

アインハルトさんは
ちっちゃくないよ！

立花フミ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

表題は『アインハルトさんはちっちゃくないよ!』ですが、基本的に、ヴィヴィオの視点から描く、1話完結の短編集です。

なので、第1話から順番に読む必要はありません。

サブタイトルを見て、気になった話だけ読む——というスタイルで大丈夫です。結果として、アインハルトさんが出てこないこともしばしば……。

本家よりも『Vivid LIFE』に近いノリのため、明るい話が多いです。とうかギャグ路線。ヴィヴィオとアインハルトさんが仲良くしている話が好きな方にはピッタリだと思うので、試しに読んでみてください。

また、検証・考察などをすることも。

時期としては『ViVid Strike!』と『Force』の間くらいですが、ネタは劇場版、ゲーム版、『ViVid LIFE』など、何でもアリです。

時間軸としては未来の出来事にあたる『Force』についても、漫画を読んだということになっています。

現在は休載中です。

また、こちらはpixivにも投稿しています。

目次

アインハルトさんはちっちゃくないよ	1
はやてさんと変身魔法と子供モード	9
あたしだけ胸が小さいのは納得いかな	18
い	
使い魔はつらいよ	26
高町ヴィヴィオ イチゴ味	40
リインフォースⅡを尾行せよ!	53
アインハルトさんをモフリ隊	67
NANOHAカートでリンネと再戦し てみた	85
特訓はグラーフアイゼンで	99
ぴこぴこキャロちゃんとうちでの小槌	105
君グレート	105
クリスマスSP ～八神はやて奇跡の 一枚～	116
風雲ヴィヴィオ神社	127
ヴィヴィオって百式に似てるよね	141
大人モード禁止大会	150
コロナのV作戦	158
逆転ミウラ裁判!	166

なのはママ豆まきをする	180	3日目	352
フェイトママと恵方巻き	185	魔法少女りりかるヴィヴィオ 第2話	
St・ヒルデ “バレンタイン” 魔法学			384
院	196	春が来れば思い出すコロナ	398
続・逆転ミウラ裁判!	219	お花見っぽいモノ (アインハルトさん	
帰ったら王様たちがいた	243	モノマネ王者決定戦)!	416
ひな祭りウオーズ	277	高町家に10人ヴィータがいる	
絶対無理なホワイトデー	288	440	
高町ヴィヴィオのトモコレやってみた		DSAAドリームタッグトーナメント	
1日目	305	第1戦	455
高町ヴィヴィオのトモコレやってみた		DSAAドリームタッグトーナメント	
2日目	330	第2戦	466
高町ヴィヴィオのトモコレやってみた		DSAAドリームタッグトーナメント	

	第3戦	484
	ママの日	514
	ミッドチルダの自動車って？	527
	クリスとテイオの衣替え	544
夜	ゴーストハンター・ヴィヴィオ	第1 557
	ゴーストハンター・ヴィヴィオ	第2 706
夜	ゴーストハンター・ヴィヴィオ	第3 720
	ゴーストハンター・ヴィヴィオ	第4 742
夜	ゴーストハンター・ヴィヴィオ	最終 770

	夜	629
	G H・ヴィヴィオ あとがきまとめ	669
	高町なのはとアイマスドンジャラ	691
	ご注文はアインハルトさんですか？	706
	アインハルトさんクイズ王決定戦！	720
	医療少女メデイカルじゃないシヤマル	742
	アミテイえもん	753
	お盆だよフェイトママ 前編	770

お盆だよフェイトママ	後編	789	霸王城アインハルトキュラ	968
宝探しののっ!	807	探せ! 七鍵守護神(ハロー・イーン)		
テスタロッツサ家族会議	820	の魔導書	985	
激闘! ストラトス四天王	834	緊急ヴィヴィット会議	なのはV i V	
そろそろいいよね? Reflect	848	idはどこへゆくべきか	998	
ion		ヴィヴィオの自由研究	くお婆ちゃん	
プレシアの日	875	おいくつですか?	く	
わたしの世界にリニスさんはいない	886	アインハルトオンラインのススメ	1030	
前編		ザツファイーは記憶喪失		
わたしの世界にリニスさんはいない		トリプルなのはブレイカー		
後編		進撃のフェイト		
高町家で初代桃鉄やってみた	919	サンタクロースを捕まえろ!	前編	
スーパー騎馬大戦FINAL	953			

シグナムと炎の聖剣	レヴィの不思議なダンジョン	チョコットとディーブダイバー	炸裂！ 霸王流 飛砕弾	お年玉とコロナとBD2号機	ベルカ諸王握手会	1112	風雲ヴィヴィオ神社『弑』 後編	1104	風雲ヴィヴィオ神社『弑』 前編	1093	サンタクロースを捕まえろ！ 後編	1083
1194	1177	1164	1156	1145	1132							

!?	霸王イングヴァルトを殺したのは誰だ	アインハルトさんは飛べますか？	i Vid	劇場版 新魔法少女リリカルなのはV	1250	アインハルトさんは飛べますか？	編	ツヴァイ、アインスに会いに行く	編	ツヴァイ、アインスに会いに行く	不思議の国のフェイト	
1327	1305	2	1269	V								
								1231	後	1219	前	1210

- 魔王と狸のベルベットルーム — 1343
アインハルトさんはクラウスほど強く
なれない!?
- なぜなにプレシアお婆ちゃん — 1360
目指せ、赤龍帝! — 1387
断空が — 1418
ティルズオブってるヴィヴィオ — 1439
- 1473 ヴィヴィオ強化計画 — 1493
コロナと猫とガンプラと — 1518
1533 ハーデイス氏はスカさんクローン!? — 1533
そいえばチンクも年を取らないよね?

- 1600 リリカルなのは年齢当てクイズ! — 1585
1600 アインハルトさんと丸い棺桶 — 1623
1633 ぷちつと考察 ノーヴェの秘密(?) — 1633
1640 うちのノーヴェがウザすぎる! — 1640
新暦75年のアインハルトさん!
- 1579 ぷちつと考察 ヴィヴィオ年表! — 1557
緊急指令、海鳴市に聖地巡礼せよ!

- 1758 我のユーリが男の娘のわけがない！
i o n | 1737
- 新暦75年〜現在のアインハルトさん
解説！ | 1710
- ！ | 1695
- 新暦79年〜現在のアインハルトさん
1680 |
- ！ | 1676
- 新暦78年のアインハルトさん！
1680 |
- 新暦76〜77年のアインハルトさん
1665 |

- のりんもない | 1903
- 第3話 『Force』にはすみぺもい | 1888
- 第2話 タイトルはネタバレの始まり | 1852
- 第1話 はじまりはサラちゃんになの
けが知っている」編 |
- 「この世界が『Force』だとわたしだ
マリーさんの秘密 | 1837
- ていくつくらいなの？ | 1805
- 実際のところ『なの&フェイ』の身長つ
1781 |
- 八神はやてはちっちゃくないよっ！？

第4話 ギャラクシーエンジェルとは

違うのだよ 1916

第4・5話 もしもヴィヴィオが2人

なら 1940

第5話 アヴェニールをさがして!

1952

第6話 アインハルトさんのバイザー

では3倍のスピードは出ない 1969

第6・5話 コロナとモノアイガンダ

ムズ 1990

第7話 わたしにとーまが舞い降りた

! 2007

第8話 少女戦記リリカルとーまつ!

第9話 助けてアミティえもん!

2044

第10話 月は出ているかッ!

2062

第11話 そいえばトーマはガロード

に似ている 2087

第12話 わたしにその手を汚せとい

うのか 2103

第13話 潜入! ルヴェラ鉱山遺跡

2119

第14話 ジャイアントロボじゃなく

て紫天ロボだった 2137

第15話 とーまの嫁は女の子じやな

いと思った？

第X話 ロザリア

21792156

アインハルトさんはちっちゃくないよ!

「ねえ、なのはママ。ちょっと質問があるんだけど……?」

今日のトレーニングから帰ったわたしは、ダイニングテーブルに座ると、夕食の支度をしているのはママに尋ねた。

「ほら、変身魔法ってあるでしょ」

「ああ、ヴィヴィオが大人バージョンになるアレでしょ?」

「うん。自分で変身しておいて何なんだけど、アレって何歳ぐらいのわたしなのかな?」

「うくん、私としては19歳なんてオススメだけど……」

「オススメって……でも、どうして?」

「ほら、大人モードって聖王モードの2Pカラーみたいなものでしょ?」

「2Pカラー……」

幼いころ格闘ゲームで、なのはママからフルボッコにされた記憶が思い浮かぶ。高町家はたとえゲームであろうと全力全開なのだ。

「聖王モードのヴィヴィオって、何だかんだと言って私とよく似たバリアジャケットで、髪型も私と同じサイドポニーだったでしょ?」

「うん」

「まあ、深い愛を感じたわけなんだけど」

「もう、その話は、今は置いて！」

流石に気恥ずかしい。

「あはは、でね、つまりヴィヴィオはあの当時の私を真似ていたと」

「あ、そつか！ わたし、服装や髪型だけじゃなくて、外見年齢も無意識になのはママを真似ていたんだ……」

「そう。だから19歳ってのがいいな〜と思うんだけど」

「うん。すっごく納得した」

「でしょ？ それに肉体のピークってよく25歳くらいまでって言うけど、実際は19くらいだと思うんだよ。だから戦うとなれば無理のできる10代がいいわけで、20歳を越えると、こう、色々調子の悪いところが出てきて……ぐはっ……」

「だ、大丈夫だよ！なのはママはまだまだ若いよっ！ ちょーかわいいし、ちょー美人だし、自慢のママだから！」

「あー、うん、ゴメン、もう大丈夫だから……」

無敵のなのはママも寄る年波には勝てないのだ。

「まあ、19歳ってのは、あくまで私の希望的観測だから、実際は別にあるんだけどね」

「え、そうなの!？」

「うん。ネット上だと——」

ネット準拠なんだあ……。

「大人モードは、10代半ばとか、16〜19歳って書かれていることが多いんだよ。10代後半ってのもあるかな」

「へ〜」

「私としては当時のスバルの年齢(15)を鑑みて15〜19歳でもいいかな〜と思うんだけど」

「うん、それくらいは誤差の範囲内じゃないかな」

「そう思うでしょ? とところがどっこい」

「え、まだあるの?」

「そう『魔法少女リリカルなのはStrikers オフィシャルファンBOOK』によると——」

そんなの出しちゃうんだあ……。

「原作者、都築真紀先生の描いた、聖王モードのヴィヴィオのイラストの脇に『17歳くらい』とメモってあるんだよ」

「うわ……ほんとだ」

「ただ、まあ、あくまで『17歳くらい』だから、前後プラスマイナス1歳なら『16〜18歳』、前後2歳ととらえるなら『15〜19歳』で、いいんじゃないかな、と思うしだいなわけで」

「はあく、なるほど。流石ママ、細かく調べたね」

「ふっふっふ、もつと褒めてくれて構わないよ〜」

「あはは、で、他には資料ないの?」

「う〜ん、もしかしたら決定的な資料があるのかもしれないけど、手持ちがこれくらいしかなくて……知ってる方はコメント募集だよ!」

と、なのはママは下を指差している。

「でもヴィヴィオ、変身魔法の年齢なんて今まで気にもしなかったのに、急にどうしたの?」

「うん、実は、その、今日のトレーニング中、ひさしぶりにアインハルトさんが変身するところをジッと見てただけど……」

「おおうつ、アインハルトちゃんの変身バンクだね!」

「なのはママ……その食いつきっぷりが気になるんだけど……まあいいや。でね、ふと思っただよ、アインハルトさんって確か13歳だったよね〜と」

「うん、それで?」

「その、こういうとアインハルトさんに失礼なんだけど、変身するとスゴイ大人っぽいというか、ナイスバディの大人の美少女になるでしょ?」

「うん、なるね。ヴィヴィオもだけど」

「ありがとう、ママ。でも、本当にあんな風に成長するのなかうって心配になつてきちゃつて。わたしも大人モードっていうけど、実際はただの願望にすぎなくて、なのはママやフェイトママみたいなおっぱいにはなれないんじゃないかなつて」

「なるほど」

なのはママはあごに手を当てて、何やら思案するポーズをとつた。

「仮に、ヴィヴィオとアインハルトちゃんの大人モードが17歳だとした場合、2人のタイムリミットは?」

「えつと、わたしがあと6年で、アインハルトさんがあと4年」

「だつたら余裕なんじゃない?」

「でも、大人モードが15歳だつたら?」

「……ヴィヴィオはいいとして、アインハルトちゃんはあと2年で『StrikerS』当時のスバルくらいに成長しなくちゃいけないのかあ。微妙なところだね」

わたしもそう思う。

「いや、待つて?!? そうだ、大丈夫、大丈夫、全然平気だよ。アインハルトちゃんなら普

通に大人モードくらいに成長できるって」

「え、急に樂觀的になったけど、なのはママ、一体何を根拠に……?」

「ふっふっふ、これを見よ——」

わたしの目の前に男性の顔が表示された。

「ほら、クロノくん。フェイトちゃんのお兄さんだよ。ヴィヴィオも何回か会ってるでしょ?」

それはわかるのだけど……。

クロノ・ハラオウン提督は、背も高く、カッコイイ大人の男性だ。

「で、こっちの映像が私たちと初めて会ったときのクロノくん。当時、なんと14歳」

「……あれ? 小さいよ!? ママたちとあんまり変わらない」

「そう。ちなみに、ママとフェイトちゃんは9歳だったりする。今のヴィヴィオより子供だね。いや、あのころは若かった」

「……うわー、人って、こんなに成長するんだね」

「うん。クロノくん、一体何があったの!? って心配するレベルで背伸びたしね」

「でも、男子と女子じゃ成長の仕方が違うってことはないかな?」

「ふっふっふ、そう言うと思って、もう1人サンプルを用意しておきましたー」

今度は女性の顔が表示される。

「これって……ギンガさん……?」

「そう。スバルの2歳年上のお姉さん。で、これが初めて会った13歳のときで、こっちが4年後の17歳。どう? これなら参考になるでしょ」

「うん、バツチリだよ! しかも……うわ、ギンガさんすっごいかわいい……っというか、小さいよ。それがたった4年でこんなお姉さんに……スゴイ、スゴイよギンガさん! これならアインハルトさんも安心だよっ!」

「あはは、ママも一生懸命調べたかいました。だけど、こうして比べて見ると、クロノくんといいいギンガといい、もしかしたらミッドチルダ出身の魔導師って、10代半ばで急激に成長する特徴があるのかもね」

「えー、何それ〜」

「例えば、来年や再来年、ヴィヴィオは今とあんまり変わらないのに、アインハルトちゃんだけが、大人っぽく成長したりとか」

「あー、そういうのもあるかもだ〜」

「だから、ヴィヴィオは何にも心配しなくていいってことだよ」

「あ……うん!」

すると、

『なのは、ヴィヴィオ、ただいまー』

「おっと、フェイトちゃんおかえりー」

なのはママが、パタパタとスリッパを鳴らしながら玄関へ向かった。

とにもかくにも、アインハルトさんが大人モードのように成長しないかも、なんてのはわたしの杞憂だったわけで……。

「そっか、フェイトちゃんの中学時代って……あれ？　もうナイスバディだったよな……」

「え？」

「ええっ!!？」

はやてさんと変身魔法と子供モード

ここの発端は、こんなだったそうです。

今朝、なのはママとフェイトママが本部のドアを開けると、執務机に座ったシヨートカットの女性が、口もとを隠すように顔の前で手を組んでいた。

「久しぶりやな」

「はやてちゃん、碇指令(ごっこ)はやめよーよ。いくらBSで再放送してるからって……」

「一度やってみたかったんや〜」

フェイトママが苦笑しながら尋ねた。

「それで、わざわざ私となのはを呼び出したということは、何か事件でもあったの?」

「んん、それなんやけど、ほら、先日なのはちゃんとヴィヴィオが、アインハルトの件で変身魔法の話をしてたやろ?」

「うん、してたね」

「変身魔法といえ、昔、ユーノ君はフェレットになってたし……」

「あゝ、懐かしいね。淫獣疑惑とか」

「ヴィヴィオは大人モードになれる。つちゅーことは、子供モードつてのもできるんじゃないかなーと思つてな」

「あゝ、なるほど」

「なんで、3人でやつてみませんかー、というお誘いなんやけど」

フェイトママは「いやいやいや」と抵抗したものの、なのはママの「面白そうだね!」という一言に押し切られてしまった。

フェイトママは、いつも毅然としてカツコイイけど、なのはママの押しにはめっぼう弱いのだ。

「ところではやてちゃん。どうして私とヴィヴィオの会話の内容を知ってるのかな？」

もしかしてうちに盗聴器とかしかけてないよね?? シャーリーじゃあるまいし……」

「さ、さくて、たまにはヴィータとパトロールにでも……」

「どうして横向くのかな、はやてちゃん??」

そんな2人のやり取りを、フェイトママは生温かい目で見守っていたそうです。

そんなわけで、夕方、いつものようにわたしがトレーニングから帰ると、キッチンで小さなツイントールがピョコピョコ動いていた。

「——つて、なのはママあつ?!」

「あはは、ヴィヴィオ驚いた?」

なのはママは「なのはママさんだよ」と、鍋つかみをはめた両手を上げて、クルクル回っている。

「ど、どうしたの、アポトキシン4869でも飲まされたの!?!」

「そんなの飲まされたら、仕返しに乗ごと焼き払っちゃうけどね」

そうだった。なのはママは9歳になっても戦闘力が落ちないんだった。

逃げてー、黒い人!

「と、まあ冗談はさておき——」

こうして、なのはママは冒頭の出来事を語ってくれた。

「それで子供の姿なんだあ……」

「そうそう」

「わたしだったら、断然、大人モードの方がいいけどな」

なのはママやフェイトママのように、スタイル抜群になってモテモテになるのだ。

「ヴィヴィオも大人になればわかるよ……」

なのはママの目からリアルな涙がこぼれ落ちた。

すると、

『なのは、ヴィヴィオ、ただいまあ』

「あつ、フェイトちゃんおかえりなさい」

9歳の体でパタパタ駆けていくママの背中は、ちよつと愛らしい。

ところが、

「ちよ……フェイトちゃん、その荷物どうしたの!?!」

玄関から、なのはママの悲鳴が聞こえてきた。

どうしたのだろう、と思っていいたら、リビングに入ってきたフェイトママが、両手で

抱えきれないほどの紙袋や箱などを運んできた。しかも、子供モードの姿で。よほど疲れたのか、なのはママとおそろいのリボンがしおれている。

「フェイトちゃん大丈夫？」

「うん。ちよつと荷物が多かっただけだから……」

こ、これは……。

「あく、フェイトママ、子供モードを解除すればよかつたんじゃ……」

「あ」

フェイトママがカーペットの上で、両手両膝をつけたorzのポーズをとった。

「そ、それで、フェイトちゃん、この大量の荷物は何なのかな？」

慌ててフォローに入ったなのはママが、わたしのお尻をポコンと叩く。

「そ、そうだよね！ フェイトママ、こっちの紙袋は、あ、お手紙でいっばいだよ。何が書いてあるのか知りたいな」

「……」

ようやく幽鬼のようにフラリと立ち上がったフェイトママは、人生に疲れた顔をしてつぶやいた。

「子供モードになったら、いきなりたくさんの手紙やプレゼントをもらっちゃって……」
「え、これ全部、フェイトママが、今日一日でもらったラブレターとプレゼントの山なの!?」

フェイトママが力なく頷いた。

ついでにメールも大量らしく、バルディッシュもお疲れモード。

「そういえば、小、中学のころも、こんなだったよーな気がするけど……」

まさか、子供モードになった途端、大人社会でも同じ現象が起きるとは……。

わたしは、なのはママと目を合わせた。

「うん、时空管理局は、一度潰れた方がいいんじゃないかな?」

などと話していると、映像通信が入った。

『ここにやちわく、高町家の諸君』

「は、はやてさん!?!」

画面上で、ショートカットの少女が片手を上げた。

「ヴィヴィオも元気そうで何よりや。で、なのはちゃんとフェイトちゃん、今日一日子供モードで過ぎしてどうやった?」

「私はいつもと変わらなかつたけどね、フェイトちゃんが——」

と、なのはママはフェイトママの戦利品を指差した。

「うわ、相変わらずやね。私もなのはちゃんと一緒に平常運転やった……って、どうしたんやヴィヴィオ、私の顔をジツと見て。ん、私の子供時代の姿は珍しいか？ それとも、やつば変なんか？」

「えと、そうじゃなくて……いつもとあまり変わってないな……って。髪型も一緒だし」「ぐほっ！」

画面からはやてさんの姿が消えた……と、思ったが、また下からせり上がってきた。

「プラス思考、プラス思考、そうや、今と昔の姿が変わらないっちゅーことは、私は普段から若く見えるってことやな！」

「あ、そうじゃなくて、昔から近所のおばちゃんっぽかったんだな……って」

「ぐぼオオオオ！」

今度こそ、はやてさんの姿が画面の下に沈んでいく。

「おい大丈夫かはやて！」

すると、画面上に赤い髪の少女が映り、はやてさんを抱きかかえた。

「あ、ヴィータさん！」

「つて、何だヴィヴィオと通信してたのか……つて今はそれどころじゃない」

ヴィータさんが「はやてー、はやてー」と何度も叫んでいる姿を見て、わたしは思わず問いかけた。

「ヴィータさんも子供モードですか？」

「……（なのは）」

「……（フエイト）」

「……（はやて）」

「ちっげーよ、いつも通りだよっ！」

——プツン！

「あ、通信切れちゃった……」

「ヴィヴィオ……流石は高町家の血を受け継いだ娘だよね」

「うん。血は引いてないけどね、確かなのはの娘だとは思う」

「あれ？ フェイトちゃんの娘でもあるんだよう？」

「あう」

こうして、高町家の夜は今日も静かにふけていくのでした。

あたしだけ胸が小さいのは納得いかない

休み時間のこと、リオがわたしとコロナに向かつて言い放った。

「大人モードで、あたしだけ胸が小さいのは納得いかないだけどー」

「と、言われても……あれつて、デバイスが所有者の遺伝子から、将来をシミュレートして変化させてる姿なんだよ?」

「え、マジで!？」

「冗談、冗談。変身魔法だもん、事前に調整しておくこともできるみたいだけど、基本はイメージなんじゃないかな。そのところは、ゴーレム創成と一緒に思うんだけど、どうでしょうか、コロナせんせー?」

「ん、そうだね、魔力のコントロールも大事だけど、イメージが固まっていないと、ゴーレムも上手に作れないかな」

「なるほど、イメージかあ……」

リオが栗みたいな瞳で、わたしをジッと見つめてくる。

「うん、納得した」

「あ、あれ……? やけにあっさり納得したね」

「だって、ヴィヴィオんちって、なのはさんとフェイトさんがいるじゃん」

「コロナが「あー」と声を発した。」

「二人ともスタイルいいしね」

「そう。あのおっぱいを間近に見て育ったヴィヴィオは、頭の中で自然と『大人モード』なのフェイ||おっぱい』ってイメージしてるんだよ!」

「な、なんだってー ……って、いやいや、勝手にママたちとおっぱいをイコールで結ばないで! ……って、あれ、なんか通信がきたんだけど?」

『諦めるんや』

「は、はやてさん!? 一体どこから……」

「ま、まあ、ヴィヴィオ。リオの言うことも一理あると思うよ?」

「う……」

否定する要素がどこにも見当たらない。

「つてことは、あたしもしばらくヴィヴィオの家で寝泊まりすれば、おっぱいが大きな大人モードをマスターできるってことか!」

「……………うゝん」

「え、なんで？　そういうことじゃないの？」

「だって……………ねえ？」

「リオのおっぱいが大きい姿がイメージできないというか……………」

「ひどいっ!?　親友だと思ってたのに！」

「いや、親友関係ないから……………」

　コロナが少しだけ真剣な顔つきになった。

「たぶんだけど、リオはおっぱいが小さい方がいいと思う」

「ど、どうして？」

「だって、大人モードと同じくらい年齢になったとき、実際はおっぱいが小さいままだったら、困るのはリオなんだよ!？」

「リアルなら大きく育つよ！　こうポインと！」

「がんばれ！」

「がんばれっ！」

「がんばるよ、もうおおー！」

リオが猿みたいに「ウキーツ」と唸った。

「でもリオ、現実問題として、いまさら大人モードで胸を大きくしたら、試合のとき感覚がズレて困らない？」

「あ……うー、どうなんだろう？」

「そうだよ。わたしはゴレム主体だからいいけど、ヴィヴィオやリオは近接格闘がメインでしょ。体のわずかな変化が、技のキレに影響するんじゃない？」

「う、うーん、でもおっぱいぐらい……」

「あ、そういえば『バママミの平凡な日常』ってマンガの豆知識に『巨乳の人がいきなり走ると、その大きさと重さのせいで大ダメージを食らうよ！』って書いてあったよ」

「もげるのっ!？」

「ヴィヴィオ、いきなり別のマンガをぶっこんできたけど大丈夫？」

「大丈夫、大丈夫、そんなことより、いきなり胸を大きくしても戦闘に影響がでないかどうか、アインハルトさんに相談するってのはどうかな？」

「そうだね、もうあたしたちだけじゃ答えでないし……」

世の中には、3人寄っても、文殊の知恵が出ないこともあるのだ。

「はい？ 大人モードで胸を大きくしたい……ですか」

昼休みになり、一緒にお弁当を食べながら尋ねただけど、流石はアインハルトさん。おっぱいネタだというのに顔色一つ変えない。

「影響が出ない——ということはありませんが、私としては、むしろ小さいままがいいと思いますよ」

「きよ、巨乳の人はみんなそう言うんだああ！」

「わあ、リオ、逃げちゃだめ！」

とつさに、リオの首にスリーパーホールドを決める。

「んがっ、ギブ、ギブ、ギブ！」

しかし、アインハルトさんは冷静だ。

「リオさんの実家は、春光拳の道場をしていましたよね？」

「う……うん、けほけほ……」

「それなら、聞いたことがあると思いますが、胸が大きい——ということは、格闘技の世界においてあまりいいことではありません」

「それって、大きいと動きの邪魔になるから？」

「はい、それもあります。一番の問題点は、胸が女性にとつて急所であるということです。競技によっては、胸部への攻撃を禁止しているところもありますね」

昔はベルカ以外のことに興味がなかったのに、最近のアインハルトさんは色んなことを学んでいる。

わたしとしてはちよつと寂しい気もするけど、これはたぶん素敵なことなのだろう。

「マジかあ〜」

リオが「あたしのおっぱいがー」と泣き叫んでいる。

「もしリオさんが、真に春光拳を極めたいと思つていいるなら、大きな胸は必要ありません。小さな胸でいいでしょう」

すると、コロナが「はい、アインハルト先生！」と手を挙げた。

「格闘技としては確かに必要ありませんが、シヨ一的な要素の一つととらえた場合、やはり大きな胸は必要なんじゃないでしょうか？」

ボインボイン。

「あく、確かに、そういうのはあるかもしれませんがね」

揺れは大事なのだ。

「そういえば、色仕掛けつてのもあるよね」

「うっ……」

「そうだよ！ おっぱいガードとか、おっぱいミサイルとか」

「「それはない」」

「で、でも、コロナのゴoremおっぱいミサイルついてるじゃん！」

「ゴライアスについてるのは、ロケットパンチだよ！」

「う………だったら、せめて胸んとくにプレストファイヤーぐらいつけてよ！」

「そ、それはまだ実装してないけど……」

コロナ、つける予定はあるんだ。

マジンゴー。

すると、

「リオさん——」

「あ、はい！」

アインハルトさんが優しく微笑んだ。

「リオさんは、2年生まで実家のルーフェンで学んでいたとお聞きしました。だから、大人モードに変身したときは、無意識に春光拳の総師範でもある、おじいさまをイメージしているのではないのでしょうか？」

わたしの、なのはママへの想いと同じ。

「最も憧れている人に近づきたい——という想いですね！」

「はい。相手は男性である総師範ですから、自然と胸も小さくなる」

リオがお弁当を食べる手を止めた。

「そっか……おっぱいが小さいことにも意味があったんだ……」

「よかつたね、リオ……」

なぜかコロナまで涙を流している。

「はい。レイ総師範を真似ていると考えれば、むしろ、格闘家としては正しい大人モードだと思えます。同じ強さを求める者として、私も見習いたいですね」

リオが立ち上がって、アインハルトさんの両手を握りしめた。

「ありがとう、アインハルトさん！ あたしもう胸が小さいことなんて気にしないよ。

よし、これからもちっぱい大人モードでがんばるぞ——っ！」

「はい。その意気です！」

そう言ってニコニコ見守ったアインハルトさんの大人モード（武装形態）は、今もおっぱいが大きいままで。

使い魔はつらいよ

「——はい、そんなわけで、今日は無限書庫の司書長室からLIVE中継でお送りしたいと思います。」

それでは、本日トリプルスレットマッチ形式で対談する、3人の使い魔さんたちをご紹介します！

1 枠はこの人！ ヴオルケンリッターが誇る『盾の守護獣』にして『蒼き狼』！

八神はやて司令の使い魔、その名も、ザファイラああ——っ！

キヤー、ザファイひさしぶり！」

「ああ、今日はヨロシク頼む、ヴィヴィオ」

「うん！ あとでまた昔みたいにもフモフさせてね」

「善処しよう」

「フッフッフ、お待たせしました！

2 枠はこの人、もう出番がないなんて言わせない。昔はママたちとやんちゃしてたけど、今ではすっかりオレンジの子犬フォームが板についた『ハラオウン家の守護獣』にしてフェイトママの使い魔、その名も、アルフううう——っ！」

「おいーつす！ あく、なんかひさしぶりに表舞台に立つと緊張するわね」

「わたし、大っきいアルフっていまだに違和感あるよ？」

「そうきたか。昔はコッチがメインだったんだけどね、まあ、今日はお手柔らかに」

「はい！ それでは視聴者のみなさん、長らくお待ちせしました。」

本日の主役にして、第3枠。

淫獣！ 淫獣！ と蔑まれつつも、汚名返上したような、してないよーな、声がキュートな匿名希望こと、なのはママの使い魔。

その名も、フェレット仮面——ンっ！

「つて、それ匿名希望になってないよね!？」

「はい、ここでクロノ・ハラオウン提督から通信が入りました」

『フェレットマスクにしたらどうだ？』

「一緒だろそれ！ ていうか見てるのかよ、いや、それ以前に、使い魔じゃないから！」

「はい、いただきました！」

「ネタじゃないから！」

「まあまあ、もう諦めなつて。もうネタみたいなものだろ？ ユー……フェレット仮面」

「そうだな。使い魔であろうとなかろうと、我々は主人に尽くすだけだ。ユー……フェレット仮面」

「主人って……」

「あ、ここでののはママから通信です」

『もう、私の使い魔でいいんじゃないかな?』

「……」

「と、とりあえず今日は……そう、今日だけ使い魔つてことでお送りしたいと——」

——コンコン!

「失礼しまーす」

「あ、今本番中なんで……つて、あれ、ルールー?」

「ヴィヴィオ? どうしてこんなところに?」

「それはこっちの台詞だよ!」

「私はほら、匿名希望のF執務官から、その見るからに怪しいフェレット頭を拘束しろつて緊急指令を受けて来たんだけど……」

「F執務官つて……」

「……」

「あの子、すっかり権力を濫用する側になっちゃつて……あたしも鼻が高いよ!」

「アルフ、そこは喜ぶところじゃないからね!?!」

「よし、さっそくたいーほを!」

「ルールも捕まえなくていいから！」

「え、そうなの？　じゃ、帰るけど……ザフィーラさんにアルフさんか……ふむ、ガリユーも置いてく？」

「た、確かに——ようやく立ち直ったから解説すると——召喚獣だけど僕よりはよっぽど使い魔らしいんじゃないかな？」

「そう言われると……」

「だが、ガリユーはしゃべらないからな」

「え？」

「を？」

「ん？」

「「ザフィーラが突っ込んだああ!?!」」

「——ヴィータさんからの通信『おまいう』でした。それでは、ルールが帰ったところで、そろそろ、本日の対談を行うことになった経緯について、触れていきたいと思います」

「そりや言わずもがなでしょ？」

「えつと……」

「アルフはせっかちだからね、僕が説明するよ——。」

『Vi Vid Strike!』の5話で、スパーリングパートナーの話が出たとき、それがアルフとザファイラだったらテンション上がったの! ということらしいよ?」

「あく、『聖闘士星矢Ω』で、鋼鉄聖闘士（スチールセイント）が登場したときみたいな感じですか?」

「その例えはどうかと思うけど、予想外に懐かしい顔ぶれが登場すると、うれしくなるよね」

「私は特に期待していなかったからな。問題ない」

「あたしはちよっぴり期待したけどね、やっぱなかったけど」

「アルフとザファイラは『リリカルなのは』の世界でも、元祖ストライクアーツって感じだもんね。スパーリングパートナーとしても頼もしいよ!」

「でもさ、ザファイラはまだいいわよ。『Vi Vid』のときも、ちゃんと出番あったじゃない」

「ミウラのおマケだがな」

「いや、あたしは思うわけよ。ザファイラが、はやてんとこのミウラちゃんの師匠なら、本来あたしが、なのはとフェイトの娘であるヴィヴィオの師匠ポジなんじゃないかなって。そしたらノーヴェでしょ、いや、あの子が悪いわけじゃないんだけど、あた

「しゃこつそり泣いたわよ」

「うう、なんかゴメンなさい……」

「僕も『ViVid』じゃ出番少ないしな」

「あれ？ フェレット司書長『ViVid』に出てましたっけ？」

「フェレット司書長って……」

「出ていたか？」

「出てないでしょ？」

「出てるよ!!」 原作の8巻で中段ぶち抜きで大きく出てるよ！ かつこいいポーズで！

まあ、アニメには出なかったけど」

「フェレットだから？」

「話が無限書庫までいかなかったからだよ！」

『ViVid Strike!』で、話が一気に飛びましたからね、1年びゅんと」

「だからさ、僕としては、こういうシーンを期待してたんだよ……」

「ストライクアーツなんて、もうやめちゃいたい！」

無名の選手に弱点をつかれたわたしは、アインハルトさんやりオ、コロナ、ミウラさん、それに期待してくれたママたちの前で無様に負けた。

「わかってたよ、わたしの体と魔力資質が格闘に向いてないってことは……だけど……」
それでも、どうにかできると思っていた。

努力すれば、がんばればきつと勝てると思っていたのだ。
それなのに……。

わたしだけが負けた。

「みんなにも、なのはママにも会わせる顔がないよ……」

もう、ジムにも、うちにもは帰れない。

雨の中、ひとりずぶぬれになって歩き続けたわたしは、いつの間にかあの場所にやってきていた。

ストライクアーツにのめりこむ前は、毎日のように通っていた、懐かしいあの場所――
無限書庫へ。

「ヴィヴィオ？」

わたしは唐突に声をかけられた。

目の前に、カサをさしたオレンジの少女が立っている。

「……アルフ？」

「そんなずぶぬれになって、まるで昔のフェイトみたいじゃないか！ ほら、早く中に入って入って」

「い、イヤっ！ 離してよアルフ！」

「……いいから」

「やだ！ やだっ！」

「……裏から入ればいいんだろ？」

アルフは軽々とわたしを抱きかかえると、誰にも見つからないよう、司書長室まで運びこんでくれた。

すると、司書長のユーノが慌てて駆け寄ってくる。

「ヴィヴィオ!? アルフこれは一体どうしたことなんだ！」

「いいから、あなたは風呂の用意。ユーノがいつも泊まるせいで、バスルームにも結構予算がついたんだ、これが」

「……了解。なのはとフェイトには、僕から伝えておくよ——」

途中、フェレットになったユーノが、一緒にお風呂に入ろうとして、アルフに叩き出されたりもしたけれど、2人は真剣に事情を聞いてくれた。

「ヴィヴィオ、もうストライクアーツをやめたいのかい？」

「……………」

「それとも、もつと強くなりたいのかい？」

アルフはジッとわたしの目を見て問いかけた。

「わ、わたしは……………わたしは……………もつと強くなりたい！　なのはママとフェイトママの子供だって誇れるくらい！　もう、誰にも負けなくらい強くなりたいたいよ!!」

「だったら簡単だ。ね、ユーノ？」

「ああ。僕とアルフで、それぞれ、なのはとフェイトが子供のころ使っていた技と魔法を教えてあげるよ」

なのはママとフェイトママの技と魔法……………。

「それで、強くなれるのかな……………」

「ヴィヴィオの知っているママたちは、誰かに負けたことがあるかい？」

「……………ううん、ない！」

——そうだ。

わたしはまだまだ強くなれる！

「さあ、ここから反撃だ。行くよ、ヴィヴィオ！」

「はい！」

こうしてわたしは『全力全開』の4文字を背負い、再びストライクアーツのリングに立つ！

「——なんてどう？」

「長いよっ!? そしてフェレットでお風呂に入る意味ないよね!？」

「僕はね、サーブスシーンは必要だと思っただ……」

「そんな遠い目で言われましても!？」

「あー、それにはあたしも賛成」

「ちよ、アルフが裏切ったああ!？」

「私も、月に1〜2回は、主やヴィータと一緒にいるが?？」

「え、こんな時にまさかのカミングアウトおお——っ!？」

「トリミングやシャンプーが必要だと言われてな……」

「そっちなあ」

「ぎ、ザフィーラ! 僕にも師匠と呼ばせてくれええ——んっ!？」

——チユトオオオオオ!

「は!?! 何なのよ、今の?？」

「部屋の壁に穴が空いているな」

「ちよ、僕の——フェレットの頭の毛が焦げてるんだけど!？」

「あ、匿名希望の白いマ、マ王から通信です!」

『お座り』

「ゴメンナサイ……」

「あんたもフェレットより、子犬フォームの方がいいんじゃない?」

「おっと、ここでフェイトママから通信が入りました!」

『ヴィヴィオ、家の外で小型犬を飼いたくない?』

「雨ざらし!？」

「フェイトママ、無限書庫で飼おうね〜」

「それ、フォローじゃないよね!？」

「ユーノ・スクライア。そんな情けない有り様で、お前はヴィヴィオに技や魔法を教えられるのか?」

「急に真面目だな!?! えっと、忘れてる人が多いので説明しておく、なのはの最初の

師匠は僕だからね。なのはに魔法を教えたのもこの僕……っていうか、今、僕のこと名前で呼んだよね!?! ザファイーラさああん!?!」

「振り返るな」

「まあまあ、いまさらだろ？」

「くううく、正しいけど、悔しいいいい！」

「あく、もう手がつけれないんで、話題戻しますね。3人から見て『Vivid Strike!』はどうなんでしょうか？」

「そうだな、ミウラの出番が少ないと思っただら、6話でとんでもないことに。リンネ・ベルリネット、試合の帰り道には気をつけるんだな」

「あたしは、リンネがちよつと昔のフェイトに似てると思うわけよ。まあ、フェイトの方が美少女だったけどね！」

「主人公フーカのデバイスがヒョウだから、ライバルであるリンネのデバイスを、フェレットにしたらどうかかな？」

「却下！」

「ちよ、いいじゃないか！ フェレット！」

「私は問題ないがな」

「流石はザフィーラ師匠！ 話がわかる！」

「フェレットだろうがなんだろうが、まとめてボコるだけだ」

「ひどいっ!?!」

「いやいや、百歩譲ってフェレットはいいとしても、リンネさんには、もう立派なデバイ

スありますから。大事な宝石の形をした」

「ユーノ。あんまり、あの子の思い出を汚すんじゃないよ」

「くっ……僕だって、僕だって1期みたいに出番が欲しいんだあ——っ！」

「うっ、切実すぎてあたしには何も言えねえ！」

「はあ……フェレット司書長、安心してください。お忘れですか？ 中の人的には、いつ

ばい出てるじゃないですか！ わたしと話している今だって一人二役……」

「そ、それは……そうなんだけど……」

「フェレット・スクライア。気にすることはない。私やお前がいたからこそ、今のヴィ
ヴィオやミウラたちの活躍があると思えばな」

「ザフィーラ、かつこいい……」

「え、何か間違えてない？」

「そうだね。それで十分なのかもしれない。たとえ出番がなくても、あたしら使い魔に
とっては、ご主人様の幸せが自分の幸せなんだよ。あんたもわかるだろ？」

「わからないよ!?!」

「精進するといい」

「僕の名前を精進してよ！」

「あ、そういえば、アルフも中の人、ルーラーと一緒にだよな？」

「え？ ……まあね。ルーテシアなら人気もあるし『ViVid Strike!』にも登場するかな〜って、でも、6話でないととなると怪しいかな〜って、あれ、ザフィーラ？ 急に固まってどうしたのよ!」

「……わ、私も『ViVid Strike!』に出てみたかった」

「ぎ、ザフィーラ師匠おお——つつ!?! いくらミウラ回で影も形もなかったらつてめげないでくださあぁ——い!」

「……せ、せめて写真にくらい写っていると思ったのに」

「え〜つと……ナニコレ?」

「結局、一番気にしてたのは、ザフィーラだったってことでしょ。ね、ザフィーラ、デバイスの猫2匹に対抗して、あたしらも子犬フォームでタッグを組もうか？ 意外と出番あるかもよ? こう、枕もとで丸くなってる感じで」

「ちよ、僕のフェレットも混ぜてよおお!」

「あく、と、とりあえず、今宵のトリプルスレットマッチは、5079文字で、ザフィーラ選手のKO負けつてことで、また来週〜」

「提供は、陛下万歳! 高町ヴィヴィオを崇める聖王教会でお送りしました」

高町ヴィヴィオ イチゴ味

その日は、初等部の学芸会。

当然、親御さんたちが観に来るわけでして……。

「ゴメン！ ヴィータ、待った？」

「おうフェイト、遅かったじゃねーか……って、その格好、気合い入れすぎじゃね？」

「なんだってヴィヴィオが主役だからね、主役の親としてはこれくらいカツコつけないとダメかなって」

「お前の場合はいつものままで十分なんだけどな……って、あー、そういえば、なのはのやつはどうした？」

「んー、それが、どうしても外せない用事があつて、あとから行くつて。あんなに楽しみにしてたくせに」

「ふーん、あいつにしちや珍しい。なんだ、男でもできたか？ —— っつて、どこに行くつもりだよ!？」

「いや、緊急の案件ができて……」

ヴィータさんが、フェイトママの腕をつかんだ。

「冗談だよ、冗談！ 同僚のあたしが保証する。あいつに男はいねーから」

「ホント？ ヴィータ、本当？」

「あー、うぜえ！ 本当だよ！ いいから、劇が始まるだろ、ほら、さっさと行くぞ！」

こうして、一世一代の「わたしたち」の演劇が始まったのです。



『時はまさに世紀末。古代ベルカ諸王時代——。』

幼いころデバイスを作ってくれた恩人に頼まれて、霸王アインハルトは、聖王ヴィヴィオと対決しました。

しかし、霸王の拳は聖王に通じず、逆に深手を負ってしまいます。

それを知った恩人が、ひとり決死の覚悟で聖王に戦いを挑んだところから、この物語は始まります……』

「このナレーションって、コロナかな？」

「あー、あのちびっ子どもの一人か？」

「うん（ヴィータもね、とは言えない）……あ、ヴィヴィオとアインハルトが出てきたわ

よ！ ああぁー、キヤー、ヴィヴィオ、黒いバリアジャケット格好いい！」

「おまつ、それでいいのか……？ 聖王モード反対してたくせに」

「それはそれ、これはこれよ！」

『霸王アインハルトは、聖王ヴィヴィオが築いた巨大ピラミッド——聖王十字陵の頂上に捕らわれた恩人を見上げて叫びます』

「や、ヤガミシレー」

「「ちよー棒読みっ!」」

「つていうか、今アイツ、八神指令って言わなかったか？」

「うん、言っただけど間違ってはいないよね」

「ま、まあ、デバイスを作った恩人といえは確かにはやてなんだが……」

「ん？ ヴィータ、聖王十字陵のてっぺんを見て！」

「なああ！ ど、どうしてはやてが捕まってるんだよ!? しかも、あんなデカイ、キャップストーンをかつがされて！」

「キャップストーン……?」

「ピラミッドの頂上にある、四角錐状のデカイ石のことだよ!」

「豆知識ぶつこんできたわね!」

「いいんだよ、そんなことは!? っていうか学芸会のくせに、天井ぶち抜いてるセットって何なんだよ!?! 見づらいだろ!?!」

『()で一旦、CMです。』

謎の建物一晩で造るなら、ルーテシア、ルーテシア・アルピーノに、ご用命ください』

「お前かよっ!?!」

『ちなみに、どうして中等部のアインハルト・ストラトス先輩が、初等部の劇で主役をやっているかというところ——愛をとりもどせええ!!』

「意味わかんねーよ!?!」

「はやて仕事で来れないって言ってたけど……仕事ってコレ?」

「ちっげーよ! 他に仕事があるんだよ、こんなのあたしも聞いてねええ——っ!?!」

『八神指令は、最後の力を振り絞って霸王に語りかけます』

「あ、アインハルト……どうやら私の命もここまでのようや……せ、せめてひと目見たかった、あんたの成長した姿を……」

「ヤガミシレー」

『霸王アインハルトは、八神指令を救うため聖王十字陵を駆け上がります。』

しかし、そんな2人の間に、聖王ヴィヴィオが立ちはだかりました。拳に魔力を集中させます』

「霸王と八神指令を、会わせるわけにはいかない！ とどめだ、喰らえ、デイバインバー——あれ？」

『八神指令の足が、ふるふるしているようですが……？』

「も、もうあかん……」

——プチッ。

「や、八神指令ええ——っ!?」

『おおつと、石の重さに耐えきれず、八神指令が潰れたああ!』

「はやてええ——っ!?」

『聖王と霸王の2人が、急いで八神指令のもとに駆け寄ります!
かに!?!』

八神指令の運命やい

「ここ、コロナの作ったゴーレムだから、セーフ!」

「意味がわからねええ!?!」

『そんな恩人の姿を見て、霸王アインハルトは決意します!』

「わ、私の中で生きよ、魔導騎士、八神はやて！ ヴィヴィオさん、あなたの髪の毛一本もこの世には残しません！」

「だったら、これを使うがいい！」

「あ、うちのコロコロだ」

「お前んちみんな髪長いしな！」

「これはご丁寧に、ありがとうございます」

「フフ……ベルカ乱れるとき、霸王現れると聞く……。ならば、アインハルトさんと戦うのが、わたしの宿命。」

人質などいらぬ！

今こそ、聖王と霸王の決着をつけるときだ！

「こ、この石段は、ルーテシアさんの徹夜の証。一步一步、噛み締めて……の、ノボテクルガ、あう！」

『キヤー、アインハルトさんが噛んだ瞬間、歴史が動いた！ 聖王目がけて、ナイフを

持ったポニテの少女が突撃するうう!」

「わしが主役のはずなのに、全然目立つとらん。むしろ、リンネの方が主役っぽいんじゃないあ——っ!」

『ところが、ギイインと弾かれたああ!』

「見よ、リンネ・ベルリネットタさんに出演を断られたのに、脚本そのままのせいで、台詞がおかしなことになってる、フーカ・レヴェントンさんを!」

「脚本直してやれよ!? ていうか、なんでいるんだよ!?!」

「愛ゆえに、人は苦しまねばならぬ! 愛ゆえに、人は悲しまねばならぬ! ならば、わたしは愛などいらぬ!」

「ならば、私は愛のために闘おう!」

「ならば、わたしと結婚してください!」

『キャアアア！ きたアア——ッ！ プロポーズです！ 聖王（ヴィヴィオ） ↓ 霸王（アインハルト）へ、愛の告白です！』

「なんだコレ……？ なんつーか、昔のお前らみたいだな」

「ちっ、違うよ!? 私となのはは、ちゃんとドカーンと一戦交えてからだもん！」

「ならば（4度目）！ この霸王の拳に勝つたなら、ヴィヴィオさん、その結婚お受けしましょう！」

「……一緒じゃね？」

「……け、結婚はしてないしー」

『おおっと、ここで霸王が体を捻り、必殺の一撃を放ちます！』

「——霸王断空拳！」

『ところが、フーカさんのナイフと一緒に、ギイイインと弾かれたああ！』

「セイクリッド・デイフェンダー!? ですが、ヴィヴィオさんの魔力量は決して多くはありません。いくら防御に全て回しているとはいえ、連続で打ちこめば!」

『おっと、霸王が一方的にラッシュ、ラッシュうう!』

「おいおい、大丈夫かよ……?」

「ヴィヴィオ……」

『しかーし、息を切らせているのは霸王の方だああ! 聖王ビクともしない! 今日のヴィヴィオは最強だああ!』

「ど、どうして……?」

「フハハハ! なぜきかぬか、その位置からではわかるまい!」

「おいおい、まさかヴィヴィオのやつ、聖王の鎧を取り戻したのかよ……?」

「そんなことないと思うんだけど……ね、ヴィータ、ヴィヴィオの背中からケープブルが伸

びてると思わない?」

「そういや、舞台袖まで伸びてるな……なんだ、自転車とつながってんのか?」

「リオだわ! 道理で姿が見えないと思つたら、あんなところで自転車こいでる!」

「つーか、隣はミウラに……おい、ザフィーラまでこいでるぞ」

「ね、ヴィータ、自転車こいで意味あるの? 魔力送れるのかな?」

「あー、もう、それっぽいから、いいんじゃない?」

『聖王ヴィヴィオ、高らかに勝利の宣言だああ——つ!』

「どうやらわからぬようだな。ならば、ここで結婚式を上げてもらおう! 聖室を開け

——い!」

『おおつとく、ファンファーレを響かせながら、聖王十字陵の側面が、大きく開いていくうう! そして、中から現れたのは、管理局の白いあの人だああ!』

「へ? なのはああ!? あとから来るってそこからなののおお——つ!? しかも、白いことは白いけど、ウエディングドレス来てるんですけどおお——つ!? って、付き添って

るのはやてなのおお!? ……本物?」

「ああ。それが今日のはやての、本当の仕事だからな」

「……え、どういう」

『本日は、聖王教会騎士団より、カリム・グラシアさんが、式を執り行うためお越しになりました』

「さあ、アインハルトさん、今日はここで結婚式を上げましょう!　なのはママとフェイトママの!!」

「はい!」

「はい?　もしかして、ヴィータも、みんなも……知ってたの……?」

「ま、そういうこつた。ほら、タキシードも用意してある。さっさと着替えてこいよ」

『お、おおっと、タキシードを渡されたフェイトさんが……怒っているのでしょうか、体を震わせています……』

「フェイトママ……」

「フェイトちゃん……」

「おいおい、怒るなって、黙ってたのは悪かったから」
「た、タキシードが、なのはでしょ！」

「」「そっちか!」「」

リインフォースⅡを尾行せよ!

——が、それを知ったのは、実は最初からだつたりする。

「はい? リインさんに恋人ができた……ですか?」

高町ヴィヴィオがママの親友——八神はやてに呼び出されたのは、休日をひかえたあの日の放課後。

通信ではダメ。直接会って話したい、というのだから、よつぽどのことなんだろうなあ……と思っていたら、

「そうや。最近リインの様子がおかしくてなあ、一人、自室にこもっては、誰かと楽しそうに話しとるんや。——コレって由々しき事態やろ?」

これが噂のゲンドウポーズから、とヴィヴィオは思ったが口にはしない。「別にいいことだと思えますよ。ステキなことじゃないですか。で、お相手は——」

「——シャラアアツプウウ!!」

「ひいい!？」

「いやいや、私だって頭つから否定しているわけじゃないんやで？　ただ、こう、なんや、モヤモヤくつとした……そう、リインが心配というか、悪い男に騙されとらんやろか、とか、未っ子に追いつかれて追い抜かれて、ぶっちぎられたああ!？　とか……」

はやての脳内メーカーが心配だ！

「で、でもはやてさん、それって相手の人が男性とは限りませんよね？　たとえば……そう、ナンバーズのみんなとか、単純に友達とおしゃべりしてただけかもしれないし」

「フツ……この八神はやて、そこも抜かりなしや!？」

パンパン手を叩く。

「ルーテシア!　おるか!？」

「はっ、ここに!？」

どこからともなく紫髪の少女が姿を現した。

「つて、ルールー!？　何してるの!？」

「……えくつと、アルバイト……的なの？　囑託魔導師として」

「るー子、例の通信記録をここに」

音声だけが流れ始める。

『——そう、そうなんですよ。』

エアコンが壊れたから図書館に行こうって話をしたら、はやてちゃんが何と答えたと思えます?

喫茶翠屋の方が、エアコンよりも涼しいでって。

あははは。。

元祖高町家には、私の魔法——氷結の息吹（アーテム・デス・アイセス）でも敵わんなあつて。

あははは。。

……はあ、リインも、もっとあなたに会えるといいんですが……どうしたら会えますかね……。

直接会ってみたいです。

ふふ、そのときリインもがんばって、あーんなことや、こーんなことまでしちゃいますよー。

あ、もちろん大きくなってですけど。

あ、意外とちつちやいままとか、マニアックなものもアリかもしれませんね。』

「——どやっ。」

「……いや、どやと言われましても」

ヴィヴィオは困惑の表情を浮かべた。

「まさか、まさか、うちのリインが、こんなに大人になつるとは……私だつて、私だつて、まだ……まだなのがいい——っ!？」

「あー、八神指令く？ あーんなことや、こーんなことつてのはわかりませんが、これだけじゃまだ恋愛とはわからないというか……一応いつとくと、ダメ、盗聴!」

「いや、これは私がやったんじゃないで？」

「責任をルールーに押しつけた!？」

「いつもシャーリーじゃ悪いと思つてな」

「とばっちり!？」

「民間協力者で、自称、八神指令の隠し刀」

『『Nanoha Wiki』のもろパクリ!？」

ルーテシアが「仲いいな」と2人を眺めている。

「——と、まあ、そんなわけで、ヴィヴィオにはリインの尾行をお願いしたいんよ」

「……どうしてそうなの!？」

「実はな、一昨日リインが急に、

『今度の休日は、一人でお出かけしてくるですっ!』

って言い出してな」

「はあ……」

「これは怪しい——と、るー子に調べさせたら、通信記録はあったんやけど、

①相手の音声がない。

②通信先が特定できない。

ということになってな」

「なるほど」

「そこで、後をつけてみよか——という話になったんやけど……ほら、私じゃすぐ見つかっちゃうやろ? 体格とか、気配とか、魔力とか、特にリイン相手やしなあ」

「運動能力も低いしねえ」

「あ」

「ルーテシアああ!? ——って、まあ、ホントのことなんやけど。そこで、私の知っている中で、一番根気があり、口が固く、小柄で、スピードがあり、いざというときに対処できる人材——といったら、ヴィヴィオしかおらん! ということになってな」

「私がやるって言ったんだけどね」

「るー子は目立ちがりやだからなあ、尾行には向かんやろ。現在尾行中! とかSN Sにアップするタイプやし」

「あゝ」

「そんなことしませんって！」

「昔は、寡黙でミステリアスな女の子やったのに……どうしてこうなった!？」

「やーめーてー」

「それってブーメランですよね？」

「しれつとえぐられた!？」

ルーテシアとはやてがorzのポーズをとったところで、

「ま、まあ、そんなわけで、深く静かに沈黙せよってな。」

なのはちゃんやフェイトちゃんじゃ、立ってるだけで目立つしなー。

フェレットはオチが見えるし、

シグナムは仕事やし、

ヴィータは向いてないし、

ザフィーラは犬やし、

まあ、何だかんだで、やっぱりヴィヴィオが適任かな……と」

「アルフ、アルフー」

「それに、万が一ラインに見つかったときもヴィヴィオなら陛下スマイルで乗り切れるしなー！」

「陛下スマイルって……」

「ちなみに、見つかったても管理局は一切関知しないからそのつもりで。なお、このテープは自動的に消滅する——や!」

もちろん、ただとは言わんで——」

「——それで、どうして私も一緒に?」

翌日の朝。

ヴィヴィオに召喚されたのは緑髪先輩少女だった。

テイオが「にゃー」と鳴く。

「いや、流石に一人だと不安で。物静かなアインハルトさんなら、尾行にも向いてるかなうつて思いました(体もちっちゃいから、とは言わないよ!?)」

「はあ……」

「最初は、リオとコロナに頼もうかと思っただけ……リオじゃ黙っていられないというか、オチが見えるといいますか……」

「ああ……」

「コロナの場合は……結局、もれなくリオがついてきそうで……」

「ああ」

「こうなると、迷惑かもと思つたんですが、アインハルトさんしかいないなーと思ひまして、すみません」

「い、いえ、迷惑だなんて思つてませんから……むしろ、頼りにしていただいて光栄といえますか……」

「ありがとうございます！ それに、報酬はクリスとテイオの拡張パックだそうで」

「まあ!？」

「特にテイオは八神家お手製ですから、相性もバツチリですし、アインハルトさんも興味あるかな」と。

「デバイスが強くなれば、わたしたちも強くなれますし……それに……」

「それに?」

「少しでも機能が上がって、クリスたちの負担が減るのは、いいことかなうって思ひまして」

「そうですね。そういうことでしたら、喜んでおつき合ひさせていただきます」

「はい！ それとあともう一つ。ほら、なんかこれって、わたしとアインハルトさんがデートしてるみたいじゃないですか」

——ブハッ！

キヨロキヨロ。

「ヴィヴィオさん、どうかしましたか？」

「い、いえ、どこかでコロナが見てるよーな気がしまして……あー、気のせいですよね」

正解。

魔法を使い、スナイパーのごとく狙い撃てそうな位置から眺めていたのはこの2人。

「ちよ、コロナ、見つかったちゃうよ!？」

「わ、私もうお腹いっぱい……」

「いつからそんな『V i v i d L I F E』みたいなキャラになったの!？」

「せ、先週から……ぐはっ!」

「ちよ、そんなことじゃ八神指令から頼まれた2人の護衛ができないじゃん!」

こうして、ヴィヴィオとアインハルト——ベルカの聖王と霸王はそろってリインフォースの後をつけたのだけど……。

アインハルトが、壁にピツタリ背中をつける。

「リインさん、誰かと待ち合わせをしているみたいですね……」

「そうですね……（キャー、アインハルトさん、尾行姿もカッコイイ!）」

2人はそつとカフェのテラス席の様子をうかがった。

「この位置からだ、死角になって相手の姿が見えませんか……どうしますか?」

「あ、はい。そうですね……ここは、変装して接近しましょう!」

「変装……ですか?」

「クリス、お願いっ!」

——セイクリッド・ハート、セット・アップ!

はい、『Fate/Zero』のセイバーみたいな感じで」

「黒いスーツ姿っ!? てか、フェイトゼロって何ですか!? ——っていうか、私まで変

わってるんですけど!? しかも、髪を下ろした大人モードに……あの、私の方が女の

子っぽい格好って、ヴィヴィオさんと逆なんじゃ……」

「いいんですよ。いつもと逆だからこそ、変装になるんです!」

「た、確かに……」

ヴィヴィオはサングラスをかけると、片膝をついて、アインハルトの手を取った。

「それでは、アインハルトお嬢様、参りましょうか?」

——ブホオオ!

遠くでコロナが鼻血を噴き上げた。

「さ、行きますよ、アインハルトさん！」

「はい——」

相手の姿が見える位置まで移動する。

あと10メートル……。

あと5メートル……。

あと3メートル……。

あと1メートル……。

つて、

「ガリユウウ——つつつ!!?」

ルーテシアの人型召喚獣だった。

2人の叫びにリインが振り返る。

「あれ? ヴィヴィオにアインハルトじゃないですか、こんなところで奇遇ですね」

「……」

当然、ガリユーはしゃべらないわけで、

「えっと、どういうこと……?」

「つまり、私のためにガリユーから格闘技術を習っていたと……?」

八神家に帰ったヴィヴィオは、リインフォースと一緒に事情を説明した。

「はい、どうもそうみたいです……」

「昨今、ストライクアーツを始めとした格闘技がブームじゃないですか。

そうになると、接近戦を挑んでくる犯罪者も増えるかもしれません。リンネ選手みたいに、タフネスな人もいるでしょうしね。

そのときのために——はやてちゃんは忙しいですから——リインがこっそり学習し

ておこうかなー、と思ったんですよ」

「そんなんザフィーラから習えば……」

「それじゃ秘密にならないですよー。ザフィーラにも内緒だからいいんじゃないですか」

「う、うーん……」

「何にせよ、これで一安心ですね。リインさんの話し相手に音声がない理由も、通信先がハッキリしなかったのも、召喚前のガリューさんの次元だったからってことで」

常にルーテシアの実家にいるわけではないのだ。

「うう……っ……そんな、そんな弱いオチでええんか!? ガリューオチって……」

「もうはやてさん、この話はこれでおしまいです。あんまりしつこいと、お婆……桃子さんに連絡して、翠屋をネタにした司令ジョークのこと、バラしますよ?」

「なーっ!? そんなん、まだなのはちゃん『少し頭冷やそうか』の方が100倍マシやないかああ——っ!」

「——と、まあ、そんなことがあったんですよ。

聞いてますか?

ええ、まあ、最初から盗聴されてるのはわかってましたしね。

人格型ユニゾンデバイスをなめてもらっては困ります。

ルーテシアにも負けないんですから！

……でも、恋、ですか。

はわく、いいですね、リインもしてみたいです。でも……まずは、はやてちゃんが先ですかね。

あなたはどう思いますか？」

こうして私は、今日も、どこか遠くの——声も届かない——次元世界に住む、モニター越しの「あなた」に話しかけるのだ。

「それでは、おやすみなさいです」

アインハルトさんをモフリ隊

放課後。

わたしとリオとコロナの3人は、いつものように——ジムに行くんだよ——校門前でアインハルトさんと待ち合わせをしていたのだけど……。

早速リオがしゃべり出す。

「この前ヴィヴィオから、地球産のマンガ借りたでしょ?」

「うん、『ご注文はうさぎですか?』のことでしょ?」

「そうそう。——で、読んでて思ったんだけど『チマメ隊』って、あたしたち3人に似てるよね!」

「わたしがチノで、リオがマヤで、コロナがメグってこと?」

ちなみに、チノは髪が長く、頭にウサギを乗せている女の子。マヤは髪が短く、八重歯が特徴的なボーイッシュな女の子。メグは髪が二つ結びで、礼儀正しくおとなしい女の子だ。

「そうそう、ヴィヴィオ、よくわかってるじゃん!」

「あはは、わたしも一緒のこと考えたから」

わたしも読んでいて、なんとなくわたしたち3人と似ているなあ、と感じたのだ。すると、先に貸して読んでいたコロナが小さく唸った。

「そうなるよ……ヴィヴィオとリオとコロナで『ヴィリコ隊』よね」

「ゴロ悪っ!?!」

「ま、まあ、それくらいは妥協しようよ……あはは……」

わたしは話題を切り替える。

「じゃ、メインの主人公——ココアは誰がいいと思う？」

明るく元気で、ドジな部分も多いが、お姉ちゃんにまかせなさい——みたいなノリのキャラだ。

「主人公として考えると、なのはママなんだけど……」

「いや、流石に年齢的に——あつ、あつ、痛いよ！ なにこのピンクの魔法弾は!?!」

——アクセルシューター!?!

流石はなのはママ。

狙い撃つどころの話じゃない。

そうこう言っているうちに、

「ぎ、ゴメンなさい……なの……」

「口調までしつつけられてる!？」

顔を地面にこすりつけ、お尻を突き上げた格好のままリオは意見を撤回。

「ぐい、ヴィヴィオがチノなんだから、ヴィヴィオに近い年齢がいいと思うんだよね……た、例えば、字面的にコロナとか……」

「確かにココアとコロナで一文字違いだけど、わたしはもうメグだしね。それに、なのはさんみたいに素敵なお姉さんじゃないし」

——メグみたいな台詞で、なのはママの砲撃を避けた!？」

「だ、だったら、中の人的に、リンネさんのコーチさんなんてどう?」

「いや、それこそ流石に無理っしょ?」

わたしは少し考えて、

「じゃ、ユミナさんは? わたしたちより二つ年上で、性格も明るいよ」

「でも、ココアってあんまりしつかりしてないじゃん」

「あゝ」

と、苦笑するしかない。

「ユミナさんには悪いけど、ココアといったら森永——今年コラボしてましたが——じゃなくて主人公だからね。いくらアインハルトさんのクラス委員長だからといって、そこまでじゃない」

「リオがいつになく厳しい!？」

すると、コロナがゴーレムでも作るように、ポンと手を打った。

「もつとシンプルでいいんじゃないかな。ヴィヴィオと並んだ主人公——アインハルトさんで」

わたしは脳内でアインハルトさんとココアを比べてみる。

「ちよつとイメージが合わないかな」

「天然なところは似てると思っただけど……ダメ？」

「天然かあ」

そこは否定できない。

ようやく本格復帰したリオが立ち上がる。

「アインハルトさんって寡黙だし、いつも真面目でSO COOL!——って、感じだもんねえ、一方でココアは賑やかで、周囲を振り回して……あ、いいこと思いついた！」

リオがわたしを見て「にまあ」と笑みを浮かべた。

「アインハルトさんをチノにして、ヴィヴィオをココアにすればいいんだよ！」

「な、なんだって——」

「それだっ！」

コロナが食いついた。

「ちよ、ちよつと待って！ わたし年下だよ!？」

「いいんだって、イメージなんだから。だって、いつもヴィヴィオは元気で明るいし、将来は『街の国際バリスタ弁護士としてパンを焼きながら格闘家の道を生きる』って言うてるし」

「言つてないよ!？」

「じゃ、だいたいひとりりでアインハルトさんを振り回し隊だよね」

「否定できないっ!？」

「それにほら、アインハルトさんが髪を下ろして、頭にテイオを乗つけて、ウエイトレスの衣装で『アインハルト・ストラトス、ご、ご注文に参りました』——ちよつと噛むところがポイント——で、接客している姿を想像してみてください」

「あゝ」

「さらには、コーヒーでも格闘技でもいい——一つのことにごだわるあの姿勢。クールに見えてデレやすいあの性格!」

「ああゝ」

「そして何より——」

リオがわたしの両肩に手を置いた。

「ヴィヴィオがココアになれば、姉という立場を利用して、いつでもアインハルトさんをモフモフし放題っ！」

——グッ。

「どうしてコロナは親指立ててるの!?!」

でも、それはそれで……。

「あああ、えつと、うん、コホン。ココアでお願いします。——つて、もうちょー恥ずかしいんだから、絶対アインハルトさんの前では言わないでよね！」

「わかってるって!」

——ググッ。

「だからどうしてコロナは親指を2本も立ててるのおお!」

とてもじゃないが、恥ずかしくてアインハルトさんをモフモフしたい、なんて言えないのだ。

こころで、

暫定『ヴィヴィオと愉快的仲間たち』と『ご注文はうさぎですか?』変換表

●ヴィヴィオ⇨ココア

●アインハルト〓チノ

●リオ〓マヤ

●コロナ〓メグ

「こうなると、次はリゼかあ……」

リオの言葉に「あ、まだ続けるんだあ」と思ったが口にはしない。

ちなみに、リゼといえは種田梨沙——一日も早いご回復をお祈りしてますっ！——
じゃなくて、男勝りな性格だけど、容姿端麗でスポーツ万能、とにかく格好いい女の子だ。

「そういうえば、さっきのコロナとココアみたいに、リオとリゼって一文字違いだね。性格全然似てないけど」

「全然似てないとか言うな！」

「おっぱいのサイズも違うけど」

「ちよ、ヴィヴィオ、コロナがいじめるんだけど!？」

「あゝ」

——否定できない！

「格好いいというと、わたしの中だとやっぱりフェイトママなんだけど」

「確かに、天然なところといい、リゼと似てるよね」

「そうそう、アインハルトさんと一緒に、カツコイイけど隙があるんだよねえ」

「あゝ」

——世間だとそういう評価なのか……。

「否定できない!」

「ヴィヴィオはなのはさんの娘だから、そういうアインハルトさんに惹かれたんだよね」

「へ……」

——ひ、否定できない!?

「ほらほら、ヴィヴィオが真っ赤になってるから」

「私としては、同じタイプのリンネさんも捨てがたいんだけど。高町家の家訓としては、

殴り合ったら友達でしょ?」

「そんな家訓ないからね!」

「コロナの言うことにも一理ある……けど、やっぱりあたしたち『ヴェリコ隊』——」

「え、それ決定事項なんだ!」

「との関係性がイマイチなんだよね、リンネさんだと。フーカさんがココアなら、リンネ

さんがチノ——みたいな」

「あゝ、でも、扱いはアインハルトさんと一緒なんだ……」

「あれは絶対デレるね」

「いや、言わなくていいから」

どんだん話が逸れていく。

「じゃ、フェイトママもリンネさんもダメってことで。そうなる——ココアより前にチノに会ったみたいなのに、わたしより前にアインハルトさんに出会って——立ち位置は、お姉さん、教官、先生、あるいはコーチ……ん、コーチ、コーチ……ああああ——っ!？」

「「ノーヴェええ——っ!」」

「偉い、ヴィヴィオ! そうだよ、最近会長だけど、コーチがいたじゃん!」

「ノーヴェええなら、ヴィヴィオとアインハルトさんとの関係性もバッチリだしね。——ほら、ナカジマジム3姉妹爆誕だよ!」

「うわあ……3姉妹って、ノーヴェ、口では嫌がっても、あとでこっさり喜んでそう」

別の姉妹も多いし、ぶっきらぼうだけど、ノーヴェはああ見えて寂しいと死んじやうウサギみたいなのだ。

「ノーヴェって、ウサギみたいに寂しいと死んじやうタイプだよね」

「うわああ! リオ、それ絶対本人の前じゃ言っちゃダメだからね!」

ちなみに、あとで知ったノーヴェエが、顔を真っ赤にしてリングをゴロゴロしたのは秘密である。

暫定『ヴィヴィオと愉快的仲間たち』と『ご注文はうさぎですか?』変換表追加

●ノーヴェエ||リゼ

「こうなると、次はココアの親友ポジシヨンの千夜とシャロの2人なわけだけど、やっぱリヴィヴィオの親友がいいのかな?」

「わたしの親友というと、リオとコロナになっちゃうけど?」

「はっはっは、うれしいことを言ってくれますな、ヴィヴィオ選手。でも、あたしとコロナはもう役どころが決まってるしなあ、コロナ、誰かいない?」

「ん、ルーちゃんでもいいんじゃない? やつと『V i V i d S t r i k e!』にも出たし」

「あ、それだ! ルーも千夜もお嬢様っぽいし」

「うわあ……」

——勝手に決められていく!

「でも、お嬢様っていうとシャロ役はどうするの？」

「そこだよなあ」

「えーつと2人とも……」

「髪型が似てるミウラさんなんてどう？」

「いやー、いまいちシャロっぽくないというか……」

「おーい……」

——ちつとも聞いてくれない!?

「もう、2人とも勝手に決めないでよ！」

「じゃ、ヴィヴィオは誰がいいの？」

「え、えと……」

——親友、親友……。

マズい、自分の口から親友なんて、リオとコロナ以外だといひ出しづらい。

——もしかして2人とも気づいてた!?

リオとコロナが苦笑している。

——ええい、ままよっ！

「シャロ、シャロ、シャロ、シャロ……キャロ、ん？ キャロ!?!」

「あ」

「お」

「性格は似てないけど、ルールーとの関係性ならアリなんじゃない？」

「うん。ルーちゃんとキャラさん、千夜とシヤロ、あのイジられ方といい、間違いなく親友だよね！」

「やったよ、キャラ！ この気持ちキャラに届けたい——」

ということ、後日本当に通信してみました。

「おめでどう、キャラ！ シヤロに選ばれたよ！」

『何それ？』

「お嬢様っぽいしやべり方してみて！」

『できないよ！』

「シヤロと一緒に、ちよつと、貧乏だったイメージもあるしね」

『ナニソレええ!?!』

キャラは幼いころ、部族から追い出されて——わりかしボロボロな格好で——たった一人旅をしていた重い過去があるのだ。

暫定『ヴィヴィオと愉快的仲間たち』と『ご注文はうさぎですか？』変換表追加

●ルーテシアⅡ千夜

●キャロⅡシヤロ

「そんなわけで——ヴィヴィオ、コロナ、残る枠はモカ姉と青山さんなわけだけ……」

モカはしつかり者で社交的なココアの姉。

青山はおっとりした小説家の女性。

わたしはバツ——と、誰よりも早く手を挙げた。

「はい！ 2人にはしつくりこないかもしれないし、お姉ちゃんではないんだけど、モカには、なのはママを押しつくりたいと思います。——すねるので」

「あく、すねるんだあく。なのはさん子供っぽ——あたっ！ またピンクの魔法弾、あだ

だっ！ やめてやめて！」

——ママ……。

「でも、悪くないんじゃないかな。なのはさん若いしね、ヴィヴィオのお姉さんと名乗ってもおかしくないよ」

——ピロピロ。

「えーつと、コロナにメールが来ました。今度うちの夕食にご招待だそうです」

「やった！」

「えー、どうしてコロナばっか！ あたっ、いたいよ、このピンク!」

——ママ……。

ボコボコにされたリオが帰ってくる。

「もう、モカ姉はなのはさんと、青山さんはフェイトさんでいいんじゃないかな……」

「あー、そんな感じで……」

まあ、確かにフェイトママと青山さんはちよつと似ているかもしれない。

その後、紆余曲折あって——原稿用紙で言うところの4枚くらいはありました——ティツピーは八神司令。チノの父タカヒロは、シグナムさんに決まった。

『ヴィヴィオと愉快的仲間たち』と『ご注文はうさぎですか?』変換表完全版

● ヴィヴィオ⇨ココア

● アイんハルト⇨チノ

● リオ⇨マヤ

● コロナ⇨メグ

● ノーヴェ⇨リゼ

● ルーテシアⅡ千夜

● キャロⅡシヤロ

● なのはⅡモカ

● フェイトⅡ青山

● はやてⅡティツピー

● シグナムⅡチノの父

「ふう〜、やっと決まったよお〜」

わたしが大きく伸びをすると、

「ここ、この間の試合よりキツかった……」

「うん、それはリオだけだけどね……」

再びコロナがゴーレム創成みたいなのに、ポコンと手を打った。

「そうだ、アインハルトさんがチノで、リオがマヤで、わたしがメグってことは『チマメ

隊』や『ヴェリコ隊』でなく——『アリコ隊』なんじゃ？」

「どこかの生命保険みたいだけど——『ヴェリコ隊』より断然ゴロがいいっ！」

リオとコロナは「アリコ隊、アリコ隊」と歌いながら手を取り合って回っている。

「これはもう、新しいトリオを結成するしかないかもね！」

「え？　ちょ、ちょっとわたしは!？」

「ココア役の方は『アリコ隊』には入っておりません」

「なー」

「主役の座はヴィヴィオに譲ったけど『Vivid』新3姉妹爆誕だね!」

「ふぎや!？」

「これぞ、試合に負けて勝負に勝った——という」

——くっ……。

「リ、リオのくせに生意気なー。だ、だったら、だったら、わたしだって……わたしだって……ひとりでも——」

ここで、わたしの全力全開!

『『アインハルトさんをモフリ隊』だもおお——んっ!!』

そのときのわたしの叫びは、遠く聖王教会まで届いたという。

ここに新たな聖王伝説が誕生した……。

すると、リオとコロナが不思議な踊りを踊り始めた。

「あ、アインハルトさん。……いい、１モフ、おいくらですか？」

「お、おかしな質問きたああ——っ!？」

「きやああ——っ!」

アインハルトさんがモジモジしながら答える。

「……いい、１モフ、１スパ―で」

「こっちはこっちで、斜め方向に答えたああ——っ!？」

「むはーっ! か、格闘家らしいお支払だけどね!」

恥ずかしい、恥ずかしいけど……わたしは精一杯答える。

「じゃ、１０モフで」

「意外と遠慮ないな!？」

あ、ちなみに、１０回もスパ―リングしたので、モフモフどころじゃなかったよ？
ちつとも残念じゃないよ？

NANOHAカートでリンネと再戦してみた

高町家・鉄の掟。

それは、全力全開で拳を交えたら友達になれ——というモノである。

なので——なのはママの許可をもらおうと——わたしは早速リンネさんを家に招待したのだ。

「大手ファッションメーカー『ベルリネッタ・ブランド』のお嬢様だし、きつと、今日も、リンネさんの髪色に合わせた、素敵なお白い洋服なんだろうなあ。」

あの白いバリアジャケットも、ブランドデザイナーによる特注品だって話だし……
そうワクワクしながら待っていると、

——ピンポーン！

「あ、はい！ リンネさんいらっしゃーい！」

ガチャリ——とドアを開ける。

「本日はお招きいただきありがとうございます」

礼儀たたくしく一礼して、顔を上げたリンネさんは、予想通り真っ白い、

「——死に装束じゃないですかああ——つつ!?」



「すみません、すみません！ コーチに高町選手の家を招待されたと話したら——。」

『高町選手の家、ですか……。リンネ、気をつけなさい。高町選手の母親は、あの管理局の白い悪魔とか魔王と呼ばれている——高町なのは一等空尉です。』

あなたも映画を見たことあるでしょ？

子供のころからあんなですから、大人になったらもう、ね……。私たちとは次元の違う生き物です。

だから、絶対に粗相のないように。ただでさえ、あなたは高町選手にケガを負わせているのだから——ハッ!?

ひよつとしたらこれはもう、招待という名を借りた羊の皮を被って校舎裏へ呼び出す狼的な——お、おしおきな?!?』

そうしたら家族会議で、

『これしかない!』

という結論に達しまして……あ、一応ベルリネット・ブランドの新作白装束ですよ?」
「ホントだ。ブランドロゴが入ってる! じゃなくて、どんな家族会議ですか!? それに、いくらなのはママでも、そこまで魔王じゃないですよ〜」

そう言つて、わたしはリビングへ続くドアを開いた。

すると、

「あ」

真っ白いバリアジャケットに身を包み、砲撃モードのレイジングハートをリンネさんに向けた噂の白い魔王が、

「スターライト……ブレイカアア——ツツ!!」

「ひいひい——っ!?!」

「ちよ——っ!?!」

わたしとリンネさんの目の前で、まばゆいピンクの光が弾けた。

——パンパン！

「いらつしやうい、リンネちゃん。驚いた？ レイジングハート、クラツカーモードだよ？ 今年のクリスマスマスにお披露目予定だったんだけど、まさか、こんなに早く使うことになるうとは……つて……あれ？」

「リンネさん、リンネさん!? うわああ、泡吹いてるよおお——っ!？」



「すみません、すみません！ ハートが弱くてごめんなさい！」

「あー、リンネちゃん。体は頑丈だけど、精神が弱いつて、ゴッドマジンガーみたいなのだね」

「なのはママ、その例えわかりにくいから。あと、ゴッドマジンガーは別に精神弱くないから。人が乗ってなくても勝手に動くし」

ちなみに『ニコニコ大百科』からゴッドマジンガーを引用させてもらうと、

『ムー王国の守護神。通常時は石像だが、ムーの民がピンチになると火野ヤマトと一体

化し、戦う。

飛び道具は持たず、武器は専用の剣のみ。主にパンチや直接掴んで力任せに引き千切るなど肉弾戦を行う。

神秘的で荘厳な存在感を持つが、無口のうえにかなりの気分屋でヤマトとムーの民をよく振り回す』

「——だいたいリンネさんと一緒だ!?!」

スパロボ! スパロボ!

お待ちします!

「ううっ……また豆腐メンタルでござ迷惑をおかけしました……」

「いえいえ、今のは、なのはママが悪いですから」

すると、リンネさんがキョロキョロ周囲を見回した。

「……あの、それで、高町選手のお母様はどちらに? 声はすれども姿は見えず……」

「あく、リンネさんを驚かせた罰で——今日は一日子供モードの刑です」

「さあ! 今日には全力全開で『NANOHAカート』をやるよおお——っ!」

ソファアに座った9歳くらいのツインテール少女が、コントローラー片手に拳を突き上げた。

テーブルの上にはジュースとお菓子。

準備万端である。



「あ、あの……私、ゲームはあまりしたことなくて……」

なのはママがソファアの上に立ち上がる。

「そんなリンネちゃんに解説しよう——」。

『NANOHAカート』とは、高町なのはやフェイト・テストアロツサなどの人気キャラクターが、次元世界ならではの機能や性能を持った乗り物に乗りこみ、魔法やデバイスを駆使しながら競争するレースゲームのことだよ！」

ちなみに、HPゲージもあって、ゼロになると、しばらくレースに復帰できなくなるのだ。

「は、はあ……」

「大丈夫ですよ、操作も簡単ですし。それに——こんなこともあろうかと、すでにリンネ

さんのキャラも追加してありますから」

画面には、リンネさんと思しき——ねんどろいどみたいな——デフォルメキャラクターが乗る白いカートが映っていた。

「ホントだ!? いつの間に……」

「ちなみにフーカさんもいますよ。確かに強くはなつたんですが……『わし』とか『じや』と台詞が入る以外、性能はアインハルトさんの下位互換なんで。レースゲームだと表現しづらいですね。連続魔とか使えればいいのに……」

「フーちゃん、赤魔道士みたい……」

すると、なのはママが優しくリンネさんの肩を抱いた。

「まあ、習うより慣れろってね。最初っから上手い子なんていないよ。まずは1回やってみようか?」

「さっすがなのはママ。見た目は子供、頭脳は年の功——」

「ん、ヴィヴィオ、何か言ったかな」

「スピマセン……言い間違えました……」

そんなわけでレース開始したのはいいのだけど、

「あ、あの、私のカートだけ、ひどくスピードが遅くありませんか……?」

「あく、リンネさんのキャラの特徴なんですよ。スピードが遅い代わりに、ダートや壁にぶつかっても——」

「まったくスピードが落ちません!?!」

「はい。ある意味、初心者向けのカートかもしれないですね。マズかったですか?」

「いえ、いかにも私らしいというか、今の私にはちょうどいいです。そういえば、ヴィオさんのカートは?」

「スピードタイプです。すごい速いんですけどね……例えば、リンネさんに当たったりとすると——」

——スコーン!

「ちよ、吹っ飛んでったんですけどおお!?! あと、HPゲージが一気に3分の1も減りましたよ!?!」

「ええ、ちよー速いんですが、ちよー打たれ弱いんです。まあ、わたしらしいといえば、わたしらしいんですが……」

ちなみに、隠しキャラの聖王モードのときは頑丈だし、ゆりかご号は無敵なのだ。

「じゃ、なのはさんのカートは……」

「どーけ、どけええ——いつ!」

次々とコンピュータに体当たりして吹き飛ばしていく。

「何ですか! あのガンダムヴァーチエみたいなGNフィールドは!」

「GNフィールドじゃないですけどね! バリアタイプの防御魔法をまとつて、突撃してきます」

某有名レースゲームのスター状態が、ずっと続くようなものだ。

すると、なのはママが「ふっふっふ」と笑みを浮かべる。

「よし、カートリッジゲット! 魔力ゲージも溜まったことだし、そろそろ行くよお——っ、3、2、1、くらえええ、スターライトブレイカーああ——っ!」

コースが真っ白に染まる。

「ひいひい——っ! 私のカートも吹っ飛んだあげくにHPゲージが真っ赤にいい!」

「ええ、コース上にいると、ほぼ即死です——ていうか、人間タイプで耐え切ったのは初めて見ました——なので、スターライトブレイカーのカウントダウンが始まったら、コースアウトして避けてください」

「今さら言われても!」

「じゃ、もう一発、いっくよおお——っ！」

「いやああ——っ！　って、コースアウトしてもスピードが落ちない私は、結構有利なのでは？！」

「甘い、甘い！　——シュートッ！」

無数のピンクの魔法弾が、カーブを描いてコース外のリンネに襲いかかる。

「スターライトブレイカーじゃなくて、誘導追尾弾?！」

「はい。なのはママは口で言うのと、実際に飛んでくる魔法が違うので厄介なんです」

「人気カリスマ教導官が教える、戦いの駆け引きだよ！」

「はい！　勉強になります——って、高町選手、これどうやって防げばいいんですかああ!?!」

「アクセルシューターはコース外まで追ってくるので、全キャラ共通のラウンドシールド（Rボタン）を張って防いでください」

「な、なるほど……一応、全ての攻撃に対抗策が用意されているんですね？」

「はい……それでも、なのはママは強キャラなんですけどね」

「はあ、流石は高町選手のお母様。管理局のストライクフリーダム！　憧れますっ！」

「憧れるんだあ〜」

「私も、リンネ・バルバトスとか言われたい！」

「鉄血だね!? すでにだいたいそんな感じだけど!」

4時間後――。

「いや、満足、満足!」

「……ママがね」

「……ううつ、スターライトブレイカー怖い!」

死して屍拾う者なし。

リンネさんが操作に慣れてからは、色々なキャラクターを使ったのだけど、だいたいなのはママが勝った。

特に、なのはママが操作キャラに高町なのはを選ぶと（無印く劇場第2期まで、どれでも）悪魔のように強かった。

「だからフェイトママに大人気ないって言われるんだよ!」

「さくて、夕食の支度でもしよーかな。もちろんリンネちゃんも食べてくよね?」

「あ、はい! ご迷惑でなければ……ありがとうございます」

キッチンに向かうなのはママを見送ると、リンネさんがわたしを見て微笑んだ。

「本当に、素敵なお母様ですな……」

「はい！ でも、リンネさんのご家族だって素敵じゃないですか。家族会議で白装束を選んじやうなんて、とつても楽しそうです」

「それはもう言わないでください！」

「あははっ、それに——私もリンネさんと同じで養子として引き取られたらから、何となくわかるんです。いい家族なんだなあつて」

「高町選手……」

「もう、高町選手じゃなくて、ヴィヴィオでいいですよ。だいたい、わたしの方が年下なんですから」

「あ、はい！ じゃ、じゃあ……ヴィヴィイさんで」

「うん、一気に飛びましたね」

「違うんです、違うんです！ これはフーちゃんがそう呼んでたからでええ！」
などと、地味に痛いリンネ選手のポカポカを食らっている

「あ、そうだ。リンネちゃんも明日からの合宿に行くでしょ？」

キツチンから、なのはママの声が聞こえてきた。

「……合宿？」

「いや、今回は出席者が少なくて。みんなは私がしごきすぎだつて言うんだけど、そんなことないよねえ、ヴィヴィオ？」

「……」

私は無言で明後日の方を向いた。

——答えられません！

「えつと、それで合宿というのは……」

「そうだ！ リンネちゃんタフネスだし、大人チームの方でもいいよね？」

「えつと……」

「模擬戦で、リンネちゃんにも本物のスターライトブレイカーをガンガン撃ちこんであげるから、楽しみに待っててね！」

「……ほ、本物のスターライトブレイカー？ あ、あんなの正面から受ける……ちよ、ヴィヴィさん、あの、どうして横を向いているんですか……ヴィヴィさん、ヴィヴィさあ——んっ!？」

わたしは、そつと切符を差し出しました。



後日。

フリーカさんが、

「ヴィヴィさん、リンネのやつが高町家は魔王城じや言うとつたんですが、どがあな意味ですか？」

「……え〜つと、友情の証、かな」

特訓はグラーフアイゼンで

——ズッドオオオオ——ンツ！

「うくん、次の対戦相手は巨大ハンマー使いかあ。避けられるかなあ……」
わたしはピツと映像を止めると、家のソファアで小さく唸った。

「ヴィヴィオのスピードなら避けられるでしょ？」

キツチンのなのはママは、笑いながら答えてくれるけど、

「この大会、リングアウトしたら負けってルールなんだよね」

「あー、天下一武道会みたいなの？」

「そうそう」

地球出身者は、何かとドラゴンボールで例えたがるのだ。

「じゃ、本職のハンマー使いでも呼んじゃう？」

「はい？」

……本職のハンマー使い？

「——というわけで、鉄槌の騎士ヴィータ教導官です。拍手、拍手」

「わ〜」

スポーツセンターにやってくると、レイジングハートがトレーニング用の仮想リングを展開してくれる。

「なんであたしがこんなことを……」

「はやてちゃんちから、1週間レンタルしてきました」

「そんなにいねーよっ!? いても2泊3日だ!」

……2泊3日はいるんだ。

「ほら、時間が惜しい。さっさと始めるぞヴィヴィオ!」

「はい、ヴィータコーチ!」

「じゃ、私は巻きこまれないように離れて見てるね」

こうして、変なBGMを流しながら、のろいうさぎ跳びでもしそうな特訓が始まったのだけど、

「ギガントフォルムだ。打ち下ろすから避けてみる!」

「はいー！」

モグラ叩きのモグラになった気分。

リングアウトしないよう、頭上から降ってくる巨大ハンマーを避け続けていると、

「——はう、いたっ!？」

銀色の鉄球が、わたしの背中に命中した。

なのはママが腕を振り上げて抗議する。

「ちよ、ヴィータちゃん!? ズツこいよ、相手選手はハンマーオンリー使いだって!」

「相手だつてヴィヴィオ対策に、これくらいするかもしれないだろ! 大振りのハン

マーの欠点をカバーするんだよ」

なるほど。

「ママ、大丈夫だから。ヴィータさん、続きお願いします!」

「よし、もう一度、縦に行くぞ——」

「はいー!」

「と、見せかけて、横にスイングだ!」

水平に振るわれたグラーフアイゼンを、わたしは垂直にジャンプして避ける。

「もうその手には乗りませんよ!」

「んで、そのあとはどーすんだ?」

「へ?」

目の前には無数の鉄球。

どうにかシールドで防いで着地したところを、

——スコーン!

ホームラン。バッティング練習でもしているかのようなスイングで、わたしはリングの外に叩き出された。

きゅっ。

すると、

「もーっ! ——レイジングハート、セーツト・アーツプ! ヴィータちゃん、次は私が相手になるよ!」

「ちよ、な、なのはママ!?!」

「いいだろう!」

「ヴィータさんまで!?!」

「てめえとは、どこかで決着をつけないといけねーと思ってたからな。てめーが、これ以上年食って弱くなる前に、一戦やつとくのも悪くねえだろ」

「年、食つて……ふくん、そつかく、そうきたかあ、いいよね、ヴィータちゃんはずつとちつちやいままで、フフフ」

「そうだな、てめえよりは若いからな、ふふふ」

「けちよんけちよんにしてあげる／やるよ！」

こうして、白と赤、約15年ぶりの全力全開バトルが今始まる！



「——で、こうなつたど？」

遅れてやってきたフェイトママとわたしの前には、頭から垂直に地面にめりこんだなのはママと、黒焦げになって五体投地しているヴィータさんの姿があつた。

「もう、2人ともわたしの特訓なのに」

フェイトママが笑っている。

「なのはとヴィータは、ちようとヴィヴィオくらいの歳からライバル関係だつたしね、仕方がないのよ」

「へえ。じゃ、ドラゴンボールでいうと、『悟空VSベジータ』みたいな関係？」

「うん、どっちかというところ『悟空VSピッコロ』みたいな感じかな。仲間になる順番に。ちなみに、ヴィヴィオがベジータね」

「あはは。そっから、じゃ、そうなるってフェイトママは……」

「うん、うん」

「ヤムチャだね！」

「!？」

ぴこぴこキャラちゃんとうちでの小槌君グレート

ある日の夕食後。

高町家のリビングに、エリオから秘匿通信が送られてきた。

『実は、最近キャラの身長がスゴく伸びていたみたいで……』

「「な、なんだってー!?!」」

わたしとなのはママとフェイトママは、そろってデザートのカレーケーキを落とした。

『先日、僕はいつもより早く家に帰ったんです。』

そうしたら、洗面所にフェイトさんやなのはさんみたいな長身の女性の影が見えて……次の瞬間、パツと光ったかと思うと、いつものキャラが現れて、お帰りなさい、つて。

だけど、まるで常時魔法を使っていたみたいに疲れた顔をしていて……。

僕も気にはなっていたんです。

「ここ最近、キャラの身長がちつとも伸びてないなって……」

「「……………」」

『もしかしたら、僕やフェイトさんに、自分は変わってないから安心して欲しいって、身長が伸びたのを隠すため、わざと変身魔法で子供モードになってるんじゃないかって』

「それは流石にないんじゃない？」

慌ててフェイトママが否定した。

ところが、

「いや、あるかも……」

「なのは!?!」

わたしもすかさず追従する。

「キャラの気持ちもわかるかも。わたしだって、なのはママやフェイトママに心配かけたくないって思うもん。」

今の関係性っていうのかな、たとえば成長したとしても、2人の前では子供らしく振る

舞いたい——そっちの方が喜んでくれるんじゃないかな〜って思っちゃうから」

『だ、だよね!?!』

「私も、そういうところあつたなあ……」

なのはママも翠屋のケーキを見ながら頷いている。

「で、でも、そんなのどうやって尋ねたら……家族会議、家族会議をすればいいの!?!」

フェイト一家、緊急招集である。

「安心してフェイトちゃん。こんなこともあるかと、秘密道具を用意しておいたから」

「……ひみつ、道具?」



「てれれれ〜」

マジック・ハンマー『うちでの小槌君グレート』〜。

——というわけで、こんなこともあるかと(2回目)、教導隊(ヴィータちゃん含む)の面々と潜った『破邪の洞窟』で、手に入れておきました!」

「破邪の洞窟!？」

「アバン先生が潜ったやつだね!」

不思議なダンジョンみたいなものだ。

「そんな連続して昔のジャンプネタを出されても……つていうか、そんなところ潜って教導隊はヒマなの!？」 執務官は忙しいのに!」

さり気なく愚痴るフェイトママ。

すると、

「そ、そんなことより、これどんな状況なんですかああ——っ!？」

「あはは……」

というわけで、実はエリオから通信をもらって、すでに3日目。

よく晴れた青空の下。

高町家の庭には、コロナから借りたゴーレムのゴライアス（なのはカラー）に、両肩をがっちりホルドされたキャロと、苦笑気味のエリオの姿があった。

「だ・か・ら、うちのの小槌君グレートで叩いて、キャロを大きくしてみようって。打ち出の小槌は知ってるでしょ？ 地球のロストロギア」

「あれってロストロギアだったんですか!? ——じゃなくて、それでどうやってわたしの疑惑が晴れるんですか、なのはさあぁ——んっ!?」

なのはママはくるりと振り返る。

「ふっ、ヴィヴィオ、解説して——」

「了解、ママ!」

うちでの小槌君グレートとは、古の大魔法使いダーク・シユナイダーが、色々あつて小さな——ねんどろいどみたいな姿になったときに、これでぶっ叩かれてもとのサイズに戻ったという、伝説のいわくつきマジック・ハンマーだよ!」

「つまり、もしキャラが本当は成長しているのに、魔法で子供モードになつてゐるなら、叩いた瞬間、デフォルメ状態が解呪されて、私やフェイトちゃんみたいな八頭身に戻ると——」

「裏切り者!」

「別に、今はデフォルメ状態じゃないですから!? それとヴィヴィオ、別にわたしは好きこのんでちつちやい同盟じゃないから、これがわたしの普通なのっ! フェイトさんも何か言つてください!」

「キャラ、エリオ、ついにフェイト一家の団結力を見せるときがきたわ。家族の絆ね!」

「ちよ、それおかし——っていうか、何でキメ顔!? もう、エリオくんも何か言つて止

めてよおお！」

「ハンマーに、家族の絆……お正月にはキャロとフェイトさんと餅つきかあ……」

「エリオくん、また何か違うこと想像してるよねっ!!? わたしも結構憧れるけどおお——っ！」

「スゴイね、なのはママ。フェイト一家の団結力……」

「ええ……」

「それ、違う意味の団結力だからああ!?!」

ツツコミすぎて息切れしているキャロを見ていてふと思った。

「そういえば、ゴライアスがキャロを押さえてるわけだけど、なのはママ、誰がそのでっかいハンマーを持ち上げるの?」

「ふふくん、それはもちろん、先週に引き続き本職のハンマー使いに……といきたかったんだけど、なぜかヴィータちゃんか逃げ出しちゃったんだよねえ……ヴィータちゃんも叩いてあげよつかって誘ったのが悪かったのかな?」

「ハア、ハア、ぞ、ぞれだああ!」

「無理して突っこまなくても……」

「そんなキャロにレストリクトロック!」

なのはママが（年齢を考えず）かわいく言うと、ピンクの光の輪がキャロの手足を拘

束する。

「うわ、これどつかで見たような……」

「……」

フェイトママが目を逸らした。

「い、今ならティアさんの気持ちが変わりますうう——っ！」

「……」

エリオも目を逸らした。

「私、ティアナにはバインドかけてないんだけどなあ……そうだ、チェーンバインドにしとく？」

「ん？ それ、わたしとアインハルトさんだああ——っ!？」

わ、わたしは目を逸らさないよおお！

「さあゴライアス、やくっしておしまいっ！」

「G A A A A A A A！」

ゴライアスが若干駆け足で、うちでの小槌君グレートを拾い上げる。

「——って、ゴライアスがいつもより緊張感もって動いてるうう!？」

巨大ゴーレムが、呪われちゃいそうなほど外見が禍々しいハンマーを、大上段に振り上げた。

何だかよくわからない魔力の奔流がバチバチ鳴っている。

「うわ、これ、物理だし……死んじゃうんじゃないかな、大丈夫、ママ……?」

「ひいひい!」

流石のキャラも、もう突っこめない。

「非殺傷設定だから大丈夫! フーカちゃんとリンネちゃんの試合も平気だったでしょ?」

「あ、ん? あとで歯医者予約してたけどね! ちなみに、あのときのちびっ子ひな壇にさり気なくキャラが混じっていても、絶対にバレなかったと思う」

「今言うことじゃないよねっ!」

「じゃ、覚悟はいい、キャラ?」

「いいわけな——」

「全力全開! GO——ゴライアスっ!」

「GO A A A A A A A A!」

「ひっ、イツヤアアア——ッ!」

「うっわ〜」

「キャラ……」

「御武運を……」

高町家とフェイト一家が敬礼ポーズで見守る中、禍々しいオーラと共に、うちでの小槌君グレートが振り下ろされた。

——ドツゴオオオオ——ン！



そんなこんなで結論から先に言うと、

「……だから言ったのに、グスン」

キャラは『そのままの姿』で、大きくなっていた。

高町家の庭で体育座りする巨大キャラ。

「と、とりあえず撮っとこ……」

「いや、撮影しないで〜」

漫画やアニメでよくある、下から見上げるとパンツ丸見え状態というアレだ。

「G A A ……」

何となくゴライアスが気遣っているように見えるこの光景……。

「はっ!?!」

突然、なのはママが何かに気づいたように顔を振り上げた。

「巨大ゴーレムに、巨大デフォルメ魔導師ときたら……ぴこぴこ？　ぴこぴこキャラちゃんなの……？」

「ううっ、デフォルメじゃないですう、っていうか、ぴこぴこキャラちゃんって何なんですかあゝ」

そんなキャラを慰めるのは、やっぱりこの人。

「ま、まあ、色々あつたけど、キャラがいつも通りのキャラだとわかって、僕は安心したよ」

「エリオくん……」

「そうね。これからも隠しごとなんてしないで、2人も私に何でも相談してね」

「フェイトさん……」

涙目のキャラが、ようやく笑ってくれる。

「へへ、家族の絆が深まったなら、たんこぶができたかいもあつたかな……」

「よかつたね、キャラ！」

最近背が伸び悩んでいたところ、わたしたちがよく大人モードで戦っているのを見て、自分もやってみようかな、と思い立って変身したものの、むなしくなってもとの姿に戻ったら、偶然、帰ってきたエリオに見つかってしまい、はわわ、と気まずくて正

直に答えられなかったのに……。

雨降って地固まる、だね！」

「そ、そうなの!？」

「キャラ、本当!？」

「な、な、何でヴィヴィオは見てきたようにわたしの状況を知ってるのおお——っ!？」

「そりやもちろん、ねえ？」

「うん」

わたしとなのはママは、顔を見合わせて頷き合った。

「「だいたい、そんなことだろうと、最初からわかってたからね／だよ!」」

フェイト一家 「「!」」

後日、フェイトママの日記をこっそり見たら「3対2なのに勝てる気がしない」と書いてありました。

クリスマスSP　　く八神はやて奇跡の一枚く

クリスマス——といえは「聖なる夜」。

クリスマスツリーにケーキにプレゼント、そして、真つ赤なサンタにトナカイさんが街にあふれる地球のお祭りだ。

しかし、残念なことにミッドチルダでは馴染みのない——ほとんど知られていない——習慣でもある。

それでも、ママたちにとっては一年の最後を彩る大切なイベントらしくて……。

「今年はみんなのオフが重なってラッキーやったなー」

「そうだね、みんなでクリスマスパーティーなんて」

「エリオとキャロも来ればよかったのに……」

——と、いうわけで、本日は八神司令のおうちでクリスマスパーティーです！

とはいえ、

『アレ（なのは）と一緒に飲んでいたら体がもたん……』

『私は朝食の用意があるから……』

『たまには、あの3人だけにしてやるのもいいだろ……』

と、夜天の騎士たちは早々に退場。だけど、

——わたし、気になります！

あの3人が、3人だけのとき、一体どんな会話をしているのか！

——というわけで、唯一残ってくれたザフィーラにもふもふしつつ、サンタクロースのように、部屋の中の様子をこっそり見学したいと思います。



「そういえばクリスマスといえば、なんやけど……」

「なに、はやてちゃん、またデートする相手がいないら、とか、彼氏の話？」

「いい加減、諦めればいいのに……」

「諦めておらんからああ——っ!? じゃなくて、クリスマスイラストの話や」

「クリスマスイラスト?？」

「そうや。昔——『StrikerS』のころ、3人で撮ったやつがあるやろ？」

ミニスカサンののはちゃんが真中で、右にはやつぱりミニスカサンのフェイトちゃんが、大きなプレゼント袋を持って——なのに、左の私だけトナカイの格好をし

とるやつや。

忘れとつたら『なのは クリスマス』でググれば、すぐに出てくるで」

「あゝ」

「あつたね、こんなの。懐かしい」

「当時は気にしなかったけど、今考えると私だけトナカイっておかしいやろ。私もサンタでいいと思わへん？」

「いやゝ、どうだろ」

「……オチ？」

「そう、オチやオチ。どうして私ばつかオチなんやろ。ほら、前にみんなで動物の格好したときも、なのはちゃんがわんこ。フェイトちゃんがにゃんこ。なのに最後の私はタヌキ……いやいやいや、別にタヌキが悪いわけではないで？ でも、犬、猫、ときて、私だけ狸って、やっぱりおかしいやろ？」

「あ、はは……」

「しかも、なのはちゃんはあぎとくパンツ見せとるし、フェイトちゃんは『にゃん！』って可愛くポーズを決めとるし……」

「あぎとくって、私そんなにパンツ見せてるかな？」

「見せとる、見せとる。3人で一緒に撮るとフェイトちゃんが鉄壁なのに、なのはちゃん

「だけいっつもサービスサービスう——や」

「あ、それちよつとわかるかも」

「フェイトちゃんまでええ!?!」

「小さいころ——『A's』のときに2人だけで写ってるクリスマスイラスト。右の私がトナカイの格好で——あ、私は別にトナカイでも構わないんだけど、問題は左のミニスカサンタなのが、ピンクのパンツを見せてること。」

「隙が多いのか、わざとなのか、本気で悩んだこともありました」

「え〜」

「正直、わざとの方がまだ納得や。もしこれを意識しないでやつとるとしたら、まさに——」

「なのは、おそろしい子! や」

「なので、私は心配で心配で……」

「今でもなのはちゃんの面倒を見ていると?」

「そうそう」

「うわ〜、何か風向きが悪いとか旗色が悪いというか……」

「ふっふっふ、今日は観念せえや、なのはちゃん!」

「う〜ん、だつたらさ、はやてちゃんもサンタの格好してみる?」

「えっ、ええんか?」

「いや、別に許可制じゃないし。それに、トリプルサンタも悪くないでしょ？ ジェットストリームアタックやトライアングルアタックみたいに」

「なのは、そこはトリプルブレイカーにしとこうよ」

「ああ、おそろいの衣装といえは制服くらいしかなかったのに……ついに……」

「そんな大げさな。アイドル風の衣装とかあったじゃない。——ちなみに、はやてちゃんにはパンツ見せるの大丈夫？」

「あ、できればなしの方向で。恥ずかしいし」

「いやいや、普通はナシだからね!？」

「フェイトちゃんだって時々イラストで見せてるくせに」

「うぐっ!？」

「と、まあ、それは置いといて。じゃあ、はやてちゃんのサンタ衣装は、私とフェイトちゃんと区別化する意味もこめて、ズボンにするってことでいい?」

「ええよ」

「じゃ、あとは帽子に白いもふもふおひげをつけて——はい、完成っ!」

「おおー! どうや、フェイトちゃん似合っとなるか?」

「……えっと、似合っではいるけど、これ、ただのサンタクロースだよ。別にはやてじゃなくてもいいんじゃない」

「……だまされた!？」

「あはは、冗談、冗談だから」

「ううっ……いつから私はオチ担当になったんやろ?」

「関西弁だから?」

「ううっ……だとしても、ここに『魔法少女リリカルなのは The MOVIE 2 n

d A, s オフィシャルコンプリートブック』があります」

「いつの間に……」

「これの43ページに、私のキャラクター紹介があるんやけど。」

『ただ穏やかに暮らせれば』

『治る見込みのない足』

『辛さも涙も抱え込む少女』

命を削られつつあっても、騎士たちの前では常に笑顔。どんなに痛くて苦しくても、みんなが悲しむのは嫌だから。両親がいない、足が不自由で学校にも通えない。そんな泣き言をこぼすことすらいつさいない。

——からの、トナカイ（現在）。

「どういうこっちゃ!? おかしいやろ!?

薄幸の美少女設定はどこいったんやあぁ——っ!?

「待って、はやてちゃん!

メタ発言になっちゃうけど、劇場版はあくまで作られた作品と考えれば、ここは『魔法少女リリカルなのは／魔法少女リリカルなのはA's ビジュアルファンブック』を見るべきでは?」

「なのはもいつの間に……」

「なるほど、流石は管理局のエース・オブ・エースや……」

「関係ないよね!?!」

「じゃ、読むでー」

20ページ……『騎士たちに守られているいたいけなお姫様』。

——からの、トナカイ（やっぱり現在）。

「おかし……私がトナカイになる要素がまったくないんやけど!?!」

「お、落ち着いてはやてー!」

「責任者を呼べえ〜い!」

「それは難しいかなあ〜。でも、わかりました。はやてちゃん、今年のクリスマスは私とフェイトちゃんがトナカイ役で、はやてちゃんがサンタクロースでいこう! 流行りの

ミモレ丈（膝下丈）スカートにすれば、パンツも見えないし」

「ホントに？ 本当にええんかつ!？」

「うん、フェイトちゃんもいいよね？」

「もちろん、私はなのはと一緒なら」

「よし、じゃ、レイジングハート衣装お願いね——」

「バルディッシュも——」

「ほら、リインも寝とる場合やないで——」

「二——セーツト・アーツプ!」



「ふわあく、本当に仲がいいんだから……そろそろ寝よつか、ザフィーラ？」

わたしは青い狼の背中を揺さぶると、寝室へ向かう。

そして、トナカイやサンタの格好をしたママたちをチラリと振り返った。

「メリークリスマス、地球の魔法使いさんたち」

ミッドチルダに来てくれてありがとう。

わたしにとってのサンタクロースは、きっと貴方たちなのだから――。

と、ここで終わると綺麗だったのだけど、もうちよつとだけ続くんじゃない。

●

そんなわけで後日。

ナカジマジムの練習を終えたミウラさんを、珍しくはやてさんが迎えに来ていた。

「そうだヴィヴィオ――」

ちよい、ちよい、と手招きする。

「?」

わたしが駆け寄ると、

「ほら、これこの前の写真や。ヴィヴィオ途中まで見とつたやろ?」

「あ、はは……」

——バレてたかあ。

流星は夜天の主、歩くロストロギア——八神司令。

たぶん、こういうところがタヌキ扱いされる所以なのだろうな、と思う。
すると、

「なに、なに、何見てるの、ヴィヴィオー?」

「こら、リオ! すみませんお邪魔しちゃって」

「何かあつたんですか?」

「えつと……」

みんなが集まってくる。

「うわつ、なのはさんとフェイトさんのトナカイ姿、ちよーかわいいんだけど!」

「あ、ホントだ!」

「ボクも着てみたいけど、絶対に似合いませんよお」

「あ、あの、ヴィヴィオさん……」

アインハルトさんがチラツ、チラツ、つてこつち見てる。たぶん、一緒に着ま
かって意味だあ——つ!

「——つて、はやてさん大丈夫ですか!」

八神司令が、ラオウみたいに地面に膝がつくのをごらえている。

「……………ふっ、ど、どういうこっちゃん!? トナカイばっか人気で、どうして私のサンタ衣装に注目がいかへん……………はっ!? まさか……………まさか、パンツ、パンツが見えへんせいなんかああ——っ!?!」

「いやいやいや——つて、突っこんでる場合じゃない! ね、ねえ、みんな! 八神司令の赤い衣装はどうかな?」

「……………えっと、これ、ヴィータさんのコスプレですか?」

「!?!」

「そっか! みんなクリスマスのこと知らないから、当然サンタクロースのことも……………」

「そ、そやったああ——っ!?!」

はやてさんがリング上でひさしぶりのorzポーズ。

「ちよ、八神司令が燃え尽きちや……………はっ!? これがホントのホワイトクリスマス?」

パシヤツ——と撮影。

届け、ママのもとへ——。

ここに、八神はやての一年を締めくくる奇跡の一枚が誕生した。

風雲ヴィヴィオ神社

「おはようヴィヴィオ」

「おはようママ……って、ママじゃない!? 騎士カリムうう——っ!」

元旦。

目が覚めると、わたしは聖王教会の敷地内に特設された（ルーテシア作）謎の神社の本殿に祭られていた。

「な、ナニコレ……?」

いつもの黒い衣装と違い、紅白の巫女さん衣装に身を包んだカリムが答えてくれる。

「いくら次元世界最大規模の宗教組織とはいえ、年々、信者の数は減っているの。」

そこで、新しい信者獲得のため、何か目新しいイベントを考えよう——ということになって、はやてに相談したところ、地球の初詣というシステムを聞いて『コレだ!』と思っただのよ」

「はあ……」

「初詣の場合、祭られている神社の神様に1年の感謝を捧げたり、新年の無事と平安を祈

願したりするものでしょ？　で、聖王教会の場合、聖王が信仰対象なわけ。つまり……」
「わたし……？　って、ああああ!!　寝てる間に大人モードで、しかも衣装がオリヴィエみたいになつてるうう!!?」

黒い戦装束ではなく、青いセイバーカラーの衣装でもなく、ピンクの——例えるなら、『DOG DAYS』のミルヒオーレ姫みたいな格好だ!」

「確かに、シニヨンキャップもつけていて似ていますが……違います。オリヴィエの人物画でよく描かれるピンクの衣装です」

「あゝ」

わたしも見たことがある。霸王イングヴァルトの回顧録なんかに使われている挿絵でもおなじみのアレだ。

「でも……どうして?」

「聖王教会では生き神様——ヴィヴィ陛下をお迎えして、信者のみなさまの結束を高めつつ、新しい層も獲得しようとして計画したの」

「そんな……わたしがオリヴィエの複製体ってことは……」

「聖王教会主催『聖王女オリヴィエ公式コスプレ大会』優勝者ということにしてあるから大丈夫!」

「それはそれでなんかイヤアア!　ううっ、これもカリムが考えたの?」

「……いいえ、主にセインとシャンテが」

「やっぱりかああっ！」

どこかでクシャミをする音。

「まあ、最近ヴィヴィオも試合映像がミッド中に中継されるようになってきたし、いい機会だと思うのよ」

「……そう言われると」

色々と誤魔化せる気がする。

「もちろんそれだけじゃないわ。これを見て——」

モニターに映るのは、開け放たれた赤塗りの巨大な門。

「合図と同時に開門して、コース上の様々なアトラクションや妨害をクリアしながら、一番にヴィヴィオのもとにたどり着いた人が、今年の『福魔導師』になるのよ」

「色々混ざりすぎだよねっ!? これ、なんてフロニヤルド!?!」

「だからフロニヤルドではありません」

「——ていうか、参拝にきてアトラクションって……大丈夫なの?」

「聖王教会もいきなり本番はしないわよ。プレオープンということで、今回は教会関係者のみの出場になっているから」

「出場って……やっぱり参拝じゃないんじゃ……」

「ちなみに、すでにレースは始まっているんだけどね」

「もう始まつてるの!?! つていうか、参拝なのにレース、レースつて言ったよねっ!?!」

カリムはスツと目を逸らした。

「第1の関門は『マスタードラゴン池』よ」

「スルーされた上に、何だか凄そうな名称だけど……大丈夫?」

天空装備が必要なのではないだろうか。

「ルールは簡単。池の上の飛び石をポンポン渡つて、向こう岸にたどり着けばゴール。ただし、池に落ちると失格。もちろん、飛行魔法やウイングロードといった移動魔法は禁止よ。他の選手を妨害しつつ、一番にゴールを目指す——というものね」

「選手——つてところが、すでに参拝でもなんでもないんだけど……意外に普通……じゃなかったああ!?!」

池の上の小さな足場で、振り袖姿のなのはママとフェイトママのお尻が激突!

「どっかの競女みたいなことになつてるうう——っ!?!」

しかも、教会関係者のみつて……参加してるの、なのはママにフェイトママ、八神家にもと機動六課にナンバーズ、コロナヤリオ、それにアインハルトさんといったジムのみんなに……リンネさんたちストライクアーツ関係者ばっかだよ!?!」

「ええ『教会』聖王』ヴィヴィオ』関係者だから」

「わたしのかああ！」

カリムは再びスツと目を逸らした。

「マスタードラゴン池を突破した勇士たちを待ち受ける第2の関門——それは『シユラク隊海峡』よ！」

「その名称は色々アレだよね!? 確かに女性ばかりだけど、ジブラルタルでマストドライブで死んじやいそうだよねっ!？」

「こちらのルールもいたってシンプルよ。やたらと揺れる細い吊り橋を渡り切るだけ。ただし、選手を妨害しようと、何発もの魔法弾が飛んでくるので、避けるなり、シールドで防ぐなりしながらゴールを目指すの」

「……う、うくん、これもルールだけ聞くと普通かも」

よくよく考えると、先ほどのマスタードラゴン池だって、ママたちだからバトルになっただけ、一般参加者なら競女みたいなことにはならないだろう。

キャツキャシながら遊ぶ程度——。

「でも、さつきもだけど、落ちたら濡れたりケガしたりするんじゃないや……。せつかく参拜に来てくれたのに……」

「そこも万全よ。境内全域に安全フィールドが働いているので、落ちても“だま化”するだけ」

「だま化つてなに!? けものだま? やっぱりフロニヤルドの戦興行なの!? 勇者様、勇者様どこおおくつ!」

「違います。フロニヤルドでもなければ勇者様でもありませんから——」

モニターに神社——というより、野外ライブ会場みたいな光景が映し出される。

「そして、最後の関門がオリヴィエモードのヴィヴィオと一緒に写真撮影ができる権利をかけての、ハンマープライス!」

「なにそれオークション!? 参拝どころかレースでもないよね!? 何その課金制度、最後は魔力でもなく財力なの!」

「教会の運営も大変なのよ……」

「うわ、生々しい……」

「なので、大口のお客様には別途個人撮影会をお願いします」

「うわ、リアルだ!」

「例えばダールグリュン家とか」

「それ雷帝……って、わたしよりジークさんの撮影会の方が喜ぶんじゃないや……。だいたい、オリヴィエモードのわたしと写真とって、誰が喜ぶの?」

一般参拝客からしてみれば、ただのコスプレ大会優勝者——そっくりさん。

事情を知っている人たちからしてみても、ただの複製体。わたしはわたし、どちらか

といえ、高町なのはの娘——の方が通りがいいだろう。

「ヴィヴィオ、あなたは自分自身を過小評価しすぎね。もっと自信を持っていいのよ」
「カリム……」

「ほら、モニターのアインハルトをご覧なさい——」

わたしは、未来を視るといふカリムの助言に従ってアインハルトさんを見た。

「——はっ!? 振り袖どころか、いつものちよつとエツちなバリアジャケットじゃない
! カラーリングは一緒だけどズボンはいてるよ!」

もしかして——パンツじゃないから恥ずかしくないもん! の幻想から解き放たれたとか!?

初めて会ったころは普通にスカートだったのに、最近ではスリットが大きく割れすぎてインナーが丸見えだよ——って心配してたんだけど!!」

「いえ、違います。アインハルトの格好は霸王クラウス・G・S・イングヴァルトの衣装よ」

「え……?」

「教会にも飾つてあるからヴィヴィオも見たことあるでしょ? 椅子に腰かけて優しく微笑むオリヴィエと傍らに立つクラウスの絵画を。同じ構図でオリヴィエの子孫と撮影することは、霸王家直系の悲願だったのよ」

「霸王家の悲願安いね！ 明日にでも一緒に写真とるよ!？」
「そんなわけで、オープン！」

——ボン！ ボン！

小さな火薬音と共に、わたしがいる本殿の前後左右の壁がパタンと倒れる——と、そこは、先ほど映し出された野外コンサート会場のステージ上。

「あ、あれ、本殿は……?」

観客席には、すでにレースを終えたママたちの姿が。

「きゃああ——っ！ ヴィヴィオ、こっち向いてええ、ほら、ほらフェイトちゃんは撮影係！」

「任せといて！」

さらに、

——ズゴゴゴゴゴゴ！

ステージと観客席の間。地面から巨大な賽銭箱が迫り上がってくる。

「ナニコレええ!?!」

「それではみなさま、ヴィヴィ陛下の寵愛をかけて、お賽銭をお納めください!」
なのはママがハンドバッグを開く。

「ここ、ここはヴィヴィオの将来のためにと貯めている学費を……」

「ちよ、ちよつと待つてなのは! それ本末転倒だから、預金通帳しまつてええ!」

「ふえ、フェイトママ、早くなのはママを止めてええ——つ!!」

「陛下のため、我々もとナンバーズの財力を結集してええ!」

「ダメええ! 特にその双子おお! ノーヴェ早く止めて止めてええ——つ!!」

「友達料は、お、お年玉を入れれば、入れればいいのかな……?」

「コロナ、リオ、正気に戻つてええ!」

「こ……これを……」

「アインハルトさん、チャンピオンベルトを入れられても困りますからああ!」

「じゃ、こ、これを……」

ニャア。

「貴重だけど、テイオを入れちゃだめええ——つ!!」

「ここは私に——ベルリネット・ブランド任せてください!」

「リンネさん、戦車も買えそうな黒いカード来たアア!?!」

「わ、わしも……」

「フーカさん、引っくり返したポケットが漫画みたいに空っぽだああ!? 逆にお賽銭入れたくなるんですけどおお——っ!!」

「スマン、スマンの、ヴィヴィさん。わし、給料のほとんどを孤児院に寄付しとるけえ」
「うわ、いい話きたああ——っ!!」

すると、

「た、大変です、カリム!」

紫髪の修道騎士がステージに駆けこんできた。

「どうしたのシャツハ?」

「ヴィヴィ陛下復活祭——」

「これ、そんな名称だったんだ!」

「——の噂が、いつの間にか広まって、ミッド中から信者がぞくぞく集まって来ています!」

「ぞくぞく——って、そんなたかが知れているでしょう? まだ正式な告知もしていないのだから。あ、そうだ。せっかくだから集まっていたいだいたみなさんにも、企画の趣旨を説明して、アトラクションに参加してもらおうというのはどうかしら? 一般客の反応も知っておきたいし。まあ、難易度も調整しなくちゃいけないから、ゴールできるの

は10人に1人くらいでしょうけど……」

「その数、すでに数十万……いえ、数百万人とも……」

「なにその関ヶ原——って、それ10人に1人でもさばけないよ!? シャンテが死ぬ気で分身するとかしても」

「くっ……まさかそんなに集まるなんて……」

「予言しようよカリム!」

「こうなったら……シャツハ、プランDで行くわよ!」

「はい!」

「プランD!? プランDって何!? BとかCはどこ行つたの!?!」

「ヴィヴィオ。せっかく遠いところから来ていただいたみなさまを、手ぶらで帰すわけにはいきません。なので、この会場を利用した野外ライブコンサートで乗り切ります!」

「や、野外ライブコンサートおお!?!」

などと言っているうちに、観客席からシャツハによって連れてこられたのは——フェイトママ。

カリムが頭を下げる。

「主席、一つよろしくお願ひします」

「主席？」

「ううっ……ヴィヴィオのピンチとなれば、しかたないのであります」

「……あります？」

ステージ上で、フェイトママの全身が金色の光に包まれた。

「もしかしてソニックフォーム……じゃない!？」

「フェイト・T・ハラオウン——リコッタモード!」

「うわあ、いつものフェイトママのままアルフみたいな耳とか尻尾がついてるうう

——っ!」

頬を赤らめてるフェイトママと相まって、ちょーカワイイんですけどおお!?

「こ、コンサートとか、ちょー慣れてるのでありますよ」

「うわ、中の人とか色々混ざりすぎてるうう!」

すると、

「きやああく、フェイトちゃんもふもふお耳に尻尾、最高おお——っ! エクセレントっ

!!」

興奮したなのはママが激写している。

少し頭を冷やそうかああ!?

「ちよ、なのはママ撮りすぎ! フェイトママが困ってるでしょ!!」

「ヴィヴィオ〜」

「——でも、あとでわたしにもデータ分けてええ！ きゃああ——っ!!」

「高町家の魂は、聖王家の遺伝子を超えるのね……」

ちなみに物理で超えます。

すると、顔を真っ赤にしてプルプルしていたフェイトママがついに覚醒した。

「……ヴィヴィ姫様、コンサートの準備をしますであります」

「ちよ、フェイトママ……目が笑ってないよ?」

「ヴィヴィ姫様も、自分と同じ耳と尻尾をつけるであります。——クリスお願い」

わたしの体に犬耳と犬尻尾が現れる。

「クリスが勝手に言うこと聞いてるうう——っ!?!」

「あ、そうだ。せっかくだから、髪もピンクにするでありますな」

「それも、オリヴィエじゃなくて、ただのミルヒオーレ姫だからああ——っ!?!」

「さあ、ヴィヴィ姫様、ステージリハに行くでありますよ」

「わ、わたしキャラソンないんですけどおお——っ!?! 助けて勇者様〜」

なのはママを始め、観客席のみんなが、引きずられていくわたしを最上級の敬礼で見

送ってくれた。

ちなみに、その後のことはよく覚えていないのだけど、戦興行（違う）は大成功でし

たでありますよ？

ヴィヴィオって百式に似てるよね

「当たらなければどうということはない！」

朝の通学路。

寝不足で目を真つ赤に充血させたリオが、開口一番そう叫んだ。

「何を見てこうなったのかはだいたいわかるんだけど……今回のタイトルと今の台詞は何なのっ!？」

「ん？ もちろんシヤアの台詞だけど……あ、クワトロのときは言っていないって野暮なことは言いつこなしで」

「いや、そういうことじゃなくて……」

日直で先に行ったコロナ助けてええ！

あと、今気づいたけど『コロナ助けて』って書くと『コロ助』みたいいい!!

「ほら、ヴィヴィオって金髪だし、当たったら負け——みたいなところあるでしょ?」

「う、うくん、そう言われると……っていうか、前にもこんなパターンのネタがあったよ
うな……」

リオが、地球産のアニメや漫画を見るとだいたいこんな感じなので、これからもあるよ!?

「じゃ、わかった。わたしが百式というのはいいとして、リオは何なの？ まさかZガンダムとか……」

「うーん、リック・ディアスかな」

「あれ!? リオにしては普通というか、過小評価?」

「いや、過小評価じゃないよ。ヴィヴィオが百式なら、仲間だし、能力的にもそんなもんかなと。色的にも」

「あく、黒と赤があるしね。リオも黒髪で赤いバリアジャケットだし……」

やっぱり、リオにしてはまともな受け答えだ。

今回は期待がもてるかも。

「だ、だったら……アインハルトさんは?」

「……うーん、パラス・アテネ?」

機体色はグリーン。シロッコが開発した対艦用MSだ。

「それ絶対、色で決めてるよねっ!」

「いや、最初はデিজエかと思ったんだけど」

「いやいや、確かにデিজエは緑だけど、アインハルトさんはもっと強いよ!」

「ヴィヴィオはそう言うかもしないけど、あたしとしては『ヴィヴィオVSアインハルトさん』だと、ヴィヴィオが勝ってるイメージがあるんだよね。だから、能力的にも百式よりちよい劣る程度のデিজエ——なんていいかなと」

「う、うくん、でもデিজエかあ〜」

嬉しい意見なのだけど、MSとして考えると、デিজエではアインハルトさんに比べて力不足だと思う。

「例えば、霸王流（カイザーアーツ）がアムロだとすると——」

「すごい例えきたね!？」

「機体のスペックが劣っても、どんな相手にも勝てそうだし」

「うっ、そう言われるとデিজエも捨てがたい」

「でも、ヴィヴィオの言う通り、最近のアインハルトさんはちよー強いし。だからパラス・アテネかな〜と」

「確かに高火力ではあるけど、格闘のイメージがないMSだからなあ〜。射撃タイプだよ〜」

「パラス・アテネって、地球の戦いの女神の名前なんですよ？——聖闘士的な」

「聖闘士……あ〜、うん、納得しました。アインハルトさんはパラス・アテネでいいです。というか、むしろそれでお願いします」

すでにガンダムじゃないけれど。

「じゃ、コロナは？」

「……サイコガンダム」

「それもうゴレムとかサイコサイズで決めてるよねっ!？」

騎士ガンダムだとサイコゴレムなので、何となくわかるけど。

「じゃ、ノーヴェは？」

「……マラサイ？」

「もう色だけじゃん！」

「じゃ、ガルバルディβ」

「あく、それも色だけだけど、何となくわかる気がするかも」

もともとジオンのMSだったのが、改修されて連邦のMSになったのだ。

「じゃ、ミカヤさんは？」

「ギャンかイフリート」

「それもう剣のイメージだけだよ！ Zガンダム縛りでもないし！ じゃ、次はチャ

ンピオン——ジークさん」

「メツサーラ」

「それ髪型と大型スラスターが似てるからだよねっ！ 確かに劇中で一度も撃破されて

ないけどおおー！」

あと、外見だけならバイアランも似てるかも。

「雷帝——ヴィクトーリアさん」

「色がジ・〇」

「色って言ったああ！ でも、バリアジャケットが鎧っぽくて重装甲だし、立場や性格がおかんタイプだから——ラスボスちつくでアリかも！ メッサーラがジークさんなら余計にわかる気がする……。」

「じゃ、じゃあ……ミウラさんは？」

「バーザム」

「ひどいっ！」

「冗談、冗談。バウンド・ドック」

「もしかして、MA形態に変形すると足が手になるから？」

「うん。あとはカラーリングとザフィーラが師匠つてことで」

わんわん！

これはアリだ。

「ちなみに、新進気鋭のフーカさんは？」

「……ネモ？」

「また色だけ!? 量産機だよ!」

「あくまで現段階ってことで。将来的には量産機でもジエガン。最終的にはリ・ガズィに成長すると」

「なんかもうGジエネみたいになってきたけど、言いたいことはわかるかも」

フーカさんはこれからもっと強くなるのだろう。

「色々とツツコミたいことも多いけど、リオにしてはいい変換だったよ」

「リオにしてはって……」

「わかってるって。まだ、一番大事なMSが登場してないしね。じゃ、最後に——満を持してリンネさんで締めてください」

「……ジエリド?」

わたしは朝からずっこけた。

「どーして急にパイロットなのっ!?

MSはどこいったの!?

リンネさん白いんだから、主役機——Mk——IIかZガンダムでいいじゃん!

「何だったらキュベレイだってあるよ!？」

「いや、確かに強さ的にはガンダムMk-IIIやキュベレイくらいはありそうなんだけど、Mk-IIIは装甲材質が旧素材だし、キュベレイはキュベレイで耐久性に不安があるし……リンネさんほど硬くないでしょ?」

「うっ、だったらもうZガンダムでいいよね!! 色はちよつと違うけど『フーカさんVSリンネさん』||『リ・ガズィVSZガンダム』くらいなイメージでちよいどいいし! 夢の対決だよ!？」

「ほ、ほらヴィヴィオ落ち着いて、みんな見てるって!」

「いや、これだけは言わせて欲しい。」

「ジェリドは『ギレンの野望』だと——」

「ギレンの野望って……」

「連邦やティターンズでもトップクラスの能力値だし、あのシーマ様と互角なんだよ!」

「シーマ様……」

「アニメだと物語上、主人公のカミーユに負け続けのイメージがあるけど……。」

ん?

モブに強いウルトラエースだけど、主人公キャラには負け続ける……。

んんっ……っって、これリンネさんと一緒だああ——っ!？」
「……うん。わかってもらえたようすで何より」

結論。

『ヴィヴィオと愉快的仲間たち』と『機動戦士Ζガンダム（一部例外あり）』変換表

- ヴィヴィオⅡ百式
- リオⅡリック・ディアス
- アインハルトⅡパラス・アテネ
- コロナⅡサイコガンダム
- ノーヴエⅡガルバルディβ
- ミカヤⅡギャン or イフリート
- ジークⅡメツサーラ
- ヴイクトリーアⅡジ・O
- ミウラⅡバウンド・ドック
- フーカⅡネモ ↓ ジエガン ↓ リ・ガズイ

●リンネ||ジエリド

異論は大いに認めます。

誰か覆してええ——っ (特にリンネさんの辺り) !!

大人モード禁止大会

「ついに私の時代がきたああ——っ！」

ナカジマジム。

珍しくコロナが「いやっほー」と飛び跳ねた。

今度『大人モードに変身するのは禁止』の大会が開かれる——と、ノーヴェエから聞いて歓声を上げたのだ。

「ヴィヴィオやアインハルトさんが『デッド オア アライブ』や『閃乱カグラ』みたいに胸をたゆんたゆん揺らしている中、私ひとりもちーんと戦ってきたかいがあつたああ——！」

「あゝ」

ゴレムマイスターのコロナは、魔力制御のリソースを創成戦技に回すため、大人モードで戦わないのだ。使えるようになっても。

「ねっ、あたしはあたしは？」

揺れているか、揺れていないのか……。

「……」

ジムのみんなが無言でリオの肩に手を置いた。

「……ひどい」

「あはは……でも、みんながみんな大人モードできるわけじゃないしね」

「コロナのように、こういったレギュレーションのある大会を待ち望んでいた選手も大勢いるはずだ。」

「——で、ヴィヴィオ。小柄なお前にとっては不利な大会になるわけだが、出場するのかわ？」

「もちろんだよ、ノーヴェ！」

「リーチは短くなるけど、この体格でどこまで通用するのも試してみたいし、むしろワクワクしてるよー！」

「まったくお前らしいな。で、アインハルトはどうするんだ？」

「もちろん出場します」

「「ちっちゃいのに!?!」」

「ちよ、ど、どうしてみなさんで声をそろえるんですか!?!」

ち、小さいか大きいかは関係ありません。霸王流こそ最強——ということを世に知らしめるよい機会だと思っっていますから」

こうして、前代未聞。完全大人モード禁止大会が幕を開ける！



試合当日。

第1試合——。

「ふっふっふっ」

口がふもつふの形。いつにも増して自信満々なコロナがリングに立つ。

「二回戦で当たるようなモブ選手には興味ありませんから。私の目標——ライバルはヴィヴィオとアインハルトさんのみ！」

「あたしはあたしは！」

「……え？」

「……え？」

リング上のコロナと、リング下のリオが顔を見合わせる。

「ひ、ひどいいいー！」

「あゝ」

リオ、早く帰っておいで。

「体のサイズが一緒なら、ゴーレム創成とネフィリムフィストのある私に死角なし！」

「アインハルトさん、当たるのは準決勝ですが、それまで負けないでくださいね。今日こそ、あのときの借りを返しますから！」

「はいー！」

初めてのインターミドル。予選三回戦。因縁の2人。

あのときの激闘をもう一度——というやつだ。

「——って、コロナ、後ろ後ろおお！」

「………はい？ 後ろって………ええっ!? 私まだゴーレム創成してないよ!?」

「それ、ゴーレムじゃなくてデンドロキさんだからああ！」

「ジャニス・ゴート選手——ウインターカップでアインハルトさんと戦った、あの190cm180kgという巨漢のWGCデンドロビウム級ワールドランカーだ。」

——カーン！

——プチッ。

「タンカ、タンカああ——っ！」

「「コロナああ!?!」」

「そ、そつか。大人モード禁止ってことは、もともと体の大きな人にとっては超有利ってことでもあるんだ……」

コロナに引き続き、わたしやリオが敗退していく中で、アインハルトさんだけが勝ち残る。

「鍛えてますから」

どこかの仮面ライダーみたいで頼もしい。

アインハルトさんも、いつか家電に詳しくなるのだろうか……。すると、

「私だって鍛えてたのに〜」

「コロナ、元氣だして。今度ゴライアスMk—IIとか創るの手伝うから」

「ホントに？ フルアーマーゴライアスでもいい？」

「う、うん、任せといて」

これ以上、装甲盛るんだあ〜。

「安心してください。コロナさんの仇は私が取りますから」

流石アインハルトさん。やっぱり頼もしい……とはいえ、

「いくらアインハルトさんでも、体格差がありすぎるんで、注意してくださいね？」

「大丈夫ですよ。霸王流に一度見た技は二度と通用しませんから」

「聖闘士みたいでカッコイイ！ そっか、ウインターカップで一度戦ってますもんね！」

——カーン！

こうして、準決勝でアインハルトさんVSデンドロさんの試合が始まったのだけど、

「あ、でも、アインハルトさん、前は瞬殺だったから技を見てないんじゃない……」

「え？」

ゴングと共に、デンドロさんが巨体をいかしたボディプレス。しかも、魔法でジャンプ力を強化しているため、かなり高所からの一撃だ。

単純だけど、破壊力はとんでもない。

「こうかはばつぐんだ！ アインハルトさん逃げてええ!!」

「いいえ、ヴィヴィオさん。霸王流は——退かぬ！ 媚びぬ！ 省みぬ！ ですつ!!」
「それわたし（聖王）の台詞うう！」

「いや、それサウザー（聖帝）の台詞だから……」
ようやく帰ってきたリオが、こそつとツツコミを入れる。

「——霸王空破断！」

嵐のような衝撃。

デンドロさんの巨体が弾かれ、より高く宙を舞った。

「流石アインハルトさん……」

たった一発。わずか一撃であのデンドロさんの体を貫き、気を失わせたのだ。

白目をむいた姿に勝利を確信したのか、アインハルトさんはカッコよく振り返ると
「ふっ」と息を吐いた。

ところが、

「アインハルトさん、上、上ええ——っ！」

「はい？」

——プチッ。

気を失った人は重くなる——というのが、いわんや、デンドロさんともなれば尚更だ。

「担架、担架ああ——っ！」

「アインハルトさん……」

試合結果は両者ノックアウト。
引き分けである。

ちなみに決勝戦は、

「スミマセン！ 何かボクが優勝しちゃって……」

こそつと、地味に勝ち進んでいたミウラさんが不戦勝でした。

「そっか、ミウラさんも普段の試合から大人モード使っていないから……」

「使ってますよっつ!?!」

コロナのV作戦

「はっ、はっ、はっ……」

休日。

朝食を食べ終わると、わたしは急いでコロナの家に向かっていた。

理由はシンプル。

昨晩から、いくらコロナにメールしても、返信がないからだ。

「やっぱり、理由はアレかなあ〜」

最近のコロナはスランプだ——と思う。

先週の試合も一回戦負けだったし……。

だからだろうか？

コロナは、

『こうなったら、ゴーレムマイスターの名にかけて、ミッドチルダのみんなが見たことない最強のゴーレムを創成してみせる！』

と、意気込んでいたのだ。

けれど、そんなトリプルレアなゴーレムなんて、一朝一夕にはできないわけで、

「また、いつかみたいに自分ひとりで悩まなければいいんだけど……」

——ピンポーン！

ガチャリ——と、扉が開いて現れたのは、赤ジャージ姿のコロナ。

「いつものオシャレなコロナじゃない!？」

眼鏡。髪型もいつものおさげではなく、ボサボサのまま肩口で一つに束ねていた。

「ど、どうしたのコロナ!？」

その格好。

「ごめんね、ヴィヴィオ。メールも返さなくて。昨日からずっと初代ガンダムのBiu——rayボックスを見てたから……」

「どうしてガンダムっ!？」

「ほら、最強のゴレムといえば、やっぱりガンダムでしょ?」

「最強だとは思うけど——ガンダムはゴレムじゃないからね?」

「まあまあ、似たようなものでしょ?」

「う、うくん、そう言われると……」

コックピットに乗るか、乗らないか。操縦方法の違いくらい……かも。

「それに、ほとんどのミッドの人たちは、地球のガンダムを知らないでしょ？ だから、みんなが見たことない最強のゴーレムを創ろうと思ったら、自然とガンダムに行き着いちやっただの」

「た、確かに……でも、ストライクアーツでガンダムって、何かこう違うよーな……」

イメージが合わない。

「やっぱりそう思う？」

「なんだ、コロナもそう思ってたんだ……」

「初代よりGガンの方が良かったかな？」

「そういうことじゃないよ!？」

「私はマスターガンダムで行こうと思ってただけど、ヴィヴィオはゴッド派なの？」

「そういうことでもないよっ!!？」

確かに、コロナのバリアジャケツトはマスターガンダムのカラーリングっぽいけど

……いやいや、まさかね!？」

「じゃ、次元霸王流で」

「ビルドバーニングもダメ！ だいたいアインハルトさんと被っちゃうでしょ!！」

「もう、ヴィヴィオったらアインハルトさんのことになるかと熱くなるんだから」

「いやいや、そんな恋バナみたいに言われても……」

——と、まあ、いつまでも玄関で長話をしているわけにもいかない。

「おじやましーます！」と、コロナ部屋に向かい、クツションに座って第2ラウンド開始のゴング。

「ねえコロナ、よく聞いて。

ガンダムは強いと思うけど、わたしたちが戦う舞台とは、戦場が異なるでしょ？

だから、ガンダムにこだわらず、色々なイメージを取り入れて、もつと想像の翼を広げるべき——だと思っただよ」

「なるほど……つまり、スパロボね！」

「え……あ、うん、古今東西の最強ロボが集結してるしね」

あながち間違いではない。

「そっか、そうだね。確かにヴィヴィオの言う通り、私のゴーレムはスーパー系。ガンダムみたいなリアル系じゃない……」

そんなこと一言も言っていないけどね!?

「まあ、区分が難しい機体もあるから一概には言えないけど、コロナの戦闘スタイルや戦術に合ったゴーレムがいいと思うよ？」

「うくん、ガオガイガーとかゼオライマー的な？」

「うん、今とあんまり変わらないよね。ちなみに冥王攻撃とかイクスが泣いちやいそう
なんで、やめところうね」

「だったら……」

コロナはこれまでスパロボに参戦した作品のタイトルと機体を、ブランゼル——デバ
イスに表示させて眺めていく。

そして、

「あっ！」

コロナがスクロールを止めた先は、

「ゾイド……」

「そっか。ゴレムって別に人型にこだわる必要ないんだ！ コロナ、ティオやクリス
のこともよく可愛がってるし——いいんじゃないかな？」

さらに機体を絞り込んでいく。

「うん、わたしこの子に決めたっ！」

何かに似ている気もするけど、野暮なことは言わない。

だって、コロナがひさしぶりに——わたしの大好きな——向日葵みたいな笑みを浮か
べたのだから。

●
数日後。

完成したゴーレムのお披露目も兼ねて、ジムで『コロナVSアインハルトさん』の練習試合が行われることになった。

「見せてもらおうか、新しいガンダムの性能とやらを！」

「リオ、勝手にアインハルトさんの台詞を捏造しないの！」

「だって、コロナ絶対ガンダムにすると思ってたんだもん！」

リング下で、わたしとリオが言い争いをしていると、リング上のコロナがごろごろ笑った。

「だつたらリオ、私の新しいゴーレムを見てびっくりするかもね」

つられてアインハルトさんも微笑んだ。

「楽しみですね、コロナさん。見せてください、あなたの新しいゴーレムの力を！」

「はい！これが私の——誰も見たことがない——新しいゴーレム！」

お願いブランゼル！

創成起動——創主コロナと魔導器ブランゼルの名において——出でよ蒼き獅子！

——シールドライガアア——ツ!!」

コロナの掛け声と共に、リング上に巨大な青い獅子が創成される。たくましい四肢。鮮やかな——ヴィヴィッドブルーのボディ。

——G A O O O O O O O O O O !

その咆哮は、まさに百獣の王。

「うわっ!?!」

リオが尻餅をついてシールドライガーを見上げた。

「どう、驚いたでしょ?」

「うん、びっくりした……」

わたしは「それだけじゃないんだよ」と、コロナに代わって説明する。

「コロナを背中に乗せたまま、相手に向かって突進。そこで——計算上——アインハルトさんの『霸王断空拳』すら防ぐエネルギーシールドならぬラウンドシールドを展開。コロナがネフィリムフィストを放つ隙をつくるんだよ！」

まさに、攻防一体。

コロナのために生み出された、最強の獣型ゴーレムなのだ！

「どうですかアインハルトさん？ コロナすごいでしょ！」

「はい。これは立派な………ザファイーラさんですね！」

「……」

「……」

「……」

もうザファイーラにしか見えないよっ!?

逆転ミウラ裁判！

——カン、カン、カン。

黒い法服に身を包んだフェイトママが、バルデイツシユ（木槌フォーム）で、テープルを叩いた。

「静粛に。それでは、弁護側——高町ヴィヴィオ。検察側——高町なのは、準備はよろしいですね？」

「もちろん！」

「ヴィヴィオ、今日は手加減しないからね」

「わたしだつて負けないよ！」

リビングテーブルの左右に分かれて座つたわたしとなのはママ。

激しく睨み合う。

「それでは、被告人——ミウラ・リナルデイ入廷してください」

「——つて、どうしていきなりうち（八神家）で裁判ごっこやってるんだよ!？」

カン、カン、カン。

「はい、ヴィータ。お静かに」

「お静かに——じゃねえよ！ 静粛にしろっ!？」

そこは突っこむんだあ。

「いや、フェイトちゃん、そのおヒゲ結構似合つとるな」

「そうかな、サイバンチョコを真似てみたんだけど……」

「いやいや、はやてまで何を冷静に。——ほら、シグナムとシヤマルも何か言えよ！」

「……主がいいなら、わざわざ目くじらを立てることもあるまい」

「それに、面白そうじゃない」

ヴィータさんが「ちっ」と舌打ちした。

「おい、ザフィーラ——って、子犬フォームかよ」

「子犬ではない。小狼だ」

「区別つかねーよ！」

「ヴィータちゃん、そんなに突っこんで大丈夫？ ちよつと回数多いよ？」

「おめーら家族のせいだろおお!!? いつもはこんなにしねーよ！」

なのはママが「にやはは」と笑っている。

これは絶対にからかって楽しんでるなく。
すると、ようやく夜天の主が動いた。

「まあまあヴィータ、その辺で。もつと発言したい子もおるようやし」
「もつと発言したい子……?」

長いリビングテーブルの端と端。

フェイトママの正面。

座っているのは、ピンクのショートカットが似合うボクっ娘——。

「ど………どうしてボクが被告人なんですかああ——っ!？」

「「あ〜」」

ミウラさん……。

そういうえば、まったく事情を説明しないまま八神家に連れてこられたんだっけ。
けれど、そこはフェイトママ。華麗にスルースキルを発動する。

「それでは弁護側、これまでの経緯と、弁護をお願いします」

「はいー」

「おい、それ、弁護と検察がごちゃ混ぜになってないか?」

わたしもフェイトママから受け継いだスキルで華麗にスルー。

「まずはこちらをご覧ください——こちらが現在のミウラさんです。

それからクリス——」

モニターに映像が映る。

「こちらが、試合中のミウラさんです。どうです? 何か気づきませんか? そうです。

ミウラさんの身長は、ほとんど変化がありません。

つまり、ミウラさんは『大人モード』を使っていない。

わたしは、ずっとそう思っていました。

ところがです!

『大人モード禁止大会』のとき調べたら、どうも使っているっぽいんです!

『いやいや、使っていないよね!?!』

と、思ったけど『Vivid Strike!』の2話。

みんなで大人モードに変身するシーンがあるので、確かに使っている。

『やっぱり使っているのかな？』

だけど、納得できない。

わたしは考えました。

『あのときは、あくまでフーカさんに見せるためであって、試合では使っていないのではないか……？』

と。

以前、こんな話を耳にしたことがあります。

ティアナさんは飛行魔法を使える。

けれど、空戦できるレベルではない。

だから、実戦では空を飛ばない——と。

つまり、ミウラさんも、

『大人モードは一応使えるけど、試合で使えるレベルではない』
と考えたわけです。

魔法には、素質や適正もありますから。

同じ魔法使いでも、ブライはヒヤド系呪文の使い手で、マーニャは炎熱系呪文の使い手のように……」

「おーい、ドラクエ混じってんぞ〜」

「フェイトママサイバンチョ（長いな）、『魔法少女リリカルなのはVivid』原作7巻を証拠として提出します」

「それ、証拠になるのか……?」

ヴィータさんの疑問をよそに、フェイトママは1ページ目をめくって——ハッと両目を見開いた。

「どうしたん、フェイトちゃ——」

続けてはやてさんが動きを止めた。

すかさず振り返る。

「ミウラ、希望はあるでえええ!」

「ちよ、何なんですか一体いい!?!」

わたしはクリスに頼んで、7巻の表紙をめくってすぐのカラーページを、みんなが見えるように表示した。

手もとに7巻がある方は、ぜひ一緒にご覧ください。

全員が目をそらす。

「これが、驚異（胸囲）の格差ってやつか……」

「ごめん、ミウラちゃん。私、告訴を取り下げてもいいかも」

「ちよ、なのはさん、こんなことでやめないでくださああい！」

わたしは陳述を続ける。

「とはいえです。

『変身前』と『変身後』を比べると、若干ですが背や手足が伸びている気もします。

ですが、これは“誤差の範囲内”だと思いますか？

わたしもよく、『Vivid Strike!』を見ながらアインハルトさんとわたしの身長差を必死になって見比べていたんですが……」

「いたのかよ……」

「シーンや、話数によって若干異なっていました。だけど、これだって“誤差の範囲内”

ですよ？

それどころか、むしろ身長差がほとんどないシーンだと『よくやった!』と、褒め称

えていたぐらいです」

「褒め称えるなよ……」

「そもそもです。ミウラさんがほとんど成長しないなら、変身分の魔力を一撃必殺の『抜剣』に込めた方がいい。

特に、ヴィータさん——」

「お、おう」

「一撃必殺の重要性は、ミウラさんの師匠であるあなたが、一番良くわかっているはず。そんなあなたが、愛弟子に教えないわけがない！」

わたしは改めて、フエイトママとミウラさんを見やった。

「以上のことから、ミウラさんは『大人モード』を使っておらず、よって、これから先、成長した暁には、はやてさんのようなショートカットが似合う、素敵な大人の女性に変身する——。

だからこそ、わたしたちのミウラさんがこんなになっちゃうわけがない——と、強く弁護する次第であります」

そう——。

ミウラさんの未来を守る。

これがわたしの裁判の目的なのだ！

「なるほどな〜」

「ふん、一応、筋は通ってるじゃねーか」

などと、八神家からは高評価。

さらに、ガタツ——とミウラさんが椅子から立ち上がる。

「づい、ヴィヴィオさあ〜ん……」

「わたし、弁護側ですから。ミウラさんはきつと大きく成長しますよ！——アインハルトさんはちっちゃい方がうれしいんですが」

すると、目の前のなのはママが「ふう」と息を吐いた。

「ヴィヴィオ、頑張ったね？　でも、ママだつて負けてないよ」

「それでは検察側——高町なのは、反証お願いします。なのは、ガンバレ！」

「ちよ、フェイトママサイバンチョヨ!？」

「あ、ごめん、ごめん。つい……」

気持ちはわかるけどね！

「はい。みなさんお聞きのように、うちのヴィヴィオが頑張りました〜。ライバル、ミウラちゃんとの熱い友情。偉い！　もう私の負けでいいんじゃないかな——」

「おい」

「とも思いましたが、世の中そんなに甘くない——ということを教えてあげるのも親の

務め。そこで、泣く泣くこの言葉を贈らせてもらいます」

なのはママはビシツと指を突き出して、

「異議あり!」

「それ、やりたかったただけなんじゃ……」

「ノンノン。こちらには決定的な証拠があるんだから。」

フエイトちゃんサイバンチョ、検察側は証拠としてアニメのオフィシャルサイトを提出します」

「オフィシャルサイト?」

「そう。『Vivid』ではなく、TVアニメ『Vivid Strike!』のオフィシャルサイト」だよ。

ヴィヴィオ、ちゃんと見てなかったんじゃないかな?

灯台もと暗し。

サイトの『キャラクター』から『ナカジマジムのミウラちゃんを選択!』

さらに『バリアジャケット』の項目を見ると……。

【ミウラの試合での姿。 18才ごろの姿を先取りで再現。 小柄ながらタフで強靱な体と集束打撃「抜剣（バツケン）」でインファイトを得意とする強打者】

と、表示されます」

「へ？」

「さらに、ヴィヴィオなら——」。

【ヴィヴィオの試合での姿。 18才ごろの姿を先取りで再現。 長身と長いリーチに恵まれた体格を、ボディースーツとジャケットで覆ったスタイル】

アインハルトちゃんなら——。

【アインハルトの試合での姿。 18才ごろの姿を先取りで再現。 古流の動作と一撃必倒の打撃技術「断空」を駆使して無敗のチャンピオンとして勝利を重ねている】

フリーカちゃん——。

「フリーカの試合での姿。18才ごろの姿を先取りで再現。服装は師匠のインハルトのものをフリーカ流に再現している」

リンネちゃん——。

「リンネの試合での姿。18と19才ごろの姿を先取りで再現。常軌を逸した筋力で、ガードの上からでも相手を薙ぎ倒す。競技格闘技のセオリーすら破壊するパワーの持ち主」

以上のことから、まず、ミウラちゃんは確実に試合で大人モードを使っている。

なおかつ、リンネちゃんを除いたナカジマジムの選手たちの大人モードは、みな18才ごろの姿を先取りで再現している——ということがわかるのです!」

えええええ!

百歩譲って大人モードは使っているとしても、あれで18歳だったのおお——っ!?

「あう……」

ミウラさんが白目向いて卒倒しそうになってるよ!

な、何か反論しないと——。

「そ、そうだ! ミウラさんがナカジマジムに入ったのは『戦技披露会』のあとだから、

それまでは大人モードを使っていなかったのかも！」

「だとしても、今使っていない——ということにはならないでしょ？ オフィシャルサイトに書いてある以上、現在のミウラちゃんは間違いなく大人モード。それも18才の姿で戦っているの。」

ヴィヴィオが一生懸命に調べたのは知ってるし、否定したい気持ちもわかる。

だけど、これがミウラちゃんの運命。

デステイニーガンダム。

ミウラちゃんの18才は……今とほとんど変わらないんだよおお——っ！」

ぐほっ！

聖帝十字陵で北斗神拳奥義『天破活殺』を食らったサウザーのように、わたしは鎧と翼をもがれた。

「お……お師さん（ママ）……」

「ヴィヴィオ、膝枕でもする？」

「うちでサウザーごっこするなよ……」

わたしはよろよろミウラさんを見やった。

「ゴメンねミウラさん……わたし負けちゃったよ……」

「いいえ、いいんです。ヴィヴィオさんはボクのために必死に戦ってくれたんですから……」

「ええ話やな〜」

「そうか？」

すると「フッフッフ」となのはママが笑い出した。

ゴゴゴと天地魔闘の構えを取る。

「これで終わりだと思った？ ミウラちゃん、ヴィヴィオ」

「ま、まだ何かあるんですかああ!?!」

「なのはママもうやめて！ ミウラさんのライフは胸と一緒に永遠にゼロだようう！」

「ええええええええ!?!」

長くなっちゃったんで次回に続く！

なのはママ豆まきをする

「鬼はああく、外おお——っ！」

——ズドオオオンツ！

「福はああく、内いいい——っっ!!」

——チユドオオオンツ！

夜。

ミッドチルダ上空、約1万メートル。

バリアジャケットをまとうなのはママが砲撃（エクセリオンバスター）する度、桜色の光が花火のように闇を照らす。

ちなみに、フェイトママもバリアジャケット姿。わたしはといえば、フェイトママが抱えて飛びやすいよう、いつものサイズ。

ただし、クリスのお陰で高高度でも寒くない。

「鬼はああ〜、外おお——っ！」

——ゴゴゴゴゴゴ!

「福はああああ〜、内いいい——っつ!!」

——ズゴゴゴゴゴゴ……。

うわあ……。

何だろう……この世の終わりのようだ……。

具体的に言う……FF6のラスボス戦みたいな光景?

「えっと……ねえフェイトママ。うちの豆まきって変わってるよね?」

わたしが知ってるのとだいぶ違う。

「そうね、ちよつと違うかも」

ちよつと!?!

「一応、カートリッジに福豆を入れてるから——」

「豆っ!？」

「日本の豆まきとあまり変わらないはずなんだけど……」

「そっか、なのはママが撃つ度、豆が夜空に拡散してるんだね
って、いやいやいや。」

最早、どこから突っこんでいいのかわからない……。

だいたい豆が入ってレイジングハートは平気なのだろうか？

いや、ひよつとしてクリスにも同じ機能が……？

クリスを見ると、うさぎの頭をブンブン左右に振っている。

「前にね、私が鬼の格好をして、なのはが全力全開で豆まきをしたことがあったのよ」

「あく、うん、言わなくてももうわかったから」

基本、「豆まきは夜に行く。だから、調子にのってヒヤッハーしすぎると、朝になって家の周りが大惨事——というやつである。」

しかも、なのはママとフェイトママのバトルとなったら、ちよつとした模擬戦になったのかもしれない。

『いっけええ！ アクセルシューター（豆）——シュートッ！』

福豆が軌道を変えてフェイトママを襲う。

『くっ、ラウンドシールド!』

みたいな感じで……。

「鬼はああく、外おおう——つつ!!」

——無とは一体……うごごご!

「でもさ、これって鬼を追い返してる——つていうより鬼退治なんじゃ……。たぶん、鬼も消滅してるよ?」

「大丈夫。非殺傷設定だから!」

「え、鬼にも効果あるの!?!」

「福はああく、内いい——っ!」

——ウボアア

「いやいやいや。いくら非殺傷設定でも、これ、福の神も撃ち落としてるよね!」

「だいたい『福は内』って、家の内側にまくんじやなかったっけ……。」

「まあ、なのはだから。基本一戦交えてからじゃないと……。」

「福の神もそういう扱い!? 厳しいよ!」

「うっ、うっん……。」

「これじゃ入ってこないどころか、逃げ出しちゃうんじや……。」

「そうやって、フェイトママと一緒に苦笑していると、なのはママが「そんなことないよー」と声をかけてきた。」

「大丈夫、大丈夫。だって、ちゃんと入ってきたじゃない。フェイトちゃんもヴィヴィオも——」

とどめとばかりに、スターライトブレイカーの光が夜空をかける。

「あゝ」

わたしとフェイトママは顔を見合わせると、やっぱり苦笑するしかないのであった。

フェイトママと恵方巻き

「——というわけで、恵方巻きを食べましょうか?」

「豆まきを終えて帰宅すると、わたしたちはフェイトママが事前に用意した、お手製の恵方巻きに手を伸ばした。

すると、なのはママが神妙な顔つきになった。

「このフェイトちゃんお手製の恵方巻きなんだけど……」

「なんだけど……?」

やけに緊張感ある物言いだ。

「たぶん、管理局に持っていったら高値で取り引きされるんだろうなあ」

わたしとフェイトママは椅子からずり落ちた。

「待った待った。ナニソレなのはママ?」

「いや、フェイトちゃん局でも大人気だからね。フェイトちゃんお手製——とか言ったら、こう、オークションみたいな感じで値上がっていくんだよ」

「ホントにいい?」

「いやいや、そんなことないから」

フエイトママが否定するも、

「いやいやいや、去年のチョコ争奪戦とかなんてもう、ね、阿鼻叫喚だったじゃない」
「なにその抱き枕カバーみたいな惨状……」

黒い恵方巻きが、だんだん金の延べ棒に見えてきたんですけれど……。

あ。

「でも、そんなこと言い出したら、なのはママだつて人気あるんじゃないの？」

美人度ならいい勝負のはず。

「ん、私の場合『ちからのたね』とか『まもりのたね』とか『まりよくのたね』みたいな扱いだから……」

ステータスアップ!?

「それ、逆に超欲しいんですけど……」

魔導師なら誰もが欲しがる夢のアイテムだ。

「まあ、ほら、私つて時々作つて持つていくでしょ？」

「ああ、そういえば……」

差し入れ——と言つて教導先に作つて持つていく。だから、フエイトママほど珍しくはないのだ。

「例えばなんだけど、ヴィータちゃんが、

『別に、お前のために作ったんじゃないからな！』

とか言つて、作つてくれたりなんかしたらもう、ね」

王道ツンデレではあるが、そこがいい。

「きゃああ〜！」

盛り上がるわたしとなのはママを見て、フェイトママが苦笑している。

「ヴィヴィオはどう？」

「そうだなあ〜、わたしとしてはアインハルトさんに、ダークマターみたいなやつを作ってきて欲しいんだけど……」

「あ〜、わかるわかる。アインハルトちゃんが止めるのも聞かず、ヴィヴィオが無理やり食べて、

『見た目は悪いけど、美味しいですよ』

みたいに答える作戦でしょ？」

「きゃあああ〜！！」

この母娘は——みたいな感じで、フェイトママが呆れ返っている。

「そういえばなのはママ」

「なあに？」

「フェイトママって、わたしたちぐらいの時って、料理の腕前はどうかだったの？」

なのはママも、マズい料理を「美味しい美味しい」と言いながら食べたのだろうか？

「んー、フェイトちゃん、何でもできたからなあ。むしろ、私の方が味つけ担当とは名ばかりの試食担当だったような……」

「そっかあり、フェイトママ、わかってないよね」

「だねー」

「えええ、私が悪いの!？」

「悪い」

「悪いね」

「えええー」

「アインハルトさんみたいに、食べたら空破断食らっちゃうような料理を作らないと」

「いや……まだ、アインハルトが料理ベタと決まったわけじゃ……」

まあ、こういうときは大抵——『実は上手でしたー』みたいなオチがつくものだけだ。

バレンタインが今から楽しみだ。

フェイトママが「ハア〜」と嘆息する。

「そっか、なのはもヴィヴィオも、私のおいっし〜恵方巻きはいらなんだ……うん、わかった」

恵方巻きの乗った皿をサツと取り下げる。

「ちよ、ちよ〜と待ったあ〜、そんなことないから、ね、ね、フェイトちゃん！」

「そ、そうだよ、フェイトママ！ マズい料理より美味しい料理の方がいいに決まってるよー！」

自然と声が重なる。

「フェイトちゃん／ママの料理サイッコー!!」

「2人とも調子いいんだから」

やれやれ——といった顔つきでフェイトママが笑う。

「ゴメンね、フェイトちゃん」

「ごめんなさい、フェイトママ」

「それでは、許してあげましょう」

お皿が帰ってきた。

こうして、今度こそフェイトママの恵方巻きを食べることになったのだけど、

「そういえば、今年の恵方つてどっちだっけ？」

「北北西だね」

わたしは北北西を向こうとして、

「ん、この場合ミツドの北北西でいいの？ それとも地球基準なの？」

「えっと……どうなんだろ、知ってるフェイトちゃん？」

「さあ、私もちよつと……」

地球生まれ地球育ちの意地があるのか、なのはママが唸った。

「そもそも恵方とは、吉方とも書いて、吉の方角なわけで、歳徳神がいる方位が縁起がいいと……でも、地球の神様がミツドにいるかと問われると、それはそれで謎なわけで、だけど神様というくらいだから、全次元共通に存在しているかもしれないわけで……」

「あ、うん、もう平気だから」

このまま脳内が集束したら、なのはママがスターライトブレイカーをぶつ放すかもしれない。

「要は、縁起のいい方角を向いて食べればいんだよね。だったら……わたしはフェイトママの方を向いて食べます」

「え？」

「なるほど、それはいいアイデア。じゃ、私も今日はフェイトちゃんの方を向いて食べます」

「ええええ、なのはまでええ!？」

赤くなつてキョロキョロしていたフェイトママだったが……ついに、

「だったら、私だってなのはとヴィヴィオの方を向いて食べます！」

モグモグと栗鼠みたく可愛い。

2人のママが、今年も健康でありますように……。



後日。

恵方巻きの話をはやてさんにすると、意外な答えが返ってきた。

「それ、結構当たつとるかもなあ」

「どういふことですか？」

「歳神様。つまり暦や方位を司る歳徳神を、クシナダヒメと同一視する見方があるんやけど……」

「クシナダヒメ……つてヤマタノオロチ退治の？」

「そうや。櫛名田比売。奇稻田姫。ドラクエ3のジパングに碧奇魂ブルーシード。

ヤマタノオロチとのバトルの際、変身魔法で櫛に変えられて、アクセサリー扱いの装備アイテムになるから『櫛・奇（クシ）』はいいとして『名田・稻田（ナダ）』はどっからきたと思う？」

「田んぼに豊穣をもたらす女神だから？」

「そやな。クシナダヒメは縁結びの他に、本来は農耕神としての側面をもつ。

土属性に水属性や。

ところが、日本神話には、クシナダヒメに属性イベントが一切ない。

民俗学的にいうと、人身供犠や異類婚姻譚なんかに分類されるんやけど、あくまでメタファー。

名前に『田んぼ』と入っているなら、もつとシンプルに、最初から属性を身に着けると考えるべきなんやないか。

仲魔の初期スキルとして。

つまり、クシナダヒメの外見が『田んぼ・稲』みたいやったんやないか——という説

やな」

「田や稲みたいだった……?」

「そう。長い髪がな、稲穂みたいに風に揺れる金髪やつた——というクシナダヒメ金髪碧眼説やあー!」

「なにその『きんいろモザイク』!?!」

「ヤマタノオロチもクシナダヒメも神話——とする一方で、もつと現実的に……まあ、ファンタジー要素がないんやけど、洪水や製鉄文化と結びつける傾向は結構強い。」

だとしたら、クシナダヒメも現実的に考えるべきやろ?

そもそも製鉄は、技術も、材料も、全て中国から入ってきたものや。

当然、技術者たちも一緒にやってきた。

もしかしたら、最初は逃げ延びてきた王族なんかと一緒に入ってきたのかもしれない。

その中に、金髪碧眼の姫さんが混じったとしてもおかしくはない」

「いやいや、おかしいでしょ! 金髪武将なんて無双シリーズくらいだよ!」

「現実的に考えて、シルクロードはキングダム時代からあって、古代ローマ帝国と東西交易を行っていたわけや。」

当然、人の行き来もあったと考える方が自然やな。

そこから、日本にやってきた一族がおったとしたら……。

ちなみに、三国志の孫権は青い瞳だった——という話もある」

「う、うーん……」

「まあ、あくまで可能性の話や。

古代の日本に、そんな稲穂みたいな髪をした女性がおったら、豊穣を祈願する巫女さんとして崇められても、おかしくはない。奪い合いが起こってもおかしくないレベルだな。

つまり——」

「つまり?」

「現代日本の金髪への憧れは、古代から連綿と受け継がれる、遺伝子に刻み込まれた、日本人の魂みたいなものなんやあ——っ!」

「な、なんだってー!?!」

「だから、恵方巻きをフェイトちゃんの方を向いて食べるのは——ヴィヴィオもやけど——意外と正解なのかもって。

ま、信じるか信じないかは、ヴィヴィオ次第やけどな」

「う、う〜ん……」

信じるほどじゃないけど、まあ、ロマンはあるかなあ〜、と思う。

「とりあえず、来年の節分はうちもみんなフェイトちゃんを拝みに行こかな」

フェイトママが恥ずかしがって逃げ出す光景が目には浮かぶ。

「あはは……でも、金髪でいいならシャマル先生でもいいんじゃない」

「……あ〜、うちにもシャマルがおったか……でも、パワースポットとしてはフェイトちゃんの方がありがたみが……」

「あ〜」

わかるような、わかっちゃいけないような……。

そんなわけで、来年の節分も楽しくなりそうです。

S t. ヒルデ バレンタイン 魔法学院

よく晴れた朝。

S t. ヒルデ魔法学院前。

初等科・中等科に続く並木道の通学路。

私の横で、ピンクのリボンをつけた金髪美少女が足を止めた。

「ねえねえ、なのは、やつぱりやめようよう〜」

「フェイトちゃん、ここまで来てやめはなし。突撃あるのみだよ!」

「私、その生き方はちよつと……」

●バレンタインデーとは!

架空の記念日とか壮大な釣り——なんて言われているけれど、驚くなかれ実在する記念日である。

地球では世界的に贈り物をする日。メッセージカードなんかが多いみたいだよ?

日本では女性がチョコレートと一緒に愛の告白をする日。

『なんでミッドにあるんだよ!』

なんて赤髪のちっちゃい魔導師はツツコミそうだけど、ほら、管理局にははやてちゃんのおしながおじさんみたいな人もいたし、その辺りから伝わったんじゃないかな〜と
思ったり思わなかったり。

で、目の前のSt. ヒルデ魔法学院は、聖王教会系列の学校。なので、現代の聖王陛下の意向に沿って、積極的にチョコレート交換が行われているとかいらないとか。

「とういうわけで、一部配信中のみなさん——モニター越しに見ているあなたですよ、こにやにやちわ、高町なのはです。

今日は聖バレンタインデー。

特に、学生さんにとっては一大イベントの日。

なので、今週は娘（ヴィヴィオ）の視点ではなく、私（ママ）の視点で、バレンタインをこっそり見守っちゃおう——という企画です。

さらに私ひとりでは心許ない——ということで、可愛い人生のパートナーが参戦してくれました！

フェイト・テストロッサ・ハラオウンちゃん（Ver. A, s）です。

どうぞ〜」

「はい、フェイト・テストロッサ・ハラオウンです。——って、どうして私たち子供モー

ドなおお!」

「そりや、大人の姿で学校に潜入したら怪しまれるからだよ。同じ学生の姿なら、万が一気づかれても誤魔化せるしね。」

——保護者です!　みたいな?」

「いやいや、そこは転校生です!　にしとこうよ!」

「そんなことよりフェイトちゃん——」

「えー」

「St. ヒルデ魔法学院の初等科って “共学” か “女子校” ——どっちだったか覚えてる?」

「もちろん、覚えてるけど……」

「いや、薄い本だと共学なんだけどね」

「薄い本じゃなくても共学だよ! ——ていうか、周りを見ればわかるよね!」
確かに。校門前まで来ると、制服を着た男子女子がわんさか歩いている。

ただ……何だろう、この感じ。

「妙にジロジロ見られているような……」

「なのはがうるさいだけとか?」

それも……うん、あるとは思っただけど。

いつの間にか、私とフェイトちゃんを取り囲み、甘いドーナツみたいな人ばかりができていた。

明らかに異常だ。

「なのは、これって……?」

「まさか、もう正体がバレて——」

いや、違う!

みんなの視線が私をスルーして、フェイトちゃんに集まっている。

「フェイトちゃんが可愛いだけか!」

「えええ〜?」

気持ちはわかるけどね!

ジリジリにじり寄る生徒たち。ドーナツの輪が狭まる。

気分的には、ゾンビの集団に襲われるヒロインのようで……。

「ひいひい〜」

私だけじゃない。百戦錬磨の執務官ちゃんも脅えている。

「こ、こっとなつたら奥の手を……」

「あるの!？」

「リミッター解除おお——つつ!!」

「何のおお!？」

——ビリッ!

全力全開。コンビニで買っておいたお徳用チョコ（小分け）の袋——ちよつと固め——を勢いよく破る。

見よ、これが時空管理局・戦技教導官の力だああ!

「w k t k していた男子諸君! お待ちかねのチョコレートだよおお~~~~~つつ
!!」

「豆まきみたいにチョコをバラまく。

「ウオオオオ——というどよめきの中、私はフェイトちゃんの手を引き脱出。

そして、

「とう——つつ!」

と、花壇の陰に隠れた。

「ハア、ハア、危なかったあ〜」

「うん、はあ、はあ、ありがと、なのは」

さて、どうしたものか……。

「とりあえずフェイトちゃん、コンビニの袋でもかぶつとく？」

「えー、でも、うん、一応……」

昔もこんなことしたねー、などと目とツインテールの部分に穴を開けていると、

「あゝ、なのはさん、フェイトさん、向こうがちよ〜騒ぎになってますけど……学校で何を？」

しまった気づかれたああ!?

「奥の手しかない!」

「またああ!?!」

「A. C. Sドライブアア——ッ（指）!」

——ぷすつ。

「ぎにやああ〜〜〜つ！」

目の前で、八重歯が特徴的な少女が、ゴロゴロ地面をのたうち回る。

「ふう、危なかったあ〜」

「なのは、いくら相手がリオでも目潰しはちよつと……」

「へ？ あああつ！ これリオちゃんだったの？」

「ううつ、なのはさん……相変わらず地獄の帝王みたいですね……」

「あはは、いくら私でもそんなエスタークみたいに呼ばれたことないよ〜」

まだ、進化の秘宝は使っていないからね！

「あく、もしかして、ヴィヴィオが男子にチョコあげるかどうか気になってます？」

「ほお〜、リオちゃんわかってるじゃない。あと、アインハルトちゃんがチョコを用意し

たかどうか——なんかもね」

「ほほう〜、それは面白そうですね」

私とリオちゃんは「ふっふっふっ」と含み笑いを浮かべると、

「いえ〜い！」

ハイタツチして意気投合。

「悪い子が2人になっちゃった……」

早速リオちゃんが振り返る。

「じゃ、これから教室に向かうんで、あたしのあとに着いてきてくださいーい」

「おつ、3人パーティーだね。先頭のリオちゃんが戦士枠だからローレシアの王子で、オールラウンダーのフェイトちゃんがサマルトリアの王子、私がムーンブルクの王女って感じかな？」

「サマルトリアっ!？」

「大丈夫、大丈夫。フェイトちゃん『A, S』の終盤戦以外はそんなことないから」

「あう」

テンション下降気味のフェイトちゃんを中衛に、私たちはヴィヴィオのクラス前に到着した。

「まあ、ここまでは授業参観や学院祭で来たことあるんだけどね」

「とりあえず作戦会議——と思つたら、」

「じゃ、ちよつと聞いてきますね〜」

「リオちゃん!？」

リオちゃんは教室に入るやいなや、

『ヴィヴィオ、ヴィヴィオって誰か好きな男子にチョコあげるの？』
ざわつく教室。

——つて、そりやざわつくよね!?

「流石はリオちゃん……頼もしい。アホ毛だけど!」

「あ、せめて、怖いもの知らずとか勇気があるってことにしようよ」
怒髪天を衝く我が愛娘。

『もおお! リオつてば、いきなり何言ってるのおお!? ——セイクリッド、ブレイ
ザああ——つ!!』

『ぎにやああああつ!』

リオちゃんを直撃した特大の閃光が、窓から外に抜けていく。

「うわあ……」

「ねえ、なのは。私、さつきもコレと似たような光景を見た気がするんだけど……」
もう前衛が死亡である。

すると、ヴィヴィオがコロナちゃんと一緒に、小分けにされたチョコレート——女問わず——クラスのみんなに配り始めた。

「ねえ、なのは。私、コレもさっき似たような光景を見た気がするんだけど……」
「……うん」

親の背を見て子は育つ、というけれど。

「母親を見て嫁をもらえ、とかいいますしね」

リオちゃんが「アイタタタ」と戻ってきた。復活早いな。

ただ、ヴィヴィオが私に似ているとなると……。

「やっぱり本命は……」

「たぶん、私もそうかと……」

名前は出さなかったが、フェイトちゃんも賛同してくれる。

「あく、でもあたしヴィヴィオから大っきいチョコもらいましたよ?」

リオちゃんは、残ったチョコ全部——みたいな、ラッピングされたチョコレートを見せてくれた。

「友チョコです」

「むむう、私だつてママチョコだもん!」

「なのは、張り合わないの」

私たち3人パーティーは、霸王っ子ちゃんの教室を目指して冒険の旅を続ける。

「——目標はつけくん」

教室の一番後ろ。窓側。通称ハルヒ席に座っていた。

「うくん、流石はアインハルトちゃん、隙がないなあ〜」

基本、誰も話しかけてこないの、ひとり黙々と予習をしている。真面目な子だ。

「私も、なのはたちがいなくなったらあんなんだったかも……」

「あたしも、ヴィヴィオたちがいなくなったら——」

「それはない」

「えー」

しばらく眺めていたが、アインハルトちゃんが動く気配はない。

ただ、時々そわそわと、机の横にかけたカバンを気にしている様子。

「たぶん、あの中にチョコが入ってるんじゃないかな?」

「ですね〜」

「2人とも、もう諦めたら?」

「ここまで来て……あ、そうだ! リオちゃん髪型だけ大人モードできる?」

「ええ、できますけど……あ、なるほど。あたしがアインハルトさんを誘き出している間に、中身を確認するんですね！」

「そうそう」

アインハルトちゃんは、髪型が変わると親しい相手でも気づかない——と、ヴィヴィオから聞いたことがある。

「そんなダンスや壺を調べるみたいなことしていいのかな？」

「大丈夫、大丈夫、だって私たち——」

リオちゃんと一緒にポーズを決める。

「勇者だからねっ！」

「えー」

バレンタインデーだから——といった影響もあるのだろう。

リオちゃんが廊下から「アインハルトさんと呼んできてもらえますか」とクラスメイトに伝えると、あっさり霸王つ子ちゃんは引つかかった。

席がガラ空き。

「今がチャア〜ンス！」

「もう、知らないからね！」

と言いながらも、そこはフェイトちゃん。以心伝心。長年連れ添ったパートナー。私がかバンをあさる——じゃなかった調べている間、クラスメイトの視線を遮る壁役になっくれる。

かバンを開く。

「こ、これは……鉄アレイ!？」

手のひらサイズから大きいものまで、大小様々な鉄アレイが詰まっていた。しかもご丁寧に、リボンまでついている。

「いやいや、そんな馬鹿な……」

かバンごと持ち上げると、

「重っ！ これ、身体強化の魔法を使わないと無理だよ?」

「そんな大げさな。たぶん、これチョコレートの色だよ?」

フェイトちゃんが鉄アレイを指で弾くと——キインツ!

「……金属?」

何度叩いてもキンキン音が鳴る。

まさかとは思うが、

「アインハルトちゃんのことだから、

『ええつ、バレンタインってチョコを渡す日だったんですかああ!!』

「みたいなオチなんじゃ……?」

「うくん、でも、まあ、チョコにこだわらなければ鉄アレイでも……い、い?」

苦味のあるチョコレート気分、鉄アレイを見つめていると、

「あなたたち! アイnhルトさんのカバンに何してるのっ!」

しまった!

このクラスにはまだ、何かと鋭い委員長——ユミナちゃんがいたんだっけ!!

さらに、

「何ごとですかっ!」

アイnhルトちゃんが教室に駆け戻ってくる。

こりやマズい。

リオちゃんも戻ったところで、

「ずらかるよ、みんな!」

「アラホラサッサー」

「えー」

3人で廊下を全力ダツシユ。

「こらああ！ カバン返せええ——っ！」

背後から、アインハルトちゃんとユミナちゃんが迫ってくる。

「ちよ、なのはさん、どうしてカバン持ってきたんですかああ!?!」

「……勢いで？」

「だから、そういう生き方はダメだと……」

こっぴどい声で——私は床をキュツと踏みしめUターン。

「リオちゃん、ゴーレム創成だよ！」

「りよ、了解っ！ もう、どうなっても知りませんからね！」

「カバン返せばいいだけなんじゃ!?!」

「カガリは今泣いてるんだああ！」

「ぐぬぬ、いでよ——我が分身！」

リオちゃんの手のひらの上で、茶色いモ●ゾー&キ●コロみたいな未確認生物がクリエイトされていく。

「こ、これが噂のちびリオ！」

相当強いと聞いているのだけど、

「ゴー、ちびリオおお——っ！」

——ペキッ。

「えええ〜」

「やっぱりチョコで作ったんじやダメかああ!?!」

「チョコゴーレムって……」

板チョコみたいな防御力じゃ、霸王の行進は止められない。

「ひひまふっ!」

アインハルトちゃんが、ちびリオの欠片を口にくわえながら「うまうま」拳を振るう。
やらせるかああ!

「えーい、バインディングシールド!」

とつさに捕縛盾で拘束。

しかし、アインハルトちゃんは回転しながら拳を押し出すことで——パキンと私のバ

インドを破壊した。

「え、何このデジャヴ!?!」

さらに、アインハルトちゃんの右拳に全身の力が集まっていくなの。

「なのはさんっ!?!」

「あ、こりやダメだね」

「霸王断空——」

「ひいい〜!」

私とリオちゃんが、抱き合って体を震わせると、

「なのは、危ないっ!」

すかさずフェイトちゃんが、リオちゃんの襟首をつかんで、

「へ?」

振りかぶる。

「プラズマザンバア——ッ (物理)!!」

「ふぎやああつ！」

「はぶちついいい！」

さしものアインハルトちゃんも、正面からリオちゃんをぶつけられては返せない。

「なのは大丈夫？」

「うん、私は平気なんだけどね」

2人してキュ〜と廊下で伸びている。

「よかったあ〜」

うん、よくないけどね。

フェイトちゃん、すっかりたくましくなっちゃって……。

すると、私たちの前に小柄な影が立ちふさがった。

「誰かがアインハルトさんのチョコを奪った——つてユミナさんから連絡をもらって駆けつけてみればああ——っ！」

なのはママ！ フェイトママ！ それにリオまで、3人とも一体何やつてるのおお——っ!？」

我が愛娘ご立腹である。

ヴィヴィオの声に反応したのか、アインハルトちゃんが「うう〜ん」と目を覚ます。

「はっ！ そう言われてみれば、以前教導ビデオで拝見したヴィヴィオさんのお母様方の姿によく似て——」

これはマズい。

母の威厳が……。

「ちっ、違います。私はそう——星光の殲滅者シユテルです。お久しぶりですね、アインハルト」

「ぼ、ボクはレヴィだよ」

「あ、ああ、お二人でしたか、本当にお久しぶりです。1年ぶりでしょうか？」

「ほらく、アインハルトさん信じちゃったでしょおお！」

「え、え？ 違うんですか?！」

とキョロキョロ。

うん。信じる方も信じる方だとママは思うけどね。

「ヴィヴィオよく聞いて。このカバンに入っていたのはチョコじゃないの」

「何を言ってる……」

「なんと、鉄アレイだったんだよ！」

「えええ、そんな馬鹿な……あ、いや、でもアインハルトさんなら……前に『V i V i d L I F E』で、アクセサリーのお返しにダンベルもらったし……」

周囲の観客——ユミナちゃんを含め——が「あゝ」とコクコク頷いている。
すると、

「ちっ、違います！ それは一見鉄アレイに見えますが、鉄アレイ型のチョコで……」
「ほ、ほらあゝっ！ そうだね、アインハルトさん！ わたしは最初からアインハルトさんを信じてたよ！」
ええ。

我が愛娘ながら、なんとという変わり身の速さ。

とはいえ、

「これ、本当に鉄アレイじゃないの？ 重いし、硬いし……」

「もう、作った本人が鉄アレイじゃないって言うてるんだから。ごめんなさい、アインハルトさん、うちのママたちが迷惑かけて。ほら、ママも！」

「はい……反省してまーす。ほら、フェイトちゃんも！」

「えー」

2人して土下座したところで、

「じゃ、ヴィヴィオ返すから——」

鉄アレイの入ったカバンを放り投げる。

あれ？

そういえば、私、身体強化の魔法を使っていたような……。
ヴィヴィオがナイスキャッチする。ところが、

「ぐへっ……」

カエルが潰れたような声で、カバンに押し潰された。

「ぐい、ヴィヴィオおお〜っ!?」

「お、重い、これ、ホントに重いんですけど……」

「すみません、すみません！ 鉄アレイそっくりなチョコですみませええ——んっ！」
鉄アレイ分が濃すぎる……。

「だ、大丈夫ですよ。あ、アインハルトさん……」

はっ！ これは例のアレだ。

不味くても美味しいと答えるという。

私とフェイトちゃんは小さく親指を立てると、ヴィヴィオを応援する。

「ちよつとくらい重くて、硬くても、味はほら——」

ヴィヴィオはチョコを口に含んで、爽やかに噛んで、

——ガツキイイン！

歯が欠けた。

「…………ぐふっ」

パタン。

oh……。



放課後。

鉄アレイ型チョコにチャレンジしたみんなの歯医者につき添ったのだけど……。

ヴィヴィオ（最初の犠牲者）とアインハルトちゃん（自決）は、初めての歯医者でドリル音にガクガクブルブル。

「あ、アインハルトさ〜ん!」

「だ、大丈夫です。私がついてますから〜」

まあ、手を取り合っているので、結果オーライ……かな？

残りのリオちゃん（好奇心は八重歯をも折る）はといえば、

「どうしてなのはさんとフェイトさんだけはアレ食べてもビクともしないんですかああ〜〜〜っつっつ!?!」

うん、意外と平気でした。

「あはは、それは、やっぱり魔王とか地獄の帝王だからとか？　——ね、フェイトちゃん」

「私は違うよっ!?!」

「うゝん、でも、何だかんだと言ってなのはママと似たところ多いよ?」

「似た者同士ですな」

「あたしのことも、全力全開——で投げましたよね?」

「……………はい」

残った鉄アレイ型チョコは、私とフェイトちゃんの火力でチョコフォンデュにして美味しくいただきました。

続・逆転ミウラ裁判!

「これで終わりだと思った? ミウラちゃん、ヴィヴィオ」

「ま、まだ何かあるんですかああ!?!」

「なのはママもうやめて! ミウラさんのライフは胸と一緒に永遠にゼロだようう!」

「ええええええええ!?!」

というわけで(随分と前になっちゃいますが)前回の続き。

ママが手を挙げる。

「フェイトちゃんサイバンチョ。検察側は、ミウラちゃんが大人モードを使っている。なのに、ちっちゃいままである——その理由を知る唯一の人物を、証人として呼びたいと思います!」

「「ええええええええ!?!」」

「そんな必要もないよね!？」

明らかにオーバークル。

ヴィータさんも困惑気味だ。

「おいおい、まだ誰か呼ぶのかよ?　もしかして親御さんか?？」

「違いまーす」

「だったら……あー、コーチのノーヴェか、それとも意表をついてお前の手下のスバルやティアナ——」

手下……。

「いや、待てよ、だいたいそんなこと知ってるやつが本当にいるのか?」

「チツチツチ、私の証人は——まあ、ある意味手下なんだけど——スターズ分隊副隊長、鉄槌の騎士ヴィータちゃん——あなただああ!」

なのはママが「異議あり」——みたいなポーズでヴィータさんをババーンと指差した。

「はああ?　どういうことだよ!」

わたしも同感。

「ママ、どういふこと?」

なのはママは「まあまあ」と、ヴィータさんをなだめつつ、証言台——ミウラさんの

隣に移動させた。

2人ともちつちやいので、背もたれのない1人掛けソファなら問題なく座れる。並んでいると、なんだか姉妹みたいで微笑ましい。

「高町家と八神家のみなさん、この2人をご覧ください。何か気づきませんか?」
ん。

「……そういえば」

「髪の色が似てる?」

「あとは小さいところだな」

「そうです。」

ミウラちゃんは髪が短いので、

『ヴィヴィオ』なのは』

『アインハルト』フェイト』

のように、

『ミウラ』はやて』

ポジションだと思われがちです。

ところが、実際は違ったのです。

ミウラちゃんの身体資質——しなやかで強靱。そして何より、打撃の威力と突進力は

もう一流の域。

これ、誰かに似ていると思いませんか？」

「そう言われると……」

全員の視線が一点に集まる。

「お、おい、どうしてみんなしてあたしを見るんだよ!？」

「そうです。

ここで私が発表するのは、

『ミウラちゃん、ヴィータちゃんの隠し子』説です!」

「「な、な、なんだってエエエエ——っっ!!?」」

「な、ないから絶対。ママ! いくららんでもそれはないから!!」

「ヴィヴィオ、囁んでるよ?」

「だ、だっつゝ」

そんな馬鹿な説を出されたら驚きもする。

リオだって、そんなアホなことは言い出さないだろう。

「ったく、おめーは昔から馬鹿なことを……。だいたい、あたしの子だとして、誰との子だよ」

「……うーん、はやてちゃん？」

「……………まあ、それならいいか」

「いやいや、よくないですからああ——っ!」

水と油のように見えて、いいコンビネーションすぎる!

なのはママが苦笑する。

「まあ、はやてちゃんとの子供ってのは冗談としても、ミウラちゃんとヴィータちゃんって共通点が多いと思わない?」

「それはそうだけど……」

なぜかシグナムさんが笑っている。

「確かに面白い説だな」

「おいシグナムてめえ!」

「だがな、怪獣」

「怪獣言わないでください」

「お前は一つ大事なことを忘れてるぞ。年齢はどう説明をつける? ミウラは今年で

13歳。そのころは、まだ私たちもお前もミッドではなく海鳴にいたはずだ」
そうだ。

ママだつて小学生だつたはず。

「そこなんですよシグナムさん。13年前というと、私が11歳のときです。あのとき何があつたか覚えていませんか？」

「お前が11歳のとき？」

「ああああああああああああああ!!」

と、叫んだのはフェイトママだつた。

「なのはが大怪我したときだ!」

「ああ! テスタロツサが試験に2度も落ちたときか!!」

「シグナム、そういう覚え方はしないでください!」

「まあまあ。私がフェイトちゃんに心配かけたせいですから——つまり、あのフェイトちゃんが試験に2度も落ちるくらい、みんなに心配をかけた。

「ただ、あのとき一番落ちこんだのが誰だつたか、みんな覚えてる?」

「それは……」

「ヴェータやな」

「なっ!？」

「そう。」

『一緒に出撃してたあたしは、誰より早く気づかなきやいけなかった』

とか、

『あたしは空で、なのはを守ってやらなきやいけねえ』

とか、

『あたしはスターズの副隊長だからな。おまえのことは、あたしが守ってやる』

とか、ギップルを召喚できそうな台詞で、私は深い愛情を感じたわけです。いや、親友冥利につきますね。友達っていいな〜

「なっ……あ、あれは……だあーっ! んなこと言っただけだ!!」

ヴェータさんは顔を真っ赤にして否定したけど、

——カン!

「証人、嘘はいけません」

「そうだな」

「てめつ、シグナム！ おめーはどっちの味方だよ!!」

「つまり、私の推測では、13年前——。」

私の負ったケガに責任を感じたヴィータちゃんは酷く落ちこんでしまった。

そして気弱になったヴィータちゃんは………と、まあ色々あったんじゃないかな
と思うわけですよ。

そう考えると、いくら道場があるといつても、

『あたしは、はやてのため以外で無駄に戦う気はねー』

と言っていたあのヴィータちゃんが、特定の誰かを弟子にした。

さらに、私ですら観客席からヴィヴィオを応援するだけなのに、セコンドを勤めるほどミウラちゃんに深く肩入れする理由も——みんな、納得できると思わない?」

「だああ、んなことあるかってーの!」

ヴィータさんが、今にもグラーフアイゼンを振り回しそうなほど憤る。

「私、ミウラちゃんの両親が山の中で小さなレストランをやってる——って聞いてから
ずっと疑ってたんだよ。」

実は、オナーがはやてちゃんじゃないかって……」

「ええええ!!」

「初めてのインターミドル公式戦。娘の晴れ舞台なのに姿が見えない——いや、見えな

いんじゃないくて、すでにあの会場にいたとしたら……。

ミウラちゃんもヴィヴィオと一緒に、はやてママやヴィータママやシグナムママやシャマルママがいたとしたら——」

多いな……。

「全てが丸く収まる。パズルのピースがピタッとはまる——そうは思わない?」

ママ、流石にそれは穿ち過ぎじゃ……。

と、思っていたらヴィータさんがついにブチ切れた。

「ガアア！」

おかしな考えで、ミウラと家族に迷惑をかけるんじゃないやねえええ!

いいか、よく聞け!

あたしがミウラに肩入れする理由は一つ、ザフィーラと一緒に、あたしがコイツの素質に惚れこんだからだっ!

あたしみたいなタイプはいっぱいいても、あたしみたいに敵をもともせず突破できるやつはまずいねー。それは教導をしてもよくわかった」

ヴィータさんの顔が紅い。

「それと、もう一つ。その、なんだ……」

はて？

ヴィータさんがやけにわたしの方をチラチラ見ている。

最後になのはママを見据えた。

「お前があんまり楽しそうにヴィヴィオのことを話すもんだから……その、子供を育てるとかは無理でも、特定の一個人を育てるつてのを、あたしもやってみたいと思っただよ。」

おめえーみたいにな！

だああ！ んなこと言わせんな!!」

「ほうく、ふうくん」

なのはママはヴィータさんの背後に回りこむ。

「そりや確かに愛弟子だねく」

「だーっ！ 胸を乗せるな胸を、重いんだよ！ 育ちやがって」

そんな2人の隣で、ミウラさんが気恥ずかしそうにうつむいている。

もしかして……。

ママは最初から隠し子説なんてどうでもよくて、実際は、ただヴィータさんの本音をミウラさんに伝えたかっただけなんじゃ……。

——カン、カン、カン。

「それでは検察側——なのは、証人——ヴィータは否定していただけますか？」

「はい。ヴィータちゃんの隠し子説は取り下げます。」

でも、ミウラちゃんが大人モードを使っているってことには変わらないからね
そうだった。」

どんなにでつち上げても、オフィシャルサイトには敵わない。

「ううっ……」

やっぱりなのはママの壁は高かった。

「ゴメンね、ミウラさん」

「いえ、本当に平気ですから……それに、ちよっとうれしかったですよ?」

「2人とも納得したみたいだね。じゃ、私とフェイトちゃんの勝ちってことで」

「ちよ、サイバンチョと結託しないでよおお!」

ところが、

「異議あり! や」

「はやて、さん……?」

「ミウラもヴィヴィオも、諦めたらそこで試合終了やで」

「試合じゃないよ!! 地球出身者は安西先生大好きだよね!」

なのはママとはやてさんが睨み合う。

「ムムム、いくら八神部隊長でも、この状況は覆せないよ?」

「それはどうやらな、高町教導官。よし、いくで、シヤマル、シグナム!」

「がってん、はやてちゃん」

「え、主……本当にやるのですか?」

「大丈夫、大丈夫。シグナム、メデイカルシヤマルのときもノリノリやったやろ?」

はやてさんは「ちよつと用意してくるからな」と言い残し、シヤマル先生とシグナ

ムさんを連れて隣の部屋に向かった。

「えつと……ヴィータちゃん、はやてちゃんたち何やるか聞いてる?」

「いや、聞いてねー。ザフィーラは?」

「聞いてないな」

わたしも尋ねる。

「ミウラさん知ってる?」

「い、いえ……」

メデイカルシヤマル——つて単語が、すでに不安をあおるのだけど……。

『準備オツケーやで〜』

早い。一分とかからず戻ってきたはやてさんの格好は、タヌキの……きぐるみ……? さらにシグナムさんは……え? ツインテールのオーバーオール?? なに、このレアシヨット。

「撮るな怪獣! テスタロツサもだ!」

あとで送つてもらおう。

ちなみにシヤマル先生は、いつもと変わらない白衣姿。

はやてさんがノリノリで叫び出す。

「3・2・1、どっか〜ん!

わ〜い、なぜなにシヤマル先生〜!

お〜い、みんな集まれ〜。

なぜなにシヤマル先生の時間だよ〜」

そうきたか。

地球出身者と、なのはママから英才教育を受けたわたしは知っているが、ミウラさんは頭に「??」を浮かべまくっている。

まあ、初めて見たら、こういう反応だよねえ。

タヌキ姿のはやてさんが、ツインテールのシグナムさん（顔ちよー真つ赤）に声をかける。

「ねえ、ねえ、シグナムおねーさん、どうしてミウラやヴィヴィオは18才の姿に変身できてるの？」

「た、タヌキさん……お、大人モードって知ってる？」

「なんのことかわかんないや、ボクなにしろタヌキだし……って、なんで私がタヌキやねええ——ん!? 誰やこの脚本書いたの！」

「いえ、主ですが……」

「しもた〜」

あ〜。

「では解説しましょう！」

シヤマル先生……いつもより生き生きしてるなあ〜。

白衣が似合う人って、こういうの好きそうだよねえ……。

『大人モード』とは、広義において子供が大人の姿に変身する魔法を意味します。では、この『大人モード』が、一体どの系統の魔法に属するのか——というと、実は明確な解答がありません。

①変身魔法

②身体強化魔法

など、話によって変化するからです。

——と、まあ、そんなことを言い出したらバリアジャケットだって変身魔法みたいなものだから……。

なので『大人モード』も“変身するタイプの身体強化魔法”とでも考えておけば問題ないでしょう。

ただし『大人モード』という名称は、あくまで“愛称”だと思ってください。

一般的には馴染みやすい『変身魔法』。

専門的には『強化モード』の名で知られています。

そうですね……例えば『ViVid Strike!』のヴィヴィオの台詞で、

『そういえばフーカさん、リンネ選手と戦うなら強化モードを使えなきゃですよね』とか。

アインハルトちゃんの台詞で、

『変身魔法と言ったらわかりやすいですか？ 魔法で体格を変化させるんです』
さらにヴィヴィオの台詞で、

『自分の成人時か、その少し手前くらいになったときの姿を先取りする形ですね』
というモノがありました』

あゝ、あつたなく、そういうの……。

「はい、シャマルせんせい」

「はい、なのはちゃん」

「私、ストライクフリーダムだからよくわからないんだけど、これが、どうして私への反証になるの？」

「そうですね。ここで、アインハルトちゃんの台詞が重要なヒントになります。

『目を閉じて成長した自分をイメージして、18才くらいがいいでしょう』

つまり、デバイスが未来の姿を予測して変身するわけではない——ということですよ

確かに、あの時点では、まだフーカさんはウラカン——デバイスを持っていなかった。
「それだけじゃないわ。18歳くらいの自分——なんて言われて簡単にイメージできるものかしら？」

なのはちゃんならどう？

9歳のころ、18歳になった自分を具体的にイメージできた？」

「いや、無理でしょう。もし、どうしても言われたら、家族——お父さんやお母さん、それにお兄ちゃんやお姉ちゃんを参考にイメージしたと思います」

「そうね。それが普通だわ。ヴィヴィオの変身だって、家族——なのはちゃんがベースになってるでしょ?」

「ええ、まあ……たぶん」

聖王モード。自分ではよく覚えていないけれど、間違いなくそうなのだろう。

「だから、ミウラちゃんも誰かの姿を参考にして18歳の自分をイメージした——と考える方が自然なの」

「だけど、」

「待ってください、シヤマル先生。だったらミウラさんだって、わたしやなのはママみたく家族を意識するはずじゃ……」

「そうね。ヴィヴィオの言う通り。でも、ヴィヴィオのママはエース・オブ・エース。なのはちゃんのご実家も、道場があつて強い剣士よね?」

「確かに……」

「だけど、ミウラちゃんのおうちは違う」

「戦いとは無縁、ですね……」

「ただのレストラン。」

「そう。だから、もしミウラちゃんが試合のために大人——もっと強い自分——をイメージしようと思ったら、両親よりも、格闘技の先生がベースになる。」

だから、同じ女性で、戦闘スタイルの似たヴィータちゃんの姿を、自分の将来と重ねたんでしょうね」

わたしがなのはママに憧れたように、ミウラさんもヴィータさんみたいに強くなりた
い——と願ったのかもしれない。

「あとは、現実問題として、ミウラちゃんはスターセイバーがないと大人モードが安定し
ないから……。」

できるだけ、負担がかからない、今とかけ離れた姿にならない——という点でも都合
がよかつたんでしょうね。

だから、ミウラちゃんの大人モードは、ヴィータちゃんと同じ小柄な体型である——
と説明できるわけね」

ということは、

「大人モードがちっちゃくても、実際の成長には関係ないってことですか？」

「そういうことになるわね。」

この裁判、大人モードを使っているかどうか——という争点なら、完全になのはちゃ
んの勝利。

「だけど、ミウラちゃんが将来大きくなれるかどうか——という点においては、ヴィオの勝利とも言えるのよ」

「シャマル先生が話し終わると、フェイトママがバルディツシュで机を叩く。

——カン。

「それでは、被告人——ミウラ・リナルデイに対する判決を言い渡します。

判決は——無罪!」

「やったああ!」

「そもそも何の罪だよ……」

「そして、検察側と弁護側の母娘対決は引き分け」

「おおお」

「あちやく、母の威厳が……」

「それとミウラ——」

「はい! フェイトさんサイバンチョ」

「ヴィオが言っていたけど、将来ははやてのようなショートカットが似合う素敵な大人の女性になる——私もそう信じているからね」

「はい」

「だから、もう少しオシヤレにも気をつかうように。ミウラだって魅力的な女の子なんだから」

「あ……はい」

ミウラさんが頭をかいて照れている。

さつすがフェイトママサイバンチョ。

執務官は伊達じゃない！

「あう〜」

一方で、もうひとりのママは涙目でフェイトママの側に寄っていく。

「わあくん、最後の最後で撃墜されちゃったよ〜」

「まあまあ、これでよかったんじゃない？」

「それはそうなんだけどね〜」

フェイトママが、なのはママの頭を「よしよし」となでている。

あの2人はまた人目もはばからず……。

とはいえ、

「やりましたね、ミウラさん！」

「はい、ヴィヴィオさん！」

わたしはわたしで、ミウラさんとハイタッチ。

これも全てシヤマル先生——いや、脚本を書いた、はやてさんのお膳立てのお陰なのだろう。

さつすが八神司令!

「まったく。なのはのやつ、なんつー裁判を……」

疲れ目のヴィータさんが「あく」と、ソファーからずり落ちた。でも、ホツとした表情でもある。

「よかったですね〜」

「あく、まったく、おめーは高町家の良心だよな。アイツの娘にしとくにや惜しい逸材だ

……」

「あはは……」

そんなヴィータさんを見ていたら、ふと疑問がわいてきた。

「あの、はやてさん、一つ質問があるんですが……」

タヌキのコスプレのまま「なんでも聞いてえーよ」とポンポコ腹を叩く。

「わたしやミウラさんの大人モードはイメージで変身した18歳。だから、実際にはもっと大きく成長するよ——って話じゃないですか」

「うん、そうやな」

「つてことは、逆に、ミウラさんもヴィータさんみたいに成長しない。大人モードよりもっと育たない可能性もある——つてことですか？」

「……あー」

ミウラさんが慌てて立ち上がる。

「なつ、何を聞いてるんですかヴィヴィオさあくん！ はやてさん、そんなことないです

よね!」

「……ふう」

「ちよ、どうして目をそらすんですかああ——っ!？」

「私、タヌキだからわからんなく」

「もうそのコーナー終わりましたよね!？」

「あはは、ミウラさんのツツコミも、ヴィータさんみたいになってきましたね」

「ヴィヴィオさんのせいじゃないですかあー」

わたしはポンと手を打った。

「そうだ。もしこのままちっちゃいままだったら、いつそのこと本当にヴィータさんの愛娘——みたいに名乗っちゃったらどうですか？」

「ゲホッ！ おいおい……」

「うー、悪くはないというか複雑な気分です……」

わたしたちの会話を聞きつけて、なのはママが「ほう〜」と唸った。
また悪い顔を……。

「次の戦技披露会もこのネタで行けそうだね。2人とも、もう一戦いつとく?」
「またやるのかよ!? こんのエスターク野郎めっ!」

また地獄の帝王呼ばわり……。

「ボクももうしばらくは……」

ヴィータ&ミウラの似た者師弟コンビは否定的だけど、

「ええ〜っ、いいじゃないですか! ねえ、ミウラさんやりましょうよ〜」

「ちよ、ひつつかないでくださ〜い、ヴィータさあ〜ん、助けてくださあ〜い」

ミウラさんを逃さぬようがっちりホールド。

「よいではないか〜、よいではないか〜」

「ふうええ〜ん!」

「この光景、どこかで見たような……」

「あ〜、懐かしいな〜」

フェイトママとはやてさんが笑っている。

そんなわたしの姿にヴィータさんがボソツと一言、

「やっぱおめーは、なのはの娘だよ。こんのプチタークめ！」

えー。

褒め言葉？

帰ったら王様たちがいた

「たっだいまあ〜」

ある日、わたしが家に帰りリビングのドアを開けると、

「おう、帰ったか小娘。勝手に上がっておるぞ」

「お邪魔しています」

「ヴィヴィオ、おつかえりーっ!!」

紫天一家。

閻王——ダイアーチエ。

星光——シユテル。

雷刃——レヴィ。

マテリアルズとも呼ばれる3人が、ソファアでくつろいでいた。

「……………はっ?」

普段は思い出せないトーマの件を含めて、完全に記憶封鎖が解かれる。

「どうして3人がうちにいるのおお!？」

何だかんだでちよくちよくやってくるこの3人。とはいえ、いきなり家にいるのは、ミウラさんがスカートを履いてきた——くらいのインパクト。

「はっ! ママは? ママはこのこと知ってるの!？」

「あやつなら、まだ帰ってはおらぬぞ」

「……じゃ、どうやって家に? まさか、ルパンみたいにガラス切りで丸く……」

「するか、このたわけ!」

「もちろん、王サマのジャガーノートで」

「ドあほう! 家ごと破壊してどうするうう!？」

ああ、この反応……。

本物の王様だあ。

「小娘。何を満ち足りた顔をしておる……」

「正解は、この家の本人認証システムが私とレヴィの存在に誤作動を起こしたと推測で

きます」

「入り口で、ボクが『入れてー』って言ったたら、開いちやっただよね」

「あく、なるほどお〜」

声、一緒だしね……。

「あっ！」

忘れてた。

「すぐにお茶を出しますね！」

「お構いなく」

んんっ？

クンクン——すでに、わたしが淹れるより格段に鼻孔をくすぐるお茶の香りが漂っている。

「勝手に使わせていただいたのですが、問題があったでしようか？」

「あー、いえいえ、問題なんてまったくなかったです。むしろ、あとでその技を教えてくださいしいかなあ〜と思いますして」

「喜んで」

すると、

「ねえ、ヴィヴィオ〜、ゲームで遊んでもいい〜？」

「あ、うん、いいよ〜って、レヴィはもう遊び倒してるよねっ!? こんなに散らかってるリビングは久しぶりだよ!」

などとはしゃいでいると、

「ヴィヴィオ。貴様、いつもこんなに突っこんだり反応したりしているのか……?」

「ええ、まあ、なのはママとフェイトママがいるんで……」

王様が「ふっ」と笑った。

謎の親近感というか連帯感が生まれる。

「そこで握手を交わされるのは不愉快なのですが……」

「いいんじゃない、仲良くて」

わたしはカバンを置くと、改めて話を切り出した。

「それで、王様たちはどうしてこっちの世界に?」

「ふむ、それはもちろん、時空管理局が制作する教導ビデオ——劇場版第3弾『魔法少女リリカルなのは Reflection』——にアマタとキリエが出演すると聞いてな。そろそろ我らの出番であろうと、わざわざエルトリアから来てやったのだ。ありがたいと思え!」

「……」

わたしはわずかに逡巡し、

「あのく、王様たち、出番ないかもです」

「……………な、何だとオオ!? 貴様ああ、『マテリアル娘。』と『INNOCEN
TS』が終わったら、我らはもう用なしとでも言うつもりかああ——っ!?!」

「ディアーチエ、近すぎです」

——ゴスツ!

「ぐほう! ルシフェリオンで叩くな! 死ぬわっ!」

「我が王、少し頭を冷やしましょうか…………」

「お…………おう、そ、そうだな…………」

うくん、

「ね、レヴィ。いつもこんななの?」

「うん、だいたいこんなだよー」

なのはママに相通ずるモノがある。

仲がいいわけだ…………。

わたしは『王様たちの出番がないかも』と言った事情を説明する。

「実は『Reflection』の情報って意外と少なく、わたしが知っているのも、

①劇場版第2弾『魔法少女リリカルなのは The MOVIE 2nd Act』から約3カ月後。

②前後編2部作。

③『Axs』から『Strikers』までの空白期間を描く。

④PSP用ゲーム『魔法少女リリカルなのはAct's PORTABLE —THE GEARS OF DESTINY—』（長いので、以後『GOD』に省略しますねー）から、アミタさんとキリエさんが登場する。

ってことぐらいなんです」

「ふむ、どうだシユテル？」

「はい。私たちが知っている内容と大差ありませんね」

「どうやって知ったんだろう……:とすることはさておき、王様が命令を下す。

「ならばシユテル。今すぐウィキを検索せい！」

「御意」

「ちよつと待ったああ——つ！ ウィキを見るより先に、公式ホームページを見た方がいいですよ？」

最近、これで痛い目を見たばかりなのだ。

「ふむ、まあいいだろう。映せ」

モニターに表示された公式ホームページ。

ところが、

「何だこれは？ キャラ紹介もストーリー紹介も何もないではないか！」

「簡単な【NEWS】に【CAST】【STAFF】それに公開日くらいですね」

「どこかに隠しリンクがあるとか？」

「それだ。シユテル、探せ」

「ここにリンクがあります、が……」

シユテルさんの指が、画面の左上——〈THEATER〉で停止する。

「たわけ、それは公開予定の映画館だ！」

こうなると、あとはもう特に見るべきモノはない。

「今回は、あんまり情報を得られなかったなあ」

「そんなことないんじゃない？」

とレヴィ。

「ほえ？」

「ほら、このイラスト。『Force』みたいな格好したなのは——フェイトとも切り替

わるんだけど——の背景」

ちなみに〈THEATER〉のページなら、背景のみを観賞できる。

「ほう。なんじやこの夢の国みたいな人工島は？ 海鳴にあつたか?」

「新しく建設された——という可能性もあるかと」

むしろ、

「エルトリアの風景ってことはないんですか?」

「こんな潤沢に水があつたら苦労せんわ」

「いずれはこのように復興したいですね」

「真ん中にお城っぽいのがあるから、テーマパークなんでしょ? いいなく、ボクも遊び

に行きたいー」

別の次元世界や古代遺跡——なんて可能性もあるけれど、これ以上はわからない。

王様が指示を下す。

「次はPVだ。あるのだろ?」

流れ出すと、すぐに王様が舌打ちした。

「そういうことか。我は大きな勘違いをしておつたようだ」

「どういうことですか?」

『GOD』が『闇の欠片事件』から約3か月後——だったせいで『Reflectio

n』も『The MOVIE 2nd A's』から、約3か月後が舞台と勘違いしておったのだ」

「へ？ あつてるんじゃないんですか?？」

「シユテル、説明してやれ」

「はい。このPVで流れる日常風景は、『The MOVIE 2nd A's』の“エピソード”から約3か月後。つまり『闇の書事件』が解決してから2年プラス3か月後ということですよ」

「ああああ！ そういうことかああ！」

「ふえり、よくわかったね、王さま」

「あつたり前だ！ よく見ろ、子鴉のやつが元気に走り回っておる。あやつが自力で歩けるようになったのは、事件から2年後だからな」

「はあく、王様って何だかんだではやてさんについて詳しいですよねー」

「知るかつ！」

「キリエに言わせれば、我が王はツンデレ？ というモノらしいですから」

「誰がツンデレだっ!?! あの桃色、帰ったらしめるっ！」

王様はグチグチ言いながらも、

「それと、ここを見る。パジャマのツヴァイの背景——」

枕を持ったリインさんのことだ。

「何だこの水没都市は？」

「あゝ、そう言われると……」

「2年で地球温暖化でも進んだのか?？」

「いやゝ、それはないかと……」

「だったら、セカンドインパクトで使徒が攻めてこない限り、舞台は海鳴ではない——と
いう結論に達するな」

「はあ、なるほどゝ」

流石は王様。

「じゃあ、ママが砲撃してるこの変な足場って」

「うむ。先ほどレヴィが気づいたテーマパークのような人工島であろうな」

王様は本当に何でもわかる。

「——で、ボクたちはどうして映画に出れないの王さま？」

「そ、それはだな……ええい！ シュテル、ウイキだウイキ！」

あはは……。

結局、最後はウイキ頼みなんだあゝ。

うん、わかるけど……。

すると、

「……我が王。残念ですが『ウィキペディア』に『Reflection』専用のページはありませんでした」

「なんと!？」

「ですが『Nanoha Wiki』になら専用ページがあります」

「ほう、聞いてみよ」

が、

「ここに書いてあるの、最初にヴィヴィオが話してくれた内容と変わんないよ？」

「それほど、公式で発表されている情報量が少ないということか……」

諦めずに眺めていると、

「……ん？ ここ、王様、ここ見てくださいっ！ 登場人物の一番下——女の子。」

『完全な新規キャラクター。序盤から登場する重要人物』

ってありますよ!」

「女の子だと？ でかしたヴィヴィオ！ こやつのイラストの1枚でもあれば、突破口が開けるやもしれん——」

けれど、新キャラの『女の子』は、いくら検索しても引つかからない。

ソースすらわからなかった。

「ボク、もうツカレタあゝゝっ！」

「これ以上は無意味、か……」

「うゝん、またノーヒントになっちゃいましたねゝ」

「いえ、そうとも限りませんよ?」

シユテルが指し示したのは『Nanoha Wiki』の概要に載っていた一文。

『Reflection』には「反射」「反響」「鏡像」などの意味があるが本作との関係は不明。(りりかる歳時記52回)『

「なるほど。『Reflection』をヒントにして内容を読み解こうということか」

「はい」

「Reflection」といえば、映像、鏡などに映った影、反射光、熟考、影響、反映、それに——よく似た人、なんて意味がありますよね?」

「よく似た人——つて、やっぱりボクたちのことなんじゃない?」

「早るなレヴィ。また肩透かしを食らってはかなわんからな。シユテル『A's』と『StrikerS』の時はどうだった? 空白期間の物語ならば意味も同じようにとらえるべきであろう」

「そうですね。これも『Nanoha Wiki』に書かれていましたが、

『エース……技術が優れていて、華麗で優秀に戦える魔導師』

『ストライカー……その人がいれば、困難な状況を打破できる、どんな厳しい状況でも突破できる、そういう信頼を持って呼ばれる名前』

「どちらも魔導師の尊称のようです」

「尊称か……であれば、『Reflection』も物事ではなく人物——子鴉たちを鏡とした、我ら3基のマテリアルズのことを意味している可能性が高いかもしれんぞ」

「おっつ！ やっぱりボクら出番があるかもだー」

「むしろ未来組、貴様やアインハルト、トーマは出番がないかもしれんな」

「なんてこつたい！」

「王様たちにはかりいい思いをさせてなるものかああ——っ！」

「甘い、甘い、バレンタインのチョコぐらい甘いですよ、王様ああ！」

「何だと?」

『Reflection』を人物としてとらえた場合、もう一つ意味が隠されているんです！」

「ふん、言ってみろ」

「それは——“カーバンクル”！ 味方全員に魔法を反射するリフレクの魔法をかけて

くれる、もふもふな生き物のことを意味してるんですよおっ!!」

「たわけええ! それFFの召喚獣だろうが!」

一撃で返された!?

「詳しいですね、ディアーチエ」

「さすが王サマー」

「まさか気づかれるとは」

「ふんつ、当たり前だ。我は王だからな、ドラクエ、FFから『未来神話ジャーヴアス』

まで全てのRPGを網羅しておる!」

「『未来神話ジャーヴアス』って……」

ファミコンRPG初のバッテリーバックアップ搭載ソフトだっけ……。

そんなのママだっけってプレイしたことないよ。

「一応、エルトリアの復興に役立つかと思っただけ……」

文明崩壊後。荒廃した未来の地球が舞台なので、まあ、似ていなくもない……かも。

シユテルが小さくため息を吐いた。

「カーバンクルやジャーヴアスはさておき、『Reflection』が私たちを意味している——と解釈した場合、アミタとキリエの行動も互いの鏡像として理解できます。

が、最も重要な人物——ユーリが抜け落ちてしまうのではありませんか? リイン

フォースの鏡というよりは、かつて一部だったモノですから」

「むっ……むむっ、確かに」

すると、レヴィがポンと手を打った。

「あー、アレじゃない？　“reflection”って情報工学のリフレクション。

プログラムが、自身の構造をデータのよう読み取ったり、書き換えたりすること——だったよね？」

「……レヴィ、おまつ、アホの子設定はどこへやったああ——っ!？」

王様がレヴィの水色の髪をぐちゃぐちゃにかき混ぜる。

「イタい、イタいってば王さま。前にユーリが話してたんだって」

「むう……ユーリが、か……」

「なるほど。これは盲点でしたね」

「そっかあ。みんなそれぞれが鏡のような存在になっていて、マテリアルズやシステムU—Dそれにギアーズにとっては、リフレクションとしての意味合いもある。

さらに、全体を通して未来へと続く“自己言及”の戦いでもある——それはつまりテーマなわけで……いやいや、ここで納得しちゃったら高町家の名が廃るっ!」

「そこまでたどり着きながら……もういいだろ、貴様の家はもうなっておる……?　天

邪鬼一家か？」

わたしは起死回生(?)となる、新たな一手を投じる。

「アミタさんとキリエさんは時間移動してやってきた、いわば時魔道士です。ここまで
はいいいですか?」

「桃色の二つ名は『時の操手』だからな、まあ、そこまでは許してやろう」

「であれば、時魔道士のフローリアン姉妹だけが、唯一、時魔法のリフレクを使えるわけ
で、『Reflection』とはアミタさんとキリエさん姉妹を指して——」

「だからFFタクティクスから離れろと!」

「ていうか、例の謎の『女の子』はどう説明つけるんですかああ——っ!?!」

新キャラの正体がわかるまでは、王様たちだけ出演なんて、認めるわけにはいかない
のだ!

「ああ、あ奴か。たぶん、ユーリのことだろ」

「……へ?」

「もしくは、我ら3人とユーリが合体した存在。もともとマテリアルズとU—Dは、一つ
の存在だったのだからな」

「な、なんだつてええ——っ!?!」

「いや、今さら驚くこともあるまい。過去の世界で話したはずだが……」

「あゝ、記憶封鎖の影響で〜」

そんな話聞いたっけ〜？

「とうかレヴィ、貴様は驚くなっ！」

「だつて〜」

「まあよい。それと小娘。貴様とアホな会話をしている気づいたことがある……が、シユテル。貴様も気づいているのだろう？ 説明してやれ」

「はい。我が王」

あゝ、補習授業を受ける生徒つてのは、きつとこんな気分なんだろうなあ。

学校では立たされたこともないのにつ！

「あの……お手やわらかにお願いしまーす……」

「シユテルくん、ボクにもわかるよーにね」

「善処します。」

そうですね、そもその誤りは、私たちが劇場版第3弾『魔法少女リリカルなのは
Reflection』を、”劇中劇”だと信じこんでいたことです」

おや？

「でも『The Movie 1st』も『The MOVIE 2nd A's』も映

画ですよ？ ママたちも監修しましたし、わたしだって友達と見に行きましたよ？」

「んにゆく、難しいことはわかんないけど、別世界のなのはたちのことでもあるよー。ポクたち会ったことあるしね！」

「え、そうなの!？」

初耳だ。

「それに関しては、いずれもが正解で、いずれもが間違いではありません。」

「ここで問題となるのは、アミタとキリエが『時間移動をしたかどうか』なんです」
時間移動をしたかどうか……。

「あ、あああああああ！ そっか！」

「え、え、どーいうことお〜？」

「流石はナノハの娘。察しが良いです」

「ほらレヴィ、わたしたちつて普段は記憶封鎖を受けているから、アミタさんやキリエさんは時間移動じゃなくて、管理外世界からやってきた——つて認識してるんだよ。」

だから、もし『時間移動』のシーンが映画にあつたら」

「あゝ、映画じゃなくて、ホントにあつたハナシになるのかあゝ！」

「うん！ 管理局にも資料はないし、ママたちだって覚えてないんだから、作れるはずが

ないんだよ」

「はい。2人とも花マルです。」

そして、おそらく“時間移動”のシーンは登場します。

だからこそ、タイトルも『The MOVIE 3rd Reflection』から『魔法少女リリカルなのはReflection』に変更されたのでしよう。

これまでの劇場版とは違い、劇中劇ではない——という意味もこめて」

「はあく、そつかく。……あれ？」

でも、それじゃ、わたしが知ってる『砕け得ぬ闇事件』——『GOD』と、まったく違うストーリーになっちゃいますよね??

『A×s』から『Strikers』までの空白期間を描く——って話なのに、別世界のママたちの物語になっちゃうんじゃ……」

「そーだよー。シユテるん、やつばおかしんじゃないのー? もしボクたちとユーリが一つになってたら、ボクたちなのはやオリジナル、それに、ヴィヴィオとも会ってないってことになるしー」

「そ、そーだよねっ!」

そもそも、ここで話していること自体、おかしくなってしまう。

わたしとレヴィは「そんなのヤダー」と異議を唱える。

「えええい！ 駄々っ子どもめが！ 静かにせええい！」

スパパンツ——と、王様が丸めた雑誌でわたしとレヴィの頭を叩いた。

「いいか、よく聞け？」

別世界、平行世界、パラレル世界——名称は違っても全て同じことだが、貴様らもすでに、この世界がいくつもの世界から成り立っていることは気づいておろう」

「はい。それは……」

「うん、知ってるよー」

「だとすれば、

●Aルート(TVアニメ版ルート)……『魔法少女リリカルなのは』(『無印』) ↓

『A, s』(※リインフォース・アインスが消失する) ↓ なのは大怪我(入局から約

2年後) ↓ 『StrikerS』 ↓ 『Vivid』 ↓ 『Vivid Strike

ke!』 ↓ 『Force』

●Bルート(PSP版ルート)……『無印』 ↓ 『A, s』(※リインフォース・アイ

ンスが消失しない) ↓ 『BOA』(『A, s』直後・PSP版1作目・マテリアルズ登

場) ↓ 『GOD』(約3か月後・エルトリアを救うためキリエやってくる) ↓ なの

は大怪我 ↓ 『Strikers』 ↓ 『Vivid』 ↓ 『Vivid Striker!』 ↓ 『Force』

●Cルート(劇場版ルート)……『The Movie 1st』 ↓ 『The Movie 2nd A's』(※リインフォース・アインスが消失する) ↓ 『Reflection』(約2年3か月後・エルトリアを救うためキリエやつてくる)

便宜上、この3ルートに分けた。

厳密に言えば、もっと分岐するであろうし、

『Vivid Strike!』の扱いにも思うところはあるが……まあ、こんなものであろう。

ヴィヴィオ、レヴィ、これを見て気づいたことはあるか?」

「AのTVアニメ版ルートって、王様たちが出てこないですよね」

「そうだな」

「今度の映画のヤツと、なのはがケガしたのってだいたい同じ時期じゃない?」

「あ、ホントだ!」

王様が口の端を吊り上げた。

「ようやく気づいたか。
つまり、

●Aルート(TVアニメ版ルート)……『魔法少女リリカルなのは』(『無印』) ↓
『A's』(※リインフォース・アインスが消失する) ↓『Reflection』 ↓
なのは大怪我 ↓『Strikers』 ↓『Vivid』 ↓『Vivid S
trike!』 ↓『Force』

と、置き換えることも可能なわけだ。

バリアジャケットの違いなどは些細なこと。

新装備が『Force』のストライクカノンに似てる？

そんなもの『The MOVIE 2nd A's』で『Strikers』の装備
を先取りしていたのだから、当然次は『Force』の装備だろう。問題ない。

事件の内容は、『Reflection』と変わらなかつたととらえればよい。

さらに、『Reflection』で頑張りすぎて、体に負担が残っていたから、結果
として直後の大怪我につながった——と、とらえることもできるわけだ」

「はわ、これって、全て解決しちゃったんじゃない……」

ところが、レヴィが首を捻る。

「ねー、王サマー」

「なんだレヴィ」

「だったら、今のボクたちってブルーってこと？」

確かにそうだ。

シユテルが割って入る。

「そう解釈してもいいですが、先ほどディアーチエは、便宜上3ルートに分けたとおっしゃいました」

「そういうことだ。分岐はもつとあるぞ。例えば、

●Dルート(劇場版+PSP版ルート)……『The Movie list』↓『The MOVIE 2nd Act』(※リインフォース・アインスが消失しない)↓『BOA』(バリアジャケット違う、PSP版1作目)↓『GOD』(リーゼ姉妹出ない。エルトリアを救うためキリエやってくる)↓なのは大怪我↓『Strike erS』↓『Vivid』↓『Vivid Strike!』↓『Force』

なんて世界もあるだろう。

もつと言えば、

●Xルート……『魔法少女リリカルなのはINNOCENT』

●Yルート……『とらいあんぐるハート3』

●Zルート……『とらいあんぐるハート3』 ↓ 『とらいあんぐるハート3 リリカルおもちゃ箱』

なども、どちらが先か後かは置いておくとして、パラレル世界の一部であろうな」

「うわあ〜」

もう、何がなんだか……。

「ふっ、そう複雑に考えるな。

『シユタインズゲート』、あるいは他のアドベンチャーゲームでもいい。

最終的に、全ての平行世界の記憶を持っている世界——という分岐も存在するであろう？ それと似たようなものだし」

シユテルが頷く。

「だから、私たちがこのような会話をしている、おかしくない——ということなのです」

すると、王様が「ほう」と小さく笑った。

「そういうことか。リフレクションにはメタ発言（メタ認知）のような意味合いもあるのだが、AルートとCルート、互いにメタ世界である——ということが『Reflect ion』に隠された、真の意味なのかもしれないぞ？」

「ゴメン、王さま。ボクもう無理……」

「わたしも」

「ふんつ、子供にはまだ早かったか。あとで貴様の母親——いや、子鴉辺りにでも聞いておけ。貴様でもわかるよう話してくれるだろうからな」

何だかんだで、はやてさんのこと信頼してるよね、王様。

「あー、ボクも聞いてこよーつと」

「レヴィ……貴様は私の話を聞けええい！　そして理解しろっ！」

「ムくりいゝゝつ！」

そうだつ！

「あのか、王様」

「どうした、まだ何かあるのか？」

「わたし、アミタさんやキリエさんが出るっていうんで、今回の映画は単純に、ゲームだった『GOD』のストーリーを映像化した作品——だと思っていんですけど……」

「まあ、違うであろうな」

「なんで、結局『Reflection』は、どんなお話になるのかな〜って、気になっちゃって」

「我に教えるど？」

「え〜つと、はい、そうなんですけど……ダメ、ですか？」

「ふっ、仕方あるまい。今日は気分がいい。特別に我自ら『Reflection』のストーリーをまとめて、先取りで語ってやろう」

「良いのですか、ディアーチエ？」

「構わん」

「王サマはやくう〜」

「お前もか、レヴィ……まあよい、貴様らまとめて傾聴せよっ！」



『魔法少女リリカルなのはReflection（闇王バージョン）』

『闇の書事件』から2年。

養子縁組を受け入れたフェイト。

元気に走り回れるほどに回復した子鴉。

そして、優秀な魔導師に成長したことで、逆に「あの時、もつとできたことがあったんじゃない……」と悩むなのは。

未だ、明確なビジョンは定まっていないけれど、3人にとつても一つの区切りを迎えていたころ。

海鳴市では、奇妙な魔力反応と共に、謎の女の子の姿が度々目撃されていた。

一方で、故郷エルトリアと父を救うためには、システムU—Dの持つ『永遠結晶エグザミア』が必要である。

フロリーアン姉妹の妹——キリエは、時間遡行システムを使い、遠い異世界である現在の地球へやってくる。

けれど、システムU—Dは、起動させれば世界を破壊するほど危険な存在。

「闇の書に眠っているうちにU—Dを手に入れる！」

魔導書を奪うため、はやてを襲うキリエ。

しかし、2年前リインフォース・アインスの犠牲により、本来の姿を取り戻した夜天の書に、U—Dの姿はなかった。

「おかしい。この時代、この世界に、システムU—Dが現れるはずなのに……」

そう。

夜天の書から切り離された闇の書の残滓は2年という歳月をかけて、女の子の形に実体化しようとしていたのだ。

阻止に動く管理局の魔導師たち。

「彼らにU—Dを破壊されるわけにはいかない！」

キリエのプログラムにより、*“完全体”*へと進化するシステムU—D——いや、碎け得ぬ闇ユーリ・エーヴェルヴァイン！

妹を追ってきた姉アミタの介入。

それに、なのは、フェイト、はやてといった一騎当千のエース級魔導師たちの力で、一度は消滅するユーリ。

ところが、彼らの強大な魔力によって、逆にエグザミアの力が解放。かつてのナハトヴァールをも超える、古代ベルカが生み出した狂気の無限連環機構が起動する。

再生していくユーリ。

それどころか、彼女はさらなる高み——究極体へと進化する！

なのはたちとフロリーアン姉妹は協力。暴走するユーリを止めようとするが、

「灼熱の牙『カーディナルレッド』」

全てを焼き尽くす『ファイヤーレッド』

結晶世界への導き『ダイヤモンドレッド』

——輝けっ！ 召喚獣カーバンクルうう!!（阿澄佳奈ボイスでよろ）

ユーリはカーバンクルを召喚すると「リフレク、リフレク」なのはたちの魔法をことごとく反射する。

さらに、ユーリから溢れる闇が、なのはたちを飲みこむ。そこは、かつて闇の書がフェイトに見せた夢のような空間で——さあ、ここで我ら3人が登場だ！

なのはたちの鏡像になって問いかける。

「ナノハ、あなたはかつての戦いから何も変わっていない……」。

ユーリのことも、リインフォース・アインスの時と同じ。あなたには、破壊することしかできない……」

なのはの脳裏に、消えていくアインスの姿や、泣き崩れるはやての姿が思い浮かぶ。

「ううん、そんなことない……あの時はダメだったけど……今度こそ助けてみせる！」

しかし、召喚獣カーバンクルの力で「リフレク、リフレク」するユーリを、どうしても止めることができない。

「アレを破る方法が、一つだけあります」

なのはは、フローリアン姉妹が提案した賭けに乗る。

「なのは、やめて！」

「それだけはあかん、なのはちゃん！」

「わかってる、無茶だつてことは……。」

「だけど、私はもう誰の涙も見たくない。」

「だから決めたんだ。私の魔法が届く距離にあるモノは、全部守つて行くんだつて——」

時魔道士アマミタとキリエの魔法——フォーミュラエルトリアの力によつて、巨大な砲身と総合支援ユニットが召喚される。

「これがストライクカノンとフォートレス……。魔力の無効化に対抗できる、未来の私の装備……」

「デバイスとは違う。初めて扱う魔力駆動の兵器によつて、なのはの小さな体は翻弄される。」

「例え今、この時を最後に飛べなくなつても私は諦めない——。」

「思いを貫く力を——。」

「スターライトブレイカーS・Cフルバーストおおお——つっ!!」

「なのはの砲撃が、もふもふしたカーバンクルを撃ち抜く。」

消えるリフレク。

「なのはがくれたチャンスが無駄にはしないっ！」

雷光一閃——プラズマザンバアアア！」

フェイトの一撃を皮切りに、みんなの全力全開がユーリに直撃。

動きが止まり、再生までのわずかな隙が生じる。

「私も今度こそ救ってみせる！」

ひとりユーリに近づくはやて。アインスの生まれ変わりとも言わべきツヴァイの力を借り、システムを上書き。制御プログラムを起動。そして、ついに暴走の原因エグザミアの停止に成功する。

こうして『砕け得ぬ闇事件』は解決。

ユーリは「自分の力が役に立つなら」と、赤毛、桃色と一緒に遙か未来の異世界エルトリアへ旅立つ。

そして、なのは、フェイト、はやての3人は、それぞれの進むべき未来像を、明確に意識するのだった。



「——と、まあ、こんなところだな」

「……えつと、悪くはないけど、考察したことが反映されていないというか、色々ヘンな部分が混じっているというか……どうして詠唱がFFアンリミテッド!？」

「何を言っておる。ヴィヴィオ、貴様の要望を全て取り入れてやった結果ではないか」

「た、確かに言いましたけどお」

要望じゃないよ!?

「私は出番があつて満足しました」

「シユテルはね!」

「ん、ユーリがデジモンみたいに進化してたよね」

「そう、レヴィ、それ!」

完全体とか究極体。ユーリモンみたいなノリだし。

「ふう……いいか貴様ら、今話したストーリーは『Reflection』とは別物だ」

「えええつ、あんなに長々語っておいてええ——っ!？」

「ボク、後半寝ちやつたよ」

「寝るな、ドアホウ! だいたい、最初に「闇王バージョン」と言っておいたはずだが」

「うわつ、ホントだ、書いてあつたあ」

騙された!

「よく考えてみよ。この長さでは映画1本分にしかなるまい」

「そ、そうだった……今度の映画は前後編2本なんだっけ！」

「つまり、今語った闇王バージョンは『GOD』をベースに、貴様の面白おかしいアイデアを加えたいわば——我のお遊びだ」

「あう〜」

「だいたい、こんなところでストーリーを知ってしまったら、つまらぬではないか」

「でも〜」

シユテルが落ち着きなさいと、わたしのカップにお茶を注いでくれる。

「いいですか、ヴィヴィオ。本物の『Reflection』は映画館で、頭を空っぽにして、自分の目で確かめる方が面白い——そう、ダイアーチエは言いたいのですよ」

ママの声で言われたら反論できない。

するとレヴィが、

「でも、ユーリが『リフレク、リフレク』する可能性もあるんでしょ？」

「そうだな。無限に存在するパラレル世界のどこかに、そんな世界があったとしても我は否定せん」

「じゃ、ボクも自分の『Reflection』を考えてみよ〜っと。もっと、ボクが大活躍するようなストーリーでっ！」

「それも、パラレル世界になるかもしれないですね。では、私も一つ考えてみましょうか」
「あはは！ わたしだって負けないよ、王様、シユテル、レヴィ!!」

信じるか信じないかはみなさん次第ってことで。

ひな祭りウォーズ

ひな祭りが近づいたある日のこと。

その戦いは、ママたちの、ほんの小さなすれ違いから始まりました。

「ヴィヴィオは、どんなおひな様が欲しいの？」

「うくん、どうなんだろう……」

地球の文化なので、そこまで詳しいわけではない。それどころか、どんなタイプのひな人形があるのかもよく知らないのだ。

「おひな様って言ったら、やっぱり7段飾りだよ。最近、コンパクトな親王飾りや3段も人気みたいだけど……フェイトちゃんは思う？」

「いつそのこと特注で8段なんてどう？」

「ムムツ、私なら9段にするかな」

「じゃ、私は10段で」

「11」

「12」

2人が睨み合う。

「フェイトちゃん、ここぞとばかりにヴィヴィオにいいところ見せようとして〜」
「なのはこそ〜」

ガツ——と、両手で組み合った。

「だったら、ひさしぶりに模擬戦で決着つけようか？」

「……そうだね。受けて立つよ、なのは！」

2人とも「負けないよ」と、力比べの格好のままバリアジャケット姿に変身する。
家の中だから、大暴れすることはないだろうけど……。

「13段！」

「14段！」

うん。

黄金聖闘士の千日戦争みたいな感じで、当分は決着つかないな、これ……。

「そういうえば、他の家ってひな人形あるのかな？」

そもそも、ミッドチルダでも、ひな祭りをやるのだろうか……？

「やるよ？」

突然、八神家を訪れたわたしに、はやてさんは軽い口調で答えてくれた。

「子供が大きくなったらやらない家もあるみたいやけど、うちは毎年ヴィータがおるからな」

「なんでだよー！」

ソファアで寝そべっていた八神家のチビっ子……じやなかったヴィータさんが、バツと起き上がった。

「あはは、まあ、それは冗談としても、リインにアギト、今はミウラもおるしな」

「なるほど」。それに、八神家はザフィーラをのぞいてみんな女性ですもんね」

「そやな」

ザフィーラも大変そうだな。

「あのお、それで、はやてさんのところは、どんなひな人形を飾るんですか？」

「うちのはフェイトやな」

「フェイト……って、フェイトママ？」

はやてさんが小さく笑う。

「これがうちのひな人形や——」

シンプルな赤い7段飾りに、シンプルなユ●クロみたいな服を着たお内裏様(?)と、真つ赤な服にツインテールのお雛様(?)。

「——つて、これフェイトママじゃなくて『F a t e』だよねっ!？」

「衛宮くんは、遠坂凛やな」

「へ、へえ」

わたしは突っこまない。

突っこまないぞ。

「この2段目の三人官女つて……」

「セイバー（青）と、イリヤと、桜やな」

「へ、へえ」

耐えろわたしいいゝゝゝっ!

「そ、その下のカラフルな五人囃子つて……」

「全部セイバーやな。白とか黒とか赤とか……」

納得。

わたしは、さり気なく倒れたままの隋臣ランサーを起こす。

「ところで、青セイバーの横に置いてある菱餅だけなくなってますけど?」

「あ、またヴィータやね」

「腹ペコ王の隣に置いとくのが悪いんだよ。なくなってる方がリアリティあるだろ?」

確かに……。

あ、

「3色の菱餅で思い出したんですけど、なのはママの魔力光と同じピンクには、桃と一緒に魔除けの意味があるそうですよ?」

「なんだよ魔除けって、あいつにピツタリじゃねーか。どんどん食ってやれ——」
そう言つて、ヴィータさんはもう一か所の菱餅にも手を伸ばす。

「ちなみに、緑はフェイトママに近いし、白は、はやてさんの魔力光ですよね」
「げほ、ゲホッ! 早く言わねーから、はやての色食っちゃまったじゃねーか!」
「あ〜」

「あ〜つて言うな、あ〜つて! はやてに悪いことでも起きるのかよっ!?!」
別に何も起きないけどね。

「ヴィヴィオは、相変わらざるの悪魔っ娘やね〜」

「へへ、魔王の娘ですからあ〜」
「褒めてねええつ!」

次は、コロナハウスへ向かう。

きつと、学院祭の喫茶店みたいにカワイイひな人形が、夢いっぱい飾ってあるのだらう。

そんな、ぬいぐるみみたいなおひな様を想像しながら、

「おじやましませ〜す〜つて、これガンプラだよねっ!? 何このジオン脅威のメカニズムみたいなひな壇は!」

「やっぱり、おかしいかなあ〜?」

「うん、流石にコレは……」
ないな〜。

「やっぱり、1段目は初代ガンダムとシャアザクより、レガンダムとサザビーの方がいいよね! 私も悩んだんだよ〜」

「……いや、どうだろ」

かろうじて色で判断できるけど、最早お内裏様とお雛様ではない。

「ヴィヴィオならどっち?」

どっちでもいいよね!?

とはいえ、

「え〜つと、マジレスすると、初代ガンダムとジオングかな。スカートっほしいし」

「な、なるほど。流石はヴィヴィオ……」

コロナが「うん」と長考に入ったので、次いこ、次――。

というわけで、次はリオハウスなのだけど……すでに嫌な予感しかない。

「……」

家の前を無言で通り過ぎる――と、

「ちよつと待ってよヴィヴィオ！ あたしんちのおひな様も見てつてよおおうつ！」
気づかれた！

まさか、ずっとわたしが来るのを正座待機してたの!?

結局、強引に室内に引きずりこまれる。

「コレがあたしの仮面ライダー雛だああ――っ！」

「あゝ」

何というかりオらしい。

「戦隊モノとどつちにしようか悩んだんだけど、戦隊は人数が多すぎて」

「うん。賢明な判断だと思う」

意外なほどまともな理由だった。

ちなみに、1段目は今年のライダーが来るそうです。

こうして、ナカジマ家でチンクが飾りつけしていたプリキユア雛を眺めつつ、最後の目的地——アインハルトさん宅へ。

「アインハルトさんのことだから、お内裏様がダンベルで、お雛様が鉄アレイ——みたいな感じで飾ってあるんだろうなあ〜」

縦に立たせたダンベルに、着物を羽織わせているイメージ。

「逆に、ちよつと見てみたいかも……」

わくわくしながらインターホンを押す。

「こんにちは〜。アインハルトさん、ひな人形を見に来ましたよ〜」

「ようこそヴィヴィオさん。一応、手作りで作ってはみたんですが、あまり上手くはできなくて……」

手作りっ！

期待が高まる。

「いえいえ、大丈夫ですよ。みんな変わり雛でしたしね」

きっと、最強の変わり雛が爆誕してくれることだろう。

今日回った各家のおひな様について話しながら、アインハルトさんの部屋へ――。

「あ、あの、これなんですが……」

最上段のみ。男女一組の、シンプルな親王飾り。

だけど、ひと目見てピンときた。

「これって……」

「はい。霸王イングヴァルト――クラウスと聖王女オリヴィエのひな人形を、ゴーレム創成で作ってみました」

「……」

「えっと、また何か間違っていたでしょうか!？」

確かに、造形――という点では失敗したねんどろいどみたいんだけど、ひな人形にこめられた想いと願いは誰よりも強い。

「いえ、これはスゴくいいですね。たぶん、今日見てきた中で一番の作品です」

「ほ、ホントですか!？」

「はい!」

こうして、数々のひな人形を見たわたしは帰路についたのだけど、
「ただいまっ——」

——ドツカアアーン！

「ちよ、なのはママ、フェイトママ、まだやってたのおお——っ!?」
本気で千日戦争に突入するつもり!?

「ピラミッドひな壇、31段、1800体……」

「だったら私は、日本一高い32段……」

「ああ……もう……こんな部屋の中を散らかしてええ〜」

フツフツと怒りが沸いてきた。

「セツトアップ!」

わたしは思わず、黒いバリアジャケットをまどつてしまう。

「ヴィヴィオっ!?!」

「聖王モードっ!?!」

「2人とも、その場で正座っ！」

「あう〜」

なのはママとフェイトママは、バリアジャケット姿のまま並んで正座する。

「まったく、こんな仲良しなのに……ああ」

ピンときた。

わたしは直ぐに写真を撮ると、アインハルトさんに送信する。

『これがうちのおひな様です』

と。

絶対無理なホワイトデー

話は2月14日——バレンタインデーにまで遡る。

帰宅後。

わたしたち高町家3人娘は、チョコレートを手にも、時空管理局本局内部の無限書庫を訪れていた。

目的はもちろん、

「ユーノ君。私、ホワイトデーはこの新しいオーブンレンジでいいから」

なのはママが、星のように眩しい笑顔で最新家電の載った雑誌を手渡した。

「ちよ?!」

「もう、ダメだよなのは。ユーノが困ってるじゃない……」

「あ、あはは、助かったよフェイト」

「私はこのカタログの新車で——」

「フオオオオオ!!」

まるで、クロノ提督のエターナルコフィンでも食らったかのように、ユーノ司書長が凍結する。

わたしは駆け寄ると、

「大丈夫ですか、司書長？」

「あ、ああ……ヴィヴィオ……うん、ボクなら平気だから」

精一杯の笑顔。

「よかったあ。じゃ、これ、ジムのみんなの分のチョコです。それと、こっちのメモに欲しい物リストが書いてあるんで、よろしくお願いしま〜す！」

「ギヤアアアム!!」

そんなユーノ司書長の肩に、ポン——と置かれた優しく小さな手。

「アルフ……」

「これ、あたしの分のチョコだから。ホワイトデーよろしく〜」

「ヴェアアアアアアア!?!」

と、まあ、バリアブレイクされちゃったような出来事がありましたとき。



時は流れ——3月某日。

ホワイトデー直前の休日。

ミッドチルダ中央の繁華街に、2人の男性の姿があった。

フェレットみたいな眼鏡の優男が、黒ジャケットとコーデの男性に話しかける。

「おい、クロノ……」

「なんだ、ユーン……」

「お前の妹は、なんつーお返しを要求してくれてるんだよっ!？」

「知るか」

「お前だって責任感じて来てくれたんだろっ!」

「いや、違うぞ？ 僕も、ちょうどそろそろ用意しなくちゃいけないかな、と思っていただけで」

「……まあ、いいけどさ。1人で選ぶのも大変だし」

「それには同感だな。3人寄ればトリプルブレイカー——とも言おうしな」

「ボクとお前、2人しかないけどね……って、おいクロノ、あそこに立っているのって……」

まるで川の中州。この人混みが嘘のようにぽっかり空いた路上で、存在感のあるたくましい獣人が、人気スイーツ専門店が集まるビルを見上げていた。

「ザファイーラ!？」

獣耳の男性がゆっくり振り返る。

「ユーノ・スクライアにクロノ・ハラウンか……」

「こんなところで会うなんて奇遇……というか一体何を？」

「ああ、ホワイトデーのお返しを買いにな」

「ザファイラが!？」

「君にしては珍しいな。これまで買ったことなんてないんじゃないか？」

「ああ——」

基本、犬だと思われているので、チョコをもらうことが少ないのだ。もらっても、はやてさんがクツキーなどを焼いてお返ししてしまう。

「それがどうして?」

「実は、道場の教え子たちからチョコをもらってしまつてな」

「あく」

納得である。

八神家道場——とはいっても、実質ザファイラの道場。であれば、はやてさんではなくザファイラがお返しを用意する——というのが筋というものだろう。

流星の盾の守護獣も、子供たちの笑顔には勝てないのだ。

「——それで買いに来たのだが、どこで、何を買ったらいいいのかわからなくてな」

シヤマルメモはあるのだけど、聞いたことのないお店ばかり。どうにか現地まで来たものの、自分と周囲の雰囲気の違いに、戸惑っていたらしい。

クロノさんが小さく嘆息した。

「まず、その格好がマズいだろ」

「そうなのか？ 私としては、ブランドスーツとやらを買うのに普段着ではマズいと思ひ、騎士服を着てきたのだが……」

確かに正式な服装ではあるのだけど、手の甲を覆う銀のガントレットといい、今にも戦いに赴きそうな格好だ。

「シグナムやヴィータだって、普段はもっとラフな格好をしているだろう？」

「……一理ある。トレーニングウェアでよかったということか」

「いや、それもちよつと……」

基本、狼フォームのザフィーラは、衣服に対する優先順位が低いのだ。

ユーノ司書長が柔らかい笑みを浮かべる。

「まあ、しょうがないよね。ボクだって普段はこんなところに来ないし。服装にこだわらなくていい無限書庫や遺跡の中の方が、よっぽど気が楽だよ」

「あと、フェレットの時とかな」

「そうそう——って、お前はまたそういうことを……って、ん、んんっ？ あ、ああっ！
そっか、それだよクロノっ!!」

突然、ユーノ司書長の全身が緑の魔力光に包まれる。

「久しぶりのフェレットモードで見参！」

「いきなりどうした？ やっぱり、そっちが本性だったのか」

「ちつがーう！ ザファイラも子犬フォームになって、クロノの使い魔——ということにして店に入ればいいんだよ」

ザファイラは感心した表情で、フンフン頷いている。

「クロノも別にいいだろ？」

「構わないが……」

「何だよ？」

「いや、アリだな、と思ってさ。それに小動物を連れていると女性にモテるしな、僕にとっても悪くない」

「おーい、エイミイさんとフェイトに連絡するぞー」

「そんなことをしたら、君のフェレット時の悪行を本にして無限書庫に寄贈するけどな」

「悪行とか言うなよおお!!」

フェレットと人間の取っ組み合いを横目に、ザファイラも久しぶりの子犬フォーム。

「——では、よろしく頼む」

まずは、ザファイラの分の限定スイーツを購入。一旦、店の外に出る。

「まさか、こんなにおマケしてもらえるなんて……」

クロノ提督が驚きのあまりよろけた。

「だから、小動物に姿を変えてマスコットになれば、シャワーシーンでハブられることもないって言っただろ？」

「そんなこと言ったか？ 誰かと間違えているんじゃない——」

店の外に出ると、また、どこか見覚えのある背中が、キヨロキヨロ不審な動きを繰り返している。

「あの赤髪って……」

「ああ、エリオだ。おおい、エリオっ！」

赤いツンツン髪の少年が振り返る。

「え？ あつ、クロノさんっ!? どうしてここに。それに、子犬フォームのザファイラさんに、えっと、そっちのフェレットは……もしかしてユーノ先生ですかああ!？」

若き竜騎士は目を丸くしている。

「はは、そういえばこの姿で会うのって初めてだったりするのかな？」

「はい、初めてです。顔だけフェレット——とかはありましたけど」

「あはは、あつたね、そういうのも」

六課時代のイベントだ。

「なんていうか、フェレットモードのユーノ先生って、いつもより気配が自然体感じられますね」

「ユーノはこつちが本性だからな」

「ええつ、そうなんですかああ!?!」

「ちつがーう！ クロノ、お前は何度言えばわかるんだよ!!」

「何だ、ユーノ・スクライア。お前は高町なのはの使い魔ではなかったのか？」

「ザファイラまでええ!?!」

そんな、鉄板のやり取りを繰り返したところで、エリオが首を傾げた。

「珍しい組み合わせだとは思いますが、みなさん集まって何を？」

クロノさんが、代表してホワイトデーの話を持ち出すと、エリオは「みなさんもでしたか!」と、安堵の表情を浮かべた。

「実は、キャロにいつもと違うお返しをしようと思ったんですが、何を買ったらいいか

迷ってしまつて……」

「キャラなら何でも喜びそうだけどね」

「本心はわからない、だろ？ 何をあげても喜ぶだろう——なんて考えるとところが男性の浅はかさなんだよ」

「ううっ……お前そういうところホント豆だよな……」

「ま、そんなダメな男どもでも、4人もそろえば少しくらいは役立つだろ。どうだいエリオ、僕らと一緒に行くか？」

「いいんですかっ!？」

「ああ。僕にとつても君とキャラは、甥と姪みたいなものだからね」

フエイトママの息子なら、自然とそういう関係性になるのだろう。

「そーいやそーうだつたなあ〜」

「なのはの使い魔だつた君も、ある意味そういう関係なんだぞ？」

「もう突っこむのも面倒なんだけど、確かにそーうかもなあ〜」

わたしとの関係性も同様だ。

「それで、キャラへのお返し——一応、何か考えてはいるんだろ？」

「はい。クツキーとかじゃなくて、アクセサリーの類にしようかなつて」

「ああ、いいんじゃないか。ホワイトデー限定のペアネックレスやペアリング辺りがオ

ススメだな」

「おまつ、本当に詳しいよな、そういうの……まあ、こういう時は頼りがいがあるけどさ……」

「洋服もいいぞ?」

ザフィーラが、早速さっきの反省を活かしている。

「あく、それもいいんですよね! キヤロ、大人っぽい服が欲しい——みたいなことも言ってたんで」

キヤロの気持ちもわからないではない。

いつもルルーに「チビっ子、チビっ子」とからかわれているからだ。

「まあ、あとは実際に見て回るしかないだろうな。エリオの予算もある。足りなかったら僕が出してもいい」

「ああ、その時はボクも協力するよ」

「私も構わない」

エリオは「みなさんありがとうございます!」と、頭を下げた。

「となると、だ。どうせエリオ、君も使ったり食べたりするんだろ? 僕からは入浴剤とスニーカーどつちがいい?」

「あ、ボクにも教えてもらえるかな」

「私も頼む」

みんな被らないですむ。

「はい。でしたら、フェイトさんやなのはさん、それにはやてさんたちの分も、協力して考えませんか？」

「それはいいかもな」

「だったら、ミウラとヴィヴィオの分も頼んでいいか？」

すると、ユーノ司書長がひとり眉間にシワを寄せた。

「あ、あれっ？ ちょっと待ってよみんな。なのはのどこも、スイーツで済ませるつもりなの??」

今度は、逆にクロノさんが眉根を寄せた。

「なんだ、あまり高価な代物だと、却って気を使わせるぞ？」

「そうなんだけど、そうじゃないっていうか——」

ユーノ司書長は「これを見て」と、鞆から雑誌やカタログを取り出した。

「こつちがなのはで、こつちがフェイト、それでこのメモがヴィヴィオからのリクエストなんだけど……」

「おいおい、いくらなんでも、こんな大物だなんて聞いてないぞ。どうしてこんなことに……」

「それはこっちの台詞だつて!! お前の妹なんて新車だぞ、新車っ! つていうか、どうしてボクばかりこんなスゴいお返しになってるんだよおお——っ!!?」

クロノさんが考える目をして、

「使い魔だからとか?」

「ちっがーう!」

「……いえ、それもあながち間違いではないかもしれませんが?」

「エリオまでええ——っ!?!」

エリオが慌てて手を左右に振った。

「そういうことじゃなくて、実際に使い魔ではなくても、ユーノ先生は、なのはさんたちにとつて、それくらい気心が知れた仲、気を使わないでいい相手——つてことじゃないでしょつか?」

「冗談を言い合えるほど親しい間柄——ということか」

「はい、そうです、ザフィーラさん!」

「……そ、そう言われると、悪い気はしないし、ちよつと……いや、かなり嬉しいような……。でも、なのはの場合、冗談なんだか本気なんだかわからない時があるんだよね」

「確かになく。それに、このオープンレンジって、冗談で口にしたとしても、なのはが本気で欲しい家電なんじゃないか?」

「やっぱり、クロノもそう思う?」

「だが、わかりやすくはある。下手に悩む必要がない」

ザフィーラ的にはアリらしい。

「それは、そうなんだけど……」

「でも、そんな風に欲しい物を素直に言ってもらえると、僕らも楽ですよ」

エリオが少しだけ羨ましそうに呟いた。

「だったら、こういうのはどうだ?」



3月14日——ホワイトデー。

ナカジマジムに、珍しい4人組が訪れていた。

「ユーノ司書長にクロノ提督、それとザフィーラにエリオまで、一体どうしたの?」
「からい、」

「私たちまで呼ばれたんだけど……」

「お兄ちゃん、何かあったの?」

なのはママとフェイトママまで。

ある意味、かなり豪華なメンバーだ。

コロナやリオはまだしも、ジムのみんなが緊張してしまうのは無理もない。

ユーノ司書長が、眼鏡をキランと輝かせて叫ぶ。

「ヴィヴィオ、これがボクたち4人のホワイトデーのお返しだああ！ ザフィーラー！」

「おおー——」

わたしたちが学校に通っている間に搬入したのだろう。白い布をはがすと、下からトレーニングマシンが4台も姿を現した。

「ええええええ！ まさか、ホントに買ってくれたんですかああ——っ!!?」

「しかもこれ、ちゃんとした業務用ですよっ!!?」

ミウラさんも驚いている。

「流石に新品とはいかなかったけどね」

「近々、廃艦予定の船があったから、払い下げてもらったのさ。新進気鋭、U15ワールドチャンピオンのいるナカジマジムだ——って話したら、喜んで手続きしてくれたよ」

「中古品とはいえ本局で使っていたマシンですから、正直、僕がいる自然保護隊で使っているやつよりいいやつですよ」

エリオが苦笑している。

「いいの、クロノ君？」

「もちろん。これまでだって大手ジムに払い下げたことはあったしね」「だったら、せめて代金だけでも——」

ジムの責任者としては心苦しかったのだろう。しかし、そんなノーヴェの台詞を遮ったのはザフィーラだった。

「ミウラも世話になってるしな。これからも、うちの教え子たちが成長し、世話になることがあるかもしれん」

「それは……」

「むしろ、うっかり口にしてしまい、ヴィータの一枚噛ませろという申し出を断る方が大変だった」

「あはは」

それは大変そうだ。ヴィータさんがガミガミとザフィーラに文句を言う様子が目に浮かぶ。すると、

「師匠——」

ミウラさんが「ありがとうございますっ！」と言って抱きついた。

いつもと変わらない表情のザフィーラだけど、尻尾がブンブン左右に揺れているのは内緒にしておこう。

「それで、なのはの分がコレね——」

ユーノ司書長が「どっこいしょ」と、ダンボールを取り出した。

「えええ、ウソおお!? 本当にオーブンレンジ買って来てくれたのおお〜っ!?」

「まあ、たまにはね。というか、4人もそろろうと、下手な限定スイーツ買うよりも安くついたりして」

「さすがユーノ君っ!!」

なのはママが勢いよく抱きついた瞬間、ピカッ——とフェレットに変身する。

流石はユーノ司書長。

わかってるなあ。

「やっぱり、なのはの使い魔でいいんじゃないか?」

「だから違うって言ってるだろおおっ!?」

「にははあ〜」

ユーノ司書長とクロノ提督のやり取りに笑いが起きる。

残すはあとひとり。

全員の視線がフェイトママに集まった。

「えっ、えっ!? もしかして本当に私の新車まで——」

「つて、フェイトママ新車なんて頼んでたのおお——っ!?」

そっちの方が驚きだ。

ジムの中がざわつく。

フエイトママって、何気にカッコイイ——デザインのいい自動車を選ぶから、高いんだよね。

すると、エリオが苦虫を噛み潰したような顔で、

「その、僕はプレゼントしたかったんですが……」

フエレットの司書長が、喧嘩していたクロノさんの頭に素早く駆け上がった。

1人と1匹は、仲良く両手をクロスする。

「それは流石に」

「絶対ムリっ!」

「え〜」

みなさん、ホワイトデーは実現可能な範囲にしときましようね。

高町ヴィヴィオのトモコレやってみた 1日目

いつものナカジマジム。

練習の休憩時間。

わたしは、スポーツバッグから携帯ゲーム機を取り出すと、隣で休んでいるリオとコロナに向かってこう話しかけた。

「わたし『トモダチコレクション』をやってみようと思うんだけど……」

リオが「え〜」と声を上げる。

「わざわざ『トモコレ』で遊ばなくても、ヴィヴィオ友達多いじゃん。——アインハルトさんやリンネさんと違って」

「!!?」

1人でズドンズドン——サンドバッグを叩いていたアインハルトさんが、驚愕の表情で振り返る。

さらに、1人でシャドーボクシングをしていたリンネさんが、鏡の前で崩れ落ちた。

ちなみに、学校の用事でユミナさんがまだ来ないため、フーカさんは受付で応対中。
……ていうか、

リンネさん、最近いつもうちにいるな。

もう、ジルコーチと一緒にうちのジムに移籍すればいいのに……。

——と、まあ、そんなことはさておき、

「リアルとゲームは別物だし、コレはコレで面白そうかなって」

「あく、確かに、トモコレって色んな楽しみ方ができるしね」

「とりあえずやってみたら？」

「だね」

コロナの後押しもあり、わたしは早速電源ボタンをポチツとな。

ここで、一応紹介しておく、『トモダチコレクション』とは、

『プレイヤー自身のMiiや友人・知人などのMiiを登録し（100名まで）、架空の島のマンションで生活するMii達の生活を観察したり、干渉して楽しむゲーム』

ウィキペディアより

というニンテンドーDS用のゲームソフトである。

以前から興味はあったのだけど、偶然手にするチャンスがあったので、これを機にやってみようかな——と思い立ったのだ。

なので、ここからは実況。

高町ヴィヴィオのトモコレやってみた——始まります。



「なるほど、海の真ん中に浮かぶ小さな島が舞台なんだね」

わたしは〈V i V i 島〉と名づけてゲームをスタート。

最初に M i i (自分の分身となるキャラクターで、アバターみたいなもの) を作る。

「性別は女の子と……」

「そのタッチペン、ちょくちょくと、待ったアアアア……っつ!!」

「ひっ!?!」

「ど、どうしたのリオっ、いきなり大きな声出して」

リオはキラリと八重歯を光らせると、わたしとコロナに向かって重々しい口調で言い

放った。

「そのままプレイしても面白くないと思うんだよね。終わりもないし」

「そうなの？」

「二応、誰かが結婚するとスタツフロールが流れるんだけど、同性婚ないからね、このゲーム。つまり、ここにいるメンバーをみんな登録したとしても、決してエンディングにはたどり着けない」

「あゝ」

女子ばかりだからだ。

「しかも、恋人関係まではいっても、そこから先、中々結婚しないことも多い」

「んゝ」

どこかで聞いたような話。

「そこであたしは考えました。最初の住人ヴィヴィオを〈ViVi島〉唯一の“男性”キャラにして、あたしたちの分身のうち、誰が最初にヴィヴィオと恋人関係になるかを競う——って勝負はどう？」

「どうと言われても……」

「その勝負、受けて立ちましょう！」

ババア〜ンと効果音でも鳴らしたかのように、いつの間にかわたしの横でアインハルトさんが正座待機しててうう〜っ!?

さらに、

「一番の幼なじみとしては、負けられない戦いがここにある!」

「ちよ、コロナまでどうしてそんなにやる気なおお!?!」

「フッフッフ、初恋は実らないって言うからねっ!」

「リオ、その台詞はおかしいから!」

「ぶっちやけ、こんな勝負でもない限り、アインハルトさんには勝てないしねええ!」

「あ〜」

それには激しく同意。

すると「あの〜」と、控え目な声が聞こえてきた。

「全員の分身を登録すると、すごい時間がかかりませんか?」

「——あ、ミウラさんもいたんですね」

「最初からいきましたよおおっ!?! そりゃ、文章にすると影薄いですけど、ちゃんと一緒に練習してたじゃないですかああ——っ!」

「冗談ですよ、冗談。高町家ジョークです」

「え〜」

貴重なミウラさんのジト目。

ちよつとゾクゾクするかも。

「でも、ミウラさんの言う通りかもですね。流石に知り合い全部を入れるほど時間ないですし……」

あくまで休憩時間。

後から追加する——という方法もあるけれど、リオの言う勝負にした場合、できるだけ条件は公平にしたい。

つまり、今、この場で入力を終えたメンバーのみで競いたいのだ。

「では、私とフーちゃんは入れるとして、人数を絞って登録する——というのはいかがでしょう?」

いつの間にか——リンネさんがわたしの真ん前に陣取って、ゲーム機の画面をのぞきこんでいた。しかもキラキラした目で。

アインハルトさんと似ているのでわかるのだけど、これはものすごく期待している時の目だ。

全身から発するワクワク感。

ああ、昔のリンネさんだったら「そんなゲームに興味はありませんから」と、もつと

ストイックで格好よかったのにいい——っ！

と、心の中でもだえていると、わたしの肩をリオが肘でつつく。

「どしたの？」

「あつちのドアの陰——」

「あゝ」

ノーヴェが仲間になりたそうにこちらを見ている！

仲間になりますか？

はい／いいえ

わたしはノーヴェにも聞こえる声で伝える。

「とりあえず、今、ここにいるみんなは入れる——ということだ」

会長としての体面もあるのだろうけど、ノーヴェも早くこっちおいで。

「あと、なのはママやフェイトママも加えていいかな？」

みんなが頷いてくれる。

他にも、時間が許す限り〈V i V i 島〉の住人を増やすことに決定した。

「まずは、わたしの分身を登録しないとねええ——って、リオおお！ 勝手にわたしの身長を一番低くするのはやめてくれるかな」

「え〜っ！ いいじゃん、本当にちっちゃいんだし」

「リオよりは大きいよ、胸と一緒にで」

「まだ同じくらいでしょおお——っ！」

「まあまあ、それを言い出したらみなさん小さくて可愛らしいですから」

「アインハルトさんも、どちらかと言えばこっち側ですからね？」

「え？」

アインハルトさんが「ずくん」と落ちこんでいる間にゲームを進める。

「生年月日かあく。そういえば、誕生日知らない人結構いるかもだよ〜」

自分たちだけ正しい生年月日を入れると、勝負としては、公平性に欠けてしまうかもしれない。

「だったら、まずは生まれた年をみんな一緒にするってのはどう？」

「なるほどお〜」

流石はコロナ。実に公平だ。年齢で左右されるのはわからないけど、これでより勝負の行方がわからなくなる。

「あとは誕生日なんだけど……」

「ほらよ、コイツで決めるといい——」

「ノーヴェエ？」

さり気なく寄ってきたノーヴェエが、わたしに向かって、12面と30面のサイコロを放り投げる。

「こんなこともあろうかと用意しておいたかいがあつたな」

「こんな、こと……？」

「どんなことがあつたら、わたしがトモコレで遊ぶことを想定できるのか……」。

もしかしてノーヴェエも……」。

いやいや、気にしたら負けだ。

「ここは素直に、

「さつすがノーヴェエ、ありがとう！」

「我らが会長は、あばよ——みたいな感じで片手を上げて去っていく。」

「もうこつちにいればいいのに……」

「私と同じ匂いがしますね」

「リンネさん……同じ匂いって……あ、でも……」。

●『INNOCENTS』のノヴエ（スバルさんが、元々は内気で泣き虫な子供だったことから、ノヴエも普通に生活していたら、あんな性格になっていたかも） ↓
 『Strike』時代 ↓ 現在

●孤児院時代のリンネ ↓ 『Vivid Strike!』時代 ↓ 現在

——つて考えると似てるかも。そういえばアインハルトさんも同じ匂いがしますね」
 「あう」

そんなわけでサイコロを振る。

わたしの誕生日は12月8日に決定。

ここで24日や25日になっていたら、流石に出来過ぎというものだろう。

「最後は性格の入力だね」

トモコレにおける性格は、5種類の質問に答える形で決定する。

どちらに偏っているか、8段階から選ぶことで、16タイプの性格に分岐するのだ。

①行動は？

と思ったのだけど、アインハルトさんが目を逸らしたので、ここはリオの意見を採用する。

「じゃ、言葉はマイルド——」

「いやいや、かなりストレートだって」

「いやいや、そんなはずは……ミウラさんもそう思いますよね？」

「……」

ミウラさんもそつと目を逸らした。

あれ〜？

「表情はフェイトママみたいにクー」

「フロンティアアジムでは、高町選手は表情が豊かだと噂になっていました」

「……」

おかしい。

「だったら、考え方は慎重——」

「ちよつと楽観的などこあるよね」

「は、はつきり言つて……」

「高町家の中では常識人だと思ふよ？」

コロナまでええ——っ!?

「何そのうちの評価!? しかも常識人といいながら、2段階も変わってる寄りなんだけど! もう、これじゃわたしと全然違う、別人だよお——っ!」
とはいえ、みんなの意見なので、仕方なく参考にして登録。
結果。

●ノリ系

●第一印象

気さく

●特徴

直感&勢い重視

●ガンガン型

元気のかたまりタイプ。思いつきでなんでもやる。何かやりだしたらだれにも止められない。

「だいたい合ってるっ!? ナニコレ、どういうことっつ!!?」

「ヴィヴィオさん本人が否定しても、客観的に評価してしまう……恐ろしいゲームですね……ゲームとは思えません……」

わたしはちよこつと心に傷を負う。

けれど、ママから受け継いだ不屈の魂（こころ）で立ち上がると、チュートリアルを兼ねて次の住人を作成する。

「あゝ、1人じゃ寂しいから友達が欲しいってことかあゝ」
気持ちはわかる。

すると、次は自分を登録して欲しいと、コロナとリオが猛烈アピール。

「ウサギは寂しいと死んじやうって言うしね」

「ヴィヴィオも寂しいと死んじやうって話だしね」

「じゃ、アインハルトさんで」

コロナが「ぐはっ！」と倒れこむ。

「ううっ、もうアインハルトさんに負けちゃったよ……」

「コロナ、コロナああ——っ！」

「でも、アインハルトさんになら負けてもいいかな……」
ガクッ。

「コロナ、コロナああ——っ！」

「あゝ」

そんな2人の寸劇を眺めながら、

「じゃ、アインハルトさんにしますね〜」

「ありがとうございます」

「わかつてはいたけど、幼なじみとしては複雑な気分かも……」

「あたしたち3人で『ヴェリコ隊』なのに……」

懐かしいなあ、それ……。

「まあまあ、2人ともアインハルトさんの次に登録するから待っててよ」

「割りこむような形になってしまい、申し訳ありません」

「「いえいえ」」

と、丸く収まったところで早速入力。

「えっと、アインハルトさんと言えば、キビキビしてクールで慎重で——」

アインハルトさんは「ふふ、そんなことありませんよ」と否定しつつも、かなり満足そうだ。

「最後、はつきり言って………変わってる」

「変わってるっ!?!」

アインハルトさんが助けを求めするように周囲のみんなを見る——が、全員が目を逸ら

した。

「わ、私も少しは世間とズレているなく、とは思っています。いくらなんでも変わっているMAXというのは……」

「あ、性格が出ましたよ。でも、クールじゃないんだ……」

「ほ、ほら、やっぱり違つて」

「ドライ系、自信家、負けず嫌い」

「……」

「ひとりで行動するのが好きなタイプ。ワイワイさわぐことはないけど、内に秘める力はけっこうスゴイ——だいたい合つてるような気がするんですけど……?」

「……お、恐ろしいゲームですね」

アインハルトさんが、DSの裏側をのぞきこんだ。

「いやいや、デバイスとつなげて改造してるとかないですから」

そして、登録後の最初の画面。

アインハルトさん（分身）は、部屋の真ん中でぽつんとひとり体育座りをしていた。

全員の視線が、自然とアインハルトさんに向けられる。

「うっ……うっ、ヴィヴィオさんと会う前は毎日こんな感じでしたああ!」

「こんなところでカミングアウトしないでいいですからああ——っ!! り、リオ、ほら、ポ

ケてボケて」

「え、なに、そのフリ。えっと——じゃ、ボケじゃないけど、アインハルトさんの分身って、最初からヴィヴィオの友達ポジからスタートですよ。なんで、あたしたちより、ちよ〜有利！ うらやましいっ！」

「それが正妻力だからああ!!」

「ヴィヴィオの口からはつきり言われると、誰も突っこめないんだけど」

そんなこんなで、しばらくチュートリアルで住人の悩みを解決。すると『市役所』がオープン。

これで、他の住人の登録もできるようになった。

「今度こそ、一番の幼なじみ梓——ということとでコロナを登録するね」

「ふっふっふ、アインハルトさん、勝負はまだまだこれからですよ！」

今日のコロナは何気にアグレッシブだなあ〜。

サイコロを振る。

「おっと、誕生日が10月10日に」

縁起がいい。ゾロ目だ。

「創成神が降りてきたよ〜」

「何そのゴレム神。スゴそうなんだけどおお!?」

イメージ的には、遊戯王の『創成神（ザ・クリエイター）』みたいな感じらしい。

性格は、リオの提案もあり、ゆっくりをMAXなど、わざと極端に偏らせてみた。

「クール系。特徴は、控えめ、注意深い、しぶとい、論理的、口調が淡々としている」

「しぶとい……」

アインハルトさんとの試合内容を思い浮かべて、全員が「あ〜」と納得。

「もじもじ型。ガマン強いタイプ。自分より他人を大切にし、争いごとはさける。でも

ガマンしすぎるとバクハツすることも」

「バクハツ!?!」

「……しそくだよね」

「……否定はしません」

「……しないんだ」

コロナも思うところがあったのだろう。

「それにしても不思議ですね。あんなに極端にしたのにだいたい合ってるなんて……」

「だからアインハルトさん、クリスを見てもゲームデータを操作してませんって」

そして、次の住人。

「お待たせしました。リオの番——」

「ちよつと待ったああ——っ！ 次はゴライアスにしない？」

「なんで、ゴライアスっ!？」

「オチを期待して」

あゝ。

「ねえ、ねえ。1人くらいそういうキャラも登録しようよ〜」

「うゝん、他に登録すべき人がいっぱいいるとは思うけど……どうしよう？」

コロナを始め、みんな苦笑しながらも許してくれた。

なので、こんな時に、こんな場所で『ゴライアス女の子バージョン』が、緊急爆誕！

「クール系、しーん……型。」

かぎりなくひかえめなタイプ。思っていることが顔に出ることもなければ口に出すこ

ともほとんどない。でも芯は強い」

「うわ……」

なんてこつたい。

「ゴレム対応とは、地球のゲームもやりますね！」

アインハルトさんが『トモダチコレクション』を崇めそうな勢いで感心している。

そんな対応してませんからああ！

とはいえ、オチとして適当に入力したゴライアスは、限りなくゴーレムらしい性格になってしまった。

「提案しておいてなんだけど、あたしもビックリだよ……」

続けて、そんなリオを改めて登録する。

「性格が出たよ。直感&勢い重視、大雑把、楽観的、熱しやすく冷めやすい……うん、リオっほいかも」

「あれ？ これってヴィヴィオと一緒にノリ系ガンガン型じゃん！」

「いやいやいや、わたし大雑把じゃないし、まさかりオと同じ性格なんて有り得ないよお」

流石のトモコレも、ついに間違えが発生したようだ。

するとコロナが、

「でも、一番の幼なじみから言わせてもらえば、2人とも似たところ多いけどね。だから私たち友達になれたんじゃないかな？」

「あうち」

「おっと、トモコレだと、同じ性格の方が相性よくなるって話もあるし——あたしが優勝の大本命なんじゃ！」

「うーん、まあ、それはそれで……」

「ゴライアスよりはいいかなあ〜。」

「とはいえ、」

「アインハルトさん、コロナ、負けないでねっ!」

「ちよ、ヴィヴィオ〜っ!?!」

そんな感じで、この後も順番に登録。

けれど、ここまででわかるように、みんなの性格判定はだいたいピッタリ。なので、この先はダイジエストでお送りします。

「ノーヴェ、厳しいリーダータイプだつて。割と最近のノーヴェかも」

「昔はゲーセンで台パンしてたのにね〜」

「してねええよっ!」

「なのはママとわたしの性格が一緒かあ〜」

「これが高町家の遺伝子か!」

「フェイトママはアインハルトさんと一緒」

「色んな意味で納得」

「リオく、シャンテのニックネームに『こまちちゃん』って入れるのやめよーよ」
「気持ちわかるけど……。」

「ちよ、またリオく、さり気なくチンクの身長を一番低くして。そういうのはダメだつて」

「じゃ、あたしとヴィヴィオを一番低くする？」

「……チンクでお願いします」

「シグナムさんの誕生日はつと……4月、4日……」

「コレが持つてる——というやつですね」

「ヴィータさんの性格は、ノリ系、メラメラ型、つっぱしる熱血タイプ。面白いことがあると、まわりの人をまきこんで楽しむ。多少強引つと。ミウラさん、どうですか？」
「だいたいそんな感じですよ、はい」

「うわ、チャンピオン——ジークさんの性格が、ナゴミ系、ふわふわ型に！」

第一印象……おだやか。

特徴は、マイペース、ナイーブ&デリケート、素直、気配り上手、みんなに優しい。

究極のいやし系タイプ。楽しいことはすぐに顔に出る。イヤなことともすぐに顔に出る——つて流石にこれはちよつと……」

「あの、これって、普段のジークさんではないでしょうか？」

「あゝ、そう言われると……」

確かにそんな感じかも……。

トモコレ恐るべしっ！

というわけで、

● 〈V i V i 島〉住人名簿（登録順）

① ヴィヴィオ（唯一の男性）

② アインハルト（チュートリアルにより、最初から友達）

③ コロナ（誕生日がいい感じ）

④ ゴライアス（女の子・オチー）

- ⑤ リオ（ヴィヴィオと性格が一緒、有利？）
 - ⑥ ノーヴェ
 - ⑦ ミウラ
 - ⑧ ルーテシア（年上友人代表）
 - ⑨なのは（ヴィヴィオと性格が一緒、やっぱり有利？）
 - ⑩ フェイト
 - ⑪ はやて
 - ⑫ シヤンテ（教会代表・こまちちゃん）
 - ⑬ チンク（ナンバーズ代表・一番ちっちゃいキャラ代表も兼任）
 - ⑭ ザファイラ（メス・オチ2）
 - ⑮ シグナム（ザファイのついで1・もってる女性）
 - ⑯ ヴィータ（ザファイのついで2）
 - ⑰ シヤマル（ザファイのついで3）
 - ⑱ ジーク（ストライクアーツの選手代表）
 - ⑲ アルフ（忘れてて慌てて入力）
 - ⑳ リンネ（忘れていたわけじゃないよ？）
- ☒ フーカ（リンネさんの要望で締め。たぶんリンネさんが友達になりたいんじゃない

かと……)

以上20名による、わたし——高町ヴィヴィオを巡っての、友情・恋愛バトルが、今、小さな島で幕を開けるっ！

わたしと一番に恋人になり、優勝の栄冠を手に入れるのは、果たして誰なのか!?

次回に続くうう！

高町ヴィヴィオのトモコレやってみた 2日目

●〈V i V i 島〉住人名簿（登録順）

- ①ヴィヴィオ（唯一の男性）
- ②アインハルト（チュートリアルにより、最初から友達）
- ③コロナ（誕生日がいい感じ）
- ④ゴライアス（女の子・オチー）
- ⑤リオ（ヴィヴィオと性格が一緒、有利？）
- ⑥ノーヴェ
- ⑦ミウラ
- ⑧ルーテシア（年上友人代表）
- ⑨なのは（ヴィヴィオと性格が一緒、やっぱり有利？）
- ⑩フェイト
- ⑪はやて
- ⑫シャンテ（教会代表・こまちちゃん）
- ⑬チンク（ナンバーズ代表・一番ちっちゃいキャラ代表も兼任）

⑭ ザファイラ（メス・オチ2）

⑮ シグナム（ザファイのついで1・もってる女性）

⑯ ヴィータ（ザファイのついで2）

⑰ シヤマル（ザファイのついで3）

⑱ ジーク（ストライクアーツの選手代表）

⑲ アルフ（忘れてて慌てて入力）

⑳ リンネ（忘れていたわけじゃないよ？）

☒ フーカ（リンネさんの要望で締め。たぶんリンネさんが友達になりたいんじゃないかと……）



ジムでの練習後、わたしは改めて携帯ゲーム機を開いた。

周囲にはいつもの面子。

隣は、正座待機のアインハルトさん。

トモコレ経験者のリオ。

あとは、コロナにミウラさん。

それに、なんかもう最近いつもいるリンネさん。

最後に、会長業務を放つては、ちよくちよく顔を出すノーヴェ。

ちなみに、ユミナさんとフーカさんは今日の分の伝票を整理中。

「そういえばリンネさん、今日はまだ帰らなくて平気なんですか？」

いつもならもう迎えるの車が来る時間だ。

「はい。今日はフーちゃんの家に泊めてもらおうと連絡済みです」

準備万端だった。

というわけで、高町ヴィヴィオのトモコレやってみた2日目——始まります。



「はい！ 記念すべき最初のお悩み相談の相手は——なんと、なのはママの分身っ！

なんだけど……台詞が『思いつきで突っ走るタイプです』って……」

「なのはさんらしいね」

「あはは……」

つき合いが長いだけあって、コロナはよくママの性格を心得ている。

「ヴィヴィオもただけどね」

「ん？ んん〜っ」

まあ、ママと一緒にならいつかあ〜。

はて？

「ねえ、リオ。はやてさんの分身が、第一声でわたしとの相性について尋ねてきたんだけど……」

● 相性バツチリ！

● ふつうかな

● 合わないかも……

の3択である。

「あく、えつと確か『相性バツチリ』って答えると、表には出ないけど“友好度”みたいなのがアツプするんだよ」

「へえ〜。じゃ『相性バツチリ』にしようつと。これから先、同じ質問されたら、みんな『相性バツチリ』って答えるね」

その方が公平だし、何よりゲームの進みが早くなるだろう。

画面を見てコロナが頷いている。

「これ、早くも先手を打ってきたところが八神司令っばいよね」

「はやてだけに——ですか？」

全員で一斉にアインハルトさんを見る。

「……」

「あう、すみません、すみませんでしたああ!!」

いえいえ、貴重なアインハルトさんの霸王ギヤグを聞いて満足でしたよ。

「ちよ、リオ！ シャンテの部屋をタッチしたら、名前が『こまちゃん』になってるんだけどおお!」

「あく、ニックネームで呼ばれるからね」

前回、リオがシャンテに『こまちゃん』なんてニックネームをつけるから……。

「シャンテの『シャ』の字もない……。しかも、いきなりフォーカさんと友達になりたいとか言ってるし」

わたしはどうした？

いつも『陛下』とか言ってるくせに。

あ、わたしのニックネーム『陛下』でもよかったかも……。

「ふっ、それは私とフーちゃん（友情）への挑戦とみました！」

「いやいや、リンネさん落ち着いて」

「合意と見てよろしいですね？」

「いやいや、リオもメダロットみたいにあおらないでええ！ 友達になるの、失敗する可能性だってあるんだか——あ、成功しちゃった」

シャンテとフーカさんの組み合わせ。

チュートリアルで友達になったわたしとアインハルトさんを除けば、友達一番乗りだ。

「……次の試合で潰します」

「シャンテ逃げ……あく、でもいつか。シャンテにはいい薬になるしね」

色々と。

「ねえリオ、チンクの背が低すぎるんだけど……。何このチビっ子。最初に設定したときより小さく見えるよっ！」

ちなみに、わたしの身長は少し伸ばしたので違和感はない。

「まあまあ、カワイイし、いいんじゃない？ 眼帯はないけどね」

「それは……まあ、同意するけど」

実際、チンクはカワイイと思う。

「——つて、チンクがはやてさんと友達になりたいって言ってきたよ!？」

意外な組み合わせ……でもないのか。

「ミウラさん。はやてさんつて、チンクのこと可愛がりそうですよね」

「はい。ヴィータさんにもよくスリスリしてますし。ボクも……その、時々やられますから」

「あゝ」

やっぱり……。

案の定、友達になるのは成功。

ちなみに、成功報酬で胃腸薬をくれたのがチンクらしい気配りというかなんというか……。

「あ、ヴィータさんが、はやてさんと同じ質問してきたよ?」

「ヴィータさんですから」

ミウラさんの台詞に納得。

『ヴィヴィオはアインハルトの部屋に出かけています』——かあ、えらいぞ、わたしいいー!」

「おーい、ヴィヴィオ、鼻肩はなしだからね」

「リオ、いきなりジークさんと友達になりたいだなんて——消されるよ?」

「消されるって誰にっ!」

「ヴィクターさんに……」

「何でっ!」

すると、これまで黙ってゲーム機を見つめていたリンネさんが口を開く。

「確かに、ヴィクターさんはジークさんのことになるかと怖いですが。わかりやすく言うと、ヴィヴィオさんの前でアインハルトさんの悪口を言うような感覚……でしょうか」
「え、ナニソレ、どうしよう……どうしてくれるんだああ、あたしの分身っ!?! はああ、失敗しろ、友達になるの失敗しろおお」

リオが一生懸命に念を送るけど、

「うん、成功した。おめでとリオ」

「オワター」

「むう、なのはママが、コロナと友達になりたいうって。もう、娘を差し置いてええ」
「まあまあ、ゲームだから、ね？」

当然成功したわけで、

「なのはママが失敗するイメージがわからない……」

「でも、なのはさんが友達になる時ってあれでしょ？」

「あ」

コロナの分身もボツコボコにされたのだろうか……？

「おっと、ミウラさんがアインハルトさんと友達になりたいうって——電源切ろう」

「ちよ、何ですかそれええ——っ!？」

「冗談ですよ、冗談。ほら——ウマクイツタヨ？」

「ううっ、絶対本気でしたよね！」

などとプレイしていると、いくつか悩み事に答えたことで、ViVi島に新しく『ラ
ンキング掲示板』が建設された。

これは、住人たちの様々なランキングが発表される——というもので、最初は『絶好調ランキング』というデータが揭示された。

『絶好調ランキング』

- 1位……シグナム 957ポイント
- 2位……はやて 851ポイント
- 3位……なのは 755ポイント

「この三強、わかる気がする……」

納得の組み合わせである。

ちなみに、

- 4位……リンネ 735ポイント

● 21位（最下位）……コロナ 114ポイント
でした。

リンネさんが勢いよく立ち上がる。

まるで、大きな大会で優勝した時みたいな喜びようで、

「私やったよ、フーちゃああ〜んっ!!」

『リンネ〜、何かあったんか〜?』

遠くから、微かにフーカさんの返事が聞こえてきた。
すると、

「ヴィヴィオ〜、私ビリなんだけどお!」

「コロナ、大丈夫だよ〜」

「うえ〜ん」

「お〜、よしよし」

「あつ、もしかしてアレじゃない?　なのはさんと戦ったから」

「あ〜」

どうやら、これがなのはママと友達になった代償だったらしい。

こうしてトモコレは続いていく。



「うわああく、アインハルトさんがチンクと友達になりたい——つて言ってますよおお!!? アインハルトさんの浮気者おお——つつ!!」

「ええええええええええつ!」

「——なんて、冗談ですけどね。アインハルトさんとチンク……何かこう性格とか、ちっちゃいとことか、通じる部分があったんじゃないですか?」

「そう言われると……つて、ちっちゃいとこつて何なんですかああ!」

「つて、あれ? 初めて友達になるの失敗しちゃった」

「ヴィヴィオさああん!」

「あつ、今度ははやてさんがシャンテと友達になりたい……つて、あれれえ? また失敗したんだけどおお!」

「シャンテさん、八神司令のこと苦手そうですから」

アインハルトさんが苦笑している。

「あゝ、わかる気がします。シスターのくせにアナキーな性格してますしね。はやてさんは好きで追いかけるのに、シャンテは逃げ回る——みたいな」

なのはママから逃げ回るヴィータさんみたいなものだ。

そういった意味では「本当は好き」——とか言ったら、2人から叩かれそうだけど。

「フェイトママまでチンクと友達になりたいかあゝ」

「チンク大人気だよね」

「うん。やっぱりちっちゃくすると人気出るとかあるのかな？」

わたしも身長一番低いままにしておけばよかったかも。

「うくん、そういうのは、ないはずなんだけどなゝ」

リオが小首を傾げている。

ちなみに、2人は無事友達に。

フェイトママ、よかったね！

「んゝ」

「どうしたの、ヴィヴィオ？」

「ねえコロナ、今度はシャマル先生がママと友達になりたがってるでしょ？」
「うん」

「そうやって、みんなどんどん友達のを広げてるんだけど、わたしの分身——アインハルトさんしか友達いないんだよね」

他にちつとも友達ができない。

「それって、もしかしてヴィヴィオが心の奥底で『アインハルトさんだけいればいいや』
と思ってるのか？」

「いやいや、流星にそんなことは……」

すると、アインハルトさんが、

「私は別に構いませんが？」

「じゃ、わたしもそれで」

「解決したああ!？」

今度は、アインハルトさんの分身が、ジークさんと友達になりたがっている。

「これはわかる気がします」

本人のお墨付き。

トモコレがスゴいのか、アインハルトさんの行動パターンが単純なのか。

「……つて、あ、また失敗しちゃった」

「ヴィヴィオさああんっ!!」

「え、ちよ、コレ、わたしのせいじゃないですからああっつ!」

握った拳でポカポカ叩いてくる霸王っ娘。

ナニコレ!?

お持ち帰りしたいっ!

「ヴィヴィオ、鼻血、鼻血……」

という話は置いて置いて、ことごとく友達作りに失敗しているところが「アインハルトさんっぽいなあ」と思うのは、わたしだけだろうか?

「……ね、リオ。ゴライアスがわたしのこと気になるって言ってきたんだけど、どうしたらいいと思う?」

「ゴライアス落ち、見えてきたね」

「やだよ、そんなエンディングうう!」

「ムムツ、リオがザファイラと友達に……しかも成功しているし。

もう、ザファイと友達になる前に、わたしと友達になってよおおっつ!

ジークさんとか、ザファイーラとか、わたし以外の人ばっか選んでええ——っ!!」
「そ、そんな全力全開で怒られても……」

などとプンスカしていると、ついにその時がやってきた。

「来たアアア! ノーヴェがわたしと友達になりたがってるうううううううっ!!」

「「「「あゝ」」」」

「よし成功っ! さっすがノーヴェ!! わたしのピンチに颯爽登場で、愛してるよおおおおろっつっ!!!」って、どうしたんですかアインハルトさん、わたしの肩をツンツンして。嫉妬ですか?」

「いえ、そうではなくて……」

「ヴィヴィオ、後ろ、後ろ」

「……はい?」

言われて振り向くと、

「いや、まあ、なんだ……さっきからいたんだけどな」

照れっ照れのナカジマジム会長。

「えええ!? ノーヴェエ、会長室にいるんじゃないかなかったのおお!?」
しまった。

全力全開で叫んでしまった。

世界の中心で愛を叫んだウサギである。

「ヴィヴィオさんのお顔が、ノーヴェエさんの髪みたいに真っ赤ですね」
「あう〜」

その後も、

● ヴィータ ↓ コロナ

● グライアス ↓ フーカ

など、友達の輪が広がっていく。

「ミウラさん、塩辛い物が食べたい——と言われても、まだそんな食べ物登場してないんですけど?」

「ボクのせいじゃないですよおお!」
そこへ、

● シグナム ↓ ザファイーラ

● ザファイーラ ↓ アルフ

「何だか納得の組み合わせですよ〜」

「偶然かもしれませんが、ボクも運命的なモノを感じてしまいます」

さくらに、

●なのは ↓ ザファイーラ

「ママまで……。ザファイーラの女性バージョンって、どうしてこんなに人気があるんだろっ?」

「たぶん、なんですけど。もし師匠が女性になったら、青い獣耳のシグナムさん——みたいになるんじゃないかと」

「あ〜」

クールなシグナムさんが、常時ケモミミモードなわけで、

「アリですねっ!」

そして、本日のラストを飾るのは、

●フリーカ ↓ シヤマル

「フリーちゃん……」

「リンネさん落ち着いて、どうどう。そんなロボ超人みたいな呼吸しないで」

こうして、トモコレ生活1日目（物語としては2日目）は無事終了。

掲示板を見ると、

『人気ランキング』（1日目）

●1位……ザファイラ 70ポイント

「やっぱり」

「凄いですね、ザファイラさんは」

●2位……フーカ 52ポイント

「流石『Vivid Strike!』の主人公!」
「やったね、フーちゃん! 私も負けないから!!」

●3位……リオ 50ポイント

「不正?」

「してないよっ!」

そして、

●21位(最下位)……リンネ 0ポイント

「」「あゝ」「」

「ど、どういふことなんですか、ヴィヴィさああんっ!

私だけ人気ランキング0ポイン

トってええ——っ!？」

「アバババ……そんな首をグオングオン揺らされても〜」

リンネさんが床に突っ伏した。

「いいんです、いいんですっ、私なんてもうっっ!!」

まさかの『0』ポイント。

予想の斜め上に行く結果に、誰も声をかけられない。

まさか、リンネさんのぼっちパワー（そんなパワーがあるかどうか知らないけど）は、ゆんゆんクラスなのだろうか？

人間強度が高すぎである。

「あの、一応なんですけど、最近、誕生日にひとりでケーキを食べたりとかは……?」

「ううっ、そんなことはありません」

「で、ですよね〜」

「両親の帰りが遅くても、言葉を交わしたくないメイドがいましたから」

「スイマセンでしたああ——っ!」

「どうして謝るんですかああ——っ!？」

結構きつつい光景が目に見えかぶ。

今年はみんなで祝いしてあげよう——と心に誓う。

「リンネさん、元気だしてください。トモコレ生活は始まったばかりなんですから、まだまだ勝負はこれからですよ！」

ほら、わたしだつてベスト3にはかすつてもいないんですから」

「ヴィヴィさん……」

リンネさんは涙をふいて立ち上がる。

「そうですね。私、明日から本気出して頑張りますっ！」

「いや、それもうダメなやつですから」

果たして、わたしの恋人になるのは誰なのか？

そして、リンネさんに友達はできるのだろうか？

次回、高町ヴィヴィオのトモコレやってみた3日目——お楽しみに！

高町ヴィヴィオのトモコレやってみた 3日目

●〈V i v i 島〉住人名簿（登録順）

- ①ヴィヴィオ（唯一の男性・意外と友達が少ない？）
- ②アインハルト（ヴィヴィオ以外に対しては、友達になりたがるものの、お断りされることが多い）
- ③コロナ（絶好調ランキング最下位）
- ④ゴライアス（こっそりゴライアスENDになりそうで怖い）
- ⑤リオ（裏切り者）
- ⑥ノーヴェ（綺羅星）
- ⑦ミウラ（影が薄い）
- ⑧ルーテシア（ほぼ絡んでこない）
- ⑨なのは（我道に行く）
- ⑩フェイト（普通）
- ⑪はやて（思ったより何もしてこない）
- ⑫シャンテ（もうこまちゃんでもいいや）

- ⑬ チンク（ちっちゃいから人気？）
- ⑭ ザファイラ（〈V i V i 島〉で一番人気）
- ⑮ シグナム（絶好調ランキング1位）
- ⑯ ヴィータ（パツとしない）
- ⑰ シヤマル（さらにパツとしない）
- ⑱ ジーク（もつとパツとしない）
- ⑲ アルフ（やっぱりパツとしない）
- ⑳ リンネ（人気ランキング最下位・誰か友達になつてあげてええ！）
- ☒ フーカ（本人はいないけど、分身は人気）



トモコレは、プレイしていない間もゲーム内で時間が経過する。なので、初プレイの翌日。

ジムでDSを開くと、住人たちの人間関係にめまぐるしい変化が起きていた。

「知らない間に、リオとザファイラが親友同士になつてるうう——っ!？」

ちなみに『トモダチコレクション』の『親友』は、通常の「友達」のランクアップ版みたいなものだ。

性別は関係なし。

男女どちらでも『親友』になれる。

ただし『親友』になれるのは、1キャラにつきたった1人。

ある意味、恋人に匹敵するポジション——と言えるだろう。

隣でリオがボンと手を叩く。

「わかった！ あたしが実家でシヤオを飼ってるからだよっ!!」

「ああ、あの虎?」

「猫だよっ!」

「いやいやいや」

すかさず、わたしとコロナがツツコミを入れる。

「でも、あの虎みたいな猫とじゃれていたリオさんの姿を思い出すと、狼フオームの師匠とも仲良くできそうな……」

「うっ、ミウラさんの言う通りかも……」

なんだろう？

リンネさんの件といい、だんだんと現実とゲームがリンクしているようで怖い。

とはいえ、

「わたしとアインハルトさんは友達のままなのに……ああつ！ シヤンテとフーカさんも親友になってるうう！ それに、チンクとフェイトママまでええっつ！！？」

うゝん……。

先陣を切り、チュートリアルで友達関係になったわたしとアインハルトさん。もつと関係が深まっていてもおかしくないはず。

なのに、ちつとも前に進めない。

越えられない壁でもあるのだろうか？

昨晚、こっそりネットで調べただけど、狙い通り最初の友達とくつついた——なんて人はほとんどいない。

むしろ、みんな自分の思い通りにならなくて困っていた。

だから『トモダチコレクション』は面白い——とも言えるのだけど。

あく、恋人は無理でも、せめて親友ポジションくらいは確保したいなあ。

「あの、ヴィヴィオさん、どうなさいましたか？」

隣のアインハルトさんが、わたしの顔をのぞきこむ。

「いえいえ、何でもありませんから。さあ、ゲームを続けましょうか——」
と、前に向き直ると、

「ちよ、リンネさんがゴロンと床に転がっているんですけどおお——っ!? あの、リンネさん大丈夫ですか!?!」

「ふ、フーちゃんの親友が……シャンテさんに……も、もうだめほ……」
「あゝ」

わたしなんかより、よっぽど精神が大ピンチ。

空気を読まないことで有名なアインハルトさんですら「あわあわ」声をかけられない。

「ここはチームナカジマのリーダーとしてわたしが——」

「いやいや、いつリーダーに……」

「いいですかリンネさん。これはゲームです。ゲームなんですよ?」

現実ではない。

「いえ、たぶん、私とフーちゃんしかいない島を作っても、1か月経つても進展がないとか、そういうやつです、はい」

有り得そうで困る。

とはいえ、

「安心してください。ほら、わたしとアインハルトさんも、そんな感じになりそうなんです……」

「で、でも……」

リンネさんは、まだ立ち直れない。

「だったら、他にも友達を作ればいいんですよ。せつかくなんで、いい機会じゃないですか。ゲーム中とはいえ、フーカさん以外にも友達を作る。今はまだ0人ですけど、きつと仲良くなれますよ。わたしの分身やアインハルトさん、リオ、コロナ、みんなの分身と」

「そうだ。」

「これはわたしにだって言えることだ。」

「ヴィヴィさん……」

「そうですね、ボクだっていますからね!」

「……あ、そうそう、ミウラさんも」

「ちよ、今忘れてませんでしたかああ!?!」

「そんなわたしたちのやり取りを見ていたリンネさんが、ようやく顔をほころばせる。「わかりました。私も頑張って友達を作ってみます。私の分身ガンバレ!」

そんなわけで、高町ヴィヴィオのトモコレやってみた3日目——始まりです。

「さつきからジークさんだけ、やたらとトランプ勝負を挑んでくるんですけど……」
代わりに悩み事の相談がまったくくない。

アインハルトさんが「ジークさんらしいですね」と苦笑する。
「確かに……」

「あ、あつ、あつ、みんな見て！

つ、ついに来たアアア——っ!!

なのはママが、なのはママがつ、わたしと友達になりたいって……。

キヤアア——ツ!!!

「させるかああ！ しゅっぱい！ しゅっぱいっ!!」

「フツ……見るがいいリオ、コレがわたしとなのはママの絆パワーだああ！ ——ほら、成功！」

ちなみに、なのはママだけ満足度レベルが3にアップ。

わたしはレベラーなのに……。

さすママ。

「え？　こ、コロナもチンクに浮気なの」

「浮気って……」

「あ、失敗したよ」

「ヴィヴィオうれしそう……えっと、これって喜んだ方がいいのかな？」

「ヴィータさんもチンクと……。ホント、どうしてこんなに人気あるんだろ？」

リオもさっぱりわからないようで、

「認めたくはないけど……」

「若さゆえの過ちみたいなの？」

「いやいや、そうじゃなくて、あたしとしては前に否定したけど、リアルと一緒でちっちゃいと人気が出るのかもね」

「う、うん……」

「どうだろう？」

と、思いつつ隣のアインハルトさんを見やって、

「あゝ」

「どうして納得するんですかああ!?!」

「シヤマル先生から、お宝『汚い雑巾』をもらったんだけど……」

「嫌がらせ?」

「おつ、ルーラーがわたしと友達になりたがってる。さつすがルーテシアだね、わかつてるううゝ」

当然、成功。

さらに連続して、

●フーカ ↓ ヴィヴィオ

「うん、うん。フーカさんもわかつてるなあゝ」

「あれでしょ? 長いものには巻かれろ——みたいな」

「ヴィヴィオは、フーカさんにとつていつも自分の先を行く、ちっちゃいけど尊敬すべき先輩——だもんね」

「えへへゝ」

などと、わたしが照れていると、

「ぐ、グフウウ〜」

青い巨星の乗機みたいな声を発して、リンネさんが倒れこむ。

「え、ちよ、リンネさん!?! 突然どうしたんですかああ——っ!?!」

「わ、私、ヴィヴィオさんに公式戦2連敗中でした……。や、やつぱりフリーちゃんも強い人と友達になりたいですよね」

「あ〜」

マズい。

また、リンネさんがベッドで毛布をかぶった繭みたいになつちやうよおお!?!

ここは一発ギャグで乗り切るしかない!

わたしはリオ&コロナにアイコンタクトを送る。

そして、ワイングラスを片手に、深く椅子に腰かけたようなポーズで、

「パンがなければ、列強の王達を全て倒し、ベルカの天地に覇を成せばいいじゃない」

「よっ、聖女王!」

「陛下万歳っ!」

「ヴィヴィオさん、それ私の台詞じゃないですかああ——っ!?!」

アインハルトさんの尊い犠牲により、どうにかリンネさんも落ち着きを取り戻した。

「よかった、よかった」

「よくないですっ!」

「ん、始めてトランプ（ババ抜き）で負けたんだけど、相手がミウラさんの分身つてのが、なんとも因縁を感じますねー」

「はは、すみません……」

リオがノーヴェにちよっかいを出す。

「イヤアア、やめて、わたしの友達を奪わないでええ!」

「ハツハツハ、よいではないか、よいではないか」

「……あ、失敗した」

絶対成功すると思ったのに……。

ちようどやってきたノーヴェに、リオとわたしは口をそろえて言う。

「ノーヴェひどい!」

「ノーヴェ、ダメだよ?」

「あたしにどうしろと!」

ノーヴェエとアルフが友達になったところで、

「ほくら、お前ら、そろそろ練習時間だぞ」

「あ、ホントだっ!？」

わたしがDSを閉じようとすると、

「ヴィヴィオー、その前に友達がどれくらいできたか見てみようよ」

リオの言葉に、ノーヴェエも「それで練習に気合が入るならいいんじゃないか」と苦笑する。

市役所の『トモダチリスト』から確認すると、

「わたしの友達は——アインハルトさん、フーカさん、なのはママ、ルールー、それからノーヴェエの5人だね」

何だかんだで、結構増えていた。

「ちなみにアインハルトさんは……わたしとミウラさんだけですわね」

「……」

「何もこんなとこまでリアルじゃなくてもいいのにね」

と笑うリオに対し、

「何なんですかその感想はああ!？」——霸王断空拳!」

「ぐぼあ〜」

あ〜。

「それにしても問題はリンネさんかな〜。どうして友達が1人もできないんだろう？
本人も気合十分なのに……アインハルトさんわかりますか？」

「そ、そんなこと、私の口から言えるわけないじゃないですかああ!?!」

両手のひらを前に突き出すと、アインハルトさんが全力で頭を振った。

「いえいえ、リアルじゃなくてトモコレでの話で……あ、リンネさんが試合では一度も見
たことないポーズで叩きのめされてるうう——っ!!?」

具体的に言うと、キルミードダンスのラストみたいな感じ。

——何だろう？

リンネさんは、こう、ゲームを越えたボツチ星を背負っていると思えない。

ちなみに、ゲーム中でのリンネさんのプロフィールを見ると、好物の欄に『ミートソー
スパスタ』とだけ書いてある。

なんだか「リンネさんらしいな〜」と思ったのは、わたしだけだろうか？

その後も、休憩時間の度にDSを開いてはのぞいていたのだけど……。

「い、いつの間にかコロナとヴィータさんが親友に!? ちよ、どうしてコロナ、わたしじゃないのおお——っ! わたしとは遊びだったんだねええ!」

「お、落ち着いてヴィヴィオ、ゲームだからゲーム!」

「う〜」

とか、

●チンク ↓ ノーヴェ

など、納得の友達の輪が広がっていく。

そして、練習後——。

予想外の結末が、わたしたちを待ち構えていた。

「アレ? ねえリオ、わたしの部屋に赤いマークがついてるんだけど?」

「ん? ちよ、ヴィヴィオ、それって!」

「へ? 何か特別なイベントなの——」

いつものように、タツチペンの先端で軽く叩くと、

「えつとなになに…… 『実はアインハルトのことが好きです。告白したいのですが……』って、え、ホントに? うそ…… 来たアアア—— つ!! 信じられない、

始めて2日目でもう来たの!?　　っていうか、相手アインハルトさんだよっ！　偉いぞわ
たしいい！」

「「「え〜」」」

アインハルトさん以外からは大ブーイングである。

『告白を手伝う』

——当たり前！

『どんな感じに告白したらいいですか』

——ロマンチックもいいけど、やはりここは王道で、正統派！

『どこで告白するのがいいでしょうか』

——もちろん教室！」

「ヴィヴィオ、自分の趣味を全力全開しすぎじゃ……」

「いいんだよ、だって、わたしからの告白なんだから！」

そうなのだ。

誰がわたしに告白して恋人になるか——の勝負だったのに、まさかわたしからアインハルトさんに告白するとは……。

まさに予想外の結末。

さらに質問は続く。

『その前に着替えた方がいいですか』

——もちろんだよ！

せつかくの初めての告白だし、お金に糸目はつけないから、一番いい服をおお！

本音がダダ漏れだった。

「——つて、リオ大変だよおお!!」

「はいはい、今度はなに〜?」

「わたし、最初の服しか持ってない!」

「あれ、服屋さんで買ってないの?」

「え、服屋さんなんてあるの?」

すると、リオが「あああ!」と、イタズラがバレた時みたいな顔をした。

「服屋さんつて、男女それぞれ2人以上いないとオープンしないんだっけ!」

そう。

〈V i V i 島〉は、男性がわたし1人しかいないため、服屋さんが開店しないのだ。

「ええええ!!? どうしたらいいの?」

「う〜ん、告白は中断できないし、今回はもう間に合わないから諦めるしか……」

「そ、そんなあ〜」

そんなわたしの手の甲に、小さくも温かい手が重なった。

「大丈夫ですよ、ヴィヴィオさん。私は何度でも待っていますから」

「アインハルトさん……」

リオがボソッと、

「失敗すると、2人とも相手への気持ちがダウンするんだけどね〜」

NTRはやめてええ！

そして、わたしの分身が無謀にも告白。

「玉砕上等！ ナカジマ式ストライクアーツ、高町ヴィヴィオ、これがわたしの生き様
だああ——っ!!」

『いつもあの席から見つめていました。付き合ってください』

『（こちらこそ）お願いします』

「……あれ？ 成功……しちやった??」

「ええええ、いきなり成功しちゃったの？」

「うん、そうみたい」

「ないわ」

コロナが「グスツ」と涙を流す。

「よかったね、ヴィヴィオ」

「ありがとう、コロナ！」

最後に、

「ヴィヴィオさん……」

「アインハルトさん……」

手を取り合い、

「わたしたちの大勝利ですっ！」

わたしとアインハルトさんの絆は、世界も時間も空間も越えてつながっているのだ！

——というわけで、誰が最初にヴィヴィオと恋人関係になるかを競う勝負、優勝はアインハルトさんでした！

翌日。

わたしたちは、改めてトモコレの掲示板ランキングを見ることに決めた。

『絶好調ランキング』

- 1位……シグナム 919ポイント
- 2位……はやて 846ポイント
- 3位……なのは 804ポイント

「結局、1日目と変わらないメンバーって……わかるけど、おかしいよね」
この3人は、どんだけゲームの世界にまで影響を与えるんだろう？

『人気ランキング』

- 1位……ザフィーラ 110ポイント
- 2位……ヴィヴィオ 92ポイント

● 3位……フリーカ 88ポイント

「結局、ザフィーラがトップのままかあ。でも、リオを蹴落としてわたしが2位にランクアツプだよ！」

「うゝ」

ちなみに、同点で4位が4人。

- 4位……コロナ 50ポイント
- 4位……リオ 50ポイント
- 4位……ノーヴェ 50ポイント
- 4位……シヤンテ 50ポイント

意外なことにチンクが入っていない。

友達の多さと人気度は別なのだろうか？

「リオとコロナが同点かあゝ」

「あたし、前と全然変わってないんだけど……ま、コロナと一緒にならいつか」
「だね」

しかし、

● 21位（最下位）……リンネ 0ポイント

「ど、どういうことですか……どういうことなんですかああ!?!」

「[[[[[[あゝ]]]]]]」

「その『あゝ』は、何の『あゝ』なんですかああ——っ!?!」

おつかしいなあゝ。

いまだに0ポイントって、ゲーム的にありえるのだろうか？

昨日ならまだしも、もう始まって3日目なのに……。

リンネ・ベルリネッタ——ある意味『持っている』女性である。

『モテ女ランキング』

● 1位……アインハルト 70ポイント

● 2位……ノーヴェ 20ポイント

● 3位……なのは 12ポイント

● 21位……リンネ 0ポイント

「ま、また私が0ポイント……」

リンネさんの脚が、子鹿みたいにプルプルしている。

「何と申しますか、ここまで来ると、いつそ清々しいモノがありますね」

ていうか、アインハルトさんがぶつちぎりで1位というのもスゴいのだけど。

リオが言う。

「ねえ、ヴィヴィオ。これつてさ、男性がヴィヴィオしかいないんだから、ヴィヴィオからアタックした女性のランキング——でもあるんだよ？」

「え、そうなの？」

「自覚もない。最早、清々しいまでのアインハルトさんびいき！」

「わたしのせいじゃないよねっ!？」

ゲーム中の分身がやったこと。

「ううっ、これはきつと全てヴィヴィオさんが操ってるんですうう。ストライクアーツの技術も私より上手いですしい！」

「いやいや、ソレとコレとは話が別ですからね。それに、これといって鼻負した覚えもないんだけどなあ……」

選択肢も公平だったはず。

「だったらさ『お気に入りランキング』を見るってのはどう？ ゲームのプレイヤーが、どの住人を可愛がっているか——部屋を訪ねたりするとポイントが加算される——が、一目でわかるんだよ」

わたしが覚えていない。無意識の行動が明らかになる。

「ヴィヴィさん、早く見てくださいっ！」

「は、はい……」

『お気に入りランキング』

- 1位……ヴィヴィオ 37ポイント
- 2位……リオ 15ポイント
- 3位……シグナム 12ポイント
- 4位……アインハルト 11ポイント
- 4位……なのは 11ポイント

「ヴィヴィオ、どんだけ自分好き？」

「ちよ、これは違うくてええ——っ！」

「っていうかりオ2位なんだ……。」

「それで私は……？」

● 16位……ノーヴェ 5ポイント

● 16位……リンネ 5ポイント

「あれ、順位は低いけど0ポイントじゃないし、ノーヴェと同じだよ？ だったらビリは……。」

● 21位（最下位）……コロナ 2ポイント

「ちよつとヴィヴィオ、どうして私がビリなおお！」

「あ、あれ？ えつと、たぶんそれはコロナの分身が、本物のコロナと同じで我慢強い性格だからじゃないかと。そう——悩み事をひとりで抱え込んで表に出さないから、訪問する機会が少なかったんだよ！」

「……な、なるほど。納得しちやったかも」

「あ、あの〜」

「はい、リンネさん」

恐る恐るといった様子で尋ねてくる。

「それじゃ、私がゲームでも友達ができない理由って……？」

「ん、ん〜……リンネさんの持つて生まれた何か？」

「いやああ——っ！ フーちゃん助けてええ——あ、そうだ、フーちゃん、フーちゃんの友達関係はどうなっているんですか？」

調べると、

「親友のこまちちゃん——じゃなかったシャンテを初めてとして……いっぱいいますね、フーカさん」

「イヤアア——っ！」

そんなリンネさんの肩を、アインハルトさんがつかむ。

「あくまでゲームなんですから、そこまで深刻に思うことはありません。友達だつてこれから自然にできますよ」

「まあ、そういうアインハルトさんも、恋人がわたしで、友達がミウラさんだけなんですけどね」

「いいんです、霸王流は少数精鋭ですから」

「そう言われると……」

確かに、ナカジマジムのトップ3だ。

「おっと、そういえばわたしは……昨日と変わらず恋人がアインハルトさんで……んんっ、親友ができてるよ！ しかもノーヴェだああ——っ!!」

「おおう……ヴィヴィオに格闘技を教えたかいたかいがあつたなあ……ぐすつ……」
「そんな大げさな……いやいや、泣いて喜ぶほどじゃないよ!」

みんなで赤い髪をなでなでする。

「ちなみにノーヴェは親友がわたしで、あと友達がアルフにザフィーラ、チンク」

「それ、何となく納得の面子だな」

流石はトモコレ。

「うくん、お気に入り度はリンネさんと同じはずなのに、どうしてこうなった!」

「いやああ——っ!」

「大丈夫だ、リンネ。お前もいつかあたしみたいになれるさ!」

「上から目線すぎるっ!」

すると、ずつと沈黙を守っていたあの抜剣少女が、ついに口を開いた。

「あ、あの、ボクはどうだったんでしょうか?」

「……え？」

「その『どちら様ですか？』みたいな顔つきやめてくださいよおお！」

「冗談ですよ、冗談。ワスレテタワケジヤナイデスヨ？」

「ひいっ！」

ミウラさんは純粹なので反応が楽しい

「えっと、ミウラさんはですね、友達がアインハルトさん——」

「はい」

「——以上」

「へ？」

「ミウラさん、ゲームでも地味ですね」

「イヤアアッ！」

「いつそのこと、リンネさんみたいに友達0人ならインパクトあったのに、1人だけいるってところが……」

「あう」

ここで、最後の締めとして、住人同士の相性がわかる『相性テスター』の建物を建設

する。

しかし、服屋さんと一緒に、男女それぞれ2人以上の登録が必要なため、エリオを男性キャラとして追加した。

『恋愛相性ランキング』

- 1位……ヴィヴィオ&ルーテシア 80パーセント
- 1位……ヴィヴィオ&フーカ 80パーセント

「わたしとルールーって、こんなに相性よかつたんだ……」

「ふ、フーちゃんの浮気もののお——っ！」

- 3位……ヴィヴィオ&はやて 69パーセント

「意外かも」

「ヴィヴィオさんと八神司令の組み合わせ。私は何となくわかる気がします。どちらも感情だけでなく、理屈で物事を考えていますから」

）

● 6位……ヴィヴィオ&リンネ

64パーセント

「こ、こんなに上位なのに、ヴィヴィオさんどうして私と友達になってくれないんですかああ——つ!？」

「ど、どうしてでしょうか?」

なつてあげなよ、わたしいゝ。

● 13位……ヴィヴィオ&なのは

24パーセント

「うくん、もうちよつと高くてもいいんだけどなあ」

性格が一緒だと相性がよくなる——というのは、必ずしも正しい情報ではなかったよ
うだ。

● 15位……ヴィヴィオ&アインハルト 19パーセント

「えええ〜つ!?! アインハルトさんとわたしって20パーセント切ってるんだ……」

これでよく恋人関係になったものである。

小さな画面には、

『無理のあるふたり』タイプ

ただし、アインハルトはどうにかしたいと思っているようです

と、あつた。

「納得です」

「わたしもですよおお！」

ちなみに、リンネさんとフリーカさんの相性は25パーセントで、

『イマイチな仲』タイプ

お互い無関心です

だった。

「そ、そんな……」

リンネさんが、ついにヤムチャのポーズに……。

もう、どんな慰めの言葉も、彼女の耳には届かないだろう。

「ふう……」

DSを閉じると、わたしは今回の勝負を思い出しながら深く息を吐いた。

実際、たったの2日しかプレイしていないはずなのに、長く、長く、それは長く、色々なモノを得て、失った——そんなトモコレ生活だったように感じられる。

そんなわたしの虹彩異色の瞳を、アインハルトさんがジツと見つめてきた。

「今回の『トモダチコレクション』でよくわかりました。

私にソツクリな分身ですらこうなんですから、やはり、私自身にとつても、ヴィヴィオさんの存在は必要不可欠なようです。

そんなことを改めて考えさせられる2日間でした。

ヴィヴィオさん、これからもよろしくお願いしますね」

「はい、もちろんです。こちらこそよろしくお願いします！

いや、いい話だなあ」

「ちつとも良くないですよおお?」

と、早くも復活したリンネさんが憤る。

うん、リンネさんもメンタルが鍛えられたということ……やっぱりこれは、
いい話なのだろう。

魔法少女りりかるヴィヴィオ 第2話

ドキドキ……。

何だろう、コレ……？

ヴィヴィオは土の上に横たわる「ソレ」を見た。

かのフェレットやネコっぽい豹でもない。

パステルグリーンの髪に、同色を基調とした衣装。それとよく似合う紅いリボン。

女の子のフィギュアだろうか？

ちっちゃいけれど、顔立ちは凛々しい。まるで、本物の人間のようによく出来ている。

こうなると、色々と確かめたくなるのが人の性。

「誰も、見てないよね……」

キョロキョロ周囲を確認すると、拾った人形を、スカートの中をのぞける高さまで持ち上げた。

すると、

「お腹が空きました……」

「ひっ!？」

突然聞こえた声に、慌てて人形を落としそうになる。

「まさか、ね……」

幻聴、幻聴——と、ヴィヴィオが改めて人形のスカートをつまんでめくる。

「黒、かあ……」

「お腹が空きました……」

「ひいひい!？」

間違いなく人形から声が出ていた。

「ビックリしたあ〜。そういう機能があるのかな?」

スイツチを入れた覚えはない。となれば、押すと声が出るタイプの人形なのだろう。

「う〜ん、こ〜かなあ〜」

柔らかそうな頬を突く。作り物とは思えないほどプニプニして心地よい。

「癒されるなあ〜」

続けて二の腕や背中を押してみる。

「コレはコレで……」

残りは、胸やお尻の辺りのみ。

「し、仕方ないなあ〜。別にわたしが触りたいわけじゃなくて、ちゃんと声が出るかどうかのチェックなわけであ〜いっ!」

「いただきますー！」

少女を地面に下ろす。

ちっちゃな女の子は、ステーキタイプのを両手で持つと、もしかもしや食べ始めた。

……リスみたいだなあ。

「わたし高町ヴィヴィオって言います。あなたのお名前なんですかー？」

「ほうひほふれまひた。はいんはるふお、ほふほふほ——」

「いえ、全部食べてからでいいですから」

両頬をパンパンにしている姿は、

……やっぱりリスみたいだなあ。

「はい、飲み物もどうぞ」

ペットボトルのスポーツ飲料を手渡す。

見かけによらず力持ちなのか、自分の体よりも大きなペットボトルを持ち上げて、ごきゅごきゅ飲み干した。

『ナニコレ、家で飼いたいっ！』

「あの、何かおっしやいましたか？」

「い、いえ、何も言つてませんよ」

危ない、危ない——つい心の声を口にしてしまった。

ちっちゃい女の子はパンパン手を払う。

「改めまして。申し遅れました。私は魔法の国ミッドチルダから参りました、ハイデイ・

E・S・イングヴァルトと申します」

魔法の、国……？ は一旦置いておく。

「えっと、アインハルトさんとお呼びすれば……？」

「はい。それで構いません。まずは食事のお礼に、この鉄のダンベルか、銅の鉄アレイを

……」

金の斧銀の斧的なイベントだろうか？

ていうか、銅の鉄アレイって……。

「いえ、そういうのいいですから」

「そうですか……中々の逸品なんです」

しょんぼりしているアインハルトさんも悪くないなあ、などと思っていると、

「ヴィヴィオ、そっち何か見つかった？」

木々の奥から、元気いっぱいな声が聞こえてきた。

「今のは？」

「すみません。実は、友達と一緒に来てまして」

「なるほど。であれば、私は姿を隠していた方が良さそうですね」

「はい。ちよつとの間でいいんでお願いします。リオー、こつちだよ、こつちく、おいで、カム！」

ガサガサと葉のこすれる音。

枝葉の間から、ヴィヴィオと同じ制服を着た子供が犬みたいに顔を出す。八重歯のキュートな女の子だ。

「やつと見つけたあく。ヴィヴィオってばこんなところで何を——つて、ぎにやああくくくくくくくつ!!」

「ちよ、り、リオ？ リオ、どうしたのリオおお——つ!？」

目の前で、同級生の少女が苦しみ出す。

「ハ、ハ、ハ、これは……」

「知っているのか雷電」

「アインハルトですが、知っています。というか、知っているも何も、コレが私が地球に
来た理由なんです。ジュエルシードを回収するという——」

「ジュエルシード？」

「はい。その名の通り、光り輝く小さな種のような宝石です。ジュエルシードには願
いを叶える——というプラスの面と、対象を変質させ暴走させる——マイナスの面がある
のですが……」

全身がリオの髪と同じ黒一色に染まっていく。さらに、頭部だけが巨大化。首から下
の胴体も消失し、頭に直接足が生えているような姿に変わった。

「リオ……」

無表情のため、何を考えているかはわからない。けれど、リオの面影は残っている。

腕の変わりに、頭部のアホ毛2本を伸ばして近づいてくる。

「何このタタリ神いい——っ！ も●のけ姫で見たよう!」

「これがジュエルシードの異相体化です」

とてもじゃないが止められない。ヴィヴィオはアインハルトを抱えると、脱兎のごと
く逃げ出した。

背後でズシン——とブナの木が薙ぎ倒される。

「アインハルトさん、どうやったらリオを助けられるのっ!？」

「ヴィヴィオさん、これを使ってください——」

手渡されたのは丸く小さな虹色の宝石。

「これは？」

「セイクリッドハートです。今の私の魔力では無理ですが、あなたの力なら彼女を止められるかもしれません」

「何だかわからないけどわかったよ！ で、どうすればいいのっ!？」

「私に続いて詠唱を——」

ヴィヴィオはアインハルトに合わせて、魔法の呪文を叫ぶ。

「左手に星を、右手に雷を——」

「左手に星を、右手に雷を——」

「虹は天に、聖なる魂はこの胸に——」

「虹は天に、聖なる魂はこの胸に——」

「この手に魔法を——」

「この手に魔法を——」

「セイクリッド・ハート！ セ——ット・ア————ツプ！」

全身が光に包まれる。次の瞬間、ヴィヴィオは——どこか学校の制服に似た——白と青の防護服に身を包んでいた。

頭のリボンも、青から白に変わっている。

「この服って……」

「バリアジャケットと言います。それを着ていれば、ちよつとやさつとの攻撃ではビクともしませんから。」

あとは、セイクリッドハートの音声に従ってください。全て上手く行くはずですよ」

「セイクリッドハート……ううん、クリスよろしくね！」

ところが、

『……』

「何もしゃべらないんですけどおお!?!」

「……そうでした。この子はしゃべらないデバイスでした。どうしましょう。ヴィヴィオさん、都合よくウサギのぬいぐるみを持っていませんか？」

「流石にそれは〜」

無理。両手をばつてんにクロスする。

「ウサギの人形がついたストラップでもいいですよ?」

「どうしてウサギ限定なんですかああ!?!」

「仕方ありません。ヴィヴィオさん、ちよつと靴下を脱いでいただけませんか?」

「靴、下……?」

疑問は残るが緊急事態。指示に従つて片方だけ脱いだ。

「ありがとうございます。それでは、脱いだ靴下の中に、セイクリッドハートを入れてください」

「何だかとてもなく胡散臭い光景なのだけど……入れた途端、風もないのに靴下がフワリと浮いた。」

「こいつ、動くぞー!」

一見すると白いフェレットのようで、愛らしい小動物みたいなのだけど……。

落ち着け。

コレはわたしの靴下だ。

けれど、自分の靴下だけあつてか、動きを見てみると、

「何となく言わんとしていることはわかるかも……」

「流石はヴィヴィオさん。やはり、あなたには才能があるようですね」

何の才能だろう——と思ったが、気にしたら負けなので、とりあえずクリスマスから攻撃魔法の基礎を学ぶ。

「助けるため——とはいえ、お友達を傷つける行為。ヴィヴィオさんにも、ためらいや葛藤といった複雑な想いがあると思います。ですが——」

「ソニツクシューターアア！ ソニツクシューターアア！！ ソニツクウウシューウターアアア——ツツ！！」

ヴィヴィオは、ちびリオというカタタリオに向かって光弾の雨を降らせる。

「えええく!?」

さらに、怯むことなく飛びかかってきたカタタリオの体が、虹色の球体によって拘束される。

「かかったね、リオ……それはわたしのバインドだああ！

はああああつ!!

一閃必中ツツ!! セイクリッドオオブレイザーア——ツツ!!

特大の閃光がリオの体を飲みこみ、

——チユドオオオオンツツ！

耳をつんざく轟音が、空と大地を揺るがした。鳥たちが一斉に舞い上がる。

「まったくためらわないですねぇ!!」

ボタン——とリオが地面に倒れこむ。

いつの間にか元の姿に戻った彼女は、全身が茶色で、髪はアフロ、口からは煙を吐いている。

「よかった、命に別状はないみたい……」

「え、ええ……」

ヴィヴィオはクルリと回転して蹴りのポーズを決めた。

「チャララララ〜チャツチャツ、愛がアツプ！」

「しませんよっ!?!」

すると、黒焦げになったリオの体から、光り輝く種のような宝石が現れた。

「コレって……」

「はい。これが念願の——」

「アイスソードを手に入れたぞおお！」

「ジュエルビーストです。ヴィヴィオさん、コレが他の生物を暴走させる前に、早く封印してしまいましょう」

魔法の杖は持っていないので、代わりに拳を近づけると、

「その封印、ちよ……つと、待ったあ……つ……つ!!」

戦いの余韻が冷めやらぬまま、ヴィヴィオやアインハルト、ましてやりオでもない——
——第三者の声が響き渡った。

「だ、誰っ!？」

「ココだよ！」

「木の上です、ヴィヴィオさん！」

見上げる。枝に乗ってコチラを見下ろしていたのは、金髪ツインテールに水色の衣装をまとう快活そうな少女。

その隣には、落ち着いた雰囲気をもつ、黒みがかつた茶色のショートカットの女性。

「私の名前はアリシア——アリシア・テストアロッサ。」

そしてこっちは、ママの使い魔リニス。

あなたの見つけた、7つ集めればどんな願いも叶うという地球のロストロギア——龍球を、さあ、私たちに渡してもらいましょうかああ！」

「色々と間違ってるうう!!?’」

春が来れば思い出すコロナ

「もう、コロナなんて知らない！」

「珍しいよね、ヴィヴィオがコロナとケンカするなんて」

朝のホームルーム前。

自分の席で机を叩いたわたしを、リオは驚きの顔つきで見つめている。

ちなみに、コロナは日直なので教室にいない。戻ってきたらどんな顔をして会えばいいだろう。

「——で、ケンカの原因は何なの？」

「……うん、原作5巻のコロナの台詞で、

『いっしょにいたいから、いっしょに練習するようになって』

とか、

『わたしが格闘技や魔法戦競技をやめちゃったら、ヴィヴィオと友達でいられなくなる気がして』

ってあったから、コロナってわたしのこと大好きだよね、って言ったから」

「あく、いじりすぎたんだ……」

「ううっ、でもホントのことだし、あんなに恥ずかしくなくてもいいのに」

「ヴィヴィオって意外とSっ気が……」

「女王様だからね！」

「あく、そういうえげそうでした」

——と、そんな会話を交わしながら窓の外を見る。遥か昔、地球から植樹されたという桜の木が、なのはママの魔力光のような花びらで校庭を満たす。

春の景色だ。

「こうしていると入学したばかりの頃を思い出すんだよね。まだ、仲のいい友達もいなくて不安でいっぱいだった頃のことを」

コロナがいないと、余計にあの頃のことを思い出してしまう。

その前のことまで——。

「何だかんだと言って、ヴィヴィオもコロナのこと好きだよね」

「まあね」

学校には、なのはママもフェイトママもいなかった。そういった意味では、コロナがいてくれたからこそ、S t. ヒルデ魔法学院での、今の自分がある——とも言えるだろう。

「もしコロナがいなかったらと想像すると、ひよつとしたら、リオとも友達になつていなかったかもね？」

「結局のろけてるんじゃない！」

「あはは〜」

「心配して損した。仲直りも時間の問題だね〜」

「うん、まあ、でも、こういう時だからこそ考えることもあるんだよ」

「何を？」

「コロナの両親って何してるのかな〜って。普段は意識しないんだけど、わたしコロナの家のことってあんまり知らないんだよね。リオは知ってる？」

ほら、わたしがなのはママポジションだとすると、リオとコロナってアリサさんとすずかさんポジでしょ」

「そんな風に言われると身も蓋もないんだけど……そうだな、しょうがない、これはコロナから口止めされてただけど、教えちゃいますか。」

ヴィヴィオ、あたしが話したってこと、コロナには内緒ね、いい？」

「うん！」

こうしてリオは、コロナの過去について語り出す。

古代ベルカ三賢者の1人、アイザック・テイミルの曾孫にあたり、創成魔導工学の天才ニコラ・テイミル博士の娘。

11年前。

ジェイル・スカリエツティは、ニコラの技術を人造魔導師や戦闘機人、及び聖王のゆりかご復活の研究に利用するため、ナンバーズに命じて彼を拉致。

後に、ニコラの強硬な拒絶を緩和するために、妻クラウディアと娘コロナをも人質として拉致した。

2年後。

母クラウディアが死亡。死因は不明。実験中の事故として処理された。

4年後。

ついにゴライアスが完成。

これを機に、スカリエツティは管理局地上本部と機動六課を襲撃。

その後、フェイト・テスタロッサがスカリエツティのアジトに潜入。ニコラは混乱に乗じ、娘のコロナをゴライアスに乗せると、曾祖父アイザックの手を借りて脱出させる。

「こ、コロナにそんな過去が……。しかもわたしと関係していたなんて……。ひよつとしてノーヴェエヤオットーも、それを知っていたからコロナに優しく……。なんて、今の話、ゼノギアスのパクリだよねえ!?!」

「ちっ、バレたか〜」

「もうっ、リオだつて知らなかったんでしょっ!」

「しょうがないじゃん! 1年の時から親友のヴィヴィオが知らない事を、どうしてあたしが知ってる?! むしろヴィヴィオが聞いたのに忘れてるだけなんじゃ……!」

「はっ!?!」

「ど、どうしたのヴィヴィオ……まさか、本当に?」

「うん。そういえば、前に一度だけ聞いたことがあったかも……!」

わたしは低い声でリオに語り出す。

かつて、とある管理外世界は大魔王と呼ばれる存在に支配されていたという。

しかし、その支配も長くは続かなかつた。

勇者が現れ大魔王を倒したからだ。

しかし、勇者はこう告げる。

「いつの日か新たな魔王がこの地に現れんと。」

その地の人々は、予言を信じ、都市の城壁を高く築いた。

さらに、勇者によつてもたらされた“生ある石”によつて、町の守護神となるゴーレムを生み出したという。

そのゴーレムを創った魔導師こそが、グラシヨフ・テイミル。

コロナの遠い先祖である。



「つまり、コロナの家は代々ゴーレムマイスターの家系だったと……つて、それドラクエIのバクリだよええ!? どのアレフガルドおお!?”

「ちえっ、バレたかあ〜」

「ヴィヴィオまで冗談言わないで、本当のこと教えてよ!」

「わたしだって本当に知らないんだもん!」

「こういう時は、

「素直にウイキに頼ろっか?」

というわけで、早速コロナについて検索してみる。ところが、

「何も無いよおお!」

『コロナ・ティミル』『両親』『家族』『実家』などなど、色々なワードで調べるも、コロナの家庭事情について触れたサイトはまったくない。

というより、そもそも公式の情報が皆無なのだ。

「ヴィヴィオ、コロナって謎すぎるんだけど〜」

「くっ、こうなったらルールに依頼して、管理局のデータベースにハッキング。個人情報報を得るしか——」

「いやいや、そんなことしなくても、コロナに直接聞けばいいよねっ!」

「え〜、それって何だかコロナに負けた気がして……」

「どんだけ負けず嫌いなんだか……なのはさんもビックリだよ」

仕方ない。

わたしとリオは、とりあえず現在わかっている情報だけでもまとめしてみる。

『大解剖！ コロナ・ティミル10の秘密』

- ① ヴィヴィオとは、1年生の頃から大の仲良し。
- ② 学校の成績は常に学年トップ。
- ③ 運動は苦手。
- ④ 得意魔法は『ゴーレム創成』と『操作』。
- ⑤ 『格闘戦技』と『ゴーレム創成』を組み合わせた、独自の『創成戦技』を操る。
- ⑥ 身体自動操作『ネファイリムフィスト』を独自に編み出す。
- ⑦ ルーテシアから、インテリジエントデバイス『ブランゼル』を作ってもらう。
- ⑧ 脳筋の多いナカジマジムの中で、数少ない知性派。三国志で例えるなら、ヴィヴィオが劉備で、リオが張飛、コロナが関羽である。
- ⑨ 外伝漫画『Vivid LIFE』では、百合腐女子と化している。
- ⑩ 時々ポーズがひとりだけあざとい。

リオが「うーん」と唸る。

「これって、よく考えるところおかしくない？」

「コロナが関羽ってどこ？」

「いやいや、そこじゃなくて、⑤と⑥。『創成戦技』と『ネフィリムフィスト』なんだけどき」

「??？」

「あたしたちにとつてはコロナの使う技——ということ、普通というか当たり前なんだけど、こんなの一人で編み出せるかな？」

「コロナ頭いいし」

「だとしても、うくん、そうだなー、例えばなんだけど、

●なのはさんには、ユーノ司書長。

●フェイトさんには、リニスさん。

●スバルさん、ティアナさん、エリオさん、キャロさんにとつては、なのはさんやフェイトさん。

あたしやヴィヴィオだつてそう。みんな優秀な師匠がいるからこそ、技を教えてもらつて、強くなれたんだよね？」

「そう言われると……」

「あのジークさんやアインハルトさんだつて過去の、代々受け継いできた知識や記憶が

あるからこそ今の強さがある」

数百年という研鑽の積み重ねだ。

「だけど、コロナにはそれがない。全て自分で編み出した技術。それで、アインハルトさんと互角に渡り合える」

わたしはハツと気づく。

「もしかして、コロナってなのはママやアインハルトさんを超える、ちよー天才だつてこと?？」

「うん、ヤバイくらいに……」

しかし、

「いや、待って。わたしたち大事なことを忘れてるかも」

「どういうこと?」

「最初の目的だよ。コロナの家庭、両親や家族について」

「あ」

「もしも、コロナの両親が創成魔法関連の魔導工学研究者だったとしたらどう? フェ

イトママのママ——プレシアおば……プレシアさんみたいに!」

「そっか。あたしがじーちゃんから春光拳を教わったみたいに、コロナもゴーレム創成を教わっていた可能性があると!」

「うん。だってコロナ、昔から操作魔法も得意だったし。

そもそも、コロナって『普通の初等科4年生』とか『先祖代々普通の家庭』って言うけど、あれって自己申告でしょ？

リオだって、拳仙レイ・タンドラの孫娘だけど、普段はそんなことおくびにも出さず、ポケモンマスターになりたいって言うてるわけだし」

「うん、確かにピカピカしちゃうけど、あたしが言うてるのは、春光拳と炎雷魔法をもつとマスターしたい——ね。

だけど、そういうトコはあるかも。

わざわざ話すようなことじゃないし……というか、ぶっちゃけヴィヴィオが特別すぎて、ヴィヴィオと比べてたら、みくんな普通なただけどね」

「あはは……そうでした。でも、そうなる腑に落ちないこともあるんだよね」

「例えば？」

「ほら、コロナってルーラーからデバイスを作ってもらったでしょ？ でも、両親が研究者だったら、自分たちの手で愛娘のデバイスを調整してプレゼントしたい——って思うんじゃないかな？」

「そっか。だったら……うん、実は両親がいない——とか？」

「いや、流石にそれはないかと。家族がいないと、ますますコロナの天才性について説

明でできなくなっちゃうし。

リオみたいに、祖父母がすごいという可能性はあるかもだけど。

なので、わたしとしては、コロナのパパとママは一般的な、主に創成魔法などに関する魔導工学研究者で、娘の初めてのデバイスは自分たちからのプレゼントにしたかったけど、才能豊かな娘のため、専用のインテリジェントデバイスを作ってくれるというルールの申し出を素直に受けた。

そんな、いい両親なんじゃないかな、と思うんだけど——」

そこで、わたしは教室に戻ってきたコロナを発見。不安げな瞳でコチラの様子をうかがっているの、

「ジェットステップ……」

一瞬で距離を縮める。ガバツ——とコロナの首に腕を回すと、幼なじみの瞳が大きく見開かれた。遅れて頬が紅潮する。

「な、何で？ 何でヴィヴィオは私に抱きついてるのおお——っ!？」

「わたしも、コロナがわたしのこと好きなくらいに、コロナのこと大好きなんだからねっ!」

「何でいきなりこんなことにいい!？」

「お、2人ともケンカしてたんじゃないっけ」

いつになく落ち着いた、大人びた声音。

ツインテールの少女は、立ち上がると同時に全身に光をまとう。

「どうして急に大人モード？」

最近マスターした、わたしやアインハルトさんに匹敵するナイスバディの女性の姿に変身する。

「そう、リオの胸にはない二つの膨らみがああ〜」

「ちよ、声に出して言う必要ないよね!？」

そんなわたしとリオを見ながら、コロナは泣きそうな顔で微笑んだ。

「ゴメンね、ヴィヴィオ、リオ。これ、本当は大人モードじゃないんだ」

「ど、どうということ?」

「実はね、こっちが本当の姿なの。」

だから、前は私ひとりだけ大人モードができなくて……」

「??」

「??」

わたしとリオは、頭にクエスチョンマークを浮かべたまま顔を見合わせる。

次の瞬間、コロナがその場で片膝を落とした。

宮廷儀礼に従い、顔は伏せたまま言葉を発する。

「改めまして、ヴィヴィオ陛下——。」

私の名前は、コロナ・ティミル。

階級は陸曹。

時空管理局、陸上警備隊に所属する秘密捜査官です」

「へ?」

「私の任務は陛下の護衛であり、同時に、かつてのゆりかご事件のような有事の際は、陛下の殺害も視野に入れて行動せよ——との指令も受けています」

「ちよ、コロナ、何を言ってるの……?」

「普段は、陛下の同級生としての生活に疑問を抱かぬよう、記憶封鎖により管理局員としての意識が表に出ることはありません。」

しかし、陛下の身に危険が及んだ時、あるいは、陛下が自らの意思で私の正体を知りたいと願った時のみ、封鎖が解かれるよう処置されていました。これは、陛下の意思を尊重したいという教会側からの要望です」

「……」

「かつての聖王女と陛下は別人です。しかしクローンであり、ゆりかごの起動という力を示したことで、それを理解しない者が多くいることも事実。」

そのため、管理局と聖王教会の話し合いにより、自然な形で陛下をお守りすべく、私
が派遣されることになりました」

わたしは唾を飲む。

「……じゃ、じゃあ、コロナって本当は？」

「はい。今年で18歳になります。」

陛下は覚えていらつしやらないと思いますが、入学前にも一度お会いしているんです
よ？

ルーちゃん——ルーテシアの更生プログラムを担当していたのが私です。理由は年
齢が近いから——でしたが、その縁で、今も仲良くしてもらっています。まあ、普段の
私は覚えていないんですけどね」

それでも、無意識のうちにルーテシアのことを「ルーちゃん」と年下のよう呼んで
いた。

「そのせいで、あの子の方はすぐに気づいたみたいですけど」

そう言つて、コロナはばつが悪そうに小さく舌を出した。

「で、でも、記憶封鎖をかけられてたら、いくら同級生になつても、わたしと友達になら
ない可能性だつてあるかもじゃ……」

しかも、親友にならなければ、常に傍にすることもなかっただろう。

「はい。だから謝らなければならぬです……。私には、陛下に自然に近づくよう——高町ヴィヴィオに対し、大きな興味と好意をもつよう記憶転写が施されています」

つまり、自分の意思ではない——ということだ。

「そ、そんな……じゃ、本当は……」

コロナは綺麗な顔を歪める。

「ごめんなさい、ヴィヴィオ」

「そんなのって、そんなのって……」

「仕方なかったんだよ！」

「だからって、そんなのおかしいよ!？」

コロナの頬を涙が伝う。

「だって、だって、そんなこと言っただって、私にだって、もうどっちの想いが本物なのかわからないんだよお！」

「う……嘘だと言ってよ、コロナああ!!」

チャイムの音が鳴り響く。

わたしの叫びは無情にもかき消され、桜の花びらのように散っていった。



今回の結末。

「あー、あたしこの1時間で寿命が10年は縮んだんだけど……」

「わたしなんて修復中のゆりかご再起動させて、ミッドチルダを壊滅させようかと思っ
ちやつたよ……」

危うく、次元世界終了のお知らせだった。

「ゴメンね、ヴィヴィオ、リオ」

結局、アレが全て作り話で、コロナのわたしへの仕返しだったとわかったのは、一限
目の休み時間だった。

未だにドキドキの治まらないわたしは、コロナに再確認する。

「一応なんだけど、さっきの本当にウソなんだよね？」

「さて、どーでしょう？」

わたしの幼なじみは小さく舌を出すと、あざといポーズで笑みを浮かべるのだった。

のような歓声が沸き起こる。

そして、なぜか桜の木の下に用意された長机とパイプ椅子。そこに、並んで腰かけるわたしとユミナさんは、パンツ——と手を打ち合わせた。

マイク片手に、ユミナさんがハイテンションで声を弾ませる。

「司会は私——St. ヒルテ魔法学院中等科2年生のユミナ・アンクレイヴ。

解説には、霸王を見つめて600年。アインハルトマイスターでおなじみの高町ヴィオオ陛下にお越しいただきました！」

「はい！ アインハルトマイスターつて、文字にするとアイドルマスターみたいですね——リリカルマジカルがんばります！」

——うおおおおおああ!!

再び謎の歓声。

「それにしても陛下。まさか私が司会に抜擢されるとは思いませんでした。少し前のトモコレの時もハブられてたんで、私でつきり嫌われているのかと……」

「ソレはソレ、コレはコレです。ユミナさんこのお花見に集まったメンバーをご覧ください
さか」

「……なんというか、一般人の私の目から見てもスゴいメンバーですね。世界を何度でも救えそうです」

「はい。ですが、逆もまた然りです。」

「いずれゆりかごが復活し、わたしが聖王教会の信者を率いて、次元世界征服に乗り出した暁には、頼もしい戦力になってくれることでしょう。」

「とはいえ、まだまだ人材不足は否めません。」

「わたし、ユミナさんには期待しているんですよ？」

「こんなところでサラツと恐ろしいことを言われたような……っというか、どこまで気でもどこまで冗談なのかわからないというか、でも、割とマジでやったらできちゃいそうな気も……と、とりあえず、陛下のご期待にそえるよう努力します！」

「はい。鉄華団みたいにがんばりましょうね！」

「それダメなやつですからああ！」

——と、ひとしきりつかみも終わったところで、陛下、本日のお花見アインハルトさんが欠席ということですが？」

「はい。あれは見事なジャンピング土下座でしたね〜」

「昨日の放課後。」

学校の屋上で「急な用事が入りまして、お花見に行けなくなりましたああ！」と、ア

インハルトさんはスカートのまま、全力ダツシユからの全力ジャンプ。

そして——着地の瞬間に、言葉遣い同様、乱れることなく手のひらと額を地につけたのだ。

「私もその場にいたんですが……私、ジャンピング土下座なんて初めて生で見ちゃいましたよ」

「そうですね。うちでは時々なのはママがフェイトママに向かってやっているので、比較的よくある光景なんです——」

なのはママが「ブーッ！」とお酒を吹き出して、ヴィータさんの顔を強襲している。「アインハルトさんの、あの流れるような一連の動作。流星は霸王流でしたね。御神流と違い回転はありませんでしたが」

「あ、流派あつたんですか。確かにスゴかったですけど、たぶん、私の一生でジャンピング土下座をする機会はずまないかと……」

「ですね」

と、2人で笑い合う。

「そんなわけで、これだけ人が集まるのにアインハルトさんだけいない——なんてビツグチャンス、最近ではもう滅多にありませんから」

「陛下は、アインハルトさんモノマネ王者決定戦を企画したと？」

「はい、そんなところです。ユミナさんだって賛成してくれたじゃないですか」

「はは、まあ、そうなんですけどね。このユミナ・アンクレイヴ、ヴィヴィ陛下のピンチをチャンスに変える才能に感服いたしました——」

ユミナさんはお花見の参加者に向き直る。

「というわけで、優勝者には一日聖王としてこのあとのお花見でチャホヤされる権利が与えられます。

みなさんごぞつて参加してくださいね！

なお、得点に関しては、みなさんお手持ちのデバイスから投じることができません。似ているな、スゴいな、面白いな——などなど、バシバシ得点を入れちゃってくださいー！

それでは、ヴィヴィ陛下のご意向により、1番ミウラ・リナルディさん——」

「はい？」

「スタンバイ、よろしくお願いますっ！」

「ちよ、いきなりそんなこと言われても……ボク、モノマネをやるだなんて一言も聞いてませんよ？」

「まあまあ、ミウラさん。ほら、いつもやってるアレでいいですから、ちよー期待してませんね」

「いつもやってるアレって何なんですかああ——っ!？」

——ミーウラツ！ ミーウラツ！

勢いで立ち上がったミウラさんに対して、酔っぱらい軍団のミウラコール。

「あううう〜」

引くに引けない抜剣少女。ついに、プツン——と心が点火する。

「ああアア、もおお、ヤケクソですっ！ 1番ミウラ・リナルデイ——バトル開始前のアインハルトさんやりますっ!!」

見慣れた霸王流の構えを取ると、

「一槍お願いいたしますっ！」

クリスがみんなのデバイスから送られた得点を集計。全員から見えるよう大きく表示する。

ダラララララ〜と、ドラムロールが鳴り——ジャン！

『3点!』

「「「あゝ」」」」

ミウラさんが「うええええん!」と、レジヤーシートに突っ伏した。

「ダメでしたか、陛下?」

「いやゝ、悪くはなかったんですけどね、ちよつとインパクトにかけるといいうか、一般の方々には認知度が低いモノマネだったと言いますか……」

「一言でいうと?」

「地味ですね」

「ふええええんっ!!」

ミウラさんが泣き叫ぶ。

ヴィータさんが缶ビールを口につけながら「ひでえな」と呟いている。

「それでは、次の挑戦者どぞどぞっ!」

「はい! あたしが行っきまーす!!」

八重歯のキレイな少女が手を挙げる。

「お〜つと、早くも優勝候補の筆頭、リオちゃんの登場だああ——っ!!」

「リオは、普段からアインハルトさんのモノマネをしていますからね、これは期待できま
すよ〜」

「それではリオちゃん、よろしくお願いします!」

リオは「はい!」と元気よく立ち上がる。

「2番、リオ・ウエズリー——合宿で水斬りをやり過ぎたアインハルトさんをやりますつ
!」

リオは膝を曲げて前屈みになると、

——プルプル……。

全身を小刻みに震わせる。

「次、模擬戦終了後のアインハルトさん!」

リオはレジャーシートに仰向けで寝転ぶと、

——プルプル……。

やっぱり全身を小刻みに震わせる。

「ふっ……似てるかも」

まあ、あの時はわたしとリオもプルプルしてたんだけど……。

お花見会場が、リオの微妙な演技で笑いに包まれる。

『78点!』

「おおっと、高得点キタアア——っ!!」

「リオにしては珍しく当たりでしたね!」

「くううっ! 最近のアインハルトさんはそんなプルプルしないので、私もいつか、ぜひ見てみたい!」

それでは、次の挑戦者どぞぞっ!

「3番、コロナ・ティミル——初めてのインターミドルで通路を歩いていたアインハルトさんをやります!」

アインハルトさんの真似なのだろう。コロナはキリリと冷静な顔つきで歩き出し、

——ゴツンツ!!

柱にぶつかつたように尻餅をついた。

世にも珍しい、目を回したアインハルトさんである。

『62点!』

「くうう、来ましたね、アインハルトさんのドジっ子シリーズ」

「ええ、素晴らしいドジっ子です。ただ、リオの後ですから、どうしても採点が厳しくなるかもですね」

「それでは次の挑戦者……次の挑戦者は……おрутと、早くも参加者ゼロかああ!?!」

「仕方ありません。ここで伏せカードオープン！ 聖王の強権を発動おお！ というわけでフーカさんモノマネお願いしますね」

「わしですかああ!?!」

慌ててポニーテールの少女が立ち上がる。

「なるほど。アインハルトさん唯一の弟子。私たちの知らない覇王の一面を知っているのではないか——ということですね!」

フーカさんが「ううっ」と一歩下がる。

「わしへのハードルが上がつとるような……。でも、わかりました。ヴィヴィさんのご命令とあればやってみるんじやけえ！」

4番、フーカ・レヴェントン——朝のランニングのあと、冷蔵庫を開けて牛乳がなかったときのハルさんの顔」

フーカさんの顔から表情が消える。

「……」

死んだ魚のような瞳。アインハルトさんの表には出さないガツカリ感が、見事に表現されていた。

「ぷーっ！」

「あははっ！」

『74点！』

「これは面白かったですね、リオちゃんには及ばなかったものの高得点でした！」

「フーカさん、もし今度同じ場面に遭遇したら、写真を撮って送ってくださいね！」

「あ、私も待つてまーす！」

「押忍っ！」

すると、

「はい！」

「お〜つと、ここで新たに名乗りを上げたのは、あのリンネ選手だあ〜！」

「フーちゃんがやったのなら、私も何か披露したいと思います〜！」

丸くなったリンネさんは、何だかなんだでサービス精神旺盛なのだ。

フーカさんいわく、最近のリンネさんがアレなだけで、元々こんな感じだったらいいのだけど。

「しかし陛下。リンネ選手といえはフロンティアジム所属。最近はナカジマジムに出入りが多いとはいえ、まだまだアインハルトさんと接する機会は少ないと思いますが……」

「そうですね。ですが、それゆえに、どんなアインハルトさんを演じてくれるのか、今から楽しみですよ〜！」

「わっかかりました！　そういうことなので、リンネ選手よろしくお願いしますね〜」

「はい！　5番、リンネ・ベルリネッタ——ヴィヴィオさんと出会う前の、昼休みのチャ

ンピオンをやります」

空気椅子のポーズ。机の横にかけたカバンからお弁当を取り出すと、

「……」

ひとり窓の外を眺めながら、黙々と食べ続ける。

「それただのリンネさんなんじゃああ!?!」

「あく、でも陛下、私1年の時からクラス委員でしたけど、当時のアインハルトさんって
だいたいそんな感じだったかも……」

「笑うに笑えませんが、リアルすぎて」

「はい……」

『5点!』

リンネさんが「あう」とひっくり返るが、

「それでもボクより点数高いじゃないですかああ!?!」

ミウラさんよりはマシである。

ユミナさんの語尾がトーンダウンする。

「こうなると、もうリオちゃんの優勝でしょうか？」

「いやいや、ユミナさん。まだまだ優勝の大本命が残ってるじゃないですか。ナカジマジムのリーサル・ウエポン——我らがノーヴェ・ナカジマ会長がああ！」

——うおおおおおおおっ！

「ゲホッ、ゲホッ……聞いてねーぞおお！」

——ノーヴェ！ ノーヴェ！

セインやウエンディを中心に、ノーヴェコールが巻き起こる。

「お前らなああ〜」

「いいじゃないか、ナカジマちゃん」

「ナカジマ会長、やってあげたらいいかですか？」

「ミカヤちゃんはまだしも、ジルまで……」

眼鏡をかけたリンネさんのコーチが苦笑する。

「やってよノーヴェ！」

最後にわたしが頼むと、

「ちえつ、仕方ねーな。あゝ、あの時いたのはつと……おいスバル、ちよつと手伝え」

「へ、あたし？」

ギンガやエリオと共に、お弁当の空箱を積み上げていた姉妹を引つ張り出す。

2人でちよこつと打ち合わせて、

「6番、ノーヴェ・ナカジマ——ヴィヴィオとアインハルトが廃倉庫で試合した直後。気

絶していたヴィヴィオだけが知らないアインハルト」

ノーヴェはしやがみこむと、おそらく寝ていたわたしの手をつかむ。

「はじめまして……ヴィヴィオさん。

アインハルト・ストラトスです」

ノーヴェ役のスバルが声をかける。

「それ、起きてる時に言つてやれよ」

「……恥ずかしいので嫌です」

「ちよ、ナニソレ、わたし知らないんですけどおお！　ちよー見たいというか、もう一

「回言って欲しいんですけどおお!?」

「いや、陛下、青春ですねぇ」

わたしの反応に気を良くしたのか、ノーヴェは「もう一つあるぞ」と言い出した。

「八神家で、初めてテイオの認証をして、変身を解いたあとのアインハルト。

フーカ、ウラカン借りるぞ——」

ノーヴェはアインハルトさんっぽく、左肩に乗せたテイオの同型機を両手でつかむと、無表情で地面に落とした。

——クルン。

ウラカンは綺麗に着地。

同じ行為をもう一度繰り返すと、

「……?」

何が疑問なのか、ノーヴェが黙って小首を傾げるマネをした。

「あ、あああああ、わかった！ きつとアインハルトさんは、テイオもクリスと同じで

飛べると思ってたんだああ！」

「な、なるほどっ！　つてなんですかソレええ!?　カワイイというかアホの子みたいですねええ！」

みなんでお腹を抱えて笑う。

『94点!』

「いや、ついに90点台が出ましたね……って、どうなさいました陛下?」

わたしは沸々とわき上がる想いを抑え切れない。

「うぐぐつ、わたしもアインハルトマイスターとして、みんなに負けてられないよっ！」
パイプ椅子を引いて立ち上がる。

「おおぐつと、ここで満を持して登場！　ヴィヴィ陛下自らご出陣ですっつ!!」

「セ——ット・ア————っプ！」

わたしは大人モードになると、桜の木の枝に飛び乗った。

「7番、高町ヴィヴィオ——アインハルトさんのやんちゃ時代をやりますっ！」

わたしは真剣な表情で左手を胸に当てる。

「列強の王たちを全て倒し、ベルカの天地に覇を成すこと、それが私の成すべき事です」
木の上で見よう見まね——霸王流の演武を披露する。

「弱い王なら、この手でただ屠るまで——」
さらに演武を行う。

「弱さは罪です。弱い拳では……誰の事も守れないから」

「キヤアア！ 陛下カツコイイイ！ これが噂の、アインハルトさんの黒歴史なんです
すねええ!!」

わたしは桜の木から飛び下りると、ユミナさんに駆け寄った。

「どう？ どう？ 似てたかな？ わたしも直接見たことないんだけど、ノーヴェから
何度も話を聞いて、台詞を暗記しちゃったんだ」

「ないわ」と呟いて、ヴィータさんがなのはママから鉄拳制裁を食らっている。

モノマネの良し悪しはさておき、わたしのアインハルト愛が評価されたのか、得点が
伸びて行く。

そして、

『99点!』

「やったああ!」

「陛下やりましたね!」

抱き合つて喜んでいると、ユミナさんの大事な記憶の箱の蓋が開いた。

「そ、そういうことだったんだ……」

「ユミナさん?」

「私、今の台詞見たことあるんですよ。前にクラスの課題でノートを集めたときなんです。アインハルトさんのノートの余白に、やたらと色んな台詞が書き連ねてあつて……」

「まさか、それつて……?」

「はい。今にして思えば、こんな前口上にしようとか、こんな決め台詞にしようとか、授業中に一生懸命考えていたんでしょね。」

あの頃は、アインハルトさん、アニメや漫画が好きなのかな、スーパーヒーロータイムかな、ぐらいにしか思わなかつたんですが……」

わたしはじゅるりと唾液を飲みこんだ。

「それ、ちよー貴重じゃないですかああ！ わたしも読んでみたああい！！ あく、今度授業で使うので、昔のノート貸してくださいって言ってみようかな」

貸してくれるだろうか？

「それはおもし……いいお考えだとは思いますが、陛下、事前に伝えると感づかれて証拠隠滅される恐れがありますので……」

「なるほど。いきなり言って、いきなりお願いするのがいいかもですね」

「ええ、やるなら奇襲です！」

「ふっふっふ、流星はユミナさん、黒いですねえ」

「いえいえ、陛下ほどでは」

キヤアア——と、2人して手を合わせる。

「ホント、陛下ってそういうの好きですよね」

「ええ、丸くなった今のアインハルトさんも素敵ですが、初期の、人に懐かない野良猫みたいなアインハルトさんも捨て難いんですね」

「あく、それなんとなくわかるかも」

——きやあああ〜〜つ！

などと意気投合していると、凜とした声が聞こえてくる。

「——モノマネ。私も参加させていただいてよろしいでしょうか？」

「はい、もちろんです！」

「自由参加ですからね、わたしを越えるスーパーアインハルトさんを見せてください
ね」

わたしとユミナさんは相手も見ずに「オツケー、オツケー」と即答してしまう。

「ありがとうございます。」

それでは、8番、ハイディ・E・S・イングヴァルト——霸王断空拳をやります」

「おおつ、霸王流の奥義をマネるとは通ですね。それにアインハルトさんそっくりな
衣装にバイザーなんてつけて、もうノリノリじゃないですか」

「それではハイディさんお願いします……って、あれ？ ハイディ・E・S・イングヴァ
ルトって、アインハルトさんのフルネーム……というか、陛下？」

「はい、なんででしょう？」

「ハイディさんの手に、何だかすごい魔力が集まってるような……」

「おや、奇遇ですね。わたしも感じているところ……」

わたしとユミナさんは、声と手のひらを重ねる。

「ちよ、コレって……」

「2人とも覚悟してくださいね……」

「本物じゃないですかああ——っ!!?」

「はああ……ッ！ 真・霸王断ッッ空々ッ拳ッ!!」

わたしとユミナさんの目の前で、長机が粉碎。さらに衝撃が地面をえぐり、

——ズツドオオオオオオオオンッ!!

「びやアアアアアアア——っ!!」

わたしとユミナさんは仲良くドロンボーやロケット団のように空高く吹き飛ばされる。

そして、

——ドツボくくくン！

庭の噴水に着水。

「ぶはっー！」

「けほっ、けほ」

水面に顔を出したわたしとユミナさんを、顔を真っ赤にしたアインハルトさんが見下ろしていた。プルプル震えている。

「少しでもお花見に参加したくて、用事を早く済ませて駆けつけてみれば……もう、ヴィオさんもユミナさんも知りません！」

「はわわく」

霸王様が激おこでいらっしやる。

こうなったら……わたしとユミナさんはアイコンタクトで頷き合う。

「ユミナさんっ！」

「了解、ヴィヴィオちゃん！」

「とおおとおおとおお!!」

全力全開。

2人で噴水の縁から大きくジャンプ。

アインハルトさんの目の前に着地すると、額と手のひらを地面につけた。

「ごめんなさいでしたああ——っ!!」

奥義ダブルジャンピング土下座、なんだけど……許してもらえるかなあ？

高町家に10人ヴィータがいる

ある日のジム帰り。

少し暗くなった住宅街をひとり歩いてみると、

——ガッ！

わたしは背後から口を塞がれ、とんでもない膂力で路地裏に引きずりこまれた。

「うう〜っ!？」

「こらっ！ 暴れるな！」

「パンツが脱がせにくいだろうが？」

「ちつがーう！ あたしは阿良々木暦じゃねええ！」

「——つて、その声は……P S……V i t aさんじゃないですか！」

「読み方として間違っちゃいないんだが、あたしの名字はP Sじゃねえ」

「P Sをプレイステーションって呼ぶと長いので、わたしとしてはピーエスと呼びたくなるんですが？」

「そこは同意してやってもいいが、あたしの名前とは関係ねー」

「それでV i t aさん、どうしてこんなことを……?」

「いや、ちよつと待てヴィヴィオ。文章で読んでるやつは、もうV i t aでいいか——つてな雰囲気だが、お前ラテン語読みで『ウィータ』って呼んでるだろーがっ！ 濁点が足りねえんだよ、濁点が！」

「失礼。噛みました」

「まったく噛んでねええ！」

「ウィータで画像検索すると、雑貨屋かヴァンガードのカードしか出てきませんしね」
《元気の魔法（マジカルチャージ）ウィータ》——バミューダ△のマーメイドである。

「まあ、あんまり変わらんよーな気もするが……じゃなくてだな」

「わかっています。ウィータで画像検索すると、まだまだあたしがトップだぜ——みたいなことを言いたいですよね？」

「……あー、うん、話、戻していいか？」

「W i i i」

閑話休題。

改めてヴィータさんを見ると、口には白いマスク。真っ赤なトレンチコートに、スパイっぽいソフト帽を身に着けている。

まるで、季節外れのサンタクロースみたいな格好で取り出したのは、プレゼントではなく意外な言葉だった。

「一度しか言わねえ……いいかヴィヴィオ、あたしに大人モードを教えろおおッ!!」

「ええええええええええッ!?!」

とんでもないことになってきましたよ。



頭をかきながら、

「簡単に説明すつとだな、毎年春先、海鳴に住んでるじーちゃんばーちゃんの所に顔を出してたんだが……。」

今年、はやてたちと時間の都合が合わなくてな、明日、あたしだけ先にひとりで行くことになった——ってわけだ」

「なるほど〜」

わたしはピンときた。

「ヴィータさん成長しないから、お爺ちゃんお婆ちゃんが心配するよ?」

「そーいうこった。去年までは、何だかんだでシャマルだったりはやてだったり変身魔法で調整してくれてたんだが、今年はひとりだからな」

ヴィータさんひとりやってやれないわけではないけど、慣れない魔法はどうしても安定感にかけるといふ。

「それで……ん?」

ふと、疑問に思う。

「それなら、ミウラさんに教われればよかつたんじゃないですか? わざわざわたしのところに来なくても、ミウラさんの性格なら、喜んで教えてくれたと思いますけど」

「……そこは察しろ。なんつーか、教え子に頭を下げるつてのものな」

ヴィータさんは頬を赤らめた。

恥ずかしい——ということか。

プライドの問題なのだろう。

「それに……」

今度は眉をひそめる。

「なんつーか、あいつの大人モードってあんま成長しないだろ」

「あゝ」

納得しました。

「わっかかりました。わたしが大人モードを教えれば、ヴィータさんもバインバインになりますからね！」

「マジかッ!?!」

「はい、マジです。ひよつとしたらシャマルさんどころか、シグナムさんよりもバインバインになれますよオオ！」

ヴィータさんが「うおおおおッ！」と拳を突き上げる。

「じーちゃん、ばーちゃん、あたし立派に育ったぞおお——っ!!」

「——話は聞かせてもらったああ！」

夜空から、凜としつつも愛嬌のある声が聞こえてくる。

「だ、誰だッ!?!」

月を背に、ゆつくりと舞い降りる大魔王——じゃなかった、

「なのはママああ!?!」

「なのはだとおお!?!」

ちなみに、わたしたちの位置からだどパンツ見えてます。

ママ、もうちよつと気にしようね。

「てめー、どうしてここにいやがる！」

「そりやもちろん、ヴィータちゃんと同じ職場だからねええ！」

「くうう！」

「大事な同僚が、いつもより早い時間、しかも、こそこそトレンチコートなんかに着替えて帰ろうだなんて——おもしろ……じゃなかった、心配で心配で、私はあとをつけてきたんだよ！」

ヴィータさんが舌打ちした。

「そうだった、おめーは昔からすぐ余計なことに首を突っこむやつだったな」

「まーね。それがまさか、こんな楽し……深刻な事態になっていただなんて！」

「だああ——っ！ あたしはヴィヴィオに頼んでんだ。今回はおめーの出番はねーよ！」

すると、なのはママが「チツチツチ」と指を振った。

「そんなつれないな。変身制御を安定して使えるようヴィヴィオに教えたのは、何を隠そうこの私——高町なのは教導官なのにな」

「マジかッ!？」

「オフコース。私のは、あのユーノ君直伝だからね。毎日変身して、いわば大人モードのエキスパートたるヴィヴィオに、私の変身魔法理論が加われば鬼に金棒……いや、ヴィータちゃんにグラブファイゼン！ 間違はなくバインバインツ!!」

なのはママの台詞にタイミングを合わせ、わたしは自然な動作で大人モードへ。ヴィータさんの目の前で、2人の胸が大きく揺れる。

「くっ……し、仕方ねーな……きよ、今日だけはなのは、おめーに教えさせてやる」

「ありがと、ヴィータちゃん」

そうと決まればヴィータさん、思い切りがいい。

なのはママとわたしに向かって敬礼すると、

「高町母娘教導官、大人モードのご指導よろしくお願いしまーすっ!」

とはいえ、いくらなんでも路地裏で練習ともいかなかったので、我が家に帰って練習——という流れになったのだけど。

リビングで待ち受けていたのは烈火の将。

「——ヴィータ、まさかお前が大人モードとはな」

「……シグナム、てめえ、どうしてこいつんちにいるんだよッ！」

「ごめくんヴィータ。私がひさしぶりにシグナムに会ったから、たまには一緒にうちで夕食でもどう——って誘っちゃって」

フェイトママが、片手でゴメンのポーズを取っていた。

「チツ、まあいい。今更1人や2人増えたところで……」

「私もいるがな」

「——って、ザファイラ、おめーもか!？」

狼フォームのザファイラが、絨毯の上で丸くなっていた。

「最近のミウラの様子を、ヴィヴィオに訊こうと思ったのだ」

あゝ。

「ザファイラパパ、ご苦労さまでーす」

「くうくつ、どいつもこいつもあたしの邪魔しやがってええ〜」

ヴィータさんが今にも爆発しそうだ。

「でもでも、ヴィータさん。考えようによつてはプラスですよ。ほら、ザフィーラつて人型になったり、場合によっては子犬モードとか、結構変身魔法に長けてると思うんですよね」

「そ、そういやそーだったな……」

ヴィータさんは決意をこめて「よし」と小さく頷いた。

「こうなったら、お前から全員であたしを鍛えやがれ!」

「よく言いました。流石は夜天の切り込み隊長ヴィータちゃん。今日は、一気にレベルアップしちゃうよおお!」

「おおー!」

と、なのはママとヴィータさんは意気込んでいるのだけど……。

わたしをのぞいて、ここにいるみんなはすでにレベル99。カンストしていると思うんだけど、まだ上がるのだろうか？

とはいえ、これだけのメンバーがそろっているのだ。

夕食班と教導班に分かれても問題なし。

短時間であっても、ヴィータさんもみっちり練習可能。飲みこみも早い。あつという

間にバインバインのヴィータさん大人モードが高町家に爆誕する。

「これでもう、海鳴のじーちゃんばーちゃんに心配されることもないな」

「——それはどないやる？」

「だ、誰だあつ!?!」

「ヴィータ。いきなりそないにバインバインになったら、じーちゃんたちが驚いて、腰を抜かすかもしれへんよ?」

リビングに現れたのは、柔らかな関西弁を操るショートカットの女性。

「は、はやてか!?!」

さらに、金髪で落ち着いた雰囲気をもつ大人の女性が顔を出す。

「もう、そういうのは私に相談してくればよかったのに!」

「シヤマルまで、どうしていんだよっ!?!」

「いや、ヴィータにシグナム、それにザフィーラまで、3人そろってなのはちゃんちだなんて……これは何かあるな、思ってたな」

はやてさんが笑っている。

「確かに、急に3人でうちでご飯とか、何事かと思っちゃうかもですよね」

「せやから、夕食の支度をしていたリインとアギトには、おかずをタツパーに詰めてこつちを持ってくるよう連絡済みや。もうじき着くんやないかな」

「うわ……」

「どんどん増えやがる……」

すると、ピンポーン——とインターホンが鳴った。

「もう来たのかよ……追い返してやる！」

「ちよ、ヴィータさああん!？」

追いかけて玄関に向かうと、そこにいたのは、ちっちゃなピンクの竜召喚士と、ツンツン赤髪の竜騎士だった。

「おひさしぶりです。あのく、フェイトさんはいらっしやいますか?」

「本局の用事で近くまで来たもので……」

「キャラにエリオ……?」

「お前らもかよおお!？」

「ヴィヴィオにヴィータさん? え、え、何なんですかこの集まりはああ!？」

その後、無事にリインとアギトも到着。

「図らずも、高町家にママたちの関係者が勢ぞろいした。

「せっかくなんで、みなさん事情を聞いてもらえますか？」

ヴィータさんもついに観念したのか、わたしの隣でガツクリ肩を落としている。

結果。

はやてさんとシャマルさんが、みんなに変身魔法をかけることで、ミッドに引越してから約10年間。ヴィータさんが成長したであろう姿を、1年刻みで見比べることに成功した。

「うおっ、なんだこりや……」

「こ、これは圧巻ですねぇ」

うちのリビングに、ヴィータさんが10人も降臨している。右を向いても左を向いてもヴィータヴィータ……赤すぎて目が痛い。

「今日は私もヴィータちゃん！」

なのはママもいつになくハイテンション。

「へへ、このスカートの中って……」

「勝手にめくるんじゃねええ——っ！」

「にやはは」

仲良しなこと……。

とりあえず撮影してから、ヴィータさんに尋ねる。

「それでヴィータさん、どのヴィータさんにしますか？ どれか一人に絞ってイメージすれば、大人モードもやりやすいと思うんですけど」

「私はこつちのヴィータちゃんが……」

「去年はこれくらいやったから」

「でしたら、僕くらいのが」

「どーせ詳しく覚えてないんだから、もっとバインバインに……」

「流石に無理だな」

こうして、希望と妥協により、理想の大人モードを一晩でマスターしたヴィータさんだったのだけど……。



翌日。

海鳴市。

時空管理局に所属するママたちの関係者が、昨日に引き続いて、ズラリと勢ぞろいしていた。

「……って、お前らまで来るなら、あたしが必死こいて大人モードをマスターする意味なかつたじゃねーかつ！」

「ごもつともである。」

「はやてさんが申し訳なさそうに謝罪した。」

「昨日、なのはちゃんたちと話しとつたら盛り上がってしまつてな〜」

「電話したら、アリサちゃんとすずかちゃんもお休みが取れるっていうから」

「私も、キャロとエリオを連れて母さんのところに顔を出しておこうかなつて」

「はは、来ちゃいました」

「僕たちも、まさかこんなことになるなんて……」

「いつになく大所帯だった。」

「ヴィータさんがプルプル震えている。」

「諦めろ、ヴィータ」

「そうよ、ヴィータちゃん」

「すでに子犬フォームになつているザファイラが「わん！」と吠えた。」

「守護騎士たちの同情が、逆に怒りを助長している気がしないでもないけど……。」

「ま、まあ、ヴィータさん。大人モードをマスターしたってことは、これからいつでも好きな時に海鳴に帰れるってことで……」

「そ、そうだよな」

たぶん、

「なのはママに誘われる回数は増えるかもですけど」

「それ、やっぱり、マスターする意味なかったじゃねえかあ——っ!!?」

大人モードに変身しても、なのはママに弱いところは変わらないみたいです。

D S A A ドリームタッグトーナメント 第1戦

1か月前のことだ。

いつものナカジマジムの練習終わり、次の大会について説明するノーヴェに、わたしは聞き返した。

「D S A A主催の、タッグチームでのトーナメント試合？」

「ああ。正式名称は『D S A A ドリームタッグトーナメント』。ゴールデンウィーク後半に開催される、ストライクアーツの人気イベントだな」

ミッドチルダにゴールデンウィークがあるかどうかはさておき、

「20n2の4人同時対戦形式に、総合ルールって……あく、こういう変則試合、前もあつたような……」

大人モード禁止大会のときだ。

リオが「ムムム」と唸る。

「タッグトーナメントって言うと、『宇宙超人タッグトーナメント』みたいだよね」

「いやいや、そんなキン肉マンみたいなこと言われても、せめて鉄拳にしとこーよ」

ちなみに、家庭用ゲームのキン肉マンも鉄拳もリリカルなのはも、全て発売元はバンダイナムコゲームスだったりするので、新作お待ちしてまーす。

「4月中旬に行われる予選会を突破した8チームが、トーナメントマウンテンという場所です合をする——ってルールだな」

うわ。

「トーナメントマウンテンって……」

ますますキン肉マン——夢の超人タッグ編である。天辺にトロフィーでも突き刺さっているのだろうか？

リオいわく、

「この大会、マッスルドッキングしたチームの優勝だね！」

「いやいや、そんな無理だつてグレート」

「いやいや、確かにこのメンバーの中で唯一の黒髪だけど、そんなキン肉マングレートみたいに呼ばれても、あたしヴィヴィオとはタッグを組まないから」

え？

「まさか、悪魔超人にわたしとリオの友情パワーが奪われていたなんてええ!!」

「うん、コロナと出場するだけだけどね」

隣のコロナも苦笑するしかない。

「初代グレートでもいいけど？」

「それ不幸なことがあって2回戦から別人だよねっ!？」

——と、まあ、キン肉マンネタも終わったところで、

「アインハルトさん、わたしとタッグを組みましようね!」

ところが、

「……どうでしょう。ヴィヴィオさんなら実力的に、ミウラさんと組んだ方がよいので

は?」

なーっ!?

「あ、アインハルトさん……?」

声が冷たい。何か怒っていらっしやるような……。

「私はフーカと師弟コンビで——」

「あー、すみませんハルさん。わたしはリンネと出るんで」

「……」

空気が固まったよっ!?

すると、おさげの少女が手を挙げる。

「あの会長、パートナーはジムが違っていても構わないんですか?」

「おう、流石はコロナ、いい質問だな。フーカには——一緒にマンションに住んでるから——昨日話したんだが、出場選手枠は、インターミドルより広い10歳〜23歳。U15やU19の枠にとらわれることのない……そうだな、一種のお祭り試合みたいなものだから、相手のジムや選手がオツケーなら問題ない」

「それはリンネさん喜びそうですね〜」

一緒に練習することはあっても、仲間として戦う——なんてことは、これまで一度もなかったからだ。

「ということば、わたしとアインハルトさんで1チーム——」

「はい。もう全てヴィヴィオさんにおまかせしま〜す……」

なんかもう投げやりな声がした。

「あと、リオコロで1チーム」

「リオコロ言うなああ!」

「あはは」

「残るミウラさんは……ミウラさんは……」

ナカジマジムには、もう上位ランカーと戦えるほどの選手はいない。

「ユミナさん出ちゃいます?」

いきなり話を振ってみる。

マナージャーでもあるアインハルトさんの同級生は目を丸くして驚いた。

「へ？ ちよ、そんな無茶言わないでよおお——っ!？」

「ほら、アタッカー兼タンクとヒーラーみたいな感じで」

「あ、なるほど〜って、リングの上じゃ真っ先に狙われちゃうじゃん！」

「チツ」

「ちつ——って、だからヴィヴィオちゃんシヤンテさんからDS陛下だなんて！」

「言われてないよっ!？」

もし言っていたら、シヤンテには最近クロからこっそり教えてもらっている魔女の呪いでさらにもちっちゃくなくれぬ刑である。

ん？

「そっか、まだクロが——」

「お嬢と出るって言ってたぞ？」

ルールーとだなんて、一癖も二癖もあるチームになりそうだ。

「つてことは、ミウラさんは……」

ぼっち。

「いいんです、いいんですよもう、ボクなんてええ——っ！」

「もう、ミウラさん。いつもの冗談ですよ、冗談」

「ううっ……やっぱりDSです」

失敬な。愛ですよ、愛。

「実はですね、わたしにいい考えがありました」

「ヴィヴィオ、それ、失敗フラグなんじゃない？」

「リオ、コンボイ司令官じゃないから大丈夫だって」

むしろ、人事面に関しては成功フラグだと言われている。

「わたし、前から一度見てみたかったですよね。いちファンとして、ミカヤさんとミウラさんの抜刀・抜剣コンビ！」

ナカジマジムにざわめきが走る。

「そ、それはわしも見てみたいですよっ！」

「ええ、ドキドキしますね」

手強いライバル——という以前に、観戦したいという欲求が上回る。

「てか、それ最強っぽくない？ あたしとコロナ負けちゃうじゃん！」

「わたしだつて負けるのは悔しいけど、お祭り試合なんですよ？ こーいう方が盛り上がるし、みんな喜んでくれるんじゃないのかな？ って思うんだけど」

何より自分が見たい。そして、戦ってみたいのだ。

「これだから高町家は……」

「いやいや、そんなサイヤ人みたいに言われても……」

ミウラさんに視線を向けると、それこそ孫悟空みたいにワクワクしていた。

「わ、わ、それ、いいんでしょうか？ ボクもやってみたい……ミカヤさんがよろしければ、ぜひお願いしたいですっ！」

「そうだな。あたしも面白いと思うし、いいんじゃないか？ じゃ、早速ミカヤちゃんに

連絡を——」

「その必要はないよ」

「[[[[[[ミカヤさんっ!?!]]]]]]」

現れたのは、ナカジマジムの顧問取締役であり、天瞳流抜刀居合の師範として現役選手でもある——ミカヤ・シエベルさんだった。

いつものように刀を持つてのご登場である。

「抜刀・抜劍コンビ——いいね、むしろコチラからお願いしたいくらいだよ」

「ありがとうございますっ！」

「いやいや、これで私にも勝ち目が出てきたわけだ。なにせ今大会には、百戦錬磨の最強

タッグが出場するからね」

「最強タッグ？」

「ああ、ジークとヴィクターのコンビだよ」

「うわ……」

「それは流石に……」

勝ち目がない。

現在のU19——格闘競技と総合魔法戦競技それぞれのチャンピオンがタッグを組んだということだ。

しかも、仲良しの幼なじみであり、チームワークにも疑う余地はない。

「でも、見てみたいし、戦ってみたいよおお——っ！」

まさに夢のタッグである。

「——おっと、忘れていた。私はこのことを伝えるに寄ったんだっけ。ナカジマちゃん、例の件、ジルとヴィクターが話をまとめてくれたよ。フロンティアジムの方もオツケーだそうだ」

「そいつはありがたい！」

「例の件？」

「ああ。タッグ戦の練習はこれから全員でやるとして、最終的にはチーム同士ライバル

になるわけだ。

そこで、ゴールデンウィークの前半、試合前、最後の特訓として、それぞれのタッグにあつた合宿先を考えている」

「じゃ、フーカさんはリンネさんと一緒にフロンティアジムで？」

「そういうこつた。いつもと違う環境つてのも勉強になるだろ。フーカ、ジルの特訓はあたしよりずっと厳しいぞお〜？」

「うっ……お、押忍っ！」

ジルコーチの練習は鬼も裸足で逃げ出すくらいと聞いているので、

——チーン。

「合掌」

「ヴィヴィさあ〜ん!？」

「もちろん、ヴィヴィオとアインハルトの合宿先も、とっておきの場所を考えてあるからな」

ん？

「——つて、さつきタッグを決めたばつかなのに？」

「あく、今朝この大会のことをアインハルトに話したら、

『わかりました。ヴィヴィオさんとのタッグなら出場しましょう』

なんて言っつてな。まあ、お前が断るはずもないと思っつて勝手に話を進めたんだが……」

あれ？

さつきはわたしではなく、フーカさんと組むような話をしていたのに……。

アインハルトさんがプルプル震えだす。

「か、会長っ!?!」

なるほど。

「もう、アインハルトさんてばツンデレなんですから。もしかして、わたしが最初にリオを誘ったからすねて——」

「ヴィヴィオ、ホントのことだからってあんまいじめるなっつて」

「ちよく、ヴィヴィオさああん！ ノーヴェさああん！」

真つ赤つかなアインハルトさんの反撃をヒラヒラ避けながら、わたしは『D S A A D リームタツグトーナメント』に想いを馳せる。

こうして、無事に予選会を突破したわたしとアインハルトさんの2人は、ゴールデンウィークの始め、合宿で地球のイギリスへ赴くことになり、とある双子の使い魔と再会することになるのだけど……。

その時の様子はまたいつか、『ゴーストハンター・ヴィヴィオ』でお話したいと思います。

そんなわけで、次回はいよいよ本戦。

『D S A A ドリームタッグトーナメント 第2戦』で——リリカルマジカル、がんばりま
すっつ!!

D S A A ドリームタッグトーナメント 第2戦

——パンパンッ！

空砲ではない。魔法の花火が青空に大輪の花を咲かせる。

『D S A A ドリームタッグトーナメント』本戦。

試合会場のトーナメントマウンテンに、8チーム16名の選手たち。そして、連休と
いうこともあり、いつも以上の観客が集まっている。歓声もひとしおだ。

そんな中、

「はあ、はあ、間に合った〜」

「ええ、ホント、ギリギリでしたね」

地球から戻ったわたしとアインハルトさんは、息を切らせながら会場入りした。

「ここで、全管理世界から集められた選りすぐりの強豪タッグ8チームが、トーナメント
マウンテン山頂に眠る幻のタッグトロフィーを目指して、死闘を展開するわけですね
！」

「あれ？ そんな大会でしたっけ??」

「まあまあアインハルトさん、気にしたら負けですよ。勝てばいいです、勝てば！」
すると、

「よっ！ お前ら久しぶりだな、元気してたか？」

わたしとアインハルトさんに声をかけてきたのは、

「ノーヴェ！」

「会長」

「まったく……お前らだけ中々合宿先から戻ってこないから、もう間に合わないかと思っただぜ」

「はは、ゴメンね、ノーヴェ」

「ご心配をおかけして申し訳ありませんでした」

「それにしても、2人ともちよつと見ない間に大きく……なってるねーな」

「ちよ、ノーヴェ!!」

「ノーヴェさんっ!？」

「ま、その調子なら大丈夫か」

と笑って、ナカジマジムの会長は話を続ける。

「んで、合宿先での修行はどうだった？」

「いや、もう色々ありすぎて……」

特に、はやてさんのSAN値とか……。

「はい。色んな意味で貴重な体験でした」

「わふ」

「その口癖は気になるが、まあいい。2人とも思い切りやってこい！」

「はいっ!!」

わたしとアインハルトさんは、巨大迷路を抜けてリングへ向かう。

こうして対戦相手を決定するのだ。

けれど、

「まさか、1回戦の相手が陛下……じゃなくて、ヴィヴィオっちとはね！」

待ち受けていたのは傍若無人。阿澄佳奈ボイスのちっちゃなシスター。

「シャンテ！」

「対戦相手はチーム・カテドラルですか」

聖王教会系の上位ランカーとタッグを組んだバランスのいいチームだ。

「いくら陛下……じゃなかったヴィヴィオっちが相手でも、今日は手加減しないよ」

うん、もう陛下でいいし、

「手加減しないのはいいんだけど、シャンテ大丈夫？ わたしと全力で戦って、あとで

デイドとオットーからお仕置きされない？」

「うっ……た、たぶん平気かと……いやいやいや、そんなことであたしの精神は揺るがな

い！」

うん、本当に平気かなあ。

メチャクチャ揺らいでいるように見えるんだけど……。

——カーン！

そんな感じで始まった第1試合。

シャンテの重奏——自身の術は確かに驚異だ。けれど、わたしの神眼ならセオリー通

り見極めることができる。

さらに、アインハルトさんはいえればテイオの能力で回復可能。

双剣のシャンテと再生するアインハルトさんの戦いは、なんとなくアーチャーVS
バーサーカーを思い出す。

「やっちゃえ、バーサーカーっ！」

「アインハルトですよおっ!？」

などと叫びつつも、きっちりシャンテチームを撃破。わたしとアインハルトさんは2
回戦へ駒を進める。



第2試合は、ミウラさん&ミカヤさんが、番長——ハリーさんとエルスさんの凸凹コ
ンビと激突。

エルスさんの鎖——バインドをミカヤさんが断ち切り、もう1本。ミウラさんの抜剣
がエルスさん本人を薙ぐ。

番長がひとりで粘るも、2本の剣の前には為す術がない。マットに沈む。

第3試合は、リオとコロナが、フーカさん&リンネさんの1060万パワーズと激突。ちなみに、リンネさんが人間強度1000万パワーで、フーカさんが60万パワーだそうです。

ある意味、同門対決とも言えるこの一戦。

格闘競技のルールだったら明らかに1060万パワーズに軍配が上がったのだろうけれど、タッグトーナメントはインターミドルと同じ総合魔法戦競技ルール。

コロナが巧みな魔法で重戦車のごときリンネさんを足止めしている間に、リオがフーカさんを撃破。

あとは、2人がかりでリンネさんを封殺してみせた。

第4試合は、優勝の大本命——ジークさんとヴィクターさんのベルカミツシヨネルズVSルーラー&クロの魔女っ娘コンビ……だったのだけど。

ベルカミツシヨネルズが、ルーラーとクロの魔法を物ともせず一気呵成——全てを薙

ぎ倒す圧倒的パワーを見せつけて押し切った。

……ように見えた。

「ジークさんたち、もうちよつと余裕を見せてもよかったのにな」

「おそらく、ルーテシアさんとクロの魔法を警戒していたのでしょうか」

無限書庫での苦い思い出がそうさせたのかもしれない。

●
そして2回戦、第1試合——準決勝。

念願——とでも言うべきか、わたしとアインハルトさんのタッグVSミウラさんとミカヤさんのタッグ——『チーム抜刀斎』との戦いが実現する。

「なんとというるろうに感……」

ミカヤさんが苦笑する。

「まあ、ヴィヴィオちゃんのチーム『セイクリッドカイザーズ』も、いい勝負だと思うけどね」

「あゝ、それは」

「はい。実に素晴らしいネーミングセンスだと思います！」

あゝ。

「うちのアインハルトさんがいたく気に入っているので問題なしですっ！」

初代覇王の頃から、基本真面目だけどちよつとズレている——という点では、孫悟飯みたいな感性なのだろう。

グレートサイヤマンも緑を基調とした衣装だし……。

ミウラさんが、喜々としてわたしに向かつて宣言する。

「ヴィヴィオさんとは、ウインタージャケットで戦えませんでしたから、すつごく楽しみでした！ 今回はボクが勝たせてもらいますからね！」

「フッフッフ、それはどうでしょうか。例えばミウラさんが『必中』の精神コマンドを使つたとしても、わたしの神眼はひらめいちやつてますからね、全て避けてみせますよ」
わたしとアインハルトさんはリングの端まで下がる。

——3、2、1、カンッ！

ゴングが鳴って試合開始。

ミウラさんが開幕点火で突っこんで来るかと思つただけど……。

わたしと相對したのは、

「ミカヤさんっ!？」

「意外だったかい？」

「はい。正直意外でした」

「ミウラちゃんには悪いけど、私も一度君と公式戦で戦ってみたかったんだよ——」

言うが早い、縦、横、斜め、突きと、それこそ九頭龍閃のごとく打ちこんでくる。

わたしはそんな晴嵐の刃をギリギリのタイミングで避けていく。昨年まではとても見切れなかった速度、そして角度の斬撃に反応して距離を取る。

しかし、わたしの得意なフリツカージャブも、こちらよりリーチの長いミカヤさんには通用しない。カウンターも同様だ。接近しなければ届かない。

そういった意味では、ただ単に『戦ってみたかった』——だけではないのだろう。ミウラさんではなく、ミカヤさんがわたしの相手をする事には、ちゃんとした意味があるのだ。

すると、わずかに動きに変化が生まれる。

いくら達人のミカヤさんでも、永遠に刀を振るうわけにはいかない。どこかのタイミングで連撃に隙が生じる。

——踏みこめる!

しかし、わたしは逆に大きく後ろに下がった。

「へえ、踏みこんでこなかったね？」

ミカヤさんは剣士だ。純粋な格闘タイプに比べれば、どうしても密着戦闘は後手に回る——と、誰もが思うだろう。しかし、あのミウラさんとタッグチームの訓練をしてきたのだ。当然、ミウラさん相手に対策を練ってきたはず。

うかつに間合いに入れば、逆にライフを刈り取られるのはわたしだ。

「逃げてばかりじゃ私には勝てないよー」

おっしやる通り。

だけど、これはタッグチームバトル。

わたしがミカヤさんを引きつけておけばおくほど、アインハルトさんがミウラさんと一対一で戦える。

ミウラさんには悪いけど……実力は圧倒的にアインハルトさんが上。ならば、このままアインハルトさんにミウラさんを下してもらい、その後、2人がかりでミカヤさんを仕留める——というのが上策だ。

わたしとアインハルトさんはアイコンタクトを交わし作戦を実行に移す——が、

「スイッチ！」

つて、どこのSAOっ!?

ミウラさんとミカヤさんが位置を変える。

「まさか——」

「お待たせしました、ヴィヴィオさん！」

一瞬で近づくミウラさん。突然の交代に距離感がつかめない。

それに比べてチーム抜刀齋は、わたしとアインハルトさん。ほとんどリーチが変わらない2人。違和感なく試合を続行できる。

ミウラさんの振り上げた右足が、ハンマーのように振り下ろされる。飛び蹴りだ。さらに近接からのパンチ——そして再び蹴り。

連刃旋空刃によつてわたしの体がサンドバッグのように吹っ飛んだ。

「ヴィヴィオさんっ!?!」

「おっと、アインハルトちゃんにはもうしばらく私の相手をしてもらわないとね！」

さらに追い打ちをかけるミウラさん。追撃の手を緩めない。わたしは立ち上がることを諦めて転がる。その直後、ミウラさんの足裏がリングをえぐった——とところで、

——カアアン！

第1ラウンドが終了。

ゴングに救われた。

インターバル。アインハルトさんが話しかけてくる。

「厄介ですね、あのスイッチは」

「はい。わたしみたいなテクニカルヒッターには相性悪すぎです」

「おや、諦めますか？」

「まさか」

「では、プラン・ロツテで。ヴィヴィオさん信頼してますよ」

やれやれ、双子の使い魔から聞いたときには一番反対していた作戦のくせに……。

「はい、まかせてください！ その代わりにアインハルトさんも外さないでくださいよ」

「ええ、もちろんです」

——カーンッ！

第2ラウンド開始の合図。

1ラウンドと違い、わたしとアインハルトさんは互いに離れてリングに立つ。

これだけ距離があれば、いくらミウラさんやミカヤさんでもうかつにスイッチはできない。

代わろうとすれば、逆に追いかけて攻撃を仕掛けることも可能だろう。

しかし、

「これを待っていました！」

「どうやら読みが甘かったようだね、ヴィヴィオちゃん、アインハルトちゃん——」

駆け出した2人はアインハルトさんを完全無視。2人がかりでわたしにロケット点火。

ジークさんやヴィクターさんですら反応できない速度——それこそ弾丸のようなスピードでわたしとの距離を詰める。

そして、最高速から一転。抜剣と抜刀、引き抜かれた二振りの剣が、同時にわたしを

襲う。不敗の剣だ。

けれど、この感覚——リオのお爺ちゃん——レイ総師範と相對したときのことを思い出す。わたしの神眼が、蹴りと刃それぞれの軌跡をゆつくりと写し出す。あのときは偶然だったけれど、今のわたしはこの集中力を意識的に操ることができる。

だから、

——ギイイイイン！

最強の矛と盾。矛盾。反発する魔法力が激しく軋んだ音を鳴らした。驚きの声を上げたのはわたしではなく、チーム抜刀斎の2人。

「どうして!?!」

「まさか!?!」

わたしはミウラさんの脚を、ミカヤさんの晴嵐を、それぞれガツチリ受け止めていた。それも、両腕で絡め取り固定する。

「全力全開のセイクリッドディフェンダーなら、お二人の攻撃も防げますからっ!」

「でも、そんなことしたら反撃用の魔力が足りなくなるはずでは!?!」

「忘れたんですか、ミウラさん? わたしたちもタッグチームなんですよ。お二人がわ

たしとアインハルトさんが離れることを待っていたように、わたしとアインハルトさんも、2人がわたしを狙う瞬間をずっと待っていたんです——」

2人がハツと気づいた時には、すでに、背後にアインハルトさんがいた。

「霸王！ 断ツツ空々ッ拳ツツ!!」

右拳、左拳、それぞれに力をこめて、手刀の形で振り下ろす。両腕から放たれる必殺の一撃が、同時に2人の首を狙う。

「くっ——」

必死に飛び退ろうとするミウラさん。しかしその脚はわたしにガツチリつかまれ動けない。

ミウラさんは腕をクロスして断空拳を受け止めようとするが、
「うわあああああ！」

勢いに乗った霸王の一撃は両腕を粉碎。ミウラさんのライフを一瞬で削り取った。

一方のミカヤさんは晴嵐を諦め、手を離して下がるも、

「ソニックシューターっ！」

わたしだってこれくらいの魔力は残っている。牽制の光弾に気を取られたミカヤさんはダツシユで接近したアインハルトさんの拳を避けることができず、くの字になってリングに沈む。

——カン、カン、カーン！

この瞬間、わたしとアインハルトさん——セイクリッドカイザーズの決勝進出が決定する。

「やりましたね、アインハルトさんっ!!」

「はい、ヴィヴィオさん、やりました!!」

2人でハイタッチ。

すると、

『わあああああああああ!!』

ひと際大きな歓声上がる……が、

「これ、わたしたちの試合じゃない！」

「もう一つの試合会場からです！」

リオコロVSジークさん、ヴィクターさんのベルカミツシヨネルズだ。

担架で運ばれていくミウラさんとミカヤさんを横目に、わたしとアインハルトさんは急いで別のリングへ向かう。

嫌な予感がする。

走る、走る。

そして、

「リオっ、コロナああ——っ!!」

わたしたちが駆けつけたとき、その試合会場はボロボロだった。所々に巨大な陥没が発生しており、砕け散ったゴライアスの残骸が無残にも弁慶のごとく仁王立ちしている。

担架で運ばれていくコロナの姿。

「リオ、リオはどこ?!」

「ヴィヴィオさん、あちらです！」

ドラゴンボールみたいに、リングの壁に背中からめりこんでいた。

「リオっ！」

急いで駆け寄ると、パラパラと石の欠片と一緒にリオの体が落ちてきた。魔力も限界だったのだろう。落下と同時に大人モードが解除される。

「リオ、リオ、大丈夫っ!?!」

わたしは親友の体を抱きかかえた。

リオが最後の力を振り絞って言い残す。

「ヴィヴィオ……よく聞いて……ベルカミツシヨネルズは——」

第3戦に続く!

D S A A ドリームタッグトーナメント 第3戦

「ヴィヴィオ……よく聞いて……ベルカミツシヨネルズは——」

まさか、何者かに操られているとか？

あるいは、大きな弱点があつて、リオはこんなボロボロの体になりながらも、攻略の糸口を見つけてくれたとか？

それとも他に——

「リオ、リオ、教えて。ベルカミツシヨネルズがなんだっていうの！」

八重歯のカワイイ親友の少女は、弱々しい声で告げる。

「ジークさんとヴィクターさんは……ブラゴとシエリーのペアに似てる……」
ガクッ。

「それなんて金色のガツシユベルウウ——ッ!？」

いや、確かに似てるけどねええ！

あの2人のタッグ。白黒の色合いとか、貴族のお嬢様だったり、すっごい強いところか！

——はっ!?

思わず抱きかかえていたリオから手を離してしまい——ゴチン!

頭から落下したリオは、それがトドメの一撃になったのかきゅくと気絶する。目の前で担架に乗って運ばれていく。

「ヴィヴィオさん……」

「はい……何の役にも立たない情報でしたああ!」

だけど、もしジークさんとヴィクターさんがブラゴとシエリーだった場合、当然金髪のわたしがガツシユベルであり、コロナがテイオ、リオは……ウマゴンポジションなのだろう。

メルメルメ。

だとすればアインハルトさんって……。

緑の衣装を基調としたキャラ……思い浮かばないこともないけど、パワー不足。

強くて、グリーン……メロンつながりでビクトリームだろうか。Vの字で無表情のまま「ベリーメロン」と歌っているアインハルトさんを想像して、ひとり笑いがこみ上げてきたので頭を振る。

「何にしても、ジークさんとヴィクターさんがそれくらい圧倒的に強いってことですよね……それこそ、今のわたしたちでは勝ち目がないくらいに……」

いつかは、それこそガツシユベルのように強く成長したら勝てる日が来るのかもしれないけど、今はまだ無理。

だいたい雷撃の術を操るといふなら——確かにフェイトママから学んだ魔法はあるけれど——雷帝の子孫ヴィクターさんの方が、遙かにガツシユベルに近い。

「アインハルトさん、正々堂々Ionionでやって負けるのと、奇策を使ってでも会場を沸かすのと、どっちがいいですか？」

「そうですね、普段の私なら前者ですが、今回はお祭り試合なのでしょう？」

「はい、そうなりますね。わたしとしては正直、練習を含めて、いつもジークさんに負けっぱなしというのもアレかなあ〜と思っているんですけど……」

「わかりました。私だっていつも負けるのは悔しいですからね。せつかくのタツグチームです。本当に勝てるかどうかは別として、双子の使い魔さんから教わったことも多数あります。こんな機会でもない限り、試せない技もありますし、やれるだけのことはやってみましようか？」

「はい！ 大番狂わせ、わたしたちの友情パワーで、奇跡の大逆転を狙ってやりましよう！」

こうして、わたしとアインハルトさんは決勝の舞台へと駒を進める。

準決勝から1時間後。

ついに、D S A A ドリームタッグトーナメント決勝、その時がやってきた。

リオとコロナも目を覚まし、ノーヴェと一緒にセコンドについてくれている。

そして——目の前には黒と白。U19の格闘競技と総合魔法戦競技それぞれの象徴でもあるチャンピオン——ジークリンデ・エレミアとヴィクトーリア・ダールグリユンのタッグが立っている。

「まさか、こないなトコでヴィヴィちゃんとハルにやんと試合ができるなんてなー、今日は楽しもうな〜」

「はい。コロナの仇は必ず取らせてもらいますからねっ!」

「ちよ、あたしの仇はああ——っ!」

と、リング外から聞こえたけれど気にしな〜い。

アインハルトさんが一步前が出る。

「ジークさん、ヴィクターさん、今日は一槍お願いいたします」

「もちろんや。今日は目一杯仕合おーな」

ジークさんには、これから戦いを繰り広げる——という緊張感は一切ない。

「はあく、まったく、お祭りとはいえ公式試合なのでから、そんなゆるゆるでどうするんですか」

「でもなく」

「ジーク！」

「はう〜」

かんにんなー、と言いながらヴィクターさんに謝っている様子は、

「何ていうか、よそのうちの様子を見てみたいですね」

「はい……」

2人がコチラを向いた。

「あの子たちにチャンピオンらしい試合を見せますわよ！」

「そーいうことらしいから、最初から全力でいかせてもらおうで！」

「はい！」

「望むところですよ！」

——3, 2, 1, カアアアア〜ンツ!!

「鉄腕解放——」

前言通り、ジークさんは最初から全力全開だ！

アインハルトさんが構える。

「こちらでも出し惜しみはなしですね」

「はい。それに、あの状態のジークさんを破つてこそ意味がある——ですよね？」

「ええ」

ジークさんがひとり前に出る。

低空からダツシユ。反応。わたしとアインハルトさんも駆け出すと、リング中央、2

対1で激突した。

一方、ヴィクターさんは動かない。

様子見、それとも甘く見られているのか、開始地点で銜槍——ハルバード片手に腕組みしたまま。まさに王者の風格。

だけど、それならそれで構わない。

「先にジークさんを叩くだけ！」

「2対1なら勝たせてもらいますよ！」

アインハルトさんの右ストレート。ジークさんはわずかに体を捻り、腕を取る。得意

の投げ技に入ろうとしたところで、わたしのフリツカー。仕方なく腕で弾いたところでアインハルトさんが脱出。

決して押されているわけではない。けれど相手がジークさんひとりだと考えると、試合内容では完全に負けている。

「呂布と3対1戦った、劉備、関羽、張飛の気分ですね」

「それは、なのはさんと4対1で模擬戦をした、スバルさん、ティアナさん、エリオさん、キャロさん、みたいなものですか？」

「ええ、そんな感じですよ——」

わたしとアインハルトさんは大きく左右に飛び退くと、

「ディバインバスタアア——ッ！」

「霸王——空破断ッ！」

2方向からのロングレンジ攻撃。

ドオオン——と煙が上がるが、

「あいたたた……」

ジークさんは手をぶらぶらさせているだけでビクともしない。

「うわ〜」

「これを防ぎますか……」

「危ない危ない、ホンマにええチームワークやな〜。うちとは大違いや〜」

後ろからツツコミが入る。

「そんなことありませんわよ！　うちだってチームワークは——って、ジーク上っ！」

「へ？」

スコーン！　と後頭部に光弾が当たる。

「あたっ！　なんや今の!？」

「はーい、わたしの魔法弾でーす」

同じチームのアインハルトさんですら目を丸くしている。

「相変わらず器用ですね」

「へへっ、はい！　どんな『鉄壁』でも、1ターンが終わればゆるゆるですからね〜」

そう会話しながら、わたしとアインハルトさんは再び合流する。あまり離れないよ

う、いつでも2人で対処できるよう並んで間合いをはかる。

「それにしても、ヴィクターさん前に出てきませんね」

何やらあちらはあちらで試合中だというのに言い争いをしている。

「そうですね。先程も声だけでした」

気づいた瞬間——走り出してハルバードを振るえば……あ、

「ひよつとすると、ヴィクターさんの武器が原因なのかも」

「とうとう?」

「ハルバードはリーチも長く、攻撃範囲も広いじゃないですか。だから、わたしとアインハルトさん、それにジークさんの3人で密着戦闘していると、どうしてもジークさんを巻きこんでしまう」

「なるほど。でしたら、このまま接近戦を続けていればヴィクターさんは戦闘に参加できないうち?」

「おそらく。ただし戦えない——というわけではありません。単に、ジークさんを入れ替わればいいだけの話ですから。そうなると、不利なのはダメージを負っているわたしたちの方で、体力と魔力を温存しているヴィクターさんの方が有利になります」

「そうこうしているうちに、ジークさんも回復するだろう。」

「でしたら……」

「はい。早いうちにヴィクターさんを巻きこんじゃいましょう。あわよくば、ヴィクターさんの攻撃を避けて、逆にジークさんにぶち当たる——同士討ちですね」

アインハルトさんがわずかに考えこむ。

「できますか?」

「はい。やってみせますよー！」

今のわたしが唯一チャンピオンに勝っているモノ。神眼——見切りの力なのだから。わたしとアインハルトさんはジークさんに向かって駆け出した。

「ステインガースナイプ！」

なのはママのアクセルシューターと同じ誘導弾。双子の使い魔から教わった魔法だ。威力は低い。けれど、スピードと追尾性能が高く、牽制攻撃としては今でも優秀。

狙いはジークさん——ではなく、ヴィクターさん。

5発の光弾が大きく曲線を描いて、頭上から襲いかかる。

「この程度でー！」

ヴィクターさんがハルバードを頭上で回転させる。バン、バン、バン——と打ち消されるが、残り2発が長い柄をかくぐり、側面からダールグリユン家のお嬢様に着弾する……も、ほとんどダメージはない。あの重装甲、堅すぎる！

しかし、

「そういうことですか！」

ヴィクターさんが止まって対処している間に、わたしとアインハルトさん、それに

ジークさんの戦場は、ヴィクターさんのすぐ傍まで近づいていた。

「ジーク、もつと離れなさい！」

「そないなこと言われても〜」

本来なら四つ巴——のはずが、わたしとアインハルトさんは直線上——ヴィクターさんとの間にジークさんを挟んで対峙する。

次の瞬間、

「四式『瞬光』！」

高く澄んだ、それでいて力強い声が響く。

「ひいひい！」

「うわっ！」

「くっ！」

ハルバードの穂先。青い稲妻をまとった突きが、ジークさんの体をかすめてわたしとアインハルトさんを襲う。敵は背後にあり。一番驚いたのはジークさんだったらしく、

「ちよ、ヴィクタアアっ!?!」

「邪魔です、ジーク！」

「なー」

チャンス。

「あだっ！ ちよい！ 待って〜」

パン、パン、パン——と、わたしのフリッカージャブがジークさんの顔面にヒット、ヒット、ヒット。

さしものジークさんも、前にわたしたち2人。味方とはいえ、後ろのヴィクターから放たれる鋭い一撃を気にしていたら、いつもの力が発揮できない。

先程までと違い、わたしのジャブが面白いように当たる。

ただし、一発一発のダメージが低いので、どちらかと言うと、ジークさんの百面相の方が面白い。

むしろ、全力で防ぐのはアインハルトさんの一撃。霸王の断空を食らえば、いくら鉄腕でも一気にライフを削られるからだ。

あれ？

ひよつとすると、このまま混戦状態。巻きこんで戦えば勝てるかもしれない——と
思った矢先、

「らちが明きませんわね。そんなに巻きこみたいなら、お望み通り巻きこんでさしあげ
ましょう！

——ジーク、避けなさいっ!!」

「へ?」

「何を!？」

「つて——」

ヴィクターさんがハルバードの石突をリングに叩きつける。同時に青白い光を放つ魔法陣が展開。

「百式ッ! 『神雷』!!」

わたしとアインハルトさん、ついでにジークさんをも巻きこんで、リング上の全てを飲みこむ膨大な魔力の雷が発生。全てが白に染まる。

サンダガもびっくり。

ギガデインとまではいかないが、ライデインぐらいの破壊力はあるようだ。

眩い閃光に引き続き、舞い上がった土煙が収まる。

「けほっ、けほっ……ヴィクター、やり過ぎや」

「あなたなら耐えてくれると信じていましたから」

「ウチは平気でも、ヴィヴィちゃんやハルにゃんは——なあ~~~~っ!？」

ジークさんが目を丸くして驚く。

わたしとアインハルトさんが神雷の直撃を受けても立っていたからだ。

それも、感電することなく、ほぼ無傷で――。

ヴィクターさんが眉をひそめた。

しかし、驚いているのはもうひとり。

「ヴィヴィオさん!？」

「ライトニングプロテクション――なのはママの魔法ですけど。ついでに言えば、うちのもうひとりのママは、雷撃魔法のスペシャリストですから」

わたしとアインハルトさんの会話を聞いていたのか、ヴィクターさんが頷いた。

「そういうことでしたか、フェイト執務官の……」

ここでカーンとゴングが鳴り、第1ラウンドが終了する。



「いや、属性防御の魔法はあんまり使う機会がないんで――」

アインハルトさんにも披露したことがなかったのだ。炎雷変換資質をもつリオと、もつと全力で試合をすることがあれば、見せる機会もあったのだろうけど。

「まったく、なのはママとフェイトママの娘で良かったですよ」

そうでなければ、この勝負、ここで負けていただろう。

「ヴィヴィオさん。これで、少なくとも神雷は攻略した——と考えてよろしいのでしょうか？」

「どうでしょう？　今回はジークさんを巻きこんでいましたから、ヴィクターさんが少し手加減していたかもですし……何より、わたしもごっそり魔力を消費しましたから、何度かは防げないかと」

まあ、それは大技を使ったヴィクターさんも同じだとは思いますが……。

あの人魔力量多いからなあ。

「だいたい、ジークさんごと神雷に巻きこむなんて思いませんでしたよ」

もつと小技の応酬になると思っていた。

「そうですね。信頼していた——というのもあるとは思いますが、それよりも、むしろ彼女の焦りが感じられました」

「焦り、ですか？」

「はい。焦り……というよりも、むしろもつと直接的な、私がジークさんに一撃を食らわせるのを嫌がっていたような……」

「それ『エレミアの神髄』が発動することを心配してたのかもですね」

以前より、もつと制御できるようになったらしいけれど、あれは反射行動。取り外しのできない常時発動系スキルみたいなものだ。

自分の意思だけでどうこうできる技ではない。

「あの状態のジークさんは、ちよつとしたバーサークモードですからね。乱戦状態ともなれば……」

「ヴィクターさんもタダではすまないでしょうしね」

パーティーアタックで敗北——なんて笑えない話だ。

まあ、何だかんだと言ってツンデレ……じゃなかった、優しいお嬢様なので、わたしたちにケガさせないようにとか、ジークさんを落ちこませないようにするためとか、色々理由はあるのだろうけれど……。

「何にせよ、ジークさんとヴィクターさんが強すぎるゆえの欠点ですよね」

単騎で最前線に立って破壊を撒き散らす戦闘スタイルの2人は、タッグバトルには向かない。

1 on 1の交代制ならいいけれど、4人同時に戦うような試合では、その欠点が顕著に現れてしまう。

「そうですね。とはいえ、地力では完全に負けていますから、やはり、このまま——というわけにはいきません」

ジリ貧だ。

「うーん、2人には申し訳ないですが、エレミアの神髄を使ってもらえないですよね

」

活路を開くには。

「まあ、現状ではそこが一番難しいのですが……」

「そこはほら、わたしにいい考えがありますよ？」

アインハルトさんは大きく目を見開くと、続けて口の端を上げた。

「流石はヴィヴィオ司令官。作戦、よろしくお願いしますね」

「それ失敗フラグじゃないですか」

コンボイじやあるまいし……。

わたしとアインハルトさんは笑い合う。

——カアア——ツン！

さあ、第2ラウンドの始まりだ！



「もう、さっきのようにはいかへんで！」

「もう、手加減はしませんわよ！」

ジークさんの頭に、先程のラウンドにはなかったコブがあるのは気になるが……まあ、そこはそつと置いておこう。

再び距離を取ったので、先程のように巻きこんでの攻撃はできない。だが、それでいい。

見よ、アインハルトさんやミウラさん相手に鍛えたこのテクニクっ！

「ジークさん、魔法でちっちゃくなつたときにおねしょしたってホントですか？」

「なああああああ~~~~~っつっ!?」

「くっ、精神攻撃ね！」

「流石はヴィヴィオさんです！」

うれしくないですけどおお！

わたしはさらに続ける。

「ジークさん、黒ジャージ以外の洋服も、今度一緒に買いに行きましようか？」
「他にも持つとるでええ！」

「もつところ、ヒラヒラフリフリしたような……」

「だから持つとるって！」

「いえ、あの露出度の高いやつじゃなくて」

「そんな着とらんからああ！」

「あゝ、まあ、そういうことにしときましようか……」

「ウチのはヘソ出しくらいやゝ」

「ほら、前にヴィクターさんみたいにお嬢様っぽい洋服も着てみたいとか言ってたじゃないですかゝ」

「そ、それはちよつとは思つとるけど……」

「そ、それなら私がすぐに手配をおお！」

「ちよ、ヴィクターああ!？」

「あと、お姫様とか魔法少女みたいなやつとか……」

「それもすぐに用意させましょう！」

「だからヴィヴィちゃん、ヴィクターア——っ!？」

「そうそう。言い忘れてたんですが、ジークさんの足元に、先程の神雷で亡くなったGの死骸が転がってますよ?」

「……」

ジークさんがG嫌いという情報は、ねことうふ先生の『魔法少女リリカルなのはV i d L I F E インターミドル編』で仕入れてある。

呆然とたたずむ黒のエレミア。

「アインハルトさん、ちよつと（かなり）卑怯ですが、今ですよおっ!」

「はい!」

「くっ、何という精神攻撃、ですがジークはやらせません!」

「あ、ヴィクターさん。あんまりジークさんが使ったあとの枕カバーをクンクンしちゃダメですよ?」

「してませんわよお——っ! つて、しまった!」

点火したアインハルトさんは、すでに奥義の間合いに。

「霸王、断空拳！」

あわよくば、この一撃で勝負を決める。そうでなくとも、ダメージを与えつつエレミアの神髓を発動させる。

セイクリッドカイザーズの作戦としては、どちらでも構わない。
ところが、

——ガガガッ！

削り取るような怪音。

ジークさんは、アインハルトさんの、霸王の必殺の一撃を受け止める。逆に黒い魔力に包まれた拳を引いて。

まさか……

「攻撃を食らう前から、エレミアの神髓が発動してる!？」

「マズいですわね、暴走するかも。アインハルト避けなさい！」

しかし、

「その忠告は無用です！」

ジークさんのお株を奪う組み技で、突き出された腕をつかみ取る。

「何を!？」

「ヴィヴィオさん!」

「はい!」

わたしの魔法陣が展開する。

「これが無敵のジークさん、唯一の弱点だああ——っ!!」

クロから教わっていた相手をちっちゃくする魔法——魔女の呪い。

黒い爆風が、アインハルトさんもろともジークさんを飲みこんだ。2人の体がググ、ググツと縮んでいく。

単に小さくするわけではない。

大人モードの逆、子供モードを強制的に引き起こす。一種の若返りの魔法。

イギリスでの合宿中。クロノ提督の師匠でもある双子の使い魔が、長い管理局時代に培った経験から、エレミアの神髄の欠陥について説明してくれた。

極端に強くなる——というメリットだけなら、みなが使う。しかし、使わないということとはそれだけデメリットもある。

つまり、エレミアの神髄とは、誰もが思うバーサークモードと変わらないのだ。戦闘力が跳ね上がる代わりに、コマンド入力を一切受け付けなくなる。

結果、周囲の人や物を傷つけ破壊する。それを、自分の意思では止められない。正常な判断ができなくなるということだ。

冷静なジークさんなら、経験から「危険」と判断して避けるところを、本能が「危険」と判断しなければ避けない。ダメージを受けないなら、正面から受け止めてしまう。

故に——かつて、無限書庫でもクロによつて小さくされてしまい、その無敵の戦闘力を奪われた。

こればかりは無意識の反射行動なので、直そうとしても直せない。

エレミアの神髄になったら最後、食らうのを覚悟しなければならない。

諸刃の剣だ。

「ヴィヴィ、あなたたちは最初からこの状況を？」

「はい、狙っていました」

未だエレミアの神髄状態のジークさん。光を失った瞳のまま、強引にアインハルトさんの拘束から逃れる。そして、後ろに飛び退いたかと思うと——ツルツ！ 仰向けにずっこけ後頭部を床に打ちつけた。

目に光が戻る。

「いたああ！ な、なんやコレ……まさか、またなんかああ——っ!？」

ちよつと微笑ましい。

ヴィクターさんも同じことを思ったのか「こほん」と小さく咳払いした。

「確かにジークは小さくなりました。しかしそちらもアインハルトがちつちやくなつたのだから条件は同じ。むしろ、私が健在な分、有利なのはコチラのはず」

「それはどうでしょうか？」

「えっ!？」

——バキッ!

派手な音を立ててジークさんの体がリング中央を転がった。

信じられないことに、ちつちやくなつたアインハルトさんが、あの無敵のチャンピオン——ジークさんを押しているのだ。

「どうして!？」

「いいですか、ヴィクターさん……。」

アインハルトさんは普段からちっちゃいので、少しくらい身長が低くなろうと、手足が短くなろうと、いつもと変わらない、安定した強さを保てるですよお！」

「そ、そうきましたかああ！」

「全然、うれしくないですよお——霸王流、破城槌ッ！」

リングが割れ、バランスを崩したジークさんをアインハルトさんが打ち上げた。ちっちゃくなつた体が「はぶうう——っ！」とリング高く舞い上がる。

「ジークうう——っ!!？」

これまでで一番の焦りの声。ヴィクターさんが慌てて前に駆け出す。わたしも追つて飛び出した。

「いいですかヴィクターさん、これからアインハルトさんが、ジークさんにキン肉バスターをかけますっ！」

上空から声が聞こえる。

「ほ、ホンマにキン肉バスターなんか〜」

「このおバカあ〜っ！ どうしてジークがうれしそうなんですのよおお——っ！」

「ロマンだからですよ、ロマン。雷帝——いや、悪魔將軍っ！」

「誰が悪魔將軍ですか——って、しまった!?!」

スピードならわたしの方が上。ジークさんを追ってジャンプしたヴィクターさんの両足にタックル。太ももの間にズボツ——と頭を入れて担ぎ上げる格好。

「くらえ——っ！」

重装甲の鎧。その重さを利用して180度反転。上下逆さまにする。さらにヴィクターさんの両足首をつかむと、自分の両足を彼女の脇の下に入れて、腕の動きを封じた。

「くっ……動けない!?!」

そして、直上では、今まさにアインハルトさんが、逆立ち状態のジークさんを抱え上げ、両足をホールドしたキン肉バスターの体勢で下りてきていた。

ちっちゃくなくなったアインハルトさんが、わたしの肩にまたがることで、この至高の合体技は完成する。

「マッスル・ドッキンググ~~~~っ!!」

とんでもない轟音を響かせて、無敵のベルカミツシヨネルズがリングに沈む。2人のライフが一気にゼロに。

——カン、カン、カン、カア~~~~ン!

『ワアアアアアアアアアアアアアアア!!』

トーナメントマウンテンを揺るがすほどの大歓声。

「やりましたね、ヴィヴィオさん!」

抱きついてくるアインハルトさん。身体だけでなく精神年齢まで幼くなっているのか全身で喜びを表現する。

「はい!」

わたしは撮影しているカメラに向かって叫んだ。

「アリアさん、ロツテさん、それに——グレアムさん! 見えますか? わたしたちやりましたよ~~~~つ、今日の勝利に感謝を——ですつ!!」

続けて、ノーヴェヤリオコロがリングに駆け上がってくる。みんな、割れる寸前の風船のような、満面の笑みを浮かべている。

一方で敗者——ジークさんは、大の字の格好のまま動かない。

「まさか、こないなトコでマッスルドッキングの使い手に会えるなんて、ウチもびつくりや〜」

「ジークっ！ どうしてあなたはうれしそうなんですのよおっ！」

フラフラしながらも、ハルバードを杖代わりに立ち上がるヴィクターさん。やつてきた担架を手で制し、帰らせる。そして、ちっちゃいジークさんをおんぶすると、自らの足で歩いてリングを降り始めた。

「今日は負けましたわ、ヴィヴィ、アインハルト……。でも、次の機会があれば、その時は必ず私たちがベルカミツシヨネルズが勝利しますから、覚えておきなさい——」

何というか、まだまだ余裕があるんだよなく、ヴィクターさん……。

ママほどではないにせよ、やっぱり悪魔將軍である。

「ていうか……」

あのジークさんをおんぶする姿。

「オカンだな」

「オカンですね」

ノーヴェたちも納得の母親ぶりだった。

ちっちゃくなる呪いは、ゴールドデンウィーク明けにでも解いてあげようと思う。

すると、まだまだハイテンションのインハルトさんが「むふふ」といった表情でわたくしを見上げる。

「ヴィヴィオさん、いよいよ次は『ベルカ王位争奪戦』ですね！ 運命の5王の子孫たちがベルカ統一をかけて拳を交える！ さあ、早速チームメンバーを集めに行きましょう！！」

「そんなのないですからねええ——っ!?!」

なにそのキン肉星王位争奪編。

ていうか、もしそんなのあったら、たぶんインハルトさんも、敵になっちゃうじゃないですかああ〜っ！

ママの日

みなさんはママの日……じゃなかった、母の日の由来をご存知でしょうか？

古くは古代ギリシア、あるいは17世紀のイギリスから始まった——と言われているが、本格的に広まったのは20世紀初頭のアメリカだそうです。

日本でクリスマスが一般化したのと同じ頃ですね。

亡くなった母を思い、彼女の好きだった白いカーネーションを教会に贈った。その行為の尊さに多くの人が共感したのでしょう。結果、今のような一大イベントに成長したわけです。

そして、

白いカーネーションは、亡くなった母へ。

赤いカーネーションは、生きている母へ。

さらに、区別や配慮などから、赤いカーネーションに一本化。

最終的には、現在のような多彩な色のカーネーションから、薔薇、紫陽花といった季節の花まで。

母の日も、随分とバリエーション豊かに変わったものです。これも、時代の流れとい

うモノでしょうか？

ただし、それがいいことばかりとは限りません。

カーネーション以外が許されるなら、それは無限の選択肢があるようなもので、わたしたち子供は「母の日にどんなプレゼントをしようかな？」と、毎年悩むわけですよ。しかし、それは大きくなってからも同様なようでありまして……。

「たっだいま〜」

帰宅したわたしがリビングのドアを開けると、歳は9歳ぐらい。ツイントールの可愛らしい女の子が、

「う〜ん」

と、眉間にシワを寄せていた。

「ちよ、なのはママ。また子供モード？ てか一体どうしたの?？」

ソファアに腰かけた格好で、足をぶらぶらさせている様子は、まあ、何だかんだで似

合ってはいるのだけど……。

「あ、ヴィヴィオお帰り〜。ほら、もうじき母の日でしょ?」

「あ〜、うん」

テーブルの上には、たくさんの母の日ギフトのカタログ。某有名デパートのやつまであった。

もしかして、今年のわたしへの催促だろうか?

ハードル高いんですけどお〜。

「あはは〜、そんな顔しないで。これ、ヴィヴィオのじゃなくて、私がお母さんあげるやつだから」

「あ〜」

そういうことか。

「ママのママ。桃子おば……じゃなくて、桃子お姉さん(こう呼ぶと喜ぶのだ)にあげる分かあ〜」

「そういうこと」

「——で、なんで子供モード?」

「あはは、子供の姿になれば、何かいいアイデアが浮かぶかな〜って」

「あ〜」

気持ちにはわからなくもない。

「——で、ヴィヴィオは母の日に私に何をくれるのかな？」

「つて、それ今聞いちゃダメだよね！」

「だつて、外見だけちっちゃくなつてもいいアイディアが浮かばなかつたんだもん。ここはもう、リアル小学生——ヴィヴィオの純粹無垢な子供心に頼るしか！」

「もう、ママは大人なんだから、子供にはプレゼントできないような選択肢だつてあるでしょ？」

高額な金銭が絡んだ贈り物だ。

まさか、大人になつてまで“肩たたき券”や“お手伝い券”を渡すわけにもいかないし……。まあ、ネタとしてはアリかもだけど。

「確かにね。でも、翠屋を建て替えるほどのお金は流石に……」

「その辺りは、恭也おじさんに任せておいた方が……」
すると、

「ただいまー」

聞いただけで美人とわかる凛とした声が響いた。

「フェイトママだ！」

「フェイトちゃん、ナイスタイミング！」

2人でドタドタ玄関に向かうと、

「へ？」

フェイトママの目が見開かれた。別にセブセンシズに目覚めたわけではない。少しお疲れ気味のフェイトママの頬に紅が差し、一気に笑顔が戻る。

「きゃあ~~~~~~~~つ!!」

わたしとなのはママを両腕でぎゅゅと抱きしめると、

「写真、写真撮ってもいいかなっ!？」

あゝ、なのはママ、子供モードのままだったんだっけ……。

フェイトママ、子供姿なのはママのこと大好きだからなあゝ。

仕方ない。

ていうか、意外と子供モードのママと行動する機会が多いので、わたしとしてはどちらの姿でもあまり違和感を覚えなくなっているという。

フェイトママの荷物を持つと、幼妻というか娘というか、そんな感じでなのはママが尋ねる。

「ねえ、フェイトちゃん。フェイトちゃんは母の日——リンディさんに何をあげるの？」
「母の日？ 私はお兄ちゃんと一緒に旅行でもプレゼントしようか——って計画してるけど」

「それだあぁ！」

どうやらなのはママも旅行をプレゼントするつもりらしい。

「それで——なのはとヴィヴィオは私に何をくれるのかな？」

「うん、フェイトちゃん。別に私はフェイトちゃんの娘じゃないからね？」

とか言ってるなのはママを、フェイトママが抱きかかえてスリスリしている。

「にゃ〜」

まあ、それはそれとして、

「ママ、たまには桃子さんと2人で母娘旅なんてどう？」

なのはママの案内で、ミッドチルダなどの管理世界を回るのもいいと思う。

うちの場合、旅行——というところ合宿みたいな面があるから、たまにはママたちと水入らずで行きたいと思うし、桃子さんだって、たまには自分の娘と二人きりで出かけたいと願うのではなからうか？

「あ、それいいんじゃないかな——」

フエイトママが賛同してくれる。

「どう、なのは／ママ？」

わたしとフエイトママが口をそろえて言うと、なのはママは少し照れくさそうにはにかみながら頷いた。



こうして、なのはママから桃子さんへの母の日が決まった晩。
今度はわたしが、

「うーん」

と、唸っていた。

確かにママは決まった。けれど、肝心のわたしからなのはママへのプレゼントが決まらない。

「わたしにも、アインハルトさんみたいにオリヴィエの記憶があればなく」

ベルカ案内！ とか出来そうだけど、そんなことはない。

「お手伝い券」は去年あげたし……」

ちなみに一昨年は「肩たたき券」だ。

別に何度あげても構わないとは思っただけど……ちよつとは工夫してみたい。

「オーソドックスなところでカーネーションかあ〜」

悪くはない。むしろいい。

「あとはスイーツ系に、変わったところでローズバスとか……」

お風呂に薔薇の花を浮かべるといふ、ちよつと高級感あふれる優雅なアイテムだ。わたしも体験できるので、そそられる気持ちはある。

「でもなあ〜」

こういうお金をかけたプレゼントは中等部に上がってからのにしたい。今は、もつと子供らしい、できれば、なのはママが驚いてくれるようなのがいいのだけ……。

「サプライズになるものかあ〜」

手紙、似顔絵、歌をうたう。

なんて、いずれもお金をかけない、子供らしいプレゼント。きつとママたちも喜んでくれるだろう。

「たぶん、その辺りが落としどころなんだろうなあ〜」

もしわたしがコロナだったら、ちっちゃいなのはママとフェイトママのゴーレムを作ってプレゼント——なんてこともできるのに。

それで人形劇をやるのだ。

あの名シーンを再現する。

なのはママとフェイトママの一騎打ち。

『受けてみて！』

これが私の全力全開ツ!!

——スターライトオオブレイカア——ツ!!!』

そして、フェイトママの人形の首が飛ぶ。

——って、最近どうも思考がなのはママみたいになってきている気がする。

いかんいかん。

「あ、そういえば……」

なのはママに子供のころ何をあげたのかと訊いたら、

『私、ヴィヴィオの歳にはもう管理局で働いてたからな』

と語っていた。

たぶん、同年代の子供に比べて、自由に使えるお金も多かったことだろう。

あんまり参考にならない気がする。

でも、

「昔のママかあ〜」

クリスに移した最も古い写真データを再生してみる。

わたしの最も古い記憶と同じ——六課時代。みんなも写っている。一番変わったの

はエリオだろうか。まだまだちっちゃい。

「みんな年取ったねえ〜」

とか口にしたら怒られるだろうか……。

怒られなくても、たぶん、おかずが一品減る。

「この頃も、ママは母の日に何かあげてたんだよねえ〜」

当たり前のことだけ。

わたしはどうだったろうか？

「まだ、なあくんにもわかつてなかったからなあ……」

六課時代から現在まで、わたしとママたちの記録を順番に眺めていく。

そして――

「これって……」



「ヴィ、イ、タ、ちやくちやくんっ!!」

教導先の更衣室。

朝っぱらから、なのはママがヴィータさんに抱きついてた。

「だああ、鬱陶しい！ 何だよ一体？」

「ほらほら、昨日って母の日だったでしょ」

「あたしはおめーの娘じゃねええ——っ！」

ママの膨らみがヴィータさんの頭を圧迫する。

「いやいや、そーいうことじゃなくて、これ見てよ。昨日ヴィヴィオからもらったんだけど——」

それは一枚の写真データ。

9歳のなのはママとわたし——ヴィヴィオがテーブルでへたっている。それを、隣に座っているフェイトママ（やっぱり9歳）とアインハルトさんが笑って見つめている。

そんな光景。

わたしたちが時間移動して、ママたちと一緒に戦った『砕け得ぬ闇事件』の時に撮った写真のうちの一枚だ。

ハッキリとは思いつけないこともあるけれど、おそらく、アミタさんやキリエさんが、時が来たら——歴史に影響を与えない——と判断したら、自動的に閲覧できるよう、大事なママたちとの思い出を消去せず、残しておいてくれたのだろう。

「ほら、懐かしくない？ あれからもう14年だもんね。感慨深いと言うか、私たちも成長したなあ、とか」

なのはママは遠い目をして写真を見つめている。

「あんまり変わってないような気もしてたけど、こうして、あの当時の気持ちを出してみると、ミッドに引越して、ヴィヴィオの母親になって……やっぱり、随分と物事を見る目や感じ方は変わっているんだなって、改めて思うんだよ」

そして、ヴィータさんもジッと写真を見つめて……眉根を寄せた。

「なんだ、また子供モードかよ。遊んでばっかいないで、お前も仕事しろよなー」

「ちよ、違うって、これ14年前の私たちだよ！ ほら、このテーブルとかソファアール席、アースラの休憩室でしょお!!」

「わかるかああ！」

確かに、あの写真、いつもの高町家と変わんないかもです。

ミッドチルダの自動車って？

とある山奥の、とあるレストラン。

わたしともうひとり。

シヨートカットのボクっ娘が、ソファアー席に並んで座っている。

「——はい！ 次元世界1兆人の聖王教会信者のみなさん、リリカルまじかるこんにち
は。あなたの崇め奉る現代の聖王女——高町ヴィヴィオです。

毎週異なるゲストをお迎えして、視聴者のみなさんの疑問に、高町家っぽく答えてい
こうというこのコーナー。

今週のゲストはなんと、あのD S A AのU15格闘競技で、ワールドランク5位のミ
ウラ・リナルディ選手です。

今日は一槍お願いしますね〜」

「(´▽`)じゃ戦いませんよっ——じゃなくて、えっと、あの、こんにちは！ ミウラ・リナ
ルディです。

力不足だとは思いますが、精一杯みなさんの疑問に答えていきたいと思しますので、
今日はよろしくお願いします！」

というわけで、今週は聖王教会系列で配信されている番組を、ちよこつとだけみなさんにもお届けします。

「いや、それにしてもミウラさんがこのコーナーに出演してくれるなんて珍しいですよね」

「え、つと、呼ばれたの初めてだったんですけど……」

「やっぱりココ——実家のレストランの宣伝目的ということでもよろしいでしょうか？」

「違いますよっ！ 昨日の帰り、いきなりうちでやりたいって言い出したの、ヴィヴィオさんじゃないですかああ——っ!？」

「まあ、ゲストと言いつつ、大抵リオコロだったり、なのはママだったり、難しい説明が必要な時は、八神指令だったりしますからね」

「ちよ、ボクの質問に答えてくださいよおお——つて、あれ？ アインハルトさんは呼ばないんですか?? ヴィヴィオさんのことだから、てつきり、ゲストという名の準レギュラーかと思っていたんですが」

「あ、そこはちよつと事情がありました。わたしも呼びたいんですけど、ほら、いくらわたしでも、面と向かってアインハルトさんをいじり倒すことできないじゃないです

か」

「あく、つて、それ、ボクならいじり倒していいつてことですよねええ——っ!」

「提供は、次元世界最大の信者数を誇る聖王教会がお送りします——」



「——つて、ちよ、さっきの話の続きはどこ行つたんですかああ!」

「まあまあ、そんなことよりお便りが届いてますよ。」

第97管理外世界、海鳴市にお住まいのイニシャルA・Bさんからのお便りです。く

ぎゅ〜」

「それイニシャルの意味不是吗よねええ!」

「まあまあ。ほら、そんなにぜえぜえして、試合の時より息切れが激しいじゃないですか

〜」

「誰のせいだと〜」

そこで、突然クリスが謎のポーズをとる。

「おっと、メールが届いてますね。」

えっと、ミッドチルダ在住の、人生は全力全開さんからです。

『ヴィータちゃんみたい』

おっと、さらにメールが。ミッド南部にお住まいの、呪いウサギさんからです。

『諦めろ……』

だそうです。なんだかいやに実感がこもってますね〜」

「師匠……」

「それでは、イニシャルA・Bさんからのお便りを読みますね〜。

『ミッドチルダの自動車って魔法で動いてるの？ それともガソリンで動いてるの？
あたしに教えなさい！』

とのことですが……」

「自動車、ですか……?」

「はい。でも、確かに言われてみると何で動いてるんでしょうね。魔法世界なので、魔力なのか、それとも地球のようにガソリン、あるいは電気なのか——外見だけなら、地球の車と変わりませんしね〜」

「ボクもその辺はさっぱりです。だけど、家電製品なんかもそうですよね?」

「あゝ、確かに家電って言ってる時点で電気っぽいですよね〜」

まあ、実際、電気で動くのだけけど。

ただし、各家庭に供給される電力の大本は『魔力』↓『電力』の魔導炉なので、ちよつぱり複雑な気分ではある。

うちなんて、直接魔力でいいのにと。

すると、ミウラさんが急に言葉を濁した。

「あの、今更なんですけど、ヴィヴィオさんはデバイスが何で動いているかご存知でしょうか？」

「ああ、デバイスも普段は意識しませんがね。とりあえず、結論から言っておくと、基本、デバイスは魔力ですよ。」

「わかりやすい例で言えば……そうですね……ほら、初めてのインターミドルで、わたしがミウラさんにボコられたことあつたじゃないですか」

「あうう、スミマセン、スミマセン！」

「あの時、クリスが予備魔力まで使っちゃって機能停止になったの覚えてますか？」

「あああつ、そういうえば……」

「なので、デバイスは魔力で動く。ついでに充電みたいな感じで、魔力を蓄えておける機能もあるわけですね」

「確か、『予備魔力蓄積石』だったかが使用されている。」

「なるほど。じゃ、結局、自動車は何で動くんですか？」

「あはは、そこはわたしもよくわかっていなくてですね……一緒に、いつもみたいに検索してみましようか？」

わたしとミウラさんは『リリカルなのは』『自動車』『燃料』のワードで検索。いつもお世話になっている『Nanoha Wiki』で答えを発見した。

「ありましたね、読みますよ？」

『なお、自動車のことをミッドでは「モーターモーター」と呼称する。』

モーターモーターは燃料駆動で、水と微量の化学触媒を組み合わせた燃料によって内燃機関が稼動するシステムとなっている。

排気は微量の触媒煙を含むだけの水蒸気が排出されるという極めてクリーンなシステムとなっている、環境への配慮がなされている。

また、オートバイの燃料もモーターモーターと同様である』

——だそうです」

ミウラさんが「おー」と感嘆の声を漏らした。

「ミッドの車って水と化学触媒で動いてたんですね……あ、これってイニシャルA・Bさんの疑問が一発で解決しちゃったんじゃない？」

「シヤラアアアア~~~~~ッブ!!」

「ひいひい」

わたしはフリツカージヤブから、ミウラさんの額にデコピンをかます。

「あうちっ!」

「ダメですよ、ミウラさん! いきなり信じちゃ」

「でもでも、ここに書いてあるわけですし……ほら、他のSSでも、みんな同じように書いてありますよ?」

「チツチツチ、みんな『Nanoha Wiki』を参考にしてるだけかもですよ!」

ミウラさんが小首を傾げた。

「そのの何がマズいんですか?」

「ネットの情報を鵜呑みにしていいのかって話ですよ。万が一、『Nanoha Wiki』の書きこみが間違っていたらどうするんですか?」

「そ、それは……」

「なので、公式の情報を見つける。あるいはソースは2か所……いや3か所くらい見つけて裏づけし、情報の信憑性を高めないとダメなんですよ!」

「そ、そんなこと言われても、どのサイトも『Nanoha Wiki』と同じ説明が書い

てあるだけですし〜」

「だったら、検索ワードを変えましょう。そうですね『モーターモービル』で攻めてみましょうか?」

「モーターモービル、ですか。そういえば、みんな車、車って言うてるから、あんまり正式名称のモーターモービルって使いませんもんね」

ボクもすっかり忘れていましたと、ミウラさんが頭をかく。

「ええ。それに、スノーモービルやモビルスーツって単語はありますが、モーターモービルという単語はありません」

「モビルスーツ……」

「もし存在するとすれば、それは『魔法少女リリカルなのは』の造語。架空の乗り物の名称になるはずですよ!」

「は、はあ……メタ発言すぎてボクには何とも……」

こうして、先程同様『リリカルなのは』と『モーターモービル』で検索していくと

「おつ、有名どころでありましたよ。『Wikipedia』の『魔法戦記リリカルなのはForce』の項目ですね」

「それ未来の話じゃないですかああ!」

「まあまあ今更なんで。えっと——カレドヴルフ・テクニクス社（CW社）……社外も含めたMM（モーターモービル）事業部を持っており……MMですか……」。

燃料まではわかりませんが、少なくともモーターモービルという単語は存在するといふことですね。

『Nanoha Wiki』の情報の信憑性が高まりました。

あとは『Nanoha Wiki』の元ネタ、元情報が見つければいいんですが——
こうして、わたしとミウラさんは検索を続けて行き……そして、

「づい、ヴィヴィオさん……」

「はい、ミウラさん……」

「ついに見つけましたね！」

「はい！ まさか、魔法少女リリカルなのはStrikerSのDVD第2巻についてきた魔法辞典が出典だったなんて……」

『Nanoha Wiki』は、しっかりした情報を元に書かれていた——ということだ。ただし魔法辞典。魔法ではなく、フェイトママの車についての解説の方が詳しく書いてあるのはどうだろう——とは思うけれど。

ミウラさんがガッツポーズで立ち上がる。

「これでまさしく公式情報！ ヴィヴィオさん、今度こそ、これでまるっと完全解決です

ねっ!!」

「……まだだ! まだ終わらんよおお!!」

「どこのクワトロ・バジーナですかああ!? もう認めましょうよ」

「諦めたらそこでええ——」

「試合終了じゃないですからああ」

「——は、冗談として」

「いや、絶対本気でしたよね……」

「だっておかしいじゃないですか。魔力があるのに、どうしてわざわざ他の燃料使ってるんですかッ!」

「……そ、そう言われると、デバイスの件もありますし、魔力の方が便利なような」

「停電もなければ、ガソリンスタンドも必要ない。まあ、ガソリンじゃないですがああ。それに、」

「車にタイヤがついてるのもおかしいじゃないですかああ——っ!」

「えっ、そこですかああ!」

「はい、例えばなんです、『ドラ●もん のび太の魔界大冒険』みたいに——」

「ド●えもん……」

『自転車やオートバイ ↓ 空飛ぶ箒』『自動車 ↓ 空飛ぶ絨毯』の方が、魔法の世界らしいと思いませんか？」

ミウラさんが「う、うん」と唸った。

「どうなんでしょう。確かにタイヤがなくても自由に飛べそうなんですけど、ミッドの街中って、非常時しか飛んじやダメですよ。これって、みんなが好き勝手に飛ぶと、ぶつかって危ないからだと思ってるんですが……」

ムムツ、ミウラさんのくせに生意気なああ——っ！ とジャイアン気分で。

「だったら『F—ZERO』みたいに、路面からちよつと浮いてるぐらいでもいいじゃないですか！

どんな悪路でも、タイヤじゃ不可能な雪道や水面だって走れますし、騒音も少ない。だいたい、金属の塊に乗って走るだなんてことが危ない。むしろ、箒や絨毯にして、バリアジャケットみたいな防御フィールドを張っておけば、もし交通事故が起こっても、ドライバーと歩行者の両方が無事。

究極の交通安全対策ですよっ！」

「ううっ……」

ミウラさんが困った顔をしている。

ちよつと興奮して、ミウラさんをイジメすぎただろうか。

「そうですね、ドラえもんみたいな空飛ぶ箒や絨毯の方が……ドラえもん、箒や絨毯……あ、そうだ、そうですね、ヴィヴィオさんっ！

ド●えもんのび太くんみたいに箒に乗れない人。いや、もつと根本的に、魔法を使えない人はどうするんですか？ 自分じや運転できないってことじゃないですか！」

「っ!？」

そうきたかあ。

流石はわたしに勝ったボクっ娘。

「つまりミウラさんは魔法が使えない人——リンカーコアを持たない、魔法の資質を持たない人のために、タイヤのついた燃料駆動の車が走っているの？」

「はい」

言っていることは正しいと思う。が、

「それって、どれくらいいるんでしょうね、魔法を使えない人。仮にも魔法が普及している世界ですよ？」

例えば『ブレイクブレイド』の主人公ライガットさんは——

「ブレイクブレイド……」

「100万人に1人の確率で生まれると言われる魔力無者であり、魔力を持っているこ

とが普通のブレイクブレイドの世界では、機械や生活用品の一切を使えない。

次元世界も同様です。

そんな少数の魔法を使えない人たちのために、世界全体で便利な魔導技術を使わない

——なんて有り得ると思いますか？」

すると、ミウラさんが大きく首を傾げた。

「あの、ヴィヴィオさん。魔法を使えない人が少ないって、そもそもどこ情報なんでしょうか？」

「……おや？」

そう言われると、確かにそう。

正確な情報がないなら、思い込み、ただの偏見でしかない。

「う、うくん、悔しいですが、ミウラさんの言う通りかもですね。ミッドチルダってどれくらいの人が魔法を使えて、どれくらいの人が魔法を使えないんでしょうね？ 中学で習ったりしないんですか？」

「……ううつ、すみません。ボク、学校の成績はあく」

「あく、いえいえ、知らないのはわたしも一緒なので」

はやてさんがいけば一発で解決なのだろうけど。

「とりあえず調べてみましょうか？」

『リリカルなのは』『魔法を使えない人』——なんて検索しても、答えが出てくるはずもない。

「もしかしたら、これまでついてきた魔法辞典や他の何かに載っているのかもしれませんが手元がありませんしね、これは別角度からアプローチしないと」

「別角度、ですか？」

「はい。まず、わたしの通っているSt. ヒルデ魔法学院には魔法の授業があります。

ここまではいいですよね？」

「はい」

「魔法学院——つまり、魔法学校のことなんですが、ミッドにおける魔法学校とは『魔法資質をもった一般人が通う専門学校』という扱いだそうです」

「専門学校……ですか」

「ええ。他にも『魔法少女リリカルなのはStrikerS THE COMICS』の第1巻を見てください。

ティアナさんとギンガさんの会話をしているシーンで、

『あの子、魔法学校とか行ってなかったんですか？』

『うん、普通校。魔法歴1年以下……』

というやり取りがあります」

「それって……」

「はい。普通の学校では、魔法を教えない。魔法を学ぼうと思ったら、専門の魔法学校に通うか、個人的に習うしかない——ということなんです」

「つてことは、つまり……」

「一般人は魔法を使えない。ミッドにおいても魔法は特殊なスキルであり、魔導師とは専門職である——ということですよ」

「だから自動車は、デバイスと違い、魔力を使わない、水と化学触媒の燃料で動いてるんですね」

と、頷いたところで、ミウラさんが再び大きく首を傾げた。

「あの、だったらどうして運転するんでしょうね？」

「運転、ですか？」

ミウラさんの言っていることがわからない。

「ほら、確かに魔力がなければデバイスは動きませんが、デバイスのAIつて、別に妖精さんが入ってるわけじゃないですよね？」

「はい。電子機器ですけど……」

「だったら、自分で運転しなくても、自動運転でいいんじゃないかなあつて」

「……あああつ、そ、そうですね！ スターライトブレイカー食らっても壊れないほど

頑丈だし、レイジングハートなんて、あんなに頭いいし、人が運転するよりよっぽど安全ですよね！」

「はい。なのに、はやてさんといい、みなさんどうして自分でハンドル握ってるのかなあ
〜って」

「コレはもう趣味としか……地球出身者というより、あく、ひよつとすると、作者の、都築先生の趣味かもしれませんね〜」

「それを言い出したら、もうどうしようもありませんよ、ヴィヴィオさ〜ん！」

「はは、ですよね〜」

でも、う〜ん、そうなんだろうなあ〜。



「というわけで、イニシャルA・Bさんの疑問に対する答えとしまして——」
わたしとミウラさんが声を合わせる。

「『本日の結論っ！』」

「ミッドチルダに魔法は普及している。けれど、まだまだ魔法を使わない、使えない一般人の方が圧倒的に多い。」

そのため、水と微量の化学触媒を組み合わせた燃料によって、ミッドの自動車は動いている。

——ということで、リリカルマジカルまた来週！ お相手は」

「ミウラ・リナルディでしたああ！

今日は、何だかいっぱい調べましたけど、ヴィヴィオさん、実は『Nanoha Wiki』だけで解決してましたよね？」

うっ。

「それ言わないでくださいよおお——っ！」

クリスマスとテイオの衣替え

今日も空は快晴。

いつもと何も変わらない、平和な、朝の登校風景だ。

「おっはよー、ヴィヴィオっ!」

やっぱりいつもと変わらない元気な声。

「おはよー、リオ!」

「クリスマスもおはー……って、クリスマスじゃないっ!?」

わたしの横でフワフワ浮いているデバイスを見て、リオが一步後退った。

「やだなく、クリスマスだよ」

「いやいや、それどー見ても、いつものジムライトアーマーみたいな軽装じゃなくて、もふもふなアンゴラウサギだね。なに、ティツピーにでもクラスチェンジしたの?」

「してないよっ!」

「ほら、もうじき衣替えのシーズンでしょ」

「うん」

「で、昨日、アインハルトさんとその話をしてただけど……」



『衣替えといえは、動物も冬毛から夏毛に生え変わる時期ですよ〜』

『換毛期ですね』

『そうそう、それです！ いつもはちよつと本物のウサギがうらやましい時もあるんですが、こーいう時は、本物の動物じゃなくてよかつたな〜と。』

毛がいっぱい抜けると大変そうじゃないですか？』

『それはありますね。ただ、本物の動物もいいものですよ？』

前に、クラウドがシュトウラの雪原豹を飼っていた話をしたと思いますが、ちょうど毛が生え変わる時期になると、オリヴィエ殿下が楽しそうにブラッシングをしていますから。

きつと、ヴィヴィオさんにも喜んでいただけるか？』

『へ〜』

「——なんて話をして、家に帰ってクリスをよく見たら」

「あゝ、そろそろヤバかったと?」

「うん。テレビに出ずっぱりで薄汚れてきたふ●つしーの1号みたいになってて」

「あゝ、ヴィヴィオ、いつもクリスと一緒にトレーニングだもんね」

「はい、反省してます。なんで、とりあえずいつものぬいぐるみ部分の外装は、ママに頼んで洗濯&修繕中。」

「これを機に、外装を何着か用意しようかなって」

「んゝ、どうせならPSO2のマグみたいに見えを色々と変えてみたら?」

「コラボしてないしなく。いかにもわたしが言いそうな女性追加ボイスならあつたけど」

「気になった方は、『女性追加ボイス1-13』で動画検索して聞いてみてください。」

その後、

「クリスは1モフおいくらですか?」

「非売品です」

「みたいなり取りをココア……じゃなかったコロナとしてみると、ついにインハル

「いてて、でも、どうしてこんな大惨事に？」

「大惨事って……ほら、昨日ヴィヴィオさんと話したじゃないですか、換毛期——毛が生え変わる時期だって」

「にやあ、にやあ〜」

「いやいやいや、ぬいぐるみですから〜」

「ですが、今朝起きたら、ティオの毛が伸びていて、さらに抜け始めたので……」

アインハルトさんは日課のランニングにも行かず、コロコロで部屋の掃除をしていたと言う。

「それで、学校が毛だらけになると迷惑がかかるので、外装だけでも変えることにしたんです」

「にやあ……」

「はあ、そこで鉄アレイチョイスが、アインハルトさんらしいですが……」

「ダンベルの方がよろしかったでしょうか？」

「うん、あんまり変わりませんけどね！」

兎にも角にも、

「放課後になったら、アインハルトさんちに行ってみましょう！」

こうして、高町ヴィヴィオ探検隊は、謎のティオの皮を求めて、アインハルト・ストラトス宅へ向かうのだった。

「ティオの皮って生々しいよね」

「うん、わたしも自分で言ってるそう思った」

「はあ、普通デバイスは毛が伸びないものなんですか……」

「はい。でも、気持ちはわかります。あの八神司令が作ったモノですから」

リオ、わたし、アインハルトさん、コロナの4人は話しながら歩く。

「そーいえば、八神家のみんなも髪の毛伸びないよね」

「ミウラさんは伸びるけどね」

「確かにそうですね」

「もう、ミウラさんは守護騎士や融合騎じゃないでしょ！」

何にせよ、散髪代は浮きそうだけど。

そうこうしているうちに、アインハルトさんちに無事——到着。

「トラップの一つでもあるかと思っただけ」

「リオ、いくらアインハルトさんちでもそれはないって」

「開けますね」

——ガチャリ!

「さあ、どう——むぎゆうう~~~~むぎゆうう~~~~むぎゆうう~~~~むぎゆうう~~~~つ!」

「ちよ、アインハルトさああんつ!? ひいい! 家の中から大量の毛がああ——つ!」
グリーンの頭だけ見えて流されていく。

「な、ナニコレ……」

「珍百景?」

「うん、珍百景だとは思うけど——アインハルトさん無事ですかああ——つ!」

「help! help!」

アインハルトさんを救出すると、高町ヴィヴィオ探検隊は、大量のもふもふをかき分けつつ家の奥へ進んでいく。

「よくわかんないけど、元凶っぽいティオの外装にバインドオオ——ツ!」

どうにか毛の噴出がストップする。

「おかしいよね、コレええ——つ!」

「にやにやにああ〜つ!」

「そうだ! 同型機のウラカンにも同じ症状が出てるかもしれないよ?」

「さっすがコロナ大先生！」

早速フリーカさんに通信を送るも、

『わしもウラカンもいつもと変わらず、元気じゃけん』

と、返信があつた。

「うーん、となると……これは新種のカビですかね？」

「ヴィヴィオさん、カビとか言わないでくださああい！」

リオが笑っている。

「部屋中カビだらけて、腐海みたいだよね〜」

「その者、青き衣をまといて——」

「私のバリアジャケットは緑ですから！」

「日本では、昔から緑を青って言うんですよ？」

青信号、青りんご、青汁、e t c.

「知りませんよ！」

何にせよ、このままでは話が進まない。

コロコロをかけているコロナを横目に、わたしは真剣に考えてみることにした。

「この呪いの人形みたいな怪現象、アインハルトさんだけに起こっている……呪い、アインハルトさん、呪いとアインハルトさんに共通する……何か、犯人は……あ、いた」

こんなことができそうな唯一の人物。

魔法で呪いをかけることができ、アインハルトさんに近い関係者。

「魔女の館をガサ入れじゃあぁ~~~~っつ!!」

というわけで、体をぐるぐる巻きにしたロープを、天井の梁に通して、魔女っ子を吊り下げている。

もちろんチンクではない。

フアビア・クロゼルグ——最近は魔女のとながり帽子より、マリンベレーを被ることの多い——クロだ。

「ほら〜、吐け〜、吐くんだけ〜、クロお〜」

「うん。リオ、それ悪役の台詞だから」

「ううっ、わたしやってないのにい〜っ!」

「確かに、今のクロが私に迷惑をかけるとは思えないのですが……」

「そうだよ、リオ、ヴィヴィオ〜」

ティオも「にやあ! にやあ!」抗議の声を上げている。

すると、それを聞いた宙吊りのクロが、海老反りで顔を上げた。

「アインハルト! ティオを、アステイオンをわたしの近くに!」

「?」

意味もわからないまま、アインハルトさんはティオをクロの顔に近づけて、

——ボクシツ!

わたしののように顔をクリーンヒット。

「あう〜」

外装が“鉄アレイver.”だと伝えていなかった。

けれど、クロはめげずにティオに声をかける。

「ふんふん」

「にやあ、にやあ〜」

「なるほど、なるほど……」

「にやにやにやにやにや」

「おう、流石は魔女っ子。動物の言葉がわかるんだね」

リオが感心している。

「わたしだって、リオの言葉わかるよ？」

「おうって、あたしは犬じゃないからねええ——っ！」

「んっ……」

コロナがなんともいえない表情でわたしとリオを見つめていると、クロの「ありがとう、アステイオン」と言う声が聞こえてきた。

「リオとヴィヴィのお馬鹿さんコンビは置いといて、謎は解けたよ？」

「本当ですかっ!？」

お馬鹿さんコンビって……。

「うん。昨日アインハルト、本物の動物で毛が生え変わる時期なら、ヴィヴィが喜んでくれる——みたいな話をしたんでしょ？」

「……ええ、しましたね」

「わたしも聞きました」

クロが一拍置く。

「それで、アステイオンが気を利かせて、自分で機能をアップデート——自己進化したん

だよ。毛が伸びて生え変わるようにね」

「「マジかあ~~~~~~~~つっ!」」

なに、その斜め方向の超進化。

そっか——だから今日のティオは、それを説明したくて、やたらと「にやあ、にやあ」
鳴いていたのか。

「流星はアインハルトさんの愛機ですなっ!」

「はい! ……つて、それ褒めてないですよねええ——っ!」

「いえいえ、似た者同士だなあ〜つて」

「それ、褒められてるんでしょうか……」

「にやあ〜」

ちよつとから回ってしまったけれど、わたしへの深い愛情に、アインハルトさんと
ティオの深い絆が感じられる。

きつとオリヴィエも、こんな気持ちでクラウス殿下や雪原豹と接していたのだろう。

「……つて、いい話ふうに終わらそうとしてないで、そろそろわたしのことも下ろして
よおお〜っ!」

「「「あ「「「」

たぶん、シュトラの森の魔女クロゼルクともこんな感じだったのだろう。

ゴーストハンター・ヴィヴィオ 第1夜

第1夜『高町ヴィヴィオと秘密の館』

1

——ドツカアア~~~~ンツ!!

深夜。

古い洋館の地下室で、轟音が鳴り響く。

「ひいいつ、天井に穴がああ!?!」

「ヴィヴィオさんご無事ですか〜」

「はい! こっちは無事なんです、はやてさんのSAN値が大変なことになっています!」

ここのままでは6人全員生き埋めだ!

〈正気度ロール〉でも〈恐怖判定〉でもどちらでもいいのだけど、今や、はやてさんの精

神状態は、SAN値! ピンチ! SAN値! ピンチ! ある。

「こうなったらアインハルトさん、ドラクエ・FF方式で、一発殴っちゃいましょう。パーティーアタックですよお！」

「ええええ〜っ!? 八神司令にそんなことできませんよお——っ!」

「どうやらあたしたちの出番のようね!」

「パーティーアタックならお手の物——」

「つて『劇場版2nd A's』でハブられた、その懐かしい仮面はああ——っ!」

双子の使い魔が、

「あばばばばば——」

はやてさんの頬を、ビビビビビ——と鬼太郎のねずみ男ばりにピンタする。

これで正気に戻ってくれただろうか?

すると、はやてさんの口から謎の言葉が漏れ出し始める。

『……咎人達に、滅びの光を。星よ集え、全てを撃ち抜く光となれ……貫け、閃光……』

「え、この詠唱ってもしかして……」

隣の老人に尋ねると、

「う……うむ、おそろくなのは君のスターライトブレイカーだと」

「やつぱりいい〜っ!」

いまだ混乱しているのか、いないのか……。

闇の書が蒐集して撃てるのは知っていたけれど、めぐみんのエクスプロージョンより厄介なママの切り札——その、闇の書の意志Ver.。

「まさか、こんなところでお目にかかることになろうとは……って、お願いだから、室内で放つのはやめてええ!」

生き埋めである。

最強使い魔さんたちが叫ぶ。

「間に合えバインドオオ——ッ!」

「ヴィヴィオちゃんも!」

「了解ですつ! アインハルトさんは“旋衝破”で跳ね返してくださいっつ!!」

「ええええええええええええええええつ、アレをですかああ——っ!」

「この歳で結界を張ることになろうとはなああ〜」

ああ、わたしとアインハルトさんは、ただ合宿に来ただけなのに……。

どうしてこんなことにいいっつ!?

2

1か月前。

ゴールドデンウィークの頭。

『D S A A ドリームタッグトーナメント』本戦に向けたチームごとの最終合宿。

わたしとアインハルトさんのタッグは、ノーヴェエの指示で、第97管理外世界——
地球”のイギリスへ向かうことに決まった。

引率はこの人。

「ああああああ……ヴィヴィオは肩たたきが上手やな」

夜天の腹黒タヌキ——ではなく、時空管理局本局海上警備部・八神はやて捜査司令。

なのはママ&フェイトママいわく。

『ノーヴェエが同行しないって聞いて心配してたんだけど、はやてちゃんが一緒なら私より安心かも』

『あはは、なのはは時々無茶するからね』

わたしもそう思う。

なので、中央次元港で船を待つ間、日頃の感謝も兼ねてマッサージのプレゼントをしていたのだけど。

「あだっ、いだだっ、あゝ、でもこの痛みがまた……あゝ、アインハルトのツボ押しもええな〜」

「ユミナさんから教わったのですが……」

練習台になったわたしとリオは、あまりのパワーに1ラウンドKOされたのだけど、大人のはやてさんには丁度いいらしい。

たぶん、ママたちも「気持ちいい」って言うんだろなあゝ。
怖いものなんて何も無い。

絶対無敵の管理局3人娘の1柱。

一緒にいるだけで安心・安堵してしまう。そんな存在だ。

「それにしても、この3人で旅行に行くことになるなんてな、思いもしなかったで」「同感です。はやてさんって、どちらかと言えば、ミウラさんと一緒にイメージがあまりますしね」

「そやなく、でも、あつちはミカヤんが一緒やからね。私が行く必要もないやろ」

「あの……であれば、八神司令、わざわざ私たちの合宿にご一緒していただいて、本当によろしかったのでしょうか？」

アインハルトさんが恐縮気味に尋ねると、

「あゝ、かまへん、かまへん。私もおじさんの顔見に行こうと思つとつたトコや。

それになく、ヴィヴィオやアインハルトと一緒にみると、何だか昔のなのはちちゃんとフエイトちゃんと一緒にみたいで、なんや懐かしいと言おうか、若返つた気分が……ううっ」

「ちよ、泣き出さないでくさああい！ ヴィータさんやリインさんが娘だとしたら、ミウラさんは孫みたいなものですけど」

「ぐはああ——っ!!」

そんなわけで、長らくお待ちしました。

DSAAドリームタツグトーナメント外伝・イギリス編・ゴーストハンター・ヴィヴィオ——始まります！

3

日本を経由することなく、ミッドから直接イギリスに渡つたわたしたち一行は、その後バスに揺られて4時間。

イギリスの片田舎。

素敵な——緑の庭のある木造の邸宅を訪れていた。

薔薇のアーチをくぐると、玄関前には白い簡素なテーブルと椅子が一揃え。腰かけるのはひとりの老人。そして、彼を守るように隙なく立つのは、2人の若い女性たち。

はやてさんが優しい笑みを浮かべて手を振る。

「お久しぶりです、グレアムおじさん」

老人もまた優しい笑みを返すと、

「ああ、久しぶりだね……はやて」

はやてさんは座ったままの老人を抱きしめると、両頬に軽くキスをした。

そして、左右に立つ女性たちに視線を向ける。髪の毛の長さをのぞけば、どちらもそっくりな顔立ちで、頭部にアルフやザフィーラのような獣耳が生えていた。

「リーゼたちも元気そうやね」

「ああ、お前もな」

「久しぶりね、八神。それと——そっちの2人も」

髪が長い方の女性が、涼しげな瞳でわたしとアインハルトさんを見やる。

「はい！ お久しぶりです、アリアさん、それに、ロッテさんも！」

「ああ、おひさ……てか、お前らホントに昔と変わってないのな」

「この度はお世話になります」

わたしとアインハルトさんはそれぞれの女性——髪の毛の長いリーゼアリアさんと、髪の毛の短いリーゼロッテさんと握手を交わしハグをした。

どことなくリオを彷彿とさせるテンションのロッテさんが、複雑な表情を浮かべる。

「あれからもう14年なんだよなあ、長かったような、あつという間だったような」

「わたしたちにとっては、去年の出来事なんですけどね」

「そりゃ最近だわ」

「変わってないのも当然よね」

「まあ、アインハルトさんは、成長してないだけですけどね」

「ちよ、ヴィヴィオさあ——んっ！？」

そんなわたしたちと、リーゼさんたちとの関係。

『魔法少女リリカルなのはA, s PORTABLE —THE GEARS OF DESTINY—』——今から14年前の新暦66年。ママたちが子供の頃に起きた『砕け得ぬ闇事件』に、時間移動という形で、わたしとアインハルトさんは巻きこまれたのだ。

過去に遡ったわたしたちは、ママたちはやてさんだけでなく、アリアさんやロツテさんとも出会い、共に戦った。

だから、2人の実力はよく知っている。

「チビども、あれから少しは強くなったのか？」

「はい！ そりやもちろん、わたしもアインハルトさんも、前よりずううつと強くなつてますよ〜」

そりや楽しみだ——と笑うリーゼ姉妹は、猫を素体とした双子の使い魔。

姉のリーゼアリアさんは魔法戦。妹のリーゼロツテさんは格闘戦を得意とする。

あのフエイトママの義兄——クロノ・ハラオウン提督に戦闘技術を叩きこんだ師匠でもあり、おそらく使い魔としては、管理局でも歴代トップクラスの戦闘力を誇る。

そんな2人のコンビネーションは、当時から悪魔的だったママたち、さらには、シグナムさんやヴィータさん、ヴォルケンリッターをも退けた。

正直、どうやったたらそんなことが可能なのか——わたしにはさっぱり妖精である。

もはや、伝説的な存在。

タッグチーム戦のコーチとしては、これ以上の人材は望めないだろう。

そしてもう1人。

わたしは老人——リーゼ姉妹の主人——の前に立つ。

「初めまして、グレアムさん。高町なのはの娘——高町ヴィヴィオです」

「そうか、君がなのは君の……やれやれ、あの小さかった少女がもう母親とは、私も年をとるわけだ」

眼鏡をかけた老人は、ヒゲの隙間から、穏やかな顔つきで笑う。白髪に深いシワ。もう70歳は越えているであろう。けれど、その仕草はいかにも英国紳士といった風で、落ち着いた色のカーディガンとズボンも、品の良さを感じさせる。

続いてアインハルトさんが挨拶した。

「お初にお目にかかります。ハイデイ・アインハルト・ストラトス・イングヴァルトと申します」

「イングヴァルト……そうか、覇王家直系の……ヴィヴィオ君と君が出会うとは、これも運命かもしれないな」

この老人はどこまで知っているのだろう。

「リーゼから話は聞いている。遠いところからよく来たね、歓迎するよ」
「はい」

本当に優しそうな老人だ。

士郎さんはまだまだお爺ちゃんといった感じがしないので、もしわたしに祖父がいたとしたら、こんな人がいいなと思う。

——けれど……。

ギル・グレアム元時空管理局提督。

艦隊指揮官、執務官長を歴任し、最後は時空管理局顧問官まで務めた、ママたちの遠い先輩。

いくら理由があつたにせよ、彼がはやてさんにしたことは許されることではない。それは、辞職したグレアムさん自身が一番よくわかっているはず。

そんな老人に対して、はやてさんはどんな気持ちで会いに来ているのだろうか？

スカリエツティと面会する元ナンバーズみたいな気持ち？ それとも、もつと複雑な何かがあるのだろうか？

決して表に出さないタヌ吉さんなので、彼女の心中をうかがい知ることができないし、わからない。

「——そんなわけやから、リーゼたちにはヴィヴィオとアインハルトのことを頼みたいんよ。バツチリ鍛えたつてや。その間、グレアムおじさんのことは私に任せとき！」

ドンと胸を叩く。

「ああ、わかっているつて。くろ助からもよろしく頼まれてるしね」

「ただし、その前に——みんなこれに乗ってもらえる？」

6人全員、アリアさんの運転する車でガタンゴトンと数時間。

連れて行かれた先は、コックスウエルの丘に建つ、曇り空や雷雨のよく似合う、いかにもアンデッドが出そうな古びた洋館。

「——つて、なんで幽霊屋敷やねんっ!!?」

タイミングバツチリ。

はやてさんのツツコミが、もうじき夜を迎えそうなイギリスの空に響き渡る。



次回、ゴーストハンター・ヴィヴィオ 第2夜

『高町ヴィヴィオとトランザム・バースト』

に——リリカルマジカル、がんばります！

ゴーストハンター・ヴィヴィオ 第2夜

第2夜 『高町ヴィヴィオとトランザム・バースト』

1

「——というわけで、ここが、最近ウワサの幽霊屋敷よ」

アリアさんの話によると、この館には、かつて“トランザム”という魔法使いの一族が住んでいたという。

そして、最後の主人の名は——“トランザム・バースト”。

「あの、わたしもう、ちよつと犯人というかオチがわかっちゃったんですけど」

GN粒子だったり、太陽炉だったり、量子化しちやったりして、まあ、幽霊っぽく見えたのではなからうか。

「あ、最近コロナさんがゴライアスに搭載しようとしているアレのことですね」

「わたし聞いてませんけどねエエ!？」

赤く光ったゴライアスが「ゴー！　ゴライアス！！」とか言って、3倍くらいのスピードで突っこんで来るのだろうか？

コロナならやりかねないよっ!?

「それ自爆オチじゃね？」

そうロツテさんに突っこまれつつ、

「あゝ」

わたしたちは幽霊屋敷の扉を叩く。

——ギギイイツ、バタンツ！

「なんやっ!？」

6人全員が入ったところで、突然、背後で玄関の扉が閉まった。

アインハルトさんが素早く動き、取っ手に手をかけて、

「開きません。自動ドアでしょうか？」

「違うやろおお!？」

「まあまあ、はやてさん〃SAN値〃が下がっちゃいますよ」

ちなみにSAN値が減ると、発狂しやすくなる。まあ、はやてさんのことだから——

神経図太そうだし——心配することはないと思うけど。

「あれって……」

暗がりの中、屋敷の天井に白いモヤのような人影が消えていく。

「早速、トランザム氏の亡霊のようね」

「え」

はやてさんがブリキ人形のように振り返った。

「大丈夫ですよ。こういうときは、3階の屋根裏にある鐘を鳴らせば、解錠される仕組みになってますから」

「そういうものなんですか、ヴィヴィオさん？」

「様式美ですから」

「そんな『ラプラスの魔』ネタなんて今どき誰も知らんやろおお!？」

流石は八神司令。

古いネタもすっかり突っこんでくれる。

「それはそれとして、ヴィヴィオさん、私たちのこの格好は？」

「ゴーストハンターといえば、黒マントですからね」

「これも様式美——お約束である。」

わたしとアインハルトさんは、知る人ぞ知る草壁健一郎のごとく、洋服の上から黒い

マントを羽織っていた。

「昔のクロノみたいね」

「ヴィヴィオって、格好から入るタイプだよなあ」

「あゝ、そうかもですね。わたしがアインハルトさんみたいに聖王モードでやんちゃしてた頃も——」

「ちよ、飛び火してますよおお!？」

「ママの外見やら魔法を、まねっこしてましたしね〜」

「だけど、今はまねっこじゃない。」

「髪型は今もだけど。」

「ノーヴェと2人で理想の格闘戦技を追いかけている。」

「だから、聖王としての力は、ちよっとお休み中。」

「それじゃ、先に進みましょうか？」

「アリアさんは冷静に仕切ると、明かりの魔法を唱えた。」

「光に照らし出された室内は、どこことなく聖王教会を思い起こさせる。」

「入ってすぐの空間は、広いホールになっていて、壁には3枚の風景画が飾られていた。」

「この絵は……」

「アインハルトさん、どうかしましたか？」

「いえ、少しベルカの景色に似ているなと思いますよ」

「あく、それ、この屋敷の外の風景じゃないか？ 丘から見下ろしたやつ」

「うわ、もう暗かったのによく見えましたねえ」

「あたしとアリアは夜目が利くんだよ」

「にやあ」

「ティオと一緒にですね」

ホールからは、奥へ続く通路の他に、2階へ続く階段と、地下に続く階段に分かれている——さて、どこから向かったものか。

「よっしゃ、一気に2階へ！」

「行かないわよ、ロツテ」

まずは、1階を隅々まで探索することに決まった。

廊下を歩きながら、わたしはアリアさんに質問する。

「それで、このお屋敷なんですけど、トランザムさんが、胡散臭い魔術の実験を繰り返していた——とかいうやつですか？

幽霊騒ぎが起きるような……例えば、生贄にするため街の住人をさらったとか、あるいは、魔女狩り——のように、逆に屋敷の住人が火あぶりの刑にされたとか」

すると、アリアさんが困った表情を浮かべる。

「それがね、評判は悪くないのよ。むしろ、仲良くやっていたみたいで。トランザム氏が亡くなってから、もう何十年と経過しているんだけど、今でも時々、街の老人たちが昔を懐かしんで庭の手入れをするそうよ」

「へ〜」

「慕われていたのでしょうか？」

アインハルトさんが小首を傾げる。

そう。

惨劇など何も起きていない。

「幽霊屋敷になる要素皆無だろ？」

「はい」

どうということだろう？

「それで、屋敷の異変に気づいたのね。突然庭の草木が枯れ始めたとか、建物の中から物が音がするとか——」

その後、面白半分で屋敷に入った子供が幽霊を見たとき騒ぎ出し、地元紙に、オカルト雑誌……最後には、それなりに有名な霊能者が雇われたのだという。しかし、解決には至らず、それどころか、トランザムさんの霊に襲われたのだと主張する。

「それは怪しいですね」

「そうね。ただ、まったくの作り話ってわけでもなさそうなのよ。——ほら、2人とも感じるでしょ?」

屋敷のどことはいえないのだけど、何かおかしな、それでいて覚えのある魔力の気配を感じる。

「これって……」

「牛乳を拭いたあとの雑巾のような……」

「あく、それですよ、アインハルトさん!」

「嫌な例えやなく」

それで、オカルトでも超常現象でも、起きたことはできる範囲で対応する元管理局の2人に、解決の依頼が舞いこんだのだという。

「狭い屋敷内で協力し合って戦う——なんてお前らの特訓には、ちょうどいいシチュエーションだろう?」

「ああ、それでこのお屋敷に」

「無限書庫やルーフェンの洞窟でも、わたしとヴィヴィオさんは別行動でしたからね」
アインハルトさんが、シュツシュと拳を振るう。

腕が鳴ります——といったところか。

「あく、だったら私とおじさんはいらなかったんじゃない?」

はやてさんがテンション低めに呟いた。

「そんなの退屈だろ？」

「いやいや」

「父様が」

「……」

「すまないね、父親思いの子に育ってしまったて」

わたしは何となくだけど、かつてのリーゼ姉妹が及んだ凶行に納得がいった。

わたしだって、もしなのはママが望むなら——そこに多少の迷いがあったとしても——必ず手伝うだろう。

「実際問題として、さっきも話したけど、この屋敷はちよつとおかしなところが多いのよね。だから、万が一のとき八神がいたら2人も安心でしょ？」

「はい、それはあるかもです」

「何かあったときは、よろしくお願いいたします」

グレアムさんに寄り添いながら、はやてさんが「しやーないなく」と肩を落としたところで、再び、例の白い影——トランザムさんの亡霊が前を横切る。

「またなんかああ!?!」

「みんな、注意して！」

アリアさんの警告。

わたしたちは周囲を警戒しつつ、応接室や舞踏室などを見て回ったのだけど、「特に、これといった異変はありませんね」

アインハルトさんは幽霊が平気なのか——鈍感なのか——臆することなくカーテンを開け閉めする。さらに遊戯室では、平気の平左でビリヤード台の下をのぞきこんでいた。

「お前ら、もう少し子供らしく怖がってみたらどうよ？」

「そんなこと言われましても」

わたしもアインハルトさんも、死者よりもっと恐ろしいモノを知っている。

「一番恐ろしいのは人間ですからね」

冬月先生ふうに言えば『やはり、最後の敵は同じ人間だったな』である。

「もしかして、ヴィヴィオさんのお母様のお話ですか？」

ええ、

「それもありますけどねええ!？」

「「「あ〜」」」

「もつとこう、古代ベルカの戦争に関わった人やモノのお話ですよ」

全長数キロはあるわたしの母艦、聖王家の守護兵器——聖王のゆりかご。

ガレア王国で作られた、人間の屍を利用した自立増殖兵器——マリアージュ。イクスのアレだ。

無敵に近い再生能力、闇の書の自動防衛プログラム——ナハトヴァール。これははやてさん。

他にも、人や草木の命を腐らせる腐敗兵器に、喰らい尽くすモノと呼ばれた奈落の腐食兵器、そして、世界を破壊する無限連環機構——システムU—D。

現在ではロストロギアとなった、数々の禁忌兵器（フェアレーター）と、それらに関わった人々の逸話。

「でもさ、マテリアルズ——ディアーチエたちはギャグキャラじゃなかったか？」

「それは言つてあげないでええ！」

最初はそれなりに悪役だったんだよ。

「——つて、どうしてみんなして私を見るん？」

「私なんて、未だに王様と八神司令の区別がつきませんからね」

「それ自慢することやないやろおお!？」

ああ、そつか。

アインハルトさんの認識能力だと、ちよつと難易度高かったかあ。

たぶん、ママたちとシユテル、レヴィの区別もつかないだろう。

そんなこんなで、食堂へ続く通路を歩いていると、アリアさんが急に立ち止まった。

「そうだった。あまりに何も出てこないんで忘れてたけど、はいこれ——」

手渡されたのは、手のひらサイズの使い捨てカメラ。ちゃんと感度が高いやつだ。

「これって？」

「もしアンデッド系モンスターが出たら、それで撮影してね」

「なんでやねん！」

「流石の八神も知らなかったか。心靈写真ってのはさ、好事家に高値で取り引きされるんだよ」

何だかゲームみたいになってきたなく。

「あの、デバイスで撮影したらいけないのでしょうか？」

ティオが「にやあく」と鳴く。

「やつぱりそう思った？ あたしたちも最初は不思議だったんだけど、どうも高性能なカメラで撮るとダメみたいなのよ」

「はやてさんの騎士甲冑の、スカート部分みたいなものですね」

「その心は？」

「見えそうで見えないところがいい」

「ああ〜」

「納得しなくてええって」

「ところで、このカメラの使い方を教えていただきたいのですが？」

「ああ、コレはですね〜」

そう言つて、アインハルトさんにレクチャーしながら食堂に入った途端、

「危ない、ヴィヴィオさんっ！」

突然、暗がりから飛んできたナイフとフォークを、わたしを守るように進み出たアインハルトさんが手刀で叩き落とした。

「まだ来るぞ——チビどもっ!!」

「ヴィヴィオさん、ご注意を！」

そんな2人の警告にわたしは、

「——シャッターアアチャアアンスうう!!」

「完全に、飛んでる食器のベストショットを撮ってしまったあ〜」

高町ヴィヴィオ一生の不覚である。

すると、はやてさんだけが眉間にシワを寄せた。

「みんな自然にポルターガイスト現象なんて言つとるけど、普通に考えてナイフとフォークがひとりでに飛んでくる——って、おかしいやろ？」

心霊現象である。

「でもはやてさん、前に劇場版で見たんですけど、夜天の書もふわふわ飛んでましたよね？」

「あれは……まあ、飛んでたな……」

「これも同じように魔力で動いていたと考えれば……」

「魔法使いと呼ばれたトランザム氏の仕業かもしれないわね」

どうやらこの屋敷、まだまだ秘密が隠されているようである。

「こりゃ、とつとと白い影を追いかけた方がいいんじゃないか？」

じっくり調べれば調べるほど、相手の思う壺かもしれない。

「ん〜、難しいところですね〜」

などと話している。

「この奥はキッチンのようですね」

怖いもの知らずのアインハルトさんが、一人で先に進んでしまう。

「待ってください、アインハルトさん！」

するとキッチンから、

ウイイ……ウイイーン！

「冷蔵庫のコンプレッサーの音が……」

「いや、電気通ってないやろ」

ガサツ、ゴソツ、バリツ……。

「ポテチの音でしょうか？」

「いやいや」

「待つんだアインハルト君——」

グレアムさんの、渋く落ち着いた声が霸王の足を止める。

「キッチンの奥に何かいるぞ」

「何かって……」

「何がおるんや……?」

ドドドド　ド　ド　ド

全員で目を凝らす。長い間使われることがなかったキッチンの闇に、ランランと輝く

黒い瞳——いや、

「あのネズミって……まさか……」

ドン！

「スタンド使いいい——っ!!?」

「いやいやいやいや!」



次回、ゴーストハンター・ヴィヴィオ　第3夜

『高町ヴィヴィオとメダパニ』

に——リリカルマジカル、がんばります！

ゴーストハンター・ヴィヴィオ 第3夜

第3夜『高町ヴィヴィオとメダパニ』

1

「スタンド使いいい——っ?!!」

「いやいやいやいや! 流石にそれはないやろ」

「せやかて工藤」

「八神や。」

確かに、管理外世界を探せば、それっぽいネズミの1匹ぐらいは見つかるかもしれへんけど——」

「あの、一つよろしいでしょうか?」

「どうしたんですか、アインハルトさん?」

「あのネズミ、大きくなっていませんか?」

「……そう言われると」

わたしとはやてさんが声を合わせて見つめる中、ネズミがズモモモ——といった感じで巨大化していく。

「ちよ、アレなんてジュエルシードおおくっ!?」

「異相体やな!」

「ああ、お借りした記憶ディスクで拝見しました! 序盤でユーノ司書長が吹っ飛ばされていた、ちびりオミたいなアレですね!」

「だいたい合ってますけどおお〜」

司書長。

「この屋敷の、異常な魔力に影響を受けたってとこやな——」

というか、

「何このベヒーモスうう!?!」

巨大化したネズミは、もう頭から角とか生えちゃって陸の王! ——みたいな姿に。

「とは言っても、しよせんネズミはネズミや——」

——パクッ。

「うわああ、はやてさああ~~~~んっ!？」

「八神司令いっつ!？」

ああ、頭からマミつてると言おうか、飲みこまれそうなんですけどおお——っ!？」

ヤバイヨヤバイヨ。

「そうだ! アインハルトさんテイオですよ! テイオがいるじゃないですか! 雪原豹をモチーフにしたテイオなら、あの程度のネズミどーってことありませんよっ!! 捕まえてくれるはず」

「そ、そうでした。テイオ、今こそあなたの力を——って、テイオ、テイオ~~~~っ!？」

床の上で目をつぶり、大の字になって転がっている。

「まさかの死んだふりいっつ!？」

また余計な機能をマスターしてるしいい!

すると、

「ふうふうふうふう〜〜〜つっ!!」

「アリアさん？ ロツテさん？」

ネズミと遭遇してから一言も話さなくなったリーゼ姉妹が、ベヒーモス（ネズミ）を睨みながら激しく唸っている。

「すまないね。ああなったリーゼたちはもう私でも止められないんだよ」

「あゝ、猫のフレンズでしたね〜」

「ほたいは!」

たぶん「素体や!」ってツツコミだと思うけど。流石ははやてさん、頭から飲みこまれそうな状況でも結構タフだなあゝ。

「そういうえばTV版『A's』でも、ユーノ司書長が初めてリーゼ姉妹に会ったとき、食べられそうになってましたね〜」

フェレットですけど〜。

その後、あつさりリーゼ姉妹に倒されたベヒーモスは、ご主人様であるグレアムさんの前に献上された。

「……あかん、これはあかんでえ〜」

全身がネズミの唾液でベタベタになったはやてさんがムツクリ起き上がる。

「流石はやてさんっ!」

しゅといっ!

バリアジャケットがあるので、肉体的にはノーダメージなのだけど、精神的には結構食らってる気がする。

SAN値大丈夫かな〜。

すると、アインハルトさんが奇妙なことを口にした。

「この巨大化したネズミ……どこかで見たことがあるような……」

「まさか、アインハルトさんちに!?!」

「いませんよおおー！」

霸王様はコホンと咳をして、

「じっくり見て思い出しました。確か、シュトウラの森でクロが——ああ、初代の魔女クロゼルグのことですが、丸焼きにして食べていました」

「コレをですか……?」

ダンジョン飯の世界である。

「わたしはちよつと〜」

「森ではごちそうだったんですよおお!？」

とりあえず、パシヤリ——と一枚撮って、これはクロへのお土産にしよう。

2

「やつぱり、さっきのネズミも、トランザムさんの仕業だったんでしょうか?」

「トランザム・バースト許すまじっ!」

「もう、そういうはやてさんだって、ダブルオーライザーみたいになるじゃないですかあ〜」

「ユニゾンや！ まあ、確かにリインがおらんと安定しないとか、似てると言えば似てるんやけどな〜」

「——ほら、バカばつか言っていないで先に進むわよ」

1階の探索が空振りに終わったわたしたちは、一旦入り口のホールへ戻ることにした。

先に地下へ向かったものの、思ったより狭いワインセラーがあるだけ。空っぽの樽は残っていても、隠し通路や扉の類は見つからなかった。

階段を上がって2階へ向かう。

早速エンカウントしたのは、

「さ、さまようよろい？」

「ドラクエかよ……」

「キラーアーマー？」

「普通にアンデッド系モンスターでいいんじゃない？」

「ピサロナイト」

「あいつは中身入ってるだろ？」

「ええ加減ドラクエネタはやめええい！」

「じゃ、キャラメルマン7号で」

「そんなん鳥山●大先生でも忘れとるわああ！」

しかも、どちらかと言えば「よろいのきし」の方である。

はやてさんは手のひらをかざすと、特に詠唱することなく純粹魔力の衝撃波だけで動く鎧を吹き飛ばす。

これが怒りのパワーか……。

壁にぶつかると、ガシヤン——という音と共に鎧がパーツごとに散らばった。

「あ、ホントに中身空っぽだ……」

「コロナさんが操っているということとは？」

「そんな肝試しじゃあるまいし。でも、そうか、これ、操作系魔法の一種だとしたら

……」

「錬金術の可能性もあるぞ？」

「あく、アリサさんみたいな声が鎧から聞こえるアレですか……」

どちらにせよ、

「ええ加減にせええ！ 魔導師トランザムっ!!」

はやてさんがキレた。

「いつまでも隠れとらんと、とつとと姿を現しいい！」

ネタは上がつとるんや！

私は時空管理局本局海上警備部の八神はやて捜査司令やああ——っ!!」

「ちよ、八神っ!!」

「他にも元提督に最強の使い魔。さらに古代ベルカのツイートップ——聖王と霸王もおるでええ！」

ツイートップって……。

「確かに知名度だけならツイートップですけどおお——つて、アインハルトさん、なにうれしそうな顔してるんですかああ!?!」

「いえ、別に、そういうわけでは——あ、あそこを見てください！ 白い影が出ましたよっ!!」

「そこかああ！ もう逃さへんでええ、クラウソラ——ふっふっ」

「八神、ストップストップ！」

「ほら落ち着いて、屋敷を破壊しないの！」

リーゼ姉妹が素早く動き、はやてさんの口に蓋をする。

その姿に、わたしは何となくだけど納得してしまう。

わたしの知る限り、いつも落ち着いて見えるはやてさんだけど、考えてみれば今のわたしより二つも年下の頃からお母さん役をやっていたわけで……。

ひよつとすると、両親を早くに亡くしたはやてさんにとっては、ずっと援助を受けていたグレアムさんの前が、数少ない“子供っぽくいられる場所”なのかもしれない……。

「——なんて感傷的になつてる場合じゃなかった！ はやてさん、トランザムさんの亡霊が右の部屋に入つていきましたよ！」

「よっしや、追うでええ！」

「おおっつ！」

拳を振り上げたはやてさんの後ろを、アインハルトさんが追いかけていく。

まるで親分と子分だ。

「——つたく、父様の面倒は私が見る、みたいなこと言っておいて」

「結局こうなるんだから」

「たはは……」

「まあいいじゃないか」

そう言うグレアムさんがはやてさんを見る目は、本当に娘か孫を見守るおじいちゃん
のようで……。

——ああ、そうか……。

わたしを見るなのはママの瞳や、フェイトママを見るリンディさんに似てるんだ
……。

その優しげな眼差しは、ミウラさんを見守るはやてさんにも受け継がれている。

だけど、だからこそ、どうしてこんなにも心優しい老人が、あの時、はやてさんを封
印——凍結する道を選んだのか？

いくらクロノ提督の父親の一件があつたにせよ、それだけがわからない。

そんなわたしの心情の変化に気づいたのか、グレアムさんが優しく頭をなでてくれよ
うとする——が、わたしは思わず避けてしまう。

「あ……すみません！」

「いいんだよ。私は切り捨て、なのは君たちは拾い上げることを選んだ。その結果なのだからね」

「グレアムさん……」

「だけど、一つだけ覚えておいて欲しい。

もしはやてが私と同じ道を選んだその時は、君が……君たちが、助けてあげて欲しい。かつての、なのは君やフェイト君のようにね——」

3

「……」

壁一面に古い本が並んでいる。

白い影が逃げこんだ部屋に入ると、そこはまるで図書室のようだった。

明らかに客室や使用人部屋の類ではない。

「トランザムさんの私室か書斎だとは思うけど……」

「ヴィヴィオさんっ！」

「トランザムがどこにもおらんぞ!?!」

「はい、そのベルカコンビ、いい加減正気に戻ってくださいーい」
すると、

「ん〜」

辺りをクンクンしていたロツテさんが、

「あたしは別に犬じゃないけどさ、この書棚の向こうから、例の変な魔力が臭ってきてる
と思うんだよね」

「そう言われると……」

「壊しましょうか?」

アインハルトさんが断空拳のポーズで身構えた。

「いやいや、隠し扉だろ。八神、アバカムは蒐集してないのかよ?」

「流石にドラクエの魔法はな〜」

「『さいごのかぎ』はどうですか?」

「持つとらんわ!」

「壺かタンスを調べれば……」

「どこの勇者やねんっ!?!」

「——ん〜」

「どうかしましたかヴィヴィオさん?　もしかして壺の中に何か……」

「いえ、壺はないんですが、この肖像画なんですけど」

「あー、この背景もベルカっぽいですね」

「そうですか……となると、人物と一緒に描かれているこの杖も……」

「カートリッジシステム？」

「はい。これまでトランザムさんが使ってきたのが魔法だとして、しかも、古代ベルカと関係があるとすれば——」

わたしは本棚の前で詠唱を始める。

「アバカムかつ!？」

「違いますよ! だけどこれで——えいっ!」

本棚が中央から縦に割れる。

そして、両開きのドアのように、わたしたちの目の前で大きな口を開いた。
下へと続く階段が現われる。

「「「おくっ!」」」

「流石は私のヴィヴィオさんです!」

「今のって?」

「はい。古代ベルカで使われていた魔法の鍵を、解錠するための魔法です」

「それは、もしかして聖王女の……?」

「いえ、わたしそういうのはあんまりないんで。ただ、小さい頃ユーノ司書長から教わったことがあるんですよ。トレジャーハンターには必須スキルだ、みたいなこと言われまして」

「あ、フェレットのあの子か」

「遺跡探索が生業のスクライア一族らしいわね」

昔を思い出し、一瞬、和やかな雰囲気になったところで、

「みんな、あんまり、のんびりとはしてられへんようやで——」

はやてさんが凜とした声を発し、階段の下を睨みつけた。

「何なんですか、この腐ったような、饅えた魔力の臭いは……?」

「全員、当てられないようにしたまえ」

ロツテさん先頭に階段を下りる。

1階どころか、地下1階……いや、地下2階まで続いている。

「そっか、それで入ってすぐの地下室にあったワインセラーが、屋敷の規模に比べて狭かったんですね」

「本命はこっちってこつたな——つとおお!」

階段を下りきった先。

再び待ち受ける扉を、ロツテさんが蹴破った。

と、同時に飛びこんだアリアさんが「光よ——」目眩ましを兼ねた、これまでよりも強烈な明かりの魔法を唱えた。

「これは……」

相当広い。ストライクアーツの練習場としても申し分ないほど。

「地下室より地下洞窟、と言った方が相応しいわね」

「何でしょう、地面に大きな石が等間隔に置かれているようですが……?」

ロツテさんがしゃがみこんで、

「コイツはどれも墓石だな」

「——つて、じゃあ、ここ一面、地下墓地つてことですかああ!?!」

——ズボツ!

「ヒィアアアアアアア〜ツツ!?!」

墓石の置かれた地面から、次々と手が生える。そして、ゆっくり這い出してきたのは、

「スケルトン！ ソンビ！」

「あつちはスペクターかしら？ それともレイス？ ああ、もう、これは写真に収めなくちゃ！」

「ちよ、アリアさんしつかりしてええ！」

「金の成る木キタアア——ツ!!」

「ロツテさんも写真撮るか戦うかどつちかにしてええ——つて、アインハルトさんもいっぱいいるからつて数えなくていいですからああ！」

「すみません、つい物珍しくてええ」

みんな興奮してしまっている。

そんな中、ただ一人押し黙っていたのが、

「はやて、さん……?」

「あかん、あかんで……こんなの、こんなの……おるはずない………こんな、うじやうじや………のろいうさぎのダンス………」

「はやてさんのSAN値がヤバイ！」

虚ろな目で現実逃避している。

「まさか、はやてがここまで心霊現象を苦手としていたとは……」

「わたしだって初耳ですよお——あ」

『クラウソラス』

前触れなく、はやてさんの高速で直進する砲撃魔法が放たれる。

「そーいえぼー」

初めて闇の書が起動した時、はやてさんは驚きのあまり気を失ったという。

劇場版『2nd A's』でも見た。

その時に比べれば、気絶することなく攻撃魔法を唱えている分、成長したと言えるだろう……けど、

「最強火力がメダパニって、最悪じゃないですかあ——つつ!!」

——ドツカアア~~~~ンツ!!

ここで、第1夜の冒頭にあるような、なのはママとは違う、//闇の書の意志Ver.、
とも呼ぶべき、はやてさんのスターライトブレイカーが炸裂するという大惨事。

正直、

『おお ヴィヴィー！ しんでしまうとは なにごとだ！』
になるかと思いました。

4

パラパラ……と、天井から砂や石の欠片が落下する。

「助、かつ、た……？」

アレだけの規模の爆発が起きたのに、わたしはケガ一つない。それどころか、生き埋めにもなっていないかった。

「ふう、なのは君のような結界を破壊する効果がなくて助かったよ」

「父様っ！」

グレアムさんの張った結界のお陰だろう。

「流石は元提督っ！」

艦隊指揮官、執務官長を歴任しただけのことはある。地球出身者の魔力資質は高い。ひよっとしたら、若い頃のグレラムさんは、なのはママやはやてさんと、ガチンコで戦えるほどの魔導師だったのかもしれない。

「コチラもどうにか終わりました」

アインハルトさんが、手刀ではやてさんを昏倒させていた。

「もう、アインハルトさん、旋衝破で跳ね返してくださいって言ったのにい〜」

「あんなの受けたら死にますからああ!?!」

何にせよ、一面焼け野原——まあ、元から墓地だったのだけど——ゾンビやスケルトンは跡形もない。

ん〜。

「結局、わたしたちはトランザムさんの畏にはめられたってことでしょうか?」

「どうかしら……」

ハッ——と、アインハルトさんが振り返る。

「ヴィヴィオさん、上です! 例の白い影が浮かんでますよ!」

「あつ——」

トランザムさんの亡霊が、まるで、わたしたちを睥睨するかのよう、天井付近に浮かんでいた。

ロツテさんの毛が逆立つ。

「お前ら、注意しろッ！」

地下墓地の地面に、白いベルカ式の魔法陣が浮かび上がる。

「これは——」

「「「「転移魔法陣!?!」」」」

わたしたち6人の姿が、屋敷の地下から消え失せた。



次回、ゴーストハンター・ヴィヴィオ 第4夜

『高町ヴィヴィオと奈落からの呼び声』

に——リリカルマジカル、がんばります！

ゴーストハンター・ヴィヴィオ 第4夜

第4夜『高町ヴィヴィオと奈落からの呼び声』

1

「——ここは？」

キヨロキヨロ周囲をうかがう。

わたしたち6人が転移魔法陣で連れて来られたのは——断崖絶壁。

巨大な穴の縁に建てられた、丸屋根で小さな寺院のような建物の内部だった。

僧侶がいるわけでもなく、ただ、壁一面——360度に渡ってたくさんの書物が並んでいる。

書齋の本も多かつたけれど、この寺院はそれを圧倒していた。

「どれも、古代ベルカ語で書かれているようですね」

手に取ったアインハルトさんが教えてくれる。

「ちよつと検索してみましようか……？」

ユーノ司書長仕込みの検索魔法で、今回の一件に関係ありそうな資料を絞りこむ。

ヒットした本にざっと目を通すと、わかったことを、リーゼ姉妹とアインハルトさんに伝える。グレアムさんとはやてさんはまだ目覚めない。

「——つまり、トランザム氏の一族は、ベルカ戦乱の末期に、管理外世界である地球に逃げ延びた者たちの末裔だと？」

「はい」

「聖王家がベルカの戦乱を終わらせるため『ゆりかご』を起動した『聖王統一戦争』はご存じですよね？」

戦後、生き残った国がある一方で、国を失い、管理外世界へ逃れた人々がいました。

それも、一般人ではなく、とある王家の一族……」

『魔法使いと呼ばれたトランザムは、君やアインハルト君と同じ、いや、それどころかはやてとも同じ、古代ベルカに縁がある一族だった——ということだね』

「グレアムさん！ 気がついたんですね！」

「ああ、心配をかけたようだけど、もう大丈夫だよ」

老体に鞭打ち、スターライトブレイカーを結界に封じたのだ。相当お疲れだったのだ

ろう。

リーゼ姉妹が「父様！」と抱きついた。

「これで気を失っているのは八神司令だけになりましたね……って、あの、ヴィヴィオさんもみなさんも、どうして私をジツと見つめているのでしょうか？」

「いや、お前のことだから、なんかクリティカルヒットとか出しちやつたんじゃないかなって」

はやてさん致命傷である。

「出してませんよおお!? ちゃんと手加減しましたからっ!」

「まあまあ、あれくらいじゃないと、はやては止められなかつたさ。それよりもヴィヴィオ君、あまり時間は残されていないのだろう?」

「あ、はい——。」

このマニュアルによると、この場所は「奈落」と呼ばれ、屋敷の地下深くに、ベルカの結界魔法——封鎖領域を応用して生み出された異空間の一種のようです。

そして、奈落の最下層に封じられているのが、トランザムさんの一族が滅びる国から持ち出したロストロギア——禁忌兵器です。

その名も「アデイス」。

喰らい尽くすモノと呼ばれた奈落の腐食兵器ですね。

元々は、腐敗兵器に対抗するために作られた、キメラ的なカウンターマジックだったそうです。ところが、改良を重ねるうち、次第に周辺諸国から、腐食兵器と呼ばれる存在に成長したとあります」

「それを地球に持ち出したと？」

「はい。ただ、本国の設備でも管理が難しかったアデイスを、地球の、それも当時の技術での封印には限界があつたらしく、徐々に結界が侵食されていったようです」

「それで、ついに地上にまで影響が開始めたということか……」

「屋敷の草木が枯れたのもそのせいね」

「地下にあつた墓地は、代々のトランザム一族のモノで、彼らは死してなお、アデイスを封印する結界の一部になつたそうです。」

いわば『守護者』ですね。

わたしたちが、結界を維持する守護者を倒してしまったので、今、アデイスの動きは一気に活性化してしまつたはず——」

「あたしたちが来ない方が良かったってことかよッ!？」

「もう地上に影響が出てたんだから、遅かれ早かれでしょ」

まぶたを閉じ、黙って聞いていたグレアムさんが目を見開いた。

「アリア、ロツテ、先行して、アデイスを止められるようなら止めてくるんだ」

「わかりました」

「任せといてよ、父様！」

わたしも手を挙げる。

「あの、わたしも一緒に行きます！」

「危ないからやめとけ」

「そうね。わざわざヴィヴィオちゃんが危険な目に遭うことはないわよ」

「でも、このマニュアルを読めるのはわたしだけだし……」

「アインハルトさんも読めるけど、古代ベルカの魔法技術に関しては、わたしの方が詳しい。」

「でしたら、私がヴィヴィオさんと一緒にしましょう。それでいかかでしょうか？」

「父様……」

リーゼ姉妹が自分たちの主人を見やる。

「君のお母さん——なのは君も、君たちの歳ぐらいにはもうエースと呼ばれていたよ。」

リーゼも、『砕け得ぬ闇事件』の際に、2人と共に戦っているのだろうか？」

「それは……」

「そうだけど……」

「だったら、この状況、ヴィヴィオ君たちも立派な戦力だよ。そうじゃないかね？」

「あく、もうわかったよ、父様！」

「ヴィヴィオちゃんも、アインハルトちゃんも、くれぐれも無茶はしないようにね？」

「はいー！」

「私も、はやてが目覚めたら事情を説明してすぐに追いかけるよ」

「了解！」

「わかりましたー！」

2

「この穴の真下に、腐食兵器アデイスがあるんですね——」

寺院を出ると、大人モードに変身したわたしとアインハルトさん、そしてアリアさんとロツテさんの4人は、断崖絶壁の内側に沿って掘られた足場——螺旋状に地下へ続く坂道を駆け下りていた。

「んで、ヴィヴィオ。どうやったらアデイスを止められるんだ？」

「はい。起動前の腐食兵器は『アデイス—ククリ』と呼ばれ、小さな繭のような形をし

ているそうです」

「完全な封印状態ということね」

「はい。それが、何らかの影響で起動すると、アデイスーラールア」という幼虫のような状態になるそうです」

「では、現在は？」

「はい。今がちょうど、そのアデイスーラールアの状態だと思います。

これが最終段階になると、アデイスーアポルト」という腐食兵器の完成体に成長するそうです。

止める方法はただ一つ。

完成体になる前に破壊することだけ」

「そりゃシンプルでわかりやすいな——つとど！」

わたしたちの行く手を遮るように、壁面から人型のゴーレムが現われる。

「霸王流——」

わずかに体を引いたアインハルトさんの拳が、エメラルドグリーンの魔力光に包まれる。

「破城槌！」

叩きこまれた魔力の輝きが、ゴーレムを内側から粉碎。わたしたちは足を止めること

なくゴーレムの横を通過する。

「やるね、アインハルト！」

「いえ、ですが、これもトランザムさんの仕業なのでしようか？ もはや妨害する意味もないと思うのですが……」

「おそらく違うと思います。今のは単なる奈落の防衛システムかと」

「というと？」

「わたし、さっきの寺院でマニユアルの他に、トランザムさんの一族の記録……いえ、手記のようなものを見つけたんです。

最初は、故郷の大地に似ていた——それだけの理由で移住したはずが、いつしかベルカに帰ることを諦め、この地に根づくことを選んだ——そう書かれていました」

「そう。コックスウエルと、そこに住む人々を気に入ったのね」

「はい。けれど、問題が一つありました」

「アデイス……でしようか？」

「そうです。屋敷の地下深くに封じた腐食兵器が動き始めていることに気づくと、彼らは自分たちの命と魔力を使い、結界を強化することに決めました」

「それが地下墓地か」

「はい。そして、ここからは推測になりますが——一族が死に絶え、結界を維持できなく

なったトランザムさんは、探していたんだと思います。

腐食兵器の影響が地上に出始めた今、アデイスを止めることができる本物の魔導師を」

「それで心霊現象を……つまり、屋敷の罨や怪物は、私たちの力を試すことが目的だったんですね？」

わたしは「はい」と頷いた。

「それで、合格したあたしらを魔法陣で奈落まで連れて来たってわけか」

アリアさんが「ふうん」と鼻を鳴らす。

「だったら、これ以上グズグズしているわけにはいかないわね、ロツテ！」

「おうよ、アリア！」

「え」

「ちよ——」

2人は、いきなりわたしとアインハルトさんに近づくと、腰に手を回し持ち上げる。

そして、お姫様抱っこの格好のまま、

「それええ——っ!!」

坂道の縁を蹴り、穴の中央に向かって大ジャンプ！

「ちよつと待つて、ちよつと待つてつてばああ〜!」

浮遊制御もせず、奈落の底に向かって一直線に下降する。

「トランザムに妨害する意思がないなら——」

「こつちの方が手っ取り早いでしょ——?」

「それはそうですけどおお〜〜〜」

「ふわああ〜〜〜」

風を切る感触。

「前にもこんなことあったようなああ〜〜〜つつ!!」

「過去の世界に行ったときはわああああ〜〜〜つつ!!」

「舌噛むなよお!」

「もうすぐ着くわよ——」

超特急でした。

3

「よっし、到着うっつ！」

猫科だけにナイス着地！

と、言いたいんだけど、わたしとアインハルトさんは「あうっ」とよろける。

耳がツツツンするうっ。

「()が最下層ね——」

奈落の最深部。

魔力炉のような巨大装置が、地面に刻まれたベルカ式の魔法陣に合わせ、3方向に設置されている。

問題は中央。

台座のようなプレートの上に、芋虫を彷彿とさせる赤茶けた生き物が乗っていた。

「うわぁ……」

「何というか……キモいわね……」

「昆虫……でしようか？」

はやてさんがいたら「モスラか！」みたいに突っこんでいただろう。実際、そんな感じの生物だった。

小さければ、まだ可愛げもあったのだろうけど、何せサイズが電車の先頭車両くらいはある。

「これが腐食兵器の幼生体——アデイス——ラールアの状態だと思います」

「どうやら間に合ったようね」

わたしたちの存在を認識したのか、チョココロネみたいなボディで鎌首をもたげる。

「完成体になる前にさっさと破壊するぞ」

「わかりました！」

わたしたち4人は魔力を高めると、各自の最大火力をぶつける。

「一閃必中っ！ セイクリッドブレイザーア——っ!!」

「霸王！ 断ツツ空々ツ拳ツ!!」

「焼き尽くせ！ ブレイズカノンツ!!」

「殲滅せよ！ ステインガーブレイド・エクスキューションシフトっ!!」

——轟音。

虹色の閃光に、断空の破壊力、さらに炎と数え切れないほどの刃が、アデイスーラー
ルアに突き刺さり、空間を蹂躞する。

吸いこまれるような突風。燃え上がった肉片や、砕けた台座の欠片が弾け飛ぶ。

改めて、攻撃魔法の恐ろしさを知る——そんな光景だった。

トリプル・ブレイカー——とまではいかないけれど、

「これはまた……」

「やったか！」

「やったか禁止ですよ〜って、ほら、何か残っちゃってるじゃないですかああ……って、

あれ、なに……女の、子……？」

初めて出会った頃のアインハルトさんのような、それでいて眠っているイクスのよう
な神秘的な雰囲気を漂わせる少女。

特徴的なのは、背中に生えた蝶の羽。

「妖精さんみたい……」

「全身茶色だけどな」

「エスタークですね」

「誰ええ!? アインハルトさんに余計な知識を与えたのはああ〜っ!!」

「まさか……これが完成体なの!？」

初期マニユアルには書いていない。

未知の進化と現象。

ひよつとすると、さらに改良が加えられていたのかもしれない……。

「何にせよ、人間サイズまで縮んだ今がチャンスだろ——先手必勝おお!!」

足に魔力をこめたロツテさんが、完成体アデイス—アポリトに向かって跳び蹴りを放つ。

——グシャアア!

アデイスの肉体は、泥か何かで出来ているように、

「分裂したああ!？」

わずかに小さくなったアデイスが2体が増える。

「馬鹿ロツテ! ブレイズカノンっ!!」

ブワツ——と、肌を焼くような熱量と爆風に、わたしは思わず身をすくませる。

そして、ようやく煙が収まると、

「1、2、3、4、5、6体——馬鹿アリアっ！ さらに分裂しただろおおうっ!?」

「何なのよこれっ!?」

「とにかく全部倒しちゃいましょう!」

「1人2体ずつ。行きますよ!」

「おう!」

ところが、

「おいおい、さらに分裂って!?!」

単純な倍——12体に増加する。

「切りがないわね」

「しかも分裂するごとに小さくなって……このままじゃ、アインハルトさんよりちっちゃくなっちゃいますよ!?!」

「ヴィヴィオさんも一緒ですよねええ!? とにかく、もう一度、全員で一気に殲滅しましょう!」

「だな」

「これ以上増える前に」

「わかりました!」

再び4人同時の最大火力。

名づけて「クアドラプル・アサルト」といったフルドライブバーストが、分裂したアデイスを容赦なく飲みこんだ。

今度こそ消滅したはず。

「——つて、何でええ!?!」

「おいしい、何でこんなに増えてんだよ!」

「粉々にしたせいなのっ!」

「しかもこの大きさって……」

「フレイムアームズ・ガールですね」

「だから、誰がアインハルトさんに余計な知識をおお〜〜〜っ!?!」

茶色いバーゼラルドやステイ子みたいなのが、無数に飛び交う。

しかも、倒した先から消滅ではなく分裂していくのだ。

際限がない。

「スピードに定評のあるわたしですがあゝ、流石にこれは〜〜」

まとめて3体のアデイスを叩き潰したアインハルトさんが動きを止める。

「どうしました!?!」

「ヴィヴィオさん、コレを——」

アインハルトさんの拳。金属製のナックルが茶色く錆びて、黒いグローブまで溶け始

めている。

「まさか——」

慌ててわたしも自分の手を見る。

同じだ。バリアジャケットがアデイスに侵食され素肌が見え始めていた。慌てて防護服を再生すると、

「ロツテっ!!」

耳をつんざくような悲鳴が上がる。

「アリアさん、何が——」

慌てて駆け寄ろうとして、

「こっちに來んな、ヴィヴィオっ!!」

ロツテさんの怒鳴り声が、わたしの足を制止する。

「その手!」

ロツテさんの拳が、腐ったように茶色く変色していた。

猫の使い魔であり、誰より多くアデイスを倒した結果がコレだ。

わたしやインハルトさんと違い、グローブをつけていない——といった影響もある

のだろう。

「ロツテさん、下がってください！」

「大丈夫だ！ あたしにはまだ魔法がある!!」

しかし、アデイスはもつと小さく、もつと数を増やし、ロツテさんに群がっていく。容赦なく。

まるで、イナゴの大群のよう。

「喰らい尽くすモノって……そうか、そういう意味だったんだ！」

「ロツテええ——っっ!!」

助けに向かおうとしたアリアさんを、アインハルトさんが背後から両脇を抱えて押さえつける。

「素手では相性が悪すぎます！ ヴィヴィオさん魔法で！」

「わかりました！」

バリアジャケットがあるから、多少無茶な魔法が直撃しても平気なはず。

「デイバインバスタアア——ッ!!」

ママから獲得した大出力の魔力砲が、ロツテさんごとアデイスを吹き飛ばす。

「ロツテさん！ 逃げてください！」

爆煙が収まると、そこには、さらに数を増やしロツテさんに群がるアデイスの姿が。

「どうして……」

これまでのアデイスの分裂速度なら、一時的にでも消滅して、脱出の機会が得られるはずだったのに。

それが、まったくくない。

ただ、増えていた。

「こんなのって……こんなのって、もう、分裂なんかじゃないよー」

「増殖、ですね……」

潰そうが、焼き殺そうが、消滅した端から増えていく。

最早、手がつけれられない。

「ロツテ、今助けに行くから！」

アインハルトさんの腕を、無理やりにも振り解こうとするアリアさん。

ところが、

「アリア、来んじゃねええ——」

「ロツテ!?」

「ロツテさん!」

まだ無事なのか、ロツテさんの力強い声が双子の姉を厳しく叱咤する。

「ヴィヴィオとアインハルトを連れて、とつとと引くんだ!」

「でも——」

「いいから」

声が震える。

「あたしならまだねばれる。だから、行くんだ!」

「ロツテ!」

「ロツテさん!」

さらに密度を増し、アデイスがロツテさんに肉薄する。

それはもう、巨大な茶色の塊で、ロツテさんの姿を確認することすらできない。

「くっそ……お前らアア……闇の書かよオオオオ—— ツツ!!」

ロツテさんの絶叫が押し潰されそうになった瞬間、天から真つ白い光の柱が降り注ぐ。

「これは!？」

薙ぎ払うように、ロツテさんにまとわりつくアデイスの半数をえぐり取る。

さらに、

「着弾炸裂魔法!？」

目のくらむ白い閃光が連続して弾けると、無数の爆発音と共にアデイスが一掃されていく。

そして、

「——呼んだか、ロツテ?」

空から舞い降りるのは、漆黒の翼に騎士甲冑をまとう大人の女性。

「八神……」

「八神いい」

「八神司令!」

「はやてさあゝゝゝんっ!!」



次回、ゴーストハンター・ヴィヴィオ 最終夜

『高町ヴィヴィオと導かれし者たち』

に——リリカルマジカル、がんばります!

ゴーストハンター・ヴィヴィオ 最終夜

最終夜『高町ヴィヴィオと導かれし者たち』

1

「——これはまた厄介な状況やな」

騎士杖を水平に持ち上げ、再びはやてさんが呪文を唱えると、

——ドンツ！ ドンツ！ ドンツツ！！

「はわわっ!?!」

「あうっ!」

「ちよ!」

わたしたちのすぐそばで、立て続けに魔法の爆発が起きる。

「こら八神つ、あたしたちまで巻きこむなああ——っ！」

「すまんすまん。ほら、ラインがおらんから細かいコントロールができなくて」
「そういえば、ユニゾンしていないので髪や瞳の色が変わっていない。」

いつものタヌキ色だ。

「せやけど、まとめて吹っ飛ばす分には、問題ないやろ？」

「大アリだっつーの！」

「そーいうことね」

「ロツテさん、先程はよくご無事でしたね」

一歩間違えれば大惨事。

「あく、結局、こういう展開なんですわええ」

「あはは、なのはちゃんと一緒やろ？」

「……はい」

ですわ、と笑って頷くしかない。

「アデイスく、やったか、見た限り、お話は聞いてもらえへんと思うけど——一気にドカ
ンとやるで、みんな！」

「はい／了解です／おう／わかったわ！」

3度目となる最大火力。

わたしたちのクアドラプル・アサルトに加え、はやてさんの特大魔法が炸裂する。

「さあ、これでお終いや！ 響け、終焉の笛——ラグナロクっ!!」

奈落の底を満たす白い閃光。

残っていたアデイスだけでなく、わたしたちのいる空間までえぐり取る。

たった1人の砲撃で、わたしたち4人の連携魔法を上回ると、防御フィールドでも防げないほどの突風を発生させる。

「クリス！ シールド、シールドおお！」

「流石、八神司令っ！」

「敵ながら同情するよ」

バサバサわたしたちの髪がなびく。

「化け物クラスの魔力量ね……こりゃ結婚できないわけだわ」

「今それ関係ないやろおお!？」

はやてさんはバツが悪そうに頭をかくと、

「とりあえず、グレアムおじさんもこっち向かつとるけど……ああ、あかん、結界のせいで外部に通信が届かへん。」

ロツテ……は、ちよつと休んでもらつて、アリア、ひとつ飛びしておじさん連れて屋敷の外まで出てくれるか？

まだあるんやろ、おじさんからレテイ提督へのホットライン。管理局から応援を呼んで——」

「八神、危ないっ！」

「へっ!？」

先程よりさらに細かくなり、もはや小バエほどのサイズになったアデイスが、はやてさんに群がった瞬間、ロツテさんが素早く腕をつかみ引き剥がす。

同時に、アリアさんがブレイズカノンで一掃した。

「なんやの……こいつ？」

「流石にシヤレになりませんね」

一度は完全に消滅したと思つたアデイス。

ところが、それがもつと小さくなり、爆発的な広がりを見せている。

その姿は煙のようで、さらながら一つの生物のようにながら膨張し、上昇していく。

「まるでパンデミックね」

「感染……そうか、そういうことか。わかったで、アデイスは魔力を喰べとるんや」

「魔力を喰べる？」

「そう。わかりやすく言うと、収束砲みたいなもんやな。こつちが強力な魔法を放つと、それを利用して自己増殖を早める」

「だったら攻撃しなければよいのでは？」

「空気中の魔力素を喰らうだけや。一度動き出したアデイスは、魔力が存在する限り増え続ける。——アホみたいにな」

「そんなやつ、どうやって倒せば……」

「アルカンシエルでもあれば、どうにかなるかもしれないけど」

「おいおい、闇の書じゃあるまいし」

「そやね。でも、同じ古代ベルカで作られたもんや」

ある意味、倒し方も一緒ということだ。

「宿主がないだけマシってもんね」

「だったら、今すぐみんなで奈落の外に出しましょう。管理局に応援を頼めば、レティ提督

だけじゃない、クロノ提督だって、ヴォルケンリッターのみんなだってすぐに駆けつけてくれますよ！　なのはママたちだって」

「いいや、それはあかん。

アデイスは、今、ここで食い止めんな。

コイツの増殖スピードは異常や、結界の、屋敷の外に出したら最後、もう誰にも止められへん。

こんなちっこいのが広範囲に広がったら、転送——アルカンシエル、なんて手も使えへんやろ」

14年前は、限定的なコア捕獲ができたからこそ、シャマル先生、アルフ、ユーノ司書長の3人で、超長距離転送なんて無茶ができた。

けれど、今回はアデイスの1匹でも逃したらアウトなのだ。

破壊性は下がっても、不死性だけはさらに高い。

「だから、私が今ここで、決着をつける」

「でも、どうやって！」

「私の全力全開。知つとるか？　なのはちゃんより強いんやで。ただなあ、ラインがおらんから、細かい調節できんし、みんなを巻きこんでしまうかもしれないへんから——」
「な」
はやてさんは、いたずらっ子っぽく片目をつぶって笑うけれど、そんな台詞で納得で

きるはずが――、

「そう。あたしたちは邪魔ってことね」

「アリアさんっ!？」

「ヴィヴィオ、ここは八神に任せるんだ」

「ロツテさんまで！ さつき助けてもらったんだから――」

「ごめんな、アリア、ロツテ。また嫌な役を押しつけてもうて……」

「ふんっ、それはお互い様だろ。」

行くぞ、ヴィヴィオ、アインハルト！

「あたしたちは父様をひろって屋敷の外に脱出。その後、すぐに管理局に連絡。」

――これでいいのね？」

「おおきにな」

持ちやすいよう、変身解除したわたしとアインハルトさんの体が、リーゼ姉妹に抱えられ宙に浮く。

最下層に残ったはやてさんの姿が徐々に小さくなっていく。

――だけど、本当にこれでよかったのだろうか？

「アインハルトさん……はやてさんは、本当にアデイスを倒せるんでしょうか？」

「そうですね。八神司令の魔力と、夜天の書に蓄積された魔力——その両者を全て放出すれば、あるいは瞬間的にアルカンシエルクラスの力が出せるかもしれません。

本来なら、被害の大きさを鑑みて地上では使えない兵器ですが、幸いなことに、この奈落はベルカ式の結界内部。

例え結界が崩落したとしても、アデイスが解放されることに比べれば、地上への影響は最小限で済むはず……ただし、その際、八神司令がどうなるかまでは……」

「そんな!？」

「言うな、アインハルト!」

「あの子の覚悟を無駄にしないであげて」

——あのはやてさんが死ぬかもしれない？

ダメだ、それだけはダメだ……。

そうか、ようやくわかった……。

はやてさんの選んだキャリアの道は、限りなくグレアムさんと同じ道のり。

けれど、ここでははやてさんが下した結論——切り捨てようとしているのは、自分自身

だ。

今打てる最善の一手。

犠牲にする対象が、はやてさん自身だったということ。

わたしはトランザムさんの屋敷で聞いた、グレアム元提督の言葉を思い出す。

『だけど、一つだけ覚えておいて欲しい。

もしはやてが私と同じ道を選んだその時は、君が……君たちが、助けてあげて欲しい。かつての、なのは君やフェイト君のようにね——』

もし、ここにいたのが、わたしでなく、なのはママだったとしたら——。

決して、はやてさんを助けることを諦めないだろう。

だけど、わたしはなのはママじゃない。

フェイトママでもない。

2人に比べれば、心も、体も、ずっと弱い……。

だとしても……そうだ、まだだ、まだわたしは、ママたちみたいにやれることを全てやったわけではない。

わたしにしか出来ないことが、何か、他にあるはず——。

「アリアさん、ロツテさん、ごめんなさいっ——」

「ヴィヴィオ!?!」

「ヴィヴィオちゃん!?!」

わたしは2人の手を振り解き、再び最下層目がけて飛び下りる。

「ヴィヴィオさんっ——」

すぐさま、アインハルトさんも追いかけて来てくれる。

——ありがとう、アインハルトさん。

わたしはタン——と地面に着地した。

「ヴィヴィオ、どうして戻ってきたんや!」

魔力を練るため無防備な状態になっていたのだろう。はやてさんは、帽子を落とされ、バリアジャケットの白い上着を、茶色く腐食され始めていた。

わたしはママのように——どんな絶望的な状況でも諦めないのはママのように、ニカッと空を飛ぶように笑ってみせる。

——ノーヴェ、ごめんね。

今だけストライクアーツは封印する。

——なのはママ、フェイトママ、ごめんなさい。

「セイクリッド・ハート！ セ——ット・ア————ツプ!!」

これがわたしの、もう一つの全力全開——全身を、まるで戦乱末期のベルカの空のよう
うに真っ黒なバリアジャケットで包みこむ。

「聖王モード！」

「ヴィヴィオさん！」

わたしに駆け寄るのは、600年前から変わらない真っ直ぐな瞳。

「アインハルトさん——いえ、ハイティ・E・S・イングヴァルト。わたしのために時間

を稼いでくれますか？」

アインハルトさんは少しだけ驚いた顔つきになるも、すぐに頷き返してくれる。

「……わかりました。霸王イングヴァルトの子孫として、今度こそ、あなたを守ってみせましょう——ヴィヴィオ、陛下！」

再び武装形態——霸王の戦装束に身を包む。

さあ、これで準備はできた。

あとは、

思い出せ、わたし——。

聖王の鎧はない。

あれはもう使えない。

レリック——聖王核がないから。魔力が足りないのだ。

けれど、わたしにはもう一つ、他の誰にもないスキルがあるじゃないか。

高速魔法蒐集。

ゆりかごの玉座に近づくと驚異を排除するための力。

データ収集による魔法戦闘。

コロナが、ネフィリムフィストで他者の技を真似るなら、わたしは他者の魔法を学習

し獲得できる。

それも、見ただけで。

セイクリッドクラストーも、インパクトキャノンも、フェイトママのプラズマアームにスマッシュャーだってそう。

そもそも、最初はそのために、魔力データの収集を行うため、無意識のうちに、なのはママのそばにいた。

そして、その能力だけは、今もこの胸にある。

高い学習能力と共に。

だからといって、どんな魔法でも使えるというわけではない。

魔力量が足りないから。

やり方はわかっていても、スターライトブレイカーも、プラズマザンバーも、ラグナロクも、使えない。

だったらどうする？

はやてさんが、アインハルトさんが、戻ってきたアリアさんとロツテさんが、必死にアデイスに対抗している。

もう、後には引けない。

「——クリスっ！」

聖王として覚醒した後、今のわたしが高町ヴィヴィオとしてデータ収集してきた中で、アデイスに対抗できる、はやてさんを救うことができる唯一の魔法。

逆転できる『王』の一手。

「術式——フォーミュラ・エルトリアアア——っ！」

ミッド式でもベルカ式でもない。

わたしの学習した異世界エルトリアの魔法が、クリスを通し虹色の光帯となって足元で円を描く。

「こつちからあつちに行くのは無理でも、あつちからこつちに喚ぶだけならああ——よし、つかんだ！」

転移元の座標を特定する。

「聖王の名の元に、来よ、王、来よ、理、来よ、力、来よ、紫天の盟主！」

古代ベルカの遺産たる紫天の騎士たちよ、遠方より、運命の守護者、時の操手を引き

連れ、ここへ集え——」

異世界の魔法陣——フォーミュラ・プレートを通り、まず現われたのは、不遜な態度で腕を組む、子供の頃のはやてさんそっくりな紫の少女、闇統べる王——ロード・ディアーチエ。

続けて、落ち着いた雰囲気をもつシヨートヘアなのはママ、星光の殲滅者——シユテル・ザ・デストラクター。

さらに、今にも待ち切れないといった様子の、水色の髪をしたフェイトママ、雷刃の襲撃者——レヴィ・ザ・スラッシュャー。

そして、最後に現れたのは、かつて碎け得ぬ闇と呼ばれた、わたしやアインハルトさんより幼く見える少女、紫天の盟主——ユーリ・エーヴェルヴァイン。

異世界エルトリアに侵攻した紫天一家の4人組だった。

「待たせたな、小鴉——」

「お久しぶりです。ハヤテ、ヴィヴィオ、アインハルト、それに、リーゼ姉妹でしたか」
「ユーリとボクもいるよ〜」

「お、お久しぶりです……その節は大変お世話になりました」

「まさか、マテリアルたち!? ああ、こちらこそお久しぶりです。1年ぶりでしょうか」
突然の出来事に手を止めたアインハルトさんが頭を下げている。

「そういうえば……あれ? 2人足りない。」

「アミタさんとキリエさんは?」

「ふんっ、どうせ帰りの魔力はない片道切符なのであろう? 送還用に残してきたわ」

「とか言って、あの2人ばかり映画の出番が多いのが悔しくて置いてきたんだよね、王様!」

「我らも、まさかの出演決まったであろお!?」

「まあまあ、ディアーチェ、レヴィ、あちらの4人に失礼ですよ」

「そうですよ! 出れない方だっているんですから!」

あう。

悪意はないのに辛口だあ。

流石は砕け得ぬ闇。

「あ、私CMなら出演させていただきましたよ?」

「アインハルトさ〜ん!」

わたしもミウラさんと一緒に出ちやいましたがああ。

「まったく貴様ら……それで小鴉、どうした？ 先程より一言もしやべらず、鴉が魔力砲を食らったような顔をしておって」

「い、いや……だって、どうして王様たちがここにおるん？」

「それはヴィヴィオに喚ばれたからだが」

「それにもビックリやけど、どうしてそんな準備万端で？」

「そういえば、王様の暗黒甲冑というバリアジャケットを始め、みんな戦闘モードだ。」

「最悪、料理中で、お玉にポニテの王様が来るかと思つたのに……」

「来るかボケエエ！」

「それはそれで百人力やったな〜」

「それ一人力であろう!？」

「もう忘れたのか？ 元々我らは貴様の夜天の書に封じられておつただぞ。つながりが全て消え去つたわけではない」

「例え眠つていたとしても、何となく胸の奥で感じるんですよ」

「とはいえ、基本、こちらから干渉するわけにもいきませんが……」

「んで、やきもきしてたら、ヴィヴィオつちから召喚されたんだよね〜、ナイスタイミング

グー！」

謎能力と言おうか、多少強引な理屈な気もするけれど、杖の代わりにお玉を、紫天の書の代わりに鍋の蓋を装備した王様が召喚されるよりは、よしとしよう。

「それにしてもだ、そんな蟲程度の輩に苦戦するとは……小鶉、貴様も歳を取ったものよな」

「歳の話はしなくてええから！」

「——で、子鶉、融合騎はどうした？」

「あ、はは……今日は連れて来てへんくて……」

「はあ、それでか……ならば、これは今日だけのサービスだ。ユーリー！」

「はいー！」

ユーリーの背中から溢れる魄翼が、紫の渦を成すと、それは次第に人の形を生み出していく。

長い銀髪に赤い瞳、そして、背中で黒い羽がはばたいた。

「これって……」

「まさか……リインフォース!？」

14年前に眠ったはずの管制融合騎——初代リインフォースさんがそこにいた。驚いたのはわたしたちだけじゃない。

リインさん本人も同じ気持ちだったようで、

「その声、その騎士甲冑……まさか、主はやて……ですが、そのお姿は……？」

そちらにいるのはマテリアルたちに、ユーリ、ヴィヴィオ、アインハルト、リーゼたちまで……」

どう伝えたものか。

「リインフォースさんには一瞬だったかもしれませんが、その、今は、わたしたちのいた時間と言いますか、実は、あれからいつぱい時間が経過していると言いますか……」

そんな拙い説明を、リインさんは肯定し、頷いてくれた。

「そういうことですか、理解しました。ここは未来、そして私のこの体は……闇の欠片、なのですね？」

「ふんつ、長くは持たんぞ」

闇の欠片とは、過去の記憶を闇の書の残滓が再現したもの——つまり、ユーリと制御する王様がいれば、同様の事象を意図的に引き起こすことが可能ということだ。

ビックリだけだ。

「王様、どうしてリインフォースを……？」

「我らは今の貴様の融合騎のことは知らぬからな。我らが知っているのは、あの時、あの場所、共に戦った其奴だけだ。」

故に、今はそのポンコツ融合騎で我慢しておけ」

王様がプイツ——とそっぽを向いた。

「あれが『TSUNDERE!』というものですか……」

「そうですね。アインハルトさん、参考になりますね」

「ええい、するな!」

リインフォースさんは、落ちていたベレー帽を拾うと、パンパン砂を払い、はやてさんの頭に被せる。

「奇跡のような残り時間を過ごし、思い残すことなど何もなかったはずなのに……まさか、こうして主はやての成長した姿を見ることができようとは……。」

主、本当に大きくなられて……」

「あく、胸はアインスほど成長しなかったけどな」

「アインス?」

「ああ、えっと、最初のリインフォースがアインスで、今の、2代目がツヴァイヤ」

リインさんは少しだけ目を丸くして、

「なるほど……そういうことでしたか」

「やつぱり、自分の名前がなくなるんは、嫌な気分やったか？」

「いいえ、私の名を継いでくれた者がいてくれて安心しています。どうせなら、ひと目会ってみたかったです」

「……せやな」

「それに、こうして、新たな名をいただけたのですから、やはり、私は世界で一番幸福な魔導書です」

「ほんま、相変わらずリインフォースは優しいな」

「今はアインスですよ、我が主」

「そやった！ これは一本取られたなあ、あつはつは——」

「あつはつはじゃねええ——ツ!!」

「そろそろ空気読むのも限界なんだけど！」

アデイスの猛攻を、たった2人で防いでいたリーゼ姉妹がピンチだった。

「おっと、忘れとった！ アインス、行くで——」

「はい、主はやて——」

「夜天の祝福、今ここに——ユニゾン、インツツ!!」

光になったアインズさんが胸に吸いこまれると、はやてさんの髪と瞳の色が変化。爆発的に魔力量が増大する。

「久しぶりに見ましたね〜」

「はい。初代融合状態ですわね!」

リインさん——えっと、ツヴァイさんには悪いけど、この圧倒的なまでの安心感というか迫力は、初代リインフォースさんにしか出せないものだろう。

「だけど、

「あの〜、王様。あのリインさんは闇の欠片ですけど、ユニゾンして平気なんでしょうか?」

「リオさんの大好きな爆発オチですわね」

「するかああ! シュテル、説明してやれ」

「承知しました。今のハヤテのリンカーコアは、初代の融合騎——つまり彼女と溶け合って出来ているそうです。であれば、ユニゾン後のリインフォースは、例えその身が闇の欠片であろうとも——」

「限りなく本物に近くなる!」

「そういうことだ。よし、小鴉どもに後れを取るな！ 我らも行くぞ——シユテル、レヴィ、ユーリ!!」

「「おーっ!!」」

「ヴィヴィオ陛下、お下がりにください」

「いえいえ、ここからはいつものナカジマ式ストライクアーツ、高町ヴィヴィオで勝負です！ クリス、もうひと踏ん張りいくよ！」

「わかりました、ヴィヴィオさん。霸王流アインハルト・ストラトス、参ります！」

「ああ、もう、あたしただけダレてる場合じゃないよな、アリア！」

「そうね。このまま見てるだけなんて、父様に顔向け、いえ、リーゼ姉妹の名が泣くわ、行くわよ、ロツテ！」

飛び上がったはやてさんの足元に、ベルカ式の魔法陣が展開する。

「先に行くぞ小鴉！——ジャガーノートツ！」

「ルシフェリオンブレイカアア！」

「雷刃封殺ツ、爆滅剣ツツ!!」

「エンシエント……マトリクスツ！」

「これでラストオオ——ツ、セイクリッド、ブレイザアア!!」

「連鎖を断ち切る力を……霸王断空拳ツ!!」

「こいつであたしらも打ち止めだああ——ミラージュ、アサルトオオ!!」
最後に、はやてさんが騎士杖シユベルトクロイツを掲げる。

いつもと違う黒い魔力光を放つ魔法陣。

「来よ、夜の帳、撃ち抜けええ——夜天の雷!!」

はやてさんとアインスさんの声が重なる。

放たれたのはフェイトママのお株を奪う巨大な黒い雷。

耳がおかしくなるような轟音。

わたしの視界だけじゃない、奈落の全てが白く染まり、あらゆる敵を討ち滅ぼす。

「あく、もうく、これでどうだああ!」

「やりましたね、ヴィヴィオさん!」

「……っ」

「……はあ、はあ」

流石のリーゼ姉妹も限界だったらしく、地べたに座りこみ肩で息をしている。

「みんな、お疲れやったな」

アインスさんの姿が、ツヴァイさんくらいのサイズではやてさんの傍らに現出する。

『主はやても、お見事でした……』

そんな、わたしたちの目の前で土煙が晴れていく。

ところが、そこに存在したのは、

「何でアイツ生きてんのさっ!」

「これは一体……?」

どう考えても、奈落から全て消し去ったはずなのに、何処からともなくアデイスが湧き始めていた。

「こんなのって……」

何かおかしい。

「——あうっ!?!」

「どうしたユーリ」

「この感じ……エグザミア?」

苦痛に顔を歪め、右手で瞳から額にかけて押さえていたユーリがぼつりと漏らす。

「おい小鴉! この蟲はまさか、ベルカ時代の遺産かッ?」

「そやけど……」

「まったく……また厄介な物を呼び覚ましおつて。エグザミアだ。この蟲にもユーリのもつエグザミアと同等の永遠結晶が使われておる」

「ちよ、待って、エグザミアって凄いパワーの源とかいったアレやろ？ 複数あるなんて聞いてないよ!」

「小鴉、足りない頭を使ってよく考える。いくら蠱惑的とはいえ、一介の魔導書——闇の書——に組みこまれた永遠結晶が、唯一無二の存在だったはずはあるまい。

仮に複数存在していたとして、見たところ増殖する兵器。どこぞで手に入れた無限連環機構を搭載しない通りがない」

「そんな……」

「でも、だったら同じ結晶をもつユーリなら!」

「たわけ! またユーリを暴走させる気か?」

「だったらどうすれば……」

「シユテるん、何かないのく!」

「そうですね。対システムU—Dプログラムを改良すれば、あるいは……ただ、根本的な問題として、ユーリには我が王——ロード・デИАーチェという制御プログラムが存在しましたが、この蟲にはそれが無い」

「あの蟲を抑えこもうと思つたら、それこそナハトヴァール——我らとユーリを休眠状態に追いこんだ、忌まわしき闇の書の自動防衛プログラムでも持ち出さねば不可能ということだ」

「ナハトヴァールって……」

そんなこと、

「——ようやく間に合ったようだね」

誰もが不可能だと思ったその時、聞こえてきたのは落ち着いた老人の声。

「グレアムおじさん!?!」

「父様!」

「ここは危険ですよ!」

「お下がりにください」

「むう……アレは誰だ?」

王様が胡乱げな眼差しでグレアムさんを睨めつける。

「リーゼさんのマスターですよ」

「ほう」

グレアムさんは言う。

「状況はリーゼから聞いている——」

主人と使い魔。同じ奈落内なら念話が使えたということか。

「やれやれ、こんなこともあろうかと常に持ち歩いていて正解だったな」

グレアムさんが取り出したのは1枚のカード……いや、それは光り輝き1本の——黒を基調とした白と青の——杖へ姿を変える。

「そのデバイスは……デュランダル!？」

「プロトタイプデュランダルだよ。かつてクロノに渡したのは、これの完成形だ。もちろん、こいつも改良していないわけではないがね」

「そっか……倒すわけやない。完全凍結させるだけならなんとかなるかも……」

「そう。主も、人格もないアデイスなら、犠牲になる人もいない。はやて、手伝ってくれるかい?」

「もちろんや、おじさん!」

「ヴィヴィオ君、君たちはリーゼの合図に合わせて下がるんだ」

「はい!」

クロノ提督のもつデュランダルよりも一回り大きく無骨な試作型のシャフトを、はやてさんとグレアムさんが並んで握る。

とつくと和解しているのかもしれないけれど、因縁ある2人が肩を並べて戦う姿。

——ママたちにも見せたかったな……。

すると、はやてさんが驚きの表情を見せる。

「ちよ、おじさんこの魔力って……」

「私が10年間デュランダルに蓄積した魔力だよ。少し増えすぎてね、私ひとりでは制御しきれないんだ……」

そう言つてグレアムさんが笑う。

なのはママやはやてさんクラスの魔導師が職を辞め、ほとんど魔法を使わず、ただひたすら長期間に渡り自らの魔力を貯め続けたのだ。

その魔力量は想像を絶する。

「これなら……やれる。アインス、準備はええな？」

『はい、我が主。いつでも——』

「おじさん、出し惜しみはなしや。私とおじさんの全力全開、そろそろ行くでええ！」

「ああ、タイミングは任せる！」

はやてさんとグレアムさんの周囲に、凍えるような白い魔力の冷気が舞い散り始める。

「悠久なる凍土……凍てつく棺のうちにて……永遠の眠りを与えよ……」

まるで、詩でも吟じているような2人の詠唱が響く中、わたしたちはギリギリまでア

デイスと戦い続け、

「全員下がって！」

リーゼ姉妹の合図で、一斉にはやてさんとグレアムさんの後ろに移動する。

刹那、

「凍てつけッ——」

放たれた白き閃光が奈落を穿つ。

「これで終わりやああ！ エターナルコフィンッツ!!」

最下層のベルカ式魔法陣と呼応し、奈落の全てが一瞬真っ白に染まる。

そして、地下から始まった凍結は、徐々にアデイスを追って上へ上へ伸び、巨大な穴の天辺——寺院にまで届くような冰山へ成長した。

「地獄の最下層——コキュートスで氷漬けにされたルシファーのようね」

「……っていうかアリアさん——かっこつけてる場合じゃなくて——寒いんですけどおお!!」

「へぷしっー」

温度変化から身を守るバリアジャケットですら追いつかない。

思わず炎系の魔法を使おうとして、

「あゝ、今ここ火気厳禁やで？」

「はううう」

身を寄せ合って暖を取るわたしとアインハルトさんを見て、はやてさんとリーゼ姉妹、それにグレアムさんまで笑っている。

ところが、この戦闘結果に納得いかない者が1人いた。

「あの永遠結晶エグザミアが、たかが凍結魔法ごときに封じられただと……？」

「王様あゝ、わたしたちが頑張ったから奇跡が起きたでいいじゃないですか」

「バカモノ！ 奇跡は起きないから奇跡だとかの名作『Kanon』でも言っておつただろうが……いや、待て、その杖といい、ただの凍結魔法ではない……そうか、ジジイ、グレアムとかいったな、ようやく思い出したぞ。

かつて、闇の書を小鴉ごと凍結、封印しようと目論んだ……そうか、そういうことか……」

王様が豪快に笑い出す。

「ダイアーチエ？」

「あまりの寒さに王さまが壊れちゃったよおお〜!」

「そ、それは困りますう〜」

「この、たわけ! 好き勝手なことをぬかしておるでない! ——というか、貴様らばかり固まりおつて、我が寒いだろおお!」

紫天一家は王様を中心にしくらまんじゅうのような格好で体を押しつけ合うと、再び王様が口を開いた。

「グレアム、貴様、当時どこまで闇の書について調べた? 闇の書の闇を止めるためだけに、わざわざデュランダルを用意するくらいだ。根掘り葉掘り、それこそ、夜天の書が闇の書に変わっていく過程まで、事細かに調べ尽くしたのであろう?」

管制融合騎——夜天の書創世時代からのシステムが知らぬことまでな」

『…………』

はやてさんの横に現れた小さなアインズさんが眉間にシワを寄せた。

艦隊指揮官、執務官長を歴任したグレアムさんなら、自由に調査する権限もある。

ユーノ司書長が無限書庫の整理・探索をする以前に、スクライアの一族を雇って調べることとも出来たであろう。

それらを、11年という長い歳月をかけて行つたのだ。

「なればこそ、グレアム、貴様知っておつたのだらう? ただ1人、管理局で、我らや碎

「け得ぬ闇の存在にたどり着いていたな？」

デユランダルの役割は、闇の書の凍結だけが目的ではない。

「そもそも、その奥で眠る永遠結晶エグザミア——無限連環機構、システム『アンブレイカブル・ダーク』ごと封じる。」

「そのために用意、開発したデバイスだった……そうであろう？」

「ちよつと待つて、それわたし知ってる話と違う——」

「もしも、ユーノ司書長がジュエルシードを追つて地球に行かなかつたら？」

「もしも、なのはママが魔導師になつていかなかつたら？」

「もしも、フェイトママが救われていかなかつたら？」

「もしも、最後の夜天の主がはやてさんじゃなかつたら？」

「もしも、ヴォルケンリッターが、リインフォースさんが、味方になつてくれなかつたら？」

「もしも、奇跡的に転生前に闇の書を破壊できたとして、構築体——マテリアルたちがママたちの姿をコピーせず、もっと別の存在だったなら？」

「全ては『IF』だけど、時空管理局に止められただろうか？」

「なのはママたちの存在こそが、奇跡のようなモノだったとしたら、あの時、グレアムさんが取った行動は——」

「ええんや、ヴィヴィオ」

はやてさんが唇に指を当てる。

「もしかして知って……」

それだけじゃない。

「あれ？ もしかして『砕け得ぬ闇事件』の時、責任を負って退職し、単なる民間人になつていたはずのリーゼ姉妹が、わざわざレティ提督に引つ張り出された。理由って『グレアムさんだけでなく、レティ提督もある程度まで事情を把握していた』——ということでしょうか？」

砕け得ぬ闇の危険性や、様々な因縁を。

問題は、誰がそれを伝えていたか——ということなのだけど。

「食えんジジイだな。一体どこまで計算しておつた？」

「どうだろうね？」

ただ、私のように切り捨てる側の人間もいれば、救うため現場で戦い続ける魔導師もいる。

それらはやがて、ここにいるヴィヴィオ君やアインハルト君のような、新しい世代に

もつながっていく。

私に言えるのはそれだけだよ」

「フンツ、帰るぞ、シユテル、レヴィ、ユーリ」

「王様？」

「この勝利は貴様らのものだ——」

「それではお先に失礼いたします」

『待ってくれ！ 私はどうすれば？』

フォーミュラ・プレートに乗って帰ろうとした王様たちを見て、アインスさんが慌てて声をかける。

「ユーリ」

「はい。そうですね……えっと、あと半日はもつと思いますよ。その間、何を成すのかはあなたの自由です。それでは、また、いつかどこかでお会いしましょう」

「まったねく、ヴィヴィオ、またご飯食べに来るからねく」

「あ、うん」

レヴィは最後までノリが軽いなあ。

「王様、シユテル、レヴィ、ユーリ、ありがとうございます！」

こうして紫天一家は、召喚元のエルトリアへ帰って行った。

「ヴィヴィオさん、レヴィさんたちと時々お会いしてたんですか？」

「はい。時々なんですけどね、向こうから遊びに来るんですけど。お陰で、こうしてフォーミュラ・エルトリアも使えたわけですしよかったですね、あれ？」

わかりにくいけれど、アインハルトさんの頬が、ぷくぷくと膨らむ。

「アインハルトさん、どうして怒ってるんですか？」

「知りません！」

「今度来たときは、ちゃんとアインハルトさんも呼びますから」

アインハルトさんに抱きついてなだめすかしていると、ロツテさんが「あ」と声を上げた。

「そーいや八神、お前って『闇の欠片』は平気なんだな？」

「そーね、残留思念——幽霊みたいなものだと思うんだけど？」

目を回すことはない。

「闇の欠片はちゃんと原理がわかるとるからな。それに、例え幽霊でも、アインスなら会えてうれしいし」

『主はやて……』

「はいはい、ごちそうさま」

そんなわたしたちの前に、再びあの白い影が現れる。

魔導師トランザム。

今度はしつかりした姿を取り、感謝の言葉を述べる。

そして、腐食兵器アデイスの処理は、管理局に一任したいとのこと。

はやてさんが請け負う。

「わかりました。後はお任せください」

「これでまた、八神の評価が上がっちゃうってわけかー」

「何か大きな事件が起きれば、機動六課の再結成もあるわね」

「そういうのは起きない方がえーかと」

「だとしても、その時はまた、なのは君やフェイト君と一緒になのだろうか？」

「それに関してはうれしいやら、忙しくなりそうやらで——」

アハハと笑い合う。

すると、アインハルトさんがわたしの服の袖を引っ張った。耳元でささやく。

「あく、なるほど〜」

「どうしたんや、ヴィヴィオ？」

「いえ、たいしたことじゃないんですけど、はやてさんって闇の欠片はいいとして、トランザムさんのことは平気なのかな〜って」

SAN値は下がらないのだろうか？

「ん、そやな。永遠結晶エグザミアが関係してた——ってことは、トランザムも闇の欠片と似たような存在だった——ってことやろ？　そーとわかれば何も問題なしや！」

はやてさんが控え目な胸を叩いた。

わたしはコレを話すべきかどうか悩んだのだけど、

「その、とてつもなく言い難いんですが、マニュアルを読んだ限りでは、アデイスにそんな機能なかったかと……」

「はい？」

「ほら、意思を持たぬ兵器ですから……」

過去の記憶を再現することもない。

「つまり、このトランザム氏は本物の幽霊ってことね」

——パシヤ！

「おっしや、最後の最後で本物のゴーストの写真ゲットだぜッ！」

「あ、わたしもわたしも」

「わ、私も一枚よろしいでしょうか？」

そんなわたしたちの目の前で、感謝の笑みを浮かべたまま、トランザムさんの姿が一瞬でかき消えた。

空間転移したわけではない。

魔力が一切感じられなかったから――。

「成仏、したのでしようか？」

「無事に、天国に行けるといいですね〜」

すると、

――パタン。

「はやてさん？」

「八神司令？」

「八神っ！」

「どうしたのよ？」

「はやて？」

『主はやてええ!?!』

奈落の底で仰向けに倒れた現役最強――八神はやて捜査指令は、完全にグルグル目を回している。

GH・ヴィヴィオ あとがきまとめ

「……ゴーストスイーパー？」

「うん、言うと思っただけど、あつちはGSで美神だから——はい、そんなこんなで、みなさんこんには高町ヴィヴィオです」

「高町なのはです——って、1か月ぶりの出番キタアア—— ツツ!!」

次回『高町なのはとアイマスドンジャラ』よろしくお願いします！ よろしくお願ひしますっ!!」

「ちよ、何いきなり次回予告してるのおお!! そーいうのはラストにやってよおお——っ!! ていうか、アイマスドンジャラ」って……ホント何してるの、ママ……わたしがない間に……?」

「ほら、ちよつと前まで、アニメのグランブルーファンタジーでも一緒だったし、ひさしぶりにアのつくあの人でも呼んで、やってみようかなって。まー、映画でも一緒だったけどね」

「そんな中の人ネタばっかで……えっと、そんなわけで、ゴーストハンター・ヴィヴィオのあとがきまとめです。」

あくまでおまけですが、色々と本編解説やら考察になつてるので、興味があつたら読んでみてくださいね」

●第1夜について

「ねえ、ヴィヴィオ。そもそも『GH:ヴィヴィオ』の書かれたきっかけって何だったの？」

「えっとね、今度やるママたちの映画あるでしょ？ あれってPSP版のストーリーを元にしてるわけだけど、ゲームには登場するのに映画ではハブられた……というか、削られた3人を登場させてみたい——と思つたことがキツカケだったみたい。

そもそも、

前作『The MOVIE 2nd Act』に出れなかった——グレアムさん、アリアさん、ロツテさん。

今作『Reflection』に出れない(たぶん)——わたし、アインハルトさん、アリアさん、ロツテさん」

「あちゃ、アリアさんとロツテさんなんてこのまま行くと2回目なんだ……」

「そうそう。今度の映画ってイリスさん——なんて、新キャラまで出るのに、TVアニメ

やゲームにまで登場してるキャラが出られない——なんて、流石に可哀想でしょ？」

「それはちよつと、グレアムさん共々、登場させたくなくなるよね……うん、気持ちはわかるかも。」

あゝ、でも、はやてちゃんはどうして出ることには？ 映画だつて両方に出てるし、出番だつて多いのに」

「それはほら、グレアムさんとリーゼ姉妹を出すとしたら、最も因縁のあるはやてさんを出さないわけにはいかないでしょ？」

「それは、まあ、そうかも」

知らない方は、TV版『A's』をご覧くださいね。手取り早く、ウィキペディアなどでグレアムさんを検索するのもアリです。

「それと……わたしとアインハルトさんとグレアムさんとリーゼ姉妹の5人だけじゃ、絵面的に地味になるかなつて……」

「あゝ……うん、それも、何となくわかるかも……」

「そんなわけで、負け組臭漂うわたしたち5人+はやてさん、というメンバーで、ついでに『劇場版第3弾 公開記念 1時間SPアニメ!』みたいなノリで書けたらいいな——つて感じだったみたいですよ」

● 第2夜について

「まずは、こちらの文章をお読みください——」



「……はっ!? あー、いや、なんや、そのく、ヴィヴィオとアインハルトを預かった身としては、こないに危険なことに巻きこむんは、マズいんやないかなー、と」

「心配することないわよ」

とアリアさん。

「でもな、相手は幽霊やし……」

「だいじよぶ、だいじよぶ。いぎとなつたらあたしたちの魔法で倒しやいいんだって」

あくまで軽いノリのロッテさん。

「倒すって……」

「なーに言つてんだよ。オカルトでも超常現象でも、起きたことはできる範囲で対応する——それが管理局だろ」

「あれ? じゃ、もしかしてママたちも」

聞いたことはなかったけど、幽霊退治をしたことがあるのだろうか？

「そつ、だから今、あたしたちはゴーストハンターなんてやれるわけだ」

「まあ、本物のゴーストなんて滅多にお目にかからないし、出会ったところで問題ないわよ。地球の一般的な霊能者が苦戦したとしても、あたしたちミッドの魔導師の方が何倍も強いんだから。」

「だいたい、八神ほどの魔導師なら、いざとなったら館ごとドカン——なんてこともできるでしょ？」

「いやいや、流星にそれは」

はやてさんは苦笑しているけれど、当然可能だ。

防御面でも、わたしたちにはバリアジャケットがある。一般的な鎧と違い、霊体からの攻撃にだって耐性がある。

やはり、そこまで恐ろしい相手とは思えない。

むしろ、わたしたちミッドの魔導師を相手にする幽霊サイドの方が不幸だろう。

それに、

「万が一、すっごい死霊とかが現れても、はやてさんがいれば安心ですしね。なのはママとフェイトママがよく言ってますよ、自分たちがエースなら、動くロストロギアのはやてちゃんはジョーカーだって」

なのはママを越える大火力。

実際に放つシーンを見たことはないけれど、かつて蒐集したスターライトブレイカーだつて使えてしまう。

フェイトママの魔法も同様だ。

わたしたちの知らないあらゆる魔法をマスターした、いわば賢者のような存在。

間違いなく、管理局最強の魔導師。

「ま、まあ、そうなんやけどな〜」

「八神司令がいらつしやれば安心ですね。——であれば、リーゼさん、早速参りましょうか。この館の謎を解けば、稽古をつけてもらえるんですよね？」



「——ヴィヴィオ、こんなシーンあったっけ？」

「第2夜の初稿ではあつたんだけど、長いので削られたシーンの一つだつて」

「はやてちゃんか賢者かあ〜」

「『悟りの書』ならぬ『夜天の書』を手に入れてクラスチェンジ！ みたいな感じか
なつて」

「当時のはやてちゃんは学校休んでたし……どっちかというと、遊び人ならぬ自宅警備員から——」

「それアウトおお——っ!!? どこのエロ●ンガ先生!？」

「はやてちゃんも胸は揉むけどぬ〜」

パンツは脱がさないけどぬっ！

「それはそれとして、ママ、管理局が幽霊退治をしてるって話なんだけど？」

「うん、たぶんしてる」

「たぶんって……」

「例えばだけど、スライムと腐った死体が並んで登場して、私はイオナズンを唱えました」

「うん……」

「まとめて1ターンで終わるでしょ？」

「あく、うん、そだね。ママにとっては何が出てきても変わらないんだ」

「まあ、バラモスゾンビくらいのが出てきたら苦戦するとは思うけど」

「バラモスゾンビ……って、えっと、とりあえず出典は、PSP版『GOD』でロツテさんが桃色——キリエさんに向かって言った台詞で、

『オカルトでも超常現象でも、起きた事にはできる範囲で対応するのが管理局の体質でね』

「が、元になっているそうです」

「なるほど」

「なので、管理局引退後、幽霊が多いことで有名なイギリスに住むリーゼ姉妹が、幽霊退治をしてもおかしくないかな、と考えたそうなんです……」

「アリアさんとロツテさんを相手にする幽霊も大変だよ。やっぱりバラモスゾンビクラスが出てこない……」

「うん、バラモスゾンビから離れようね、ママ」

● 第3夜について

「はやてさんがお化けが怖いって話なんだけど……」

「公式だとそうだった記述はないみたいだね」

『魔法少女リリカルなのは The MOVIE コミックアラカルト』には、お化けネタの話があったけど……。

「とりあえず今回の話を書くにあたって『The MOVIE 2nd Act』を見直したらしいんだけど、ヴォルケンリッターとの出会いのシーン——。」

冒頭、車椅子に乗って、横断歩道を渡ろうとしていたところ、居眠り運転のトラックに轢かれそうになり——」

「ん、驚いてはいるけど、しっかり起きてるね。流星はやてちゃん！」
「ところが、」

浮かんでいる闇の書、何だかよくわからないけど、突然現れて自分を取り囲むヴォルケンリッターの4人。

トラックに轢かれるよりも、そっちの方にびつくり——朝まで気絶します。夢の中でアインスさんと会話してるってのも原因の一つだとは思うけど」

「シグナムさんとザファイラが怖かったんじゃない？　せめてザファイラがワンワンの姿ならよかったのに」

「いやいやいや、違うでしょ!?　ワンワンの姿はちよつと共感できるけど!」

たぶん、子供の頃から達観してるから、現実的な出来事に対しては、冷静かつ客観的に判断できるけど、非現実的な出来事に関しては、意外と耐性が低かったんじゃないかなって」

「まあ、こーいうのは大人になっても変わらないしね。まんじゅうこわいのな?」

「ん、んん〜?」

「ちなみに、私だったら気絶しなかったと思うけどね」

「ん〜、いくらママでも、いきなり4連戦はキツイと思うけど? シグナムさんたちとス

テゴロでしょ?」

「いやいやいや、そんな必ずしも話し合いが殴り合いになるわけじゃ……」

「ヴィータさんとはなつてたよね?」

「あ、あれは、ほら、相手にも事情があつたわけだし〜。」

原作の私は超平和主義者なんだよ?」

「わたし、そつちのママには会つたことがないもので〜」

「あ〜、コホン。」

そういえば、ほら、前にピクチャードラマ『魔法少女リリカルIF』で、私じゃなくてはやてちゃんが、最初にユーノ君と出会うお話があつたじゃない?」

「話を逸らしたけど、うん、あつたよね。面白かつたよ」

「うん。でも、あの当時のはやてちゃんが、あのタイミングでユーノ君と出会つていた

ら、

『しゃべるフェレットおお?!』

みたいな感じで、ヴォルケンリッターのみんなと初めて出会つた時のように、目を回

しちやったんじゃないかなって思うんだよね」

「あく、でも、そーなると、司書長大ピンチと言うか、GAME OVER、バッドエンドルートだよ？」

「ま、まあ、ユーノ君大ピンチは置いといて、そういう欠点や弱点があった方が親しみやすいし、可愛いよね？」

「あく、ママの『少し頭冷やそうか……』みたいな？」

「んん、そっか、そういうことだったか」

ちなみにですが、はやてさんは、サウンドステージで、自分のことを『動くオカルト』と言ってます。が、この場合、心霊現象ではなく、超古代文明（アルハザード）由来のオーパーツ（ロストロギア）的な意味合いだったと思うので——セーフ（？）！

● 第4夜について

「ラストで、はやてちゃんが来た！ これで勝つる！ みたいな回だっけ？」

「そうそう。腐食兵器アデイスが登場した回だね。」

一応、ベースになるのは『Vivid』の11巻に登場した「人も草木もすべての命を腐らせる腐敗兵器」だそうです」

「あー、映画はどうなるかわからないけど、PSP版の異世界エルトリアを崩壊に追いこんだ『死蝕』みたいな現象でしょ？」

特に言及されていないけど、エルトリアの遺跡って、どーもアルハザードに関係してるっぽい。そもそも、時間移動の技術も遺跡から発掘したみたいだから」

「その辺りの大人の事情はわたしにはわからないんだけど、その腐敗兵器をコントロールするため、生き物の形を与え、そこに増殖兵器マリアージュや、エグザミアを乗つけてって、チンして完成——したのがアデイスみたい」

「それって合体怪獣みたいだね。特撮番組ではネタ切れ、もしくはラストスパートで登場することが多いらしいけど……」

「やめてええ——っ!？」

「せめて全部乗せて言っただげてええ!」

似たような物だけど。

「そりゃ、ママとフェイトママとはやてさんの3人だったら、バハムートみたいなのが出てきて倒しても問題ないと思うけど、わたしたちじゃ……ね?」

「まあ、グレアムさんを活躍させるためにはどうしても闇の書の闇——ナハトヴァールっぽいを出す必要があつたことだよ。オリジナリティはないけど」

「ま、まあ、そんなことを言い出したらそもそも二次創作なわけで。」

ただ、逆に考えれば、古代ベルカ時代に、存在してもおかしくない兵器なんじゃないかな」と

「ん、じゃあ、カッコよく言い換えて、1年戦争における“EXAMシステム”みたいな存在——でどう？」

「ん、んんんん？」

わたし的には、重装フルアーマーガンダム7号機である。

●最終夜について

「そんなわけでラストなんで、はやてさんとグレアムさんの関係性について——なんだけど？」

「ママもね、子供の頃——TVアニメ版『A's』の時——に会ったんだけど……」

「あ、うん」

発言がメタすぎる！

「グレアムさん、私の話をリンディ提督から聞いて、

『魔法との出会い方まで私とそっくりだ』

って、笑ってくれて、当時『PT事件』で保護観察の対象だったフェイトちゃんに対

しても、

『フェイト君、君はなのは君の友達なんだね？ 約束して欲しいのは一つだけだ。友達や自分を信頼してくれている人のことは、決して裏切つてはいけない。それができるなら私は君の行動について、何も制限しないことを約束するよ』

つて言ってくれて……ううっ、今思い出したらブーマランだあぁ?!』

「ま、まあ、わかってもやらないうけにはいかなかったということで。」

えっと、はやてさんはサウンドステージではやてさんの足の担当医——石田先生とこんな会話を交わしています」

『私も身近な大人というと、おじさんと石田先生くらいでしたから』

「そうだね。あの頃のはやてちゃんは両親もいなくて、学校も通つてなかったし（休学）……そうになると、グレアムさんか石田先生ぐらいしか大人との接点がないんだよね」

これに関しては、グレアムさんが裏で工作した可能性も否定できないけど。」

「わたし、石田先生とは直接会ったことないんだけど、はやてさんが大人になつてもショートヘアなのって、ひよつとしたら、小さい頃お世話になつた石田先生の影響かなと」

「あゝ、はやてちゃん昔から髪が短かったから気にしてなかったけど、言われてみるとそうかも」

「ただ、そんな感じでTV版『A's』ですら石田先生の印象が強いけど、客観的に見て——なのはママとは違う、外部からの視点で見ると——はやてさんにしてみれば、グレアムさんの方が、石田先生より近い大人だったと思うんだ〜」

「そうなの？」

「うん。『GOD』で、はやてさんがリーゼ姉妹と会話するシーンがあるんだけど——」
『そやけど、2人が猫の姿の時に撫でさせてもらった縁もあるやん。覚えてない？ グレアムおじさんが連れてきてくれた時……』

『いや、覚えてるけどさ』

『どうも調子が狂うな、コイツは』

「考えてみたら、日本って子供1人で生活するには限界があるもんね……」

グレアムさん、私と話したとき『日本の風景が懐かしい』って言ってたけど、アレもブラフで、本当は、何だかんだで、しょっちゅう日本に来てたのかも。

私もヴィヴィオの手続きをする時、色々と駆けずり回ったし……。

はやてちゃんを連れて、学校行って、海鳴の市役所に行って、あ、考えてみたら病院の手配をしたのもグレアムさんか……。

石田先生も、グレアムさんのこと知ってたしね」

「うん。たぶん、だけど……闇の書に対しては複雑な感情があっただろうから、ヴォルケ

ンリッターの4人が現れてからは、グレアムさんが会いに行くことはなかったと思う」「そうだね。だから、ヴィータちゃんたちにしてみれば『グレアム？ 誰だそれ？』みたいな感じで、どうしても『はやてちゃんの面倒を見てくれた大人 Ⅱ 石田先生』みたいにしか思えないんだろうね」

「ついでに言うと、アニメを見ていた視聴者にとっても、はやてさんの生活ってヴォルケンリッターが現れてからの日々でしょ？」

「それ以前については、断片的にしか語られなかったから、結果的に、はやてちゃんとグレアムさんの関係性はよくわからないままだったと……」

「それともう一つ、これもサウンドステージからなんだけど、はやてさん、石田先生に対して、自分はいい患者じゃなかった——って告白してるんだよね、病気が治る気がなかったって」

「石田先生に対して、どこかで一線を引いていたってこと？」

「うん。一方で石田先生も、焦っていたところがあつたから、はやてさんにしてみれば重荷だったんじゃないかって——」

「お互いに遠慮していた部分があつたと？」

「うん。で、悪いのは病気だけ——って話になって、以前より仲が深まったんだけど」

「ああ、そういうこと。だから、それまでは石田先生よりも、実はグレアムさんの方が近

しい大人だったんじゃないかって?」

「うん。でね『闇の書事件』が終わって、はやてさんと石田先生の仲が深まった一方で、はやてさんとグレアムさんがどうなったかというところ……」

「いうと?」

「実は、2人も前より仲良くなれたんじゃないかなって」

「そうなの!」

あ、でも、うん……そっか、そういうことかあ」

「うん、ママならよくわかると思うけど、ある意味、盛大にケンカしたようなもんでしょ?」

「だね」。

ひよつとしたら、直接会ったときに、もつと、感情が爆発するような出来事もあったかもしれないけど……」。

殺されかけたりすれば、一方的に援助されていた頃は遠慮していた部分まで、逆に吹っ切れて言い合える関係に——あ、でも、はやてちゃんがグレアムさんに殺されかけたってよく言うけど、あれ実は違うんだよね」

「そうなの?」

「うん。エターナルコフィンって、

『対象を死亡させることなく完全凍結させることを目的としている。

永遠の棺の名の通り、通常の生命体に使用すれば、凍結が物理的手段（破壊、高温等）で融解するまで、対象は長く果てない眠りにつくことになる』

つまり、SFで言うところのゴールドスリープだね。

医療と同じ、現在のミッドの魔法技術では切り離せないけど、闇の書の実物を確保できなければ、そこから研究して、ナハトヴァールだけを取り除いたら……。

ひよっとしたら、時間はかかってしまうかもしれないけど、あのままだよってちゃんを凍結していたら、リインフォースさんだつて助けることができたかも——って、今でも思うことがあるんだよ」

「そしたら、はやてさんはママたちの同級生じゃなくなっちゃうんだよな？」

「うん。意外とヴィヴィオたちの同級生として『Vivid』に登場したりしてね」

「長い眠りから目覚める——って、イクスみたい」

「そういうパラレルワールドだつて、ないとは言えないしね。ただ、そうなる今度ははやてちゃんとグレアムさんは、今ほど仲良くなれなかったんじゃないかなって」

「拳で語り合っていないから？」

「うん、そんな感じ。本来なら闇の書によって死ぬところを、グレアムさんに救われた——ってことだから。」

『わたしはおじさんに返しても返しきれないほどの恩がある』

「みたいなこと言ってる」

「あく、はやてさんなら言いそう」

「ちなみに、なんだけど、はやてちゃんとグレアムさんはいいとして、はやてちゃんとリーゼ姉妹は、和解するまで時間がかかったんだよ？」

「え、そうだったの？」

「うん、はやてちゃんの方は何とも思ってた……ううん、むしろ仲良くしたかったみたいだけど、リーゼ姉妹側がね、割り切れない部分があったみたいで。」

むしろ、はやてちゃんに一発殴って欲しかったんだろ？ね。はやてちゃん何でも受け入れちゃうから……アリアさん、ロツテさんとしては、はやてちゃんを見る度に罪悪感にさいなまれたんじゃないかって」

「だとしたら……ママたちの知らないところで大喧嘩してたとか？」

「だね。わたしとフェイトちゃんみたいに大バトル！」

リーゼさんたち死んじゃう死んじゃう。

「そうだ、わたしもミウラさんを、一度ビシつとしめとかないと！」

「うん、それももう2回もやってるよね！」

あ、ミウラちゃんて思い出したんだけど、クロノ君のお父さん——クライド・ハラオ

ウンさんをミウラちゃんと置き換えるとわかりやすいって話があるんだよ？」

「ナニソレ？」

「じゃ『ウイキペディア』のクライドさんの項目を置き換えてみるよ？」

ミウラ・リナルデイ

『●●の母親であり、●●の妻。故人。『●●』の11年前、艦隊として「●●」を護送中、●●の防衛プログラムが暴走。自分の艦船である「エステシア」のコントロールをジャックされてしまう。クルーを全員脱出させたのち、艦隊司令の八神はやてに嘆願し「エステシア」と運命を共にした』

——さて、こうなった場合、はやてちゃんとヴォルケンリッターの4人は、どうするでしょう？」

「うわ……」

「ひよつとしたら、グレアムさんやリーゼ姉妹と同じ行動をとるんじゃないかって。

だからね、たぶん、あの2人って本物の祖父と孫よりも似た者同士なんだよ」

「わたしとママみたいに？」

「うん、そんな感じ」

「あ、ひよつとしてグレアムさんって、現役の艦隊司令だった頃は、部下に厳しかったのかな？」

「なんでまた？ まあ、優しいだけじゃトップになれないと思うし……」

『『GOD』でトーマが、

『ちっちゃくても八神司令だから！ きつと怖いに決まってるから！』

——つて、話してたから」

「あ、そだね、私もよく生徒に怖がられて……じゃなかった、うん、着実にグレアムさんと似たようなコースに向かっているのかもね、はやてちゃん」

「そっかあ、じゃあ、はやてさんも、お婆ちゃんになっても『揉み魔』なのかもね！」

「ナニソレ？」

「だって、グレアムさんって、お年を召してもミニスカートの若い女の子を2人もそばに侍らせてたでしょ？」

「いかがわしい言い方してるけど、それリーゼ姉妹だよね!？」

やめたげて！

だいたい合ってるけどおお——っ!!」

「それでは最後に、リーゼロッテの声優は、松来未祐さんでした」
「改めてご冥福をお祈りいたします」

以上、あとがきまとめでした。

高町なのはとアイマスドンジャラ

ミッドチルダ、高町家リビング、PM9:12。

「——ハッ！ イギリスでヴィヴィオが大変な目に遭ってる気がするツツ!!?」

「はあくつ？ 何よそれ、母親のカンってやつ？」

「なのはちゃんも、すっかりお母さんって感じだよね」

「でも、なのはの場合、純粋な魔導師だからそういうのを感じ取る力があるのかも……」

「第六感的なやつってこと？ ——そんなのオカルトじゃない」

「うん、そんな感じかな。——まあ、魔法使いだからね」

「——じゃあ、もしかしてなのはちゃん地球に向かっちゃうの？ せつかくみんなで集まれたのに」

「んー、心配はするけど、大丈夫かなって。アインハルトちゃんもいるし、何より、今回の合宿ははやてちゃんが一緒だからね。

「常識的に考えて、あのはやてちゃんをどーにか出来るとは思えないし……」

「あんたの口から常識って言われてもね」

「まあまあ。なのは、あっちには他にグレアムさんとリーゼ姉妹がいるんだよね？」

「昔、2人を手玉に取ったという？」

「そうそう。だから、この戦力はちよつと崩せないかなうつて。それに、ヴィヴィオも随分強くなったしね！」

「なんだ、結局親バカなんじゃない」

「だね〜」

「にやはは」

そんなわけで、本日はヴィヴィオ合宿中につき、

「私、高町なのはと——」

「フェイト・テストアロツサ・ハラオウン」

「アリサ・バニングス！」

「月村すずか」

の4人で同窓会です。



アリサちゃんが、スマホや携帯ゲーム機がちようどすつぽり入りそうなピンクの紙箱

を開ける。

「——しっかし、ドンジャラなんてやるの子供のころ以来よね。久しぶりすぎる」

「なのはちゃん、どうしたのこれ？」

「ドン・●ホーテで驚安してて……」

「そんな生々しい話聞きたくないわよ！　っていうかミッドチルダにないでしょ!？」

「アリサちゃん、チエーン店がミッドに進出してないとも思ったの？」

「え、ドンキあるの？　ミッドチルダにもドンキあるのおお!？」

「まあまあ、その話は置いといて——」

「置いとかないで教えなさいよ、フエイトおおうっ！」

「まあまあ、伊織ちゃん」

「アリサよおお！　……ったく、それで——」

「あ、これ牌が紙製なんだね」

「説明書にも、」

『※牌カード……これよりカードと省略致します』

　　って書いてあるしね」

「だーっ！　あんたら人の話の腰を折るなああ!!」

『ドンジャラSmart　アイドルマスター　ミリオンライブ!』は、家族ゲームの定番

「ドンジャラ」を、持ち運びしやすいサイズにして、どこでも遊べるようにした商品なのよー！」

「さつすが伊織！ 説明ありがとう」

「だからアリサよお！」

「まあ、ドンジャラSmartって、あんまり売れなかったみたいだけど……シリーズ2作しかないし。」

むしろ、普通のドンジャラにした方が、ファンアイテムとして売れたんじゃないかと思う」

「それは言わないであげてええ〜っ！」

「とりあえず『親』決めよっか？」

「『じゃんけん——』」

「ほおおおお〜〜〜っ！」

うおっしやあぁ——っっ!!

今日も勝ち!!!」

「アリサちゃん、そんなどこぞのめぐみんみたいな喜び方しなくても……」
「昔から言ってるでしょ。勝負の世界はいつも厳しいのよ」

そんなわけで、アリサちゃんが親で、時計回りに、

『アリサ ↓ なのは ↓ フェイト ↓ すずか』

の順番に決まった。

「えつとなになに……」

『全ての牌カードをプレイマットの上でよくかき混ぜます——』

って、何よこのプレイマット……」

「小さいね」

「ランチョンマットみたい」

「学校の机でやる分にはいいけど」

「——いや、それもどうかと思うわよ?」

「家でプレイするには小さいかな」

「はあく、しょうがないわね。伊織の勇姿が拝めないのは残念だけど、今日は諦めるしか

ないから」

「あゝ、あざといポーズの？」

「あざとくないわよっ！」

親のアリサちゃんが9枚、子のわたしたちが8枚カードを取る。

「おっと忘れるところだった。はい、みんな——これが得点表だから」

「へー、ちゃんと人数分4枚入ってるんだ」

「気が利くじゃない……って、なんじゃこりゃああ!？」

「役名が『王道スマイル』に『シアターデュオ』、『いきなりアイドルマスター!』は、配られた時点でドンジャラになってる役だからいいとしても……」

「たぶん、聞いてる方にはさっぱりわからない役名だね」

『ルーキーズ』に『ラブリースターズ』って……」

「えっと、『ルーキーズ』は『全てのカードが15歳以下』、『ラブリースターズ』は『全てのカードが16歳以上』」

「こんなんわかるかああ!」

春香たちならともかく、765THEATERメンバー“全員の年齢って、クイズレベルじゃない!”

「でもさ、アリサちゃん。配点が一番低いってことは、揃えやすい役ってことだよな?」

「……アイマスファン恐るべし。」

ま、まあ、いいわ。とにかく親のあたしからスタートって……って、春香も美希もみんなバラバラじゃない！ 伊織にいたっては1枚もないし……とりあえず1枚捨ててと」

「次は私の番だね。私の手札はアリサちゃんが2枚に——」

「だからそれあたしじゃないから」

「あとローソン」

「久しぶりに聞いたわよ、それ。律子のことよね!？」

「それはそれとして、うくん、得点表を見ても何を揃えたらいいのかさっぱりわからない」

「イラストで惑わされちゃうんだよね。色で見るべきなのか、牌カードの右上にちっちゃく書いてあるV o (ボーカル)、D a (ダンス)、V i (ビジュアル) で分けるべきなのか……」

「ただ、この3ジャンルについて、説明書では一切触れてないんだよね」

「わかりにくいわああ!」

「次、フェイトちゃんだよ」

「えっと、アリサが1枚に……」

「だからもう違うと何度言わせれば——っていうか、どーしてあんたらばかり伊織の牌カードが入ってるのよおお!」

「はい、次すずか」

「うん」

「ちよ、あたしの話を——」

「ん、みんなアリサちゃんのことが好きだからじゃないかな……」

「……そ、そう? ま、まあ、そういうことなら許してあげないこともないわね」

「あ、わたしの手札、アリサちゃんが1枚もないや」

「すずかああくっ!」

「ところで、この亜美ちゃんと真美ちゃんって揃える時、別カードの扱いなの? 色まで

同じだけど……」

「うん、それぞれ他のメンバーと同じ枚数だし、別モノ扱いみたいだよ」

「初心者には罨すぎるわね……」

「ドンジャラアア! とか言つてカードを見せたら、それ双子で違うキャラだよ! と

か言われて」

「酷い……」

「さーで、ようやく一周回ってきたわね……おっと、流石は千早。微妙な表情のイラスト

なのが気にかかるけど、よく来てくれたわ」

「私の番……うん、765 THEATERメンバーが誰だかわからない。特に、サインが読めないキャラは顔と名前が一致しない」

「一般人には、いいとこ初期メンバーが限界かなつと……」

「そもそも、一般人はアイマスドンジャラをやらないけどね」

「はいつと。慣れてきたらドンドン進むわね——」

「ムムツ、オールマイト、私が来たああ！」

「いや、それ、オールマイティカードでしょ!? 他のカードの代わりに使えるやつ」

「——あ、そうそう。前から言おうと思ってたんだけど、アリサちゃんって中学入って髪切ってから地味になったよね」

「地味って言うなツ! あずさだって髪切ったでしょ!」

「そんな知り合いみたいに言われても」

「それに、あずささんは成功だったよね?」

「くつ……ていうか、そもそも、あたしの髪が短くなった理由は、フェイトがツインテやめて髪下ろして、あたしと被るようになったからでしょおお——っ!!」

「どっちも金髪ロングだしね。きんもザなら忍が大興奮ね。穂乃花ちゃんもだけど」

「いや、なのは、そこでお姉ちゃん口調になられても……」

「アリサちゃんの意思じゃなくて、制作サイドの意思なんだよね」

「ただ、それはそれで……」

「シヤマル先生と被ったという」

「そうね。『StrikerS』の公式イラストで、なのはとフェイトとはやてが、あたしとずずかに電話してるやつ——あれ、最初に見たとき、あたしじゃなくてシヤマル先生かと思っただわよ」

「「あゝ」」

覚えてない方は『StrikerS アリサ』で画像をググってもらえると上の方に
出ます。

「——てか、どーしてみんなして亜美真美カードばつか捨ててんのよ!?!」

「いや、一番最初に捨てたのアリサちゃんだから……」

「くっ……やよいだけは捨てられない……」

「じゃ、私が捨てー」

「やよいいい——っ?!?!」

「そんな小ネタを……」

「まあまあ、アリサちゃんだから」

「あたしだから何よ……っつて、をいをい、さつき捨てた貴音が……捨てなきゃよかった」

「貴音さんの謎パワーなんじゃ……」

「とか言つて、私も貴音さんが来たわけなんだけど……捨て」

「なのはまで……」

「あ、わたしもついにアリサちゃんが来たよ!」

「やるわね、さすが! でも、あたしだけ伊織が来ないってどういうことよ?」

「そして、アリサちゃんを捨てる」

「すずかあぁ〜っ!」

「だ、だつて、みんな持つてるつてことはそれだけ揃えにくいつてことですよ?」

「……う……それは、そう、なんだけど……くっ……あたしの番だから一枚引いて……」

「ふっ、やよい、やっぱあんた最高だわ!」

「何だかアリサちゃんの方から、すごい友情パワーを感じただけど……つて、は

い、リーチっ!」

「ちよ、なのはあぁ!」

「もう揃つたの!」

「流石、なのはちゃん!」

「まあまあ、そんなに褒めてもスターライトブレイカーしか出ないよ」

「うん、それはいらぬから」

「それはそうと、説明書を見てて気づいたんだけど、アイマスドンジャラって、1人用ルールがあるんだね」

「ドンジャラなの？」

「うん。トップアイドル育成モードだって」

「何、アイドル雀士でも育成する気？」

「また懐かしい。そうじゃなくて、自分がプロデューサーさんになるんだって」

「なのは、そういやあんたも現役アイドルのプロ雀士……」

「あ、アリサちゃんタコスいる？」

「うん、いらなから。っていうか、はやてがいなくてよかつた」

「まあまあ、麻雀とドンジャラは違うから……」

「私だけたぶん、中の人『咲』に出てない……」

「フェイトちゃん……」

などと、しばらく続けたのだけど、

「ちつとも上がれない……」

「まあまあ、私たちなんてリーチすらかからないんだから」

「それでなのは、あんた何待ちなのよ？」

「それ言っちゃったら、みんな捨てないでしょ！」

「そこはほら、コンピネーションで」

「いやいや、ドンジャラでコンピネーションって、ウレシードじゃあるまいし……」
「ウレシードって……」

「そんなことより、なのは、例の件は伝えなくていいの？」

「そうでした。ヴィヴィオの友達にアインハルトちゃんって子がいるんだけど」

「あゝ、なのはが、昔のフェイトみたいで可愛いって言ってた子でしょ？」

「そうそう」

「もうゝ、なのははったら」

「2人つきりだと、ついちよつかい出したくなるとも言ってたよね」

「なのはああゝゝゝっ!!?」

「いやいやいや、その話は一旦置いておいて——今度、痛い痛い、フェイトちゃん嘸まな
いで、中等科の職場体験があるんだけど、うちの翠屋に来ることに決まったの」

「へゝ」

「わざわざ地球の？」

「うん。元々、そんなに器用な子でもないから、知り合いがやっているとこがいいんじゃないかって」

「それはまたご苦労なことで」

「それしたら、ヴィヴィオが『わたしもやるうう』って言い出して」

「あく、あんたんちの子なら言いそうだけわ」

「結局、私も手伝うことになったんだけど……アリサちゃんとすずかちゃんもやる？」

「やるかああ！」

「子供モードで」

「子供モードって……」

「それはちよつと惹かれるワードね」

「まあ、無理には——」

「ま、まあ、なのはがどうしてもって言うなら手伝つてあげないこともないけどね！」

「ほんと、アリサは変わらないよね——捨てて、はい、次、すずかの番だよ」

「——つと、ちよつと待ったああ！ フェイトちゃん今捨てた牌カードって……？」

「春香だけど？」

「ドンジャラアア！ それいただきっ！」

「アリサちゃん、春香ちゃん、あずささんで『団結・ユニット』——240点！」

「流石、なのはちゃんとフェイトちゃん！」

「こんなところで、本気のコンビネーション見せるなああ！」

「あはは、私もなのはもそんなつもりはなかったんだけど……」

「これが私とフェイトちゃんの友情パワーだよっ！」

「まったく、ホント、あんたたちには負けるわよ」

「やっぱりタコスいる？」

「いらなあ……そうね、一応もらつとくわ。何かが充電されるかもしれないじえつと、そういうは今更なんだけど、どうしてアイマスドンジャラだったのよ？」

「ネタでいいなら、ドラえもんドンジャラなんてのもあつたよね」

「ひみつ道具カードもあるし」

「それは……ほら、昔、藤真先生がアイマスの漫画を書いてたつながりで……」

「「あゝ」」

ご注文はアインハルトさんですか？

「——押忍っ！」

「ヴィヴィオ、今日は張り切ってるね〜」

「うん！ そりゃ、なんたって職場体験だからね——アインハルトさんのおお!!」

「自分じゃないんだ〜」

というわけで、高町ヴィヴィオ、本日はなのはママと一緒に、アインハルトさんの職場体験を——面白おかしくじやなかった——全力全開でサポートするため、ママの実家

——海鳴市の喫茶店『翠屋』にやって来ました！

おつ、開店前だというのに、早速入り口に人影が、

——カランコロン！

「へい、らっしやいっ!!」

「……お店間違いました〜」

「いやいや、アインハルトさくさん、合ってますから〜」
ちよつと気合いが入りすぎてから回っただけですよ。



「——さて、アインハルトちゃんも制服に着替えたところで、喫茶『翠屋』オープンと行きますか!」

「おーっ!」

「あ〜」

「はい、アインハルトちゃん、何かな? 接客の基本はさつき教えた通りだけど」

「いえ、そういうことではなく、ヴィヴィオさんのお母様のお母様——つまり、普段の翠屋の方々はどこらに?」

「あく、あんまり人数がいてもしょうがないんで、今日は1日お休みをプレゼントしてみました〜」

「閉めの時間には来るって」

「ママ、親孝行だね!」

「うん」

「……ですが、私たち3人で大丈夫なのでしょう。いえ、もちろんなのはさんとヴィ
ヴィオさんは慣れてらっしゃるかもしれませんが、私は初心者なので……」

「大丈夫ですよ、アインハルトさん！」

「ちゃんとあとからお手伝いが2人来るしね。それに、いくら人気店といっても、平日だ
からそこまで混まない——って、お姉ちゃんも言ってたから」

「はあ、なのはさんのお姉様、ですか……」

「美由希おぼさん——って言うんですよ」

「ヴィヴィオ、それ、お姉ちゃんの前で絶対言っちゃダメだからね？」

「あ、やっぱり？」

ちなみに「桃子お婆ちゃん」も禁句だ。

「年齢と言えば、ヴィヴィオさんも、今日はちよつぱり大人モードなんです。本来の姿
と、いつもの大人モードの間くらいでしょうか？」

「あー、はい。アインハルトさんは正式な職場体験ですけど、初等科のわたしが平日の昼
間から学校をサボって働いてたら、流石にマズいかな〜って」

「なるほど」

「それで、少しだけ大人モード……いえ、お姉さんモードですね〜。」

気分的には、なのはママが「リゼさん」で、わたしが「ココアさん」で、アインハル

トさんが「チノちゃん」でしょうか」

「つて、どうして私が一番ちっちゃいんですかああ——っ!？」

「いや、性格的なキャスティングといいましようか……」

「……まあ、私も事前にフーカから色々と教わってききましたが」

「中の人的に完璧だ！」

いのりんパワーである。

「まあまあ、2人とも、落ち着いて考えてみて。ほら、ラビットハウスの看板娘はチノちゃんですよ？」

「あ、うん」

「私は常々考えてたんだよ。」

喫茶『翠屋』の看板娘には、グリーンの髪をもつアインハルトちゃんこそ相応しいんじゃないかって！

「確かに、翠屋で働くために生まれてきたよーな！」

「ここは霸王がいるような戦場じゃありませんからああ!？」

「まあまあ、あ、チノちゃんです思い出した。アインハルトちゃん、コレを頭に掛けてもらえるかな？」

「……っつ、これは」

「……ユーノ司書長？」

「確かにフェレットだけど、普通のフェレットだよ。ほら、鳴いて」

『き、キュウ』

「うんうん、よろしい。今どきは喫茶店にも可愛らしいマスコットがいらないとね。ちなみにうちは昔からフェレットだから」

「へ〜」

と、返事をしつつ、何となく怪しいと、アインハルトさんの頭にドッキングしたフェレットの頬を、人差し指で——むぎゆ〜。

『イタい、イタいつ！』

「やっぱり本物のユーノ司書長だあ〜〜〜っ！」

「え、司書長!?!」

「あちや〜、もうバレたかあ〜」

「どうしてまた?」

「ううっ……今日は、ようやく論文が書き終わって、久しぶりに発掘に行くはずだったのに……今朝、急になのはから手伝って欲しいって連絡があつて……」

「あゝ、お疲れ様デース！」

でも、まあ、司書長がフォローしてくれるなら、いくらアインハルトさんの接客でも安心ですね〜」

「むむっ、そんなこと言っつて、私だつて接客業の一つや二つ、ちゃんと出来ますよ！」

「ほほ〜っ、見せてもらおうか、アインハルトさんのコミュニケーションの能力とやらを
！」

——カランコロン！

「いらっしやいませー」

ドアベルが鳴り、入ってきたのは金髪に青いリボンのツインテール。

「アリシア・テスタロッサです」

つて、子供モードのフェイトママ来たアア——っっ??

「ちよ、ママ……仕込み？」

「うん、ほら、いきなり本物のお客様をお迎えしてもマズいでしょ？」

「うーん、まあ、それはそうなんだけど……」

いくらアインハルトさんでもこれはちよつとなあゝ、

「アリシアさん、こちらがメニューになります」

「ふつーに接客してるうう——っ!？」

「流石はアインハルトちゃんだね……あの姿を見ても、フェイトちゃんだとまったく気づかないなんて」

「ま、まあ、まだ想定内かな……」

わたしが胸をなで下ろしていると、

——カランコロン!

カラカラ——と、自分の手で車いすをこいで入ってきたショートヘアの少女。

「子供モードのはやてさん来たアア——っ!!」

「車いすだけど、えーかな？」

「はい、もちろんです。病院の帰りでしょうか？ さあ、こちらの席にどうぞ」

「……ヴィヴィオ、アレはどういうことだと思う？」

「……うーん、たぶん、アインハルトさんは車いすしか認識してないんじゃないかな？」

「あー、はやてちゃんを見て、見分けてるわけじゃないんだ」

「うん、たぶん……」

注文を聞いたアインハルトさんが、ドヤ顔で戻ってくる。

「どうです？ 私だつてちゃんと接客できてるでしょう？」

「え、ええ……」

そうなんですけど、そうなんですけど……色々と間違つてますよオオオ——ツ!?

——カランコロン！

今度は大人の2人組。

「なのはー、子供モードでやらせてくれるつて言うから手伝いに来たわよー」

「今日は1日よろしくお願いします」

「アリスさんとすずかさんがふつーに来たアア——ツ!! お久しぶりでーすつ!」

「いらつしやくい、2人とも」

「ああ、シャマル先生にデイドさんですか。いつもお世話になっております」

「素で間違えてるうう——つ!」

というか、もはや髪型やカチューシャでしか見分けてない!?

——カランコロン!

八重歯とおさげ、ちっこいのが2人。

「ヴィヴィオく、あたしたちもアインハルトさんの勇姿を見に来たよ〜」

「アインハルトさん、応援に来ました!」

「リオ、コロナ!」

「——ああ、マヤさんにメグさんでしたか。お久しぶりです」

「もはや、リリカルなのはキャラですらない!」

「ちつがああ——うっ! 1か月ぶりだからってあたしの名前を忘れないでよ〜っ

!!」

「もおく、アインハルトさ〜んっ!」

???

アインハルトさんが助けを求めるようにこちらを見ている。

「ま、まあ、わたしも時々間違えそうになりますけどね〜」

「ヴィヴィオまで〜っ!!」

——カランコロン！

そして、トリを務めるのはこの人。

いつもより大人びた、浅いオレンジ色のつんつんしたショートヘアの少女……。

「はい、ミウラさん、ダウトオオオオ——っ!!」

「ちよ、何ですか、ヴィヴィオさあ〜くん!!?」

「いやだって、わたしのミウラさんがこんなにおつきいわけがない!」

「いやいや、ヴィヴィオさんだってしつかり大人モード使ってるじゃないですか! 背も高いし、胸もおつきいし!」

「いやいやいや、わたしの場合はアインハルトさんの職場体験に合わせて、2年後の姿ですよ?」

つまり、ちょうど本来のミウラさんと同じ年の姿ですね〜

「ボクと同一年……?」

「はい。一緒に身体測定を受けたり、体育の時間に二人一組で体操したりしましょうねっ!」

「ねえ、ママ。だんだん混んできたね。アインハルトさんは、まだ大丈夫ですか？」
「はい、なんとかあゝ」

あゝ、そろそろヤバそうだ。

すると「だじえゝ」と声がする。

「ここで、もしも中学で髪を切らなかつたらバージョンの——アリサ・バニングスが大爆誕するわよおー！」

「午後からって話だったけど……大変そうだし、もう入るね」

「ありがと、アリサちゃん、すずかちゃん、よろしくね！」

昔から何度も翠屋を手伝っていたという2人組。

これで『安心無敵！』のはずだったのだけど、

「ヴィヴィオさん、さらに混んできたような……」

「ママ、平日だからそんなに混まないって言ってたのにいゝ」

「ごめくん、ヴィヴィオ、アインハルトちゃん！」

そこで手を挙げたのは、アリシアさんの格好をしたフェイトママ。

「私も手伝うよ、なのは、ヴィヴィオ！」

「フェイトママ」

続けてカラカラ車いすを引く音がする。

「これは、いよいよ私の出番のようやな」

「はやてさんが立ったあぁ——っ！」

さらに、リオコロ。

「ヴィヴィオ、あたしも手伝うよ！」

「学院祭の魔法喫茶しかしたことないけど、がんばるね！」

最後は、戻ってきた抜劍少女も、

「ぼ、ボクも何か手伝いますね！」

「ホントですか!? 買い出し頼んでも」

「任せてくださいー！」

いつも実家のレストランを手伝っているため手際がいい。

これで勝つる！

とはいえ、

「どうしてこんなにお客さんが多いのおお〜っ!!?」

「すみません！ 流石なのはさんの実家、翠屋も十分戦場でしたあぁ——っ!!」

「ううっ……まさか、うちがここまで繁盛してるなんて、お姉ちゃんどうなってる

のおお〜、聞いてないよおお!!」

すると、お客さんと会話をしていたアリサさんが、

「——理由がわかったわよ、あんたたち！」

以心伝心。さすがさんが言葉を継ぐ。

「喫茶翠屋に、凄く可愛い女の子の店員がいっぱいいる——つて、噂が広まつてるみたい！」

「それつて、つまり……」

忙しい ↓ 誰かが手伝う ↓ 可愛いウエイトレスが増える ↓ さらにお客さんが集まる ↓ エンドレスエイト

「いいことなんだけど、いいことなんだけど……」

「うううう~~~~~~~~~~~~つ、霸王、断空けええ~~~~」

「それダメえええ~~~~つ!!」

この日、喫茶翠屋は、開店以来、最高の売上を計上したという……。

アインハルトさんクイズ王決定戦！

「——はい！ 次元世界一兆人の聖王教会信者のみなさん、リリカルまじかるこんにちは。あなたの崇め奉る現代の聖王女——高町ヴィヴィオです。

毎週異なるゲストをお迎えして、視聴者のみなさんの疑問・質問に、高町家っぽく答えていこうというこのコーナー。

今週はここ、わたしの母校——St. ヒルデ魔法学院初等科の校舎からお送りしたいと思います。

というわけで、本日のゲストはこの方——最近では、あの八神司令から『揉み魔』の称号を受け継いだとも噂される、ユミナ・アंकクレイヴ先輩です」

「どーも、ユミナ・アंकクレイヴです！

——つて、陛下、ものすつごい悪意のある紹介というか、すんごい久しぶりのよーな「そうですね、前回の『ご注文はアインハルトさんですか？』でも、同じ学校の生徒で唯一呼ばれませんでしたからね」

「ガーン！」

「——つて、冗談ですよ、冗談。

だって、ユミナさん、アインハルトさんと同じクラスじゃないですか。アインハルトさんが職場体験してるなら、当然、同じ日にユミナさんも職場体験してるわけで、それもミッドで」

「あ、そーいえば……」

「だから、別に意図的にユミナさんをハブしたってことはないですよ」

「あ、ハハハ、もう陛下つてばお人が悪い」

「いえいえ、他の回にどうして出番がないのかは知りませんが」

「陛下ああ!？」

「——というわけでこの番組は、あなたの心にセイクリッドブレイザー！ 聖王教会

の提供でお送りします！」

「陛下ああ——っ!!？」



「……コホン。ま、まあ、私の処遇については置いといて、確か今日つて劇場版第3弾、

『魔法少女リリカルなのは Reflection』の公開日でしたよね？」

「そうですけど？」

「……あの、私が言うのも何なんですが……こんなことしていいの?」
「そうですね、反抗期?」

「あく、すんごい反抗期もあったんですけど、一応『Reflection』の紹介CMをやらせていただいた身としましては、申し訳ない気持ちでいっぱいと言うか、こう色々と思うところがあると申しましようか……」

「ちなみに、そのCMを見て、ユミナさんのことを思い出したから今回ゲストでお呼びしましたああ——とかではないですよ?」

「……」

「ないですよ?」

「ウソっぽい! そ、それで陛下、今日のお題は何でしょうか?」

「おっと、脱線した話を戻しましたね、流石ユミナさん。——はい。ではでは、今日はですね、一応、映画公開記念特別企画といたしまして、先週『ご注文はアインハルトさんですか?』ってあつたじゃないですか?」

「ええ、喫茶翠屋で職場体験してたアレですよ」

「はい。実はあの時——仕込みが多かったせいで——あんまりお伝えできなかつたんですが」

「あゝ」

「一般客に対しても、アインハルトさんは色々接客していたわけで……」

「ん、それってつまり、アインハルトさん珍プレー好プレーみたいなの？」

「そう、それですっ！　なので、今日はそれを肴に——じゃなかった、それをクイズ形式にして、ユミナさんに出題してみようかなあ〜と思った次第です」

「なるほど〜って、どうして私!?!」

「唯一、翠屋にいませんでしたからね!」

「うぐうぐ、出番ができて良かったんだか悪かったんだか……」

「なお、アインハルトさんクイズは、基本3択です。視聴者のみなさんは、お手元のデバイスから答えを選んだり、選ばなかったり、自由にチャレンジしてみてください。

全問正解者には、なんと!　もれなく、わたしが徹夜で制作した『SRアインハルトさん　翠屋CosVer.』を進呈します!」

「SR……」

「あれ?　ユミナさん欲しくくないんですか?!

「いえ、そーいうわけじゃないんですか……陛下の愛が重い」

「わたしの愛はサイン入りですから〜」

「とうか、こんなことやって大丈夫なんですか?　お花見の時の二の舞いになるん

じゃ……またアインハルトさんが乗り込んで来て……」

「大丈夫ですよ、そのための初等科教室での放送なんですから。気づかれませんって。それに、今日の放課後、アインハルトさん、ジムで十番勝負をやる〜とか言っていました」

「あく、それは大変そうですね、殺（や）る方も殺（や）られる方も」

「ユミナさん文字が『殺す』になってますよ〜」

「お前を殺す！ みたいな？」

「あっはっはー！」

「というわけで、アインハルトさんクイズ全8問、スタートオオ——ツツ!!」



○第1問

お客様を席まで案内したアインハルトさん。その後、水を入れたグラスをトレイに乗せて運んだのですが——？

①水をこぼした。

② グラスを落として割ってしまった。

③ 「お待たせひまひたー」と台詞を囁んだ。



「むう、これは結構難しいですね、陛下」

「そうですか？」

「ええ、どれもアイnhルトさんなら普通にやりかねないんで」

「あはは、ですね。でも、まあ、第1問、小手調べですから」

「一応、デバイスによる投票結果によると、②と③で割れてますね。個人的に見たいのは

③なんです、アイnhルトさん的には②が一番ありそうなんで、②のグラスを割った

でお願いします」

「はい！ では正解は、ダラララララ〜」

「あ、自分の口でやるんだ〜」

「——ダン！ 正解は④番！ グラスを置いた瞬間、勢い余ってバゴン！ と、テーブル

を破壊する、でした！」

「ちよつと待ったアア〜ツ!! ④番って何なんですかああ!?! そんなの選択肢にな

かったですよねええ——っ!!?」

「やだなく、よくある『その他』ですよ、その他」

「いや、もうこれ正解させる気ないんじゃない……」

「SRアインハルトさんは誰にも渡しません!」

「愛が重い! ていうか、そんなことよりテーブルを破壊するって、翠屋は平気だったんですか? お店的に」

「あく、お客さんがちようど昔からの常連さんだったので『士郎さん』とこなら、まあ、あるかな」と、納得されちやいまして……」

「あく、流石は高町家……それも本家。ある意味、アインハルトさんの職場体験は翠屋で大正解でしたね」

「はい、今となつてはわたしもそう思います……」



○第2問

お客様から注文を受けたアインハルトさん。そこで、とあるトラブルが発生したのですが——?

① かかしになった。

② メニユーが読めなかった。

③ 恥ずかしくて声が小さかった。



「かかして……前クールのアニメで見たような……②は、ああ、あつちとミッドじゃ文字が違いますもんね。③も、昔からのアインハルトさんを知る身としては十分ありえるかと……ん、こんなの全部なんじゃ……」

「はい、正解ですっ!」

「え!?!」

「答えは①と③全部でした。」

流石はユミナさん、やりますね!」

「なんてずっこい! ていうか、かかして……そういうえば、平常運転に見えて意外と緊張しいでしたっけ」

「はい。もう、あまりの可愛さに、わたしが癒やされました。」



○第3問

なのはママに教わりながら、初めてのケーキ作りにチャレンジしたアインハルトさん。生地をオーブンに入れたあと——？

- ① 爆発した。
- ② 爆発した。
- ③ 爆発した。



「ちよ、爆発オチしかないじゃないですかああ——っ!？」

「アインハルトさんですから」

「クイズになってない！ 普通、スポンジがペシヤンコになるとか、焦げるとか……ハッ!？」
またひっかけて答えは謎の④番とか……」

「ブブッ！ せっかくのボーナス問題だったのに。答えはもちろん “爆発した” でした！」

「あく、ケーキって爆発するんだあ〜」

「アインハルトさんですから〜」

「それで納得できちやう自分が怖い！」

★

○第4問

カフェラテなどにミルクの泡で絵を描くラテアートに挑戦したアインハルトさん。さて、何を描いたでしょうか——？

①わたしの顔。

②ティオ。

③クリス。

★

「①だったなら陛下が喜びそうですけど……」

「ですね——一生飲めないです」

「ですよね、なのでティオかクリスカ……と見せかけて、④番で鉄アレイとか！」

「も、ユミナさん裏をかきすぎですよ。正解は④番“ちびリオ”でした！」

「……」

「ええ、気持ちにはわかりませんが、理由を訊いたところ、アインハルトさんの描きやすかったそうです……ほら、平面で」

「あゝ」



○第5問

突然、店内で泣き出した子供。どうやらお母さんの姿が見えなくなったようなのですが、ここでアインハルトさんの取った行動とは――？

①オロオロした。

②自分も泣き出した。

③トレイに子供を乗せて、カウンターまで運んできた。



「オロオロはしそうですけど、このいかにも有り得なさそうな③を、アインハルトさんならやってくれるはず!」

「ブー。もう、ユミナさんアインハルトさんを何だと思ってるんですか?」

答えは④。ティオを使って子供を泣き止ませた——でした!」

「あれええ、いい話なんですけど!?!」

「ええ、奇跡の瞬間でした」

「うわ、ちよつと見たかったかも……」



○第6問

レジ打ちに挑戦したアインハルトさん。そこでどんな奇跡が起きたでしょう——?

① 打ち間違えた。

② 指先一つで破壊した。

③ 普通にこなした。



「また奇跡。まあ、奇跡というと③が奇跡なんですけど……あ、最初だけで忘れてたんですが、デバイスによる投票は②番が多いですね。確かに破壊ネタは鉄板だし……いや、待てよ？ 奇跡ということは、こう、なんでしょう、打ち間違えて焦って破壊した——つまり、①と②のコラボとか!？」

「惜しいっ！ 答えはちよつと長いんでよく聞いてくださいね。」

レジの機械に対抗心を燃やしたテイオが、先に計算して、

『にやにやにやにやにやにや!』

『——円になります』

と、まさかのコラボ」

「え〜」

「——と、お客さんもそんな反応で、慌てたフェレットモードのユーノ司書長が、

『1940円です』

と、普通にフォローしたら、お客さんがさらに

「ええ〜」

「——と、そんな感じになって、まさに奇跡のコラボ」

「奇跡も安くなりましたね〜」

★

○第7問

夕方、学生の帰宅時間と重なり、さらに忙しくなった翠屋。テンパったアインハルトさんが、つい応援に呼ぼうとした相手とは——？

① トーマ。

② ユーマ。

③ シーマ。

★

「トーマというと、スバルさんの弟さんみたいなの？」

「そうそう、それです」

「②のユーマ……ユーマって、もしかしてユーマ・ライトニング？」

「ですね〜」

「③のシーマ……シーマ様？」

「はい、そうですね」

「……ガンダム率が高い。こうなるとこれまでの傾向と対策からいつて、ドラクエネタに走る……つまり、④番で、踊り子のマーニヤとか！」

「残念！ 正解は食戟のソーマでした。幸平創真ですね」

「いや、それ、中の人的にはわからなくもないんですが……あく、でも、一番役に立ちそうではあるのか……」

「わたし的には③番で、ウェイトレス姿のシーマ様もオススメですけどね！」

「誰得ですかああ——っ!？」

「——というわけで、ついに最終問題ですよ。ユミナさんも視聴者のみなさんも、S R A インハルトさん目指して、頑張ってくださいね！」



○第8問

職場体験中、いつもと違い、翠屋の制服を着ていたインハルトさん。ですが、髪型はどんなだったでしょうか——？

①いつも通り。

②おさげ。

③大人っぽく髪を下ろした。



「なるほど。確かに前回はアインハルトの髪型には触れていませんでしたが、そういう思惑が……」

「どうです、ユミナさん、わかりましたか?」

「ふっふっふ、もちろんですよ、陛下。ウエイトレスだということに、ここまで一切触れていない、あのネタがあるじゃないですか!

ズバリ、答えは④番!

ポニーテエエ——ルウウ!!

さらに陛下のことだから、アインハルトさんに、

『ちっちゃくないですよ!!!』

とか言わせた!

種島アインハルト降臨っ!!

「これでどおだあ——っつ！」

「ピンポン、ピンポン！ 大正解っつ！」

「流星はユミナさん、よくわかってらっしやる〜」

「そりや、陛下の行動パターンなんて全てお見通しですよ〜」

「ユミナさんって結構わたしのこと好きですよね〜」

「あはは、で、陛下、当然お写真などは？」

「はい、もちろんありますよ。クリス、例の物を——」

「陛下……お主も悪じやのう〜」

「いえいえ、ユミナさんほどじゃないですよ〜」

「あっはっは——」

「——というわけで、髪型はもちろんなんですが、それよりも、わたしのオススメはこれ——プルプル背伸びをしているアインハルトさん！ ちよつと柵が高かつたんですよ。超カワイイ！」

「陛下、こっちの写真は？」

「あ、それですか。ご近所のお婆さんに『小学生なのにお手伝いえらいね〜』と、頭を

なでられているシーンなんですけど……これもいいですね〜

「微笑ましい!」

「——つて?」

——ドンドンッ!

「はーい、今本番中でーす!」

「こんな時間に誰でしょうね?」

「まあ、教室のドアは鍵がかかってますからね〜、入りたくても入れないという

「あ〜」

「だから、何があろうと絶対無敵!」

——ドン、ドン、ドンッツ!!

「意外としつこい……ん? あのを、そういえばなんですけど、陛下……」

「はい?」

「この放送なんですけど、ミッド中で見たり聴いたりできましたよね?」

「はい。基本は管理世界だけですけど、信者からの要望があれば管理外世界にだって流しちやいますけど?」

「……つてことは、なんですけど、ひよつとしてアインハルトさんが見てるつてことは?」

「なんですかそのマリア様みたいな」

「いやいや、ギャグじゃなくて」

「ん〜ん〜、アインハルトさんが見てる可能性ですか……あ」

——ドン、ドン……ズゴオオン!

「ドアが蹴破られたああ!?!」

「陛下、アインハルトさんですよお!?」

「お二人とも、また懲りずにこんなことをなさつて……」

「こりやマズい! ユミナさん、早く! こつから逃げますよつ!!」

「流石ヴィヴィオちゃん陛下頼もしい! もう窓枠に足までかけて——」

「2人とも、待ちなさいっ!」

「脱出!」

——とおおお~~~~っ!

「——つて、あゝ、下プールでしたね〜」

「——あゝ、確かに、お約束でしたね〜」

——ドツボオオ~~~~ン!!

「ぶはっ!」

「ううっ、死ぬかと思った……」

「ユミナさん! 早くプールサイドに上がりましょう! アインハルトさんのことだからすぐに追って——」

「づい、ヴィヴィオちゃん! 後ろ後ろおお~~~~っ!!」

「あ」

「それでは2人とも、今日はこれから私とジムで、十番勝負と参りましょうか？」

「え、ちよ、いつの間がいい！ 試合より動きが早いんですけどおお!!」

「私、選手じゃない、選手じゃないから」

「同罪です」

「ひいいいゝゝゝゝつ!!」

「——というわけでええ、お相手は高町ヴィヴィオとおお、アイタタタ、アインハルトさん襟首引きずらないでええ」

「ユミナ・アンクレ……首、首が締まるううううでしたあゝ」

「生きてたら、リリカルマジカルまた来週う」



「はあ……わたし、明日筋肉痛かな」

「私なんて死んじやいますよっ!?
汚い、さすが忍者みたいに汚い陛下ああ!!」

医療少女メデイカルじやないシヤマル

今は夏休み——ということもあり、はやてさんがうちに泊まりに来ています。

なので本日は——なのはママ、フェイトママ、はやてさん、そしてわたし——高町ヴィヴィオの4人、ベッドの上で、川の字になってパジャマパーティーです。

「とはいえ……」

「4人はちよつと……」

「端っこは朝になつたら落ちてそーやな」

「——というわけで、じゃんけんタアア~~~~イムっ!!」

もともと、なのはママ・わたし・フェイトママの3人で寝むれるようにと、キングサイズだったベッド。

そこに——珍しいことに——じゃんけんの結果、端から、なのはママ・はやてさん・わたし・フェイトママ、の組み合わせ。

早速ダイブして転がると、

「……はっ!? 1人だけ（胸が）フカフカじゃない!」

「ほほ〜っ、ヴィヴィオ、それは誰のことかな〜」

「えっと、それはわたしの隣で——」

「私しかおらへんやろおお——っ!?」

ああ、ママ以外に頭をグリグリされるなんて、

「あいたたたた……冗談、冗談ですよ——半分は——はやてさ〜ん!」

「半分」

「半分なんだあ〜」

「はあ〜、なのはちゃんたちが大きいだけで私だってそこまで小さいってわけやないんやけど……」

「そーいえば、他人の胸を揉んでばかりいると自分のが小さくなる——って噂を聞いたことありますよー?」

「マジかっ!?!」

なのはママとフェイトママが「あ〜」と残念そうに眩く。

「ヴィヴィオ、そーいうことは『GOD』の時、昔の私に言ってくれないと……もう手遅れや〜」

「あ〜」と、やっぱりママたちが声をそろえて涙した。

『GOD』かあ、あ、そうだ！

はやてさん、せっかくなんでママたちの昔の話が聞きたいんですけど！ 特に学生時代！ わたしと同じ年くらいの頃がいいです！」

「ん、えーけど、2人は話してくれないか？」

「いえいえ、聞けばしてくれるんですけど、もつとこう、別の視点からも聞いてみたいな
〜って」

「なるほどな。そーいうことなら、そうやな……『血のバレンタイン事件』なんてどう
や？」

何だか不吉な事件名来たアア！

「あれか〜」

「あつたね、そんなこと……」

なのはママとフェイトママも、神妙な顔つきで頷いている。

もしかして、

「虐殺だったり、映画だったり、もしくは、農薬用コロニーが核ミサイルで壊滅しちゃつたりしたあの事件？」

コズミック・イラで、フリーダムでジャステイスである。

というか、そもそもバレンタインである。

「まあ、バレンタインデーはまったく関係ないんやけどなー。事の発端は、私がなのはちやんたちの学校に転校したことやった……」

「……」

「ヴィヴィオは知つとると思うけど、当時、なのはちゃん、フェイトちゃん、アリサちゃん、すずかちゃん——の、仲良し4人グループやったろ？」

「はい」

「そこに、私が混ざったわけや。するとどーなると思う？」

「えつと4人が5人になるわけだから……あ、もしかして！」

「そう。体育の時間とか、それまではちよーどツーパーアになってたんが、1人あぶれてしまうわけやな」

「あゝ」

なのはママが懐かしそうに声を上げる。

「まあ、元々フェイトちゃんが来るまでも奇数グループだったんだけどね」

「お陰でなのはを独占できたわけだけど」

フェイトママ……。

そういえば、あんまり気にしたことなかったけど、わたしも学校ではリオコロと3人グループだ。

「まー、わたしの場合、呼べばアインハルトさんが来てくれるからいいけど」

「いやいやいや」

「あの子、中等科だったよね？」

「クラスのみんなも『もう慣れた』って感じで受け入れてくれてるから。そしてユミナさんが連れ帰ってくれる」

回収。

「なんや、召喚獣みたいやな……」

「あはは……」

まあ、そんな感じである。

「——で、話を戻すと、同じ頃、シャマルんとこに、石田先生からこんな話が舞いこんできたんや。」

『2週間、臨時で私立聖祥大学付属小学校の養護教諭をやりませんか——』
てな」

「結構、急な話だったよね？」

「うん、確か、いつもの保険の先生が事故にあったとかで……」

「レティ提督が地球での生活用に色々手を回してくれた中に、シャマルの養護教諭の資格ゆーんがあつて……ただな、登録もしてなかったし、一度は断ったんやけど」

「管理局の仕事もあるしね」

「でも、はやての学校生活を見てみたい——って、誘惑に負けちゃったんだよね」

「あの時、ヴィータちゃんがうらやましがってうるさかったなあ〜」

「あ〜、はは……」

半泣きでアイゼンを振り回すヴィータさんの姿が目には浮かぶようだ。

「基本、シャマルは料理関係を抜かせば、人当たりもえーし、気も利くし、何かと面倒ごととも率先してやってくれるし、うちの子たちの中でも、一番コミュニケーション能力が高いからな〜」

「最初は腹黒いなんて言われてたけど、実際はまったくそんなこともなかったしね」

「そーいうのは、はやてちゃんの役割だもんね？ よつ、タヌキ司令っ！」

「いやいやいや、あの頃の私は、もっとこう真つ当な美少女やったかと……」

何やら遠い目をしている。

「じゃ、いつからこんな風に？」

「うっ……ん、ん〜っ、思い起こせば、フェイトちゃんの純粋さが、私の心に影を落としたりよ〜な……」

「私のせいなの!?!」

「——ってのは半分冗談で」

「半分……」

「半分なんだ……」

「まー、私の話は置いといて、2週間の養護教諭というと、ちよーど教育実習生みたいなノリやろ？」

「シヤマル先生、大人気だったよね。まさかのフェイトちゃん超え」

「あはは、クラスの男子や学校の先生まで巻きこんで大騒ぎ」

「ケガもしてないのに保健室に来る子が多くて困るって、シヤマル言っとったな」

「授業中は男の先生が通ってたんだよね」

「アリスが漫画みたいつて言ってたけど」

「ホンマにそんな感じやったなく」

と、楽しそうに笑っていたはずのはやてさんが、急に真剣な顔つきに変わった。

声のトーンも低くなる。

「そんな時やった、あの事件が起きたんは……」

「悲しい事件だったよね……」

「そ、そうかな……？」

血のバレンタインのことだろうか？

「ある日、シヤマルが例の噂を聞きつけてな——」

「例の噂？」

「そや、さっきの、体育の時間に1人あぶれるっちゅう話や」

「あく、アレですか……」

「それでシャマルが、私らの体育の時間に乗りこんで来てな……」

「ドッジボールの時間だったつけ？」

「そうそう」

聖祥小学校ドッジ多いな……。

「あ、もしかして変身魔法で子供の姿になってたとか？ これではやてちゃんと一緒に準備運動できる！ みたいな」

「いんや、そのまんまの姿で」

「??？」

そこに何の問題があるのだろうか。

「その……体操服だったんだよ、シャマル先生も」

「へえ、やる気まんまんだね！」

「私たちと同じブルマだったけど」

「Oh」

ナイスブルマ！

「日常生活は完璧やったんやけど……」

「学校生活についてはまだまだで……」

「だから、体操服はバリアジャケットや騎士甲冑と同じで、普段は制服だけど、体育の時間、女子は必ずそういう格好をするものだと思いきんでいたみたい」

大人ブルマのシャマル先生が「はやてちやくん！」と、手を振りながら駆けてくる姿を想像してみる。

何だろう……このいかがわしい感じは。

「意外と知られてないんやけど、シャマルはシグナムより胸おつきーしな」

「そうなんですかつ!？」

はやてさんがわたしの目を見てゆっくり頷いた。なのはママも同調する。

「そうそう。普段ゆったりした服装だからわからないけど、シャマル先生は脱いだらスゴイからね、ビックリだよ?」

リオが「ふかふか」と喜びそうだ。

「本気で興奮して鼻血出してる男子もいたよね?」

「隣のクラスの先生もだよ?」

「あゝ、それで血のバレンタイン事件なんだ……」

「当時、ガンダムSEEDが流行ってたからなく。いつの間にか——特に男子の間で——

「そんな名称がついとったわけや」

とはいえ、シャマル先生のはやてさんを想う心、というのはよく伝わってくるエピソードなわけで、

「どつちかというと、いい話の方だよね——ふわあ〜」

「もう眠くなっちゃった？」

「うん、ちよつとはしやぎすぎたみたい」

「じゃ、最後に——さっきの話にはオチがあつてな。当時、私はまだ足が悪かったから、体育の時間はいつも見学やったという」

「つまり、最初からあぶれるはずがなかったんだよね」

「あゝ、そーいうことなんだ〜」

よかつた〜。

わたしは安堵すると、大きく欠伸をして、眠りに落ちる前に、思いついたことを口にする。

「そういえばなんだけど……フェイトママのソニックフォームも、大人ブルマみたいなもんだよね……それじゃ、お休みなさ〜い……ぐう……」

「……」

「なんちゅー爆弾を残して……」

隣り合うなのはママとはやてさんが、気まずそうに互いの目をのぞきこんだ。

フェイトママが慌ててわたし越しに、2人に声をかける。

「そ、そんなことないよね、ソニックフォームって、そんな……って、なのは!!? はやて!!? ——どうして2人とも目を逸らすのおお!!?」

なのはママが、無表情のままスタツ——と片手を上げた。

「じゃ、私そろそろ寝るんで……」

「そやな。私も明日早いし……フェイトちゃんおやすみやー……ぐう」

「ちよ、早っ!!? 待ってよ2人とも、私だけ残して、そのこともう少し突っこんで議論しようよ……って、もう起きてよおお! 気になつて眠れないんだけどおおお——っつ!!?」

翌朝。

フェイトママだけ頬を「ぷくっ」と膨らませて、機嫌が悪かったです。

アミティエもん

午前は、ジムでスパリング。

お昼は、うちに帰ってなのはママと昼食。

午後は、自分の部屋で夏休みの宿題。

——という流れだったのだけど、

——ドゴスツ！

「おう、ふっ！」

突然、腹部を強打。アインハルトさんやリンネさんのパンチを食らった時みたいに、腹から押し出された空気が口から漏れる。

「な、何で、いきなり机の引き出しが……」

ドリフのコントじゃあるまいし……。

わたしは右手にノート、左手にシャーペンを握りしめたまま必死に机にしがみつこうとしたのだけど、そんな努力を嘲笑うかのように、体は椅子ごと後方に。

あゝ。

すると、開いた机の引き出しから、ニヨキツと赤いタケノコ——じやなかった、赤毛で三つ編みのお姉さんが姿を現した。

青い衣装。松岡●造みたいにやる気に満ちた瞳。

そして、快活な声音で空気を震わせた。

「お久しぶりです、ヴィヴィオさんっ！」

「え、あ……も、もしかして映画が絶賛公開中だというのに空気も読めずに『GOD』アミタさんっ!」

「はい! みんなのお姉ちゃん、アミティエ・フローリアンですよ——つて、『GOD』アミタ??」

「ああ、スミマセン! 色々と紛らわしいんで、ゲーム版の方を『GOD』アミタ。劇場版の方を『Reflection』アミタとお呼びしようかと……」

「はあ……」

いまいちピンと来てないようなので、

「えっと、プロトタイプガンダムが昔ながらの黒と白のカラーリングか、オリジン仕様の

「googleセンサーか——みたいな」

「えっと、何のお話でしょうか？」

「しまったああ——っ!!」

わたしの周囲はだいたいそれで話が通じちゃうので、ついガンダムで例えてしまったのだけど、

「流石のガンダムもエルトリアじゃ放映してなかったか〜」

こっちは『ガンダムビルドファイターズ バトログ』で、あの2人が戦っているというのに……。

「??？」

「帰ったら王様にガンダムのこと相談してください」

「はあ……」

娯楽の少なそうなエルトリアなら、毎日ガンダム祭りでも二月もあればどうにかなるだろう。

「——って、そんなことはどうでもよくて、アミタさん、どうして机の引き出しから出てきたんですか!？」

「はい! 前にキリエから、こちらの世界にお邪魔する時は、出口を机の引き出しに設定しないとダメよん——とか言われまして。そういう慣習があるんですよね?」

「あゝ」

今やミッドでも有名な、青い猫型ロボットの事か……。

「もしかしてウソだったんですかああ!?!」

「いえ、当たらずといえども遠からずと言いましようか……」

わりかし正解な気もする。

「キリエさんらしいで——」

「あああああああああああつ!!」

「ちよ、どうしたんですか!?!」

「キリエですよっ!」

「はい?」

「今朝はふつーにうちにいたのに、お昼に姿が見えないなーとか思ってたら、

『ちよつとミッドに出かけてきまーす♪』

つて書き置きが残っててええ!」

「はあ……」

「もおおっ! 未来に影響が出ないよう、よつぽどじゃない限り時間転移装置は使わな

いって約束してたのにいい——っ!!」

「はっ! もしかして……またエルトリアに危機が!」

「ん〜っ、特にそうだったことは起きてないはずなんですが……」

いつもどおり、王様の朝食を食べて、

いつもどおり、王様の昼食を食べて、

いつもどおり、王様の夕食を食べるだけですよう?」

王様の料理の話しか出てこない!

だけど、

「完全にいつもと変わらないってことですよね……」

はて?

そうなるって、どうしてキリエさんはわざわざこっちの世界にやってきたのか??

「最近、王様たちがよくこっちに来るから、キリエさんも遊びに来たくなったんじゃない?」

「それならそうと言ってくれれば……じゃなくて、そんなホイホイ来てもいい場所じゃないんですよ!」

「ま、まあ、そう熱くならないで、落ち着いてください。キリエさんのことだから、その

辺りは色々器用にやるはずじゃ……」

たぶんだけど。

「それは……まあ、優秀な妹ですからね！」

何気に妹自慢来たアア！

「あ、そうだ。キリエさんがこつちに来てるとしたら、ママなら何か知ってるかも」

わたしとクリスが気づかなくても、ママとレイジングハートなら察知している可能性が高い。

「ヴィヴィオさんのお母さんというと、もしかして——」

「とにかく聞いてみましょう！」

わたしはアミタさんを机の引き出しから引っ張り出すと——つい、中をのぞきこんだのは言うまでもないけど、猫型ロボットのタイムマシンはなかったです——手を引いてリビングに向かった。



「なのはママ、アミタさんが遊びに来ただけだよ」

「遊びじゃないですよ！」

「スミマセン……つい。それよりママ、キリエさん見なかった？ 先にこつちの世界に

来たみたいなんだけど」

くで接する機会がこれまでなかったと申しましょうか……」

「そういえば映画だとミウラさんボイス（かな恵隊）で、母親のエレノア・フローリアンさんがいましたが、ゲーム版の『GOD』では父親——グランツ博士しかいませんでしたもんね」

「そっか、じゃあ、アミタさん……ううん、アミタちゃん、ずっとみんなのお姉さん役お疲れ様でした——」

なのはママがアミタさんをぎゅゅと抱きしめた。

「はううう~~~~~~~~つっ!？」

真っ赤な顔で身体をピンと縦に硬直させたアミタさん。

なんだか、とつても不思議で、新鮮な光景でした。

「……コホン。そ、それでですね、なのはさん」

すっかりおとなしくなったアミタさんの前には、夏らしく、麦茶の入ったグラスが置かれている。

「キリエがこちらの世界にお邪魔していないかと思ひまして」

「キリエさん、またいなくなっちゃったんだって」

「あー、それなら午前中に来たけど?」

「ホントですかああ!?!」

「どうして言ってくれなかったのおお!?!」

「ヴィヴィオ、午前中はジムに行ってたでしょ?」

「それはそーだけど〜」

アミタさんは勢いよく立ち上がると、まるで湯上がりにビン牛乳を飲むかのように、腰に手を当て、麦茶を一気に飲み干した。

そして、敬礼。

「情報提供ありがとうございます! ございました! それでは、早速キリエを追いかけま——」

「ちよつと待ったああ——つつ!!」

「グエっ!?!」

リビングから庭に飛び出そうとしたアミタさんを、なのはママがバインドした。

「もう、そんなに焦らないの」

「ですがっ!!」

「大丈夫。王様たちが心配するから、夕食までには帰る——って言ってたから、夕方には戻ってくるって」

キリエさんらしい。

「そういうことなら、ママ、アミタさんにはうちで待つてもらおうよ!」

「うん、いいんじゃないかな」

「ですが、そんな、せっかくの家族の団らんを……ご迷惑じゃ……」

「大丈夫、大丈夫」

「そうですね! 夏休みらしいイベントになりますし、明日ジムでみんなに話すいいネタが出来ちやいますから、むしろ大歓迎です」

それに、高町家はこういうイベント事が大好きなのだ!



「——一応、王様やシユテルたちから話は聞いてるけど、実際問題、アミタさんたちギアーズの目から見て、エルトリアの状況はどうなの?」

「ん、まだまだですかね。王様たちのお陰で復興が軌道に乗ったのは確かですが、ここから先、一体どれほどの時間がかかるのかまでは……レヴィいわく『目指せスイカ割り!』だそうですけど」

海で遊べるようになりたい——という意味だろう。

「レヴィらしいね……あ、だったら、今度みんなで遊びに来たら？ それくらいなら、たいていこの時間にも影響ないんでしょ？」

「はい、まあ大丈夫かと……」

「いえいえ、わかりませんよ」。

Aさんが、むしゃくしゃして蹴飛ばした小石がBさんに当たり、追いかけたBさんが、穴の底に落ちていたCさんを救い、そのCさんが病気の治療法を発見し、そのお陰でDさんの命が救われ、最終的にDさんが世界大戦の危機を解消し、人類は絶滅のピンチから救われた。

——という、話を聞いたことがありますから」

ちよつとしたことで歴史が変わるという最も有名な例え話だ。

「ほ、本当ですかっ!?!」

「はい、本当です」

「も……もしかして、私がここにやって来ただけで歴史に変化がああ!?!」

「こらヴィヴィオ、そんなに驚かささないの」

「はい」

アミタさんのグラスに新しく麦茶を注ぎながら、

「そういえば、うちもまだ今年海に行つてなかつたよね？」

「そーだっけ？」

「そーだよっ！」

「にはは、それはまあ、フェイトちゃんが帰つてから相談しようね」

「フェイトさんはお仕事ですか？」

「ん、フェイトちゃんはおちよつと過去と対面中」

「過去と……ですか？」

「うん。昔——それこそ、アミタさんやキリエさんと出会うより前、フェイトちゃんがやんちゃしてた頃、『時の庭園』つてところに住んでただけど……」

「時の庭園、ですか？」

「えつと、わたしも実物は見たことないんですが、空中移動要塞的な……」

「く、空中移動要塞ですか……何ですか、そのラスボスとかいそうな響きは……王様は好きそうですけど」

「まあ、実際、私にとってはラスダンだったんだけどね。庭園が飛び立つ前、地上に残さ

れた建物とか荷物とか、管理局に押収されたものが、少しずつ返却されてるんだよね。

学術的なやつは、ユーノ君に押しつけ——じゃなくて、無限書庫に寄贈してるみたいだけど、それ以外はフェイトちゃんや私が直接見て判断してるみたい」

「何だか大変そうですね」

「まあね。でも、フェイトちゃん的にはうれしいらしいよ？ 日記とかもあるし。数少ないプレシアさんやリニスさん、それにお姉ちゃん——アリシアさんが生きた証だから」

「お姉ちゃん……やっぱりお姉ちゃんは重要ですよねっ！」

「でも、別の部分に食いついたらしい。」

「——あ、ところでアミタさんどら焼き食べる？」

「どら焼き?!?!」

「あれ？ 未来から来た猫型ロボットはどら焼きが好きはずなんだけど……」

「ママ、流石にそれは無理があるかと」

「ギアーズだし、青いカラーリングはちよつと似ている気はしますが。」

あと、ちよつぴりポンコツなことか。

あれ？

結構似てるっ!?

窓ガラスに夕日の色が混じった頃、

「——ただいま〜」

玄関から明るい桃色声が聞こえてくる。

アミタさんは条件反射か——と思うくらいの速度で立ち上がると、

「キリエエエエエエエエエエエツツ!!」

と、玄関に向かって猛ダツシユ。

キリエとかキリトとか中の人大変だな〜。

「お、お姉ちゃん!?! どうしてここにいい!?!」

「それはこっちの台詞です! あなたこそ、どうしてこっちの世界に来たんですか!?!」

「それは、その〜」

ようやく追いつくと、目を逸らした様子のピンクな人を発見。

「キリエさんお久しぶりでーす。ヴィヴィオですよ〜」

「わ〜お！ おつきくなつたような、なつてないような気がするわね〜、ヴィヴィオちゃん」

「あはは……」

「もおお、キリエ、誤魔化さないでくださいっ!!」

すると、なのはママがやけにタイミングよく間に割って入った。

「まあまあ」

「棒？」

「うん、そういうひみつ道具はあつたけど違うからね。

2人とも、夕食までに帰らないと王様がすねちゃうんじゃない？

それともうちで食べてく？」

私はそれでもいいけど、その時は腕によりをかけて作っちゃうよ」

「はわわ、そ、そうでしたっ！」

「そーね、話の続きはうちに帰ってからってことで——」

キリエさんがなのはママに小さくウインクした。

まーた、何か悪巧みでもしてたのかな〜。

なのはママまで巻きこんで……。

アミタさんは、なのはママとわたしに向き直ると頭を下げた。

「本日は大変お世話になりました。今日のところは、ヴィヴィオさんの机の引き出しから帰らせてもらいますので——キリエもすぐ帰ってくるよーに」

「了解、了解。じゃ、私も帰るけど……今日はありがとね、なのはちゃん」

「いえいえ、どういたしましてー」

2人で微笑み合う。

「そーだ、今度はキリエさんもゆっくりうちに遊びに来てくださいね、アミタさんと一緒に。映画の座談会みたいなのもやる予定なので」

「かしこまりー。じゃーね、ヴィヴィオちゃん——」

そう言つて手を振ると、なのはママの部屋に消えていく。

「ねえ、ママ。キリエさんは最初どこから来たの？」

「私の机の引き出し」

「あー」

アミタさんに教えたのは、冗談やイタズラではなく……ガチだったらしい。

「つて、そうだった。そもそもキリエさんはどうしてこっちの世界に?？」

「あはは、それはね、もうじきアミタさんのお誕生日なんだつて」

「……あく、それで、わざわざこっちに買いに来たんだ」

何だかんだでお姉ちゃん大好きっ子なのである。

「はあく、あの人も器用なんだか不器用なんだかわかんないね」

「だね〜」

映画版のキリエさんも、色々やらかしてたし……。

わたしとなのはママは顔を見合わせると、遠くエルトリアの空の下、紫天一家と卓を囲むフローリアン姉妹の姿を思い浮かべるのであった。

お盆だよフェイトママ 前編

1

先週の回で、アミタさんとキリエさんが帰つてすぐあとのことだ——。

「なんだか慌ただしい一日だったね〜」

「アミタさんとキリエさんが、あんなに可愛い女の子だったとは……昔は、あんなにお姉さんだったのにい〜」

「なのはママも歳を取ったってこと？」

「ううっ、今日ばかりは言い返せない……。でも、まあ、こーいう昔のアルバムを開く——みたいなイベントはそうそう起きないし、たまにはいいかもね」

そう言いながら、なのはママがグラスに入った麦茶を口に含んだところで、バアアン——と玄関を開放つ音が聞こえ、

「大変っ！ なのはっっ!! 時の庭園の一部が見つかったのおお——っっっ!!!」

「——ブウウウウウウウツツ!!」

と、なのはママがフェイトママに向かって麦茶を吹き出したところから、今回の物語は始まります。

2

時の庭園とは——かのプレシア・テスタロッサが、アリシアの賠償金と自ら得た富により購入した移動庭園である。

遺跡級の年代物だったらしいけれど、人目につかず生命蘇生の研究を行うにあたり、次元間航行が可能なこの庭園は、隠れ家として実に都合がよかったのであろう。

とかなんとか小難しいことを述べてみたけれど、外観は「庭園???」とコメントしたくなるようなトゲトゲな岩塊で、ガンダムなら「アクシズ」、マクロスなら「ゴル・ボドルザー」を彷彿とさせる。

ついでに言うとなのはママと合体して「鬼眼王バーン」みたいになりそうで怖い。たぶん、ゆりかごより強い。

ちなみにサイズはというと、よくわからない。とにかくすごいデカイ。

一応、ミッドチルダ南部のアルトセイムに停泊していた頃の庭園を見ると……うん、Vガンダムバイク戦艦より遥かに大きい。バイク戦艦が全長400メートルくらいだったので、庭園がいかに巨大建造物なのかわかっていただけるかと思う。

え、わからない？

まあ、そこは雰囲気で察していただけたらと思う。

アインハルトさんみたいにちっちゃくないよ！

最後は爆発、崩壊し、虚数空間に消えたのだけど……。

アレだけの大きさの代物。

一部が飲みこまれずに残っていたとしても、何ら不思議ではないだろう。

3

紺碧の空の下を、フェイトママ、なのはママ、わたし——の3人がバリアジャケット姿で飛行している。

眼下には密林が広がっていた。

「まさか、管理外世界に落下していたなんて……」

「次元断層が発生していたから、可能性はあったんだけど」

「お盆とはいえ、とんだ里帰りになっちゃったね、フェイトママ——」

というわけで、母娘3人、時の庭園の一部が発見されたという、とある管理外世界を訪れたのだけど、

「里帰りかあ、言われてみればそうなのかも……」

「フェイトちゃんの昔の実家——だもんね」

「なのはママにとってはラスダンだもんね」

「ラスダン!？」

「ま、まあ、そうなんだけど……あれなんだよね。ほら、ヴィヴィオも映画を見て知っているとと思うけど、ラスボス（プレシアさん）目がけて一直線だったから、ほとんど探索してないという。」

正確に言うと、私とユーノ君は駆動炉を止めに行ったんだけど……まあ、結果的に寄り道できなかったし」

「あく、エクステス城でカーバンクルを取り逃したみたいなの？」

「そうそう。竜王の城でロトの剣を取らずに世界の半分をやろう——みたいなの」

「2人とも例えが酷いっ!」

フェイトママが頭を抱えている。

「——ということ、未発見のお宝も!？」

「だねえ、プレシア・テスタロツサの秘宝みたいな」

「あー、たぶんだけど、2人のご期待にはそえないかと」

フエイトママが指をさす。

密林の中央に、ひととき目立つ尖った岩山のような建造物が斜めに建っていた。

全体を植物が覆っているの、落下してからかなりの年月が経過していることをうかがわせる。

ただ、空から鳥瞰するだけでは、自然物のようにも見え、言われなければ人工物だと判別するのは難しい。

周囲に落下時の痕跡もないからだ。

それが、長らく発見されなかった所以なのだろう。

「もしかしてアレなの!？」

「うん。見つかった——と言っても、本当に庭園の一部だから」

「アレって、庭園のトゲトゲしてた部分だよな?」

「そう。そのうちの1本だと思う」

フエイトママは謙遜して一部なんて言ってるけど、

「いやいやいや、十分おつきいよ?」

魔物でも棲み着いていそうな高い塔。

これがRPGなら、中盤戦の山場。もしくはやっぱりラストダンジョンである。

「現地の人はず？」

庭園の存在に気づいていたのだろうか。

「うん、近くに集落があるから」

「だったら、中はもうとつくに荒らされてるかも」

「それが、そうでもないみたいで——」

「へ？」

フェイトママの誘導で地上に降り立つ。

ちようど、尖塔を見上げる位置だ。

やはり大きい。

「なのは、ヴィヴィオ、入り口のところを見て——」

生きているのか死んでいるのかもわからない。

体中に青い苔を生やし、下半身が蛇、腕がいくつもある巨大な生き物が、ガーゴイル像のように扉を塞いでいた。

「何あれ!?! ダームの塔とかにいそうだけど、闇の魔物か何か!?!」

「うん、そういうのじゃないから」

「じゃ、ノイズさん！」

「うん、歌わないから」

「SAKIMORIちゃん、あれって……傀儡兵だよね？」

「うん、SAKIMORIじゃないけど、たぶん、そうだと思う」

「プレシアさんが魔界から召喚したという……」

「うん、そういうのでもないから」

「ドラクエで例えるならストーンマン……うん、キラーマシンの方が近いかな？」

「無理にドラクエで例えなくていいから。普通に母さんの創ったゴーレムだから」

わたしは無印や映画を思い出し、

「時の庭園で、なのはママがドカンドカン倒してた敵のこと？」

「そういうと弱そうだけど、アレって一体一体がAランクの魔導師と同じ力を持つから

ね？」

「え」

わたしより強いかも……。

一般人には十分脅威だった。

「そりゃうかつに近づけないよね。コロナが見たらとんで喜びそうだけど……」

「あの子が、この塔を守ってくれていたから——」

フェイトママが前に進み出ると、傀儡兵の目に赤い光が灯る。

「え、大丈夫なの!？」

なのはママがわたしの肩をポンと叩く。大丈夫だよ——という合図だ。

「覚えてるかな?」

フェイトママが、優しく冷たい金属のボディに触れると、傀儡兵が抑揚のない機械的な声で反応した。

『テストロツサ・ファミリーとして認証します。

ようこそ、無事のご帰還を——マスター・フェイト』

「うわあ、フェイトママ、魔王の娘って感じだね!」

「ん、それを言ったらヴィヴィオもでしょ?」

「あはは、そうでした」

「ん、んんんん?!!」

わたしとフェイトママは「まあ、まあ、まあ」となのはママの肩を叩いて、塔内部へ

と乗りこんだ。

4

先導してくれる傀儡兵（意外と優しい？）のあとに着いて進むと、次第に天井や床に明かりが灯り始めた。

「この塔って、10年以上放置されてたんだよね？」

「生きてる駆動炉があったってこと!？」

「なのはとユーノが止めたのは、メイン駆動炉だったから、ひよつとしたらサブの駆動炉が残ってたのかも……」

歩きながらフェイトママが話す。

「私も、庭園の中を全て自由に行き来できたわけじゃないから。入っちゃダメだって言われてた場所とか、行く必要のないところには行かなかったから——」

もしフェイトママが、もっと人の言うことを聞かない女の子だったら、なのはママと出会う前に、アリシアさんのポッドを見つけてしまったかもしれない。

もしも、そうならいたら……歴史はどう変わっていたのだろうか？

「その真面目なところが、フェイトちゃんの良いところだけだね」

「ありがとう、なのは。母さんが、駆動炉からのエネルギーを自分の魔力として運用できたことは知ってるでしょ？ 逆に言うと、母さん自身の魔力量は普通だったから、メイ
ン駆動炉に何かあつた場合を想定して——」
「そっか、いくつかサブを用意しておいたんだね？」
「そう、アリシアのポッドのこともあつたし、用心するに越したことはない——と、当時の母さんなら考えたと思うんだ」

5

大きな書棚のある部屋で、わたしは検索魔法陣を展開した。

「ヴィヴィオ、わかる？」

「ん、ゴレム関連と、アルハザード関連だとは思うけど……ユーノ司書長を連れてきた方が早いかも」

「半分遺跡みたいなもんだしね、ユーノ君なら喜びそう。アルフさんも何か知ってるんじゃない？」

「そっか、連れてくればよかつた」

「今度はみんなで来ようね！」

リオコロとアインハルトさんも連れてきてあげよう。

そんなことを話しながら各部屋を調べている間、例の傀儡兵はずっとおとなしくしていたのだけど、

「映画の時は、もつとこう——ハッスルして襲ってきたよね？」

「うん、だから、こう——私もつい砲撃したくなっちゃうんだよね。」

私とフェイトちゃん、初めての共同作業——」

「そんなロマンチックに、キーキ入刀じゃないんだから。合体攻撃だったよねっ!」

そもそも共同作業なら、それ以前にあった気もするし……というか、2人がかりじゃないと倒せないって、この傀儡兵強いな。

「もう、倒したって今のなのはレベルじゃ経験値入らないんだからね」

高すぎるのだろう。

「じゃ、わたしならレベルアップできるかな？」

「おっ、やってみる？」

「やめてエエ! 2人とも経験値とか冗談だからああくっ!!」

慌てて割って入るフェイトママ。

だけど、フェイトママの冗談とは珍しい。

やはり生まれ育った場所ともなれば、いつもとテンションが違うのかもしれない。

とはいえ、

「実際問題、あの傀儡兵つて暴れたりしないのかな？ 侵入者は追いついてたんでしょ??」

マスター権限のないわたしとなのはママが声をかけても何も答えてくれないのだ。

「ん、私がいるから大丈夫かな。母さんもリニスもない今、私より上位のマスター権限を持つ人はいないはずだから」

「アルフは？」

「どうだろ？」

今度一緒に来た時にでも試してみるといふ。

その辺りの詳しい事情はわからないけど、少なくとも現在、わたしやなのはママに危害を加える意思はないようだった。

6

一通り調べ終わると、外はもう真っ暗だった。木々の隙間から、星が綺麗に見える。火を使わない携帯食料も用意したけど、わざわざ飯盒でご飯を炊いた。

「キャンプみたい！」

「テントもあるけど、せっかくだし、今日はフェイトちゃんの実家にお泊まりだね！」
「う、うくん、そんな感じなのかなあ〜」

フェイトママの白い耳の先が、火色に染まったように見えた。

7

「ふあ〜つ、トイレまで使えたのはラッキーだったよね」

深夜、塔の中を歩きながらクリスに話しかける。

暗いと、わたしの横を飛んでいるのか飛んでいないのかわからない時があるので、今度マリーさんをお願いして喋るようにしてもらうのもいいかもしれない……。

「てか、ウサギって何て鳴くんだったっけ？」

などと考えていたら、突然、目の前を昼間の傀儡兵が通り過ぎた。

「のわっ!?!」

夕食の時も、ガーディアンよろしく塔の入り口でスタンバってたのに……一体どこへ行くのだろうか？

ぐっすり寝ているママたちを起こすのも気が引けるし、

「追うよ、クリス！」

ウサギのデバイスがビシツと手を挙げた。

後をつけていくと、

「この場所って……」

どうやら、まだ調べていない部屋があつたようだ。

傀儡兵が扉の中に消える。

外でしばらく待っていると、入れ替わるように鎧騎士タイプ of 傀儡兵が現れた。塔の外に向かつて歩き出す。

「もしかして——」

わたしは急いで部屋に入ると、自分の仮説が正しいことを知る。

ここでは、昼間の傀儡兵がプラグのような物と接続しており、他にも複数の傀儡兵が眠っていた。

「充電——魔力の補充をしてるんだ……」

本来は、庭園のメイン駆動炉から直接エネルギーを供給されていたけれど、それが停止したので、サブから蓄積する形で稼働しているのだろう。

よく見ると、傀儡兵のサイズや形に合わせて、色々な魔力補充台が置かれている。

「これなんてベッドみたい……」

映像では見なかったけど、意外と人間サイズの傀儡兵なんてのもいたのかもしれない。

大きい傀儡兵ばかりでは、入れない、守れない場所もあっただろうから。
ふむ。

「これは使えるかも……」

ママたちのところに戻るのも面倒臭いし……。

わたしは台をポンポン叩いた。

固くはあるが、高さはちょうどいい。

2人から受け継いだこのスピリッツ。

何事もチャレンジである。

「お休みなさ〜い……」

魔力補充台で横になると、わたしはここで眠ることにした――。

8

「――ん〜つ、あれ？　ここって……」

おかしい。

確か、時の庭園の一部——塔の中、魔力補充台で眠ったはずなのに……。
見上げると、

空……いや、空なのだろうか？

雲一つない——というか、濃い青に、うっすらとオレンジの混じった夜明けの空。いわゆる黎明に近い。

だけど、何かがおかしい。

肌寒くもなく、朝のランニングで感じる澄んだ空気もない。何より、たいして明るくもないのに全てを見通せる。

いちいち日常の感覚とズレているのだ。

そもそも、

「何でわたしはこんな草原で寝てたんだろう？」

傀儡兵に連れて行かれた？

「いやいやいや」

流石に起きるだろう。

しかも、

「おおう……結構ギリギリだ……」

目の前は崖つぶちだった。

地面はそこで途切れており、下をのぞきこむと、空と同じような青で、あく、でもよく見ると雲のようにうねっているような……。

もしかして、

「ラピユタは本当にあつたんだっ!」

と叫んでも誰も突っこんでくれない。

「——つて、あれ?」

振り返ると岩山……いや、違う、巨大な人工物が多く混じった残骸。

近代的な部分と、石造りの柱など。

「これって……」

つい最近見た。

「時の……庭園……?」

一部ではない。もっと、残り全てを合わせたように巨大で……。

——はっ!?

「さて、時の庭園のことを知っている貴方は何者かしら?」

——瞬でわたしの間合いに入られた？

気づくと、目の前には藤色の衣服に身を包んだ長い黒髪の女性が立っていた。

長身で、それなりの年齢だというのにスタイルもいい。

この人って、まさか……、

「ぶ、プレシアお婆ちゃんやあぁ~~~~んつつ!!?」

「お婆っ……!!?」

「プツ、あつはつはつはぁあ——っ!」

続けて姿を見せたのは、お腹を抱えて笑い転げる長い金髪の女性——というか少女。

「お、お婆ちゃんだって、お婆っ!」

「アリシア、黙りなさい!」

アリ……シア……?

「だって、お婆、お婆ちゃんって……ひっ、ひっ、笑いすぎて息があゝ」

「アリシア!」

確かに、若い頃のフェイトママに似ているけれど……。だって、プレシアさんも、ア

リシアさんも……。

ああ、

「クリス、なのはママとフェイトママに連絡連絡うううって、クリスいないし、通信も届かないしいい~~~~っ!？」

どうなってるの??

「ほ、本当にプレシアさんとアリシアさんなんですかつ!？」

わたしが叫ぶと、プレシアさん(?)は、急に真顔になった。

「——そう。貴方、私だけでなくアリシアのことまで知っているのね。気になる名前も口にしていたようだし……事情を説明してもらいましょつか?」

それはこっちの台詞だよお~~~~っ!?

プレシアさんに睨まれ、アリシアさんに興味津々見つめられたまま、来週まで続く!

お盆だよフェイトママ 後編

1

「——さて、私のことをお婆ちゃんと呼び、アリシアのことまで知っていた貴方、事情を説明してもらいましょうか？」

みなさんお久しぶりです。

ていうか、1週間ぶりです、高町ヴィヴィオです。

目の前にプレシアお婆ちゃんがあります。

ピンチです。

シヤアじゃないけど、このプレッシャーは何!?

一応『GOD』で、闇の欠片とはいえお姿拝見しているので間違うことはないと思うのだけど……こうして直接お会いするのは初めてなわけで……。

「いつまで黙っているのかしら？ まったく親の顔が見てみたいわね」

あゝ、あなたの娘ですよ。

「……」

沈黙の視線。

「あ」

この目は本気だ。

フェイトママが時々するマジな目だ。

高町家鉄の掟の一つ。

フェイトちゃんは絶対に怒らせちゃダメ——に該当する。

「えっと、あの、わたしにもよくわからなくて……」

「ピンポイントで漂流してきたとでも？」

「いや、その……」

漂流つてなに〜？

そこで、ようやく黄金の助け舟がやってくる。

「——はいママ。そんなに怖い顔しないの。この子、怯えちゃってるじゃない」

「アリシア、この子が危険な存在という可能性もあるのよ？」

「そんなことないよ！ ほらほら、私と同じ金髪だし、よく見れば、どことなく、私に

似てると思わない?」

黒髪の女性が大きく息を吐いた。

「……わかったわ」

うわ、あのプレシアさんが先に折れた。

「アリシアの直感力は、私にはないものだから。ただし、貴方——名前は?」

「た、高町ヴィヴィオです!」

「そう、ヴィヴィオ——。貴方が、どうしてどうやってここに来たのか、事情だけは説明

してもらおうわよ?」

「はい! プレシアお婆——」

「……」

「——コホン。雷光少女プレシアちゃん!」

「……アリシア、この子突き落としても構わないかしら?」

「ダメだつてばああ——っ!」

2

この場所へやってきた理由や方法はわからないのだけど、とりあえず、わたしは自分

のこと、フェイトママのこと、なのはママのこと、そして、現在のミッドチルダについて話した。

「——そう、あの子の」

「ふえー、フェイトがママなんだ……」

2人とも、フェイトママが初めてわたしの大人モードを見た時と似たような顔つきをしている。

何だろう、この違和感？

「あの子、まだ生きていたのね……」

「そりやそーでしょ！ だって、ママの娘だよ？ しぶといに決まってるって」

「いいえ、あの子は私の娘ではないわ。私がお腹を痛めて産んだのはアリシア、貴方だけだもの」

「まーた、そんなこと言ってー。仮に複製体だとして、ママが全身全霊をかけて生み出したんでしょ？ だったらフェイトは、紛れもなくママの子で、私の——アリシア・テスタロッサの妹だよ」

——そうか、ようやくわかった！

この違和感の正体が。

わたしの目の前にいるこの2人は、わたしの知るどの世界のプレシアさんやアリシアさんとも異なるんだ！

『無印』や『The MOVIE 1st』で見ることができ、優しかった頃と、狂気に取り憑かれたあとのプレシア・テストロッサ。

『A's』や『The MOVIE 2nd A's』で、フェイトママの夢の世界に現れた、穏やかなプレシア・テストロッサ。

『INNOCENT』で、恥ずかしげもなく「娘☆命」と言い切る、親バカ全力全開のプレシア・テストロッサ。

そして何より、

「アリシアさんが、全然、まったく、ちっちゃくないよおお——っ!!?」

「なにそれええ!!?」

「フェイトママの中1くらいあるし!」

「ちゅ、中1……」

アリシアさんが、ズーンとorzポーズで落ちこんだ。

あれ？

もしかしてもつと年上なのだろうか？

「あのく、ヴィヴィオ、ちよつとたんま。フェイトって、外見はどんな風に成長したのかな？」

クリスがいれば映像でお見せできたのだけど、残念ながらない。

なので、

「えっと、モデルをやってもおかしくないくらいで——」

わたしはフェイトママがいかにも美人さんなのかを、原稿用紙なら10枚くらいのエピソードつきでお話する。

「そういった意味では、たぶん、よく運動をして体を鍛えているプレシアさん——って感じのスタイルでしょうか？」

「それ最強じゃん！」

「あはは、ですな〜」

アリシアさんが、悔しそうに地面をバンバン足裏で蹴る。

「むきいい〜、やっぱりフェイトは私の妹じゃないかもっ!?!」

「エエエ〜」

「姉よりすぐれた妹なぞ存在しねえっ!」

「どこで仕入れてきたんですか、そのネタああ——っ!」

アリシアさんは恨めしそうな顔つきで、

「私、背も低いけど、魔力量の値も低いしなあ〜」

チラッとプレシアさんを見る。

「私、誰かさんと違って雷撃魔法得意じゃないしなあ〜、あ、フェイトって得意なんだよね?」

「はい。電気の変換資質があるので、得意というよりもはやプロフェッショナルかと」

「はあく、私じゃなくてママの複製体なんじゃない? っっていうくらい似てるのに、どう

して認めようとしなかな、この頑固ママはっ!」

「頑固なのは貴方もでしょ!」

「あー、そーいうとこ、2人とも似てますよ〜」

何だコレ!?

3

カフェテラスのように、外に置かれた白いテーブル席に案内されたわたしは、しばらく

く歓談に興じた。

今度はわたしから尋ねる。

「あの、今更なんですけど、ここって何処なんでしょうか？」

薄々夢なんじゃないか———と思いはじめてはいたものの、訊かずにはいられなかった。ひよつとしたら———という可能性だつて捨て切れな。

プレシアさんが神妙な顔つきで答えた。

「アルハザード……と言ったらわかるかしら？」

「へ？」

「過去に存在し、未来にも存在する。」

ゴウゴウと流れ落ちる滝のように、時間が渦を巻く———時の行き着く先。狭間
「それって……っ」

突然、頭に鋭い痛みが走る。

脳裏に、人差し指を唇に当てたアミタさんとキリエさんの顔が思い浮かぶ。

———記憶封鎖？

わたしは聞いたことがある、ということだろうか？

時の果てについて、「時の庭園」という名に相応しい、この空間について。

確かに、あの2人なら知っていてもおかしくないとは思うけど……。

「貴方、時間移動能力者とも出会っているのね？」

「どうしてわかるんですかああ!？」

察しがよくすぎる。

『砕け得ぬ闇事件』の時には思ってたけれど、この人、フェイトママのママ——というだけじゃない。

ジェイル・スカリエッティと同じで、違法研究者でなければ、間違いなく歴史に残る天才のひとり——。

「こりや美人でも離婚するわけだ……」

ピキッ——と、プレシアさんの肩間にシワが寄る。

「ねえ、アリシア。この子、フェイトが私に文句を言うため送りこんだのかしら?」

「うくん、流石にそれはないかと」

「——って、あれ?」

わたしの手足が透けている。

「どうやら時間切れのようね」

「エエエエ!!? まだ聞きたいことがいっぱいあったのにいい!」

「……そういえば、ヴィヴィオ、貴方、聖王の複製体なのよね？」

「え、あ、はい。そうですけど……？」

何か問題なのだろうか。

「別に何でもないわ。確認しただけよ」

「??？」

「ふっふっくん、ママはね、こう言いたかったんだよ。」

聖王は外部からエネルギーを受け取ることができたんでしょ？

それってさ、つまり、ママの特殊技能と同じ——」

「あ」

「なのは——っていうフェイトの親友には悪いけど、ヴィヴィオはどっちかというところ、スタロツサ・ファミリーに近い。」

フェイトの娘で、私の姪ってこと。

ついでに同じ金髪だしね！」

ああ、そういうことか……。

わたしは感慨をこめてその名を呼ぶ。

「……アリシア、おばさん」

「おばアア——ツツ!!」

「……………プツ」

「ちよ、何笑つてるのママああ——っ!」

アリシアさんはブンブン手を上下に振って騒いだあと、

「あ、そーだっ! ママ、ヴィヴィオにアレ渡してもいいよね?」

アリシアさんが耳元でささやくと、プレシアさんは一言だけ、

「勝手になさい」

と告げた。

気に食わないけれど、止める気はない——といったところか。

「アレ??」

「お・み・や・げ——私の代わりにフェイトと一緒に探してあげて」

アリシアさんの言葉と同時に、わたしの五感はシャットダウン。

真っ暗闇に陥る。

最後に見えたのは、手を振るアリシアさんの姿と、わたしが遠出をする時、いつも見守ってくれるフェイトママと同じ視線だった——。

『——ヴィヴィオ、ヴィヴィオ!』

誰かが呼んでいる気がする。

ゆっくり目を開けると、ぼやけた視界がだんだん像を結ぶ。

目に映るのは、アリシアさんとプレシアさんではなく、懐かしい、なのはママとフェイトママの顔。

「——あ、あれ、ここって?」

「もう、ヴィヴィオってばこんなところで寝て」

「探すの大変だったんだから」

「あく、はは、ごめんなさ〜い……」

知っている天井。

時の庭園の一部——塔の中、魔力補充台で眠ったままの格好。

隣にはもちろんクリスもいる。

……ということとは、

「うわあああ、やっぱり夢オチだったあああ~~~~~つつつ!!」

普通なら有り得ない超体験だったのに、フェイトママには超朗報(?)だったのいい
——っ!

「な、ナニソレっ!?!」

「ヴィヴィオ、一体どんな夢を見たの?」

台をドンドン叩くほどの悔しがりっぷりに、ママたちが驚いている。

「えっと、それは——」

わたしはアルハザードで、プレシアさんとアリシアさんと出会い、色々な話を交わしたことを伝える。

「……そっか、そんな夢なら、フェイトちゃんにも見せてあげたかったね」

「そーだっ! フェイトママもここで寝てみる? ひよつとしたら同じ夢が見れるかも」

「う、うくん……それで見れるなら挑戦してみたいけど、ちよつと台が固いかなー」

苦笑いを浮かべたフェイトママに、やんわりとお断りされた。

まあ、科学的根拠は何もなく、台が固いのだけは本当だ。

わたしも、ちよつと身体が痛いし……。

わたしは「ですよ〜」と、台から降りようとして、
「……っ!？」

「どーしたの、ヴィヴィオ？」

「ううん、なんでもない——」

わたしは手を握ったり開いたりする。

これって……。

ゆりかごの駆動炉から無尽蔵に魔力を受け取っていた時と似た感覚。

どうして、いまさら……？

「ヴィヴィオ、行くよ〜」

「あ、うん！」

ま、いつか……。

体が不調なわけじゃない。

生きていれば、そういうことだってあるのだろう。

わたしたち3人は塔の外に出た。

眩しい白光。早朝のわずかに湿った森の空気が気持ち切り替えてくれる。

近いうちに、今度はユーノ司書長とアルフを連れて再調査しよう——という話になっていた。

「そーいえば、昨日の傀儡兵がいらないね」

わたしが起きた時、すでに部屋から姿を消していたのだ。

おそらく、魔力の補充が完了したのだろうけど、塔の入り口には鎧騎士タイプすらない。

「あ、あれじゃない?」

なのはママが指を差す。

ちようど、例の傀儡兵が塔から出て来るところだった。

コチラへ近づいてくる。

フェイトママが代表し、

「またしばらく留守にするけど、庭園の管理をよろしくね」

そっか……。

確かに、現在の傀儡兵は守護者——というより管理人といった方がしっくりくる。

『イエス、マスター・フェイト。それとコレを——』

傀儡兵が思いがけない動きを見せた。

フェイトママに向けて差し出したのは、青いリボンをかけて丸めた1枚の地図。

「え……これって……庭園から持ち出してきたの？」

『イエス、マスター・フェイト』

「気持ちはいれしいけど、ダメだよ、勝手に持ち出したら。元の位置に戻しておいて。そして、次に私が来る時まで大切に守っておいてくれるかな？」

『ノー、マスター・フェイト。その命令には従えません』

「え、どうして？」

主人であるフェイトママの言うことが聞けないというのだ。

「マスターの言葉に逆らうってこと？」

『ノー、マスター・フェイト』

どういふことだろうか？

わたしとなのはママも互いに顔を見合わせる。
傀儡兵は赤い瞳をゆっくり明滅させた。

『時の庭園の“真のマスター”より、あなたに渡すようにとのご命令です』

「「真のマスター!!」」

「それって……」

「プレシア、さん……?」

「でも、そんなわけは……」

ない。

ないのだ、絶対。

だってアレは夢だったわけで、もしそれが本当だとしたら、

「この塔の——庭園のどこかにプレシアさんとアリシアさんが隠れてるってこと!?!」

『ノー、“マスター・ヴィヴィオ”』

あれ？

やっぱり違うのか……。

だったら、

「どういうことなの、フエイトちゃん？」

「わ、私にも何がなんだか……」

傀儡兵は、無言のまま塔の入り口に移動すると、まるで、時が止まったかのように、瞳から赤い光を消して動きを止めた。

宝探しなのっ!

1

時の庭園で傀儡兵から渡された地図には、方位マーク、島の全景、いかにもといった髑髏や船のイラスト、そして赤い×印が、手書きで描かれていた。

「もしかして、プレシア・テスタロッサの財宝が隠された地図とかっ!？」

「エエエエ!?! そんな話聞いたことないけど……」

フェイトママにも、完全に否定できないことではない。

「レイジングハート、これ、どこの島かわかる?」

優秀な赤い宝石は、あっさりとは答えを導き出す。

それは――

2

ギラギラと焼けつく真夏の太陽に、青い空と白い砂浜、そして、

「「海だああ—— ツツ!!!」」

と、水着姿の3人でジャンプ。

「ヴィヴィオ、これやらないとダメなの？」

「一応お約束だからね〜」

「ううっ、恥ずかしいかも……」

マリンブルーのビーチは、どこも多くの海水浴客で賑わっている。

そう、地図に描かれた島。

この、とある管理世界のアクレイム島は、一年を通して温暖な気候と綺麗な海で有名な、一大リゾート地だった。

「——って、誰も訪れないような絶海の孤島じゃなかったのおお!？」

お宝が隠されているなら、謎の無人島だとばかり思っていたのだ。

「「「10年で観光地化が進んだとか？」」」

「ううん、もっと前から人気のリゾートだったと思う」

フエイトママは幼い頃テレビで見たのだという。

「それにしても、こんな形で海に来ることになるとは思わなかったなあ……」

「ヴィヴィオ、家族で海に行きたいって言ってたもんね」

「そうだったの？」

「うん、フエイトちゃんと相談してから決めようって話してたんだけど——」

予想外の形で願いが叶ってしまった。

ただ一つ、問題なのは、

「ママたちに群がる男性が多いっ！」

気持ちはわかるけど。

「大丈夫、大丈夫、ヴィヴィオにも需要あるんだから」

「それ何の需要っ!? あんまりよろしくない需要だよねええ！」

はあ、わたしも大人モードになろっかな」

「それは止めた方が……」

「どうして？」

フエイトママが答えてくれる。

「今でさえヴィヴィオが——子供がいてくれるから——一定の歯止めになっているのに、ここでヴィヴィオまで大人になったりしたら……」

「あゝ」

とんでもない人だからができる。

なのは完売どころの騒ぎではない。

「まあ、いざとなつたらフェイトちゃんを置き去りするという手も……」

「ちよ、なのはああ!?!」

「うゝん、なのはママだつて十分人気だと思っただけだなあゝ」

最後は2人して飛んで逃げそうだ。

3

地図に記されたポイントを掘り返すと、そこには小箱が隠されていた。中には新たなポイントを指し示す地図が入っており……そんな、宝探しゲームのようなことを繰り返してはや半日。

途中、海の家リ——何とかとかいう怪しい店でラーメンや焼きそばを食べていると、どこかで見たようなオレンジ髪の少女が元気いっぱい働いていたのだけどスルー。

わたしは何も見なかった。

見なかったことにする。

気のせいだろう。

再び、宝探しを再開する。

「たぶん、この洞窟がラストっぽいね！」

わたしが地図を見ながら指差すと、フェイトママが「うん」と唸った。

「どうしたの、フェイトちゃん？」

「うん、これってどう考えても宝探しゲームでしょ？」

シスト——なんて呼ばれることもある、地図に書かれたヒントを頼りに、隠された宝物を見つけ出すゲームだ。

「だから、私の——アリシアの記憶にあるかと思っただけど」

「ないんだ？」

「うん」

そうになると、ますます庭園でもらった地図の謎が深まるのだけど……。

「クリス、ライト——」

ウサギ型デバイスの両目がピカリと光り、洞窟内を照らし出す。

「え、何そのムダ機能？」

「新しくつけてみました。懐中電灯として使う以外に、空を飛んでスポットライト代わりにになるとか、怪談話をする時は、顔を下から照らしてくれたり、色々役立つんだよ？」

「ちよつと便利に思えて——いたっ!」

フェイトママが天井からぶら下がっていた鍾乳石に頭をぶつける。

優れた魔導師であるフェイトママは、常にフィールドをまとっているの、直接的なケガにはつながらないけど、

「ううっ、天井が低い……」

「あはは、こういう狭いところに来ると、ユーノ君、スクライア一族がフェレットモードになる気持ちかわかる——ををを!」

突然、小さな地震のような揺れが起きたかと思うと、

——ガガンツ!

音を立てて床が陥没した。

足下の感覚が消え、3人仲良く落下する。

「まさか、プレシアさんの罠っ!?!」

「なのは、たぶん、違う〜」

「あわわ、クリス、浮遊制御おおうっ!」

15メートルは潜っただろうか。

無傷とはいえ、フェイトママは腰を打ちつけたらしく、

「あいたたたた……なのは、ヴィヴィオ、上に戻ろうか?」

水着姿で腰をさする仕草は、滑稽ではあるけれど色っぽい。

「ちよつと待つてフェイトちゃん、この道、奥まで続いているかも……」

「アリシアさんの思し召しだね」

「そ、そうなのかな……?」

「まあまあ、どうせこの洞窟でラストなんだから、少しくらい寄り道したって平気だよ」
「渋るフェイトママを説得し、わたしとなのはママは洞窟の奥へ進んでいく——が、それが全ての間違いのもだったのだ。」

4

「「「によわああ~~~~~~~~つっつ!!」」」

人工物ではない。

自然が生み出した超ロングのウォータースライダー。

「コウモリ、コウモリっ!!」

「次、カーブ、カーブっ!!」

「ひいい、鍾乳石が顔かすめたアア!？」

●

「岩来た、岩ッ！」

「通路いつぱいのやつが転がってくるうう!？」

「インディ・ジョーンズじゃないんだからあゝゝっ!!?」

●

「な、なんで、こんなところに海賊船？」

「地底湖からと思っただけど、海に通じてるのかも……」

「いつの時代の船かな？」

「見て、眼帯をつけた骸骨が！」

「金貨の山ああ!？」

「聖王教会に寄付、寄付、寄付うう!!」

「大ダコ来たアア！」

「う、え、ちよ、どうして私ばかりいい〜っ!？」

「流石、触手先生わかってるう〜っ!」

「なのはママ、メラゾーマを！」

「合点承知っ! フェイトちゃん今助けるからね、食らえっ——カイザーフェニックスっ!!」

「それメラゾーマじゃないよ!？」

「ミッドチルダの魔法でもないからあ〜」

5

「そんな大冒険の末、ヘロヘロになったわたしたち家族は、
「や、やっともとの場所に帰ってきた……」

いつの間にか日は傾き、遠くから夕暮れを告げる聖王教会の鐘の音が聞こえる。

あの洞窟も、結局、奥は外へとつながっており、

「ここって、私たちが泊まつてるホテルの裏手なんじゃ……」

岩場の向こうに、ホテルの白い外壁が見える。

意気消沈するわたしとなのはママ。

「ほ、ほら2人とも、とにかくここを掘ればいいんだよね？　ここ掘れわんわんっ！」

フェイトママの「わんわん」に癒されたわたしとなのはママは、ヒントを頼りに、最後の力を振り絞って砂をかき分けた。

すると、これまでより大きな——といってもオルゴールくらいだけど——古い宝箱が現れる。

もちろん罨などない。

「開くよっ……」

中には、まず一番上に、二つ折りになった紙が1枚。

そこには幼い子供の文字で、

『こもつとへ』

とだけ書かれていた。

続けて、

「フェイトちゃん、この写真……」

若い頃のプレシアさんと、幼いフェイトママ——ではない、アリシアさんと、猫——
リニスさんの2人と1匹が写っている。

それが10枚ほど入っていた。

「みんな、楽しそうだね」

猫のリニスさんはよくわからないけど、きつと、喜んでいるのだろう。

「まだ何か入ってるよ?」

それは色とりどりの貝殻。

中でも、ひと際大きいのは、あまり見たことがない爽やかなミントブルーの貝殻。
子供なら、間違いなく宝物にするだろう。

「これ、アリシアさんのリボンの色に似てるね」

夢で見たのと同じ。

フェイトママが呟く。

「そっか……きつと、これ、アリシアが妹が欲しいって母さんに話したあと……」

たまの休みで、母さんがアリシアを喜ばせようと、2人でこのリゾート地に遊びに来
て……。

たぶん、アリシアは自分の楽しかった思い出を、妹にも分けてあげたいと思って宝箱に詰めて……。

いつか、私と一緒に宝探しゲームをしようと思っただ……」

「フェイトちゃんの記憶になかったのは、アリシアという名前を思い出すキツカケにならないよう、消されてたからなんだね——」

アリシアさんが妹を欲しがった時の思い出と共に。

「あ……フェイトママ、まだ何か入ってるよ？」

わたしはお札くらいの紙切れを取り出し、フェイトママに手渡した。

「メモ書き？」

「ううん、違うみたい……」

それはアリシアさんの文字ではない。

もつと大人の、整った文字で、

『お母さんとお姉ちゃんが何でも言うことを聞く券』

——何でも!?

なんて言える雰囲気じゃない。

きっとプレシアさんのことだ。

当時、子供だったアリシアさんに『ママも宝箱に宝物を入れて!』と頼まれたけれど、突然のことに思いつかず、かつ、たいした物も持ち歩いておらず、仕方なく、こんな券を書き、入れたのだろう。

夢で散々会話したおかげで、プレシアさんの困り顔が目には浮かぶようだ。

「ねえ、なのは……もし、昔これを持っていたら、もっと、仲良くできたのかな……?」

——母さんと。

そんなフェイトママの肩を、なのはママが優しく抱き寄せた。

テスタロツサ家族会議

壁も天井もない。何だかわけがわからない空間に、ちやぶ台と座布団が4枚。

そこへ、金の閃光ママがやってくる。

「はあ……フェイト、本当に来たのね、あなた」

「か、母さん……っ？　な、ナニコレ、ちよう気まずいんだけど、ヴィヴィオ、ヴィヴィオ一体どうなって……って、倒れたヴィヴィオがビリビリ痺れてるうう……っつ！！？」

「ご、ごめんなさい、フェイトママ……アロシアさんと一緒に、プロシアお婆ちゃんを誘って『なぜなにナデシコ』風に解説しようと試みたんだけど……だが断るみたいな感じでサンダーレイジを食らって……」

「って、うわあ……あつちでアロシアもビリビリしてるうう……っつ！！？」

「フェイト……お姉ちゃんもう疲れたよ……ゴールしてもいいよね……」

「うわあ……こつちはこつちで色々台詞が混ざってるウウ……っつ！！？」

「はあ……いつまでもこんな楽屋空間にいられないわ。フェイト、さっさと説明して終わるわよ」

「え、母さんと2人きりですか？」

「そうよ」

「……は、はわわわわ、あ、アリシア、ヴィヴィオ……早く起きてええ——つつ?!」
そんなわけで本日は緊急企画として『お盆だよフェイトママ 前編 後編』と『宝探しなのっ!』のちよつとした解説を試してみようかなと思います。



ちやぶ台を挟んで、何とも気まずそうなフェイトママと、不機嫌そうなプレシアお婆ちゃんが対面している。

「えっと、たぶん読んでいる人はみんな不思議に感じたと思うんだけど、どうして虚数空間に消えた母さんとアリシアが生きてるのかなって」

「フェイト、あなたそんなこともわからないで管理局の執務官をやっているの？ まったく、これだからあなたは……」

「母さん……」

「アリシアなら……アリシアなら……」

プレシアお婆ちゃんは眉間にシワを寄せると、何ともコメントし難い表情で顔を引き

つらせた。

『『そんなのわからなくても生きてけるもんっ！』とか言い出しそうね……』

「あゝ、はは……」

●

わたしはそんな母娘2人の様子を横目にコロコロ転がると、アリシアさんの足裏を突っついた。

どうにか念話を送る。

『あ、アリシアさ〜ん、言われてますよ〜』

『くう〜〜〜っ！ 魔力量Eクラスをなめんなあ〜〜っ!!』

『あゝ』

そんなノリだった。



プレシアお婆ちゃんはコホンと咳をすると仕切り直す。

「まあいいわ。あなたたちにもわかるように説明すると、今の私の状況は『無印』や『The MOVIE 1st』のあと。」

崩壊した“時の庭園”と共に次元震に巻きこまれ——最後の賭けに勝ったんでしょうね——ジュエルシードに願った通り、アルハザードに辿り着き、無事アリシアを蘇らせることができた——といったところね」

「……」

「聞いているのかしら、フェイト？」

「あ、ゴメンナサイ母さん……その、昔は、生きているなら必ずもう一度私に会いに来てくれるはずって、心のどこかで信じていて……だけど、それもなくて……だから、母さんはあのまま亡くなったんだと……そう、思っ……」

「別にいいわ。結局のところ帰りたくても帰れなかったのだから——」



『ミッドに帰ったらタイーホだから？』

『それもあるけど、アルハザードの魔法技術にヒヤッハーして——』

「そこうるさい。技術的に帰れないだけよ。それに私は、フェイト、あなたの世界の私やアリシアが生きている——とは一言も言っていないわよ」

「へ？」

フェイトママが目を丸くする。

「そうね、あなたが住んでいた地球の日本で例えるなら、源義経や豊臣秀頼は死なずに生き延びたという説が——」

『みな……みな……みなもと……しずか、ああ、しずかちゃんっ！』
『うん、アリシアさん惜しいっ！』

「惜しくない。ダメね、そこに転がっている2人にもわかるように説明すると、逆シヤア

で——」

「逆シヤア……母さんが逆シヤア……」

「最後、アムロとシヤアは生死不明となっているでしょ」

「う、うん……」

「他にも、最近『復活』とか言っているようだけど、ルルーシユも最後は生死不明だったでしょ」

「コードギアスう〜」

「どちらの作品も、生きているのか死んでいるのかハッキリしない。決定的な証拠がないから議論になる。」

逆に考えると、生きていようが死んでいようが構わない。

それくらいに差でしかない。

よく例えとして使われるシュレディンガーの猫もそうね。

つまり、私とアリシアも、次元断層に落下したまま死んだ世界と、アルハザードに辿り着いた世界が存在している——それだけのことよ」

「それってただのIFなんじゃ……?」

「そうね。でも考えてもみなさい。『GOD』のサウンドステージで、未来に存在する惑星エルトリアに『The MOVIE 2nd Act』のあなたたちが訪れたことが

あつたでしょ」

「……うん」

「あの事件は、小規模な次元震とレヴィとか言うあなたのパチもんが——」

「パチもん……」

「遺跡で拾ってきた古代文明の遺物が原因だったわけだけど——」

フェイトママがポンと手を叩いた。

「あつ、つまり次元震は、時間すら越えて平行世界をつなげることがあると？」

「……ええ、そういうことよ」

すると、プレシアお婆ちゃんはハツとした表情でフェイトママを見やった。

「あの、母さん？」

「……なんでもないわ」



『あらやだ、この子ちゃんと私の言ってること理解しているわ——みたいな？』

『そもそも、私が生き返った時点でフェイトを突き放す理由も消失したしね』

『冷静に考えれば、フェイトママほど理想の娘もいないですしねえ』

『悔しいけど優秀だし、私じゃちよつとママの話についていけないところがあるし……』

『デレましたか?』

『デレましたね』



「まだよ」

「あゝ、はは……あ、そうだ。母さんとアリシアが生存している平行世界がある——というのには理解したけど、どうして私たちの世界とつながったのかな?」

「……おそらくはあのサブ駆動炉ね。本来の所有者である私やメイン駆動炉との同期を求めた結果——古代遺跡でレヴィの拾った遺物に相当するアイテムになったのでしようね。」

ただし、小規模でも次元震を発生させるくらいエネルギーが必要だったと考えると、きつかけ……鍵となったのはその子でしょうね」

「ヴィヴィオ?」

「ええ。その子、スカリエッティがプロジェクトFの技術で生み出した聖王の複製体なのでしょ?」

「……うん。私やエリオと同じ」

正確には、人造魔導師計画の技術も使われているらしい。

「そう、同じ、なのよ。あなた地球で『ジュラ●ックパーク』って映画を見たことあるかしら？」

「ああ、うん……」

またか。

「あの作品では、恐竜の遺伝子の欠損部位をカエルなど別の生物で補っていたけれど、フェイト、あなたは古代ベルカ時代に生きた聖王の遺伝子が、まったくの欠損もなしに手に入ったと本当に思う？」

「それは……」

「それとね、フェイト。スカリエッティは、人造魔導師計画や戦闘機人計画へ自分の研究をシフトさせたから、プロジェクトFは未完成だったのよ。」

つまり、ヴィヴィオの誕生には、私が完成させたプロジェクトFの研究成果がフィードバックされていたはず。

さて、カエルは誰だったでしょう——というお話なのだけれど」

「それは……」

もし、ゆりかごの聖王のように、個人が莫大な魔力を保有しているわけではなく、媒

体からのエネルギー供給を受けることでそれを自身の魔力として運用できる、魔導師ランク〃条件付きSS〃というレアな遺伝子情報が残っていたとしたら。

「……母さん」

「もちろん使われていないかもしれない。一方で、使われていないことも証明できないのよ」

●

『ナニソレっ!? テスタロッサ三姉妹爆誕ってことおお——っ!!?』

『フェイトママが王様で、わたしがシユテルで、アリシアさんがレヴィみたいな……』

『いやいやいや、レヴィはヴィヴィオに譲るよ?』

『いやいやいやいや、レヴィはアリシアさんが〜』

●

「——だとしても、今回の事件はちよつとご都合主義だと思うけど」

「そうね、その件に関しては私も否定する気はないわ。けどね、フェイト、覚えておきな

さい。あなたが高町なのはに出会った奇跡を思えば、他の全ての出来事はたいした偶然ではないのよ。この出会いさえもね」

「母さん……」

フェイトママが一枚の紙切れを懐から取り出す。

「こんな『お母さんとお姉ちゃんが何でも言うことを聞く券』なんていらなかったね」
『宝探しのっ!』で手に入れた重要アイテムだ。

「……サンダースファイア」

紙切れに向かって紫色の魔力球が飛んでいく。

「うわわ! デイフェンサー! デイフェンサー! 母さん何するの!?!」

「その券は若気の至り。この場で始末させてもらおうわ」

「いくら母さんでも、試験中とはいえ第5世代デバイスのバルディッシュと私のコンビには勝てないから!」

「フッフッフ、言うわねフェイト。死者を蘇らせることさえ可能なアルハザードの技術で病気が完治。防御面の不安がなくなったこの私に勝てるとても——」

互いに睨み合い、

「サンダーレイジっ！」

無詠唱の雷撃魔法が互いを拘束し、頭上から雷が襲いかかる。

「はあ〜」

どっこいせと起こした無敵のちやぶ台シールドを背に、わたしとアリシアさんは溜め息を吐いた。

「せっかくいい雰囲気になってたのに、母娘対決だなんて〜」

「そういうヴィヴィオも、最近『Vivid』で自分のママと戦ってなかったっけ？」

「……母親というのは娘にとって、いつか乗り越えなければならぬ壁なんだよ、うん」

「まあ、そういうことにしとこっか？」

じゃ、最後に『宝探しのっ！』のオマケ情報〜」

「オマケ情報？」

「そう。実はラストで宝箱に入っていた写真にはモデルがありました。

まずは『リニス 水着』で画像検索してみてくれるかな？」
「はい」

「そうすると2段目くらいかな。青空の下砂浜に、左からリニス、私、フェイト（子供時代）、アルフ（子犬）、んで後ろにママが並んで写ってるイラストがあるでしょ」

「はいはいありました。横に長いタイプで写真みたいなイラストですよね？」

「そうそう、それ。そのリニス（人型）を消して、アルフをリニス（山猫）と入れ替えるとあら不思議——私が夢見た未来。」

もし私が魔導炉事故で死ななかつたら、きっとそんな世界もあつたんだろうなって「アリシアさん……」

——ズドオオオオオンっ!!

背中越しにちやぶ台の震えが伝わってくる。

「うわ……」

「そろそろ決着ついたかな」

見ると、フェイトママが、戦技披露会でシグナムさんと戦ったあとのなのはママみたく目に目を回していた。

プレシアお婆ちゃんも黒髪がワカメみたいになっている。

「フェイトママ生きてる〜?」

「はう〜、病気に侵されていない母さんがこんなに強かったなんて〜」

「ほらママ、いい歳なんだから無理しないの〜」

「はあ、はあ、フェイト…… “母親” に勝とうだなんて100年早いによっ!」

母親、ね……。

わたしとアリシアさんは目を合わすと小さく吹き出して、このヘンテコな楽屋空間に感謝を捧げるのだった。

激闘！ ストラトス四天王

夏休みが終わってすぐのこと。

わたしは「うくん、うくん」唸りながら、ジムの床に寝そべっていた。

「どうされたんです、ヴィヴィさん？」

「あ、フーカさん！ 実はですねえ、夏休みの宿題が一つだけ終わってなくて……」

「珍しいですね。ヴィヴィさんなら、すぐに終わらせるかと。それで、どがーな宿題ですか？」

「夏休みの日記です」

「絵日記ですか？」

「違いますよおお！ 普通の日記ですつ！」

初等科でも、低学年は絵日記、高学年はノーマルな日記になる。

もちろん、日記に絵をつけて悪いわけではないけれど、毎日描くのは大変なのだ。

「あたしのはイラスト入りだけだねっ！」

「リオのはパラパラ漫画でしょおお!? しかも、ちびリオがゴライアスの首をザクツと

飛ばすやつうう!!」

「ひどい!？」

聞いていたコロナが涙目でしやがみこんだ。

「でも、ヴィヴィオさんが宿題を終わらせていない——というのは、確かに珍しいですよ
ね?」

ミウラさんが蹴りを止めて話しに加わってくる。

「はい。夏休み中って、午前中はジムでトレーニング、午後はみんなで遊ぶか、家で宿題
——と、毎日学校に通ってる並のスケジュールだったので、何だか日記がつまらない
なあ〜と思いますよ」

「そんな日記にサービス精神出さなくても……」

「そうだよ、ヴィヴィオちゃん」

「ユミナさん!」

「アインハルトさんの初等科の頃の日記なんて『コピペか!』って職員室で騒がれたくら
いなんだから」

「規則正しすぎるっ!？」

「っていうか見てみたい……」。

「いーなー、ユミナさん読んだことあるんだあ〜」

「そこは回収する委員長の特権で」

「勝手に見たら犯罪ですよねっ!？」

「まあまあ、アインハルトさんの日記が目の前に置かれてたら……陛下だって見ますよね?」

「……はい」

途端に笑顔になると、2人でパーンとハイタッチ。

「2人とも、ハルさんがいのーて本当によかったです……。こがあなん聞かせらりやあせん」

「まあまあ、フーちゃん。私だってチャンピオンの日記があつたら、ちよつと読んでみたいもん」

「リンネまで……」

「仕方ないなあ〜」

と、リオがわたしの日記を取り上げる。

「このあたしが……ヴィヴィオの友達……いやいや、大親友にして、次元世界ルーフェン出身で春光拳の師範レイ・タンドラの孫娘、リオ・ウエズリーがああ〜」

「最近出番が少なかったからって何度も言い直さなくていいから!」

「日記のネタを提供してあげよう——」

○月×日 晴れ

夏休みということもあり、

『実家に帰らせていただききます』

と、夫婦ゲンカみたいな台詞を言い放った中等科のアインハルト・ストラトス先輩に誘われて、わたしは覇王家の本家にお邪魔しました――。

「ちよー、ナニコレエエ!? どーすんのこれええ!」

いや、まあ、アリといえればアリなんだけどおお!!?」

「「アリなんだっ?!」」

リオが言う。

「続きなんだけど、フーカさん、夏休みに霸王流一門の集まりとかありましたよね？」
「そがーなことは特になかったかと……」

「ありがとうございました!!」

「ううっ……わかりました……」

リオの無茶振りを受け、フーカさんがわたしの日記の続きを書く。

わたしがハルさん……じゃなかった霸王家の本家に到着すると、アインハルトさんのお兄さんが2人、お姉さんが2人、出迎えてくれました。

『我ら、ストラトス四天王っ!!』

「なんかスゴイの来たアア——っ!?!」

いくらわたしでも想定外の展開。

「マズかったんじやろーか？」

「いえいえ、これもアリといえればアリなんです……」

「「やっぱりアリなんだっつ!!?」」

すると、リンネさんがポンと手を叩いた。

「あ、この展開……昔、院の本で読んだアレだよね？」

わたしの日記がフーカさんの手からリンネさんの手にバトンタッチされる。

『アインハルトの身柄は預かった。再びアインハルトと会いたければ、五重の塔の各階で待ちける我ら四天王を倒し、最上階に囚われたアインハルトを救ってみせよ!』

「それどこのバトルマンガああ!?!」

奴は四天王でも最弱——とか言って戦いが続くのだろうか。

「バトルシーンだけで日記が1か月埋まりそうなんだけど……」

リオが軽い調子で言う。

「大丈夫、大丈夫、バ●タードなんて2人の敵と10年以上戦ってたから——」

「うん、わたしもアレは長すぎたと思うけどねええ——っ！」

方舟編まではあんなにテンポよかったのにいい！
すると、

——パンパン！

と、手を叩く音。

ユミナさんだ。

「みんな格闘選手だから戦いたいって気持ちはわかるけど、解決方法は一つじゃないんだよ？」

わたしの日記はリンネさんからユミナさんへ。



わたしはアインハルトさんを救うため、魔法で空を飛び、直接、五重の塔の最上階を目指しました――。

「まさかのスルー来たアア!!」

たった2行で解決しちゃったんですけどおお!?

ていうか、今度は短すぎるっ!

「ミウラさん、どうにかしてください!」

「ええっ、ぼ、ボクですかああ!?

ま、まあ、ボクもこういう展開は嫌いじゃないですし……」

何だか、妙にやる気なのが逆に心配である……。

最上階には、椅子に座った格好でロープに縛られたアインハルトさんがいました。

『大丈夫でしたか、アインハルトさん。助けに来ましたよ!』

ところが、わたしがロープを解いた途端、今度は、アインハルトさんが襲いかかってきたのです。

『ヴィヴィオさん、残念でしたね。実は、私こそが四天王最後の刺客!』



「ちよつと待ったアア! 1人多い、1人。もう四天王じゃないですよね!」
「気にしたら負けですよ!」

そういえばミウラさんの文系の成績って……。

あの八神一家がバツクについて赤点ギリギリだったという……。

それはそれで難しいと思うんだけどなあ……。

「安心してください。こんなこともあろうかと、私が伏線を張っておきましたから!」
「ええっ!?!」

リンネさんが書いた行を読み返すと、

『五重の塔の各階で待ちける我ら四天王を倒し——』

「ホントだ、五重の塔の各階ってことは、5人必要だああ!？」

「「流石リンネさんっ!」」

さすりんである。

とはいえ、

「このあとどうしたら……」

「大丈夫だよ、ヴィヴィオ」

「コロナ……」

「ヴィヴィオとは、1年のころから大の仲良しだった私がどうにかしてみせるから——」
何気にコロナも自分アピールしているなあ。

● ●
死闘の末、どうにかアインハルトさんを倒すと、

『実は私はあなたのお母さん——』

「いやいやいや、流石にそれは……」

「あれ？ ダメ？ じゃあ——」

コロナは消しゴムで文字を消すと、改めて書き始める。

●

死闘の末、どうにかアインハルトさんを倒すと、

『実は私は（そっくりに見えるけど）アインハルトのお母さん——』

●

「ナイスパスいただきましたああ——っ！」

「「あく、そつちはいいんだあ」」

わたしは意気揚々と日記に最後の一文をつけ加える。

事態を知り、急ぎ駆けつけた本物のアインハルトさんと、娘そっくりなアインハルトさんママ。

「——わたしは両手にアインハルトさんで満足しました。おしまい」

「よかったね、ヴィヴィオ……」

「どうして泣いてるのコロナ!？」

「まあ、ヴィヴィオさんらしいというか」

「うん、うん、確かに」

「ヴィヴィイさんらしい結末じゃのう」

「あゝ、そーいうのでいいんだあゝ」

すると、

「みなさん、今日はお早いですね——」

満を持して、アインハルトさんがジムに登場する。

わたしたちは試合直後のように駆け寄ると、

「アインハルトさん、お疲れ様でしたー」

「お疲れ様です、アインハルトさん」

「お疲れ様でーす！」

「お疲れ様でした！」

「お疲れ！」

「えっとハルさん、みなさん悪気があったわけじゃあのないよ」

「チャンピオンも大変ですね」

「え、ちょ、一体何があったんですかあああ~~~~っ!!?」

「よかつたら参考にしてくださいね、みんなの合作です！」

わたしが日記帳を手渡すと、アインハルトさんはページをパラパラめくりしばらく読んで、

「……アリですネ」

「「「「「アリなんだっ!!」「」「」」」」」

「……私の日記にも書いておきましょう」

「「「「「書くんだった!!」「」「」」」」」

「あ、でも、アインハルトさん、中等科って日記の宿題ないんじや」

「!？」

そろそろいいよね？ Reflection

「オッス！ オラ高町ヴィヴィオ。

——というわけで今回は、というかついに劇場アニメ第3弾『魔法少女リリカルなのは』『Reflection』について、語っていききたいと思います。

え、まだ見ていない？

諦めてください。

これ以上間が空くと、内容を忘れてしまいそうなので。今日やつちやいます！

高町家リビングに集まった基本メンバーはこちら。

『GOD』アミタさん&『GOD』キリエさん——」

「今日はよろしく願いますっ！」

「よろしくねん♪」

「——そこにわたしを加えた3人。

あと、なのはママやフェイトママを始め、今日集まらないみなさんとは、随時通信でつなげていきたいと思います。

はやてさん、王様く聞こえていますか？」

『おっけーやで〜』

『どうして我が小鴉と一緒にたに扱われねばならんの——』

「は〜い、大丈夫みたいですな〜」

『こら、高町ヴィヴィオ、無視す——』

「そんなわけで早速ですがキリエさん」

「はい?」

「まさか、子供時代のなのはママの顔面をグーパーで——ドグシツ! とやるなんて……やっちゃいましたね〜?」

「あく、アレは、ほら、私であつて私じゃないわけで……あああ〜、もうう〜、ごめんなさいっ! ほら、お姉ちゃんも謝つて!」

「どうして私まで!?! だいたい私だつてキリエにヴァリアントザッパーで撃たれたりとか、お姉ちゃん大嫌いと言われたとか、大嫌いと言われたとか、大嫌い……」

「撃たれたことより、大嫌いと言われたことの方がショックだったんですね〜」

「もう、キリエなんて知りませんっ!」

「だから『Reflection』の私は私じゃないって言ってるでしょお——っ!」
「あく、まだやってるし……ちようどいいのでキリエさん『GOD』と『Reflection』の違いから説明してもらえませんか?」

「あく、うん……えっと、お姉ちゃん、私の代わりにやる?」

「……わかりました」

「わかるんだ……」

「このアミティエ・フローリアン、頼られたら気合いと根性と——」

「お姉ちゃんパワーと」

「脳筋で」

「頑張りますっ! ……何か今、色々つけ加えられた気がするんですが?」

「気のせいです」

「気のせいよん」

「まあいいでしょう。」

『GOD』の私とキリエは未来からやってきているのでよくわかるのですが、この世界には現在、大きく分けて3つのパラレルワールドが存在します。

★Aルート（基本ルート）

『無印』 ↓ 『A, s』 ↓ 『Strikers』 ↓ 『Vivid』 ↓ 『Force』

※TVアニメから続く基本ルート。

※劇場版は、なのはさんたちの子供の頃を描いた劇中劇という扱い。

★Bルート (IFルート)

『無印』 ↓ 『A, s』 ↓ 『BOA』 (ゲーム) ↓ 『GOD』 (ゲーム) ↓ 『Strikers』 ↓ 『Vivid』 ↓ 『Force』

※『A, s』のラストで初代リインフォースさんがすぐには滅びず、しばらく生きていた世界。他はAルートと変わらない。

※劇場版は、なのはさんたちの子供の頃を描いた劇中劇という扱い。

★Cルート (劇場版ルート)

『The MOVIE 1st』 ↓ 『The MOVIE 2nd A, s』 ↓ 『Reflection』

※映画の出来事が実際に起きている世界。

つまり、今ここにいる私とキリエはBルートの存在。

なのでCルート、劇場版の私たちと外見は似ていても別人なわけです。

ちなみに、Bルート、ゲーム版の私たちは人工生命体 (ギアーズ) で、Cルート、劇

場版ではナノマシンで強化された人間でした。

あと、私たちは時間遡行システムを使い未来からやってきていますが、Cルートはみなさんと同一時間帯の存在のようですね。単純に異世界にある惑星エルトリアからの来訪者と考えた方が良さそうです」

「そこまでわかっていて、どうしてお姉ちゃんはむくれるのよ？」

「理屈ではわかっていても、感情が抑え切れないんですよおお！」

『あゝ』

「はい、オレンジの人！」

『ミウラですよっ!? Bルートでは今回の映画が『GOD』の事件を元にして作られた——というのわかるんですが、Aルートではどうやって映画を作ったんでしょうか？

事件そのものが起きてないわけだから、アマタさんやキリエさんの存在を知らないんですよね?』

『それについては私が説明しましょう!』

「ああつ! 『Reflection』で実は一番活躍したんじゃないかと評判のシャマル “大” 先生つ!!」

『はい、シャマル大先生ですよ!』

『いつの間に “大” が……』

『まあ、あたしとシグナムは新兵器を持ち出した割にはなあ〜』

『シャマルはたった一撃で戦況をひっくり返したからな』

『私なんて前半 “かませ” やったし……』

『あの、ボクの質問の答えなんですが……』

「シャマル大先生、どこぞのイネスさんばりに説明よろしくお願いしまーす」

『はい。そもそも、今回の映画は公開前から、『A's』から『StrikerS』までの空白期間を描く——と言われていたの。』

『となると、Aルートの世界でも『A's』から『StrikerS』の間に『GOD』や『Reflection』のような事件が起きていた——と考えれば矛盾しないでしょう。』

『なるほど!』

『あの、私も1つよろしいでしょうか?』

「はい、パンフレットに載ってた藤真先生のマンガでエッチな格好してたリンネさん、どうぞー!」

『それ関係ないですよね!』

えっと、映画でなのはさんたちが使っていた新装備って、現在カレドヴルフ社で開発されている最新の武装端末ですよね?』

「流石リンネさんよくご存じで。あれは『魔法戦記リリカルなのはForce』に登場する未来の兵器ですね。前作からそうだったんですが、劇場版の世界では、デバイスや魔力駆動の兵器レベルが10年くらい進んでいるみたいなんですよ」

『み、未来……ですか。そういった新装備やなのはさんのパワーアップなしで、Aルートのみなさんは、あれほどの強敵にどうやって勝利したんでしょうか?』

「あく、そこんとこどうだったと思う、なのはママ?」

『え、私? うくん、たぶんそこは気合いと根性で——』

「ですよねっ!」

「アミタさんと変わらないよっ!」

「ていうか私たち——ブルートと同じ要領で勝ったんじゃないの?」

「そっか。Aルートにはリーゼさんたちもいますしね、新装備がない分は、知識や経験、戦力の多さでカバーしたと。最悪、首都防衛のゼストさんやクイントさん、メガーヌさんなんて人たちも現役で活躍している頃ですし……」

「気合いと根性ですよっ!」

「あくはは……でも、気合いと根性で頑張りすぎて、後になのはママの墜落の原因になったと考えると、意外と正解なのかもしれませぬね。」

では次に、誰もがツツコミたかった小ネタ2連発うう! ということで、まずはなのはママとフェイトママが模擬戦を行っていた練習空間。

客観的に見て、キリエさんはどう思いましたか?」

「そうねえ、あの観客席はヤバかったんじゃない?」

「ギャグアニメだったら、アリサさんとすずかさん、絶対爆発に巻き込まれてアフロでしたよね〜」

『ならないわよっ!』

『一回なつてなかったっけ?』

『なつてないから!』

『それで焦げて髪を切ったという……』

『ちっがーうっ!』

「次に、謎の『時空管理局・東京臨時支局』についてなんですが……クロノ提督?」

『いくら管理外世界でもあれだけ大事件が連続して起きた世界に支局がない——なんて、みんなも思わなかっただろ?』

「海鳴支局でよかったんじゃない?」

『……ノーコメントで』

『どーせクロノことだから、『東京』とつく方が知名度が高いとか、カッコイイとか、そんな理由だろ?』

『千葉の施設みたい……』

『わかりやすいからだよ! ユーノ、そういう君だって映画じゃちつとも背が伸びていなかったじゃないか』

『うつ……』

「そういえば、そのクロノ提督の身長に関してなんですが……アミタさん」

「私が『GOD』で出会った彼とは随分と印象が違いましたね。別人でしょうか?」

「確かに、成長期と一言で片づけられないほど、すっかり背が伸びてイケメンに成長しちゃったわよねえ」

「——ということですが、クロノ提督、真相やいかに?」

『……ノーコメントで』

『見栄を張って大人モードを使って……』

『ないから。君だって『StrikerS』ではグンと背が伸びていただろ!』

『そう言われると……』

「ひよつとしたら、以前『ミッドチルダ出身の魔導師って、10代半ばで急激に成長する特徴があるのかも』という仮説をなのはママが冗談で立てていましたが、結構当たっていたのかも。」

だとすれば、クロノ提督より若いユーノ司書長が、まだ全然成長していない理由にもなりますし……あく、でも、そうなるともうじきインハルトさんも成長してしまうことにはいい……っつ!!?」

『ちよ、その何が悪いんですかああ?!』

「まあ、ミウラさんは変わらないと思いますわが」

『ボクだって成長しますよおお!』

『それは……』

『ちよつと……』

『誰ですか今の発言……っ!!?』

「あ、成長といえれば王様の初登場シーンなんですけど——」

『ふむ、ついに我の話題が来たか』

『喜ばしいことです』

『僕はまだ〜?』

「あれでしょ、ヴィヴィオちゃん。お胸がぺったんすぎて“男の娘”かと思っただけみた
いな」

「さっすがキリエさん、よくわかってるう〜」

『な、な、何だとオオ——っ！ 貴様らそこに直れええ——っっ!!』

『まあまあ、落ち着いてくださいディアーチエ』

『そうだよ、王様。だってそれは王様のせいじゃなくて、元になった人間が悪いんですよ
?』

『……ふむ、小鶉のせいかな』

『……くっ、まさかこないな角度からデイスられるとは』

「安心してください、はやてさん。その直後の王様、シユテルさん、レヴィの3人で乳比べをしているシーンで——」

『乳比べなんぞしとらんわああ——っ!?!』

『あゝ、確かに王様、ちよいお胸が膨らんでたね』

『小鴉、貴様は見るなああ——っ!!』

『今更言われても』

「映画のパンフレットを持っている方は、問題の乳比ベシーンの画像が、上手い具合に50ページに載っているのです、よかったら確認してみてくださいね。

さて、乳比べついでに、みなさんお待ちかねの変身シーンなわけですが……キリエさん、見事なパンツでしたね〜」

「いやいや、他にもつと言うべきことがあるでしょ？　なのはちゃんとフェイトちゃんがクルクル回ってカッコ良かったね〜、とか」

「ううっ、妹のパンツが全世界に絶賛公開中かと思うと……」

「ヤメテエエ！　というか後編ではお姉ちゃんとはやてちゃんがパンツお披露目でしよおお——っ!!」

『あゝ、私はパスの方向で……』

『そう言ってはやてちゃん、『StrikerS』の時も変身シーンなかったよね?』

『後編では、わたしとなのはの分まで長時間変身するとかどう?』

『やめて〜』

「あ、ちょうどよかったフェイトママ」

『はい?』

「フェイトママとレヴィのバトルが長すぎる……って、キャラが言ってたよ?」

『言っていないからああ!? いきなりそんな話振らないでよおお!』

『あ、でも、僕はソニックフォームに変身してもいいかな、と思いました』

『エリオくん……』

「フェイトママのエッチな格好が見たいから?」

『エリオ……?』

『エリオくん……?』

『違いますよおお——っ!? ほら、フェイトさんの新型ソニックフォームVSレヴィさんのスプライトフォームで、もっと高速戦闘を見たかったなー、と思ひまして』

『あゝ、それいいねっ! 僕ももっとフェイトと遊びたかったああ——っ!!』

『いや、うぬはもう十分遊んだであろう。むしろ、我と小鴉の戦いをだな——』

「確かにちよつと短かったわよね〜」

「はやてさん負け試合でしたが、前半いっぱい戦ってましたからね、その分後半の王様とのバトルは——」

『貴様のせいだったか、小鴉うう——っ!』

『またとばつちりが〜』

『私とレヴィの機動外殻(ロボ)は、みなさんが苦戦するほど頑強でしたが、ディアーチエの鳥型機動外殻は、ハヤテに一発KOでしたからね』

『小鴉うう!』

『私のせいやないで〜』

「そういえば王様、あの大きな機動外殻、後編で3体合体して紫天ロボになる——って噂を聞いたんですが?」

『え、ホントなの王サマああ!』

『初耳ですが、デИАーチエ?』

『まあ、その辺りはイリス次第だな』

「イリスねえ〜」

「私たちのエルトリアにはいませんでしたからね」

「さて、イリスさんの話題も出たところで、そろそろラストクエスチョン」

『あたしはスーパーヒトシ君で!』

「うん、そういうんじゃないからね、リオ。結局のところ、イリスさんって何者なのかというお話なんですが……」

『日笠……』

「うん、それ中の人だから」

『マリアさ……』

「うん、確かに髪の色は似てるし、中の人一緒だけど運転手じゃないから」

『侵攻武装形態になると、急に胸を盛ったように……』

「うん、その話は禁止——」

「そういえば、イリスとユーリって昔からの知り合いっぽかったわよねえ」

『——と、言われましても』

『ユーリの友達じゃないの？』

『どうなんでしょうか？ アチラの世界のことはちよつと……。ただ、イリスさんがも』

ともとエルトリアで暮らしていた“人間”だったということとは』

『そうだな。古代ベルカ時代からずっと眠っていた『GOD』と違い、少なくとも1度、ユーリは惑星エルトリアで目覚め、イリスと出会っている——というわけだ』

『それも数十年前だそうですね』

『僕たちが封じられてた時間に比べれば、つい最近の話だよね』

『あー、ちようええかー?』

「はい、はやてさん」

『それやと、劇場版のヴィータたちがイリスやユーリのことをまったく知らない、会ったことがない——というのはおかしくないか?』

『だよな。夜天の書——いや、当時は闇の書になるのか。あいつがエルトリアに転生したことがある——までではないとして、新しい主を見つけたとしたら、当然守護騎士であるあたしらが先に目覚めてるはずだろ?』

『そうね。少しくらい記憶が欠けていたとしても、エルトリア、フォーミュラ、イリスさん、ユーリ、まったく覚えていない——なんてことはないと思うわ』

『アインスが存命なら、もっと詳しく話を聞いたのだが……』

『ふむ、そういうことなら、映画の特典映像で我らが聞いておくべきだったか』

「あゝ、この世界みたいなノリでしたしね」

『——んゝ、そんなの簡単じゃん！』

「レヴィイ？」

『アレでしょ？ 単純に夜天の書が起動してなかったってこと。起動前の状態でアクセスして、ユーリと友達になって、なんかしくじってアフロになった！』

『いや、アフロかどうかは別として、エルトリアを救うためユーリの力を利用しようとした結果、逆に永遠結晶を暴走させた可能性はあるか……それで術者が亡くなってしまう、再び転生したのかもしれない』

『レヴィイ、今日は冴えていますね。花丸です』

『やったゝ、シユテるんにほつめられたゝっ！』

「つまり、それで家族を殺されて復讐を誓ったってことよね」

「ええ、ただユーリが意図的にやったのではなく、暴走状態であつたと考えると……」

「強引にアクセスしたイリスさんサイドにも落ち度があつたのかも……」

「まあ、そういうのは認めたくないだろうし……」

「おそらく、最初は上手くユーリとコミュニケーションが取れていたんでしようね。イリスとユーリの仲が良好だつたからこそ、裏切られたと思つた時の憎しみが倍增した……」

「人は何かに気持ちを囚われてしまうと、周りのことが見えなくなりますからね」

『あゝ』

『はい』

『ですね……』

「フェイトママ、アインハルトさん、リンネさん……あ、そーいえば、キリエさんもですよね?」

「ぐふっ……。そ、そんなこと言い出したらここにいるみんなだいたいそうよねっ!? さっきのレヴィよりアホそうな子以外は!」

『ほらほら、リオ、言われてるよ?』

『え、あたし? つてこう見えてあたしは学校の成績はいい方で、むしろ赤点ギリギリな人がそこにいい!』

『ちよ、ボクのことですかああ!?!』

「ほらほら、みんなケンカしないの」

『ヴィヴィオだつて昔はラスボスだつたよねっ!?!』

「わたしの黒歴史を掘り起こそうとする輩は、例え親友であつても今度の試合でフルボッコにいい!」

『うぬらが暴走してどうする……。』

そんなことよりも、まだイリスの正体が判然としたわけではないのだぞ?』

「えっと、どーいうことですか王様?」

『考えてもみよ。イリスはかつて自分が人間だったと語りおった。しかし、普通の人間があんな肉体を再構築したり、ロボを自由自在に操ったりできると思うか?』

「コロナ?」

『ロボくらいなら……』

『……ええい、普通はできんだ! いいか? そもそもイリスは“人工知能”や“人間”でなく、我らや守護騎士たちと同じシステムの存在かもしれん。

いや、それどころか、ユーリに近い存在かもしれん。ユーリは人として生まれたわけだからな。

だとすれば、イリスが己のことを“人間”だと言う根拠にもなる。

その場合、我らが知らぬだけで、ユーリとは姉妹、同じ古代ベルカの出身で、そもそも同一の存在だった可能性もある。コチラでの我らのようにの』

「……ユーリが人として生まれたとか、途中さらつと重要なことを言われたような」

『気にするでない。映画の我ら3人も“魂”が具現化した存在であるしな。その辺りが

劇場版でどうなるかは不明瞭だ。

いつそのこと古代ベルカはまったく関係なく、映画のユーリとイリスはエルトリアで闇の書を制御するために作られた存在——という可能性もあるのだぞ？

何にせよ、イリスの本体がエルトリアの遺跡板だと仮定した場合、例えば海鳴で倒したとしても逃げるのは容易。後編——最終決戦は惑星エルトリアで行われるであろう。

そして、ラストでイリスは——』

「イリスは？」

『ふむ、まあ、この先はネタバレになるかもしれないから、各々で考えるがよい。だいたいわかるであろう？ ヒントは「ユーリとイリスの間に誤解がある」そして「これまでリリカルなのはで一般人を傷つけた者たちがラストでどうなったか」この2点だけで、最後にイリスがたどるであろう行動と結末は予測がつく』

「……となると、ラスト、あちらのエルトリアはどうなるんですか？」

『もちろん——うぬらの想像通り。いや、イリスの分、我らのエルトリアより復興は早い

『かもしれんぞ』

「ん〜、わかるような、わからないような……」

「私はちよつと……こういうのはキリエに任せますね」

「そうねえ〜、ちよつとした惑星改造、SFチックな終わり方になるってことかしらん」
「なのはママ、わかつた〜?」

『あはは、私もSFはちよつと……でも、Aルートは『StrikerS』につながる必要上、Bルートとあまり変わらない結末になると思ううんだけどね』

『そうだね。映画にはシャーリーも出てたし『StrikerS』への伏線と考えると……』

『あれやね、SAKIMORI的には、ウエル博士みたいな感じでスカリエッティを登場させたってことやろ?』

『いや、流石にそれは〜、あ〜、でも、味方ならアリなのかなあ〜?』

『スバルたちの出番にもつながるしね。あとナンバースとか』

『そうなるよ、カリムやヴェロツサの出番もありそうやな〜』

「ひよつとしたら、わたしの順番にもつながるかも！　なんだつたら逆シャアのアムロとベルトーチカの子供（妊娠3か月未満の胎児）みたいな感じで、ママに助力してもいいんだよ？　ビーム跳ね返してみたり」

『うっ……時系列的にはちよつと厳しいんだけど』

「わたしの本当の年齢は誰も知らないしね。聖王の聖遺物が盗まれてから2年後と考えると——」

『色々都合のいい時期かあ〜』

『そうになると、残念ながら私には出番がないようですね……』

「アインハルトさん……」

『せいぜい、なのはさんが戦後に医局に運びこまれるシーンで、ちょうど生まれたばかりの私が記憶継承の件で偶然居合わせてチラツ——と映るくらい』

『私が運びこまれる前提なの!?!』

「あゝ、赤ちゃんでも出る気なんだあゝ」

『ヴィヴィオさんなんて胎児でも出る気ですよっ?!』

『あたしとコロナなんて影も形もないのにいゝゝっ!!』

『ご、ゴライアスだけでも……』

「そこまでして映りたいみんなのど根性……私のシーンを削つてでも登場させてあげたいわね」

「いいですね、ど根性……私のシーンもビシバシ削ってくれてオツケーですから、みなさんドーンと出ちゃってくださいー!」

「あはは……そんなわけで、王様やわたしたちの予想が当たるにせよ外れるにせよ——」

『うぬらの予想はどうあれ、我の言うことに間違いはない!』

『よく間違えとるけどな』

『ああ、時々ありますね……』

『だね』

『うぬらああく、小鴉ともどもそこに直れええ〜っ!!』

「——2018年公開予定、劇場アニメ第4弾『魔法少女リリカルなのは Detonation』を、惑星エルトリアが“爆発”しそうになるくらいの勢いで、楽しみに待ちましょう！」

アミタさん、キリエさん、そしてみなさん、今日はお付き合いただき、ありがとうございます！

「ありがとうございます!!」

プレシアの日

9月の第3月曜日は「敬老の日」である。

ちなみに今年9月18日（あくまで地球の日付ですが）。

そんなわけで、わたしはMy祖母に会うため、再び、例のあの場所を訪れたのだけど……。

——ガチャ、ガチャ、ガチャ!!

わたしは必死こいてドアノブを回す。

さらに、アインハルトさんばりのちよつと強めのノック。

——ドン、ドン、ズゴゴオオンツ!!

「プレシアお婆ちゅゃん、敬老の日をお祝いに来たよ〜」

「そんな年寄り扱いで祝われたくなんてないわよっ!? ——それ以前にあなた、どう

やってここに来たのよ!」

「その件は置いといて」

プレシアお婆ちゃんが中々玄関のドアを開けてくれません。

「だいたいあなた、わざわざ私のところに来なくても他に祖父母がいっぱいいるでしょ。高町なのはの両親や、フェイトの新しい母親のところとか——」

「あゝ、桃子さんはちよつとお婆ちゃん扱いを嫌がるんで……」

「私だってそうよっ!」

「土郎さんは喜ぶんですけどね」

「聞いてないっ!」

「あと、リンディさんのところは——ほら、お婆ちゃんも会ったことあるでしょ、クロノ提督のお子さんがいるんで……」

「さり気なく完全お婆ちゃん呼びされてるっ!」

「そんなわけで、敬老の日にお爺ちゃんお婆ちゃんに喜ばれるプレゼント第1位（ヴィオ調べ）——孫が会いに来てくれる——を实践してみましたああっ!!」

「そんなこと実践しなくていいわよっ!」

わたしが体重をかけてドアを押しこむと、プレシアお婆ちゃんも負けじと押し返す。

一進一退の攻防。

「……くっ、これが噂の『孫ブルー』というやつかしら」

「スーパースイヤー人ブルー？」

「どこのド●ゴンボールよおっ?!」



そんなわけで、ようやく家の中に入れてもらえることになりました。

椅子に腰かけると、プレシアさんがテーブルに突っ伏した。

「ハア、ハア、ハア……そ、そういうえば高町なのはも相当しつこくフェイトにつきまどつていたわね……あの子が折れるわけだわ……」

フェイトママが押しに弱いのも、結局のところプレシアさん譲りなのだろう。

アリシアさんは結構強そうなのに……。

「まあまあ、ただ会いに來ただけじゃなく、ちゃんとプレゼントも持ってきましたから」

「ま、まあ、そういうことなら受け取らないこともないけど……」

「そういうえばアリシアさんは？」

「みんな出かけてるのよ。アリシアならすぐに戻ると思うけど」

わたしは早速、鞆から透明な袋でラッピングされたお菓子を取り出す。

「わたしの学校の先輩が作ってくれた鉄アレイ型クッキーですよ」

「……鉄アレイ型という点が酷く気になるんだけど……いただくはっ!」

——ガツキイーン!

「はが、はがつ、ただの本物のミニ鉄アレイじゃないっ!!?」

「いえいえ、一応食べれるらしいですよ? 一晩ミルクにつけとくとか……」

少し目を逸らす。

「いやいやいや、おかしいでしょ!?!」

「一応、作るとこ横で見てたんですけどね、使ってたの普通の食材でしたし……」

「あなたの先輩は錬金術師か何かなのかしら……?」

覇王のアトリエです。

「まあ、今のは軽いジャブというか冗談で、わたしからは、はい、手作りの『エコたわし』です」

洗剤不要。アクリル100%の毛糸で編んだたわしだ。もちろんウサギ柄である。

「……地味に現実的ね。いや、悪いわけじゃなくて何というか普通に使えてしまうというか……」

高町ヴィヴィオは優等生です。

「あく『娘☆命うちわ』なんてのもありますけど?」

「それは遠慮しておくわ……」

ちよっぴり残念だったけれど、取り出そうとしたうちわを鞆にしまう。すると、別のプレゼントが目についた。

「おっと、一番大事なモノを忘れるところでした。孫といえbaumう一組。昔フエイトママが保護した子供が2人いるんですが——」

「ああ、エリオとキャロと言ったかしら、会ったことはないのだけど……」
知っているなら話は早い。

「その2人からもプレゼントを預かってますよ。メッセージカードとクッキーです」
「……クッキー!?!」

先程の大惨事を思い出しつつ、恐る恐る2人で口に運ぶ。

「もぐもぐ、さっきのクッキーのあとだと……」

「100倍美味しく感じるわね……とところでヴィヴィオ、あなたの鞆がゴソゴソ動いているのだけど?」

「へ?」

——のそ、のそ……。

現れたのはのつぺりとしたアホ毛に二本足の黒っぽい生き物(?)。

「あ~~~~~つ、忘れてました。友達から預かった“ちびリオ”です。せつかくだからプレシアさんにプレゼントしたいとかで」

「……これを？ 邪悪な気配がプンプンするのだけ——ぐふっ」

——ドスッ！

アホ毛が伸びてプレシアお婆ちゃんを襲撃する。

「こ、こんなものいらないわよっ!？」

「ひよつとしたら相通ずるものがあるかも——と思ったんですが」

「ないわよっ!？ 色だけでしょっ!？」

くつ……こうなったら、目には目を、ゴーレムにはゴーレムを——いでよ、メカリニ
スっつ!!」

ズモモモモ~~~~って感じの効果音を発しながら、テーブル上のアインハルトさんクツ
キーがウネウネしながら融合召喚。

理由はさっぱりなのだけれど、金属色でロボっぽいねんどろいどサイズの『リニスさんゴーレム』が創成されていく。

「何かメカゴジラっぽいの来たアア!？」

「こんな魔法を用意してるなんて、よっぽど暇だったんじゃない?」
「うっさいわよっ!？」

メカリニス、そんな魔物ごとき一撃で倒してしまいなさい!」

「いや、魔物じゃないんですけど」

リオ。

「——って、うわああ、メカなのに昇竜拳つつ!? ヨガフレイムにサイコクラッシュャーつてナニコレっ!?! リニスさんに何やらせてるのおお!?!」

「ふっ……やめてよね、本気で喧嘩したら、『ViViD』メンバーが『無印』メンバーにかなうはずないでしょ!」

「気持ちわかるけど、どこかで聞いたことあるような台詞うう!」

「とどめよ! 光子力ビームっ!」

「いやああ、それも魔法でも何でもない」

「メカなんだから目からビームでしょ!」

「間違っではないけど何か違うウウ!」

などとワイワイしていると、

「たっただいまっ!!」

フェイトママによく似た明るい声が玄関から聞こえてくる。

「あゝ、アリシア、お帰りなさい——それロケット山猫パンチっ!」

「あ、アリシアさんおじやましてーます——って、いやあゝ肉球が幸せになれる!」

「ヴィヴィオ来てたんだ……って、2人とも何してるのかな?」

「実は——って」

見ると、上半身裸で下半身にパレオみたいなのを巻いたびしょ濡れのアリシアさんが、1メートルはありそうな巨大魚を両腕で抱えていた。

「どこの丸焼き姫ですかああ!?!」

「いや、そんな懐かしい名称で呼ばれても……」

知らない方は『レ・ミィ ゾイド』で画像やら動画を検索してみてください。

「フェイトママと背中合わせでED歌ったり?」

「うん、私を自動的にチビっ子扱いするのはやめてくれるかな……」

「というか……」

アリシアさん。

「えらく元気ですね」

「どういふこと？」

『INNOCENT』のアリシアさんが元気なのはいいとして、元々の『無印』や『A's』あるいは『The MOVIE 1st』や『The MOVIE 2nd A's』のアリシアさんを知っていると、何かこう、どことなく危ういというか、はかないイメージがあつて……」

影がある少女——といった感じだった。

プレシアさんが「そうなのよね」と溜め息を吐いた。

「私もつい忘れがちになるのだけど、事故や長い間ポッドで眠っていたイメージが強すぎて……」

「ママまでっ!？」

「偏ったイメージだとはわかってるんですけどね……」

単純に魔力量の低いフェイトママ——だと考えればそりや元気だろう。運動神経もいいに違いない。

あれ？

だとすると、魔力使用に制限のある格闘大会なら……アリシアさん、実はかなりの好

成績を取められるのでは?!

というか、若いころのプレシアさんなんて総合魔法戦競技をやらせたら、それこそワールドチャンピオンだって夢じゃない。

あわわわわ……。

ちびりオだけじゃない。

何だかわたしも体がウズウズしてきた。

「それでヴィヴィオ、今日はどんな用事で来たの?」

「敬老の日よ、敬老の日。まったく、この私をお婆ちゃん扱いして……あとでフェイトに苦情を入れないと」

「アハハッ! まあまあ、確かに最近はず孫ブルー」なんて言葉もあるみたいだけど、あれつて要は、孫のために体力や時間、お金を使いすぎて憂鬱になる——だから、適度な距離感を保ちましょうって話でしょ?」

でもさ、うちつてどーせ家族以外に訪ねてくる人もいないし、基本的に暇だし、お金も使わないし、ママとしては孫に相手してもらえて、ちょうどよかつたんじゃない?」

「……ま、まあ、そういう見方もあるわね……つて、今度はこの子何を始めたのかしら?」

わたしは「1・2・3・4——」と屈伸運動を行う。

「いや、色々理由を考えてみたんですが『GOD』のストーリーモードじゃプレシア

お婆ちゃんとお戦うチャンスがなかったじゃないですか〜」

「色々理由つてナニ!? まさか……」

「これから一戦やりましょうね、プレシアお婆ちゃんっ!」

「いやいやいや、やらないわよっ!」

「アリシアさんも格闘競技ルールでどうです?」

「あ〜」

「オツス、おらヴィヴィオ! ワクワクすつぞ——みたいな感じですねっ!!」

「ちよ、アリシア、うちのスーパーサイヤ人ブルーどーにかしてええ!」

「うん、孫ブルーね」

わたしの世界にリニスさんはいない 前編

学校の帰り道。

今日は久しぶりにアインハルトさんと2人きりでホクホクです。

「敬老の日は、アインハルトさんの（鉄アレイ型）クツキーのお陰で、プレシアさんといこコミュニケーションが取れました」

「いえいえ、私のクツキーが役に立って本当によかったです」

あく、アインハルトさんの笑顔が眩しいい、キラキラしてるうう。

あのクツキーが「美味しくいただきました」ではなく、他の何に使用されたのかはとも言えない。

ともあれ、役立ったのは事実なので、わたしは「ありがとうございます」と素直に感謝を述べる。

「——で、リオからもらった“ちびリオ”が暴走しまして」

「あく、またですか……」

「対抗して、プレシアさんが“メカリニス”というゴーレムを創成したんですけど」

「リニスさん……と申しますと『GOD』でお見かけしたり、映画に登場したりしていた

「リニスさんということとは!」

「いやいやいや——ないでしょっ!」

懐かしい「今でしょ」ばりに、わたしは激しく突っこんだ。

「ですが、メカリニスさんもそういった技をお使いになったのですよね?」

「……いえ、それはそうなんですけどね」

ヨガフレイムやらサイコクラツシャーまで使いこなしていたけれど……。

「たぶん、本物のリニスさんは昇竜拳なんて知らないでしょうし——ノーヴェは好きそうだけど——第一、ミッドの住宅街にリニスさんがいる……それも生きてるなんてありえませんか!」

数々の逸話を聞く限り、もう一人のフェイトママのママ——と言っても過言ではないリニスさんは、プレシアお婆ちゃんとの使い魔契約を終えて静かに亡くなったのだから。

猫は死に際を見せないとも言う。

もちろん、思い残したことや気がかりも多く、可能ならもつと長生きしたかったのだろう。それは『GOD』で現れた闇の欠片のリニスさんを見て、わたしとアインハルトさんはよく知っている。

だからこそ、リニスさんはもうこの世界に存在しないのだ。

「あの、ヴィヴィオさん——」

アインハルトさんが改まった顔つきでわたしに問いかける。

「以前から思っていたのですが、使い魔の契約を終えたからといって、素体となった猫がすぐに亡くなるとは限らないのではないのでしょうか？」

「その話、詳しく聞かせてもらおうか！」

とおおつ！ と勢いよく起き上がった黒髪少女が走りこんでくる。

「あ、リオ。コンティニューしたんだ」

「コンティニューって何いい!?!」

「ゴメンねヴィヴィオ、お邪魔しちゃって」

リオを追ってきたコロナが苦笑いを浮かべる。

「大丈夫、大丈夫、最近はこの風にならぬ間に4人である機会も減っちゃったし、久しぶりにこういうのもアリかなって——ですよ、アインハルトさん？」

「ええ、もちろんです」

初期メンバーですね——というわけで、近くの公園に移動すると、遠目に猫（リニスさん？）を眺め（監視）つつ、ベンチに座って話し合いをスタートする。

「まずはあたしからね。例えばアーチャーはマスターからの魔力供給を絶たれても固有スキルの『単独行動』で——」

いきなり違うネタ来たアア！

「確かにサーヴァントも使い魔だけど、それリリカルなのはじゃないよねっ!?!」

「まあまあ『フエイト』つながりってことで——」

「……いやいやいや」

騙されてはいけない。

コロナが「う〜ん」と唸る。

「それに、リニスさんはアーチャーって感じじゃないよね。やっぱりキャスター?!」

「コロナまで!?! もう! リニスさんのクラスは、山猫ならアサシンだし、必殺技のプラ

ズマセイバーって名称からすればセイバーだよ!」

「……ヴィヴィオ、さん?」

ハッ!?

「ちなうんです、ちなうんです!」

ついリオの口車に乗せられてしまった。

「ほ〜ら、ヴィヴィオ〜、こっちの世界においで〜」

「もう〜」

せつかく真面目な話をしようと思つてたのにいい!

すると、リオが何かに気づいたように「あつ」と声を発した。

「よく考えたらランサーもいけるんじゃない?」

「フォトンランサーを使えるから?」

「ほら『自害しろ、リニス』みたいな台詞なかったっけ?」

「ないけどあつたような気がしてきたけど、それランサーの固有スキルじゃないからね
!」

ダメだ、これ以上リオにつき合おうと話が先に進まない。

それに、

「あんまり脱線してるとあの猫が逃げちゃうかもしれないし、話を戻すよ?」

「あー、うん、了解です」

珍しくリオが素直に従ってくれた。

あの猫の生態は、昇竜拳を食らったリオが一番理解しているのだろう。

「とりあえず、さっきのインハルトさんの質問の答えにもなるんですが、そもそもリニスさんが使い魔になった経緯を説明すると、

①飼い猫のリニス、駆動炉の事故で、アリシアと一緒に亡くなる。

②プレシア、アリシアとリニスの遺体を保存液で満たしたポッドに入れて保管する。
③プレシア「プロジェクトF」により、アリシアの記憶を転写したクローンを作る。
④元の生活に戻るため、アリシアが全ての記憶を取り戻す前に、リニスを飼い猫の姿のまま使い魔として蘇らせる。

⑤プロジェクトFの失敗。外見はアリシアそっくりでも中身が違った。アリシアそっくりな少女を眠らせると別の計画にシフト。

⑤アリシアそっくりな少女——フェイトを鍛えるため、使い魔の猫リニスに人の姿を与え教育係にする。

その後、フェイトママの教育を終えたりニスさんは、使い魔としての契約を終えるわけですが……」

「あ、わかったよ」

コロナが「はい！」と手を挙げる。

「ゴーレム創成と同じでしょ」

「ゴーレム創成と、ですか？」

「はい。動物をベースに生み出されるのが使い魔で、無機物をベース生み出されるのがゴーレム——というのが、ゴーレム創成の基本なんです。

だから、飼い猫リニスの遺体から使い魔になったリニスさんは、使い魔の契約が終わり魔力の供給が絶たれると、ゴーストと一緒で体を維持できない。

つまり、死んでしまうんです。

もちろん、術者と離れて活動することもあるだろうから、ある程度は……それこそさっきのアーチャーみたいに、しばらくは生存できると思うけどそんなには長くない。

特に、リニスさんみたいに桁違いに優秀な魔導師は、魔力の消耗も激しいから——」
長くは生きられない。

「だとすると、リニスさんが10年以上生き続けるためには……」

今度はわたしが答える。

「はい。」

①プレシアさん以外に新しいマスターを見つけた。

②マスター以外から魔力を手に入れる方法を見つけた。

可能性があったらこの2つかと」

リオが「でもヴィヴィオ」と否定する。

「忠誠心MAXなリニスさんは、他にマスター作らないんじゃない?」

さらにコロナ。

「②も危ういと思うよ? マスター以外から魔力を手に入れようと思ったら、それこそ

『Vi Vid』1巻のインハルトさんみたいに、列強の王達を倒し天地に覇を成すため——闇討ちして魔力を集めるくらい」

「集めてませんからああ!?!」

どちらかと言うと、ヴォルケンリッターの方が近いかな。

「そして、リニスさんは、インハルトさんみたいに管理局に捕まると」

「捕まって……捕まって……あう」

「大丈夫、大丈夫。あれは保護という形でティアナさんが上手くやってくれましたから……まあ、ただ、当時インハルトさんが謎の襲撃犯として、聖王教会と管理局からマークされてたのは事実ですけど」

「……あう」

インハルトさんが力なく崩れ落ちた。

リオが言う。

「あとはもう、オリキャラでも出してリニスさんを救う——くらいしか手がないんじゃない?」

「それはブー、ダメだから」

あの猫がリニスさんだと言うなら、わたしたちは、そういうのはなしで、リニスさんの生存を立証しなくてはならない。

でも、

「リニスさんが生きていて欲しい——つてみんなの気持ちはわかるし、色んな突拍子もないことが起きる世界だけど、それでもやっぱり、無理なこともあるんだよ……」

リニスさんが助かるためには、もつと別の並行世界。フェイトママが闇の書の中で見た夢のような世界しかないであろう。

「……でしたら、あのアツパーカットをした猫は何猫なのでしょうか?」

何猫……。

「えつと……バンザイする猫?」

動画で見た。

「いやいやいや、あたし確実に食らったからタイガーアツパー」

「昇竜拳だよおお!?!」

「タイガーアツパーだったってええ!?!」

「どっちでもいいんじゃない?」

「「コロナはどっちだと思う? 昇竜拳かタイガーアツパー」」

「違うでしょ! あれ猫がリニスさんかどうかでしょ!」

そうでした。

「でしたら、聞いてみる。——というのはいかがでしょう？」

「誰にですか？」

「ヴィヴィオさんのお祖母様ですよ」

「あ、プレシアさんですか！」

というか、最初からそうすれば色々ズバツと解決だったのだ。

「あ、コロナはいいけど、リオは顔隠しててね」

「どうしてええ〜っ!？」

主に「ちびリオ」が原因である。

さっそく映像通信を送る。

『……ヴィヴィオ、あなたそう簡単にこちらとつなげてどうするのよ』

相変わらず不機嫌そうなプレシアさんだが、口元に煎餅のカスがついていることに触れないのは孫の優しさである。

すると、アインハルトさんが頭を下げた。

「初めまして、ヴィヴィオさんのお祖母様——」

——ブチン。

通信が切れたああ!?

「うわああ! お婆ちゃんお婆ちゃん、今のは小粋な霸王ジョークだからああ」

通信再開。

『あなたも全力全開でお婆ちゃん言ってるわよねっ!?!』

「とにかく、今ちよつとプレシアお婆ちゃんじゃないと解決できない問題が発生してて

——」

これまでの経緯を説明する。

「——で、あの猫なただけど」

プレシアさんに見えるよう、いまだ扉で寝そべっているリニスさんによく似た猫を映し出す。

『ああ、あの子ならリニス2世よ』

「「「……リニス2世いい!?!」」」

あく、そう言われればいたな。

『魔法少女リリカルなのはINNOCENT』に……。

確か、テスタロツサ&ハラオウン家の飼い猫で、リニスさんの毛色に似ているから
“リニス2世”と呼ばれるようになったんだとか……。

『INNOCENT』が並行世界の1つだとすれば、逆に、コチラの世界に“リニス2世”
が存在しているもおかしくないわけ……。

「あく、あの猫の正体……その手があつたか」

「つまりリニスさん本人ではないということですか……」

全て解決ではあるものの、アインハルトさんが肩を落とした。

まあ、リニス2世というのは意外だったけれど、オチとしてはこんなものだろう。

「……って、どうしてプレシアお婆ちゃんがリニス2世のこと知ってるのおお?」

仮に『INNOCENT』について知っていたとしても、こちらの世界の猫を、ひと
目でリニス2世とは特定できないはず。

『ああ、あなた会ったことなかったわね。あの子うちの飼猫よ?』

「……ええ〜」

そうか プロジェクトFだ!

フェイトママ同様、リニスさんの複製体を作ったとすれば、リニス2世も十分可能なのだ。

リインフォースさんだって2世がいるわけだし……。

「つて、どうしてこっちの世界に!？」

『勝手にそっちの世界に行ったのよ。どういう手段かは知らないけど、この前あなた実体でこっちに來たでしょ?』

エルトリア組——フローリアン姉妹と紫天一家——の技術をお借りしました。

『そのお陰で座標の特定が出来たのよ。あとはもうアルハザードの技術があればどうとでもなるわ』

「……流石プレシアお婆ちゃん」
天才である。

『で、リニス2世が勝手に転移装置を使ってそっちに行つたというわけね。まったく、一体誰に似たんだか……』

「あはは……」

『悪かったですね、プレシア!』

『あうち!』

『すみません、ヴィヴィオさん。2世が迷惑をかけたようで、今からアリシアと迎えに行きますんで』

画面には、プレシアお婆ちゃんと仲良くケンカする、どこかで見たような、薄茶色の髪を肩の辺りでそろえた理知的な大人の女性が映っていた。

んゝ、んん……??

「リニス、さん……?」

わたしの見間違い?

いや、でも、確かに映像通信に映っているわけで……幽霊? いや、でも、えっと、ど

ういうことおお!?

何で生きてるのおお!?

さつき、リニスさんが生存していないことを全力全開で立証したばかりなのに……。

『本当は私が迎えに行けばいいのだけど……』

『プレシア、捕まりたいんですか?』

『はいはい、わかっているわよ。そんなわけだからヴィヴィオ、アリスアとリニスとリニス
2世のことをお願いするわね——』

ん〜、んん〜と、どうなってるのおお〜??

またか! と思いつつ来週まで続く!

わたしの世界にリニスさんはいない 後編

こんにちは、みなさん、高町ヴィヴィオです。

あれから1週間。まあ、こちらの世界では15分程度なんですけど……緊急事態です。かなり大変なことになっています。

「私窓際の席ねっ！」

「にゃー」

「ほらアリスア騒がないでください」

「だってファミレスなんて久しぶりなんだもん！」

「にゃあ〜」

というわけで、わたし、アインハルトさん、リオ、コロナの4人は、アリスアさん、リニスさん、リニス2世——2人と1匹と、近所のファミレスに来ています。

ちなみに席順は、

ヴィヴィオ アインハルト リオ

窓

アリシア リニス コロナ

(2世は膝の上)

「こんな感じですよ。」

「それであの、リニスさん」

「はい？」

「失礼ですが、本物なんでしょうか？」

「ええと、本物という？」

「実は、リニスさんが恋しくて、病んだプレシアお婆ちゃんが変身しているとか」

アリシアさんが「ぷっ」と吹いている。

リニスさんも苦笑いを浮かべ、

「あく、それはないですね」

「えつと、じゃあ、幻術魔法とか……」

「いえ、そういうのもないです」

「だったら、こう、『Reflection』の特典映像で出てきたアインスさんみたい
に、頭に天使の輪が乗ってる的な存在とか……」

「ちゃんと生きてますよ」

「いやいやいや、大変失礼ですが——」

わたしは溜めて溜めて、

「リニスさんが生きてるはずないじゃないですかああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああつっ!!」

ファミレスのお客さんが「ナニゴト!?!」と一斉にこちらを振り返った。

「そんなに全力全開で叫ばれましたも……」

「そっか、こつちじゃリニスいないんだ〜」

ドリンクバーでリオと一緒に混ぜ合わせた謎ジュースを、アリシアさんが「マズっ」と
言いつつ楽しそうに飲んでいる。

「まあ、本来アリシアさんとプレシアさんもないはずなんですけどね」

「別に生きてたなら生きてたでいいんじゃない？ そんなにこだわらなくても——」
とほリオ。

「そうは言うけど、例えばドラ●ンボールでドラゴン●ールも集めずに復活したらどう思う？」

「……それは、うん、マズいかな」

フリーザ様でも出来ない芸当だ。

「だったらヴィヴィオ、前回のアレを話したら？」

コロナがりニスさんから預かった2世を膝に乗せながら言う。

「あく、うん。もしリニスさんが生きていたら、

①プレシアさん以外に新しいマスターを見つけた。

②マスター以外から魔力を手に入れる方法を見つけた。

このどちらかだろうって話したんですけど……」

「①はムリだね。リニスが一目惚れしちゃうようなカツコイイ男性マスターがいれば話は別だね」

「アリシアああ!?!」

「ま、いたら2世が欲しい——なんてママに言わなかっただろうしね」

オリキャラはなしと考えた場合、唯一可能性があるとすれば、リニスさんを養える魔力量といい、当時すでに2人の猫の使い魔を従えていたグラム元提督くらい。

それはそれで違和感がないのだけど。

「私のマスターはプレシアだけです。それと②も却下ですね。例え死ぬとわかっていても人様に迷惑をかけてはいけません。アリシアもいいですね？ その点プレシアときたら……」

「ね、リニス真面目でしょ？」

性格的に、他者から魔力を奪うことも不可能。だとすれば、

「リニスさんもフェイトさんのように、プロジェクトFで生み出された複製体なのではないでしょうか？」

「アインハルトさんにしてはまともな答えですが……」

「!？」

「言う通りかも……いえ、それしかありませんね！」

「ブウ、それもハズレですよ」

リニスさんがわたしとアインハルトさんを見て楽しそうに笑っている。

「え〜」

「私は真正正銘、かつてフェイトとアルフに魔法を教えていたリニス本人なんですよ」
うー。

「それつてもう、完全にIFで、『無印』や『The MOVIE 1st』で最初からリニスさんが死んでいない並行世界なんじゃ……」

「そうですね、私の口から説明してもいいんですが、せっかくなのでプレシア本人から直接聞いた方がいいかと。」

プレシア、プレシア、聞いているんですよね。映像もつなげますよ?」

あ、聞いてただく、と口にする間もなく映像通信のウィンドウに映ったプレシアさんとリオが顔を見合わせた。

微妙な空気が流れる。

『アリシア気をつけなさい! そんなところに魔物の親玉が!』

「魔物おお!?!」

あく、おそらく敬老の日のちびリオのせいだろう。

突然、リオの頭上に現れた黒い雷雲から紫の光がほとばしる。

「アババババツ!!」

——ぶしゅく。

「りっ、リオオオ——っ!」

茶色く焦げたリオが、漫画みたいに口から煙を吐いた。

「ま、まさか……ライデインっ!」

『エビルデインよ』

「2人とも違うよね!」 無印や映画でママが使った次元跳躍魔法——サンダーレイジ
O. D. Jでしょ。というか、ママ、今の子ヴィヴィオの友達だって!」

『……』

「本当ですよ、プレシア」

『……昔の人は言いました。ハイマツトフルバーストもたまには外れる、と』

「何その弘法も筆の誤りみたいな言い訳ええ!?!」

「プレシア!」

「まあまあ、リオならすぐにコンティニューしますから」

コロナとアインハルトさんも「うんうん」頷いている。

「そんなことよりプレシアお婆ちゃん、どうしてリニスさんが生きてるってこと、教えてくださいなかつたのおお!」

きつと、フェイトママとアルフは涙を流して喜んだことだろう。

なのはママが嫉妬するくらい。

すると、プレシアお婆ちゃんの口から飛び出したのは意外な一言だった。

『……それはむしろ私が聞きたいくらいよ。あなたたちはどうしてリニスが死んだなんて思ったのかしら?』

「それは、リニスさんについて書かれた色々な媒体で、プレシアお婆ちゃんとの使い魔契約が切れて消滅したって」

『GOD』にいたっては、闇の欠片とはいえリニスさん本人の口から『私はちゃんと、役目を終えてから消えましたし』という台詞まであった。

これで信じないわけがない。

『それで、あなたは直接その目でリニスが消える瞬間を見たのかしら？』

「そ、それは……」

不可能だ。

リニスさんの死は、リリカルなのは本編が始まるよりも前の出来事なのだから。

『そう、誰も見ていないのよ？』

もちろん、あなたの言う通り、本当にリニスが亡くなった世界もあったのでしよう。

でもね、冷静に考えてごらんなさい。

そもそも、私がリニスを使い魔として蘇らせる以前、どうしてアリシアと一緒に遺体

をポッドで保存していたのか——その理由を』

「それは……アリシアさんが生き返った時、飼猫のリニスさんがいないとアリシアさんが悲しむからで……」

隣のアインハルトさんがわたしの両肩をつかんで揺らす。

「そうですね、ヴィヴィオさん！ 娘☆命のプレシアさんが、アリシアさんの気持ちを無視してまでリニスさんの消滅を図るでしょうか？」

「それは……」

確かにおかしいのだけど、

「そこまで追い詰められて、心を病んでいたとしたら……」

『……そうね。おそらく、アリシアを生き返らせるためにリニスを消す——この矛盾に気づくかどうか、今の私たちの日々にとどり着く『鍵』だったのよ』

すると、たまたまファミレスの窓ガラス越しに、外を歩いているユミナさんと目が合った。

ジムのバイトリーターでもあるユミナさんは忙しいのだ。

ユミナさんはアリシアさんを見て慌てたように一礼すると、わたしたちに手を振って去っていった。

プレシアさんが話を続ける。

『前々から考えてはいたのよ。』

無事にアルハザードにたどり着いた私たちと、たどり着けなかった私たちの違いは一体何だったのか？

運だけだったのか？

それとも他に——とね』

「それがリニスさんってことですか？」

『ええ。』

アリシアのことを想い、リニスを殺してはいけない——そのことに気づけたかどうか。

この、ほんのわずかな正気の差が、後に大きな差につながる。

ジュエルシードを使いアルハザードへの門を開こうとした時に、主人の命を守るため

全力でサポートする使い魔がいたとしたら』

「そんなの、完全にただの『IFルート』じゃないですか!？」

『あらヴィヴィオ、本当にそう思う?』

「それって……?」

『あなたも無印や映画を観たのでしょ?』

アリシアが入っているポッドは登場したけれど、もう一つ、かつてリニスが入っていた同型のポッドが1度も映らなかつたのよ』

「それは別の部屋にあつたからで……あ」

『そう。あなたも気づいたようね。』

1度は消滅させようとした相手を、大事なアリシアと同じ部屋に置きはしない。

さらに、身体の負担を減らすため、アリシアが起きるまで、ポッドで眠らせていたと

したら?』

「そ、それは……」

『そうそうヴィヴィオ、あなた、時の庭園の崩壊シーンで、一瞬でいいから別のポッドを見た覚えはない?』

「そ、そんなこと……」

『本当はない?』

「……わ、わかりません」

そこまで細かく見たことはない。

『そういうことよ。』

表立っては何も変わらない。

全て、あなたたちの知っている歴史通り。

だけど本当は、私がリニスとの使い魔契約を続けていた。

1人立ち去り、消える寸前だったリニスを回収して。

フェイトにもアルフにも話すことなく、ひっそりとポッドで眠らせていた。

どれだけ狂気に陥ろうと、アリシアのことを思えば、ね……。

それだけのこと』

そっか。

たったそれだけでよかったのだ。

みんなが幸せになるには……。

『まあ、全てが丸く収まったあと、リニスから、私も子供が欲しいんですけど——と言われた時には、さしもの私も焦ったのだけど』

「その件は言わないでください」

「私もそういうのはちよつとお断りというか……」

「アリシアああ!?!」

『アルハザードの技術なら、同性でも可能なのかしら……とかね』

「違いますからねえ!？」

「やっぱりイケメンが良かった?」

「それも違いますからああ!」

「にやあ〜」

真面目なりニスさんを、プレシアさんとアリシアさんがからかい、2世はいつものことかと眠りにつく。

アインハルトさんが顔をほころばせた。

「幸せそうな家族ですね」

「はいっ!」

まるで、聖夜を彩るイルミネーションのように光り輝く世界。

「うちに帰つたらなんて報告しよう」

リニスさんのこと。

フェイトママが驚いて腰を抜かさなければいいけど……。

こうしてわたしはみんなと別れ帰路についた。

そして、高町家の玄関を開けた瞬間、

——ズゴゴオオオオオオン!

「はぷう〜〜」

正面からの爆風で、わたしはゴロゴロ後方に吹き飛ばされた。

「な、ナニゴト?!? 家の中で何が起こってるのおお——っ?!?」

身の危険を感じたわたしはバリアジャケットをまといりビングに突入する。
すると、

「フェイトちゃん、お仕事サボってヴィヴィオたちとファミレスでお茶してたってユミナちゃんから連絡があったよおお、しかも子供モードでええ! フェイトちゃんばっか
ずっこおお——いつ!!」

「そんなことしてないからああ! むしろニセモノの隣にいた胸の大きい美人さんってのが、なのはの変装なんじゃああ!?!」

「正直に言わない子は……少し頭を冷やそうか……スターライト……」

「ああ、もおお、プラズマ——」

我が家だけ最終戦争（ハルマゲドン）でした。

たぶん、ユーノ司書長直伝の結界で高町家は壊れないけど、みなさん、生きていたらまた来週お会いしましょう。

高町家で初代桃鉄やってみた

「はあ……はあ……はあ……」

管理局のツートップ——白い魔王と金の閃光が睨み合う。

というわけでみなさんこにやにやちわ。高町ヴィヴィオです。

ユーノ司書長直伝の結界魔法のおかげで高町家は壊れませんでした。先週から引き続きママたちのバトルは続行中です。

「2人とも、理由は話したよね」

さつきまでフェイトママが涙をポロポロ流していたので、なのはママと一緒に慰めていたはずなのだけど……。

「それとこれとは話が別……」

「そう。だとしてもヴィヴィオ、わたしとなのには譲れない理由があるの！」
ん、あれだ。

最近はずつかり丸くなったと評判のフェイトママが、リニスさんの話を聞いてちよつとやんちゃな頃のテンションに戻っちゃったような感じかもしれない。

「こういう時のフェイトママは、だいたいバインドかけられて撃墜されてるよね？
ソースはアニメや映画や小説やコミックなど……」

「うっ……」

閃光さんがわずかに目を逸らす、無敵なのはママは容赦ない一撃を言い放つ。

「こうなったらフェイトちゃん、久しぶりに全力全開で決着をつけるしかないようだねっ！」

「あ、うん……」

冷静になったのか、フェイトママが「どうしようヴィヴィオ？」みたいな顔でこちらを振り返る。

「こうなったら……」

「うん、その発想がすでになのはと一緒だから」

「やっっちゃえフェイトママああ——っ！」

と、どこぞのイリヤさんばりに叫んだ途端、なのはママが、

「桃鉄（初代）で勝負だよっ！」

「わたしが勝ったら？」

「引き分け。素直に仲直り」

「うん、いいんじゃないかな」

わたしに損はないし。まあ、フェイトママが負けた時だけ、なのはママの無茶振りが炸裂しただけど……。

「なのは、やるからには負けないよ？」

「フェイトママも、何だかんだと言ってやる気だよね」

「桃鉄は昔よくみんなで作ったから。日本の地理を覚える勉強にもなったし」
なるほど。

ミッド出身のフェイトママからしてみれば、取っつきやすく、遊びながら学べるし、一石二鳥だったわけだ。まさに思い出のゲーム。

「理論派のアリサと、主人公補正でサイコロ運のいいなのはが一番強かったんだけど、ゲームバランスは、実力7割、運3割。カードさえ上手く使えば、私やすずかも結構勝てたしね」

「へ〜」

「あ、初代桃鉄はカードないから」

勝ちつてこと？」

「そうそう、そんな感じ——」

と言いながら、なのはママがプレイヤー名を『なのは』と入力する。ちなみに、役職名は変えられないので『なのは社長』である。

「次は私の番……で……つて、カタカナがない」

「あゝ、初代はファミコンだしね」

「……さらに『ふえいと』の、小さい『え』もないんだけどおお!？」

「ファミコンだから……」

そんなわけで『ふえいと社長』である。

そしてわたしの番。

「あのお、『う』もないんだけど」

それどころか、小さい『い』もないので、

『ういうい社長』になりました……」

「ういうい……」

「ういうい……」

今ここに、新しい愛称が生まれた……。

というわけで1年目、各自持ち金100万円、東京駅からゲームスタートである。

1番手はなのはママ。

「目的地は『和歌山』と」

2番手はフェイトママ。

「私は『熊本』……あ、最短ルートの矢印は出ない……というか、青いプラス駅と赤いマインナス駅もないんだ……」

「初代は、サイコロを振って移動したあと、2個のサイコロを振って出た目の数に応じてイベントが発生するんだよ」

ちなみに、数字が小さいほど良いイベントが起きるらしい。

「……いきなりマイナス200万円なんだけどおお!?!」

「大丈夫、大丈夫、借金もないから」

とはいえフェイトママ、1ターン目から無一文である。

「わたしは『高知』かあ……微妙に行きにくい場所なんだけど……」

初代桃鉄にはワープやぶつとび、空港といった移動マスは存在しない。

一応フェリーはあるのだけど、

千葉 ⇄ 長崎
千葉 ⇄ 釧路
長崎 ⇄ 釧路

の3航路しかないため、高知のある四国に行くのは大変なのだ。

ついでに言うとかードもないので、ひたすら6面のサイコロを振って進むしかない。

「私はプラス2000万円っ！」

サイコロで1のゾロ目を出したなのはママ、序盤から絶好調である。

「これが主人公補正かあ〜」

「うん……」

フェイトママの苦勞がしのばれる。

「そういえばフェリーに乗ったんだけど、マス目がないんだね」

毎ターン、目的の港に向かって勝手に勝手に進んで行く——という仕様らしい。

なのはママがサイコロを振る。

「よし来たアア！ 青森のホタテ屋を無料でゲットおお!!」

「……」

「……」

もう何がなにやら……。

1年目決算

1等	なのは社長
収益	180万円
持ち金	2030万円
2等	ふえいと社長
収益	50万円
持ち金	50万円
2等	ういうい社長
収益	50万円
持ち金	950万円

「フェイトママ……」

「ま、まだ序盤だから……」

「このまま逃げ切るよっ!」



2年目。

「……いきなり『ふえいと社長、東京の本社がピンチです!』とか言われたんだけど」
流石フェイトママ。

せつかく長崎に到着したのに……。

「どーせ物件も何もないし、ほっといてもいいんじゃない……」

「あ、そっか……」

というわけでフェイトママは戻らなかったが、特に問題はなかった。

悲しい理由ではあるけれど。

そうこうしているうちに、わずか2年目の秋。

「よっし、和歌山に到着うう! プラス2000万円で、次の目的地は『名古屋』つとー

物件や鉄道を買い、最後にサイコロを振ると、隣の駅まで進めるといふもの。

「あれ？ これってもしかして紀伊半島経由でぐるっと回って名古屋に到着できるんじゃない！ さらにプラス1500万円！ 次の目的地は『鳥栖』！」

もはや手がつけられない。

「こ、これがなのはママ無双か……」

「甘い、甘いよ、なのは……」

「フェイトちゃん!?!」

「トラップカードはないけれど、私も熊本に到着っ！ なんとプラス6000万円つつ!! そして次の目的地は『青森』……って遠い！ そして5000万円でデパートを購入！」

「フェイトママ、残り1050万円で大丈夫？」

たぶん、冬にサイコロを2つ振って“5”以上が出ただけでアウトっぽいんだけど。

「そこはもう勝負だ……あ、今買ったデパートが臨時収入でプラス2500万円だつて

!

なんと!?

2年目決算

1等	ふえいと社長
収益	1760万円
持ち金	4110万円
2等	なのは社長
収益	1200万円
持ち金	3230万円
3等	ういうい社長
収益	50万円
持ち金	850万円

「やるね、フェイトちゃん！ 流石は私の永遠のライバル」

「なのはこそ！」

「わたしだけ蚊帳の外なんですけど」



3年目。

フェイトママはフェリーに乗り釧路を目指す。

わたしだけ未だに目的地（高知）に到着することすらできないまま秋。フェイトママの振ったサイコロの目がわたしに希望の光をもたらした。

「えっと、一番貧乏な人に札幌のラーメン屋をプレゼントだから、ヴィヴィオにだね」

「うっ、うっ……ありがとうフェイトママ！ フェイトママは優しいから大好きっ！」

「くううう~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~またフェイトちゃんばっか、露骨な点数稼ぎをおお！」

3年目決算

1等 ふえいと社長
 収益 1760万円
 持ち金 5920万円

2等 なのは社長
 収益 1200万円
 持ち金 4730万円

3等 ういうい社長
 収益 180万円
 持ち金 2830万円

「あまり大きな変化はなしつと」

「誰も目的地につかなかつたしね」

「わたしだけフェイトママのお陰で収益が伸びました」

「うううううつ、私もフェイトちゃんに負けてられないよおお！」

4年目。

インフレが起き、もらえるお金が2倍。出ていくお金も2倍になった。

「とういわけでヴィヴィオ、早速ママからのプレゼントだよー」

なのはママのサイコロ運により、わたしは函館の温泉を無料でいただくことに。

「さっすがなのはママっ!」

とか何とか言っているうちに、ついにわたしも高知に到着。

「プラス6000万円で、次の目的地は『大分』かぁ、今度はそんなに遠くなくてよかったです」

さらに京都の漬物屋をタダでもらう。

タダでもらった物件は、これで3件目である。

「何となくヴィヴィオらしいというか……」

「そうだね、ヴィヴィオらしい……」

「あれ? 2人ともそういう認識なのお!?」

まあ聖王なので、聖王教会から色々と便宜を図ってもらえたりするのだけど。

4年目決算

1等	ういうい社長
収益	2840万円
持ち金	8870万円
2等	ふえいと社長
収益	2140万円
持ち金	8820万円
3等	なのは社長
収益	1950万円
持ち金	3080万円

「あれ、トツプになってる……?」

「むむむ、やるねヴィヴィオ」

「くっ……ちよつと持ち金が頼りないけど、まだまだ勝負は折り返しだからね!」

5年目。

なのはママが鳥栖に到着。

「プラス5000万円で、次は『仙台』かあ……距離が微妙だなあ……」

続けてフェイトママが青森に到着。

今更だけど、この2人つてだいたい同じタイミングで、まったく違う場所にある目的地に到着している気がする……。

こんなところまで仲良しじゃなくてもいいのに……。

「見てみて、なのは、ヴィヴィオ、援助金2億円だよ！」

「うわ……」

「私の4倍いい!？」

次の目的地は『岐阜』と遠かったけれど、フェイトママはもう勝った気まんまんだ。

「わたしは……ちよ、夏に6のゾロ目でマイナス400万つてひどいよおお!？」

「逆に考えたらどうかかな? 冬じゃなくてよかったとか」

「うっ、確かに……」

これが冬だったら億単位でマイナス。目も当てられない。
そのなのはママといえは、

「よし、仙台からタダで温泉ゲット！」

「わたしも米原から温泉もらったよ！」

「なのはもヴィヴィオもよかったね」

フエイトママ、勝者の余裕である。

5年目決算

1等 ふえいと社長

収益 5740万円

持ち金 2億960万円

2等 なのは社長

収益 3330万円

持ち金 4910万円

3等 ういうい社長

収益 3090万円

持ち金 1億1960万円

「あう、1年で引っくり返された……」

「うくん、フェイトちゃんが圧倒的だな」

「2人とも2位争い頑張ってるね」



6年目。

「よし、大分に着いたよ。プラス5000万円で次の目的地は『函館』と」

さらにわたしはサイコロを振って特急に乗ることに。後の特急系カードの原型だろう。一気に10マス進むことに成功する。

そして、わたしたちの運命を大きく左右する冬がやってきた。

なのはママがいつも通りサイコロを振ると、

「マイナス6000万円っっ!!?」

「なのはママ大丈夫なの!？」

「う、うん。どうか、残り170万円だけど」

ギリギリである。

「これ、フェイトちゃんも同じの出たらアウトだよね?」

「私は大丈夫だから」

前の駅で大量に物件購入をしたため、残り持ち金が4460万円なのだ。

まあ、これまでのプレイ内容を考えると、4000万円以上持つていけば余裕で安全

圏なのだけど、

「フェイトちゃん出る出る」

なのはママの怪しい祈りを受けつつ、フェイトママがサイコロを2つ振る。

目の合計は5+6で「11」。

「あ」

「ああ」

「ま、マイナス1億円……つつつ!？」

あああああああゝゝゝつ、5540万も足りないんだけどおお!!？」

先程購入したばかり、青森のホテルを5000万円、温泉を5000万円で売却。残りを熊本のラーメン屋250万円でどうにか完済する。

6年目決算

1等	ふえいと社長
収益	7190万円
持ち金	7400万円
2等	ういうい社長
収益	5820万円
持ち金	1億2680万円
3等	なのは社長
収益	3330万円
持ち金	3500万円

「それでもフェイトママ1位なんだ……」

「何気にヴィヴィオが追いついてきてる……」

「もうすぐ仙台に着くし、そうすれば私にも逆転のチャンスが……」

●
7年目。

なのはママがついに、桃鉄名物のあの人に遭遇してしまう。

「す、スリの銀次いっくくくっつ!?!」

「1作目からいたんだ……」

持ち金を半分盗まれて1800万円になる。

「もとが少なかつたからたいしたダメージじゃないけど、これが仙台に着いたあとだったら……」

などと言っていたら、仙台まであと4歩というところで、

「へりで岐阜に飛ばされたアア——っ!!?」

ひ、酷い……」

「なのは……」

「なのはママ……」

その落ちこみよときたら目も当てられないよ。

一方フェイトママは、なのはママが飛ばされた目的地の岐阜まで残り3歩というところ、特急に乗り換え12マス進めるといふ。

「い、意味ないけど、よし、プラス5000万円で次は『名古屋』と」

続けてフェイトママはらくらく隣の名古屋駅に到着。

「プラス1000万円、次は『大分』だね」

フェイトママ大躍進の年でした。

7年目決算

1等 ふえいと社長

収益 8740万円

持ち金 1億7140万円

2等 ういうい社長

収益 4570万円

持ち金 1億7050万円

3等 なのは社長

収益 3330万円

持ち金 5130万円

「フエイトちゃんが強すぎるといふより、わ、私のリアルラックが……」

「今日の夕食は私が作るから、ね」

「もう争う必要性がまったく感じられないんだけど……」

ちなみに、わたしの収益が減っているのはデパートが1件不調だったせいである。

●
8年目。

これといったイベントはなかったのだけど、なのはママが、

「よっし、盛岡のスーパーをタダでもらった」

と言っていたら次のターン、

「またマイナス6000万円って……2670万円も足りないんだけどお!?」
 いただいた物件を早束手放すハメに……。

8年目決算

1等	ふえいと社長
収益	8870万円
持ち金	2億7510万円
2等	ういうい社長
収益	8320万円
持ち金	1億7050万円
3等	なのは社長
収益	3200万円
持ち金	3280万円

「え、ヴィヴィオ、どうして追いついてきてるのおお!？」

「うん、ホテル買ったから」

「いいんだいいんだ、私なんてもう……」

ヤバイ。

なのはママが面倒臭くなってる……。

9年目。

いよいよ残り2年である。

ここからわたしの大逆転が始まる……はず。

「よおおし、ついに函館に到着！ 援助金2億3000万円ゲットだぜええ！ 合計所

持金が4億突破しましたあ〜っ!!」

ちなみに、わたしの次の目的地は『岡山』に決まったけれど、残り2年では到着できない可能性が高い。

そしてなのはママ。

「や、やっと仙台に着いた……おお、1億9000万円……ああ、ホントなら3年も前に手にしていたのに……次は『稚内』だし……ううっ、もうこうなったら一世一代の大勝

負をかけるしかない!

ホテル1億円に、デパート1億円!

さらに、偶然止まった隠し物件の「笹かまぼこ屋」を50000万円で購入。持ち金が残り1880万円。

これで恐怖の「冬」に突入である。

「なのはママ、ホントに大丈夫なの?」

「逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ……」

ママ的には「失敗した失敗した失敗した」の方が似合っているのだけ。

あ、これ前振りか!?

そしてトップブ街道を爆進中のフェイトママだったのだけど、

「き、緊急会議で札幌おお——っ!?

あと少しで大分に着いたのにいい——っ!」

それさつきも見たな。

なのはママが優しくフェイトママの肩に手を置いた。

「だからそんなとこまでコンビの相性発揮しなくても」

そしてわたしはといえば、函館のホテルを4倍の金額——4億円で売れるというイベント。

そして、運命の時。

「いくよ、たああ——つつ!!」

「おお……」

「流石なのは……」

なのはママ、マイナス1600万円。残り280万円で見事乗り切ってみせる。

流石は主人公。

ここ一番の勝負強さは流石である。

9年目決算

1等	ういうい社長
収益	9570万円
持ち金	7億5140万円

2等 なのは社長

収益 9 4 5 0 万円

持ち金 9 7 3 0 万円

3等 ふえいと社長

収益 8 8 7 0 万円

持ち金 3 億 8 7 8 0 万円

「えええ——っ！　なのはにまで逆転されたのおお——っ?!」

「まあまあ、フェイトちゃんまだ3億持ってるし」

「そんなこと言ったらヴィヴィオなんて7億……7億うううううっ?!」

「うん、スツゴイことになってます」

「あ、1つ言い忘れてたけど、初代桃鉄だと持ち金は勝敗に影響しないから」

「それって、持ち金を残さず、とにかく物件を多く買った方がいいってこと?」

「そうそう。もちろん、冬に破産しない程度に残しといてね」

10年目。

ラスト1年。

ここに来てさらにインフレが起き、サイコロによる収入や支出が倍になる。

フェイトママが「うーん」と唸った。

「ここでフェリーに乗ったらゲームが終わるから、それまでにどこかの駅に止まって物件を買わないと……」

1年前までトップだったフェイトママが最下位である。

わたしはといえば、

「せっかく秋田駅に止まったのに、フェイトママに物件が買い占められてるっつ!」

なのはママは最後まで諦めず稚内を目指し、北へと汽車を進める。

そしてフェイトママのターン。

「やった! 隠し物件の“夕張メロン畑”2億円を発見。もちろん購入!」

「ううっ、わたしなんてこんな大富豪なのに、このままじゃ7億円持ったまま逆転負けに……」

いざ駅に停まろうと思うと、中々停まれない。

と思っただら残り2ターン。奇跡のように秋に振ったサイコロで隣の駅まで進めることに。

「よ、よし……」

あとは目的地の盛岡に、購入可能な高価な物件さえあれば……。

「こ、これは……牧場5億円、買わせていただきますっ!!」

「あちゃ、これはもうヴィヴィオの優勝だね」

「ああ、こうなったらせめてなのはに負けないように2位だけでも確保して……っ、サイコロの目がまた“1”!!”い”っ!!」

フェイトママ、6年目の恐怖の再来。

それも2倍になっているので、

「マイナス2億円……っ!!」

あ、駅に停まれなかったお陰でギリギリある」

残り持ち金380万円。

「ほ、本当に危なかった……」

わたしとなのはママは、左右からフェイトママの肩を優しくポンポン叩いた。

ここでゲームは終了。

順位とは別に、まずは各部門のトップが発表される。

ホテル王　　ういうい社長

鉄道王　　ふえいと社長

外食王　　ういうい社長

「どれか1つくらい勝ちたかったな〜」

「移動系はやっぱりフェイトママが強いね」

「うくん、たまたまだよ?」

そして、日本一の大社長になって、大きなビルを建てたのは……。

10年目（ラスト）決算

1等　　ういうい社長

収益　　2億5330万円

持ち金 1億1740万円

2等 ふえいと社長

収益 1億3620万円

持ち金 380万円

3等 なのは社長

収益 9550万円

持ち金 1億2530万円

「やった！ わたしの優勝だああ——っ!!」

パチパチパチ。

「おめでとー、ヴィヴィオ」

「はあ、負けちゃった」

「なのはママもフェイトママも——とつくにしてるとは思うけど——仲直りね」

「ま、そういうことなら、ね、フェイトちゃん」

「そうだね、なのは」

というわけで、

EDに表示されるのは、懐かしいハチの姿をかたどったハドソンのマークに、今の状況にピッタリな「めでたし めでたし」の文字でした。

みなさんお疲れ様でした。

スーパー騎馬大戦FINAL

「え、今年の騎馬戦は親子競技なのっ!？」

高町家のキツチンで、なのはママが目を丸くしてコチラを向いた。

「ほらママ、手が止まってるよ〜」

「あく、ゴメンゴメン……」

慌てて夕食のシチューの入った鍋を、シリコンのヘラでかき回し始める。

「ほら、運動会——今年から体育祭なんだけど、初等科・中等科で合同になったでしょ？
学院祭みたいに」

「あく、去年アインハルトちゃんが初等科のリレーで爆走したのが原因だったっけ？

しかもアンカーで優勝しちゃったやつ。うちにもフェイトちゃんが撮ってたのあるよね」

「……うん」

アインハルトさんの黒歴史にまた新たなページが刻まれたわけだが、お陰で今年は一緒に体育祭を楽しめるといふもの。

「まあ、チームは別々なんだけどね」

「あはは、残念」

「クラスも縦割りになったから、今年はわたしとリオコロも別チーム」

「へえ、珍しいね」

「うん。でね、リオとアインハルトさんが一緒のチームなんだけど……」

「何だか微妙な組み合わせだね」

「うん、わたしたちみんなそう思った。まあそんなわけで初等科と中等科合同なんだけど、フィジカル面はともかく魔法競技の場合、初等科でも大人顔負けの子っているでしょ？」

「コロナちゃんとか？」

「うん、そう——」

昔のママたちなんて、もつと大人顔負けだったろう。

「だから、いっそのことゴーレムを使った騎馬戦をやって、それを自由参加の親子競技——目玉の1つ——にしようかって」

「なるほど」

ゴーレム同士の戦いならケガ人も出ないし、普段運動をしない父兄のみなさんも筋肉痛にならない。

それに、

「ド派手な勝負だから、一般で観に来た人も楽しめるでしょ？」

「そつかく、ちよつと面白そう。——で、ゴーレムといえばコロナちゃんなわけだけど、やっぱりゴライアス？」

「どうかな？ 一応、わたしとリオの予想だと『マスターガンダム&風雲再起』じゃないかって」

「あく、そつち系かく。それにはちよつとふつーのゴーレムじゃ敵わないねえ」

「……うん、コロナ張り切ってたし。まあ、大穴で『ガンダムキマリス・トルーパー』つて説もあるけど」

どつちみち勝てそうにない。

「あはは、リオちゃんはどうするって？ また『ちびリオ』？」

「本人としては、もつと格好いいゴーレムがいいって言ってるけど」

「へえ、例えば？」

「『ガオケンタウロス』か、『ウルケンタウロス』」

「あく、戦隊ロボかあく、でも、そつかく、騎馬戦だと思えばむしろアリかく、貴重な人馬タイプのロボだしね」

「うん。やたらと気合入れてたから、今年はついにちびリオ以外のゴーレムで参戦か

なつて」

リオが、ちびリオ以外のゴーレムを創成する姿というのはイメージできないけど。

「それはそれで逆に寂しいね。アインハルトちゃんは どうするの？」

「まだ考え中みたい。ただ『私もみなさんのように地球の作品を参考にしてみますね』って宣言してたから……うん、ちよつと楽しみかも」

霸王に関係するロボか、それともまったく別のゴーレムか……。

「ん、例えばリユーナイトとか？」

「あ、あるかも。騎馬戦って言うてるけど、別に騎馬にこだわらなくていいしね」

「うん。騎馬型のゴーレム限定にすると、ゴーレム創成のハードルが高くなつちゃうでしょ？」

「そっか」

「だから中等科は人型で、初等科はスライムとか単純な動物タイプが多いんじゃないかな？」

学院サイドとしては、おそらくねんどろいどみたいなカワイイちびキャラたちがぶつかり合うイメージなのだろうけど……コロナもいるしなあ。

抑止力は必要であろう。

「ちなみにヴィヴィオはもう決めたの？」

「わたしもまだ考え中。わたしでも作れそうなゴーレムで、そこそこかつこよくて戦力になりそうなのつて中々思いつかなくて……」

「武者ゼータとか？」

「あく、それいいかも！ 何か本拠地守ってそうだし、ケンタウロス形態もあるし……でも、あんな難しいの、コロナかプレシアお婆ちゃんしか創成できないって」

わたしにはまだまだレベルが高すぎる。

「うーん、そっか」

「変形とか合体はなしで」

「黒のアーチャーは？」

「いきなりロボ以外きたねー。でも、そっか、言われてみるとアリかも……」

ただ、できれば、わたしとしてはロボにこだわりたいのだけど。

「そんなことよりママはどうするの？」

「え、私が出ること決定なの？」

「うん。きつと盛り上がると思うよ！」

なのはママは「うーん」と考えて、

「最近のなら、『ナイツ&マジック』のツェンドリンブルとか……」

グリーンのケンタウロス型のロボだ。

「そういえばママの王国もあつたしね〜」

「あはは、それに文庫版のイラストが『Force』やこの前の映画でデバイスのデザインなどをしていた黒銀先生だし」

「あゝ、そういうつながりもあつたんだ……」

そういう意味では、絵面的に違和感が少ないのかもしれない。

「でも、フェイトちゃんと一緒にだと考えると、やっぱりパラメイルかな〜」

「あゝ、クロスアンジュ?」

「そうそう」

スパロボにも参戦したことだし、コロナのマスターガンダム&風雲再起と渡り合うには、それくらい力がないとダメなのかもしれない。

思いだけでも、力だけでも……というやつである。

その後もなのはママは「他に何かないかな〜」と悩みながらシチューをかき混ぜていた。

そして体育祭当日。

午後になり、ゴーレム騎馬戦に参加する生徒や父兄が、続々とグラウンドに集まっていた。

「あ、リオ、こっちこっち」

目の下にくまをつけたリオが、トボトボ歩いてくる。

「あれ？ ガオケンタウロスかウルケンタウロスはどうしたの??」

「朝までがんばった、がんばったんだけど……あたしには無理だったよ」

「あ、やっぱり……」

代わりに創成したゴーレムというのが、

「え、ナニコレ？ ちびリオじゃないっ!？」

色は、ちびリオと同じ単色であるものの土色で、どこことなく人型のハニワっぽい。

「もしかして、はに丸王子?」

「せめて鎧武者を作ろうとしたんだけど……あたしにはこれが限界でした……」

「はにやく。でも、まあ、いつも何だかんだでちびリオしかできないリオにしては、かなりがんばったんじゃないかと」

「だよな? そうだよなっ!?! 流石ヴィヴィオ心の友よおっくっくっ!」

「ふっふっふ、甘い、ハニワ幻人めっ！」

「そ、その声は……」

「コロナっ!? ——つて、その背後のゴーレムはゴライアスでも、マスターガンダム&風雲再起でもない!?!」

頭部は丸くグリーン、ボディは黄色、下半身は白い人馬型。

「そう、今年の私のゴーレムは『鋼鉄ジীগ』のケンタウロス形態にしてみましたあゝ!」

「うわあゝ、そう来たかああ……でも」

「カツコイイ!」

わたしとリオは思わず口を揃えて声を発してしまった。

「流石コロナ……やたらディテールも細かいし……何この完成度の高さ……」

「あたしもコロナみたいなの作りたかったあゝ」

ハニワ幻人……というよりハニワ兵士VS鋼鉄ジীগである。

「鋼鉄神の方にしようか悩んだんだけど、あつちは騎馬って感じじゃなかったから、初代

の方にしたんだけど……」

「うん、これで正解だと思っ」

まさに脱帽である。

「それでヴィヴィオは？」

「わたしのはコレ、人馬兵だよ」

人馬兵プロマキス。

『機甲界ガリアン』に登場するケンタウロス型のロボットだ。

「ちよ、どうしてヴィヴィオばかりちゃんと出来てるのおお!？」

「リオ、泣かない泣かない。ほら、人馬兵つてガンダムで例えるとザクみたいな立ち位置だし、戦隊ロボみたいな主役機に比べると、デザインがシンプルなんだよ」

カラーリングも、青と白でわたしのバリアジャケットに近い。

「あたしも量産機系にしとけばよかつた」

コロナは「ふっふっふ」と笑みを浮かべると、

「宿敵ちびリオがいらない今となつては——」

「もはや天敵つてレベルだったしね」

「言わないで！ 私のジューグといい勝負ができるのはヴィヴィオだけだね！ いくら幼

なじみといえども手加減はしないから」

何だかチャンピオン——ジークさんみたいになつてきた。

「いや、流石にコロナには敵わないと思うんだけど……」

スパロボなら気力上げに使われるだけである。

すると、わたしのよく知る澄んだボイスが聞こえてきた。

「みなさんお集まりのようですね」

「アインハルトさん！」

「アインハルトさん来ましたね！」

「同じチームでよかったです」

はに丸だけじゃ……ねえ。

アインハルトさんはわたしやコロナのゴーレムを仰ぎ見ると、自信に満ちた表情で言い切った。

「騎馬戦に勝利するため、私もみなさんのように地球の作品を参考にしてゴーレムを創成してみました。御覧ください。コレが私のゴーレムです——」

「「お~~~~~おおお……?」」

現れたのは、先程見たばかりの土色もしくはパールオレンジっぽい単色で、馬の形をしたゴーレムだった。

「これって……」

「ひんべえ……?」

「日本の古代の騎馬をモチーフにしてみたのですが……」

「ええ、ひと目でわかります」

「アインハルトさん、あたしのはに丸と合体しましょう!」

ああ、もう、はに丸でいいんだ……。

というかもうコレ、おーいはに丸である。

そういえばドッキングというか、ひんべえに乗ったはに丸王子ってあまり見たことがなかった気がする……あ、でもOPアニメであったような……。

するとコロナが余裕の表情でハニワコンビに近づいていく。

「いくら合体しても私のジューグには敵わな——」

はに丸の剣が伸びてジューグの首へ。

——ザクッ!

「ジググううう~~~~~つつつ!!?」

首がもげました。

あゝ、何だかすごくいつも通りの光景を見た気がする。

「ま、まあ、ジググは頭部パーツが本体だし……」

と、コロナを慰めていると、

「みんな相変わらずユカイなことになってるね〜」

コロナちゃん大丈夫? と登場したのは、

「ユミナさん!」

「あはは、お疲れ様です! 指令……じゃなかった陛下!」

ユミナさんのあいさつの仕方に一抹の不安を覚えつつ、

「ユミナさんも参加するんですね」

「うん、一応ね。みんなみたいに変わったゴーレムじゃないけど」

「人型ですか?」

「そうそう。普通だよ、改でも改二でもない、ノーマルの吹雪」

「へ〜」

艦これだった。

「私がやつつけちゃうんだから！ みたいな？」

中の人的には本物である。

「そつかく、そういう路線もアリだったかく」

なのはママも中の人つながりで決めてたつけ。

「そういえば、なのはさんとフェイトさんはどんなゴーレムにしたの？」

格闘技ファンのユミナさんとしては、エース・オブ・エースのゴーレムも気になるところ。

「わたしも『当日のお楽しみだよ〜』って教えてもらえなかったんですけど、たぶんフェイトママと一緒にクロスアンジュのロボで参戦じゃないかな〜って」

すると、ユミナさんが急に真顔になって、

「そうですか、アンジュリーゼ様と〜一緒に……」

「うん、たぶん、その中の人ネタ誰もわからないから。モモカ——筆頭侍女でしたつけ？」

あとフライパン仕込むのも禁止い〜」

「エンブリヲ、あたしもクロスアンジュの方がよかったかな？」

「やめてー、リオまで。別アニメの主要人物がだいたいそろつちやうから！ というかエンブリヲじゃないから！ 発音似てるから騙されちゃったけどヴィヴィオだからねっ!？」

「私だけ何も無い!？」

「コロナはストライカーユニットでもはいて、ユミナさんとコラボしてればいいでしょ!」

などとムダに中の人ネタで盛り上がっていると、金髪の女性が息を切らせながら駆け寄ってきた。

「ごめん、ヴィヴィオ〜。なのはのこと止められなかったあ〜〜〜っ!」

「フェイトママ!?! どうしたの一体……って、空から何か来たアア!」

グラウンドに地響きを起こして着地したのは、パールピンクのロボとブラックのロボの2体。

「な、何が起きて……」

「こ、これはガオガイガーの光竜と闇竜?!」

コロナが叫ぶ。

さらに2体が合体。

『あなたの相手は天竜神がするわ』

「しまったこの声……ガチなの来たアア——つ!!」

うわ、みんなで力を合わせても、たぶん勝てないよ、コレ……。

よければ『スパロボ 光竜 闇竜』で動画検索して、音声聞いてからもう一度読んでもらえると、この絶望感がわかっていただけか……。

霸王城アインハルトキユラ

夢を、夢を見ていました……。

あ、これ、なのはママの（中の人）の台詞なんで『由詔かなみ 台詞』で検索してみてください。

平塚先生もおっしゃっていましたが、スクライドは名作です。

そんなわけで今日のお話は夢です。

ええ、夢オチです。

最初に断っておきますが、全てわたしが見ている夢です。

なぜなら……タイトルがおかしいから。

どう考えてもファミリコンピュター時代の名作ゲーム『悪●城ドラキユラ』に無理矢理当てはめたとしか思えません。

——アインハルトキユラって何いにく〜っ!?

——アインハルトさんが吸血鬼なののおお？

自分の夢ながらさっぱりです。

誰とは申しませんが、黒のランサーのせいなのか……前々回の桃鉄（ファミコン）の影響が残っていたのか……とにかく色んなことが合わさった結果、無意識に夢として見ているのではないかと冷静に分析できているので、うん、たぶん、これは「明晰夢」なのでしょう。自分の夢だとわかっていながら見る夢のことです。

そんなわけでみなさん、本日はわたしと一緒に、わたしの見る夢におつき合ってください（ちよつと意味わかりませんが）。

ほら、早速周囲の風景がおかしなことに……。

『覇王城アインハルトキュラ』

どうやらタイトル画面のようですが、頭上をご覧ください——。

『PUSH START KEY』

何だこの夢……。



プロローグ

旧暦XXXX年。

古代ベルカの平和な小国シュトラ。この国にはアインハルトキュラにまつわる伝説がある。

霸王イングヴァルトは100年に1度、聖王の力が弱まるころ、邪悪な心を持つ人間の祈りによって――。

――ちよつと待ったアア……っ!?

――どうしてわたしの夢にプロローグがあるのおお――っ!?

——しかもムダに壮大そうだし、そーいうのいらなからああ！

と、とにかく……。

わたしの目の前。延々と左右に続いているのは槍みたいに尖った扉と錆びついた鉄の門扉。扉の先には、闇夜と黄色の月をバックに、謎の古城が暗く浮かび上がっている。ついでにコウモリとか飛んじやってるし……。

たぶんこの悪魔城……じゃなかった『覇王城』を攻略すればいいのだろう。

やっぱりプロログを見ておくべきだったろうか？ いつの間にか、わたしは左手にムチを握りしめていた。ストーリーくらいは知っておくべきだったかもしれない。

だいたいムチがメインウエボンって……それこそ悪●城ドラキュラのベルモンド一族か、イン●イ・ジョーンズか、どこぞの女王様か……あく、そういえばプレシアお婆ちゃんも振るってたっけ。習っておけばよかった。ちなみにフェイトママも似合うと思うのだけど、落ちこみそうなので口に出しては言わない。言えない。

「あとはランバ・ラルくらいかな」

とか言っても誰も突っこんでくれな——

「それはグフのヒートロッドですよ」

「だ、誰ええ！ わたしの夢の中にツツコミを入れてくるのはっ!?」

振り返ると、そこにいたのは一人の女性。

長い髪を後頭部でまとめた髪を、シニヨンキャップとリボンで飾りつけている。

「あゝ、『DOG DAYS』のミルヒオーレ姫ですかあ」

「違いますよ！ オリヴィエです、オリヴィエ・ゼーゲブレヒト。あなたのオリジナルで、ご先祖様です。まあ、私もちよつと似てるかなうと思わないでもないですが、髪の色がまったく違いますよね。ミルヒオーレ姫はピンクで私とあなたは金髪——」

「すみません、今日の夢は白黒なので……」

「あなたの夢は白黒テレビですか!?!」

「いえいえ、雑誌掲載のイメージですよ」

「FULL COLORSでお願いますね！」

「……もしかして、プレシアさん、アリシアさん、リニスさんに続いて」

「いえ、ただのセルフツツコミです」

「……」

「ツツコミを入りたい。でも自分で自分に突つこんでばかりもいられない。だからもう1人の自分という形で、私を生み出したのでしょうね。」

ほら、その証拠に私にもガンダムを知識があつたじゃないですか」

いくら適当な夢とはいえ「コレはないな」と思つたけれど、流石にそろそろ認めないわけにはいかなくなつてきた。

「……つてことは、何でしょう、わたしの知識に加えて、昔のオリヴィエさんの記憶とかも知っているということなんでしょうか？」

「何でもは知らないわよ。知ってることだけ」

「ほらああ——っ！ やつぱりミルヒオーレ姫だああ——っ!!」

「違いますよ！ 先週からそんな中の人ネタばかり連発してええ！ だいたい今のフリでしたよね、フリ」

「そんなわけでバサ姉」

「もう、ミルヒ……じゃなかつたオリヴィエですよ」

「じゃあ羽川先輩」

「はいはい扇ちゃん、さっさと話を進めるわよ」

1面

「1面つてナニイイ!？」

「ほらほら気にしたら負けですよ」

「セルフツツコミすぎて、どっちがどっちの台詞かわからない!」

などと言いながら霸王城を進んでいくと、バサバサという羽音が聞こえてきた。

「1面のボス——吸血コウモリですね」

「大きいコウモリというと、ダイ・アモンしか思い出さななんですけど……」

「もつと他にあるんじゃない……ほらほら、ヴィヴィオの知り合いじゃないですか?」

「……あ」

コウモリつぼく天井に逆さにぶら下がっているのは、初代リインフォースさんとはや
てさん。

「……みえ」

何が見えたのかは言わないけれど、流石はわたしの夢。
次行こ、次……。

2面

ベルガ・ダラスっぽい槍を持った鎧騎士を倒しながら塔を上がる。

「2面のボスはメデイウサで、普段は石像として身を隠しているが、近づくと本性を現わす——だそうですね」

「へえ、そうなることやっぱりボスはナハトヴァールですかね」

「うーん、どうでしょう?」

礼拝堂にたどり着くと、紫の長髪で、眼帯に黒いボディコン服をまとった女性が待っていた。

「ライダーじゃん?!」

と、ツツコミつつ次の面へ。

3面

塔と塔をつなぐ橋を渡る。

「オリヴィエさん、3面のボスは誰でしたっけ？」

「ミイラ男ですね。しかも双子」

「双子……ってリーゼ姉妹か、ノーヴェとスバルさんか……でも、さっきの面がライダーだったしなあ」

「そもそも、ミイラ『男』ですからね」

「そっか。そういえばミイラ『女』ってあまり聞かないですよね？」

「そもそも、包帯でグルグル巻きだから中身が男性か女性かわからないですしね」

とかなんとか言いながらボス部屋へ。

「アレは……」

「綾波レイさんですね」

そう来たかああ。

「つて、包帯しか合っていないよねええ!？」

「まあまあ、ほら窓の向こう」

包帯を巻いた初号機がミイラ男っぽかったのでよしとする。

4面

地下洞窟を突き進む。

「4面のボスは、フランケンシュタインとせむし男でしたっけ?」

「そうですね。イメージとしては、ヴィヴィオのお友達のコロナさんが、ゴライアスの肩に乗っているような感じでしょうか」

「あく、なるほど。でも今回はストリートにフランちゃんってことはないでしょうか?」

「あく、なるほど。じゃあ肩に乗ってるのはマスターのカウレスさんとか?」

『Fate/Apocrypha』の眼鏡が本体っぽい人だ。

「あく、はいはい、そんな感じで……」

ボスががいる狭い渡り廊下に着くと、

「フンガー」

怪物くんでした。」

5面

急に色調が変わり、白っぽい壁面に鉄格子がはまっている。

「うわ、牢獄ステージですか……」

「5面のボスは死神——霸王城の副官のような存在で、画面のあらゆるところから鎌を出現させプレイヤーをねらってくる——だそうですね」

「画面にプレイヤーって……でも、鎌かあ〜」

「イメージとしては、フェイトさんかレヴィさんがピッタリじゃないですか？」

「確かに。特にフェイトママなんて死神コスとかちよー似合いそうだし……でも、これまでの傾向からして……『ガンダムデスサイズ』なんてどうでしょう？」

まあ、本当に出てきたら負けそうだけど。

「あはは、ありそうですね。だったら私はエレミアで」

「あゝ、副官のような存在で黒っぽいし、確かにあるかもですね。でも、わたしの夢だから登場するとしたらジークさんの方かも」

「そっか、ちよつと残念ですね〜」

肖像画の入った額縁が並ぶ通路を抜け、いかにもボス部屋といった空間に到着する。
「オリヴィエさん、ストツプです!」

わたしは慌てて聖王女の手を引っ張り物陰に隠れた。

「どうしたんですか?」

「ボスがいました」

「何か問題でも?」

「いえ、アルフやミウラさんみたいなオレンジのツンツン髪キャラではあるんですが……」

「あく、なるほど。死神つながりとしては限りなくアリだと思いますけど……卍解っ!」
諸般の事情でタイトルは伏せさせていただきます。

6面

いよいよ最終ステージ。

月をバックに階段を上がっていく。

「このまま登っていく裏技がありましたよね〜」

「いえ、それバグ技なんでやめときましよう」

そして、わたしとオリヴィエさんはついに霸王城の最上階に到着する。
そこには棺桶が2つ置かれていて……。

「2つうううっ?!」

「ようこそいらつしやいましたヴィヴィオさん」

大方の予想通り、黒いマントに牙を生やしたアインハルトさん……いや、アインハルトキュラが中に浮かんでいた。

そしてもう1人。

「よくここまで来たね、オリヴィエ。それにヴィヴィオ」

「クラウスうううっ?!」

「クラウス陛下ああっ?!」

紛れもなく絵画で見たことがあるアインハルトさんの男性バージョン。古代ベルカの霸王クラウス・G・S・イングヴァルトさんだった。

覇王城というくらいだから、アインハルトさんがボスキャラだとは思っていたけれど、まさかクラウス陛下まで吸血鬼になっていようとは……。

自分の夢ながら予想外の展開である。

アインハルトさん……じゃなかったアインハルトキュラさんは愛らしい八重歯みないな牙を見せ、

「血を吸っちゃいますよ〜」

と近寄ってくる。

いつもよりアグレッシブかつフレンドリーだ。

これはこれでアリかもしれない……じゃなかった落ち着けわたし。

同様に、クラウス陛下も「君の血を吸わせて欲しい」とオリヴィエさんに歩み寄る。

こ、こ、こ……

「オリヴィエさん……」

「ヴィヴィオ……」

わたしとオリヴィエさんは顔を見合わせると頷き合う。

そして、互いに首元をはだけ、両腕を大きくバンザイのポーズで開くと、

「ど〜んと来いですよオオ〜〜〜っっ!!」

「——ハッ!?!」

わたしは自宅のベッドで跳ね起きた。

我ながらアホな夢を見た。

近年稀に見るほどアホな夢だった。

「流石にど〜んと来いはないよねえ……」

こういう日は、生アインハルトさんを見て心を落ち着かせるに限る。

早朝。

いつもより早めにランニングに出発。

アインハルトさんのマンションに突撃すると、部屋の前にヘンテコな——初等科の学芸会つぼい——ダンボール製の門があった。

——何だコレ!?!

と思いつつ、

『は〜い、これからアインハルトさんちに突撃したいと思いま〜す』

アバカムつぼい魔法を唱えると小声で侵入。

すると、中はやつぱり学院祭のお化け屋敷っぽく飾りつけがしてあり、壁には見たことがないオリヴィエとクラウス陛下の肖像画がかけてあった。

何だか甲冑もあるし、明かりは弱々しいロウソクの火だし……。

まさか!?

「アインハルトさんちが覇王城になつてるうううううううううう!!」

さらに、ベッド代わりの棺桶の蓋が開いたかと思うと、緑髪の少女がゆっくり目を覚ました。

「アインハルトさん、これつてどうなってるんですかあゝゝつ!」

まさか「これも夢でした」というオチだろうか??

「……フワア、ヴィヴィオさんおはようございます。コレは……もうすぐハロウィンなので、そろそろ準備をしておこうかと」

寝起きのせいかな、いつもよりやんわりした口調でアインハルトさんが言った。

手にはカボチャが握られている。

「なるほど。言われてみるともうじきハロウィンでしたね……つて、アインハルトさんその衣装はっ!」

黒いマントに小さな羽がついており、その姿はまるで、

「吸血鬼っ!？」

「はい。今年のハロウインの仮装です。血を吸っちゃいますよ〜」

寝起きのアインハルトさんがぼわぼわ言った。

「こ、この流れは……」。

わたしはオリヴィエさんのサムズアップを思い浮かべると、首元をはだけ両腕を広げる。

「どんと来おお〜〜いつ!!」

「はいいい〜!？」

流石のアインハルトさんですらドン引きである。

気のせいかな、オリヴィエとクラウドス陛下の肖像画が笑っているように見えた。

探せ！ 七鍵守護神（ハーロ・イーン）の魔導書

ハロウインとは、毎年10月31日に行われるお祭りです。

起源は地球の古代ヨーロッパのケルト。秋の収穫を祝い、悪霊を追い払う宗教的な行事でしたが、現代では民間行事として定着しています。

オレンジのカボチャを飾り、子供たちが魔女やお化けに仮装してお菓子をもらいに行く——といったイベントです。

日本では、クリスマスやバレンタインデーと同じく商業的な意味合いでの普及が進められました。成果は芳しくありませんでした。

しかし2000年以降、インターネットの広がりにより、メイド喫茶など、コスプレ文化が一般層にまで浸透。

さらに近年のSNSの波及により、

『お祭りという合法的な空間内において、本格的な仮装をみんなで共有できる——』
ハロウインは、多くの人たちに楽しまれるイベントに成長したのです。

まあ、わたしとしては「ヒーホー」とか言つて、女神転生シリーズのジャックランタ

ンが、炎の魔法アギを唱える方が馴染み深いのですが……。

そんなわけで、いつもの学校の帰り道、いつものようにリオが唐突に言い出しました。

「ハロウィンといえば、やっぱり〃七鍵守護神（ハロー・イーン）〃だよね？」

「いや、それハロウィン違いだから。七鍵守護神は『バスタード』の攻撃魔法だよ？」

異界の七つの門を開き、流れこむ膨大なエネルギーを、自身の体を媒介に収束し光線として放つ。

その破壊力は、ママのスターライトブレイカーをも上回るかもしれない伝説の古代語魔法だ。

するとコロナが「あつ」と声を発した。

「七鍵守護神の魔導書が存在する——って噂なら聞いたことあるよ？」

「あるのっ!？」

リオ情報だと嘘っぽいけど、コロナ情報だと途端に真実味を帯びてくる。

でも、確かに、管理外世界や並行世界を重ねていけば、バスタードと似た世界だってあるかもしれないわけで……そうなると、七鍵守護神にまつわる魔導書が、いつものようにアルハザード経由で古代ベルカに伝わり現在に至る——みたいな流れがあってもおかしくはない。たぶん。

「無限書庫にあるのかな〜?」

「あたしは見たことないけど……」

その手の物事に目ざといリオが発見していない——ということはない可能性が高い。

「だったらさ、聖王教会のカリムさんに在り処を占ってもらえば?」

「うくん、そんなことで占ってもらえるのかな〜??」

「聖王陛下なんだし大丈夫だって」

「今年のハロウインは、みんなで七鍵守護神の魔導書探しだね!」

リオココロが随分と乗り気だなくと思っていたら、

「ちよつと待つていただけませんか?!」

「アインハルトさん?」

「どうかしたんですか?」

「あの……私、今年のハロウインのために先週からいっぱい準備をしたんですが……」
そういえばそうだった。

「ですよ。アインハルトさんのコスプレも見たいし、七鍵守護神の魔導書はまた別の機会にでも探せばいいんじゃないかな?」

リオがチツチツと指を振る。

「何をおっしゃるクリスマスさん——」

「うん、クリスマスはしゃべれないけどね」

うさぎさんだ。

「ヴィヴィオもアインハルトさんも大事なことを忘れてるよ? それこそこれこれこれってね!」

ハロウィン当日。

仮装したわたしたち4人は、金髪お嬢様のいるダールグリユン邸を訪れていた。

「トリックオアトリートっ!」

「どうしてわざわざ遠いうちに来るんですのおお!」

「お菓子がいっぱいもらえそうだから?」

「……まあ、来たからにはあげますけど」

「流石はおかん」

「おかんさん……」

「ヴィクターさんは母親のようですね」

「アインハルトまでっ!」

「まあまあヴィクターさん。代わりとってはなんですけど、ここに来る途中、また行き倒れてたので拾ってきたこの方をプレゼントしますんで」

わたしたちの背後に隠れていた黒いジャージの人を前に突き出す。

「やつはろく」

どこで覚えたその挨拶。

「ジークっ!? ……交渉成立ね。エドガー、お菓子の蔵を開けなさい!」

「かしこまりました、お嬢様」



こうして大量の食料（お菓子）をゲットしたわたしたちはその足で聖王教会本部へ。

「そういえばカリムさんって名前を聞く度に仮面ライダーカリスを思い出すんだよね

……」

「うん、それリオだけだから」

早速カリムさんに七鍵守護神の魔導書の在り処を尋ねると、

「せっかくのハロウィンなのだから、お菓子の代わりに占ってみましょうか?」

なるほど。

ハロウィン効果で普段は占わないことまで占ってもらえる。これがリオの言ってい

た「それはそれこれはこれ」か!

こういう時は、意外と策士なんだよなあ。

すると、カリムさんが首を傾げた。

「あら? 結構近いのかしら……教会本部の裏手にある森の奥……」

「騎士カリム、それはもしかして例の洞窟のことでは?」

「あゝ、アレのことね」

カリムさんとシャツハさんが頷き合った。



こうしてわたしたち一行は、カリムさんに教えられた通りに森を進む。そして、ぼつかりと開けた場所に出た。

小さな岩山がある。

「ここ、これが聖王の洞窟?」

「まさかこんなところに未知のダンジョンがあったなんて……」

内部はもともと自然の洞窟だった空間を、人の手によって加工された造りになった。床は整地され、壁には古い壁画が描かれている。

「どのような由来があるのでしょね？」

「えっと……竜の神さまから光の玉を授かった聖王が魔王を退治する——といったような内容だと思いますけど」

どこかで聞いたような話だ……。

最深部の部屋には石碑が置かれており、

「ヴィヴィオ、ここってロトの洞窟？」

「うん、わたしも今そう思ったけど言っちゃダメえええ！」

「大変だよ、ヴィヴィオ、リオ！　こんなところに怪しい玉座がつ！」

「どうしてこんなところに玉座があるのおお!？」

「まさか後ろに隠し階段があるとか？」

「流石にそんな竜王の城みたいなことは……」

「ヴィヴィオさんありましたよ、隠し階段。これですよね？」

「ええ」

「竜王がいたりして？」

「いやいや」

「じゃ、ゾーマ？」

「いやいやいや——」

否定しながら階段を下りていくとケーキ屋があった。

『こんなところにお店があつてごめんなさい』

わたしは見なかつたフリをして石碑の部屋に戻つた。

「そんなネタ誰も知らないよっ!？」

「ちよつと待つてヴィヴィオ!」

「今度は何っ!？」

「あんなところにさつきまでなかつた謎の扉が!」

「え〜」

ドアノブは真鍮製で、よく手入れされた黒い樫の木で出来ていた。

「とりあえずロトの石版……じゃなかつた、石碑を読んでみたら?」

「うん、そうする。」

私の名は聖王。私の血を引きし者よ。

毎週土曜日ではなく、1年に1度、ハーロ・イーン日にだけ、ラダトー……じゃなかつた、ベルカから遠く離れた彼の地に通じる転移の扉を使い、伝説の魔導書を託した――。

何その異世界食堂……」

要するに、どこでもドアみたいなものなのだろうけど……。

「開けたらアレツタさんみたいな格好したユミナさんがいて『いらつしやいませ!』とか、中の人ネタはもうお腹いっぱいだよっ!」

「いや待ってヴィヴィオ、ここがもしロトの洞窟だとすると……」

「うん、聖王の洞窟だからね、リオ」

「この扉はただの転移装置ではなく魔王の爪痕——つまり、大魔王ゾーマの城に通じてるんだよ!」

「な、なんだってー!? って、そんなことあるはずないでしょおお!」

「ほら、ドラクエ3でゾーマを倒すと城が崩れて、出来た裂け目に飲みこまれると、この洞窟のひび割れから出てくるでしょ?」

「その光景は少しプレシアさんに似ていますね」

「え〜」

「つまりリオが言いたいのは、この扉が魔王城に通じているんじゃないかってこと?」

「そうそう」

「魔王城……まさか、ヴィヴィオさんのおうちのことでしょうか?」

「やめてー、わたしもちよつとそう思ったけどやめて〜」

コロナが扉に歩み寄る。

「少なくとも、転移魔法がかかっているのは確かだと思おうよ？」

「本当にいい!? これ、扉を開けても平気なのかなあ……」

「うん、たぶん平気だと思う」

「コロナが言うなら……じゃ、開けるよ？」

「「おっつ！」」

リオが祈る。

「なのはさん来い！ なのはさん来い！」

「やめて〜」

コロナも祈る。

「私はユミナさんユミナさん〜」

「だから、ねこやとかないから！ あ〜、でもなのはママよりはマシかく、こうなったら

わたしもユミナツタさんでええ！」

「どちらであろうと私が倒してみせますから！」

「倒しちやダメえ〜」

——カランコロン！

ドアベルが鳴った。

「いらっしやいませ〜」

目の前に広がるのは複数のテーブルや椅子。

まさか本当に異世界食堂っ!?

大穴でミウラさんちとかああ！

「——あらヴィヴィオ？ ハロウィンだからってわざわざ海鳴まで友達と一緒にお菓子
をもらいに来たの？」

わたしに声をかけてきたのは、なのはママによく似たエプロン姿の大人の女性。

「……………って、桃子さんっ!？」

異世界食堂ならぬ異世界喫茶店だったというオチだけど、リオがポンと手を打った。

「そっか、ゾーマは“大”魔王で、バラモスが魔王だったでしょ？」

「うん」

「なのはさんがバラモスだとしたら、その上に君臨する大魔王は……………」

「あゝ」

納得。

ちなみに七鍵守護神の魔導書は高町家（ママの実家）の物置にありました。

緊急ヴィヴィッド会議　なのはV i V i dはどこへゆくべきか

表紙に“大団円”——と書かれたコンプエース12月号片手に、わたしはナカジマジムのドアをジェットステップでくぐった。

「みんな大変だよおお！ 『月刊コンプエース』で連載してた『魔法少女リリカルなのはV i V i d』が終わっちゃったんだけどおお——っ!!?」

リオコロが顔を見合わせる。

「ついに来るべきモノが来たというか……」

「私の中の人も、ありがとうv i v i dとか、本屋行かなきゃとか、ツイートしてたよ」「ボクとヴィヴィオさんの再戦はどうするんですかああ!?!」

ミウラさんのストレッチをグイグイ手伝っていたユミナさんが言う。

『V i V i d S t r i k e !』でも、ヴィヴィオちゃんと戦う前に負けてたしね〜」「ぐはああ!」

「私もまだジークさんと再戦していませんのですが……今度こそ勝ちたかったです！」

「アインハルトさんはまだいいですよっ！　わたしなんて『V i V i d』本編で、一度もジークさんと戦ってないですよおお!？」

ついでに言っておくと、雷帝ヴィクターさんとはナカジマジムのメンバー誰一人として戦っていない。なんてこったい。

というわけで、

『緊急ヴィヴィッド会議　なのはV i V i dはどこへゆくべきか』

リオが言う。

「何この秘書子さんが直筆で書いてそうなタイトルは……?」

「気分的にそんなだったの！」

——というわけで、ずっと黙ってたノーヴエ、何か意見を出して!」

デスクワークが嫌で逃げ出してきた我らがコーチ様に話を振ると、

「いや、あたしはもう、ジムの会長だしさ」

なんかもう頭をかいて照れている。

「くうううっ!　この牙を抜かれた狼めええ!　ゲーセンで台パンしてたころは、あ

んなにギラギラしてたのいい——っ!!」

「してねええよっ!？」

仕方ない。

ここは主人公のわたしが、率先して意見を出すしかないだろう。

「例えばなんだけど、こんなのはどうかな？」

高町ヴィヴィオが進級して半年後。

日々、ストライクアーツの訓練を続けていた彼女のもとに『所属不明の魔導師が急速接近中』との警告が響く。

——押忍っ、相手にとって不足なし!

不穏なものを感じながらも、謎の魔導師を迎え撃つヴィヴィオ。

それが、後に『闇の書っぽい事件』と呼ばれる、ある冬の悲しくも優しい出来事の幕開けだった」

「……ヴィヴィオ、それって『魔法少女リリカルなのはA's』だよね?」

「だからねコロナ、こういうことなんだよ。

『Vivid Strike!』をなかつたことにして、『Vivid』の続編——『魔法少女リリカルなのはVivid As』を始めるんだよおお!!」

「どうしてなかったことにするんですかああ——っ?!?」

「あ、フリーカさんリンネさん、いたんですか?」

「いきましたよっ!?!」

フリーカさんがポニテを揺らしながら言う。

『V i V i d』の話をされているようなので、わしとリンネは黙っとったんですが……」
「いやほら『V i V i d S t r i k e!』は『I N N O C E N T』みたいな感じで並行世界の1つということにしちやったりなんかして……」

「やめてー、私とフリーちゃんの熱いバトルが〜」

「さっきのストーリーは『V i V i d S t r i k e!』の後でええじゃないですかああ
!?!」

「あ、クリアカード編みたいなの?」

つまり、わたしがアインハルトさんとおそろいの中等科の制服を着るということで、
「……それはアリかもですね〜。問題は、わたしにあのグリーンっぽい制服が似合うかどうかですが、一応『F o r c e』で着てるしなあ〜、でもカラーじゃなかったし……」

いや待てよ、アインハルトさんと制服交換したことあったよーな？」

みんな、藤真拓哉先生画集『V i d g i r l s』で確認しようっ！

「さり気なく宣伝してみたところで、リオ、他に何か人気が出そうな展開とかない？」

面白ネタならリオに限る。

「ん、人気が出るかどうかはわからないけど、驚きの展開が欲しいならこんなのどう？

U15ナショナルチャンプの座を得たヴィヴィオは、全ての魔力を使い切り、ストライクアーツの世界から引退することを決めました。

普通の女の子になったヴィヴィオは、いつものように朝起きて、なのはさんと朝食を食べ、学校に行き、授業中に居眠りをして先生に怒られ、あたしたちと遊んだり——そんな、どこにでもあるような平穏な日常、普通の学校生活をおくります。

そして最後、学校からの帰り道、ヴィヴィオはオモチャ屋のトラックにはねられて死んでしまいます」

「ヤメテー、何そのミン●ーモモみみたいなトラウマ最終回っ!？」

「救済はあると思うけど、当時リアルタイムで見てた人はどんな気持ちだったんだろうね？」

「知らないよっ!! 誰か教えて！」

——コロナ、コロナは何かないの？」

1年からの大親友が「うーん」と唸る。

「やつぱり基本は押さえておくべきだと思っただよね。だから……」

現代に復活した古代ベルカの、とある王国との戦いに勝利したヴィヴィオ。

つかの間の平和を満喫していると、新たな敵が攻めてきます。まだ傷が治らないヴィヴィオを心配して、私とリオが戦いに挑みますがあえなく敗北。

私たちを助けるためにヴィヴィオは再び戦場へ。しかし、ケガのせいで本調子が出せず、新たな敵に敗北寸前。

そんな、ポロポロになったヴィヴィオを救い出したのは、私より強い人に会いに参ります——と、修行の旅に出ていたアインハルトさんでした。

新たな敵との戦いをアインハルトさんに任せたヴィヴィオは、傷の治療を兼ねて地球に留学することに……。

次回から『魔法少女リリカルなのはV i V i d 覇王』始まりますっ!」

「何そのマジンガーZみたいな主役交代劇はああ!」

「大丈夫、大丈夫。知らない人も多いと思うけど、グレートマジンガーって後半、兜甲児がアメリカから帰国して、最終回では逆にポロポロになったグレートの代わりに、マジンガーZで獅子奮迅の活躍をみせるから。」

ものすごいんだよ? 敵の空中要塞に乗りこむとスクランダーカッターで敵の幹部

を真つ二つ。最後は自力で飛ぶことも出来なくなったグレートに肩を貸して、空中からのブレストファイヤー。これはスパロボの合体攻撃——ダブルバーニングファイヤーの元ネタだね」

「そんな豆知識いらないよっ!？」

ダメだ。

このままでは『魔法少女リリカルなのはZ』とかになつちやいそうな勢いだ。

なのはママは昔『ギヤラクシーエンジェルZ』とかやつてた気はするけど……。

ここはナカジマジム一番の常識人にお任せするしか……。

「ユミナさくん、何かお願いしま〜す!」

「え、私っ? ん〜、そうだな〜、やつぱり私を含めたViViDチームみんなに出番があるといいよね!」

「おう、流石ユミナさんっ!」

「だから、しつかりこれまでの学園モノの要素は残しつつ……

春。

今年も親友のリオコロと同じクラスになったヴィヴィオが、教室の窓からぼ〜つと外の風景を眺めていると、

『ちよつとヴィヴィオ、ヴィヴィオってば!』

『え?』

『ずっと声をかけてたのにちっとも返事がないんだもん、驚いちゃった』

『リオ、コロナ……あ、ゴメンゴメン。今日もアインハルトさんたちと一緒に帰ろうか?』

『……アインハルトさん? 誰それ?』

『いや、だからアインハルトさんだって』

『もうヴィヴィオ、夢で見てたんじゃない? 私たちアインハルトさんなんて知らないよ?』

『何を言ってる……去年1年みんながんばってきたじゃない。ユミナさんとミウラさんも加わって、5年生に進級した今年からはU15のチャンピオンを目指そうって……』

『5年生って……今日は、私たちが4年生に進級した始業式だよ?』

『えええ!』

慌てて学生証を確認すると、

『……4年生だ。そ、それじゃあ、アインハルトさんも、V i V i dのみんなも、みんなわたしの空想だったの……?』

みたいな感じで

「それ夢オチだよねっ!? 『ハイ●クール奇面組』的なの! ていうか、ユミナさんもみんな

なも出れてないですよねええ!」

「『劇場版 魔法少女リリカルなのはVivid 前編 始まりの物語』お楽しみに!」

「それ、わたしの首が大変なことになりそうだからヤメテエエ!」

あー、と、かな恵ボイスが。

「そうだヴィヴィオさん! いっそのこと『高町さんちの今日のごはん』とかどうでしょう?」

「ダメええ! ミウラさんそれダメええ! 全力全開でパクリだよおお!」

確かにコンプエースを読んでたら、新連載のカラーページと本編の間に、唐突にカラー広告が入ってたけどおお!」

すると、

「ふう、ヴィヴィオさんもみなさんも落ち着いてください」

「アインハルトさん……」

漫画でU15のチャンピオンになったせいとか、いつもより泰然自若な雰囲気だ。

「確かにコンプエースの『魔法少女リリカルなのはVivid』は完結しました。ですが、終わらない物語はありません——」

「バスタードやハンターハンターは? ファイブスターとか、ベルセルクとか……」

「リオ言つちやダメええ、小説アルスラーン戦記だって31年かかったけど、ついに完結するでしょおお！　はああ、一閃必中、セイクリッドブレイザー——ツ!!」

「ぎにやああああ!!」

「みなさんも聞いてください。

『V i V i d』のあとのストーリーは『V i V i d　S t r i k e!』で知ることができませんが、そこから先の未来——例えば『F o r c e』の時代、中学生になったヴィヴィオさんが、私、リンネさんの後を継いでU15のチャンピオン。私はといえば、ついにジークさんとヴィクターさんを破り、U19のチャンピオンになる未来も有り得るわけです」

「うわ、まさに夢ですね。でも、その時はみんなで記念写真を撮りましょうね!」

「はい。今の私では、まだまだ力不足かもしれませんが、未来が決まっていけないということとは、自由に想像の翼を広げられる——ということではないでしょうか?」

「……つまり、ここから先は原作を気にせず、好きに設定を盛りまくっても問題ない。そういうえば、この小説も『V i V i d　S t r i k e!』のあとくらいの設定でしたかね?」

「ええ。そうですね、ヴィヴィオさんがよく使う地球の作品で例えるなら——『もうちつ

とだけ続くんじや』みたいなものでしょうか？」

「「「「「あゝ」」」」」」

ドラ●ンボールは、そのあと6年も続いたような……それどころか、現在でもアニメ・ゲーム・漫画と次々に新作が発表されている。

『リリカルなのは』や『V i V i d』も、ド●ゴンボールみたいになるといいですねゝ」
「はい」

とはいえ、あのアインハルトさんがキレイにまとめてしまったというのは……。

「アインハルトさん、熱でもあるんじや？」

「ありませんよおおっ!？」

そんなわけで、都築先生&藤真先生、『魔法少女リリカルなのはV i V i d』完結おめでとーございます。そして、8年間の長期連載お疲れ様でした！

素晴らしい作品をありがとうございました!!

ヴィヴィオの自由研究　　くお婆ちゃんおいくつですか？

く

1

今日は珍しくなのはママが出張中なので、フェイトママと2人きりの夕食です。

「あ〜ん」

「フェイトママ、わたし1人で食べれるから〜」

「いつもなのはとはやってるのになっ!?!」

「やってないよおお!?!」

「私の目にはそう見えるのおお!」

うん、面倒臭い。

すると、フェイトママの話が急カーブする。

「そういえば夏休みのことなんだけど……」

「何そのいろは坂……」

頭文字Fである。

「自由研究って何をやったの? 観察や工作はしてなかったみたいだけど」

「あー、ほら、ちょうどプレシアお婆ちゃんと再会した頃だったでしょ?」

「……うん」

フェイトママの歯切れが悪い。

まあ、そう簡単にあの溝は埋まらないだろう。

でも、いつかは……。

という話は置いといて、

「だから、何かとはつきりしないプレシアお婆ちゃんの年齢について調べてみたんだけど」

「ナニソレエエ!?!」

フェイトママが顔を両手で覆い隠した。

一度お茶を飲んで心を落ち着かせると、指の隙間からこっそりわたしを見る。

「でも、それって、母さんに尋ねたら一発で解決なんじゃ……」

「ダメダメ! それって先生に答えを聞くようなものですよ。自分の力で、調べて、考えて、答えを導き出さないと自由研究にはならないよっ!」

「……あうつ、確かに」

そんなわけで今回は、フェイトママと一緒にわたしの自由研究『お婆ちゃんおいくつですか?』をご覧いただこうかと思えます。

「クリス、準備お願い——」

2

空間ウィンドウが開き、わたしの調べた年表がズラリと並んだ。

「あ、フェイトママ、律儀に全部読まなくていいからね。あくまで研究用の資料だから、必要な時に、必要な箇所をチェックするだけでいいよ——」

● 2004年10月1日〜12月24日……TVアニメ『魔法少女リリカルなのは』
放映。

● 2004年11月26日……ドラマCD『魔法少女リリカルなのはサウンドステーション01』発売。

※アニメの2・5話を収録。

●2005年1月13日……ドラマCD『魔法少女リリカルなのはサウンドステージ02』発売。

※アニメの5・5話を収録。

●2005年4月6日……ドラマCD『魔法少女リリカルなのはサウンドステージ03』発売。

※アニメの14話を収録。

※ドラマCDはTVアニメと同じ世界。

●2005年10月11日……小説版『魔法少女リリカルなのは』初版発行。

※発売日は9月1日。

※小説版はTVアニメとは別の並行世界。

●2005年10月1日～12月25日……TVアニメ『魔法少女リリカルなのはA's』放映。

●2006年4月1日……魔法少女リリカルなのは／魔法少女リリカルなのはA's ビジュアルファンブック』初版発行。

●2007年4月1日～9月23日……TVアニメ『魔法少女リリカルなのはStrikerS』放映。

- 2010年1月21日……PSP用ゲーム『魔法少女リリカルなのはA's PORTABLE | THE BATTLE OF ACES』発売。
- 2010年1月23日……劇場アニメ『魔法少女リリカルなのは The MOVIE 1st』公開。
- 2010年7月7日……漫画『魔法少女リリカルなのは MOVIE 1st THE COMICS』1巻 初版発行。
- 2011年4月13日……漫画『魔法少女リリカルなのは MOVIE 1st THE COMICS』2巻 初版発行。
- 2011年12月22日……PSP用ゲーム『魔法少女リリカルなのはA's PORTABLE | THE GEARS OF DESTINY』発売。
- 2012年7月14日……劇場アニメ『魔法少女リリカルなのは The MOVIE 2nd A's』公開。
- 2013年7月30日……『魔法少女リリカルなのは The MOVIE 2nd A's オフィシャルコンプリートブック』初版発行。
- 2014年3月26日……漫画『ORIGINAL CHRONICLE 魔法少女リリカルなのは The 1st』1巻 初版発行。
- 2016年8月26日……漫画『ORIGINAL CHRONICLE 魔法少女リリカルなのは The 1st』1巻 初版発行。

女リリカルなのは The 1st』7巻(完) 初版発行。

「——さて、そもそも、どうしてプレシアさんの年齢がハッキリしないのかと申しますと、

①初代TVアニメ『魔法少女リリカルなのは』——いわゆる『無印』の公式HPにおいて、プレシアさんの年齢が“(??)”と表記されていたこと。

(※2017/11/10現在確認済み)

②『無印』の第10話において、アリシアさんの駆動炉事故が『PT事件』の“26年前”という台詞があったこと。

③ドラマCD『魔法少女リリカルなのはサウンドステージ02』のCDジャケットのキャラ紹介で、プレシアさんの年齢が“(40歳)”と表記されていたこと。

この3つが原因だったりします」

「でも、③——公式の出版物に40歳と書いてあったのなら、ハッキリしないなんてことは……あ、そうか! そうなるとアリシアの亡くなった事件が、母さんが14歳の時つてことになるんだ。だとすればアリシアを産んだのは……母さん、若つつ!」

「うん、そんなリアル『ママは●学4年生』ないとは言わないけど、流星に無理があるでしよっ。」

「……確かに。アリシアと一緒に頃の頃の母さんの外見は、ちゃんと大人だものね」

「うん。すると、次に発売された小説版『魔法少女リリカルなのは』に、プレシアさんの年齢についてのヒントが隠されていました。」

正確な年齢こそ書いてなかったものの、アニメの『PT事件』の26年前」と合わせて計算することで、プレシアさんの年齢を、ほぼ「59歳」と特定することに成功しました」

「な、なるほど……」

「結果的に、『40歳説』と『59歳説』の2つが誕生してしまったと。」

ただ、さっき話したように、40歳説だとアリシアさんを5歳だと仮定した場合、産んだのが9歳になっちゃうから、現実的に考えて多くのファンが59歳説を信じ、採用したというわけ」

フェイトママは「はあ、大変だったんだね」と他人事のように嘆息した。
テストロッサ家の問題ですよ。」

「ところがどっこい！」

「え、まだあるのおお!？」

「ほら、年表を見てもらえばわかるけど……」

「ああ、映画！」

「そう。頑なに40歳説を支持していたファンからしてみれば、59歳説に反論できる
またとないチャンス！」

「そっか、ガンバレ！ 40歳説支持派！」

「あはは、何だか負けてる方を応援したくなるよね。でも、残念。パンフレットや円盤
についてきたブックレットはもちろん、ゲーム版、さらに、2年後に発売された『2nd
A's』のオフィシャルコンプリートブックにすら、プレシアさんの年齢について、
新たな情報は載っていませんでした」

「あゝ」

「そして、なんと40歳説支持派にトドメの一撃がああ！」

「もうやめてあげてええ!?!」

40歳説支持派のライフはもうゼロよおお！

「2014年からスタートした、漫画『ORIGINAL CHRONICLE 魔法少女
リリカルなのは The 1st』は、なんと、『無印』+『ドラマCD』+『小説』
+『映画』、それら全ての内容を合わせたという——いわば、1期なのはの集大成……いや、
メガシンカで究極体、悪魔合体してファイナルフュージョンを承認しちゃったよう
な、最終バージョン的な作品だったのですっ！」

しかも、そこで採用されたのが、これまで多くのファンが支持してきた、アニメと

小説の合わせ技——『59歳説』とほぼ同じ内容だったのだああ！」
 「あああ〜」

うん、フェイトママがorzポーズ取らなくていいからね。

「まあ、とはいうものの、やっぱりプレシアさんの正確な年齢は表記されてないし、漫画版だけで計算すると『58歳〜60歳』というブレは生じるんだけどね」

ちなみにこれは、作中の『4歳をすぎると——』という台詞と『あの子が学校に上がる前に……』というプレシアさんの台詞から、アリシアさんの年齢が4〜6歳であることに起因します。

5歳と断定できれば59歳に確定なのだけど。

「ううっ……」

「フェイトママ泣かないで。えつと他にも、漫画版の5巻で『プレシア・テスタロツサ……ミツドの歴史で23年前は、中央技術開発局の第3局長でしたが……』みたいな台詞があるんだけど」

「ダウトおお！」

「あ〜、うん。単純に26年前のミスだと思う。ひよつとしたら初版以降は修正されているかもしれないけど、もし直ってなかったら、都築先生、緋賀先生、それに出版社のみなさんチェックしてみてください」

「そこに何か次元世界規模の陰謀がああ!?!」

「うん、ないから。あと意外と突っこまれないんだけど、ほら、フェイトママ。アリシアさんの記憶にあるプレシアさんの顔と、フェイトママが初めて目覚めた時のプレシアさんの顔、覚えてる?」

「え、それは、まあ、覚えてるけど。……母さん、泣いてたから」

数少ない、アリシアさんにはない、フェイトママだけのプレシアさんの笑顔の記憶。「事故から20年以上経過しているのに、プレシアさんがほとんど歳をとっていないと思わない?」

「あ、ああああ59歳説ダウトおお!」

「あく、うん、それはもう覆らないから。たぶんだけど、魔力が高い人ってあんまり外見的に歳を取らないんじゃないかなと。リンデイさんもそうだし——」

『ホンマかつ?!』

「……今、一瞬、はやての通信映像が……」

「うん、八神司令だから……」

なんかもう盗聴されてるんじゃないかレベルでツツコミが入る。

「ま、まあ、はやてさんは置いて、わたしの自由研究『お婆ちゃんおいくつですか?』の結論。」

プレシアお婆ちゃんの最終年齢は、58歳〜60歳。昔から言われている59歳説で問題ない——でした!」

「そっか、59歳かあ〜」

「ところがどっこい!」

「まだあるのおお!」

「ここまでは表向き。あくまで優等生エンジェルヴィヴィオの答案だとすれば、ここから先は……フツフツ、悪魔の答え——デビルヴィヴィオの解答だああ! 心弱き者はここで去れ! しかし、世界の秘密をのぞきたい者は、心して見よおお!」

3

「世界の秘密って……リトバスみたいに言うけど、流星に今回は引っくり返しようなんじゃない?」

「チツチツチ、フェイトママ、ここからが高町家の魂（ソウル）を受け継ぐわたしの真骨頂だよっ!」

「高町家の魂って……あゝ、諦めないとか全力全開とか?」

「うん。そもそも、フェイトママ、どうしてドラマCDに40歳って表記されてたと思う?」

「え? それは……単純にミスっただけじゃないの?」

「サウンドステージ01〜03のジャケットを全て確認するとわかるんだけど、リンディ提督以外、全てのキャラクターに年齢が書いてあるんだよ」

「えっと、リンディ母さんは?」

わたしは頭を左右に振った。

「書いてない。これって書き忘れじゃなくて、公式HPでもそうだったんだよ。つまり、ドラマCDのキャラ紹介は、公式HPと同じ資料を元に作られたと考えられる。ということ……」

「もしかしてプレシア母さんの年齢って!」

「そう。おそらく、公式HPでは(?)表記だったけれど、制作サイドが使った資料には(40歳)と明記されていた」

「あああ!」

「仮に、最初から59歳と決まっていたとして、入力時に40歳と間違えるかということ……」

「流石に間違えない！」

「うん。それよりは、むしろ、初期の設定資料には40歳と書かれており、それを参考にドラマCDのジャケットも作られたと考える方が自然だよな。」

リンデイさんと違って、わざわざ年齢を(??)にした以上、何かしら決まっていたんだから」

「ということとは、40歳説も……」

「決して間違えではない。これもたぶんになっちゃうんだけど、あとから気づいたんじゃないかな、駆動炉の事故が26年前だと、年齢の辻褄が合わなくなるってことに。」

だから、制作サイドも悩んだんじゃないかなって……。

ドラマCDで表記した40歳を取るか、アニメで放映した26年前を取るかで」

「ど、どうしたら……」

フェイトママがオロオロしている。

「その答えは、なんと、あの因縁の小説版の中に隠されていたのだあー！」

「な、なんだってー！」

「押忍っ！ わたし、高町ヴィヴィオが、ど根性でクリスと一緒に小説版を、改めて詳細に調べ直してみました。」

すると……なんてことでしょう！

かつて、誰もが見落とし、誰もが諦めていた計算により、約12年ぶりに、新事実が明らかになったのですっ!」

「な、なんだってー!! (2回目)」

「これが勝利の鍵だ!! (ガオガイガー風に)」

特製・小説版のみを使った「プレシアさん年表」

●新暦47〜31年 (プレシア23歳) ……プレシア結婚。

※小説では、結婚当時のプレシアの年齢は明記されているが、何年かは書いていないため、逆算すると新暦47年〜31年のいずれかになる。

●新暦52年〜36年 (28歳) (アリシア0歳) ……アリシアが生まれる。

●新暦54〜38年 (30歳) (アリシア2歳) ……プレシア離婚。

●新暦57〜41年 (33歳) (アリシア5歳) ……アリシア死亡。裁判。地方で魔導研究に従事。

※小説の記述『数年のうちにくつかのプロジェクトを成功』とある。

“数年”は、教育を受けた年代、辞書、人の受け取り方で異なる。そのため広義で2〜10年とする。よって、以降のプレシアの年齢にも幅が生じる。

※当時はこの計算を行わなかった。

※アリシアの年齢は明言されていないが、小説内の文章より5〜6歳だと推察できる。しかし、クローンであるフェイトの年齢が5歳と計算できることから、アリシアの年齢も5歳が妥当と思われる。

●新暦59〜51年（35〜43歳）……時の庭園を購入。生命蘇生の研究が失敗。プロジェクトFを開始。

※小説の記述『わずか数年で記憶転写型クローンの素体を完成』とある。

“数年”は、教育を受けた年代、辞書、人の受け取り方で異なる。そのため広義で2〜10年とする。

※当時はこの計算を行わなかった。

●新暦61年（37〜53歳）（フェイト5歳）……フェイト誕生。リニス、フェイトの教育を開始。

●新暦62年（38〜54歳）……フェイト、アルフを使い魔にする。

●新暦63年（39〜55歳）（7歳）……フェイトの教育が終わる。バルディツシュ完成。リニスが去る。

●新暦65年（41〜57歳）（9歳）……4月〜5月にかけて『PT事件』。

※この年に41〜57歳だということは、4月〜5月の時点において、まだ40〜5

6歳である可能性が高い。つまり、享年40〜56歳ということに。

※ちなみに、小説において、プレシアの年齢が40歳という表記は一切ない。

また、アリシアの事故が26年前という表記も一切ない。

「ど、どういうことヴィヴィオ?」

「実は、アニメとドラマCDのあとに発売された小説版のみで計算した場合、40歳〜60歳前後、どちらが正しいわけでもなく、ほぼ全てに対応できるようになっていたんだよおお!!」

『ドラマCDに40歳とあったんだから、40歳だ!』

『アニメで26年前と言ってたんだから、40歳じゃおかしい。もつと年上だ!』

そんな2大勢力を融和させるため、同じ世界であるはずのアニメとドラマCDの世界を不都合なく融合させるため……そう、あえて小説版には、26年前も、40歳も、書いてなかったんだよおお!!」

「な、なんだってー!!! (3回目)」

「つまり、40歳〜約60歳の範囲内であれば、全て正解っ! 間違いはなし! コレこそが、当時、誰もたどり着けなかった、この世界の秘密だああ——っっ!!!」

「……つて、いやいや、流石にそこまでは」

などと話していると、突然、どこからか通信の回線が開いた。

長い黒髪女性の映像が、わたしとフェイトママの正面に映し出される。

『——よくやったわ、ヴィヴィオ。流石は私の孫娘ね』

「プレシアお婆ちゃん！」

「つて、母さん!? 聞いてたのおお!」

『もちろんよ』

フェイトママが焦ってお茶を嘔いている。

うちつて、色んな人から聞かれまくってるなあ……。

『いい、フェイト、よく聞きなさい。私の年齢は今日から40歳、40歳よ!』
うわ〜。

まあ、気持ちはわからなくもない。

「でも母さん、最終版の漫画でほぼ59歳って決まった——」

『サンダーレイジ』

言うが早いか次元を越えて小さな稲妻が走る。フェイトママの金髪をかすめテープ

ルが焦げた。

「ひやつ!! 母さん、しれつと次元魔法はやめて!」

『だまりなさい、フエイト。いい? いくら最終版だろうが、所詮は並行世界なのよ? 並行世界』

「うっ、そう言われると……」

『それとヴィヴィオ、あなたそこまで計算したならフエイトの本当の年齢についても気づいたんじゃないの?』

いきなり話を振られたわけだけど、

「あー、うん、アレって、やっぱりそういうことなの、お婆ちゃん?」

『まあ、そういうことなのよ。あくまで、リニスの知識では——』と書いてあったでしよ?。』

「うん。それと、当時のお婆ちゃんが急激に体調を崩した原因が、リニスさんを使い魔にしたことによる魔力消費なら、あの時点で、まだ1年しか経ってないはずだよね——」

『そう。流星は私の孫娘ね』

「ちよつと待つてええ!? ヴィヴィオも母さんも何の話をしてるのおお——っ!」

『フェイト、もしも、あなたが高町なのはや八神はやてよりも若い——と言われたら、今の年齢とどっちを信じるのかしら?』

「……え」

『そういうことよ。だから私も40歳』

「ちよつと待つてええ!?! あああ、もおお、百歩譲つて『PT事件』の時に40歳だったとして、あれから何年経つてると!?!」

『シヤラップ! アルハザードはミッドと時間の流れが違うのよっ!』

「ズルいっ!」

『フツ、諦めなさい、フェイト』

「アリシア、リニス、そっちで聞いてるなら何か母さんに言つてあげてよおお!」

テンパるフェイトママを横目に、プレシアさんがわたしに空間ウィンドウを向けた。

『ありがとうヴィヴィオ。私にとっては一足早いクリスマスプレゼントだったわ』

「どうしましたして。それでお婆ちゃん、どの辺りがクリスマスプレゼントだったの?」

『……さあ? どこかしらね』

フェイトママが「40歳の部分じゃないのおお!?!」と騒いでいる。

『ご想像にお任せするわ』

「母さん、そんなマリア様しか見てないような返しをしないでよおお!」

——2人とも仲がよろしいことで……。

フェイトママとプレシアお婆ちゃんのやり取りを黙って聞きながら、わたしはクスクス笑い続けるのだった。

アインハルトオンラインのススメ

「アインハルトさん、一緒にネットゲをやりましょう！」

ある日のナカジマジムの練習終わり。

わたしが唐突に提案すると、霸王流の継承者さんは困惑した表情で、その愛らしい虹彩異色をこちらに向けた。

「ネット……ゲ？ つまり、ネット・ゲを殺りましようというお誘いでしょうか？」

「いえ、ネット・ゲって個人名じやありませんし、仮に人だったとしても殺つちやダメですから」

ネットゲがネットワークゲームの略称で、インターネットに接続して遊ぶオンラインゲームのことだと説明する。

「この前、地球に行った時に買ってきたんです。はい——ナーヴギア」

「……………えー」

「ちよ、何なんですか今の間は!？」

「そんな強電磁パルスが発生して装着者の脳が破壊されそうなヘッドギアもデスゲームも嫌ですよおお!？」

「SAO（スーパー・アインハルト・オンライン）」

「アインハルトの頭文字は“E”ですよ!」

「大丈夫大丈夫。フェイトママもヴィクターさんもリオも、みんな平気でしたから」

「みんな電気の変換資質があるじゃないですかああ!」

わたしは「冗談ですよ」と笑いながら、アミユスファイア——円冠状のゴーグル型VRマシン——を手渡した。こつちなら安全である。

とはいえ、

「ん、アインハルトさんのことだから、ゲームでも正直に自分の素性を話しちゃうかもですね」

「何か悪いのでしょうか?」

「はあく、アインハルトさんはもう有名人なんですから、そんなことしたら人だからかきできて、わたしたちと遊べないじゃないですか」

「な、なるほど……それは困りました」

「そこで、万が一尋ねられた時のために、架空の設定を考えてみました。

三十路で独身のアインハルトさんは、格闘生活に疲れ引退。現実世界では、無職でコンビニに行くのも躊躇する引きこもりニートであり、日々、メイクもせずジャージ姿で過ごして……過ごして……。

あく、今も——青ジャージだし——似たようなもんか〜」

「何ですかその誤解を招きそうな発言はああ!? ヴィヴィオさんだっておそろいのジャージですよええ!」

「はい、おそろいですっ!」

可愛く微笑んでみせると、霸王さんが大地に膝をついた。

「そうそう。キャラの性別は自由ですから、嫁が男性キャラでもノープロブレムですよ!」

「はあ……」

「それと、名前は『もりもりちゃん』か『林』にしましょう!」

「しませんよ!?!」

アインハルト充のススメである。

「わたしのことは『リリイさん』と呼んでもらっても構いませんから!!」

「構いますよっ!?!」

「それにしても『リリイ』というと、生命体型リアクトプラグの方を思い出しますね。

ちなみに中の人はアスナさんと一緒だったんですよ? アミタさんと二人二役です
ね」

「えっと、どちら様でしょうか?」

「ほら、今から2年後くらいに出会う予定の『Force』のヒロインで、リレイ・シュトロゼックさんのことですよ」

「全力全開で未来の話をしないでくださいああ——いつ!？」

「ゲーム版の話ですけど、わたしたち去年、時間遡行した際に会ったじゃないですか」

「いや、確かに会いましたけど……記憶封鎖の意味がないですよね!？」

「まあ、ぶつちやけ、時間軸で考えると、トーマとはもう会ったことあるはずなんですよね。『Vivid』で会わなかっただけで。一度くらい登場すればよかつたのに……学院祭に来るとか」

「そこはほら、大人の事情というものがあつたんですよ、たぶん……」

「ですわね。それじゃアインハルトさん、またあとで『SAG』の中でお会いしましょう!」

『SAG』——正式名称は『サガ・オンライン』。どこかで聞いたような名前である。

人間・エスパー・獣人・モンスター・サイボーグ・ロボットから種族を選び、塔の頂上を目指したり、秘宝を集めたり、過去と現在と未来を行ったり来たり……やっぱりどこかで聞いたことのある、一部で大人気のVRMMOなのだ。

というわけで、早速ですがみなさんこんばんは、高町ヴィヴィオです。

夕食を終えたわたしは、自分の部屋でベッドに仰向けになってリンクスタート。

初心者の方——てっぺんにチェンソーで倒せる神様のいる塔前の広場に来ています。

アインハルトさんとの待ち合わせの時間まであと10分。

だけどその前に……。

「リオ、コロナ、お待たせ！」

「ヴィヴィオおっそ〜い！」

「早くこつちに隠れて！」

腕を引っ張られて、わたしのアバターが広場に隣接した建物に引きずりこまれた。

珍しく遅刻せずに早くやって来たリオが、ガミガミ言う。

「ヴィヴィオは普段とよく似た、エスパ―女性の金髪キヤラなんだから、アインハルトさんにバレやすいんだよ……って、よくよく考えるとヴィヴィオって金髪キヤラ多いよね。宮子とかマミさんとか松嶋みちるとか……」

「いや、今更言われても」

「あつ！ ヴィヴィオ、リオ、あれじゃない？」

3人で建物の陰から様子をうかがう。

キヨロキヨロと、初心者っぽい動きと装備の緑髪キャラが、噴水の前で立ち止まった。ベンチにも座らずジッと静止している。

「人間・男性キャラで、名前はハイデイ——」

「みんな忘れがちだけど、アインハルトさんの本名だよね」

「そろそろ出て行く？」

「リオ、もうちよつと待って」

最初は平然としていたもの、無敵の霸王様は次第に落ち着かない様子でそわそわ体を揺らし始めた。

——来たアア！

これぞ、THE・アインハルトさんだ。

いつもはイタズラ好きな、炎と電気の変換資質をもつ元気っ娘が言う。

「いい加減、かわいそうだよ」

「も……もう少し……」

「私、このシーンに見覚えがあるんだけど」

『Vivid LIFE』1巻で確認してね。

むふーっ、といった感じで困り顔のアインハルトさんを堪能したわたしは、救いの女神のごとく颯爽と彼女の前に姿を現した。

そして一言。

「こんばんは、林さん！」

「ハイデイですよ!?」 は、しか合っていないじゃないですか!」

「もりもりちゃんってばも〜」

「いやいやいや、そんな『ネット充のススメ』みたいに呼ばれても困るんですけど!」

慌ててリオコロが割って入った。

「すみません、アインハルトさん」

「ヴィヴィオがどうしてもやりたいっていうものだから」

しばらく2人を凝視すると、霸王さんはボンと手を叩いた。

「リオさんとコロナさんですか」

「よくわかりましたね!?」 コロナのロボットはいいとして、リオなんて一つ目の黄色いスライムなのに……」

先生と一緒。

「いえ、どこからどう見てもリオさんにしか……」

「……」

「……」

「あく、まあ、確かにこの丸みを帯びたボディとか何だかよくわからないところはリオっぽいかも」

「全然似てないよ!?!」

アインハルトさんの認識能力は、邪悪な呪いでもかけられたようにおかしいので、深く考えたら負けである。

「ちなみに、わたしもちゃんとヴィヴィオに見えてるんですか?」

「……残念ながら別人ですね。ゲームのキャラクターだと思います」

「ヴィヴィオが一番似てるのに!」

「じゃ、どうしてヴィヴィオのことがすぐにわかったんですか?」

そうリオコロが言うと、

「それはもちろん——」

「相方ですから!」

「あゝ」

ロボコロナが、アインハルトさんに基本動作をレクチャーしている。教えるのはコロナの方が上手いのだ。

「ねえ、リオ。アインハルトさんの中の人ボイスで、人間、男性で、名前も“は”から始まるし、見事に『ネット充のススメ』みたいになったよね」

「うゝん、でもーっ大きな問題が……」

「えええ!? 何かおかしなところあるかな」

「ほら、アインハルトさんじゃなくて、ヴィヴィオの方。相方になるヴィヴィオの場合、リアルも女の子だよね?」

うっ、確かに、『ネット充のススメ』は、お互いリアルとネットゲで性別が逆転しているところが面白い恋愛ストーリーなの……。

こゝ、こうなったら、

「……リオ、『ネットゲの嫁は女の子じゃないと思った?』」

「今日のお題そつちいい!?!」

ザッフィーは記憶喪失

1

ある日、八神家に呼び出されたわたしとミウラさんは、はやてさんからとんでもないことを切り出された。

「ザッフィーが記憶喪失くくくっつ!!?」

「そうなんや、ほんでな、自分を完全に犬やて思つとる」

「えー」

「ど、ど、どうしましょうヴィヴィオさん、師匠が、師匠があくくっつ!!?」

「ほらほらミウラさん、落ち着いてください」

ミウラさんは「ううっ」と、今にも泣きそうな顔つきでザッフィーの背中をなでてい
る。

「つまり……ハンマー的な何かでぶっ叩いて、記憶を取り戻そうとか、そういうご相談で

すか?」

「いや、それはもうヴィータがやったから」

グラーフアイゼンをゲートボールのクラブのように持ったヴィータさんが、そつと目を逸らした。

どうやら失敗したらしい。

「もしかして……ギガントフォルムで?」

「ちげーよ、ラケーテンフォルムだよっ!」

「どっちもいい勝負じゃないですかああ!」

とはミウラさん。

「ホントもう、治療が大変だったんだから」

どうやら、シャマルさんの癒しの風が発動するくらいの騒ぎだったらしい。

するとシグナムさんがやってきて、

「そんなに心配することはないらしいぞ。シャマルの知り合いの医者の話では一過性らしいからな、すぐに記憶も戻るだろうさ」

「な〜んだ、よかった〜」

「ただ、私たちの場合普通の人間とは違うから、ちよつと心配ではあるのだけど」

確かに、いくら無限再生の機能が失われ、人間と変わらない生活を送っている——と

はいっても『不老』ということだけでも、十分普通の人間と違うことがわかる。
ん、

「夜天の書の主になると、守護騎士みたいに歳を取らなくなる——みたいなオプシオンはついてないんですか？」

はやてさんが必死の形相でページをめくる。

「……い、今から追加することは可能やろか？」

「はやてちゃああんっ!？」

「大丈夫だって、はやてはまだ若いから！」

「まだ」

「まだ？」

「くわああく、早くなのはちゃんから『凍れる時間の秘法』を蒐集しないとおお——っ

!？」

「いやいや、使えませんか……」

たぶん。

「それで、わたしとミウラさんが呼ばれた理由なんですけど」

「あ、そやった。危うく本題を忘れるところやった……。実はな、間が悪いことに私ら全員、今日から3日ほど出張なんや。」

ほんで、その間ザフィーラの散歩やご飯を2人をお願いしたいんやけど」

「犬のエサ……ドックフード？」

「いやいや」

「そうですよヴィヴィオさん、師匠のご飯なんですから超高級缶詰のおお——」

「いやいやいや、いくら自分のことを犬やて思つとる言つても流石にそれはなく。ちやんと冷蔵庫にご飯を作り置きしといたから、それをレンジでチンするだけでええよ。

それと、2人の分も作つてあるから、好きに食べたつてや」

「わあ〜っ！　ありがとうございます！」

はやてさんは料理上手だから楽しみだ。

「ま、ハズレもあるけどな」

とはヴィータさん。

「何そのロシアンルーレットっ!？」

「シヤマルが作った分やけど」

「シヤマルが作った分だけどな」

「シヤマルが作った分だがな」

「みんな酷いっ!？」

「みなさんケンカはやめてくださあ〜い!」

そんな八神家とミウラさんを横目に、わたしは青い犬（狼）の前でしゃがみこんだ。

「ね、ザフィーラ、本当に記憶喪失になっちゃったの?」

「わんっ!」

今度クリスにパウリンガルの機能を追加してもらおうと思った。

こうして、わたしとミウラさん『2泊3日のザフィーラお世話生活』が始まったのだ
た。

2

早朝。

朝の陽光に照らされた海面が輝く中、ランニングを兼ねた散歩で、わたしはザフィーラ
の背に乗り砂浜を爆走していた。

「流石ザフィーラ、サラマンドーよりずっとはや〜いっ!」

「ヴィヴィオさん、それ言いたいだけですよねええええっ!?」

後方から必死に追いかけてくるミウラさんが、続けて叫ぶ。

「やっぱりリードつけた方がいいんじゃないでしょうかああええええっ!?」

「大丈夫ですよ。ザフィーラはお利口だもん。ねえ、ザツフィー?」

「ガオええええっ!?」

「ううっ……師匠ええ」

ニヤンコ先生ならぬワンコ先生である。

そろそろいいかな?

「ザフィーラ、ストオオええっ!?」

「よ、ようやくですかあええ」

ゼーゼー言いながら追いついてきたミウラさんだけど、足腰の筋肉はまだまだ余裕がありそうだ。

流石はよく鍛えてある。

「お疲れ様でしたええ。まあ、人が多くなったらちゃんとリードつけますから大丈夫ですよ。あ、そんなことより、ミウラさん、サムスピごっこやりませんか?」

「サムスピ?」

「GO! パピーっ!」

外見でいえば、ナコルルかレラの愛狼シクルウにそっくりなのだけど。

わたしの掛け声で、ザフィーラがミウラさんに飛びかかる。

「うわっ!?! ちょ、師匠、やあ〜」

傍から見ると、青い巨犬が少女を砂浜に押し倒している——というかなりデンジャァーな光景なのだけれど、実際はベロンベロンである。ザフィーラがひたすらミウラさんをなめ倒すという。

もはやらめえの世界である。

「ヴィヴィオさん、ストップ、ストップ、ストップううう〜っ!」

「はっはっは、よいではないかよいではないか〜。悪代官ではないけれど聖王だからいいよね?」

「いいわけないじゃないですかあ〜っ!」

などと遊んでいたら、偶然通りがかった人が「少女が大きな犬に襲われている!」と勘違いしたらしく通報……ふう、聖王教会の力（権力）は偉大だなあ……。

その後、わたしたちの手でザフィーラの記憶を取り戻そうと、シヤマルさんのご飯をザフィーラに食べさせたり……。

まあ、食べなかつただけ。

「五感の鋭い動物は、毒入りの食事を見抜くらしいですからね」

「ミウラさん、何気に黒い台詞を……」

「シヤマルさんのご飯でシヨックを与えて記憶を取り戻させよう、って言ったのヴィ
ヴィオさんじゃないですかああ——っ!？」



アインハルトさんとリオコロが遊びに来て、

「シュトウラの雪豹を思い出しますね……」

「あたしはやっぱり実家の猫かな」

猫という名のタイガーだけ。

ザフィーラとじゃれあつたり、

「荷電粒子砲、ファイヤアア——っ!!」

コロナのジェノザウラー（ゴーレム）と戦わせて、ゾイドごっこをやったり、とても楽しかったのだけど……、

「ヴィヴィオさん、やっぱり師匠の記憶は取り戻せませんでしたね」

4

みんなが帰ったあとの八神家リビング。

窓の外はすっかり日が落ちており、静かな波の音だけが聞こえてくる。

「うくん……」

「どうしたんですかヴィヴィオさん、そんなに考えこんで？」

「はい。いつそのこと、このまま犬だと思っっている方が、ザフィーラにとっては幸せなのかなって」

「な、なんですか!?!」

「ザフィーラって、ずっと戦ってきたわけじゃないですか……それこそ、古代ベルカの時

代から何百年も……だったら、この辺りでもう拳を収めて、普通の、戦いのない生活を送つてもいいんじゃないかって……」

「そ、それは……そうですけど……」

顔を上げたミウラさんが、真剣な眼差しで真っ直ぐにわたしを見つめる。

「ごめんなさい！ ミウラさんの気持ちはうれしいんですが、わたしにはアインハルトがいますのでええ！」

「違いますよっ！ そーいうんじゃないですからああ——っ！

えっと、ですね、ボクはもう八神家道場の生徒ではないですが、今も、かつてのボクみたいに師匠から格闘技を習っている子たちがいて、きつと、そこから強くなつて、ボクやヴィヴィオさんのように、大きな大会で活躍できる子が生まれるかもしれない……いえ、強くなれなくつたつて、みんな格闘技が大好きで……それは、師匠のお陰で……ヴィヴィオさんだつて、最初に格闘技の楽しさを教えてもらったのは師匠からなんですよね？」

「……はい」

「そんなボクたちを見る師匠の目は、厳しいですけど、同時に本当に嬉しそうで、楽しそ

うで、きつと……いえ、絶対に満足していたはずです。

格闘技を教える自分。

格闘技で戦う自分。

だって、師匠も格闘技が大好きだから、このまま戦いを忘れてただの犬として過ごすより、師匠なら絶対、戦う自分を選ぶはずです！」

「ミウラさん……」

わたしはザフィーラを見つめる。

「そう、ですね……そうですよね、ザフィーラはヴォルケンリッターの盾の守護獣だもんね、例えば記憶を失っても、その胸には騎士としての誇りがあるはずだもんね……」

「ヴィヴィオさん……」

「すみません、ミウラさん。わたしが間違っていました……でも、今のうちに結婚とかさせてあげたいなうって。記憶が戻ったら絶対にしないだろうし」

「あはは、それはボクもちよつと思えますね、うって、あれ？ ああ、ちよつといいですかヴィヴィオさん？」

「はい？」

「師匠って、その、相手の女性は犬の方がいいんでしょうか？ それとも人の方がいいんでしょうか？」

「……うつ、うくん、どうなんでしょう？」

ザフィーラの好みの女性なんて聞いたことがない。

「例えば、海鳴にいたところお付き合っていた女性がいるとか？」

「うくん、そういうのは……あ、でも、唯一可能性があるとすればアルフかなあ〜」

「アルフさん、ですか？」

「あ、はい。ミウラさんも映画で見たことがあると思うんですが、フェイトママの使い魔で、オレンジ髪の人型とわんこフォームになれる……」

「ああ〜っ！ 夏の映画で師匠の背中に乗っていた！」

「はいはい、その子です！」

「以前はもつと大きくて、師匠の色違いみたいだった方ですよね？」

「あ〜、はい」

色違いかあ〜。

でも、当たらずといえども遠からずかも。

「確かに……ボク、戦いの場で、あんな風に誰かを背中に乗せてる師匠なんて初めて見ました。余程アルフさんのことを信頼しているんですね……ムムツ、これは脈アリかもっ!?」

「問題は守護騎士と使い魔の組み合わせってところなんですけどね……ん〜、でも、高町

とハラオウンと八神——三家の同盟関係をより深めるためにくつつけるのは確かにアリかもですね〜」

「そんなベルカ諸王時代みたいな考え方をしなくても〜」

「ミウラさん、ベルカの戦乱も聖王戦争も、わたしにとつてはまだ何も終わってないんです……」

「それ言いたいだけですよねっ!? アインハルトさんみたいでカッコイイからああ——っ!!」

懐かしのてへぺろで誤魔化してみる。

というわけで、地球から八神家にアルフを呼んでみました。

5

「がうっ!」

「はあく、まさかあんたが記憶喪失になってるなんて、あたしや情けないよ」

何だかちび●る子ちゃんみたいな口調で嘆息したアルフは、年々幼女化が進んでいる

気がする。

「モビルスーツもF91の時代には小型化したっていうしね！」

「ヴィヴィオさん、それ意味わかりませんか」

「それで、拳でぶつ叩けばいいの？ それとも斜め45度のチョップ？」

「あゝ」

何でこうアルフは昭和感が濃いんだろう。

「ヒーラー（シヤマルさん）がいないからパーティーアタックはなしの方向でね。あと、

一応そのうち思い出すって話だから」

「そう？ ま、このまま何も思い出せなくなるようなタマでもないしね。何だったら動

物形態にでもなつて話しかけてみようか？」

「あ、それいいかも！ 犬と人ではなく、犬と犬ならまた違った結果が出るかもだし」

思つたより早く記憶が戻るかもしれない。

アルフは「あいよ」と答えると、早速子犬フォームに変身した。完全に小型犬である。

「こ、これは可愛いですね……」

「ミウラさんつて、意外に可愛いもの大好きですよね」

「意外つて……」

「だからヴィータさんのことも？」

「ちよー、そーいうこと言わないでくださいよおお——っ!？」

こうして小さなアルフと大きなザフィーラの交流が始まったのだけど……。

「ほら、お互いにくんくんお尻の匂いを嗅いでるじゃないですか?」

「はい」

「あれって、犬の世界ではあいさつみたいなものらしいですね。犬は嗅覚が優れているので、お尻の匂いだけで、色々な相手の情報がわかるらしいですよ?」

「へえ〜」

「まあ、そもそもしつけや相性が悪いと、匂いすら嗅がない、嗅がせないみたいですけど……」

「あはは、そこは人間の世界と一緒ですね。上手く行くといいですけど」

「はい。上手く行けばカップル成立ですね〜」

ただこの光景、もし、アルフ（幼女）とザフィーラ（成人男性）が人型でやっていたと思うと……わたしはくるっと振り返った。

「ミウラさん、これって事案なんじゃ?」

「違いますよお!? 犬同士ですっ!」

「は……早く通報しないと……」

「しませんよっ!?!」

後日、記憶はちゃんと戻りました。

トリプルなのはブレイカー

ある休日の昼前。わたしとなのはママが楽しくリビングで談笑していると、その事件は起こった。

——ガク、ガク、ガク、ドシ〜ン！

突然の震動で、わたしはロングソファごと後ろに引っ繰り返った。天井が見える。

「ナニゴト——ッ!?」（みんな知らないだろうけど）まるで、藤子不二雄先生の名作『タイムパトロールぼん』で、主人公がタイムボートの点検整備を怠って、時間が巻き戻っちゃった時みたいな震動はああ!?!」

叫んだ瞬間、私の眼前で映像通信が開いた。

赤毛で三つ編みのお姉さんが映る。

『ありがとうございます、ヴィヴィオさん。ある意味、完璧かつ適切で、ほとんど正解っぽい解説でした』

「アミタさん!? ……つて、うわ、頭がアフロになってますよ!」

三つ編みは無事で、耳から上の辺りがモジャモジャとボンバーしている。

『はい。お恥ずかしい話ですが、現在わたしとキリエ、それに紫天一家、全員アフロです』

「あゝ、また何か実験に失敗して爆発したとか、そういう系のオチですか?」

『はい。誠に遺憾なのですがその通りです。時間遡行システムに、レヴィが遺跡で拾ってきたパーツを組みこんでいたところトラブルが発生しまして、そちらの世界にも影響が……』

「またですか……。だけど、去年みたいにわたしとアインハルトさんが過去に飛ばされたり、みたいなことにはなっていないみたいですけど、今度は一体何が?」

映像通信で会話しつつ、とりあえずソファから起き上がろうとすると、わたしの横でもぞもぞ動く謎の生物……。いや、見覚えのあるツインテール少女が……。つて、

「な、なのはママあゝ!? もう、こんな時にまた子供モードなんかして、だいたい、さっきまで向かいのソファに座ってたでしょ! そうやっていつもみんなのこと驚かそうとするから、ヴィータさんに『お前は子供んときから変わんねーな』みたいに言われるんだよ……。つて、なのはママ?」

なんだろう? この驚きに満ちた表情は?

「まさか、先週のザツフィーみたいに記憶喪失オチとか?」

小さいなのはママは目をパチクリして、

「え、もしかしてヴィヴィオちゃんなの!?!」

「ヴィヴィオ……ちゃん?」

「うん、そうだよ! ヴィヴィオちゃんだよね。久しぶり、高町なのはだよ。元気してた?」

1か月ぶりに再会した友人のように抱きついてくる。

どういうこととおお——と思ったら、

「ひゃあああああああああ!?!」

今度は、テーブルを挟んで向こう側のソファ——やっぱり引つ繰り返っている——から、大きな悲鳴が聞こえてきた。

「あ、あれ? 今のって目の前のなのはママの声じゃなくて、いつものなのはママの声!?!」

「もうヴィヴィオ、変身魔法で昔のわたしの姿になって驚かそうとするなんて。そんなことするからフェイトちゃんがいつも腰を抜かして……って、ヴィヴィオ?」

「私が2人じゃなくて、私を含めて3人？」

何だかもうなのはママまで混乱している。

映像通信から、アミタさんの申し訳なきような音声が届いてきた。

『まあ、そういうわけでは……』

「そういうことって、どーいうこと!？」

『ディアーチェによると、おそらくこれまで私たちと接触を持ったことのある別次元のなのはさんが、全て同一人物と認識されてしまい、誤って最近よくお世話になっているそちら——新暦80年の世界にまとめて転移してしまっただけ、みたいな感じらしいんですけど……。詳しくは現在調査中なので、詳細がわかり次第連絡します……。って、どうしたんですかシユテル、そんな前のめりになっちゃって!』

『た、高町なのはが3人ですか……。わ、私もそちらの世界にお邪魔させていただきたー
——』

『シユテルん、鼻血、鼻血いい——っ!』

『ぜひお手合わせをおお——』

ブチン——と音がして通信が切れた。

「……ふう。えっと、まあ、そういうわけらしいんで、お二人（子供なのは×2）ともア

ミタさんたちと面識は？」

「うん、あるよ！」

「うん、ある、けど……」

「私だつてあるよ！」

「うん、なのはママ（大）は答えなくていいからね。記憶封鎖が解かれてるから、事情は何となく理解していると思うんだけど、一応、お互いに自己紹介しときましようか？」

まずは、わたしの隣にいるなのはさんからお願いしまーす——」

「あ、はい。聖祥大附属小学校3年生、高町なのはです。アミタさんとキリエさんと会ったのは『砕け得ぬ闇事件』の時に、ヴィヴィオちゃんとも会ってるんだよ？」

「あ、『GOD』の時のなのはママだ！」

久しぶり、ともふもふし合う。

そして、今度はもうひとりのなのはママ（小）が話し出す。

「えつと、私はみなさんとは初めましてだと思うんですが、私立聖祥大附属小学校3年生、高町なのはです。アミタさんやキリエさんたちに会ったのは、『闇の書事件』の最中で、今は事件が解決した後ですね」

ん、もしかして……。

「あの、グレーム提督や、リーゼロッテさんやリーゼアリアさんって名前に聞き覚えはあ

りますか?」

「ううん、ないけど……」

「やっぱり! これって劇場版のなのはママだああ——っ!!」

「げ、劇場版っ?」

「いえいえ、こつちの話なんであまり気にしなくて大丈夫ですよ。そうなる……
そっか『GODサウンドステージM』の時かあ。时期的にはこつちのなのはさんと一
緒くらいだし、ある意味次元を越えた“双子”みたいな感じですね」

双子かあ——と、なのはママ（小）は2人で手を取り合った。まるで“鏡”。リフレ
クシヨンのよう……って、あ。

「まだ『Reflection』前ってことなんだ……」

「リフレクシオン?」

「いえいえいえ、それもこつちの話なんで」

ひよつとして映画『魔法少女リリカルなのは Reflection』の時、なのは
ママとフェイトママがシュテルやレヴィに会っても『自分に似ている』的な台詞が一切
なかったのは、かつて一度会ったことを無意識に覚えていたから——とか??

それはそれとして、いくら後で記憶封鎖がかかるとはいえ、何がきっかけで思い出す
かわからないので、映画関連の事情にはおいそれと触れないよう注意しないと……。

それにしても……。

2人の高町なのは（小）が、学校やフェイトママについて楽しそうに話している姿は、どちらがどちらか判別不能である。

常時バリアジャケットでも着てもらわないダメかなあ——などと思っていたら、

「あ、キタコレ！ 違い発見！ 私服だとリボンの色がGODなのはママ（小）が“白”で、映画版なのはママ（小）が“ピンク”。ついでに、ポニーテールなのが、なのはママ（大）だね！」

「そんな（大）とか（小）とか、どこぞの未来人じゃないんだから……って、まあ未来人だから概ね間違っていないんだけど」

「ねえ、さっきから気になってたんだけど……！」

おお、なのはママ（小）がシンクロしてる。

「もしかして、この人が、未来の私なおお——っ!？」

2人は「きゃー背が高い!」「美人っ!」「胸が大きい!」「カッコイイ!」などなど、お世辞でも使わないような、あらん限りの美辞麗句を並べていく……というか、これって自画自賛だよねええ!？」

「そうだ！　せっかくの機会だったのにフェイトママがいなくてごめんね。なのはママの小さい頃ならきつと大人のフェイトママにも会いたかったよね。今日は休日だけ出勤だから——」

「フェイト……ママ!?!」

「うん、そうだけど?」

何かおかしかっただろうか?

GODなのはママが呟いた。

「前に会った時、ヴィヴィオちゃんが未来の私の子供だろうなあとは薄々気づいていたんだけど……まさか、わたしとフェイトちゃんの子供だったなんてええ——っ!?!」

「流石はミッドチルダの科学力……そういうことも可能なんだ……」

2人のなのはママ（小）は、手をつないだままキヤーキヤー騒いでいる。

「ヴィヴィオちゃんのお金髪はフェイトちゃん譲りなんだね!」

「声がユーノ君っぽかったから、てつきり私とユーノ君の子供かと——」

色々と認識にズレが生じているようなので、わたしとなのはママ（大）は、色々あつて養子になったのだと説明する。

「『そうなんだ〜』」

「そんなガツカリしなくても!?!」

「ちなみに、お姉ちゃんもまだ独身だよー」

2人は「そういうことなら」と納得した。

流星はなのはママ同士。よくわからないけど、自分の承知するツボは心得ているらしい。

こうして、昼食をなのはママ（大）の手作りで和気あいあいと過ごした後は、
「やっぱりこうなったか……!」

訓練所で模擬戦である。

そりやシュテルが参加したがるはずだ。こんな状況、彼女にとつては、精神と時の部屋“みたいなものだろう。理想的な修行場だ。

なのはママ（大） VS なのはママ（小）×2 ——なんて夢のバトル。しっかり撮影して後でシュテルに送ってあげよう。

とはいえ、せつかくなので、

「かつてはラスボスとして君臨したものの敗北、しかし『V i V i d』ラストでついにな

のはママに雪辱を果たしたわたし、高町ヴィヴィオも参戦させてもらいますよお——っ！」

「じゃあヴィヴィオ、私たちとやってみようか！」

なのはママ×3 VS わたし。

ん、んん？

先程まで戦っていた3人の桜色の魔力が一か所に収束していく。

「全力全開！ スターライト……ブレイカ——ッ！！」

トリプル（スターライト）ブレイカー。

あ、これ死んだな。

わたしがコンティニューする気力と魔力がないほどプスプス黒焦げになった頃、アミタさんからようやく連絡が入った。

『みなさん、お待たせしてしまつてすみません。ようやく復旧の目処がつかまりました。ただ、もう少し安全確認を行いたいのので、帰るのは明日の朝くらいになつてもよろしいでしょうか？』

「「もちろんっ！」」

と、元気にトリプルなのが答えた。

『あ、そ、そうですか、ありがとうございます……』

何だかわけがわからないパワーを前に、流星のお姉ちゃんパワーもたじたじである。

『は、早く私も参戦を……』

『おとなしくせんかシユテル！』

映像通信の向こうで爆発音が聞こえた。いつもは冷静なシユテルさんが大変なことになっている。

なのはママ3人も大概だけど、流星にここまでの事態にはならないなあ……と思っていたら、



夜。高町家。

ただいま、という水樹奈々ボイスを出迎えたのは、

「お帰り、フェイトちゃん!!!」

「お帰りなきうい、フェイトママ」

フェイトママの動きが止まり、手にした荷物を落とした。ギギギ……と、油の切れたブリキ人形のようにわたしに顔を向けた。

「づい、づい、ヴィヴィオ！　うちはいつから『なのはランド』になったの!?!」
「なつてないよ!?!」

てか、なのはランドつてなに?!

「か、カメラ、カメラ……」

「いや、メガネ、メガネじゃないんだから……」

その後もフェイトママのボルテージはMAX。

いや、もう、こんなテンション高いフェイトママは高町家の子になってから初めて見ました。もう凄いから、一度みなさんにも見てもらいたいくらいです。

そして、お風呂ではつちやけた後は、いつもなのはママ（大）と一緒に寝ているはずのベッドで、なのはママ（小）の2人を、両腕に抱きしめて眠っています。

『え、うん……なのは……でへへ……』

そんなフェイトママの姿を、わたしとなのはママ（大）はベッド脇で苦笑しつつ眺めていた。

「なんかもう幸せそうな寝顔だね〜」

世間的なイメージが崩れそうだけど。

「あはは、私がちよつと苦しそうだけどね」

「そういえば、なのはママは今日どこで寝るの？」

「ん〜、じゃ、今日は久しぶりにヴィヴィオの部屋で2人で寝ようか？」

「うん〜」

こんなことでもなければ、最近では一緒に眠る機会もなかなかない。

「——つと、その前に」

フェイトママの毛布をはがすと——ちよつとみつももないけど——よだれを垂らしながら、なのはママ（小）×2を抱きしめている姿を全身撮影。

「こんな幸せそうな寝顔、エリオとキャロにも教えてあげなくっちゃ」

——はい、送信。

進撃のフェイト

その日、ミッドの空に暗雲が垂れこめる……というかすでに雷鳴が轟き、グレートマジンガーのサンダーブレードみたいな稲妻が、いくつも地上に向かって降り注いでいた。

高町家鉄の掟の1つに『フェイトちゃんは絶対に怒らせない』というものがあるのだが、先週恥ずかしい写真をエリオとキヤロに送ったことで、怒りがMAX!!

いつも「なのはママは厳しすぎです」と言って甘やかしてくれるフェイトママが……あのフェイトママが、本気でわたしを殺……じゃなかったお仕置き（ホームラン）しようとしてきたのである。

そんなわけで、わたしにとっては最後の砦——ナカジマジムに逃げこんだというわけなのだけど……。

「ヴィヴィオ~~~~~~~~ツ！ 無駄な抵抗はやめておとなしく出てきなさい~~~~い！ 田舎のお母さんも泣いてるぞ~~~~っ！」

「田舎のお母さんって誰!？」

「なのはから聞きました。ヴィヴィオが画像を送信したってええ——っ!」

わたしはジムの入口に積み上げたバリケードに身を隠しながら、白いマントに黒いバリアジャケットをまとう執務官を見つめた。

その手にはバルディッシュの進化形態。第5世代デバイスの実験機でもあるライオットブレードⅡが握られていた。

「アレが噂のマジンガーブレードか……」

「違うだろ!———というか、どうしてうちのジムに逃げてくるんだよっ!」

「あ、ノーヴェ」

「あ、ノーヴェじゃない!——— 逃げるなら聖王教会とか、もっとお前を安全に匿ってくれそうな場所がいくらでもあるだろ!——— ここはもう昔と違って一般人の利用者も多くてだな———」

「ノーヴェ、このジムはわたしにとって第2の我が家みたいなものだから……」

「お、おう……」

かつてのナンバーズの一員は、満更でもない様子で頬を緩めた。

すると、わたしたちに差し入れの缶ジュースを持ってきてくれたコロナが言う。

「犯人は土地勘のある場所に逃げこむ———って言うよね?」

「お、おう……?」

「別に犯人とかじゃないからね! それにいざとなったら頼りになるノーヴェエが、きつとフェイトママを止めてくれると信じてるから。ね、ノーヴェエ?」

「……いや、無理だから。つーか無理だろ。あの人もアレだぞ? なのはさんと同レベルってことは、やっぱり世界人口全部で“ケンカ強い順”に並べたら、かなり上位に来る人だぞ!!」

「ヴィクターさんが“雷帝”だとしたら、フェイトさんは“雷神”って感じだよな?」

なるほど——と、わたしは隣で巻きこまれてる(巻きこんだともいう)アインハルトさんに向かって言った。

「雷帝より強い雷神だとしたら、今度のヴィクターさん戦対策のいいスパarring相手になると思いませんか?」

「な、なるほど! 確かにそうかもしれないね」

アインハルトさんはひとり立ち上がると、ひとりバリケードを出て武装形態に変身。ひとりで雷神執務官の前に立ち塞がった。

ノーヴェエが言う。

「ヴィヴィオ、お前鬼だろ?」

「いやいや、わたしの大好きな尊敬するアインハルトさんなら、フェイトママにだって一

矢報いてくれるはず……」

「あ、一矢なんだ……」

「フェイトさん、一槍、お願いいたします！」

そう叫んで、我らが霸王さんへ執務官に向かつて正面から突っこんだ。アインハルトさんもわかっているのだろう。様子見できるほど楽な戦いではない。初撃から全力全開で行かなければ勝てない相手だと……。

「はああ……ッ！ 覇お、はぶうう……ッ！」

一撃も与えることなく『ラブひな』や『ネギま』みたいな感じですつ飛んでいく。ノーヴェが頭を抱えた。

「うわああ……ッ！ うちの絶対エースがああ!？」

「やっぱりノーヴェが出るしか！」

「絶対無理っ！」

ナカジマジムの関羽雲長ポジ（ちなみに、わたしが劉備でリオが張飛である）コロナ

が冷静に解説する。

「アインハルトさんがまったく反応できないなんて……。もしかしてフェイトさん、ヴィヴィオよりずっと速いんじゃないかな?」

「えー、でも、うん、そうなんだろうなあ。ソニックムーブとかエリオも使ってたし……。などと話していたら、ひとり携帯ゲーム機で遊んでいたリオが、ようやく一段落したらしく顔を上げた。

「どしたの3人とも? ていうか、いつの間にかアインハルトさんがいないし」

どこいったのアインハルトさん——などとキョロキョロしている。ふむ……。

「実はね、リオって炎と電気の変換資質があるでしょ? それで、リオならフェイトママやエリオみたいにソニックムーブを上手く扱えるんじゃないかって」

「え、ナニソレ!? あたしのパワーアップ回ってこと!?!」

「うん。わたしより速くなれるかもね」

よし——と、さっきのアインハルトさんの惨状を見ていないリオは、さっそく大人モードに変身。フェイトママに手を振りながら駆け寄っていく。

「フェイトさくくん! あたしにソニックムーブを教えて——ぶるあつー!」

やつぱり『ラブひな』とか『ネギま』みたいな感じで一撃KOされていた。ノーヴェが白い目でわたしを見る。

「ヴィヴィオ、やっぱお前鬼だろ？」

慌ててコロナが救出に向かう。

「さつきは雷帝より雷神が強いつて言ったけど、こうなったらもう、同属性の雷帝さんに頼むしかないかも……」

さつきそく通信を送ると、ヴィクトリアお嬢様が空間ウインドウに映った。

『嫌よ』

隣にはいつもの——黒ジャージ姿の——ジークさんもいて、

『映像見とったけど、流石に無理やろ。あんな死神みたいな人には勝てへんって』

チャンピオンでも死神相手には無理かあ……とはいえ、

「わたしだってフリツカージャブ使えますけどね！」

「お前は『はじめの一步』読みすぎだろ!？」

「こうなったら仕方ない……。」

「こんなこともあるのかと……こんなこともあるのかと……あらかじめ呼んでおいた秘密兵器に登場してもらうしかないようだね！」

「呼んであったのなら最初から出せよ!？」

チツチツチ。

「アインハルトさんとリオの尊い生け贄……じゃなかったアドバンス召喚により、[〃]謎のヒロインA[〃]さんを召喚だああ！」

ジムの屋上から「とうっ！」と飛び降りてくるのは、水色のジャージに短パン、マフラー。頭にはエメラルドグリーンの野球帽を被った謎の金髪美少女。髪型こそポニテにしているものの、ぶつちやけ昔のフェイトママにそっくりな容姿だ。

『INNOCENT』世界ではないので、当然デバイス[〃]フォーチュンドロップ[〃]はない。代わりにその手に握られているのは、どつかで見たような聖剣。一回転して地上に降り立つ。

「お姉ちゃんとしては、大事な姪っ子に襲いかかる妹を止めなくちゃいけないからね。ママの研究室から勝手に持ち出してきたこの剣の力で、姉より優れた妹などいないということを証明させてもらうよ！」

おゝ。

「いつになく頼もしい！」

アリシ……じゃなかった、謎のヒロインAさんが小柄な体格を活かし疾走する。[〃]出来のいい妹[〃]に向けて聖剣を構えた。

「——ミンナニハナイシヨダヨ！ 約束されてない勝利の剣（エクスカリ ヴァー）！！」
「それダメな方のヤツだああ——っ!？」

当然フェイトママに勝てるはずもなく「ぶおっ」とか変な声を発して吹っ飛んでいった。見境のない金の閃光さんは、例え大好きなお姉ちゃんであつても容赦しないということ。つまり、わたしの身もいよいよ本気で危ないというわけだ。

「おい、これももうヴィヴィオが怒られるまで終わらないんじゃないか？」
「ふっ、大丈夫だよノーヴェ。次こそがわたしの本命だからね！」

あれ、私かませだったのおお——とアリシアさんが叫んでいるが問題なし。

わたしはジムの入口に体を向けると、背筋を伸ばし、45度ほど腰を曲げ深々と頭を下げた。最敬礼である。

「先生、お願いしますっ！」

現れたのは、炎のように長いポニーテール。ヴォルケンリッターの将にして剣の騎士。

「シグナム姐さんじゃねーか!？」

何はともあれ、中の人（清水香里さん）ご結婚おめでとうございます！

「まさか、こんな形でテストアロツサと戦うことになるとはな」

「やめときますか？」

いや——シグナムさんがニヤリと笑う。

「あいつも最近はめつきり丸くなつたからな、こんな機会でもなければ本気でやり合うこともないだろうさ。むしろ血が騒ぐ」

流石は戦闘狂。

「行くぞテストアロツサ！」

「いくらシグナムでも、今日は死んでもらいます！」

今「死」って言った、「死」ってええ!?

ナカジマジムの前で炎と雷が激突する。

炎が渦を巻き、稲妻がほとぼしる。町中でベギラゴンとギガデインを同時に唱えちやつたような光景である。大惨事。

「うわああ〜、あたしのジムがああああああ〜〜〜つ!?!」

頭を抱えたノーヴェは置いて、炎と雷かあ……。わたしは目的の人物を捜す。ちようとコロナに抱えられて治療魔法をかけられているところだった。そろそろいいだろう。

「リオ、炎と雷のスキルを習得するいい機会だよ！ ほら、強敵とのバトルこそ高レベルの技を閃くチャンスっていうでしょ！」

「どこのロマサガシリーズ!?!」

「ヴィヴィオの閃き道場。これがわたしからリオへのクリスマスプレゼント！」

「いらないよそんなの!?!」

「ほらほら、仮面ライダーWみたいに体の左右で能力が違うとか、ちよつとカツコイイよ?」

「イヤ、Wもいいけど、どうせなら最新のビルドにして〜」

「ビルドはわたし向きだから〜」

わからない人は『ラビットタンクフォーム』で検索してね。

結局、2人の勝負はつかず、最後はなのはママとはやてさんと呼んで無事解決。

「つて、あたしのジムどーすんだよおお!?!」

「大丈夫だつてノーヴェ、ほらよく見て」

「あ、あれ？ 壊れてない？」

すると、フェイトママを諭していたなのはママがわたしの方を見て「あれ、ユーノ君？」と声を上げた。

こつそり会議を抜け出してもらつたフェレット司書長が、かつてのようになのはママの左肩に駆け上がった。

「大丈夫、結界は展開完了済みだったからね。たぶん壊れないと思つたけど、2人とも昔より強くなつてたからなあ……」

「おいおい、無限書庫のユーノ司書長まで呼んであつたのかよ!? ヴィヴィオ……おまつ、そんな根回ししてる暇があつたら、さつきとフェイトさんに謝つた方が早かつたんじゃないか？」

「あ」

言われてみると……というか、言われなくてもそんな気がする。

むむむ……。

やっぱりわたしが悪いんだろなあ。

これ以上フェイトママが悲しむのも見たくないし……。

わたしは“死”を覚悟してバリケードを飛び出すと、フェイトママの前で平身低頭に

謝った。何だかもうボロボロになったアインハルトさんと、「しかたねーな」と口にしたノーヴェも一緒になって頭を下げてくれた。やはり持つべきものは立派な先輩と会長である。2人とも愛してるよ。

「ごめんなさいフェイトママ！　あまりに幸せそうな寝顔だったから、エリオとキャロにも教えてあげたくて」

すでに、いつものような冷静さを取り戻したフェイトママもバツが悪そうに、

「……うん、私もちよつと大人げなかったかなと反省してます」

そんなことを話していると、回復した謎のヒロインAさんもやってきた。

「せっかく、今日こそお姉ちゃんの威厳を見せようと張り切ってきたのに」

「ごめんねアリシア」

妹をグーでぽかぽか叩く姉。やっぱりどっちが姉でどっちが妹かわからないなあ……。などと思っていると、激闘ですっかりポニテの解けた剣の騎士さんとはやてさんも集まってきた。

「経緯はどうあれ、私は久しぶりに本気のお前と戦えてうれしかったがな。——ヴィヴィオ、またこいつを怒らせてやってくれ」

「ちよ、シグナム!？」

「たまにはそれもええかもな」

「はやてまで?!」

「あはは……はあ、ホント、なのはママも『止めなかったから』、フェイトママに確認せずに送信しちやっただよね。ごめんさい」

すると、フェイトママの動きがピタリと止まった。

「あ、あれ……なのはも止めなかったの?」

そうだよね——と聞こうとすると、いつの間にかなのはママの姿が見えない。

「さ、さーで、ユーノ君。たまには昔みたいに2人で空を飛ぼうか?」

「え、ちよ……」

飛び立つ白いエース・オブ・エースと使い魔。

再び雷神降臨。フェイトママの全身に、超サイヤ人2みたいなスパークが走った。なのはママたちに向かって大剣——ライオットザンバーIIの剣先を向ける。

「逃がすか、プラズマザンバアア——ツツ!!」

「ぎにやあああああああ!!」

ああ。ドーンと打ち上げ花火みたいな音がして、1人と1匹が撃墜された。

まあ、あの2人なら大丈夫かあ……。

ちなみに、後日こっそり撮影しといた「フェイト執務官VSシグナム一尉」の決戦を管理局に送ってみたところ、無事、高ランク魔導師のための教導ビデオとして採用されることに。

フェイトママの黒歴史がまた1ページ……。

サンタクロースを捕まえろ! 前編

1

ミッドチルダには「クリスマス」がない——と思っっている方も多い。けれどそれは違います。普通に存在しています。

「なぜ?」

と問われたら「外国から日本にクリスマスの習慣が伝わったように、地球からミッドにも伝わったんだよ」と答えます。

なのはママたち、少し前ならグレアム提督、もつと昔ならナカジマ家の祖先。ミッドだけじゃない、古代ベルカと地球にも繋がりがああり、遙か昔から他の次元世界同様に、地球の風習も多く渡ってきていた——と、現在では多くの歴史学者が認めるところです。

その辺りはユーノ司書長が詳しいので、知りたい方は一度尋ねてみるといいかも。忙しくなければ、きつと快く答えてくれるはずですよ。

そして、クリスマスやサンタクロースのように地球で広まった人気のイベントごとは、どうやらこちらの世界でも広まるのが早いらしく、古代ベルカ時代(数百年前)には、もうすでに一部の地域で行われていたことが文献から確認できます。

ひよっとしたらオリヴィエやクラウス陛下も祝っていたかも。アインハルトさん、あるいは1000年前のベルカの王だったイクスに聞けば、その辺りの事情も詳しくわかるかもしれませんね。

クリスマスではなく聖ニコラウスの命日ではあるけれど、14世紀の地球にはもう、子供たちにプレゼントを配る風習があつたのだから。

当然、当時の「彼女」が知る機会もあつたのでしよう……。

2

というわけで、今年のクリスマスは、わたし、なのはママ、フェイトママ、エリオ、キャロの5人家族でパーティー。

プレゼント交換や食事も終わり、リビングにいますと、エリオがわたしに声をかけてきた。

「ヴィヴィオ、そのプレゼントは誰から？」

「この本？ ルーラーからだよ。月刊『ルー』の創刊号。ルーラーが集めた情報をまとめたオカルト雑誌なんだって」

「ルーちゃん、また怪し気なものを〜」

とはキャロ。

聞いていたなのはママとフェイトママも苦笑している。

「あの子も多才だね〜。はやてちゃんの手伝いもしてるんだっけ？」

「うん。どうせなら執務官補佐をやってくれば、私やティアナも楽になるんだけど」
わたしはページをパラパラめくる。

「でも、この本結構面白いよ? 例えばこの記事なんだけど——『無限書庫で謎の半人半フェレットを見た!』とか」

「いやいやいや」

「顔がフェレットで体が人間なんだって。しかもほら、憶測だけで終わらず、しっかりとインタビュー記事まで載ってるし……『昔の癖で〜』とのことですが、なのはママ?」

「まあ、中途半端に変身解除しちゃったんじゃないかなと。ほら、私(の中の人)がグルグルで鍋焼き姫を演じてた時、アヒルマンっていたでしょ、あんな感じで」

ああ〜。ちよつと納得。

「じゃあ、こっちの記事なんてどう? 『無人世界のベルカ上空で、謎のサンタクロースを見た!』とか」

「ナニソレ? もしかしてルーテシアが捕まえたの?」

「ううん。それがね、毎年クリスマスの夜にだけ現れるらしくて、この雑誌を作ってる時には、捜したけどまだ会えなかつたんだって」

「なにそのクリスマス限定イベントキャラ」

「ちなみにルールの記事によると、このサンタクロス、ずっと昔、それこそ古代ベルカ時代から目撃情報が残ってるんだって」

「へえ……古代ベルカ時代から……」

「うん。多数の目撃情報を総合すると、そのサンタさんの外見は、赤髪の小柄で可愛らしい少女の姿をしていて、赤いスカートのサンタ衣装をまとい、手にはシルバーのハンマーを持って……」

「古代ベルカで赤髪で小さくてハンマー……」

「それって……」

「うん……」

「1人しかないんじゃない……」

少しお酒に酔っていたのだろう。なのはママが赤ら顔で勢いよく立ち上がった。

「よしヴィヴィオ、ヴィー……じゃなかつた、そのサンタさんを今から捕まえに行くよっ
！」

「えーっ！ 今から!？」

「そう、今から。いくら無人世界とはいえ、時空管理局の一員として、そんな不審者を野放しにはしておけないからね！」

「もう、なのはー！」

「エリオ、キヤロ、今年のクリスマスはフェイトちゃんと3人、家族水入らずで過ごしてね。私とヴィヴィオはちよつとベルカに行ってくるから」

そんなコンビ二行ってくるみたい——とも思っただけ、それはそれで楽しそうなので、

「ま、いつか。じゃ、3人とも行ってくるね。よい聖夜を〜」

こうしてわたしとなのはママは、現在無人世界になっている古代ベルカの地へ向かったのだけ……その時は、まさかこんな大事になるとは思いもなかったのだ。

3

時刻はすでに真夜中に近く、間もなく日付が変わろうとしている。頭上に浮かぶ白い月。満天の聖夜に星々が輝いていた。

サーチャーを飛ばし広域を調査すると、目的の相手はすぐに見つかった。出会うには

日付や時間帯が重要だったのだろう。

「ルーラーの記事通りだね」

赤いサンタ帽子にサンタ服。背中には大きな白い袋を担いでいる。

そして、髪型こそ三つ編みではなく真つ直ぐに伸ばしたストレートだけど、サンタさんの外見は紛れもなくヴィータさんその人だった。

上空から無言で地上を見下ろしている。

植物も生えない荒野と化したベルカには、人つ子一人住んでいないのだけど……。一体何を探しているのだろうか？

しばらくすると、サンタヴィータさんはトナカイ（ザファイラじゃない！）の引くソリに乗って、ベルカの空を駆けていった。

わたしとなのはママはいったん地上に下りると、岩場の影で感想を述べ合った。

「やっぱり、どこからどう見てもヴィータちゃんだったよねえ……何してたんだろう？」
「はやてさんちに連絡してみたらどう？」

だね——と答えて、なのはママは早速映像通信を送る。エプロン姿の八神捜査指令が映った。

『メリークリスマスっ！　なのはちゃん！　ヴィヴィオ！』

「メリークリスマス、はやてちゃん! こんな夜遅くにゴメンね。ところでヴィータちゃんんだけど、今そっちにいる?」

『あー、おるでー。代わるか?』

「あれええっ?!」

わたしとなのはママは顔を見合わせた。

「もしかしてヴィータさん、空間転移したとか?」

「いくらヴィータちゃんでも、そんな長距離は……」

すると、八神家から聞き慣れた“はすっぱボイス”が聞こえてきた。

『あ? なんだなのはかよ』

空間ウインドウに映ったのは、赤いサンタクロースの格好をしたヴィータさん。

「やっぱり犯人はヴィータちゃんだったか!」

『は? 犯人って何だよ?!』

「ヴィータちゃん、ついさつきまでベルカの空をトナカイのソリに乗って飛んでたで

しょ」

『あたしが? 馬鹿言うな、あたしはずっとここにいたんだぞ?!』

「またまた〜」

ほんまやで——とはやてさんが擁護する。

『ヴィータ、今年はな、ミウラや道場の子供たちにみんなで手分けしてプレゼントを配るんだ、とか気合入れとってな。ほんでこの可愛いサンタ服を着てるってわけや』

『言うなよな、はやて!』

サンタ衣装はどうあれ、顔を赤らめたヴィータさんが嘘をついているとは思えない。

「あ、あれ〜? 本当にそっちにいたの?」

『だからいたって言うてんだろ!』

う〜ん、ひよつとしたらこれは演技で、はやてさんがかばっている可能性もあるかもしれないわけで、最も嘘がつかない人を……。

「ザフィーラ、いる? 本当にヴィータさんずつと八神家にいたの?」

姿は見えなかったけれど『いたぞ』という男性の声が返ってきた。

その後、シグナムさんにシャルマルさん、ラインさんにアギトもみな一様に頷いた。

「あれ、あれ〜?」

あまりにわたしたちが信用しないのを不審がり、はやてさんが事情を聞いてきたので、先程までの一部始終——ベルカの上空でサンタの格好をしたヴィータさんそっくりな少女を見たこと——を伝える。

『ベルカに、サンタの格好をしたあたし、か……!』

鉄槌の騎士が深く考える目をした。

『けつたいな話やな。ヴィータのことをよく知らん人が言うならまだしも、なのはちゃんが見聞違えるとは思えんし……。もっと詳しい話も聞きたいし、なのはちゃんいったんうちに来るか?』

「そうさせてもらおうかな〜」

「ちよつと待つてなのはママ。ルーラーの雑誌によると、サンタクロースの出現期間は、1年に1度。24日の夜から25日の未明にかけてだよ」

「そつか。期間限定レイドボスだもんね」

「いやいや」

「それは冗談としても、もうはやてちゃんちに戻つてゐる時間はないってことか……。ごめんねはやてちゃん。わたしたちこのままそのサンタの子を追いかけるから——」

『なのはちゃん!』

なのはママは通信を切った。

「ねえ、ヴィヴィオ、今回の一件どう思う? もしこれが私とヴィヴィオのよく知るアレのせいだとしたら……」

「うん。どうしてサンタの格好をしているかは知らないけど、たぶん夢を見ているような状態。たぶん自分で自分のことをよくわかっていないんだと思う……」

「だよね。まだ実害は出ていないみたいだけど」

「いつまでもこのままってわけにはいかないよね」

「行くよ、ヴィヴィオ！」

「はい！」

わたしとクリスは14年前に時間遡行した際、艦船アースラから補助を受けて空戦をこなしたようにレイジングハートに姿勢制御を委ねると、なのはママと一緒にベルカの聖夜に飛び立った。

サンタクロー스를捕まえろ! 後編

1

「見つけた!」

聖夜のベルカ上空を飛ぶわたしとなのはママは、ようやく目的の相手に追いついた。

後は確保するだけ。

「止まりなさい!」

トナカイが引くソリに乗ったサンタクロス姿の紅の鉄騎は、まったく止まる様子がない。

「待つて、ヴィータちゃん!」

なのはママが名前を呼ぶと、ようやくソリが止まる。

「誰だお前? どうしてあたしの名前を知ってたんだ」

「高町なのは……と言ってもわからないか」

サンタクロスの格好である理由は思いつかないけれど、未だ残っていた「闇の欠片」が、何らかの形で活性化し、古代ベルカ時代のヴィータさんの記憶や意思を再現している——というのが、わたしとなのはママの結論だった。

つまり、はやてさんを夜天の主として認める前の彼女なわけで、わたしはもちろんなのはママのことすら知らない状態ということだ。

不意に、ヴィータさんの視線がわたしに向いた。

「そつちのお前は知ってるぞ、右目が緑、左目が赤の虹彩異色。聖王家の出身だろ。理由はわかんねーが、あたしの邪魔をするというなら叩き潰すまでだ！」

平たい銀のハンマーの先端が戦鎚のように尖り、さらに推進ユニットによって使い手ごと加速。回転しながらわたしに襲いかかってくる。

「危ないヴィヴィオー！」

咄嗟にラウンドシールドを張ったなのはママが、わたしをかばい打撃を受け止めた。

「く……………っ！」

確かに、闇の欠片の戦闘力は本物に引けを取らない。とはいえフェイクはフェイク。能力が変わらない“武器”と違い“人”である。過去の記憶再現である限り、成長した人間には敵わない。

だから、以前、本気の勝負で負けたことのあるヴィータさんが、現在のなのはママに勝てる道理はない……………はずだったのだけど、

「まさか、なのはママが押し負けてる!？」

ヴィータさんが吼えた。

「ぶち抜けええエエエ—— ツツ!!」

ラケーテン・ハンマーが、かつてのように桜色の盾を打ち砕いた。強化したレイジングハートのフレームで受け止めるも、その勢いはとどまるところを知らない。カートリッジが消費され、ノズルから噴射する炎が勢いを増した。限界。きやああ——となのはママが悲鳴を上げた瞬間、白いエース・オブ・エースの身体が地上に向かって叩き落された。マズい——

「ダイバインバスタアア——ツ！」

わたしは、追撃を仕掛けようとする紅の鉄騎を牽制すると、すぐになのはママの救出に向かう。それを見たヴィータさんは「ふん」と鼻を鳴らすと、再びトナカイのソリに乗って立ち去っていった。

助かった……?!

「大丈夫!? なのはママ！」

背中に回りこんで支える。そして、ゆっくりと地上に降り立った。

「うん。ちよつと油断した。まさか闇の欠片にあんな力が出せるなんて……」

「闇の欠片じゃないってこと?」

「わからない……。でも、もう一度戦ったら今度は油断しないよ。必ず勝つ！」
それでこそわたしのママ。不屈のエース・オブ・エースだ。

2

「またお前らか！」

杖とバリアジャケットを修復したなのはママが、再びサンタ姿のヴィータさんに挑む。今度はわたしも最初から強化モードだ。

「聞いてヴィータちゃん！ ううん、ヴォルケンリッターのひとり、鉄槌の騎士ヴィータさん！ あなたも薄々おかしいと気づいてるんでしょ？ ベルカはもう滅んだの。300年も前に。現在は新暦80年。ベルカもミッドも関係ない。1つの国になって平和に暮らしている。そして、今のあなたは夢を見ているような状態。闇の欠片という闇の書の一部から生まれた存在。実体じゃないの。」

本物のヴィータちゃんは、私の同僚として一緒に時空管理局というところで働いて——

「あたしはヴィータじゃねええ——っ！ サンタクローズだ！」

「何を言ってる……？」

「そっちこそ、あたしを鉄槌の騎士なんて名で呼ぶな！ もうこれ以上あたしを戦わせんなああ！」

そう叫びながら、ヴィータさんはグラーフアイゼンを構えて正面から突っこんでくる。迎え撃つのはママ。

ピンクと赤の光が筋を引き、空中で絡み合うように体をぶつけながら交差を繰り返す。

「シュワルベ・フリーゲンっ！」

振り向きざま、12個の鉄球が打ち出される。

「それはもう15年前に対策済みだよ！」

レイジングハートの先端から放たれた12個を越える数の光弾が迎撃し、余りが思念誘導によって上下左右からヴィータさんに襲いかかる。間髪を容れず、エクセリオンモードに移行し突撃。

紅の鉄騎も光弾を物ともせず吼える。ラケーテンフォルムで突貫。

桜と紅の魔力光がベルカの空で激突し、光の華を咲かせた。再び距離を取る。睨み合う両者。

「これが、エース同士の戦い……」

神眼のお陰で動きは追えているものの、わたしのつけ入る隙はまったくない。せめて、なのはママの邪魔にならないよう主戦場から離れて見守ることくらいしか出来ない。

そして、まるで互いに示し合わせたように大技に入る。

「——轟天、爆碎ッッ！」

「——星よ——ッ!!」

荒廃したベルカの大地を打ち砕く巨大な鉄槌と、ベルカの夜空を星の輝きで照らし出す桜色の収束砲が、広範囲に渡り衝突し合う。目のくらむ閃光。吸いこまれるような突風。大音響。

「セイクリッドディフェンダー！」

あまりの衝撃に、わたしは思わず防御魔法を唱えてしまった。

2人の魔力の激突はまったくの互角。いや、今のなのはママの方が上のはず。ところが、

「う……おおおおあああ——!!」

ヴィータさんの気迫に呼応して、さらに鉄槌がサイズと重さを増していく。胸の辺りから青い輝きが漏れ出す。

「こ、この魔力は……っ……う？」

「あたしの邪魔をするなあああ！」

信じられない。桜色の閃光が押されている。このままでは前回の二の舞いだ。なのはママ……。わたしは慌ててサポートに入ろうと試みるが、離れていたせいもあり間に合わない。

その時だった。

「だらしねーぞ、なのはー！」

スターライトブレイカーを援護する形で、もう一本のギガントフォームが打ちこまれた。まったく同じ形のハンマーがベルカ上空で激突する。使い手はもちろん、敵と同じサンタの衣装ではあるけれど、いつもと変わらぬ三つ編みの少女。わたしたちがよく知る本物の鉄槌の騎士さんだった。

まったく同じ顔が2つ並ぶ。

過去のヴィータさんが驚きで目を見開いた。

その瞬間、2人の魔力が重なり合う。呼応し、これまでとは異なる紅の輝きを放つ。光の中、わたしはまったく別の光景を目にしていた。

3

それは遠い昔。どこかの戦場に建てられた砦の中でのこと――

「シンタクラーズ祭？ 何だよ、それ……」

赤い瞳に銀の長髪を揺らした女性が、ヴィータさんに向かって話しかけた。

「別の世界の風習だそうだよ。シンタクラーズが持つ『シンタクラーズの書』には、子供たちが1年間良い子だったか悪い子だったかが記録されているらしい。そして12月5日の晩、白馬に乗って空を飛び、良い子には煙突から入ってプレゼントをくれるそうだ。」

ひよつとしたら紅の鉄騎のところにもシンタクラーズが来るかもしれないな

「来るかよ、バーカ。くだらねえ。あたしらは人じゃねー。それ以前にあたしらが作られてから一体どれだけ経つてると思ってたんだ？ もしシンタクラーズとかいう奴がい

たとしても、あたしはもらう側じゃねえ、むしろあげる側だ」

そう言うと赤髪の少女は場を離れる。

「どこへ行く?」

「うるせーな、どこでもいいだろ」

「そうか……」

また、空を見に行くのだな——と銀髪の女性が優しく微笑んだ。

それから、いくつの戦場で勝利を重ねたことだろう。

ある雪の日。奇しくもシンタクルースの晩。主人の命令で敵対する魔導師を大人から子供まで全て叩き潰した後、ヴィータさんはそれを見つけた。

「こいつは……」

植物の種子に似ている。高純度のエネルギー結晶体で『手にした者の願いを叶える』という伝承がある青い宝石。

「願いなんで……」

遺体の山を見てふと思う。

「そうだな、戦いなんでなくてもいい、こいつらに鉄の塊じゃねえ……そうだ、もつとシンタクルースみてーにプレゼントを届ける……」

ヴィータさんは頭を振った。

「ありえねえ。ただの気の迷いだ」

青く輝く宝石を握りしめると、廃墟と化した街に向かって力一杯投げ捨てる。宝石は紅の鉄騎の視界から消えると、光を放ちながら徐々に人の姿を模していった。

それから青い宝石は、毎年シンタクロースの晩になると、ヴィータさんの願いを叶えるため、彼女の姿を模倣した。その度に、周囲から新たな情報を得て装いなどを更新していく。

それはいつしか、サンタクロースになり、クリスマス・イブになり、ただひたすら子供たちを捜してベルカの夜空を彷徨っていたのだ。

ベルカが減じたことも知らず……。

4

光の奔流が収まると、わたしは現実を引き戻された。過去のヴィータさんの胸に灯る青い光。

「ナンバー外のジュエルシード……」

スカリエッティも使っていた、記録には残っていない古代ベルカの遺産。

本物のヴィータさんがグラーフアイゼンを振りかざした。過去の自分へと振り下ろ

す。

「お前の願いはな、もう叶ってるんだよ！」

破城槌のごとき一撃が相手の戦槌を粉碎し、もうひとりの紅の鉄騎の胸に突き刺さる。サンタクローズ姿の少女は満足げな笑みを浮かべると、静かに聖夜の空に溶けて消えた。

残されたのはたった一つの青い宝石。

ヴィータさんがつかみ、これで今回の事件は全ての幕が下りた。

「ヴィータちゃん……」

溜め息を吐きながら、八神家の元氣娘はなのはママに向かって言う。

「まったく、おめーは昔からクリスマスの度にとんでもねえプレゼントを持ってきやがる」

『闇の書事件』の時もそうだった。

「まあまあ、今年だつて満更じゃなかったでしょ？」

「ふん——そういうことにしといてやるよ」

ベルカの聖夜に残された願いが、数百年の時を越え成就した瞬間だった。

風雲ヴィヴィオ神社『弐』 前編

2018年、元旦。

わたしはゲンドウポーズで緑髪先輩が目覚めるのをジッと待っていた。

うんっ……と目蓋が開くと同時に、

「おはようございます。そしてあけおめです、アインハルトさん」

「……あ、ああ、おはようございます、ヴィヴィオさん。それとあけましておめでとうございます。今年も1年よろしくお願………って、どこですかここお——っ!?!」

知らない天井。

寝起きの霸王様がキョロキョロ辺りを見回している。

「聖王教会本部です。わたしがセインにお願いして昨夜のうちにアインハルトさんを拉致……じゃなくて連れてきてもらいました」

「いやいやいやいや……」

「セインの固有能力『デーパーダイバー』を使えば、どんなセキュリティの高いマンションでも、自由自在に侵入するのは容易いこと」

「それ、絶対犯罪ですよねええ!？」

ちなみに、セインの中の人はわたしと同じ声だったりする。

「まあまあ、アインハルトさんとわたしの仲じやないですか？」

「昔から『互いの間の生け垣は友情を縁に保つ』と言いましてですね!？」

「2人ともそこまで」

寝室に入ってきたのはわたしたちもよく知る長い金髪にヘアバンドがトレードマークのシスター。ところが、アインハルトさんが驚きで目を見張る。

「シスターカリム……って、いつものシスター服じゃない!？」

「ええ、騎士甲冑です。今日はシスターとしてではなく、教会騎士団の騎士としての参加ですから」

「はい?？」

「アインハルトさん、去年の元日に行われた『福魔導師』を決めるフロニヤルドの戦興行っぽいイベントを覚えていますか?」

「ええ、『マスタートドラゴン池』や『シユラク隊海峡』を越えて、一番にヴィヴィオさんの元に辿り着くという……まあ、最後はコンサートになっていました」

「はい。わたしキャラソンないのに大変だった……じゃなくて、それ、今年も開催される
ことが決まったんです」

「あゝ、なるほど」

「ただ、ドーセやるなら、今年わたしも最初の企画段階から参加したいなと思いまし
て、昨年からコツコツやってたんですよ」

「それはご苦労様です」

「で、去年は何かもう色々混ぜすぎて、何が何やらわからなくなったので、今年はおつ
とシンプルに行こうという話しになりました……」

「はあ……」

「コレです——」

クリスによって空間スクリーンが映し出された。

・『風雲た●し城』



・『風雲イ●ヤ城』



・『風雲ヴィヴィオ神社』

「もういつそのこと内容もパクリつつ、目的もわかりやすくして、

『聖王女を祭る伝説の“ヴィヴィオ神社”に参拝するため、君も八神はやて司令率いる機動六課の一員になり、数々の難関アトラクションを攻略しよう!』

「みたいな感じでやろうかなって」

「はあ……」

「まあ、口で説明するのもなんなので、直接見てもらった方が早いかもですね。——中継先のユミナさん？」

会場と映像通信がつながる。

『はいーい! こちらリポーターのユミナです。陛下にアインハルトさん、あけおめでくすー!』

「はい、あけましておめでとうございますー!」

「——つて、ユミナさんまで!?!」

霸王流の伝承者さんは、ジークさんの鉄腕を食らった時のように目を白黒させた。

「ユミナさんには、Dr. ルーと一緒に企画当初からわたしの陣営に参加してもらって

たんですよ」

「Dr. ルー?」

「ルールーのことですよ」

攻めてくるのが神にも悪魔にもなりそうな軍団なので、妨害するアトラクションを設計したルーテシアは、ドクターヘルのごとく悪の科学者ポジション……なのだけど、あの性格。どちらかといえばドクターウエストっぽい。

おっと閑話休題。

「ユミナさん、現在のそちららの状況を教えてもらえますか?」

『はい。八神司令率いる機動六課は、すでに第1、第2ステージをクリア。現在は第3ステージ「ナカジマ海峡」に向けて進軍中です』

「思ったよりペースが早いですね。第2ステージの「クリスでポーン」はダメだったんですか?」

『巨大クリスにしがみついでグルグル振り回されるアレですか? 一般参賀の方々には難易度が高いと思いますが、今日はリアル機動六課と、ストライクアーツ関係者がメインですから。むしろ飛行魔法が禁止の分、ラストの急な崖を駆け上る方が大変そうでしたね』

「なるほど〜」

ああ、とか叫びながらずり落ちていくリオの姿が目には浮かぶ。

ちなみに、第1ステージはチンクとウエンディ。第2ステージはオットーとディードがそれぞれ妨害役を担当している。

そして、この第3ステージはといえば、

「ユミナさん、ノーヴェ近くにいますか?」

『会長ですか? はい、ナカジマ海峡のラスボスつてことで張り切ってますよ。——マスクドファイターさん、陛下がお呼びですよ』

おう、ヴィヴィオか——と言って映像通信に映ったノーヴェの顔には謎のマスク。それを見たアインハルトさんがガタガタ震えだす。

「そ、そのバイザーはああ!?!」

「アインハルトさんが天地に覇を成そうとしていた頃つけてたやつですわ〜」

『最近はい——お前らの活躍で——あたしも有名になってきたんでさ、一応顔を隠しておいた方がいいってミカヤちゃんがい』

すると、マスクドファイター（ノーヴェ）の隣から、神社らしく紅白の巫女服をまとう黒髪の剣士が姿を見せた。

『ヴィヴィオちゃん、本当に私が参加してもよかつたのかい?』

「いいんですよ。だってミカヤさん、ナカジマジムの顧問取締役ですし。ナカジマ海峡

にいても何の問題もありませんからね」

『そんなことを言い出したら私はどうするんですか!?』

教会騎士団が有無を言わさず連れてきたフロンティアジム所属で眼鏡のリンネさん
専属トレーナー。

「まあまあ、攻撃側にはフロンティアジム所属のリンネさんやヴィクターさんもいること
とですし。それにこのナカジマ海峡は、デイエチの砲撃をかわしつつゴールを目指すの
が目的のアトラクションですからね。最後にドーンと待ち構えて、橋から叩き落として
もらえればオツケーです」

まあ、落とすくらいなら——と、ジルコーチが眼鏡をクイクイ動かした。

「それにしても、ミカヤさんとジルコーチは巫女さんの格好が似合うのに、ノーヴェは似
合わないよね〜」

『ほっとけ!』

そうノーヴェが答えた時、轟音が響き映像が大きく揺れた。

『うわっ、もう機動六課が攻めてきた!? そんなわけでカメラいったんお返ししま
すっ! 陛下ご武運を〜』

ふろにやるどく、とか言う謎の悲鳴を残しつつ映像がプツツリ途切れた。

「これは第3ステージ陥落も時間の問題ですね〜」

「ユミナさん……」

「そんなわけでアインハルトさんには、次の第4ステージ——最終ステージでわたしと一緒に戦ってもらいますから」

「はい？」

「昨年の反省と『風雲イ●ヤ城』を再プレイして気づいたんですが、ラスボスはもう少し手強くてよかったかなと……。まあ『カプセルさーぼんと』みたいにラスボスが強すぎるのもどうかと思うんですが。そこで、本家『風雲た●し城』にならって、最終ステージでは、生き残った攻撃側と防御側が戦車に乗って集団バトル——みたいな形にしようかなと思ってます」

「つまり、私も戦車に乗ってヴィヴィオさんと一緒に戦えばいいんですね？」

「いえ、アインハルトさんにはわたしの戦車役になってもらおうかなと」

「戦車っ!?!」

風雲ヴィヴィオ神社『弐』 後編

ドンドン——と聖王教会本部の空に花火が打ち上がった。

聖王教会敷地内に特設された“ヴィヴィオ神社”本殿前には狛犬が2体。そして広大な境内——いや最終ステージには、八神はやて司令率いる機動六課のメンバーが並んでいた。

『さあー、ここまで生き残ったのは8人。戦車役が土台となり、砲台役をおんぶする二人一組の4チームだああ！ 実況は私——もと機動六課のロングアーチにして昨年の映画“Reflection”にもさり気なく主演していたシャリオ・フィニーノがお送りいたします！』

本殿に併設された解説席に目を向けると、眼鏡をかけたシャリーさんが、まさにノリノリといった表情でマイク片手に叫んでいた。

「ヴィヴィオさん、あの方は？」

「あー、意外に会ったことなかったんですね。フェイトママの補佐官なのでうちにも

時々来るんですけど、デバイスマイスターの資格を持つてるんで、クリスのちよつとした改造なんかはシャーリーさんをお願いしてるんですよ？ アインハルトさんもテイオの……あく、でも魔改造されるかもしれないしなあ……」

ちなみに、戦技披露会の『高町ヴィヴィオVS高町ヴィヴィオ』の戦闘ルールも、シャーリーさんが作っていたりする。ルーテシア並に多才な方だ。

選手兼解説役のわたしに、シャーリーさんがヘッドセットマイクを通じて話しかけてくる。

『どうですかヴィヴィオ陛下、このズラリと並ぶ8人の顔ぶれを見て——』

- ①なのは（砲台） & フェイト（戦車）
- ②ティアナ（砲台） & スバル（戦車）
- ③ヴィクター（砲台） & ジーク（戦車）
- ④コロナ（砲台） & リオ（戦車）

「そうですね、④番目以外は順当ではないでしょうか？ ——コロナ、リオ、不正でもしたの？」

「してないよ!?!」

「がんばったんだよおお!?!」

ちなみに最終ステージのルールは簡単。砲台役を地面に落とすか、お正月らしく砲台

役の顔面を墨で黒く塗るかの2つ。相手チームを全員失格にさせたら勝利である。

なのはママが「ヴィヴィオ、今日は手加減しないからね」と手を振っている。

「なのは……ちよつと重……」

「クリスマスからちよつと食べず……ぎてないからねええ!!? はいフェイトちゃん口にチャック」

あゝ。

「なのはさんとフェイトさんもいるし、スバル、今日はあたしたちも前衛に出るわよ!」

「了解ティア、必ず勝とうね!」

ティアアナさんの二丁拳銃は手強そうだ。たぶん墨がバンバン飛んでくる。

「うぐぐ、なあヴィクター、ウチらだけ上下逆なんじゃ……」

「リーチの長い方が砲台役になるのは当然でしょう?」

「いや、だつて鎧が」

母子喧嘩は見られないよ!

つい口を挟んでしまう。

「ヴィクターさん、やっぱリオカンが上つてのはよくないんじゃ……」

「オカンじゃないと言ってるでしょ!?!」

「あれ? オカンではなかったのですか?」

アインハルトさん……。

『さあー、そんなミッドチルダ最強とも噂される機動六課の行く手を阻むのは、我らが聖王ヴィヴィオ陛下率いる聖王軍だああ!』

① ヴィヴィオ（砲台） & アインハルト（戦車）

② カリム（砲台） & シャツハ（戦車）

③ Dr. ルー（砲台） & 白天王（戦車）

④ シヤンテ（砲台） & セイン（戦車）

『おお〜つと、1チームだけ戦車がデカイぞおお!? 空を見上げるほどだああ!』
うわ〜。

観客席からピンク髪少女の声が響く。

「ルーちゃん反則っ! 私だってヴォルテール召喚するよ!」

「第1ステージで池に落ちてリタイアした子に言う資格なし!」

はう〜、とキヤロが一蹴された。

「まあまあ、ルールー……じゃなかった。我が忠実なるマッドサイエンティスト、Dr. ルーよ! ただでさえ我らの方が1チーム多いのだから、少しは手加減してやらねばな」

はあくはっはっは——と偉そうに高笑いしてみせるとリオが言う。

「ヴィヴィオ、計算も出来なくなっちゃったの？ どっちも4チームだよ」

「そういう演出なのおお!? ——いだよ今年の干支、ヴィヴィオ神社の守護獣、狛犬ツインスー！」

「なにその『おじ●る丸』みたいなキャラは!?」

『おくと、ただの石像かと思われた神社の狛犬2体が動き始めたぞおお!? しかも赤と青、賽銭箱こそ背負っていないものの、まさに実体化した満願神社の狛犬だああ!』

そんな2体の狛犬を見て、フェイトママとはやてさんがそれぞれ驚きの声を上げる。

「アルフ!? 地球にいたんじゃないの?」

「たまにはこういうお正月もいいもんさ。今日は勝たせてもらうよフェイト!」

「ザフィーラ!? 今日は用事があるから参加できない言うとしたのに、まさか聖王軍に寝返つとるなんて〜」

「申し訳ありません、主はやて。どうも記憶喪失の間に約束をしていたらしく……」

「絶対ウソやあ〜」

唯一真相を知るミウラさんが観客席で苦笑している。

こうして、⑤番目のチーム——アルフ（砲台）&ザフィーラ（戦車）が爆誕。しかも、

『まさかの犬on犬だあゝゝっ!!』

「人型じゃない!？」

まるでブレーメンの音楽隊。

「こ、コレはコレで……」

ヴィクターさんが「はあはあ」言っている。何気にティアナさんも「アリね」と呟いているので、まあツンデレ業界的に有りなのだろう。

後はD r . ルーが戦車役をガリユーに変更。いよいよ最終ステージ開始である。

『最後に八神司令、ヴィヴィオ陛下、決戦前の意気ごみをどうぞおお!』

はやてさんが「了解や」と頷いた。

「よくぞ生き残った我が機動六課の精鋭たちよ! 聖王ヴィヴィオ軍を打ち破り、必ずやみんなで神社に参拝するでええ! ほんなら、全力全開で突撃やああ——っ!!」

「「「おおおお——っ!!」」」

負けてなるものか！

「聖王のゆりかごの旗の下、今度こそ機動六課を打ち倒す。——迎え撃つよ、聖王軍！」

「「「オオオオ——ッ!!」」」

合図——わたしがセイクリッドブレイザーを空に向けて放つと同時に、両チームの戦車役が鬨の声を上げて駆け出した。

けれど、アインハルトさんがピタリと止まる。

「あの、ヴィヴィオさん。本当に戦車役が私でよかったですか？ 機動六課の方々に比べれば私はまだまだです。大将であるヴィヴィオさんの戦車役には、もつと強く相応しい方がいたのではないのでしょうか？」

「あはは、何を言ってるんですかアインハルトさん。わたしにとってはアインハルトさんと一緒。聖王女オリヴィエにとつては霸王クラスと共にあることが願いだったんですから、アインハルトさん以上に相応しい戦車役はいませんよ！」

「ヴィヴィオさん……」

「さあ、聖王と霸王の力を見せてやりましょう！」

「はー！」

すると、興奮したシャーリーの声——伊藤静さんボイス——が響き渡る。

『おお〜つと〜、まずは左舷、聖王軍のシャンテ&セインチームと機動六課のヴィクター
&ジークチームが接敵だああ！』

セインにおんぶされたままシャンテが吼える。

「雷帝のお嬢様、いつかのインターミドルの借り、ここで返させてもらおうよ！」

「いいでしょう、返り討ちにしてあげますわ！ けれどその前に——いつも思うのですけど、あなたのそのハレンチな格好、本当にシスターですか？ あなたも淑女なのですから、もう少し慎みをもった格好を——」

「だああ!?! あんたはあたしのオカンかああ！ だいたいそんなことを言い出したら、あなたのそのプレートメール、身持ち硬すぎでしょう!?! 重いんだって、男だって寄ってこないよ？ もっと軽量にしなさいよ！」

「あく、それには賛成や〜」

「ちよ、ジーク、あなたどちらの味方なのよ!?!」

シャンテ行くよ——とセインが割って入る。

「よっしやー、お嬢様、チャンピオン、あたしについてこい！」

「ふん、いいでしょう。戦場くらいあなたの好きに選ばせて差し上げますわ。——ほらジーク、もつと速く走って！」

「そないなこ言われても〜」

身軽に走るセインの後を、ジークさんがドタドタ追いかける。

『逃げるシャンテ&セインチーム。境内の一角に設けられた森林エリアに身を潜めたああ！ 枝葉が多く最も戦いづらいとされる場所で、一体どんな戦いを見せてくれるのかああ!?!』

「また厄介なところへ！」

「流石のお嬢様も、ここじや得意のハルバードを振り回せないでしょ！」

「言ったわね、このハレンチ娘！ あなただつて得意のスピードが活かせないでしょうに！」

「ふふう〜ん、それはどうかな〜？」

森の中。最大19人のシャンテがセインのデーパーダイバーを使い、あらゆる位置から攻撃を可能にする聖王軍最強のトリックスター。それが、シャンテ&セインチーム

………だったのだけど。

——ゴツン！

「あうち?!」

「あ、シャンテを潜行させるの忘れてたああ?!」

木の枝に額をぶつけたシャンテだけが地面に落下する。

『………おおくと、思わず声を失うところでしたが、雷帝に墨を塗られることなく早くもシャンテ&セインチーム脱落だああ!』

「……ううつ、シャンテ」

「ま、まあ、これで人数的には互角ですから」

何やってんだセイン——と、スバルやらノーヴェエなど内外からツツコミが入る。

「陛下ごめん……ガクッ」

未だ森林エリアにも到着していなかったチャンピオンコンビが立ち止まった。

「やりましたわよ、ジーク!」

「ウチがよう見とらん間に何が!」

「このペースでヴィヴィとアインハルトも——」

ふふふ、とおつとりした声が聞こえてくる。

「そこまでしてもらえますか、ヴィクターさん」

「セインとシャンテは後でみっちり訓練し直しますからね!」

ひいっつ——と森から悲鳴が上がった。

チャンピオンコンビに立ちはだかるのは、ヴィクターさんの鎧にも似たベルカ式の甲冑に身を包む金髪の教会騎士と、戦車役の修道騎士。

『なんと! ここで見れたのは聖王教会の騎士にして時空管理局の理事という2つの肩書きを持つ聖王軍のリーサルウェポン、カリム・グラシア少将とその秘書、シスター・シヤツハだああ!』

「あの、ヴィヴィオさん。いくら騎士の称号を持っているからといって、あの雷帝と鉄腕相手にカリムさんが戦えるのでしょうか? 助けに行った方がよいのでは……」

「あゝ、確かに戦うイメージないですもんね。だけど見ていてください。わたしが選んだ聖王軍最強の騎士団長さんですから」

片方は雷帝式といえども、基本ベルカ式の2チームが交戦する。

『おくとつと、これはスゴイ！ 騎士カリム、なんと目を閉じたままシャンテさんに合図を出し、ダールグリユンの槍術を避ける避けるうううとつ！』

ヴィクターさんの顔に焦りの色が見える。

「まさか、これが噂の未来予知なの!？」

「今度はこちらから行きますよ!」

カリムさんが、シャンテやシャツハと同じく腰の双剣を引き抜いた。

「金髪……双剣……未来予知……うつ、何か覚えが……」

「ヴィヴィオさん、他にも似た魔導師が?」

「OVAでいいから、刀藤綺凜ちゃんが主人公の実家に行ったり、主人公が綺凜ちゃんの実家に行く話を見たかったああとつ! 温泉もあるよ!？」

遠くでリオコロがコクコク頷いた。

すると、チャンピオンが悲痛な声を上げた。

「あかん、あかんでヴィクター」

「どうしたのジーク、まさかやられたの!？」

「いや、ウチの足……もうプルプルや……」
「え!？」

『あちやく、誰がこんなことを想像したでしょう、あの雷帝&鉄腕のストライクアーツ最強チームが自爆だああ!』

「実際に剣を打ち合わせなくても、ジークさんがシャツハに合わせて動き続ければ自然と自滅することは、最初から視えていましたから」

「くっ……まさか私のジークがこんなことでやられるなんて……」

「……ウチ、最初から言っとったよー」

たぶん、ヴィクターさん以外みんな気づいてたけどね!？」

『スゴイ、スゴすぎるぞつ、これが聖王軍最強と謳われる騎士カリムの真の実力だああー
ーっ!!』

その後も騎士カリムとシャツハが大暴れ。ルーラー&ガリユー、それに狛犬ツインズ（結構強い）と共に、機動六課を追い詰めていく。

はつきりいって、わたしとアインハルトさんのやることがない。

「あの、ヴィヴィオさん。このままでは私たちの出番がなくなるような……」

「それはマズいですね。せめてリオコロだけでもわたしたちの手でベルカの闇に消し去りましょう！」

「はいー！」

「なんでそんな怖いことになってるの!?!」

マイストアームで防御に徹しているリオコロからツツコミが入る。結構余裕あるな、あの2人。

『おっつと、ここで満を持して現代に蘇った聖王&霸王のチームが参戦だああ!』

広い境内の中央。防戦一方の機動六課。わたしとアインハルトさんは余裕を持って聖王軍3チームに合流する。これで4対3。完全にわたしたちが有利だ。

カリムさん、ルーラー、アルフの3人がわたしを出迎えてくれる。

「陛下、最後まで油断なきよう」

「ヴィヴィオ、私たちにとっては4年越しの勝利ね!」

「機動六課を一気に叩き潰すよ!」

ところが、白いエース・オブ・エースが不敵な笑みを浮かべた。

「ようやく前に出てきたね、ヴィヴィオ！」

「なのはママ？」

振り返り、

「スバル、ティアナ、ここはしばらく任せるから」

「了解です、なのはさん！」

「チャンスとはいえ、結局いつものアレかあ。なのはさんお手柔らかに」

「コロナちゃんもよろしく」

「はい！」

「リオちゃんは死ぬ気でね」

「ヴィヴィオといい、なのはさんといい、高町家のあたしに対する扱いが酷いよっ!」

嫌な予感しかしない。

「アルフ、ザフィーラ、こっちはいいから、なのはママたちを追いかけて！」

「オツケー、ザフィーラ行くよ！」

狍犬ツイインズが駆ける。

「騎士カリム、Dr. ルー、ティアナさんとスバルさんのコンビは手強いから、2人がかりで一気に攻め落として！ それからなのはママを追いかけて！」

わたしとアインハルトさんの前にはリオコロ。

「ヴィヴィオ、私たちのことを忘れてない?」

「忘れてないよ! アインハルトさん!」

わかりました——と正面から突撃。同時に、素早くリオの目に向かってソニックシューター(墨)を放ち、はにゃ——と一瞬動きを封じる。

「マイストアーム!」

コロナが生み出した太いゴーレムの腕が交差して行く手を塞ぐ。が、霸王の進軍は止められない。

「霸王流——破城槌!」

砕け散る腕。チャンス。隙間を狙い放つのはセイクリッドブレイザー(墨)。コロナの顔を黒く染めると勢いで地面に叩き落とす。

「ヴィヴィオさんこのまま行きますよ!」

「はい!」

止まらずなのはママたちを追いかけるが……フェイトママ、速っ!?

ザフィーラですら届かない。

アルフが「マズいよ!」と声を上げた。

「思った以上にフェイトが速い!」

「あはははは、なのは軽いから〜」

「最初に言ってたことと違う!」

ランナーズハイみたいな感じかもしれない。

その間も、なのはママに魔力が収束していく。

「そっか、そういうことなんだ……」

「ヴィヴィオさん?」

「一見フェイトママが逃げているようだけど、その間もなのはママは魔力を高めることが出来る。このまま誰も追いつけないとしたら、あの2人は完全無欠の移動砲台なんだよー!」

「どうすれば!?!」

「発動前に、全員で取り囲むことができれば——」

しかし、

「スバル、ティアナ、お待たせ。それからヴィヴィオ気づくのが遅い——」

レイジングハートの砲身がこちらを向いた。

「つて、何で左手にレイジングハート、右手にバルディッシュを握ってるのおお!?!」

「お正月だからね、私も二刀流で、N&F中距離殲滅コンビネーション——」

アレって1人で出来たの!?! あー、でも、下にフェイトママもいるし撃てるのか!?!

「今からじゃ逃げられない!? カリムさん、何か避ける方法は!」

騎士カリムはわずかに目を閉じると頭を振った。

「これは……………無理みたいね」

そんないい笑顔で諦めないで。

なのはママが言う。

「思ったより境内が広がったからね。流石に全域は覆えないから、ヴィヴィオを逃がさないよう、2人が前に出て来るのをずっと待ってたんだよ」

つまり、

「追い詰めてたはずが、実はわたしたちが追い詰められてたの?」

「そういうこと——プラスチック・カラミティ——ツツ（墨）!!」

本来は桜色と金色の、それこそ花火みたいに綺麗な輝きのはずなのだけど…………墨。

わたしとアインハルトさんだけじゃない。

騎士カリムも、シャツハも、ルーテシアも、ガリユーム、アルフも、ザフィーラも…………いや、味方である機動六課、スバルさんやティアナさん、それにまだ境内にいたりオコロや、チャンピオン2人に、シスターコンビまで、全てを飲みこみベチャ——と黒に染める。

「「「ふぎやあああ~~~~~」」」

阿鼻叫喚。誰もが真つ黒。羽根つきで負けたリオでもこうはならない。静寂の中、シャーリーさんの声だけが聞こえてくる。

『……………陛下、みなさ〜ん、生きてますか〜?』

干潟で泥まみれになったようなアインハルトさんがうつ伏せで潰れており、その背中の上にコナンの犯人みたいなたしが座っている状態。

「けほけほっ！ ううつ、新年早々こんな目に合うなんてええ〜なんて年だ!! 今年はまだダメかもしれない！」

なのはママとフェイトママが「まあまあ」と近づいてきた。ちなみに、なのはママは未だにフェイトママにおんぶされたままである。

「大丈夫だよ、ヴィヴィオ。悪いことばかりじゃないでしょ。だって、新年早々アインハルトちゃんと一緒なんだから」

「……………そう言われると」

「……………そうですね」

わたしとアインハルトさんは、真っ黒になりながらも、見つめ合って苦笑した。フェイトママが優しく微笑む。

「そしてアインハルトは、今年も1年、今日みたいにヴィヴィオの尻に敷かれるのでした
く、なんてね」

「!？」

「それ、フェイトママもね」

「あれ!？」

ベルカ諸王握手会

年が明けて数日後。わたしとアインハルトさんは改めて聖王教会本部を訪れていた。

騎士カリムの執務室で、学校生活やストライクアーツのことなど、何気ない日常の出来事について語っていると、コンコン——ノックの音が聞こえてきた。

「どうぞぞ」

入ってきたのは見知った品のいい金髪のお嬢様……というかオカン。

「ヴィクターさん！」

「あらヴィヴィにアインハルトじゃない。この前はお疲れ様でした。どう？ 元氣してた？」

「はい」

さらにもう一人。赤みがかった金髪——ストロベリーブロンドの少女が顔を見せる。

「イクス！」

「ヴィヴィオ、アインハルト、それにヴィクターもごきげんよう。お茶を持ってきましたよ」

すると、騎士カリムが急にポンと手を打った。隣でシスターシャツハがまたか——と

いった顔つきで溜め息を吐く。

「コレは……そうね、歴史的に見ても中々ないことだと思うし、そろそろ握手会なんて開いたらどうかしら？」

「「「握手会!?!」」」

古代ベルカ諸王の末裔たち——イクスだけ本人なのだけど——が、そろって顔を見合
わせた。



そんなわけで後日。

聖王教会主催で『現代に蘇る——古代ベルカ諸王（子孫）との交流会（握手会）』なる
イベントが開かれた。

会場はもちろんいつもの教会本部前。

何だかRPGっぽい玉座の間（またルールーが外に建てた）に、金の装飾が施された
豪華な椅子が4つ、横一列の等間隔に並べられている。さらにそれぞれの椅子の前に

は、赤いカーペットが真っ直ぐに敷かれていた。

もしも握手会の列に並んだとしたら、左からヴィクターさん、アインハルトさん、イクス、わたし——といった順番に見えることだろう。

ちなみに、今日はセインやシャンテたちが、最後尾を示すプラカード持ちをやつてくれている。

わたしは一番離れた玉座に座る雷帝ダールグリユンの血を引くヴィクターさんに尋ねた。

「わたしたち以外にもベルカ王族の子孫っていると思うんですけど……集まらなかったんですか?」

「ええ、今や大半が一般人で、普通の生活を送っているから。ひよつとしたら、今でもとんでもない権力や資産があり、世界を影から支配するようなベルカ王族の子孫だっているかもしれない。だけど、そんな人物が握手会に参加すると思う?」

「……しませんね」

最近コナンの「あの方」の正体も判明したけれど、真の権力者は表に出てこないからこそ影なのだ。

「——となれば、ここは聖王教会ですし、一番人気はわたし——聖王でしょうね。きつとわたしの前には1万人くらいの長蛇の列が……。噂では、手や腕や首とかすつごい疲れ

るって言うし、いや、困っちゃうな」

「言ってくれますわね」

「で、2番人気はアインハルトさん！」

「私ですか!？」

「はい。なんとたつて霸王の末裔ですからね。頑張ってくださいね。あ、でも、勢い余つてフアンの手を握り潰さないでくださいよ?」

「しませんよ! ……たぶんですけど」

たぶんなんだ——とイクスが笑っている。

「ふんつ、3人とも笑つていられるのは今のうちだけよ。今日こそ、旧ベルカの最強覇者は聖王でも霸王でもなく、雷帝だということをハッキリ教えて差し上げますから!」
わたしとヴィクターさんがバチバチ火花を散らしていると「あの〜」という控えめなイクスの声が聞こえてきた。

「今回の場合、過去のベルカ王の人気とは別に、現在の各個人の人気——特に、U19の総合魔法戦競技チャンピオン」のヴィクターと、U15ワールドチャンピオン」だったアインハルト——2人の握手会と考えた場合、ストライクアーツファンも多く集まるでしょうから、単純に諸王の知名度のみで競うことは出来ないと思いますよ?」

「……確かに」

イクスの言う通りだ。

ヴィクターさんがわずかに唸った。

「そうなるよ……自分で言うのもなんだけどこうかしら？」

空間ウインドウに、ストライクアーツの実力順が表示された。

『1位ヴィクター 2位アインハルト 3位ヴィヴィオ 4位イクス』

「きいっくっ！ 悔しいけど言い返せない！」

「それでは、客観的に判断した各王の人気・知名度も表示しますね」

イクスが空間ウインドウにプラスする。

『1位聖王 2位霸王 3位雷帝 4位冥王』

雷帝のお嬢様は悔しそうにしているけれど、わたしのイメージもこんな感じだ。

アインハルトさんが「なるほど」と呟いた。

「つまり、過去と現在——総合的に判断すると上位3名はまったくの横並び、互角の人気ということですね」

わたしとアインハルトさん、ヴィクターさんの人気は同率1位ということだ。ん、ちよつと待って、だとしたらイクスは……?」

「あ」

イクスとしても、冥王としても、人気は低い。ぶつちぎりの最下位だ。

「あはは、私のところだけまったく列ができない——なんてこともあるかもしれませんがね。破壊と殺戮を好む残酷なるガレアの王——なんて、いい印象を持つ方は少ないでしょう。ひよつとしたら一人も並ばないかもしれないですね」

明るく笑ってみせてはいるものの、

『『『うっ……コレはマズいっつ!!!』』』

哀れで思わず心を打たれる。わたしとアインハルトさんとヴィクターさんは視線を重ね頷き合った。念話を送る。

『ヴィクターさん、何かアイディアは?』

『急にそんなことを言われても……』

『アインハルトさんは？』

『いえ、私もさっぱりです……』

う〜ん。

『冥王もダメ、ストライクアーツもダメ——となると第3の手を考えないと』

『ヴィヴィはいい考えがあるの？』

みんなのオカンとしては心配なのだろう。

『はい、1つだけですけど。握手会が始まる前にちよつと試してみましようか？』

わたしはゼオライマーとは似ても似つかない、いたいけな冥王様に声をかけた。

「イクス、前みたいに小さな分身を生み出してもらえる？」

「え、あ……はい」

眠っていても出来たのだから、起きていて出来ない道理はない。

眠ったイクスの身体を寢室に運んでもらうと、小さな彼女をアインハルトさんから借りたティオの背中にドッキング。『V i v i d L I F E インターバル編』の11ページで見たような、ちっちゃな冥王様が降臨である。

「へ、コレは……」

「思った以上に……」

「か、かわいいっつ!!」

想像してみたい。

雪原豹と言いつつ、どう見ても愛くるしいニヤンコなテイオに、これまたデIFOオルメされた愛らしい冥王陛下が乗っかるのだ。

その相乗効果たるや、テイオ単品、イクス単品を遥かに越えて……グレートゼオライマー。

「ハッ!? これがイクスのメイオウ攻撃か!」

オカンの保護欲を駆り立てられたのか、現代の雷帝さんは玉座から立ち上がると、ふらふらイクスの最前列に並んだ。あなたは握手する側ですよ。

何だか目つきがグルグルして怪しい。

「はあはあ、この子は今日からうちの子ということ……そうだ、ジークにも小さくなつてもらってフーカから借りたウラカンに乗せて……2人で……はあ、はあ、はうっ!!? 騎士カリムうう、いくら寄付すればよろしくてええくっつ!!?」

『神雷』使う時みたいに金髪が青くスパークしてらうくっつ!!?

「ヴィクターさん落ち着いて！ 少し頭を冷やそうかああ——っ!？」

こうして交流会（握手会）がスタートしたのだけど、ミッドで人気のストライクアーツチャンピオンと握手できるというのは、想像以上に宣伝効果が抜群だったらしい。雷帝ヴィクターさん、霸王アインハルトさんの前には長蛇の列が出来ていた。

そして、心配された冥王イクスの前にも、今では長蛇どころかド●ゴンボールの〴〵蛇の道（閻魔大王の宮殿と界王星を繋いでるアレ）〴〵みたいに人が並んでいた。

開始直後は皆無だったものの、雷帝や霸王と握手した際、隣にポツンとたたずむイクスの愛くるしい姿に「触れてみたい!」と思ったファンが続出。並び始めたことがきつかけだった。

後はもうなし崩し的に列が伸びたわけだけど『ヴィクターさん+アインハルトさん』2人分なわけで、人数は減るどころか今も増え続けている。

そうか、これが次元連結システムか!?(違う)

一方、わたしはといえば、

「わたし聖王なのにいゝゝゝっつ!!?」

聖王ヴィヴィオのレッドカーペットに閑古鳥が鳴く。

隣のイクスが実に申し訳なさそうにこちらを見るのだけど、あまりの忙しさにペコペコ頭を下げることしか出来ないでいる。

ヴィクターさんとアインハルトさんも同様。援護攻撃も援護防御も発動しない。

こうなったら仕方ない。

奥の手だ。

結婚式じゃないけれど、

「ちよっとお色直し行つてきまーすっ!」

玉座の間の控室に入ると早速——聖王モード!

いつもの大人モード(かつてのなのはママの年齢くらい)よりも若干幼い容姿。そして髪型もなのはママとは異なりシニョンをつける。衣装は青セイバーっぽい戦装束。ごつごつした銀のガントレットも忘れずに装着する。

「負けられない戦いがここにある！」

ノーマルの聖王モードは封印。

今日は、今日だけは、恥も外聞もなく聖王女オリヴィエモードで全力全開っ！

古代ベルカ史に燦然と輝く聖王のプライドに賭けて必ずや勝ってみせる！

いざ出陣——

「みなさん、お待たせいたしました——」

まるで、教会に飾られた絵画から抜け出したようなわたしの姿に、握手会に並んでいた信者たちはみな声を発することを忘れ立ち尽くした。

時が止まる。

鎮守の森に迷いこんだ静けさが6秒は続いた後、誰ともなく堰を切ったように大歓声が上がった。阿鼻叫喚。死屍累々。なのは完売しましたっ！ 信者たちがビッグウェーブとなつて一斉にわたしの列に向かって押し寄せた。

「ありがとうございます。これからも聖王教会をよろしく願いますね」

まさにオリヴィエさまさま。

聖王女は伊達じゃない！

今なら落下するゆりかごだって止められそうだ。

わたしの人気じゃないのが悔しいけれど、奇跡の大逆転である。

すると、イクスを挟んで向こう側。わたしを見たアインハルトさんが妙にそわそわしている。何だかもうやりたいことを抑えて我慢しているといった様子で、明らかに落ち着きがない。

そもそも、今の騒ぎで他の列の握手会はストップしているのだけど。

ヴィクターさんも気づいたのか「はあ」と嘆息した。玉座から立ち上がる。

「仕方がないわね。アインハルト、ちよつとこつちに來なさい。イクスも手伝ってくれ
る？」

先程のわたし同様、3人で控室に消える。

扉から漏れてくるグリーンの魔力光。どうやらヴィクターさんとイクスがサポートしているようなのだけど……？

しばらくして現れたアインハルトさんは、いつもと違い髪を1つに束ね、白いマントを羽織り、どことなくクラウドス陛下を思い出す男装をしていた。

わたしのすぐ横まで歩いてくる。

「ヴィヴィオさん。握手会、一緒におこなってもよろしいでしょうか？」

「あ……はい、もちろんです！」

それはまるで聖王教会に伝わる宗教画のよう。再び信者たちの間からざわめきが漏れた。

その間に、ヴィクターさんはイクスを自分の隣の玉座に移動させると、残った王の椅子を持ち上げてわたしの隣に並べた。そして声を張り上げる。

「ここからは、聖王と霸王の列はセットになりますわ。焦らず、走らず、前の人から順番に合流してください」

4本あった列のうち、熱心なヴィクターさんファン以外、ほとんどの列の人がわたしとアインハルトさんの前で合流した。

シヤンテが分身して対応しているものの、てんてこ舞い。わたしとアインハルトさんは顔を見合わせて苦笑した。

ちっちゃなイクスが、隣のヴィクターさんに話しかける。

「雷帝としてはよかったですか？ 聖王と霸王に塩を送って」

「そうね……まあ、600年前からの悲願であり、悲嘆で、悲恋だもの。今日ばかりはうちのご先祖様だって野暮なことは言わないわよ」

冥王と雷帝は静かに微笑むと、自分の列に並んでくれたファンたちと握手を交わした。

お年玉とコロナとBD2号機

「うーん、お年玉何に使おうかなあ〜」

ママたちからもらったポチ袋を手に、わたしは悩んでいた。

というのも——これほど贅沢な悩みもないのだけど——だいたい欲しい物は持っているからだ。物もそれ以外も。

もちろん物欲がないというわけではないけれど、趣味とも言えるストライクアーツや無限書庫に関連することは、洋服代や文房具代と一緒に、ママたちがお金を出してくれる。特に衣装はママたちが競って買ってくるので申し訳ないほど。変身魔法もあるのに。

そのため、お年玉で購入するほど高価な買い物が思い浮かばないのだ。

貯金しておいてもいいけど、

「こういう時は、みんなに使い道を聞くのが一番だよね——」

というわけで、わたしは早速先輩や友人宅へと足を運ぶのだった。

C A S E 1 ハイデイ・アインハルト・ストラトス・イングヴァルトの場合

「はあ、お年玉ですか？ 特にもらっていませんが……」

おおう……。まあ、日本と関係ないベルカ出身の霸王直系だし、そういうこともあるのだろう。とはいえ、

「1年に1回くらい、いっぱいお小遣いが欲しいなあ、とか思わないんですか？」

「いえ、うちの場合、欲しい物があれば実家に申請すればすぐに届くので……」

「へ？」

「あ、もちろん友人など、お金で買えない物もあるので、何でもとはいきませんが……この前もユミナさんが調理に使用したいと言った家電を実家に頼んだところ、翌日には『Am●zon』から届きました」

まさかのミッドまでお急ぎ便……。『Am●zon』スゴオオ——じゃなくて、

「もしかして、そのトレーニング機材も？」

「はい。なんでしたらヴィヴィオさんの分も送ってもらえるよう手配しましょうか？」

「素晴らしいマシンにしておきますので」

ひいっ！？

そんな高い物、お年玉じゃ買えないよ!?

車買えちゃうよ!?

「くっ、流石はリアル霸王家直系……実はアインハルトさんの実家はお城か何かです

かっ!?

「え?」

「え?」

何その「どうして知ってるんですか?」みたいな表情は? まったく否定されないんですけど……。

「これは一度、本気でアインハルトさんの実家に乗りこむしか……」

リオコロを引き連れて。

すると、急にアインハルトさんが挙動不審。しどろもどろになった。

「そ、そ、それはつまり私の両親に挨拶したいということですか、いえ、それは、まだ、いえ、大変ありがたい申し出と言いますか、いや、しかし、そうですね、しばしお待ちを……色々と実家と確認を取らねばならないことがありますってええ!」

ん、んん?」

何やら勘違いされてるっぽいんだけど、いつかは訪れてみたい場所——高町ヴィヴィ才脳内ランキング第1位なので、まあ別にいいだろう。乗り越えねばならない壁である。

とはいえ、お年玉の使い道には役立たなそうなので、次行こう、次……。

CASE 2 ミウラ・リナルデイの場合

「ミウラさんお年玉は〜」

「もらってませんよ?」

「……もか!?!」

「ボクの場合は、家のお手伝いをしてお小遣いをもらう——といったタイプでしたので」

「な、なるほど……」

小さい頃から苦労して、でもそれが足腰を鍛えることになり現在の抜剣に繋がっているのだから、一体何が役立つかわからないものだ。

ミウラさんが言う。

「それに最近は大きな大会だとファイトマネーが出るじゃないですか。なので、むしろそのお金を両親に使ってもらえたらなって——」

うわ、眩しいいいい——っ!!

いい人すぎるので、次行こう、次……。

CASE 3 リオ・ウエズリーの場合

「よし、スルーしよう!」

と言った瞬間、家から飛び出してくる黒いアホ毛の影……というかりオ。

「前もあつたよね、こういうこと!？」

「えーっ、じゃあ聞くけど、リオはお年玉何に使ったの？ どーせゲームとか漫画とかラノベとか円盤でしょ？」

「……………うん。それがゲームには違うんだけど……………課金を少々」

「あゝっ……………まあ、しょうがないよね。課金も大事だし。サービス中止にならないためにも、せめて自分が一番遊ぶゲームにくらいお布施するのは、正しい行為だと思うよ。リオ、グツジョブ!」

「え、まさかの褒められた!？」

「ただし、わたしはしないけどね!」

「ちよ、ええええ、ヴィヴィオも課金しなよお——っ!？」

「とはいえ、わたしもよくやるゲームくらいは貢献しようかなと。なくなつて欲しくないし……………」

なくなつてから後悔しても遅いのせんと。

CASE 4 コロナ・ティミルの場合。

ついにやってきましたコロナ城……………じゃなくて、普通にコロナの家なんだけど。

「何このコロナの部屋っ!？ プラモ狂四郎に登場するボクサーでモデルの富田さんの

部屋みたいになつてるよ!」

「ヴィヴィオ、それ誰もわからないから。むしろわかつたら相当だよ?」

具体的に言うと、作っていないプラモの箱が大量に積み重なっていて、仕上げたプラモは大切に保管するか飾ってある部屋である。

ついでに言うと、富田さんはボクシングをやっているので鉄アレイなどのトレーニング用具が置いてあるところも、コロナ部屋に共通している。

ちなみに『プラモ狂四郎』とは、最近流行った『ガンダムビルドファイターズ』の元ネタともいべき古い漫画であり、作ったガンプラを、自分で操縦しているかのようにシミュレーションマシンで戦わせる——という作品だ。

さらに言うなら『プラモ狂四郎』では、ガンプラ以外にスケールモデル——実在の戦車プラモとマゼリアアタックなどを戦わせたり、ダンバインやエルガイム、ボトムズなどのプラモデルも参戦する。いわば、スパロボ的な要素も先駆けて存在している。

とどめに現在ではすっかり当たり前となった武者ガンダム。ジオングにドムの足をつける——パーフェクトジオングなどを広めたのもこの漫画。

“魔改造”——なんて単語も『プラモ狂四郎』発である。

最近では、Gジェネやガンダム v.s. シリーズで初めて知った人も多いだろう。

古い漫画だからと敬遠せず、機会があれば一度読んでみる価値のある作品。それが

『プラモ狂四郎』なのだ……けど、

「うわー、ちよつと遊びに来なかつた間に、まさかこんな『おいでよコロナの森』みたいな空間になっていようとは……って、机の上のは作りかけ？」

「うん。お年玉で買ったガンプラだよ。発売したのはクリスマス前だったんだけど、『H GUC 1/144 BD (ブルーデイスティニー) 2号機』

「へー」

またマニアックな……。

「——って、聞いてよヴィヴィオ、イフリート改はプレミアムバンダイ限定なんだよ!？」

これじゃEXAM機体4体そろわないよ!? 普通に売ってくればいいのに! 私に

Am●zonで高く買えと!？」

「いや、わたしに言われても……」

「コホン。まあ、それは置いといて、BD2号機って、ガンダムMk-IIIのティターンズカラーみたいにもつと黒いイメージがあっただけで、ほら見て——」

「あー、どっちかというとき青みの濃い紺色だね」

「うん。なので、私のバリアジャケットみたいに紫みの濃いグレイに変えて、ついでにニムバス機の象徴ともいうべき肩のオレンジをピンクにすることで——はい、BD2号機 コロナ専用機だよ!？」

「えー」

確かにそれっぽいカラーリングになったのがなんとも言えない。ピンクのクリアパーツで出来たビームサーベルとも上手い具合にマッチしている。というか、そもそもこのパッケージのイラストがそれっぽい。

背景の白いBD3号機がグリーンの魔力光……じゃなかったオーラを発しているところも、どこか『コロナV5アインハルトさん戦』を彷彿とさせる。

興味がある方は『1/144 ブルーデイスティニー2号機 パッケージ』で画像検索してみてください。新しい方ですよ。

「ちなみになんだけど、ヴィヴィオが作る時は頭部に注意してね」

「頭？ どういうこと？」

「パーツが細かいから。一番小さいのは私でも手で持つのが大変なくらいで。大人の指だとたぶんピンセットが必要なんじゃないかな」

「えー」

「それからデカール……シールね。小さいのは1ミリ×1ミリくらいのサイズのもあるから、これはもう大人から子供までピンセットが必須だと思う。むしろなしで貼れる人がいたら会ってみたくらいだよ」

「う、うーん、そこまでして、どうしてコロナはガンブラを作るの？」

「そこにガンプラがあるから——という哲学的な話は置いて、ヴィヴィオ、学校の授業でも習ったと思うけど、ゴーレム創成で一番大切なことはイメージなんだよ。特に立体のイメージ。これが上手く出来ないとりオの「ちびりオ」みたいなことになるの」

「あゝ」

異様に強いけど、ペラペラな平面である。

「ヴィヴィオが上手くクリスのゴーレムを作れたのは、ヴィヴィオが普段から立体のクリスの全身をよく見ているから」

「な、なるほど……」

それでアインハルトさんが作ったゴーレムは、ちよつと微妙なことになっていたのか。

「そっか。ガンプラ作りはただのコロナの趣味かと思ってたけど、ゴーレムマイスターにとって必要な訓練だったんだね」

「……………一応、趣味と実益？」

「あ、やっぱり趣味ではあるんだゝ」

「わ、私のことは置いて、結局ヴィヴィオはお年玉何に使うか決めたの？」

「うゝん、それなんだけど……」

これだけ見て回っても、ストライクアーツ以外に「これ！」というものが見つからな

いのだ。

「だったらさ、ヴィヴィオもガンプラを1体組み立てて、ガンプラバトルしない？」

「え、出来るの!?! プラフスキー粒子とかどうしたの!?!」

「魔力素で代用できるから。デバイス——クリスだつて浮いてるでしょ?」

「そうだった! そっか、わたしがストライクアーツばかりやってる間に、世の中そんなことになっていたなんて……」

「実際、クリス以外のゴーレム創成をする役にも立つし、学校の成績もこれまで以上にアップするかも……なんちゃって」

「うくん、でも、意外とアリかも。せっかくだし1体くらい作ってみようかな」

「ホント、ヴィヴィオ!」

「うん、出来たら持つてくるね——」

そう言つてわたしはコロナの家を後にした。

さて……とはいうものの、現在発売されている膨大な数のガンプラの中から、どれをチョイスするかという問題がありまして……。

さらに、ガンプラバトルつて『ガンプラの出来栄えがバトルでの性能に反映される』そうなので、ただキットを組んだだけじゃ弱くて、コロナも歯ごたえがないのでつまらないだろう。

「そうになると、ガンプラを作るのが上手そうで、なおかつゴーレム創成の技術を持っている人に教わるのが一番いいんだけど……」

あ、1人いた。

早速、彼の地に向かう。

いたいた黒い長髪の大魔導師。

「ガンプライマスターのプレシアお婆ちゃん！　一緒にガンプラ作ろう——っ！」

「誰がガンプライマスターよ!？」

そんなわけで後日。

『1/144 BD2号機 コロナ専用機』

VS

『1/144 ガンダムAGE-1 フルグランサ プレシア・テストロッサ専用機』

で、ガンプラバトルをしたのだけど、結果はまたいつか別の機会にでも……。

炸裂！ 霸王流 飛砕弾

今年はナカジマジムでも節分です。

「「鬼はく外！ 福はく内っ！」」

買ってきた豆（で●六）についていた鬼の面（守備力1）を装備したりオに向かつて、わたしやコロナやミウラさんユミナさんたち——みんなで豆を投げつける。

「リオー、豆痛くない？」

「大丈夫、大丈夫。バリアジャケット装着してるからね。番長のパンチに比べれば豆くらい問題ないよ！」

なるほど。

「豆くらいでバリアジャケットが破壊されてたら、なのはさんなんて100回は死んでるよね？」

「……うん」

確かに。

「そーだ、アインハルトさんも一豆どうですか? 今年一年元気に過ごせますよーって意味をこめた厄払いなので」

「厄払い、ですか……わかりました」

アインハルトさんは中指を親指で押さえてしならせると、豆を一粒人差し指と薬指とつまんだ。そしてオーバースローでもアンダースローでもなく、リオに向かって豆を弾いた。

「霸王流——翔穹操弾（しょうきゅうそうだん）！」

——スパーン!

とかいう豆らしからぬ空気を切り裂く音と同時に、リオの額——鬼の面が真つ二つに割れた。仰け反るように倒れこむ。

「リオオオオオオオオオオオオ!」

へんじがない。ただのしかばねのようだ。

「霸王流、翔穹操弾つて……それ、『男塾』の技ですよねええ——っ!」

民明書房刊『知られざる秘拳』に書かれていた胡散臭い技だ。ていうか實在しないけどね!

ひよつとして——わたしは気を失っているリオの襟首をつかんでブンブン前後に揺らした。

「リオおお! アインハルトさんに男塾全巻貸したでしょ! アインハルトさん、リトバスの恭介なみにすぐ漫画の影響受けるんだからああ!」

「えー」

すると、

「あ、ゴメン、ヴィヴィオ。貸したの私だった」

「コロナああ!」

「まあ、まあ、ヴィヴィオさん。翔穹操弾は冗談としても、指弾のように小石やコインを飛ばす技は霸王流にも存在するんですよ?」

「え、ホントに?」

「はい。旋衝破と同じ遠距離攻撃対策ですね。受け止めることが出来ない攻撃も存在し

ますから」

「なるほど……」

「そうだ、せつかくなのでみなさんも覚えてみませんか? 魔法使用禁止の場所や試合

でも使えますし、意外と便利ですよ」

た、確かに……と、ジムがざわつく。

「せつかくだし、ちよつとやってみようか?」

というわけで、今日の練習はストップ。みんなで指弾の修行をしたのだけど……。

「ムリ、ムリ、ムリ——」

とはリオ。コロナも、

「私もダメ。ヴィヴィオはよく習得できたね」

「お見事です! 流石はヴィヴィオさん!」

「あはは……アインハルトさんみたいな威力は出ないですけどね」

まだまだ試合では使えないレベル。

とはいえ、こういった新技をマスターすると早速使ってみたくなるのは世の常で……

お、ちようどいいところに実験台が歩いてきた。

「ノーヴェ」

「ん、どうしたヴィヴィオ?」

「霸王流——飛碎弾っ！」

問答無用でわたしの指から^ッで●六の豆が放たれる。自分で言うのも何だが、見事なコントロールで狙った箇所——ノーヴェの額——に豆が吸いこまれていく。

「ふぎやああ!?!」

悲鳴を上げてノーヴェがうずくまった。

「あれく? そんなに威力はないはずなんだけど……」

ダンボールも貫通できない。

「お前つ、豆がおでこに当たれば十分痛いだろーがああ——っ!?!」

ズンズン赤鬼がやってくる。

走って逃げるわたし。

「コリアア、待てエエ、ヴィヴィオ——っ!」

「きやああ——っ! 鬼はく外っ! 福はく内いい!!」

夜。今年の豆まきは一味違うよ——というわけで帰ってきたフェイトママを驚かせようと指弾の準備をする。

とはいえ、豆でも当たれば痛いということが十分わかったので、フェイトママの顔を横を猛スピードで通過させてびっくりさせる程度にしておこうと思う。

事情を説明してあるのはママが隣で苦笑している。

「ただいまー」

来たアア!

「お帰りフェイトママ! 鬼は外! 福は内! 霸王流——飛碎弾っ!!」

昼間よりも練度を増した豆が、玄関の夜気を切り裂きフェイトママの隣を通過する

………かに見えた瞬間、その手に剣の形に変化したバルデイツシュが握られていた。

「ふんっ——」

そして、勢いよく腰を回転させながらバルデイツシュを振り抜いた。

——カーン！

打ち返された!?

で●六“豆がわたしの額にピッチャーライナー。

「へぐっ!?!」

「ヴィヴィオ!?!」

「つい癖で打ち返しちゃった!?!」

どんな癖……?」

「……ガクッ」

みなさん、指弾は危ないので人に向けないようにしましょうね。

チヨコつとデー。プダイバー

1

みなさんこんにちは、高町ヴィヴィオです。

早速ですがわたしは今、固有能力『デー。プダイバー』を使うセイン——青髪の元ナンバーズのシスター——と一緒に、とある管理局の施設に潜入。

無機物の壁や床の間を移動するのは、ちょうど水中を泳いでいる感覚に近いんだけど、イマイチ慣れないわたしは犬かきみたいにして進んでいる。

まあ、これでも進むので問題ないだろう。

壁の中なので念話で会話を交わす。

『陛下、電子錠と魔力錠の解錠終わったよー』

『了解。はあ、それにしても面白いイベントがあるといいんだけど……』

いくらバレンタインでも、毎年変わった事件は起きない。そんなわけで、今年はおわいたちの学院を飛び出して、ママたち管理局組のバレンタインをのぞいてみようと思立っただけど……。

今朝のことだ。

「騎士カリム、今日一日シスターセインを貸してください！」

「了承」

と、どっかの秋子さんみたいに微笑みながらカリムさんがGOサインを出すと、隣でいつものようにシスターシャツハが顔をしかめた。

「本当によろしいのですか？ ヴィヴィオに協力させて。アレの能力はいわば『のぞきスキル』ですよ？ の・ぞ・き！」

「のぞきとか言うなー」

「ええ、聖王教会は退屈……もとい、私も少し、はやてのバレンタインに興味がありましたし……」

「どっちみちアウトですよ！ もう、バレたらどうするんですか！」

「セイン、絶対に気づかれないように。上位命令よ」

「アイアイサー」

上がコーだと、下もあーなる、といういい例である。部屋を出ると、どこから調達したのか口に肉まんをくわえたシャンテとすれ違う。

「あれ陛下、セインとお出かけ？　いつてらっしやうい！　お土産よろしくう」
大丈夫か聖王教会？

3

そんなわけで、まずはフェイトママの執務室に潜入成功。

『いや、相手が管理局の執務官だろーと、あたしの敵じゃーなかったね！』
『あはは……』

この場合、喜んでいいのか悪いのか複雑なところではあるのだけど、とりあえず壁からニョキッと頭だけ出して様子を探った。

フェイトママの隣のデスクで、シャーリーさんがぼやいている。

「フェイトさん、またチョコもらったんですか、あげるだけじゃなくて」

「うん、そうだけど？」

「はあ……私なんてあげる相手もいなければ、フェイトさんからもらうくらいなのに……」

「ん、グリフィスくんにはあげないの？」

「へ？　どうしてですか??」

『あちや〜』

レティ提督の息子グリフィスさんと、フェイトママの執務官補佐をしているシャーリーさんは、子供の頃から家が近所の幼馴染なのだ。

『あの眼鏡もスペックは高いんだけどなく、ガツカリ組の一員だったか〜』

シャーリーさんが「そう言えば」と眼鏡のズレを直した。

「ダンボールいっぱいにもらったチョコは毎年どうしているんですか？ まさか律儀に全部食べてるとか？ それでそのプロポーシオンってチート？」

「まさか、全部は食べきれないよ。だから、もらったチョコは保護した子や、身寄りのない子供たちにプレゼントします——って最初から断つてあるから」

『さっすがフェイトママ……』

いい話だ。ひよつとしたらフーカさんやリンネさんが昔いた孤児院にも、チョコやお菓子が寄付されたのかもしれない。ともあれ、

『陛下〜、ココには面白いイベントないみたいだね』

『うん』

というわけで、次行こう、次……。

4

「——つたく、またお前チョコもらったのかよ」

「そういうヴィータちゃんだつてもらったでしょ？」

ご存知、本局にある教導隊本部である。

わたしとセインはロッカールームに潜入し、よくアニメとかであるようなスチール製のロッカーの内側に隠れて着替えシーン……じゃなかった、2人の会話をのぞき見ることにした。

チョコの箱を開けたなのはママが肩を落とす。

「それに私の場合もらったと言っても……ほら、金箔が貼られた画びよう型チョコとか、わら人形にパイルバンカーみたいな五寸釘が打ちこまれた形をしたチョコとか……」

『なのはママ〜』

『いや、むしろ手がこんでないかアレ？　ちょー気合が入ってるんだが……』

「私、そんな恨まれることしたのかなあ……」

「したんだろ？ 自ら悪魔でいいよと言いつつた鬼教官どの」

「うええくん！ ——と、まあそれはそれとして、ヴィーたちやん私にチョコは？」

「どーしてあたしが……と言いたいところだが、ほれ今年も作ってきてやつたぞ」

『お』

『まさかあの鉄槌の騎士が、なのはさんに毎年チョコを送つてたとはね』

「今年こそはてめーでも食えねえ、シヤマルの力を借りて作った超合金チョコだ。試したら釘も打てるほど——って、どーしてバリバリ食ってるんだよおっ!?」

ガキーン、ガキーン——と、もはやチョコを噛み砕く音じゃない！

「お前の口はなんだ、デスピサロの腹の部分か何かかよっ!?!」

どうやら毎年の勝負事だったらしい。

残念だったようなホツとしたような……次行こう、次……。

最後にわたしたちが潜入したのは、本局の海上警備部。

『ついに来たね、セイン!』

『おう、ようやく本命だな!』

騎士カリムからも言い渡された「八神はやて」のバレンタインである。

『やつぱりこう、＼1／1等身大ザフィーラ型チョコ＼みたいなやつかな?』

『いや、あのたぬ吉のことだから、＼自白剤入りのチョコ＼とか、ルーテシアお嬢と共謀して「魅了の魔法がかかったチョコ」とか……』

『あく、バレンタインだから——とか言つてさりげなく取り調べ相手に食べさせることが出来るんだ』

バレンタインの時期は検挙率アップである。

『これはヤバイね。管理局の闇を見てしまうかもしれないね!』

『カリムに正直に報告すべきかどーか、悩むところだな』

——とか言つて、2人で半日ほどはやてさんの行動を監視していたのだけど……、

『何も無い!?!』

『おかしいな、ふつーだぞ?!』

確かにチョコは作つてきていたのだけど「みなさんでどーぞ」みたいな感じで、局員も犯罪者も隔てなく口になっている。

「というか、わたしとセインもこつそり食べたのだけど、非常に美味しくいただきました。」

『あれ？ どういうこと、セイン？』

『あたしに聞かれてもなー』

面白イベントもなければ色恋沙汰もない。

『まさか、大本命にオチがないなんて……』

『陛下、ひよつとしてもつと身近なところにオチがあるんじゃない？ 例えば、陛下が大

事な人たちにチョココを作り忘れたとか、よくある砂糖と塩を間違えました的なオチとか

？』

『うーん、それがね、今年に限ってはないんだよねえ……。今年はね、ジムのみんなと一緒にチョココを作ったんだよ。ノーヴェンちで。爆発するかもしれないから』

『ノーヴェ……』

『大丈夫、大丈夫。料理が得意なユミナさんやミウラさんもいてくれたし、ノーヴェもどういうわけか料理得意でしょ？』

『ノーヴェえ……』

『まあ、アインハルトさんだけは爆発したり鉄アレイみたいなの作ってたけど、想定内だったし』

『霸王つ子のそれ、想定内なんだ……。じゃ、その場でチョコを配りっこしたと?』
『そうそう。だからキツチンの惨劇を見てノーヴェが騒いでたくらいで、後は平和なバレンタインだったんだよ』

『ノーヴェええ……。あ、そーか、そーいうことか。陛下帰りにジムに寄ってみなよ』
『え、どうして?』

『まあまあ、あたしの予想が正しければ、そこにオチが待っているっ!』

というわけで、海上警備部を後にしたわたしとセインは、ディープダイバーを解除してからナカジマジムに向かったのだけ……。『ナニコレ!』

トラック1台分のチョコが届いていた。

ノーヴェやユミナさん、それにスタッフのみなさんが一生懸命に仕分けしていた。

「よっ、陛下、人気選手!」

「あ、そーいうことか! でも大半はアインハルトさんあてなんじゃないかな」

「まあまあ、陛下だって十分人気あるって、ほらあつちの山は陛下に届いた分みたいだよ」

「あはは、うれしいけど……。ん、これってクツキーの缶だ。そーだ、シャンテももらつてるかもしれないけど、これをシャンテのお土産にしよう!」

聖王教会本部がチョコの山で埋もれていた。

空中には配達業者の車代わりなのか、アースラみたいな艦船が浮かんでいて、真下に開いたハッチからドバドバとラップリングされたチョコが降り注いでいた。

ちようど、かき氷の機械で器に盛った氷が山になるような感じで、教会の尖塔までチョコが積もっている。

「な、ナニコレ……敵が攻めてきたの!?!」

こんな爆撃、仮面ライダーに年賀状を送るシヨツカーでもやらないよ!?!

「そ、そーだ陛下、さっきのストライクアーツじゃないけど、今年は神社だけじゃなく握手会とか色々やったでしょ!?!」

「そ、そーか、その時ナカジマジムやフロンティアジムに迷惑がかからないよう、ファンレターやプレゼントは聖王教会あてに送るようお願いしたんだっけ……」

地球で例えると、キリスト教徒は約22億人。イスラム教徒は約15億人。ヒンズー教徒は約9億人。仏教徒は約4億人いるらしい。

それが、次元世界で最大規模の宗教組織である聖王教会の信者数ともなれば……推して知るべしである。

「つまり、数百億はいるという信者のほんの一部がチョコを送ってくれただけで……?」

結局のところ、みんなは無事に救出。大量のチョコもフェイトママを見習って次元世界の恵まれない子供たちに配ることになりました。

よかった、よかった。

そうそう。大事なことを一つ。みんなもデュープダイバーはのぞきではなく人命救助に使おうね。大活躍するよ？

レヴィの不思議なダンジョン

1

今日は2018年公開予定の映画『魔法少女リリカルなのは Detonation』の件で、なのはママと一緒に惑星エルトリアを訪れています。

ママは王様やシユテル、アミタさんやキリエさんと一緒に大人のお話。一方わたしはといえば……。

「よしヴィヴィオ、ダンジョンに遊びに行こう！ もちろんユーリも一緒にね！」

そんなわけで、本日はわたし——高町ヴィヴィオと、レヴィ、ユーリの3人で、惑星エルトリアに点在する遺跡の中でも最大級、未だにレヴィが探索を続けているという「謎のダンジョン」からお送りしたいと思います。

2

「ココが噂の古代遺跡かあ〜」

砂漠や死触の大地を越えた先にあるそのダンジョンは、2階、3階と上がるのではなく地面の下に潜っていくタイプだった。

天然洞窟ではなく完全に人の手によつて造られた地下迷宮。石畳や石壁などファンタジーチックな建築様式かと思えば、途中から繋ぎ目のない金属のような光沢を放つ材質に変わる。

「この混ざり具合……ちよつと『時の庭園』に似てるかも……」

そんな風に思っていると、小柄なユーリがビクビクしながらレヴィのマントを引っ張った。

「あう〜、通信が上手く繋がらないし、本当にこんな下まで潜って平気なんですか？」

「そんなに深いのか？」

レヴィの案内で階数の表示されないエレベーターに乗ったのでわからないのだ。水色の髪の少女があっけらかんと答える。

「えつとね〜、ほんの地下149階くらいかな？」

「深っ!？」

某トルネコさんのダンジョンより深い。

アバン先生の潜った破邪の洞窟やスペクトラルタワーの10000階に比べればまだただけど、十分気が遠くなるような深さだ。

レヴィが言う。

「ほら、前に別次元のなのはとフェイトがこっちに來たことがあつたでしょ？ あの時、原因になつた機械を見つけたのがこの遺跡なんだよね。確か、地下125階くらいの機械神殿つぽいところで見つけたんだつたかな？」

『魔法少女リリカルなのはGOD サウンドステージM「エルトリアの空の下から」』であつた出来事だけど、そっか……アレと同じ古代遺跡なのだとしたら、この深さも納得である。

ひよつとすると、まだまだ未知のアイテムが見つかるかもしれない。そう考えると、わたしはかなりワクワクしてきた。ミッドに帰ったらユーノ司書長にも教えてあげなければならぬ。

「そういうえば、さつきからユーリって妙に警戒してるけど、普段はレヴィと一緒にダンジョンに入らないの？」

「はい。以前は一緒に入ることもあつたんですが……その、レヴィが速すぎて置いてかれることが多くて……」

「あゝ」

1人でビュンビュン先に行っちゃうんだろうなく。「まっつてくださ〜い」と追いかける涙目ユーリの姿が思い浮かぶ。紫天の盟主は苦笑した。

「なので、最近はおつぱらレヴィが遺跡から持ち帰った未知の機械の解析することが多いですね」

「ポルタック商店で鑑定するような感じか〜」

「ポル……?」

某有名3Dダンジョン探索型RPG『ウイザードリィ』において『ポツタクリ商店』や『ポツタクル商店』などと揶揄されることも多いけれど、実際はやっぱりお世話になることが多いお店だ。

前を行くレヴィが振り返る。

「大丈夫だつて! 今日おはちゃんと僕がユーリを守るからねつ。王様から言われてるし。ちっちゃい子を守るのは戦士の役目なのだ〜っ!」

「ううっ、私も早く大きくなりたいです……」

「ユーリが大きくなりたいといえば、なのはGODの公式ビジュアルブックの座談会で都築先生とイラストレーターのしのぎき先生が、

『あとはしのぎきさんへの指定で「胸があるようには描かないください」、「ゼロです」

と（笑）』

『他の原画さんに色指定とかお願いすると、やはり影をつけてくるのでそれを削ったりしてました（笑）』

——つてのがあつたよーな」

「なんですとー、酷いですうう！」

「アハハ、僕はそーいうのよくわかんないけどさ、胸なんて邪魔だし、ない方が速く動けていいんじゃないの？」

「そうだなあゝ、じゃレヴィは戦闘には意味ないけど角がついたかっこいい紫天ロボと、角がついてない紫天ロボだったらどっちがいい？」

「そりゃもちろん角がついてる方が……あ、そーいうことか。よし、僕も大きくなったらフェイトみたいに胸がドーンとなるぞゝ」

「ううつ、レヴィはフェイトさんが元になってるから希望が持てますけど、私なんて……」

「中の人つながりで『W●RK I N G!!』の種島ぼぶらや『のん●んびより』のこまちやんみみたいな感じとか？」

成長してもちつちやいよゝ。ちなみに前者は身長140センチくらい、後者はなんと身長130センチくらいである。

なんてこつたい。

「いやああ〜、早く大きくなりたいですうう〜っ!」

あはは——と笑いながら、わたしが目の前の扉のドアノブに手を伸ばすと、急にレヴィが大声で怒鳴った。

「ヴィヴィオ、ちよつと待ったああ!」

「え、何っ!」

「そのノブ触っちゃダメだよ!」

「どういふこと?」

ネバネバして手にくっつくとか、そういうイタズラみたいなトラップだろうか?

「それ、鋭い刃が高速回転して丸いノブに見えるだけだから、手で握ると指がズタズタになっっちゃうよ?」

「いやああ——っ!」

古典的だけど、なんて凶悪なトラップ。

「う〜、トラップかく、流星はダンジョン……あ、そういえばこの遺跡も入る度に形が変わったりするの?」

いわゆる自動生成ダンジョンというやつだ。

「うん、変わるよー。一部だけどね」

「へー、やっぱり外に出るとレベルが1に戻されたり、巻物を読んで武器が1+1されたりするの?」

不思議のダンジョン形式である。

するとレヴィが「やだなく、何言ってるんのヴィヴィオ」と笑った。

「現実的に考えて、ダンジョンの外に出たくらいで経験したことがなくなったり、巻物を読んだくらいでバルニフィカス（レヴィのデバイス）がパワーアップするなんてあるわけないじゃん!」

「ぐはああ!」

レヴィから「現実的」なんて言葉を言われると無性に悔しいんですけど。

「あく、でも前に王様が何か言ってたよーな……何だっけユーリ?」

「えっと、ディアーチェが言うには『レヴィのダンジョンは、トルネコやシレンではなく、ポケモンに近いな』だったような」

「そうそう、そんな感じー。意味わかんないけど」

「ポケ……あく、そういうことかっ!」

『ポ●モン不思議のダンジョン』はレベル持ち越しのため、ダンジョンを出てもレベルが1に戻ることはない。

また、キャラがポケモンなので武器を持たない。素手による攻撃か技オンリーであ

る。そのため、新しい技は次々に覚えていくものの、巻物で＋１という武器のパワーアップがない。

そういった意味では、入る度に成長を続け、モンスターハントにより新必殺技を編み出すレヴィの迷宮探索とよく似ているのかもしれない。

いつの間にか周囲が、チカチカ光るむき出しの機械のような壁面変わっていた。

「わたしね、ずっとエルトリアの古代遺跡って古代ベルカと関係があると思ってたんだ……」

「え、そーなの？」

「うん。レヴィやユーリにこんな話をするのは今更なんだけど、古代ベルカ戦争の最後に「多くのベルカの民が忽然と姿を消した」——って言われてるんだよ。死んだんじゃないくて、消えたの。だから、ひよっとしたら、わたしたちの知らない凄いロストロギアで集団転移して、ここ——エルトリアにやってきたんじゃないかとかね」

「な、なんだってー」

「なーんてねっ！もし本当にそうなら、この遺跡を探索したレヴィやユーリ、王様やシユテルが気づかないはずないもんね」

「あはは、そりゃそーだよね〜」

「だけど——とわたしは壁に触れる。」

「こうして本物の遺跡を探索してみて、レヴィの言う機械神殿も見たけど、古代ベルカとまったく似てないってわけじゃないかなって。ちよつと聖王のゆりかごと似た匂いもするし……」

「そうですね——と答えてくれたのはシステムU—Dとも呼ばれたユーリだった。

「確かに、解析していても近い技術を使っているなど感じる部分があります。私の知る技術の平行線場や延長線上というより、同一線上です。共通点は多いですね。なので、ひよつとすると古代エルトリア文明は、古代ベルカ同様にアルハザードからの技術流出があつたのかもしれない。あるいはアルハザードそのものの遺跡という可能性もあると思いますよ？ アルハザードの秘術には『時間と空間を遡り、過去さえ書き換えることができる魔法』もあつたと言いますし」

レヴィが言う。

「そういえば、うちの時間遡行システムもグランツ博士が偶然発見したんだっけ？」

「はい。レヴィの拾ってきた機械とリンクしたということは、亡くなった博士もこの遺跡で発掘したのかもしれない。アマタやキリエに聞けばわかるかもしれないが……」

その辺りの秘密も、別次元の話ではあるけど今年の映画『Detonation』でイリスさんの事情と一緒に明かされるのかもしれない。

すると急にユーリが声のトーンを変えた。外見とよく似た子供っぽい歓声を上げる。

「あつ、レヴィ、ヴィヴィオ見てください。宝箱ですよ！」

うれしそうに駆けていく。

「この遺跡、そんなものまで落ちてるんだ……」

「ちよつと待ってユーリ。うかつに開けると——」

「えっ——」

一歩遅かった。勢いよく開けた宝箱の内側から閃光が走った。思わず腕で目をかばう。少女の体が光に飲まれる。

「ユーリっ!？」

光が収まると、宝箱を残しユーリの姿が忽然と消えていた。

3

「空間……転移……?」

「トランスポーターだよ」

レヴィが危機感なく言った。

「それってテレポーターのこと? 『ウイザードリイ』とかに登場する // 強制的にどこか

別の場所に飛ばされるトラップだよね」

「そうそう。前に1度だけ食らったんだけど、まだ探索してない場所に飛ばされて、戻るのが大変だったんだから」

「ちよつと待つてレヴィ。『ウイザードリイ』だと酷い時は壁の中にテレポトさせられて、一発でパーティーが全滅したりするんだけど……」

「壁の中？」

「そうだよ！ レヴィはこれまで無事だったかもしれないけど、地面の底とか石壁の中とか、普通入りこめないとこに強制転移されたら……」

例え、なのはママでも「死ぬ」！

『いしのなかにいる』で検索してもらえば、いかにヤバイ状況か理解してもらえないはずだ。

レヴィの顔が髪の毛みたいに青ざめていく。

「うわああくくくんっ!? ユーリ、ユーリがああ——っ!!?」

「ちよつと待つて、まだそうと決まったわけじゃないし、ダンジョンのどこか別の部屋に飛ばされただけかもしれないよ！」

「そ、そーだ、通信、通信——」

——ツ、ツ、ツ……。

「うええええくん！ ユーリい、ユーリい！？」

「そうだ！ この階は通信が繋がらないとか言ってた？」

「そうだよ！」

兎に角ユーリを捜そう——と、わたしとユーリは地下149階を駆けずり回る。

「ユーリいいー！」

「ユーリどこおお?!」

宝箱のフタをドツタンバツタン開けたり閉めたりしても当然入っていない。

長い回廊の途中で見つけたジュースの自動販売機を……って、

「どうして自販機あるのおお!？」

と思っただけど、考えてみたら古代遺跡とはいえこんなに大きな施設なのだから、昔の人が自動販売機を設置していてもおかしくはない……よねえ？

「ユーリ、いたら返事を〜」

取り出し口に両手を突っこんだレヴィが、こまちゃんを捜すほたるんみたいに、ガ

チャガチャ動かしている。リインさんなら入るだろうけど、流石にユーリは入らないだろう。

こうしてユーリ捜索から1時間。わたしとレヴィはいつの間にか149階のボス部屋にたどり着いていた。

「広っ！ ていうか天井が高いよ!？」

管理局の次元航行艦が停泊しているドックくらいはある。注意して進むと、

「いたああ——っ！ ユーリだああ——っ！」

奥のキャットウォークの上にいるのは、確かにユーリ・エーヴェルヴァインその人だった。ところが今にも泣き出しそう表情で、腕をばってんの形にクロスしている。

「どういふこと?！」

わたしとユーリが顔を見合わせると、突然轟くような声が出た。床が光り出す。

「この魔方陣は!？」

ズモモモモ——って感じで腕を組んだ巨大生物が迫り上がって来る。全身が黄金に輝く2足歩行のドラゴン……というかほぼ怪獣。

ていうか、見たことあるよおお!？」

「ナニコレエエ!?! もしかしてヴォルテール亜種ってことおお!?!」

色違いである。

体長15メートルって話だけど、実際はゴジラ（50メートル）とかサイコガンダム（40メートル）くらいはありそうな気がする。

「コイツを倒せば囚われのお姫様——ユーリを助け出せるってことだね！」
何だかクツパみたいになってきた。

言うが早いかレヴィがマントを翻し飛び立った。例え敵がどれほど強大だろうと、力を司る雷刃の襲撃者は引かない、折れない、退かない。アホの子というだけではない。最短距離で接近しつつ、青く光る魔力の鎌で竜の首を薙いだ——が、大きすぎるせいか刃が通らず大したダメージにはならない。

「だったらああ——」

多数の雷の魔力光から、剣のような雷撃を放つ。

「雷刃封殺——」

ところが、カッコよく言い終える前にヴォルテール亜種の口から灼熱の炎が放たれた。腕を組んで黄金に輝く姿はまるでアルデバラン。

「ふぎやああ〜っ!?!」

髪とマントがぶすぶす燃えたレヴィが落下してくる。ギャグ漫画みたいに黒焦げだ。わたしはがっちり受け止めると後方に下がった。

「これは流石に勝てる気がしないよ〜」

アインハルトさんでも「ぷろ〜」とか言つてやられちゃうレベルだ。

わたしは仕方なくユーリを残すと、いったん通信可能な階層まで戻る。そこからなのはママに連絡すると、王様にシユテル、アマタさんにキリエさんも来てみんなで集団戦。どうにかヴォルテール亜種の討伐に成功した。

無事、紫天の盟主を救い出したのだった。

「うえ〜ん、怖かったです、ディアーチエ〜っ!」

ユーリが王様に抱きつく。

「まったく人騒がせな……」

「まあ、一番焦つていたのは我が王ですが」

「余計なことを言うなシユテルっ!」

フロリーアン姉妹も「安心しました」「ホントよね〜」と笑いながら、ちっちゃなユーリの頭をなでている。

「僕だつてがんばったのにい〜っ!」

「そうですね、レヴィも頑張りました!」

「赤毛、あまりレヴィを甘やかすな」

ヴォルテール亜種に「少し頭を冷やそうか」と言い聞かせていたなのはママが戻ってくる。リナ・インバースみたいなことになつてくなく。年々凄みが増しているのは気の

せいか。

なのはママが言う。

「よく考えたらさ、私たちの中で一番強いのもってユーリちゃんじゃなかったっけ？」

「『『『『『あ』』』』』』」

かつては『なのはママ、フェイトママ、はやてさん、ヴォルケンリッター、ユーノ司書長、リーゼ姉妹、フローリアン姉妹、王様、シユテル、レヴィ、それにわたしとアインハルトさんに、トーマとリレイさん』——『A, s』のナハトヴァール戦を遥かに凌ぐ大人数でようやく止められた『リリカルなのは屈指の強キャラ』である。

「別に弱くなつたわけじゃないんだよね？」

永遠結晶エグザミアは健在で、ユーリの魔力は今も聖王のゆりかごと渡り合えるくらい強大のはず。

「ユーリ？」

「わ、わ……私も忘れてましたっ!？」

全員がそつと目を逸らした。

シグナムと炎の聖剣

1

ことの発端は、わたしが竹書房文庫から出版されている『インディ・ジョーンズ 炎の聖剣』を読んだことでした。

みなさんお気づきの通り、リリカルなのは「炎」と言えば、炎の魔力変換資質をもつヴォルケンリッター烈火の将——シグナムさん。

そんなわけで、ザッファイアの散歩をしに（時々したくなるのだ）八神家をお邪魔した際、平常運転、今日もビシツと赤髪ポニテの彼女に聖剣の話をしたのだけど……。

「そうか……ならば……よし、探しに行くか！」

「へ？」

「その剣は地球にあるのだろうか？」

「ええ、そうですけど……っていやいやいや、何で急に!？」

わたしにとっては予想外の反応。

「最近シヤマルやヴィータだけでなく、主はやてからも『仕事以外にも趣味をもつたらどーや?』と言われることが増えてな」

「あゝ」

その気持ちはわからなくもない。

「そこで、剣のコレクションでもしてみようかと思いつたわけだ。名刀や魔法の剣といった類の物をな」

「そーいうことでしたかゝ」

うゝん……アレだ。

人間がある一定以上の年齢や役職になると、急に骨董品を集め出すようなものかもしれない。

そのうち某鑑定団辺りに出演して「ミッド在住のシグナムさん」とか「注目の鑑定結果は?」とか「いい仕事してますねえ」とか言われるのだろうか?

ちよつと騎士っぽくないよっ!?

でも、

「確かにリリカルなのは世界だと、武器つてデバイスが変化したのがほとんどですもんね。物語や伝説で語られるような魔法を付与した武器つて見たことないかも

………つて、ちよつと待ったああ！

探しに行くつて言いましたけど、わたしが読んだのはインディ・ジョーンズでフィクションの冒険小説ですよ？」

「ああ、それはわかっている。だが、かつて主から聞いた話によると、地球のシュリーマンなる人物は子供の頃に読んだ物語を信じ、大人になってからも夢を追い続け、古代ギリシアの遺跡を発見したのだろう？」

「そう言われると………つて、いやいやいや、インディとトロイを一緒にしたら………あゝ、でもインディも本場の方がいっぱい取材して書き上げたわけだし………ある意味、日本の埋蔵金伝説みたいなのりだとしたら、実際に剣が見つかったもおおしくないの………かな??」

可能性はゼロではない………はず。ただなあゝ、

「この小説に出てくる炎の聖剣つて、あのエクスカリバーのことですよ？　そう簡単に見つかるとは思えないんですが」

「ほう、『Fate』に登場したあの剣か。主はやてから話は聞いている。一度手にしたいと思っていたところだ」

凜さん………じゃなかったはやてさんから一体どんな話を聞いたのかは知らないけど………。まあ、シグナムさんがセイバーポジションだと考えれば、それほど違和感もない

……というか本当に発見したら大騒ぎ……ていうか、そんな伝説級のお宝、仮に見つけたとしても持ち帰れないよ。

などと思っていたら有言実行。

次の休みにはもう、わたしはシグナムさんに連れられて地球に向かっていた。

あつという間だよ!?

しかもいつの間にかスケジュールを押さえたのか、ミッドでも有名な考古学の専門家が同伴している。

「ふっ……行くぞ、なのはの使い魔」

「え、全然スケジュール押さえてないよね？ 急にだよ急に！ 高町家より強引だよ!？」

「あのー、ユーノ司書長ー、大変申し訳ないのですが、地球での移動費が安くなるので、ずっとフェレットモードでもいいですか?」

「それは任せてよ——じゃなくて、どこに行くかも聞いてないんだけどおお!？」

そんなわけで2人と1匹(?)による、これまで誰も見たことがない変則パーティーでのエクスカリバーを探す冒険が始まった。

今なおアーサー王伝説が色濃く残るイギリスに到着したわたしたち一行は、元管理局のグレアム提督のついで、ロンドン大学の考古学部学部長と面会した。そして、かつてエクスカリバーが実在したという隠れ里の長への紹介状を書いてもらう。

そこは魔術的に隠された村で、余所者は簡単に立ち入ることも立ち去ることも出来ないのだという。

わたしたちはシグナムさんの運転する四駆で隠れ里があるという森に向かった。

「シグナムさん運転できたんですね？」

「ああ、随分前に主から『騎乗スキルは必須。できればBは欲しい』と言われてな」

「へー」

英霊ではないので、セイバークラスであっても自動で騎乗スキルが手に入るわけではないのだ。

というか『StrikerS』でも運転してたっけ。まあ、こうして役に立っているわけだし、これ以上突っこむのも野暮というもの。

フェレット姿のユーノ司書長が言う。

「セイバーで思い出したんだけど、『Fate』ですっかり有名になったエクスカリバーの鞘は探さなくていいのかい？」

傷を癒やす力があり、かの有名な魔術師マーリンに「剣の何倍もの価値をもつ」と言

わしめた魔法の鞆である。

「なるほど。だが、私のコレクションは剣の方だな。あいにくと鞆は二の次だ。とはいえ、それほど有名な鞆であるなら、剣と一揃いになっていないのか？」

「あのく、ユーノ司書長、シグナムさん、ちよつといいですか？。その魔法の鞆なんです。インデイによると鞆は、何か月もかけてなめされた鹿皮で何層にも覆われていたそうです。けれど、溶液に浸して鹿皮をはがし、肌着に縫いつけたとありました」

「つまり、鞆はもうない？」

「はい」

「そうか……だが、剣が無事ならそれでいい」

流石は剣の騎士。

すると、突然——かつてなのはママにしたように——わたしの肩に乗っていたフェレット司書長が「むむっ」と唸った。

「この先に結界が張ってあるね」

結界魔導師でもある彼の最大の見せ場である。森を覆う魔法の一部に穴を開けると、いざ神秘と伝説が残る村へ突入。

わたしたちは待ち受けていた村人——どうしてわかつたのだろうか——に紹介状を渡すと、長老である老婆の元に案内された。村人の話によると100歳を越えるというの

に、とてもそうは見えない。ちよつと現実離れした雰囲気をもつ女性だった。彼女によると、もう剣はこの村にはない。別の場所に隠されたのだという。

「どうしてですか？」

そんな貴重な物、村に置いておくべきなのではないだろうか。

「もう剣の時代ではないのですよ、ヴィヴィ」

「あれ？ どうしてわたしの名前を……」

老婆は答えず黙って笑う。

「これまで何人もの偉い学者や騎士の称号を得た方々が剣を求めて村を訪れましたが、誰一人として手にした者はいません」

それはまるで岩に刺さった剣の選定のようで、同時に聖杯探索のようでもあった。

すると、老婆は自然な動作で立ち上がると、壁にかけてあった剣をつかんだ。刹那、老齢とは思えぬ力強く俊敏な動作で鞘から引き抜くと、シグナムさんに向かって振り下ろした。刃が白銀に煌めく。

「ちよ!!？」

わたしとユーノ司書長は慌てて止めに入るが、当の烈火の将は動じない。避けもしない。いつも通り平静であった。喉元で剣先がピタリと止まる。

「どうして動かなかったのですか？」

「ご老人、あなたの剣からは殺気が感じられませんでした。それにしても、今の動作、歩法、剣速、かつては相当な騎士だったとお見受けしますが？」

老婆は嬉しそうに笑い白銀の剣を下ろした。

「そう……シグナム……貴女も騎士なのですわ。いいでしょう、貴女に剣の隠し場所を教えてさしあげます。もし剣を手にすることが出来たのなら、炎の聖剣は貴女のものです。どこなりと持っていつてもらって構いません」

「ほう……ありがたい。感謝します」

「え？　ちよつと待つてください！　エクスカリバーですよエクスカリバーっ！　本当に持つていつていいんですか!？」

「ええ。もうこの村に後継者たり得る使い手はいませんから。マーリンが施した魔術は、すでに形を変え世界中の人々の心に刻まれました。もはやあの剣が実在するかしないかは、さして重要なことではないのですよ」

水面のような静けさで語ると、老婆は柵に置かれていた小箱から布切れを取り出した。1センチ×1センチほどの薄汚れた布片である。

「あの……それって？」

「かつて鞆を覆っていた鹿皮——と言えばわかるでしょう？　もうこれだけしか残っていませんが、シグナム、貴女が剣の所有者になった暁には、いつか貴女の身を守ってく

れるでしょう」

「ありがたく受け取っておきます」

烈火の将は胸元から布製の小袋を取り出すと、口を開けて中に鹿皮を入れた。

「お守りですか？」

「ああ、まだ日本にいた頃、主はやてからいただいたものだよ」

それを耳にした老婆が初めて目を丸くした。

「お守り……日本……はやて……貴女は日本と縁があるのですか？」

「ええ、私自身、主と共に7年近く住んでいましたから。私にとっては第2の故郷ともいうべき地ですね」

「そうですか……これも運命かもしれないですね。私は若い頃、着物を着た日本人に変装して飛行船に乗りこんだことがありましたから……」

100歳を越えるという老婆は、懐かしそうに目を細めた。

3

こうして隠れ里を後にしたわたしたちは森のさらに奥。地元の人たちが「試練の山」と呼ぶ山地へ向かった。

「試練の山って言うとFF4を思い出しますね」

「僕も昔なのはが学校に行っている間、暇だったから……じゃなくて、地球の文化や言語の勉強のためにプレイしたんだけど——」

ダウトおお！

「確か主人公が試練を受けて、暗黒騎士からパラディンにクラスチェンジするんだよね？」

ちなみに老婆によると、かつてマーリンが作ったという王笏の力を使い、挑戦者の心を映し出す試練が与えられるのだという。

ちよつと似ているかもしれない。

シグナムさんが目を輝かせている。

「試練か……楽しみだなー」

「なんだかシグナムさんが、だんだんダクネスに見えてきました……」

山頂に辿り着くと、アーサー王の伝説さながらに岩に剣が突き刺さっていた。

「これを引き抜くだけでいいのか？」

「えつと、どうなんでしょう？」

「試しに抜いてみたらどうだい？」

マーリンやエクスカリバーの魔術がどの程度のものか知らないけれど、古代ベルカの

ロストロギアであるヴォルケンリッターであれば、難なく引き抜ける気がしてきた。

押し込んでから抜くと簡単に抜けるって話もあったな。

ところが、柄を握った途端シグナムさんが頭を押さえて膝をついた。

「どうしたんですか？」

「声がする……ヴィヴィオ、ユーノ、お前たちは聞こえているか？」

わたしと司書長は頭を左右に振る。

「そうか、つまりこれが試験と……何だ、私が最も手強いと思い、最も戦ってみたいとお願いしていた相手に打ち勝て——だと？」

「シグナムさん自身とか？」

「シグナムのことだから、意外となのはやフェイトって可能性も……」

ところが、目の前に現れたのは漆黒の翼に騎士甲冑をまとうユニゾン状態の主——八神はやての姿。ただしベレー帽や上着がデИАーチエの暗黒甲冑のように黒い。まるではやてさんの影だ。

「どうしてはやてさん？」

「なるほど、そういうことか……」

シグナムさんだけが納得している。

「高町なのはやテストアロッサとは戦うことが出来るし、これまでも戦ってきた。しかし、

主はやてとは戦えない。想像することも控えてきた。頼めば模擬戦程度はつき合ってくれるだろうが、主は遠慮して本気を出すことはないだろう。私も同様だ」

ああ、そういうことか……。

常にストイックなシグナムさんにとって越えるべきは己ではない。ましてなのはマヤやフェイトママでもない。彼女が最強の存在のひとりだと確信していた友——闇の書の意志の力を継いだマスター、八神はやてその人なのだ。決して本気で戦うことが許されない相手。それは言わば叶うことのない夢のようなモノ。

シグナムさんが笑みを浮かべた。

「二度全力で戦ってみたかった。有り難い。これだけでイギリスまで剣を探しに来たか
いがあるというもの。礼を言うぞ、ヴィヴィオ！」

こうして試練の山の頂上で『剣の騎士 VS ユニゾン夜天の主』という、二度と見ることがないであろう血戦が繰り広げられた。

そして戦いの行末は——

「はっはっは、流石は主はやて！ それでこそ仕えがいがあるというもの！」

地面に四肢を投げ出し、仰向けの格好で転がるシグナムさん。惨敗だった。

「ユーノ司書長……」

「ああ、これはあくまで僕の推測なんだけど、あのはやてとユニゾンしているのは、まだ

リインフォースと呼ばれる前、それどころか『闇の書の意志』と呼ばれるよりもっと前、古代ベルカで『夜天の書』から『闇の書』に作り変えられた頃の、完全状態の管制融合騎なんじゃないかな？」

「それって、全ての機能が正常に動作していた頃のリインフォースさんってことですか？」

「うん。ヴィヴィオも知っているよね『闇の書の主となれば、一国を御することさえ可能』と言わしめた時代だよ。守護騎士として長く生きてきたシグナムが知る中でも、最強の魔導師の一人にして、もう二度と戦うことが叶わない相手。だからこそ、心の奥底ですつと戦ってみたい——と願っていたんじゃないかな？」

もしわたしがこれから先、もう全力でなのはママと戦うことが叶わなかったら、きつと同じ気持ちになるのかもしれない。

だとしても、彼女の魔力は現在のはやてさんを越え、正直見たことがないレベルの戦闘力を見せてくれた。ひよつとしたら——あるかどうか知らないけど——SSSランクすら越えているかもしれない。規格外。あるはずのない力。……いや、ひよつとしたら別の世界で本当に存在しているのかもしれないけど。

パーフェクトはやて。

シグナムさんは目を閉じて歌うように笑う。

「コレは？」

フェレット姿のユーノ司書長が答える。

「打ち勝つ——というのは、単純に力で勝利することだけではなく受け入れるという意味も含んでいたんだと思うよ。シグナムにとつては数少ない負の感情。本気の主はやてと戦つてみたいという後ろめたさと、それでも戦いたいという欲求」

「ふっ……私もまだまだだな」

聖剣の刀身が夕日を反射してキラキラ燃えるように輝いていた。

「シグナムさん……」

うつむいたまま動かない。

生真面目な彼女のことだ、色々と思うところがあつたのだろう。烈火の将は何かを悟つたように立ち上がると、わたしたちを振り返りこう言った。

「よし、早速次の伝説の剣を探しに行くか！」

川田アナミみたいなスキップをしながら「剣の修行にもなるしな」とウキウキだ。

「ポジティブすぎる！」

「当分やめてエエエエ——ッ!？」

不思議の国のフェイト

今日は3月3日。

いくつまでが女の子なんですか——と、どこかの女神様みたいなことを言いつつ振袖を着たママたち2人とわたしがりビングでくつろいでいます。

もうしばらくしたら、八神家にひな祭りパーティーをしに行く予定なのですが……。

「ねえ、なのはママ、フェイトママ。ひな祭りって何か伝説とかないの？ 七夕みたいに」

「……そう言われると、何かあったっけフェイトちゃん？」

「……日本の風習についてはなのはの方が」

「いやいや、小学3年生から一緒だったんだからほぼ似たようなものかと」

「いやいや、9年のアドバンテージは大きいよ？」

と、押しつけ合っていたので、

「クリスマス『ひな祭り 由来』で検索してみてください——」

①古代中国では、3月最初の巳の日に川で身を清め不浄を祓ったあと、宴を催す習慣

があった。

② 古代日本では、自分の穢れを移した人形を身代わりに川に流し、厄払いする習慣があった。

※これも中国由来と思われる。

③ 平安時代。人形などで遊ぶおままごのことを「雛（ひいな）遊び」といった。

※雛はちっちゃくて可愛いもの。アインハルトさんみたいなものだ。

④ 平安時代。陰陽道の発達と共に習合。人の厄を移した男女一对の紙人形を川に流す「流し雛（ながしびな）」の習慣が生まれる。

⑤ 室町時代。人形が立派になり、流さずに飾るようになった。

他にもいくつあったのだけど、いずれも現実的な内容ばかりだ。

「織姫と彦星みたいにロマンチックな物語はないんだね〜」

クリスマスやハロウィンはもちろん、5月5日のこどもの日だって調べてみるとそれなりにストーリーがあるのに……。

これでよく、1000年以上も風習が続いたものだ。

「そのうち美少女フィギュア雛に取って代わられる日がくるんじゃない……」

「「いやいやいや」」

すると、なのはママとびしびし殺り合っていたフェイトママが「そういえば……」と遠い目をした。

「直接ひな祭りとは関係ないと思うんだけど、昔、ひな祭りの日に不思議な体験をしたことがあったな〜って」

「あゝ、昔フェイトちゃんが話してくれたやつ?」

「そうそう」

「えー、どんな話?」

「確か、あの日はやての家でひな祭りパーティーをやつてて……」

「アリスちゃんやすすかちゃんもいたよね」

「そうそう。まだはやてとも仲良くなったばかりの頃で、私が1人でトイレに行った帰りだったかな……ふとキッチンで何かが動いた気がして、のぞいてみたら……」

「みたら?」

「ウサギがいたの」

「ウサギい〜?」

「最初は『のろうさ』かと思ったんだけど……」

「いやいや、アレ動かないよね?」

「そのウサギ、料理の残りを持って逃げようとしたんで思わず追いかけてちゃったんだけ

ど……」

「えー、何それ〜」

なのはママが笑う。

「まあ、アレだよな。懐中時計は見てないけど『不思議の国のアリス』的な……」

「あく、『力が欲しいか?』だっけ?」

「おしいっ!」

「じゃあ『まきますか まきませんか?』」

「うん、それもちよつとかすってるけど、人形の方ね」

再びフェイトママが「そういうえば……」と口にする。

「人形とは違うんだけど、そのウサギを追いかけていったら、ポニーテールの小さな妖精みたいな女の子とフェレットがいて——」

「はい、なのはママ緊急逮捕おお——っ!」

「ちよ、私まだその頃ポニテじゃなかったから。ツインテールだよ?」

フェイトママが笑う。

「そうそう。それに、そのフェレットね、オスじゃなくてメスだったの」

「メスっ!? つまりいつものユーノ司書長オチじゃないってこと?」「うん」

「だったら——とわたしは考える。」

「例えば、女性のスクライア一族だったとか?」

「まあ、その可能性も否定できないんだけど、フェレットだからといって何でもユーノに絡めるのはどうかと」

「……確かにそうかも。そういうえば地球には言葉をしゃべる『オコジョ妖精』もいるんだよね? 漫画で読んだよ!」

「えー、あー、うん、ひよつとしたら、いる……んじゃないかな」

「私も身近にユーノがいたからフェレットだと思いきんでたけど、オコジョやニホンイタチの可能性もあったんだよね」

「そもそも、スクライア一族の変身する動物は、厳密に言うとならフェレットではないらしい。」

「かつてなのはママがユーノ司書長を動物病院に連れて行ったとき、榎村委員長も「フェレットなのかなあ?」「変わった種類だけど」と語っていた。」

フェレットは地球のヨーロッパで改良された愛玩動物なので、ミッドに生息するイタチ科の動物が変身魔法の元になっているのだろう。

「それでフェイトママ、その3匹は捕まえたの？」

「うん、それが……頭の中に霧がかかった感じではつきり覚えてないんだけど……」

「やっぱりラストは、ウサギ、妖精、フェレットの3匹とバトルになったとか？」

「もー、流石にそれはないよ。なのはじやないんだから」

「私だっていつも戦うわけじゃないからねっ!？」

フェイトママの瞳が、どこか遠い場所を見つめるように細まった。

「一度は捕まえたんだけど、逃げられて……さらに追いかけて行くうちに……そう、だんだん、おかしな空間に迷いこんで……そうだ、最後にたくさん猫をみたんだ!」

「え、何そのARRIA的な空間……?」

「ARRIA……そうだ、思い出した。そのたくさん猫たちの中央に、1匹だけ大きくて2本足で立っている子がいて……」

「うわ」

「……うくん、その辺りの記憶が一番はつきりしないんだよね」

ここは1つ華麗なオールさばきを見せつつ、

「その大きな猫。わたしの中の人的に言わせてもらえば猫の王様ケット・シーで、会えたのはミラクルですよー」

ね、灯里さん——となのはママに話を振る。

「いやいや、中の人とは関係ないし。そもそも私もみ子でもドジっ子でもはひーっとも言わないし」

「いや、まあ、ほら立ち位置的に?」

「うーん、そんなこと言い出したら、ヴィヴィオこそドラマCDで灯里さん役もやったよね?」

おおっと……。

実はあまり知られていないが、アニメ化前のドラマCDでは、わたしの中の人が灯里さん、井上喜久子さんがアリシアさん、林原めぐみさんが藍華さん&アリア社長、草尾毅さんがサラマンダーの暁さん、田中真弓さんがノームのアルさん、他にも大木民夫さんに千葉繁さん——という今考えると超豪華キャストだったりする。

そんな縁もあつてなのか、最終的にアイちゃんだったりするのだけど……おっと、話を戻そう。

「それでフェイトママ、最後はどうなったの?」

「あー、実は、その、気づいたら、はやての家のソファで横になってました」

「フェイトちゃん、それ絶対夢オチだって」

「いやいやいやそんなことないよ!」

再び言い合いを始める。

わたしは「うーん」と唸りながら考えると、最終判断を下した。

「当時のまだ子供で、しかも純粋だったフェイトママなら、A R I A 的な不思議空間に迷いこんでもおかしくないってことで」

「え、そういう結論でいいの?」

「ほら、フェイトママって初代リインフォースさんに、結界魔法を使った夢みたいな空間に閉じこめられたこともあったでしょ?」

「そんなこともあったね……懐かしいかも」

この世界では、今やプレシアおばあちゃんやアリシアさんやリニスさんまでみんな生きてるので複雑な気分なのだろう。

幻覚魔法をかけられたフェイトママの深層意識が見せた夢——という話だけど、ひよっとしたら並行世界の一種である可能性も否定できない。ああいう世界も存在して反映されたのかもしれない。

今度はなのはママが「うーん」と唸った。

「私だって小学生の時は、フェレット（ユーノ君）に出会ったコマでは行っただけだな」

「なのはママの場合、すぐバトル方面に話がそれちゃうから」

「あう、その差があう」

「まあまあ、そのお陰で私もヴィヴィオもなのはと仲良くなれたんだから」
「だね——」

こうしてわたしとなのはママ、フェイトママはひな祭りパーティーをしに八神家へ向かったのだけど……。

それがまさか、あんなミラクルに繋がっていようとは今はまだ知る由もないのでした。

ツヴァイ、アインスに会いに行く 前編

1

先週——3月3日のひな祭りの際、八神家でリインさんにお会いしたときのことだ。

「私も過去に時間遡行してリインフォースに会ってみたいです！」

「えっと……」

ゆつくりと、目の前にいる蒼天の書に相応しいスカイブルーの髪の少女に指を向ける。

「私じゃなくてアインス——先代リインのことですよっ！」

「あゝ」

「噂に寄ると、ヴィヴィオは最近エルトリアの人たちとよく会っているとか……」

「ええ、まあ、確かに会う機会が増えましたね」

アミタさんや玉様たちがちよくちよく来るせいもあるのだけど、一番の要因はレヴィが遺跡から拾ってきたパーツのお陰で、時間遡行システムの性能が格段にアップしたことだろう。

「映画の世界の私はアマタさんやキリエさん、それに王様たちとも顔見知りになったようですが、こちらの私はまったく会ったことがないですよー」

「そう言われると……リインさん『GOD』のときはまだ生まれてませんでしたし、サウンドステージでも会ってないんですつけ……。スバルさんやティアナさん、キャロやエリオですら会ってるっていうのに……」

「はう、あのとき、はやてちゃんのをそばにいなかったばっかりに」

リインさんは「そんなわけで——」とわたしの手を取る。

「ぜひヴィヴィオには、エルトリアのみなさんとの仲立ちをして欲しいですよー」

「わかりました。間に入るくらいだったら……」

考えてみると、わたしもちよくちよく会ってはいるものの、過去に行ったのは偶然巻きこまれた『GOD』のときだけだ。

こうしてエルトリアに映像通信を送って事情説明してみたのだけど、

『ダメです』

赤髪のお姉さん——アマタさんにきっぱりお断りされた。

「ど、どうしてですかっ!？」

昔と違い人間サイズのリインさんが食い下がる。

『時間遡行というのは、個人の欲望でそう気軽にやっつけていいものではないんです。万が一、それで未来が変わってしまったら……よくある例で申し訳ありませんが、たった一つの小石の行方が世界大戦を回避することすら有り得るんです』

「うう……」

映像先にピンクの髪が映った。

『私が言うのもなんだけど、そーいうものなのよ』

赤毛と桃色。フローリアン姉妹そろい踏みだ。

「……で、ですが、みなさんは先代のリインフォースに会ったことあるんですね!」

『それは、まあ……』

姉妹は顔を見合わせて頷いた。

『だね、僕らと戦わなかったらもう少し長生きしてたかも』

姿は見えないもののレヴィの声が聞こえてくる。

近くにいるのだろう。

となれば……、

『そういうことだ。シユテル、力を貸してやれ』

『はい。すでにユーリと計算を始めています。先に申しますと、リインフォースⅡ（ツヴァイ）、あなたを過去に送りこむことは可能です……が、条件が3つあります。

① 少人数で行くこと。

② こちらから話しかけても、話しかけられてもいけない。ただ遠くから見守るだけ。

③ 用件を終えたらすぐに帰還すること。

この条件が飲めないようでしたら、時間遡行は諦めてもらいますが？』

「いえ、それで十分ですっ！」

『いい返事です。わかりました。詳しい打ち合わせはあとでするとして、準備が終わり次第こちらから連絡するということ——』

こうして1週間後の今日、リインさんとわたしの2人は、14年前——新暦66年2月末日の海鳴市に飛んだ。

2

「すみませんヴィヴィオ、わざわざつき合わせてしまって……」

「いいいえ、わたしももう一度この時間に来てみたかったですし」

わたしが同行した理由は、時間遡行経験者としてお目付け役が必要だったからだ。

そして、未来のエルトリアからさらに過去へ向かうより、わたしたちの時代から一緒に行く方が時空間への影響は少ない。

そうなる、わたしかアインハルトさんの2択であり……ええ、まあ、そーいうことです。アインハルトさんと爆発オチがあるので……。

「そういえば、どうしてこの日——2月末日を選んだですか？ もっと暖かくなつてからの方がいいような……」

「あ、はい。それにはいくつか理由がありました……。本来のリリカルなのはの世界では、『闇の書事件』の直後——12月24日の聖夜から朝方にかけてアインスさんは眠りにつきました」

「ええ、はやてちゃんから聞いています。だからアインスの写真や映像はほとんど残ってないですよね？」

「はい。そうなると時間遡行したところでアインスさんを見るチャンスはとても少ない。なので、これから向かうのは『BOA』で分岐した、アインスさんが消滅せず、残された時間、はやてさんのそばに居続けることを選んだ世界です。

こちらの世界なら、少なくとも『GOD』——つまり3か月後の『砕け得ぬ闇事件』までは、確実にアインスさんが生存しています」

「なるほど」

「また『BOA』のころには不完全だったユニゾン能力を『GOD』のころに回復していたことから、アインスさんの最も体調がいいのは、2月の終わりから『砕け得ぬ闇事件』まで。

さらに、日本の気候は1月から2月が最も寒いので、わたしたちが帽子やマフラー、マスクなどで顔を隠しても違和感がない時期でもあります」

「つまり、こっそりアインスを見るのに最も適した時期が2月の終わりだったですね？」

「はい——」

そんなわけで、過去の海鳴市に着いたあとは、かつて実際に生活していたリインさんに従い八神家の様子を観察した。

白いセーター姿の初代リインフォースさんが、まだ幼いはやてさんを乗せた車椅子を押して散歩する様子を、わたしとリインさんは公園のベンチに座りながら見つめる。

さらに、どことなくぎこちないヴィータさんとのやり取り。

シヤマル先生の料理を苦笑しながら口にする姿。

子犬形態のザファイラに微笑み。

そして、互いを対等な相手として認め合うシグナムさんとの友情。

いずれも二度と見ることがない光景だ。

「リインさん、どうですか？」

「はわく、リインも一度でいいからあの輪の中に入ってみたいなって……」

「気持ちわかりますけどダメですよ。シユテルからも注意されたじゃないですか」

「はい、わかっています。わかっていますけど……でも……いえ、そうですね」

蒼天の融合騎が寂しそうに笑った。

「あはは、これ以上見ていると余計に辛くなってしまうです。迎えが来るのはいつでしたっけ？」

「えっと、2時間後ですね」

「そうですね……。でしたらせつかくなので、その間昔の海鳴でも見て回りましょうか？ リインが案内するですよー」

「本当ですか？ やった！ わたしも前は戦闘以外アースラ待機だったんで、自由に過去の海鳴を出歩くのは始めてなんですよ〜」

ママたちが青春時代を過ごした思い出の街だ。

「今はもういない士郎さんや桃子さんがやっていた翠屋という喫茶店を、ひと目で見ただけから見てみたかったんですよね……」

「いやいや、今もバリバリ元気に営業してるじゃないですかっ!? そんなこと言つて桃子さんに頭冷やされても知りませんよー」

「あはは、冗談ですよ、冗談……つて、うわ、あの眼鏡の女子高生つて美由希おばさんですか？ 若っ!? そっか、今のなのはママたちより若いんだもんなく。むう、時間の流れを感じる……」

「そんなところで感じられても〜」

「だって桃子さんや士郎さんあんまり変わってないですし。あ、なのはママも安心だ〜」

「まあ、ヴィータちゃんたちもそうなんですけどね。私ははやてちゃんの成長で時間の流れを感じますが」

「それはあまり言わない方が……つて、そう言えばリインさんだつて変わってないじゃないですか！ 来年——新暦67年には生まれてるんですよね？」

「そうでしたっ！ あ——だから、ディアーチェとレヴィはあんなこと言ってたんですねー」

「ですね。たぶん2人とも、もしも自分たちが『闇の欠片事件』や『砕け得ぬ闇事件』でアインスさんを消耗させなければ、あと1年は生存してリインさんの誕生を見届ける未来もあつたんじやないか——って」

「IFの世界ですねー」

「はい。でも、どこかにそういう並行世界もあるかも——って、あく、やっぱりリインさんも変わってないなあ……あの人、いくつなんだろう？」

「え、ちよ、はわわッ、クロノ提督がちっちゃいですよお——っ!？」

「あ、リインさんが生まれたころってもうクロノ提督おつきくなってたんでしたっけ？」
映画を思い出していただければよくわかる。

66年の3月はまだちっちゃいのに、67年にはアレである。

成長期だとしても何があつた？

やはりミッドの人間は急におつきく……おつきく……いやああ、アインハルトさんはちっちゃいままでいて欲しいい！

ミウラさんはちっちゃいほぼ確定だけどおお！

などなど堪能しつつ、冷静かつ確実、余分なことをしないことで有名な『理』を司る

シユテルが迎えに来てくれる場所まで赴いたのだけど……、

「いませんね」

「来ないですねー」

わたしとリインさんはそろって「あれ〜？」と首を傾げた。

彼女が約束を違える——それどころか、時間を間違えることすらまず有り得ないのに姿が見えない。

「場所があつてますよね？」

「はい。なので、う〜ん、わたしが時間を間違えちゃったかな？」

「まあ、そういうこともありますよ」

「すみません」

「いえ、どのみち用件を終えたらすぐに帰還すること——って言っていましたから、私たちに長いさせる気はないでしょう。待つてればすぐ来ますよ」

それから約半日——辺りがすっかり暗くなり、街に明かりが灯り始めたころ、

「ちよ、ホントに迎えが来ないんですけどう!?」

「ど、どうするんですかコレっ!?!」

顔を見合せてさん、はい!

「か、帰れないんですけどおお——っ!!?」
「か、帰れないですよおお——っ!!?」

わたしとリンさんの全身には冷たく白い雪が降り積もっていた。
明日は、数年に1度の吹雪になるという……。

ツヴァイ、アインスに会いに行く 後編

1

あれから3日後。

奇しくも3月3日のひな祭りの日。

わたしとリインさんは未だに過去の海鳴市から帰れないでいた。

この寒空の下、公園や川原でチャンピオン（ジークさん）みたいな生活をしてきたのだ。

——ぐうぐ。

「お、お腹が空いた……」

「リインもです。そろそろ試食だけでは限界です」

今時はパンの耳も簡単にはもらえない。

「油で揚げて砂糖をたっぷりまぶして食べると美味しいですよ」

「そ、そうですか……」

ラクス・クライン……じゃなかったラスクみたいなものだろう。

どのみち油も砂糖もないのだけど。

——うぐうぐ。

思わずたい焼きが欲しくなる腹の音。

エネルギー消費を避けるため、リインさんは本来のちっちゃな姿に戻っている。

「はあく、こんなことなら桃子お婆ちゃんにもらったお年玉を、ミッドの電子マネーに変えなければよかったです」

「ええ、リインも少しくらい残して持ち歩いてればよかったです」

「リインさん、S u i ● aとかn a n a c ●の機能はないんですか？ チャージしてあるとか……」

「ないですよっ!?!」

買い物が超便利そうだ。

めげていてもしょうがないので、3日間海鳴市をすっかり観光し尽くした（他にすることがなかったともいう）わたしたちは、ひな祭りパーティーの催されている八神家へ。

玄関から右手へ回りこむと、テラスの植え込みに身を潜め、大きな窓から室内——リビングの様子をうかがう。

八神家、なのはママ、フェイトママ、アリサさん、すずかさん——彼女たちの楽しそうな笑い声が聞こえてくる。

「あー、料理結構残ってますねー」

「ヴィヴィオ、あれ、少しいただいちゃいませうか?」

「そ、そうですね。ちよつとくらい食べても大丈夫ですよ。気づかれなければ」

「そ、そーですよ、気づかれなければ」

「クリス、お願い——」

すでに素早い動きが困難になっていたわたしは、相棒であるウサギのデバイスに取っつきさせることにした。

視界を共有しながら料理を目指す。

「クリスにそんな機能あったですか?」

「あー、前に冬アニメの『血界戦線』を見てて思いついたんですよ。レオが“神々の義眼”でソニックを誘導したみたいに、わたしもクリスとできないかな〜って」

「神眼だけに?」

「そんな感じで」

調子に乗ってヒヤッハーする気力も削がれている。
とにかく栄養が必要だ。

余談だが、レオの妹ミシエーラの中の人はフェイトママだ。

「あ」

「ど、どうしたんですかヴィヴィオ」

「そのフェイトママに見つかっちゃいました！」

「え、ええええっ!?!」

「クリス退却、退却、え、料理? もちろん奪ってきてええ!」

「ちよ、どーすんですかああ!?! 私たちまで見つかっちゃいますよおお!?!」

「そ、そうだ、ポニテですポニテ! 前に王様が、次元震でエルトリアに飛ばされてきた
並行世界のなのはママたちと会ったとき、はやてさんと同じバツテンの髪飾りを外し
て、髪型を変えてました!」

「りよ、了解です! ——つて、ヴィヴィオはどうするんですか!?!」

「え、そ、そつか! わたしもマズいんだった。今月中には『砕け得ぬ闇事件』で去年の
わたしと会うことになるし、ちよつとやさつとの変装じや記憶封鎖が破られて……そ、
そうだ! こんなときこそユーノ司書長直伝の変身魔法で!」

全身を虹色の魔力光が覆いフェレットの姿に変わる。

その瞬間、玄関から白ウサギを追うアリスさながらに、クリスを追うフェイトママが飛び出してきた。

「ウサギさん待って——つて、今度は妖精にフェレット??」

「はわわッ!」

「リインさん急いで逃げま——あ」

あつさり両手で捕まった。

ソニックムーブは反則だよ。

ひゃっ——と引っくり返される。

「ユーノ……じゃない?」

「どこ見て言ってるのおお——っ!?!」

「ヴィヴィオ!? こ、こうなったら一か八か——ええい! 吸収ですっ!!」

「えっ!?!」

2

ハツと気づくと、周囲が真っ白で起伏のない——地平線すら見えない——どこまでも続く空間に変わっていた。

わたしのそばには気を失ったフェイトママ（子供）が倒れている。
怪我はしてないようだけど、

「（こ）つて……う？」

「捕獲空間ですよー」

「リインさん！」

「通常は、対象だけを転送して閉じこめる魔法なんですけど……」

「問題ありませんよ、結果オーライです。フェイトママが気を失っているうちに脱出しましょうー！」

「それが……その、内側からだとは開放できないみたいで……私たちも閉じこめられたといいでしょうか……まあ、そういうことです、はい」

OH！

「なんてこつたい……」

「だからまだ上手くできないですよお!? アインスの残してくれた記憶を頼りに練習してるですが中々再現できなくて……」

「いえ、助けてもらったのはわたしの方なので、責める気は……」

「ううつ、すみません、ポンコツ融合騎で」

「安心してください。そんなこと露程も思ってますから。せいぜい、はわわ軍師やど

「こその潜水艦の艦長の休日くらいで」

「それ十分思ってますよねえ!？」

「と、とにかくフェイトママが目覚める前に移動しましょう!」

「万が一を考えフェレットモードのまま、クリスが調達してきた料理を食べつつ、全てが静止したような世界を延々と歩く。」

「もきゅもきゅ……そういえば……この空間ってどうなってるんですか?」

目印になるものすらない場所。

「そうですねー。本来は幻覚魔法を使い捕獲対象が深層意識で望んだ夢を見せる——ですが、上手く発動しなかったみたいで、たぶん誰の精神にもアクセスしてない状態かと……」

「あ、それでこんな真っ白な……」

「ええ、でも、時間の流れだけは違ってると思うですよ? ゆっくりです。それに、外からは干渉されないので、少なくとも、しばらくはなのはさんたちに気づかれることはないかと」

「あ、でもフェイトママが起きたら、TVアニメや映画みたいに内側からザンバーで真っ二つなんじゃ……」

あつさり破られる。

「その懸念はあるのですが、たぶん使えないんじゃないかと……」
「どういうことですか？」

「ここ、一応八神家の庭なので……」

「あく、結界の張ってない外に漏れ出して『はやてさんち真つ二つ事件』とか、フエイトママの黒歴史に新たな一ページが……」

それはそれで面白そうなのだけど、

「どーせ閉じこめるなら、なのはママの方がよかったかもですね〜」

「やめてくださいいっ！ 来年リインが住むとこ消滅しちやいますからああ!？」

『八神家ブレイカー事件』である。

こうして、何だかよくわからない無機質な空間をぐるぐるしていると、

「にゃー」

「猫？」

いつの間にか足元に猫がいた。

しかも、1匹や2匹ではない。

どんどん数が増えている。

「ナニコレ……ま、まさかつ!？」

「知ってるですか、ヴィヴィオ！」

「はい。このミラクルな猫の集会。そして、フェイトママから聞かせてもらった昔話が
真実だとしたらこの先にはきつと伝説の猫の王様が——」

いた！

明らかに周囲の猫よりも大きな存在。

頭には猫の耳。2本足で立ち、黒っぽい衣装をまとっている。

「リインさん……アレが猫の王様……ケット・シーですよっ！」

「な、なんだって——っ!?!」

「いえ、期待させて申し訳ありませんが私です。シユテルです」

——ズコー。

フェレットモードのわたしとリインさんがずっこけた。

「よかった。ようやく会うことが出来ました」

「シユテル、どういうこと!?!」

「2人を過去に送りこんだときは問題なかったのですが、私が迎えに行く時分になって
どうにも時間の流れが不安定になってしまいました……」

「不安定？」

「先に結論を申しますと、原因はキリエでした」

「……あー」

事件の発端はだいたいあのピンクの人だ。

「ご存知だとは思いますが、同じ時間を繰り返すことで逆流時間が重なると、空間のひずみが大きくなりとても危険です」

航時法——時間旅行者が最低限守るべきルールである。

「少しややこしい話になるのですが、かつてキリエが『システムU—D』を手に入れるために観測し続けたのがこの辺りの時間だったらしく、すでにかかりのひずみが生じていました。」

わたしはそのひずみ——小規模な次元震に巻きこまれ色々な世界を旅するうち、いつの間にかこんなことに……」

衣服は変わり、無数の猫を引き連れていた。

おそらく『マテリアル娘。』や『INNOCENT』などに近い並行世界に迷いこんでいたのだろう。

そういえばスイートキャットのネコネコスーツみたいな格好に似ている気もする。

黒いけど。

「それで、こちらの世界の様子をうかがっていたところ、極めて安定した空間が生まれたので、ようやく正しく移動することができたというわけです」

「この空間にそんな効果があったのですか」

「ええ、一種の並行世界に近いです。素晴らしい魔法だと思いますよ、ツヴァイ」
などと話していると、

「おーい！ やつと追いついた！」

「フエイトママ！」

「フエイトさん！」

「フエイト？」

忘れてたああ——っ!?

「シユテルごめん、外の世界でフエイトママに見つかっちゃって」

わたしと同じ金髪で、ツインテの少女は「ね、猫がいつぱい!？」と驚いている。

「仕方ありませんね——」

「え、巨大ね……こ……っ……」

シユテルがデバイス——ルシフェリオンをかざすと、フエイトママがパタンと倒れこ

む。

「初歩的な眠りの魔法ですが、姿を見られる前に眠ってもらいました。私は『BOA』——『闇の欠片事件』で戦っていますから、気づかれると厄介です」

「あとで記憶封鎖じゃダメなの？」

「ええ、彼女に対しては最終手段です。下手に記憶封鎖を行うと『砕け得ぬ闇事件』のラストで私たちが記憶封鎖を行った際、私たち自身に、私たちの存在を気づかれてしまいますから。今回は私の顔をぼやけさせる程度に留めておきます」

敵はフェイトママだけでなく、過去のシユテルたちでもあるわけだ。

ややこしい話である。

何にせよ、これであるフェイトママが迷いこんだ不思議空間の謎は全て解けたのだけ
ど……、

「そういえばフェイトママ、目覚めたら八神家のソファで横になってたって……」

「なるほど。で、誰が運ぶですか？」

「……」

3人で顔を見合わせた瞬間、頭上から凜とした声が響いてきた。

「それは私がやっておこう——」

黒い羽を広げた銀髪の女性が舞い降りる。

「リインフォースさん!？」

「アインス……」

「融合騎、ですか……」

白いセーター姿ではなく、すでに黒い戦闘服をまとっている。

リインさんが慌てて問いかけた。

「どうやってここに入ってきたんですか?」

「私の使うのと同じ魔法だったからね。君こそどうして使える?」

「そ、そうでした!」

蒼天の融合騎は「はわわッ」と飛び回る。

「そっちの子は……『理』のマテリアルか?!? いつの間に復活を……それから隣のフェ

レット君、変身を解除してもらえるかな?」

「あう〜」

すっかり忘れていた。

わたしがおとなしく元の姿に戻ると、

「その瞳は……まさか聖王家?!? どうして地球に?」

説明するのに随分と骨が折れそうだ。

シュテルさんがアインスさんに話しかける。

「融合騎、私たちはあなたと敵対する意思はありません」

「……まあ、その格好を見ればわかるけどね」

シュテルにまとりつく大量の猫たちが一斉に「にゃー」と鳴いた。

このモフモフとはちよつと戦えない。

「できれば、事情を聞かずに立ち去ってもらえとうれしいのですが……」

シュテルの言葉に、初代リインさんは頭を左右に振った。

彼女の立場ならしうがないだろう。

八神家の——はやてさんの身を守るのが彼女の役目なのだから。

「ヴィヴィオ、シュテル。リインフォースならちゃんと言情を話せばわかってくれるはずなのです」

「ツヴァイであるあなたが言うなら」

「わたしも賛成です。なのはママたちと違ってすぐにドツカンバトルしないし、はやて

さんほどタヌキじゃないし……」

「何だか凄い言われようだが……だいたい合っているような気もするところが」

銀髪の女性はクスクス笑う。

「あの、リインフォース、いいでしょうか？ 口で説明するよりも早いと思うので、私と同期してもらえますか？」

「同期？」

はい——とリインさんが先代リインフォースさんの手を取った。

一瞬ぶれたようなノイズが走り、情報が共有される。

「……っ……まさか、君たちは本当に未来から？」

「はい」

「そして君が……私のあとを継いでくれた……」

「リインフォースⅡですよ、リインフォース。あなたの残してくれた記憶映像でお会いしたことはありますが、こうして本物と話したのは始めてです」

「そう、か……」

「はい。本当はこんなことよくないってわかっていたのですが、時間遡行できると聞いて、どうしてもひと目でいいから会ってみたいと思って……」

「いや、会いに来てくれてうれしいよ」

巡り合う姉妹。

この場にアミタさんがいたら号泣だろう。

「あの、ヴィヴィオ、シユテル、ちよつといいでしょうか——」

わたしとシユテルはリインさんのお願いを聞き、しばらく2人だけにしてあげた。彼女たちがどんな言葉を交わしたのかはわからない。

だけど、初代リインさんは胸のつかえがおりたような顔つきで、とても満足げな表情を浮かべていた。

わたしはシユテルに問う。

「これ、大丈夫なのかな？」

ペラペラしやべってしまつて……。

「管制融合騎はブラックボックスの塊ですから、記憶封鎖の1つや2つ、私たちがかける前から受けているでしょう。他の人たちと違い、私が追加したところで問題ありません。それに、彼女は『砕け得ぬ闇事件』のあと間もなく眠りについたと聞いています。それくらいの間であれば、私の記憶封鎖が破られることもないでしょう」

「なるほど……」

そういえばヴォルケンリッターたちも、夜天の書が完成すると主に破滅をもたらす——という記憶を消されていた。

アインスさん共々、他にも無数の記憶を代々のマスターたちが意図的に操作したのだろう。

しばらくして2人が帰ってくる。

その場でもう一度だけ——とリインさんが先代リインさんに向かって尋ねた。

「今の私に蓄積されたデータを使えば、あなたを救うことも可能かもしれませんよ？」

「ありがとう。だけど、もし私が助かってしまったら今いる君が消滅してしまう。生まれないかもしれない。それはよくない」

シユテルも言う。

「そうですね。誰が融合騎を助ける技術を提供してくれたのか——パラドックスが生じます。それもこの時間にとっては無視できないひずみになるかもしれません」

「……ですか」

ああ——と言って、アインスさんがわたしに近づいてくる。

「ヴィヴィオ。君とはもう少ししたら再会できるそうだね」

「あ、はい。ただし去年のわたしですけど。その、拳を向けることもあるかもなので、先に謝罪を——」

「いや、そんなことはいいんだよ。それよりも……主はやてに君のような子供がいなことだけが心残りだよ」

「あはは……そればかりは……」

「それじゃマテリアル——いや、シユテルというんだったね。君ともまた会うことになるけど」

「ええ、私はまだしばらくあなた方と敵対することになりますので、その際は容赦なく拳を交えてください」

「ああ」

シユテルがルシフェリオンを構えた。

「これから記憶封鎖をかけます。いいですか？　すぐに消えるわけではありません。少しずつ薄くなっていき、5分ほどで完全に何があったか思い出せなくなるよう調整します」

「それまでにフェイトをソファアで寝かせればいいんだね？」

「はい。フェイトママのことよろしくお願いします！」

「了解した」

この子たちがママか——と、アインスさんはまだ子供のフェイトママを見て、クスクス笑っている。

「ツヴァイ、主はやてと騎士たちのこと頼んだよ。未来のみんなにもよろしく伝えて欲しい」

「はい。お任せください、お姉ちゃん！」

「ああ——」

寂しそうにリインさんを見つめながら、それでいて安堵に包まれた笑みを浮かべる

と、先代リインフォースさんはフェイトママを抱えて結界から飛び去った。

「リインも、あんな風にはやてちゃんとみんなを支えられる融合騎になれるでしょうか？」

アインスさんの、曇りのない蒼空を見上げるような表情を思い出す。

「もうなってるんだと思いますよ。アインスさんの——自慢の妹さんに」

リインさんは照れたように笑い、

「じゃ、帰りましょうか！」

と、新たな一步を踏み出した。

アインハルトさんは飛べますか？

いつもとちよつと違う雰囲気の高町家リビングのソファ―に、わたしと本局制服を着た大人のポニーテール女性が並んで座る。

「――はい！ 次元世界一兆人の聖王教会信者のみなさん、リリカルまじかるこんにちは。」

あなたの崇め奉る現代の聖王女――高町ヴィヴィオです。

毎週異なるゲストをお迎えして、視聴者のみなさんの疑問に、高町家つぼく答えていこうというこのコーナー。

何だか久しぶりな気もしますが、今週のゲストはなんと……というか、ついに、お題がお題だけにあの人――時空管理局航空戦技教導隊所属・高町なのは一等空尉をお呼びしました！

今日はよろしくお願ひしますね、なのはママ」

「はい、お願ひされました。でも、家で制服を着ることってないから変に緊張しちゃうね、これ」

「だね。バリアジャケットならフェイトママと喧嘩するときいつも着てるのにね」

「ん、んんんっ!？」

「とういうわけでこの番組は、あなたの隣家にじわじわ忍び寄る、次元世界最大の信者数を誇る聖王教会の提供で送りしまーす——」



「早速なんだけどなのはママ、この映像を見て欲しいんだけど……」

「どれどれ？」

わたしはクリスにお願いして、先日の学校帰りに録画したやり取りを再生する。

『——アインハルトさんって、実際はどの程度まで飛べるんですか?』

『え、私ですか? 飛べませんよ。ヴィヴィオさんも知つての通り、ずっとジム・ストライカーみたい陸戦だったじゃないですか』

『またまた、初等科で飛行魔法習ったくせに』

『初等科で飛行魔法……箒に乗って金色の玉を捕まえるようなアレですか?』

『それ違う魔法学校ですよ』

『プロペラがついてて足に履く……』

『それ空は飛べますけど、魔法学校でも何でもありませんから。それとわたしたちがみせてるのは本物のパンツが多いです』

『??』
『で、ですが、私たちずっと陸戦で——』

『しっかりしてくださいアインハルトさん！ 確かに原作ではずっと地上で戦ってて忘れがちですが、わたしもアインハルトさんも実際は空を飛べるんですよ!?!』

『げ、ゲームでのお話?』

『違いますよおお——っ!?!』

わたしが、緑髪の前輩の肩をぐいぐい前後に揺らす場面で映像がストップする。

「——というわけで今週は、たびたび視聴者のみなさんからも疑問に上がる、わたしやアインハルトさんが空を飛べるのか、ということについてお答えしたいと思います。

おっと、ここでメールが届きました。

ミッド在住の「天地に覇を成しませんよ」さんからですね。

『今日は久しぶりに一緒にスパリングでもどうですか?』

……あゝ、今日はこの放送でちよつと遅れそうなので、リオ、フーカさん、先に相手をして体力ゲージ削つといてくださいね。

とどめはわたしが！

というわけで早速ですが、なのはママ。空戦魔導師代表として、改めて飛行魔法について教導して欲しいんだけど？」

なのはママは「了解」と言って、レイジングハートと同じ色の赤い伊達メガネをかけた。

「あ、女性教師みたいな格好の方がよかった？」

「大丈夫、大丈夫。十分魅力的だから」

「そう？　じゃ飛行魔法の基本について講義するけど、みんな眠らないで聞いてね。――

――レイジングハート！」

《OK》

主の意図を読み取り、なのはママの愛機は空間スクリーンにいくつかの内容を多角展開した。

①

【魔法技術としては「初級の最後・中級の初歩」付近にあたる飛翔魔法だが、実際の飛行においてはある程度の技術とセンス、適切な訓練を必要とする。

さらに飛翔しながらの魔法運用や『航空戦』となれば長期間の特殊な訓練が必要となり、それらを終了して初めて『空戦魔導師として』空を飛べる』と言える状態となる。

初飛行時、なのはの飛行運用の大半はレイジングハートの補助によるものであり、評するのならこれはまだ「浮かんで移動しているだけ」であり、「飛行できている」うちには入らない」

●魔法少女リリカルなのは The MOVIE 1st 魔法辞典・飛行魔法より

②

『空中に浮く』事は魔法の初歩であり、『単純に空中を移動する』事も比較的容易な技術だが、『高速空中戦』を行う、という事に関しては、高度な技術と訓練を要する難度の高いスキルであり、自由に空を駆けて戦える魔導師は「空戦魔導師」と呼ばれる——」

●魔法少女リリカルなのは The MOVIE 1st パンフレット・航空魔法戦より

③

【魔導師たちは飛行可能なものも多いが、飛行にはいくつかの適性がある。

「飛行」や「浮遊」自体は比較的初歩の魔法ながら、高高度を自由に飛行する状況においては、空間把握能力や各種の安全措置、飛行のための魔力安定維持等、さまざまな能力が必要とされる。

このため、ミッドチルダでは正規の訓練や適性試験をクリアしたものでないと、高々度飛行魔法の学習はできなくなっている。

一方、高所作業時の安全確保のための浮遊・落下緩和魔法（「高所リカバリー」と呼ばれることが多い）は誰でも学ぶことができるため、訓練時間にかかる高所飛行魔法は修得しないまま自身の魔法を極めてゆくものたちも多い。

時空管理局では、高所飛行が可能な者を「航空魔導師」、飛行能力を選択しなかった者たちを「陸上魔導師」と呼称する」

●魔法少女リリカルなのは S t r i k e r S 第1巻魔法辞典・飛行より

④

「飛行魔法を保有していても、市街地での飛行はごく一部の状況…落下防止・緊急救助を除いて、許可されない。

落下事故や建築物への衝突、航空機との衝突を避けるためであり、管理局の航空魔導師であっても、平時は市街地での飛行を禁止されている。

飛行の必要がある緊急時のみ、所属部署の承認を受けることで市街地飛行が可能となる」

●魔法少女リリカルなのは S t r i k e r S 第2巻魔法辞典・市街地飛行許可より

⑤ 「飛行魔法を持たない魔導師達は、高所落下時のフォロー方法を習得することが義務づけられている。

一般的にはバリア展開による衝撃緩和、次いでメジャーなものは落下速度の緩和系。両者を複合で持つ者や独自の方法を使用する者もいる。

それらを習得していても、高所からのリカバリーには実地での経験や反復が必要となる」

●魔法少女リリカルなのはStrikerS第2巻魔法辞典・高々度リカバリーより
先つちよにレイジングハートのついた指示棒を使い、ひとつひとつ説明したなのはマ
マは、最後にこう締めくくる。

「——以上のように、単純に浮いたり、飛んだりするだけならほとんどの魔導師が可能
んだけど、空戦になると訓練やセンスが必要、といったところだね。

だからヴィヴィオとアインハルトちゃんやんが飛べてもおかしくはないんだけど、ひよつ
としたらまったく才能がない可能性がある以上、2人が飛行魔法を使える理由には弱い
かな。

そのところ、ヴィヴィオ選手はどうお考えですかー？」

「そこはほら、単純に『GOD』で空戦してるからってことで。なのはママたちと『サ●キックフォース』みたいに戦ってたでしよ？」

「確かに飛んでたし、『サ●キックフォース』みたいだったけど、ゲームを基準にしたらマズいんじゃない？」

「でもね、公式で『GOD』の世界が存在して、王様やアミタさんたちがいる以上、わたしとアインハルトさんが空戦してたのは事実なんだよ」

「そう言われると……」

「そこで、わたしは逆に考えてみました。

『GOD』で空戦していた理由を探れば、わたしとアインハルトさんが飛べるかどうかわかるんじゃないかなと。」

すると……わたしはとんでもない真実にたどり着いたんだよ！」

「えー」

「大きく分けて理由は3つあるんだけど、まずはこれ——」

①あくまでゲーム上のシステマ的な問題。なのはママたちと戦うために飛ばせる必要があった。

「身も蓋もない答えだね……」

「現実的にはこれが正解なんだろうけど、さつきも話したように、この考え方はもう、リカルなのはの世界では通用しないんだよ」

「え、どういうこと？」

「まずはこちらをお聞きください——」

『ユーリの防衛、頑丈だったもんねえ〜』

『そういえばヴィヴィオも固かったなー、防衛』

『あー、うん、セイクリッドディフェンダーが上手く機能してたから』

「今のは『魔法少女リカルなのはGOD サウンドステージA ミッドチルダの夜空の下』で、ミッドにやってきたレヴィとわたしの会話です。

ママ、覚えてる？ ユーリとどこで戦ったのか」

「えつと……確か海上だったかな？」

「そうそう。映画もそうだったよね。つまり、わたしはゲームではなく、現実的にレヴィと戦ったことがあり、あまつさえユーリとは足場のない海上でバトルしたということが、

公式に証明されているってことなんだよ？

よって、ゲームだから飛べたという理由の①だけは絶対じゃない」

「じゃ、やっぱりヴィヴィオは飛べるってこと？」

「そこで次の理由なんだけど——」

②デバイスの補助を受けて飛んでいた。

「こちらの映像も合わせてご覧ください——」

『《F l i e r f i n . (飛びます)》』

『……………と……………わわわ……………ッ！』

「今のは、映画でなのはママが、レイジングハートの補助を受けて初めて飛んだときの映像です」

「うーん、我ながら結構動けてるよね、これ」

「うん。優秀なデバイスがいれば、ジュエルシード異相体の無数の触手攻撃を空中で避けまくるくらいのレベルまで飛べる証明だよね。」

「これまではこの小説でも、わたしが飛ぶときは、デバイスの補助を受けていると説明してました」

「そっか。優秀なデバイスがいれば、ヴィヴィオたちも飛べるってことだね」

「うん。でもね、これでもまだ不十分なんだよ。いくらデバイスの補助があっても、ゲームのときみたいに、ママたちエースと空で渡り合えるかというところ……」

「足りないね」

「そう。なので、はやてさんが『StrikerS』で、ロングアーチからリインさんと同様の照準支援を受けたように、過去の世界では、わたしとアインハルトさんもアースラから飛行補助を受けてたんじゃないかと」

「確かに、デバイスよりも高度な補助を受けられそうだけど……」

「でもね、ママ。もし本当にそんなことが可能だったら、ティアナさんだって空戦魔導師になれたんじゃないかなって？」

「うーん、色々あるだろうけど、そういったエース級の補助が受けられるなら、もつと空戦魔導師の質が上がってもいいのかも……」

「なのはママたち以外の空戦魔導師は、あつさり撃墜されているイメージしかない。」

「なので、わたしとアインハルトさんが空戦していた理由は②でもまだ足りない。そこでラスト——」

③ 普段はあくまで格闘技選手として戦っているだけで、本当はわたしもアインハルトさんも空戦ができる。

「いやいやいやいや——それこそ身も蓋もないでしょう!」

「うん、普通はそう思うよね。そこで、まずはわたしが実際にはどの程度まで飛べるのかということを検証したいと思います。クリス、お願い——」

『え……えええ——っ!?!』

『ここは……街の上空?!』

『あわわ、クリス、浮遊制御! わたしとアインハルトさんの落下防止——!』

『テイオ、クリスさんの手伝いをッ!』

「これは『GOD』で、わたしとアインハルトさんが時間移動に巻きこまれ、海鳴市の上空に投げ出されたときのシーンです」

「おう、ヴィヴィオ、ちゃんとリカバリしてたんだ、えらいえらい!」

「えへへ。そんなわけで、少なくともわたしが浮遊魔法を使えるというのはわかっても

らえたと思います。ちなみに、人目につかないよう空中を移動してビルの上から下りま
した。

次は『Vivid』の原作9巻ですね。無重力の無限書庫に入った直後のシーンで
す」

はやて『普段飛び慣れてない子は、無重力はちようキツいかなー』

ヴィクター『ですわね』

番長『ん？ お前は余裕なのな』

エルス『飛行魔法は習得済みですので』

「このシーン、わたしやリオコロにアインハルトさんは上手く飛んでいます。逆にミウ
ラさんや番長、ジークさんはダメです。

はい、なのはママ、ここで問題です。

わたしたちとミウラさんたちの違いはなんででしょうか？」

「合宿に参加してスターライトブレイカーの洗礼を浴びたかどうか！」

「違うでしょ!？」

「冗談だって。そうだなあ……仮に無限書庫の“司書資格”や“立ち入りパス”を持つ

ている——無限書庫で飛び慣れている——かどうかだと仮定した場合、アインハルトちゃんが飛べる理由がわからない。つまり、ヴィヴィオとアインハルトちゃんに共通していること——魔法学校に通ってるのか？」

「たぶんピンポーン！　なんだよ。魔法学校では授業として飛行魔法を習うけど、一般校ではそんな授業はない。だから、エルスさんのように個人的に飛行魔法を習得しないと、ミウラさんや番長のように飛ぶ機会が中々ないんじゃないかって。

まあ、子供のころにこつそり練習する人もいると思うけど、ミウラさんも番長も変に真面目だから『市街地飛行許可がない　　飛行魔法禁止』くらいにとらえて、まったく飛んでこなかったとかね。

ちなみにジークさんは、ヴィクターさんと出会う9歳まで家に引きこもってたっぽいから、仮に魔法学校出身でも、意外と初歩の魔法が使えない可能性がある」と

「なるほど。でも、今のつて推測でしょ？」

「あはは。うん。とりあえず、今ので重要なのはエルスさんの台詞かな。

『無重力で飛ぶ動き　　飛行魔法の動き』

つてことを、みなさんしっかり覚えておいてくださいね。次が本題です」

「本題？」

「うん。わたしは無限書庫の無重力空間で、クロと戦ってるんだよ。地上で戦うのと同

じ動きで」

「あく、クロちゃんの攻撃も避けてたもんね」

「つまり、わたしは空中を移動可能な魔法を持ち、空中で戦闘可能な技術もある。だから、空戦も可能である——というわけ」

「でも、それなら原作2巻、春の合宿のときにみんなで作った試合はどう？　飛んで戦ってもよかつたんじゃない？」

「なのはママもう忘れたの？　アレって『大人も子供もみんな混ざっての陸戦試合』だったでしょ！　フェイトママが飛んでたから、つい何でもアリな気がするけど」

「あく、だいたいフェイトちゃんのせいかなぁー！」

「ん、ここでメールが来ました。ミッド在住の『今夜は遅くなります』さんからです。

『なのはが忘れてただけでしょ！』

だつて」

「まあ、そうなんだけどね」

「実際問題として、合宿時のわたしじゃまだ安定した飛行をしながら攻撃できるほど、力量に余裕がなかった可能性も高いよね」

「マリーさんから作ってもらった魔力負荷のかかるリストバンドをつけたのは4巻からだっけ？」

「そうそう。で『GOD』なんだけど、わたしがセイクリッドデイフエンダーを使いこなしていることと制服が夏服だったことから、インタームドル後、無限書庫編も終わり、12巻でアインハルトさんと戦ってからは、13巻の学院祭が終わって秋服に衣替えをするまでの間に起こっていると考えられます。

そうになると、それからさらに1年以上経過している今のわたしなら、普通に飛べる可能性が非常に高いと思わない、なのはママ？」

「確かに、ヴィヴィオたちの世代は魔力が一番成長する時期だもんね……そりゃ飛べるよね」

「というわけで、今回の最終結論です。

聖王女オリヴィエは、緊急時も馬に乗って移動していた。つまり、陸戦魔導師だったので、複製体であるわたし——高町ヴィヴィオにも空戦の素質はない。

けれど、幼いころから通っていた無限書庫のお陰で無重力慣れをしたこと。

また、あの高町なのはの娘ということで、15巻の魔力球を使ったキャッチボールのように、物心つく前から一緒に空を飛び、楽しさを教えられていたであろうこと。

以上のことから、高町ヴィヴィオは“才能”ではなく“経験”で、空中で空戦魔導師と互角に戦えるだけの技術を身につけた。

さらに、成長し、飛行しながら戦えるだけの魔力を身につけ、クリスという優秀なデ

バイスの補助を受けることができる現在は、むしろ「高町ヴィヴィオが空戦できない方がおかしい」。

よって、わたしは飛べる」

そこまで一気にしやべり続け、わたしは大きく息を吐いた。

「どうかな、なのはママ？」

「うん、いいんじゃないかな。」

えっと、メールも届いてるよ。ミッド在住の「スーパーパイロット」さんから。

『アセム + キオ みたいな感じ？』

だって。これ、リオコロちゃん？」

「うん、でも、そっか、そんな感じかも……」

するとなのはママが「あ」と声を発した。

「最後に1つだけ疑問があるんだけど？」

「なにになに？」

「ヴィヴィオが飛べるのはわかった。理由も納得できる。だけど、アインハルトちゃんはどのようなの？」

「……あゝ、実はアインハルトさんのとある有名な台詞から全ての謎が解けるんだよ」

「というところ？」

『列強の王達を全て倒し、ベルカの天地に覇を成すこと。それがわたしの成すべき事です』

「ベルカの“天地”に覇を成す——つまり、アインハルトさんは初登場のときから、ベルカの天空と大地で戦うという『私は空を飛べます！』宣言してるんだよっ!!」

「な、なんだって——！ 絶対違うと思うけど……今日のところはそういうことにしとこっつか？」

「うん！ ベルカの天地に覇を成すためには空くらい飛べないとね！ アインハルトさんも頑張りました——ということ、ここまでの相手は現代の聖女王——高町ヴィヴィオと」

「本局教導隊——高町なのはでした」

「ではまた来週ううううっ!!」

「じゃ、ママ。わたししばらく身を隠すので」

「はい、夕飯には帰ってきてね。あとアインハルトちゃんによろしく」

管理局つばい敬礼を返したわたしだったが、3時間後には霸王様にとつ捕まったのは言うまでもない。

タスケテ！

劇場版 新魔法少女リリカルなのはV i V i d

『先日、第23管理世界ルヴェラの鉱山遺跡で発生した襲撃事件と、第18管理外世界イスタで起きた大規模破壊の関連性について、エクリプス保有者の関与が疑われ——』

『管理世界天文学連合の発表によると、新たに発見された惑星が公転周期600年という特異な楕円軌道であり、旧ベルカに超接近する可能性があるとして——』

クリスが映す朝のニュースを聞き流しつつ、聖王教会本部の図書館で本棚を眺める。それが最近のわたし——高町ヴィヴィオの日課だった。

新暦81年9月。

中等科に進学して、アインハルトさんと同じグリーンの制服を着るようになってから約半年後の秋。

近年多発する“魔導殺し”による犯罪と“エクリプス事件”解決のため、かつての機動六課メンバーが再結集。

はやてさん指揮の下“管理局特務六課”として、なのはママとフェイトママも招集さ

れた。

いつ解決するかわからない案件。

長期出張である。

一方で、魔導殺しやエクリプス保有者の目的がわからない以上、万が一——エクリプスが古代ベルカの負の遺産であることから、ベルカの末裔に危害が及ぶ可能性がある——を考慮し、事件解決までわたしは聖王教会本部で保護される形になった。

一人暮らしも魅力的だけれど、この方がママたちも安心して事件を追えるだろう。

それに、同じ古代ベルカ王族血統であるアインハルトさんも一緒なので、それはそれでうれしかったりする。

ついでに言うと、学校に近いのでリオやコロナ、ユミナさんもよく遊びに来る。

これでミウラさんやノーヴェまで来たらほとんどジムと変わらない。

合宿みたいなノリだ。

もちろん、教会での生活は窮屈なことも多い——シャンテやセインはよく耐えられるなあ——けれどせっかくの教会本部。

無限書庫の司書資格を持つ身としては、これまで気になっていた教会図書館に眠る蔵書の数々に目を通すまたとないチャンス！

実はこの図書館。地上から見える部分だけでも礼拝堂並の広さがあるのだけど、地下

に広がる蔵書室だけで、なんと17層。

プラス、傷んだ書物を修復する工房。

さらに、最下層にある秘密のドックを含めると、とんでもない広さがある。

古代ベルカ崩壊時に持ち出された貴重な文献も多く、あのユーノ司書長も「二度じっくり調べてみたいよね」と漏らしていたほど。

「ふっふっふ、聖王の血が騒ぐね——」

まあ、オリヴィエの血は関係ないのだけど……。

そんなわけでハシゴを使い、高い本棚の上段にある本を手にとった瞬間、ギギツ——と書庫の扉が開いた。

2人分の足音がわたしに近づいてくる。

はて……？

「ヴィヴィオさん、やはりこちらにいらっしやいましたか」

「ヴィヴィ、おはよー」

優しい声とぶつきらぼうな声。

赤いリボンをつけた緑髪先輩と、ベレー帽を被った金髪の子ビっ子が、わたしを見上げていた。

「アインハルトさん！ それにクロまで！ 珍しいね。しかもこんな朝早く」

魔女っ子のクロがニヤリと笑う。

「うん。退屈してるだろうと思って遊びにきた」

「ありがと」

「どういたしまして」

わたしは本を片手にハシゴを下りる。

「そういえばヴィヴィオさん、ヴィクターさんは何と？」

「あー『魔導殺しが来たら、私とジークで逆に追いついてやりますわ！』だそうです」

雷帝のお嬢様は、教会の保護を断ったのだ。

「なるほど。格闘家であるあのお2人であれば、局の魔導師より、むしろ魔導殺しとの相性がいいのかもしれませんがね」

「特にジークさんは投げ技も得意ですし、あんまり魔導師って感じじゃないですもんね」
「からめ手には弱いけど、正面から戦う分には負けないでしょ。ジークリンデはあれでもエレミアなんだから」

魔女っ子がつんけんと言った。

最近気づいたのだけど、ファビア・クロゼルグ——通称クロは、結構ジークさんに対して辛口だと思う。

600年前。ジークさんの祖先リッドさんの書いた『エレミアの手記』に、最初の魔

女クロゼルグに関する記述があるのだけど、

『僕にはまったくなくなかったので、基本的に険悪だった……』

とあったので、その辺りはご先祖様譲りの性質なのかもしれない。

「ところでヴィヴィ、それ何の本？」

クロの視線がわたしの左手に注がれる。

「ああ、これ？ あゝ、ちょうどよかったと言うべきか——」

2人に向かつて古代ベルカ語で書かれた本のタイトルを見せる。

「シュトウラの森の民について……」

「それはナイスタイミングでしたね」

アインハルトさんのご先祖様——霸王イングヴァルトの治めたシュトウラ王国の領地内。

クロのご先祖様——魔女クロゼルグが住んでいたという魔女の森について記された書物だ。

「それでね、前からクロに聞いてみたかったんだけど、魔女クロゼルグって“獣人”だったでしょ？」

「うん」

「でも、今のクロって獣耳がついてないよね？」

魔女ではあっても普通の人間だ。

「そういえば、そうですね……。クロ、もしかして隠しているんですか？」

わしやわしや——と、アインハルトさんが魔女っ子の金髪をかき分けた。

「隠してないから！ 単純に血が薄まっただけだと思うからっ！」

嫌がった素振りをしつつ、実は舌足らずの声音は弾んでいる。

嫌よ嫌よも好きのうち——というやつだ。

クロらしいツンデレである。

それはそれとして、わたしは話を続ける。

「そこ……なんだよね。ヴォルケンリッターで例えると『3対1』あるいは『4対1』の割合で、古代ベルカにはたくさん獣人が住んでいたはずなのに……今ってまったくいないでしょ？」

ザフィーラ本人は古代ベルカ出身だから、現代にはカウントされない。

「確かに、見かけるにしても、元が動物の使い魔くらいですね」

獣耳を持つアルフヤリニスさん、それにリーゼ姉妹。みな使い魔だ。

「あー、ヴィヴィの疑問ってそういうこと——」

クロは乱れた髪を直しつつ、己の知る情報を開示してくれた。

「うちに伝わっている話だと、森が焼かれたあと仲間たちはみんな『獣王の国』に避難

したって。クロゼルグみたいに森に残った獣人もいたみたいだけどね」

「へ〜」

「『獣王』ですか……」

「獣人たちの王様だって話だけど、私も詳しくは知らない」

古代ベルカ諸王の1人なのだろうけど、聞き覚えがない。

学校で習った記憶もない。

ひよつとして旧ベルカには、獣人だけが住む国があったのだろうか？

こういうときに頼りになる人といえば——わたしとクロクが視線を向けると、現代の覇王様は申し訳なさそうに頭を下げた。

「すみません。以前の私ならわかったのですが、1年前にクラウスの記憶が消えてしまったので……」

そうだった！

「あく、いえいえ！ いいんです。それが普通なんですから！ だいたいそんなこと言
い出したら、わたしなんてほとんどオリヴィエの記憶がないですしね〜」

するとクロクが、

「むしろ、大昔の血液サンプルだけで生まれた複製体に記憶がある方がレア。どうやっ
たか知らないけど、ヴィヴィを生み出した科学者はスゴイと思う」

「あく、うん……」

スゴイ……か。

わたしは、今も衛星軌道拘置所に収容されている。『紫髪の科学者』を思い浮かべた。

——Dr. ジェイル・スカリエッティ……。

実際に彼が生み出したかどうかは、今もって明らかになつてはいない。

けれど、少なくとも技術やDNAサンプルの提供をしたのは間違いない。

わたしの予想では『マリアー・ジュ事件』のトレディア・グラージェのような、スカリエッティの同士の一人が、クローン体を生み出すことに成功。

移送の際、何らかのトラブルが起きてわたしが逃げ出し、機動六課に保護された。というところが妥当だと思つている。

わたし自身に記憶がない以上、これもスカリエッティ本人に聞いてみないとわからないことだけ……。

まあ、もう会うこともないんだけどね。

管理局や教会が許可を出さないし。

何より、ママたちが嫌がるから……。

すると、図書館に新たな人物が顔を出した。

「みなさん、ごきげんよう」

優しい足音に、気品のある声。

赤みがかった髪をもつわたしと同年代の女の子。

1000年もの間、遺跡で眠っていた古代ベルカ——ガレア王国の冥王でもある。

「イクス！」

「みなさんが獣王についてお話されていたようなので、懐かしくてつい立ち寄ってしまいました」

「え、獣王のこと知ってるの？」

「はい」

「さすが。本当は1000歳越えのお婆ちゃんだけある」

「クロ、お婆ちゃんって言わないでください！」

実は結構気にしていたらしい。

イタズラ好きなクロの台詞に、珍しくイクスが感情を露わに否定している。

あまり声を荒らげることのない少女は「はあはあ」呼吸を落ち着けてから話を続けた。

ちよつと可愛いかも。

「えつと、ですね……獣王が治めた国というのは、古代ベルカでも獣人が多く住むことで

知られる「フロニヤルド」と呼ばれた地方でした」

「フロ、ニヤルド……？」

「はい。ガレアからもそう遠くない地域だったので、私の国と交流もありましたよ」

「へえ〜」

それは凄いです。

「フロニヤルドでは、古くから、犬、猫、栗鼠などといった獣人の性質に合わせた小国が乱立し、互いに争っていました。有名なところで言うと、ビスコッティ、ガレット、パステイヤージュなどでしょうか。

しかし、私が生まれた1000年前……戦乱期中頃ですね。ベルカで激化する兵器開発に対抗して、獣人のための統一国家が誕生しました。それが「フロニヤルド連合王国」。感覚としてはオリヴィエの時代の聖王連合に近いです。

そして、フロニヤルド連合王国の代表の名が——通称「獣王」。

初代獣王は、ピンクの髪にピンクの衣装をまとい、素敵な歌声をもつ、本当に心優しい女王だったと記憶していますよ」

「そっか……」

イクスが言うのであれば、きつと素晴らしい名君だったのだろう。

「獣人の、それも王族ともなればかなり長命な種族でしたから、ひよつとしたら私が眠っ

たずつとあと——オリヴィエやクラウスとも交流があつたのかもしれないね」

「そっかあ〜」

アインハルトさんにクラウス陛下の記憶が残っていればわかつたのかもしれないけど……。

アインハルトさんがU15のチャンピオンになったとき、彼の記憶はなにもかも消えてしまったのだという。

だけどそれは「アインハルト・ストラトス」としての日々が充実した証でもあるわけで、彼女にとってはいいことのはず。

オリヴィエの昔話など、まだまだ聞いてみたいこともあつたので惜しい気もするけれど、仕方がないのだろう。

「あれ？　だとしたらその獣人の国ってどうなったの？」

ベルカ崩壊後、ミッドのベルカ自治領に移民したという話は聞かない。

もし移り住んでいたら、現在もミッドには多くの獣人が暮らしていたことだろう。

それがないとなると……。

ん〜、と魔女っ子が唸る。

「シウトウラの森の獣人が避難したんだから。600年前——クロゼルグやクラウス、オリヴィエやリッドの生きていた時代には、まだ健在だったはず」

「その後、滅んだということでしょうか？」

「かなり強大な国力を持つ国だったので、そう簡単に滅びるとは思えないのですが……
そうですね、カリムにも相談してあとで調べてみましょうか？」

「うん。わたしもあとで手伝うね！」

そうイクスに約束すると、わたしはちよつと思いついたことがあり、意地悪な笑みを浮かべてクロに向き直った。

「ここままでーつ、重要なことがわかったよね」

「なに？」

「森が焼けた——つまり住む場所を失ったっていうのに、仲間と一緒に獣王のところに逃げなかった魔女クロゼルグって、よほどクラウドス陛下に会いたかったんだなって。——

——クロもだけど」

「べ、別に私はそんなことなかったしっ！」

「そんなこと言つてアインハルトさんに会えてうれしかったくせにく。あ、それとも実はジークさんの方だったりして？」

「ヴィヴィっ！」

「あははは〜」

クロの小さなパンチを、わたしはヒラヒラ避けまくる。

愛多ければ憎しみ至る——クロゼルグはずっと待っていたのだろう。

だけど、彼女がクラウス陛下たちに再会することは叶わなかった。

運命の輪が交わらなかつたのだ。

そして、見捨てられた、裏切られたと思つた魔女の妄執は、いつしかねじ曲がり、復讐という誤つた形で子孫に受け継がれていったのだ。

「ヴィヴィオ、昔は昔、今は今ですよ」

「イクスは、昔も今も一緒だけどね」

「そうでした——」

すっかり修道女の衣装が板についた1000年前の王様が、クスクス笑う。

そのとき、

バアアアン——と勢いよく書庫の扉が開かれた。

スカートの裾をつかみ、パタパタ走りこんでくるオレンジ髪のシスター。

わたしたちの手前で急ブレーキをかけると、息を切らせながら叫んだ。

「——つて、いたいた、陛下！ イクスとアインハルトも！ おっとクロもいたね！」

「もうシャンテ、図書館は走つちやダメだよ——」

「そんなこと言つてる場合じゃないんだつて！ さつき教会に連絡があつて、お屋敷にいた雷帝のお嬢様とチャンピオンが襲われたつて！」

「「「え、えええ——つつ!!?」」」

「だ、誰にですか!?!」

「2人は大丈夫なの!?!」

「ジークリンデ……」

「平気、平気、2人とも無事だつて。ただ、2人がかりで1人に負けたとかで、あゝ、あのイケメン執事を加えれば3人か」

「彼らほどの手練を……まさか……犯人は例の魔導殺しでしょうか?」

「それがさ、ちよつと違うみたいなんだよね。相手は長い銀髪に金色の瞳、背の高い獣人の女性で、自分のことを「獣王の使い」と名乗つたつて」

「「「獣王の使い!?!」」」

わたしとアインハルトさん、それにクロとイクスの4人は顔を見合わせた。

事情を知らないシャンテは、目をパチクリさせながら「ここからが本題」と声色を変
える。

「陛下よく聞いて。お嬢様が言うには、獣王の使いは“聖王や霸王の末裔の居場所”を尋ねてきたつて。それで答えなかったら、メイドを人質に取られたとかなんとかで……」

「この場所について話してしまつたんですね」

「メイドさんは無事だったの？」

「うん、それは大丈夫。人的被害は出てないつて」

「そつか、よかつたー」

「いやいやよくないでしょ!? あのお嬢様。だからこつちに避難してろつて言つたのに人の話聞かないからー!」

「ですが、あの2人が負けたということは、相手はかなりの使い手です。それこそ、ヴィイオさんのお母様に匹敵するような——」

途端、図書館に勇ましい大声が響いた。

『はっはっは、待たせたのう、者どもおお——ツツ!!』

ガシャアアン——と、盛大に天井のガラスが碎ける音と共に、四肢を丸めた人物が飛びこんできた。

初代リインフォースさんを彷彿とさせる銀の長髪がなびく。
手には巨大な戦斧と盾。

蒼い装束に白銀と黒鋼の甲冑。

背中に黒いマントを羽織るその女性は、

「誰エエ!?!」

「誰も待ってねええ——っ!?!」

「何者ですか!」

「雷帝の末裔から聞いておらんかったかのう。ワシは『獣王の使い』と名乗っておいたはずじゃが?」

華麗に着地した長身の女性が不敵に笑う。

彼女の頭部で白い獣耳がヒョコヒョコ揺れた。

「金色の瞳の獣人!?!」

だとしたら、

「コイツがお嬢様とチャンピオンをやった、例の襲撃犯かよ!」

「えええ! もうここまで来たっていうの!?!」

「早すぎます!」

「フッフッフ、少し驚かせてやろうと思ってな。我ながら少し急いで来た」

——無茶苦茶だ！

そんな獣王の使いに向けて、クロが低く暗い声で呟いた。

「ジークを襲っただけじゃ飽き足りないんだ……もし、アインハルトとヴィヴィにまで手を出そうというなら、この私が許さない。獣風情が——その場で這いつくばって潰れろ！」

誰よりも早く動いた魔女の末裔が、呪いをこめた声音でかつてルーテシアを追い詰めた重力魔法を発動させる。

「フン。チビっ子、貴様は黙っておれッ！」

銀髪の女性は垂直にかかる重圧を物ともせず踏み出すと、手にした黒い戦斧の先端——石突をクロの鳩尾を叩きこんだ。

「かはっ……」

少女の口腔から空気が漏れ——いくら悪魔合身してはいないとはいえ——あのクロをわずかに一撃で昏倒させる。

「クロっ!?!」

「ワシが用のあるのは、その聖王と霸王の2人だけじゃ。他の者は下がっておれ！」

「悪いけど、そーはいかないんだよねえ〜」

いつもと変わらないあつけらかなとした口調と仕草でシャンテが前に出る。

わたしたちと獣王の使いを結ぶ直線上に立ち塞がると、胸のデバイスを素早く起動。トンファー型の双剣を逆手に構えた。

こちらを一切振り返らず、獣人の女性から目を離さずに言う。

「陛下、アインハルト。イクスとクロを連れて下がって」

「シャンテ！」

「シャンテさん……」

「シャンテ、無理はしないでください！ たぶんこの方は……」

「平気だつてイクス」

「イクス？」

獣王の使いがわずかに遠い目をした。

瞬間——シャンテが猛る。

「ここでコイツを倒して、あたしがお嬢様の仇を取ってやるよッ！」

飛び出したシャンテの身体が2人、4人、8人と倍々に数を増していく。

幻術魔法だと言いつ張る彼女の実体をともなう分身——重奏だ。

「小賢しいな。邪魔だと言っておろう！」

「それはこつちの台詞だつーの！ これ以上あんたの好きにはさせないよつー！」

獣人の振るつた戦斧が当たると、シャンテの身体が幻のようにかき消える。

「残念ッ!」

「そうかな?」

戦斧が止まらない。

凄まじい臂力で振るわれた刃が、チャンスとばかりに一齐に飛びかかったシャンテの分身を風圧だけで消し去っていく。

それだけじゃない。狭い書庫内も災いしたのだろう。

ミラージュハイドで隠れていた本物のシャンテの位置まで暴き出された。

焦るシャンテ。

「しまっ——」

「甘いわああ——ッ!」

サッカーボールをシュートするかのよう、獣王の使いがブーツの爪先で蹴り上げた。

くの字に曲がったシャンテの身体が、まるで小動物のように背中から書架に衝突した。

地震にも耐えられるよう固定された大きな本棚がゆっくり前方に傾き、小柄なシスターを押し潰そうと真上に倒れこむ。

「シャンテ?!」

「フンっ——」

世話の焼ける——と叫びながら、獣王の使いが寸前でシャンテの襟首をつかんだ。軽々と片手で引き上げる。

次の瞬間、轟音と貴重な書物を撒き散らしながら書架が床に激突した。

舞い上がる粉塵と地響きの中、銀髪の女性はシャンテを先に倒れていたクロの傍らに放り投げた。手をパンパン払う。

シャンテは起き上がらない。クロに続き気を失ったのだ。

「シャンテ……」

「さて、ようやく本命の2人じゃのう」

これは逃げられない。

覚悟を決めて、わたしは尊敬する先輩の名を呼んだ。

「アインハルトさん！」

「ええ、私たちが相手をして差し上げましょう！」

「セイクリッド・ハート！」

「アステイオン！」

それぞれのデバイスを掲げたわたしたちは、魔力光の輝きを身にまとい、強化モード——成長したバリアジャケット姿へと変化する。

「ほう、それが噂に聞く変身魔法というやつか。面白い。さあ、かかってくるがよい、聖王と霸王の末裔ども！」

「イクス、クロとシヤンテをお願い！」

「わかりました。ヴィヴィオ、ご武運を！」

「はい！ 高町ヴィヴィオ、一番手、行きますッ——」

先陣を切り疾風のごとく獣人の使いに近づく。

フンツ——と気合をこめた戦斧の刃が一直線に首筋を薙ぐが、わたしの方が速い。

獣王の使いを越えるスピードで屈むと、戦斧が頭上を通過する瞬間、前傾姿勢のまま滑るように懐に飛びこんだ。

拳に魔力を宿らせると、アクセルスマッシュ——腹部と顎下を殴りつける。

しかし、

「どうしてっ!？」

わたしの拳が痛い。

この銀髪の獣人女性、硬すぎる！

「スピードは中々のものじゃが、この程度の打撃では少々物足りんのう。それではワシの守りは崩せんぞ！」

「だったら——」

「私が——」

コンビネーション。

わたしの背後に隠れていたアインハルトさんが、前後に入れ替わりつつ霸王の拳を叩きこんだ。空気が激しく唸る。

しかし、銀髪の獣人はそれすら手のひらで受け止めてみせた。

「なるほど。いい一撃じゃ。パワーもある。じゃがまだまだ足りん！」

彼女はもつと来いと煽る。

「それなら、これでどうだああ——っ！」

わたしは一瞬で背後に回りこむ。

頭部への踵落とし——と見せかけたローキック。可変蹴りだ！

ところが、獣王の使いは避けようともしない。

「貴様の一撃は軽いと言っている！」

小虫を払うかのように手を振るっただけ。

けれど、そのわずかな隙が仇となる。

「いえ、十分です。時間は十分いただきましたから——」

霸王の血統を受け継ぐハイデイ・E・S・イングヴァルトの足元に、三角形のベルカ

式魔法陣が浮かび上がった。

拳に宿る金色の光と共に放たれるのは、一撃必殺の奥義。

「足りない部分は互いに補い合えばいい。そしてあなたが何者であろうと、ただこの場で叩き伏せるのみ！」

わたしが飛び退いたと同時に打ちこまれた断空の拳が渦を巻き、獣王の使いをガードの上から弾き飛ばす。

獣人女性の身体がモーターモービルにでもはねられたように、勢いよく背後の壁に叩きつけられた。

書庫の壁が崩れ落ち、パラパラと中庭へ通じる穴が開いた。

すると、アインハルトさんが「しまった」といった風に眉をひそめた。

「これは、少々やり過ぎてしまったでしょうか……」

「いや、不可抗力だったかと……」

あとでセインを巻きこんで、みんなで壁を直すのも楽しいかも。

2人で笑い合う。

「まだです、ヴィヴィオ、アインハルト！」

図書館にイクスの悲鳴が響いた。

瓦礫を押し分けながら、ゆっくり獣王の使いが立ち上がる。

尻尾の房毛がパンパン叩きながら砂埃を払った。

それは、どことなくうれしそうにも見える動作だった。

「今のは悪くない。見事な一撃であった。——で、霸王の末裔、他の技はどうした。もつと破壊力のあるやつや、もつとえげつない奥義もあつたであろう?」

「断空拳以上の奥義……?」

「……ふむ、おかしいのう。伝わっておらんのか? ワシの知っている霸王は、もつととんでもない技をいくつも隠し持つておつたぞ」

「っ!?!」

霸王の血を受け継ぐ少女の顔に動揺が走った。

「そんなの、アインハルトさんを迷わせるハツタリですよー!」

わたしはなのはママ直伝の拘束魔法を発動させる。

「むッ!?!」

魔力で生み出したリングで獣王の使いの自由を奪うと、わたしは再び獣王の使いの懐に飛びこんだ。

狙うはむき出しの腹部。

「これで、どうだああアア——っつ!?!」

ゼロ距離から、セイクリッドの名を冠する虹色の砲撃魔法を放つ。

スターライトブレイカーには及ばないけれど、デイバインバスター以上の破壊力を持

つわたしの全力全開。

少々オーバーキルになってしまいうけど、何度も立ち上がる相手にはこうするしかない。

ああ、ついにわたしも、なのはママの気持ちができるようになってしまったか。なのに、

「甘い！ 先程から何度も言っておるであろうッ！」

獣人の女性が吠えた！

魔力リング——レストリクトロックが砕け散り、彼女の正面にミッド式やベルカ式とも異なる見たことがない魔法陣……いや、蒼と黒の紋章が浮かび上がった。

セイクリッドブレイザーの閃光が紋章の輝きに打ち消されていく。

「そんな……」

「まだです、ヴィヴィオさん！」

走りこんでくるアインハルトさん。

振り上げた手刀に、再び断空のエネルギーが集まる。

それでも、

「このワシに同じ技が通じるとでも思ったかッ！」

届かない。

獣人女性が身をひるがえす。

真横に回転しながら、アインハルトさんの視界をマントで覆い隠した。

「くっ——」

振り下ろされた手刀が標的を見失う。

逆に、獣王の使いは霸王の手首をつかんだ。

回転のエネルギーを利用し、アインハルトさんを引き寄せると、勢いそのままに鋭く鳩尾に膝を蹴り入れる。

ぐほッ——と嫌な悲鳴が漏れた。

「残念だったの。これでおしまいじゃ！」

とどめの一撃。

戦斧を握る手で、もう一度アインハルトさんの腹部を殴ろうとした獣人女性に対し、

「させません！」

「なんと!?!」

アクセルシューターで弾幕を張ると、ジェットステップで高速接近。

わたしは一瞬でアインハルトさんの身体を奪い返すと、後方に下がった。

腕の中から消えた霸王の感触を惜しむように、獣王の使いは頭を振る。

そして、わたしを見て地団駄を踏んだ。

「聖王の娘……か。惜しい、実に惜しいのう。スピード、反射神経、どれもワシの要求を満たしておるが……いかんせん魔法力量だけが致命的に足りん。それでは突破できん守りもあるのじゃ。その一点のみで——お主はオリヴィエに遠く及ばんよ」

獣王の使いはアインハルトさんにも同じようなことを語っていた。

わたしは思わず尋ねていた。

「どうしてあなたが、オリヴィエやクラウドス陛下のことを知ってるんですか？」

「それは——」

「ヴィヴィオ。彼女が先程話したフロニヤルド連合王国の大將軍にして、元ガレットの獅子王——レオンミシエリ・ガレット・デ・ロワ陛下だからですよ」

わたしとアインハルトさんを守るように、獣王の使いの正面に立ったイクスがそう告げた。

「ほう。見間違えかと思っておったが、お主、冥府の炎王——ガレアのイクスヴェリアアか！——」

「はい。お久しぶりです、レオ陛下。まさか1000年前と変わらぬお姿でお会いできるとは思いませんでした」

「それはワシの台詞じゃ」

遠い過去の知人に会えたせい、獣王の使い——レオンミシエリ陛下の声が弾む。

白い尻尾の揺れ具合も機嫌がいい。

もう戦う気はないということだろうか……？

イクスは簡単に己の身に起きた事情を語る。

「私は、海底の遺跡でずっと眠っていましたから」

「ワシも似たようなものじゃ。ただしワシが眠りについたのは『聖王統一戦争』のあとじゃがな。まあ、その後もちよくちよく目を覚ましてはおったのじゃが……。それと陛下はやめい。王の地位はミルヒのやつにくれてやった。ワシのことはレオ将軍か、ガレット卿……いや、せっかくだ、ワシのことは「閣下」と呼べい！」

何だかノリノリなので、すかさず、

「はい、レオ閣下！ 一つ質問があります！」

わたしが勢いよく手を挙げると、レオ様は「なんじゃ、言ってみろ」と応じてくれる。

「どうしてこんな真似を……？」

昏倒したままのクロやシャンテ。

わたしが身体を支えているものの、未だ足元の覚束ないアインハルトさん。

それに図書館の惨状を見回した。

大惨事……。

これだけの騒ぎを起こせば、すぐに人が——教会騎士団が集まってくるだろう。

「ふむ……少しついてまいれ」

壁に空いた穴から中庭に出ると、閣下は青空の彼方を指差した。

「あの星が見えるか？」

昼間でも見える。

ニユースでもやっていた。日に日に大きくなる謎の天体だ。

「あれはかつてのベルカの衛星——月の1つだった星じゃ」

「ベルカの月の1つ?!」

「そう。そして今の名を惑星フロニヤルド。600年ぶりに帰ってきたフロニヤルドは、もう間もなく無人世界となったベルカに衝突するだろう」

「嘘……」

「しかもだ。その衝突の余波で起きる大規模次元震は旧ベルカだけでなく、ミッドチルダを含めた多くの次元世界に甚大な被害を与えるはずじゃ。いや——最悪の場合、次元断層が起きるやもしれん。それもかつてない規模でな」

「そんな……」

「聞いたことがあります……私が眠っていた間のことですが、旧暦462年に起きたという次元断層のことを」

「ああ。あまりの緊急事態にワシの眠りも一時的に解けたのじゃが、隣接する並行世界

がいくつも崩壊してしまった。あれは酷い事件じゃった。あのような出来事を再び起こすわけにはいかん。それも、このミッドで起きるようなことだけはな！」

レオ様は天に向かって手を伸ばす。

「ワシはフロニヤルドを止めるため、この手でミルヒオーレを殺さねばならん。そのために力ある協力者を探しておったのじゃが——残念ながらお前たちでは力不足だ」

「そんな……」

わたしではなく、なのはママやフェイトママなら相応しかったのだろうか？

きつとそうなのだろう……。

今のわたしでは届かない領域。

だけど、現在ママたちは……。

「安心するがよい。原因は全て600年前にある。今を生きるお前たちに背負わせるつもりはない。オリヴィエやクラウス、そして犬姫との約束はワシー人でも果たしてみせるさ」

オリヴィエとの約束……？

すると、

「いたぞ、侵入者だ！」

「あの獣人を捕まえろ！」

駆けつけてきた教会騎士団の音が響く。

「陛下、シャンテ！」

「イクス、アインハルト！」

セインやシャツハさんの声も聞こえてくる。

「ふむ……ここまでのようじゃな」

レオ様はその身をひるがえすと大きく跳躍した。

教会の尖塔に飛び乗ると、一度だけわたしを振り返った。

「ヴィヴィオと言ったな。お前は聖王ではない。ましてやオリヴィエでもない。霸王の娘ともども自らの人生を謳歌するがよい。——ではさらばじゃ！」

再び跳躍すると、聖王教会本部から姿を消した。

「レオ閣下ツッ!」

「レオ様!」

わたしの踏み出した足が止まる。

力不足だと言われた今のわたしには、去っていくレオンミシエリ陛下を追いかける資格がない。

足手まといにしかならない。

世界の危機を知りながら、黙って彼女の背中を見送ることしかできないのだ。

だけど……。

これがもし、なのはママだったら……？

オリヴィエだったなら……。

どうしていたのだろうか？

わたしは……。

わたしの腕の中で、アインハルトさんの拳にグツと力がこもるのが感じられた。



そして――

【Vivid 2nd PROJECT】

高町ヴィヴィオは決意する。

『これはこれは陛下、このようなガラス張りの牢獄にようこそ。いや、今は高町ヴィヴィオとお呼びすべきだったかな?』

ノーヴェやセイン、元ナンバーズの4人を引き連れて彼女が会いに向かったのは、ミッドチルダ司法の最高拘置施設で虜囚の身となっている、1人の天才科学者。

『あなたにお願いがあります……』

その小さな胸に再びレリックを宿すことを。

『敵はフロニヤルド? これは面白い! 妹たちがみな死に行くと言うんだ、ウーノ、トーレ、クアットロ、私たちも協力してやろうじゃないか!』

同じころ、アインハルトも決意する。

『クラウス。私たちの覇王流が負けたままでいいんですか? あなたの極めた技の全てが必要です。今度こそ覇王の全てを受け継ぎましょう!』

それは彼女にとって後退、それとも前進なのか……。

聖王教会本部の地下格納庫から飛翔する秘密裏に建造された巨大艦船。

『ゆりかご級2番艦「パラデイス」 発進！ 陛下、ドーンと行っちゃいましょう！』

『ユミナさん、ノリノリですねー』

目指すは惑星フロニヤルド。

待ち受けるのは、異世界から召喚された最強の勇者たち。

『マリアージュ、これは守るための戦いです』

『ゴライアス Mk—II 出るよ！』

『春光拳を素手だけの武術だと思わないでよね!』

『ボクだって八神家の一員なんだ!』

『やれやれ雷帝も見くびられたものね』

『その生命、エレミアの鉄腕で刈り取らせてもらおうよ——』

そして現れるのは、柔らかいピンクの髪に漆黒の衣をまとう獣王ミルヒオーレ。

彼女の歌声が惑星フロニヤルド全土に響き渡るとき、600年前に交わされた約束と真実が明らかになる。

『わたしはわたし、オリヴィエとは別人ではあったとしても、わたしにできること、わたしにしかできないことがあるから——』

あの『魔法戦記リリカルなのはForce』と同時期に起きたもう1つのリリカルなのは“を描く超話題作!

【劇場版 新・魔法少女リリカルなのはVivid The MOVIE 2nd D
AYS】

新暦20180年、劇場公開予定!!

『ひとりで泣かないで……あなたを待ってる人がいるんだからッ!』

アインハルトさんは飛べますか? 2

今日は久しぶりにアインハルトさんと2人きりで朝のランニングです。

川べりの公園に到着すると、早速クリスが撮影開始。本題に入る。

「——はい! 次元世界1兆人の聖王教会信者のみなさん、リリカルまじかるこんにち
は。」

お久しぶりですっ!

あなたの崇め奉る現代の聖王女——高町ヴィヴィオが帰ってきましたよ。

毎週異なるゲストをお迎えして、視聴者のみなさんの疑問に、高町家つぼく答えてい
こうというこのコーナー。

本日は珍しく、タイトル通りにわたしの学校の先輩——ハイデイ・アインハルト・ス
トラトス・イングヴァルトさん——長いっ! を、ゲストにお迎えしました。

今度こそ、現代の霸王様が空を飛べちやう本当の理由を検証しちゃいますよ。

それでは、今日はよろしく願いますね、アインハルトさん!」

「はあ……あの、ヴィヴィオさん1つよろしいでしょうか?」

「はい、何ででしょうか?」

「先日、劇場版『魔法少女リリカルなのはReflection』の記憶ディスクが発売したというのに、私たち、こんなことをしていてよろしいのでしょうか？」

「あゝ、確かに4月11日に発売しましたね。」

開始47秒。

映画館で見たときも思ってたんですが、宇宙から俯瞰した惑星エルトリアをバックに

『EC4280 惑星エルトリア』って表示されるんですけど……」

「4280年ですか……。随分と歴史ある惑星なんですね」

「ええ、血のバレンタインが70年。ヤキン・ドゥーエ攻防戦が71年。デュランダル議長が亡くなったメサイア攻防戦が74年ですから、あれから4000年。ナチュラルとコーディネーターの争いはどうなったのかわからず、とか、はい、色々と思うことはあるわけですよ」

「……つて、ヴィヴィオさんしつかりしてください!!」 CE（コスミック・イラ）じゃありませんよ! ECです! どんなに観たくても、劇場版ガンダムSEEDは完成しなかつたんですよおっ!!」

「……はっ!? すみません。N●Kの『全ガンダム大投票』のMS部門で、フリーダムに投票してしまつたので、つい。」

そんなわけでこの番組は、そろそろ新しいなのはアプリゲームが欲しいよね、次元

世界最大の信者数を誇る聖王教会の提供で送りしまーす——」

「それでヴィヴィオさん、今回のお題なのですが……?」

「あ、はい。それがですね、以前わたしとアインハルトさんが飛行魔法を使えるかどうかについて、考察したことがあつたじゃないですか?」

「ああ、ありましたね、そんなことも」

「はい。あのときわたしについては結論が出たんですが、アインハルトさんが飛べる理由についてはちよつとアバウトすぎたかなと。」

「そんなわけで、今回は改めてアインハルトさんが飛べる理由を、アインハルトさん本人をお呼びして検証してみようじゃないか——という企画趣旨なんですよ」

「なるほど。私が飛べる理由、ですか……。例えば、私がヴィヴィオさんに出会う前から頑張っていた——とかじゃダメなんでしょうか?」

「ん、アインハルトさんが色々努力してたことについては、わたしも異論はないんですが、謎のバイザーをつけたり、ストライクアーツの実力者に襲撃を繰り返したり……」

「……そういえば、ヴィヴィオさんを襲撃したことはありませんでしたよね?」

「いえ、結構です。

——と、まあ、それは冗談として、アインハルトさんの部屋にあるトレーニングマシンだけじゃ、流石に飛行魔法のトレーニングまではカバーできないかなーと」

「確かに、筋力トレーニングがメインでしたから。……では、こんなのはいかがでしょう？」

実は私には、ヴィヴィオさんのお母様みたいな、抜群の飛行センスがありました、とか」

「それはうらやましい！」

でも、それを証明する手立てはありませんしね。原作にもそういう描写はありませんし」

「ですね」

「けれど、アインハルトさんは『Viivid』1巻でこんなことを言ってますよね？」

『霸王の血は歴史の中で薄れていますが、時折その血が色濃く蘇る事があります。』

碧銀の髪やこの色彩の虹彩異色、霸王の身体資質と霸王流、それらと一緒に少しの記憶もこの体は受け継いでいます』

と」

「ええ、ノーヴェさんにお話ししました」

「ふっふっふ、言質は取りましたよ。

つまりです、霸王イングヴァルトが空戦できたことを証明できれば、逆に、霸王の身体資質を継いでいるアインハルトさんも「飛べる」——ということなんですよ!」

「なるほど、そうきましたか。

そうですね。確かに、クラウスが空戦できたことを証明できれば、私も飛行魔法を使える。

よつて、ヴィヴィオさんと一緒に、過去の海鳴市で、なのはさんやフェイトさんたちと空中で戦えた理由にもなるでしょう」

「はい!」

そんなわけで視聴者のみなさん、まずは参考資料①として、『魔法少女リリカルなのは V i d』11巻をご用意ください。

過去編の辺りです。

まず、最初の『Memory;53』では、クラウス陛下とオリヴィエが近隣平定任務と一緒に戦に出かけた——ということ、そろつて馬に乗っているシーンを見ることができます。

あ、馬といえば今期やつてる『ウマ娘』というアニメが面白いです」

「ヴィヴィオさん……」

「おっと、閑話休題でしたね。」

次の『Memory; 54』では、火を放たれた魔女の森に、オリヴィエが馬に乗って駆けつけるシーンが見られます。

緊急事態ですし、飛んだ方が早く到着する。それでも馬に乗っていたということは、オリヴィエが飛行魔法を使えなかった——陸戦魔導師だった証ですね」

「ですが……クラウスが馬に乗っているシーンはありませんよね？」
「はい。」

魔女の森で、クラウス陛下が単独で敵兵の前に回りこんで撃退していることから、ひよっとするとこの時点ですでに、飛行魔法をマスターしている可能性もあります。

しかし、実際に飛んでいるシーンはありません。

ここで飛べると断定できれば、これ以上の検証は必要ないんですが……」

「これだけでクラウスが飛べると断定するのは、無理がありますね」

「はい。なので、ここではまだ飛べない。飛べたとしても、空戦できるほどの技術はなかったと考えておこうと思います」

「賢明です」

「最後に『Memory; 55』の、オリヴィエがゆりかごに乗ったあと、クラウス陛下が兵士たちと馬に乗って行軍しているシーンがあります。」

が、こちらは並足なので、単純に長距離の移動の際、兵士たちに合わせて馬に乗っているともとれるので、やはり「飛べる」「飛べない」は保留です。

以上のことから、ViViD本編で、霸王イングヴァルトが飛行魔法を使うシーンはない。けれど、オリヴィエと違い、緊急時に馬に乗っていないことから、飛行魔法が使える可能性もある——ということが言えるのです。

アインハルトさん、ここまでで何か問題はありますか？」
「いえ、特に問題はありません。」

ですが……これだけでは、むしろクラウドも、オリヴィエと同じ陸戦魔導師だったと考えた方が無難なのでは？」

「やっぱりそう見えちゃいますか。」

なので、次にコチラをご覧ください」

「……えっと、それは？」

「ロケット・ペアア——ンチッ！」

——ということで、コロナから借りてきた超合金のマジ●ガーZのフィギュアです」

「マジ●ガー……」

「ええ、視聴者のみなさんにはスパロボでおなじみ。」

1月に映画も公開されたばかりですが、このロボット、打たれ強く、パワーもあり、多

才な武器や技を持っています。

間違いなく、至高のロボットの一体です。

ちよつと、クラウス陛下やアインハルトさんに似てますよね」

「そう言われると、そんな気も……」

「ちなみに、コロナのゴライアスが『Vivid』3巻で使っていたロケット・パンチの元ネタが、マジ●ガーZのロケットパンチだということは、みなさんならご存知だと思います。

ところがどっこい！

実は、3巻のロケット・パンチ……コロナにしては調子に乗りすぎましたね。飛ばした拳に回転をかけてしまったことから、おそらく各所からツツコミが入ったのでしよう。

『それ、ロケットパンチじゃなくて、グレートマジ●ガーの“ドリルプレッシャーパンチ”だよね!』

と」

「えー……と……」

「なので、6巻でアインハルトさんと戦ったとき、どう見ても同じ技なんですけど、ロケット・パンチではなく“ドリルクラッシャーパンチ”になっていました。

「プレッシャー」にしちやうと色々と問題があるので若干変えてきていますが、間違
いなくグレートマジ●ガーが元ネタです。

「どうでしょうか、アインハルトさん？」

「……ええ、そんなこともありましたね……で、クラウドの飛行魔法の件なんです……
？」

「おっと、そうでした。」

「このマジ●ガーZ。OPで『空にそびえるくろがねの城』と歌われている割に、物
語の前半では空を飛ぶことができませんでした。」

「移動タイプが陸の、完全な陸戦型ロボットだったわけですね。」

「そのため、物語が進むにつれて現れた、敵の空飛ぶ機械獣に苦戦するようになります」
「なるほど。」

「つまり、空を飛ぶネウロイに対して、陸戦ウィッチでは、どうしても航空ウィッチの
ように戦えない——というのと同じことですね？」

「ええ、間違つてはいないんですが……間違つてはいないんですが……アインハルトさ
んがだんだん何かに染まっていつてる気がして、イヤアアッ！」

「コロナ（中の人）のせいなの、くうう、あつちで主人公だったからって」

「いえいえ、ヴィヴィオさん（中の人）も出てましたよね？ 劇場版で拝見しましたよ」

「あああ、バレてる。」

ちなみに、ルツキーニとスバルさん&ノーヴェが未だに中の人が同一人物だとは思えません。

声優さんスゴおっつー!

「おつと、ヴィヴィオさん、ここでメールが届きました。

ミッド在住の『今夜はシチューだよ』さんからです。

『少し、頭冷やそうか……』

あ。

……だ、そうですけど」

「OH。」

スママセン。興奮しすぎました。

えつと、どこまで話しましたっけ……ああ、そうそう、マジ●ガーZが空飛ぶ機械獣に苦戦する——って話でしたね。

そこで登場したのが、この支援メカ——ジェットスクランダーです」

「紅の翼ですか」

「はい。いわゆる飛行ユニットなのですが、マジ●ガーZとドッキングすることで空戦可能になり、今度こそマジ●ガーZは無敵のスーパーロボットになったわけです」

「えつと……つまり、ヴィヴィオさんが言ったことは、クラウドも空戦魔導師と戦うために、飛行魔法をマスターしたのではないか——ということでしょうか?」

「はい、その通りですつ!」

だって、古代ベルカには、シグナムさんやヴィータさんといった空戦魔導師——正確にはベルカの騎士ですが——が、存在したんですよ。

当然、他にもヴォルケンリッターに匹敵するような、強い空戦魔導師がいたはずですが「確かに、存在したでしょうね」

「アインハルトさん、飛行魔法や空戦技術なしで、シグナムさんやヴィータさんに勝てますか?」

「それは……流石に無理かと……」

「ええ、だけど、そんな古代ベルカの戦場において、クラウド陛下は歴史に名を残すほどの武勇を示しました。」

あのヴィクターさんも、3巻で、

『旧ベルカの最強覇者は、聖王でも霸王でもなく雷帝ダールグリユン。その現実を、雷帝の血を（ほんの少しだけ）引くこのわたくし! ヴィクトリア・ダールグリユンが叩き込んでさしあげますわ!』

と、厨二病っぽい台詞を、全力全開で口にしていました。

つまりクラウス陛下は、ベルカ戦乱期『ベルカ最強は、聖王か霸王かつ!』くらいまでの強さを誇っていたというわけで——」

「……あの、ヴィヴィオさん、またメールが」

「はい?」

「ミッド南部に在住の『執事は武内P』さんからです。

『これからノーヴェ会長に、ヴィヴィとの試合を申し込もうと思いますが——よろしいですね?』」

「だそそうです」

「あばばば……」

「芥川龍之介ですか?」

「いえ、すみません、取り乱しました。

ヴィク……こほん、オカンさん、ベルカ最強は聖王というのが通説なので、先に中ボスの霸王を倒したら、いつでも受けて立ちますよっ!」

「それ私ですよねええ!! まあ、私はいつでも戦う準備はできていますが」

「タイトルマッチですね」

「ヴィクターさん、お待ちしています」

「——と、まあ、話が脱線しましたが、古代ベルカの戦乱期、諸王時代において、

聖王がゆりかごに乗っている以上、間違ひなく霸王イングヴァルトは地上に残る最強の魔導師の1人でした。

そして、ベルカ平定間近の時期に戦場で命を落とすまで、彼は勝ち続けました。

時には敗北することもありましたが、生きてさえいれば、再戦時に必ず相手を打ち破っていたのでしよう。

そんな偉業、飛行魔法を使わずに達成できたと思いますか？」

「それは……」

「ほぼ、不可能でしょう。」

なぜなら、ドラマCD『Strikers サウンドステージX』のジャケットに載っている『History of Belka』でも、

『たった一人の優れた王が強大な質量を操る兵器となり、戦場では万騎を屠りうる時代』と書かれているからです。

ヴォルケンリッターにせよ、ロード・ディアーチエにせよ、ユーリ・エーベルヴァインにせよ、古代ベルカの実力者は、みな飛んでいるんです。

そんな彼らを相手に、勝利し続けるのは、陸戦魔導師では不可能なはずですよ！」

「……」

「アインハルトさんも2巻で言っていましたよね？」

『皮肉な話ですが、彼女を失って彼は強くなりました。全てをなげうって武の道に打ち込み、一騎当千の力を手に入れて——』

と。

才能があつたかどうかはわかりません。

ですが、クラウド陛下は手に入れたんですよ、ひたすら武の道に打ち込むことで、空を飛ぶ力を、霸王イングヴァルトのジエツトスクランダーを！」

「……確かに、戦乱の古代ベルカで勝ち続けるためには、飛行魔法は必要だったと思います。」

クラウドが空を飛べたことは疑いようがない。

ですが、ヴィヴィオさんの考察には1つ、大きな穴があります」

「え？」

「それは、仲間の存在です。」

ヴィヴィオさんが教えてくれたことですよ。

クラウドがどんなに強くても、1人で戦争はできません。

つまり、敵の空戦魔導師には、仲間うちで最も優れた空戦魔導師があたり、クラウドはあくまで陸戦をメインにした魔導師として、地上の敵のみを相手にしていた——とも考えることができます」

「そうきちやいましたか……」

「そうきちやいました」

「仕方ありませんね、とっておきです」

「まだ、何かあつたんですか?」

「はい。アインハルトさん、これを一部とはいえクラウド陛下の記憶を持っているアインハルトさんに伝えるのもどうかと思つたんですが……クラウド陛下には、空を飛ばなくちゃいけない大事な理由があつたんですよ」

「空戦魔導師と戦うこと以外に、ですか?」

「はい。」

それは——クラウド・G・S・イングヴァルトが、空を飛ぶ「ゆりかご」に、オリヴェイエを迎えに行くという理由です」

「あ……」

「ただ、すぐに向かったところで、オリヴェイエはゆりかごを出ようとはしないでしよう。彼女の目的である戦乱を終わらせること。」

まずはそれが第一です。

しかし、ゆりかごの聖王は、わずか数年でその命を燃やし尽くすそうです。

だから、クラウド陛下はベルカ平定を急いだはずです。

その焦りこそが、平定間近の彼の死につながったのかもしれないね。

また、ゆりかごの聖王は、玉座を守る生きた兵器として自我を奪われます。

このことは、城の書庫に文献があつたので——リッドさんから聞かされたでしょう——当然、知っていたはずです。

8巻の『Memory; 42』でも、クラウス陛下自身が危惧していました。

つまり、仮に戦争を終えたとしても、オリヴィエがゆりかごを降りない可能性も大いにありました。文献が正しいとすれば、数年で彼女は死に、そのままゆりかごは眠りにつく。

だから、そうなる前にクラウス陛下は、場合によっては、ゆりかごと一戦交えるつもりだったのかもしれませんが。

ゆりかご内部に侵入して、オリヴィエを救い出す。

なのはママがわたしにやってくれたのと同じようなことを、かつてクラウス陛下も考えていたのかもしれませんが。

立場的なことを考えれば、王位を譲る、あるいは国を出奔したあと、単独でゆりかごを襲撃する」

「いくらなんでもそこまでは……」

「いえ、やったはずですよ。だって、わたしと出会う前のアインハルトさんだって、同じよ

うなことをやったじゃないですか」

「あ……」

「アインハルトさんとよく似た、思い詰めたクラウス陛下なら、必ず実行していたはずですよ。」

だから、霸王イングヴァルトは飛ばなくちやいけなかつたんです。空を飛ぶ才能があるうとなかるうと、空を目指す。

誰よりも強い、ゆりかごに対抗できる空戦魔導師になつて——」

「オリヴィエを救うため……ですか。そんなことを言われたら、私には何も言えないじゃないですか。」

ただ……9巻でもお話したように、クラウスはゆりかごの王になどならなくても、戦乱を終わらせる方法はあるはずだ——と考えていました。

逆に言えば、戦乱さえ終われば、オリヴィエがゆりかごの王にならなくていい——とも考えていたはずですよ。」

私から言えるのは、これくらいでしょうか」

「ありがとうございます。」

そんなわけで、今回の結論です。

霸王クラウス・G・S・イングヴァルトが、聖王のゆりかごの鍵となつた聖王女オリ

ヴィエを救い出すためには、一日でも早くベルカの戦乱を終わらせる必要があります。た。

しかし、たった一人の優れた王が、戦場では万騎を屠り、また、禁忌兵器が使用され、数多の騎士たちが飛び交い剣を合わせる時代。

そして、最終目標である聖王のゆりかご。

それら全てを打ち倒し、ベルカの天地に覇をもつて和を成そうとしたら、クラウド陛下に『空を飛ぶ以外の選択肢』は、残されていませんでした。

空を自在に駆け巡り、ヴォルケンリッター級の敵相手に、一騎当千の武勇を示し続けた結果、彼は後世に名を残すほど偉大な霸王——最強の空戦魔導師に成長しました。

そんな、霸王イングヴァルトの記憶や身体資質を受け継いだインハルトさんだからこそ飛べる。

いいえ——うちのアインハルトさんが飛べないわけがないっつ!!

——みたいな感じでどうでしょう?」

「……いや、その、なんででしょう。そこまでクラウドを高く評価していただけるというのも恥ずかしいですが……そうですね、ゲームとはいえ『GOD』でも飛んでいましたし、私は飛べる。」

その結論で構わないと思いますよ?」

「そっか、よかった〜。

これで、わたしとアインハルトさんが2人とも飛行魔法が使える、なおかつ空戦できるだけの技術を持っているということがわかっていただけたと思います。

そんなわけで、本日の考察はこれでおしまいっ！

視聴者のみなさん、長い時間お付き合いいただきありがとうございます。ありがとうございました。

ここまでの相手は現代の聖王女——高町ヴィヴィオと」

「霸王流——アインハルト・ストラトスでした」

「ではまた次回お会いしましょう!!」



クリスが撮影を終えると、ようやくわたしとアインハルトさんは一息ついた。

「ふう〜、お疲れ様でしたー、アインハルトさん」

「いえいえ」

「ところでアインハルトさん、1つ大きな問題がありました……」

「え、今更ですか？」

「はい、そこ、ミッド市街地での飛行は禁止されています。2人とも勝手に飛んだらダメだよー」

いきなりストップをかけられた。

「つて、フェイトママっ!? どうしてこんなところに?」

金色の執務官さんの手には、黄色い旗が握られていた。

「あー、もしかして旗当番?」

色的には似合っている。

けれど、あのシステムってミッドにもあったのか。

「2人には違反切符を切らないとね」

「ナニソレええ!?!」

「もう、普段から調子に乗って飛行魔法を使わないようにって言うてるでしょ。」

あの「なのは」だって、ビューンと飛びたいのを我慢して、自動車で職場に通ってるんだから」

「そ、そうでした……」

帰りに車で、ヴィータさんを八神家に送ったりなんかしちゃってるんです……。

「はあ、だから私もヴィヴィオさんも、普段は“飛べるけど飛ばない”——ということな
んですね」

覇王イングヴァルトを殺したのは誰だ!?

ある日の放課後のこと。

「なのはママの名にかけて！」

ちよつと違う……。

「オリヴィエの名にかけて！」

これもちよつと違う……。

「あの、ヴィヴィオさん、一体なにをされているのでしょうか？」

校門で待ち合わせていた碧銀の髪の先輩がやってくる。

「あー、アインハルトさん。今回は『高町ヴィヴィオの事件簿』ということで……」

「そんなタイトルだったでしようか？」

「真実はいつも1つか2つ！」

「ええ、毎回そんな感じですけど……」

「ヴィヴィつと閃いた！」

「……それは？」

「名探偵ピカ●ユウの決め台詞『ピカツとひらめいた』をまねてみました！」

「ピカ●ユウ？」

「あく、なんだろう、こうフェイトママが縦にぎゅーつと縮んで、お尻は……まあ、今のままでいいかな、おつきいし、それで獣人化したような……？」

「はあ……それは新手的UMAですね」

「ええ、UMRで宴を……じゃなくて、ポ●モンバトル……でもなくて、今回のお題は『ラストバトル』です」

「ビームライフルを真上に突き出したような……？」

「惜しい！」

それは『ラストシューティング』ですっ！

というわけで全ガンダム大投票、作品部門1位、ファーストガンダムおめでとうございませすー！」

「おめでとうございませすー！」

「キャラクター部門1位のオルガは意外だったんですが、鉄華団全員でオルガを推した——みたいな話で、そういうことならしょうがないというか、ちよっぴり納得してしましました。

そんなわけでラストバトル——まあ、単純に最後の戦いのことなんです……あの、

クラウドが最後に戦った戦場ってどんな様子だったか、アインハルトさんは覚えてるんですか?」

「最後に戦った戦場というと、クラウドが亡くなったときのことでしょうか?」

「はい、そうです」

「そうですね、最も印象深い記憶の一つであるはずなのですが、その辺りは霞がかかっているといえますか、おそらく死の記憶というのは、あまりいいものではないですから、潜在的に避けているのかもしれませんがね」

「つまり、よく覚えていないと?」

「はい」

「一騎打ちの最中に矢を射かけられて、首をスパーンとかでもなく?」

「ええ」

「そうですね……。実は、先日アインハルトさんが飛べるかどうか——みたいな話をしたじゃないですか」

「ええ、しましたね」

「そのときに調べていて気づいたんですが……」

ベルカ平定周辺の覇王イングヴァルトを討ち取ったのは、ひよつとしたら、ヴォルケンリッターだったんじゃないかって……」

古代ベルカで、そんな覇王イングヴァルトの進軍を止めるには、それこそカシュー陛下みたくに罫を仕掛けるか——。

あー、もちろんカシュー陛下も最強に近いんですが、そのカシュー陛下をもつてしても、必ず勝つためには準備しなくてはならない。

あるいは、『A's』のナハトヴァール戦みたいに、一騎当千のエースたちで取り囲むしかない——と思うんですよね」

「ええ、まあ、何となくわかります」

「ですが……ベルカ平定間近という時期。聖王連合に敵対する国もあとわずかだったのでしよう。」

「そこまで追いこまれたということは、そもそも聖王連合に対抗できるだけの魔導師も、ほとんど残っていないかったです。」

『History of Belka』にも、

『「古代ベルカ式魔法」の伝承者やその武装も、この時期にほぼ絶滅している』

と書いてありました。ああ、“この時期”というのは『聖王統一戦争』のことです。

そんな中で、覇王イングヴァルトほどの大物を討ち取るには——」

「やはり、罫を張ったのでは?」

「……それを言ったら元も子もないので、シグナムさん、ヴィータさん、シャマル先生、

「いやいやいや、そんなシーン見たことありませんよおお!？」

「ええ、そうですね。」

とりあえず、まずはそもそもの疑念の発端となる3巻を見てみましょうか？

合宿中に、アインハルトさん、デバイスの件でルールー……」

「どうかなさいましたか？」

「すみません。なんでもないです。」

アインハルトさん、ルーテシアと一緒に八神家のみなさんと通信で話していたじゃないですか」

「はい、確かにありましたね、そんなシーンが」

「このとき、通信に出たのは、はやてさん、リインさん、アギトの3人。」

ところが、ページをめくっていけばわかるんですが、あのとき——同じ部屋なのか、隣の部屋なのかまでは判然としませんが——シグナムさん、ヴィータさん、シャマル先生もそばにいたんですよ。」

ちなみにザフィーラは、砂浜でミウラさんを指導中でした」

「えつと、それが何か問題でも？」

「元々『デバイスの件』で連絡することは伝えてあつたようです。」

当時の古代ベルカを生き抜いた騎士として、覇王イングヴァルト直系の子孫と会話す

るチャンスですよ？ 気にならないはずがないんです」

「それは、あくまでデバイスの件ということで、みなさん遠慮なさっていただけでは……？ それだけで疑うのはちよつと無理があると思うのですが」

「いえいえ、シグナムさんやヴィータさんはしょうがないにせよ、ほら、シヤマル先生つて近所のおばちゃんや親戚のおばさんみたいな感じなんで、絶対顔を出しに——」

「あの、ヴィヴィオさん。胸から手が突き出しているんですが……」

「ひいひい、シヤ、シヤマル先生はいつまでも若くてお綺麗で、みんなのお姉さんつて感じですよねっ！ わたしの憧れです！」

「OK。もう大丈夫。手は消えました」

「ふう、危ない、危ない……」

流石は北斗や南斗、元斗のない修羅の国ベルカにおいて最強と名高い〃孟古流妖禽掌（もうこりゆうようきんしよう）〃の使い手ですね。群将クラスです」

「ええ、『Reflection』を見たときも、シヤマル先生にだけは勝てないと思いました……」

あ、でも確かに、この技を使えば、いくら全盛期のクラウドでも抗えないかもしれませんね」

「あはは、まあどうやって勝利したのかはおいといて——」

「アインハルトさん、次に4巻を見てもらえますか？」

「あ、はい」

「ティオ——アインハルトさんのデバイス、アステイオンを受け取りに、八神家を訪れたシーンなんですが……」

「えっと、何かおかしなところがあつたでしょうか？ みなさんにこやかに接してくれたと思うのですが……」

「いやいや、だつておかしいじゃないですか！

合宿を終えてから2週間後。

「あの日、八神家にいたのは、はやてさん、リンさん、アギトの3人だけだつたんですよ!？」

「いえ、それはデバイス制作の依頼を受けたのがお三方だつたわけで……」

「古代ベルカで、クラウス陛下と戦つた可能性のあるヴォルケンリッターの4人だけが、あの場に姿を見せなかつたんですよ?」

「それは、たまたまみなさんお仕事だつたとか」

「主であるはやてさんのお休みに、誰一人として合わせなかつた?」

「たまには、そういう日もありますよ」

「……そうですね。みなさんお忙しい方たちだから偶然そういう日があつたとしてもお

かしくはありませんよね。

でもですね、アインハルトさん、聞いてください。

シグナムさん、ヴィータさん、シャマル先生はまだわかるんです。

でも、ザフィーラまでいないのはおかしいんですよっ！

ザフィーラは管理局内で役職を持つていないんです。機動六課時代にも、部隊守護、要人警護を主な任務にしていたぐらいですから。

つまり、平時の『Vivid』時代のザフィーラは、管理局へは行かず、基本、八神家道場で子供たちの安全を守りながら、ストライクアーツを教えるのがお仕事だったんですよー！

「では、3巻のときのようにな、砂浜でミウラさんを指導なさっていたとか……？」

「いえいえ、アインハルトさん、あの日、ミウラさんが一人で練習していたのを見てましたよね？」

「そ、そういえば、チンクさんがドーナツ屋がどーとかおっしやっていたので忘れていましたが、確かに砂浜で練習中のミウラさんをお見かけしたんです！」

「ザフィーラはいましたか？」

「いえ、お一人でした……」

「そうなんです。」

理由はさっぱりわかりませんが、ヴォルケンリッターの4人は、どういうわけか、アインハルトさんに会うことを、極力避けているんですよおお!」

「きや、キャラが多くなりすぎるからとか……藤真先生が描くの大変ですし……」

「そういうメタ発言禁止いい!」

「えええ!?! あ、そう、そうですよ、ヴィヴィオさん! いくら古代ベルカ出身といえど、ヴォルケンリッターのみなさんだつて常に起動していたわけじゃないんですよね?」

「だつたら、クラウスの存在もよく知らないのです、私に対しても、まったく興味がないとかで……」

「それが、ですね……少なくとも覇王イングヴァルトについて知っていることは確かなんです」

「え?」

「同じく4巻の、インターミドル選考会するとき、ザフィーラがアインハルトさんを見て『覇王の子は落ち着いてるじやないか』と口にしてるんです」

「私聞いてないんですけどおお!?!」

「それだけじゃありません。あの会場には、シグナムさん、ヴィータさん、シャマル先生、みんないたんですが……」

「そ、そういえば、私、誰とも口を聞いてないような……」

「はい。あの霸王イングヴァルトの記憶継承者がいるのに完全スルー。そして、ちよつと飛んじやうんですが9巻です」

「えええ、まだあるんですかつ!？」

「長かつたインターミドル編が終わり、無限書庫編が始まる前、はやてさんがホテルの最上階に、みんなを集めたときです。」

『かつて戦乱の時代を一緒に生きたベルカの末裔が、今この時代にまた集まつてる』

『同じ、真正古代ベルカ継承者同士——行きたい場所や探したい資料があるなら、私も全力で協力するよ』

この台詞を聞いて、アインハルトさんは「アレ？」と思いませんでしたか？」

「……あ、あのときはエレミアの件で頭がいっぱいだったので気づきませんでした。言われてみればヴォルケンリッターのみなさんだけいません!」

「はい、そうなんです。もし、この集まりを行うなら、実際に当時の古代ベルカを生き抜いたヴォルケンリッターの、誰か1人でいいから、代表として参加するべきなんですよ! だって、彼らの生の記憶が役立つことだってあるはずだからです!」

「あわわ……」

「つまり、ヴォルケンリッターの4人が、こうまでしてアインハルトさんとの接触を避けたい——ということは、古代ベルカの霸王に対して、何か思う所があつたのではない

か？

例えば、ベルカ平定間近だった覇王イングヴァルトの命を奪ったのは、ヴォルケンリッターだった——とか」

「そんなことは……」

「ほら、アインハルトさんって、ジークさんと戦ったときや、クロに触れたときとか、何かキツカケがあると、普段忘れていたクラウス陛下の記憶を思い出すことがあったじゃないですか」

「ええ……」

「ヴォルケンリッターの4人は、それを懸念して、なるべく接触を避けてた可能性もあるんじゃないかなって……」

「いや、ですけど……」

「高町ヴィヴィオはここに宣言します。」

ベルカ平定間近だった覇王イングヴァルトの命を奪ったのは、一国を御することさえ可能と言われていた、旧ベルカにおいても遺失技術扱いの自立可動プログラム——ヴォルケンリッターの4騎と、闇の書の意志とその主。

ただし、その後間もなくベルカが統一されたことから、当時の闇の書のマスターと覇王イングヴァルトは相打ち、もしくははこの戦いにおいて完全に魔力を集めたことで闇の

書は暴走、周囲を破壊したのち次の主を求めて転移した」

「いやいやいや」

「よし、これからいつちよ八神家にカチコミかけますかっ!」

「かけませんよっ!?!」

「じゃ……」

わたしはアインハルトさんの手をつかむと、ナカジマジムへ足早に向かう。

早速試合をセッティング。

オレンジ髪の蹴り技少女が目を点にしている。

「え、どうしてボクとアインハルトさんが戦わなくちゃいけないんですかああ!」

「ミウラさんって、もはや八神家の一員といっても過言ではないですよね?」

「え? え、ええ、まあ……ちよつと気恥ずかしいですけど……」

「つまり、一番年若い、新規のヴォルケンリッターの一員といっても過言ではないですよ?」

「えへへ、そ、そこまで言われるのは光栄なんですが……」

「さあ、アインハルトさん。クラウス陛下の敵討ちですよ!」

「なんですかああ!?!」

「……そうですね。ミウラさん、あなたに恨みはありませんが、この勝負、受けていただ

けど、ヴィータさんこんなことを言ってるんだ。

『ところで近頃、たまに昔の事を夢に見る事がある。いろんな昔の夢だ。戦乱の時代、夜天の書がまだ闇の書なんて呼ばれていた時代。人々も兵士たちも、天を覆う空も人の心も、暗い雲に覆われていた時代——』

そのシーンで、ヴィータさんの見ている思い出の景色は、クラウス陛下だったり、オリヴィエだったり、わたしたちが見たことのない『サウンドステージX』ですら登場しなかった、1000年前、冥王だったころのイクスの姿だったりするんだよ」

「？」

「えっと、ヴィヴィオどうしたの？」

「うん、だからね。」

わたしには真実なんてわからないけど、本当のことを思い出したとき、もうインハルトさんが心を乱さないようにすることも、わたしの役目かなって——そう思うんだよ」

魔王と狸のベルベットルーム

私——高町なのはが訪れたのは本局の海上警備部。

目的は、幼なじみの1人——八神はやてに会うためだった。

建物に入ると、受付の女性に声をかける。

「航空戦技教導隊の高町一尉です。八神司令と面会の約束をしていたんですが……」

「はい、うかがっております。八神司令は地下の留置場でお待ちしているそうですよ」

「留置場……?」

はやてちゃんはどうしてそんなところで?

私はわずかな不安を感じながら、エレベーターで地下へ向かった。

1人、留置場の奥へと進む。

そこで私が見たモノとは——

薄暗い部屋に、会議室から運んできたような長机とパイプ椅子。

椅子には、鼻がちつとも長くないけど、ゲンドウポーズのように両手を口元で組んだ、シヨートヘアの女性が座っていた。

「ようこそ、私のベルベットルームへ……」

よく見ると、入口の左右にも眼帯をつけた銀髪と赤髪の少女がいた。

「現実のなのはさんは、今は睡眠中（ウソ）なのです」

「主はやての御前だ、姿勢を正せ！」

——パタン。

私は見なかったことにして留置場の扉をそつと閉め直した。

「待って、待って、なのはちゃん！」

私は再び扉を開いた。

「いや、だからはやてちゃん、ペルソナ5ごっこはやめようって……」

「今アニメやってるしなー。一応やつとかんとあかんかなーと」

「それでラインとアギトにまで眼帯つけさせて……看守のカロリーヌとジュステイーヌだっけ？」

「そうそう」

「はやてちゃんがどうしてもというので……」

「眼帯はチンクから借りてきたんだ」

「あゝ」

納得。

そこでリインがハツと顔を上げた。

「すみません、はやてちゃん、なのはさん。私たちはそろそろ仕事に戻らないと……」

「じゃーな、ヴィヴィオによろしく!」

融合騎の2人は足早に留置場を去っていった。

残されたのは、私とはやてちゃんの2人。

「はあ……はやてちゃん、あんまりやりすぎるとフェイトちゃんが色っぽい格好した怪盗になって乗りこんでくるよ〜?」

「あはは、それはそれで見てみたい気もするな」

とはいえフェイトちゃん、はやてちゃんに会うことを話したら忙しそうにしてたので、今日はもう来ないだろう。

執務官さんは大変なのだ。

そんなわけで、本日はN&H——後ろから砲撃コンビでお送りしたいと思います。

「——というわけではやてちゃん、連絡しといた件なだけど？」

「あー、ヴィヴィオが言ってた、うちの子たち——ヴォルケンリッターが『霸王イングヴァルト殺害の犯人』だっていう話しやろ？」

「うん」

「まあ、ヴィータたちはあんま昔の話とか自分からはしてくれへんからなあ」

「だねー。『闇の書事件』のころからそんな感じだったし」

「そやねー。ただ、ヴィヴィオの説も状況証拠ばっかで、決定打には欠けとる。あれではちよつと納得できへんやろ？」

「あ、やつぱり？」

「うん。まあ、可能性の1つとしては面白いけどな。私としてはうちの子たちより、もつと別に犯人がおるんやないかなーと」

「ほうー。例えば……意外なところで『雷帝』とか？」

「いやー、それはないやろ。もし雷帝が霸王に勝利しとつたら、

『旧ベルカの最強覇者は聖王でも霸王でもなく雷帝ダールグリユン』

なんて、わざわざヴィクターが改めて言うはずないしなー。

というか、犯人候補の1人とは、なのはちゃんも会ったことあるんやぞ？」

「え、嘘!? 私の知り合いなの?」

「そーや」

「ん、ん、例えば、意気揚々とゆりかごに乗りこんだクラウス陛下だったけど、オリヴィエに返り討ちにあつたとかで——つまり、真犯人はヴィヴィオだったとか!」

「それなんつーバッドエンドや!」

「いやいやいや、なのはちゃんとヴィヴィオ、ついでにアインハルトも忘れとるよーやけど、ほら、王様んこのユーリ。」

「あの子とオリヴィエ、クラウスの3人は会ったことあるんやで?」

「……え?」

「やっぱ忘れとったか。まー私らにしたら10年以上前の話やしな。」

劇場アニメ版第3弾『魔法少女リリカルなのは Reflection』の元ネタ。

PSP専用ゲーム『魔法少女リリカルなのはA's PORTABLE —THE GEARs OF DESTINY—』（以下『GOD』）。

のファイナルシークエンス。

ヴィヴィオVSユーリ 戦闘開始前の会話。

ユーリ 『ゆりかごの聖王——? いや、違う……君は一体?』

ヴィヴィオ『オリヴィエを知ってるの？ オリヴィエは、わたしのご先祖様なんだ』
ユーリ 『……先祖……？ オリヴィエは、子を残さなかつたはず……』

アインハルトVSユーリ 戦闘開始前の会話

ユーリ 『あなたとは——どこかで会いましたか？ ずっと昔に……あなたに良く似た人と、会った気がします』

アインハルト 『ベルカ戦乱時代の事でしたら——きっと私の先祖です。私は、霸王イングヴァルトの末裔ですから』

ユーリ 『そうなのでしょ—違—うか—も—し—れ—ませ—ん。昔の記憶なんて、曖昧ですから』

——どや！——

「むむむ、100万パーセントってわけじゃないけど、3人は出会ってるかもしれないんだ」

「そんなヒーローアカデミアみたいに言われても困るんやけど、まー、オリヴィエに関しては直接ではないにしろ、ヴィヴィオを見ただけで“ゆりかごの聖王”と断定してるしな。ほぼ同時代に存在していたとみて間違いないやろ」

「ということとは、ユーリちゃんと3人の愉快的仲間たちが霸王イングヴァルト殺害の真犯人ってこと?」

「いやいやいや、愉快的仲間たち……は、だいたいおうとるけど、王様、シユテル、レヴィの3人に關してはようわからんで?」

「とうとう?」

「①ゲーム中に王様たちと、ヴィヴィオ&アインハルトの会話がないこと。

②そもそも、ゲームにしる、映画にしる、ユーリとマテリアルズは長いこと 夜天の書に封じられていた」わけや。ナハトヴァールの力だな。

さらに、闇の書の意志にして管制人格であるリインフォース・アインスや、ヴォルケンリッターが存在を知らなかった以上、王様たちは一度も表に出たことがない——と考える方が自然や」

「つまり、マテリアルズが聖王や霸王に会えるはずがないってこと?」

「そーや」

「だったらユーリちゃんが会ったってのは?」

「人間時代のシステムU—D。」

つまり、闇の書に囚われる前——ユーリ・エーベルヴァインという1人の人間だったころのユーリが、オリヴィエやクラウスと会っていた——と考えれば説明はつく。

記憶が曖昧なのも含めてなー」

「あー、そういうこと。ユーリちゃん、昔は人間だったって話だもんね……」

「そや。そもそも、ディアーチエのこともみんなして王様、王様、言うてるけど、ゆりかごでフルボッコにされた——とか言ったら怒られそうやけど——オリヴィエやクラウスと同じベルカ諸王時代の王様の1人だったー、とか考えれば自然やろ？」

「確かに、諸王時代っていうくらいだしね、王様いっぱいいたし、記録に残っていない王国や王族がいてもおかしくないかあ……」

「まー、その辺りに関してはハッキリしないことも多いけど、『GOD』と映画のユーリ、並行世界といえども背景や事情がまったく異なるってことはないだろうから、2018年公開予定の劇場版第4弾——『魔法少女リリカルなのは Detonation』を観れば、もっと詳しくわかるんやないかなーと」

「HUG（はぐ）っと宣伝いれてきたね〜」

「まあ一応……って、なのはちゃんもなー」

「あはは……」

最近ね、ヴィヴィオがルーテシアを「ルールー」って呼ぶ度に『うああああ』とか、よくわからない奇声を発しながら頭を抱えてるし。ぬるぬる発注しちゃうよー」

「なのはちゃんもついにプ●キュアの仲間入りかー、私の中の人はいつごろかなー……」

ふう、ま、そろそろ話を戻そか」

「だね。ユーリちゃんのことなんだけど、人間時代に会っていたと考えると、霸王イングヴァルトを殺せるとは思えないんだけど。」

犯人捜しが振り出しに戻っちゃうよ?」

「そやね。まー、ドラマチックな物語としては、かつての闇の書の主と守護騎士たち、もしくはユーリとマテリアルズが、古代ベルカの空で霸王イングヴァルトと激突!

みたいな方が面白いんやろうけどなあ……今ある情報だけでは、本当の犯人の特定なんてコ●ン君でも呼んでこない限り無理やろ」

「バーロー! そんなことで諦めてどうすんだ八神いい!」

「そやかて高町! ……って、いやいやいや」

「あはは。それで、実際のところ、はやてちゃんとしてはどう思ってるの?」

最初に言ってたよね。

犯人は別にいる。ユーリちゃんは犯人候補の1人だつて。

つまり、はやてちゃんの中では、もつと別に本命の犯人候補がいるんじゃないかなつて?」

「あー、流石はなのはちゃん、覚えとつたかー。これなあ、リリカルなのは”つぼくないから黙つとこうと思つとつたんやけど……」

「リリカルなのはっぼくない？」

「そや。ラインやアギトには聞かせたくないなーって」

「あー、それでわざわざベルベットルーム？」

「それについては内緒ということだ。」

じゃ、今から私の推理を話すよ？

何の証拠もない。あくまで私の想像、推察による霸王イングヴァルトの死の真相や――
――。

『聖王統一戦争』で一騎当千の活躍を続けるクラウス。

彼の「霸王」としての名声は日増しに高まっていく。

最初は戦場を共に駆け抜ける兵士たちとの間で。

ついで民衆の間で。

クラウスの元へは、聖王連合に所属する友好国から婚約の話が次々に舞いこんでいた。

そして、英雄としてのクラウスの名声が、聖王に比肩するほど高まったとき、聖王連合の盟主である聖王家に一つの不安が生まれた。

仮に、ベルカを平定したとする。

しかし、そのころにはすでに、国民から熱狂的な支持を得ている聖王女オリヴィエは亡くなっているだろう。

そして、民衆はオリヴィエとクラウスの関係をよく知っている。

“悲恋”というものは、いつの時代も人々を惹きつけるからだ。

民衆は次代の王に誰を選ぶだろうか？

聖王家から？

いや、オリヴィエと共にベルカに平和をもたらした、若き“霸王”を、彼女の伴侶となつたかもしれないクラウスを、新しい“ベルカの統一王”として望むかもしれない。

ゆりかご内部で生まれた中枢王家の子らを差し置いて。

もちろん、国王を選ぶのは民衆ではない。聖王連合だ。

しかし、民意というものは侮りがたく、また、クラウスをベルカの王とすることで、王家を権力の座から引きずり落とそうと目論む輩がいるかもしれない。

さらに、聖王家がゆりかごの聖王として、オリヴィエを使い捨てにしたことが知られば、怒りの矛先は聖王家に向けられ、民衆は全てクラウス側につくだろう。

——なのはちゃん、ここまででもうわかったやろ？」

「うん……」

「今回の結論。」

ベルカの歴史に名を残した武勇の人にして初代霸王——クラウス・G・S・イングヴァルトは、ベルカ平定間近の時期に戦場で命を落としたとされている。

しかし、古代ベルカ式魔法の使い手や武装が、この戦争でほとんど失われたことが事実であれば、すでに戦場で霸王を討ち取る人は不可能に近い。

聖王連合と敵対国の戦力差が大きすぎるからや。

例え奇襲をかけたとしても、霸王は一騎で、万騎を相手にできる。

しばらく持ちこたえれば、いくらでも強力な援軍が駆けつける。

勝ち目はない。

よって、私——八神はやて海上司令が推察するんは、次のような結末や。

『霸王クラウス・G・S・イングヴァルトは、類まれなる武勇をいかし、ベルカ平定間近まで活躍を続けた。しかし、彼の名声を恐れた聖王家の手によって、正当とは言い難い方法で始末された』

戦争の勝者であるはずの聖王家が、統一戦争後すぐに滅びたことから、ベルカをまとめるべき聖王連合のトップはずでに腐りきったんやろな。

民衆の一斉蜂起が起きたのか、各国の反乱が起きたのか、どちらにせよ、ゆりかごを動かせない、霸王もない聖王家では、もはや止めることはできへんかった。

結果的に、オリヴィエやクラウスの奮戦もむなしく、もう二度とベルカが統一されることはなく、ただ、最後の聖王として戦乱を集結に導いたオリヴィエを祀る聖王教会だけが今日まで残っている。

——つちゅーわけや」

「それはまた……」

「実は、証拠もあつてな。

『Vi Vid』の2巻で、

ルーテシア『クラウスとオリヴィエの関係は歴史研究でも諸説あるんだよね』

コロナ『そもそも、生きた時代が違うって説が主だよね』

“生きた時代が違うって説が主流”——なんて、どこをどうやったらそんな話に変わるんやろな。

600年くらい前の話やから、日本の歴史で例えれば戦国時代に浅井長政とお市の方が、実は生きた時代が違いました——言うてるようなもんやで？」

「聖王家が情報統制したってこと？」

「たぶんな。自分ら聖王家を守るため、オリヴィエとクラウスに関する情報を、意図的に操作、改ざんした可能性が高い。酷い話や」

「それであんなに有名で記録も残ってるのに、諸説ありなんてことになってるんだ……」

「胡散臭い話やろ？」

「一体どんな風にしてクラウスをハメたんやろな」

「ねえ、ひよつとしてクラウス陛下以外も？」

「たぶんな。」

「ほら、さつきも話したけど『History of Belka』の、

『「古代ベルカ式魔法」の伝承者やその武装も、この時期にほぼ絶滅している』
ってあるやろ？」

「うん」

「戦争で“敵対”した伝承者や武装が失われたんはわかる。

でも、“味方”した伝承者や武装まで失われたんはおかしい。

生き残ってるはずや」

「そっか、クラウス陛下のように、ベルカ平定に尽力した古代ベルカ式魔法の伝承者がこごとく始末されたとするれば、辻褄が合うんだ……」

「そや。聖王家にとつて危険な相手はこごとく始末された。あるいは、反乱の最中に亡くなった。聖王家もろともな」

「全滅エンド……何だかハムレットみたいだねえ……」

「ヴィヴィオなら『富野監督みたい！』って言うんやろうけど」

「あゝ、言いそう」

「でも、こんな血なまぐさい話、ヴィヴィオやアインハルトだけじゃない、ミウラを含めた子供たちには聞かせたくない。

みんな明るくていい子ばかりやから、AにはAに向いた話、BにはBに相應しい話があるからな」

「そうだね、オーベルシュタインちゃん」

「あー、実際、銀英伝のオーベルシュタインみたいに、クラウス陛下の参謀役として、影の部分を任せられる人物がいれば、歴史は変わったかもしれないな」と

「ベルカの歴史がまた1ページ、だね……」

話を終え、私とはやてちゃんが長机とパイプ椅子を片づけようとしていると、カンカン——と留置場を駆けるヒール音が聞こえてきた。

「はあ、はあ……なのは！ はやて！ お待たせっ！」

「フエイトちゃん来たんだ！ ……って、何で猫の仮面にツインテール？」

「ピッタリした赤いボディスーツまで着て……」

「ほら、ペルソナ5って聞いて！ パンサー、パンサー、高巻杏」

「あー」

とりあえず激写する。

——パシヤ、パシヤ！

「え、ちよつと、やめて!?!」

——エクセレント！

「よし、さつそくヴィヴィオとユーノ君、あとはエリオとキャロ……そうだ！ アルフとクロノ君にも送らなきゃね」

「そんなら私はすずかちゃんとアリサちゃんに送つとくわ。おつと一応シグナムにも送

信つと」

「いや〜」

こうして、フェイトちゃんの黒歴史もまた1ページ。

「ついでに、めちよつく！ とか言ってくれないかな〜」

「いやー、流石にそれは無理やろ」

「私、堪忍袋の緒が切れました！」

アインハルトさんはクラウドスほど強くなれない!?

S t . ヒルデ魔法学院の昼休み。

わたしは、なのはママから作ってもらったお弁当片手に——誰にも見つからないよう——1人で旧校舎へ向かった。

キヨロキヨロ。

「よし、誰もいないよね……」

鍵のかかった教室のドアを、コンコンとノックする。

すると、教室の中から艦これの“吹雪”みたいな声がした。

『コロナ』

「あざとこ——」

ガチャリ。鍵が解除された。ドアを開けると、そこで待っていたのは、

「マッサージと称して、女の子にいかがわしい施術を施す、自称、格闘技ファンの、ユミ

ナ・アングレイヴ先輩でした」

「うん。そういう誤解を生む紹介はやめようね、ヴィヴィオちゃん!」

「あははー、冗談ですって」

「もう、半分しかあつてないよ」

「え?」

「え?」

「その件は後日、アインハルトさんがいる前で追求するとして……」

「やめてエエ!」

「すみません、ユミナさん。貴重な昼休みに、わざわざ旧校舎まで来てもらって」

「また、いつもの疑問を解決するコーナーを撮るって聞いたけど?」

「はい」

「私は別にいいんだけどね。」

内緒で教室を出ようとしたら、アインハルトさんが「仲間になりたそうにこちらを見ている」ものだから、あまりにいたたまれなくて……」

「あはは、アインハルトさん。今日は、わたしたちと一緒にお昼を食べる日でもないですしね。」

ああ、ユミナさん以外のお友達に、声をかけたいけどかけられない……そんなアイン

ハルトさんの勇姿が目には浮かびます……」

「勇姿って……うくん、クラスメイトの誰かに、アインハルトさんのお世話を頼んでくればよかつたかなあ……」

「なに、そのアインハルトさん係……。わたしもやりたい……。」

ちなみに、リオコロに任せるって手もあったんですが、そうなると、わたしとユミナさんだけいいですね。わたしたちの秘密の行動を感じられる恐れがありましたから……」

「今日のもって、そんなにやばいネタなの？」

「はい。排出率0・01パーセントの星5のレアカードを狙って当てるくらい……」

「ヴィヴィオちゃん。私、鎮守府に帰らせてもらうね——」

「どこに帰る気なのっ!？」

「だって、タイトルからして不穏だよねっ!？」

『アインハルトさんはクラウスほど強くなれない!』

って、そんなことアインハルトさんに聞かれた日には、絶対いつもみたいにならなくて見つかって、

『霸王断空拳!』

『ドツカーン!』

「みたいなオチでしょ!？」

「ええ、だからこそ本日はユミナさんをお呼びしたわけで——」

「さーて、今日はもう早退、早退つと……」

「冗談ですよっ!？」

ほら、今回はいつもの生放送と違って収録なんです。これの放送日は、2人で地球へバカンスにでも行きましょう。流星のアインハルトさんも地球までは追ってこれないでしょうし」

「うーん……」

「それに、アインハルトさんの性格なら、翌日にはもう忘れてますって」

「ヴィヴィオちゃんのアインハルトさんに対する認識が……でも、否定できない自分がいる……」

「大丈夫、大丈夫。いくらアインハルトさんでも、まだ聴いてもいないネタに向かって『フンガー』とか怒ることはできませんよ」

ユミナさんは「はあ……」と嘆息すると、言葉づかいを改めた。

「じゃ、陛下、やつちやいませうか?」

「はい、ユミナさん、やつちやいませう!」

そんなわけでこの番組は、ウマ娘のゲームを1話からずっと待っているのに、このま

まじや先にアニメが終わっちゃおうよ!?

次元世界最大の信者数を誇る、聖王教会の提供で送りしまーすっ——」



「緊急特番! 『アインハルトさんはクラウスほど強くなれない!』」

——わー、パチパチ。

「というわけで、ヴィヴィオ陛下。今日のタイトルコールをアインハルトさんが聞いたら、シヨックでまた、フォースの暗黒面に落ちそうな内容ですねえ……」

「はい。最近、このコーナーでも、連続してクラウス陛下やオリヴィエについて、考察していたじゃないですか?」

「そう言われると、今年の10月19日に公開予定の劇場版『魔法少女リリカルなのは Detonation』をぶつちぎりで見捨て、やってみましたね」

「ユーノ・スペランカー隊長と共に、古代ベルカ大地下迷宮に挑んだり……」

「『ユーノ・ス』までしかあつてませんか。ていうか、そんなことしてましたっけ?」

「それくらい在意気込みってことです」

「でも陛下。格闘技ファンの私からしてみれば、U15ワールドチャンピオンで、絶対王者とまで呼ばれたアインハルトさんが強くなれない——というのは、違和感があるんですか?」

「確かに、そうかもしれませんね」

「私が編集中の『アインハルトさん霸王列伝』でも——」

「はあ、はあ……ユミナさん、それあとで貸してくださいっ!」

「あー、陛下の『アインハルトさん秘蔵写真』の1枚と交換ですよ?」

「じゃ、アインハルトさん初めて自転車に乗る」の巻でいかがでしょう? 動画もあります」

「それは……面白……コホン、いいですね。わかりました。それで手を打ちましょう。

——で、話を戻しますが、アインハルトさんの強さを表すエピソードとして、

①1巻、

アインハルトさん自身の台詞で、

『この体は、間違いなく強いのに』

『霸王の血は歴史の中で薄れていますが、時折その血が色濃く蘇る事があります』

『碧銀の髪やこの色彩の虹彩異色。霸王の身体資質と霸王流。それらと一緒に、少しの記憶もこの体は受け継いでいます』

②3巻、

ルーテシアさんのお母さん、メガーヌさんの台詞で、

『あの年齢である技術。一体どれだけ苛烈な修練を——？』

なのはさんの台詞で、

『まだ荒削りだけど、土台がしっかりしてる。きっと、凄い量の基礎トレをやってるんだろ？』

③15巻、

ノーヴェエ会長の台詞で、

『お前がいるのは霸王流の入り口にすぎないってことだ。今のお前なら霸王流の……そして断空の真髄に近づいて……』

それを受けての、20巻で放った『真・霸王断空拳』だったわけですが——ほら、陛

まずは、先程ユミナさんがやったように、クラウス陛下の強さを表すエピソードを上げて行きましょう――。

① 1巻、

チンクの台詞で、

『聖王家のオリヴィエ聖王女、シュトウラの霸王イングヴァルト、ガレアの冥王イクスヴェリア、いずれも優れた王達でしたから』

シャツハさんの台詞で、

『霸王イングヴァルトは物語にも現れる英傑です』

② 2巻、

ルーラー……特殊ED最高！ じゃなくて、ルーテシアの台詞で、
『ベルカの歴史に名を残した武勇の人にして、初代の霸王』

アインハルトさんの台詞で、

『皮肉な話ですが、彼女を失って彼は強くなりました。全てをなげうって武の道に打ち

込み、一騎当千の力を手に入れて』

③3巻、

ヴィクターさんの台詞で、

『旧ベルカの最強覇者は、聖王でも霸王でもなく雷帝ダールグリユン』

④11巻、

リッドさん（エレミア）の台詞で、

『当時、まだ血統伝承のすべてをみにつけてはいなかったとはいえ、局所破壊技を封じ手にしてなお戦力は僕の方が上だったはずだけれど、彼の頑強さと打撃力には目を見張るものがあつた』

『武勇に優れ、兵にも慕われている若い王子』

クラウド陛下とリッドさんのやり取りで、

『これで僕の勝ち越しは5勝目だったか？』

『まだ4勝目だよ！ あとは全部僕の勝ち！』

他にもあるかもしれませんが、とりあえずはこんなところでしようか——」

「あの、陛下下？」

「ユミナさん、もう平気なんですか？」

「あー、はい。ご迷惑をおかけしました。」

それで、ですね。今の話を聞いていて思ったんですが、クラウド陛下は、オリヴィエ王女に負けて強くなった——ということですよね？」

「はい。理由の1つだと思えます」

「となると、12巻で陛下に負けて成長したアインハルトさんは、奇しくもクラウド陛下と同じ道を歩んだ——ということでは？」

「言われてみると、確かに、ご先祖様ともどもオリヴィエに負けたようなものですからね——」

「つまり、これはもう運命。ますます強くなるフラグとしか思えないんですが……？」

「なるほど。一理あります。」

ですが、ユミナさん、想像してみてください。

仮に、アインハルトさんの言う通り、クラウド陛下が、全てを投げ打って死に物狂いで鍛錬を続けたとします——」

「はい」

「ですが、それだけで本当に、一個人が、あの戦乱の古代ベルカで、最強と謳われるほどの強さを身に着けることが、可能なのでしょうか？」

「それは……」

『StrikerS』を見たことがある方なら、ご存知だと思いますが。

第8話——スバルさんとティアナさんが、ちよつとした空き時間もムダにせず、本当に一生懸命に特訓して、なのはママとの模擬戦に挑んだことがありました」

「ああ！ あの有名な『少し……頭冷やそうか』回ですね！」

「はい。娘のわたしですら、初めてあの回を見たときは、

『スバルさんとティアナさん頑張ってるな、むくわれるといいな』

ところが、フルボッコ！

『ヒイイイ、なのはママひどっ!? 魔王だ、魔王がいる……』

でした……」

「あ、ああ」

「つまり、どんなに努力を重ねても、圧倒的な力の前には手も足も出ない……」

「身も蓋もない結論だっ！」

「ところが、そんな魔王の称号を得たなのはママですら、1対1では、ナハトヴァールやユーリには勝てません……」

「それは……まあ……確かに……」

「クラウス陛下は、そんなナハトヴァールやユーリみたいな、化け物クラスの魔導師が跳梁跋扈する古代ベルカで最強だったんですよ？」

「努力や根性だけでどうにかなるでしょうか？」

「う、うくん、そう言われると不可能なような……」。

あの、陛下、ひよつとして、単純に、私たちがクラウス陛下を過大評価しすぎていた——とかいうオチなのでは？」

「いえ。そうだったら、まだアインハルトさんにも、クラウス陛下ほど強くなれるチャンスがあったんですが……」

「えくっ!? クラウス陛下って何者なんですかっ!? 何だかもう、考察する度に、クラウス陛下の強さが増しているような……。おかしくないですか?」

「そうですね。わたしも、まさかここまでとは思っていません……」

「本編で、そこまでクラウス陛下が強い描写って、ありましたっけ……?」

「残念ながら『Viivid』本編にはありません。主役は、ほら、わたしなので」

「あゝ」

「ですが、証明することだけなら可能です。」

古代ベルカの歴史について語る上で、短いながらも、最も重要な資料。

ドラマCD『Strikers サウンドステージX』のジャケットに載っている『History of Belka』から、引用しますね——。

『戦乱期中ごろの時点で人造生命体の研究は大きな進化を遂げ、王たちは自らの肉体を強化し、自らの子孫にもそれを宿命づけた』

『聖王家が誇る最大武装の鍵であり、使用者となることを宿命づけられた聖王』

『その他数々の王が過度な力をその身に宿し、力の象徴として誇っていた』

『たった一人の優れた王が強大な質量を操る兵器となり、戦場では万騎を屠りうる時代』

といったところなんですが、ユミナさん気づきましたか?」

「……王たちは自らの肉体を強化し、自らの子孫にもそれを宿命づけた……って、もしかしてクラウド陛下もっ!」

「はい。」

●オリヴィエ——聖王核&ゆりかご。

●イクス——マリアージュ（屍兵器）コア生成能力。

●ユーリ——永遠結晶エグザミア。

(ディアーチエとの関連性から、ユーリもベルカ王族であった可能性が高い)。

つまり、古代ベルカの王の一人であったクラウス陛下も、オリヴィエに負けたあと——王位を継いだあともかもしれませんが——他の王たちと同じように肉体を強化したと考える方が自然。

しかも、この肉体強化ですが、オリヴィエ、イクス、ユーリ、などを見てもらえばわかりますが、全てアルハザードから流出した、遺失技術(ロストログア)ばかり……」
「うわ……」

「そして、肉体を強化しただけで、どれだけ劇的な変化が起きるのか……?」

最もわかりやすい、最も身近な例を上げるとするなら——わたし、高町ヴィヴィオです」

「陛下、ですか……?」

「はい。現在のわたしは、なのはママにノーヴェ、他にもたくさんの人たちから指導を受けて、練習して、試合を重ね、少しずつ強くなり、ようやく、ルールのある試合で、リミッターのかかっている、なのはママに辛勝するくらいにまで成長しました。

先はまだまだ長そうですね」

「陛下も、頑張ってますもんね」

「えへへ、ありがとうございます。

——ところがですっ!

そんな、なのはママの娘になる前。

スターライクアーツの“ス”の字も知らなかったころ、わたしはレリック——オリヴィエの聖王核みたいなものですね——と、ゆりかごから供給される無限の魔力により、なのはママを圧倒するラスボスとして君臨したわけですよっ!

「あゝ、『StrikerS』のころですね」

「はい。

つまり、何の技術も、魔法も知らなかったころのわたしですら、アルハザードの遺失技術の力を借りれば、あの、なのはママにだって勝てる。

——だけでですよ?」

もしも、今のわたしが、あのころのような無限の魔力を手に入れたとしたら……。

あらゆる攻撃を跳ね返し、アインハルトさんやジークさんですら一撃でマツトに沈め、本気のなのはママと戦ったとしても、正直、負ける気がしません……。

遠距離なら、スターライトブレイカー級の砲撃魔法を、何発でも、連続して撃ち続け、近づいてきたら、スターライトブレイカー級の魔力をこめた拳で殴りつけ、相手を粉砕します。

手加減しないと、相手が死んじゃうかもしれないね〜」

「へ、陛下……?」

「たぶん、なのはママとフェイトママ、はやてさんとヴォルケンリッター、まとめて相手にしても、まだ余裕があるかもです」

「それ、最強なんじゃ……」

「はい。きつと、当時のクラウス陛下も、似たような状態だったんだと思います。

それも、わたし以上に、努力に努力を重ねた人物が、遺失技術による肉体強化を受けたんですから……それはもう……」

「無敵なんじゃ……?」

「はい。かつてのわたしも、リリカルなのは屈指の強キャラ——ユーリですら、クラウス陛下にはかなわないと思います。

『砕け得ぬ闇事件』のあと、惑星エルトリアに渡ったユーリが、初めて戦う訓練をした——というのは『GOD』のエンディング後、シークエン্সXで描かれています。力加減のコントロールすらできないんですよ?」

『A, s』のボスキャラ——ナハトヴァール。

『GOD』のボスキャラ——ユーリ・エーベルヴァイン。

『StrikerS』のボスキャラ——聖王ヴィヴィオ。

共通しているのは、圧倒的な魔力量だけで相手を蹴散らせる。強すぎるので、戦闘訓練をする必要がないということ……。

だけど、クラウド陛下は違います。

『努力 + 才能 + ロストロギアによる肉体強化』

ただでさえ強いボスキャラが、全てを投げ打ち、死に物狂いで、武の道に打ちこんでんです。

そして、勝利にかける想いすら、誰よりも強かった……。

こんな相手とどう戦えと……？

隙がない。勝てる要素が見つからない。

覇王の進軍を止めることは、誰にもできない。

高町ヴィヴィオは断言します。

クラウド・G・S・イングヴァルトは、間違いなく、古代ベルカ最強を名乗るに相応しい、騎士であり、魔導師であり、王だったと

「ああああっ!!? ということは、肉体強化していないアインハルトさんは……」

「はい。どんなに修行を続けても、

『努力 + 才能』

「止まりなんです！」

「めちよつくー！」

「はい。」

ミライクリスタルのないエミルが、どんなに頑張っても、けつこうプリキュアのように……。

サイがどんなに努力しても、キラ・ヤマトのようにはなれないように……。

クリリンやヤムチャがどんなに修行しても、サイヤ人には追いつけないように……。

ミウラさんが、変身魔法で大人になっても、ほとんど身長が伸びないように……。

はやてさんが、いつまでたっても彼氏の1人もできないように……。」

「後半もうそれ違いますよねっ!？」

「一般人より、遥かに優秀なんですけど、その世界の頂点と比べると、どうしても劣ってます。まう。そんな存在……。」

そんなわけで本日の結論です。

アインハルト・ストラトスが、今後、どんなに厳しいトレーニングを続けたとしても、遺失技術により肉体を強化した、霸王イングヴァルトと同等の強さを手にすることはできない。

——以上、お疲れ様でした!」

●
教室の椅子に座ったまま、ユミナさんが肩を落としている。

「はあく。ヴィヴィオちゃん、これ、ガチでアインハルトさんに伝えられないやつだよね?」

「どうするの? 本当に放送するの? 落ちこむよ? フォースの暗黒面だよ?」

「うん、やっぱりアインハルトさんには酷でしょうか?」

「うん。世の中には知らなくていいこともあるんだよ。」

アインハルトさんのライフはもうゼロよ——つてやつだね。

アインハルトさんには、

『クラウドみたいに、私はなる!』

みたいなのりで、夢を見させてあげた方がいいんじゃないかな?」

すると、壁の向こうから、

——ガタタツ!

「ひいひい!?!」

「ユミ姉さん、今の音はっ?!」

「そんな、ネコ姉さんみたいに呼ばれても困るんだけど、隣の教室からみたい……」

ゴクリと息を呑む。

そして、さらに……。

——ヒタ……ヒタ……。

「あ、足音が……」

「近づいてくる……?」

——ガッ!

引き手をつかむ音。ドアがわずかに揺れる。

——バキッ!

「鍵がつ!」

強引にドアが開かれる!

——ガラララララ!

「ひいひいっ! カビたねずみ男みたいに、緑色なの入って来たああああああ
あああっ!」

「……………私です」

碧銀の髪をもつ、かつこよくて、可愛らしい先輩……。ただ、いつもよりドヨンと
している。

「あ、アインハルトさん……?」

「どうしてここに……?」

「……その、今日はお昼を一緒に過ごす方がいなかったもので……」
アインハルトさんは遠い目をした。

「以前はよく、ここ（旧校舎）で、一人で食べていたものです……」

「あゝ」

「ぼっちめ……」

「ヴィヴィオちゃん、ヴィヴィオちゃんっ、それ以上言っちゃダメええっ!」

「おっと失礼。わたしもユミナさんも、友達多いから、まさかこんなところで食べるなんて思わなくて……」

「あう……」

「ヴィヴィオちゃん、オーバーキルうう!」

アインハルトさんのライフは、もうマイナスだよっ!」

現代の霸王様が片膝をついた。

「冗談ですよ、冗談。それに、ここなら誰にも見つからずに、こっそり秘密のトレーニングができるじゃないですか! 絶好の修行スポットですね」

「あ、はい。それはもう、筋トレや、霸王流の型の練習や——」

ん!!!」

——メキツ！ ドツゴオオン！

アインハルトさんは、魔力も使わずに、壁を素手で破壊して去っていく。

「……ねえ、陛下」

「……はい」

「……私としては、十分強いと思うんですが？」

「……ええ、十分強いですね」

壁の大穴からは、グラウンドがよく見渡せた。

そよ風が気持ちいい。

「そういえば、なんですけど……」。

クラウス陛下下つてオリヴィエ王女にこそ負けましたが、11巻で、他国の兵士から——

『若造がただひとり——？ いや、あれは霸王の——！』

って、言われていましたよね？」

「はい」

「つまり、オリヴィエと戦う以前から、他国の軍勢に『霸王』と呼ばれるくらい名が広まっていた。強かったんですよね？」

「はい。流石はユミナさん。いいところに気づきました」

「陛下？」

「だって、クラウド陛下が負けた当時のオリヴィエって、ゆりかごの玉座に適合したあとで、ひよつとしたら、『すでに接続状態で、魔力の供給を受けていた』可能性もあるんですよ？」

「どんなにクラウド陛下が強くても、生身の魔導師ごときに、負けるわけじゃないじゃないですか」

「うわ……」

「だから、オリヴィエとの一戦で、クラウド陛下の強さを測ることはできません。

むしろ、若くして霸王と呼ばれていたクラウド陛下は、あの時点で、すでに生身での限界値——なのはママやフェイトママくらい、強かったのかもしれないね。」

「だから、霸王と同じ身体資質をもつアインハルトさんも、このまま鍛錬を続けていけば、遺失技術で肉体強化なんてしなくても、なのはママたちと同じくらい強くなれる可能性があると」

「へ〜……って、ちよつと待ってください!？」

なのはさんって、確か、ノーヴェ会長の話によると、

『あの人アレだぞ？ 世界人口全部で『ケンカ強い順』に並べたとしても、かなり上位に来る人だぞ?!』

でしたよね?!」

「あははー」

「つまり、アインハルトさんも、次元世界トップクラスに強くなれるって……へ、陛下、もしかして知っていて?!」

「いや、だから、わたし最初から、

『アインハルトさんは、クラウス陛下ほど強くなれない』

と、言っただけで、

『アインハルトさんが、強くなれない』

なんて、一言も言っけませんよ?」

「くっ……ドS陛下!」

「ふっふっふ……今日も勝ち!」

なぜなにプレシアお婆ちゃん

みなさんこんにちは、高町ヴィヴィオです。

今日やってきたのは、とある並行世界の1つ。今風に例えれば、世界線の1つ、とでもいったところででしょうか。

どうして行き来できるのか？ など、詳しい事情や経緯は、これまでの話を読んでもらうとして、つまるところ、無印や劇場版1作目のリリカルなのは、ラスト、虚数空間にのまれたプレシア・テスタロッサが、無事にアルハザードに着いた——そんな世界。だものだから、プレシアお婆ちゃんの性格は、アリシアさんが元気なころ、あるいは『A, s』でフェイトママの夢に登場したような、優しい大人の女性——ではありません。

かといって、『INNOCENT』のように、娘を溺愛しすぎている——わけでもありません。

そう、あのムチでピシピシ叩いていたプレシア・テスタロッサの延長線上——

「ひねくれたままのプレシアお婆ちゃん、遊びに来たよ……つて、あれ？」

いつもなら、すかさずツツコミが帰ってくるはずなのだけど……。
何度か遊びに来ているので、勝手知ったる他人の家といった感じで、ズカズカ奥へ進んで行くと……、

「な、なんじゃこりやあああああああああああああああああ!？」

リビングルーム——というか、居間の中央で、プレシアお婆ちゃん、アリシアさん（フェイトママが中学生くらいの容姿）、リニスさんの三人が、こたつを囲んでいた。

色々とツツコミどころが多いのだけど……、

「え、もう6月の後半だよ」

流石にコレはない。

プレシアお婆ちゃんが、顔だけわたしに向ける。

「そつちはそうでも、こつちはまだまだまだ寒いのだよ」

「まーまー、ヴィヴィオも入りなよー」

「あ、中に2世がいるので、気をつけてくださいね」

「しつかり者のリニスさんまでええ〜っ!？」

「元が、猫の使い魔だしね」

「すみません、ヴィヴィオさん。私も早く片づけなさいけない——とは思っているんですが、本能にはあらがえず……」

「あゝ」

「でもね、ヴィヴィオ。これは、元はと言えば、あなたの母親が悪いのよ?」

「なのはママのせい?」

「もう一人の方よ」

「フェイトママ?!? それこそ有り得ないんじゃない?」

あの品行方正なフェイトママより、まだ全力全開なのはママのせい——と言われた方がしつくりくる。

「ほら、こたつのメーカー名をご覧ください」

「メーカー名? ……って、これ日本製!? どういうこと?」

「あなたも無印や劇場版を見たなら覚えているでしょ? フェイトが、

『あの……母さんに……お土産を……』

ってケーキを買ってくるシーン」

「あく、はいはい、ありました。そのあとムチでピシピシ叩いて……ひどい!」

「そうね。今はその話は置いて、フェイトがお土産に買ってきたのが、本当にケーキ

「ただだったと思う？」

「ま、まさか……そのこたつ……」

「ええ、あなたが考えた通りよ。もちろん、ケーキとは別の日だったけれど……」

『あ、あの、地球でいいものを見つけて……。まだ春先で寒いだろうから、母さんに……。』
「つて」

「あゝ」

「フエイトママなら買いそうだ！」

「ただ、当時の私は……」

『なによ、これ!? 暖かくて外に出たくなるわ……』

「研究が……大事な研究が進まない！」

「フエイト、どうしてこんな物を……」

「そんなヒマがあつたら、言われたことをちゃんとおやりなさい！」

「ピシピシ——と」

「え、そんな理由で!?!」

「ママ、さいてー」

「プレシア、最低です」

「くっ……そんなわけで、忌まわしい記憶と共に、私はこたつに帰ってきたのよ」

「そんな、アクシズとソロモンを合体させたみたいな台詞を言われても……」

「まあまあ、ヴィヴィオも、早くこたつに入りなよー」

「どうしよう、この空間……」

「早くなんとかしないと……」

「ヴィヴィオさん、みかんとアイスもありますよ」

「……くつ。ま、まあ、郷に入れば郷に従えともいうしね、少しくらいなら……」

「飲み物は？」

「……コーラで」

そんなわけで、本日は、梅雨入りしたこの時期にこたつに入りながら、みかんとアイスを食べるという、一周半くらい回った贅沢をしつつ、お送りします。



「——それで、今日はどんな要件で来たのよ？　あなたが来ると、だいたい面倒くさいことに巻きこまれるのよね」

「あははー、今日は大丈夫だって」

実はね、前回、霸王イングヴァルトが“肉体強化”をしてた——って、調べただけ

ど、そもそも、リリカルなのはおける。『肉体強化』って、どんな種類があるのかなくつて。その辺り、お婆ちゃんなら詳しいでしょ?」

「肉体強化ねえ……それなら、スカリエッティに聞いた方が早いんじゃないかしら? あなたにレリックを移植したのも、あの男でしょ?」

「それはそうなんだけど……ほら、軌道拘置所にいるから、そう簡単には会えないし……というか、『INNOCENT』のスカさんならいいんだけど、こつちには『Striker erS』のスカリエッティだし……『StrikerS サウンドステージX』での言動を考えると、気分が良い日は話してくれそうな気がしないでもないんだけど……」

「まあ、あなたにとって唯一の天敵みたいなものだね」

「なので、そこはほら、スカリエッティに匹敵する天才で、何歳になっても若くてお綺麗
な、大魔導師様に聞いた方がいいかなって」

「……………」
「ホーン。そうね、まあ、そういうことなら」

「プレシア、乗せられてますよー」

「意外とチョロいよね、うちのママ」

「うっさいわね。たまには解説するのも悪くはないでしょう」

「まあ、ママらしいけどねー。でも、その肉体強化とやらをすれば、魔力量Eクラスの私でも、Sランクのフェイトと勝負して勝てるようになるってこと?」

「う、うくん……どうなんだろう？」

「姉より優れた妹なぞ存在しねえ！　みたいな日がついに来るの!？」

「あー、どうでしょうね、プレシア？」

「そうね。その辺りも含めて説明してみましようか。」

ただ、一口に肉体強化といっても範囲が広すぎるから、とりあえず『無印』から、ヴィオオが主役の『Vivid』までに登場した技術に絞って説明するわよ？」

「はい。それでお願ひします」

「ついに私の時代が〜」

「来るといいのだけど……。まずは——リニス、そっちのみかん取って」

「はい、どうぞ」

「いい、ヴィオオ、アリシア。こっちの①から始まる数字の小さいみかんほど、現在の肉体に負担の少ない強化方法だと思いなさい。」

① デバイス

② 強化魔法

③ 融合

④ ナノマシン

⑤ 人造魔導師

⑥ 戦闘機人

後半のみかんほど、外科的な手術が必要になるわけね」

①

「デバイスも、肉体強化なの？」

「そうね。単に端末や、魔導端末なんて呼ぶことが多いのだけど……。古くは、ゲームなんかでよく登場する魔力の宿った杖だったのよ。その現代版がデバイスね。

　RPGで考えてご覧なさい。ステータスをアップさせる——という意味では、肉体強化になるでしょ？」

「でも、昔と違って、演算補助や記憶装置としての意味合いが大きいから、肉体強化とは違う気がするんだけど……」

「あら、そんなことないわよ。」

『フフ、モバイルスーツの性能の違いが、戦力の決定的差ではないということを教えてやる』

「とでも言えばわかるかしら？」

「あー、素人同然だったアムロでも、ガンダムに乗れば赤い彗星と互角に戦える。なのはママとレイジングハートも、そんな感じだったもんね」

「つまり、フェイトとバルディツシユは、シヤアとシヤアザクみたいなもの？」

「いえ、そこはシヤアとシヤア専用ゲルググくらいにしてもらえると……。バルディツシユ頑張つて作つたんですよー」

「まあ、Zガンダム以降ならともかく、初代ガンダムとザクの機体性能の差は——」

「ママ、話がそれてる、それてる。ガンダムじゃないよー」

「……コホン。まあ、そんなわけで、単純に高性能なデバイスがあれば強くなれる——というの、確かなのよ」

②

「次は②——強化魔法ね。」

補助魔法による肉体強化から、バリアジャケットなんかの防御魔法。それに、あなたにも馴染み深い大人モードも、これに含まれるわね」

「うん。単純に大人の姿に変身するだけでも、筋力がアップして、リーチも伸びるしね。」

ストライクアーツをするなら結構重要なんだよ？」

「つまり、私も変身魔法を使って大人の姿になればフェイトぐらい——」

「……」

「え、何で、どうしてみんな可哀想な子を見る目で私を見るのおお？」

「……コホン。とりあえず、ここまでが比較的 안전한 肉体強化といったところかしら」

「ちよつと！ 私だってちつちやくないよっ!？」

③

「えーと、まあ、そんなわけで③番目の融合(ユニゾン)なんだけど……ほら、アリシア、機嫌直して」

「今度、私とプレシアで、最強の、アリシア専用のデバイスを作りますから」

「……じゃ、太陽炉積んで」

「えー」

「GNドライブ搭載型かどうかは置いて、ミッドで、フェイトとバルディッシュが実

験中の第五世代型をすつ飛ばして、第六世代型を目指す——というのはアリかもしれないわね」

「なるほど。それはちよつと挑戦しがいがありますね」

「それなんてイオリア・シユヘンベルグ？」

「——と、まあ、ダブルオーの話は置いて、ユニゾンなんだけど……。これ、あなたが前回調べた霸王イングヴァルトにも関係してくる技術なのよ」

「え、クラウス陛下ユニゾンしてたのっ!？」

「まあ、してはいないでしょうね。」

戦っているとき、外見がまったく変化していなかったもの。

その辺りの事情は、あなたのお友達の方が詳しいでしょうから説明は省くけれど、そもそもユニゾンは、ベルカ独自の技術で、

『一個の人間を究極まで強化する、という思想に基づいた兵器開発もベルカでは積極的に行われ、その中で開発された技術成果の一つである』

ということなの。

詳しく知りたければ『A, s ビジジュアルファンブック』や『A, s 魔法辞典』。それに『2nd A, s パンフレット』を見るといいわ」

「一個の人間を究極まで強化する、かあ……」

「ええ、デバイス強化による、1つの到達点ね」

「こ、これはスゴいかも！」

「まあ、待ちなさいアリシア。ステイ、ステイ。」

確かにユニゾンは、術者の魔法行使能力を飛躍的に上昇させることができるわ。でもね、その分、欠点の多い技術でもあったの」

「欠点？」

「そう。融合適性を持つ術者の少なさと、頻発した『融合事故』よ。」

『デバイスが術者の体に乗っ取り、自律行動をとってしまふ』

『魔法行使時などに使用者が肉体的な不具合を発生させる』

などね。他にも多くの不具合があったみたいよ」

「でもママ、それくらいで強くなれるなら、一度試してみたいかも」

「それは止めておきなさい」

「どうして？」

「古代ベルカにも、アリシアと同じように考えた人が多くいたはずよ。なのに、まったく普及しなかったところを見ると……これは『合体事故』ね！」

「が、合体事故!?!」

「女神転生やペルソナのな!?!」

「ええ。」

『術者 × 融合騎（ユニゾンデバイス）』

が、失敗して、外道スライムの何かが誕生して「コンゴトモヨロシク」したとしたら……しかも、元に戻れない」

「ひいいい!! リスクが高すぎるよー!」

「とはいえ、成功すれば、外科的な手術を行うことなく強くなれるし、ユニゾンを解除すれば、簡単に元の姿に戻れることを思えば、便利よね」

「……ということは、いつかはやてさんも融合事故を起こして、スライムみたいになる日がああ!?!」

「八神はやての場合、余程のことがない限り、そんな日は来ないでしょうね。あの子のユニゾンは、少し事情が異なるのよ」

「えー」

「ヴィヴィオさん、ちよつと期待していませんでしたか?」

「いやいや、別に関西弁をしゃべる「八神スライム司令」とか、ちよつと面白そうだなあー、とか思ってますんよー?」

『嘘だ!』と、ティアナさんの中の人に言ってもらいたい……」

「まず、夜天の書の管制融合騎——初代リインフォースなんだけど、

『夜天の書のマスターとして登録された人物の生体パターンや魔力資質といった情報を詳細に解析し、数ヶ月〜数年をかけて管制融合騎が自身の融合機能を自動的に調整するシステムが搭載されており、融合事故の発生率は極めて低く抑えられている』

次に、リインフォースⅡね。

『はやてのリンカーコアを分け与える形で彼女の基礎コアは生みだされており』

もつと詳しく知りたければ『2nd A's パンフレット』を読むことね。

こうすることで、融合適性や相性の問題を完全にクリアーしているのよ」

「それって、つまり——私も、自分のリンカーコアを分け与えて融合騎を作っちゃえば、融合事故の起きないユニゾンができるってことだよねっ!」

「なるほど、わたしも作ってみたいかも!」

「ただ、アリシアの場合は、基本となる魔力量が低いですから、完成した融合騎を含めても、おそらく——」

『アリシア × 融合騎（ピクシー） Ⅱ ポルターガイスト』

くらいになるかと」

「ナニソレ!? 弱っ!」

「しかもポルターガイストって、普段のアリシアさんとほとんど変わらないよ!」

「それもひどっ!」

「まあ、アリシア専用の、強力な融合騎を作る方法がないわけでもないのだけどね」

「え、本当、ママ!？」

「さっすが、お婆ちゃん!」

「さすプレですね」

「アリシアの場合、たとえ本人の魔力量が低かったとしても、クローンであるフェイトのリンカーコアを分けてもらい、融合騎のコアにすればいいのよ」

「そっか! 単にクローンってだけじゃなく、二人とも仲良しだし、融合適性や相性も問題なし、これは上手く行きそう!」

「待ったアア! それって、フェイトを倒すのにフェイトの力を借りるってことじゃん!」

「魔竜王ガーヴを倒すのに、ガーヴ・フレア使うようなもんだよね!？」

「例えば微妙だけど、わからなくもない自分がイヤ」

「二人とも、あのアム口だって、シヤアからもたらされたサイコ・フレームの技術でレガンダムを完成させて、シヤアに勝利したんですよ」

「「な、なるほど!」」

「あー、それで納得するのね……」

④

「④番目は『ナノマシン』ね」

「あれ？ お婆ちゃん、リリカルなのはにナノマシンなんて登場したっけ？」

「劇場版3作目の『Reflection』の後半で、高町なのはが、アミタからナノマシンの供給を受けたでしょ」

「そうでした！ あー、何気に映画の——並行世界のなのはママは肉体強化をしてたんだ……わたしに先駆けて。なのはママだけ超パワーアップ。『StrikerS』どうするの!?! わたしはもちろんだけど、ノーヴェたちまで素手でボコられる未来しか見えないよ!?!」

「そういえば、加速したキリエに、なのはとフェイト殴られてたねえ……ワンパンマンみたいなことに……」

「そこは一応、伏線っぽいのもあるから、大丈夫でしょう」

「伏線？」

「アミタの使う『アクセラレイター』や、キリエの『システムオルタ』は、どちらも『体内のナノマシンを大きく消耗する』と説明にあるわ」

「なのはさんのことだから、『Detonation』でも全力全開。ラストは、ナノマ

シンンを使い切つての大勝利！ といったところでしょね。相当ボロボロでしょうけど」

「うわー、墜落事故コース一直線だ！」

「とはいえ、事件後も、少しはナノマシンが残っている——とするのかもしれないわね」
「というと？」

「本来は空を飛ぶどころか、歩くことすら困難なほどの大怪我だったって話でしょ？」
「うん」

「そんな大怪我から回復したのも、苦手だった運動が『StrikerS』から急に得意になつていたのも、全て、わずかに身体に残っていたナノマシンのお陰だった——とすれば、安易な奇跡に頼らなくても、まるっと説明がつくわ」

「じゃ、ゆりかご戦での後遺症が『Force』で皆無に見えるのも？」
「ナノマシンの影響ね」

「慣性コントロールしなくても、でかいカノンを片手持ちできるのも？」

「ナノマシンのお陰」

「いつまで経つても若いのもっ!？」

「ナノマシン」

「えー」

「なんてこつたい、ビバ！ ナノマシン万能説！」

「▽ガンダムだって、ナノマシンを使ってるでしょ？」

「月光蝶である！」

「……はっ！ これを私の体にも入れてもらえれば」

「肉体的には強くなると思うけど、魔力量はアップしないわよ」

「ううっ……」

「ヴィヴィオさんみたいに、毎朝10キロ走れば、自然と強くなれますよ」

「そんな走れるかああ!?!」

⑤

「さて、ようやく⑤番目まで来たわね。古代ベルカの肉体強化における1つの完成形——人造魔導師」

「うおお、なんかスゴそうなの来た〜」

『『StrikerS魔法辞典』には、

『人間に対して、主に外科的な処置・調整によって、強力な魔力や魔法行使能力を持たせる技術』

と、書いてあるのだけど……」

「これって、スカリエツティがわたしにやったやつだよね?」

「そうね。ただし、あなたに対して行われたのは、人造魔導師研究の中でも、スカリエツティが『レリックウエポン』と呼んでいたものよ。」

同じく『StrikerS魔法辞典』には、

『古代ベルカの聖王血統のみ許された、ロストロギア移植による人体強化。体内に埋没移植されたエネルギー結晶体の力を取り出す他、外部エネルギーとの連結も可能とする』

と、あるわね。

あなたの——『Vivid』の1巻にもあるでしょ、

『産まれると同時に、聖王核と呼ばれる魔力補助コアを埋め込まれる』

と。あれのことよ」

「レリックかあ……」

「ねえママ。レリックウエポンって、聖王家の血を引くヴィヴィオ以外でもいけるの?」

「ええ。レリックウエポンは、

『古代ベルカで行われていた研究をスカリエツティが解析・復活させ、独自の改良を加えて完成させた(ルーテシア・ゼストの両名は、このレリックウエポンの実験体でもある)』

さらに、スカリエッティが目指していた人造魔導師は、

『ある程度成熟した人間（魔導師／非魔導師を問わず）に対して、後天的に能力を与えることが目的となる』

という話だから、アリシアでも可能ね」

「おう、キタコレ！」

「でも、ルールーとゼストさんは、想定された程の実力が出なくて失敗したって聞いたけど？」

「技術が不完全だったのよ。上手く適合できなかったのね。そのためにも、適合率の高い聖王のサンプル——ヴィヴィオが必要だったのでしよう」

「それに——失敗したといっても、ルーテシアさんはSランクでしたしね」

「そうだった！ ルールーって今でも十分強いけど、あれで魔力封鎖受けてるんだって！」

「おそらく、正式に管理局に入局すれば、魔力封鎖も解除されるでしょうから、なのはさんやフェイトに匹敵するオーバーSランク魔導師——次世代エースとして活躍できるでしょうね」

「どちらかというと、はやてさんの後継者って感じだけど……」

「強っ！ っていうか、うらやましー」

「そうねえ……例によってガンダムで例えるなら、百式みたいなものかしら。可変型モビルスーツとしては失敗したけれど、作ってみたなら機体性能は高かった——というやつね」

「つまり、ヴィヴィオがいてくれる今の私なら、百式どころか完成形——目指せデルタプラスってところ!?! 変形しちゃうよ!」

「そこで、さらに上のモビルスーツの名前を出さないところが、アリシアさんらしいというか、なんとというか……」

「ちなみに、あなたのお友達のイクス——マリアージュコア生成能力を持つあの子は、レリックウエポンとは別タイプの人造魔導師、ということになるわね」

⑥

「⑥番目——ラストは『戦闘機人』よ」

「これはわたしも知ってまーす。ノーヴェから色々聞いてるよ」

「そう。だったらシンプルに、『StrikerSサウンドステージX 魔法・用語辞典』を参考にしましょうか。」

『人間の体と機械を融合させた兵器。』

古くより構想されてきたシステムであるが、ジェイル・スカリエッティによる「機械の適合性のため、誕生の時点で人体の方を作り替える」という解を得て完成した。

鋼の骨格と人工筋肉を持ち、遺伝子調整やリンカーコアに干渉するプログラムユニットの埋め込みにより、高い戦闘力を誇る。

スバルやギンガ、ナンバーズらは皆、この「戦闘機人」として生まれている』
といったところね」

「おー、何だかドクター・ゲロの作った人造人間みたい」

「ちなみに『StrikerS魔法辞典』によると、

『人造魔導師とは異なるアプローチながら、天賦の才や地道な訓練に頼る魔導師に頼らず、その誕生に人為的な力を介在させることによって確実に安定した数を揃えることができる武力という点で、思想と到達点は同一線上にある』

と、あるから、これも肉体強化の1つの完成形なのでしょうね」

「つまり、私の前には「デルタプラス」か「18号」、2つの道が開かれていると?」「スカリエッティの戦闘機人は、誕生の時点での改造が必要だから、選ぶとしたら——」「デルタプラス」の方ね」

「なんだかもわかりづらいよ!?!」

「しょうがないわね。大ヒント。」

戦闘機人の真の完成形は、完全に1から造られた人工生命体よ。だから、アリシアじゃ無理なの」

「は…?」

「『機械の適合性のため、誕生の時点で人体の方を作り替える』——って、スカリエツティは考えたみたいだけど、最初から、機械の人体を持った人工生命体を生み出せたとしたら……」

「と、トラン●フォーマー?」

「違うわよ!? あなたもよく知ってるでしょ。PSP版のアミタやキリエ」

「あ、ああ、ギアーズ!」

「『魔法戦記リリカルなのはForce』後半で登場する人型機械ラプターは、その第一歩かもしれないわね」

?

「ところでプレシア。その『Force』の肉体強化について、説明しなくていいんですか?」

「リニスさん、何をっ!?!」

「この際『未来がー』などと言うのも今更なので、含めておくべきだと思うのですが？」

「まあ、リニスが生きてる時点ですねー」

「アリシアさんもだよ？」

「ヴィヴィオ。あなたもナノマシンのとき、サラッと『Force』に触れてたわよね」

「あれ〜」

「まあいいわ。ともかく、エクリプスドライバーとリアクターの関係……あー、トーマとリリーの関係といった方がわかりやすいかしら。」

アレって、技術的には③番目の『融合』とほぼ同じものなのよ」

「そうなの？」

「ええ。さつき、合体事故でスライムが〜、とか言ってたけど、ほら、『Force』2巻で説明のあった『自己対滅』って覚えてる？」

『肉体再生の機能が異常化し、人間としての原型を留めることが不可能になった状態。EC感染者の末路のひとつである』

「というやつなだけだよ」

「あ〜、研究施設のガラスポッドに入ってた肉塊……って、あのスライムネタ、冗談じゃなかったんだ！」

「3巻の、

『エンゲージまでは容易いのに、適合者がまるで作れん』

って話も、ユニゾンの欠点と一緒によね」

「でもでも、驚異的な再生能力や、殺戮衝動とか、ユニゾンとはまったく別の……」

「その辺の説明も、しようと思えばできないこともないのだけれどね。長くなるから、とりあえず、"リリカルなのは版・吸血鬼"とでも思っておきなさい」

「なんて身も蓋もない説明！ ていうか、すずかさんは？」

「あれはとらハ時代の設定でしょ。」

最古のエクリップスウィルス母体——"原初の種"が、俗にいう"真祖"や"始祖"みたいなモノだとすれば、だいたい理解できるでしょう？」

「あゝ」

「だから、フツケバイン一家とか、確かに感染者は強いんだけど……」

「吸血鬼と同じで、欠点もあると？」

「ま、そんなところ。」

『Force』5巻で、シグナムと褐色隻眼のサイファーが再戦したとき、サイファー自身も、

『合金のニードル！ AECコート済みか——"銀の銃弾"のつもりか？』

って言ってたでしょ」

「昔から、吸血鬼や狼男などは銀の弾丸に弱い——とされてきましたね」

「ええ。EC感染者である彼ら自身、自分たちが吸血鬼のような存在だと思っていた証
拠よ」

「古城く〜ん」

「吸血鬼が嫌なら、FF7のジエノバでもいいけど……」

「セフィロ〜ス」

「万能の力なんて、そうそうあるものじゃないわ。だいたい、これもアルハザードやベル
カ絡みでしょうし……」。

ひよつとすると——いえ、これは止めておきましょう」

「ああ、ついに私でもフェイトに勝てる手段が見つかったと思つたのに〜」

「適合できる確率と、失敗時のリスクが高すぎるから、軽い気持ちで試すようなものでは
ないわね」

「ダブルオーのツインドライヴみたい……」

「了解！ トランザム！」

「アリシア、爆発オチですか？」

「……ゴメンナサイ」

「どちらかといえば、鉄血のオルフェンズの阿頼耶識システムに近いのだけれどね」

「もっとヤバイよっ!？」



アリシアさんが、こたつの上に置かれた6つのみかんのうち、2つをカゴに戻した。「戦闘機人とエクリプスウィルスはなし。」

強化魔法もみんなが使ってるので、私だけのパワーアップには含まれない。つまり、

- ① 劇場版のアミタやキリエから、ナノマシンを供給してもらう。
- ② レリックを移植する。
- ③ 私専用の超高性能デバイスを作ってもらう。
- ④ フェイトのリンカーコアから作った融合騎とユニゾンする。

これで、私もフェイト以上の大魔導師になれるってこと?」

「……………」

わたしとプレシアお婆ちゃん、リニスさんの3人が顔を見合わせた。

こたつの中から「にゃ〜」と2世の声がある。

「「返り討ちにあう未来しか見えないうっ！」」

「みんなひどっ!?!」

「まあ、フェイトは私の教え子の中でも、最強の生徒でしたからね。それに——デルタクラスは、フェイトと似たカラーリングのバンシイに大破……」

「リニスう〜」

「まあまあ、2人とも。」

ここはひとつ、冷静かつ論理的に考えてみましょう。

仮に、1つの肉体強化で、1つ魔導師ランクがアップするとします。

また、本当は違うんですが、「魔力量クラス」と「魔導師ランク」を同じものとして扱います。

こうして考えた場合——。

『The MOVIE 1stパンフレット』のアリシアさんの説明に『魔力量Eクラス相当』とあるので、

- | | | |
|-----|---|---|
| ① E | ↓ | D |
| ② D | ↓ | C |
| ③ C | ↓ | B |
| ④ B | ↓ | A |

フェイトママはSランクなので……あ」

「……あ。

「……までやってフェイトに勝てないって、ママ、どーいうこととおお——っ!？」

「ヴィヴィオさん、今のアリシアの魔力量は……」

「本当のところ、どれくらい成長したかなんて、見た目じゃわからないですしね」

「相変わらずですね。まったく、誰に似たんだか……」

「……コホン」

プレシアお婆ちゃんが遠い目をした。

「私ね、最近思うのよ。

プロジェクトFで、フェイトやヴィヴィオが生まれたわけだけど……。

聖王女オリヴィエが、幼いころの負傷で、両腕や主要臓器を欠損していても、ヴィヴィオは、五体を損なうことなく誕生したわ。

今晚の高町家は大荒れである。

夕食1人分追加で——と、なのはママにメールを打たないと。

「まあ、それを失敗と思うかどうかは、人それぞれよね。私はそこが可愛いと思うのだけ
ど……」

「プレシア。そういうことは、アリシアがいるところで言っておあげましょうよ」

「はあ、本当、お婆ちゃんってDSだよね」

「あら、私、あなたの祖母よ？」

「そーでした！」

目指せ、赤龍帝！

7月に入ってしばらくした、ある日の学校の帰り道――。

「ムムツ！ 前方に緑髪発見！

リオ、コロナ、突貫するよっ!!」

「「おおーっ!!」」

ジェットステップで近づくと、タン――と大地を蹴る。そのまま相手の首に手を回すと、チャオズが「さよなら天さん」と言いそうな勢いで、背中にしがみついた。

「アインハルトさくん、これからジムですか？」

「ええ、ヴィヴィオさんも？」

「はい！ よかったらご一緒しませんか？」

「はい。もちろんです」

そこへ、ようやくリオコロが追いついてきた。

「あのく、ヴィヴィオ、アインハルトさん?」

「何事もなかったかのように、ヴィヴィオをおんぶして歩くのはどうかと……」

「そうでした! ……ですが、ヴィヴィオさんはダンベル50キロに比べればずっと軽いですから、さして問題ではありませんよ」

「そうだよ! ピッコロさんがよく戦闘前に脱ぐ重り入りのマントは、なんと100キロ以上あるみたいだし」

「あー、アレそんなに重かったんだ……」

「流石に、ドラゴ●ボールと比べるのはどうかと……」

すると、わたしをおんぶしたままアインハルトさんが振り返る。

「そういえばヴィヴィオさん。先日、ヴィヴィオさんのお祖母様にお会いして、肉体強化についてお聞きしたそうですね?」

「はい。プレシアお婆ちゃん相変わらず元気でしたよー」

「あ、お師匠様元気なんだ」

「あ、コロナ、お婆ちゃんにゴーレムのこと教わってるんだっけ？」

「ううん、ガンプラ」

「ガンプラ心形流とか教わってそうだよね」

「ゴライアスが3体合体する日も、そう遠くないかあ……」

話がカオス先生みたいになってきたところで、アインハルトさんが本題に入る。

「あの、結局のところ、私のご先祖さま——クラウスは、どんな肉体強化をしていたのでしょうか？」

お祖母様が何かおっしゃっていたなら、私も知りたいのですが……」

「あ、そのことですか。わたしが人造魔導師としてレリックを移植されたように、クラウス陛下は身体に“キングストーン”を埋めこまれたんですよ」

「キングストーン？」

「き、キングストーン……」

リオが全身を震わせる。

「リオが説明する?」

「あ、あたしでは興奮しすぎて難しいので、コロナお願い」

「はいはい。」

キングストーンというのは、世紀王の証で、BLACKの『太陽のキングストーン』と、シャドームーンの『月のキングストーン』の2つをそろえると、全次元世界の支配すら可能になるという、スゴい力を秘めたロストロギアなんです」

「世紀王ですか……霸王よりスゴそうです!」

「ピンチになると、そのとき不思議なことが起こった——みたいな感じで助かって、戦場でも、もう全部あいつ1人でいいんじゃないかな——くらいに活躍できるんですよ!」

「なるほど。そんなスゴいロストロギアが埋めこまれていたからこそ、古代ベルカ最強覇者になれたんですね!」

「——という冗談はさておき」

わたしをおんぶしたまま、アインハルトさんがズルつとコケそうになった。

「確かに、アリシアさんのパワーアップ計画に気を取られて、クラウドス陛下については聞き忘れてました」

「ヴィヴィオさ〜ん」

「まあまあ、今からちよこつと聞いてみますから。クリス、お婆ちゃんのこと通信つなげて——」

空間ウィンドウを開くと、そこに現れたのは白い三角巾を被った大魔導師の姿。

「どうしたのお婆ちゃん？ 給食当番？」

『違うわよ』

「給食のオバちゃ——ぴぎゃー」

リオがプレシアお婆ちゃんの次元跳躍攻撃を食らっている。

流石は大魔導師……。

そんなお婆ちゃんの背後で、アリシアさんとリニスさんが忙しそうに動き回っていた。

「あく、もしかしてこたつを片づけてるの？」

『ええ。流石にね、7月でこたつはないだろうって……』

「春がスコーンって抜けちゃったねえ……」

一気に夏服だ。

『それで、今日はなんの用よ？ 衣替えで忙しいんだけど』

「大丈夫、大丈夫。ちよつとした質問だから——」

さつきアインハルトさんに言われたことを、そのままお婆ちゃんに伝える。

『霸王イングヴァルトの肉体強化ね……』

そこに記憶継承した霸王っ子がいるのに、私が説明するというのもなんだけど……』

「すみません」

『まあいいわ』

お婆ちゃんの背後から声がする。

『説明……プレシア、白衣はいりますか?』

『3・2・1　どつかくん——とかやる?』

『いらぬいし、やらないわよ!　2人はそのまま掃除を続けなさい』

「愉快なおうちだよね〜」

——ポン。

リオとコロナとアインハルトさんから同時に肩を叩かれた。

「え、何で同情されてるの?」

『霸王イングヴァルトがどのような人造魔導師だったのか——という記録は残っていないわ。』

『Vi Vid』でも、オリヴィエの聖王核については説明があったけど、イングヴァルトの強化については一切触れられていない』

「じゃ、お婆ちゃんでもわからないの?」

『そうね。ただ、推測することは可能よ』

「「さすプレー!」」

「さ、さす……プレ?」

『はあ……。その不器用な子を見てると、昔のフェイトを思い出すのよね』

「す、すみません!」

『まあ、そういうところなんだけど……。まあいいわ。』

イングヴァルトの基本スペックは、1-1巻のエレミア（リッド）の台詞――

『彼の頑強さと打撃力には、目を見張るものがあつた』

からわかるでしょう。

霸王つ子が『霸王の身体資質』を受け継いだというけど、実際、その子の身体能力はイングヴァルトとよく似ている。

これは、私より、実際に手合わせしているあなたたちの方がよくわかっていることでしょうけど』

「うん。攻撃スキルも習得したダクネスみたいな感じだもんね。くっころ!」

「!？」

『その上で、霸王イングヴァルトがどのような人造魔導師だったのか――ということなのだけだ。』

ズバリ！ オリヴェイエ——つまり、聖王家と同じ聖王核を埋めこむタイプの肉体強化ね』

「「えっ!?!」」

「どうしてそんな結論に!?!」

『まず『2nd A, s パンフレット』にも載っている大前提として、

『ベルカの術者は総じて身体強化・武器強化の技能に優れ、近接格闘を得意とする』
『ミッドチルダ式は射撃・砲撃といった中々長距離戦闘を得意とする』

「(い)ま(で)は(い)い(わ)ね?。」

「「「は」」「」」

『前回も触れたのだけど、戦闘時のイングヴァルトは外見上の変化がない。

つまり、ユニゾンだったり、見た目でわかるような強化はしていない』

「あく、だから聖王核やレリックみたいな、身体の中に埋めこむタイプってこと?。」

『ええ。仮に、ゴムゴムの実のようなロストロギアがあつて、それを身体に埋めこんだと

する』

「それも強そう!」

『そうね。だけど、もしもイングヴァルトが、モンキー・D・ルフィのような戦闘スタイルだったとしたら、その霸王っ子は同じことができるかしら?』

「アインハルトさん、腕、伸びます?」

「伸びませんよっ!?!」

『あとは……そうね、イングヴァルトは、高町なのはのスターライトブレイカーや、ガンダムXのサテライトキャノンのように、大規模な砲撃は撃てたのかしら?』

「アインハルトさん、月は出てました?」

「出てませんよっ!?!」

『そういうことよ』

「「「どういふこと?」」」

『人造魔導師になってからの、クラウド・G・S・イングヴァルトの戦闘スタイルは、あくまで、その霸王っ子が目指せる範囲内だったのよ。』

『破壊力や技術は別としてね』

「平成ライダーみたいな強化フォームはなかったと?」

『そうね。昭和ライダーのようにシンプルな戦闘スタイル。いい意味での泥臭さ。』

つまり、身体に聖王核のような魔力補助コアを埋めこむという、シンプルな肉体強化を行ったと考える方が自然なの』

「ああ、それで3巻の合宿の夜、アインハルトさん——

『いつかあなたに追いついて、いつかあなたを追い越して、あの日のオリヴィエ殿下より強くなって、私たちの悲願を叶えるために——』

って言ってたんだ!」

「聞いてたんですか、ヴィヴィオさくん?!」

「えへへ」

「格闘戦技『霸王流』のみでクラウドス陛下より強くなれる」

「特殊な強化は何もなかった証拠だよね」

『もちろん、マリアージュコアを生み出す冥王イクスヴェリアのように、特殊なスキルを得た人造魔導師だった可能性もある。』

『Vi Vid』の8巻、9巻、11巻のように、武器を振るうこともあったでしょう』

「そういえばクラウドス陛下って、オリヴィエを止めようとしたときも、ベルセルクのガッツみたいな大剣を構えてたよね」

『そうね。だけど、その、オリヴィエと戦うシーンにこそ、霸王イングヴァルトが、聖王核を埋めこんだ』 もしくは、これから埋めこもうとする。』 決定的な証拠があるのよ』

「「「な、なんだってーっ!!!」」」

『『Vi Vid』の最も基本。1巻のメモリー07「はじめまして」をご覧ください。』

霸王っ子の見ている夢—— “一番悲しい霸王の記憶” よ——』

オリヴィエ 『クラウス、今まで本当にありがとう。だけど、私は行きます』

クラウス 『待ってください、オリヴィエ！ 勝負はまだ……！』

オリヴィエ 『あなたはどうか、良き王として国民とともに生きてください。この大地がもう戦で枯れぬよう、青空と綺麗な花をいつでも見られるような、そんな国を——』
クラウス 『待ってください！ まだです!! “ゆりかごには僕が——!!” オリ

ヴィエ!! 僕は——!!』

「ゆりかごには僕が……?」

『そういうこと。8巻でのオリヴィエとの会話から、イングヴァルトが “ゆりかごの事

情”を全て知っていたことはわかる。

その上で“ゆりかごには僕が——”と叫んだのだとしたら……」

「すでに聖王核を埋めこんでいた。もしくは、これから聖王核を埋めこむつもりだった……？」

「オリヴィエの代わりに、ゆりかごに乗るつもりだった……ということですか？」

『あなたの記憶では、どうなっていたか知らないけれど、会話からはそう読み取れるわね』

「でも、プレシアおばさん」

『——サンダーレイジO・D・J（次元跳躍）！』

「アバババババ!?」

『そのエターナル、もう一度』

「で……でも、プレシアお姉さん……聖王核って聖王家の血族しかダメって……」

『国交があった両国よ。何代前に興入れたのかは知らないけど、聖王家の血が、イングヴァルトに流れていてもおかしくはないでしょ』

「あゝ、そういうことかあ」

『世間では知られていない、ゆりかごの真実を知るほど、シュトウラは聖王家と深くつながっていた。』

そして『エレミアの手記』に書いてあった通り、イングヴァルトが本当に「呆れるほどにまつすぐで、面白いくらいに情熱的」な青年だったとしたら、

『オリヴィエの代わりに、僕を使い捨ての王として使つて欲しい——』

なんて聖王連合に申し出たとしても、おかしくはないでしょ？』

「あう〜」

「聖王連合は猛反対すると思うけど？」

『オリヴィエ以外に適合者がいなかったのだから、万が一を考えスペアパーツとして、王核を埋めこむことを許可したかもしれない』

「あ、そっか……。ゆりかごの王は、数年で命を燃やし尽くすんだから、ベルカ統一前にゆりかごが眠りにつく可能性を考慮して……」

『そうでなくても、聖王核がレリックというロストログアの一種だった——ということとは、現代においてスカリエツィが証明してくれたでしょ。』

人造魔導師になるための移植技術は、古代ベルカならほとんどの国が持っていたのだから、レリックと聖王家の血さえあれば——ゆりかごの王になることは可能だったの

よ。

あとは適合率の問題だけど、こればっかりは試してみないとわからないわね』

「ですが師匠。レリック1つで、古代ベルカ最強とうたわれるほど、強い人造魔導師になれるものでしょうか？」

『1つならそうでしょうね』

「……へ？」

『聖王家の子供たちのように、生まれると同時に埋めこめば、確かに適合率はアップするわ。でも、赤子の、肉体的な負担を考えれば、せいぜい1つが限界でしょうね。』

「だけど、エレミアの一族が驚くほど、生来の頑強さに恵まれ、さらに、ひたすら鍛え上げた霸王イングヴァルトの肉体であれば……。」

「しかも、聖王家の血を引いているのよ？ 一般の術者より、遥かにレリックとの適合率が高い。」

「そして、古代ベルカの完全な移植技術があれば……。」

「なるほど。2つ、3つ……クラウスなら、複数の聖王核を埋めこむ手術に耐えられたんですね？」

『ええ』

「そういえば、お婆ちゃんが集めてたジュエルシードも、いっぱい集めれば、それだけ効果が増したよね。レリックとよく似てたし」

『そうね。』

前回のアリシアじゃないけれど、仮に、子供のころの高町なのはやフェイトのように、生身のイングヴァルトの魔力量が、AAAクラス相当だったとしましょうか？

そして、聖王核1個で、1クラス上がるとする。

① A A A ↓ S

② S ↓ S S

③ S S ↓ S S S

わずか3つで、前人未到のSSSクラスよ。

鉄血のオルフェンズの三日月・オーガスは、阿頼耶識システムの手術を3回成功して、あの鬼神のような強さを手に入れたでしょ?』

「あく、アレか〜」

『……からさらに、4つ、5つと埋めこんでいったとすれば……』

「「手がつけられないよ!?!」」

『そういうことよ。』

ついでに言っておくと、11巻でエレミアが面白いことを語っているわ。

『幼い頃、両腕や主要臓器を欠損するような負傷を負ってもなお、健常者と変わらない——あるいはそれ以上の健康さで、ヴィヴィ様が生きているのは、彼女の言葉通り、彼女の血統と聖王核の恩恵と言っていいのだろう』

つまり、聖王核を埋めこまれた、聖王家の血を引く術者は、かなりの回復能力を手に入れるわけなのだけど……。

しかも、聖王核が複数あつた場合はどうなるか……??

『その覇王っ子——』

「はい?。」

『あなたは、なぜその猫型デバイスに、攻撃補助ではなく、ダメージ緩和と回復能力を求めたのかしら?』

「それは……」

「ダクネスだから……?」

「違いますよっ!？」

『ひよつとして、継承した記憶の中で、霸王イングヴァルトのもつ強力な回復能力を見たことがあつたんじゃない?』

「……」

『それこそ——昔あつた武神・川神百代の瞬間回復みたいなやつを』

「松風ええ〜」

プレシアお婆ちゃんが、格ゲーの勝利ポーズのごとく三角巾を取った。長い黒髪をなびかせる。

『以上のことから、霸王イングヴァルトは、オリヴィエと同じ、聖王核を埋めこむシンプリなタイプの人造魔導師だった——と、推測できるわけよ』

「なんてこつたい」

「クラウス……」

『だいたい……あなた、3巻で八神はやてにデバイス制作を頼んだとき、ヴィヴィオのクリスを手にしながら、

『この子のような補助・制御型がいいなと』

なんて言ってたじゃない。

ヴィヴィオと同じタイプがよかったんでしょ？

だったら、あなたのご先祖様だって、オリヴィエと同じタイプの肉体強化をすること
は、むしろご褒美だったんじゃないの？』

「なー」

「「それだっ!!!」」

こうして、プレシアお婆ちゃんは様々な波紋を残したまま通信を切った。

「ご褒美……」

「まあまあ、アインハルトさん」

わたしは、相変わらずアインハルトさんにおんぶされたまま慰める。

リオが「でもさー」と言う。

「シンプルな格闘戦技だけで古代ベルカ最強だなんて、最近のアニメで言えば『ハイス

クールD×D』のサイラオーグみたいだよね」

「あー、それは強いねえ」

「そうになると、ライバルのヴィヴィオが兵藤一誠で赤龍帝ってこと?」

「コロナ、おっぱいドラゴンはちよつと〜」

「いくらヴィヴィオでも、ドレスブレイク（洋服崩壊）は使えないもんね」

「女の子の衣服だけを破壊する技でしょ? まあ、使えなくてもないけど……」

「え、ヴィヴィオ使えるのっ!?!」

「うん。『Vivid Strike!』2話で、〃強化魔法あるある〃の話したでしょ? フーカさんが大人モードになったとき、ジャージだけ破れちゃったやつ」

「あった、あった。手伝ったコロナとユミナさんが制御に失敗したときでしょ?」

「うん。アレの応用で、こう、衣服に触れながら……魔力コントロールを乱してあげれば

……」

「っ!?!」

わたしを背中から下ろすと、アインハルトさんがそくさと遠ざかっていく。

「ちよー、やりませんってばああ!?!」

「そっか、ドレスブレイクもマスターしてたかー。流石はヴィヴィオ、アインハルトさんのライバルだね!」

「目指せ、おっぱいドラゴン!」

「うれしくないよ!?!」

断空がー

夏休みに入ったある日のこと。

心地よい朝のランニング中、わたしは並走するアインハルトさんに聞いてみた。

「アインハルトさん、結局のところ『断空』って何なんですか？」

「断空ですか？　そうですね……足先から練り上げた力を拳足から打ち出す技法そのものが『断空』です」

『Vi Vid』1巻で言っていたのと同じだ。

「でも、それってリオの実家のルーフェンで教わった『勁(チエン)』と一緒にすよね？」

14巻で、春光拳道場にいたリオの後輩——問題児の2人——が説明してくれたことをまとめると、

- ① 『筋力とか魔力による身体強化は「力」。近代格闘技で重視されているのはこっち』
- ② 『伝統武術が重視するのは、術理によって力を生む技術「勁」』
- ③ 『踏み込んだ力を拳で弾けさせる』ってイメージかな。筋力と魔力がしょっぱくても「必殺」の一撃を撃てる。それが春光拳の「勁」なんだ』

「アインハルトさんの断空は、

『足先から練り上げた力を拳足から打ち出す』

シユエさんの見せてくれた勁は、

『踏み込んだ力を拳で弾けさせる』

でしたけど……」

「そう言われてみると……」

アインハルトさんが橋の上で足を止めた。

わたしは小さなウサギ型デバイスに請う。

「クリス、お願い。」

断空についてまとめて——」

①『Vivid』11巻より。

クラウスの打撃。

『大地から足先へ、下半身から上半身へ螺旋を描いて力を伝える』

②『GOD公式攻略ガイドブック』

霸王断空拳より。

『右拳に全身の力を集めて渾身の一撃を叩き込む』

③ 『GOD公式ビジュアルブック』

霸王断空拳より

『拳にありつたけの魔力を込めて、乾坤一擲の一撃を相手のみぞおちに叩き込む』

④ 『A, sビジュアルファンブック』

魔力付与攻撃より

『自らの魔力を武器や肉体に乗せ、爆発的に威力を高めて行う攻撃。ベルカ騎士たちの攻撃技法の基本にして奥義ともいえる技法』

「——つまり、

春光拳の『勁』とは違い、螺旋を描く霸王流独特の『勁』こそが『断空』の技法。

そこに、ベルカらしい魔法攻撃の技法も加える。

よって、

『断空（勁）』 + 『魔力付与攻撃』 || 『断空拳』

なんじゃないかって思うんですけど……」

「ええ、その認識で間違っていないと思います」

「やっぱり……。」

『Vi Vid Strike!』で、フーカさんとリンネさんの試合を見ていたジークさんも言っていた。

『その硬い拳に古流の、霸王流の打撃法と魔力運用を加えれば、威力はさらに増すと……。』

「ただ、そうなる気になることもありません……」

「?」

「ほら、15巻で、変装したノーヴェが断空拳を放ったことがあったじゃないですか?

『お前の拳に眠る本当の威力は、お前が思うより、遥かに上の場所にある』

『これがお前の使っている断空拳。ここまでは練習すれば習得できる程度の技だ。

だが断空の真髄はこんなもんじゃないそうだ。

お前がいるのは、霸王流の入り口にすぎないってことだ』

それを受けて、20巻では「真・霸王断空拳」を放つわけですが……」

「あのときは、精神的に吹っ切れて、身体から余計な力が抜けたから放てたのでしょうね。」

理想的な、自然な形で『断空（勁）』を使えた——ということだと思います」

「本当にそれだけなんでしょうか？」

「？」

「アレが、本当にノーヴェの言う“断空の真髄”なんでしょうか？」

「といたしますと？」

「確かに強力な技だとは思いますが、格闘技の世界だけで見れば『ああ、なのはママみた（＝オーバーキル）……』だとも思います」

「いえ、そこまでは——」

「だけど、あれを古代ベルカの戦場で使っていたのかと思うと、疑問が残るといいですか……。」

「だって、シグナムさんやヴィータさん——ベルカの騎士たち——を見ていると、ベルカって魔法攻撃だけでも十分強いじゃないですか。カートリッジシステムもありましたし」

「それは……」

「アインハルトさんは、シュツルム・ファルケンやギガント・シユラークより、真・霸王断空拳が強いと思いますか？」

アインハルトさんが「ん〜」と可愛く唸る。

「つまり、ヴィヴィオさんは、断空の真髓とは、単に威力を増すだけでなく、もつと別の何かではないのか——そうおっしゃりたいのですね？」

「はい。単に『神撃』に至るだけでなく、もつと先に何かがあるんじゃないかって……。」

真・霸王断空拳の「拳の光り方」も気になりますし……」

「なるほど……断空の真髓ですか……。」

これはもう一度、ノーヴェ会長におうかがいするべきかもしれませんね」

わたしとアインハルトさんは、ランニングのコースを変更。

ノーヴェのマンションにお邪魔する。

「おう、どうした2人も。フーカならリンネのところへ——」

ノーヴェの用意してくれた朝食を口いっぱい頬張りながら、断空について尋ねてみた。

「断空の真髓って、今更だよな。もう、あたしよりアインハルトの方が詳しいんじゃないのか？ 実践しているわけだし」

「ん、ていうかさ……もぐもぐ……そもそもノーヴェって、アインハルトさんですら知らなかった断空の真髓について、どこから情報を仕入れてきたの？」

「……そりゃ、お前、あたし……というより、あたしの姉妹なら、表に出てこないようなネットワークもあるだろ？」

「うっ、確かに……」

管理局から聖王教会。果てはスカリエツティと親交のあった裏世界の住人まで。

「ついでに言えば、お前らと無限書庫に行つたのもいい機会だったな」

「無限書庫編？」

「ああ。それまで無限書庫なんてデカイ図書館程度のもんかと思つてたけど、未整理区画——だっけ？ あそこなら『エレミアの手記』なんて古代ベルカ時代の個人的な日記みたいなものであつただろ？」

「だつたら、霸王流に関する資料だつて、どこかに眠つてるんじゃないかって。」

「お前らのコーチだ——つて、胸張つて言うにはそれくらいは、な」

「そういうえば、8巻ではやてさんが言つていた。」

「私らの方でもいろいろ調べてたんよ。アインハルトの記憶にある諸王時代のこと——」

と。

「ノーヴェも、自分なりに調べてみようかと頑張つてくれたのだろう。」

「ああ、あのゲーセンで台パンしてたよーな暴れん坊ノーヴェが、図書館で調べ物だなんて……成長したねえ、ノーヴェも……」

「すっげームカつくんだが、否定できない自分がある……」

「あの、それで会長。その霸王流に関する資料には、断空の真髓についてのどのように書かれていたのでしょうか？」

「あー、それな。」

結論から言うと、よくわからん」

「はあ？」

「アインハルトの断空拳が、霸王流の入り口にすぎないってことまではわかったんだが……その、最終型となるとわからなかったんだよ」

「えー、なんでー？」

「なんでと言われてもな。」

お嬢（ルーテシア）の家で見ただろ？ イングヴァルト自身の回顧録はあっても、イングヴァルト自身の奥義書——はないんだよ。

その辺りは『エレミアの手記』を残した、ジークのご先祖様と同じだな」

むしろ、おかん——ヴィクターさんの方が詳しいというアレだ。

「とはいえ、周囲が残してくれた資料で、断空拳はあたしが使ってみせたような、単なる

『捻りを加えた勁』＋『魔力付与攻撃』

ではなく、もっと強烈な威力を秘めていたことがわかった。それと、断空の鍛錬方法もだな。イングヴァルト本人がやってたんだろ。

でもな、断空を極めるということ——断空の真髄が何を意味しているのかまでは、亡くなった霸王イングヴァルト本人にしかわからないんだよ。

つまり、アインハルトにしかわからないってことだな」

「そんな……」

「とはいえ、ヒントがないわけじゃーないぞ？

なのはさんだ」

「は？ うちのママ？」

「ああ。考えてもみろ、あの人、戦技教導隊だぞ？

魔導師用の新型装備や戦闘技術をテストしたり、仮想敵として演習の相手をするから、いろんな飛び方や戦い方をする。

もちろん、古流武術もだ」

「えー？」

「スバルが言ってたぞ。六課時代に、バリアジャケットすら装着してないのはさんに、4人がかりで軽くないなされたって」

「それはスゴいですね！」

そういうえば『StrikerS』の漫画でそんな話を読んだ気がする……。

というか、そもそもママの実家も……。

「だからさ、なのはさんなら、今のお前たちの中にある漠然とした霸王流の終着点に、1つの答えをくれるんじゃないか——」

というわけで、灯台もと暗し。

わたしは一周回って高町家に帰ってきた。

ついさつき朝食を食べていた気がするのだけど、今度はなのはママが作った昼食を口にする。

「はむはむ……で、ママ、断空拳なんだけど……」

「断空剣？」

「それダンクーガ」

テイルズの必殺技でもいいのだけど、どちらかというと有名なのは、スパロボにも参戦しているロボットアニメ——超獣機神ダンクーガの必殺技。

「我を空にして煩惱を断つ！」

「それも断空我。漢字で書いただけ。もう、わからないならわからないって言ってくれればいいのに」

なのはママが笑って言う。

「霸王流に関しては、私としても思うところはあるんだけどね。断空を語ろうと思ったら、たぶん、私よりもっと適任がいるんだよ」

「適任……ですか……？」

こうして、わたしとアインハルトさんが、なのはママの紹介で訪れた先は高町家——といつても、ミッドではなく、地球の高町家——そう、なのはママの実家だった。夕食後（うん、なんか食べてばつかな気がする）。

その道場主に対して、アインハルトさんが今必殺の——

「真・霸王断空拳——」

螺旋を描く衝撃を、道場主は刀の刀身で受け流してみせる。

「あ、あれ？」

非殺傷設定で威力を抑えていたとはいえ、相手は魔法世界の住人ではない——にもかかわらず、霸王流の奥義があつさり破られたのだ。

アインハルトさんとしては、それこそ魔法をかけられたような気分なのだろう。

「なのはママのお父さんなので……」

「あ、ああ〜」

それだけで納得されるのもどうかと思うけど、割とマジで強い古流武術。御神真刀流の使い手だ。

ちなみに、わたしが御神流の奥義・神速をマスターすれば、神眼・神速のコンボで、ほぼ無敵になります。

士郎さんが険しい表情を浮かべた。

「やはりな……」

「何かわかったの？」

「ああ。魔法世界とこっちの違いはあるが、同じ古流武術の使い手として思うところはある。

君の——アインハルトちゃんの断空という技法は、おそらく、なののような魔導師を相手にするための技術ではないね」

「え？」

「もつと別の相手と戦うことを想定している」

「どういこと？」

「いくつか霸王流の技を見せてもらったんだが、例えば旋衝破——アレは魔法だけでなく、物理攻撃も跳ね返すことができるんじゃないかい？」

「はい」

そういえば、6巻でコロナのゴライアスが飛ばしたパンチを跳ね返していた。

「それと破城槌だったね。その名の通り、城門なんかを破壊するための技に思えるけど

——」

古代ベルカの城攻めに必要だったのだろう。

「なのはのようには、遠くから強力な魔法を撃てる世界で、わざわざ危険を犯してまで接近して破壊する必要があるのかい？」

「それは……」

「もつと別の、硬い、特殊な何かを破壊するために考案されたようにも思える」

……うん。

そういえば、アインハルトさんが初めて破城槌を使ったのは、ゴライアスの「腕部」を破壊するときだったっけ……。

「『霸王流』とつく技はみんなそうだ。どれも、普通の武術の技のように見えて、その根底には、もつと別の目的があるように感じられる」

「別の目的……ですか？」

「ああ。それは俺にはわからないが……そうだな、君の拳に宿る光は、どこか、なのはたちが使う魔力とは違うように感じられるよ——」

翌日。

地球から帰ったわたしとアインハルトさんは、アインハルトさんの家で話し合いをしていた。

ちなみに、20巻でアインハルトさんちに泊まったとき、みんなしてパンツ姿だったのは『Vivid』が終わってしまった今では永遠の謎である。

おそらくだが、2巻の合宿の夜——アインハルトさんだけパンツ姿だったので（わたしはパジャマ姿だ）、

「アインハルトさんちでは、夜、パンツで寝るのがデフォなのだろう」

「そーいう間違った情報を発信するのは止めてください！」

「いや、案外いい線いってると思っただんですが……」

「こほん。パンツの話は置いておきまして、以前から1つ疑問に思っていたことがあったんです。

チャンピオン——ジークさんの中には、先祖代々続く、数多くのエレミアたちの戦闘経験が受け継がれていると聞きました。

なのに、私と初めて対戦したとき、霸王流についての記憶がまったくありませんでした」

「そういえば、そんなこともありましたねー。

8巻の試合中は、アインハルトさんのこと “古流武術家ちゃん” 呼ばわりしてましたよね」

「はい。なので、クラウドと拳を交えていたエレミア——リッドの戦闘経験は、一体どこへ行つてしまったのだろう——と」

「だったら、ジークさんに聞いて……」

「ええ、そうしたいの山々なのですが……」

また、その辺でふらつとゆるキャン中である。

いや……がちキャンなのか、アレ……？

仕方がない——。

『——で、私に連絡してきたと？』

「はい。ジークさんのオカンさん」

『違いますわよ!』

雷帝のお嬢様。ヴィクターさんその人である。

『——で、ジークが霸王流を知らなかった理由ねえ……』

大きな胸を押し上げるように腕を組む。

『ひよつとしてなんだけど、今アインハルトが使っている霸王流は、クラウドがオリヴィ

エヤリツドと別れてから考案した流派——つてことはないの？」

「ああ〜！」

10年間軟禁され続けたリツドさんが解放されたとき、すでにクラウドス陛下は戦場で命を落としていた。だから、エレミアの記憶に霸王流はなかったのである。

「そう考えれば辻褄が合いますね！」

「流石、ジークさんのオカンさん！」

「だから、それはやめなさいって——」

『ただいまー』

通信の向こうから、どこかで聞いたチャンピオン声が聞こえてきた。

ヴィクターさんが早速向かう。

『もう、こんな長くほつき歩いて……』

『堪忍な〜』

『汚れたジャージは、ちゃんと洗濯カゴに……早くお風呂に入ってきてなさい……ご飯は

——』

……………。

わたしとアインハルトさんは、そつと通信を切った……。

「つまり、霸王流は、クラウド陛下がオリヴィエに負けて、オリヴィエがゆりかごに乗ったあと作られた——つてことになりますよね？」

「ええ、初めてリッドと試合をしていたときの様子から、すでに断空の基本となる型はあつたようですが——」

自分で編み出した——というより、城に招いた旅の武術家から教わった——それをクラウド陛下なりにアレンジした——と考える方が自然だろうか。

「1つの流派として創始したのは、1人になってからなのでしょよね」

「でもアインハルトさん、それっておかしくないですか？」

「どういうことでしょう？」

「誰よりも強くなつて、早く戦争を終わらせたい——つて願うなら、あの時代、新しく武術を創始するより、全盛期だったベルカ式の魔法を極めた方がよかつたんじゃ……？」

「シグナムさんやヴィータさんみたいに——ということですか？」

「はい」

人造魔導師になり、さらに強靱な肉体と巨大な魔力を得たクラウド陛下なら、間違いなく最強のベルカの騎士になれただろう。

「その道を選ばなかつたつてことは、お爺ちゃん（土郎さん）が言っていたように、霸王

流には、ただ強くなるだけでなく、もっと『別の目的』があったと思うんですね」
「別の目的ですか……。」

そういえば、6巻でコロナさんと戦ったとき、私の台詞で、

『身体自動操作や頑強な腕部武装。霸王にとってその対策は、600年前から取り組み続けた課題だったんです』

ってあつたじゃないですか」

「はい。ありましたねえ」

「アレは、オリヴィエ王女のことなんですが……」

漫画を読むと、オリヴィエの姿がすっかりコマ載っているの、間違いないだろう。「あのときはそこまで深く考えていなかったんですが、改めて考えてみると、オリヴィエがゆりかごに乗ったあとも、彼女への対策を続けていたということは一——」

「霸王イングヴァルトは、間違いなく、もう1度オリヴィエと戦うことを想定していた!?!」

「以前、ヴィヴィオさんが、

『クラウスの最終目標は、ベルカ平定後、ゆりかごからオリヴィエを救出すること』

と考察していたじゃないですか。

『場合によっては、ゆりかごと一戦交えるつもりだった——』
と。

けれど、クラウドスは、ゆりかごだけでなく、オリヴィエと戦うことも視野に入れていたのではないのでしょうか？」

「でもでも、クラウドス陛下が迎えに来てくれたってことは、すでに大きな戦争がなくなつたころなわけで、素直に——」

「それをヴィヴィオさんが言いますか？」

『Strikers』……。

「あう、そうですね。」

もしわたしがオリヴィエだったら、クラウドス陛下が迎えに来たとしても、たぶん、最後までゆりかごを降りないかな」と

「やっぱり……」

「もしも、自分が生きているうちにベルカが統一されたとしても、しばらくは政情や治安が不安定だと思えますよねえ……」

どうせ数年の命ですし、それなら抑止力として最後まで——命が尽きるまで——空を飛び続けるんじゃないかなって……」

実際、『Vivid』9巻によると、諸王乱立の戦国時代が終わり、聖王家によりベルカが統一の道を歩み始めても、ゆりかごは聖王家の剣として、空を飛び続けたという。

「そんなヴィヴィオさん——オリヴィエを、私——クラウドだったら、殴つてでも連れ帰るだろうなって」

「そして逆に殴り倒されると言う……」

「やめてくださいーい！」

「つまり、霸王流とは、ただ強くなるだけが目的ではなく、むしろ——」

「対ゆりかご戦。」

AMF（アンチ・マギリンク・フィールド）の影響下で、再びオリヴィエと拳を交えることを想定した格闘戦技！」

「——つてことですか？」

「はい。魔法が無効化されてしまう領域内でも、伝統武術の『勁』——つまり『断空』の技法であれば問題なく力を振るうことができるはずですよ」

「なるほど」

「ただ、純粹な魔導師であるヴィヴィオさんのお母様も、ゆりかごを墜とされたというこ

とは、断空がなくても勝てるという証明でもあるわけで……」

「うーん、あのときのことをなのはママに聞くのはちよつと……つて、あ、もう一人いた——」

というわけで、永遠の赤色チビっ子のもとへ連絡を入れる。

『あ？ ゆりかごと……』

大怪我を負ってたしなあ……。

ヴィータさんにとつても、あまり思い出さたくない記憶なのかもしれない。

『バルス、バルス……』

「待って、待って、なに唱えてるのおお!?!」

『ゆりかご戦のあとな、休養ついでに海鳴のじーちゃんばーちゃん家に泊まったことがあったんだよ』

「は、はい……」

『そしたらさ、ちよーどラピユタの再放送があつてさ——。』

『うげー、ラピユタ内部ってロボット兵がたくさん搭載されてやがったんだな……』

まともに喧嘩したら勝てねーだろ。

つーか、ゆりかごん中も、昔はもつとたくさんガジェットIⅤ型がいたんだろーな……。

バルス、バルスと……』

思ったわけだ』

ちなみに「ガジェットIV型」は、スカリエッティが参考にしたという、元々ゆりかごに搭載されていた古代の自律行動兵器だ。

ヴィータさんを追い詰め、かつてなのはママを墜落させた犯人もコイツ——なわけで、1体でもかなりの戦闘力をもつ防衛システムなのだけど、

『つーかヴィヴィオ、次やるときは、先に滅びの言葉をだな——』

——ブチッ。

わたしとアインハルトさんは通信を切った。

「滅びの言葉は置いといて、確かに、ヴィータさんが苦戦するようなロボット兵——」

「ガジェットです、ガジェットドローン」

「——が、うじゃうじゃいたとしたら、普通の魔導師じゃ手も足も出ないかと」

さらに『StrikerS魔法辞典』には、

『ゆりかごに乗る乗組員や騎士たちがAMF対抗の訓練を重ねることで、

自分たちは魔力を運用し、

侵入してきた敵対象は魔力を使用しづらい、

という状況にすることで、艦内の防衛力を高めていたと思われる』

とあった。

「つまり、かつてのゆりかごには、AMF状況下で戦う訓練をしている聖王家の騎士団も常駐していたってことです。

仮にも聖王家ですからね。

その中に、2〜3人くらい、シグナムさんやヴィータさんに匹敵するベルカの騎士が乗っていたかもしれせん。

そう考えると、断空のような魔力に頼らない戦闘技法が、ゆりかご攻略には必須だった——と考える方が自然だと思えます」

「でしたらヴィヴィオさん。

『断空の真髄』とは、やはり『断空（勁）』の技法を極めることにあつたのではないでしようか?」

『断空の真髄』＝『神撃の領域』

ということだ。

「確かに、人造魔導師になったクラウス陛下なら、

『断空（勁）』＋『魔力付与攻撃』

だけで、サイラオーグみたいに強いので、ゆりかごを突破することができると思いません。

ですが、クラウス陛下なら、

『まだ足りない……』

と思っただはずです」

「どうしてでしょうか？」

「ゆりかごの聖王になったオリヴィエには、『聖王の鎧』があつたからです」

「聖王の鎧、ですか……？」

「はい。ゆりかごに関してアレほど詳しく知っていたクラウス陛下なら、まず知らないことはありえませんが……」

というより、オリヴィエから詳しい話を聞いていたかもしれませぬし……」

「聖王の鎧とは、どのようなものなんですか？」

「そうですね……。簡単に説明すると、わたしのセイクリッド・ディフェンダーの完全上位互換です。」

今のわたしですら、アインハルトさんの断空拳や、ミウラさんの抜剣を防げますからね。」

さらに、ゆりかごから無尽蔵の魔力が供給されますから、完全な聖王の鎧には、物理・魔法攻撃はもちろん、断空（勁）の技法ですら、ほとんど効果がなかったはずだ」

「……つまり、先日お借りしたドラクエのメタル系モンスターみたいな感じでしょうか

「？」

「あく、経験値が多いかどーかは知りませんが、そんな感じかもですなー」

ついでに攻撃力も高いという詐欺みたいなボスキャラだ。

「光の玉なしでゾーマに挑むといいましようか、もしそのまま挑戦したら、クラウス陛下涙目だったでしょうね」

「それって倒せるんですか？」

「んー、オリヴィエの場合、わたしみたいなレベル1聖王じゃなくて、レベル100聖王ですからね……どうでしょう？」

「ここは1つ、同じボスキャラ枠だった人に聞いてみましようか？」

『GOD』版の惑星エルトリアと通信をつなぐ。

『——むっ、どうしたこわっばども』

いつもながら、エプロン姿のディアーチエが料理をしていた。

もうこのまま料理業界で世界征服すればいいんじゃないかな。

「王様、王様。聖王の鎧の攻略方法って知ってますか？」

『ふむ……聖王の鎧か……。まあ、なくもないが……』

「え、本当ですか!？」

「紫天口ボ——とかいうオチはなしですよ？」

『レヴィじやあるまいし……というか、劇場版に登場した3体の機動外殻を使う——というのはいつの手ではあるだろうか』

ああ、アレか。

『とはいえ、アレ程度で勝てるほどベルカの戦乱期は甘くないぞ。』

聖王の鎧を突破するには、劇場版でユーリが放った結晶樹のような攻撃が必要になるだろうな』

あのクロノ提督を、モブ魔導師と一緒にあつさり行動不能にしたアレだ。シグナムさんやフェイトママもやられている。

『パンフレットは見たのだから？ アレは“通常の魔導防御が機能しない”攻撃だからな』

お玉をブンブン振る。

「だったら、永遠結晶エグザミアがあれば、聖王の鎧も突破できるってこと？」

『うむ。あとは劇場版の高町なのはが使っていたフォーミュラカノンだな。』

ブックレットによると、

『魔力をフォーミュラエネルギーに変換し、電磁コートを加えて打ち出す機構を持ち、「魔力無効化」や「エネルギー分解装甲」能力を持つ対象にも有効打を与える事が可能』

とある。

つまり、魔力を、データのない第3のエネルギーに変換し、攻撃することができれば、聖王の鎧すらも貫く最強の矛になるわけだ——』

『要はアレでしょ！ かーめーはーめー——』

『だああ！ やめんかレヴィ！』

——ブチッ。

通信が切れた。

「そういえばリリカルなのはに『気』ってなかったっけ……」

ぶっっちゃけ、光子力エネルギーやゲッター線でもいけそうな気がする……でも……。

格闘技だしなあ……。

「とりあえず、その『第3のエネルギー』＝『未知のエネルギー』を『気』と呼びましようか？」

「わかりました。

つまり、

『断空（勁）』＋『魔力（バリアジャケットなどの肉体強化）』＋『気付与打撃（魔力を変換）』

すれば、クラウドは、オリヴィエ王女に勝てるということですね？」

「ええ。攻撃は通りますし、あとはクラウド陛下の頑張り次第で……って、あー、そうか、

そういうことだったんだ！」

「？」

「えつとですね、さっきのフォーミュラカノンの説明を置き換えてみてください。

もしも、クラウド陛下が、

『魔力を“気”に変換し、断空の技法を加えて打ち込む技術を持ち、「魔力無効化」や「エネルギー分解装甲」能力を持つ対象にも有効打を与える事が可能』

だったとしたら——」

「ああー！ 私にもわかりました！

古代ベルカ時代に、劇場版のユーリさんや、エクリップス感染者のような、魔力エネルギーを無効化できる存在と相對しても、霸王流のまま、自身の戦闘スタイルを変えることなく戦うことができた——ということですね！」

「はー！

前から思ってたんですよ。

同じベルカの騎士であるシグナムさんやヴィータさんでも勝てない相手と、当時の騎士たちは、どうやって戦っていたのかなって。

強力な質量兵器も、混戦状態では使えないじゃないですか。

味方ごと消滅させた指揮官もいたかもしれませんか……。

けれど、もしクラウス陛下がそういった力を持つていたとすれば、引くことなく打ち破ることも可能です。たった1人で前進を続けるんです！

これこそ『霸王』の名に相応しいと思いませんか？」

「ああ、霸王流……最強じゃないですか！」

現代の霸王様もご満悦である。

翌日。

わたしとアインハルトさんは、調査結果をジムで報告することにした。

リオコロたちみんなが体育座りで聞いている。

「オリヴィエがゆりかごに乗ったあと、クラウス陛下は霸王流を創始しました。

それにもかかわらず、クラウス陛下がオリヴィエ対策に取り組み続けたという事は——いつかゆりかごに乗りこみ、オリヴィエと再戦することを胸に秘めていた証拠です。

そう——霸王流の真の目的とは、オリヴィエに勝利し、救うこと。霸王流とは、そのために考案された格闘戦技だったのです！

AMF状況下での戦闘を考慮し、霸王流では魔力を使わない攻撃——伝統武術における『勁』の技法の一種である『断空』を基本とします。

また、古代ベルカの騎士たちは、自分の魔力を武器や肉体に付与することを、攻撃技法の基本にして奥義にしています。

故に霸王流では、奥義である『断空拳』を、

『断空（勁）』＋『魔力付与攻撃』

としてきましたが、それでは神撃の領域に踏みこむことはできても、オリヴィエの聖王の鎧は打ち碎けません。

それを知っていたクラウド陛下がたどり着いた領域こそが、さらに先の——断空の真髓。

『断空（勁）』＋『魔力』＋『気（魔力を未知のエネルギーに変換する）』

という特殊な技法でした。

例によって、アルハザードの関与があつたかもしれませんが。

ひよつとしたら、真・霸王断空拳も不完全ではあるのですが、

『断空（勁）』＋『気付与攻撃』

だったのかもしれませんが。

拳の奇妙な光り方や、リングの外周防護フィールドが役に立たなかつた説明にもなりません。

皮肉な話ではあるのですが、オリヴィエを救うために身につけた力は、エクリップス感

染者など、魔力エネルギーを無効化できる相手に対しても、極めて有効だったのでしょう。

多くのベルカ騎士が苦戦する中、たった1人でも勝利し続ける存在——霸王の名が広まった所以だと思われまます。

『魔法少女リリカルなのはStrikerS THE COMICS 1巻』に、シグナムさんとヴィータさんのこんな台詞があります。

『己が信ずる武器を手に、あらゆる害悪を貫き敵を打ち砕くのがベルカの騎士だ』

『魔導師どもみてーにゴチャゴチャやんねーでも、ストレートにブツ叩くだけでブチ抜けんだよ！』

クラウス陛下は、ある意味、ベルカの騎士の理想を体現していたのかもしれない。あらゆる敵を、拳ひとつでブツ叩く。殴り倒す。

そんな「霸王」の名に相応しい、ベルカの王になれたのだと思います。

ただ、その姿を一番見せたい相手は、ずっと空の上にいたのですが——。

最後に、20巻でクラウス陛下の記憶が消えてしまったときのインハルトさんの台詞に、

『クラウス

あなたが望んだ霸王流の強さに

わたしは少しは

近づけましたか？」

とありましたが、クラウス陛下が望んだ霸王流の強さとは何だったのか？

それは、同じく20巻のラストで、アインハルトさんがわたしに言ってくれた言葉にあります。

『やりたい事は全部やってみて、そして、自分と自分の大切な人を一番幸せにできる道を、笑顔にできる道を選んでいくのがいいのかなと』

そうです。

オリヴィエを笑顔にすることが、クラウス陛下が望んだ霸王流の強さであり、そのために必要な力が『断空の真髄だった』——そういうことだったのでしょう」

ジムがしんと静まり返る。

「なんだかとてもスツキリしました——」

アインハルトさんにしては珍しく、その場でクルクル回っている。

霸王流にとっては納得がいく結論だった——ということだろう。

すると、

「ねえ、ヴィヴィオ〜」

「はい、リオ」

「『断空』 + 『魔力』 + 『気』って、ネギまの『咸卦法』に似てない？」

「うっ」

「ネギ先生が、

『中国拳法』 + 『魔力』 + 『気』

で、咸卦法を使いこなしてたことを考えると、よく似てるような……」

「ふお、せつかく内緒にしたのに、言ってはならんことを。行き着いた先が一緒になっちゃったの！」

「ゴメン、ゴメンってば〜」

リオにアクセルスマッシュWを決めていると、

「ねえ、ヴィヴィオ」

「はい、コロナ」

まあ、コロナならリオと違って大丈夫だろう。

「ねえ、知ってる？」

「豆し●みたいだなあ……」。

「ダンクーガノヴァの放送終了は2007年5月。

なのはVividの連載開始は、2009年5月。

『断空剣』から『断空拳』を思いついたとして、企画がスタート。漫画家さんが決ま

り、断空剣のほとぼりが冷めたころっていうと、2年くらいがちょうどいいよね?」
.....。

「それ、一番言っちゃダメなやつだよね!?!」

テイルズオブつてるヴィヴィオ

毎日暑くて、もうランニングするときは水着でいいんじゃないかな——と思う今日このごろ。

夕方になり、

「たっただいま〜」

と、なのはママが帰ってきたので、ジェットステップで玄関へお出迎え。

（よく考えると、娘が一瞬でやってくるおかしな家かもしれない）。

「お帰り、なのはママ〜……って、何でギター持つてるの?」

「教導で使ったからだけど?」

「へー……」

はぐつと使ったのだろうか……?

「一応聞いとくけど、どこで教導してきたの? はぐくみ市?」

「とある島（アイランド）で……」

「へー……」

OPなど、急に歌ってきたのだろう。

ツインラブギターを持つと、一緒にリビングへ向かう。

「——それで、ヴィヴィオは何してたの？」

「リオから借りたアニメのDVDを見てただけど……」

再生ボタンをポチッと。

『ガラス玉ひとつ落とされた』

「あー、『テイルズオブジアビス』のOP『カルマ』は、名曲だよなー」

「うん、そこに異論はないんだけど——」

曲はいいし、歌詞がゲーム内容ともリンクしているので、ゲームのOPとして、これ以上ないくらいの完成度だと思う。

とりあえず、冷蔵庫から冷えた麦茶をコップに注いでなのはママに手渡す。

「改めてアニメ版を見て思ったんだけど……」

「うん」

「主人公のルークは17歳。だけど、本当はレプリカ（クローンみたいなもの）だから、外

見は17歳でも、中身は7歳の男の子だったでしょ？」

「そういえば、そんな内容だったねえ……」

ちなみにゲームの発売日は、ちょうど『A's』でなのはママと初代リインフォースさんが戦っていたころだったりする。

「アビスの舞台となる世界は、1年が地球の2倍の日数だから『ルークも14歳だ!』って主張する人もいたけれど、異世界を地球換算するのもどうかと思うから——。

ほら、よくファンタジーもののエルフで100歳越えてるけど、精神年齢は意外と幼い——みたいな多いでしょ？」

だからルークも、ここは素直に7歳でいいかなと……」

「そこはまあ、個人の自由じゃない？」

「なのはママだって、急に年齢が倍になったら……えっと、この小説で一応『Vivid Strike!』〜『Force』までつて扱いだから……、

新暦80年……『Vivid Strike!』(なのはママ 24歳)

新暦81年……『Force』開始(なのはママ 25歳)

仮に、新暦81年の25歳を採用すると、倍で50歳——」

「お〜っと、ヴィヴィオ、それ以上は少し頭を冷やして黙ろうか……」

ガッ!

「やめて、やめて、アイアンクロおおくつ! ギブ、ギブ!」

夏休みの娘にアイアンクロする母親はどうかと思う。

「はあ……はあ……そ、そういうわけだから、ルークを7歳扱いで話を進めるけど……」
「許可します」

「えーつと、ほら、わたしってオリヴィエのクローンにしては——聖王核を抜きにしても——弱いなあ、って思わない?」

「うーん、弱いつていうけど、D S A AのU15でワールドランク7位でしょ?」

「でもでも、仮にも古代ベルカで武技において最強を誇ったオリヴィエのクローンが『格闘には向いていない』とか『か細い魔力』とか評されるのはおかしくない?」

「えつと……つまり、」

『実は、わたしは、オリヴィエのクローンじゃなかったんだよ!』

『な、なんだつてー!?!』

「みたいなの?」

「あ、それはないから、大丈夫。」

『Vivid』本編で、わたしがオリヴィエの記憶を思い出すシーンもあったわけだし。

それまでは、ひよっとしたらオリヴィエとは別の聖王——という可能性もあったけど、記憶を思い出したということは、普通のクローンでもなく、プロジェクトFの技術で作られた、オリヴィエのクローンで間違いないからね。

わたしとアインハルトさんには、誰よりも濃い600年分のご縁がありました——つてことでオールオツケー」

「だけど、弱いな？」

「うん。どれだけストライクアーツで結果を出したとしても、なのはママの9歳のときの活躍と比べちゃうとね……」

「あー」

『『Vivid』1巻のアインハルトさんの台詞じゃないけど、

『この体は間違いなく強いのに……』』

って、感じなんだよねえ。

わたしもう11〜12歳だよ？

オリヴィエなんて、でっかいバトルアックスをブンブン振り回すような人だったんだ

よっ」

「うっ、うっ……」

「そこでわたしは考えました。

ひよっとしたら、ルークがレプリカで7歳だったように、わたしの出生にも、もっと何か「別の秘密」が隠されているんじゃないかと！」

「そーいうことかあ〜。」

……別の秘密ねえ〜。

例えば、

① どうしてスカリエツティが、自分で聖王のクローンを作ろうとしなかったのか？

② プロジェクトF——記憶転写型特殊クローン技術の割に、オリヴィエの記憶がほとんどないのは何故なのか？

③ オリヴィエが亡くなった年齢と比べ、ヴィヴィオが幼すぎるのは何故なのか？

④ プロジェクトFで作られたから、最初から知識や言語があつて当たり前——なのに、何故オリヴィエが使つていたはずの古代ベルカ語ではなく、ミッド語を話したり、読んでいたのか？

——とか？」

「……うん、まあ、その辺りはあまりツツコミすぎると『StrikerS』の「居酒屋お品書き事件」とか、色々あるから。」

とりあえず、わたしが戯れで書いた4コマ漫画でお茶を濁しとくね——」

天才美少女魔導師フェイトちゃん！

作 高町ヴィヴィオ

1

なのは 『わたし、なのは……高町なのは——』

フェイト ……。

2

なのは 『私立聖祥大付属小学校三年生——』

フェイト ……。

3

なのは 『……お話ししないと、言葉にしないと、伝わらないことも……きっとあるよ

……』

フェイト ……。

4

なのは 『それにまだ、あなたの名前も聞いてない！』

フェイト 「ア……アイキャンノットスピーク、ジャパニーズ！」

「——と、まあ、そんなわけで①④のツツコミに対して簡単に答えると、DNAって壊

れやすいでしょ？

だから、死後、600年経過していたオリヴィエの遺伝子は、かなり劣化していたんじゃないかなって」

「そういえば『Strikers オフィシャル ファンブック』にも、

『布にわずかに付着していた血液から聖王の遺伝子情報が抽出された』

って書いてあったね」

「うん。たぶんだけど、オリヴィエのクローンを作ろうにも、DNAに欠損部位が多かったんじゃないかなって。

スカリエッティが必要としていたのは、ゆりかごを動かす鍵としての聖王だけど、その欠損部位のせいで、ゆりかごとの適合率が上がらなかったとしたら……」

「いくらクローンを作っても意味ないってことかあー」

「うん。だから、うれしくないんだけど、

『わたしはたぶん3人目だと思うから……』

みたいな感じか……。

『ヴィヴィオはヴィヴィオは説明を続けるよ』

みたいな可能性もあつたのかなって……」

「ヴィヴィオがオリヴィエよりちっちゃかったり、アホ毛があるのは、打ち止め（ラスト

オーダー) みたいな存在だったからと?」

「いくらなんでも20000人もいないからね。ただ、まあ、最初はオリジナル——オリヴィエと同じ年齢のクローンが、いっぱい作られたかもだけど」

「そういえば妹達(シスターズ)も、みんな欠陥電気(レディオノイズ)だったね。オリジナルの1パーセントにも満たない能力しかない——だっけ」

「うっ……オリヴィエの1パーセントに満たない能力があく。納得しそうになるけど、とりあえず〃とあるシリーズ〃から話を戻すね。

えっと、ゆりかごを動かせるオリヴィエのクローンを作る上での問題点は、

『じゃあ、足りない欠損部位を、一体どんな遺伝子で補おうか?』

って話になるんだけど……」

「うくん……でも、それだと完全なオリヴィエのクローンは生まれないんじゃない?」

「うん。それでもスカリエッティは構わなかったんだよ。

だって、彼にとっては、ゆりかごさえ動けばよかったんだもん。わたしのことを〃鍵〃に過ぎない——なんて言ってたくらいだし、オリヴィエの記憶や人格なんて二の次だったんだよ」

「そっか。じゃあ、スカリエッティが最初に狙うとしたら……やっぱ、聖王家の子孫だよな。アインハルトちゃん(霸王)やヴィクターちゃん(雷帝)みたいな感じで、聖王

家の血筋だつて遠縁でも残っているだろうし」

「うん。ただ『Vivid』11巻でもあったけど、聖王家の人間でも、ゆりかごに適合する人は少なかったみたいだから……」

「そうだねえ……。上手く行かなかつたからこそ、スカリエツティも自分でクローンを造ることを中止して、他の誰かが造つたのを、ガジェットドローンで奪おうとしたわけだし」

「あはは……まあ、お陰でトラックから逃げ出せたんだけどね」

「そうでなければ、キャロやエリオ——そして、なのはママには出会えなかつたかもしれない。」

「それで——ヴィヴィオはわかつたの？」

他の、どんな遺伝子で補完されたのか」

「うん。確証はないんだけどねー。」

じゃ、ヒント出すよ？

①古代ベルカ語ではなく、ミッドの言語を使っていたこと。

つまり、ミッド生まれ。

②優しいフェイトママだけでなく、当時の機動六課には『自身を保護し、学習させてくれる人物』がたくさんいたにもかかわらず、なのはママだけにやたらと懐いたこと。

簡単にいうと、なのは大好き！

③ 正確な年齢は不明だけど、オリヴィエと違い、わたしは5歳くらいの年齢で造られた。

他に、クローンで5歳の子供といえば……。

④ 遠距離からの砲撃魔法も使えるが、どちらかというところ、速度や回避能力をいかした近接戦闘を好む傾向にある。

いわゆるレヴィじゃない方。

——こんなところで、どう？ わかった？」

「……えーっと、ヴィヴィオ、私、この人、よく知ってる気がするんだけど？」

「うん。わたしもね、よく知ってる気がする。

ついでにね、

⑤ オリヴィエの遺伝子のはずなのに、わたしはタイプとしては学者型。戦闘魔導師になるにしても、中後衛型。

なんでだろう？

⑥ オリヴィエ——聖王と同じように、媒体からのエネルギー供給を受けることで、それを自身の魔力として運用できる特殊技能の持ち主である。

誰とはいわないけど、開発者でありながら「その気になれば大魔導師にも匹敵する」魔

導運用を可能としていた人がいたなあ……。

——つてもあるんだけど？」

「……ごめん、ヴィヴィオ。私、この人も知ってる気がする」

「うん。わたしも知っちゃってるかな、なんて。」

そもそもね、『StrikerS オフィシャル ファンブック』によると、プロジェクトFは、

『スカリエッツィが基礎理論を構築し、フェイトの母親であるプレシアが完成させた』
ってあるの。

『StrikerS』本編の24話でも、スカリエッツィ本人がフェイトママに対して、
『君の母親プレシア・テスタロッサは、実に優秀な魔導師だった。私が原案のクローニ
グ技術を、見事に完成させてくれた——』

って言ってたし。

そうなる……これはお婆ちゃん本人に聞かないとわからないけど、スカリエッツィ
同様、最高評議会から援助を受けていた可能性もある」

「プレシアさんが？ 何かソースはあるの？」

「魔法少女リリカルなのはStrikerS クロニクル』によると、

『評議会の目的は、ミッドチルダ平和のための生命操作技術の進化。そこには、老衰に

よってすでに脳を残して体を失った自分たちが、いましばらく生きながらえるという目的も含んでいた』

とあるから、むしろプロジェクトFを完成させるほどのプレシア・テストロッサに接触——さらなる研究のために援助しない方がおかしいんだよ。

だって、

『アリシアさんを蘇らせる Ⅱ 生命操作技術の進化』

プレシアお婆ちゃんの目的と、最高評議会の目的は、完全に一致していたんだもん。

協力関係がない——と、考える方が不自然だよ。

そもそも、ジュエルシード移送中の事故だって、お婆ちゃんから頼まれた最高評議会が絡んでいたとすれば——」

「うわ、待って待って、それはちょっとリリカルなのはの根幹を揺るがすというか……」

「ただ、人為的に次元震を発生させてアルハザードに行く——という目的を知ったあとは、最高評議会としても見過ごせないから、

『これまでよく働いてくれたが、この辺りが潮時だな……』

みたいなノリで、トカゲの尻尾切り。

もはや、かばわれることなく、ドツカーン……」

「あゝ」

「まあ、最高評議会も、後に管理局の白い魔王と恐れられる、なのはママを目覚めさせるきっかけになるうとは思いませんでした。ただらうけどねー」

「……一度、お墓参りに行った方がいいかな？」

「……うん、喜んでくれるかもね。」

亡くなって、元の立派だったころの魂に戻っているかもしれないし。

そのときは、わたしも一緒に行かないと」

「どうして?」

「だって、遠回しになるけど、わたしがなのはママに出会えたのだって、最高評議会のおかげ——かもしれないでしょ?」

「あゝ」

「それにね、『StrikerS魔法辞典』によると、そもそも『ゆりかご』は、最高評議会が『自分たちの切り札』として確保していたものだったんだよ?」

だとしたら、先に聖王のクローンを必要としていたのは誰か?」

「あゝ、最高評議会ー!」

「そう。だから、プレシアお婆ちゃんの完成版プロジェクトFと聖王の遺伝子情報を、スカリエツティ以外の科学者にも教えて、オリヴィエのクローンを造ろうとしていたのは、他でもない——最高評議会だったんだよっ！」

「つまり、ヴィヴィオを生み出したのは最高評議会で、移送中のヴィヴィオを盗み出そうとしたのが、スカリエツティだったってこと!？」

「うん。それなら辻褃が合うでしょ？」

考えてみたら、スカリエツティを造ったのだからって最高評議会だったわけだし、スカリエツティの知らないアルハザードの生命操作技術やロストロギアを保有していたとしても、おかしくはない。

そんな、最高評議会の息がかかった研究施設がいくつかあって、そのうちの1箇所で作られた一体が、スカリエツティが待っていた“当たり”だったとしたら——」

「あゝ」

「わたしは管理局の最高評議会の子として誕生し、聖王家の血を引く、まさに、次元世界の王となるべくして生まれた存在だったんだよおお!？」

「な、なんだってー!? ——じゃなくてええ!」

「はい、ゴメンナサイ。

ちよつと調子に乗りすぎました……」

「まったく、誰に似たんだか……」

YOU。

「まあ、でも、ヴィヴィオの言いたいこともわかるかな。

いくら賠償金や特許料があつたからつて、あんなガンダムのアクシズみたいな移動庭園を購入、大量のゴーレムを含め、長期（20年以上）に渡つて管理・維持するのは、プレシアさん個人じゃ限界があるしね。

違法行為があつても、ずっと見逃されてきた理由にもなる。

援助と引き換えに、プレシアさんの研究データが最高評議会の手に渡り、『P・T事件』のあとも、別の誰かが、研究を引き継いでいたとしたら——」

「ひよつとしたら、同じプロジェクトFで生まれたエリオが、電気変換の資質を持つていたのも、偶然じゃなかったのかもね。

わたしも、プラズマアーム——腕に電気変換した魔力をまとわせる——を使えるくらいには電気系の魔法と相性がいいし」

「あう……そつか、フェイトちゃんパワーかあ……」。

あれ？ だとしたら、どうしてヴィヴィオは“弱い”——なんてことになつてるの？

あのフェイトちゃんやプレシアさんだよ？」

「うーん、そこなんだけどね。ここから導かれる『わたしが弱い理由』は2つ！

①プロジェクトFでは高速培養クローンを使用するけど、短期間（スカリエツティいわく、1月もあればいいらしい）で造ったため、ルークが外見は17歳でも中身が7歳だったように、わたしも外見が5歳でも、中身——リンカーコアがほとんど育っていなかった。

だから、保護された当時は、少し魔力が高い程度の子供に過ぎなかった。

よって、現在のわたしの魔力量——リンカーコアは、外見と違い、ようやく6歳児程度。

なので、あと3年もすれば、オリヴィエにも負けない、かつてのなのはママやフェイトママくらい——魔力量AAAクラスまで成長するかも!?

②わたしがまだ『真の力』に目覚めていないだけ。

わたしの胸のリンカーコアの封印がく。

オリヴィエ + フェイト&プレシア || すっごい魔導師になれるに違いないよ！

アインハルトさんですら、かつてのクラウドス殿下のようにフルボッコ！
もはやミウラさんも敵じゃない！

高町ヴィヴィオ最強伝説——始まります！」

「……………あー、ないなー、とは思うけど……………うーん、でも、オリヴィエ＋フェイトちゃん——つてところには、夢や希望……………ロマンを感じちゃうよねえ……………」
などと言っていたら、

「ただいま〜」

「フェイトママだ！」

「フェイトちゃん！」

プロジェクトF（フェイト）の名を持つ、話題の人物、その人だ。

たった今判明した事実を、急いで伝えたくて玄関に向かう。

「お帰り、フェイトママ〜」

いつもと違い、フェイトママの首に腕を回し、抱きつくような格好で、ねちっこく言う。

「ごめんね、フェイトママ。わたし、もしかしたらフェイトママより強くなっちゃうかも」

「えつと……なに、このヴィヴィオのうぎさは……？」

「実はね、フェイトちゃん——」

なのはママが一から説明する。

「あー、そういうこと。」

でも……その、とても言いづらいんだけど、ヴィヴィオ……」

「はい?」

「もし、その説が本当だとして、ヴィヴィオに私の遺伝子が混ざっていたとしたら、高町家の魂もプラスして、まさになのはわたしの子供——って感じで、とてもうれしいんだけど……」

「うれしんだけど?」

「たぶん、使ったのは私の遺伝子じゃなくて、アリシアの遺伝子かな」

オリヴィエ + アリシア・テスタロッサ（魔力量Eクラス相当だよ!） || オリジナルの1パーセントにも満たない魔導師が爆誕!

「……なんてこつたい!?」

ヴィヴィオ強化計画

みなさんお霸王ございます。

アインハルト・ストラトスです。

今回は、ヴィヴィオさんが、その……ちよつと諸事情でお話しできないので、変わつて私の視点から物語をお送りしたいと思います。

ヴィヴィオさんのように、面白おかしくはできませんが、精一杯がんばりますので、ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

「——というわけで、本日はここナカジマジムから、ヴィヴィオさんの強化計画を発信していきますと思います。」

司会は私——アインハルト・ストラトス。

参加者は、いつものメンバー。

ノーヴェ会長、リオさん、コロナさん、フーカ、ユミナさん、あと忘れるところだつたミウラさんの6人ですね」

「アインハルトさん、いきなりボクのこと忘れないでくださいよおお!」

「いえ、ヴィヴィオさんがいつも忘れていらつしやるので、そういうものなのか……。」

お約束とか、様式美とか、そういうものなんですよね？」

「「真面目だ！」」

「そうなんですけど、そうなんですけど、ちなうんです、ちなうんです」

「おい、アインハルト。いきなり呼ばれて来たんだが、これ、どーなってるんだ？ ミウラはもだえてるし……」

「ノーヴェ会長……リングの上をご覧ください。」

前回の一件で、ヴィヴィオさんがすっかりふてくされてしまい、どこから持ってきたのかわからない布団に潜りこむと、丸くなってストライキ中なんです」

「マジか……」

「ヴィヴィオく、そんなことしてると、深夜アニメが溜まつちやうよく」

リオコロさんの説得にも応じず……あ、今、じやつかん動いた気もしますが……ええ、どうかこらえて出てきませんかでしたね。

「陛下く、いい加減、機嫌直しましょうよく。ちよつと奮発して、ハーゲ●ダッツもあり

ますよ〜」

『ユミナさんの中の人は『タ●リ倶楽部』のシユウマイ回に出てたからいいでしょうっ
！』

「それ今関係ないですよねええ!？」

消えゆくグリーンピースの謎——というのは、中々に興味深かったですけど。

『いいんだ……いいんだ……どーせ、わたしなんて……どんなにトレーニングしても、オ
リヴィエみたいに強くなれないんだから……』

「あ〜」

「アリシアさん Ⅱ フェイトさんだとして……」

「なのはさんが無意識のうちにヴィヴィオのことを気に入ったのも……」

「フェイトさんって、アリシアさんのこと……」

「2人がヴィヴィオのことを猫可愛がりしてるのって……」

『あああああああ〜〜〜っ!?!』

「みなさん、ここぞとばかりにヴィヴィオさんをイジるのはやめてください。私の断空
拳が火を噴きますよっ!」

「「「「しないから、しないから」」」」

「そんなわけで、今回ばかりは、なのはさんとフェイトさんの手に負えないので——お仕事もありますしね——ヴィヴィオさんの復活は私たちに託された——というわけなんです。」

まあ、何だかんだと言つて、ジムに來ているところは、ヴィヴィオさんらしいといえ
ばらしいですが……。ぜひ見習いたい姿勢ですね」

「「「「いやいやいや」」」」

「それで、ヴィヴィオ強化計画だっけ？」

アインハルト——お前は、どうやってヴィヴィオを強くする気なんだ？」

「そうですね……とりあえず、トレーニング量を2倍にするというのはいかがでしょう？」

単純計算で2倍強くなれます」

「「「「いやいやいや」」」」

「あれ〜?」

『……ううつ、みんながどんどん強くなっていくのに、わたしだけ魔力量が絶望的に伸びないかもしれないですよおおく〜っ!』

「アニメでよく見かけるお悩みですね。

ここはやはり、サイラオーグさんみたいに体を鍛えるしかないのでは?」

『……ううつ、いくら鍛えても、アリシアさんみたいに、ちっちゃいままかもしれないですよ』

「あ〜」

八方塞がりだった。

「つまり、現在のテクニカルヒッターとしてのスタイルのまま、さらに強くなる方法を模索しなければならぬ——というわけですね。

ノーヴェ会長……ふあいつ!」

「いや、丸投げするなよ……。」

まあ、でも……そうだな。

一番手っ取り早いのは、新必殺技だろうな」

「……普通の意見ですね」

「ふつーで悪かったなああ!？」

「はい、はい、はい!？」

「はい、リオさん」

「だったらさ、新しい変身とかどう？」

新フォーム。最強フォーム的——」

「つまり、変身魔法——強化モードを見直せということですね。なるほど……それは一理ありますね」

「いや、仮面ライダー的——」

「コロナさんは、何か意見はありますか？」

「え？ あー、いつそのこと、フルアーマーとかどうかな？」

フルアーマーヴィヴィオ——みたいな」

「なるほど。つまり、なのはさんのエクシードモードやフォートレスのように、デバイス面からの強化を目的としているんですね」

「そーじゃなくて、ガンダ——」

「あゝ」

「はい、ミウラさん」

「それでしたら、ボクと同じように、収束系魔法を打撃に応用すればいいのではないで

しようか？

確か、なのはさんの教え子であるティアナさんも収束砲で火力を補っているとお聞きしました。

ヴィヴィオさんも、なのはさんから収束技術を教わってはいるんですよ？」

「なるほど！ それは素晴らしいご意見ですね。流星はナカジマジムのブラックホース、ミウラさん……」

「せめて、ちゃんとダークホースっていつてくださいよおお!？」

「あの、ハルさん……」

「はい、フーカ」

「わしが思うに、ヴィヴィさんも霸王流に入門する——つてのは、どうじゃろ？」
「ほう」

「断空の技術が、伝統武術の『勁』だとすれば、小柄で非力なヴィヴィさんのような方にこそ、霸王流は相応しいと思うんじゃないが……」

「それは盲点でしたね。フーカ、ハナマルです。明日はスパーリング100番勝負につきあつてあげましょう」

「お……押忍……っ……」

「もうフーカ、いくらうれしいからって、そんなにブルブル震えなくてもいいんですよ

「？」

「「絶対、違うっ！」」

「最後にユミナさん、何か気づいたことはありますか？」

「あー、えー、私？ そうだね。陛下……ヴィヴィオちゃんは小柄だから、ポーキーとか……」

「ポーキー……？」

『それ、はるかなレシーブですよねええ!?!』

「ほら、肌色の量なら負けてないし……何より、陛下なら、大も小も一人で兼ねるから、観客からも大人気！」

『いやー』

「なるほど。ユミナさんが言いたいことは、観客からの声援を力に変える——ということですね？」

「え？ そうじゃなくてビーチバ——」

「いえ、ユミナさん、謙遜しなくても結構です。これも盲点でした。確かに、私も試合でピンチに陥ったとき、何度もみなさんの声援で立ち上がった覚えがありますし……」

「『『『ポジティブ過ぎるっ！』』』』」

「——わかりました。」

ヴィヴィオさん強化計画、本日の結論は——

変身魔法やバリアジャケットの見直しに、デバイスの強化。

そして、断空の技法に、収束で集めた魔力を乗せることで、これまでのヴィヴィオさんにはない破壊力ある必殺技——神撃に至る一撃を生み出す。

もちろん、さらなるファンを獲得するため、魅せる試合を目指す。

——こんなところでしようか？」

ざわざわ……。

「い、意外にまともだ……？」

「これ、意外にいけるんじゃない……？」

「で、いつ爆発するの……?」

「しませんよっ!?!」

『——なるほど、噂通り、愉快なことになっているようだね』

「……今度は、誰ええ——っ!?!」

30歳前後だろうか?

印象的なゲジゲジ眉毛。

ジムに入ってきたのは、体格の良い長身で、スーツ姿の男性だった。

初めての空間だというのに、まったく緊張した様子もなく、真っ直ぐノーヴェ会長に向かつて歩いていく。

……この人、出来るっ!

「はじめまして、ノーヴェ・ナカジマ会長。私はヴァンデイン・コーポレーションの専務取締役、ハーデイス・ヴァンデインと申します。以後お見知りおきを——」

そうやって名刺を手渡すと、ニカッと人好きのする笑みをこぼした。

「の、ノーヴェが名刺を受け取ってる……?」

「あたしだって会長なんだよ! 名刺の1枚や2枚受け取るわああ——っ!」

きやー、とりオコロさんが会長に追われて逃げ惑う。

「人づてに現代の聖王陛下が困っている——と聞きましてね。ちようど私用で近くを通りがかつたものだからアドバイスでも——と思い、こうして立ち寄らせてもらった次第です」

ハーデイス氏の出現に、ジム中がざわめいた。

「……ま……『魔法戦記リリカルなのはForce』のラスボスキタアア——

——ツツ?!」

「ラスボスとは心外な。私は善良な一市民だよ。高町教導官のように、ちゃんと娘もいるしね」

ふむ……。

「……確かに、この小説で『Force』は未来の出来事。あなたをラスボスと呼ぶのは、時期尚早ではありませんね。

ですが、そんなあなたがどうしてここへ?」

「それはもちろん、これで陛下やナカジマ会長と面識を持てれば、我が社の商品を、聖王教会やストライクアーツ関係団体、さらには管理局にまで売りこむことができるからね。」

うちのデバイス結構優秀なんだよ？

出来る男は恋愛と同じで、こういうチャンスを見逃さないものなのさ」

「なるほど。即物的ですね」

「即物的とは、これは耳が痛い。娘にも叱られそうだよ。」

けれど、それだけじゃあないよ。もう一つ。

高町ヴィヴィオ才聖王陛下の出生にまつわる能力のことなら、今は軌道拘置所において答えることができない。彼に変わって、私が答えなくてはならない——と、思ったからね」

「は？」

「Dr. ジェイル・スカリエッティと面会するのは、手続きが大変なんだろう？」

「まさか……っ!?!」

「「「「ハーデイス氏とスカさんって、知り合いだったのおお!?!」」」」

「冗談だよ、冗談。」

さつきも言ったけど、私は単なる善良な一市民だからね。それも小市民だよ？

Dr. スカリエッティのような、広域次元犯罪者と一緒にされたら困るよ。ハラオウン執務官にホームランされたあげく逮捕されるのはゴメンだからね。

地上には私の娘だっているんだから」

「そういえば、ハガレンのキング・ブラッドレイも奥さんと息子さんが——」

「リオ・ウエズリー君、あまり漫画ばかり読んでいると、そのアホ毛を引っこ抜いて、量産したちびリオを管理局に売っ払っっちゃうよ？」

「やめてええ!?!」

「さて、ヴィヴィオ陛下——」。

君は、自分の弱さの原因が、聖王女オリヴィエの遺伝子の欠損部位を埋めた、亡きアリシア・テスタロツサ嬢の遺伝子にあるのではないか——と疑っているようだけど、それは間違いだろうね」

『え?』

「どういうことでしょうか?」

「私が思うに、オリヴィエ・ゼーゲブレヒトという人物は、世間一般で考えられているほど、魔力量の多い魔導師（ベルカの騎士）ではなかった——というのが真相だろうね」

『っ!?』で、でも……古代ベルカで、武技において最強を誇ったって……ですよ、アイ
ンハルトさんっ!?』

「はい、その通りです。私の霸王の記憶に誓ってそれは間違いありません」

「そうだね。彼女が最強を誇ったのは、歴史的に判断しても間違いはないだろう。」

けれど、彼女が産まれながらにして強かったのか——という問いに対してはどうか
かな
?

この件は、君たちの方がよく知っているだろうけどね。

『Vi Vid』10〜11巻で語られた『エレミアの手記』によると、

『余談だが、ヴィヴィ様の聖王核には、少し不思議な謂れがある。』

ヴィヴィ様が産まれるとき、母君は亡くなられているのだが、母君がお持ちだった聖
王核が、そのままヴィヴィ様の体内に吸収されたのだという』

つまりだ——わかるかい？

オリヴィエ王女は、離れていても、無意識であつても——聖王核を引きつける、コン
トロールできるほど、聖王核との相性が抜群だったんだ。

むしろ、聖王核の方から彼女を選んだかのようにね。

例えば、インテリジェントデバイスなんかもそうだね。

有名などころでは、高町教導官と愛機レイジングハート。

「正解だよ。」

おそらく、この聖王核との相性が、ゆりかごとの適合率にも関わってくるんだろっね」
「だから、聖王核のないオリヴィエは、最強ではない。わたしのように、ちよつと魔力が高だけの女の子だった——ということですか？」

「That's right その通り」

『だけど……』

「そうですね。それだけでオリヴィエが弱かった——と断じるのは愚かです。聖王核がなくとも、素の魔力が高かった可能性は十分にありますから」

「ふむ……。もう6年近く前のことだから、忘れているかもしれないけどね。」

トトラック横転事故の際——」

「実は、リトバスみたいなことになっていたとかっ!？」

「黒髪ロングに変身するリオ君には、エターナル胸ぺったんの称号をあげようじゃないか」

「やめてエエ!？」

「機動六課に保護されるまでの間。」

陛下は、スカリエッティのガジェットドローンI型を、6機も破壊しているんだよ」

『あー……そんなこともありましたっけ……』

『Striker S』の3話で、当時のティアナ執務官たち4名が、陸戦用空間シミュレーターでI型8機と戦ったときのことを覚えているかい？

AMFや素早い動きに、かなり苦戦していただろう。
ところが――。

少し魔力が強い程度で、攻撃魔法の1つも覚えていないボロボロの5歳の女の子が、I型を6機も破壊してみせた。

一体、どうやったんだらうね？」

『……えっと、あのときのことはいマイチよく覚えていないと申しますか』

「ひよつとして、ヴィヴィオさんの秘められし力が覚醒したとか……？」

「僕の王の力がああああ！」

『やめてええ——っ!』

「あなたがち間違いでもないのだけどね。

答えは「聖王核（レリック）」だよ。

奇しくも陛下は、その身で、オリヴィエ・ゼーゲブレヒトと聖王核のつながりを、再現してみせたんだよ。

体内に埋めこむ必要すらない。

鎖でつながれたケースに入っていれば、肉体から離れていても構わない。

あたかも、母親の体内にあった聖王核が、オリヴィエの肉体に移動したように……。聖王核から魔力を引き出すと、強靱な肉体——素手で、機械のボディをもつガジエツトを粉砕。

攻撃魔法なんて知らなくても、巨大な純粹魔力だけでA M Fを中和、吹き飛ばし、残りのガジエツトを消滅させた。

——ま、こんなところだろうね。

どうだい？

これでも陛下は、自分はオリヴィエより弱い——だなんて言い張るつもりかい？」

『で、でも……それは、全部、ハーデイスさんの想像で……』

「そうだね。

だけど……いや、だからこそかな。

かつて——

ウーノ 「レリック反応を追跡していたドローンI型6機、全て破壊されています」

スカリエッティ 「ほう、破壊したのは局の魔導師か、それとも当たりを引いたか」

ウーノ 「確定はできませんが、どうやら後者のようです」

スカリエッティ 「素晴らしい。さっそく追跡をかけるとしよう」

ウーノとスカリエツティは、陛下を「当たり前」だと信じたんだよ。

そんなことができるのは、聖王オリヴィエ・ゼーゲブレヒトのクローンしかない——と、わかっていたからね。

確か……あのとき、ノーヴェ会長も、スカリエツティや映像通信のウーノと共に、その場にいらしたとか」

「……ああ」

「彼、うれしそうだったでしょ？」

「あんた、やっぱり……」

「大丈夫。今はまだ、君たちの味方だよ。」

『Force』が始まるまではね」

「わーっつたよ。今はまだ、な……」

彼もまた謎多き人物のようですが、『Force』休載中の今となっては、これ以上追求めることはできません。

むしろ、私が気になるのはヴィヴィオさんの方。

「むむむ……かつてのヴィヴィオさんが、そんなに強かったただなんて……」

『まあ、聖王核（レリック）があつたからこそ、ですけどねー。今のわたしはご存知の通りで——』

「何を言ってるんだい？」

レリックの1つや2つ、管理局に保管されているだろうか？

たぶん、聖王教会にも、聖骸布などと一緒に保存されているはずだよ？

ひよつとしたら、ユーノ司書長やスクライア一族が発掘したモノもあるかもしれない」

『あ……』

「そう。陛下がレリックを手に入れる方法なんて、少し考えれば、いくらでもあるんだよ。

自分で探しに行く——というのも1つの手だろうね」

「そ、そんな方法まで……」

「さて、6年前の時点で、軽々とガジェットドローンを破壊できるほどの魔力量を誇ったわけだけど……」。

今の鍛えた陛下なら、一体どれほどの強さを引き出すことができるのやら……。

まさに、オリヴィエ・ゼーゲブレヒトの再来だろうね——」

『あわわ……』

「そんなわけで陛下。

これからヴァンデイン・コーポレーションの商品をどうぞよろしく。

君の素敵な2人のお母様にも、よろしく伝えてもらえるかな？

あとは、そうだね、八神捜査指令にクロノ提督、それと聖王教会にも、うちの武装端末を紹介してもらえとうれしいのだけど……」

そう言うと、いずれ敵となる『Force』のラスボスことハーデイス・ヴァンディン氏は、したり顔でジムを去っていった。

姿が見えなくなる——と同時に、リング上の天岩戸（布団）が開き、ようやくヴィヴィオさんが愛らしい姿を現す。

「……ど、どうしましょうか、アインハルトさんっ!？」

慌てた声音でリングから下りてくる。

「ヴィヴィオさん……」

「レリックなんですけど……」

「ハーデイス氏の甘言に惑わされず、落ち着いてください」

「なのはママのレイジングハートみたいに、ネックレスにして、首からぶら下げた方がいいでしょうか？」

それとも、クリスと一緒に、外装のウサギのぬいぐるみの中に入れておくとかつ!？」

「すでに、レリックを手に入れるの前提ですかっ!？」

「そ……そうになると、わたしって敵しいトレーニングなんてしなくても、レリックさえあれば最強になれるってことですよね?」

「ハーデイス氏の話聞く限り、そのようですが……」

「だったら、その上で、さらに、アインハルトさんたちが考えてくれた、

変身魔法やバリアジャケットの見直しに、デバイスの強化。

断空と収束による新必殺技をマスターなんてしちやった日には……。

あと、トレーニングも2倍しちやって……。

もはや、みんなが足元にも及ばないほど強く——超サイヤ人と地球人くらい実力差が開いちゃう——ってことですか!？」

「どうしよう……スカウターが爆発しちゃうよ!？」

「「「「ああ〜」」」」」

——パンパン!

「よし、全員撤収！ 練習再開しろー」

「「「押忍っ！」」」

「あ……あれ？ どうしてみんな、わたしのパワーアップ計画に協力してくれないのおお!？」

「さっきは、あんなに乗り気だったのにいい〜」

「ヴィヴィオさん……今わかりました。」

「どうして『魔法少女リリカルなのはViViD』において、最も使い手に相応しい、なのはさんの娘であるヴィヴィオさんが、収束系魔法を使わなかったのか……」

「急に、そんなこと言われましても〜」

「それはですね………ハンデだったんですよおお!？」

「ええええええええええええつ!？」

「いざとなったら、レリックで、スッコ〜ン——とパワーアップしてしまうヴィヴィオさんへのハンデです！」

「いやいや、そんなことないですって!?!」

「クラウス……今やつと、私もあなたの気持ちがわかった気がします……。」

あなたも苦労したんですね……。

ですが、チートはダメですよね、チートは……。」

「えー」

「そんなわけで、ヴィヴィオさんのこれ以上のパワーアップは禁止い——っ!!」

「なんですとっ!?!」

コロナと猫とガンプラと

とある9月の頭。

夏休みが終わってすぐの出来事だ。

わたしがSt・ヒルデ魔法学院に登校して、教室に入ると、自分の席に座ったコロナが、机の上をジツと凝視していた。

置いてあるのは、何やらプラモデルの箱。

「おはよう、コロナ。」

ガンプラじゃないなんて珍しいね」

「あー、うん……。」

昨日新しいガンプラを買いに行ったら、こんな新商品が売っていて……」

箱のサイズは、一般的なHGガンプラの箱を、一回り小さくしたくらい……えっと、ティッシュUIBOXくらいと例えた方がわかりやすいだろうか。

片手で持てるサイズである。

色は、全体的にアインハルトさんより濃いグリーンで、黒字で『ねこぶそう てんこ盛り』と書いてある。

「ねこぶそろうっ！」

「うん。8月31日に発売した、バンダイの新商品のプラモだよ」
なるほど。

言われてよく見ると、ガンブラと一緒にパッケージの右下に、おなじみの赤地に白文字の『BANDAI』マークが表記されていた。

「ガンブラの新商品コーナーに、一緒に並んで置かれてたの」

「あー、それは嫌でも目に入るよねー。」

でも、ガンブラじゃないし、誰がこんなを買うの……って、コロナが買ってるか」

「うん。わたしもよく知らなかったから検索してみたら、どうもエイプリルフールのジョーク企画だったのを、実現しちゃったみたい」

パッケージ裏を見ると、こんなうたい文句が書いてある。

ねこぶそろうとは

地上のヒエラルキー最上位である、ねこたちのために開発されたメカの総称。

彼らの生活をより快適にすべく人類が作り出した愛の結晶「ねこぶそろう」だが、人類の熱い想いとは裏腹に、いまやねこたちの遊び道具……。

それでもかわいいので結果オーライな人類なのでした。

「最近ベアツガイとか、可愛い系のガンプラが売れてたしねえ……空前(?)の猫ブームとも言われてるし『これも行ける!』とか思つて、ゴーサイン出しちゃったんじゃないかな——」

などと話していたら、視界でリオのアホ毛がぴよこんと揺れる。

「ヴィヴィオ、コロナ、おはよー。」

朝からガンプラ作つてないでさ、新しく始まったジオウの話でもしようよー。

仮面ライダージオウ」

「んー、歴代平成仮面ライダーが出るっていうからディケイドか、未来で魔王になるってことから漫画版ブラックみたいな感じかな、と思つて見てたら、電王の1話みたいだった。

あと、2話で味方デレるの早いな——っていう、ジオウ?」

「……うん、まあ、そうなんだけどね。」

魔王つてところが、ヴィヴィオも他人事じゃないでしょ?」

「でも、うち、大魔王バーンの系列だからなあ。」

天地魔闘の構えとか……」

「魔王に系列とかあるのっ!」

……って、あれ？　これガンブラじゃない!？」

「今ごろ気づいたんだ……」

「どーしたのコロナ、熱でもあるの？」

「もう、リオ。私ガンブラ以外も作ってるでしょ」

巨神ゴッグとか、マニアックなやつだけど。

「ほら、リオ。よく見てみなよ、ねこぶそうだつて。猫を主役にしたプラモだよ？」

「あー、コロナつてアインハルトさんちのテイオとか大好きだもんねえ〜」

「テイオは一応豹だからー」

どう見ても猫ですけど〜。

ちなみに、この「ねこぶそう」というシリーズ。

(税込) 540円の並盛りが、4種類。

さらに、一箱で全ての武装がそろう(ただし、猫は1匹しか入っていない)お得な(税込) 1499円のでんこ盛り——の、合計5種類が発売したらしい。

コロナは、その「でんこ盛り」を買ったわけだ。

『デカ盛り 閃乱カグラ』的なの？」

「うん、それ「盛り」しかあってないから。」

普通に全部乗せとか、魔神英雄伝ワタルの合体魔神ゴーストンのプラモで例えない

と。色違いの魔神が14体セットだったやつ」

「それ、余計にわからないからねっ!？」

「じゃ、開けてみるよ——」

開けたくてウズウズしていたのだろう。

コロナが、ねこぶそうの箱を側面から開く。

「ガンプラと違い、上下が離れるタイプの箱じゃないんだね」

「あれってさ、意外に便利だねー。裏返したフタの上で切ると、切ったパーツがどっか飛んで行かないし」

ねこぶそう——という、普段プラモデルを作らない人をターゲットにした——と考えると、優しくない箱ともいえる。

4種類の並盛りの武装ごとなのか、小分けでパーツが入っていた。

「猫のフィギュアが、わたしが思ってたよりデカイ……」

「うくん。色数が……。これ、昔の単色だったころのガンプラみたい……」

「組み立てたら、MS（モビルスーツ）ができそうだね……」

「ちよつと説明書が小さすぎない？ 写真を白黒にしているから、細かい組み立て部分が見づらいし」

「詳しい組み立て方は、QRコードで読み取るんだって」

「それでかく。スマホやデバイス持っていない子はどうするの?」

「……自力で頑張る」

「あー」

「でもさー。ガンブラと比べたら、パーツ数すつごい少ないよね。説明書なんてなくても、これなら簡単に組み立てられるんじゃない?」

「言われてみると、確かに……」

「あああああああゝゝっ!」

「ちよ、どうしたのコロナ!」

「説明書に——ガンブラで言うところの、イラストつき『パーツリスト』がない!」

「だから、パーツが全部そろっているかどうか、よくわからない!」

「それ、結構致命的かも。ただでさえ、新商品でよくわからないプラモデルなのに……」

「再販や、11月の第2弾は、取説のサイズを2倍にして、ちゃんと載せた方がいいよね」

「ひよつとしたら足りないパーツがあるかもしれないけど——わからないので——と
りあえず、個々のビニール包装をハサミで開け、3人で手分けして組み立て始める。」

「むう。可愛い見た目に反して、基本の黒いジョイントパーツがきつい！ 固いの、小さくて力が入れづらい！ ハマらない！」

「最近の出来が良い、作りやすいガンプラに慣れてると手強いね……」

「パーツ数は少ないけど、コレはコレで厄介かも……」

「ねえ、コロナ。ニツパーが必要なのは当たり前として、組み立てるのが固くて、押さえにペンチを使わないとダメなのは、どうなの？」

「うわ、コロナ。ニツパーの刃が入らないパーツがあるんだけど、これ、どうやって切るの〜？」

「そこまで丁寧を作るつもりはないから、手でねじ切っていいよ」

「あたし向きかも！」

一応、切ったあとヤスリをかける。

「うくん、このミサイルポッドが上手くハマらない……。リオ、お願いしていい？」

「任せて！ ……って、何だこれ、キツイ……。うう、アインハルトさんでも呼んだ方が……」

「うくん、アインハルトさんのパワーだと、破壊しそудしなあ……」

学院祭でも、アームレスリングで競技台を破壊してたし……。

するとコロナが、

「大丈夫、コレを貸してあげるから——」

「つて、マイストアームっ!」

「いやいやいや、これをどうしろと?」

「パーツが砕け散りそうなんだけど」

「冗談、冗談。はい、どーぞ」

「……なに、この木製の金槌みたいなの?」

「こんなこともあろうかと、木槌を用意しておきました」

「どんな状況を想定してたの!」

真田さんでも想定しないよ!」

ていうか、朝から教室で、プラモデルを木槌でトントン叩いて組み立てるって、ダクネスしか喜ばないような羞恥プレイなんですけどおお——っ!」

「よくパンツみせてるヴィヴィオならでできる!」

「2人とも、わたしをどーいう目で見てたのおお!」

はあく、こんな可愛いニャンコなのに……。

これ、本当に初心者の子供や女の子に組み立てられるの?」

「ヴィヴィオ……箱の側面をよく見て」

「えつと……ねこぶそう……。プラモデル……。」

対象年齢15才以上おお!？」

ちなみに、ガンプラは基本、8才以上である。

「なんてこつたい。15才以上つて……」

そういうえば、昔、藤真先生が『R-15』つて小説のイラスト描いてましたがー。

「罨だ。孔明の罨すぎる……」

そりや、組み立てるの大変なわけだ……。

「ねえ、結局木槌でも、完全にハマりきらないんだけど……」

「……ふう。そつかく。やつぱり最初に削つてから組み立てればよかつたね」

コロナが、ハマらないパーツをヤスリなどで軽く削ると、今度はあつさりハマるようになった。

「さつきまでの苦労は一体……。」

面倒くさがらないで最初からやろうよ!？」

木槌なんていらなかつたよねええ!？」

こうして、朝の時間だけでは足りず、昼休みを使い、ようやく完成したのだけ……。

「うーん、あのゲルググの足というか、デージェの放熱板みたいなパーツがこんなことに

なるとは……」

「並盛りの武装が全部合体することで、どう考えても余りそうなパーツまで、ムダに全部使っちゃったねー」

「意味ないところにハメるの多かつたけど……」

「ねえ、コロナ。このねこぶそうって、ひよつとして、自分で好きに色んなパーツをくつつけられるってこと？」

「そうだよ。ブロックみたいな感じかな。」

他メーカーの商品とも、互換性があつたりするから、自分なりのねこぶそうを作つて遊べるんだよ。」

ネコが操縦するロボットにしてみたりね」

「じゃ、今完成したこれは、説明書通りの基本形つてことになるんだ——」

色は全体的に密林っぽいグリーン。

キヤタピラに、腕のアーム。砲身。

イメージとしては、ザクタンクとマゼラアタックを悪魔合体させて、中央（胴体）に猫がはまっている——といったところか。

陸戦用なのは間違いない。

「確かに、てんこ盛り」って感じだけど、これに1500円分の価値があるかというと

……」

「ガンプラ買った方がよかったよね。」

サラちゃんピンチだし、ダブルオースカイの方が……」

「アニメはイマイチだけど、ゾイドの方が……。」

少し高いけど、ワイルドライガーとか、かなり出来が良いって話だよ？」

「もう！ ガンプラともゾイドとも違うの！」

いい？ ヴィヴィオ、リオ。

半分ネタから始まったとはいえ、新しいシリーズなんだから、最初はこんなものなの

！

それに、私のネコの目は当たりだったんだから、ほら、可愛いでしょ？」

ネコの目に当たりってナニ!?

ハズレとかあったの!?

「うくん、まあ、コロナが満足してるなら別にいいんだけど……。」

で、このねこぶそうどうするの？ 飾ってください？」

「一応、自分なりにパーツをつけ加えて、改造してみようとは思うけど……」

「だったらさ、せつかくだし、ガンプラバトルでもやる？」

普段は負けるけど、ねこぶそうが相手なら、わたしでもコロナに勝てるかもだし」

「というか、これでコロナに負けたらヴィヴィオって……」

「リオだって、ちびリオ使ったとき以外は全敗のくせにいい！」

「……うん、わかった。」

色々と改造してみるから、明日勝負ね！」



放課後。

コロナがアインハルトさんを連れて、先に帰ってしまったので、リオと2人で、明日の勝負に使うガンブラを探しにシヨップへ向かう。

「ヴィヴィオは何にするの?」

「うくん、相手はコロナとはいえ、ねこぶそう。」

キヤタピラで空は飛ばない。

あんまりガちなガンブラだと引かれるというか、それで勝つても、って感じだしね」
「ベアツガイさんとか?」

「ん、かといって手加減はしたくないし、BB戦士の騎士ガンダムなら、飛び道具がな
いし、面白い勝負ができるんじゃないかな」と

「ノーマル？」

「ううん、三種の神器のやつ。フルアーマー騎士ガンダム」

「それ、十分強いよねええ!? HP10000だよ?」

「でも、あんまり長くその姿でいたことがないというか、炎の剣がないだけで、HP800だし、バールサル騎士ガンダムの方が強いイメージがあるというか……。

そういうリオこそどうするの?」

「ヴィヴィオが騎士ガンダムなら……あたしはスペリオルドラゴンで」

「それこそ、ガチなやつだよねええ!?」

「たまには、ちびリオ以外のキャラで、カツコよく勝つてみたいんだよおお——っ!」
気持ちはお察しします。

こうして、完成したガンプラを2人で眺める。

コロナには悪いけど、

「オーバーキルすぎる!!」

「たまにはいいんじゃない? コロナ悔しがるけど」

「だね」

そして、ガンプラバトル当日。

「おまたせ、ヴィヴィオ、リオ——」

——ズゴゴゴゴ……。

わたしとリオの操るガンプラの前に現れたのは、巨大な空飛ぶねこぶそう……と
いうか、

「それ、もうデンドロビウムだよねっ!?

中央のガンダムの代わりに、猫（ティオ）がはまつてるだけでええ——っ!!?」

ゴライアスですらない。

「マイクロミサイル全弾発射ああ!!」

「あゝ」

——ちゅどくん！

コロナって——アインハルトさんとの試合からもわかるように——結構、負けず嫌いな
なの、忘れてました……。

ハーデイス氏はスカさんクローン!?

高町家のリビングソファに、大・小の金髪が向かい合う格好で座っている。

「金髪、金髪——ということ、本日のゲストは上手い具合に休みが取れたフェイトママこと——スカさん&ハーさんと因縁浅からぬ、フェイト・テスタロッサ・ハラオウン執務官です。」

はい、拍手うゝ。わー、パチパチ!

「えつと、色々ツツコミどころが多いんだけど、とりあえず……はーさん？」

フルバの草摩はとりさん？」

「フェイトママ……『フ●ーツバスケット』は超名作だとは思うけど、流石に古いからね。知らない人も多そうだし、年齢がバレちゃ——」

「サンダーアームツツ!!」

「ぎにゃあああああああ!!?」

「ヴィヴィオ……。フルバはね、現在続編が連載中なんだよ?」

「そ、そうでしたか……ゴメンナサイ……」

ハーさんは、『魔法戦記リリカルなのはForce』のラスボスというか黒幕の、ハーデイス・ヴァンテイン氏のことです……名前が長いんで略してみました……」

「なるほど……。つまり、今回のタイトルから察するに、ハーデイス氏がスカリエッティのクローンかどうかを調査しよう、ってことだよな。

だけど、どうしてそんなことに？」

見た目、まったく違うし、だいたい私が彼を逮捕するのは『Force』6巻だよ？」
それはそれで超絶メタ発言なのだけど。

ちなみに、フェイトママは『StrikeS』でもスカリエッティを逮捕している。
真面目なシリーズにおける——『Vivid』が真面目じゃないという意味じゃないよ?! ——連続タイーホ記録更新中である。

「そーいえば、なのはママってタイーホしてるイメージないよね。だいたい犯人をズドーン……。わたしもフェイトママもズドーン……」

「うん、それは言っちゃダメだから」

閑話休題。

話をハーデイス氏に戻そう。

「それがね、前……々回ジムに来て、たくさん意味深な台詞を残して去っていったものだ

から……」

「忘れた方は軽く読み返してくださいね。」

「だから……流石にスカリエッティのクローンは行き過ぎだと思ふなあ」

「でも、あの人、ちよー怪しかったけど？ 特に笑顔が胡散臭い」

「あく、笑顔が胡散臭いのは同意するけど……。」

「だったら……そうだね、まずはハーデイス氏のプロフィールを、改めてネットの有名なところで調べてみようか？」

『ヴァンデイン・コーポレーションの専務取締役にして、一連のエクリップス関連事件においての黒幕。』

「一見爽やかで紳士的、笑顔を絶やさない温厚そうな人物だが、本性は傲岸不遜。」

「ECウイルスの独自研究者で、エクリップスのことをフツケバイン一家とも管理局とも違う視点から捉えており、次代のクリーンエネルギーとなりうると評して様々な実験を秘密裏に行い、どの勢力とも違う多くの知識を得ている模様——」

「ウィキペディア『魔法少女リリカルなのはシリーズの登場人物』より」

『ヴァンデイン・コーポレーションの専務取締役。』

娘がいるらしい。

一見穏やかなインテリの紳士に見えるが、内面はかなり腹黒く、自らの目的を達成させる為には手段を選ばない危険人物。

また、自らもエクリプスウイルスの感染者であるが、「原初の種」と呼ばれるものの効果によつて、その力は並のエクリプスの感染者を圧倒する程のものとなっている——『

Nanoha Wiki 『登場人物／Force』より

「——どう?」

確かに研究者だったり、非合法な実験だったり、スカリエッティと似ているところはあるけど、そんな実験は母さんもしていたことだから……」

「あ〜」

フェイトママの口からそれを言われてしまうと、ぐうの音も出ない。

「それに、どちらのサイトも、実際にハーデイス氏を紹介している文章はもつと長いですよ。」

けれど、その、どこを読んでも『スカリエッティのクローンだ』なんて書いてないし、やっぱり、ヴィヴィオたちが、ハーデイス氏にからかわれただけなんじゃないかな」

「う〜、でもでも、フェイトママ。」

『Force』って連載がストップしたでしょ。

これから核心に触れていく——って、大事なところで。

明らかになつていない謎が多いってことは、逆にハーさんがスカさんクローンの可能性も『ゼロ』じゃない——ってことだよな?」

「ん、まあ、そうだね。ゼロではない。

でもね、ヴィヴィオ。

スカリエツティ本人は、軌道拘置所に収監されているだけで、まだ生きてるんだよ? それに、スカさん——じゃなかった、スカリエツティのクローンの種が入ったカプセルは、すでに捕らえたナンバーズ一同から回収済み。

新たにクローンが生まれてくる心配はないの」

「フェイトママ、そこだよ、そこ。」

前々から思ってたんだけど、スカさんって、わざわざフェイトママに、

『自分が死んでも、戦闘機人の体内にコピーの種がいるから大丈夫!』

みたいなことを言ったでしょ。

いくら余裕ぶっこいてたといつても、敵であるフェイトママに、そんな大事なことを教えるかな?」

「それは——」

「ナンバーズは囿で、本命のカプセルは、わたしたちの——ナンバーズすら知らない別の人物、あるいは秘密の施設に隠されていたとか……」

「……うん、それはあるかもしれない。」

「けどね、それを立証するのは難しいの」

「どうして？」

「ヴィヴィオも『魔法少女リリカルなのはStrikerS クロニクル』を読んだことがあるでしょ。」

『StrikerS』のあと、スカリエツティと4人のナンバーズは、一切の捜査協力を拒んでいる——と。

「だから——公式で描かれていない——これ以上は調べようがないんだよ」

「そうきたか。」

「あー、ウーノやクアットロは無理でも、せめてナンバー3だったトローレが協力してくれば、もう少し、」

『謎は全て解けた！』

「みたいになるんだけどな。」

「プレシアばっちゃんの名にかけて〜」

「そんなことに母さんの名をかけられても〜。」

——そうだね。

スカリエツティの因子を濃く受け継いでいるナンバーズの中で、更生の可能性があるとしたら、トーレくらいだから。

妹たちが管理局の中で出世して、安定した生活を送っていることに納得したら、意外とすんなり更生プログラムを受け入れてくれるかもね」

『Force』に間に合っていたら、魔力を無効化する相手にも、AEC装備なしでいい戦力になってくれたのに」

「そうだね。……あ、スカリエツティの因子で思い出したんだけど、もつと基本的なお話。」

もしハーデイス氏が、プロジェクトFで造られたスカリエツティのクローンだったとした場合、容姿がまったく違う点はどう説明するつもりなの？

●スカリエツティは、スラツとした長身。

●ハーデイス氏は、学生時代スポーツやってましたーって感じの、ガツシリした長身。

●スカリエツティは、細眉。

●ハーデイス氏は——ウエンディが「マユゲマン」と呼ぶくらい——太いゲジゲジ眉。

——なんだけど？」

「つまり、オカリンとブラウン氏——くらいの違いがある？」

「あー、うん。まあ、そこまでじゃなくていいんだけど。」

その辺は、なのはと要相談で。

スカリエツティとハーデイス氏の共通点といったら、長身くらいでしょ？

私だって、容姿だけなら（逆に身長は除く）アリシアとそっくりだよ」

「むう、容姿くらい遺伝子調整でどうにかなるんじゃない？」

ほら、コーデイナーだって、知能や身体能力だけでなく、髪の色、肌の色、目の色、身長など、外見のデザインも可能となったって、SEEDのウイキペディアで読んだし」

「いやいやいや」

「大事なのは中身ってことで。」

ほら、スカさんもハーさんも、どっかのマーボー神父みたいに“愉悦部”でしょ？」

「助けて、はやってー」

「あとは喋り方。2人とも、

『一人称……私』

『三人称……君』

で、よく似てるんだよね」

「それはー、ほら、黒幕やラスボスってだいたいそんな話し方だと思うんだけど……」
「……うつ、そうかも」

「それにね、ヴィヴィオ。」

これも『魔法少女リリカルなのはStrikers クロニクル』に書いてあること
だけだ。

スカリエツティには、

『地上の人々に譲歩し、理解しあうという理念そのものが存在しない』
んだよ。

だから、地上も、管理局も、平気で破壊しようとした。

一方で、ハーデイス氏は違う。

『我々はただ、この技術で社会に貢献したいだけなのにな』

『エクリプスの研究が我が社にとって重要な項目である事は間違いない』

『次代を担うクリーンエネルギー——新時代の灯火になりうる可能性を秘めてるんだ。』

その運用ノウハウはなんとしても手に入れるべきなんだよ。

うまくやれば、特許と機密独占でどれだけ会社の利益になるか——』

確かに、目的のために手段を選ばない——という点では同じだけど、それは母さんにも共通していたこと。

例えば、あー、シャリーだって似たところあるでしょ？」

『そんな不安もあろうかですかね、このシャリオ・フィニーノが、密かに彼らの会話を入手しておきました！』

「あゝ」

「ハーデイス氏はスカリエツティと違い、復讐だったり、管理局の転覆だったり、新たな世界の構築なんて求めている。

むしろ、現在の社会を気に入っている——楽しんでる節さえある。娘さんとのデートを含めてね。

だから、ミッドなどの大都市圏ではエクリップスウイルスを撒き散らさない。彼の生活圏内だけは、いたって平和。

スカリエツティや、彼の因子が濃いクアットロと違い、彼の精神に、『地上の人々に譲歩し、理解しあうという理念そのものが存在する』

以上、根本的な思想の部分で、スカリエツティとハーデイス氏は異なる。コピーではない。別人なんだよ」

「ううっ……」

で、でも、ハーさんが嘘ついてるだけかも。

『StrikerS』22話でクアットロが、

『今回の件で軽く何千人か死ぬでしょうけど、1000年経たずに帳尻が合うわよ。ドクターの研究は人々を救える力だもの』

って、デイエチに嘘ついてたでしょ？

『人々を救える力』を『次代を担うクリーンエネルギー』だと置き換えれば、言ってることもやってることもだいたい一緒だし……」

「うん、そうだね。私だってあのハーデイス氏が、全てを正直に語っているとは思わない。

だけど、これはヴィヴィオが言ったことだよね。

『Force』は、これから核心に触れていくという大事なところで休載したって——」
「あう」

「作中で明らかになっていないことは、公式で語られていないことと同義。

だから、私たちには、ハーデイス氏の台詞を否定することはできない」

「あう」

流石はフェイトママ。

今回、考察班としては完全な敗北である。

「じゃ、じゃあ、百歩譲って、ハーさんがスカさんクローンじゃなくても、スカさんのクローンは絶対どこかにいるよね？」

「どうして？」

「だって、いくらスカさんだって、まさか自分のクローン種を、ぶっつけ本番でナンバーズに埋めこんだりしないでしょ？」

「あ、そういうこと！」

「うん。いざというとき、本当に自分の記憶を持ったクローンが生まれるかどうかを、事前に実験してたと思うんだよね」

「それは……あるかも。だけど、スカリエツティ本人が健在なんだから、実験が上手く行ったあと、クローンを廃棄したんじゃない？」

「プレシアお婆ちゃんだって、失敗作といったフェイトママのこと捨てなかったよね」

「それは……」

役立つ手駒が欲しかったこと――。

外見がアリシアそっくりだったこと――。

などの理由もあるが、

「スカさんも、仲間意識だけは妙に高かったでしょ？」

「うん」

「自分と同じ遺伝子を持って生まれた存在を殺すかなあ?」

「……確率としてはファイフティーファイフティーだと思う」

「軌道拘置所に入ってから余裕の姿を見せているのは、もう1人の自分が地上で活動

——暗躍——しているからだとしたら?」

「……」

「というか、そもそも実験で造ったクローンって1人とは限らないよね。

複数いたとして……。」

あ、そうだ。プロジェクトFで造られたクローンって、

『オリジナルとは異なる個性や性格、資質を發揮することも多く、完全なものではありえない』

なんだから、1人くらい、ハーさんみたいなのが生まれきてもおかしくない。

場合によっては、オリジナルと敵対するような性格に生まれてきてもいいし」

「それは——」

「ついでに、遺伝子調整——例えば別の人の遺伝子を混ぜることで——スカさんの弱点でもある、戦闘能力を高めた自分のクローンを生み出そうとした——としても、おかしくないよね?」

ひよつとしたら、その人の遺伝子の影響で、会社の利益のためとはいえ、スカさんじゃ

ありえない、地上の人々の生活に役立つクリーンエネルギーを開発しよう——とか思い立ったりして」

「……はあ、ヴィヴィオ。そうまでしてハーデイス氏をスカリエツティのクローンにしたいの？」

「……ううつ、ここまでやったからには、もう引っこみがつかなくなったんだよおお！」

「もう、なのはと一緒で負けず嫌いなんだから……」

「んー、そこはフェイトママも一緒かと。無印だと相当なのはママと競ってドンパチやってたの、わたしは知ってますよー」

「あー、それを言われちゃうと。」

じゃあ、ハーデイス氏の娘についてはどう考えてるの？

あのスカリエツティが、『INNOCENT』みたいに結婚してるようなものだよ？
ぶっっちゃけ、

『今日は娘との約束があるんだ。久しぶりに二人でデートの約束だね』

という、ハーデイス氏の台詞や表情は、それこそ『INNOCENT』スカさんを彷彿とさせる。

最高評議会の呪縛に囚われていない素のスカリエッティは、意外とハーさんのように生きたのではないか？

それはそれとして、

「そこはほら、前回リオが言ってたように、ハガレンのキング・ブラッドレイとか——。あと、原作版CCさくらの父親も、クロウ・リードの生まれ変わりで、エリオルの分身だったわけだから、ある意味クローンみたいなものでしょ？

どちらも共通して、

『出生不明な人物が社会的信用を得るためには、家族を得ること』

だと思っただよね」

「その部分はわからなくないけど。」

私もハラオウン家の養子になったわけだし」

「……いや、ちよつと待って。」

ひよつとしたら娘はいるけど、奥さんはいない可能性も」

「どういふこと？」

「娘の話は出ても、奥さんの話は一切出てこない。つまり、娘は、本当の娘ではなく——
新たな戦闘機人——ナンバーズの末娘とか!？」

「うわ〜」

「ダメ？」

「ん、想像するのは勝手だと思うけど、ほら、ハーデイス氏の名字って『ヴァンデイン』でしょ？」

「うん」

「会社名は？」

「ヴァンデイン・コーポレーション……あれ？」

「単純にハーデイス氏の起業した会社——だったらわかりやすかつただけだね。」

ハーデイス氏の肩書が『専務取締役』であること。

また、4巻で部下から、

『本社からの釈明要求をかわしつつづけるのももう限界が……』

とされていることから、彼が主導権を握る会社ではない——ということがわかる。

「()まではいい？」

「うん」

「じゃ、ハーデイス氏は、どうやって若くしてヴァンデイン・コーポレーションの専務取締役という高い地位を得たんだと思う？」

「研究者として才能があったから——とか？」

「名字の件は？」

「えっと……」

「元々ヴァンデイン・コーポレーション社長の親族だった——と考える方が自然なんだけど、ヴィヴィオのスカリエツィクローン説でも矛盾がないように考えてみると、

(現在のハーデイス氏の年齢が不明のため、外見から30〜35歳くらいと推測する)。

● 約15年前——学生時代、スポーツ系サークルでヴァンデイン・コーポレーション社長の一人娘と出会う。

● 付き合い始める。

● 彼女の父親に才能を認められる。

● ヴァンデイン・コーポレーション入社。

● 新規プロジェクトを次々に成功させる。

● 結婚(娘婿として)。

以降、ハーデイス・ヴァンデインと名乗る。

● 娘が誕生。

● その後も成果を出し続ける。

● 若くして専務取締役就任。

——こんなところじゃないかな」

「……あう。こつちの方がいいかも」

『Force』が………新暦81年。

母さんの事件が……新暦65年。

スカリエッティが、母さんの完成させたプロジェクトFを試したとするなら、だいたい15年くらい前でしょ。

クローンの外見年齢は自由。

『StrikerS』でのスカリエッティの話では、クローンの制作期間は、1か月あればいいんだし。

社会生活に適應させるなどの理由で、試しに造った15〜20歳くらいのクローンの1人を、学生の身分を偽造し通わせてみた——といったところかな。

スカリエッティにしてみれば、実験の1つだったんだろうね。

——なんて、こんな風に考えてみると、ハーデイス氏のスカリエッティ・クローン説も、あながち間違いじゃないかも」

「だったら!?!」

「だ〜め。」

可能性はあっても、全て想像、トンデモ仮説なんだから。

どんなに疑わしくても、これじゃ状況証拠にもならないよ。

ハーデイス氏は、黒幕でラスボス。

だけど、スカリエツティとは別人である。

これが、今回の結論だろうね」

「ですかー。あう……」

「まあまあ、落ちこまないの。」

『Force』の休載が続く限り、可能性はゼロじゃないんだから」

「それはそうだけどー」

「とりあえず、最後にナンバーズ代表として、チンクにも聞いてみようか？」

自由になってるナンバーズの中では、一番スカリエツティとの付き合いが長かったし。

『Force』4巻で、私と一緒に、六課で最初にハーデイス氏と接触したのも彼女だからね」

「はあく。ハーさんがスカさんクローンなら、チンクも因縁浅からぬ——だったのに」

「私と一緒にハーデイス氏に会ったのが伏線だったとか？」

「そうそう、そんな感じ。」

あ、ちなみに、『Force』4巻のそのシーン。

フェイトママとチンク、ハーさんの3人がソファに座ってるんだけど、チンクだけ足が床についてないように見えるんだよねえ。真面目なシーンなのに足ぶらぶら。可愛いよね、チンク」

「それはしー……って、ほら、通信がつながったよ——」

ここで、魔法少女のコスプレをしているチンクの映像が映ったら最高なのだけど、当然そんなこともなく、いつもの眼帯少女が降臨である。

「ノーヴェがわたしにストライクアーツを教えてくださいましたのって、慕っていたチンク姉に、わたしの外見（サイズ）が似ていたからではないか——と思うのは邪推だろうか？」

『え？』

「え？ ——って、突然なに言ってるのヴィヴィオおお!？」

「ゴメンナサイ。前から疑問に思ってたもので」

『いえ、陛下と似ているとか、ノーヴェが私を慕ってくれている——と言っていただけるのはうれしいことなので』

よかった。意味が通じてなかったよ。

ホツと胸をなでおろしつつ、これまでの経緯を説明する。

『ハーデイス氏がドクターのクローン……？』

そうですね……。

まったく似た部分がないとは言いませんが、私としてはあの眉毛を見ていると、あの男——ゼスト・グランガイツを思い出しますね』

「あゝ、チンクの右目を奪った……」

というか、チンクが殺した相手だよおお!?

ちなみに、ゼストさんは『StrikerS』に登場した槍使いのゴツイ男性だ。

古代ベルカ式のSランク魔導師（騎士）で、その実力はシグナムさんをも上回る。

ちよー強い人。

スバルさんたちのように近代ベルカ式でないところを見ると、ひよつとしたら、アインハルトさんやジークさん、ヴィクターさんのようにベルカの末裔の1人だったのかも
しれない……。

『Vivid』9巻でホテルに集まったとき、1人だけゴツイ男性がいたらスゴい絵面だったのに……。

たぶん、生きていたらザフィーラとよい飲み仲間になれたであろう。

色んな意味で惜しい人を亡くしたと思う……。

「そういえば、ゼストさんもゲジゲジ眉毛だっけ」

「ウエンデイなら、裏でマユゲマンとか呼んでそうだね」

「……あ、ちなみにチンクがゼストさんと戦ったのっていつだっけ？」

『そうですね……。新暦でいうと、66年ごろでしょうか』

「そっか。」

ということとは、

- 約15年前に亡くなって、スカリエッティの人造魔導師の実験体として使われる。
- ガツシリした体格。
- マユゲマン。
- 地上の平和を守る。

●近接戦闘に優れ、男性魔導師としては、リリカルなのは屈指の実力者。

ねえ、フェイトママ〜」

「はい？」

「前に、

『オリヴィエ + アリシア || わたし』

みたいな話をしたことあったでしょ？」

「うん、あったね」

「だったらさ、

『スカリエツティ + ゼスト || ????’

——とか、どう?」

「いやいやいやいや!? ないよ、絶対！」

「だよー。わたしも、流石にコレはないと思う……」

『あのー、1つよろしいでしょうか?』

「はい?」

『ハーデイス氏についてなのですが……』

いくら「原初の種」の力を得ているとはいえ、一般市民の研究者が、素人とは思えないほどの殺気を放ち、あれほど戦い慣れしているものでしょうか？

ともすれば、フツケバインの連中よりも高い戦闘技術を有しているように思えたのです。……』

つまり、六課——なのはママたちに匹敵する戦闘スキルというわけで、そんな男性魔導師、クロノ提督やユーノ司書長以外にいたら……。

それも、近接戦闘で……。

「いやいやいや……」

信じるか信じないかはあなた次第です。

そいえばチンクも年を取らないよね？

ミッドチルダ南部。

八神家。

PM 9:00

「「永遠のロリっ子コンビ（ユニゾンもするよー）には、私たちメインヒロインズ（×3人）の気持ちなんて、わかんないんだああああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

スターライト——

プラズマザンバ——

ラグナロク——

——ブレイカアアアア——————ツツ!!」

「あ————」

ちゅどーん——という轟音&爆風と共に、3筋の閃光が八神家のリビングを蹂躪。壁をブチ抜き、海の彼方へと消えていく。

残されたのは、わたしの真横で、両手両足を投げ出したうつ伏せの格好のまま、黒焦げになっている鉄槌の騎士と、祝福されてないっぽい風の2人。

「わーお、あと1ミリずれてたら、わたしも巻き添えに……」

いやー、ここが海沿いでよかったですよねぇ、ミウラさん。ご近所に被害が出なくて」

「なんて、のんきなこと言ってる場合じゃないですよおお、ヴィヴィオさあーんっ!?!」

●
そんなわけで、みなさん聖王わ。

高町ヴィヴィオです。

本日は、八神司令のお宅でお泊りホームパーティーです。

どんな感じか、イラストで知りたい方は、ねことうふ先生のコミック『魔法少女リリカルなのはVivid LIFE Advance』をご覧ください。

——だいたい事件（笑）が起きます。

そんな定期的なイベントではあるのですが、今回はいつになくバイオレンスなことに……。



「すでに犠牲者が2名……。」

「どうしてこんなことに？」

「いやいや、だいたいヴィヴィオさんのせいですよねええ——っ!？」

「……………」

コホン。

なんてことはない。

前回のラストでチンクが登場したので、その件について口にしただけなのだ。

「わたしはただ、15年前にゼストさんと戦ったときから姿が変わらないから、チンクもヴォルケンリッターみたいに年を取らないのかも——。」

「って、あおっただけですよ?」

「今、あおったって言いましたよねええ!？」

酔ったなのはママが、ふらり立ち上がる。

「ひつく……これはチンクを、自分ばかり年を取らない罪でタイーホしないと」
「……待つんや、なのはちゃん。」

ひよつとしたら、戦闘機人はみんな年を取らない可能性も。

ナカジマ家、一網打尽にするで」

「なのは……はやて……。」

取り調べ……。

ついに、母さんから譲り受けたムチ——使っちゃおう？」

「つて、フェイトママ、なに譲り受けてるのおお——っ!？」

あわわ——と、慌てて緑の人が止めに入る。

「3人とも待つて！」

戦闘機人と言つても、スバルやギンガは年を取るでしよ。空港火災のとき、2人ともちっちゃかったし」

「あゝ」

「そういえば……」

「そやったなゝ」

……ふむ。

「よつ、さつすがシャマル先生！ 最年長っ!!」

「えつと、いわゆる知恵袋的な？」

「そこ、最年長いわないの！ あと、おばあちゃんじゃないから！」

「……ひつく、最、年長？」

「……本当にそうかな？」

「……私ら、本当はもうシャマルより年上ってことは——」

「あー、設定資料集によると、シャマル先生の外見年齢は22歳だそうですねー」

「ちよ、ヴィヴィオさあゝくんっ!?!」

『Vi Vid Strike!』で、すでに24歳に達した3人娘(?)が、ゆらゝり幽鬼のごとく振り向いた。

「「あー、これはシャマルもトリプルブレイカーの刑だねえ……………」」

「どうしてええ——」

シャマル先生の「風の護盾！」という声が聞こえたのだけど、聞こえただけで——ちゅどーん！

自身の料理のように黒焦げだっ！

「くっ…………あの3人娘(?)の前では、湖の騎士の防御魔法も紙のようだ…………」

「やっぱりヴィヴィオさんのせいじゃないですかああ！ ていうか、3人娘のあとに(?)なんてつけなくていいんですよおお!？」

すると満を持して——ガタンッ！

赤ワインが似合う女騎士——髪の色が赤いからだだけだけどね——他1名が立ち上がる。

「くっ、殺…………」

「ヴィヴィオさんは黙っててくださいああい！」

「やはり、ここは私が出るしかないようだな…………。行くぞ、アギト！」

「おうう！ ……って、本当にやんの？」

なんだかできあがっているシグナムさんと違ってアギトは冷静だ。

「おっと、出るかユニゾン烈火の将うう!？」

「そ、そうですね。いくら管理局最強の3人娘が相手でも、酔った状態ならシグナムさんとアギトさんの2人で——」

シグナムさんが吼える。

「確か、スバルとギンガはスカリエツティ以外の誰かが生み出した戦闘機人だと聞いている！

つまり、同じ戦闘機人でも、ナンバーズだけが年を取らない——ということではないのか？」

「さっすが剣の騎士、Sランクっ！」

「それ剣技と関係ないですよねええ!？」

「ユニゾン、インツ！」（酔シグナム）

「それ肩車してるだけですよねええ!？」

「でも、シグナムさん。」

『Vi Vid Strike!』で、ノーヴェの赤髪、伸びてましたよ？

『シヨート ↓ セミロング』

くらいに」

アギトを肩に座らせた格好で、冷静なんだか冷静じゃないんだかわからない表情で、ヴォルケンリッターの将が答えた。

「そうだったな……。」

だとすれば、スバル、ギンガ、ノーヴェの共通点……。」

「3人ともクイントの遺伝子を元にしてるってことだろ?」

「さっすがアギト、元スカさん一味!」

「元スカさん一味って……いや、まあ、そうなんだけどさ」

元スカさん一味——という単語に、なのはママがピクリと反応する。

「……ひつく、むむつ……これは最初にタイーホしないと……?」

「ラグナロク、いつでも行けるでええ!」

「ふっふっふ、シグナムも覚悟してください!」

「テストロツサか……よし！ ばっちこーい！」（酔シグナム）
「いや、くんなよっ!？」

——ちゅどーん！

三度ブレイカーの煌めきが八神家を破壊する。

「けほけほ……ついに天井まで……」

「うわーん、シグナムさん、アギトさああん！」

く・ろ・こ・げ。

「尊い犠牲だった……南無……」

「死んでませんよおお——っ!？」

すると、ガタツと音がして、瓦礫の下から青いマユゲ犬が姿を現す。

「先ほどから、おとなしく聞いていたのだが……」

おとなしく聞きすぎだ！

「ザフィーラー！」

「師匠！」

この惨劇に耐え切るとは……。

(あんまり役に立たない……とかいいたら怒られそうだけど)盾の守護獣の、面目躍如と
いったところか……。

「外見でいうなら、スカリエッティも若い姿のままだったと記憶しているが」
なのはママがポンつと手を打った。

「……あ、なるほろ」

「……自分にもナンバーズと同じアンチエイジングを施していた……とか?」
美容か!?

「そーや!」

『魔法少女リリカルなのはStriker THE COMICS 2巻』

で、スカリエッティがウーノに散髪してもらつとるシーンがあつたところを見ると、
スカリエッティ製は〃年を取らんけど髪は伸びる〃——とか、どうや!?

「なんてピンポイントな機能! でも、あく、だからノーヴェも髪だけ伸びたと」

ミウラさんが妙に頭をコクコクしている。

「そうですよね。ナンバーズのみなさんは女性ばかりですし、やっぱり、女性としては髪

が伸びないと困りますもんね……」

「わからなくもないが……」

「「ミウラ／さん／ちゃんがいう？」」

「どーしてここだけ息ぴったりなんですかああ——っ!？」

「まあ、まあ、ミウラさん。

はやてさんって、とっくりが似合いますよね？」

「どこの信楽焼ですかああ!？」

「狸といえぼザフィーラ。」

『Force』4巻で、

ウエンディ「ちびたぬ隊長、尊敬するっス」

ティアナ「あと、その妙な愛称は本人の前ではくれぐれも言わないように
って言われてたの読んで、どう思った？」

「ああ、あのシーンか……」

流石に主も、もういいお年だ。

呼ぶのであれば “ちびだぬ” ではなく “古だぬ” だろう」

「……………クラウソラス」

夜天の主がぼそつと呟く。

白い閃光。

なのはママでいうところのデイバインバスターが今日のわんこを直撃——ちゅどーん！

「し、師匠おっ!?!」

「さっすが、ちびたぬ隊長！ 単騎でこの破壊力うう!」

「だいたいヴィヴィオさんのせいですよねええつ!?!」

師匠たちに何か恨みでもあるんですかああ!?!」

「やだなー、ミウラさん。」

わたし平常運転じゃないですかあ〜」

「……………そうでした〜」

「それはそれとして、ミウラさん。」

わたし、ここまでのやり取りで、謎が全て解けましたよ!」

「ええ、ここにそんな要素が……」

「文系が赤点ギリギリだった人には、わからないかもしれないかもしれませんが……」

「ぐっは!？」

『Strikers 魔法辞典』によると、スバルさんとギンガさん——タイプゼロの2人は、

『同じ戦闘機人であるナンバーズとは異なる製作者の手で、異なる製作コンセプトで製作された機体』

とあります。

スバルさんやギンガさんは、成長する過程で強くなっていく。

もし最初から強ければ、空港火災のとき一般人と同じように逃げ惑う必要はありません。

けれど、後の戦闘結果を見てもわかるように、ピーク時は、スカリエッティ製の戦闘機人よりも高い戦闘力を得ることができません。

タイプゼロの欠点は、確かに強いけれど、成長に時間がかかりすぎる——ということ。

また、肉体が成長するということは、逆に衰えるということでもあります。

つまり、スバルさんやギンガさんは、年を取る——ということなんです。

一方でナンバーズは、最初から大人の姿、安定した強さを誇っています。

経験や技術、装備などでの能力アップはあっても大幅な成長はない。

『Strikers 魔法辞典』の『戦闘機人』の項目にある、

『天賦の才や地道な訓練に頼る「魔導師」に頼らず——』

『確実に安定した数を揃えることができる武力——』

からもわかるように、量産を前提に完成された兵器として考えるなら、むしろ、ナンバーズの方が正しい姿だと思われます」

「な……なるほど。」

ピーク時の強さを犠牲にすることで、肉体的な衰えを減らし、安定した強さを得ることを優先した——それが、チンクさんが年を取らないように見える秘密だということですね！」

「はい。」

ただ、スカさん自身は、

『魔法少女リリカルなのはStrikers THE COMICS 2巻』
で、

『生命ならではのゆらぎとでも言おうか、ただの機体では出せない輝きだ』

と言っているので、成長や感情によるステータスアップを理解していたんでしょね。

時間のかかる肉体的な成長は、ナンバーズに採用しませんでした。

だからこそ、タイプゼロの2人を、貴重な研究対象として捕まえようとしたんだと思います」

「でも、ヴィヴィオさん……。」

そうになると、チンクさんだけでなく元ナンバーズのみなさん——ノーヴェ会長はもちろん、セインさんにウエンデイさん、オットーさんも、この先みんな見た目が若いままっでことでしょうか？」

「んー、たぶん、そうなると思うんですが……」

半壊した八神家で、なのはママたちがワイン片手にストレッチを開始する。

「……ぷつは。そっかー、ここはやっぱり、ナカジマ家に行くしかないみたいだねえ」

「……あー、ひつく。チンクの確保を最優先に、次点で他のナンバーズってとこやな」

「……ムチ、使ってもいいよね、ムチ……」

真・ソニックフォームで、ムチをピシピシ振るうフェイトママ……。

こ、これは、わたしの命に換えても写真を撮らねば！

「あ、そいえば今日、ノーヴェがナカジマ家でご飯食べるーとか言ってたっけ」

「どうしてまた、こんな時にいい!？」

「いやー、

『今日のうち、八神家でお泊りホームパーティーなんだよ』

とか話したら、

『あたしも久しぶりにセインたちを誘って、ナカジマ家に里帰りでもすっつかない』

みたいなノリに？」

「いい話なんです、いい話なんです……」

「——それは好都合!」

「どうして、そう、火に油を注ぐようなことをおお!？」

「ちゃんと、

『ミウラさんも、ホームパーティーに参加するんだよ』

って、ノーヴェに伝えただけど？」

「そしたら余計にやる気になって……」

「勝手に巻きこまないでくださいああい!？」

「なのはママとフェイトママ、そしてはやてさんの3人が、デバイス片手に向かい合う。」

「……ひつく。」

レイジングハート――

バルディツシュ――

シユベルトロクロイツ――

――セーツト、アーツプ！――

おーっ！

こんなところでTVアニメ版『A's』の名シーンの再現っぽいのが見れるなんて――

――じゃなくて、バリアジャケット着ちやっただけですけどおお！？

「3人とも殺る気だ……」

「どうするんですかもおお！？」

「ええ、言わなきゃよかったと後悔してます」

「どうして、そう、毎回毎回、刹那的な生き方を」

「わたしは神眼の刻の中で生きる女の子ですから」

「いきなり神眼とか持ち出されても」

「それが——わたしの受け継ぐ高町家の魂（ソウル）ですから！」

「ムダにカッコいい！」

でも、その生き方ダメですよお!?」

「そんなわけでミウラさん。」

チンクとノーヴェには逃げるよう連絡しておいたので——」

「いつの間に!？」

そーいうの早いですよ……」

「少しでも責任を取るため——時間稼ぎに、これから2人で最後の抵抗を試みましょう
!」

わたしも黒いバリアジャケット——聖王モードで挑みますから」

「こんなところで本気の戦装束ですかああ!？」

「ほらミウラさんも、試合みたいに大人モードでバリアジャケット装着してください！」

「ううっ……こうなったら破れかぶれです！」

金色の星型デバイスを取り出す。

「スターセイバー——セーット、アープ！」

「ミウラさんのスーパースーパー変身タイムをじっくり眺めていると、……はっ!?!」

まさか!?!

なのはママ、フェイトママ、はやておば——」

「ミストルティン！」

魔力の槍が飛んでくる。

「ひいい、あつぶな!?!」

危うく石化するところだった。

「嘘です。ゴメンナサイ」

試合モードで助かった。

とっさのセイクリッドディフェンダーが間に合ってくれた。

「憧れのはやてお姉さん、前から思っていたんですが……ミウラさんって、ただの人間の割に、妙に頑丈な気がしませんか？」

「……………あー、それは、あるな〜」

『ViVid』12巻でわたしがアインハルトさんと戦うシーンと、18巻でわたしがミウラさんと戦うシーンを見比べて欲しい。

アインハルトさんですら倒れるほどの打撃を何度も打ちこんでいるのに、ミウラさんは何度でも立ち上がってくる。

そう。

まるで、スバルさんのように……。

そして、

「成長してるんだかしてないんだかわからない大人モードの存在……」

「ま、まさかー」

「そうです。

今回のオチ——じゃなかった、真の結論は、

ミウラさんも戦闘機人なんじゃあぁ——っ!?!」

「へ？」

「なるほど……それはあるかもー」

「ないですよおお!!？」

——ガシツ！

否定した瞬間、ミウラさんは左右から、なのはママとフエイトママに腕をつかまれた。

「……ひつく。じゃ、ミウラちゃん」

「……ちよつと隣の部屋行こかー」

「……痛くしないから——ピシピシ——ね」

「え、ちよ……待ってくだ……あああゝ」

——パタン。

かろうじて残っていた扉が閉まり、ミウラさんの姿が消える。

「ふう……。」

ついに、パンデモニウムへの扉が閉じたか……。

ノーヴェ、チンク……わたし、がんばったよ……。」

『がんばってるのボクですよねええっ!?!』

……。

明日の練習後、ミウラさんには、コンビニで一番高いアイスを奢ろうと思う。

ぶちつと考察 ヴィヴィオ年表!

「はい! みなさん聖王わ。高町ヴィヴィオです」

「ヴィヴィオ、そのあいさつは流行らないと思うよ?」

「でも、ママ。今回の『ぶち考察』は、半分なのはママのせいでもあるんだよ?」

「あれ、いきなり私の責任にされてるんだけど……?」

「まあ、まずはこの年表を見てもらいたいんだけど——」

●新暦75年……『Striker』JS事件 9月に解決

桃子(43歳) なのは(19歳) ヴィヴィオ(5歳 養子縁組時)

●新暦76年……春 ヴィヴィオ入学

桃子(44歳) なのは(20歳) ヴィヴィオ(7歳 初等科1年)

●新暦77年

桃子(45歳) なのは(21歳) ヴィヴィオ(8歳 初等科2年)

●新暦78年……『Striker』サウンドステージX

桃子(46歳) なのは(22歳) ヴィヴィオ(9歳 初等科3年)

●新暦79年……『ViVid』本編

桃子（47歳）　なのは（23歳）　ヴィヴィオ（10歳　初等科4年）

「えつと、お母さん（桃子）の年齢が、四捨五入で50歳だよ!?　とかいうネタ？」

「違う、違う。そっちはオマケで、ほら、わたしの年齢をよく見て」

「新暦75年に5歳で、翌年、新暦76年に7歳……おやあ〜？」

「養子縁組時に5歳——というのは『魔法少女リリカルなのはStrikerS』オフィシャルファンブック』の、わたしのキャラ紹介欄にバッチリ書いてるので間違いない。」

『サウンドステージX』もCDのジャケットのキャラ紹介に書いてあるので間違いない。『ViVid』は言うまでもないよね？」

「……ゴメン、ヴィヴィオ。私、何かしくじったとか？」

「……うん、わたしもこの年表を見たとき、コレはマズい!?　と思ったんだけど」

「思ったんだけど？」

「どーにか、なりましたあああああああ！」

「おおお——っ!」

「そもそも、リリカルなのは年齢って、その年に誕生日を迎える予定の年齢なんだよ。

●小学1年生 6歳〜7歳

●小学2年生 7歳〜8歳

●小学3年生 8歳〜9歳

(『無印』で例えるなら、本当はまだ8歳だけど『高町なのは 9歳 小学3年生』と、キャラクター紹介される)

●小学4年生 9歳〜10歳

なので、わたしも『Vivid』で10歳ってことになってるけど、本当は誕生日が来るまでは9歳だったりします」

「つまり、9月にJS事件が解決して、すぐあとに養子縁組をしたとして、翌年の4月1日までに、ヴィヴィオが誕生日を迎えればセーフ! と?」

「ただね、1月〜3月の早生まれだと、年齢表記が色々と面倒くさいことになるでしょ。

その辺りは、原作とらいあんぐるハート版のなのはママが3月生まれだったから、一番よくわかってると思うけど。

なので、わたしの誕生日は10月〜12月くらいがちょうどいい。でも、誕生日が、養子縁組してすぐじゃん！

どーいうこと!?!

急すぎだよね!?!

——と、思っていたら『りりかる歳時記』のお陰で判明しました。

11月。

聖王教会で、聖王オリヴィエの誕生を祝う『聖誕祭』が行われるという。

そう。

わたしの誕生日は、推察通り、養子縁組をしてすぐの11月だったのです!」

「あー、だねえ……」

「つてことは、なのはママ。ひよつとして、養子縁組のときに5歳にしたものの、

『あれ? 来月って『聖誕祭』があるからヴィヴィオの誕生日ってこと?」

え、しまった、もう6歳になるのおお!?!」

みたいなオチだったとか?!

「ん〜、それに関しては1つ物申したい。

学校に通いたいと言ったのはヴィヴィオなんだよ。

つまり、ヴィヴィオの誕生日が11月だから、翌年に入学する年齢に合わせて、養子

縁組の時点では5歳にしようと思ったんだよ」

「おやあ〜?」

しまった、わたしのせいだったか!?

「あはは。まあ、でも、外見年齢が偶然にも一致したつてのが、一番の要因かな。

例えば、ヴィヴィオの外見年齢がヴィータちゃんみたいに8歳だった場合、初等科2〜3年生に編入つて形になってただろうしね」

「むむむ……そんな偶然つて……あ、前に考察したつて。

わたしにはプレシアお婆ちゃんの『プロジェクトF』の研究成果が入つている。

つまり、アリシアさんやフェイトママのデータが使われているんじゃないかって……」

「そーいえば、アリシアちゃんの遺伝子データつて、ちようど学校入学を控えた6歳なんだよね。劇場版で判明したことだけど、アリシアちゃんの年齢はTV版から変更する必要性はないし……」

「おお〜」

その後、帰宅したフェイトママの前で、

「どうして、なのはとヴィヴィオは私に手を合わせて拜んでるのおおおおおお——
——っ!?!?」

「フェイトちゃん／＼ママ、ありがとうございます!」

緊急指令、海鳴市に聖地巡礼せよ!

「はい! みなさん聖王わ。高町ヴィヴィオです」

「お霸王ごございます。アインハルト・ストラトスです」

「本日は、

Q 『海鳴市のモデルはどこなの? (何処にあるの?)』

というご質問をいただいたので、さくつと調査しちやいたいと思います」

「はあ……海鳴市ですか。確か、ヴィヴィオさんのお母様がお生まれになったという……魔界?」

「いやいやいや、前に翠屋行きましたよね? ふつーの、日本の地方都市ですよお!」

「そうでしたか……。ですが、その、海鳴市のモデルとなった都市を、どのように探したらよいのでしょうか?」

「それは簡単です。今どきは、

『リリカルなのは 聖地』

と、ネットで検索すれば、ほら、この通り——おや?」

「ありませんね」

「えっと、茨城説、新潟説、三重説、平塚説、神戸説……ダメだ、ハッキリしない。特定した人はいない？ どうしましょう、アインハルトさん。アルハザードみたいですよ？」

「どうでしょうと言われましても……そうですね……でしたら、格闘技もそうですが、基本に立ち返る、というのはいかがでしょうか？」

「基本に、ですか……？」

「そうですね……だったら、

『リリカルなのは』

で検索。

誰でも一度は見たことがありそうな、ウィキペディアの『リリカルなのは』のページを……」

「あ、ほらヴィヴィオさん、ありましたよ——」

海鳴市

海に隣接した街で、第1期からA、sまでの主な舞台。海辺といっても山もあれば丘もあり、果てには温泉宿やスーパ―銭湯も備えた、至れり尽くせりな街。登場人物のほとんどはこの街に住んでいる。土地に関する設定は原作からの変更がほとんど無い

めこちらも参照。

「こちらも参照?」

「ああ、それって『リリカルなのは』の原作。

『とらいあんぐるハート』シリーズの舞台ですね。

えつと……」

『——シリーズすべてが関東地方の架空の都市、海鳴市を舞台としている』

(※ウィキペディア『とらいあんぐるハートシリーズ』全体の特徴の項より)

「なんてこつたい……」

「つまり、海鳴市は架空都市であつて、聖地——モデルになつた実在の都市はない、というこつでしようか?」

「え、ええ……。ですが、ですが……」

「まだ納得が行きませんか?」

「はい。いくら詳しい先人が残してくれた記述とはいえ、自分の目で確かめないことには納得が行きません!」

高町家の魂を継ぐ者として、そう簡単に諦めたりはしませんよオオ！」

「はい、ヴィヴィオさん、その意気です！」

「とりあえず、今、わたしにできることといえば……そうだ、他の似たような作品も調べてみましょう！」

「他の似たような作品と言いますと？」

「ええ、リリカルなのはファンは、あまり触れたくないかもしれませんが——避けては通れない——当時、大人気だった魔法少女モノといえば、

『カードキャプターさくら』

ですー！」

「ああ、私でも知っています」

「最近も新作が放映されてましたしね。」

その『カードキャプターさくら』の舞台となる“友枝町”を調べれば、海鳴市のモデルとなった都市の傾向がわかるんじゃないかと

「なるほどー」

『カードキャプターさくら 聖地』

で検索すれば……あ……、友枝町も架空の町だったああ!？」

「ですが、ほらー！」

横浜のとある街を参考に作られたとか、校舎のモデルは旧京都市立立誠小学校など、色々と書いてありますよ！」

「ホントだ！」

「だったら『リリカルなのは』の海鳴市も、そうやって複数の景観を組み合わせて創造された架空都市だった、のかもしれないね」

「はい。臨海公園のモデルが神戸、戦闘シーンのビル群が大阪、なんて話もありますしね。」

「きつと、なのはさんが通われた小学校や、フェイトさんの住んでいたマンションなども、モデルになった建物が存在するのでしょうか」

「ええ。PCゲームのときはまだしも、アニメ化ともなれば、ロケハンが取材に行ったはず」

「そうですね。想像だけで、アニメの背景を全て描いていたとしたら、それはそれで才能が溢れすぎですし」

「ただ……」

「他にも何かありましたか？」

「はい。先程の『カードキャプターさくら』の友枝町。架空の町ではありませんが、場所は東京都という設定のようです」

「なるほど。つまり、海鳴市も、架空都市ではあっても、日本のどこにあるかは、設定が決まっているではないか——ということですね？」

「はい。」

なので、最初の質問の、

Q 『何処にあるの？』

の方であれば、調べれば突き止められるかもしれません」

「そういえば、先程、

『——シリーズすべてが関東地方の架空の都市、海鳴市を舞台としている』

と、ありましたね」

「はい。ですが、もっとシンプルかつ決定的な証拠を見つけました！

『The MOVIE 1st』のパンフレット。

なのはママのキャラクター紹介で、

『Home 第97管理外世界 極東地区 現地惑星名称「地球」 陸上国家「日本」
「関東地区」海鳴市藤見町』

と書いてありました！」

「ああ！ 本当です！ これで、海鳴市が関東にあることは疑いようがありませんね！」

「はい！」

さらに、海鳴市は、海に面していますから。

関東で海に面した都道府県といえば、『東京都』と『神奈川県』と『千葉県』と『茨城県』の4か所です」

「だいぶ絞られてきましたね」

「はい。」

まだまだ行きますよっ！

『Reflection』の时空管理局・東京臨時支局のシーンで、イリスさんとキリエさんの活動範囲がモニターに表示されています。

北は千葉県の浦安市辺りから、南は神奈川県横須賀辺りまで。

2人の目的がはやてさん（夜天の書）であり、

イリス『私たちがこれからすることは、この世界の人たちにとって、少し迷惑なこと』
キリエ『ただくなるべく迷惑をかけずに、できるだけ急いで、パパとエルトリアを助ける鍵を手に入れる』

ということである以上、海鳴市に近い場所を本拠地に据えての短期決戦——戦力増強をはかったと考えるべきでしょう。

また、イリスさんとキリエさんが最初に降り立ったのが江戸川区。ところが、機動外殻のもとになる工事車両の盗難は、北や、東西ではなく、南へ、南へと伸びています」

「私は日本の地理にはそれほど詳しくはありませんが、つまり、狙い——目的地は、茨城県や千葉県、東京都ではなく、南の神奈川県にあったと？」

「はい。」

2人の動きから、神奈川県を目指していたのは明らかです。

ここでさらに、懐かしの『無印』第5話——温泉回を思い出してください。

ウィキペディアの『とらいあんぐるハートシリーズ』の地名に、こんなことが書いてありました」

月守台

全国的に有名な温泉街。北の山を越えた先にあり、市街地からは車で一時間ほどを要する。

「あく、そういえば、以前『無印』の記憶ディスクをお借りして拝見した際、海の見えない山の中にある温泉だった、と記憶しています」

「まあ、宿の名前が『旅館山の宿』というストレートな名称ですからねえ。」

そんなわけで、関東でこの条件に該当する有名な温泉街といえば——」

●鶴巻温泉（神奈川県秦野市）

●湯河原温泉（神奈川県足柄下郡湯河原町）

●箱根温泉（神奈川県足柄下郡箱根町）

ウイキペディア『温泉街』より

「千葉県にも、白子温泉という有名な温泉街がありますが、ここは海岸近くにあるのが売
りですし、ちよつと違うかなと」

「なるほど。やはり神奈川県ですか……。」

あとは先程の、

『北の山を越えた先にあり』

というところがポイントですね？」

「はい。その情報を信じるのであれば、海鳴市は温泉の南に位置するはずですよ！」

「えつと……箱根の南が……湯河原で……その南が……静岡県熱海、でしょうか？」

「はい。熱海も有名な温泉街なので、そこからさらに南へ向かうと、流石に、イリスさん
とキリエさんの活動範囲から離れすぎてしまうんです」

「そうなるよ、残った鶴巻温泉（神奈川県秦野市）の南ということですが……」

「はい。地図で確認すると『小田原市』と『平塚市』になります。」

地元民じゃないわたしには、戦国時代の北条氏か、俺ガイルの平塚先生しか思い浮かばないんですが……」

早く誰かもらってやってくれー、でないとなんかもらってしまおう。

「ただ、もう少し欲を言おうと、2人の活動範囲に近い藤沢市辺りが理想的なんですけど……」

「そこは誤差の範囲内ということで、よいのではないのでしょうか？」

「はい、そうですねー。」

そんなわけで、最後の小田原市と平塚市の2択。より藤沢市に近い、平塚市に軍配を上げたいと思います。

よって、海鳴市の位置ですが――

Q 『何処にあるの?』

A 『神奈川県中央、平塚市の辺り』

が、今回の回答になります」

「そうですね……。」

『とらいあんぐるハート』とTVアニメ版『リリカルなのは』は違う――という方もいる

「私たち、召喚魔導師の間では、結構有名な話なんだけどね」

「召喚魔導師の間で有名……?」

「うん。海鳴市のモデルはね——『平崎市』」

「平崎市……つて、どこそこおお!」

日本にないよね、そんな市!

「えつとね、『真・女神転生デビルサマナー』つてゲームの舞台になった架空の都市だよ」

「へ? 架空の都市??」

「そう。モデルは横浜市で、名前は、同じ神奈川県『平塚 + 川崎』の悪魔合体!

なんだつて」

「へ〜」

「ただね、ゲームで平崎市の地図を見ると、海岸線が南にあるから、地理的には平塚市をモデルにしたと考えるべきだね」

「ほ〜」

「それと、ゲームをプレイすればわかるんだけど、古代日本史にも登場する“秦氏”つて一族が、深く関係してくるの。

でね、この秦氏が拠点を構えたのが、神奈川県秦野市つてところなんだけど……」

「へ、へえ……」

「だから、『横浜 + 平塚 + 秦野』の三身合体！ が、平崎市のモデルってのが、本当のところなんじゃないかなって、私は思うんだよ」

「な、なるほど。」

悪魔召喚師（デビルサマナー）が主人公のゲームだけに、召喚師の間で有名と？」

「そうそう。でね、主人公の名前が『葛葉キョウジ』っていうんだけど、葛の葉といえば、安倍晴明の母親としても有名な葛の葉狐で、妖狐でしょ」

「あー、うん」

「確か、ユーノ先生のもとになった久遠ってキャラが妖狐だったよね」

「おう〜」

「それに、原作の海鳴市って退魔師の方もいるんでしょ？」

「……はい」

「あとは……そうそう、

『真・女神転生デビルサマナー』の発売日は、1995年12月25日。

『とらいあんぐるハート』1作目の発売日が、1998年12月18日。

デビルサマナーって人気があったから、実写のドラマにもなったし、小説も出たし、平崎市について詳しく書かれた書籍も発売したんだよ。

ちようど、そういった資料が出揃った時期でもあったろうし……。

ほら、ひよつとしたら、原作者さんがゲームにハマって、海鳴市の創作の参考にしたって、可能性もあるでしょ?」

「ううっ……」

「まあ、あくまで、召喚魔導師の間で噂されてることだから、ヴィヴィオは気にせず、自分の考えを貫いてね」

「……はい」

どうしよう……これ……。

ただ、まあ、架空都市をモデルにした架空都市ということであれば、今まで誰も聖地にたどり着けなかった理由にはなるわけで……。

とりあえず、

『デビルサマナー 平崎市』

で画像検索してもらえると、平崎市の全体MAPが出てくるので、それを見て、みなさんで判断してもらえたらうれしいです……。

リリカルなのは年齢当てクイズ！

聖王教会本部の巨大礼拝堂。

そこでは、つい先程まで聖王の偉業について書かれた書物を朗読したり、聖歌を唄ったりと、厳かなミサが行われていたのだけど……今や雰囲気が一転！

運びこまれたテーブルの上には、きらびやかな食事の数々。広い礼拝堂は、立食パーティーの場に変更していた。

わたしは講壇に立つと、パーティーの参加者にマイクを向けた。問いかける。

「11月といえば？」

『ハローウィン!!』

「——は、もう古い！」

ミッドチルダの11月恒例行事はといえば、聖王教会主催、聖王オリヴィエの誕生日を祝う『聖誕祭』！

そして『聖誕祭』にかこつけた二次会。

「ヒドいっ！」

「そんなわけで、本日はもう一人、特別ゲストをお呼びしています」

「なんと、ヴィヴィオ陛下の伯母にあたる、アリシア・テスタロッサさんです！ どうぞ
」

——ブーツ！

フェイトママがシャンパンを噴いているけど、気にしな—い。

髪をストレートにしているフェイトママと違い、ポニテにドレス（セイバーリイミ
たいな感じ）姿のアリシアさんが、講壇に立つ。

「ただ今ご紹介に与りました、アリシア・テスタロッサです。」

この年で伯母と呼ばれるのもアレなんですけど……せつかくなので、今日はこの場をお
借りして、1ついいたい！

フェイトが私のパチもんだとしたら、レヴィなんていう私のパチもんのパチもんが映
画で活躍してるってど—い—うこと!?

なんでフェイトと抱き合ったりしてるのおお!?

オリジナルの私はまったく出番がないって—うの—いい——っ！

救済措置として『アリシアのなつやすみ』とかないのおお!？」

「そんな『ピカチュウのなつやすみ』じゃあるまいし……」

まあ、電気属性って意味じゃ、当たらずといえども遠からずだけど。

「ただ、私は気づきました。

以前よりレヴィは、性格といい魔力光といい、フェイトを元にして生まれた割には、私——アリシア・テストアロッサによく似ていると……。

つまり、フェイトよりも、オリジナルである私の影響が色濃く出ている。

そう——これまで成長したレヴィは、フェイトのようなナイスバディになると言われて来ましたが……ブツブツ。

きつと、私のようにちまーんとしたボディに成長するのだあ〜っ!

はっはっは!

レヴィめ、これがアリシア・テストアロッサの呪いだあ〜っ!

「うわあ……マジで呪いだ……」

『INNOCENT』は他人の空似で、大人モードもアバターなので、実際のところどう成長するかはわからない。

映画版も、外観データを付与されただけだから、成長には関係ない。

ところが、原作ともいえるべき『GOD』版は、完全に『なの&フェイ&はや』が元に

なってるしなあ……。

ダメかもしれない。

遠いエルトリアの空に向かって……合掌！

「つまり、

八神司令 ↓ 王様

アリシア ↓ レヴィ

で、どっちが将来ちっちゃいか対決と？」

「いやいや、そこで私を引き合いに出されても」

『聖誕祭』では貴賓席側で借りてきたタヌキ(?)のようにおとなしくしていたせいか、はやてさんがいつも以上にゆるい表情を浮かべている。

“たればんだ”ならぬ“たれたぬき”だ。

『Strike』だと、スバルさんが身長154センチなんですよね」

「確か、八神司令はそれより小さかったはず……」

「となると……アリシアさん？」

「いくら私でも、もう少し大きく育つけどね」

——ぐはああ!?

はやてさんが地に膝をついた。

「ま、まあ、ほら、合唱なんかだとソプラノに多い身長ですしね、150センチ前後。大丈夫、可愛いのは正義ですから」

「それでは陛下、そろそろ本題の、

『リリカルなのは年齢当てクイズ!』

に入りましょうか?」

「そうでした! 当初は全員参加で、○×エリアに移動するタイプを考えていたんですが……その、クイズの内容があまりにマニアックなので、コチラから代表者を指名して、3択から答えていただく形式に変更しました。

もちろん、代表者さんと関係している内容なので愛があれば答えられるはず!」

「それでは行きます、第1問!

つて……これ、アリシアさんに読んでもらった方がいいような」

ユミナさんが問題の書かれた紙を、アリシアさんに手渡した。

「どれどれ?」

第1問。プレシア・テス……あー、フェイトく、ヘルプ、ヘルプ、これ読んでく
お姉ちゃんのお願いである。

「仕方ないな〜」

と言いつつ、フェイトママはうれしそう。

「第1問。」

プレ……プレシア・テストタロツサ……母さんの『The MOVIE list』における年齢を当てなさい!!」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

① 40代中頃。

② 60歳前後。

③ 実は、まだ30代だった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「負けられない戦いがここにある！　って感じですね、陛下？」

「とりあえず、資料を1枚、1枚めくった結果、わかったことをまとめると――

- プレシア30代中頃 アリシア（6）
- プレシア40代前半 フェイト（6）
- プレシア40代中頃 フェイト（9）

といったところでしょうか」

「でもさー。これってほら、懐かしの小説版で、

『プレシアは二十三歳で結婚し、二十八歳で一児を授かった』

って記述とも一致するよね〜」

「待って、待って！」

『ORIGINAL CHRONICLE 魔法少女リリカルなのは The l s
t』に載ってた、

『プレシア・テスタロッサ……ミッドの歴史で23年前は中央技術開発局の第3局長で
したが……』

の記述は、どうなるのおお!?!」

「……漫画版はなかったことになりました」

床にうつ伏せに倒れたフェイトママの頭から、ぷすぷす煙が上がっている。

「……ま、まあ、大丈夫そうなので、はりきって2問目いきますかー」

「そ、そうですねー。」

第2問。

『A, s』及び『The MOVIE 2nd A, s』における、リンディ・ハラオウ
ンの年齢は？」

みなさんも、一緒に考えてみてくださいくださいねー。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

① 20代。

② 30代中頃。

③ 実は、200歳を越える長寿種族である。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「リンディさんって、確か、フェイトの義理のママさんだよね?」

「ええ。これまで散々 “一番の謎だ!” “みたいに言ってきたんですが、お恥ずかしい話、『魔法少女リリカルなのはA's 設定資料集』の時点で、すでに書いてありました。

申し訳ありませんでしたああ!」

『A's』及び『The MOVIE 2nd A's』どちらの設定資料でも同じ記述だったので、リンディ提督の年齢に関しては、まず間違いないと思われます。

さて陛下、この問題、誰に答えていただきましようか?」

「そうですねえ……」

「あたた……」

紫のドレスの金髪美女がようやく立ち上がる。

「復活したフェイトママに答えてもらおうってことで」

「また、私いい——っ!?!」

「まあ、義理とはいえ娘になったわけだし、このお姉ちゃんに新しい家族の絆とやらを見

せてもらおうかああ！」

シヤアっぽい言い回しが気になるけど、まあ、アリシアさんだしなあ……。
フェイトママがおずおずと答える。

「……①。20代、かなあ〜」

「まあ」

とは、パーティーに参加しているリンデイさん御本人。うれしそう。

「ひよったアア！ おおっとく、フェイトママ、母親に気を遣って、ひよりましたああ！」

「そーいうこと言わないのおお！」

「——というわけで、正解をござ息、クロノ・ハラオウン提督からおうかがいしたいと思
います。クロノ提督、よろしくお願いしますね」

相変わらず真っ黒い衣装のクロノ提督が、フェイトママを見て苦笑する。

「仕方ないな。フェイトにとっては答えづらい問題だったということ、僕が代わりに答えよう。当時の母さんの年齢は②。30代中頃だよ。僕が当時14歳だったことを思えば、随分と若かったよね」

「うふふ」

と、やっぱりうれしそう。

「ちなみに、資料集の中で、直接30代中頃と書かれた記述はありません。

しかし、

●11年前 リンディ20代前半 クロノ(3) クライド(父親)(25)

また、10年後の『魔法少女リリカルなのは StrikerS 設定資料集』に、

●リンディ 40代中頃ですがごく若く見えます

との記述があるので、『A's』の時点で、30代中頃であることは、まず間違いありません」

「フェイトは、ヴィヴィオとおんなじで、若く見えるママが2人もいるってことだねー」
「確かにそうかもですねー」。

ちなみに、A'sの設定資料集のクライドさんのページには、

『クロノの父親らしく、やや童顔です』

と、書かれていました。

クロノ提督の童顔は、遺伝だったんですねえ」

「そういうことは言わなくていい」

「よかったですね、エイミーさん。昔からシヨタ——」

「うわああああああ?!? ヴィヴィオちゃんの矛先がこつち来たああ?!?」

双子の面倒を見ていたエイミーさんが、ブンブン手を振って否定している。

「ちなみに、リンディさんの年齢設定は、なのはママのママ——桃子 “お姉さん” と同い年くらいだったりします」

「「「ヴィヴィオが一番ひよってる……」」」

「それでは気を取り直しまして、

第3問。

今やホテルアルビーノの若女将（小学生じゃないよ！）ルーテシア・アルピーノですが、『StrikerS』時点での年齢はいくつ?」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

① エリオやキャロと同じ年の、10歳。

② 人造魔導師実験体として、数年間ポッド内で眠っていたため幼く見えるが、実年齢は13歳。

③ 実は、かつてのなのはママたちと同じ、9歳。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「本来なら、エリオかキャロに答えてもらおうところなんですが、何かもう、問題文に答えが出ちゃってるので——デバイスつながりでコロナ！」

さあ、回答をどうぞー！」

「え？ だって『Viivid』2巻でルーちゃんが、

『一人ちびっこがいるけど、三人で同じ年』
って。」

だから、①の、エリオさんやキャロさんと同じ年の10歳でしょ？」

● 14歳……エリオ、キャロ

● 13歳……ルーテシア

● 12歳……アインハルト

● 10歳……ヴィヴィオ

「——そう。ルーラーはあのスタイルで、キャロより1つ下、アインハルトさんとは、たった1つしか違わなかったのですっ!」

——ガシャンツ!

皿やグラスが激しく置かれる音が響く。

「2人とも、なんで追いかけてくるのおお!」

ルーラーが——誰とは言わないが——とあるチビっ子×2に追われて逃げ回る。

「まあ、実際のところ、わたしも『StrikerS』で5歳 ↓ 6歳になっているわけ、ルーテシアも早生まれとか、そういう関係がなく、と思わなくもないんですが」

「陛下あく、そういうことは、先に言ってあげましょうよ?」

「そのひねくれ具合、うちのママの血をひしひしと感ずるよ……」

いつの間にか精神的ダメージから回復していたはやてさんが、のんきに食事をうまうましている。

「るー子は大変やなー」

「はやてちゃんも、ちよつと大変だったじゃない」

「私はだいたい大変だったけどね……」

「そやけど、私や、なのはちゃん、フェイトちゃん——メインヒロイン3人組は、ほとんど情報が出尽くしとるし、今さら『大々的に明かされる謎!』とかもうないやろ?」

「あー、確かにそうかも……」

「今日はもう平和なのかなあ……?」

「……3人とも、フラグ……フラグをありがとうございます」

「なんや?! まだ何かあるんか!」

わたしの台詞におびえる八神司令。

「ご安心を。悪い話ばかりではありませんから。特にはやてさんには朗報です」

「ホンマか!？」

「はい。」

年齢……ではないんですが、『A，sの設定資料集』を丹念に調べた結果、見つけました。

知ってた人は知ってたかもしれませんが……これが13年ぶりに（今更）判明した新事実！

『A，s』ラストの15歳

●身長

1位……………フェイト

2位……………すずか

3位……………アリサ

(同) 3位……なのは

5位……………はやて

●バスト

1位……………すずか

2位……………アリサ

3位……………フェイト

(同) 3位…はやて

5位……………なのは

「……………これは……………っ!？」

「身長はご存知の通りですが、問題は胸、バストサイズです！」

すずかさんは、ほら、色々と規格外のお方なのでしょうがないにせよ、なんと、はやてさんは、あのフェイト&アリサの金髪巨乳コンビに匹敵するバストの持ち主だったのですっ！

そして、大きいと思われていたなのはママが、意外にも最下位……」

「な……………なんやて工藤!？」

「ヴィヴィオです。」

——そう。

八神はやて捜査司令は、
本来、低い身長と相まって、

リリカルなのは屈指の、
ロリ巨乳キャラ
だったのですっつ!!」

「マジかああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

「はい……。悲しいことに原作者様も忘れているかもしれませんが、『A's』ラストの
15歳当時は、間違いなく、はやてさんはロリ巨乳ポジションでした……」

「な……。なんでや……」。

私……。どこで人生間違えたんやろ……」

ドレス姿のはやてさんが、両手両膝を床につけた久しぶりのOrzポーズを披露す
る。

「――それではみなさん、聖歌をご斉唱ください」

今日はわたしが主役の『誕生会』だけど、今だけは、みんなではやてさんのために歌いたいと思います。

アインハルトさんと丸い棺桶

物語は10月に遡る。

『聖誕祭』よりも前の出来事だ。

わたしがSt・ヒルデ魔法学院に登校して、教室に入ると、自分の席に座ったコロナが、机の上をジツと凝視していた。

置いてあるのは、何やらプラモデルの箱。

「おはよう、コロナ——って、この入り方、前に見たような気がするうう!？」

「あ、ヴィヴィオ、おはよう」

「おはよ、コロナ。——で、そのプラモなに？ まさかまた『ねこぶそう』？」

「ううん。今日はハロプラの『ボールハロ』だよ」

「『ボールハロ』？」

「うん。パッケージを見てももらえればわかると思うんだけど」

「……ああ！ 初代ガンダムに登場した、丸っこい1つ眼で、頭にキャノン砲がついてる機体——ボールだね！」

「そう。そのハロバージョン。他のハロやプチッガイとも、飾り台で連結できるんだよ」

「へ〜」

パッケージ横の『集めて楽しい!』と書かれた写真を眺める。ピンクやグリーンのハロと並んで映っている。

「どうせなら、『ガンダムビルドダイバーズ』に登場したピンクのモモハロにしとけばよかったのに。モモちゃんが使ってたやつ。猫耳とかついてて可愛いし——」
すると、コロナがムツと眉間にシワを寄せた。

「あんな軟弱なハロと、ボールハロを一緒にされたら困るよ!」

「軟弱って……。セイラさんじゃあるまいし……。」

「じゃなくて、ハロもボールも似たようなものじゃ……。」

「ヴィヴィオ……アニメだけ見たり、ネットの情報を鵜呑みにして、ボールを雑魚キャラのように思っているかもしれないけど、そんなことないんだよ?」

その後、普段はおとなしいコロナが延々と語りだす。

「——初期ギレンの野望だと序盤MSのない連邦はザク相手にしよばい戦闘機オンリーで戦わないとダメなんだけど、あ、戦艦もいるけど落とされると痛いしあんまり弾が当

たらないし数も少ないから後方から攻撃ね。そこに現れるのが救世主ボール。資金も資源も格安のくせに遠距離攻撃ができるから、さらに格安の戦闘機の後ろからスタックして撃ちまくれば——なんということでしょう、あのザクですら軽々と破壊することが可能なんだよ！ MSなんていらなかったんやー」

「う、うん……」

「ちなみに、MSなかったから戦闘機にユウ・カジマ——射撃能力が高かったから——を乗せて戦わせてたら、やたら攻撃を避けるザクがいて、他のザクが全部落ちても1機だけの残って『何だコイツ?』と思って索敵してみたら、なんとパイロットがララアだったという。普通あんな時期のルナツ—宙域にララアが乗ったザクが攻めてくるなんて思わないよね? まあ、そんなララアですら戦闘機とボールのコンピの前には沈んでいったわけですが……」

「あー、うん、わかった。コロナのボール愛はわかったから……」

「とうか、コロナって、ゴライアスといい（そういえば、頭がボールみたいに丸いっけ）意外とチョイスが渋いよね」

「そ、そうかな……?」

「うん。ポーズはあざといのに」

「それ、関係ないよねええ!？」

「でもコロナ——」

と、わたしはボールハロのパッケージを眺める。

「表紙に『道具不要』『接着剤不要』『EASY ASSEMBLY!』と書いてあるくらい初心者向けキットなのに、わざわざ学校まで持ってきて作る必要あるの?」

「あ、私じゃなくて、アインハルトさんに組み立ててもらおうかなと思って」「アインハルトさんにいい!？」

……………。

「……マズかった?」

「うくん、アインハルトさんなら、グリーンのハロの方がよかったんじゃない?」

「あー、そこは、ほら……私の趣味?」

というわけで、放課後。

『精神を集中して指先を動かすことで、繊細な魔力コントロールの訓練になる!』

とか、

『授業で行うゴーレム創生に必要な、イメージトレーニングに役立つ!』

とかなんとか、だまくらかして、あのアインハルトさんに、プラモデル制作にチャレンジさせることに成功した。

椅子に座ったアインハルトさんが、強敵に挑むように、机上に置かれたボールハロと向き合っている。

「——なるほど、道具を使わなくていい、というのは素晴らしいですね。」

以前、ペンチをハンドグリップ（握力を鍛える器具）のように握ったら、バキツツと壊れてしまつて……」

「「おう……」」

「素手でいいなら、そういう道具を壊すこともありませんしね」

「これ、絶対ボールハロ破壊オチだよね？」

わたし&コロナと共に、リオがドキドキしながら見守っている。
すると……、

「あの、ヴィヴィオさん？」

「はい？」

「どうして使用しないパーツが、こんなにいっぱい使っているのでしょうか？ 特にこの黒いパイプみたいなパーツ、4つもあるのに全て使わないって、おかしくないですか？」

「そ、そう言われてみると……コロナ？」

「確かに、まったく使わないってことは、予備パーツでもないだろうし……」

「『ねこぶそう』にでもくつつけといたら？」

「うん、そうしとく」

ちなみに、あとで調べてみたところ、ボールハ口を通常のハ口にするための手足用パーツでした。

バンダイさん、せめて、取扱説明書に記載しておきましょうよ……。

他のハ口を購入していない人や、普段ガンプラを作らない人だと、ただの余剰パーツだと思って、捨てちゃうかもしれないよ？

台座の裏に収納スペースがあるなんて、気づかないよおお!?

「それでは、取扱説明書の順番通りに作り始めますね」

アインハルトさんが、緑色した最も大きいパーツを、ぐりぐり素手で取り外そうとす

る。

「あの、ヴィヴィオさん？」

「はい？」

「パーツは取れないんですが、先に回りの枠がもげてしまいました……」

「えええ——っ!？」

「早速破壊オチいい!？」

慌ててコロナが見る。

「あ、普段ニツパーで、簡単に切るから気づかなかったけど、枠の色と色が変わる部分、強く力を入れると外れやすくなってるんだ……」

いまさら知った新(?) 事実。

「あの、ヴィヴィオさん？」

「今度はなに!？」

「小さいパーツはすぐに取りれるのですが、大きいパーツが……」

——バキイイツ!

「「「やつちやつた!?!」」」

「いえ、取れました」

「スゴい音が鳴るくらい勢いでもぎとったのに、意外とキレイに取れるもんだねー」
ラッキーだったのか、ガンプラが凄いのか。

「むう……」

「どうしましたか、アインハルトさん？」

「いえ、時々固いパーツが混じっていて……おつと外れました」

そのまま、危なげなく組み立てが進んで行くと思われたのだけど、

「これは……ちよつとはめ込みがキツイですね……」

マジンパワーじゃないけど、アインハルトさんが霸王の力をこめる。

すると、

「ちよつと待ったあああああああああ!？」

アインハルトさん、ちよつと待ってください！ ほら、その赤いパーツ、折れそう、折れそう、根本が白くなってきてますよおお!？」

「え?」

慌てて引き抜くと……セーフ!

圧力がかかって白く変色しているものの、赤いパーツは無事だった。

コロナが解説してくれる。

「一見すると同じ色、同じパーツに見えますが、よく見てください。リオの変身前と変身後くらいサイズに違いがあります」

「それ、ほとんど変わらないってことじゃ……」

「だいぶ変わるよねええ!？」

はめこむ場所を替え、エンジンノズルみたいな赤いパーツさえつけ終われば、あとはもう簡単。

キャノン砲がちよつと取りつけにくい点を除けば、初心者のアインハルトさんでも迷うことはない。

「ハロプラってスゴいよね」

「アインハルトさんでも作れるから?」

「いやいや、そうじゃなくて。だってニッパー使わなくても、ほら、ゲート処理がいらない。紙ヤスリを使わなくても、パーツ同士がピッタリはまるんだもん……」

「ゆつくり組み立てても、10分もあれば完成するしね。時間がないけど、久しぶりにガンプラ作ってみたい——って人にはちようどいいかも」

とかなんとか言っていたら、

「完成しました!」

アインハルトさんが、完成したボールハロを、ゼルダの伝説のアイテムゲットみたい

な感じで、頭上に掲げた。

「「おおお、おめでとうございますっ!」」

「これで私のゴーレムもレベルアップしたということですね!」

そんなアインハルトさんとポールハロを眺めながら、リオがわたしにささやいた。

「ねえ、どうするの? ふつーに完成しちゃったけど?」

「はわわ、

『Vi Vid』も、映画みたいに『Detonation』（爆発）しちゃいました!」

みたいなオチを考えてたのにいっくつ!」

「まあまあ、アインハルトさんも喜んでるみたいだし——」

とか言っているコロナが、実は一番喜んでるので——アインハルトさんも一緒にガンプラバトルできるから——今日のところは、これでいいかな?

ぶちつと考察 ノーヴェエの秘密 (?)

ニチアサキツズタイム……。

椅子に腰かけたノーヴェエの両手両足には、1人1バインド——4人の魔導師による強固な拘束魔法がかけられていた。

「——ハッ!？」

ノーヴェエが顔を上げる。

「ようやく起きたようだね……ノーヴェエ・ナカジマ……ナカジマジム会長……」

「ここは……どこだ……?？」

「もちろん……君のマンションだよ……」

「——って、いい加減このバインド外せよ!？ ごっこ遊びなら他所でやれっついても言ってるだろ、このチビどもオオ——っつ!？」

「「「「「きゃあああああああああ!」「」」」」」

わたし——高町ヴィヴィオとリオコロは「あはは」と笑い、アインハルトさんとフリーカさんは苦笑いを浮かべている。

「いや、こつちの方が雰囲気出るかな〜って。ほらほら、ノーヴェ怒らないのー。はい、あーん、このサラダ美味しいよ〜?」

「お、おう……って、それ作ったのあたしだろおお——っ!?

っていうか、珍しく全員で、あたしの家で朝食食べたい! とか言ったと思ったら……ヴィヴィオ……お前っ、一服盛っただろおお!」

「大丈夫。セインに相談したら、ニヤニヤしながら譲ってくれた聖王教会特製の無害なお薬だから」

「セインのやつうう——絶対あとでシメる!」

「まあまあ。実は、前からノーヴェに聞きたいことがあつただけど、たぶん、尋ねると恥ずかしかつて逃げちゃうかな〜って思つて」

「……いや、だからつて4人がかりのバインドとかつて」

「逃げられないでしょ?」

「……あー、わかつたよ。わかつたから、答えたらさっさと解除しろよ?」

「うん、それはもちろん!」

「それで聞きたいことって何なんだよ? 最近よく考察してた年齢か?」

「ううん。ノーヴェってさ、ちっちゃい子好きだよね？」

——ブーツ！

「もう、ダメだよ、ノーヴェ。食べ物を粗末にしたら」

「お前のせいだろ!?! いきなり変なこと聞いてきやがって」

「だからほら、逃げると思ったって」

「いや、ふつーに『NO』と答えるだろ？」

「ノーヴェ、わたしたちのこと嫌いななの？」

「いや、そーいうことじゃなくてだな……。ほら、社会的になんだ、うん……」

「でもさ、ノーヴェってチンクのこと大好きだよね？」

例えば——

『魔法少女リリカルなのはStrikerS THE COMICS 2巻』

で、ナンバーズのみななどお風呂に入ってるシーン。ノーヴェ、チンクの頭にシャン
プーハット被せてるでしょ？」

「「「シャンプーハット……」」」

「そりや、チンク姉が目がしみるっていうから……」

「それと、

『ViVid 1巻』

わたしとアインハルトさんの初対決前、ウエンデイやデイエチたちに対して、

『なんでお前らまで揃ってんのかってことだ！ チンク姉だけだぞ、呼んだの！』

って」

「うう……チンク姉は、あたしの教育担当だったから……」

「あとは、

『ViVid LIFE 1巻』

で、

『でも楽しいぞ、あいつら吸収もはえーし、ホント子供ってのは最高だよ』

って」

「『ViVid LIFE』を参考資料に入れちゃダメだろっ!?!」

「小学生は最高だぜ！ って」

「もはや、言ってもねええ——っ!?!」

「だからさ、わたし思ったんだよね。」

ノーヴェがわたしにストライクアーツを教えてくださいましたのって、わたしの体格や髪型が、チンクに似ていたからなんじゃないかって……」

「……いや、ん……そうだな。まったく言わないとは思わないが。それだけじゃないぞ。それはお前が一番よくわかってることだろ？」

「うん。だから……まったくわかないわけじゃあないんでしょ？」

「ん……んん？」

「つまり、わたし、リオ、コロナ、アインハルトさん、ミウラさん、フーカさん——このちびっこ率の高さよ——今のナカジマジムって、ノーヴェにとってはまさに楽園、パラダイス。理想のジム空間なんじゃないかなって……」

「いやいやいや」

「でもね、わたし気づいちゃったんだよ。」

もしノーヴェが、そんなにちっちゃい子が好きでもなかったとしたら……。

『ViVid 1巻』

で、アインハルトさんから襲撃を受けたあと、スバルさんとティアナさんを呼んで、『例の格闘戦技の実力者をばかりを狙う襲撃犯だ。しかも、チンク姉が心配してたみてーに、ヴィヴィオやイクス——ベルカの王たちを狙ってやがる』

そして、アインハルトさんはタイーホ。

わたし、高町ヴィヴィオの鮮烈な物語は、特に始まることもなく――

『魔法少女リリカルなのはVivid 完』

となっていたんじゃないかなって……」

「まさか、そんなことになっていたかもしれないだなんて……」

アインハルトさんが青い顔して、ブルブル震えている。

「いやいやいやいや!? ねーよ、ねーから、絶対ないからな!」

「ノーヴェ……ちっちゃい子好きでありがとう。」

『Vivid』が20巻まで続いたのも、ノーヴェがちっちゃい子好きだったお陰だよ」

「ありがとう!」

「ありがとうございます!」

「ノーヴェ会長、ちっちゃい子が好きで、本当にありがとうございました!」

「や、や、や……やめろおおおおおおおおおおおおおおおおお!」

そんなんじゃないからなああああああああああああああああ!」

――バキイイイイン!

顔を真っ赤に染めたノーヴェが、わたしたちのバインドを砕いた！

そのまま、マンションから走り去る。

「今のは……」

「繋がれぬ拳——アンチエイン・ナツクルですね」

クイントさんの得意技だったそうで、ノーヴェやスバルさんも使えるのだ。
そういえば、使つてるとこ初めて見たなあ……。

『ノーヴェはスキル——アンチエイン・ナツクルを極めた！』

うちのノーヴェエがウザすぎる！

1

その日、ノーヴェエが珍しく——フーカさんと同じマンションで暮らすようになってからは特に——ナカジマ家に帰ると、チンクが深夜アニメを見ていた。

ちなみに、ウエンディとディエチは、コンビニに出かけている。

「ふむ……。なあノーヴェエ」

「どうしたチンク姉？」

「眼帯つながりで『うちのメイドがウザすぎる！』というアニメを見ていたのだが……」
「あー、うん」

どちらかといえば、眼帯をつけたメイドさんのムキムキな体格（身長が高い！）に、憧れて見ていたのではないか——と思っただけれど、ノーヴェエは気づかない振りをする。

「この主人公——ロシア人の血を引くという小学2年生の金髪少女を見ると、昔のヴィヴィオを思い出さないか？」

「あー、性格は全然違うけど、外見は似てるかも……」

ただ、それを言うならチンク姉も似ているよなあ——と思ったけれど、ノーヴェはそつと涙を拭きつつ口には出さない。

「——そこでだ。当時のノーヴェは、様々な資格を取り、バイトや救助隊の研修で忙しくしていたらどろ? それなのに、なぜ、1回や2回ではなく、本格的に、ヴィヴィオにストライクアーツを教えようと決意したのかと思つてな」

「今更どうして?」

「ああ、直接聞いたことがなかったからな。単なる興味だよ」

「……そうだなあ」

それは、わたし——高町ヴィヴィオとノーヴェの出会いの物語。

2

更生プログラムを終えたあたし——ノーヴェとチンク姉、デイエチ、ウエンデイの4人は、姉貴——スバルのナカジマ家に引き取られた。

姉妹の順序に関しては、家族会議という名の一悶着あつたんだが、それはまた別の物語なので、今回は割愛させてもらう。

それから、しばらく経つたある日のこと。

「すまないな、ノーヴェエ、明日の護衛、頼まれてくれるか？」

「ああ、王様のだろ？ いいよ、そういう日もあるって」

夕食後、眼帯を外したチンク姉が、申し訳なきように頭を下げた。

「王様、か……」

あたしたちナンバーズの王になるはずだった少女——高町ヴィヴィオ。彼女の護衛。

「ゆりかごが落ちたとはいえ、陛下の価値が失われたわけではないからな」

貴重な聖王のクローン。唯一の成功例。

「ゆりかご以外にも、王様にしか動かせないロストロギアとかあんだろ？」

「ああ。それに、古代ベルカ、特に聖王家の再興を目指す輩にとっては格好の旗印。担ぎ

上げようとする者も多いだろうな」

「つたく、ベルカなんて国、とつくの昔に終わってるっつーの」

「過去の栄光を忘れられない者たちもいる、ということさ」

だからこそ、王様を陰になり日向になり守る者が必要になる。

「学校なんて通わなければいいのに。そーすりや、全員安心だ」

「そう言うな、ノーヴェエ。私たちですら、自由に生きる権利が与えられようとしているの

に、小さな陛下には与えられない——なんておかしいだろ？」

「それは……そうなんだけどさ」

聖王教会系列の学校ということもあり、今は教会組の3人が護衛につくことが多いところだ、

「明日から、大がかりな聖地巡礼ツアーがあるのでな、どうしても時間が取れないそう
だ。オットーやディードをなだめるのが大変だった」

「あー、あいつら変に真面目だからなあ……。そのうち『陛下に死んでお詫びを』とか
言い出しそうだ」

「ああ、まったく。こういうときは、セインくらい融通がきいてくれた方がいいんだが」
「いや、セインはダメだろ」

「そうか？ あいつは隠れての警護には最適なんだがな」

地面や壁に潜るディープダイバーという能力をもつからだ。

「オットーやディードだって、あの性格だから、護衛にはピツタリだろ？」

「まあ、そうなんだが。陰から見守りすぎて、学院から苦情が来たことがあってな」

「あー、確かに、傍から見たら不審者か……」

ストーカーである。

「この前のデイエチの一件もな……」

「あれだろ？ 校舎の屋上からずっとスコープでのぞいてたってやつ」

「ああ。陛下を叱った教師を狙撃した」

「まあ、爆笑だったけど。そーいや、ウエンデイはどうなんだ？」

「あれは隠れないからな。陛下と一緒に登校して、陛下と一緒に下校したそうさ。ライディングボード片手に……」

「あー、ウエンデイらしいというか……。そういえば、前にチンク姉が生徒と間違われたこともあつたよ……あ」

「言うな、ノーヴェ」

あれよあれよという間に、初等科の制服を着させられたという。

——ちよつと、見てみたかったよなあ……。

こんなだから、姉妹に「ノーヴェはチンク姉好きだからなあ」とからかわれるのだから。

「まあ、そのかいあつてか、陛下の最も近くで護衛できたのだがな！」

敬愛する姉が、誇らしそうに小さな胸を張った。

「あく、はは……」

チンク姉が満足なら、あたしは何も言うまい。

ただ……。

「どうした、ノーヴェ？」

「そういった意味では、あたしが一番護衛に向いてないなあ、つて」

大人ならともかく、子供の警護には。

「お前もスバルも、ジツとしているのは得意じゃないからな」

「うん」

常に落ち着いて見える姉——ギンガは、そういった任務もそつなくこなすのだろう。

だったら、あたしのオリジナル。スバルたちが母さんと呼ぶ、クイント・ナカジマはどうだったんだらう？

「まあ、管理局や教会も動いている。私たちはそつと陛下を見守るだけでいいさ。深くは考えず、たまには休暇と思つてのんびりしてくるといい」

「わかつたよ、チンク姉——」

3

姉妹たちに聞いた話によると、王様の下校ルートはだいたい2つに絞られる。

1つ目は、高町家へ直接帰宅するルート。

2つ目は、無限書庫へ向かうルート。

1つ目は、先に、高町なのはやフェイト・テストアロッサ・ハラオウンが帰宅していることが多い。

2つ目は、無限書庫の司書長の元に身を寄せ、教導帰りの高町なのはと一緒に帰るといふ。

そして、本日はといえば、

「やれやれ、無事に高町家にたどり着いたか。これであたしの役目も終わりだな——つて」

家から、ピンクのジャージに着替えた王様が飛び出してきた。

「おいおい、こーいうときって、どーすんだよ!? 誰か一緒じゃないのか? 1人かよ!

あー、もう!」

仕方ない。

とりあえずあとを追う。王様が子供らしく駆け出す。小柄だからか。意外と足が速い。目的地は、

「近所の公園か?」

王様に気づかれぬよう背後に回りこむと、木陰に潜んで様子をうかがった。すると、

「おいおい、今度はなに始めてんだよ……?」

柔軟体操に続いて、パンチ、蹴り。

たった1人で、ストライクアーツの真似事を行っていた。

「チビのくせに、それなりに様にはなってるけど……」

———「そういや、スバルのやつが格闘の基礎を教えたとか言ってたっけ。

きつと、昔よく一緒にいたという、あの青い眉毛犬。人狼の旦那も教えたことがあったのだろう。」

ただ、スバルは救助隊で忙しいし、旦那は………確かミツドの南部で暮らしている。

だから、最近では教わることもなく、独学で練習している———といったところか。

「筋は悪くないんだけどな……」

基礎とはいえ、スバルは近代ベルカ式。ザファイラに至っては古代ベルカ式。そこから一步踏み出そうとした場合、近代格闘技であるストライクアーツとは勝手が違う。

古代ベルカ式は言わずもがな、ミツドチルダのシステムでエミュレートする近代ベルカ式を、自己流で再現するのは難しい。

というか、肉体に変な負荷がかかる。

「そもそも、あのちっちゃな王様の体格なら、汎用的で扱いやすい、ミツド式のストライクアーツの方が向いているんだよな……」

———「あー、もう！

見ているとイライラしてくる。

「違う、そーじゃないって……」

もっと下半身を使って踏みこまないと。

いくら子供とはいえ、腰を痛めてしまう。

「だー、仮にもあたしらの王様になろうとしてたんだろ!？」

やるなら、もっと上手くやって欲しい。

だいたい、背丈やシルエツトがチンク姉に似ているのもよくない。

心配だ。

このままじゃ、ケガするかも……。

「アアアア——」

もどかしい。

どうする?!

どうする?!

このまま、木の陰から見守っているだけでいいのか?

——いやいやいや。

「別にあたしが教えなくても……」

『たあああ——うわ!?!』

裂帛の気合いをこめて蹴り上げた王様が、バランスを崩す。

——あく、もうオオ!

ダメだ!

見てらんねえ!

とにかく1度教える。

それで直れば、それでいい。あたしに護衛任務が回ってくることなんて、もうないだろうし。

——1回だけ、1回だけ……。

そう思ったら、自然に体が動いていた。

あたしは木の陰から飛び出し、王様のそばに立っていた。

「おい、王様!」

「え?」

「ダメだ、ダメだ! 全然ダメだ。なんだ、その動きは。そんなんじや体壊すぞ」

「……………」

王様は驚いた表情で、あたしを見上げている。

「あー、ノーヴェだ、ノーヴェ。わかんذار、この顔で。スバルの——妹だ。お前にとつては、ナンバーズと名乗った方が、わかりやすいかもしんねーけど」

「……うん」

「そう警戒すんなって。あたしは……その、なんだ……ストライクアーツの段位を持ってんだよ。だから、その下手つぴな練習を見ると、どうにも落ち着かなくて……」

「……うう」

王様がしょんぼりと肩を落とす。

「だああ！ 誰だって最初は下手くそなんだよ！ だからあたしが教えてやる」

「……？」

「だから、教えてやるって言うてんだよ。ストライクアーツをな」

「ホント？」

「ああ。お前も本当はスバルから教わる方がいいんだろうが……あいつはその、忙しいからな。代わりにあたしが教えてやるよ……って、あー、それでもいいか？」

「うん！」

「ありがとう——という王様の無邪気な笑顔に、思わずあたしも顔を赤くしてしまう。ダメだ。

「こーいのは慣れねえ……」。

「あー、なんだ。ただし、あたしも忙しいからな、今日だけだ。今日だけで教えたこと、全部マスターしろよな？」

その日の晩。

あたしは風呂に入りながら独りごちた。

「少し意地悪な教え方しちまったかな……」

たった1日の指導でマスターできる量ではない。

「でも、ま、それでいっか……」

あとは独学でゆっくり学べばいい。

「これで、体を壊すこともないだろ……」

姉妹たちも安心して見守れる。

それに、

「もう、あたしが護衛することも、そうそうないだろうしな……」

などと思っていたら、

「すまない、ノーヴェエ! 姉も試験があつてな」

わずか3日後に、王様と再会することになった。

「あたしも忙しい——とか言っておきながら3日後つて……」

「ノーヴェェさん！ 教えてもらったこと全部マスターしたよ！」

「……はあ？ 全部って、ウソだろツ!?」

ところが、完全とは言えないまでも、確かにあたしが教えたことを自分のモノにして
いた。

「マジかよ……」

ドクターは「ゆりかごの鍵に過ぎない」と言っていたけど、流石はあたしらの王様と
いったところか……。

面白い……。

だったら、

「いいぜ、もっと難しい技を教えてやるよ！」

そんなことを2度、3度と繰り返し返したある日のことだった。

ミット打ちをしていると、王様が尋ねてきた。

「ねえ、ノーヴェェさん。次はいつ教えてくれるの?」

「あー」

護衛任務がある日——とは言えねえよなあ……。

それに、

「あたしも準備があんだよ。実は……もうじき大きなストライクアーツの大会があつて

「や」

「本当っ!?!」

「ああ。あたしの登録年齢16歳だからな。余裕で出れんだよ」

ちなみに、チンク姉は19歳。

家族全員（チンク姉以外）で「うゝん」と首を捻ったものだが、思えば、あれが家族の意見が一致した初めての時だった気がする。

「じゃ、応援行くね!」

「おう、特別に許してやる。あんま大事にしたくねえから、チンク姉たちにしか話してないんだけどな。あとセインとウエンデイもなし。あいつらうっせーから」

「あゝ」

王様も、最近では姉妹たちの性格の違いについてわかってきたのか苦笑している。

「デイエチにでも伝えておくから、試合会場まで連れてってもらえよ」

「うん、わかった。試合がんばってね!」

「ああ、必ず、優勝してくるぜ!」

けれど、あたしは試合当日——リングに立つことができなかつた。

青空の下、区民公園の水辺で手すりを背にしたあたしは、深く溜め息を吐いた。

「あー、やっぱダメだったかー。レギュレーション違反だつてよ。そりやそうだよな。戦闘機人の体は反則だよなあー。パワードスーツでも着こんで試合に出るようなもんだし……」

「ノーヴェさん……」

隣にいる王様が不安そうな顔つきで見上げる。

「いや、わかっただけなんだ……わかってはいたんだけどさ……」

クイントが……あたしのオリジナルも学生時代に参加してたつていうから……。

「クソっ！　せめて事前に言ってくれてたらなあ……」

最初から出場しなかったのに。

最初から諦めることができたのに。

「優勝するぜ——とか言っておきながら、これじゃーな、カッコ悪いよなあ……」

「そんなことない！　それに、出てたらノーヴェさん優勝してたもん」

「あー、それはどーだろうなあ……」

自信はある。自信はあるが……もし、王様の母親——高町なのはみたいなのが出てき

たら、正直勝てる気がしない。

「デイエチなんていまだにゾツとするらしい。」

「だったら、わたしが証明してあげるよ!」

「は? どうやってだよ」

「わたしがノーヴェエさんの代わりに大会に出て優勝する!」

「はあ……。」

「ば〜か、優勝なんて軽々しく言うもんじゃね〜よ。大変なんだぞ?」

「軽くなってるよ! だって、わたしストライクアーツ好きだもん!」

「好きつつつてもなあ……」

「強くなるための、大事な要素の1つだとは思って……。」

「ノーヴェエさんだって、ストライクアーツ好きでしょ?」

「あたしか? あたしは……ん〜、どうなんだろうな?」

「そういや、深く考えたことがなかった。」

「ほら、あたしの場合、クイントのクローン培養だからさ。この気持ち、どこまであつしたものなのか、オリジナルのものなのか、わかんね〜んだよ」

「でも、好きなんですよ?」

「何だよ、それ……?」

「だって、わたしも一緒だもん」

「……………あ」

そうだった。

「お前も王様の……………」

聖王オリヴィエのクローン培養。

それも、プロジェクトFで造られた記憶転写型のクローンだ。

しかも、最後の聖王オリヴィエ・ゼーゲブレヒトといえ、武技において最強を誇ったという。

それだけの人物の記憶や人格をコピーしたのだから、好き嫌い以前に、本能に染み込んでいる部分もあるのだろう。

そりゃ格闘技にこだわるわけだ…………。

「そうだったな…………。なあ、この気持ちって、どこまでがあたしらのもんなんだろうな？」

「…………わかんない。でもね、オリヴィエとか関係なく、わたしは強くなりたいから」

「何でだ？」

古代ベルカの戦争はとっくの昔に終わっている。

敵はいない。

いたとしても、代わりに戦ってくれる魔導師がいくらでもいる。
あたしだって戦うだろう。

「えっと……笑わないで聞いてね。いつか、なのはママと戦って勝ってみたいから」
「おいおい、マジかよ……」

流石にそれは無茶だ。

「聖王の証であるレリックとか、そういうのはなしで」

どんな無理ゲーだよ……。

「これって、オリヴィエじゃなくて、わたしだけの気持ちでしょ?」

「まあ、そうだな……」

「ノーヴェさんはどう?」

「あたしだけの気持ち……か……」。

そんなの……いや、たぶん、わかるよ……。

あたしはさ、たぶん、そいつを探してるんだよ……。

お前が、オリヴィエじゃない高町ヴィヴィオ——自分を見つけたように。

片っ端から資格を取ってんのも、たぶん、あたしだけの何かを探してる……。

あー、だからって、別に救助隊や警備隊が悪いって言ってんじゃないぞ?」

「うん」

「何かを壊すんじゃないくて、誰かを救うってのは、やりがいがある仕事だっと思う……。でもさ、何か違うんだよな。」

オリジナルとは違う、スバルやギンガとも違う、あたしは、あたしだけの何かをやってみたい。

そうして初めて、あたしは、ただのノーヴェじゃない、ナンバーズとも違う、ノーヴェ・ナカジマとして生きられるんじゃないかって……」

「それが、ノーヴェさんにとってのストライクアーツ？」

「そうだな。」

ただ戦うってんなら、あたしの能力も、デバイスも、スバルたちと同じシューティングアーツの方が向いてんだろ？」

「うん」

「でも、それじゃ嫌だったんだよ。」

救助隊でシューティングアーツじゃ、スバルと変わらねえ。

警備隊でシューティングアーツじゃ、オリジナルやギンガと変わらねえ。

あたしだけの何か欲しかった。

そして、やっと見つけたと思ったんだけどなあ……」

あたしは空を見上げ、苦笑する。

「結局、ダメだった」

「……ダメじゃない。まだダメじゃないよ！」

ノーヴェさんに教わったわたしがストライクアーツの大会で優勝すれば、ノーヴェさんも優勝できるくらい強いってことになるでしょ。

ノーヴェさんのストライクアーツの技術は、間違いなく世界に通用するってこと、わたしが証明してあげる！」

「おいおい、本気かよ、王様……」

「王様なら、家臣の願いを叶えてあげないとね。」

それに、優勝くらいできなきゃ、わたしの目標としている相手は、もっと手強いんだから」

「そりゃそうだけど……」

「だから、ノーヴェさんはこれから自分だけの何かを探し続けなよ。」

見つけるまでの間、わたしにストライクアーツを教えてくれればいいから」

あー、

「つたく、上から目線かよ、この生意気なガキめ」

「ガキじゃないですよー」

「わーってるよ、王様だろ」

「王様じゃなくてヴィヴィオ。これからはちゃんとわたしにコーチしてくれるんでしょ？ 護衛とかじゃなくて」

「なっ!?!」

「……くそつ、気づかれてたのかよ。」

「わーつたよ。その、なんだ……時間が取れたときだけな」

「うん。じゃ、これからはわたしのこともちゃんとヴィヴィオつて名前で呼んでね」

「何でだよ」

「だってノーヴェさん。学校の『先生』は『王様』なんて呼ばないよ?」

「先生じゃねー。」

でも、ま、お前があたしの代わりに戦うってんなら、あたしらはこれから対等な同士だ。名前で呼んでやるよ。

その代わり、あたしのこともノーヴェでいい。『さん』はいらねえ」

「同士?」

「あー、なんだ、その……友達って意味だよ」

「うん!」

王様——ヴィヴィオの虹彩異色が、眩しく虹色に輝いた。

あたしに預言者の技能なんてねーけど、不思議と長いつき合いになるんじゃないか、

という予感があった。

「これからよろしくね、ノーヴェ!」

「おう、よろしくな、ヴィヴィオ!」

あたしとヴィヴィオは拳を突き合わせた。

6

「——なるほど、なるほど」

「——ってウエンデイ、いつコンビニから帰ってたんだよ!」

「ノーヴェが、ノリノリで話してる最中っスよ」

深夜のナカジマ家のソファの上を、ウエンデイがノーヴェに向かって匍匐前進するよ
うに、にじり寄っていく。

まるで這い寄る混沌だ……。

そーいうのは、ユーリやシャンテの中の人にお願いしよーよ。

すると、ノーヴェの反対側からも、落ち着いた声がする。

「はい、ノーヴェ。肉まん、食べるでしょ？ チンク姉はプリンまんできったよね」

「ああ、ただこう」

プリンまんかあ……。

「はあ、デイエチまで……」

首の後ろで髪をひとくくりにした姉が、苦笑しながら続ける。

「聞いてて思ったんだけど、最近ノーヴェって料理も得意でしょ？」

「アスリートの栄養管理のために、必要だと思ったからだよ」

「チンク姉が見てるこのアニメのメイドさんも、料理が得意だし、色々できるし、資格の多いノーヴェとよく似てるよね」

「はあ!? どこがツ!？」

流石に、この変態メイドとは似てないと思うのだけ……。

「あー、それ、ちよつとわかるっス」

「おい、勝手なこと言うんじゃないねー」

ノーヴェがウエンデイの首に腕を回し、ヘッドロックをかける。

「うぐぐ、きつと、ノーヴェも亡くなったチンク姉の形見の眼帯をつけて——」

「勝手に姉を殺すなよ……」

「どこか、チンク姉の面影を残す、金髪美少女陛下のハウスメイドをやるっすよ」

「そういえば、高町家にもいたっけ」

ハウスキーパーだったアイナさんだ。

「そうそう、その代わりっす」

「まあ、ノーヴェは面倒見がいいからな、可能だろうな」

「そんなことは……」

「でなければ、フーカという出会ったばかりの子を自分のマンションに住ませよう」

「なんて思わないさ」

「ううっ……」

流石のノーヴェも、チンクの言うことは強く否定できない。

「——で、あたしらの代表として、毎日ヴィヴィオの送り迎えをしたり、ハンググライダーで学校の屋上から侵入したり、オンラインゲームで友達になったり、旅行先で仲居やったり……」

「ヴィヴィオのために、ピチピチの初等科の制服を着たり、体操服やきぐるみを着ちゃったり、雪だるまになったり、洗濯したパンツをポケットに忍ばせたりしてね——」

「誰がするかああ——っ!？」

チンクがクスクス笑う。

「いや、この次元世界のどこかには、案外そんな並行世界もあるのかもしれないぞ？」

うわ……。

もし、そんなことになったら、きっとわたし——高町ヴィヴィオはこう叫ぶのだろう。

「うちのノーヴェがウザすぎる！」

と。

新暦75年のアインハルトさん!

Memory; 01 新暦75年

『魔法少女リリカルなのは Vivid』から遡ること4年前。

夏。9月。

私——アインハルト・ストラトスが、小学2年生だったころの物語だ。

当時、St. ヒルデとは“別”の教会系魔法学校に通っていた私は、その映像を見て驚いた。

『ミッドチルダ東部山中、森林地帯より浮上した巨大船は、いまだ上昇を続けています。

同時に、第7廃棄都市区画方面から、首都クラナガンに向かって、自動機械や危険人物と見られる集団が移動中。

周辺各地には緊急避難勧告が出されています。

市民のみなさんは、案内放送と、管理局員の誘導に従い落ち着いて避難してください』

臨時ニュース。男女アナウンサーの背後に、黒と黄色の空中戦艦が映し出される。

「わ……」

まるで、映画のような光景。

そんな、全長数キロはあろうかという巨大船に、私の目は釘づけになった。

画面が変わり、青い衣装に身を包む赤髪のテロリストたちや自動機械が映る。

そして、再び空中戦艦が映し出されたとき、私の全身が震えた。

「あ、あ、ああああ……」

なんで？ どうして？

「なに、これ……？」

わからない。

わからない。

心の奥底。ううん、違う、もっと深い魂の奥底から溢れ出す、とめどない怒りや、悲しみといった感情。

した。

次に私が目を覚ましたとき、すでに事件は終わっていた。

後に知ったことだが、その事件の名は『JS事件』。

首謀者ジェイル・スカリエッティの名を冠した、管理局史上に残る都市型テロ事件だった。

「……は……？」

知らない天井や、知らないベッド。

室内の風景から、幼心にも病院だとわかる。

「あ……」

一体どれだけ眠っていたのだろうか？

随分と口の中が乾いていた。

身体を起こすと、枕元に置かれていたペットボトルの水を一口飲んだ。

そして、ポツリと一言。

「私も、知らない私に変わっちゃった……」

私——ハイデイ・E・S・イングヴァルトの中にもう1人。

クラウス・G・S・イングヴァルトがいる。

そう——私の中で、遠い昔、霸王と呼ばれた古代ベルカ戦乱期の王の記憶が目覚めた。

私のご先祖様だ……。

彼の体験したことや感情を、まるで自分の記憶のように思い出せる。

「どこからが私の記憶で、どこからがクラウスの記憶なんだろう……?」

境目がわからない。

霸王（わたし）の記憶……。

「そうか、これが記憶継承なんだ……」

私の一族には、時折、このような症状が現れることがあるという。

話には聞いていた。

「でも……まさか私になるだなんて……」

髪や瞳の色といった身体的特徴は別として、記憶に関しては、霸王が男性だったことから、女性の私には起こらないであろう——と、勝手に思っていたのだ。

「原因はやつぱり……」

あのニュース映像。

クラウスの記憶にもあつた黒と黄色の巨大船。

「聖王のゆりかごを見たから……あ!?!」

大事なことを思い出す。

「ゆりかごは!?!」

どうなったのか?

慌てて枕元の通信端末を使い、検索する。

空間ディスプレイに映し出された内容は、

「爆、破……?」

まさか、あの船が落とされるなんて……。

クラウスの記憶は否定するが、事実なのだからしょうがない。古代ベルカで無敵を誇った戦船も、現代の技術で建造された管理局の艦隊には勝てなかった——ということだ。

けれど、

「誰がゆりかごを動かしたんだろう?」

あの船は、鍵……いや、生贄ともいふべき適合者がいないと起動しない。

可能性があるとしたら、

「聖王家の血統しかない……」

数百年ぶりに、聖王家の血統と聖王核が出会い、ゆりかごを動かすに足る適合率を叩き出したのだろうか？

だけど、

「事件に聖王家の人間は関わっていない……う？ そんなはずは……」

クラウスの記憶が、私に「調べろ」とささやき続ける。

「うん……」

退院後、私はしばらく図書館に通い詰めた。

眠っていた間の新聞に、週刊誌のゴシップ記事からオカルト雑誌まで。

「変な感じ……」

アインハルト（わたし）の知識がミッド語を読み、霸王（わたし）が知識が文章の意味を理解する。

そこで知ったのが、事件の首謀者——広域次元犯罪者のジェイル・スカリエツィという天才技術者の名。

彼の業績ともいふべき生命操作技術の数々。

戦闘機人、人造魔導師、プロジェクトF、それら全てが、

「違法クローン……。まさかッ!? ゆりかごを動かすために、彼女のクローンが造られたのだとしたら……?」

「ご丁寧に、私の想像を裏づけてくれる記事も多かった。

「私が生まれる前——10年前に盗まれた聖骸布……?」

最後のゆりかごの聖王——オリヴィエ・ゼーゲブレヒトの血が付着していたらしい。

「ゆりかごを動かすには、生きている聖王が必要……。逆に考えれば、生きてさえいればいいんだから……」

ゆりかご起動に必要な適合者は、古代ベルカでも探すのに困難を極めたのだ。現代なら、見つけるより造った方が、遥かに確実性が高く、何より手っ取り早い。

そもそも、わずか数年で命を燃やし尽くすような船に、誰が乗りたがるというのか……。

けれど、

「もし、船を動かしていたのが、出生届けの出していない、名もなきオリヴィエのクローンだったとしたら……?」

1人の人間として登録される前に、ゆりかごもろとも爆破された……?」

いや、ゆりかごを止めるため、突入隊に殺害されたのだとしたら……?」

あの強力無比な戦船が撃墜された説明もつく。

「そうだ。聖王のクローンなんて、最初からいないことにされたんだ……」

最初から存在しない人間の死が報道されることはない。

そう考えれば、全て辻褃が合う。

「ああ……」

涙が……涙が止まらない。

私なのか、クラウスの涙なのか……。

「私は……僕は……また、オリヴィエを救えなかった……」

ガンツ！ 私は図書館の壁を何度も殴りつけていた。

拳から血が出ても構わない。

『——あなた、何やってるのツ!?!』

制止されても、振り切って、さらに続け、たくさんの大人に押さえつけられて、ようやく私は止まった……。

私は弱い、弱すぎる……。

ダメだ……。こんなんじやダメだ……。
また誰も救えない。守れない。

「もう弱いのは嫌だ、嫌なんだ！」

それは強迫観念のよう。

かつてオリヴィエを救えなかった……。守れなかった後悔の気持ち。

私の記憶ではないのに、意識から振り払おうとしても、どうしても消すことができない。

そんな思いが、グルグル、グルグル、と頭の中を回り続けるのだ。

オリヴィエを失ったあと、全てをなげうち、武の道に打ちこんだクラウドスの日々が、私の背中を殴りつけるように押す。

昨日よりも今日。

今日よりも明日。

強くなることを強いる。

「守るべきものを守れない悲しみを、もう繰り返さないために……」

た。その日から私の、たった独り、霸王の武術を身につけるトレーニングの日々が始まった。

新暦76〜77年のアインハルトさん！

Memory; 02 新暦76年

霸王流の修練を続けて1年。

初等科の3年生になった私は、クラウスの記憶に従い自分の強さを試してみることにした。

相手は——人間ではない。

古代ベルカにも生息し、かつてクラウスも戦ったことがあるという、森に住むハチミツ熊だ。

彼らは極めて知能が高く、並の騎士より素早く動き、連携攻撃を行い、個体によつては古流武術を使いこなすという。

「一槍、お願いいたしますー！」

正面から迫るハチクマ。緊張する。2頭が連携して鋭い爪の一撃を繰り出す。落ち

着け。霸王（わたし）は負けない。

「ハアアア——」

右のハチくまの打撃を受け流すと、左のハチくまの懐に潜りこむ。低い身長を活かす。下方からハチくまの顎を掌打で打ち抜いた。

「たああ！」

続けて肘。蹴り。その反動で別のハチくまのもとへ。腹部と胸部に2発。拳を叩きつける。

ハチくまの巨体が崩れ落ちた。

「やれる……私は……霸王は、強……ぶろおお——ツ!？」

これまでより一回りも二回りも大きな、母親ハチくまが現れて、私はあつさりKOされた。

手強い。

今の私ではとても敵わない。

まずは、この母親ハチくまを目標に、トレーニングを続けようと決意した。

4年生になった私は、大人の姿になる武装形態を身に着けた。

この武装形態というのは、身体強化魔法であり、変身魔法の一種である。

これまでは騎士甲冑——バリアジャケットのみだったのだけど、4年生になったというのに、わたしの身長は期待したほど伸びず、小柄な体格なままだったからだ。

もちろん、変身するための魔力を、もつと一撃の破壊力に回す——という考え方もある。

しかし、近接格闘という霸王流のスタイルは、拳が届かなければ、相手にダメージを与えられない。

巨大な——手足も長い——母親ハチくまと正面から戦うためには、もつと長いリーチが必要だと判断したのだ。

それともう一つ、

「クラウスの記憶にある肉体と、私の身体のズレが大きすぎる……」

クラウスの記憶なら届く距離も、私ではまったく届かないのだ。

この差を埋めるためにも、武装形態は重要なのである。

ただ……、

「やっと変身が安定した……」

デバイスを持たない私は、魔力コントロールが上手くいかず、また、大人になった自分のイメージが湧かず、修得に時間がかかってしまった。

特にイメージの方が酷かったのだけど、クラウドの記憶を頼りに、どうにか大人のボディを手に入れることができた。

これで、より霸王の身体資質を活かすことができる。

「再戦、よろしくお願いいたしますー!」

こうして、1年前は手も足も出なかった母親のハチミツ熊に、私は勝利する。

「やったー! 強くはなっている……強くはなっているけど……」

私の強さは、人間相手ではどの程度なのだろう?

今の私に、それを確かめる術はない。

新暦78年のアインハルトさん！

Memory ; 04 新暦78年

1

初等科5年生になった私は、相変わらず霸王流のトレーニングを続けていた。断空拳を撃てるようになったのも、この年だったと思う。

そんな私に転機が訪れたのは、この年の夏——9月のこと。

皮肉にも『JS事件』からちようど3年目を迎えようとしていたある日の晩。

6月から始まった『マリアージュ事件』と呼ばれる連続殺人事件。その終幕。マリンガーデンで発生した大型火災だった。

『ミッドチルダMBCニュースです。

現場はここ、ミッド港湾地区の海上に建てられたレジャーランド——マリンガーデン。

暗闇の中、激しい炎と黒煙が上がっています。

営業時間が終わっているため人は少ないですが、いまだ取り残されている方たちの安否が心配されています。

陸地とは、海底トンネル及び海上橋のみで繋がれており、避難の……あ、アクアラインを通して救助隊の姿が見えます!』

空間ディスプレイには、海岸線まで燃える火災の様子がはつきり映って見えた。

『JS事件』のときほど危険ではないと判断したのか、チャンネルを変えると、よりマリンガーデンに近づいて撮影するテレビ局もあった。

「あれは!?!」

消火作業や人命救助だけじゃない。

炎の中、私と変わらない背丈の魔導師が2人、激しい戦闘を繰り広げていた。少年が槍を振るう。少女が魔法を唱える。私の手に力がこもった。

今の私に、あんな戦い方ができるだろうか?

そして、燃え盛る炎に照らし出され、仮面をつけた怪しい人物が浮かび上がった。見

覚えがある。

「マリアージュ!?!」

間違いない。私は知っている。

クラウスの記憶が、アレの正体を教えてくれる。

「古代ベルカ——ガレアの王。冥府の炎王イクスヴェリアが生み出す屍兵器……まさか、イクスヴェリアが目覚めたツ!?!」

クラウスが生きていた時代ですら、冥王が目覚めたのはほんのわずかな時間。直接会ったことはなかった。だから、女性ということ以外、姿形もわからない。

「でも、どうして……?」

古代ベルカの王が、ミッドチルダで目覚めたのだろうか？

ふと、3年前の事件を思い出す。

「……冥王のクローン?」

や、ダメだ。ありえない。

イクスヴェリアの肉体に埋めこまれたマリアージュコアを生成するロストロギアは、クラウスの時代でもすでに失われた技術だった。

「唯一無二のもので、替えがきかない……」

だからこそ、眠りについたあとも、イクスヴェリアはガレアで大事に守られ続けた。た。

だとすれば、

「本物？」

わからない……。

半信半疑のまま、リアルタイムの映像を見ると、血だらけになった青髪の魔導師が、救助者を抱えて海上に飛び出してきた。

「あれは!？」

チラリと見えた救助者の格好は、古いガレアの民族衣装だった。

「あの服は……間違いない……」

冥府の炎王が、なぜマリಂಗーデンに、それも閉館後の施設にいたのかなんて想像もつかない。

それでも、

「冥王イクスヴェリアは、生きて目覚めた……」

クラウスと同じ古代ベルカの王が、現代に蘇ったのだ!

「霸王（わたし）の力を試すのに、これほど相応しい相手はいないッ！」

空間ディスプレイの向こうで、傷ついた魔導師とイクスヴェリアは、無事、赤髪の救助隊に保護されていた。

2

翌日から、私は何度も管理局にイクスヴェリアについて問い合わせるが、答えはNO。まったく取り合ってもらえなかった。

報道機関にも規制が入ったのか、テレビや新聞がイクスヴェリアについて触れることもない。

だんだんと不安になってくる。

「私の間違いだったとか……？」

ただ、一部の雑誌などで、マリアージュとイクスヴェリアの関連性について取り上げられていた。

やはりアレは、冥王だったのだろう。

「このままじゃ、イクスヴェリアにつながる手がかりが消えてしまう！」

私はいても立ってもいられず、ミッドチルダに向かうことにした。それも、
「……制服で来てしまった」

私が学校をサボったのは、このときが初めて最後である。

事件の現場——マリンガーデンに赴くも、冥王につながる手がかりはない。

「どこかに保護されたんだろうけど……」

あとで聞いた話によると、そのころイクスは管理局の海上隔離施設で検査を受けながら、眠りについていたという。

もちろん、当時の私がそんなことを知る由もなく……。

「あとは、聖王教会本部くらいしか……」

ミッド北部にあるベルカ自治領。そこに建つ聖王教会の本部が、ベルカの代表のような立場にあることは、ベルカ出身者なら誰もが知っている。

けれど……通信では要領を得ない。管理局と変わらない対応。

「やっぱり、危険ではあるけど、直接乗りこむしかない!」

霸王クラウス・G・S・イングヴァルト直系の子孫がいることは聖王教会——というより、ベルカ社会においても秘匿されてきた。

決して表舞台に出ることはない。

はつきりした理由はわからないのだけど、どうやらクラウスの死の真相や、オリヴィ

工をめぐる聖王連合や中枢王家との確執が根底にあるらしい。

だから、これまで私のような記憶継承者が幾人もいたにもかかわらず、歴史的にも貴重な霸王の記憶や、最強の古流武術ともいうべき霸王流が広まることはなかった。

レアスキルで有名な教会騎士カリム・グラシアでさえ、霸王の血統の存在を知らないだろう。

「着いた……聖王教会本部……」

幸い——とでもいうべきか、教会系の学校に通っているため、修学旅行で訪れたばかりだ。

道順はよく覚えている。

切り立った崖に囲まれた伝統ある教会は、建物を含めた景観にも恵まれ、参拝だけでなく単純な観光目的で訪れる人も多い。

「冥王の、居場所に関するヒントだけでも手に入れば……」

迷子になったフリをして、修学旅行では入らなかつた教会の奥へと進んでいく。「訊くなら、やつぱりおしゃべりそうな人がいいんだろうけど……」

よくわからない。

あまりウロウロしていたら、教会騎士団に怪しまれるかもしれない。

とりあえず、教会の庭で見かけた年若いシスターを選んで質問する。

「あの、陛下にお会いしたいのですが……」

「あー、えっと、その制服。もしかして、陛下のお友達?」

「いえ、友達というほどではないのですが、先日のマリンガーデンの火災で、マリアー
ジュとイクスヴェリア陛下のお姿が見えたもので……」

「マリアージュとイクスヴェリア陛下ねえ………つて、ああああ!?! 聖王陛下のこと
じゃなくてエエ!?!」

「え? 聖王、陛下……?」

「あー、ゴメン、なんでもないよー」

聖王教会で陛下といえ、聖王陛下。特に、最後のゆりかごの聖王が人気だ。

私が気をつかい冥王イクスヴェリアを「陛下」と略したのが悪かった。勘違いされ
たのだ。そこまではいい。

けれど、友達……聖王陛下の友達とは……?」

まるで、今現在も生きているかのよう……。

生きています?

聖王が?

オリヴィエが?

まさか……。まさか……。

3年前。『JS事件』。複製体。

バカな私でもわかる。

到達する答えは、ただ一つ。

「ここに、あのときの聖王陛下がいらっしやるんですか!？」

「あー、うん。ここは聖王教会だからね。聖王様は絵画や像だけでなく、みんなの心の中に――」

「そうじゃなくて、オリヴィエのクローンが!」

「しーっ」

シスターが人差し指を唇に当てる。

「声が大きいよ」

「す、すみません!」

「あのね、君は色々と詳しく知ってそうだから、先に教えておくと、ここには聖王陛下も、冥王陛下もないから」

「でしたらどこに!？」

「はあく。言うと思う? 秘密だよ。たまーに、君のように訊いてくる人がいるんだけど、そんなこと答えられると思うかい?」

「それは……」

「だいたいね、今の陛下と昔の陛下は別人。まだ子供なんだよ」

「子供……?」

「しまった。あー、今のはオフレコね。とにかく、過去はどうあれ、今を普通に生きてる子供の居場所なんて教えられないってこと!」

「ですが!」

「君もしつこいね。誰に頼まれたのか知らないけど、君だって、もし自分に何か秘密があったとして、それをベラベラ他人にしゃべりたいと思う?」

「それは……」

私も同じだ。

覇王の血統に関しては、うかつに話すことができない。

「……………」

「えっと、理解してくれたのかな?」

「……………はい、理解しました」

シスターが「よし」と頷く。

「ところで、君の着ている制服なんだけどさ」

「あ……」

身元を知られるのはまずい。

「し、失礼しましたああー！」

私はおとなしく引き下がると、急いで教会本部から飛び出した。

「はあ……はあ……イクスヴェリアの居場所はわからなかったけど……」

良かった。ここに来て本当に良かった。

だって……だって……

生きていた。

生きていた。

亡くなったとばかり思っていたオリヴィエのクローンが生きていたのだ。それだけ

でうれしい。

涙が溢れる。

けれど、

「クローンだというなら、霸王（わたし）のことも覚えていないんだろうな……」

いくら外見が似ていても、まったくの別人。

強いのか、弱いのかもわからない。

それでも、霸王（わたし）の強さを証明するために、避けては通れない相手。

「全ては、この霸王（わたし）が、オリヴィエに負けたことから始まったのだから……」

彼女に勝たなければ、クラウスの長い旅は終わらない。新たな一歩も踏み出せない。

「でも……」

クローンとはいえ、ゆりかごを動かした聖王。魔力補助コア——聖王核を持つのだから。

長い眠りについていたとはいえ、戦乱のベルカを生き抜いた冥府の炎王。そして、彼女が生み出すマリアーージュの軍団。

「私に勝てるだろうか……?」

霸王（わたし）はまた、彼女に負けてしまうかもしれない。冥王にもだ。

マリンガーデンの戦闘を眺めてわかった。

「私には圧倒的に実戦経験が少ない……」

どれだけ肉体が頑強で、どれだけ霸王の記憶や感情があろうとも、私——アインハルト・ストラトスの心は弱い。

「もつと戦いの経験を積まないと……」

動物相手ではない。人間相手の戦闘訓練だ。

クラウスは己を鍛え上げたあと、戦場で名だたるベルカの騎士たちと戦うことで経験を積み、強さに磨きをかけていった。

「現代なら、管理局の高ランク魔導師を相手にするとか……？」
悪くない考えのように思えたが、

「どこで戦えばいいんだろう……？」 襲いかかるとか……？」

いやいやいや。捕まったら終わりだ。

「だったら他に……」

手持ち無沙汰になり見ていたテレビに、昨今のストライクアーツ人気を受け、夜のミッドでストリート・ファイトに興じる少年少女の姿が映った。

「これだー！」

有名でも無名でも構わない。本当に強いと言われている魔導師や格闘系の実力者に、街頭試合を申しこむのだ。

軽く検索しただけでも、多くの試合動画や実力者のプロフィールが見つかる。

ここから選んでいけばいい。

「あとは、どうやって聖王と冥王を捜すかだけ……」

クローンとはいえ、再びオリヴィエと拳を交えることができる。さらに、あの冥王イクスヴェリアとも……。

私は恵まれている。

「これが、数百年ぶりに巡ってきた、クラウスの悲願を叶える、最初で最後のチャンスかもしれないんだ……」

これまで、ずっと隠されてきた霸王の血統。だけど、

「霸王（わたし）が、霸王（これまでの記憶継承者たち）に縛られてどうするッ！」

この機会を逃してはならない。

「今こそ、霸王イングヴァルトの名を名乗ろう！」

名乗り、勝ち続ければ、向こうから接触してくるかもしれない。

「接触してこなければ、鍛え上げた拳で霸王（わたし）から会いに行くまで」
ただ……。

「そう、ちよくちよくミッドに行くわけには……」

ちよつと遠いのだ。ミッドチルダは。

「夜に試合をするとして……ううっ、門限が……」

現在の住居から通うのは現実的ではない。

しかも、来年からは中学生……。

「そうだ……中学だ。進学先に、ミッドにある同じ教会系の学校を選べば……」

確か、聖王教会本部に近い、有名な魔法学校があったはず。

名高いシスターや教会騎士の多くが、その出身だと聞いたことがある。

「上手く行けば、2人の情報だつて手に入るかも……」

そして何より、一人暮らしをすれば、時間を気にすることなく鍛えることができる。

私は、小学校卒業と共に、故郷と親元から離れることを決意した。

新暦79年～現在のアインハルトさん!

Memory; 05 新暦79年

1

3月の中頃。

小学校の卒業式を終えた私は、すぐにミッドチルダへ向かった。

昔から、霸王の記憶継承者は、年若くして家を出る人が多かったという。

「今なら気持ちが変わる……」

強くならなくちゃ——という焦りが、日に日に増していくのだ。

「とにかく修行をしないと……」

一人暮らしのマンションの中には、すでに真新しい大型のトレーニング器具が運び込まれている。

全て実家が手配してくれたものだ。

ありがたい。

自分の荷物は着替えと筆記用具くらい。

「午前中は引越しの片づけをして、午後から早速街頭試合を申しこみに行こう！」

1日とて無駄にはしたくない。

『カイザーアーツ正統、ハイディ・E・S・イングヴァルト——霸王を名乗らせて頂いて
います』

こうして、わたしは次々に試合を重ねていった。

日に2戦、3戦とこなす日もあった。

霸王の体で相手を一方的に叩きのめす。

「これで、本当に、守るべきものを守る強さが手に入るのかな……？」

気持ちだけが焦り、空回りしていく……。

そしてまた、次の対戦相手を選ぶ。

まるで辻斬りのよう。

そんな毎日が続いていた、ある日。

「これは……」

本当に偶然だった。

「ストライクアーツ、有段者……ノーヴェ・ナカジマ……？」

赤いショートヘアの女性。救助隊としても活躍しているらしい。公式試合への参加は少ないけれど、

「この人は間違いなく強い」

映像を見ればわかる。

私の拳を試すのに相応しい相手。

それに、

「この防護服……どこかで見たような……。そうだ！ 確か『マリアージュ事件』のとき……」

ひよっとしたら、冥王イクスヴェリアの行方を知っているかもしれない。

「ううん、ちよっと待って。この姿……もつと昔に見たことがあるような……」

クラウスの記憶ではない。

私の——アインハルトの記憶。

「あ……あ……そうだ、この人だ……」

4年前。『JS事件』。

私が霸王の記憶を継承するきっかけになったニュース映像。あのと映ったテロリストの中にいた。

赤いショートヘアに青いバリアジャケット。アームドデバイスにローラーブーツ。

彼女だ。

間違いない。

「ノーヴェ・ナカジマ……この人なら……」

オリヴィエのクローンの行方についても、知っているかもしれない。

全身が震える。

「待っていてください……ノーヴェ・ナカジマ。私が、必ずあなたを見つけさせてみせますから……」

空間ディスプレイに映る赤髪の女性の顔に、拳を打ちつけた。

4月。

St. ヒルデ魔法学院の入学式を迎えた。

昨日が始業式で、クラス分けの発表があったらしい。しかし、中等科1年の私にとっては、入学式の今日が初登校となる。

だから、大きな荷物は必要ないのだけど……、

「着替えを持つていかないと……」

学校が始まったので、トレーニングに割く時間が減ってしまう。

「1日も無駄にしたくないから……」

入学式の終わった午後から、ノーヴェ・ナカジマが現れそうな場所を回ることにする。

「そうだ。靴も持つていかないと……」

指定靴を汚したくない。

実を言うと、私は自分で洋服や下着類を買ったことがない。

個人的には、トレーニングしやすい服装であればなんでもいいのだけど、実家から送られてくるのは可愛らしい格好が多い。

「……このワンピースとサンダルにしよう」

入学式へ向かう。

『(きげんよう)』

『(きげんよう)』

私がついていた教会系の学校と、あいさつは変わらない。雰囲気も似たようなものだ。安心した。

「これなら、あまり目立つことなく通えそうだ……」

校門を通りしばらくすると、初等科・中等科の校舎が見えてくる。

ふと、聖王像のそばに視線を向けると、

『じゃ、午後からね。中央市街地の駅で——』

3人組の初等科の生徒が、楽しそうにはしゃいでいる。

入学式が午前中で終わるため、午後から待ち合わせて遊びに出かけるのだろう。

『いえ——い♪』

騒がしいので、周囲からはクスクス笑われているけれど、そこには温かい空気が流れていた。

「ああ……」

平和な日常だと思った。

私にはない世界。

私もあんな世界に行けたら……。

「ううん——」

頭を振る。

「私はあるなふうに笑ってはいけないんだ……」

楽しんではいけない。

私には、やるべきことがある。

「これまでの記憶継承者たち数百年分の後悔を消すためにも、霸王クラウド・G・S・イ
ングヴァルトの悲願を果たしてみせる！」

入学式のあと、教室でオリエンテーションを終えると、私は一目散に学校を出た。

部活動の勧誘には目もくれない。

駅のトイレで私服に着替えると、制服や鞆をコインロッカーに預ける。

「彼女はどこにいるんだろう……?」

スポーツコートなど、ストライクアーツの練習ができる施設を見て回る。しかし、
ノーヴェ・ナカジマの姿は見つからなかった。

「このまま闇雲に捜しても……」

ダメ元で、ストライクアーツの練習をしている人に尋ねてみると、次第に彼女の居場

所がわかってきた。この界限では有名人らしい。

「一般人に混じって、本格的な組み手をするなんて……」

それは目立つだろう。

修行相手がいるというのも、うらやましい。

「……、ですか……」

本日、彼女がトレーニングしているという、中央第4区のストライクアーツ練習場に
着いたとき、辺りはもうすっかり暗くなっていた。

夜空に浮かぶ丸い月が、白く輝いている。

「外で待っていてよう……」

どうせ、人目につく場所で、本気の戦いはできない。私の確かめたい強さは、表舞台
にはないのだ。

練習場の外で、じっとノーヴェ・ナカジマが出てくるのを待つ。

「あ……」

来た――

『悪い、チビたち送ってやってってくれるか?』

『あ、了解っす。なんかご用事?』

『いや、救助隊。装備調整だつて』

一緒にいる人間なんて目に入らない。

ノーヴェ・ナカジマは同行者たちと別れ、1人で夜道を歩き出す。

——チャンスだ!

そつとあとをつける。

こういうとき、小柄な自分の体は便利だ。

気づかれずに行動できる。

そして、救助隊へ向かうという彼女は、人気のない湾岸沿いの通りに入った。

——今しかない!

「ああ……」

ついに、ついに、このときが来た!

聖王オリヴィエのクローンと、冥府の炎王イクスヴェリア。2人に関係する人物であり、本物の実力者でもある。

そんな彼女と拳を交える機会。

「武装形態——」

守るべきものを守れる強さを得るため。

古きベルカのどの王よりも、霸王のこの身が強くなることを証明するため。

大人の姿に変身した私は、思わず街灯に飛び乗っていた。

前を行く赤髪の女性に、背後から声をかける。

さあ、勝負だ！

「ストライクアーツ有段者、ノーヴェ・ナカジマさんとお見受けします。
貴方にくっつか伺いたいことと、確かめさせて頂きたいことが——」

Memory; 06 新暦80年 現在

「——と、いう設定を考えてみました」

「「設定だったのおお——っ!?!」」

ざわざわ。

クリスマスパーティーで高町家に集まったりオコロを始めとするみんなが、驚きの表情でアインハルトさんを見つめた。

「最近、やたらと熱心にノートを取っていると思ったら〜」

これだったか! と、クラス委員のユミナさんが頭を抱えている。

まあ、アインハルトさん、テストの成績はいいから問題ないだろうけど。

「特に、最初の新暦75年の辺りであれば、劇場版第5弾——『魔法少女リリカルなのは The MOVIE St r i k e r S』にも使えるはず。

そんなわけでヴィヴィオさんのお母様、こちらの原稿をお納めください」

「「「「ちやつかり自分だけ次の映画に出ようとしているうう——っ!?!」「「「「「」

「それと、新暦76年以降ですが、本編上映後の週替わり映像にでも使っていただければと」

「「」

リオがクリスマスケーキにフォークを刺したまま悔しがる。

「くうう、あたしそのころまだルーフェンだ！」

でも、ゆりかごが起動したあと、他の管理世界にも報道が流れるシーンとかあれば、あたしも出れるよね!？」

それは……確かにアリかも shouldn't.

コロナがわずかに考える目をして、

「ヴィヴィオ。私、『Strikers』の最終決戦でティアナさんを手伝ったとか、どこかな？」

ほら、1人でナンバーズ3人撃破とか、イザークもびつくりなくらい金星あげすぎだし……たまたま廃棄ビルでゴーレム創成の練習をしていた私が、結界に巻きこまれて、ゴーレムを囿にしてティアナさんに協力するとか……」

イザークって……アレか、SEEDか！

あのミウラさんまで、おずおずと手を挙げる。

「ぼ、ボクは六課に出前とかでよければ……。ちよつと遠いですが、いいですよね？」

はやてさんの口から『最近、南部の山ん中にあるおいしいレストランに行つてへんなー』とか言つてもらえればそれだけで……」

さり気なく実家アピール!? 宣伝か!

ミニスカサントのユミナさんも、負けじと声を張り上げる。

「だったら私は、逃げ遅れた民間人役で。

スバルさんとギンガさんの一騎打ちが激しさを増す中、廃棄都市区画から市街地に入ったところで巻きこまれるんだよ。

そして、2人の戦うシーンを目撃して『わあく』って感じで憧れの眼差しを向けるの。その後、彼女は格闘技ファンになりましたとき」

それはそれでアリそうで困る。

「いえ、みなさん。ここはやはり、聖王と最も因縁のある私が代表で——」

アインハルトさんも譲らない。

流石のなのはママも、どうしたものかと苦笑している。

しょうがない。

「もう、みんな、なのはママが困ってるでしょ。

あんまりワガママ言わないのー。

わたしたちは『Vivid』でいっぱい出番があるんだから『Strikers』は我慢しようねー」

「……」つて、ヴィヴィオは『Strikers』だと準主役の、それもピーチ姫&クツパの、一人二役だよねええ——っ!?!?」

「……ふっ」

「……」なに、その勝ち誇ったよーな、ドヤ顔はああ——っ!?!?」

みなさんは当時——新暦75年ごろ、何をしていましたか？

新暦75年〜現在のアインハルトさん解説!

この話は『新暦75年のアインハルトさん!』〜『新暦79年〜現在のアインハルトさん!』の解説になるので、先にそちらをご覧になってからお読みくださいねー。

「——そんなわけでアインハルトさん、5日連続投稿最終日、お疲れ様でしたー」

「お疲れ様でした」

「それで早速なんですが、今回アインハルトさんの考えた“設定”には、どれくらいホントのことが含まれていたんですか?」

「……さあ?」

「もったいぶらないで、ほらほら、教えてくださいよ〜」

「ちよ、ちよつと待ってください、くすぐるのはなしでええ〜!」

恐れ入りますが、しばらくお待ちください。

「はあ、はあ……えつと、ですね、原作『Vivid』では、私の過去や家庭環境がほぼ

描かれていないため、もし今回の設定の中に真実が含まれていたとしても、お話するこ
とはできないんです」

「ずっこいー!」

「ずっこいと言われましても、設定と一緒に考えてくれたの、ヴィヴィオさんじゃないで
すか〜!?!」

「……………そうでした。」

と、まあ、そんなわけで、今回はアインハルトさんの過去設定が、

『どうしてこうなった!?!』

のかを、考察を交えながら解説していきたいと思います」

●美少女が転校してくるといってお約束

「新暦75年。『JS事件』の年。アインハルトさんが8歳で、小学2年生のころです
ねー。で、これがそのころの、ロリアインハルトさんの写真です」

「っ!?! どーしてそんなの持ってるんですかああ!?!」

「聖王特権です」

「えー」

「見た目、あんまり変わってないような気も——あー、ゴメンナサイ。断空拳はなしの方
向でお願いします。オチ、まだなんで。」

とりあえず、のつけから、

『当時、St. ヒルデとは“別”の教会系魔法学校に通っていた私は——』

とか、おいしいな展開ですけど、これに関してはいかがでしょうか？」

「これ、ヴィヴィオさんが、

『うちのアインハルトさんが、St. ヒルデに通っていたわけがない！』

と、声高に主張したからじゃないですか」

むう……。

「だってアインハルトさん、考えてもみてください……。」

もし、アインハルトさんが昔からSt. ヒルデに通っていたとしたら……そんな長い

間、わたしの存在に気づかないはずないじゃないですかアア!!」

「あー」

「しかも3年間、同じ初等科ですよ？　ちよーすれ違ってますよ？　いたるところで接

近遭遇してますよおお!!」

「学年が違ったから——という理由ではダメですか？」

「クラウス陛下のオリヴィエへの愛が、その程度だった——ということなら、それでもい

いですけど」

「うっ……」

「ただ、他にも理由がありました。これは、わたしはよく覚えていないんですが、ども、わたしが入学したとき、自分で言うのもなんですが、聖王フィーバーみたいのがあったようでして……」

「あー」

「一応、素性を隠してはいましたが、ほら、S t. ヒルデって聖王教会関係者の子女も多いですし、そもそも先生だって司祭だったり、シスターだったりするじゃないですか。

なので、わたしが入学するとき『あの聖王オリヴィエのクローンが入学する!』ということで、学院内で大きな話題になったらしいんです。

地球でもよく、皇●関係者が入学すると『○○さまフィーバー』とか、ニュースになるじゃないですか」

「確かに……」

「外部にこそ漏れなくても、学内では公然の秘密だったわけで、いくら友達がいな……コホン。

「少なかったアインハルトさんでも、それだけ周囲が騒がしければ、わたしの存在に気づいたと思うんですが——どうでしょう?」

「そうですね……」

私に友人が『いた or いない』は別として、ヴィヴィオさんのお好きな、美少女ゲームやライトノベルの主人公なら……」

「お話の都合上、仕方がないですけど。」

今回の場合はわたし——聖王オリヴィエのクローンが対象ですからね。

ずっと捜していた相手の話題を、3年間スルーするのは、流石に無理があると思います。

頭の上に眼鏡を乗せて『メガネ、メガネ……』よりも、遥かに無理があると思います。

それに、もしわたしが、学校で自分と同じ虹彩異色のアインハルトさんを見かけてたら、即行で話しかけてますもん！」

「ううっ……そっちの方が説得力があります。」

ノーヴェさんと戦わなくても、いずれヴィヴィオさんから話しかけてきたような……」

「まあ、その場合も、どっちみち、なのはママが初めてフェイトママに会ったときのように、わたしがボコボコにされそうですけどねー」

弱い王なら、この手でただ屠るまでえー」

「いや、そんなことは……たぶん……」

ですが、例えばですが……1年くらい前に転校してきたとしたら、どうでしょう？

それなら、聖王フィーバーを知らなかったり、お互いの存在に気づかなかつたりして、説明がつくのでは？」

「そうですね……ただ、それだとちよつと厳しいかもな部分があるんですよ」

「えつと、なぜでしょう？」

『『Vi Vid 13巻』で、学院祭の出し物を決める話があつたじゃないですか。

そこで、アインハルトさんのクラスメイトが、

『あー、そつか!』

『すごい強いんだよね?』

という台詞があるんですが……」

「何か問題でも……?」

「ふつーに読むと、

『あー、やつぱりアインハルトさん、インターミドルに出場するまで、クラスになじんでなかつたんだあー(クラスに友達いなかつたんだー)』

みたいな感じになるんですが……」

「うぐう」

「よくよく考えたら、アインハルトさんって、うちのママみたいに、

『授業も真面目に全力全開!』

「みたいなタイプじゃないですか？」

「それはまあ、否定はしませんが……」

「だとしたら、どう考えても、体育や体育祭といった運動系イベントのとき、腕相撲みたいな感じで一波乱起こしていると思うんですよね。」

「すっごい記録を叩き出したりして」

「けほけほ……」

「だから、もし1年もSt.ヒルデにいたら、色んな意味で有名になると思うんです。」

『何か、虹彩異色の凄いのが転校してきた!』

「みたいに。」

「ひよつとしたら、学年を越えて、わたしの耳にも届いたかもしれません。たぶん、コロナが教えてくれたと思うし。」

ところが、クラスはもちろん、先生——シスターですら、インターミドルでテレビに映るまで、アインハルトさんのパワーに気づいていなかった。

あの、格闘技ファンのユミナさんでさえ、です」

「それは……」

「さらに、『Vivid 1巻』、それも記念すべき第1話。わたしの4年生の始業式の日。

ギンガさんが、チンクやノーヴェ、ナカジマ家のみんなに向かつて、アインハルトさんの『連続傷害事件』について話しています」

「まだ事件では—」

「そう——『まだ』事件ではない。

ノーヴェたちが知らないほど、ほんの一部で話題に上がり始めたばかり。

つまり、アインハルトさんが格闘技の実力者を襲撃し始めたのは、わたしの4年生の始業式。その少し前からなんです」

「そう、なりますね……」

「では、なぜこの時期、急に始めたのか？」

新暦78年の9月——『マリアージュ事件』でイクスの存在を知り、

翌年、新暦79年の3月中旬～下旬——中等科入学に合わせてミッドに引越す。

街頭試合を始めた（襲い始めた）。

と考えれば、合点がいきます」

「おう……」

「以上のことから、アインハルトさんがSt.ヒルデに通うようになったのは、つい最

近、新暦79年の春からである。

というが、最も自然な形だと思うんですが……どうでしょう?」

「ご、ご想像におまかせします……」

「ちなみに、アインハルトさんが、元々、同じ教会系の学校に通っていた、ということにしたのも理由があります。」

ほら、St. ヒルデのあいさつって『ごきげんよう』じゃないですか?」

「え、問題があるんですか?」

「はい。普段は使わないというか、マリみてか、サイコロを振るときくらい。」

その辺りは、志摩子さんが詳しいとは思いますが……」

「そんな、いきなり中の人ネタを振られても困るんですけど」

「アインハルトさんも、銀杏とか拾ってそうですね」

「まあ、否定はしませんが……」

「そんなわけで、春からSt. ヒルデに通い始めたにしては『ごきげんよう』など、学院の空気になじんでいるなど。」

つまり、元々同じ教会系の魔法学校に通っていた——と考えれば、辻褄が合うわけですね。

ついでに制服も同じだった——と仮定すれば、『ViViD LIFE』の「衣替えで

初等科の秋服を着てきたアインハルトさん!」にも対応可。

死角なしです!」

「ゆ、祐巳さんに相談しないと……」

「そーいえば、はやてさんもタヌキ顔でしたねー」

● 思い……出した!

「次に、アインハルトさんが霸王の記憶に目覚めたシーンなわけですが……。

ぐっ……右手に封印した霸王の力があぁ!」

「いえ、そういうのはありませんでしたが……。

生まれたときからクラウスの記憶があった——じゃ、マズかったんでしようか?」

「生まれ変わり、とは違いますからねー」。

生まれたときからあったら『シャー●ンキング』のハオみたいになっちゃいますよ。

これは珍しく原作『Vivid 12巻』に記述がありまして——」

『物心ついた時から、私の中にはもう「彼」の記憶があった』

「あー、私がフルボッコされたときですか……」

「はい。わたしがフルボッコにした試合です。」

生涯忘れませんよー。

ただ、この「物心」というのは、かなり曖昧な言葉でして、多くの辞書を引くと、『世の中の物事や人の感情を、なんとなく理解する心』

みたいな意味になります」

「一番古い『記憶』とは別——ということですね？」

「はい。勘違いしている人が多いみたいですけど……。ただ、アインハルトさん……」

もしも『JS事件』のとき、すでにクラウドス陛下の記憶があったとしたら、アインハルトさんはニュースを見て、どうしたと思いますか？」

「何を差し置いても駆けつけたと思います」

「ですよー。どんなに未熟で、どんなに力不足だったとしても、あの戦場に参戦していたに違いないんです。」

たとえば間に合わなかったにせよ。

それが無い——あとづけで語られることもない——ということとは、やはり『JS事件』以降の、どこかの時点で、霸王の記憶に目覚めたと考えるべきです」

「そう……かもしれない」

「もちろん、クラウス陛下の記憶が目覚めるチャンスはいくつかあったでしょうが、もし、一番可能性があるとするれば——」

『JS事件』ですか？」

「はい。『StrikerS 22話』のニュース映像が流れるシーンで、〃聖王のゆりかご〃がしつかり映っていますからね。

管理世界中に、臨時ニュースとして報道されたはずです。

クラウス陛下が最も衝撃を受ける——記憶が目覚めるとしたら、やっぱり、この時を置いて他にないかなど。

ついでに、シヨックでしばらく眠っていた——とすれば、アインハルトさんが強引にでも戦場に駆けつけなかった理由にもなるかなど」

「そうですね……。そうしていただけると、クラウスも納得するかと思えます」

●600年と1年前から愛してる

「アインハルトさんが聖王のクローン——わたしの存在に気づいた時期なんですけど……」

「あの、St. ヒルデでは結構有名ということなら、別の聖王教会系の学校でも、それな

りに話題になっていたと思うのですが？」

「そこは、ほら『アインハルトさん友達いなかった説』は、ほぼ定説ですから、いいんですが」

「あう」

「I巻のノーヴェとの会話から、アインハルトさんは、わたしがSt. ヒルデに通っている。ことすら知らなかったですしね」

「友達いなくてすみませんでしたああ！」

「とにかく、ゆりかごが起動したのは事実。当然、調べようとする。

もし、アインハルトさんのバックに、霸王家の諜報機関とかがついていたら、わたしやイクスの所在なんて、わざわざノーヴェに訊く必要はなかった。

つまり、アインハルトさんの背後に、巨大な組織はない。あくまで単独で動いていた——ということがわかるわけです」

「はい。フーカが現れるまで、霸王流には門弟もいませんでしたから」
「では、アインハルトさんはいつわたしの存在を知ったのでしょうか？」

クラウド陛下の記憶がある以上、かなり早い段階だったのではないか？

その割に、わたしがSt. ヒルデに通っていることすら突き止められなかった。

となると……最近、改めて生存を知ったのではないか？

と、結論づけたわけですよ」

「偶然、どこかで知った可能性もあるのでは？」

『Vi Vid 14巻』のルーフェン編でもお話しましたが、私も、昔からベルカに関してだけは興味がありましたから」

「そうなんですけど、それだとドラマチック——運命的な出会いにならないじゃないですか」

「えー」

「どちらにせよ、『Vi Vid』開始の半年前——『Striker』サウンドステージX——『マリアージュ事件』のとき、聖王&冥王両者の存在に気づいたと考えた方が、自然だと思えますよね。襲撃を始めた時期とも一致しますし」

●アインハルト DAYS

「新暦76～77年。アインハルトさんが、3～4年生。9～10歳のころの話ですね」

「懐かしい……というより、何だか修行ばかりしていた気がします」

「えつと、ここに登場した“ハチミツ熊”。気づいた人も多いと思いますが、漫画版『DOG DAYS』に登場した“ハチエスター黒熊”です」

「なぜ？」

「修行相手は誰でもよかったですね、ほら、アインハルトさん『Vivid 2巻』で、少しうらやましいです。私はずっと独学（ひとり）でしたから」

「って、萌え死にそんな台詞を呟いたじゃないですか」

「萌え死に……」

「だから、誰か（人間）と一緒に修行したことなかったんだらうなって」

「なるほど。それで動物相手ですか……。イタチですよ」

「あー、落ちこまないでください。一応、他にも理由がありますね。」

「17巻や20巻で戦ったエーデルガルト選手。」

『故郷じゃいろんな獣と戦った』

「って、リオんちの猫が凶暴化したようなのと、子供のころからいつも戦ってたような人が、アインハルトさんから獣を感じたじゃないですか？」

「ええ、そんなこともありましたね」

「パワーや精神面が主だとしても、まったく野生の獣と戦ったことがない選手より、戦

い、学んだことがある選手のファイトスタイルから感じ取った——の方が、説得力があるのかなと。

本物の獣と戦ったことがある人だけが感じ取れる何かがあったとか……」

●中の人はセイバーでやっぱり王様

「新暦78年。アインハルトさんが11歳で、初等科5年生だったところ。

『StrikerS サウンドステージX』——『マリアージュ事件』のときですわね」
「9月のお話ですから、翌年の4月に私がヴィヴィオさんと出会う、約半年前の出来事ですわね」

「ちなみに、CDジャケットには『3度目の夏』としか書いてないのに、なぜ9月なのかというと、ドラマCD内で——」

スカリエッティ「出処の確かな、できればそれなりのベルカワインの赤を一瓶、それだけさ」

ギンガ「差し支えなければ、その理由を……」

スカリエッティ「私の最高傑作のうちの一体。彼女の命日が近いだろ？」

ギンガ「ああ……」

トーレ「ドゥーエの喪失くらい、悼ませてもらっても罰は当たらなからう」

「——という会話があるからです。」

『JS事件』は、新暦75年9月に解決。ドゥーエさんは、最終戦の最中、ゼストさんに討たれましたから、これは9月で間違いはないかと」

「そうですね。そこに異論はありません」

「——で、これまでも何度かお話ししましたが、この事件でイクスの存在を知ったのだとすれば、半年後に、ノーヴェにイクスの居場所を質問したとしてもおかしくないな——と、思ったわけです」

「なるほど。ただ、あんなニュース映像で、イクスさんのことに気づけるでしょうか？」
「そうですねー。単純に、事件について調べているうちに知った——でもいいんですが、せつかくなので、今回の作中でアインハルトさんがイクスの存在に気づくキツカケになつた、ガレアの民族衣装に触れてみたいと思います。」

ドラマCDはもちろん、漫画で眠っていたときからずっと着ている白い衣装。

特に、民族衣装との記述はないんですが、これ、アニメ版『Vivid 1話』の冒頭。

覚えている人は少ないかもしれませんが、1000年前——マリアージュを従えた貴重なイクスの王様時代の映像でも着ています。

黒いマントを羽織って、『SEED DE●TINY』最終話のラクス・クラインみたいに、颯爽と歩いてるシーンですねー。

一応、『Vivid 5巻』のヴィータさんの回想シーンでも、炎の文様が入っているところだけが違いますが、基本、同じ衣装を着ています。

クラウス陛下の記憶が一番濃かった時期のアインハルトさんなら、一目見てピンときたんじゃないのかな——と思っただけです」

「ずっと同じ衣装……ですか……?」

「あー、そこに引っかけかっちやいましたかー。

ソフィーちゃん（吸血鬼）みたいに汗かかないから、ずっと着替えてないとか……。一番ありそーなのが、クローゼットを開けると同じ衣装がズラリ……。

まあ、最終回でようやく違う服着てますが」

「あー」

「どちらにせよ、ツツコミどころ満載ですけどね。今度聞いてみましょうか?」

● 霸王宗家

「いきなり北斗の拳みたいなこと……」

「霸王イングヴァルトの純血統が、どうして秘密になっていたのか——という理由は、本作中で述べたように、以前クラウス陛下の考察をしたときの内容そのままです。

これが正しいかどうかはさておき、1つ疑問に思っただけなのは、最初——『V i V i d 1巻』の聖王教会でのカリムさん、シャツハさん、チンクのやり取りで、誰もアインハルトさんのことを、本物の霸王の血統だと思わなかったことです。

もし、霸王の血統が存在していることを知っていたら、当然、アインハルトさんの実家にお電話がいくと思いませんか？

親の呼び出しです」

「それはちよつと困ります……」

「それがなかったということは、理由はどうあれ霸王イングヴァルトの末裔がいることは秘密にされていた——と考えるべきだと思うんですよ」

● 聖王の『AZITO』

「今回の作中では、聖王教会本部でシスターと会話をして、わたしやイクスについて知る

シーンがあるのですが……」

「かなり無理があるのでは?」

「まー、ありますね。」

例えば、『Vi Vid 1巻』——連続傷害事件。街頭試合で知った——とかでもアリだと思っんですよ。ただ……」

「ただ……?」

「それだと、霸王を名乗る意味がないですし。」

そもそも、ノーヴェ以外には、聖王&冥王について質問していません。

それに、アインハルトさんって、中途半端に情報を得てるんですよねー」

「中途半端……ですか?」

「はい。だって、ふつー、オリヴィエのクローンっていったら、もっと大人をイメージしますよね?」

「あー」

「でも、ノーヴェから、

『あたしが知ってるのは、一生懸命生きてるだけの普通の子供達だ』

と言われて、特に驚くこともなく受けいれた。

つまり、わたしやイクスが子供であることを、最初から知っていたわけです」

「……そこはノーコメントでお願いします」

「ついでに、あれだけオリヴィエにこだわりがありながら、

『——理解できました。その件については他を当たるとします』

って、あつさり引いたのも、ヴィヴィオ的にポイント高いです。

前に1度、どこかでしつこく聞いて、反省をうながされた経験があるんじゃないかなと。

どうでしょう？

わたしのこと訊いて、叱られたことあるんじゃないですか??」

「……そ、そこもノーコメントでお願いします」

●アインハルトの防具屋さん

『Vivid 12巻』で、

『笑う事も楽しむ事も、自分にはずっと出来ないんだと思ってた』

って、アインハルトさんの台詞があるじゃないですか?」

「はい。お恥ずかしい限りで……」

「ただ、わたし思うんですよね。」

そんな人が、いつも、あんな可愛らしい洋服を、自分で選んで買うかなって?」
「あう」

「さらに、決定的だったのが16巻です。

オーファンから帰ってきたとき——」

「いえ、ルーフェンです。そんな、ソード・ワールドのアレクラスト大陸の国名を出されても……。懐かしいですが」

「失礼噛みました。

ユミナさんと2人つきりというのは、あとでドロップキックの刑ですが——」

「やめてくださいああいい!」

「アインハルトさん、

『色気のない部屋ですが……清潔ではあると思います』

って言うてるじゃないですか。

そんな人が、中学1年で紐パンとか、色気のありまくる格好するでしょうか?

いや、しませんよねええ!?

と、思ったわけですよ」

「あう」

「ひよつとしたら、アインハルトさんの実家に二両親がいて、実は、うちのママたち以上

に、娘のことを溺愛してて、ウキウキしながらアインハルトさんに似合いそうな洋服や下着を選んで購入して、送っているのではないか？

と、考えたわけですよ」

「さ、さあ、どうでしょう?」

「——で、巻を追うごとに、アインハルトさんの格好が地味……というか、落ち着いてきているんですね。」

シンプルな格好も増えましたし。

これは、自分で買うようになったか、ユミナさんに相談したか、まあ、心境の変化でしようが……」

「ううっ」

「アインハルトママさんは泣いてるぞー」

「いるって決まったわけじゃないですよねえ!?!」

「ちなみに、以前、

『アインハルトさんは、ドーして家だと、Tシャツにパンツで寝てるんだらう?』

と、悩んだことがあったのですが……」

「悩まなくていいですから!?!」

「送られてくるパジャマが、やたらフリフリのついた可愛いのだったり、動物の着ぐるみ

タイプのパジャマだったりするので、シンプルな格好の好きなアインハルトさんとしては、

『ま、家の中ですし、これでいいかな……』

と、Tシャツにパンツ。

最近ではそれがデフォルトになったと

「勝手に想像しないでくださいああ——い！」

「ちなみに、アインハルトさんの部屋って、基本トレーニングマシンとベッドしか映りませんが、絶対に衣装部屋があると思います。

一部屋まるまる衣装や靴が並んだ部屋が

「ノーコメントでええ〜」

●ときめきアインハルトメモリアル

「アインハルトさんって、礼儀正しく、年下のわたしたちにも敬語を使いますよね？」

「ええ、まあ」

「ですが、気づいた人も多いと思いますが、本作中でのアインハルトさんは、あまり敬語をしません」

「そういわれてみると……」

「実は——『Vivid 12巻』で、わたしがアインハルトさんをボコつてるシーンを読んでいただくとかわりやすいんですが、アインハルトさんって、心の中——それも、深い部分で考えるときって敬語じゃないんです」

「……おや？」

「つまり、伝説の樹の下で告白して、つき合い始めたとしてもまだ敬語。おそらく数年後——長く一緒に過ごすことで、ようやく隠し好感度パラメーターがMAX。敬語がとれるんじゃないかと思うんですよね」

「そ……そうなんでしょうか？」

「はい。残念なことに。」

「なので、わたしもまだ、その領域には達していない——ということですねー」

「私自身、意識したことはありませんでした。」

「ですが、私が敬語を使わない相手って……いましたっけ？」

「完全に使わないわけではありませんが、いますよー。ただ一人」

「え？」

「霸王クラウス・G・S・イングヴァルト。クラウス陛下です。」

彼に語りかけるときのアインハルトさんは、普段より軽い敬語なんですよねー。ただ

の丁寧語。わかりやすいのは20巻でしょうか。

あれが、わたしの目標ですわねー」

「そういうことでしたか……。」

つまり、そのときは、ヴィヴィオさんも私に対して敬語はなし——ということですか？

「……うっ。押忍、が、がんばって善処します」

●アインハルトさんの実家は合法ロリの夢を見るか？

「——というわけで、だいたいこんなところでしようか」

「適当に設定を作ったわけでなく、一応、考察っぽいこととしてたんですわね」

「もちろんですよ。ちなみに、半分以上はアインハルトさんの実家に連絡して——」

「っ!? 今、なんと……?」

「いえ、別に、誰もアインハルトさんの可愛らしいママさんから、思い出話やら思い出写真なんて提供してもらっていませんよー。」

わたしの持つてる写真とトレードしたなんてことは、一切ありませんから。ええ」

「あの、少しクリスさんをお借りしても……」

「おっと、緊急メンテが……。ちよつとマリーさんのところ行ってきますねー」

「ちよつと待つてください、クリスさんの……クリスさんの中の写真データの提出を要求します！」

「もう無理、時間ないからー、ではまた来年！ よいお年をー！」

「あうー」

そろそろいいよね? Detonation

あけましておめでとうございます。

みなさん、今年もよろしくお願いしますねっ。

そんなわけで新年1回目の本日は、劇場版第4弾『魔法少女リリカルなのは Detonation』について話したいと思います。

ネタバレを多く含むので、映画を観ていない方は注意してください。

また、リリカルなのはファンにとってはショッキングな内容になっているかもなので、お餅を喉に詰まらせたり、アルハザードを探す旅に出たりしないよう、注意してお読みください。

それでは、スタートですっ！

『Detonation』で、スターライトブレイカーが放たれなかった最大の理由は……どどん、エルトリア式フォーミュラとの相性うんぬんではなく、

劇場版『StrikerS』を制作することが、完全になくなったからああ〜〜〜

!!

お正月の高町家リビングでわたしが告げると、アインハルトさんを始め、リオコロ、ミウラさん、ユミナさん——みんなが押し黙った。

そして、なのはママとフェイトママは、そつと目を逸らす。

「ど、ど、どーいうことですかああ!? 私、昨年末、劇場版第5弾『魔法少女リリカルなのは The MOVIE S t r i k e r S』に出演するため、一生懸命プレゼンしたんですけどおお——っ!」

「すみません、アインハルトさん……。わかってはいた……。わかってはいたんですが……アインハルトさんの頑張りを無駄にしたくなって、黙ってましたああ——っ!」

「待って、ヴィヴィオ。じゃ、あたしはもう、一生映画に出れないってこと?」

「私のゴースト創成が……」

「あわわわわ……」

「わ……。私のオーディオコメンタリー、総合司会連続記録が……」

「とりあえず、その辺も含めて、順番に説明していきましようね——」

●劇場版『StrikerS』はない？

振り袖を着たアインハルトさんが手を挙げる。

とりあえず、重箱の栗きんとんに突き刺した箸から手を放しましょうよ！。

「わ、わかりました。ヴィヴィオさん。謎は全て解けました。

確か『りりかる歳時記』の第47回に、

『なんや映画の偉い人によるとな？』『StrikerS』はそのまんまやと絶対2時間に収まらへんねんて』

という台詞があつたので、劇場版『StrikerS』は制作されない——なんて結論に達したのではないでしょうか？」

「[[「おー」]]」

「やりますね、アインハルトさん！」

しかーし、今回に関してはまったく関係なかったりします。

なぜなら、『Reflection』と『Detonation』は前後編だったじゃ

ないですか。同じように映画2本分あれば、『Striker』も問題なく映画化できるからです！

まあ、予算とか、色んな大人の事情はおいといてですけどねー」

「なっ……。だったら映画、最初から『Striker』でよかったじゃないですかああ！」

「あー」

そこは言っちゃダメですよー。

「わかった！」

「はい、リオ」

「今回、映画でスターライトブレイカーを撃てなかったのはさんが、腹いせに暴れまくったせいで、映画の撮影スタジオから出禁を食らったから！」

「「「おく……おっ……」」」

「リョちゃん」

「はい？」

振り返ったリオが「あばばば」と、なのはママからアイアンクローを食らっている。

「でも……確かに『エクシードブレイカー』という新技はあったにせよ、『スターライトブレイカー』といえ、リリカルなのは代名詞。

水戸黄門でいえば、印籠。

ウルトラマンでいえば、必殺光線。

仮面ライダーでいえば、ライダーキック。

ドラゴンボールでいえば、かめはめ波。

セイバーでいえば、エクスカリバー。

それが、劇場版、一番の見せ場で放たれない——というのは、ちよつと変だと思ってたんだよね」

「流石コロナ。わたしの最も古くからの友人だけあるね」

「まあ、それほどでもあるけど」

「浴衣姿の抱き枕カバーがエッチなだけあるね」

「それアインハルトさんでしょお!?」

「とばつちりですっ!」

「まあ、そんなわけで、スターライトブレイカーが放たれなかった理由を探ることで、劇場版『StrikerS』がなくなった理由もわかるんだよ」

● 聖闘士に1度見た技は通用しない

「では、ここで問題です。ミウラさん」

「はい？」

「前作『Reflection』から登場した“臨海テーマパーク『オールストン・シー』
”ですが、何かに似ていると思いませんか？」

「そ……それは口に出していいテーマパークなのでしょうか……？」

「どんと口に出して言っちゃいなよ、YOU！ ネズミーとか、発勁島とか——」

「はい。リオはもうちよつと黙つとこーねー。フェイトママ、お願い！」

「ふんっ——」

フェイトママのザンバーホームランで、なのはママが開けた窓から、リオが寒空の下に飛んでいく。

「じゃ、ピッチャーミウラさんに代わりまして、ユミナさん。さあ、答えちゃいなよ、YOU！」

「あんまりリオちゃんと変わってない!？」

えつと、ひよつとしてなんだけど、この前のアインハルトさんの話にも出てきたよね。

『StrikerS サウンドステージX』に登場した、ミッドチルダの海上に建設され

たレジャーランド——“マリンガーデン”だったりする?」

「ピンポン、ピンポン！」

さつすがユミナさん、年の功！」

「いえ、陛下。2歳しか違いませんかからね!」

「それじゃ、一気に比較して行きますよ——」

1・舞台

●劇場版

・オールストーン・シー（海上テーマパーク）

●『StrikerS サウンドステージX』

・マリンガーデン（海上レジャーランド）

2・古代ベルカのキーキャラクターが眠っていた場所

●劇場版

・遺跡（ユーリ ※エルトリア過去）

・海鳴市沖の海中（ユーリ）

●『StrikerS サウンドステージX』

・海底遺跡（イクス）

3・新装備

●劇場版

・ストライクカノン（味方複数）

・フォートレスユニット（なのは）

●『Force』

・ストライクカノン（味方複数）

・フォートレス装備（なのは）

4・ボスキャラ（ラスボスではない）の特殊能力1

●劇場版

・イリス群体（イリス）

※次々にコピーを作り、無限に増えていく。

●『StrikerS サウンドステージX』

・マリアージュコアの生成（イクス）

※人の死体を利用し、無限に増えていく。

5・ボスキャラ（ラスボスではない）の特殊能力2

● 劇場版

・結晶樹（ユーリ）

※「対魔導師・対魔力」戦闘を主眼とされているため、通常の魔導防御が機能しない。

● 『Force』

・魔導殺し（エクリップス因子適合者）

※魔法によって発生するエネルギーの消滅。現行の魔法技術による武装が機能しない。

6・ラスボス・黒幕

● 劇場版（フィル・マクスウエル）

・男性

・優秀な研究者

・エルトリア中央政府との関係

・ラスボスに相応しい個人戦闘能力

● 『StrikerS』+『Force』

- ・男性（スカリエッティ ハーデイス）
- ・優秀な研究者（スカリエッティ ハーデイス）
- ・最高評議会との関係（スカリエッティ）
- ・ラスボスに相応しい個人戦闘能力（ハーデイス）

7・敵側の強キャラ

●劇場版

- ・イリス群体「固有型」

※高い戦闘能力。量産型に対する指揮能力。外見・性格はそれぞれ異なる。

●『StrikerS』

- ・戦闘機人ナンバーズ

※高い戦闘能力。外見・性格はそれぞれ異なる。

●『StrikerS サウンドステージX』

- ・マリアージュ（軍団長）

※高い戦闘能力。量産型に対する指揮能力。

8・最終兵器

● 劇場版

・軌道上からの衛星砲

※地上の人を人質にした取引

● 『StrikerS』

・聖王のゆりかご

※軌道上に到達すれば2つの月の魔力で無敵。ミッドの地上全てが人質。

9・決着

● 劇場版

・大気圏外での砲撃

● 『StrikerS』

・大気圏外での艦隊射撃

「——そして何より、映画でのなのはママが、最後に放った砲撃魔法」

「[[[[[[い)くり……]]]]]]」

「さつきもコロナが言ってたけど、これまでのシリーズを考えれば、スターライトブレイ

カーほど、ラストを飾るに相応しい魔法はありません。

というより、劇中で一度も撃たなかったので、あの最後の瞬間、

『そっか、このときのために取っておいたのか!』

と、思ったほど。

ところが、ラストに選ばれた魔法は、デイバインバスター。それも、レイジングハートの先端からではなく、なのはママ自身の、手のひらから放たれています……。

もう、みんなわかったよね?」

「「「スバルさんの、拳で撃ち出すデイバインバスター!?!」」」

「その通り!」

『Reflect ion』でも、やたらと素手で殴りつける描写が印象的だったな……と
思ったら、『Striker S』の格闘要素を入れこんでいたのですかあ!」

「「「「そうなの!?!」」」」

「まあ、その辺りは、人によって感じ方はそれぞれだと思いますが……ただ、

これで『StrikerS』の映画を制作したら、観客はどう感じると思う？

『StrikerS』を知らない人だって、

『このナンバーズって……前作のイリス群体「固有型」に似てない?』

『このスカリエツティってキャラ、前作のマクスウエル所長っぽいよね』

と、なるわけです……」

「「「「あゝ」」」」

「つまり、これだけ『StrikerS』以降の要素を登場させてしまった以上、もはや劇場版『StrikerS』は映画化できない、制作されることは完全になくなってしまったのだああ——つつ!!」

「そ……そんな……私の映画進出の夢が……」

「あ、あたし、ルーフェンに帰らないと……」

「つ……積んであるガンプラ組み立てないと……」

「ま……またはやてさんの変身シーンが削……」

「……ん、ちよつと待って、ヴィヴィオちゃん陛下」

「どうしましたかユミナさん。劇場版艦これ第2弾でも決まりましたか？」
「ううん、そーいうことじゃなくて。」

逆に考えれば、さつき比較して似ていた部分を変更して、新しい要素を加えれば、TVアニメ版を見ていた人も、見ていない人も新鮮な気持ちで楽しめる、最強の『StrikerS』ができちゃうんじゃないかな？」

「「「おおおおおおおおおお！」「」」

「——ぐはっ！」

や……やりますね、ユミナさん……」

「うん、殴ってないけどね」

「ただ……リリカルなのはの映画……今の“劇中劇”というスタイルを取っている限り、劇場版『StrikerS』はアウトなんですよおお！」

「「「な、なんだってー!」「」」」

「まずはコチラ。」

『StrikerS サウンドステージX』でのやり取りをお聞きください——」

ルネッサ「閲覧ロックがかけられているのは何故でしょうか？」

ギンガ「JS事件自体、非公開項目の多い事件だから、それでひっかかるんじゃないかなあ。関係者のプライバシーもあるし——」

「「「「ま、まさか……」」」」

「——そう。これまでの劇場版に関しては、結構むか……し……」

ママたちの視線が!?

「……なのはママたちの子供時代の出来事で、ついでに管理外世界の事件ということもあり、まあ、映画化しても大きな問題はありませんでした。

ところが、『StrikerS』はつい最近、それもミッドチルダで起きた事件なので、映画化するには色々問題が多い……」

「「「「確かに！」」」」

「そこで、今回の劇場版は、そもそもディアーチエたちから記憶封鎖を受けた『GOD』の事件をベースに、映画化できない作品を加えて——」

『記憶改変されたGODの出来事』

+

『StrikerSの要素』

+

『Strikers サウンドステージXの要素』

+

『Forceの要素』

||

劇場版『Reflection』&『Detonation』

「——として制作されたと考えれば、みんなも納得してくれるかなと思うんだけど、どうでしょぅ？」

「……そうですね。ヴィヴィオさんが聖王の複製体であることを、世間に広く公表するのはマズいですから……」

「名前をV・V・(ヴィツ)にしちゃうとか……」

「うん、やめてー」

「わ、私オレンジ役でもいいから……」

「うん、やめてー」

「ナンバーズ——ノーヴェ会長のこともありますし、迂闊には映画化できないですよね」

「ヴィヴィオちゃん陛下の言う通り、劇場版艦これ第2弾を待つしか〜」

「もちろん、劇中劇——という設定をなくし、完全に、

『並行世界のリリカルなのは』

ということにしてしまえば、劇場版『StrikerS』も可能だと思います。

ただし、その場合、わたしたちの世界線では映画が制作されていない。つまり、わたしたちは映画を見ていない、見れないことになるので、これまでのオーディオコメンタリーと違い、わたしたちに出番はありません」

「わ、私の総合司会はああ!?!」

「そうですねー」

いつそのこと、この話みたいに、みんな全てをわかった上で会話するような世界線な

ら、アリなんじゃないかなーと。

ふっふっふ、ユミナさん……。

その場合、司会枠は取り合いですけどねー。

わたしだって狙っっちゃいますよおお！

「な……っつて、いつそのこといっつもみたいに2人で司会やっちゃうとか、どうでしょう、

陛下？」

「あ、いいですねー」

「[[[[ずっ(っ)いー]]]]」

「ただ、これはあくまで、劇場版『StrikerS』が無理とだけいっているだけで、劇場版第5弾が無理といっているわけではありません」

「[[[[あー]]]]」

「——そう。ママたちの子供時代の事件を、原作なしの、完全オリジナルの映画として制作してしまえば、何の問題もないのですっ！」

「「「それだぁあ——っ!!」」」

「まあ、その場合、またわたしたち『Vivid』勢には、やっぱり映像としての出番がなく、オーディオコメンタリーに出演するだけになっちゃうんですけどねー」

「「「あゝ」」」

「ねえ、なのはママー。いつそのこと『StrikerS』以降の時間軸を舞台に、架空の事件で映画制作できないかなー?」

「アリアハンから勇者がやってきて、なのはママと戦うとかー。」

「竜魔人になったエリオが、なのはパレスに乗りこんでくるとかー」

「え、なんで私がボスキャラ枠なの!?!」

「ほら『サイバー●オーミュラ』だって、最終的には、レーサーとして強くなり過ぎた主人公がラスボス枠になったでしょ?」

「あく、あれ？ それってすでに『Vivid』でやってしまったような……」
「うっ、確かにそんな気もするけど……。」

ほら、わたしとなのはママのバトルって、言うなれば、葛木先生とキャスターが居間で夫婦喧嘩するようなものでしょ？ 先生は本気を出せても、キャスターは愛する宗一郎様に全力全開できない——みたいな」

「その例えもどうかと思うけど……。」

すると、両手に栗きんとんを突き刺した箸を一本ずつ持ち、バンザイの格好をしたアインハルトさんが、いつになくハイテンションでまくしたてる。

「待ってください、ヴィヴィオさん！」

劇場版の『The MOVIE 1st』と『The MOVIE 2nd Act』には、TVアニメ版の原作が存在した——ということを手にとり、

『Reflection』&『Detonation』のTVアニメ版——いえ、その原作ともいべき『GOD』をTVアニメ化するというのはいかがでしょうか？」

「つまり、わたしとアインハルトさんも出演できる——ということですね？」

「はい！」

アインハルトさんの突き出した栗きんとんを、わたしがパクりとくわえる。

そして——パン! とハイタッチ。

「パーフェクトっ!」

「全然、パーフェクトじゃないよおお!!?」

最近劇場版が続いたので、みなさんも、TVアニメで、なのはママたちの活躍（ついでにわたし）を見たいと思いませんか？

私のユーリが男の娘のわけがない！

さて本日は、

『ユーリ・エーベルヴァインは女の子ではなく男の娘』

という説を検証していきたいと思います。

結構前に依頼されたのですが、ちょうど100話のアニバーサリーと重なる時期、ついでにクリスマスもお正月とイベントシーズンだったので、伸びに伸び、今回になってしまいました。

本当に申し訳ありません。

さて、『ユーリ男の娘説』の根拠ですが、

- ① スカートを履いてない。
- ② 『INNOCENT』の大人バージョンの姿に、胸やくびれがない。
- ③ インタビューで、ユーリのデザインは中性的にするのを心がけた。
- ④ “ユーリ” という名前は男性名。

などだそうです。

確かに『ユーリ・エーベルヴァイン 紫天の極星』などのカードイラストを見ると、伝説の「72(如月●早)」を越える——いえ、この場合72を越えないと言うべきでしょうか——ちよー平面だったりします。

フラット、フラット♪

うーん……。

「つて、別にわたしが頭を悩ませなくても、本人に訊けばいいだけじゃん!」

というわけで、早速ユーリに会いに——とはいっても、ネタバレになる劇場版エルトラアではなく原作『GOD』版の惑星エルトラアへ。

フローリアンハウスのドアを叩く。

「たーのーもー」

……。

「おかしいな……？ 誰も出て来ない……」

レヴィなら、バルニフィカス片手に大声で飛び出してきそうなものだけど……。家の裏手に回って、キリエさんが育てている花壇の様子などをチェックする。

「ま、まさか……。とうとう『死触』の影響がこの家にまで!? みんなはすでにグランツ博士のあとを追うように息を引き取って……」

——スコーン!

「あいたー」

背後から頭を叩かれた。振り返ると、お玉を片手にディーアーチェ——王様がムスツと仁王立ちしていた。

「勝手に我らを殺すな! 縁起でもない。だいたい桃色の花壇は、今日もあやつのようにしごとく元気に育っておるわ!」

「あはは、まあ、そうなんですけどねー」

博士が残したという新種の花が、綺麗に咲いている。わずかに土が濡れているので、今朝もふつーに水やりをしたのだろう。

「——というわけで王様。お久しぶりです。本日もご健勝なようで何よりです」

「ふんつ、当たり前だ。我が病にかかるとでも思ったか?」

「ですねー。考えてみれば、はやてさんも車椅子のころから足のこと以外は元気でましたし。あー、ちょうどキリエさんの花みたいにしぶとい——」

「ええい! 我と子鴉と、ついでに桃色を重ねるなアア!」

「あたっ! あたっ!」

お玉でポカポカ叩くのをやめてー。

「魔法少女らしく、魔法使いましょーよー」

「まったく。それで、今日は何用だ? 未来にポンポン来おつてからに」

『未来 ↓ 過去』より『過去 ↓ 未来』の方が影響は少ないらしい。

最悪、記憶封鎖もわたしたとクリスだけで済む。

「実は、ユーリに会いに来たんですけど……」。

「というか、みんなは?」

「むう、それはタイミングが悪かったな。ちょうど今朝から全員で街に出かけている。買い物をするにも、ここは少し離れているのでな、往復に時間がかかるのだ」

「なるほど……そういうことでしたか……」

つまり、王様はぼつちでお留守番と？」

「ぼつちとか言うなッ！ 貴様、我に喧嘩を売ってるのか!? 子鴉といい貴様といい……。せつかくの機会だから、少々手間がかかる料理でもしようと思っただな……」

「そういえば『2nd A's』のドラマCDによると、『Force』のころのはやてさん、忙しくてめつきり料理する機会が減ってるとか——」

ひよつとしたら、すでに王様の方が、料理の腕前が上かもですねー」

「当たり前だ。我が子鴉ごときに遅れを取るなど、あるはずがなからう」

「その件は、あとでわたしが王様の手料理をいただいて判断するとして——」

「おい」

「ねえ、王様。ユーリって女の子？ それとも男の娘？ どっちなんですか?？」

「はあ？ いきなり何を。我らのユーリが男の娘のわけあるかああ！」

「でもでも王様——」

わたしは『ユーリ男の娘説』を伝える。

「それにほら、2018年の秋アニメでも、ロマンシングゾンビランドサガのリリィ——まさお事件とか、あつたじゃないですか」

「あー、まあ、そーいう事件もあつたがな。だからといってユーリがだな……」

「まさおくんの件も、みんな一緒に共同生活していても気づかなかったんですよ？ 王様、ユーリの身体をじっくり観察したことありますか？」

「むう……」

「でなければ、ユーリが男の娘という可能性も捨て切れないのではないのでしょうか？」

「はあ……わかった。うぬがそこまでいうなら仕方なかるう。」

我が居城（フロリーアン家）に上がることを許そう。

大書庫（居間の本棚）に収蔵された、貴重な『古代の文献（『マテリアル娘。』の漫画など）』で調べてやろうではないか

「古代の……あー、そっか……」

『GOD』の惑星エルトリアは、時間軸が未来なので、わたしたちの時代に書かれた本は、全て『古代の文献』扱いになるのだ。

あの漫画たちが希少な書物扱いである。

「まずは『魔法少女リリカルなのはINNOCENT 公式ビジュアル大事典』から紐解くとするか——」

「ん？ ちょっとたんま！ 何ですか、その本……？ 聞いたことないんですけど?！」

「ああ。ひよっとしたら、うぬらの世界とは別の世界線で発売された書物かもしれんな。ゲームなどに使用されたカード、美麗イラストが全て収録されている一品だ」

「ナニソレ!? わたしもちよー欲しいんですけどおお!」

『ストライクウィッチーズ 軌跡の輪舞曲 OFFICIAL VISUAL FILE』——みたいに、『INNOCENT』もイベントやカードのイラスト集を出してくれたらよかったのいい!

今からでも遅くないから編集、発行しましょうよー。

「ふむ……ユーリのカード一覧……。確かにパンツスカーտっぽい格好が多いか……。

しかし、振り袖に、ウエディングドレス、スカートの子服。ワンピースも着ておるし、やはり女の子であろう。

それと、これは漫画の限定カバーに使われたイラストらしいが、うぬの母親と一緒にメイド服を着ているぞ?」

「でもでも、時代は世紀末……じゃなかった、ジエンダーレス。男性がそういう格好をしても構わないじゃ。特にユーリは似合ってますし」

「ユーリが似合っている——という点は、我も認めざるをえんが……。

というか、よくよく考えてみれば、我ら『GOD』と『INNOCENT』は別の世界ではないか。

先に調べるのであれば、

漫画『魔法少女リリカルなのはA's PORTABLE | THE GEARS

OF DESTINYー マテリアル娘。』

シリーズであったな」

「そういわれるとー。ただ、性別に関しては変更ないと思いますけど。そのせいで、トーレのイラストなんてスゴいことになってますし」

「まあ、そういう需要もあるであろうー」

王様がパラパラと漫画のページをめくっていく。

「ふむ。例えば『マテリアル娘。だっしゅ』の温泉回はどうか？ 我らと一緒に、ユーリ

も温泉に入っているぞ」

「まあ、子供ですし。男の娘でも入れるかと。

混浴って可能性もありますし。

『INNOCENT』の『グランツ研究所一同 温泉タイム』のカードイラストでも、一緒に温泉に入ってますよね？

あとは……ほらほら、漫画『INNOCENT』の2巻、6話の表紙。王様たち4人、お風呂で洗いっこしてますよ？」

「くっ……。で、あれば、ひな祭りはどうだ？ 女の子の祭りを一緒に祝っておるぞ」

「んー、別に男の娘が祝ってもいいんじゃないや。ほら、兄妹がいる家なんて一緒にやるだろうし、そんな感じだと思えば……」

「くっつ、ああ言えばこう言う！ 貴様はどこの子鴉だアア——っ!？」

『呼んだか、王様？』

「——つて、どうして貴様がしやしり出てくるのだ、子鴉うう!？」

「援軍ですよ、援軍。映像通信による援軍です。わたしたちだけじゃ先行きが怪し……行き詰まってきましたから。そろそろ外部の意見をですな。」

あー、八神司令、お仕事すみません」

『ええよ。どーせ、ヴォルフラムん中の執務室で暇しとつたしな』

それはそれでどーかと思うけど、『Force』が始まるまでは、ミッドも平和なのだ。

「くうう、レヴィが見たら大喜びしそうな戦艦に乗りおつてからにいい！」
「確かに、レヴィなら『今すぐ乗りに行こー』とか言い出しそうですなえ」

『まー、ロボには変形せえへんけどな。フツケバインと戦う前に改造するんもアリかな？』

「それ、未来変わっちゃいますからー」

「えーい、ヴィヴィオ、とつとと通信を切れええ——いッ!」

『もう、つれへんなー、王様。せつかく耳寄りな情報持ってきたのに』

「耳寄りな情報だど?」

『そやで。まずはコレや——』

『マテリアル娘。 page 6 チエンジ☆ユ-リ ユ-リ・エ-ベルヴァイン』その4
コマ目。

ユ-リに対する説明台詞より——
『ちよつと天然な“娘”である』

「娘エエ! なんてこつたい、これ、もう女の子確定じゃないですか!」

「むう……」

『次はコレや——』

『マテリアル娘。INNOCENT SR デュエル21 オリジナル☆カスタム お礼ですよ』その4コマ目。

アインズとユーリに対しての、お豆腐屋さんの台詞——

『あらかた売れたのは、嬢ちゃんたちのおかげだ！』

「王様！ このおじさん、2人を女の子扱いしてますよおお！ もちろん、ユーリも問題なく受け入れてますし」

「くっ……」

『最後はコレや——』

『りりかる歳時記 第43回 87ページ』

ユーリ「大きくなったら……みんなをまとめてぎゅってできるかなって……」

キリエ「も——、それじゃあ、家（ウチ）で一番おつきな存在（おねーちゃん）にな

「らなきやいけないじゃないの——」

「おにーちゃん」ではなく「おねーちゃん」とルビが振つてある！ これは決定的だああ！」

「うぬぬぬ……」

映像通信の向こうで、ドジっ子潜水艦艦長みたいな声が聞こえてくる。

『——はやてちゃん、お仕事の時間ですよー』

『おっと、見つかつてもーた。もっと話したいんやけど、あとは2人で頑張つてなー。健闘を祈ってますー』

空間ディスプレイから、夜天の主の顔が消えた。

「むう……子鴉のやつに言われると、無性に『ユーリ男の娘説』の証拠を探したくなるのはなぜだツ!？」

「やめて王様ああ!？」

「例えばの話だ。そう、例えば……だぞ？」

ユーリの水着姿——。

漫画、カード共に、上着を羽織っておったなど。しかも、ショートパンツっぽい。

もつとユーリに似合いそうな、可愛い水着が無数に存在する中で、あえてこの
チョイスというのは……。

有名ところで、性別秀吉もそうであつたなど……

「あー、戸塚彩加なんかもそうですよね？」

「中の人とも若干関係してくるが、ハス太もな……つて」

「うがあああああああああツツ!?!」

「ダメダメダメえええ！ どーして王様が、男の娘派に寝返つてるんですかああ!?!」

「くっ……。なぜだ、なぜ、ユーリだけこんな水着姿なのだああ!?!」

王様がカカカカカン——と、お玉で家の柱を叩き出す。

むう、これはマズい!?

「ハッ！ そ、そーですよ、王様！ こんな漫画とかアプリゲーとか、二次資料に頼つて
いるからダメなんですよ！

そもその原作である、PSP用ゲームをプレイし直せばいいんじゃない?!」

「な、なんと！ その手があつたかああ！

流石は高町なのはの娘! でかしたぞっ!

「いや、それほどでも」

とはいえ、今更PSP用ゲームを再プレイするのは……ふう。

「じゃ、わたし今日はそろそろこの辺でおいとまさせて——」

ガツ——と肩をつかまれた。

「まあ、待て、ヴィヴィオ。同じ王様同士、たまには親睦を深めるのもよかろう。確か、
私の料理を味わいたいと申しておったな。今から用意するから……貴様はゲームをプ
レイしろ!」

「ひいひい!」

「安心しろ。ユーリの登場は中盤以降。よって、プレイ時間も半分で済む計算だ」
「それはそーなんですけどおお——っ!」

なんだかんだで、2人がかりでプレイし続けた結果……。

——パタン。

わたしは床にへばった。

「だ……ダメです……王様……。ないです、ないよー、ユーリの性別を特定できるシーン……」

「ぐぬぬぬ……」

「だいたい王様、初めてユーリが登場したシーンで——」

キリエ「ちょっと王様？ システムU—Dが人型してるなんて、聞いてないんですけどッ!？」

ディアーチェ「むう、おかしい。我が記憶でも、人の姿を取っているなどは……」

「——つて、ちよーアバウトだったじゃないですかああ!？」

「むう、おかしい」

「おかしくないですからああ!？」

「……こうなったら、

『魔法少女リリカルなのはA \boxtimes s PORTABLE — THE GEARS OF
DESTINY — 公式ビジュアルブック』

を持ってーいッ!

基本的に立ち返るのだ! ユーリのキャラクター紹介があるであろう!」

「そ、それは盲点だったかも!」

王様やわたしのキャラ紹介と違い、ラスボスであるユーリだけ、離れたページに記載されている……が、

「ダメです王様! ありません! 『公式攻略ガイドブック』も見てみましたが、やっぱり性別は書いてないです!」

「な、なんと……」

「——ていうか、王様たちのところにも、わざわざ性別なんて書いてないですけどね!

フエイトママのところにもないし!」

「くっ……。我らの場合は子鴉たちを元に行っているから女性体は確定として……ユーリは、もともと人間だったからな」

「性別、覚えてないんですか?」

「むう……。ユーリの名を思い出したのもシユテルだったしな……」

あー。

『GOD』のエンディングでそんなこと言ってたっけ……。

「はあく。もう諦めましょうか、王様。」

これ以上調べなくても、はやてさんのお陰で、ほとんど女の子確定みたいなものですし」

「くっ……。子鴉經由というのが納得いかんが、こうなつては是非もな……。いや、ちよつと待て……」

王様が『公式ビジュアルファンブック』のページをパラパラめくる。瞳が素早く動く。斜めに繰り返す。速読していく。

「コレだ……。あつた、あつたぞ、ヴィヴィオ！」

ユーリが男の娘ではない、女の子の証拠だッ！」

「ホントですか!？」

「うむ。子鴉ではない。我が見つけた。見るがよい——」

そう言つて『公式ビジュアルファンブック』を手渡してくる。

「でも、さつきキャラ紹介には書いてないって」

「いや、そこではない。〃ストーリー紹介〃の部分だ。

例えば『SEQUENCE10 SCENE42』のストーリーを読んでいくと——」

『U—Dのその言葉にも屈せず、シユテルとレヴィは敢然と〃彼女〃に立ち向かう』

「他にも『Final SEQUENCE』では——」

『落下する“彼女”を抱きとめるディアーチエ』

『ユーリ・エーベルヴァインという本来の名を取り戻した“彼女”は』

「エンディング後の『SEQUENCE X』においても——」

『“彼女”の能力の高さに全員が舌を巻いた』

『——“彼女”は強く願うのだった』

「こ、コレって……」

「うむ。ユーリのことを表現するときは、必ず三人称で“彼女”と表記しておるのだ。もちろん、今紹介しただけではないぞ？」

ユーリに関係したストーリー紹介は、全て“彼女”表記になっておる。

これだけ“彼女”“彼女”と連呼しておいて、

『実は“彼女”じゃありませんでしたー』

とか、流石にないであろう?」

「た、確かに……。長い文章中は、百歩譲って見逃したとしても、『——彼女』は強く願うのだった」

「って、ストーリー紹介のラストを締める、大事な一文ですから。これを見逃す可能性は極めて低いかと……」

「うむ。これで、」

『実は、ユーリは男の娘でしたー』

とか公式発表されても、我にはお手上げだぞ？」

「あはは。そうですね。漫画家さんを始めとした周囲みんなにも黙っていた——ってことですからねえ……」

「とはいえ、だ。映画のネタバレになるから詳しくは話せんが、劇場版のユーリに関しては、むしろ性別がない——男の娘ではないにしろ、中性である可能性が高い。

映画のユーリはでかくもならんしな。

その理由は、映画を観た者であればわかるであろう？」

「中性って……最近のアニメで例えれば、スライムみたいな？」

「ふむ。おそらくあんな感じの肉体であろうな」

「これ以上はネタバレになるので、聞かせられないよ！

「じゃあ、王様。

結局のところ、どうして『INNOCENT』の大人モードのユーリは、リオやミウラさん——いえ、それ以上にべったんなんですか？

ほら、『りりかる歳時記』には、ユーリも大きくなるような話が——

「うむ。あの大きくなる——というのは、胸ではなく身長のこと。」

また、先程の『公式ビジュアルファンブック』のメインスタツフ座談会によると——

都築：——あとはしのぎきさんへの指定で「胸があるようには描かないください」、「ゼロです」と（笑）。

しのぎき：それははつきり言われていました（笑）。他の原画さんに色指定とかお願いすると、やはり影をつけてくるのでそれを削ったりしてました（笑）。

「つまり、スタツフはみんな、ユーリのことを女の子だと思っていたってことですよね」「うむ。一般プレイヤーならまだしも、スタツフにまで秘密にする理由はないからな。それだけ仕事が増えてしまう。ただでさえ制作スケジュールはギリギリのはず。そんなバカなこととはせんだろう」

「そういうことは、『INNOCENT』の大人モードのユーリって……?」

「おそらく、ここからは完全に推察になるが、大人の姿のユーリのイラストにも、『GO

D』のとき同様に、上から何らかの見えざる圧力がかかり、まるでプリペイドカードやギフトカードの銀色の部分のように、削り、削られ、フラットになったのであろう」

「番号が見えなくなるくらい削っちゃいましたー、みたいなの？」

「うむ。イラストレーターの方力の賜物よ」

「いやー、それ、努力の方向性が間違ってますよねえ」

「まったくくだな——」

「はっはっは——」

わたしと王様が声に出して笑っていると、玄関ドアの向こうから、『GOD』であるのはやてさんに、

『な……なんやこの重圧……魔力量の桁が違う!?!』

と言わしめた、巨大なパワーが漂ってくる。

ギギツ——ゆつくりドアが開く。

「ディアーチエ……ヴィヴィオ……」

小さな影。長い金髪がわさわさ逆立つ。砕け得ぬ闇時代を彷彿とさせる灼熱の翼が、夜の帳のごとく広がっていく。

「ゆ、ユーリ……!?!」

「もしかして聞いておったの……」

「デИАーチエが一人で寂しがつているかと思い、早く帰ってきてみればああ、2人も、そこになおってくださああ——いつ!

——エンシエント……マトリクスツ!

暗黒の大剣が、わたしと王様を貫き……ちゅどーん! 大爆発!

「ぎにやあああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああ〜っ!」

ちよ……ちよと立ち上がれそうにないので……今日のところはフローリアン家で

一泊します……がくつ。

八神はやてはちっちゃくないよっ!?

1

とある休日前夜の高町家。

リビングで、なのはママが呼んでいる。

「ねえ、ヴィヴィオ、ヴィヴィオ〜」

「どーしたの、なのはママ？」

わたしこれから前回エルトリアで借りてきたPSP版『ストライクウィッチーズ』や『とある魔術の禁書目録』、それに『グリザアの果実』なんかをプレイしようかと思っ
てただんど……。

「どれも遊んだことなかったんだよねえ〜」

「それはまた、随分と遠い世界から借りてきたねえ……しかも結構前のゲームを……
じゃなかった。」

ほら、去年のヴィヴィオの「聖誕祭」のとき、昔のはやてちゃんは、リリカルなのは
屈指のロリ巨乳キャラだった——ってオチがあつたじゃない？」

「オチ……うん。あー、アレはオチ扱いだったんだ……。わたしとしては、一応、ちゃんと調べたつもりだったんだけど……」

「あはは。そのときなんだけどき、身長やバスのサイズも調べたりしたの？」

「数値ってこと？」

「うん」

「一応したよ。ただ、どうやって計算したのかを話し出すと、長いし、本筋から外れちゃうから黙っていたけど」

「そっか。じゃあ、ちよつとママに教えてもらえるかな？」

なのはママにしては珍しい質問。

「実はね、今日、本局ではやてちゃんに会ったんだけど……」

『久しぶりに現場で捜査しよーとしたら、局員から「君、学校は？」とか職質された〜』

って、愚痴ってて」

「ん〜、それってむしろ、若く見られてラッキーだったんじゃない。なのはママだって『学生』と間違われたらうれしいでしょ？」

「うん。だよねえ……。だから私も『自慢か！』と思って、スターライトブレイカーでも食らわせようかと思っただけど……」

おう……。

本局大惨事。

「ほら、私って、はやてちゃんに対してはズドンしてないでしょ?」

「あゝ」

わたしやフェイトママ、ティアナさんが食らった洗札だ……。

「ママがはやてさんに一発食らわせるかどーかは置いといて、部屋から資料持ってくるから、ちよつと待っててね」

「はい」

とてて……とダツシユ。

部屋でガサゴソしつ……。

あー、そうだ。こういう話をするなら、ご本人も呼んだ方がいいかも……。

一応、メールしておこう。

2

『魔法少女リリカルなのは Strikers 設定資料集 SIDE A』と『SID

E B』などを抱えて、リビングに戻る。

わたしは、白いテーブルを挟んで、なのはママの向かい側のソファーに腰かけた。

「それでは、海上警備部捜査司令——八神はやてさんの身長などについて発表しまーす！

まずはこちら、空間ディスプレイをご覧ください。クリス、お願いね——」

『身長は低め』

『身長151cm』

『身長155cm』

『設定資料から割り出した説——はやて150cm』

『推定スリーサイズ——八神はやて T150 B83 W59 H84』

『StSでの八神はやての身長は約150cm』

『基本HP：25000 基本EN：400』

『身長156cm。代表作は「魔法少女リリカルなのはStrikerS」八神はやて——』

「——こちらはインターネットで検索した結果なのですが……おっと、後半余計なものが混じっていたというか、最後のは中の人のデータでした」

「あー。中の人も平均身長より小柄……というのは置いといて、はやてちゃんの身長つ

て150ちよつとでバラバラ、一定していないね。

ということとは、公式発表はないってこと?」

「うん。そうみたい」

「だけど、150センチって意見が多いね。

この設定資料から割り出した説——つてのに、説得力があるからかな?」

「うん。だと思っけど……その割り出し方、不完全なんだよね」

「え?」

「ふっふっふ。この高町ヴィヴィオ。なのはママの娘として、ふつーにネットで見つかるような内容を考察したりなんてしませんよおお!」

「おう、我が娘ながら頼もしいっ!」

「はい。ということで、こちらが本当のはやてさんの身長です——」

『八神はやて 19歳 身長：150〜153センチぐらい』

「うわ……。ほとんど変わらないというか、さらにアバウトというか……」

「しようがないんだってばよ！」

「そんなナルトみたいに言われてもー」

「まずは、さっきも話したけど、

『はやてさんの身長は、公式発表がない』

「……まではいい？」

「うん、OK」

「でね、次にコレを見て——」

わたしは『Strikers 設定資料集』の最初のページを開く。

「このキャラ対比表を見るとわかるんだけど、はやてさんって、明らかにスバルさんより身長が低いでしょ？」

「うん、確かに。明らかにちっちゃいね」

「ちなみに、この対比表から割り出す方法もあるんだけど……実際にやってみると少しズレちゃうんだよね……」

「どうして？」

「なのはママたちが靴履いてるからだよおお！」

「あゝ」

「裸足だったり、みんな同じ靴ならよかったのに、特になのはママなんて、1人だけ、こんな厚底っぽいブーツだかスニーカーだかわかんないの履いてるしいい!」

「あゝ」

「他にも、立ち位置が横一列ではなく、前後に重なっている——などの影響もあるんだけど、それはしようがない。」

なぜなら、この対比表は、あくまでアニメを作る側がわかりやすいよう、目安として描いたものだから」

「つまり、わたしよりフェイトちゃんの方が身長高い——とか、そういった、だいたいのごとはわかるけど、細かい数値を割り出すには向いていないってこと?」

「うん、そんな感じ。」

なので、対比表から数値を割り出す方法は、対比としては実に優秀だけど、正確さには欠ける。」

もちろん、アニメによつてはこだわって描いてる作品もあるとは思うけど」

「そこまで厳密にこだわってもねえ……」

「うん。それに、公式で身長が発表されていれば、それでOK。測る意味もないしね」
「確かに、それで試合終了だね」

「それじゃ、ママ。次にコチラのページをご覧ください——」

わたしは『Strikers 設定資料集 SIDE B』を開く。

「これはマリーさんの設定資料です」

「ホントだ。マリーさん26歳なんだね」

「うん。今回は、年齢は置いといて、このページの左上にご注目。なんと、スバルさんと身長が対比が書いてあるのです！

『スバル 対比 スバル 154cm』

で、マリーさんの横には、

『150cmぐらい ※はやてよりも低いです』

と書いてある。

ここに、先程対比表で見た、はやてさんはスバルさんより身長が低いという情報を加えると——」

● 154センチ……スバル

越えられない壁

● 153センチ……はやて？

● 152センチ……はやて？

● 151センチ……はやて? マリー?

● 150センチ……はやて? マリー?

● 149センチ……マリー?

「——と、いう計算が成り立つわけです。

よって、

『八神はやて 19歳 身長:150〜153センチぐらい』

という解が、導き出されるわけです」

「なるほど……。」

マリーさん次第で、はやてちゃんの身長は上下するってことだね?」

「そう。マリーさんの『150cmぐらい』——の解釈の違いで変わってくるの」

「そっかー。だったら……例えば解釈を広げて、マリーさんの身長は148センチ。だから、はやてちゃんの身長は140センチ後半ぐらい、ってのもアリってこと?」

「うん。アリといえばアリんだけど……ちよつと難しいかな」

「というと?」

「これは『Strikers 設定資料集 SIDE A』に書いてあることなんだけど

——」

『15歳はやて 対比 140cm後半ぐらい』

「あく。なるほど。15歳当時で、すでに140センチ後半あったんだ……」

「うん。まったく伸びていない——という可能性もないわけじゃないけど……」

「現実的じゃないか……」

「うん。というか、多くの人が誤解してると思うんだけど、日本人女性の身長って、15歳くらいでほぼ成長がストップするんだよ」

「へー」

「ほら、なのはママはおつききくなっただけど、成長曲線や、平均身長で比べると、

『15歳 ↓ 19歳』

なら「2センチ」も伸びればいい方」

「なんと!？」

「というわけで、ただでさえ——自己申告ですが——成長していないという、はやてさんなら尚更、成長の限界が、

『+2センチ以下』

と仮定して、それを、さっきの表に付け足すと——」

● 154センチ……スバル

越えられない壁

- 153センチ……はやて (19歳) 無理
- 152センチ……はやて (19歳) 無理
- 151センチ……はやて (19歳) ? マリー?
- 150センチ……はやて (19歳) ? マリー?
- 149センチ……はやて (15歳) ? マリー?
- 148センチ……はやて (15歳) ?

「は……はやてちゃんがどんどん小さくなっていく……」

「うん。現実的な数値を加えていくとこんな結果に……」

「とはいえ、公式の設定資料集だけで割り出すなら——」

『八神はやて 19歳 身長：150〜153センチぐらい』

『八神はやて 15歳 身長：140センチ後半ぐらい』

「が、正解。」

「これに、現実的な数値を加えると——」

『八神はやて 19歳 身長：150〜151センチぐらい』
 『八神はやて 15歳 身長：148〜149センチぐらい』

「——とまります」

「そつかく。でも、まあ、これなら、これまで推測されていた数値と、ほとんど変わらな
 いよね」

「うん。150センチだと思いたい方は、150でいいと思うし、マリーさんが150セ
 ンチぐらいだから、はやてさんはもう少し高くて151センチぐらい——と考えるのも
 アリだしね」

「微妙なところだね〜」

「ちなみに、身長148センチというと、ママの中の人が演じてた、

● 来栖加奈子（俺の妹がこんなにかわいかわげがない）
 や、他にも、

● フランチェスカ・ルッキニー（ストライクウィッチーズ）

● インデックス（とある魔術の禁書目録）

● 川島緑輝（響け！ユーフォニアム）

などのキャラたちがいます」

「うくん、ちっちゃい子感がスゴいかも……」

「身長151センチなら、

● ナナ・アスタ・デビルーク (To LOVEる)

● モモ・アスタ・デビルーク (To LOVEる)

● 桜咲刹那 (魔法先生ネギま!)

最長の153センチなら

● 水瀬伊織 (アイドルマスター)

● ルイズ (ゼロの使い魔)

● 雪音クリス (戦姫絶唱シンフォギア)

かな」

「どっちみち小柄なイメージが……」

「でも、魅力的なキャラが多いよね」

「確かに……。そう考えると、はやてちゃんにとって低身長つてのは、決して悪いこと

じゃないってこと？」

「うん。むしろご褒美というか、可愛いよね」

「だね。ただ、まあ、司令としての立場や威厳を考えると微妙なところだけど……」

ウエンデイが「ちびたぬ隊長」と呼ぶのも、その辺りが原因だから、はやてさんの気持ちもわからないではない。

3

「それでは、なのはママからのもう1つの質問。

はやてさんの胸のサイズ検証〜」

「お〜」

「ちなみになんだけど、15歳当時は、なのはママより大きかったんだよね？」

「うん。だね〜」

「さっすが、今はぶっちぎってるだけあって余裕だね」

「いやいや。だって、空戦魔導師には、胸があっても邪魔なだけだから〜」

「そんな、スポーツじゃあるまいし……」

さて、リリカルなのはのバストサイズですが、設定資料集にも、

『フェイトのほうが胸大きいです』

などといった表記はあるものの、比較するために必要な正確な数値が発表されていないため、正確に割り出すことはできません」

「じゃ、最初のネット検索で見つけた、

『推定スリーサイズ——八神はやて T150 B83 W59 H84』

みたいにな、全て推測ってこと?」

「うん。おっぱいドラゴンでもいれば、目測でわかるんだろうけど……」

「ヴォルテールは出来なさそうだしねえ……」

「うん。出来たら出来たで嫌だけど。それに、もし測れたとしても、イラストによつて、サイズつて変わるでしょ?」

「あ、そつか。イラストを描く人によつても、個人差が出るだろうし。」

3次元——フィギュアもそうだろうし……。

だとすると、胸のサイズに関しては完全に推測するしかないってこと?」

「うん」

「うわ……そんな超能力者みたいなこと、可能なの?」

「もちろん!」

なのはママの娘をなめてもらっちゃ困るよ!」

「……うちの娘が頼もしすぎる」

「まず取っかかりとして、各種媒体で、はやてさん自身が、自分のことを『貧相ボディ』みたいなこと言っていること」

「とうとう?」

「わたしとしては、単純になのはママを始め、はやてさんの周囲にいるメンバーが、スタイル良すぎただけだとは思うんだけど……。」

わたしの意見は置いといて。

仮に、もし、はやてさんが平均的なスタイルの持ち主だったとしたら、自分の胸などを小さいみたいに発言すると思う?」

「ん、『私はこれでも普通なんや』みたいに言うかなあ」

「うん、そこなんだよ。」

一応、一般的に言われている、日本人女性の平均的な体型は――」

身長：158 cm

体重：50 kg

バスト：84 cm

ウエスト：63 cm

ヒップ：86 cm

「だ、そうです。」

つまり、はやてさんのお胸は、平均の84センチより小さい可能性が高い」

「な、なるほど……」

「でもね、なのはママ。はやてさんって、15歳当時、フェイトママと同じくらい胸のサイズがあつたわけでしょ？」

「うん」

「仮に、『Strikers』——19歳まで、ほとんど成長しなかつたとしても、15歳のフェイトママと同じくらいはあつた。

ということは、若くしてしぼんだりしない限り、はやてさんの胸は、それなりのサイズがあつたと考えられるわけです」

「た、確かに……」

「さて、ここで15歳女性の平均バストサイズなんだけど」

「そんなのも用意したんだ？」

「ちよつと古いデータなんだけどね。成長曲線のグラフで見ると、15歳はバスト80センチ」

「ん、大人の平均が84センチなら、まあ、アリな数値なんじゃないかな？」

「うん。で、15歳のフェイトママのバストサイズって、どう考えても日本人の平均より大きかつたでしょ？ ミッドの平均は知らないけど、全体的に大きい人多いし」

「だねえ……」

「なので、

『フェイト（15歳）バスト81以上 Ⅱ 八神はやて（15歳）もバスト81以上』
の、計算式が成り立つわけ」

「な、なるほど……」

「そこに、最初の平均84センチを加えると——」

●バスト84センチ（日本人平均）

●バスト81〜83センチ（八神はやて）

●バスト80センチ（15歳平均）

「という解が導き出されると」

「お、おう……」

「ただ、まあ、調べた中でも、比較的新しいグラフによっては、

15歳平均……82センチ。

19歳平均……82・4センチ。

なんてデータもあるから、一概には言えないんだけどね」

「ま、まあ、そこまで厳密にしなくても、さっきの解ともだいたい一致するから、いいんじゃないかな?」

「まあ、ママたちの時代だと、ちよつと古いデータの方が——」

「少しアイスでも食べようか?」

「……申し訳ありませんでしたああ!」

えつと、まあ、そこで、バスト81〜83センチって、どんなキャラがいるのか調べてみると——」

バスト81

●萩原 雪歩 (アイドルマスター)

●魍呼 (天地無用!)

バスト82

●アーシア・アルジェント (ハイスクールD×D)

●高坂 桐乃 (俺の妹がこんなに可愛いわけがない)

●小嶺 幸 (グリザイアの果実)

バスト83センチ

●天海 春香 (アイドルマスター)

● 神楽坂明日菜（魔法先生ネギま！）

● ハマーン・カーン（機動戦士Zガンダム）

● ベルダンディー（ああっ女神さまっ）

「ハマーン様とベルダンディー!？」

「うん。もう、なんていうか、十二分に、スタイルいいよね？」

「うん。春閣下も、明日菜ちゃんも、アーシア……というか廻呼も……」

「でね、どうしてこのメンバーの中に、さっちゃんを入れたかというのと、

『小嶺 幸 151cm B82・W56・H83』

なんだよー！」

「お、これまで考察した身長やバストサイズとちょうどいい！」

それだけじゃなく最初の、

『推定スリーサイズ——八神はやて T150 B83 W59 H84』

にも、かなり近いよね！」

「うん。なので、具体的にはやてさんと同じくらいスタイルを比較検討したいと思つたら、さっちゃんの画像検索してもらえればいかと」

「うわ、さっちゃん全然アリだね。」

ちよー可愛い……。

「中の人」的にも二重丸!」

「すずかさんだしね〜」

なのはママとはやてさん両方にとっても関係が深い。

「でもヴィヴィオ、私ちよっと思っただけど……」

「はい?」

「レイジングハート、さっきの身長148センチキャラのバストサイズを表示してもらえる?」

● 来栖加奈子 バスト70

● フランチェスカ・ルツキーニ 不明

※ただし、主要キャラ11人中もつとも小さいことのみ判明。

● インデックス 不明

※しかし、バスト78の御坂美琴より小さいと思われる。

● 川島緑輝 不明

※水着姿の画像で、各自ご判断ください。

「身長が140センチ台で、バスト80センチ以上のキャラって、有名どころでいえば、シユタゲのフェイリスぐらいでしょ？」

「あー、うん、一応他にもいるけど、ママ的にはそこがベストかく。でも、少ないのは確かだよね」

「だからさ、はやてちゃんだって、いつそのこと、

『15歳で全力全開に成長止まった』

みたいなことにすれば、夢の、

『八神はやて 19歳 身長148センチ バスト83』

くらいになって、

スタイル抜群！

合法ロリ巨乳ポジションを、がっちりキープ！

今以上に大人気！

こうなれば『StrikerS』で変身シーンがハブられることもなかったんじゃないかな？と、思うんだけど……どうかな？」

「う……うん」

「いや、はやてちゃん、ちょー惜しい！

絶対に成長しない方が人気出たよね。」

ヴィヴィオは覚えてないかもだけど、『StrikerS』放映当時グッズの1つとして、

『魔法少女リリカルなのはStrikerS ミニミアームクロック』

という時計が発売したことがあったんだけど、わたしやフェイトちゃんや大人姿なのに、はやてちゃんだけが、どーいうわけか『A's』時代の子供姿のイラストを使用していたという……。

スバルとティアナも『StrikerS』の姿。ヴィヴィオに至っては『StrikerS』最終話の制服姿なのに、はやてちゃんだけが昔の子供時代イラスト……。いや、公式もわかってたんだね」

「……………」

わたしはそつと、なのはママの背後の空間に視線を向ける。

あー。

そこには、こつそり入ってきて、なのはママを背後から驚かせようとした格好のまま、『いなかつペ大将』の主人公みたいに、アメリカンクラッカー状の涙を見せて固まるはやてさんの姿があった。

今夜は長くなりそうです……。

実際のところ『なの&フェイ』の身長っていくつくらいなの？

1

「ドーせ、私よりおつきいんやろおお!？」

高町家リビングのソファで、ふてくされた八神司令が横になっている。

そこへ、

「ただいまー」

と、フェイトママが帰宅。ドアを開けて、

「ナニコレええ!？」

はやてさんを見て、流行りの黒いレザーバッグを落としたり。

「……………」

フェイトママからなのはママへ、身振り手振り、無言のままハンドサインで意思疎通

が行われる。

『ナノハ ドウシテコウナツタノ セツメイモトム』

『イヤゝ チョットゼンカイ イロイロアツテ』

——と、まあ、だいたいこんな感じの内容。
でも、

「2人とも、念話でいいんじゃない?」

「ヴィヴィオ、はやてほどの魔導師になると、私たちの念話ぐらいインターセプトできちゃうんだよ」

「え、ホントに!?!」

「だから、余計に耳年増——みたいに言われちゃうんだけどねえ」
「あゝ」

「ぐはああ——っ!?!」

白いソファアールの上で、はやてさんがさらにグツタリする。

そろそろ口から魂が抜けそうだ。

「とうわけで、フェイトママ。」

そつちのソファアールは、はやてさんに占拠されてるので、今日は、なのはママ、わたし、フェイトママの3人で——ちよつと狭いかもだけど——こつちのソファアールに並んで座って考察していこうね」

「あ、うん。了解です……」

フェイトママは着替えるのも忘れ、本局の黒い制服のままソファアールに腰を下ろした。

2

「さて、本日はタイトルにもあるように、なのはママとフェイトママの身長について、調べていきたいと思います」

「わゝ」

ドンドンドンパフー。

左右からパチパチ乾いた拍手が鳴る。

はやてさんはコチラにお尻を向けたままだ。

心なしか脳内では見えない“たぬ尻尾”も元気がない。

「まずは、なのはママから検証するね。」

はやてさんのときと同じように、

『高町なのは 19歳 身長』

で、ネット検索した情報をまとめると——」

『身長・体重のプロファイルは公表されていない』

『設定資料集では、160センチ』

『Nanoha Wikiでは、160センチ』

『設定資料集のキャラ対比表では、158・28センチ』

なのはママがニヤける。

「うーん、見事に情報が錯綜してるねえ……」

「なのは、自分のことでしょ?」

「そうなんだけどね、コレはコレで楽しいかも」

「ぶっちゃけ、結論から言うと、設定資料集から160センチだとわかるので、『Nan o h a W i k i』の情報は正しいです」

「そうなの？」

「うん。ただ、設定資料集にも直接記述があるわけじゃないから、今回は、どうしてなのはママの身長が160センチなのか、理由を説明したいと思います——」

わたしは前回使ってテーブルに置かれたままになっていた、

『魔法少女リリカルなのは StrikerS 設定資料集 SIDE A』
を開いた。

「まずは、ここ、クイント・ナカジマさんの設定資料のページを見て——」

『身長19歳なのはと同じくらいです』

「って書いてあるでしょ？」

「ホントだ」

「うん、書いてあるね」

次に、

『魔法少女リリカルなのは StrikerS 設定資料集 SIDE B』

を開く。

「今度はコレ——メガヌさんがポッドに入ってるよきの設定資料。」

『19歳なのはと同じ身長です（160cm）』
って書いてある。

つまり——」

『メガーヌ Ⅱ 身長160センチ Ⅱ なのは Ⅱ クイント』

「ということがわかるわけ。

だから、設定資料集に、なのはママの身長が160センチと書かれているのは正しい
ことになる」

「おー」

「うん、これはケチのつけようがないね」

「ちなみに、設定資料集以外から160センチと算出する方法がないわけじゃないんだ
けど、ここまで決定的にはならないので、この出し方がベストだと思います」

「んー、じゃあ、最初の、

『設定資料集のキャラ対比表では、158・28センチ』

って——アレは何だったの?」

「アレはね、有志の方が、設定資料集の1ページ目に載っている『キャラ対比表』を、は

やてさんの身長を“150・00センチ”という基準にして、他のキャラ全員の身長を割り出した——という、有名な表なの」

『なのは 身長』で、画像検索すると最初に出てくるので、気になる方は、そちらをご覧ください。

「同じ設定資料集に160センチと明記されていた“主人公”である私の身長を使わずに、明確に公表されていない、はやてちゃんの身長を基準に使うなんて……」

「余程のはやてファンだったんだね」

——ビクッ！

と、横たわるはやてさんの身体が動く。

「そうかも」

「私の身長が間違っている以上、基準にしたはやてちゃんの150センチも間違い。」

つまり、何の役にも立たないの？」

「ううん。むしろ、大いに役立つよ。」

前回は話したと思うけど、対比表は、あくまでキャラ同士の大小を、だいたい目安として描いたイラスト。

だから、細かな差については誤差があつたとしても、AとBどちらの身長が高い——とか、低い——に関しては、正確。わかりやすい。

ほかにも、ほら、ズラリと並んだこの表だと、左右離れているキャラで、同じくらいの身長だと、どっちが高いのか、ひと目じゃわからない。

だけど、はやてさんファンの方が、しつかり測つて、しかも、数値にして記入してくれてるバージョンの対比表は、確かな目安、判断の基準になる。

素晴らしい仕事だと思います。

それにね——」

『160・00 — 158・28 || 1・72センチ』

「これを、正確に数値がわかる……例えば、スバルさんにプラスすると——」

『スバル 151・83 + 1・72 || 153・55』

「スバルさんの身長は154センチだから、だいたい合つてる。

あと、はやてさんの身長だつて——」

『はやて 150・00 + 1・72 || 151・72』

「前回考察した結果は、150と153センチなんだから、これもだいたい合つてる」

「そつか、約2センチをプラスすれば、だいたい正確な身長がわかるつてことだね」

「うん。ただ、そこはアバウトな対比表なので、残念ながらズレるキャラもいるけどね。」

例えば、

シグナムさんは身長167センチ。

リインIIさんは身長30センチぐらい。

と公式に発表されてるけど……」

『シグナム 166・70 + 1・72センチ || 168・42センチ』

『リインII 32・43 + 1・72 || 34・15センチ』

「——と、まあ、こんな感じ。」

それでも、この対比表の価値は、微塵も揺るがないと思います。

先人の、努力の賜物ですね。

とにもかくにも、19歳時の、なのはママの身長は、全力全開で“160センチ”が正しい、でした。」

2

「はあ、いよいよ次は、私の身長かあ……」

「いやいや、フェイトちゃん。自分の身長だよ？」

「なのはだつて、さつきワクワクしてたくせに」

「うん、不思議だよね〜」

「健康診断以外で、実際に身長を測定してもいないのに、設定資料の数値だけで算出されるってのは、ドキドキするよね」

「——というわけで、なのはママ、フェイトママ、それにはやてさん。」

次はいよいよフェイトママの身長ですが、これがまたチョー手強い。無印のフェイトママを説得するくらいチョー手強い」

「あ〜、それはちよつと大変だねえ〜」

「お話ししよーと言いつつドカーンの刑やな？」

「うん、そんな感じー」

「えー」

はやてさんの身体が横向きから、うつ伏せに変わっている。

ちよつとずつ、わたしたちの方を向き始めた。

「じゃ、なのはママのときと同じように、

『フェイト・テストアロッサ 19歳 身長』

で、ネット検索した情報をまとめると——」

『身長・体重のプロフィールは公表されていない』

『設定資料集にはない』

『NanohaWikiにはない』

『167センチ』

『156センチ』

『160センチ前後』

『160 ～ 170センチ』

『161 ～ 166センチ（なのは以上シグナム以下）』

『設定資料集のキャラ対比表では、163・27センチ』

「わたしも一生懸命、目をリオの胸のようにして調べただけど、

『設定資料集にはない』

というのは本当でした。

見つかりませんでしたああ！

『NanohaWikiにはない』

というのも本当です。

やっぱり見つかりませんでしたああ！

「つまり、私のときと違って、公式にわかるような記述はないってこと？」

「うん。フェイトママには一切ありません」

「えー」

「だから、ネットの情報もバラバラなんやな」

「ん、だつたらさ、私のときに試した、キャラ対比表から算出する方法はどうかかな？」
「うん。先人の知恵というか偉業だよね——」

『フェイト 163・27 + 1・72 || 164・99』

「つまり、キャラ対比表なら、165センチぐらいという結果になります」

「お〜」

「ねえ、ねえ、ヴィヴィオ」

「はい、フェイトママ」

「こつちの、」

『161 ~ 166センチ（なのは以上シグナム以下）』

「ってのはどうなの？」

「うん。これも正解だよ。」

なのはママより、フェイトママの方が身長高いのは、キャラ対比表を見なくても知っ

「てるくらい有名な話でしょ？」

「うん」

「それと、シグナムさんの方が、フェイトママより身長高いのも、ご承知の通り。

そして、なのはママとシグナムさんの身長は、都合がいいことに、公式なデータがあるので——」

●なのは 160センチ

越えられない壁

●フェイト 161 ～ 166センチ

越えられない壁

●シグナム 167センチ

「という解が成り立つわけです」

「おう」

「ただし、これではまだ不完全。

何度も言ってる気がするけど、この高町ヴィヴィオ、こんなネットに載ってる情報だけで満足できるほど子供じゃないよおお！」

「ヴィヴィオ……こんなに頼もしく成長して……」

「この成長はいいのかなあ……?」

「私にも子供がおれば」

「はやさんはまず相手がいないとね」

「ふんがつ!?!」

「まずは、

『魔法少女リリカルなのは S t r i k e r S 設定資料集 S I D E A』

をご覧ください——」

わたしは分厚い資料集の真ん中を開く。

「あれ、これって……?」

「そう。フェイトママの義理の母親。リンディ・ハラオウン提督の設定資料です。

まさか、リンディさんのページに、フェイトママの謎を解く手がかりがあるなんて、あの意味、運命的だよな」

「デステイニー、デステイニー♪」

「というわけで、このページの左上を見て——

『フェイト なのは 対比 2人の中頃ぐらい』

って書いてあるでしょ?」

「うん、あるある」

「リンディ母さんって、私となのはの、ちょうど間くらいの身長だったんだ……」
ちなみに、これはハラオウン家の家族写真からもわかる。

「なので——」

●なののは 160センチ

越えられない壁

●リンディ 161 ㄋ 165センチ

越えられない壁

●フェイト 162 ㄋ 166センチ

越えられない壁

●シグナム 167センチ

「——と、いうように、さらにフェイトママの身長を絞りこめるのですっ！」

「来たね、来たね、ヴィヴィオ！」

私の娘なら、さらに高みに飛べるんでしょう？」

「もちろんだよ、なのはママ、まかせて！」

「はやて、はやて、うちの娘スゴいんだけど!」

「あー、私も娘が欲しい!」

ちなみに、この先の計算は、文章だけで読むとわかりにくいかもです。

みなさん、頑張つてついてきてくださいね!

「さて、これまでわかっているフェイトママの身長についての情報をまとめますと――」

①キャラ対比表では、164・99センチ。

※ただし、正確ではない。

②設定資料集の数値から割り出すと、162 ～ 166センチ。

※特定はできない。しかし、公式データを使っているため正確。

「それじゃ、もう一度、

『StrikerS 設定資料集 SIDE A』
を見て――」

開いたのは、スバルさんとギンガさんのバリアジャケット姿を、対比させているページ。

『スバル ローラー装備時 目線の高さなのは(バリアジャケット)とほぼ同じになりま
す』

『ギンガ ローラー装備時 目線の高さフェイト(バリアジャケット)とほぼ同じになり
ます』

「をを?! これって……」

「うん。やつと、公式で、フェイトママと同じくらいの身長の手相が現れました。目線の
高さ——と書いてあるけど、添付してあるイラストだと、身長も同じくらいに描いてあ
るしね」

「何だか出せそうな気がしてきた!」

「単純計算するよ——」

『なの(160) || スバル(154) + マツハキヤリバー(6)』

『フェイト(?) || ギンガ(?) + ブリッツキヤリバー(6)』

「つてことは、ギンガの身長がわかれば、フェイトちゃんの身長もわかるってこと?」

「うん。あくまで単純計算ならね。」

設定資料集はもちろん、『原画集 上下巻』も引つ張り出して調べたけど書いてない。だいたい、あの『Nanoha Wiki』にも載ってないくらいだからねえ……」

「えつと……『Nanoha Wiki』ってそんなにスゴいの？」

「うん。正直、昔のわたしが、ゆりかごを降りちゃうくらいスゴい。

その時点で調べられることは、あらゆる参考資料を使い、ほぼ完璧に調べ上げられている。

もし間違いを探そうと思ったら、古い記事で、推測で書いてある情報ぐらい。

特に、リリカルなのはの人気があつた『StrikerS』までの情報は“神”レベル。

なので、『StrikerS』までの情報で『Nanoha Wiki』に書いてないところがあつたら、それはむしろ、出どころが不確かな、ただのネット上の噂だと思つた方がいいかもです」

「ということは、ギンガの身長は不明ってこと？」

「ううん、そこはほら、どーにかなる」

「あー、出せるんだ〜」

「これくらいはね。高町なのはの娘としてパパッと計算しちゃうよ。

まずは、例の、はやてさんファンの測つたキャラ対比表のお力をお借りして——」

『ギンガ 157・71 + 1・72 || 159・43センチ』

「ほら、このギンガさんの身長。どこかで見覚えがない？」

「えつと……」

「あつ！ なのはの身長に近いかも」

『なのは 158・28 + 1・72 || 160・00センチ』

「本当だ！」

へく、ふつーに公式の対比表で見ると、目測じゃわからないくらい、私とギンガの身長つて近かったんだ……。

これなら、確かに157センチより高いはず」

「そこで、最初に伏せておいたトラップカードオープン！」

「アレやな——」

はやてさんがグルリとコチラを向いて、インターセプト。

ぐはっ!?

わたしの見せ場がっ！

「最初になのはちゃん的身長を出したときから、ずっと引つかかってたんよ——」

『メガーヌ Ⅱ 身長160センチ Ⅱ なのは Ⅱ クイント Ⅱ ？』

「そっか！ ギンガって、クイントさんのクローン培養だから！」

「うん……。特に、ギンガさんって見た目でわかるほどクイントさんにそっくりでしょ？

だったら、なのはママと同じくらいの身長でもおかしくない。

まあ、クローンだからといって、必ずしも同じくらいの身長になるとは限らないけど、実際に、公式の対比表で同じくらいだからね。

これも、間違いないはず」

「ということは、私の身長って——」

フェイトママが慌てて計算する。

『フェイト(166) Ⅱ ギンガ(160) + ブリッツキャリバー(6)』

「166センチってこと!？」

「うーん、それがね、フェイトママには、まだ届かないんだよねえ……」

「うわ、フェイトちゃん、面倒くさー!」

「なのはもはやてもヒドいつ!？」

「2人とも、フェイトママのバリアジャケットの靴の部分、知ってるでしょ?」

「あー、ガッチリしたシルバーの金属製で、やたらとヒールが高い……」

「アレは、かなり背丈が伸びるな」

「そうなの。」

キャラ対比表には、

『注 バリアジャケット時、ヒール、ローラー分高くなるキャラいます』

って書いてあるんだけど、フェイトママの設定資料のページにも、

『バリアジャケット時 ヒール分高くなります』

って書いてある。

つまり本当は——」

『フェイト(?) + バリアジャケット時のヒールの高さ(?) || ギンガ(160)
+ ブリッツキヤリバー(?)』

「なんてこつたい……」

「そうやってくると、もう、全員のヒールやソールを計算に入れなくちゃいけなくなつてきて……」

「せめて、なのはママとおそろいの靴だったら、こんな事態にはならなかったのに……」

「あう。ごめんなさい、ごめんなさい、なのは」

「あく、もう、泣かないの、フェイトちゃん。」

「ヴィヴィオ、どうにかならないの？」

「こればかりはね。時の庭園で、プレシアお婆ちゃんを説得するくらい難しい」

「母さんを説得して……それ、不可能なんじゃ」

「うん。ぶつちやけ、無理。」

「プレシアお婆ちゃんに人生ゲームで勝つくらい難しい」

「それなら、ドーにかなりそーな」

「ヴィヴィオ、出して」

「はい？」

「計算しなさい。でないと、来月の小遣いなし」

「えええ!!」

「高町家は厳しーなー。どーや、ヴィヴィオ、うちの子になるかー？」

「それはそれで面白そうだけど、はやてさんが誘うべきは、まず他にいますよ」

抜剣っ！

「そーいわれるとー」

「というわけで、高町ヴィヴィオ。かなり強引ですが、計算させていただきます！

コレが今回の、勝利の鍵だアア——ツ!!」

① 一般的なヒールの高さは『3センチ、5センチ、7センチ』である。

②

● ヒール3センチ……安定して歩きやすい高さ。

● ヒール5センチ……バランスがよく、ちょうどいい高さ。

● ヒール7センチ……7センチ以上がハイヒール。ファッションシューズのモデルも多く履く。美しく見える。慣れていないと辛い高さ。

③ 一般的な数値に当てはめて、

● なのはバリアジャケット……ヒール3センチ。

● なのはエクシードモード……ヒール5センチ。

● フェイトバリアジャケット……ヒール7センチ。
とする。

④ ヒールの高さ Ⅱ 単純に、身長にプラスではない。

※傾斜角があるため減る。また、ソール（靴底）などで増加する。

※傾斜角の少ないヒール3センチは、そのまま身長プラス3センチ。

※傾斜角の大きいヒール7センチは、トータルで70パーセントほど。身長プラス5センチとする。

⑤ ヒールのない靴。一般的なソール（靴底）の厚さは、2センチぐらいである。

※ヒールと違い、そのまま身長にプラスする。

⑥ インラインスケートのタイヤは、5センチ〜11センチぐらい。なので、マッハキャリバーとブリッツツキキャリバーのローラーも、その範囲内とする。

「うわ、ちよー面倒くさい！」

「フェイトママのたーめならえんやこら〜」

空間ディスプレイに、4人の最終データを表示する。

『なのは(160) + バリアジャケット時のヒールの高さ(3) 〓 163センチ』

〓

『スバル(154) + バリアジャケット時の靴底の厚さ(2) + マツハキャリバーのローラーの高さ(7) 〓 163センチ』

「よって——」

『ギンガ(160) + バリアジャケット時の靴のヒールの高さ(3) + ブリッツキャリバーのローラーの高さ(7) 〓 170センチ』

〓

『フェイト(165) + バリアジャケット時の靴のヒールの高さ(7) ※ただし傾斜角から5センチとして計算する) 〓 170センチ』

「——これでどうだ！ ピツタリだアア！」

「こ………これだけ複雑に計算したのに、結果が対比表と変わらない！」
「うぐうぐ。」

それはあつちが優秀だったということでも。

なのはママ………これでなんとか勘弁してもらえないでしょうか………」

「うん。まあ、フェイトちゃんがあんな靴履いてるのが悪いんだしね」

「あう」

「ついになんだけどね、ママ、これまで誰も注目してこなかったナンバーズのみの対比表も利用すると——」

『クアットロ（160） ※設定資料集に、ほぼなのはと同じと書かれている（） : ウエ

ンディ（165） ※原案イラスト集に165センチ程度と書かれている（）』

「の比率と、キャラ対比表の——」

『なのは（160） : フェイト（？）』

「の比率が、ほぼ一致する。

よって、フェイトママの身長は――

『公式発表のデータからは、162〜166センチである』

しかし、

はやてファンの方の測ったキャラ対比表のデータや、スバル&ギンガさんからの算出。あるいは、ナンバーズからの割り出しなどから、フェイトママの身長は、限りなく165センチに近い。

よって、

『フェイト・テストロッサ・ハラオウン 19歳 身長：165センチくらい』

である！」

「「おう〜」」

パチパチパチ——と、うちのママ2人から拍手が起こる。

「えーなー、フェイトちゃんは……。私より10センチ以上も身長が高い……。」

なののはちゃんは……。まー、ギリギリオツケー。私たちはこれからも友達や！」

「あはは、これからもよろしくねー」

「なんで!?! 私は？ はやてええ!?!」

フェイトママがはやてさんに向かって、テレビのリモコンのボタンを何度もポチポチ押しているのだけど……。

フェイトママ、たぶん、それじゃ、はやてさんは動かない……。

「そんなはやてさんに秘宝伝——じゃなかった、悲報が……」

「またか!?!」

「ほら、今まで調べたのつて、あくまで『Strikers』——19歳時のデータじゃないですか」

「まー、そーやな……」

「ところが、世間には、20歳になっても身長が伸びる人がいるわけで……」

「まさか!?!」

「そう。そのまさかです。」

なののはママに、まさかの、さらに身長伸びている疑惑がああ〜」

カエサルとブルータスみたいな感じだなあ。

立ち上がったはやてさんのおでこに、同じく立ち上がったなのはママとフェイトママの2人が、手を当てて進撃を押し留めている。

子供が腕をグルグルさせる、あの光景だ。

「まあまあ、はやてさんの場合、ちっちゃいやい方がミウラさんも安心すると思いますし。むしろ、ミウラさんがちっちゃすぎて不安になる今日このごろ」

「……あー、まー、そーいうことなら」

チヨロい！

「それに、前回考察した通り、はやてさんはちっちゃいやい部分も魅力的なんですから。はやてさん、世界一かわいいよ！」

「それも、なのはちゃん（中の人）やああ——っ!？」

「そーれ、わたしも大人モード！」

なのはママやフェイトママより高くなる。わたしの大人モードはフェイトママどこ

ろかシグナムさんより高いのだ。

当然、ドドゥンとはやてさんを見下ろす形に。

「ひいっつ!?!」

今晚は、高町家3人で仲良くはやてさんを愛でたいと思います。

マリーさんの秘密

霸王イングヴァルトの記憶継承者であるアインハルトさんは、『クラウスの記憶は、何もかも消えてしまいました』

と言っていたけれど、人によっては再び記憶が蘇ることもあるらしい。

というわけで、本日はアインハルトさんの「定期検診」にご同行して、首都クラナガンにある『先端技術医療センター』にやってきました。

検査してくれる方はご存知、本局第四技術部主任——マリエル・アテンザ技術官。アインハルトさんより濃いエバー・グリーンの髪に、童顔、眼鏡。ついでに白衣。通称「マリーさん」である。

本来は医局の方がやるべき検査なのだけど、記憶継承——というのは特殊で、リインIIさんの中に、初代リインフォースさんの記憶が残っていることを知るマリーさんが、オカルトと片づけず、しっかり検査をしてくれることになった。

ほんと、六課関係者はみんな、幼いころからマリーさんに、お世話になりっぱなしである。

そんなわけで、ガラスで仕切られたモニタールームから、わたしとマリーさんは、検査台に横になったアインハルトさんを眺めている。

「おっつ、アインハルトさんの真っ裸、真っ裸……」

「ヴィヴィオちゃん、そんなにガン見しちゃダメだよ」

「あはは……」

これから先、口にするのは、アインハルトさんの裸でも見てテンションを上げないと、素面ではとても話せない内容なのだ。

わたしは、あくまでアインハルトさんの凹凸の少ないボディを眺める振りをしつつ、

「マリーさん『GOD』——『砕け得ぬ闇事件』については、どれくらい覚えてますか？」

「え？ いきなりだねえ……」

ギアーズに関しては、記憶封鎖がかけられているため、劇場版ではアミタさん&キリエさんが、

『機械 ↓ 人』

に変更されているのだけど……。

「あの事件については、なんとなく……かなあ？」

ちなみに『GOD』のエンディングでは、こんなやり取りがあった——

キリエ「封鎖後は、わたしやお姉ちゃんは、どこか、ええと……管理外世界？ から来た人って事になると思う」

アミタ「ヴィヴィオさん達も、過去の記憶は封鎖してしまう方が良いと思います……この先の未来に影響を及ぼしかねませんし」

ヴィヴィオ「あ、えーと……お願いします」

アインハルト「はい」

トーマ「俺も、2人に同意」

マリー「アミタ達の治療データも、破棄しないとけませんよねえ」

クロノ「まあ、仕方ない。持っけていてもどうせロストログア扱いさ。書類作業の手間が増えるだけだ」

マリー「ですよね……じゃあやつぱり、おとなしく破棄して、記憶封鎖を受けます」

わたしはチラリと技官を見つめた。

「——マリーさん、あのあと、本当に治療データを破棄しましたか？」

「え？」

「ギアーズの治療データ。未来の技術。何かに流用したりしませんでしたか？」

「ええええ!! 破棄した、破棄したって! どうして急にそんなこと」

焦りつつも、コンソールの操作は正確だ。

『StrikerS』の話なんですけど……マリーさん、ここでスバルさんやギンガさんの定期検診を行っていましたよね？」

「あー、あつたね、そんなこと」

「さらに23話の回想シーンでは、クイントさん立ち会いのもと、今のアインハルトさんみたいに、全裸のスバルさん（4歳）とギンガさん（6歳）を、検査しましたよね？」

「うん。してたけど？」

「それ以降、マリーさんはずっとスバルさん、ギンガさんの定期検診を担当していました。

つまり——」

●新暦64年（マリー 15歳）

- ・スバル（4）&ギンガ（6）の検査を通じて、クイント・ナカジマと懇意になる。
- ・クイントのデバイス——リボルバーナックルに使われていたカートリッジシステムを知る？

●新暦65年（マリー 16歳）

『A's』にて、レイジングハートとバルディッシュに、近代ベルカ式魔法の研究用

に開発されていたカートリッジシステムを組みこむ。

・安全性を高めるため、個人的に所有していたクイントの運用データが使われたのではないか？

●新暦66年（マリー 17歳）

『GOD』にて、マリーさんが、機械の体をもつアマタさんをあつさり修復できた理由の1つ——戦闘機人の検査・治療データを持っていたから？

・ギアーズの治療データを破棄した？

・クイント殉職。

●新暦71年（マリー 21歳）

・空港火災。クイントから受け継がれたカートリッジシステムのおかげもあり、エースに成長した高町なのは、クイントの娘——スバル（11）を救出する。

●新暦75年（マリー 26歳）

・戦闘機人研究の第一人者と呼ばれるようになる。

・スカリエツティの残した技術を研究する役目を受ける。

「——こうして考えると、なのはママとスバルさんは、昔からご縁があつたんだなって。クイントさんは、亡くなったあとも、自分の子供たちを守ったんじゃないかって……」

「私も、そういうオカルトなら、信じてもいいかなあ」

「ただ……マリーさん。色々と、万能すぎじゃないでしょうか？」

困ったときはマリーさん——みたいなところもあるんですが、宇宙戦艦ヤマトの真田さんもビックリですよ？」

「こんなこともあろうかと。」

「えーつと、それって褒められてるのかな？ それとも貶されてる？」

「前々から思っていたんですが、マリーさん、六課襲撃時はどこにいたんですか？ あとでピンピンして出てきましたよね?」

「いやいや、ヴィヴィオちゃんもあのとき一緒にいたでしょ。私、なのはちゃんやスバルたち先発隊と一緒にへりに乗って——」

「みんなは『公開意見陳述会』の警備のためでしたけど、マリーさん、

『私は別件。中央方面に用事があつてね』

つて……。

あの注目だった公開意見陳述会と同じ日に、同じ中央での別件……」

「いやいや。私、基本、本局だから。別に六課専属ってわけじゃないし……」

「そもそも、本局と地上つて仲が悪いじゃないですか。なのに、スバルさんとギンガさんの検査を、本局のマリーさんが受け持つのは……おかしくないですか?」

「それは……ほら、戦闘機人とはいえ、スバルもギンガも幼い女の子だったでしょ？ 当時、わたしもまだ管理局に入ったばかりの15歳だったから、なるべく年齢が近い女性の技術官——という配慮で選ばれたんじゃないかなって……」

「ひよつとしてマリーさん、タイプゼロの情報、スカリエッツィに流してたとか……？」
「してないよ!？」

確かに、2人のデータは取ってたから、最高評議会やレジアス中将経由で、スカリエッツィの手に渡っていた可能性はあるけど……」

「前に、『Force』のラスボス——ハーデイス・ヴァンディングが、スカリエッツィのクローンじゃないか？」

という考察をしたことがあったんですが……」

「ま、まさか、ヴィヴィオちゃん……私まで疑ってるのおお!？」

「そのとき、ハーデイスさんの年齢を、30〜35歳くらいって推測したんですが、マリーさんも『Force』だと、ほぼ同年——31歳ですよね？」

「いやいやいや……」

「ちなみに、スカリエッツィの生命操作技術が、戦闘機人を通じて表舞台に現れたのが

『StrikerS』の25年前。

『Force』なら——30年前。

つまり、マリーさんやハーさんが生まれた前後から、スカリエツティの動きが活発化しているんですよ！」

「え、そんなこと言われても」

「別に、ハーさんやマリーさんが、スカリエツティのクローンだとは言いません。

ただ、スカさんを生み出した最高評議会辺りが、万が一スカリエツティを失った、反乱を起こしたときのために、代わりを用意しておいた——と考えても何ら不思議ではありません。

実際『StrikerS』では、スカリエツティがゆりかごを起動したあとも、

『ジエイルは貴重な個体だ。消去するにはまだ惜しい』

と、最高評議会が、いつでもスカリエツティを始末できることを示唆しています。

だからこそ、スカリエツティは先手を打って生命ポッドを破壊したのでしょうか……。

ただ、最高評議会も、スカリエツティの性格が偏っていた、扱いづらいことは知っていた。だからこそ、彼の予備を造ろうと考えたとき、そのままクローンを生み出すことはせず、あくまでスカリエツティの天才的な遺伝子データを使った、デザイナーベイビーを造ったとしたら、どうでしょう？」

「ないから！　ないからああ!？」

「スーパーコーディネーター、マリエル・アテンザ……」

「私パイロット適性ないよおお!？」

「——と、まあ、冗談はさておき」

「あ、なんだ、冗談だったんだあ……」

その声音は動揺しているものの、アインハルトさんの検査を続ける手は、平然と動き続けている。

「ね、マリーさん、知ってますか？」

ネットで、スカリエツティについて書かれた説明文や、SSを読むと、ほとんどの作品で『科学者』として扱われていますが、公式の、

『魔法少女リリカルなのはStrikerS クロニクル』
では、

『違法技術者』

また、

『StrikerS サウンドステージX』

では、

『天才技術者』

と、記載されています。

そもそも、16話でスカリエツティ本人が、

『研究者として、技術者として、心が沸き立つじやないか。そうだろ、ウーノ？』
って言ってるんです。

——そう。スカリエツティは科学者ではなく、マリーさんと同じ “技術者” だったんですよおお！」

「え、え〜」

「だからこそ、『StrikerS』のあと、スカリエツティの残した技術を研究する役目を受けたんですよね？」

「あー、うん……」

「ほら、眼鏡を外して、目を細めてください……」

わたしはマリーさんに近づくと、彼女の眼鏡をそつと外した。

「えつと……」

「——そう、その顔。まるで、スカリエツティの因子を色濃く受け継いだクアットロが、眼鏡を外して本性を表したときのよう……」

「あう……眼鏡、眼鏡……」

「いえ、ソーという古典的ギャグは別にいいんで」

「でもね、ヴィヴィオちゃん。見た目がクアットロに似てるっていうなら、私より、眼鏡を外して悪巧みしてるときのシャーリーの方が似てない？」

あー。

「……確かに」

言われてみると、シャーリーさんの方が、クアットロと身長も近いし、性格やら、才能面でも似てるような気がする。

「——つて、いやいやいや、わたしは騙されませんよっ!？」

『StrikerS 19話』で、スカリエッティとウーノがこんな会話を交わしています。

ウーノ（通信）「失敗が目立つ人造魔導師と比較して、私たち戦闘機人はトラブルが少ないですね」

スカリエッティ「もとは最高評議会の主導で、管理局が実用寸前まではこぎつけていた技術だからねエ……それを私がずいぶんと時間をかけて改良したんだ」

ウーノ（通信）「良質なはずです」

——そう。ナンバーズは、旧式のタイプゼロと違い、あのロストロギア級のオーバーテックノロジーマをもつスカリエツティが、

『ずいぶんと時間をかけて改良した』

と断言するほど、遙かに高い性能を誇っていたはずなんです。

ところがどっこい、旧式のスバルさんは、そんな高性能なナンバーズを単騎で圧倒します。

もちろん、厳しい訓練の成果や、デバイスの頑張り、対戦闘機人に有効なIS——振動破碎もありましたが、それにしただって、あのスカリエツティが改良した最新の戦闘機人が、旧式の戦闘機人に負けるはずがない。

いくらタイプゼロが、成長する戦闘機人であったとしても、一般的な人間同様、旧式のままでは性能に限界がある。

ガンダムで例えるなら、ゲルググとリゲルググくらい違いがある！」

「それ、わかりにくいかと……」

「じゃ、ザクとザクⅢ」

「いや、それも……」

「しよがないですね。いくら初代ガンダムが優秀なMSでも、ZやZZを圧倒できるかという、流石にうらんとするじゃないですか？」

「それは、まあ……」

「つまりです。」

『GOD』で、マリーさんがアマタさんを修理できたということは、ギアーズの機械の体は、全てがロストロギア扱いというわけではなく、現行技術で十分に対応可能な箇所も多かったということです。

つまり、全ての治療データを破棄する必要はなかった」

「えつと……」

「記憶封鎖を受けたところで、現行技術の延長線上ですから、自分で思いついた——と錯覚してもおかしくない。」

ギアーズは未来の技術ですから、実際、遅かれ早かれ、マリーさんが到達していた技術ではあったのでしょうか。

そして、スバルさんとギンガさんを、ギアーズの治療データをもとに改良した。

もちろん、悪意などではなく、

『2人があまり定期検診を受けなくていいように』

とか、

『2人がより普通の女の子として暮らせるように』

など、クイントさんが望んでいたような善意の方向での改良でしょう。

ところが、未来の技術をもとに改良した結果、旧式のタイプゼロは、最新のナンバーズに匹敵する性能を得ていた。

そこに「成長する」というタイプゼロの特性が加わったとしたら……?」

「ナンバーズにも勝てる?」

「はい。」

世間でどこまで評価されているのかわかりませんが、スカリエツティが魔改造したギンガさんをおつさり直したことから、マリーさん自身が、スカリエツティと同等、あるいはそれ以上の天才技術者に成長していたと考えるべきで——」

「いやあく、天才だなんて」

顔を赤く染めたマリーさんが「えへへ」と照れまくっている。

——めちやくちやうれしそうだ!

あまりにご機嫌なので、わたしが「うくん」と悩んでいると、

「どうなさいましたか、ヴィヴィオさん?」

いつの間にか検査を終え、いつもの制服を着た——しまった、着替えシーンを見逃した! ——アインハルトさんが、ドアを開けてモニタールームに戻ってきた。

「あー、いえ……」

わたしは、未だにヘラヘラしているマリーさんの顔を眺めつつ、

「コレはコレでアリかなって」

仮に、マリーさんが本当にデザイナーベイビーのような存在だったとしても、

「出生なんて言い出したら、わたしもですしねー」

「はあ……?」

アインハルトさんが可愛らしく小首を傾げた。

【この世界が『Force』だとわたしだけが知っている】
編

第1話 はじまりはサラちゃんになの

『第1話』つてところがすでに怪しいなあ……と思いつつ、本日は昨年——2018年12月15日に発売された『HGBD モビルドールサラ』——アニメ『ガンダムビルドダイバーズ』のヒロイン・サラちゃんのガンプラを作るため、マイスターのプレシアお婆ちゃんちへ。

「毎回言っていると思うのだけど、ゴーレムマイスターではあってもガンプラマイスターではないのよ?」

「それってアレでしょ。エロマンガ先生が『そんな名前の人知らないっ!』つて言うのと同じフリ」

「違うわよ!? だいたい、どうしてうちで作るのよ。あなたのお友達のコロナつて子のうちで作ればいいじゃない」

「だって、コロナとガンプラバトルで対戦するのに、そのコロナと一緒に作ったら手の内

を明かすようでマズいでしょ？ ストライクアーツだって同門対決のときは別々に練習するし——」

『アインハルトさんVSコロナ』戦みたいなものだ。

「……それは、まあ、そうね。でも対戦するのにモビルドールサラって、そのチョイスは
いかななものかしら？」

……。

そう言われると、かわいいは正義だけで選んじやったけど、戦闘には向かない気がする……というかしてきた。

せめて、最近発売したばかりの対魔忍……じゃなかったアヤメさんなら、少しは戦えたかもしれないけど。

「サラと同時期に発売された商品で言えば、ビルドダイバーズのチャンピオン（クジヨウ・キョウヤ）が使っていた最終戦仕様の白い『ガンダムAGEEIイマグナムSVVer.』があつたじゃない。価格帯も同じくらいだったでしょ？」

確かに、正直、アレはちよつとカツコイイなと思つていた。

アニメでも超強かつたし……。

「それはー、そうなんだけどお……」

わたしの目が泳ぐ。

すると、わたしの隣で興味深そうにガンブラの取扱説明書を眺めていたアリシアさんが「でもママー」と声を発した。

「このサラつて女の子のボディ、説明書の解説によると、

腕部……見た目は華奢だがコーイチ渾身の設計によって、ユニコーンガンダムのビームマガナムを軽々と連射できる程。

スカート……噂では、▽ガンダムが使用したあの月光蝶が使えるらしい。

みたいなことになってるけど？」

「何よそれ、最終兵器？」

お盆に、お茶の入った湯のみ2つと、オレンジジュースの入ったグラスを2つ載せて運んできたリニスさんが、飲み物を配りながら言う。

「その白いスカート部分、キュベレイっぽいですし、ファンネルもしこめそうですしね。見た目こそ愛らしいですが、

『ぼくのかんがえたさいきょうのモビルスーツ』

みたいなノリだったのかもしれないね」

やるな、あの眼鏡！（コーイチ氏）

このモビルドールサラという機体は、アニメ作中において、コーイチという眼鏡がフルスクラッチしたガンブラなのだ。

つまり、彼の趣味が120パーセント反映されたガンプラだとも言えよう。

おっと、ちなみに言い忘れていましたが、現在室内中央にはこたつ。ええ、かつてフェイトママ（無印のころ）が、プレシアお婆ちゃんのために購入したという日本製のこたつが置かれており、その四方から、

① 白衣——に見せかけた白いでてらを着こんだプレシアお婆ちゃん。

② 猫はこたつで——らしく、やつぱりふわもこなどてらを着こんだリニスさん（どことなくウマ娘のスペシャルウィークっぽく見えるのは気のせいか）。

③ 子供——ではないけど、風の子なのか、復活後は薄着でも元気なアリシアさん（まあ、魔力量が少ないだけで、身体はフェイトママと同スペック……どころかオリジナル。そりゃ元気だよね）。

④ 最後に、コートを脱いで普通に部屋着のわたし。

が、それぞれこたつに足を突っこんでいる状況。

こたつの中にはリニス2世がいるはずなのだけど、姿は見えない。というか出てくる気配が微塵も感じられない。

そのこたつの上には恒例のみかん——と思いきや、どこから仕入れてきたのか大玉なのに手でむける「はるみみかん」——略してはみちゃん（異議あり！）と、サラちゃん
の箱が置かれている。

「パッケージのイラストはかわいいけど、中身はちゃんとプラモデルしてるんだね」
アリシアさんの言う通り、パーツ数は意外に多い。

もつと簡単にパチ組みして「はい完成！」みたいな商品かと思っていた。

ニツパー片手に組み立て開始。

「……つて、いきなり最初のボディ部分。アインハルトさんみたいに薄い胸の辺りが、上手くはまらないっ!」

早速、金属ヤスリのお世話になる。

そのまま下半身へ。

紫の単色。

「むう、お尻の形にはこだわってるのに、パンツにこだわらないなんて、コイイチ氏にはガツカリだよっ!」

「それをコイイチ氏に求めるのはー」

「わたしやアインハルトさん他——ViViD勢は、いつ見られてもいいように、常にこだわりを持つてのぞんでいるというのにつ!」

「それ、あなたたち……というより、藤真先生のこだわりなんじゃ……。」

「というか、そもそもサラつて子、常に紫色のタイツを履いてるから、下半身もシンプルな作りになってるんじゃない?」

「……あー」

そういえばそうだった！

アニメ終了から結構経っているの、すっかり忘れていました。

とはいえ、

「お尻から太股のむっちりしたラインには、コーイチ氏渾身のこだわりが感じられるでござる」

「ヴィヴィオ……あなた、いつからござるキャラになったのよ。というか、そのこだわりはどうかしら？」

とかなんとか言っている間に、フィギュアの肝ともいべき頭部——顔部分の制作へ。

とはいっても、細かく自分で色を塗るのでなければ、目の部分に付属のシールを貼るだけなので、これといって難しいことはない。

「このシール、目ぼっかりだね」

はい、とアリシアさんが手渡してくれたステッカーは……怖っ！

三種類。予備を含めた『6つ×両目＝12個の瞳』が並んでいる。

「こんなガンプラ初めてかも……」

どこことなく懐かしのメダロットを彷彿とさせる頭部の組み立てを終え、手足パーツに

突入すると、

「なんだろう……ガンプラの手足を作ってる感じがしない……?」

正しい表現かはわからないけど、義手や義足を組み立てている感じ。

「ガツチリしたモビルスーツではなく、サラ——細い人形の手足だからでしょうね」

「あー、そつかく。なんというか、こんなサラちゃんをフルスクラッチしたコーイチ氏、

天才すぎる!」

「でもさー、ヴィヴィオ。コーイチって人、これ、どうやって作ったのかな?」

「コツコツ、家で自作したか、アニメ中に登場したAGEシステムみたいなのを使ったんだと思うけど」

「そういうことじゃなくてさ……サイズ? 仮想電子空間内のみ存在していたサラが、リアルでも違和感がないということは、現実の肉体——ガンプラで作られた身体の、背丈なんかのボディサイズがびつたりだったってことでしょ?」

「あー」

データとしての存在ではあったけれど、そのデータに身長・体重といった情報は含まれていないだろう。電子の妖精みたいな存在だったからだ。

であれば、サラの現実で宿る身体を作るため、いつか、どこかで——GBN内で——採寸したはず。

それも細かく。

「コイチって人が、

『はあ……はあ……サラちゃん……モビルドールを作るためにも、身体のあるところやこんなところまで、詳しくサイズを測らせてよおお!』

みたいなの？」

「やめてエエ!? コイチ氏にHENTAI紳士の称号を与えないでエエ!!

確かに、モビルドールサラちゃんが完成した今、スリットの位置がアレだから、角度をズラすとすぐにスカートの内側が『みえ』になるなー、とか。コイチ氏、やりおつたなお主、とか思ってたけど、やめたげてエエ!」

「薄い本が劇的に厚くなるわね」

「あの一、みなさん、普通にモモさんやアヤメさん、ナミさん（中の人はこそつとミウラさんと一緒）が測っただけなんじゃ……」

くつ……。

リニスさん。なんて正論を……。

流石はテストロッサ家の良心だけある。

「そこはほら一、やっぱり一悶着あつた方がOVAとかになりやすいといおうか……サービスシーン?」

「ふう……今度、フェイトと子供の教育についてお話ししないといけないようですね」
「やめてー」

「リニス、その辺でやめに——」

「あら、もとはといえればプレシアがフェイトを——」

お婆ちゃんがパンパン手を叩く。

話題を方向転換。

「ほらヴィヴィオ、さっさとサラを完成させるわよ！」

「イエス、ママ！」

無敵のプレシアお婆ちゃんも、リニスさんだけには勝てないのだ。

とりあえず、『HGBD モビルドールサラ』を作ってみて思ったことは、

『一部のパーツは、ダイバースナミと共通なんだなあ』

とか、

『首のパーツは衣装と同じホワイトでなく、顔と同じ肌の色が良かったなあ』

とか、

『台座が付属してるけど、使い勝手がイマイチなので、本気で飾るならアクションベースを購入した方がいいなあ……いや、いつそのこと価格が上がってもいいから、サラちゃん専用のかわいいオリジナル台座をつけてくれてもよかったのになあ』

とか、

『ガンプラというか、出来上がりがフィグマっぽいなあ』

とか、

『MS状態にしなければパーツ数も減るのですぐに完成するなあ……』と思つたら、サラちゃんへの思い入れ次第では、丁寧につけてしまい、組み立てるだけでも、意外と時間がかかるなあ』

などなど……。

「まあ、たまにはこういうガンプラもいいよね！」

そう、わたしが結論づけたところで、説明書を眺めていたアリシアさんが言う。

「見て見てヴィヴィオ。サラの現実世界での身長は151・4ミリだつて。リンみたいだよね」

「あー、言われてみると」

ビルドダイバーズの最終回を思い出す。ちよつとサイズは小さいけれど、確かに妖精さんというか、リンさんみたいな感じだ。髪はスカイブルー。服装はバリアジャケットと同じホワイトと、色合いもよく似ているし。

リニスさんがお茶をすすす。

「GBN——ゲーム内でのサラさんの身長は151・4センチなのかもしれませぬね。」

わかりやすいように、ちょうどその100分の1サイズで、151・4ミリになったとか」

「なるほど。サラちゃんの本当の身長は151・4センチかあ……151・4センチ……151・4センチいい!？」

ああ……はやてさん……。

GBN内で、はやてさん（大人）とサラちゃんが並んだら、だいたい同じ身長なのかと想像すると、

「ヴィヴィオ、どうして泣いてるのよ？」

「いえ、ちよつと……あれ……うん、おかしいな……涙が、止まらないよ……」

はやてさんに幸あれ！

と、まあ、それは置いといて、

「忘れるところだった——」

わたしは鞆から、もう1つのガンプラを取り出す。

「なにそれ？」

「プトレマイオスアームズっていうんだけど……」

『HGB C 1/144 プトレマイオスアームズ』は、『機動戦士ガンダム00』に登場する母艦トレミーの形をしたカスタムパーツ。

いわゆるガンプラの追加武装だ。

「わたしがサラちゃんを作るって言ったら、コロナが、

『これ以上積みプラが増えるのもアレだから、ヴィヴィオ、よかったら使ってみて』

ってくれたの」

「へえ、アルカンシエルとか撃てそうなほどでつかいキャノン砲になったり、両手に装着するガントレットみたいな爪になる……って、あー、なるほどねえ、これ、本体が水色っぽいカラーリングだから、サラの髪色に近いんだ」

「うん。最初は、ねこぶそう用に買ったみたいなんだけど、サラちゃんに使えそうだからって」

色を塗る必要がなく、無改造でも手に持たせることができる。

特にGNクローは、ビームマグナムを軽々と連射できるサラちゃんのパワーなら、強力な武器になること間違いなしだ。

「確かに、ヴィヴィオがストライクアーツのスタイルで接近戦を挑むなら、有効な追加武装かもしれないわね」

「そういえば、敵に塩を送る——という地球の故事がありましたね」

ちなみに、この場合『甲斐のウサギ、越後のゴライアス』みたいな感じになるの……かなあ？ ゴライアスの方が武田信玄っぽいんだけど。

「プトレマイオスアームズの箱を手にとったアリシアさんが、おねだりの口調になる。「ヴィヴィオー、私もガンプラ作ってみたい」」

「え？ あーもちろんオツケーですよ。パツケージも小さいから、初心者にも——まあ、わたしも初心者なんだけど——ちょうどいいと思うし」

ニッパで枠から切る必要はあるけれど、あとはパーツをパチツとはめこむだけ。

接着剤を必要としない今のガンプラの組み立ては、どこか、ジクソーパズルを組み上げる感覚に似ている。

気軽に楽しめるものから、パーツ数の多いものまで、ピース数で難易度の上がる点もよく似ているのではないだろうか。

そういえば、ピカチユウの立体クリスタルパズルを組み立てたことがあったけど……うん、やっぱりガンプラとパズルは似てるかもだ。

アリシアさんがパカッと蓋を開けると、

「うわ、小さい箱の中にパーツがぎっしり詰まってるんだけどおお!」

「ホントだ……」

予想外。ギユウギユウだ。普通はもう少し箱に余裕があるものだけど。

「このプトレマイオスアームズって、希望小売価格は税込で972円ね。普通にHGダブルオーやバルバトスが買えそうな金額じゃない」

「どうりで……」

パーツが詰まっているはずだ。

「これ、一度開けたら、もう蓋がきつちり閉まらないんだけどおお!」

バンダイさん、箱のサイズ一回り大きくした方がよかったんじやく。

「リニスく、一緒に作って〜」

「そうですね。私も武器制作には一家言もっていますから」

リニスさんの目が、獲物を狙うにやんこのように煌めいた。

フェイトママのバルディッシュも、こだわって作ったんだろうなあ。

わたしはそんな2人を横目に、完成したサラちゃんを眺める。

下からスカートの中をのぞきこみつつ、

「ねえ、お婆ちゃん。これ——サラちゃんを動かせないかな。リインさんほどじゃなく

ても、なんか、ここう、自律行動みたいなの……」

「あら、できるわよ?」

「ホントに!?!」

「ええ。あなたのクリスマスだって、外装はうさぎだけど、中身は普通のクリスタルタイプの

デバイスでしょ」

「あー」

そうでした。

いつももうさぎの姿なので、最近ではもう、すっかり忘れかかっていた。正式名称の『セイクリッド・ハート』もご無沙汰だ。

「つまり、サラちゃんを外装に見立てて、中身にデバイスを組みこめばいいってこと？」
「ええ」

「じゃあ、試しにクリスを外してくつつけてみれば……」

AIがクリスなので、動きはクリスみたいになるかもだけど、フワフワ飛んだりできるといふことだ。

「わざわざクリスから外さなくても、デバイスの1つや2つうちに余っているわよ。そうね……インテリジェントデバイスではなく、ストレージ型にして、逆に術者が自由に操れるようにすれば、ガンプラバトルの特訓にもなるんじゃないかしら」

特訓！

わたしの大好きな言葉の1つ。

オラ、わくわくしてきたぞ！

「さっすが大魔導師プレシア・テストアロツサ！」

「フッフッフ、おだてても何も出ないわよ。そうね、リニス。ちようどいいから、例のデバイスを試してみましようか？」

「例の?」

「5-01 (ごまるいち) 型よ」

なんだか、コロナの中の人々が反応しそうな名称だ。パンツじゃないから。

「ああ、つて、いいんですかプレシア。あれ、失敗作ですよ?」

「失敗作う!?!」

「あら失礼ね。失敗ではなく実験機よ。試作型とかプロトタイプとか、ヴィヴィオ、あなたそういうの好きでしょ?」

「そ、それは心惹かれるお言葉かも……」

「しかも、単純に失敗というわけではなく、魔力出力が大きすぎて、私やリニス、アリシアでは扱い切れなかった、いわくつきのデバイスなのよ。

そうね……ガンダムMk-III 試作0号機や、プロトタイプダンバイン——サーバインみたいなものかしら」

「きたこれええ!!」

「ヴィヴィオ、それ、絶対ママにだまされてるって」

「ですええ」

アリシアさんとリニスさんが、がつくりと肩を落とした。

「まったく人聞きの悪い。リニス、あなた、5-01型に使った『高エネルギー結晶体』」

のことは覚えている？」

「それはもちろん……って、あ、そうでした、そうでした。そういうことですか……。はいはいわかりましたよ、プレシア。あなたの言いたいことが。5—01型デバイス、すぐに用意しますね——」

「？」

ただの失敗作ではなかったということだろうか？

「お待たせしました」

しばらく席を外したりニスさんが、研究室から持ってきたのは小さな宝石。レイジングハートやバルディッシュと同じクリスタルタイプのデバイスで、形は実験機だけあってシンプルなキューブ状。例えるなら、半透明のサイコロっぽい。

インペリアルトパーズのように、赤みを帯びた黄色をしている。

「インペリアル……まさに皇帝……いや、このわたし高町ヴィヴィオにこそ相応しい、聖王カラーだね！」

「ええ」

なぜかツツコミが入らない。

「5—01型デバイスには、レリックやジュエルシードと同じ、高エネルギー結晶体を使っているのよ」

「へえ〜」

そっから、レリックやジュエルシードかあ……って、

「どーして、そんな物騒なものをおお!? とうか、お婆ちゃん、どこからそんなもの仕入れてきたのおお!?!」

「はあ……。ヴィヴィオ、ここがどこだと思ってるの?」

アリシアさんを蘇らせるために到達した、次元の狭間。アルハザードの一端。

「まさか……」

「あれほどのエネルギーを持つレリックやジュエルシードといった結晶体が、自然界に存在する鉱物や宝石のほががない。だったらどこで、どうやって生み出されたのか、あなたならわかるでしょ?」

ああ、そこにたどり着いた者は、ありとあらゆる望みが叶うとされた伝説の理想郷――

「すごいぞ! ラピユタは本当にあつたんだああ!」

「ヴィヴィオ、あなたそれ、言いたいだけでしょ」

「えへへ」

まあ、例によつて、いつものように、アルハザード由来ということだ。

「でも、なんでそんな無茶なデバイス作っちゃったの？」

確かに強力だとは思うけど、自転車にジェットエンジン乗つけちゃうみたいなのだ。

「5-01型は、第五世代デバイスの実験機なのよ」

「第五世代デバイス……って『魔法戦記リリカルなのはForce』に登場する、バルディッシュが実験機になつてフェイトママが試験運用してるアレ？」

「そう、アレよ」

一応、この小説の時間軸では約1年後の世界。

この小説でも、フェイトママを怒らせたときに、時々登場するけど、だいたいマジックブレードとサンダーブレイクだからなあ……。

「でも、第五世代デバイスって『Force』の時代でも未完成だよ。結局、ストライクカノンとか、カレドヴルフ社のAEC装備が採用されてたし」

AEC装備。つまり、エクリプス感染者に対抗する。アンチエクリプス装備という意味だろう。

「だからこそじゃない。管理局がいまだ魔力無効化に対して有効な手を打てないうちに、AEC装備とかいう代替品ではなく、完璧な第五世代デバイスを作り出して、管理局をあざ笑ってやるのよ」

「うわあ……」

「ママ、負けず嫌いだからね」

「なんだか、圧倒的性能差があった、ダブルオー・ファーストシーズンのガンダムみたいな」

「ヴィヴィオ、あなた、第五世代デバイスがどんなものか知っている？」

「来るべき対話のために」

「そんなガンダム造らないわよ!」

劇場版ダブルオーの第五世代ガンダム（クアンタとか）は置いといて、

「えっと『魔法戦記リリカルなのはForce NEXT』によると、

『術者の魔力を機体内に蓄積・変換して活動するシステム』

『魔力無効状況でも魔力を魔法として使用できる』

『魔力有効状況下においてはさらなる強化を得る』

だっけ」

「そうね。だったら、今度は第五世代の欠点はわかるかしら？」

「うん。

『電気や炎といった変換資質がある人か、魔力コントロールが上手い術者でないと、稼働出力が安定しない』

『ついでに、現状ではエネルギーが多すぎて、長時間運用が難しい』
だったよね。

だから、戦技教導隊ではなく、電気変換資質があつて魔力コントロールも上手い、フェイトママが試験運用してるんでしょ？」

「その通り。」

まあ、私の方がフェイトより上手く扱えるんだけど」

「うわ……」

アムロ・レイみたいな台詞を。

「出力が安定しない。エネルギーが大きすぎる。」

だったら、もつとも単純かつ簡単な改善方法として、デバイス自体に、高エネルギー結晶を使用すれば、エネルギーロスも気にならないほどの出力と、長時間運用が可能になる——ということよ」

「えー、それってただのゴリ押しというか、力押しなんじゃ……」

「だまらっしゃい。ただの実験機なんだからこれでいいのよ」

「でもでも、レリックやジュエルシードみたいな結晶なんて数が限られてるし、というか、デバイスの動力に高エネルギー結晶体を使うってことでしょ。」

「そんなこと本当にできるの？ 危なくないかな？」

無印や劇場版で、子供のころのフェイトママが暴走しかけたジュエルシードを胸に抱き「生まれ……生まれっ！」ってやっているシーンを覚えている人も多いと思う。

「あなた、私の専門をなんだと思ってるの？」

「……クローン？」

「違うでしょ。エネルギーよ、エネルギー。魔導エネルギー工学。ヒュドラとかいうあんなヘツポコに関わったせいでごんなことになったけど、魔力駆動のシステムは私の得意分野なんだから」

「そうでした！」

「それに、高エネルギー結晶体を動力に使うのは、すでに確立されている技術なのよ。表向きには知られていないけど。前にスカリエツティが、ジュエルシードをガジェットI-I型の動力にしたことがあったでしょ」

「あー、そういえば……」

アニメ『StrikerS』の5話だ。

「あれは内燃機関だったけど、燃料電池のようなタイプにして、結晶の力を魔力近似の工

ネルギーに直接変換すれば、どれだけロスが多かろうと問題ない。魔導師は、魔力無効状況でも普段と変わらない。パフォーマンスが発揮できる——ということなのよ」

「（よくわからないけど）な、なるほど」

「まあ、理論上ですけどね」

と、リニスさん。

「ああ」

だから、失敗作だったんだなあ。

「確かに、今度は出力が大きすぎて余計に安定しなくなったけど、そこは現状の第五世代が変換資質を持つ人オンリーと同じ。エネルギー結晶をコントロール可能な資質を持つ人が使えば、この5—01型デバイスも安定する——ということよ」

「なるほど」

「そこでヴィヴィオ、あなたの出番というわけね」

「なるほど……って、わたしいい!？」

「そう。聖王オリヴィエのクローンのあなたなら『レリックⅡ聖王核』に近い結晶体を使ったこのデバイスの性能を引き出せる。」

いえ、インペリアルトパーズカラーの5—01型デバイスは、聖王の血を引くヴィ

「ヴィオ——あなたにしか操れない、あなた専用の、ワンオフモデルのデバイスだったのよおっ！」

「ま、マジでえ……」

「ヴィヴィオ、だからまたママにだまされてるって」

「ワンオフというより、ただの実験機ですからねえ……」

「2人とも静かになさい！ あと少しなんだから！」

騙されてる感が半端ないけど……。

ワンオフ……専用機……ああ、なんて心躍る言葉なんだろう。

「5—01型……いずれ歴史の闇に葬られ、存在したこと自体を抹消されてしまうデバイス……」

それ、なんてGPシリーズ！

「ふっふっふ、お婆ちゃん、わたしに任せてええ！」

「流石このわたしの孫ねっ！」

「ヴィヴィオ、やめた方がいいって」

「そうですね。自分で用意しておいてなんですが、やっぱりやめた方がいいかと」

「アリシア……リニス……」。

魔導技術の発展のためには、多少の犠牲はつきものなのよ！」

「ママーっ!？」

「そうだよ！ ガンダムだっていわば実験機みたいなものでしょ！ トールギスだって

そうだし！」

「ヴィヴィオまでっ!？」

「そうよ、ヴィヴィオ！ サーバインを思い出しなさい！」

はっ!？」

「サーバイン……試作機で、さらに、前半主役機ダンバインのプロトタイプなのに、その性能は後半主役機のビルバインや、ラスボス機体ズワアースよりも上、最強のオーラバトラー！」

「オーラロード開いちやうよ!？」

「確かにスパロボでは強かったですけど〜」

わたしは躊躇うことなく、ガツと5-0-01型デバイスをつかむ。

「——で、このデバイス、サラちゃんのものに取りつけたらいいの?」

「見なさいヴィヴィオ。あたかも最初からコアを入れてくださいと言わんばかりに、お腹の部分が上下に開閉するでしょ」

確かに、洋服のヒラヒラを意識したのか、不自然に開くようになっていた。たぶんだ

けど、本来はビルドデカールなど、各種ICチップが収まる箇所なのかもしれない。

「穴を空けて、デバイスをはめこめるように改造すれば……ほら、完成よ」

「おっつ！」

「私たちは前にマスター認証してあるから、あなたも登録しなさい。管理権限、新規使用者設定機能オープン——」

そう唱えると、プレシアお婆ちゃんは、サラちゃんを「はい」と手渡してくる。

わたしは両手で人形を握りしめた。

サラちゃんの周囲に、小さな空間ディスプレイがいくつも表示される。

「マスター認証——高町ヴィヴィオ。

術式は、ベルカ主体のミッド混合ハイブリッド」

サラちゃんを中心に、わたしの魔力が小さな虹色の魔法陣を展開する。グルグル。

こうすることで、デバイスがわたしの音声と魔力を認識し、機体に自動登録してくれるのだ。

「こたつに入ったまま登録って、冬にアイスを食べるような感じだよねえ」

普通は広いところでやるものだ。

「あれは半分慣習なのだけだね。あなたの母親や『Force』のトーマなんて、戦闘中に登録してたでしょ？」

「あゝ」

言われてみると、そんな気がしてきた。

正確にいうとデバイスではないけど、トーマなんて瓦礫の中でリレイさんと誓約してたたしなあ……。未来の話だけだ。

「……………んん、んん？」

起動、登録した途端、魔力が……魔力が……。

「どうしたのよ、ヴィヴィオ？」

「オラ、すげえ気を感じっぞー！」

「はいはい。ドラゴンボールごっこならよそでやりなさい」

「冗談、冗談。そうじゃなくって、このサラちゃんデバイスからわたしに、補給なしで戦い続けられそうなエネルギーが送られてくるんだけどっ!？」

「だから、フリーダムごっこならよそでやりなさいと」

「本当なんだってえゝ」

「はいはい。別に不思議なことでもなんでもないわよ。聖王家の血統——特に、オリヴィエのクローンであるあなたは、エネルギー結晶体から力を取り出すスキルが、人よ

りずっと優れているんだから」

「それはわかっているけどお〜」

そう。わかっている。わかっているのだ……。

だって、わたしは5年前、スカリエツティにレリックを移植され、ゆりかごと接続し、ゆりかごの駆動炉から無限の魔力を得たことが……。

「そっか……そうなんだ……この感覚。あのときは必死だったからイマイチよく覚えていないと思つてたけど、ゆりかごに接続してたときに似てるんだ……」

前にもこんなことあつたような気がするけど、今回は輪をかけてとんでもない魔力が送られてくる。

「そんなに？ 確かに高エネルギー結晶体ではあるけど、ゆりかご内部の駆動炉と比べたらたいしたことないはずよ？」

いやいや。

「ひよつとしたら太陽炉……お婆ちゃん、知り合いの科学者にイオリア・シユヘンベルグさんつていない？」

「GNドライブじゃないんだから……」。

でも、おかしいわね。移植したわけでもない。どんなに出力が上がっても、せいぜい、あなたがトラックやガジェットをぶち壊したときくらいが限界なはず」

「ぶち壊したと言わないでー」

わたしの身体から溢れる余剰魔力が、こたつの上で、勝手に三角形のベルカ式魔法陣を描き出す。

「うおおおおお、お婆ちゃん、本当にスゴいよこれ、今ならトランザムとかできちゃいそうー!」

「むしろ見てみたいくらいだけど……むう、聖王の血はそこまで力を引き出せるものなのかしら? 私でもここまでは……。まあ、いいわ。リニス、ひよつとしたら、今日は貴重なデータが取れるかもしれないわよ」

「まったく……でも、そうですね。私、ちよつと研究室まで行って、モニタリングしてきますね」

リニスさんがこたつを離れると、アリシアさんが溜め息を吐いた。

「ヴィヴィオく。これ絶対、いつもの爆発オチだよね?」

「……………はっ」

そうかも!?

「つて、どうしてアリシアさん、プトレマイオスアームズ片手に、こたつに潜ろうとしているのおお!」

「うちのこたつは簡易シエルターになってるからね。リニス2世は出ないように押さえ

とくから、あとよろしく〜」

すぼっ！ アリシアさんのアホ毛が、こたつの中に消えていく。

うあああ、逃げられたああ！

とか言ってる間にも魔力供給がああ！

「あつ……あ……」

部屋の中が、勝手にわたしの虹色の魔力光で満たされていくのがわかる。

「ヴィヴィオ、魔力量が増えてうれしい気持ちはわかるけど、もう少しコントロールしなさい。できるでしょ？」

「うん、してる、してるんだけど……なんだろう、なのはママが子供のころ、スターライトブレイカーの発射シークエンスを変えてヒヤッハーしたときみたいに、どんどん魔力が送られてくるんだけどおお!? ナニコレ、ナニコレええ!?」

光が強まり、視界が白く染まっていく。

レリック1つでこれはありえない！

「……あら、これはちよつとマズいわね。

——結果、展開——

「ちよ、お婆ちゃんばつかなにやってんのおお!?」

どこから取り出したのか、ヤマトで波動砲を発射するときみたいな対閃光ゴーグルま

ガガガガガ——つと、ガオガイガーがヘルアンドヘブンでも使ったかのように、虹色の魔力が強烈な渦を巻く。無理だ！ もう押さえ切れない！ 解き放たれたエネルギーの本流が周囲を吸いこみ、突風となってわたしの身体をさらう。

ふわつと、浮いた感覚。

同時に、ドン——という爆発音と共に、わたしの身体は、ふんがつ——と前のめりに放り出された。

一瞬の闇のあと、

「これ、ギャグ小説じゃなかったら死んでるやつだよねっ!？」

お約束。いつものように黒焦げで、モジャモジャなアフロヘアになったわたしは、頭を抱えながら立ち上がる。

「あいたたた……つて、ここどこおお!? お婆ちゃんちじゃない! プレシアお婆ちゃん!? アリシアさん! リニスさん!？」

返事がない。

さつきまで入っていた、こたつもない。

というかそもそも、

「部屋の中ですらない！ え、マジでオーラロードとか開いちゃったの!？」

海と大地の狭間に来ちゃったとか!？」

空が青いよ!？」

月も2つあるし！

周囲を見渡すと……、

「駐車場？」

自動車がいっぱい停まっている。

「チェーン展開してるファミレスに、あっちはコンビニ。どこか見覚えがあるような

……って、あれ？ ここミッドだ」

ミッドチルダの中央市街地。前になのはママたちと車に乗って来たことがある。

そもそも、空に浮かぶ2つの大きな月は、ミッドの証なのだ。

「そういえばここ、王様とシュテルとレヴィの3人が、次元トラブルで飛んできたところだっけ……」

ドラマCDのときの話。

うちからもそんなに遠くないし、なによりナカジマジムが近くにあるので、最近ではこの辺りを通ることも少くない。

「ひよっとして、ただ単にミッドチルダに帰ってきちゃったってオチいい!？」

アスファルトを蹴って高速移動。

思わず、ファミレスの看板の陰に隠れてしまった。しやがんでじつと見つめる。こういうときはちつちやくてよかつたと思うけど、やっぱり間違いない。

「ど、どうして……？」

どうして、中等科の制服を着たわたしとアインハルトさんが、並んで歩いてるのおお

——っ!？」

しかも、

「ちよー楽しそうというか、仲良さそうなんですけどおお!？」

お婆ちゃんちに置いてきたはずのクリスがふわふわ寄り添って飛んでいるし、とても偽物とは思えない。

となると、

「ひよつとして、また桃色な人のせいだとか……？」

この手の事件はだいたいキリエさんが……。

すると——トントン。びくうう。

突然、背後から肩を叩かれる。

「は、は、はっ!？」

「ヴィヴィオ、だよね？」

振り返ると、中等科の制服を着たリオコロが立っていた。

【次回予告】

はあ……お婆ちゃんなのか、それとも桃色さんや意外にドジっ子な赤毛さんのせいなのかはわからないけど、またどんでもないことに……。

次回【この世界が『Force』だとわただしだけが知っている】第2話。

【タイトルはネタバレの始まり】

で、リリカルマジカルがんばります！

第2話 タイトルはネタバレの始まり

「ヴィヴィオ、だよな？」

振り返ると、中等科の制服を着たりオコロが立っていた。

うわー、本物だ。

この黒いアホ毛といい、あざとい感じのポーズといい、リオコロだ。

間違いない。

しかも、さつき見たわたしとアインハルトさんと同じ、グリーンの中等科の制服を着用している。

でも、スカートの丈が長いせいか、リオみたいな元気っ子には似合っていない。そのうち慣れるのかもしれないけど、そっかー、アインハルトさんは、いつもこんな動きにくそうな格好で戦ってたのかあ。

とはいえ、なんてこったい……。

ドツキリにもほどがある。

わたしが返答できずに、眼前の光景にわなないていると、

「ねえ、リオ。やっぱり違うんじゃない？」

「そう？ コロナが言うならそうかもしれないけど、んー、やっぱりこの子、ヴィヴィオに似てると思う」

なんだかんだで最も野生の勘に優れたリオが、うろんな眼差し向けてくる。

「私だつてそう思ったけど、本物のヴィヴィオなら……こんな黒焦げで、アフロになんかならないよ、うん、絶対。ついでに言うと、靴も履いてないし」

そうでした。白い靴下のままでした。

なにせ、ついさつきまでこたつに入ってたから。

とはいえ、いつものコロナなら、

『あく、また爆発オチ？』

くらいに突っこんでくれるはずなのだけど……これが中学生……大人に成長すると
いうことなのだろうか？

「ヴィヴィオの金髪はいつも綺麗だし、こんなギャグ漫画みたいな格好にはならないよ」
うう……なんだろ、このプレッシャーは。

「コロナつて、いつもは表に出さないけど、ヴィヴィオのこと大好きだよねえ。ストライクアーツをやめなかったのだから、ヴィヴィオがいたからでしょ？」

「もう、リオ！」

じやれるように、コロナがリオの頬を引っ張っている。
おう……なんてこつたい。

一応、『Vivid』6巻——アインハルトさん戦の回想シーンのおかげで、なんとなく知ってはいたけれど、まさか、こんな飛ばされた先の世界でコロナの本心が聞けるとは。

もとの世界に帰ったら、どんな顔をして彼女に会えば……ていうか、ガン普拉バトルで対戦するんだっけ。

接待プレイは……うん、逆に手加減してもらおう側だしなあ……。うん、せめて、優しく、イチヤイチヤしてあげなければー。

などと、わたしが帰還後のことを妄想していると、コロナが申し訳なさそうな表情を浮かべた。

「ごめんね、人違いしちゃって。あなたが私のお友達によく似ていたから間違えちゃったの。えっと、その手に持つてるお人形さん可愛いね」

この年下に対する余裕というか態度。これが中等科の実力か……じゃなくって、お人形さん……？

コロナの視線の先。

わたしの手のひらに目を向けると、

「あ、あああああああああああああああああああつ!」

空色の髪をした、リインさんみたいなガンブラ。

「サラちゃん! つていうか、5—01型デバイスだ!」

そっか! 飛ばされる前は、こたつに入ったままサラちゃんを握りしめてたんだっけ。

というか元凶。

さつきから異常事態ばかり起きていて気が回らなかつたけど、わたしのデバイスとしてマスター認証も終わってるし、これで、クリスがいなくてもお婆ちゃんに連絡できる!

「へえ、そのお人形さんデバイスなんだ」

「うん。外装だけで中は普通のクリスタルタイプだけだ」

「ヴィヴィオやインハルトさんのデバイスみたいだね」

「「あははー」」

本人ですけどねええ！

3人でひとしきり笑ったあと——わたしは冷や汗モノだったけど——リオコロは「これから行くところがあるから」と、立ち去っていく。ナカジマジムへ向かうのだろう。

そんな2人の背中を見送りながら、わたしはある重大な違和感に気づいた。

「……………、コロナの方が、背が高い……………」

『Vivid Strike!』では、わたし、リオ、コロナの3人は同じくらいの身長である。ついでにいうと、ミウラさんも同じくらい（ミウラさんは2歳年上ですが）。

なのに、

「あ、明らかにコロナの方が伸びてる……………って、はっ!？」

よく見れば、何やら胸の辺りの膨らみも……………。

「なんてこつたい……………はっ!？」

そういえば『ご注文はうさぎですか?』の最新7巻でも、チマメ隊。

チノ ↓ わたし

マヤ ↓ リオ

メグ ↓ コロナ

と、仮定して、メグちゃんだけ、昔は3人とも通れた狭い抜け穴が「胸が苦しくて通りにくい」とかなんとかで……。

「ふう……ヴィ・リ・コ隊も解散だなあ……」

『誰がヴィリコ隊よ!』

「あいたー」

ほっぺにローリングソバットを食らったような衝撃。

「だ、誰っ!？」

『私よ、私』

目の前に、ふわふわ人形が浮かんでいる。

「サラちゃん!？」

いつの間にか、わたしの手を勝手に抜け出していたらしい……。

「つて、あれ? 確かストレージ型デバイスだったような……」

勝手に動くなんてことあるはずがない。

「まさか、わたしは今まさに、機械に生命が宿る瞬間を目撃しているのではああ!？」

トラ●スフォーマー的な。

『そんなことあるはずないでしょ。忘れたの？ ガンプラバトルの特訓のため、外部操作できるようにデバイスを埋めこんだんでしょ』

「そうでしたー。つてことは、中の人はプレシアお婆ちゃんっ!？」

『中の人つて……声優じゃあるまいし』

「スーツアクターでもいいけど？」

『やめなさい』

「見た目がサラちゃんなのに、声がお婆ちゃんつて、違和感が半端ないけど」

『だまらっしゃい』

それにしてもだ。

「はあ、こっちはミッドチルダなのに、そんな遠くからデバイスを制御できるなんて、流石は次元魔法が使える大魔導師。メテオやコメットも使えそうだね」

『それはFFの時空魔法——』

《プレシア、そんなことより、現状説明をしないと》

《ヴィヴィオー、そっちは怪我してない？》

サラちゃんから、お婆ちゃんだけでなくリニスさんやアリシアさんの声も聞こえてくる。

「そうだった！ わたしは平気だったけど、そっちは大丈夫なの？」

『ええ。聞いての通り、こちらは3人とも無事よ』

《私は研究室にいましたから。ただ……》

《聞いてよヴィヴィオウ。こたつから出たら天井がなくなってたんだよっ!!》

「うわ……それは本当にごめんなさいっ！」

わたしが5-01型デバイスをコントロールできなかったばかりに、大惨事を引き起こしてしまった。

『いいえ。それを言うなら私のミスよ。まさか、あんなエネルギーの暴走が起きるなんて……。もう二度と起こさないと誓ったのに……本当にごめんなさい』

「えっ!?!」

《ええっ!?!》

「お婆ちゃんが……」

《ママが……》

《プレシアが……》

「《素直に謝るだなんてええ!?!》」

『私だつて謝るときは謝るわよッ!? まったく、あなたたちは私をどんな風に——』

《こ、こういうときは、お赤飯とかいうのを炊くんでしたっけ!?!》

《ふえ……フェイトに教えてあげないと……》

『そんなことでいちいち通信しなくていいわよッ!』

ああ。なんだかあつちは賑やかそうだ。

家屋的には大惨事だけど、人的被害がなかったのは本当によかった。

『——あー、コホン。それはそれとして、ヴィヴィオ、気づいている? あなたが飛ばされた場所なんだけど』

「うん。単純にミッドに転移しただけかと思ったけど、たぶんここ、1年後くらい。未来だよね」

『1年後、ね。どうりで座標の特定に手間取るはずだわ。それで何か確証はあるの?』

「うん。正確な日時はわからないけど、アインハルトさんとわたしが同じ中等科の制服を着るチャンスは、来年——新暦81年しかないから」

わたしが1年生。アインハルトさんが3年生。わずか1年の間。

「ひよつとしたらもう『Force』の事件が始まっているかもだけど、漫画じゃ日付まで出てなかったから……って、あれ? ここが未来ってことは、わたしすぐには帰れないってこと?」

『そうなるわね。5—01型デバイスがあったからこうしてつなげることはできたけど、映像までは送れないもの』

「そうなんだ……」

単純にデータ量の問題なのか、もつと他に理由があるのか、こっちの映像は見えてい
るみたいだし、その辺りはエルトリアのみなさんに聞いてみないとわからない。

『とにかく、時間移動は私の管轄外だから、クリスを借りるわよ。エルトリアのギアーズ
たちと直接連絡を取りたいから』

「うん、それは構わないんだけど……。ねえお婆ちゃん、どうしてこんなことになったの

かな?」

いつものように桃色さんたちが関わっているなら、すぐに向こうから連絡が来るはずなのだけだ。

『そうね。あなたにもわかりやすいように説明すると、クロノトリガーってゲームはやったことある?』

「うん。ちよー有名RPGだし、当然あるけど」

『だったら、〃時の最果て〃って場所は覚えてるわよね』

「スペッキオや時の賢者がいたところだよ」

『そう。〃全ての時代に通じていて、どの時代にも属さない時空を越えた謎の場所〃。今、私たちがいる〃次元の狭間〃も、似たような場所なのよ』

「あく、それで……」

色々な世界に通じている可能性があるということだ。

しかも、

「考えてみたらサラちゃんって名前、クロノトリガーやクロノクロスの……」

『まあ、それは偶然でしょうけど』

わたしやプレシアお婆ちゃん、サラ、全てラスボスつながりである。

「つてことは、飛ばされた先が1年後くらいでむしろラッキーだったのかなあ?」

B. C. 650000000に飛ばされて恐竜人とか出てきたら、流石にちよつと泣けてくる。

ラヴオスが降ってきたり。

「あ、B. C. 18000なら興味あるけど」

『それ、あなたの母親が中の人やってたシユタゲゼロのラストじゃない』

あつさりバレた！

『たぶんそれくらいなら、すでにアルハザードが存在してたと思うけど……まあいいわ。おそらくだけど、以前ドラマCDで、闇の書事件の最中の高町なのはやフェイトが、未来のエルトリアに飛ばされる——ということがあったでしょ？』

「うん、あつたね」

『アレの原因の1つに、並行世界の出来事とはいえ「GOD」での接触により「ギアーズや紫天一家」と「高町なのはやフェイト」の間に、何らかのつながりが形成されていた——と考えることができるのよ』

「そつか。逆に、エルトリアから王様たちがミッドに——なのはママたちのそばに飛ばされてきたこともあつたし」

『ええ。だとするなら、あなた「GOD」で「Force」の子たちと接触してるでしょ。偶然というよりは、同じようにつながりが出来てきていたから——と考えるべきでしょ

うね』

「そっか〜」

そういう意味では、やっぱりキリエさんが原因なのかもしれない。いや、今回の場合はむしろ助かったというべきか。

変な世界や時代に飛ばされなくて。

いきなりラヴオス戦みたいになっても、勝てないよ？

『それでも、あの小規模次元震が起きるほどのエネルギーは理屈に合わないのよね』

「やっぱり、またキリエさんが、レヴィが拾ってきたオーパーツを蹴ったり水をかけたりして、時間転移装置を誤作動させたとか？」

『その辺りも聞いておくわよ。何にせよ、あなたが高町なのは——主人公の関係者である限り、そういうった事件に巻きこまれる可能性が常にある——ということよ』

そんなメタ発言されても〜。

「でも、なんだかんだいって、みんなすぐに元の世界に帰れてるしね。わたしもそんなに心配してなかったりして」

『そうね。半日もあれば帰れるでしょ。座標の特定も終わっているし。詳しい検証は、あなたが戻ってからすればいいわ』

「だね〜」

よし、そうと決まれば！

「帰るまでに、もつとこの『Force』世界を堪能しちゃおう！」
わずか1年先の未来ではあるけど。

『それもいいかもしれないわね。でもヴィヴィオ、宝くじは止めておきなさい』
うっ。

「……と、当選番号をメモつとくとか、し、しないですよー？」

『……まったく』

「えつとー、ほら、ナカジマジムの様子でも見に行こうかなと」

『たいして変化ないでしょ？』

「それはそうなんだけど『Force』だとジムの様子が描かれたことってなかったでしよ。主人公はトーマだったから」

『そういえばそうだったわね』

「一応、わたしやインハルトさん。それにノーヴェも登場してたけど、あくまでちよい役。ひよつとしたら、ジムの経営が悪化して潰れてるかもしれないし。ノーヴェが、

『すまんヴィヴィオ、やつちまった！』

とかー」

『いや、ないでしょ。あれだけ人気選手を抱えておいて』

「ある日、謎の大爆発で潰れるとか」

『……あー、そうね、予想外のことは常に起きるものよね』

こうしてナカジマジムの入っているビルの外。大きな窓ガラスから、みんなが練習している競技ジムエリアをのぞくことにしたのだけど……。

「あれ？ フーカさんがいない。受付にもいないし……って、そういえば変態……じゃなかった、ユミナさんの姿もない！」

『ああ、それはしょうがないわよ。だって「Vivid Strike!」は並行世界だもの。「INNOCENT」みたいなものね』

「……え？」

【次回予告】

ちよつとたんまお婆ちゃん。『INNOCENT』みたいってどーいうことっ!? 百歩譲ってフーカさんがいないのはしょうがないにしても、ユミナさんまでいないってどーいうこと? あの変態は島に飛ばされたの??

次回【この世界が『Force』だとわただけが知っている】第3話。

【『Force』にはすみべもいのりんもない】

で、リリカルマジカルがんばります!

第3話 『Force』にはすみぺもいのりんもない

『Vivid Strike!』が並行世界ってどーいうことおお!? 『INNOCENT』みたいなものって……『Vivid』の正統統編じゃなかったのおお!? 『ビビッドレッド・オペレーション』じゃないんだよおお!？」

ナカジマジムの入っているビルの外。大きな窓ガラスから、未来のアインハルトさんたちの練習風景をのぞきこみながら、わたしはプレシアお婆ちゃんが操るサラちゃんを激しく——ブンブン上下に揺らした。

『いいから落ち着きなさいヴィヴィオ。冷静に考えなさい。今、ビビッドレッド・オペレーションは関係ないでしょ?』

……………。

そうでした。

「あつちはお尻メインだもんね。リリカルなのは、どちらかという小さい子だったり、胸がメイン」

『そうよ。あなたの中の人がエンジニア役で出演していたアニメ——サークレット・プ

リンセスも、お尻メインだったでしょ？」

「あー、だねー」

『そういえば、アニメのラストバトルで、武器を使わずに殴り合いの格闘技に変わっていたのは、あなたの差し金かしら？』

「もうー、関係ないってー」

《どーでもいいので早く話を進めてください》

あちらの世界にいるリニスさんから、冷たくお叱りをいただいたので、わたしとお婆ちゃんは脱線した話題を元に戻す。

「確かに『ViVid Strike!』には、なのはママたちが出てこなかったけど、それだけで並行世界だと決めつけるのはよくないと思うんだよ。むしろ、フーカさんがいないのは、ただ単に風邪を引いたとかそういう理由で……いや、あのフーカさんが風邪を引くとかないかー」

想像もできないよ！

『何気にひどいわね、あなた……』

「いやいや、頑丈という意味でー。だって、ふつーあんな正面からリンネさんと殴り合っ

たら、死んでもおかしくないのにピンピンしてたし……って、ま、まさか、リンネさんのいるフロンティアジムから引き抜きを受けて、わたしとアインハルトさんの敵に回ったとかああ!？」

リンネさんの移籍は難しいけど、フーカさんが望めば、ノーヴェはきつと快く送り出すだろう。彼女たちの気持ちを一番に考えるからだ。

それに、フロンティアジムにはヴィクターさんがいる。ジークさんも所属こそしていないものの、主な練習場所はあちら。

U19のワールドチャンピオンが2人もいるのだ。上を目指すのであれば、これ以上ない環境。

「くっ……なんてこつたい。わたしとアインハルトさんの前に最強の敵が……」

『でもあの子、アインハルトの弟子よね。もしこの世界にいたとしても、移籍なんてしないでしょ』

チツチツチツ、とわたしは指を振る。

「弟子は常に師匠を乗り越えるもの。東方は赤く燃えちやつてるんだよ！ あ、それはそれで燃える展開かも。そんなわけでお婆ちゃん、ちよつとフロンティアジムのサイトで所属選手を調べてみてよ」

『しょうがないわね……』

クリスに頼むときと同じように、プレシアお婆ちゃんが検索してくれる。わずか1年しか違わないので、通信規格も変わっていないかった。

問題なく空間ディスプレイが開き、フロンティアジムに所属する選手の一覧が表示される。

「ムムムツ……つて、あれ？ フーカさんどころか、リンネさんまでいないんですけどおお！ ど、どーいうこと!?」

2人で愛の逃避行とかっ!?

うらやま……違っ!?

『だから言ったでしょ。「Vivid Strike!」は並行世界だもの。「INNOCENT」みたいなものね——つて』

「嘘だツ!!」

『もはやネタなのかの区別もつかないわね』

「だってわたし『Vivid Strike!』が並行世界だなんて聞いてないよ〜」
だったら、普段わたしたちがいる世界は何なのだろう。

『あなた、自分のことでしょ。せめて設定資料集ぐらいいは見えないの?』

「あー、あれ。みんな『裸参考』のイラストが載ってるのに、わたしだけ載ってないやつでしょ?」
一応入浴時くらいはあるけど、水着姿もやっぱりわたしだけ少ないという謎

の設定資料集。その反省からかReflection&Detonationの設定資料集は、素晴らしい出来栄えだったけど」

『……しっかり見てるじゃない』

《見るポイントがアホだけどねー》

アリシアさんから言われたよおお！

『そんなだから気づかないのよ。ほら、設定資料集恒例の1ページ目。キャラクター対比表を御覧なさい——』

空間ディスプレイに表示される。

「うくん、そういうえば珍しいことに年齢が書いてある……アインハルトさんとユミナさんとミウラさんが14歳で、わたしとリオコロが11歳……学年で考えれば問題な……あれ、ちよつと待って!？」

●新暦79年『Vivid』本編より

・初等科4年……ヴィヴィオ、リオ、コロナ 10歳

・中等科1年……アインハルト、ユミナ、ミウラ 12歳

●新暦80年『ViVid Strike!』本編 公式サイト&設定資料集より

・初等科5年……ヴィヴィオ、リオ、コロナ 11歳

・中等科2年……アインハルト、ユミナ、ミウラ 14歳

「——どうして3歳も離れちゃったの!?!」

誕生日が1、とか言うなら、全員一律でズレるなんてことはないはず。同じ作品内で満年齢と数え年を分けるとも考えられない。明らかに、わたし世代とアインハルトさん世代の年齢の差がおかしなことになっている。

『単なるミス——と、片づけてもいいのだけど、これを解消するための、たった1つの冴えたやり方があるのよ』

「そんな有名SF小説のタイトルみたいな台詞言わないでええー!」

確かに、アレを初めて読んだとき、主人公がわたしやフェイトママみたいな金髪で16歳の女の子だったときは驚いたけど。

もっと、敷居が高いイメージがあつたから——

『そう。リリカルなのはも、長い年月とシリーズを重ねている間に、ファン以外にとっては敷居が高い作品になっていったのよ』

新規ファン層を獲得せねば。

「だからタイトルに『なのはママの名前』がついてないと？」

『ええ、だから高町なのはを登場すらさせなかった。そしてもう一つ。ミッドチルダの小学校は5年制——という制度が、リリカルなのはを知らない、地球の、日本の一般層に受け入れられるかというと……』

「ああ、難しいかもっ！」

『そう。だから——』

これまでのリリカルなのはシリーズでのミッドチルダ

●初等科5年……11歳

●初等科6年……存在しない

●中等科1年……12歳

●中等科2年……13歳

←

『Vivid Strike!』でのミッドチルダ

●初等科5年……11歳

●初等科6年……12歳

●中等科1年……13歳

●中等科2年……14歳

『——と、いうふうには、日本と同じ6年制に改編してしまえば、全て解決なのよ』

「……な、なんてこつたい」

これが本当であるなら、確かに『Vivid Strike!』が並行世界であることを認めないわけにはいかない。

『あとは、本来、あなたの大人モードより身長が低いはずのノーヴェが「Vivid Strike!」のキャラクター対比表では高く描かれている——なんてのもあるわね』
ノーヴェの身長はスバルさんと一緒。なのはママと同じくらいなので、フェイトママやシグナムさんより高いわたしより上というのは——多少の変化があったとしても——無理があるのだ。

『でもね、ヴィヴィオ。こんなのは考察とは呼べない。ただの推論。あくまで私の憶測にすぎないわ。だって、この程度のズレ、たいした問題じゃないもの』

「ええええええええ!?　じゃあ、なんで並行世界だなんて言い出したのおお?」

『そうね。少し言い換えましょうか。「Vivid Strike!」は「Force」に

とつての並行世界なのよ』

『Force』にとつての……?』

つまり、現在わたしがいる世界にとつての——という意味だけど。

『ヴィヴィオ、よく思い出して御覧なさい。「魔法戦記リリカルなのはForce」が連載していたころは——まだ「Vivid Strike!」が存在していなかったのよ』

……………。

『だから「Force」の世界観に「Vivid Strike!」の物語は反映されていない。だって、ないものを前提とした世界だもの、当然よね』

「あ……………」

単純だけど、そりやそーだ!

身も蓋もないメタ発言だけど、反論しようがない。

『Vivid Strike!』のキャラ——フーカさんを登場させてしまった時点で、それはもう『Force』とは別の、並行世界になってしまうのだ。

「そつか、だからなんだっ!」

『Force』の長期休載が発表されたのは、『娘TYPE』2013年11月号。

一方で、ユミナさんが初登場した『ViVid』13巻の初版発行日は、2015年1月26日。

すでに、『Force』の連載がストップしていた……。じゃあ、この世界には、水瀬いのりさんや上坂すみれさんはもちろん、小倉唯さんもないってことおお!!」

『声優の名前で言わないの。まあ、あくまで「Force」本来の漫画での話だから、フーカやユミナ、リンネって子が、この世界にいないとも限らないわ。いたとしても別の人生を歩んでいる可能性もあるでしょうけど』

「あつ……。あああああああああああああああー!」

『今度はなによ』

「だからだよ! この世界、わたしとアインハルトさんがやけに仲がいいと思ったら、ユミナさんがいないからだああ!」

『……。あら、三角関係?』

「そうじゃなくて! あ、それもあるかもだけど、ユミナさんがいないということとは、アインハルトさんは、学校のクラスでぼっち街道まっしぐらなんだよおお!」

『……。あー』

「つまり、アインハルトさんにとって、学校で最も親しい、唯一ともいえるお友達は、わたしオンリー。……あ、リオコロとノーヴェもいるけど、どう考えてもわたしが頭一つ分抜け出してるし！」

わかりやすく説明すると、プリズマイリヤで全てのクラスカードを回収したあと、2巻ラストの美遊が、イリヤにべったりだったみたいない感じいい！」

わたしの友達生涯イリヤだけ、他の人なんてどうでもいいでしょ——みたいな。

「なんてうらやましいい！」

『ヴィヴィオ、どうどう。落ち着きなさい』

「ご、ごめんなさいお婆ちゃん……」

道行く人が、何やら不審者を見る目でこちらを見てるので、深呼吸して心を静めることにする。

「すー、はー、あー、それにしてもこの『Force』世界だと、リンネさんのゴリラパワー（怪力）が見れないなんて……」

『ゴリラパワーって……まあ、あの子強かったものね』

「うん。それに、設定資料集の裸イラストを見ればわかるんだけど、リンネさん、変身前からムチムチボディなんだよ？」

アインハルトさんなんて、初めて見たとき「へー」とか、平静的フリして、サンドバツ

グに穴開けてたし。

はあ、あのムチムチボディは、わたしたちの理想だったのに……」

『そういうものかしら?』

「お婆ちゃんやフェイトママにはわかんないんだよ!」

《そーだ、そーだ!》

アリシアさんの声がさり気なく聞こえてきた直後、今度は騒がしい（リオ）声が聞こえてくる。

「外で騒いでたの、さっきのヴィヴィオのそっくりさんだ!」

しまった!

ちよつとはつちやけ過ぎたか!

続けて複数の足音。ガラスの自動ドアが開いて飛び出してきたのは、コロナに、ミウラさん、アインハルトさん、それに高町ヴィヴィオ——この世界のわたし。

「黒焦げアフロじゃなくなると、ますますヴィヴィオにそっくり……」

「えっと……わたしの……そっくりさん？」

「あ、あの、ボクには区別がつかないんですが……」

「ど、どういふことですか？ ヴィヴィオさんの偽物、名前を、名前を名乗りなさい！」

くっ……こうなったら、

「ヴ……」

ヴィヴィで“V”が2つだから、

「V2（ブイツー）！ V2・アサルトバスターが、わたしの名前だああ——っ!!」

【次回予告】

しまった！ つい勢いでヴィクトリーガンダムふうに答えてしまったけど、せめてコードギアスのV・V（ブイツー）にしとけばよかった。一生背が伸びなくなりそうだけど……っていうか、これどうしたらいいの!?

次回【この世界が『Force』だとわたしが知っている】第4話。

【ギヤラクシーエンジェルとは違うのだよ】

で、リリカルマジカルがんばります！

第4話 ギャラクシーエンジェルとは違うのだよ

ナカジマジムの入っているビルの外。

わたしの目の前には、リオ、コロナ、ミウラさん、アインハルトさん、それに高町ヴィ
ヴィオ——この世界のわたしが立っている。

未来のアインハルトさんがわたしを指差す。

「ど、どういうことですか？ ヴィヴィオさんの偽物、名前を、名前を名乗りなさい！
くっ……こうなったら、

「ヴ……」

ヴィヴィで「V」が2つだから、

「V2（ブイツー）！ V2・アサルトバスターが、わたしの名前だああ——っ!!」

「「「「V2・アサルトバスター……？」「」」」

しまった。ちょーしまったっ！

動揺したせいとか、勢いに任せてVガンで答えてしまった。何だか上手い感じに名前と名字に分かれたのだけど、これはないな。

百歩譲ってV2はいいけど、名字がアサルトバスターはないな。

「お婆ちゃん、どーしよう……？」

『面白そうだから、そのまま行きなさい』

適当すぎるっ！

クリスがいなかったため、現在わたしの仮デバイスになっているサラちゃん（ガンプラ）から答えが返ってくる。

まあ、中身はプレシアお婆ちゃんなんだけど……。

プレシア・テストアロツサ。

『無印』や『The MOVIE 1st』を見て暗いイメージがあるかもしれないけど、考えてみて欲しい。あのアリシア・テストアロツサの母親である。あの性格が遺伝なのだとしたら……そう、基本的に「お婆ちゃんはおバカ……じゃなかった、アホ……」でもなかった、明るいことが大好きなのである。

逆に『A's』や『The MOVIE 2nd A's』の狂気に陥る前の彼女を見て、落ち着いた大人の女性のイメージをもつ方も多いだろうが……考えてみて欲しい。フェイトママも子供のころから落ち着いていたけれど、なのはママやリンディさん

という一風変わった(いい意味でだよ!)人たちが大好きなのである。

そう。どう転んでも、テストロツサ家は面白いことが大好きな一族なのだ。

「前々から思ってたんだけど、お婆ちゃんって無責任艦長というか、無責任魔導師だよねえ……」

『あら、光荣じゃない』

《あー、そういうところ昔からありますよねえ。面倒くさいことは私に任せて、自分は好きにやってるんですよ》

『それ今関係ないでしょ!?!』

リニスさんとお婆ちゃんのやり取りが、だんだんとムとジェリーに見えてくる。ネコとネズミが逆転してるけど。

すると、ようやくこの世界のわたしたちの間でも意見の決着を見たようだ。

「V2・アサルトバスター……かつこいい名前だよね!」

「リオ、絶対偽名だつて」

「アサルトバスター……何だか強そうなお名前です」

「アインハルトさん、流石にそれは〜」

「ぼ、ボクにはなんとも……」

……おや〜。

「ねえ、お婆ちゃん。わたしとしては、

『なに、その光の翼とか出そうな名前ええ——っ!』

みたいに、激しく突っこまれると思つてただけど?」

『そうね。おそらく、この世界にはガンダムが存在しないんじゃないかしら?』

あ〜、なるほど。

だから初めて会つたとき、コロナはモビルドールサラを見ても、お人形さん——みた
いにしか反応しなかつたんだ。

ちよつと寂しいかも。

「あの、ちよつといいかな?」

この世界のわたしが手を挙げる。

「さつきから気になつてただけど、そのお婆ちゃんつてなに?」

「あく、実はこのデバイス、わたしのお婆ちゃんが遠隔操作してて」

「お婆ちゃんつてことは……その、あくまで例えばなんだけど、どこかの管理外世界で喫

茶店をやつてるとかじゃ……」

「あー、そつちじゃなくて。というか、あつちのお婆ちゃんは、お婆ちゃんって呼ぶの禁句でしょ？」

「まあ、そうなんだけど……」

「やつぱり、ママのママなのに“さん”付けで呼んでるの？」

「うん。桃子さんって……」

「うわー、そつちも大変だねえー」

「あはは……って、やつぱりあなたわたしじゃないの!？」

ちっ……。

「なんという誘導尋問……」

「あつちのヴィヴィオ、アホだね……」

「やつぱり偽物なんじゃ……」

くっ……。

未来とはいえりオコロめええ。

こつなつたら、

「初めてですよ、聖王であるわたしを、ここまでコケにしたおバカさんたちは……」

「「「……………」」」

あれ？

「ちよ、お婆ちゃんドラゴンボールネタが通じないんだけどおお!!」

ちなみに、フリーザ様の名言をパクって改造してみました。

『ドラゴンボールもないんですよ』

くっ……………なんてやりにくい世界だ！

未来のわたしが小首を傾げる。

「……………今、聖王って……………」

「ノー、ノー、ノー、聞き間違えです」

「あの、今更なんですけど、その紅と翠の虹彩異色の瞳は……………」

「……………か、カラーコンタクトです」

「変身魔法ではなく?」

「……………変身魔法です」

「『遅すぎる?!』」

なんだか、真綿で首を絞めるようにジワジワ包围されていく。しかし、わたしがヴィオオであるという証拠がない。あと一歩が踏み出せないでいると、ミウラさんが恐る恐るといった感じに手を挙げた。

「あの、どうでしょうか? ここは1つリングで決着をつけるというのは。彼女が本当にヴィオオさんだとしたら、ファイトスタイルでわかるかと」

「確かに、あのカウンターは誰にでも真似できるといえるものではありませんし」

「本物のヴィオオなら、負けず嫌いだからわざと負けるなんてできないだろうしね」

「つい本気になっちゃうよね」

「えー、わたしそんなに負けず嫌いじゃないよー」

「『いやいやいや』」

おかしいな。

こっこの世界でも言われ放題だな、わたし……。

『どうするのよ、ヴィ……V2?』

自分でもすつかり忘れてたよ。アサルトバスター。

「もうひとりのわたしと戦う。それはそれでちよー貴重な体験だとは思っただけど、できれば、時間までにもう1つ見ておきたいモノがあるんだよね」

しょうがない。

ぼくぼくぼく……チーン!

そろそろ一休さんとかリメイクされそうな予感。

「えっと、そっちのボクっ娘——というかアホ毛が3本ある方」

「ぼ、ボクのことですか!? アホ毛3本って……」

ミウラさん。実際、設定資料集に『アホ毛3本あります』って書いてあるのだからしょうがない。

「あなたのちっちゃい師匠といい、高町家といい、すぐにバトルで白黒つけようとするのはよくありません」

「あう」

何気にあつちのわたしもダメージを受けている。

「そんなだから……(ここで溜め)……アインハルトさんですらふっのブラをつけてる

のに、ミウラさんだけわたしたちと同じキャミソールのままなんですよおお!? 中3ですし、そろそろヤバイんじゃない?」

「普段はスポーツブラつけてますよおお!?」

「いえ、私服のときです」

「ど、どーして知ってるんですかああ!? ヴィヴィオさんたちにも話したことなかったのにいい!」

むう……流石はミウラさん。1年後も育ってなかったかあ。設定資料集を見ると、大人モードに成長しても、あのシャンテと同じ身長だからなあ……というのは置いといて。

この『Force』世界。ユミナさんがいない分、わたしがインハルトさんにかかりきりなのだろう。つまり、ミウラさんとの友情度が上がりにくい。そう、いまだに、『一緒に帰って、友達に噂とかされると恥ずかしい……』

みたいな関係。

ここは、未来のわたしに1つアドバイスをあげねば。

「たとえ、アホ毛3本の方が、

『ほ、ボクにはまだ早いですからああ〜』

とか恥ずかしかったとしても、みんなで一緒について行って、彼女に似合う可愛いブラを選んであげてくださいね」

「ふにやあああああああああああああああゝゝつつつ!」

顔が赤く染まる。ミウラさんが吼えた。同時に、足元の魔法陣に、なのはママとよく似た桜色の魔力光が集中する。

集束系魔法——抜剣。

こりや凄い! たった1年で、わたしの知ってるミウラさんより、格段に威力がアップしている。

『大丈夫なのかしら……これ?』

お婆ちゃんが集束魔法にあまりいい思い出がないらしい。主になのはママのせいだけど……。

「うん。このまま暴走したミウラさんの技を食らったフリして、後ろに吹っ飛んで逃げる作戦」

『あら、意外に策士ね?』

「まあね。伊達に毎回爆発オチみたいな感じで、すごい必殺技食らってるわけじゃな

いからね。いくらパワーアップしてるミウラさんといえども、一撃くらいならセイクリッドディフェンダーで受け流せるよ……たぶん」

『たぶんなのね……』

すると、もうひとり追加戦士（緑）が。

「あの、ヴィヴィオさん……先程の、私ですらってどういう意味でしょう？」

「あー、アインハルトさんも思ってたより成長してなかったの、まだまだ必要ないかなって思うんですが、ミウラさんよりはかろうじておつきいですし。まあ、わたしとしてはちっちゃいままの方が……って」

おや。

アインハルトさんの右拳に、グリーンの魔力光が集まっていく。

「逃げてー、そっちのわたし逃げてー」

もうひとりのわたしがアインハルトさんを必死に押さえつけ、リオコロがミウラさんの両腕をつかんで……いやいや蹴り技ですから。

スパロボでいうところの合体攻撃だな、これ……。

『ヴィヴィオ……あなたよく落ち着いていられるわね？』

「こういうときは平常心なんだよ、お婆ちゃん。高町家ではよくあること！」

『嫌な家ね……』

実際問題、八神さんちのヴィータさんとフェイトママが同時に近接攻撃魔法を放つてくるようなモノと考えればよ。

「次回までには復活できるといいなあ〜」

『ちよ、次回予告には早いわよッ!?!』

ミウラさんの脚とアインハルトさんの拳にさらなる輝きが宿る。

まばゆい光が解き放たれた!

「抜剣——星煌刃!」

「霸王! 断空拳ッ!」

桜色の蹴りと緑色の拳が正面から突き刺さり、わたしの小さな身体は「ぷろおお〜」と遙か後方へ弾き飛ばされる。

死んだー、これ死ぬやつだ〜。

車椅子はやてさんのように闇の書が助けしてくれるわけではなく、ヴォルケンリッターが現れることもなく「ポコン!」とトラックにはねられたわたしは、ふんがつ——と向かい側の通りへ。

最後はとどめとばかりに、カエルが潰れるような感じで、舗装された並木道に、うつぶせの格好で叩きつけられた。

びたん！

あく、Tシャツに張りつきそうかも。

『ヴィヴィオ〜ッ!』

「うん、大丈夫、大丈夫——」

わたしは何事もなかったかのように——ゾンビランドサガみたいに——ムクリと起き上がった。

「こっちの世界のわたしたちが追いついてくる前に逃げないと」

『ちよつとあなた、平気なの?』

「……うん。わたし自身、驚いているところなんだけど」

アレだけの攻撃を受けて無傷。

「斬魔剣二の太刀みたいなのに、服だけ切れたわけじゃないし……」

服だけ切れて厄災切れず——っ！

いつもより身軽に、まるで忍者のようにびよんこびよんこ街路樹や街灯をジャンプして移動する。

「はあ、こんなことしてるから、ユミナさんから『汚い、さすが陛下汚い!』とか言われ

るんだよなあ〜」

「この世界のわたしでは、追いつくこともできないだろう。」

『強くなつたわね、ヴィヴィオ。流石は私の孫だわ』

「うん。たぶん、この力、お婆ちゃんのおかげなんだよね」

『私の?』

「サラちゃん——5—01型デバイスに、レリックと似た高エネルギー結晶体を使ったでしょ」

さらに、第五世代デバイスの『魔力有効状況下においてはさらなる強化を得る』という設計が、正しく機能したのだろう。

よかつた〜。

今回は暴走しなかったらしい。というよりも、これが本来の5—01型デバイスなのだろう。わたしに適したピーキーな機体。

『ああ、そういうこと。つまり今のあなたは——』

「聖王モード。アインハルトさんとミウラさんの合体攻撃を食らっても平気だったのは、こつちに飛ばされる前に、お婆ちゃんが言つてた通り『聖王の鎧』が発動したから。聖王の鎧は、無意識に発動するパッシブスキルだからね。条件さえ揃えば、勝手にわたしを守ってくれるんだよ」

『そうだったわね。そういうえば、以前から聞いてみたかったのだけど、あなたのセイクリッドディフェンダーって……』

「防衛全振りのクリスを使って、本来、聖王の鎧が自動的に行うことを、“技術的”かつ“意識的”に、擬似再現した魔法だから、劣化聖王の鎧、あるいは聖王の鎧の下位互換になると思う」

『確かに“瞬間的な防衛”——という意味ではどちらも同じなのよね』

「本当はディフェンダーだって、聖王の鎧みたく全身防衛にしたいんだけどね」

『あなた、4巻の魔力負荷トレーニングでようやく一点防衛。それも、他の部分の防衛魔力をゼロにして、やっつと発動だものね』

「うん。だから、遥かに高性能な聖王の鎧なんて無敵バリア、今回みたいにレリックの莫大な魔力がなかったら、とてもとても……。たぶん、大人になっても使えないんじゃないかな？」

よく、わたしは『なのはママのスターライトブレイカーにより聖王の鎧を無くした』と言われているけれど……ピンポン！ 正解である。

ただし、それは莫大な魔力の源であったレリック——聖王核を失ったからであり、決して、遺伝子に刻まれた固有スキルまで失ったわけではない。

それはどういふことかという……ちよこつと思ひ浮かべて欲しい。

これまで、リリカルなのはの世界で——なのはママの極大魔法を食らって、スキルを失った魔導師がいたろうか？

どう見てもオーバーキルされたフェイトママを含め、誰一人いないのである。

しかも、あの時なのはママは、

『防御を抜いて、魔力ダメージでノックダウン。いけるね、レイジングハート!』

と言っているのだけど……これ、いわゆる“非殺傷設定”というやつである。

わたしの肉体そのものは傷つけないように撃っている。そう、破壊されたのはレリツクのみ。傷つけられなかったわたしの体が、遺伝子に刻まれた固有スキルを失う理由はどこにもない。

そもそも、両腕や主要臓器を欠損するような負傷を負ったオリヴィエですら、聖王の鎧を失わなかったのだ。

たいした怪我也負っていないわたしが失ったのでは、オリヴィエに申し訳が立たない。

もちろん『スターライトブレイカーの影響で偶然失った』可能性もある。

けれど『偶然失った』——なんて言い出したら、それこそ、なんでもアリになってしまう。今、この時、『偶然、聖王の鎧が戻った』と言ってもアリになってしまう。

流星に、それはナシだろう。

だったら、なぜ？ どうして？ わたしは聖王の鎧を失ったのか？
難しく考えることはない。

単純な理由。

最初に述べた通り、

『わたしが、魔力補助コアであるレリック——聖王核を破壊され、莫大な魔力を失ったから』

だ。

12巻で、奇しくもアインハルトさんが語っている。

『ディフェンダーもきつと同じだ——防御箇所以外は裸に等しい状態』

そう。

わたしの魔力量では、セイクリッドディフェンダーですら一点防御しかできなかった。

それなのに、全身防御で、なおかつ、ディフェンダー以上の防御力を誇る聖王の鎧を、
どうしてわたしが使えるというのか？

使えないのだ。

そして何より、思い出して欲しい……。

もし、わたしがレリックなしで、聖王の鎧を使えるのだとしたら……。

「そもそも『StrikerS』の六課襲撃のとき、ルールーやガリューにさらわれるなんてことなかったもん」

わたしが身を守っている間に、気がついたヴァイスさんが、ルールーはダメでも、ガリューを背後から狙撃したかもしれない。

エリオとキャロが間に合って、室内での陸戦が始まったかもしれない。

そうなれば……最強の援軍が到着した。

わたしがさらわれなければ、ゆりかごは飛ばない。

機動六課は、ヴェロツサさんとシャツハさんが発見したスカリエッティのアジトに、全員で突入。

ゆりかごは浮上することなく『JS事件』は解決していた。

『StrikerS』の物語は、そこで試合終了である。

『これは検査してみないとわからないのだけど、そもそも聖王の鎧は、最初から、聖王核があることを前提としたスキルなのかもしれないわね。レリックウエポンになること。故に強力。』

けれど、それだけではなくて、例えば聖王家の一族と一般庶民との間に生まれた子供が聖王の鎧を使えたとしたら、選民意識を持つ中枢王家はどう思うかしら？」

「……嫌がるってこと？」

『ええ、嫌がるでしょうね。庶民の子が、庶民と結婚し、やがて聖王家にのみ許された秘中の秘が、民間に広まってしまふ。全ての庶子を迎え入れたり、始末したりすることはできないでしょうし。』

だから、安全装置を設けた。

聖王核だけが盗まれても、遺伝子だけが流出しても——使えない。両方がそろって初めて、聖王の鎧が使える。ゆりかごもそうだったでしょ？」

「あー、そっか、そういう考え方もあるんだ……」

遺伝で発現する虹彩異色や虹色の魔力光とは別に、ゆりかご内部で生まれた、ゼーゲブレヒト家をはじめとする中枢王家の子である正統な証——みたいなものだろうか？

『それはそれとして、聖王の鎧を完全に発動させるためには、ある程度、身体の成長も必要なかもしれないわね。聖王核からの魔力を安定させるためか、莫大な魔力量に肉体が耐えるためかはわからないけど』

「スカさんが、ゆりかごを動かすためにわたしを大人モードにしたのも、その辺りが理由ってこと？」

『ええ。子供のころから聖王の鎧を完全に発動できるなら、そもそも、オリヴィエ・ゼーゲブレヒトが両腕を失うこともなかったでしょうしね』

11巻を読む限り、オリヴィエも5歳児くらいまでは両手があったのだ。

「単純に聖王核があるくらいじゃ、まだ足りない。発動はできて、まだ不完全……」
そう。

「FF4のテラのように……」

『あー、ちよつと待ちなさい。〃おもいだす〃から……えつと、最大MPが90だから、イベントで全ての魔法を思い出しても、消費MPが99のメテオは使えないってことね』

「うん。でも、プチメテオなら消費MP50でしょ」

『……えー、まあ、そうね。テラは使えないけど、1000歩くらい譲ってよしとしましょう』

ちなみに『GOD』では、セイクリッドデイフエンダーが上手く機能したおかげで、わたしは作中でも、なのはママより上、ユーリに次ぐ防御力を誇った——ということになっている。

ドラマCDのとき、ミッドで再会したレヴィが『そういうえばヴィヴィオも堅かったなあ、防衛』と語っていたのも、そのためだ。

ただ、どうして『GOD』のときだけ、あんなに上手くセイクリッドディフェンダーが機能したのかは、未だによくわからないのだけど……。

ゲーム世界だから——以外にも、何か理由があるはずなのだ。

この旅でわかると面白いのだけど。

『トップクラスの防衛魔法なのに、他の魔導師が真似できない——という点では、セイクリッドディフェンダーも、あなたの固有スキルと呼んでいいのでしょうね』

「そう言われると……そうかも」

ちなみに、聖王の鎧は防衛性能にばかり目が行きがちだけど、実は、わたしが「可愛く生まれてきたこと」にも関係している。

自分で言うな、と突っこまれそうだけど、苦情は聖王家にお願いします。

その件はまた別の機会にでも。

「そろそろいいかな」

わたしは足を止めた。振り返るが、もう誰も追ってきてはいない。流石に諦めたのだろ。

街路樹から下り、一般人に紛れて並木道を歩き始める。

「はあ、まさかガンダムがない世界なんてね〜」

『もともと、リリカルなのはにガンダムはないでしょ』

そうでした！

『ただ、わかったことも多いわね。あなた、原作の世界で黒焦げアフロになることはあつたのかしら？』

「ボロボロになることはあつたけど、黒焦げアフロはなかったかなあ……。あ、フーカさんなら『Vivid Strike!』で、リオの春光拳を食らつて黒焦げになつてたけど」

『そう、やつぱりね。コロナが、

「本物のヴィヴィオなら……。こんな黒焦げで、アフロになんかならないよ」と言っていたでしょ？

「Vivid Strike!」の出来事が反映されていないこの世界は、より原作の「Force」に近い世界観なのかもしれないわね』

黒焦げアフロになんてならない世界。

「いつもの『Vivid LIFE』的な、コメディ世界ではなく？」

『ええ。隕石が落ちてきて世界が滅んでも、次の回には何事もなかったかのように復活する世界とは違うのよ』

「つまり……なのはママの中の人が出てた『ギャラクシーエンジェル』みたいに、投げっぱなしじゃないってことだね？」

『また古い例を持ち出してきたわね』

ちなみに、とてつもなくズーでもいい話題なのだけど、ギャラクシーエンジェルのインタビューで、なのはママの中からは、次は魔法少女をやりたい——みたいに答えていたので、それがリリカルなのにはつながったんじゃないかなあ……と勝手に思っています。

「真面目な世界がある。何かあったら大変かも……って思ったけど、GNフィールドをもつ今のわたしを傷つけられる敵なんて、そうはいないだろうし」

『実際、ヴァーチエみたいなものよねえ』

ナドレ！

「そうなるよ、次はやっぱりアレを見に行かないとね」

『アレ？』

「トーマだよ、トーマ。トーマ・アヴェニール。『Force』の主人公」

【次回予告】

ようやく『Force』につながったわけだけど……あれ？ 今つてもう『Force

e』1巻の事件が始まっているのかな？ それとも、まだ旅の途中かな？ というか、トーマどこにいらっしゃるんだろう？ わたしとトーマの関係を含め、まだまだ問題は山積み！

次回【この世界が『Force』だとわたしだけが知っている】第5話。

【アヴェニールをさがして！】

で、リリカルマジカルがんばります！

第4・5話　もしもヴィヴィオが2人なら

「——ん、わかった。私からフェイトちゃんに伝えておくね」

本局の技術部にて、カレドヴルフ社の協力で行われていた新型装備——AEC武装のテスト休憩中、愛娘のコーチからの連絡を受けて、私は急いで長年の友人に通信を入れた。

空間ディスプレイに長い金髪女性の顔が表示される。

「ごめんねフェイトちゃん。お仕事中」

「大丈夫だよ、なのは。これからフェイディアに向かうところだったから。シャーリーも一緒」

「なのはさん、ドーもです！」

隣からピヨコンと眼鏡をかけた女性の顔も映った。相変わらず騒がしい……じゃなかった明るい子だ。でも、

「ちようどよかった。シャーリーにも伝えなきゃだったし」

「おや、それは珍しい」

どういうことでしょうかフェイトさんと、シャーリーが小首を傾げた。

「あのね、今ノーヴェから連絡があつて、ヴィヴィオの偽物が出たつて」

「偽物？ ヴィヴィオの？」

「それつて、ウウイウイオとか、偽ブランド的な？」

「ううん、そういうのじゃなくて、そっくりさん」

「つまり、ヴィヴィオに変装した、あるいはヴィヴィオのフリをした犯罪者が現れたつて
ハント？」

「ひよつとして聖王教会絡みなんじゃ？」

フェイトちゃんとシャーリーがわずかに眉をひそめた。

フェイトちゃんはもちろんだが、シャーリーも本気で心配してくれている。何だかんだで、根は真面目でいい子なのだ。

はあ、グリフィス君も見えない……なんて言ったらルキノに失礼か。

「んー、それがね、特に事件性があるわけではなく、大した被害が出たわけでもなく」
むしろ、ヴィヴィオたちが——ミウラちゃんやアインハルトちゃんが加害者だったらしいけど、相手が姿をくらませた——ということは、偽物側にもやましい事情があつたのだからから、お互いに喧嘩両成敗。

「そういうことなら、別に焦るようなことでもないんじゃ」

「そうですね。世界には自分にそっくりな人が3人はいる——つて言いますし」

地球にもそんな格言があったっけ。そうなるよ、次元世界規模ならもつといえそうな気もするけど。そっくりさん。

「ただね、妙にヴィヴィオたちの個人情報や事情に詳しいというか……」

「ストーカー？」

「ううん、今日初めて会ったって」

「あー、アレじゃないですか？ ほら、最近ストライクアーツの上位選手って人気あるじゃないですか、テレビで特集されることもありますし。その影響か、モノマネする人も増えてきたって」

人気スポーツ選手のモノマネ——みたいなノリだろう。

「ヴィクターやジーク、アインハルトに続いて、ついにヴィヴィオもモノマネされるようになったってこと？」

フェイトちゃんはしつくりいかないうちだけ……うん、フェイトちゃん自身、昔から鈍感だったからなあ。

大変なのは、私やはやてちゃん、アリサちゃんにすずかちゃん、周りにいる子たちなのだ。

「なのはさんの娘さん——ということも含めて、むしろ、これまで注目されなかった方がおかしいんですよ」

シャーリーが語気を強めた。

「そっか、そういう可能性もあるんだね。人気選手のモノマネをするために、見た目をそっくりにしてジムの練習風景をのぞいていた……かあ」

「あれ、なのはがそういう風に言うってことは、モノマネの線もないってこと？」

「うん。特にモノマネする気もなかったみたいで」

「愉快犯でしょうか？」

すると、フェイトちゃんが真剣な口調で呟いた。

「ひよつとして……ついに見つかつた……ううん、現れたってこと？ ヴィヴィオ以外に造られた聖王女の複製体が……」

「あ、あああああ！ そ、そうでした！ すっかり忘れてましたけど、ヴィヴィオって……これって大事件じゃないですか!？」

シャーリーが慌てている。

「あー、それならそれで私は構わないんだけどね。今更一人くらい増えたところで」

「なのはっ!!？」

「なのはさん〜」

「なんだったら、さらにもう1人増えてくれれば、1人は無限書庫でユーノ君の後を継いで司書になって、もう1人は私の後を継いで局の魔導師になって……あ、どうせならもう1人が翠屋を継いでくれれば……まあ、そっちはお姉ちゃん次第だけど。お父さんとお母さんは喜ぶかな。そう考えると、あと3人はヴィヴィオが必要だね」

合計4人。うん、それくらいならなんとか……。

「なのはっ!？」

「ごめん、ごめん、冗談だってフェイトちゃん」

「私も、愛玩用に1人欲しいかな」

「愛玩用って……」

あのシャーリーが「まじひくわー」みたいな表情で一步下がった。

「私も冗談だから!」

「まあ、気持ちにはわかるけどね。最近のヴィヴィオってストライクアーツの練習やら試合やら合宿やらで、家を空けることが多いし、母親としては寂しく感じることもあるんだよ」

「そういうものなんですか?」

「そういうものなんですよー」

私はシャーリーに微笑んだ。

「——と、まあ、それはさておき。その偽物ちゃん、複製体でもないみたいなんだよね」
「というと？」

フェイトちゃんが首を捻った。

「ヴィヴィオ本人……ううん、もう一人のヴィヴィオかな」

「どういふことですか、なのはさん？」

意味わかんないですよ、とシャーリー。うん、そうだろう。

「本人はヴィヴィオじゃないって、全力否定してみたいんだけどね。口にした内容は教会関係者……ううん、それどころか、わたしやフェイトちゃんしか知らない海鳴のことまで含まれてたって。ヴィヴィオいわく、家族と話してみたいだって……ちよつとおかしいよね」

「そんなことってあるんでしょうか？」

シャーリーが唸る。

「……なのは、〃闇の欠片〃ってことは？」

かつて戦った闇の書の残滓。過去の負の記憶や感情を再現したコピーのような存在。

「うん。私も疑った。でも、それだと説明できないことが1つあって……。偽物ちゃん

が連れてたデバイスが、クリスじやなかったってこと。

リンみたいに小さな人型で、やたら偉そうな年配の女性が遠隔操作で操っていた。そして、その女性のことを、偽物ちゃんはお婆ちゃんと呼んでいたって」

「お婆ちゃん？ ヴィヴィオのお婆ちゃんってことは、桃子さんってこと？」

「普通に考えるとそうだよねえ。でも、うちのお母さん、そこまで偉そうじゃないし……あ、高町家のヒエラルキーでは頂点だけどねー」

「土郎さん、大変そうだったもんね」

フエイトちゃんがクスクス笑っている。

「そうかな？」

「なのはさんの実家の家族構成って……」

「ああ、お父さん、お母さん、お兄ちゃん、お姉ちゃん、と私の5人家族だよ。お兄ちゃんは仕事で家を離れちゃったけど」

「となると、なのはさんのお父様は、お一人で“なのはさん×3人”を相手にしていたようなものですか……へー、そりや胃に穴が開き……」

「んー、シャーリー何か言ったかな？」

「いえいえ、何にもー。ぜひティアナを居候させてあげたい環境ですよねー」

「シャーリー……それは酷というもの」

「え、フェイトちゃんまで!? なんでええ〜?」

フェイトちゃんとシャーリーが苦笑いを浮かべている。この件は今度追求するとして。

「まあ、うちのお母さんではないにしても、フェイトちゃん、ヴィヴィオのお婆ちゃんっていうと、まだ他にいるでしょ」

「え?」

「だって、ヴィヴィオにはもう一人ママがいるんだから」

あゝ、と声を発したシャーリーが、隣にいる上司の執務官をうながした。

「私? 偽ヴィヴィオのお婆ちゃんの本体は……リンディ母さんってこと!」

「確かに、距離にも寄りますけど、デバイスをリアルタイムで操るなら、魔導師でないダメなところがありますからねえ。その点、リンディ提督なら合格です」

「う、うくん、そうかなあ……? リンディ母さんも、偉そう——とは無縁の存在だと思っただけ」

「もう、フェイトちゃん、私リンディさんとは一言もいってないでしょ」

「だって……」

「リンディさんじゃなくて、もう1人いるでしょ、お婆ちゃん。まあ、フェイトちゃんに向かつて、その人が『偉そう』なんて言うのもどうかと思うんだけど……」

「もう1人……偉そう……って、あ……でも……だって……」

口籠るフェイトちゃんを見て、頭に疑問符を浮かべていたシャーリーが、突然、奇声を上げた。

「あ、あああああああ！　そ、そういうことでしたか！　あの、デバイスマイスターの資格を持つ身として、1つ発言よろしいでしょうか？」

「はい。いいよ、話して」

「デバイスの遠隔操作って……その、ゴーレム操作に似ている部分がありました……」
わたしの脳裏に、100のゴーレムを操る黒衣の大魔導師の姿が思い浮かぶ。
なるほど、できるわけだ。

「だから、さ、ホント『もしも』の話だよ。あの人が生きていて、ヴィヴィオがお婆ちゃんなんて呼んでいる世界があったとしたら……それって、ちよつと素敵じゃない？」

「……………どう、なのかな？」

フェイトちゃんが言い淀む。

「そんな世界でも、やっぱり、母さんは私を認めてくれないんじゃないかな」

「そうかも」

「ちよ、なのはああ!?!」

「なのはさ〜ん」

「そこは『そんなことないよ』って慰めてくれるところでしょうおお!?!」

「いや〜、つい、正直に」

「はあ、そんなだからなのはさんのお父様、胃に穴が開くんですよ〜」

「開いてないからね!?!」

私は「だつて」と言い訳する。

「今なら、何となくプレシアさんの気持ちもわかるんだもん……。アリシアさんを亡くした……。ね」

「なのは……」

「それにさ、子供の頃のフェイトちゃんってすつごい頑なだったし。ちつともお話聞い

てくれないし」

「うっ……」

「そんなフェイトちゃんのお母さんでしょ。そりや、簡単には納得してくれないだろうし、説得もできないだろうなって」

「あー、最後はやっぱりズドン！　ですか？」

「まあ、ズドン！　だろうねえ」

「やめてー、母さん死んじゃうからー、もともと病気だったし、あと半年の……あと半年？」

「うん、そういうこと。病気が治ったのなら時間はあるよ」

フェイトちゃんの表情が少し和らいだ。

「でも、ズドンしそうですよねえ……なのはさん」

「うん、一度、全力全開の大魔導師と戦ってみたかったんだよねえ」

「ああああ……」

「まあ、とは言っても、あくまで“もしも”の話だから。そのためにも——」

フェイトちゃんが真顔で答えた。

「そうだね。まずはエクリプスの案件を早く解決しないと。明日の取引で、デイバイダーと銀十字が押収できればいいんだけど」

「ですね。そうだ、あとでティアナと合流するので、偽ヴィヴィオの件、伝えておきましようか？」

「うん、お願い。スバルが伝えてるかもしれないけど。ティアナによろしくね——うち、怖くないよって」

「あ、そつちはお約束できないかもです」

「なのは、今度はヴァイゼンで会おう」

「うん——」

笑いながら空間ディスプレイを閉じると、私は頬を叩いた。気合いを入れ直す。

子供たちの笑顔を守るために、

「さあ、フォートレスの完成まであとわずかだ！」

《Let, s do our best, master》

レイジングハートと共に、私は再び走り出す。

第5話 アヴェニールをさがして！

ミッドチルダ中央市街地の並木道を歩きながら、わたしは右拳を空に向かって突き出した。

「アヴェニールをさがして！」

『ヴィヴィオ、あなたそれ、言いたいでしょ……』

「えへへ〜」

アヴェニールではなく『アベニールをさがして』は、その昔、ソノラマ文庫で発売されたSF小説だ。作者は富野由悠季さん。

そう、あのガンダムの富野監督である。

モビルスーツという名称こそ登場しないものの、ミノフスキー粒子といった単語は登場するし、舞台背景の年代から、初代ガンダム以前の世界観と捉える人も少なくない。

なんていうと、ユニコーンファンに怒られそうだけど……。

「ほら、デバイスもサラちゃん（ガンプラ）だし、一度は言っておかないとって〜」

ちなみに、イラストは幡池裕行さん。

『聖刻』や『ソード・ワールドRPGリプレイ第2部』といっても「知らないよ?」って方も多いかもしれないので。

別名義の伊東岳彦さん——『NG騎士ラムネ&40』や『霸王大系リユーナイト』『星方武俠アウトロースター』と聞けば、覚えのある方も多いのではないだろうか。とても魅力的なイラストを描く方だ。

「なんて——そもそも、リリカルなのは好きなら知ってると思うけど、なのはの登場人物って、自動車関連の由来が多いでしょ。

だから、アヴェニールも日産の“アベニール”って車名から名づけたと思うから、むしろ『アベニールをさがして』の方が、本来の名称に近いのだからあー!”

『はあ……ヴィヴィオ、あなた、どうしてトーマにアヴェニールの姓が与えられたか、本当に理解しているの?』

「え? だから、自動車関連から選ばれただけでしょ。主人公っぽい、カッコイイ名前ってことで」

『違うわよ。アベニールは地球のフランス語で“未来”を意味するのよ』

「なにそれ、フューチャータイムで白ウオズだったの!?’

仮面ライダーウオズ……といっても、わたしがTVで見ていたころは変身者が黒ウオ

ズに変わっていたから、まさにトーマカラーである。

『他にも、アベニールには“将来性”なんて意味もあるわね。フランス語の辞書の用例では“有望な青年”なんて使い方もされているから、いい意味で主人公に相応しい名称として採用されたんでしょう』

「将来性に有望な青年かあ……ちゃんと考えられてたんだねえ……」

そこまでは知らなかった。

新シリーズの主人公として、トーマがいかにも期待されていたかわかる。

「わたしより待遇いい気が〜」

『リリカルなのはシリーズ初の男性主人公だものね』

信号で足を止めると、ふわふわ浮かぶサラちゃんが腕を組んだ。

『それはそれとして、トーマ・アヴェニールなだけ。わざわざ見に行かなくても、元の世界に帰れば会えるでしょ』

「それはー、そうなんだけどー」

この『Force』世界は1年先の未来——新暦81年なので、元の世界——新暦80年にも、トーマは普通に存在しているのだ。

星1カードみたいなものである。

レアリティは低い。

「ただね、わたしとトーマの関係って微妙なんだよ。『Force』にわたしが友情出演したみたいに、『Vi Vid』にも少しでいいからトーマが顔を見せてくれたらよかったのに……」

『そういえば登場しなかったわね』

『Vi Vid Strike!』にも、トーマが出ることはなかった。

お婆ちゃんが『う〜ん』と唸る。

『原作「Vi Vid」における、あなたとトーマの関係ってどうなってるの?』

「えつとね、原作中は一切触れられてない。だけど『GOD』でコラボしたとき、直接会ったことはなくて、スバルさんと一緒のとき通信で話しただけ——ってことになってた」

『それはまた、微妙な関係ねえ……』

「うん、そうなんだよねえ。でも、まあ、しょうがないんだけどね。そのころのトーマって保護施設に入ってたから。詳しくはわかんないけど、トーマの故郷の鉾山町ってヴァイゼンだから、保護施設もヴァイゼンにあったのかもしれないし……」

『ああ、第3管理世界ね』

「そーそー。トーマがナカジマ家以外、ヘリパイロットのアルトさんとも仲がいいのは、スバルさんとアルトさんが友人だからだけじゃなくて、アルトさんの出身もヴァイゼンだから——つてのもあっただろうし……」

ティアナさんと仲良くなるのはわかるけど、『どうしてアルトさんまで、アーちゃん?』と、理由を知るまでは悩んだものだ。

信号が青に変わり、わたしとお婆ちゃんは再び移動を始める。

『まあ、「Force」は黒歴史だからしようがないわよね』

「ちよ、勝手に『Force』を黒歴史扱いにしないでよおお?！」

『あら、確か「Vivid Strike!」の主人公——フーカとリンネは孤児院の出身だったわよね? 保護施設つながりでトーマとも顔見知りなんてことも可能だったはずでしょ。休載中の「Force」の設定を活かす絶好の機会だったじゃない』

「ううっ……でもでも、『GOD』じゃわたしとトーマと一緒に戦ってるんだから!」

『つまり、未来のトーマと会って、話したことがあるってことよね。だったら、やっぱり見に行く必要ないじゃない』

「あう……それはお婆ちゃんの言う通りなんだけど……だからこそ、なんだよ。」

知らないというか、覚えていない人の方が多いと思うんだけど、『GOD』のトーマって『Force』第二部以降の——新暦82年のトーマだから、わたしはまだ、新暦81年のトーマには会ったことないんだよ。」

普段の世界は、いわゆる「サザエさん時空」なので、この時代のトーマに会うことは一生できないのだ。

『あく、そういうこと……』

「うん。だから一度くらい拝んでおこうかなって」

『拝むねえ……そんなこと言つて、以前に登場したハーデイス・ヴァンデインのように、トーマも訳知り顔で現れそうよね』

「うわ、ありそう……」

いつもの小説は何でもアリになってきてるからなあ……。

「ていうか、今から『Force』のラスボスのハーデイスさんのところに行つて倒せたら、

『魔法戦記リリカルなのはForce 完』

みたいになるのかな?」

『本当、クロノトリガミみたいなことになってるわね』

「ちようど、強くてニューゲームみたいな感じだしね」

『Force』の漫画を読んでおり、おまけに今のわたしはちつちやくても聖王モードだ。

『まあ、惜しむらくは「Force」が「6巻+雑誌連載分」しか発表されていないことね』

「だね。そこまでなら無敵なのに」

逆に考えれば、そこまでなら無敵ということでもある。

エクリプスウィルス？ なにそれ美味しいの？？

『それで、そのトーマ・アヴェニールなんだけど、どこにいるかはわかってるのかしら？』

「それは『Force』1巻を読めば……つて、あれ？ 『Force』の事件つていつから始まったんだっけ??」

とりあえず、1巻の裏表紙に、

『新暦0081年、空戦魔導師・高町なのは25歳——』

と書いてあるので、新暦81年は間違いない。

「細かい日付まではわからないけど、トーマが厚手のジャケットを着てるから……」

『あら、アイシスつて子は半袖じゃない』

「……おや〜」

しかも、半袖パーカーの下は、丈の短いタンクトップというちよ〜薄着だ。

そういうえば、トーマとリレイさんが最初に立ち寄った港町も、温暖な気候だった。

『そもそも、舞台のルヴェラは、確か第23管理世界だったわよね。ミッドと同じ季節じゃないでしょ』

「うっ……」

そもそもミッドだって、首都近郊が真冬するとき、南国のミラベルは真夏だったりする。日本とオーストラリアみたいない関係だ。

「だったら、『Force』5巻でわたしが登場したとき、中等科の制服が夏服だったから、ミッドの衣替え前ということでしょう——」

『それもアウトね。5巻のころは、まだ「Vivid」の秋服が存在してなかったのよ』
年中夏服だ。

「ふんがつ! えへつ、じゃ、どうしろと……」

『そうね。かつての機動六課が再編成されたとなればニュースになってるでしょ。だから、この世界の情報網で、新たな特務六課の動きを追えば、現在が「Force」のどの辺りかわかるという——』

サラちゃんの動きがピタリと止まった。

『あら、ないわね。1巻最初の、フェディキアやイスタの事件についてのニュースも見つからないわ』

「それって、まだ『Force』の事件が発生していない。トーマがリレイさんと出会う前ってこと?」

『ええ、そういうことでしょうね』

「そつかく。となると……トーマって確か自分探しの旅の最中だったよね?」

『自分探し……まあ、踏ん切りをつけるための旅よね』

「お婆ちゃんがつけれなかったやつだね」

『ほほう……言ってくれるわね、ヴィヴィオ……』

中身はお婆ちゃんだけど、外見はサラちゃんなので、荒ぶる鷹のポーズもお可愛いこと！

「まあまあ、そういえば、こういうとき突っこんでくるリニスさんやアリシアさんはどうしたの？」

『あの子たちなら、エルトリアのギアーズたちと通信中よ』

「うわ、急がないと、トーマを見る前に戻されちゃうかも！」

アミティえもんは、時間移動に関する掟——航時法にうるさいのだ。

「いざとなったら、お姉ちゃんと連呼して滞在時間を引き伸ばさねば〜」

『嫌なお子様ね』

こうなると、いつまでものんびり考察している時間はない。

「しよがないかあ〜。攻略本や攻略サイトを見るようなものだけど、トーマが今現在どこを旅しているのか聞いちゃおつと」

『できるなら最初からそうしなさいよ』

一応、この世界のわたしのことを考えて遠慮していたのだ。

人通りの少ない公園に向かう。

「1巻を読む限りでは、トーマってちよくちよくスバルさんに連絡を入れてるでしょ」

1巻の出だしから、次元間通信が不自由な文化保護区で、電信絵葉書を送っていた。

きつと、新しい場所に移動する度、珍しいものを見たとき、こまめに連絡していたの
だろう。

「ナカジマ家の共有アルバムみたいなのもあるかもだけど、わたし知らないし。だから、スバルさんに直接聞いちゃおうかなって」

『大丈夫なの?』

「いや、最初はほら、スバルさんが、万が一『Force』2巻でフツケバインの飛空艇に乗りこんでる最中だったら大変かなって思ってたんだけど」

『危機感だいなしね』

「まだ1巻前みたいだし、大丈夫でしょ」

変身魔法を使い、わたしは中等科の制服を身にまとう。普段からアインハルトさんの制服を見ているので、再現度はバッチリだ。

あとはスバルさんに連絡を入れるだけ。

「お婆ちゃん、映像通信よろしく」

『はいはい。上手くやりなさいよ』

空間ディスプレイに、白い制服姿のスバルさんが映る。

「こんにちはスバルさん。ヴィヴィオです。今大丈夫ですか？」

『う、うん、大丈夫だけど……』

「あのく、ちよつと尋ねたいことがありますて〜」

『あ、あのさ、ヴィヴィオ。その前にちよつといいかな？』

「はい？」

『えつと……さつきノーヴェから連絡があつただけど、ヴィヴィオの偽物が出たとか
なんか……』

「っ!？」

ノーヴェ、こういうときの対応早すぎく。

わたしは「あはは」と乾いた笑みを浮かべる。

「えつとー、確かにわたしの偽物というかそつくりさんが出たんですが、アインハルトさんとミウラさんが撃退してくれたので、もう平気ですよ。それに、何か被害が出たわけじゃないですしねー」

『あー、そうなんだ。それで、なんだけど……気を悪くしないで聞いてね。そのう、ヴィヴィオの横に浮かんでる、クリスじゃないお人形さんは何かな〜つて。ノーヴェが言つてた偽物のデバイスの特徴によく似てるんだけど。リンさんっぽいところか』

「あ」

『あ』

プレシアお婆ちやあゝんっ!!

『フツ……』

開き直ったのか、焦るでもなく、腕を組んで踏ん反り返るサラちゃん……お可愛いこと!
と!

くっ……。

こうなったらわたしも……。

「ふっ……よく気づいたね、スバル!」

お婆ちゃんを見習い、腕を組んで踏ん反り返った。

『うわく、やつぱり偽物だったああ!?!』

「わたしの名前は、V2 (ブイツー)!」

アサルトバスターは流石にアレなので今回はパス。

『えっと、それってヴィヴィだからVが2つってこと?』

「違うないけど違うの!」

『ええええ〜っ!?!』

「トーにーかーく、わたしは今、トーマがどこにいるのか知りたいだけなの。それだけ教えてくれれば、これからもずっとへい……平和じゃないかもだけど、大丈夫、スバルさんがトーマのことを信じていれば、夢はきつと叶う!」

『え、なに、その締め方!?! 意味わかんないんだけど!?!』

しょうがない。こうなったら、

「スバルさん……教えてくれないと、暴れ……じゃなかった、マツハキャリバーでテイアナさんをローアングルで撮影しまくってたつてこと、みんなにバラしちゃいますよ?!」
てか、考えてみたら、なのはママとフェイトママのローアングルだつて多いですよ
ねええ!?! しかも六課時代の大切な思い出だからつて、絶対消さずに持つてますよ
ねええ!?!」

『な、な、なんで知つてるの、ヴィヴィオおお——っ!?!』
「執務官に通報しました」

『やめてええ!』

「ほーら、ほーら、ノーヴェヤやトーマにもチクつちやいますよ、いいんですか?」
『くっ……の、ノーヴェはいとしても、とーまには〜』

「弟の前では、いいお姉さんでいたいですもんねえ〜。というわけで交渉成立ですなー」

『弟じゃないけど、ううっ……こんなあくどい子がヴィヴィオのわけない……』

「ふっふくん、悪魔でいいよ!」

『!? それってなのはさんの……』

「おおっと。スバルさん……この世界にはまだまだ魔導や科学じゃ解明できないこともあるんですよ。というわけで、トーマの行き先を教えてください」

『……悪用しない?』

「はい。それはもちろん。なのはママとオリヴィエ、それに……そうですね、クイントさんに誓って」

『……はあ、母さんに誓われちゃね。ところでヴィヴィオ』

「はい?」

『はいって……』

しまった。

『V2、だっけ。やつぱりヴィヴィオなんじゃないの?』

「……違いますよ。この世界の高町ヴィヴィオは、今もナカジマジムでノーヴェエやアインハルトさんと一緒に練習中の女の子なんです。わたしとは別人。それでいいんです。だってわたし、クリスマスもないですしね。もし会うことがあっても、V2でお願いますね」

まず会うことはないだろうけど。

『了解……って、あ、そうだ。今度の出張、なのはさんと待ち合わせてるんだけど、何か伝えておくことある?』

「へ? ママに……って、だからヴィヴィオじゃないよー」

こうして、スバルさんからトーマの現在位置を聞き出したわたしは、空間ディスプレイを閉じた。

「お婆ちゃん、トーマ、もうルヴェラにいるって」

『そう。でも、電信絵葉書が届いていないところを見ると、ギリギリセーフ。「Fore」の物語が始まる直前といったところね』

「ということは、今から急いで向かえば、事件に巻き込まれることもないだろうし……なんていうか、このタイムリミットがあるドキドキ感」

『懐かしいわね。私も、私の庭園に踏みこんできた、あなたの母親とフレット、それに黒い執務官がいつ来るかと……』

「それ、ガチなやつだよね」

サラちゃん越しに哀愁を感じる。

『それで、あなた、どうやって第23管理世界の“ルヴェラ”に渡るつもりなの?』

「そりやもちろん、中央次元港から船に乗って……。お金ならお年玉を貯めた分が

……って、クリスがない! あ、それどころか、この世界で支払った場合、この世界のわたしのお金を使ったことになるの!」

『そういうことよ』

なんてこつたい……。

「わたし、無一文じゃん……」

はやてさんみたいに、懐かしのorzポーズで、両手両膝を地面につけた。

『安心しなさい、ヴィヴィオ。こんなこともあろうかと調べておいたのだけど、この世界にも、私が別名義で作っておいた口座がいくつか残っていたわ』

「え、ナニソレ?」

『そうね。あなたが好きな言葉でいえば、プレシア・テストロッサの隠し財産——さしずめ、プレシア・テストロッサの埋蔵金といったところかしら』

「ま、埋蔵金?!」

【次回予告】

プレシア・テストロッサの埋蔵金って……隠した本人がいるんだから、徳川埋蔵金やM資金、テンプル騎士団の財宝なんかよりずっと現実味がある……っていうか、もう、完全にあるよね!! ヤバイ、わたし次回から大金持ちだ!

次回【この世界が『Force』だとわたしだけが知っている】第6話。

【アインハルトさんのバイザーでは3倍のスピードは出ない】
で、リリカルマジカルがんばります！

第6話 アインハルトさんのバイザーでは3倍のスピードは出ない

ミッドチルダ中央市街地にある人気のない公園。わたしは周囲の様子をうかがいながら小声でサラちゃん（ガンプラ）を操る大魔導師に尋ねた。

「プレシアお婆ちゃん、本当に埋蔵金——隠し財産なんてあるの？」

『ええ。賠償金や特許料もあつたけど、それだけで“時の庭園”を購入したあとの、維持費や研究費用が賄えるなんて、あなたも思わなかつたでしょ？』

「それは……」

100体以上のゴーレムの制作費などを含めて、確かに、個人で得られる額を遥かに超えている。

『表向きの収入とは別に手に入れた資金は、複数の次元世界に分散して、それぞれ別名義で口座を作つてあるのよ。もちろん、ほとんどが事件後に押さえられたみたいだけど、アルフやフェイトの知らない口座はいくつもあるわ』

「つまり、この世界のお婆ちゃんが亡くなつたあとも、亡くなつたと知られないまま、休眠口座みたいになつてること？」

『ええ。口座管理料がかかる世界もあるけれど、私の預金額に比べればたいしたことないもの。それどころか、むしろそういった金融機関の方が残っているようなね』

まさに現代の埋蔵金だ。

『チケットは私が購入しておくから、あとはパスポートなんだけど……そうね、昔フェイトに用意したのがいくつかあったから……』

そういえば、フェイトママってジュエルシードを手に入れるため地球へ来る前にも、お婆ちゃんの手指示で複数の世界を渡り、捜し物をしていたので。

時の庭園は目立つので、民間の次元船や転送ポートを使うこともあっただろう。

しかし、違法クローンであったフェイトママに正式な身分証明があったとは思えない。亡くなったアリシアさんの番号も使えない。

渡航許可を得ようとしたら、

「……ん？ それって偽造パスポートというやつなのでは？」

『ヴィヴィオ、そういうときは発想の転換をするの。』

アクシズから地球圏に帰還したシャア・アズナブルは、クワトロ・バジーナという戸籍と連邦軍の軍籍を手に入れて、エウーゴに参加したでしょ』

「な、なるほど……」

《ヴィヴィオ、またママにだまされてるって》

「アリシアさん!」

サラちゃんから聞こえてきたのは、お婆ちゃんではなく、水樹奈々さんのロリボイス。
「王様やアマタさんとの話し合いは終わったの?」

《なんかね、思ったより面倒くさいことになってるから、もう少し待って欲しいって》

それはむしろチャンスかも。

「あー、急がないからごゆっくり伝えておいてもらえるとうれしいです」

《かしまり。レヴィに伝えとくね》

フェイトママ顔の2人を思い浮かべる。

レヴィかあ。

アリシアさんと気が合いそうだよねえ。魔力光も似ているし。

とりあえず、

「お婆ちゃん。こつちの世界のわたしに、これ以上迷惑をかけたくないので、シャア方式でお願いします」

『ええ、わかつたわ。それとヴィヴィオ、あなた洋服も買わないとね』

「あ」

そういえば靴下のままだっけ。

わたしは気にならないけど、身に着けている物も、最初の爆発の際にところどころ焦げている。人によつては「みすぼらしい」と感じるかもしれない。

「変身魔法じゃダメかな？」

『空港で検査されるでしょ』

「そうでした」

どうせ一時的だしなあ。

いくらこの世界では故人といつてもお婆ちゃんのお金だ。出費は抑えよう。

この辺りで一番安いアパレルショップといえば……。

『それと、お金は気にしなくていいから、しっかりした物を買いなさい』

「あう」

『言葉づかいと同じ。それなりにいい品を身に着けていれば、空港のチェックも甘くなるよ。「Force」6巻で、いつもと違いスーツ姿のフツケバイン首領と手下が、乗

客として悠々と次元船に乗っていたでしよ。そんなものなのよ』

言われてみれば、3巻の空中戦で2人の姿は撮影されている。さらに、魔導事典によるとフツケバインは、

『凶悪犯罪集団として広域指名手配がかけられた武装グループ』
となっている。

『Force』の1期〜2期までの時間経過を考えれば、当然、姿形データと共に、さらなる手配がかけられているだろう。次元港なら特に厳しい。

顔認識システム——とかは考えたらダメなんだろうなあ。

「ピーチ城みたいな警備ってこと？」

『違うわよ。キノピオはあれでも頑張ってるのよ』

意外にもお婆ちゃんやキノコ族に優しい。マリオシリーズをプレイして思うところでもあったのかもしれない。

『あなた「Vivid LIFE」2巻で、アインハルトが怪しい黒ジャージにカツアゲされてると思ひ、助けようと挑んだら、実はチャンピオンの子だったでしよ？』

「あ〜」

ジークさんだ。

「だってパーカーのフードを被ってて、顔が見えなかったから」

『そういうことよ。認知バイアスや光背効果って聞いたことあるでしょ。逆もまた然り。人間はね、外見がしつかりしているだけで、無意識に相手を信頼してしまうものなのよ』

だからフツケバインもスーツだったのか。

そういえば、4巻でヴァンデインの工場を襲撃したときも、潜入するためスーツ姿に変装してたっけ。

「だつたらわたしも学校の制服とか……あ、それじゃこつちのわたしに迷惑がかかるか……」

普段着も同様。

できるだけ、いつものわたしとは違う格好をした方がいいのかもしれない。

例えば、

「常にノースリーブとか？」

『クワトロじゃないんだから……って、あなた、元々ノースリーブ多いじゃない』
ノースリーブどころか肌色が多い。

「つまり、発想の転換で、クワトロではなくシャアっぽい格好をすればいいと？」

ヘルメットに仮面。

『いやいやいや、せめてフル・フロンタルくらいにしときなさい』

「全裸だけに？」

『そうそう』

フル・フロンタルは「全裸」って意味なのだ。

《アホなことばかり言っていないで、早く洋服を買ってください》

テストロッサ家の良心に怒られた。

「リニスさん、もしかして、もう帰還準備が整っちゃったとか!？」

《いえ、まだですが、エルトリア側に転移座標のデータは送ったので、急がないと目的達成前に帰ることになりますよ》

それは大変。急いで大型のショッピングモールに向かう。

いつもは着ないような格好ということで、民族衣装っぽいファッションを集めたセレクトショップに入る。

「お、これってイクスが着てたガリアの民族衣装みたいかも」

文化保護区や管理外世界の衣装が多く、中には「コスプレか!？」と思うような中世の

衣装まである。

「これはイスタで、こっちはリオの実家のだし……」

これはこれで迷うかも！

すると、ふわふわ飛んでいたサラちゃんが動きを止めた。

《あら、プレシア、これって……》

『あ……あー、そうね』

リニスさんに対して、お婆ちゃんの歯切れが悪い。はて、何だろうと思ひ見ると、「これ、フェイトママが子供のころ着てた服に似てるかも」

『A's』や『The MOVIE 2nd A's』の夢の中で着ていた衣装といえば、わかる方も多いだろう。

シンプルな丈の短い白のワンピース……というかチュニックに、黒いマントと黒い靴。そして赤いベルト。

『ヴィヴィオ、こんな服は気にせず、自分が気に入ったものを選びなさい。あなた、クワトロ大尉みたいな格好にするんでしょ』

「そんな襟を立てたりノースリーブにはしないよっ!? まあ、ちよつとは惹かれる部分

があるけど〜」

《あゝ、惹かれるんですねえ。でも、赤色は目立ちますよ?》

「うっ……」

わたしもそう思う。

Zガンダムでアポリーやロベルトが亡くなったのも、リック・ディアスを赤色に塗っちゃったことが原因な気もするし。いや、もちろんそれだけじゃないけど……。

「ヴイータさんも、普段は赤色じゃないしねえ……。まあ、バリアジャケットだけなら赤色もありだと思っけど」

3倍早くなりそうだし。

『そう? だったら考えておくわ』

嫌な未来をひしひしと感じる。

わたしニュータイプじゃないんだけどなあ。聖王家の遺伝子にも、流石にそんなスキルはないだろう。命中や回避に補正がかかって、ファンネル（リリカルなのはならブラスタービット）の射程が伸びるのだ。

「そういえば、とてつもなくどーでもいいことなんだけど、シャアって、どうして逆シャ

アのときだけ黄色のノーマルスーツだったのかな?」

モビルスーツ同様、ずっと赤系統だったのに……。

一度、別の人の意見を聞いてみたかったのだ。

『そうね……色々と説があるようだけど、私なら、アムロと決着をつけるため、あえてラアアのノーマルスーツと同じ黄色にした——なんてどうかしら?』

そりゃ新説だ。

リニスさんの落ち着いた声が聞こえてくる。

《ガンダム話は置いといて、これから向かうルヴェエラで違和感がない格好を選ぶといいと思いますよ》

なるほど。

『Force』の魔導辞典には、

『ルヴェエラ地方は雄大な自然の景観や旧歴中期から続く閑静な町並みが保護指定されており、観光地として賑わっている』

と書いてある。

そうなるよ、

「ルヴェラの町並みにもあつてるし、フェイトママの子供のころの格好がちょうどいいかも」

『もつとあなたに似合う、カラフルで可愛い洋服があるでしょ』

「シンプルだけど、これはこれでいいモノだと思うよ?」

マ・クベの壺じゃないけど、あれはいいものだけ。

『はあ……あなたも物好きね』

あの当時のプレシアお婆ちゃんが、フェイトママに「アリシアさんの使っていた洋服をそのまま着させた」とは思えない。

リニスさんの衣装と色合いが似ているので、彼女が購入した可能性もあるけれど、わたしとしては「最初の一着だけは、フェイトママとリニスさんの衣装を、プレシアお婆ちゃん本人が選んだ」のではないかと思っっている。

何の根拠もないけれど、今のわたしと同じように、アリシアさんが着たことはないけれど、1度は着させてみたかった、流行とは違う衣服。それが、このシンプルな衣装なのではないか——。

現在のお婆ちゃんにとっては、黒歴史なんて言葉じゃ言い表すことができないほどの葛藤があるのかもしれない。

自己嫌悪の象徴。

けれど、

「フェイトママも嫌いじゃなかったと思うよ。今も黒コーデが多いし」

『そう……』

早速試着。ついでに鏡を見ながら髪型を黒いリボンでツインテールにする。

お婆ちゃんにとつては、モリサマーが凸守からミヨルニルハンマーをポコポコ食らつてるような気分だろうけど。

『本当、嫌になるくらい昔のあの子に似ているわね……』

《こう、なんででしょう、新型バルディッシュを作りたくありませんね》

「あはは」

ちなみに、なんだけど、わたしの黒いリボンのツインテール姿は、『ViVid』19巻の特典などで見ることができる。

(新しいところでは『Detonation』パンフレットの巻末漫画でも見れます)。

19巻では、なのはママたちとバリアジャケットを交換するという企画イラストで、わたしは『StrikerS』時代の、フェイトママの真ソニックフォームの格好をしているため、ツインテなのだ。

このときのイラストでいうと、はやてさんが一番エッチで（まさか、ミウラさんの格好でエロいと思う日が来ようとは……）、なのはママは異常に強そうで（戦ったらワンパンで負ける気がする）、フェイトママは……あの歳でアインハルトさんの髪型は（へぷうう!?)。

わたしを見つめて、サラちゃんがわずかに小首を傾げた。

『確かにいつものあなたと雰囲気は違うのだけど、紅と翠の虹彩異色の瞳で、すぐにバレそうね』

《そうですねえ、リボンの色でも変えてみましょうか?》

服装がシンプルになったことで、逆に瞳の色が目立つらしい。

「そんなこと言われても……って、こ、コレは!?!」

サングラスでもないかと思ひ、装飾品のコーナーをのぞいていたら、中央の黄色く波打つ線が怪しく光る、ジオン系モビルスーツみたいな黒いバイザーを発見した。

よくわからない人のために比較的最近の作品で例えるなら、ゴブリンスレイヤーの剣の乙女の目隠しとか、ゴドー検事の赤いバイザーの入った仮面みたいなもの。

「……ていうか、アインハルトさんが初登場時にしたバイザーにそっくりだあ!」

どこかで購入したか、参考にしたものだとは思っていたけど、まさか、まさか、こんなところで出会えるなんて……。

「コレだ、コレしかない……」

『落ち着きなさい、ヴィヴィオ。アインハルトのバイザーでは、3倍速くはならないのよ？』

《シヤアの仮面にも、3倍速くなるような効果は付与されていませんよ？ 固有スキルです》

固有スキル!?

か、どうかは置いといて、

「わたしがクワトロみたいなサングラスかけると、シヤアみたいな仮面つけるのと、鉄仮面（F91）みたいな被るのと、アインハルトさんみたいなバイザーつけるの、どれがいいと思う?」

『……バイザーね』

《……バイザーですわね》

満場一致でアインハルトさんのバイザーに決まった。

驚くべきことに、シヤア他に比べると、アインハルトさんのバイザーなんて、お可愛
いことだったのだ。それに、

「元の世界に帰ったら、アインハルトさんごっこことかできそうだし」

『それ、断空拳を食らうオチしか見えないわよ?』

リオかユミナさんにつけてもらおう。

こうしてわたしは空港から次元船に乗り、『Force』1巻の舞台である、第23管
理世界ルヴェラへと降り立った。

観光を一切せずに、文化保護区にある山向こうの教会を目指す。

確かミヘナ街道沿いだったはず。

到着したところには、すっかり日が沈んでいた。周囲に他の家屋がないせいか、森の中
に教会の灯りだけがポツカリ浮かんで見える。

中に入り、1巻に登場した眼鏡をかけた老シスター——この人、亡くなっちゃうんだ
よなあ——に確認すると、最近、電信絵葉書を送信した男性はいないという。

「ひよつとしたら追い抜いちやったのかな……?」

『そうね。トーマが教会を訪ねたのは昼間だもの。まだ、近くの街の宿に泊まっているのかもれないわね』

リレイさんを抱きかかえていれば『ゆうべはおたのしみでしたね』なんだろうけど、そういうイベントが発生することもなく、ぐっすり休憩していることだろう。

そういえば、今年のエイプリルフールの『FGOクエスト』で唯一残念だったのが、姫を抱えて宿屋に泊まったときの台詞だ。

アレさえドラクエIっぽかったら、100点だったのに……。星3つどころか、星333くらいである。

とはいえ、

「あく、ここでタイムアップかあく」

わたしはカウンターに手をかけ、しゃがみこんだ。

ドラマCDでの、転移から帰還までの時間を考えると、この辺りが限界だろう。

「十分もつたともいえるのかなあ……」

おとなしく、1年前の世界に時間移動しよう。みやげ話もいっぱいできたし。

すると、しばらく無言で浮いていたサラちゃんから『安心しなさい』という声が聞こえてきた。

『今しがたギアーズから連絡があったのだけど、もう少しかかるそうよ。できればこち

らの世界で一泊して欲しいって』

「ホントに?」

本来なら、帰還に手間取るのは困るところだけど、今回ばかりはラツキーだ。感謝。

さらに幸運なことに、老シスターによると、この教会は簡易的な宿泊施設としても利用できるという。

昨今流行りの宿坊ではないけれど、旅行者にとってはありがたいサービス。

「漫画じゃなかったよね?」

こんなサービス滅多にしないんだからね。

そういえば、N●Kの全マクロス大投票のキャラ部門では、シエリル・ノームが1位だった。

とても素晴らしい企画だったと思うのだけど、もし、唯一欠点があるとするならば、マクロス系ゲームのキャラや機体が、含まれなかったということ。

YF-30 クロノスに1票入れたかったのに。

『漫画だけじゃわからないことも多いでしょう』

確かに……。

漫画でも、見えない部分で泊まっていた人がいたのかもしれない。

簡単な手続き済ませて食堂へ向かう。

「ホントだ。わたし以外にも宿泊客がいるんだね」

トーマと同じ観光目的だろうか？

後ろ姿しか見えないものの、若いシスターと話している幼い女の子や、ツンツン頭の男性などがいた。

ツンツン頭……。

「トーマはトーマでも、上条当麻オチだったりして」

『リリイと銀十字じゃなくて、禁書目録でしたら、みたいなの？』

「そうそう。トーマ、お腹すいたー、とか言い出すの」

『嫌なフラグね……』

ちなみに、2018年秋から放映していた『とある魔術の禁書目録Ⅲ』は、原作を読んでも「流石に駆け足だったかなあ」と思う。

ただ、アレで懲りずに、レイヴィニア・バードウェイに振り回される、いかにも不幸な上条さんらしい『とある魔術の禁書目録SP』の漫画や新約の2巻、あるいは超電磁砲ファンも納得してくれそうな、ドキッ！ 水着だらけの新約16巻も映像化して欲しいものだ。

「あ、食蜂操祈と上条さんの過去話の新約11巻も捨てがたいけどね！」

『あなたそんなこと言っていると、本当に上条当麻……いえ「とある魔術の禁書目録たん」

「みたいな世界になっちゃうわよ？」

「うわ。髪の毛引っこ抜かれそう。」

「そういえばサラちゃんのカラーって、リンさんだけじゃなく、インなんとかさんとも似てるような……」

『フラグの重ねがけは止めなさい』

そんなことを話しながら、食事を終えた私は清潔なベッドでばたんきゅー。流石に疲れました。

そして翌日――。

窓ガラスから朝日が差し込む中「ん〜」と伸びをしながら廊下に出ると、通路の先から何やら話し声が聞こえる。

『ミッドチルダ宛ての電信絵葉書の送信、お願いできますかー？』

をを！

再び室内へ。

お婆ちゃんはまだ寝ているのか、ベッドの上のサラちゃんから反応はない。調べる。

へんじがない、ただのガンプラのようだ。

「お婆ちゃん、先行ってるね！」

わたしは霸王バイザーをつけると、黒いマントを羽織ってタタタと現場へ急ぐ。

目指すは眼鏡の老シスターがいる入り口カウンター。

そこに立っていたのは、

「トーマ!?!」

「ん?」

振り返ったのは、わたしよりちよつと年下で、ショートヘアの女の子。たぶん、昨晚食堂で見かけた子供だった。

「ごめん、間違え——」

「んー、とーまなら、あたしもとーまだな」

「はい?」

「あたし、とーま。とーま・ナカジマ、9歳っ!」

【次回予告】

とーま、とーま、トーマ……。ナカジマ姓つてことは、ナカジマ家だし、やっぱりあ

のトーマなんだよね？ でもなんで女の子？ アヴェニールはどこいったの?? ただ偶然名前が似てるだけで、本物は別にいるとか??? 禁書目録どころか、まったく別人なんですけどおお???

次回【この世界が『Force』だとわたしだけが知っている】第7話。

【わたしにとーまが舞い降りた!】
で、リリカルマジカルがんばります!

第6・5話 コロナとモノアイガンダムズ

「むむつ、ヴィヴィオがノースリーブで襟を立てたクワトロ大尉みたいな格好をしようとしている！」

というわけでみなさんこんにちは、コロナ・テイミルです。

完全なるメタ発言（いつもこと）ですが、ヴィヴィオが『魔法戦記リリカルなのはF or ce』の世界に飛ばされてからはや……早くない！ まだ半日も経ってない！

随分長いようできて、実はまだ数時間しか経過していないという……。

ナメック星が爆発するまであと5分で、2か月以上戦っていた国民的アニメ（事情はお察しします）に比べれば短いものですが、ヴィヴィオも大概です。

なので、当然こちらの世界——元の世界でも、ほとんど時間が経過していないわけで、当初の目的——ヴィヴィオとのガン普拉バトルのため、私も新しい機体を完成させるべく休日返上でナカジマジムへやってきた——という次第です。

「そんなわけで、本日ご用意いたしましたのは、2019年4月27日に発売したガンブラ『SDガンダム クロスシルエット シスクード』です。

この『シスクード』というガンダムタイプのモビルスーツ。聞き慣れない方もいる

と思いますが、ゲーム『SDガンダムGジェネレーション モノアイガンダムズ』に登場するガンダムタイプのオリジナル機体です。

モノアイガンダムズのストーリーは、初代ガンダムの終盤からZガンダムまでを舞台としていきます。

かつてCMで流れた、

『ほう、まるでモノアイガンダムだな』

『私が奪取したのはMk—IIだけではない!』

というクワトロ大尉の台詞からもわかるように、Mk—IIとは別にティターンズが開発していた試作モビルスーツを奪ったという設定です。

ツインアイのガンダムと違い、他のティターンズ機と同じ、ジオン系モノアイを採用しているところが特徴でしょうか。額のツノでわかりにくいですが、単眼のガンダムという点が、ファン心をくすぐるのでしょう。

公式の宇宙世紀の歴史には含まれないIF機体ですが、地味に人気が高く、採算が取れるであろうことから、ついにガンプラとして立体化を果たしたわけです。

ひよつとしたら、単純に現在のバンダイのクロスシルエツト担当者が、モノアイガンダムズ好きだけかもしれません……」

などと、私が一人でガンプラ片手に熱弁していると、ナカジマジムの休憩所のドアが

勢いよく開いた。

「コロナ、なにこんなところで動画投稿みたいなことしてんの?」

中に入ってきたのは、私の友人でヴィヴィオの飼ってる黒いわんこみたいなの——

「すっごい失礼なこと思われてる気がするんだけど……」

「思っていない、思っていないよ、リオ。いつも感じてることだから」

「そっかー、いつも感じてることならしょうがないよね……ん、ん?」

待て、待てだよ、リオ。ステイ。

「そんなことよりどうしたの? 今日練習お休みだよ。私はほら、ナカジマジムの休憩所って一般のお客さんが入ってこないし、少し狭いし、雑然と積まれたダンボールに、ちよつとボロつちいソファアールと机とパイプ椅子に、いかにもなオフィスキャビネットという、この部室感が——」

「部室とか言うなよおお!」

荷物を取りにきたのか、ノーヴェエ会長が顔だけ見せて帰っていく。

リオが苦笑しながら、

「まあ、実際部活動みたいな感じだよねえ。あたしたちからしてみれば」

「……ガン普拉バトル部？」

「違うよ!? それコロナだけだから！」

「ここに来るといいアイディアが浮かんでくるんだよねえ……イオリ・セイの魂が宿ったような……」

「あー、うん。あたしは、ほら、今日はヴィヴィオもアインハルトさんもいないから、その隙に少しでも練習しようかと思って」

ちなみに、ミウラさんとフーカさんもお休みだ。

「そっか……リオが自主練かあ……。ふう、ヴィヴィオ、『Force』世界から帰ってこないかも……」

「そんな空から仮面ライダーギンガ（杉田ボイス）が降ってくるようなことないよー！」
うん。わかりにくいけど、雨とか雪とか槍が降ってくるみたいなりオ流の比喩だろう。

すると、再び休憩所のドアが開いた。

「2人とも遊んでるなら手伝ってよー」

ノーヴェ会長に続いて顔を見せたのは、

「ナイトリーダー！」

「バイトリリーダーだよ!？」

ナカジマジムのバイトリリーダーで、選手部門のマネージャー。アインハルトさんの同級生でもある。

「ユミナさん、ノーヴェ会長と一緒に書類整理してたんじや?」

「してたよ……してたけど……私も出番が欲しいんだよおお!」

「あゝ」

『Force』世界に私がいなくてどーいうこと!? ヴィヴィオちゃん陛下の陰謀なの!? ヴィヴィオちゃんが望んだ世界ってオチなの!?」

ユミナさんがミュージカルのように天を仰ぐ。

「ああ、どうして私の出番はないの？ 私、何かしたかな？」

「んー、ボンキュツボンとか歌ってたからなんじや……う？」

「それ、関係ないよねええ！ 中の人だけでええ！ そういうコロナちゃんだって、中の人忙しかったんじゃないの、久しぶりにネウロイと戦って……戦って……なかったね、アレ」

「そうですね。主に、ハルトマンさんとルツキーニちゃんとシャーリーさんのイタズラと、ミーナ中佐の料理と戦っていた気がします。エイラさんの病も深刻化してましたし」

「お疲れ様でーすっ！」

「私、いつも思うんですよね。ノーヴエ会長とルツキーニちゃんの中の人が一緒って……ないなーって……別人だよ！ 声優さんすぎすぎだよ！ リオはどう思う？」

「あたしに振られてもー」

「ガハラさんやほむらちゃんるとき一緒だったでしょ？」

「いやいやいや」

「私としては、ルツキーニちゃんの中身がリオでしたらっつていう方が、まだ納得いくんだけど」

「それはわかるかも」

ユミナさんも「うんうん」頷いてくれる。

「そんなイタズラキヤラばっかじゃないからあたしいい！」

「——というわけで、本日はシスクードを組み立てたいと思います」

「何がというわけなのかわからないけど……はあ、私も戻ってバイトに励みますかー」

「そういえば、ミカヤさんは？」

ノーヴェエさん、ユミナさんと来たら、あとはナカジマジム顧問取締役にして、天瞳流抜刀居合・師範のミカヤさんなのだけど。

「……逃げた」

「あの泰然とした感じに騙されちゃうけど、何気にミカヤさんって脳筋タイプだよねえ」
「リオちゃんもね。コロナちゃん、早く私の右腕になつて〜」

そう言い残し、ユミナさんは手を振って戦場に戻っていった。

南無……。

リオは私の隣に座ると、シスクードのパッケージを手にして側面を眺めている。

「ねえコロナ。クロスシルエツトって作ったことないんだけど、SDガンダムのBB戦

士とどう違うの？ これもSDガンダムシリーズだよな？」

「うん。2種類の内部フレームが使って、昔ながらの低い頭身のSDガンダムと、少し背が伸びたSDガンダムも楽しめる、ってところが売りなんだけど……」

「売りなんだけど？」

「その、最初に買って入っているのが、昔ながらの低い頭身のフレームだけで、背が高いクロスシルエットフレームというのは別売りだから、単体で買った場合は“これ”と違った違いは感じられないかな。組み立てる感覚も同じだし」

「ふうん。じゃあ、あんまり意味ないシリーズってこと？」

「それがね、このクロスシルエット、組み立てるとわかるんだけど、これまでのシリーズ以上に、頭と体、手足が、簡単に取り外しできるんだよね。足の付け根がスポスポ抜けやすいのもあるし」

「それって欠点なんじゃ……」

「うん、欠点。だけど、リオ、よく考えてみて。内部のフレームが共通で、頭や手足が取り外ししやすいってことは？」

「……ん、あれ？ ひよつとして交換しやすいってこと？」

「そう、当たり。欠点であると同時に、他のクロスシルエットの機体と自由に付け替えてきるといふ強みでもあるの。全てを試したわけじゃないけど、クロスシルエット以外の

B B戦士の頭や腕とも交換できたしね。足や武器は合わなかったけど」

「それって、リアル、ガンダムブレイカーみたいに遊べるってこと？」

「そうそう。バックパックはダメだけど、それ以外なら組み換え自由。Zザクみたいなのが簡単にできるの。フレームがティンペットっぽいから、メダロットを思い出すかもだけど」

「それはちよつと面白そうかも……」

「しかもだよ！ このクロスシルエットシリーズは、なんと、SDガンダム系だけじゃなくて、マジンガーやゲッターといったダイナミック企画系の機体まで発売されているんだよおお！」

「マジで!? それってもはや、ガンダムブレイカーじゃなくて、スパロボブレイカーになつちやうつてことおお!？」

「ところがどっこい！ 同じクロスシルエットシリーズのはずなのに、内部フレームがガンダム系とマジンガー系で、別タイプの物を採用してるんだよおお!？」

「なにそれエエ!？」

「おかしいよね？ 一応、頭や腕は交換できたけど、SDフレームだけじゃ足はダメだった。武器はOKだったから、ガンダム系にマジンガーブレードを持たせたり、逆に、このシスクードのIフィールド・ランチャーをマジンガーに持たせることはできるけど」

「マジンガーにビームライフルかあ……」

「それはともかく、この共通フレームが1つの売りなのに、あほかうと思っただけど……」

「あー、うん」

「このマジンガー系、なんと、別のフレームを買わなくても、頭身を自由に変えられるんだよおお!!」

「あれ、マジンガー系のフレームの方が優秀ってこと?」

「うん。しかも、完成度がやたらと高い。グレートマジンガーのSD体型なんて、ただ組み立てただけなのに、パッケージ横の写真よりかつこよく見えるという……こんな経験初めてだったよおお!!」

「うわ」

「ちなみに、頭を交換してみてもわかりました。マジンガーのボディにガンダムの頭部を乗せると違和感がハンパないです。モノアイ系の頭部なんて乗せた日には、機械獣みたいでした。逆に、ガンダム系のボディにマジンガー系の頭部は、ゲシュペンストみたいな感じでいけないこともないです。場合によってはマジンカイザーにも勝てそうな、新型マジンガーっぽいです」

「へ」

劍鉄也さんなら乗りこなせるだろう。

「ただ……まあ、色々と言ってきたけど、説明書通りに組み立てるだけで、無改造のまま、手軽に自分のオリジナル機体を作れるってことでもあるしね。シリーズの機体が増えれば増えるほど、楽しみ方の幅が広がるんじゃないかな？　特にガンダム系以外の機体が増えてきたら、もっと面白いことになりそう」

「そっか〜」

目を輝かせたりオが、シスクードの箱を開ける。

「中身も普通のガンブラだね。2つのフレームっていうから、もっと違うの想像してた」
「うん。だからってわけじゃないんだけど、一度組み立てると、別のフレームに変えるのは大変かも」

「あれ？　フレーム交換できるのが売りなんじゃなかったの？」

「う〜ん、これはあくまで個人的な意見なんだけど、最初にどちらか一方に決めてから組み立てた方がいいかも。何度もフレーム交換するような商品ではないと思う。大変だし。その点でもマジンガー系のフレームの方が優秀なんだよねえ……早くどちらかに統一しちやえばいいのに……」

話しながらシスクードを組み立て始める。

「説明書に書いてあるように、ほとんどのパーツが手で取れるんだけど、ハロブラほど

じゃないし、最初はニツパーを使って、最後残り一箇所を指で押すと楽に外せる……みたいな感じかな」

「こうして見ると、ホントにふっりのガンプラだねえ」

「そうだねえ……でも、どうしてもっていうなら、ほら、見て、普通ガンプラって頭部から作ることが多いでしょ。でも、このシスクードの取説といい、クロスボーンもそうだったけど、体と手足を組み立ててドッキングさせてから、最後に頭の組み立てなんだよね。そこところがちよつと違うかも」

「そーいうのは、どーでもいいかも……」

と言いながら、リオがいきなりシスクードの頭から作り始める。

ふおお、一番楽しい部分を。

「リアル頭身のイラストだと気づかなかったけど、シスクードって、この黄色いツノがなだけで、ジオン系のモビルスーツみたいだねえ」

ツノを外した状態の頭部を、リオは胴体に乗せた。さらに感想を続ける。

「ティターンズのガンダムという意味では、バーザムっぽいし。でもバツクパツクの形が羽つばいから、全体的にはザフトのクルーゼ専用の白いシグーっぽいかも」

あー、言われてみると……。

「本当だ。確かに、似てるかも。そういえばネットで、モノアイガンダムズを調べると――

「

『発売時期は「機動戦士ガンダムSEED」放映開始前であったが、隠し機体としてストライクガンダム（初期稿の装備タイプ）が登場する』

ニコニコ大百科『SDガンダム GENERATION モノアイガンダムズ』より

「——みたいに書いてあるから、少しくらいはSEEDのモビルスーツの影響を受けてた可能性はあるのかも……というかつノがないとこれ、白いシナンジュにも見えるような」

シナンジュ・スタインとは違う。モノアイである赤いシナンジュの色違い。

「そういえばコロナ。シナンジュも、ある意味モノアイガンダムなんじゃない?」

「うーん、そんなことを言い出したら、リック・ディアスとディジェも、モノアイガンダムになっちゃうけど……」

ガーベラ・テトラ（GP04）やドーベン・ウルフ（ガンダムMk-V）も。

「ただ、シスクードも、別にガンダムってわけじゃないから、そういつた意味ではむしろシナンジュやリック・ディアスの方がモノアイガンダムと言えるのかも……って、

ハッツ!?」

「ど、どうしたの、コロナ!?」

「ヴィヴィオがクワトロ大尉の衣装を止めた気がする!」

ヴィヴィオともあろう者が日和るだなんて……。クワトロ大尉みたいなサングラスをして帰ってきて欲しかったのにい!

「バスケットしてるシャアとか、ガテン系シャアみたいになって帰ってきてても、それはそれで……」

「えー、そんなニュータイプみたいに“キュピーン”って反応してそれ」

リオががっくり肩を落とした。

「大事なことなんだよ。だって、クワトロ大尉と関係があるからこそ、変化球狙いで私の新機体をシスクードにしたんだから!」

「変化球って……じゃあさ、いつそのことコロナ、白いエルメスにしてみたらどう?」

「白いエルメスって……ああ、シスクードと同じモノアイガンダムズに登場した?」

「そうそう。一年戦争時に、12歳のハマーン様に乗ってたエルメス3号機」

ちなみに、ララア・スンが乗っていた緑のエルメスが1号機——という、ゲームオリジナル設定だ。

「んー、それはそれでクワトロ大尉と関係なくはないけど変化球すぎる気も……。『C』

D・A.』の白いリックドムもそうだけど、連想ゲームにならない？」

「大丈夫だつて。最近のコロナつて、ちよつと『はにやーン様(さくらではない)』つばいし。前にヴィクターさんから『どこか良家のお嬢様だつたりするのかしら』つて言われてたでしょ？」

「はにやーン様だなんて恐れ多い。全然似てないよう。子供のころとはいえ、ハマーン様だよ？」

ゲーム『モノアイガンダムズ』や漫画『虹霓のシン・マツナガ』では12歳。

漫画『機動戦士ガンダムC・D・A. 若き彗星の肖像』では14歳。

このころのハマーン・カーンは、その愛らしさ故に一部で『はにやーン様』と呼ばれることがある。

「そう？ どつちもツインテだし、なんかこう真つ直ぐで、無邪気(あざとい)などころが、はにやーン様つばいかと。特にシン・マツナガのハマーン様なんて、あたしたちの同級生にいてもおかしくないレベルだし」

「あはは、はにやーン様に似てると言われるのはうれしんだけどね。リリカルなのはには、私なんかよりずっとハマーン様つばい人がいるしなあ……」

「ヴィクターさんのこと？」

確かに、雷帝というより女帝つばい。

「ヴィクターさんでもいいけど、ほら、12歳と14歳、さらに21歳と、どのハマーン様にも対応できる師匠がいるでしょ」

「なにその東方不敗」

「子供時代は明るくて、大人になったら真面目で一生懸命で、後にハマーン様と同じ、暗くて冷たいキャラになっちゃった、私のゴーレムマイスターの師匠がアア——」

●雷光少女プレシアちゃん ↓ アリシア生存時プレシア ↓ アリシア死亡後（アニメ1期）プレシア

●12歳『はにやーン様』 ↓ NT実験後の14歳『はにやーン様』 ↓ ZやZZ時代『ハマーン様』

「——どうかな？」

「んー、つまり、小さいころはアリシアさんみたいに明るくて、成長したらフェイトさんみたいにクールで、最後は面倒くさい性格になっちゃったプレシアさんかあ……。そういえば黒色好きだしなあ……。そう言われると似てなくもないような気が、しないでもないような……」

うんうん唸るリオを横目に、私は遠い世界に向けて手を合わせた。

「はにゃーん様、どうかヴィヴィオをお守りください……」

『くしゅん！ はにゃーん様じゃないわよ!?』

と、どこかで大魔導師がクシヤマをした気がした。

第7話 わたしにとーまが舞い降りた!

『Force』1巻の教会で出会ったのは、15歳の少年トーマ・アヴェニールではなく、9歳の少女とーま・ナカジマだった。

当然、身長は低く、わたしとどっこいどっこい（いや、決してわたしが低いと言って
いるわけではないよ?）。

髪色や長さはトーマと同じ（トーマと同じとか言うことややこしいけど）、茶色のショートヘア。あー、でも若干トーマより長いかな。左側頭部で短い髪を結んでるし。

なんだろう、あくまで想像なんだけど、スバルさんが、彼女を膝の上に乗せて、

『あたしはベリーショートばつだから、とーまはあたしの憧れのなのはさんみたいにしよーね』

とか言つて、髪型をショートサイドテールにしてみた感じ。

男子時代の名残（名残とかいうとまたややこしいけど）なのか、やたらと元気いっぱいといった感じで、尻尾をブンブン振るわんこのように、はちきれんばかりの笑顔を浮かべている。その幼女声にも張りがある。

「あたしがとーまだな!」

だな、とか言われても〜。

ん〜、そうか、わかった！ この子、どこことなく『私に天使が舞い降りた！』のひなたちやんに似てるんだ！ って、

「わたしの知ってるトーマと全然違うよおお?!」

頭を抱えると、オーバーリアクションで天を仰ぐ。

すると、

「あたし、違うんだ……」

「あれ〜?」

とーま、というか、とーまちちゃんは、急にやる気を貧ちゃん神さんにでも吸い取られたかのように、虚ろな瞳で肩を落とした。

「ううっ……ぐすっ……」

「待って待って、泣かないで、ね?」

むう……これまでリリカルなのはには、わたしより年下キャラが登場しなかったから、こういうときの対処に困る。

クロも、魔女っ子の金髪ロリキャラに見えて、実はアインハルトさんより1つ年上

だったりするからなあ。

『ViVid』4巻の初登場時に『フェアビア・クロゼルグ（13）』って書いてあったので、まず間違いないだろう。

逆に『ViVid Strike! 設定資料集』でクロの年齢が書いてないのは、その辺りの事情かもしれない。

と・に・か・く!

ここは全身全霊を傾けて、9歳少女をなだめねば。

いつか、みんなの前で披露しようと思っていた宴会芸が役に立つ。

決してアクア様の花鳥風月ではない。

「プラプラ様、わたしに力をー」

朝食のパンをもらってくると、お尻に挟んで、右手の指を鼻の穴に入れて、左手でストライクアーツをしながら、

「い……いのちをだいじに〜」

と叫ぶ。

ちなみに、どんな感じでやっているのか「どうしても見てみたい!」という方は、

『リリカルなのは ヴィヴィオ BJ交換シリーズ』で画像検索してみてください。

前回もちよこつと触れた、わたしがフェイトママの真ソニックフォームの格好をしているイラストが、ツインテを含めて、とてもよく似ているので……。

ちなみに、元ネタは『グルグル いのちをだいじに』で検索してもらえれば、すぐわかります。

「アホですな」

言われた、言われたよ、魔法陣グルグルがない世界なのに！

それも9歳少女に！

わたしは泣き止んだとーまに声をかける。

「えっと、ごめんね、人違いしちゃって。わたしが捜していたのは、もつとこう身長が高くて、そもそも男の子で、えっと、まだ先の話になるんだけど、悪役っぽい、黒くて赤い紋様が浮き出ちやうような人だから、とーまちゃんとはまったくの別人なのだよ」
「？」

教会の床板にくつつきそうな勢いで、とーまが頭を傾けていく。

たぶん、意味わかんなかっただろうけど、勢いでどうにかしようと思っていたら、予想外の答えが返ってきた。

「その声……ひよつとしてヴィヴィ姉？ ヴィヴィ姉ちゃんだよね！」

「ヴィヴィ姉……?」

みやー姉ってこと!?

いや、違って、ヴィヴィオ——わたしのことだろう。

わたしの知っているトーマ・アヴェニールは『Force』2巻で、

『スウちゃんに助けてもらって、ティアさんやアーちゃんお姉達に会えて——』

なんてことを言っていた。

これはスバルさんが、ギンガさんのことを『おねーちゃん』や『ギン姉』と呼ぶ影響を受けたのだろうと思う。だから、目の前の“とーま・ナカジマ”も同様。スバルさんの影響を受けたのかもしれない。

そして、現在9歳のとーまは、この世界のわたしより3つ年下になる。

よって、わたしはとーまのお姉ちゃん的ポジションの1人になり、結果的に『ヴィヴィ姉』や『ヴィヴィ姉ちゃん』と呼ばれるようになったのだろう。

もちろん、とーまが100パーセントこの世界のトーマ・アヴェニールであるという

確証はない。

それでも、この世界のわたしと面識があるのは確か。

そうなると、下手にわたしがヴィヴィオだと認めるわけにもいかない。

これ以上、未来のわたしに迷惑がかからないようにしないとだからだ。

昨日はいつぱいやらかしたしなあ。自重しないと。

「わたしとヴィヴィ姉ちゃんって人は別人だよ？　ほら、髪型も違うし、バイザーもつけてるし」

「でも、声は一緒だぞ？」

「一緒って、似てるだけだよ」

「ん、完全に一致してるぞ？」

「完全にと言われても」

アレか、中の人のせいか、わたしを演じてるときの水橋かおりさんの声に特徴がありすぎて、一発で身バレしたような感じか。

わたしのミスではない。水橋かおりさんのせいということ……。。

とーまちゃんがポンと手を叩いた。

「そうだ！　そのバイザーを取ってくればすぐにわかるぞ」
それはわたしが困る。

「……実はね、この黒いバイザー、呪いのアイテムなんだよ」

「呪いのアイテム？」

「そう。いわゆるつきの一品でね、聖王や冥王に喧嘩を売らないと外せないの」

「聖王や冥王に……それは大変だな。でも、だったらちようどいいぞ。シスターのおばちゃん、次元通信でつなげたいところがあるんだけど!」

「はいはい」

すっかり存在を忘れていた老シスターが、受付の向こうで優しく微笑んだ。

「あ」

そうだった!

教会なら保護区内でも次元間通信が使えるんだ……って、

「通信できるなら、どうしてさつき電信絵葉書なんて送ったの!? 直接スバルさんと話すとか、メール送ればいいのに!」

「ん、だって、ただのメールより電信絵葉書の方が趣あるだろ?」

趣っ!?

いとをかしだよっ!?

でも、それって画像つきメールや映像通信とどう違うのだろう? ハリポタで見たよ
うな動く写真だろうか。ホログラム写真。確かに、アレはアレで風情があつてちよつと
いいかもだけど。

「おつ、つながったぞヴィヴィ姉!」

「だからヴィヴィ姉じゃないと」

あ。

鏡ではない。今のわたしのように黒いリボンのツインテールではなく、黒いバイザーもつけていない高町ヴィヴィオの姿が、空間ディスプレイに映っていた。

朝っぱらから元気にジャージを着ているのは、単にランニング中だったのか、それともミッドとの時差の関係なのか……。

「ヴィヴィ姉ひさしぶりだな！」

『あー、トーマ、久しぶりー。確か、まだ一人旅の途中だったよね。どうしたの?』

「さつき、ヴィヴィ姉ちゃんにナンパされたからなー」

『わたしナンパなんてしてないよ……って、あああ! 昨日のそっくりさん!? どうしてとーまと一緒にいるの?!』

「あー、そのう、色々ありまして〜」

なんだろう、この状況〜。

すると、突然向こうのわたしが身を乗り出した。

『あああああつ!? そのバイザー、ど、どうしてあなたがつけてるの?!』

「あー、天地に覇を成す為の霸王バイザーのこと? これなら、昨日、偶然見つけちゃっ

て」

『ど、どこで見つけて——』

流石わたし。食いついてきた——と思つたら、もつとグリーンな大物が釣れた。横で映像をのぞいていたのだろう。未来のわたしを押しつけて現れる。

『な、な、なんてものつけてるんですか、ヴィヴィオさあ〜〜んつつ?!』

黒歴史。

『わたしならここにいますよっ?!』

『いえ、画面の向こうのヴィヴィオさんのことです!』

「はっはー、別人ですよ、別人。ハイデイさん」

『どうしてあなたがその名前を知ってるんですかああ?!』

アインハルトさんの真名。

「わたしは何も知りませんよ、あなたが知っているんです、阿良々木……じゃなくてアインハルト先輩」

ちよつと、忍野扇ちゃん風に言ってみたところで、わたしはと一まを振り返る。

「それはそれとして、これでわたしが高町ヴィヴィオとは別人だとわかつてもらえたと

思うんだけど」

『思えませんかよっ!?』

「弱い王ならこの手で屠るまでええ〜」

断空拳ポーズでチョップ！ チョップ！

『ふにゃあああああ〜〜っ!?』

『魔法少女リリカルなのは コミックアラカルト 〜スターライトパーティー編〜』で成し得なかったティオとのユニゾンを果たしたかのように、アインハルトさんが「にゃーにゃー」暴れだす。

「この、安全圏からアインハルトさんをからかう楽しさよ〜」

『ちよつと可愛いかもだけど、やめてわたしいい!?』

わたし×2とアインハルトさんのやり取りを眺めていたとーまちゃんが「う〜ん」と唸った。

「うん、わかつたぞ！ こっちのヴィヴィ姉ちゃんとおつちのヴィヴィ姉ちゃんは別人だな」

『どこをどう見たらそんな結論にいい!?!』

画面の向こうで、アインハルトさんを羽交い締めに行っているわたしが突っこんだ。

流石はスバルさん。

中々なアホの子を生み出してくれたようだ……。

「だって、こつちのヴィヴィ姉は身長が1・5センチ低いから。いくらヴィヴィ姉がちつちやくても、背が縮むなんてないぞ。これじゃ去年のヴィヴィ姉とおんなじだ」
うぐっ。

1・5センチ……だと……。

「ちよ、なんで全然伸びてないのおお!?!」

『それ、わたしのせいじゃないよおお!?!』

わたしと未来のわたしが同時に両手両膝を地面につけた。

互いに責任をなすりつけあう。

というか、

「『それ、なんてキャロさんっ!?!』」

なんかもう、ハモっていた。

わたしたちは誰に成長成分を吸い取られているのだろうか……。

コロナかつ!?

「それで、こつちのヴィヴィ姉はどうしてあたしを捜してたんだ？」

「だからヴィヴィ姉じゃないと〜」

「おう、そうだったな！」

「はあ。一度見てみたかっただけで、深い意味はないというか、最初に言ったけど、人違
いだったんだよ。わたしが捜してたトーマは男性だから」

「そーなのか？ そっかー、残念だな。せつかく旅の仲間——ヴィヴィ姉ちゃんと一緒
に観光できると思ったのに」

しよんぼり顔。

やばい。ちよつと可愛いかも。

こちらの世界のわたしも同じように感じたのか、2人で見合つて「えへへ〜」と頷き
あう。

みやー姉は、花ちゃん以外にももつと目を向けないとダメだよねえ〜。

『ヴィヴィオさん、浮気はいけませんよ、浮気は』

『し、しませんよおお!?!』

再びハモった。

「それじゃ、あたしそろそろ出発するから。今日は鉢山遺跡で宝探しと写真撮影をする予定だからなー」

『あ、はい。いつてらっしやい、とーま。気をつけてね〜』

わたしと映像先のわたしが手を振る。やっぱり動きがシンクロしていた。

老シスターたちと見送ったあと、未来のわたしが尋ねてくる。

『えつと去年のわたし——じゃなかった、V2さん。やっぱりその格好ってフェイトママの……』

ん〜、もうこうなったら認めちゃってもいいような気がするけど、ここは『ViVi d LIFE』のインハルトさんを見習って、一世一代の大芝居を演じてみよう。

軽く深呼吸。

この世界のヴィヴィオをじっと見つめてからの——ジャンピング土下座ああ!

そういえば、教会、教会、言ってるけど、実はここ、聖王教会系列だったりする。

1巻のアイシスの台詞に、

『聖王教会の建物はどこの世界でも変わらないねえ』

とあることから、わかってもらえると思う。

ルヴェラで生まれた土着信仰の教会ではないのだ。だからこそ、文化保護区内なのに次元通信などの規制された先進技術が置かれているのである。

そういえば、この老シスターって、明後日には殺されるんだよなあ。

いい人そうなのに……。

教会内部は破壊され、他のシスターたちも皆殺しにされる……。

だったら……、

「えっと、今から伝える内容は、わたしの言葉ではなく、聖王の神託として、疑うことなく信じて欲しいんですが——」

【次回予告】

トーマが女の子って……もはやわたしの知ってる『Force』とは全然違うよ!?

そういえば過去改変で性別が変わった作品があったような……。ま、まさか、誰かが過

去にDメールを送ったとかああ!? ゲルバナ、ゲルバナのおお!? 次回までに電話レ
ンジ（仮）を用意しないとおお!?

とう、トウツトウルー♪

早く来て、バイト戦士いい!

次回【この世界が『Force』だとわたしだけが知っている】第8話。

【幼女戦記リリカルとーまっ!ー】

で、リリカルマジカルがんばります!

第8話 幼女戦記リリカルとーまつ!

『魔法戦記リリカルなのはForce』1巻。

自分探しの一人旅の途中、主人公トーマが立ち寄った第23管理世界ルヴェラ文化保護区の教会から、物語はスタートする。

そして、1巻の終盤。

始まりの教会は、トーマのライバルキャラ——武装集団フツケバインの灰髪の銃劍使い——ヴェイロンの手で破壊され、シスターたちは皆殺しにされる。

だけど……。

わたしがこの世界で出会ったトーマは、トーマ・アヴェニール(15) 男性ではなく、とーまちゃん——とーま・ナカジマ(9) 女の子だった。

であれば、

この世界は1年先の未来——『魔法戦記リリカルなのはForce』と似て非なる世界。

並行世界の1つではあるけれど、主人公が別人。まったく異なる世界なら、少しくらい変化があっても構わないだろう。

だって、聖王教会のシスターということは聖王の信徒——つまり、わたしを崇める敬虔な信者たちということなのだああ！

これは助けねばっ！

教会の受付カウンターにいる眼鏡の老シスターに向けて、わたしは言い放つ。

「えっと、今から伝える内容は、わたしの言葉ではなく、聖王の神託として、疑うことな
く信じて欲しいんですが——」

『やめなさい、V2！』

お婆ちゃん——プレシア・テスタロッサの声が響き渡る。

「あの……」

立ち上がろうとした老シスターを、お婆ちゃんが操るサラちゃん（ガンプラ）が手で制した。

『申し訳ありません。うちの孫は少々誇大妄想の気があります、狼少年ならぬ狼少女
ですね。何を話したかは存じませんが、お信じなさらぬよう。ほら、行くわよ、V2！』

「ちよ、引つ張らないでよお婆ちゃん」

耳をつかんだサラちゃんに、わたしは教会の外に引きずり出された。

「もう! どうして『言わせねえよ!』するのおお!」

『ヴィヴィオ、この世界の歴史を変えることはやめなさい』

「もう十分変わってるって! トーマが女の子で9歳で幼女なんだよっ!? わたしたちが知ってる『Force』とは異なる未来を歩んでるんだから、歴史を変えることにはならないでしょ!」

『それがどうしたというの?』

「どうしたのって……」

『ここでタイムトラベルについて詳しく話すつもりはないけど……そうね、ヴィヴィオ、よく思い出してごらんなさい。』

ルカ子が女の子になったところで、世界が大きく変化することはなかったでしょ?』

「それは——って、それ、シユタゲの話だよねええ!」

だが男だああ!

『しようがないわね。例えば……そうね、古くはドラクエ3や4で勇者の性別を変えても、ストーリーに大きな変化はなかったでしょ?』

「ドラクエ……まあ、そうだけど……」

『不満そうね。じゃあFGOで主人公の性別を変えても、やっぱりストーリーに大きな

変化は起きないでしょ』

「それはそうだけども、リヨぐだ子とリヨぐだ男は——」

『あれはなし。考えちゃダメ。以前、劇場版の「Detonation」とコラボしていたPSO2なんて、性別どころか、種族や見た目——そうね、マイキャラ設定でいいから年齢だつて自由に変更できるけど、物語に大きな変化は起きないわ』

「そんな、アニメやゲームの話をされても〜」

『あら、リリカルなのはの原作はゲームでありアニメよね?』

「……あ」

『ようやく理解したようね』

「じゃあ、トーマの性別や年齢が変わったとして、会話や若干のイベントに変化があったとしても、大筋としては『Force』の物語に変化はないってこと?」

『そういうことよ』

「だったら、この教会のシスターたちを助けたって——」

『それはやめておきなさい』

「どうして?」

『確かに、彼女たちは1巻にしか登場しないいわゆるモブキャラね。けれど、トーマはシスターたちが殺された状況と、彼の故郷を破壊された状況を重ねることで怒り、リリイ

なしでリアクトした。

その行為が、結果的にヴェイロンの興味を引き、あの場でデイバイダーとリリイを奪われることを阻止した。

その猶予はわずか1日だったけれど、その1日がなければ、アイシスって子は、トーマを守る決意をしなかったかもしれない。

それどころか、後にトーマとリリイは正しいリアクトを行えず、トーマは周囲の人たちを傷つけないよう、フツケバインのフォルテイスが言うように、

「自滅の道を選び、1人で死んだ」

可能性もある。

そういつた未来も有り得たってことよ」

「そんな……」

『まあ、バタフライ効果の一種だけど、小石を蹴ったことが世界大戦阻止につながる——なんてことに比べたら、たいしたことじゃないでしょ』

まさか、教会のシスターたちを救うという善行が、トーマの——いや、とーまちゃんのもの——『Force』の物語をバッドエンドに導くだなんて……。思いもしなかった。

だけど、

「とーまちゃんは9歳だし、トーマは15歳でしょ。トーマは7年前に故郷を滅ぼされ

たわけで、そうすると2歳なわけだし、ずっと捜してた“藍色の羽根”の入れ墨も、覚えてないとかで……やっぱり、シスターを殺す殺さないは関係ないんじゃないか？」

『そうね。けれど、バッドエンドになる可能性もあるわけよね？』

「……あう」

そうだ。

どちらに転ぶかわからない以上、なるべく本来の——『魔法戦記リリカルなのはF o r c e』がトゥルーエンドに向かうルートを壊すわけにはいかない。

『それにね、ヴィヴィオ。そもそもなのだけど、トーマには多くの矛盾があったのよ』『矛盾？ ……あー、聞いたことあるかも。トーマの故郷の事故、作中ではトーマの口から何度か『7年前』と語られてるんだけど、1巻の魔導事典では『新暦75年』になつてるとやつでしょ？』

『新暦81 — 7年前 Ⅱ 新暦74年』

だから『7年前』か『新暦75年』のどちらかが誤りなんじゃないかって『ええ、そうね——』

ちなみに、N a n o h a W i k i では

『新暦74年の誤植か？』

と書いてあり、ウイキペディアでは、

『7年前（新暦74年）』

と書いてある。

つまり、両サイトの執筆者は、どちらも新暦75年を誤りと考えているようだ。

『それでヴィヴィオ、あなたはどう考えているの?』

「わたしも……やっぱり『新暦75年』が間違ってるかなって」

真似たわけじゃないけど、Nanoha Wikiやウイキペディアと同じ意見だ。

「だって、トーマは作中に何度も『7年前』みたいなことを口にしてるし、5巻と同じころに発売した『Force』のフルカラー版でも『7年前』の台詞は変更してなかったから。」

フルカラー版は魔導事典が掲載されてないから不明だけど『7年前』が間違いなら、台詞が訂正されているはずだよ。

それが無い——ということは、やっぱり『新暦75年』の方が間違いだったんだろうなって」

『そう……。だからあなたは甘いだよ。フェイトと同じね』

「ええええっ!? まあ、フェイトママと同じならいいけど」

『だまらっしやい。ヴィヴィオ、もつと深く考えなさい。もつと疑ってかかりなさい。自分の考えに自信があるのなら尚更よ。一度、その考えを否定してみるの。あなたの母親のように、全力全開で、自分の考えを否定してみるのよ』

「そんなこと言われても〜」

『いい？ 結論から言うわよ。7年前、新暦75年——どちらも間違いなのよ』

「待つて、待つて、どういうこと？」

『最初に言ったでしょ。トーマには多くの矛盾があったのよつて。わかりやすいように、簡単な年表に起こしてみるわよ——』

●新暦74年（トーマ・8歳）……故郷壊滅（?）。

●新暦75年（トーマ・9歳）……『StrikerS』JS事件。9月に解決。故郷壊滅（?）。

●新暦76年（トーマ・10歳）……4月に機動六課解散。スバル特別救助隊へ。“最速”で、この年にトーマはスバルと出会い保護される。

「……あれ？」

『まあ、トーマつて子が2年間、山の中で一人暮らしてたつていうなら、それでもいいん

「だけど」

「8歳の少年に可能だろうか？」

「せめて12〜13歳くらいならなんとかあったかもしれないけど、8歳といえば、小学校2年生〜3年生。故郷の町は建物まで破壊されていたし、8歳の子供に全てをまかなえというのは流石に無理がある。」

「待つて、待つて。確かスバルさんつて機動六課の前、ティアナさんと一緒に災害救助隊に所属してたよね。だったら、新暦74年に保護された可能性だつてあるよね？」

「それなら問題ない。」

『そうね。ただ、2巻の保護の申請と居場所作りのシーン、スバルとティアナの着ている制服をごろんなさい。特別救助隊の銀制服にフェイトと同じ本局の黒い制服。六課解散後ということよ』

「それは単純に漫画で間違えただけかも」

『新暦74年じゃ、まだナカジマ家にナンバースもないでしよ?』

「あう……」

『どちらにせよ、ハッキリしていないってことね』

「じゃあ、新暦76年以降に保護されたと仮定して、2年間の一人暮らしは厳しいから、やっぱり故郷の壊滅は『新暦75年』が正しいってこと?」

『そうね。6年前なら辻褃が合うわ。といってもギリギリだけだね。2巻の出会いのシーンを読めばわかるけど、トーマがスバルに出会ったとき、スバルはもう救助隊だった。ということ——わかるわね?』

「2人の出会いは六課解散後——4月以降ってことだよね」

『ええ。トーマが冬山で修行している描写があるから——そうね、新暦75年の終わりに事件が起きて、夏くらいに出会ったすれぽうかしら?』

半年程度であれば、備蓄食糧など、生活に必要な品が残っていたかもしれない。

それにね、復讐もそうだけど、人って負の感情に囚われたまま1人していると、次第に心がおかしくなっていくのよ。

でも、トーマって子はまだ、そこまで気が狂っていなかった。獣になることなく、理性の光を宿していた。

長くても半年でしょうね。

だから、トーマは早い段階でスバルに出会えて——そこだけは——本当に運が良かったのよ』

サラちゃんの姿ではわからないけど、今ごろお婆ちゃんは遠い目をしているのかもしれない。

『ただね、スバルは鍛え直す目的で、ヴァイゼンを訪れたわけでしょ? 肉体や精神を鍛

え直すといつても、夏くらいじゃ機動六課が解散して日が浅い。入隊して間もない
いつそのこと、1年後——新暦77年くらいの方がしつくりくると思わない?』

「それは〜」

10歳になっているとはいえ、また2年間の一人暮らしになる。

『まあ、ただの憶測よ。入隊してすぐ、シヨックな出来事があったのかもしれないし。

それに、さつきは否定したけど、新暦74年の方が都合のいいこともあるのよ? 故

郷の事故は、隠蔽工作のあとが見え隠れするでしょう?』

魔導事典には『事故ではなく事件であるとする声もある』みたいに書かれている。

『ヴァンデイン社は大企業だけど、ハーデイスがあっさり逮捕されたことから、局の調査に口出しできるほどの力はなかった。

だったら、何処の誰が、事故として隠蔽工作したのか?』

「誰って言われても……」

『新暦74年といえ、まだ調査結果を捏造するくらい朝飯前な、彼らが元気だったで
しょ?』

「……あ、最高評議会とスカさん!」

広域指名手配されていたスカリエツティなら、ヴァイゼンで活動していてもおかしく
なかったわけで……。

「いやいやいや、スカさんが『Force』に関係してたなんて……」

『そうね。ただの物語よ。ただ、私が何を言いたいのかは理解したでしょ?』

「うん。『Force』本来の主人公であるトーマ・アヴェニール自身が、故郷の事件一つ取ってみても、矛盾に満ちた存在だったってこと……だよな?」

『ええ。トーマの故郷が壊滅した年も、トーマがスバルと出会った年も、実は判然としな
い。だったら、とーまって女の子が9歳でも問題ないでしょ』

「でもお婆ちゃん、とーまちゃんが9歳ってことは——」

●新暦74年（とーま・2歳）……故郷壊滅(?)。

●新暦75年（とーま・3歳）……『Strikers』JS事件。9月に解決。

年末、故郷壊滅(?)

●新暦76年（とーま・4歳）……4月に機動六課解散。スバルさん特別救助隊へ。
“最速”で、この年にとーまちゃんはスバルさんと出会い保護される。

「——つてことになっちゃうけど? 74年でも75年でも、流石に2〜3歳で一人暮らしは不可能だと思っただけぞ」

『そうね。だったらこうしたらどう?』

●新暦76年(とーま・4歳)……4月に機動六課解散。スバル特別救助隊へ。
とーまの故郷壊滅。

災害現場でスバルと出会い保護される。

『そもそも、一人暮らしなんてする必要ないでしょ。一例に過ぎないけど、これで「Force」のストーリーに影響は出るかしら?』

「そう言われちゃうと〜」

『といっても、これもただの物語だから。実際に何があつたのかは、とーまっで子かスバルにでも聞いてみないとわからないわね。』

ただ……とーまの「9歳」って年齢、あなた気にならない?』

「うん。実はずっと気になってました。なのはママの……『無印』のころの年齢」

『そうね。リリカルなのはとして初代を彷彿とさせる年齢なわけよ』

「魔法少女リリカルとーま!?!」

『そんな感じね。さらにいえば、新暦76年の4歳って年齢はどう? 思い当たる節はない?』

「……ひよつとして、スバルさんがクイントさんに保護された年齢?!」

『ええ。運命的でしょ』

自分やギンガさんの幼いころを、とーまちゃんに重ねたのかもしれない。

『それに、时期的にも、ナンバーズの4人——チンク・デイエチ・ノーヴェ・ウエンデイを、ナカジマ家に引き取るかどうかの話が出ていたころでしょ？ ついでに、もう一人くらい末っ子として迎え入れたところで、彼女の父親なら即「了承」でしょう』

確かに、ゲンヤさんなら秋子さんなみに理解があるからなあ。

しかも、謎ジャムというデメリットなしで……。

「あ、だからナカジマ姓なの？ アヴェニールじゃなくて」

『でしようね。4歳なら自然と受け入れたでしょう』

「あ、あああああああああああああああああああ!？」

『ちよつと、どうしたのよ?』

「今更だけど思い出した。ほら、前にこの世界のスバルさんと映像通信で話したとき」

『“弟”の前では、いいお姉さんでいたいですもんねえ。というわけで交渉成立ですねー』

『弟“じゃないけど、ううっ……こんなあくどい子がヴィヴィオのわけない……』

「——みたいな会話してた!」

『あく、あつたわね。アレ、伏線だったのね……』

今の今まで忘れてたよ!?

『そうそう。伏線といえbaumう1つ。あなた初めてとーまに出会う前、

「トーマはトーマでも、上条当麻オチだったりして……」

みたいなこと言ってたでしょ。禁書目録ネタを連発して』

「あく、そういえば……つて、ひよ、ひよつとして、とーまちゃんつて打ち止め(ラス
トオーダー)的なポジジョンつてことおお!? 御坂姉妹ならぬナカジマ姉妹の末っ子ポ
ジジョンでええ!?!」

『とーまが女の子で9歳になったのは、ひよつとしたら、あなたの責任かもしれないわよ
? 立錐の余地もなくフラグを立てまくった』

「いやああ、そんなつもり全然なかったのにいゝゝ!?!」

『それはまあ、冗談としても、並行世界である「INNOCENT」も、みんな年齢が引
き下げられていたでしょ? もしもトーマが登場していたら……』

「あ、性別はどうあれ、年齢は一桁だったんだ!」

『それにね、これは意外かもしれないのだけど……1巻のキャラクターファイルに、「初期のデザインはすごく幼かったです」

とコメントが書かれているの。

そして、それを裏づけるかのように、フルカラー版1巻の巻末にある設定資料では、第1形態のトーマと並んで、15歳ではなく、なぜか12歳時のトーマのフルカラーイラストが掲載されているのよ』

「あ、あれ？」

『それがこのイラストなんだけど——』

空間ディスプレイに表示される。

「あく、茶髪になった子供時代のクロノ提督のようだって……あ、確かにちよつと、わたんのひなたちゃんっぽいような気がしないでもないかも」

わたしはそこでहतと気づく。

「待ってお婆ちゃん。つてことはだよ、ひよつとしてとーまちゃんて……」

『ええ。私もこうやってあなたに説明していて気づいたのだけど……』

リリカルなのはって代々女性主人公だったわよね。

当然、都築先生にだって「男性主人公にしているのだろうか？」という葛藤があったと思うのよ。

そこで思い出したのだけど、1巻の都築先生のコメントに、

「トーマはちょうど、第1期のなのはと似たような経緯で不思議な力と出会います」
「新メンバーで原点回帰という目標があったりします」

なんてのがあるの。

このコメントを素直に受け取るなら、構想の初期段階では、第1期の高町なのはのよ
うに、9歳の女の子が主人公だったバージョンがあったとしてもおかしくない……。

そうは思わない?』

「うん。むしろ、まったく考えなかった——って方が無理あるかも。

つまり、とーまちゃんって……トーマが女体化とか、そういった存在じゃなくて、む
しろ……初期型トーマってことおお!」

『ええ、プロトタイプ・トーマね……』

なんてガンダム! じゃなくて、

「そういえばサラちゃん——5—01型デバイスだって実験機だし、うわ、なんか、そう
いう世界なの? こことって!」

『そうかもしれないわね……』

「魔法少女リリカルとーま……ううん、魔法戦記リリカルとーま……みたいなの?」

『そうね。どちらかといえば、幼女だし、幼女戦記リリカルとーまかしら?』

「幼女戦記って……」

『あら、ターニャ・デグレチャフだって9歳でしょ』

「ああああああ!!」

偶然とはいえ、まさか同じとは。

『ただ、演算宝珠エレニウム九五式が実験機だとするなら、とーまよりあなたの方がターニャ寄りよね』

「いやあああああああ！ アニメしか見てないからわからないけど、絶対最後、デスノートみたいに死んじゃうパターンでしょお!!? フラグ立てすぎだもん、あの子というかあの人〜」

『はあ、ネタバレになるから言わないけど、気になるならWeb版読むなり、ネットで調べるかすればいいでしょ?』

「それは嫌。アニメで見たい」

『はいはい。勝手になさい——』

サラちゃんが空中でクルリと振り返る。

『まあ、なんにせよ、あなたがこれ以上かかわることもないわ。この世界に』

「……あ、そっか」

わたしはもうすぐ、元の世界に帰るのだ。

「はあく。わたしの知ってるトーマじゃなかったけど『星5』のレアキャラと一まに会えたから、これはこれで良かったのかも。全身ゴールドなラッキー鷹文に会ったようなものだね」

『そんなネタ、覚えてる人いるのかしら?』

D & amp ; T (ダンジョンズ & amp ; タカフミズ) は、何気に面白かった。

Keyミニゲーム集とか発売してくれないものだろうか。

「そういえば、今ごろルヴェラ鉱山遺跡で、ヴァンデイン社の研究施設が撤退の準備を進めているところだよねえ」

機材とデータの搬出が終了するのは、確か日暮れごろだったはず……。

そんなことを話しながら、道なりに歩いていると、ようやくサラちゃん経由でエルトリアから連絡が入る。もちろん、理由はわからないけど映像は出ない。音声通信のみだ。

《お久しぶりです、ヴィヴィオさん》

「その声は……アミタさん！ お久しぶりです」

赤毛のお姉さんは、相変わらずアスナさんみたいなおねーさん声をしている。中の人的に。

わたしは素直に謝罪する。

「この度は、時間移動したあげく『Force』の並行世界に飛ばされちゃうなどという事件の後始末をさせてしまい、大変ご迷惑をおかけしました」。

正直な話、もう少しとーまちゃんの後を見守ってみたい気もするのですが、これ以上お手数かけるわけにもいかないので、おとなしく帰ることにしますね」

《えっと……それで、なんですが……》

「はい。来たときと同じように黒焦げアフロになれというなら、甘んじて受ける所存でありますっ！」

5―01型デバイスがあれば、時間移動に伴う肉体への負荷も、たいした問題ではないだろう。

《いえ、そういうことではなく……その、落ち着いて聞いてくださいね。今のままでは、ヴィヴィオさん、あなたは元の世界に帰ることができません》

「はい?」

《キリエとユーリが綿密にシミュレーションした結果、ヴィヴィオさんの帰還には『原初の種』が必要だとわかりました》

「原初の種……げ、原初の種ええ!?!」

【次回予告】

原初の種って、確か最終巻でようやく語られた、『Force』のキーアイテムみたいなやつだよな? ……って、ちよつとたんま。

漫画で登場していないモノを、どうやって探せと? 見たことないモノを、どうやって見つけろと? 原作休載しちやってるんですけどおお!?

なんというハードモード! いや、なのは(魔王)モードだこれええ!?! もう、種割れしちゃうよ!?

次回【この世界が『Force』だとわたしだけが知っている】第9話。
【助けてアミティえもん!】

で、リリカルマジカルがんばります!

第9話 助けてアミテイえもん！

アミテイエ・フローリアン。

彼女は、高町なのはやフェイト・テストロツサ、あるいは八神はやてといった『魔法少女リリカルなのはシリーズ』の面々が活躍する時代より、遙か未来の惑星エルトリアで生まれた自動作業機械「ギアーズ」だ。

いわゆるロボっ娘である。

けれど、普及型ギアーズの試作機（わたしの5-01型デバイスやとーまちゃんと一緒に）だったアミタさんと妹のキリエさんは、人格形成システムを作りこみすぎたとかで、普通の人間のように育てられたらしい。

コロナが学校の宿題でゴーレム創成したときに、1人だけ高機動型ザクを作ってきたようなものだ。

映画だとは見えなかったけど、グランツ博士は失敗が多かったそうなので、たぶんだけど、健康なところは『INNOCENT』みたいに愉快的性格だったのだろう。

あー、あれだ。

『魔法少女リリカルなのはINNOCENT コミックアラカルト』で、スーパー移動床

くんα（ドラクエの矢印がついた床みたいなの）に乗った博士が、シユテルを押し倒したり、ユーリのパンツを被ったりしたみたいが大惨事が、結構日常的にあったのかもしれない。

いつかわたしも、ナカジマジムの床に設置したいので誰か作ってくれないかなと切に願う。

と、まあ、映画版の彼女たちしか知らない方にはさっぱりなのだけど、原作ともいうべきゲーム版『魔法少女リリカルなのはA's PORTABLE —THE GEAR S OF DESTINY—』（GOD）の世界では、概ねそんな感じである。

つまり『Force』世界に飛ばされたわたしがもとの時代に帰るには、リリカルなのはで唯一、公式で、時間移動可能な転移装置を持つ『GOD』版フロリアン姉妹の協力が不可欠である——ということだ。

そんなわけで、

「助けてアミティエもんくん！」

《また、ド直球で来ましたね、ヴィヴィオさん……》

ルヴェラ文化保護区の丘陵地帯へ続く道の途中、わたし——高町ヴィヴィオはみつと

もなくも、身長15・14センチの人形にすがりついていた。

この人形——というかサラちゃん（ガンプラ）を外装としたデバイス。いつもはプレシアお婆ちゃんが遠隔操作しているのだけど、現在はサラちゃんを通して、前述の阿米タさんと話しているのだ。

「だって、阿米タさんのプロテクトスーツって、ドラえもんカラーじゃないですか？」

《いえ、そういうのじゃありませんから》

「ドラえもんの丸い鼻と同じで、赤毛ですよね？」

《だから無理やり結びつけようとするのは……》

「でも、未来からやってきて、タイムマシーン持ってますし、ドラミちゃんならぬキリエさんがいますよね？」

《……あ、あれ？ 私、だんだん自信なくなってきたんですが、意外と共通点多いですね……ドラえもんさんと》

四次元ポケットはないけどね。

今ごろ未来では、「頭上に？」マークを浮かべているのだろう。

『ヴィヴィオ、そんなことより本題を——』

お婆ちゃんからツツコミが入る。

「そうでした、そうでした……。突拍子もないせいかな、イマイチ信じられなくて冷静でい

られるんですが、どうしてわたしがもとの世界に帰るために“原初の種”が必要なんですか?」

原初の種。

作中では名称こそ出てくるものの、実際に登場することなく作品が休載したので、謎ワードと化した代物。

『Force』6巻の魔導事典には、

『最古のエクリプスウィルス母体と言われる存在。その詳細ははまだ不明』
とあるだけで、やっぱり判然としない。

本来は、7巻以降で明らかになるはずだったのだろう。

ハーデイスさんと関係があり、フツケバインのボス、カレンさんが追い求めていることから、『Force』のキーアイテムであることは間違いないのだけど、とかく情報の少なさ故に、外見すらわからない。

「原初の種が何なのかもわからないのに原初の種が必要って、うーん、ちよつと納得がいかないんですが……この作品の物語的な都合?」

『ヴィヴィオ、それを言ったらおしまいでしょ?』

すると、サラちゃんから少し困ったようなお姉ちゃんボイスが聞こえてきた。

《物語的な都合……で済めばよかったですか……》

「あ、あれ……違うの?」

《そうですね、どこからお話したのか……ああ、そうだ、ヴィヴィオさんはキリエが博士とエルトリアを救うには、ユーリの持つエグザミアが必要だという結論に至った経緯はご存知でしょうか?》

「あく、映画だとイリスさんが『私にいい考えがある』みたいな感じでしたけど、もともとはキリエさん本人が、過去改変のシミュレーションを繰り返した結果でしたっけ……」

シユタゲで例えると、Dメールを送ると世界線がどう変動するのか、あらかじめ予測できちやうのような、すごいマシンやプログラムがあるのだろう。

未来がすごいのか、グランツ博士がすごいのか、その両方だったのか、あるいは時間転移装置と同じで、発掘したオーパーツ（ミッドでいうところのロストログア）の類なのかは知らないけど。

そして、何度も何度もエラーを繰り返し、たった1つの可能性——そう、たったひとつの冴えたやりかたを、キリエさんは見つけ出したのだ。

それが『GOD』——『砕け得ぬ闇』事件の発端。

『闇統べる王が完全な状態で稼働していて、なおかつ、砕け得ぬ闇をその制御下に置くタイミングが』って、今思い出すと中二病というか、スクエニ系RPGみたいな台詞

でしたよね〜」

《あう!?!》

《あー、ヴィヴィオさん。私の隣でキリエが頭を抱えてもだえているので、少し手加減していただけたらうれしいのですが……》

「すみません。『心の花は、枯れたりしない……!』」

《いやああああああああああああ!?!》

《ちよ、キリエ、どうしたんですか!?! 何が起きたんですかああ!?!》

「今のは『GOD』のバトル開始前のキリエさんの台詞です〜ね〜。

ちなみに、わたしは『よろしくおねがいますっ!』で、アミタさんが『さあッ!

行きますよッ!』、アインハルトさんは『一槍、お願いいたします!』、トーマなら『やるぞ銀十字……!』は負けられないッ!』で、キリエさんは、

『心の花は、枯れたりしない……!』」

《ふにやああああああああああ!?!》

《キリエええ!?! ヴィヴィオさん、もう勘弁してあげてくださいああい!》

「すみません。今を逃すと、もう言うチャンスがないかなあ〜と思ひまして、ついでへへ〜!」

《くうう〜、今すぐヴィヴィオちゃんのところに飛んでいって、ヴァリアントザッパーを

撃ちこみたいくっつ！ どうにかして、どうにかして行く方法はないのおお!!》

サラちゃんから「ガンガンガンガン！」と何かを叩く音が聞こえてくる。

たぶんキリエさん。

しかし、一行にこちらへ向かってくる気配はない。

これだけヘイトを溜めたのに……。

「本当にこっちに来れないんですねえ」

《……ひよつとしてヴィヴィオさん、試しましたか?》

「ごめんなさい。キリエさんなら『帰れないドツキリでした』とかあるかなと」

《あー。キリエですからねえ》

とか言っているうちに、いつもなら背後にニヤル子さんのごとく這い寄る混沌からの——フルドライブバースト！ で、わたしの爆発オチ。なのに、それすらない。皆無だ。

むう。

「むしろ、黒焦げアフロになっていないと落ち着かないわたしがいますよ?」

《それはそれで重症だと思えますが、とりあえず、私たちですら自由に行き来できない状況にある、ということだけはわかっていただけましたでしょうか?》

「はい。まさか、あの『時の操手』ですら無理だなんて」

《あふ!?》

《ヴィヴィオさん、その二つ名もやめてあげてください》

「スミマセン。いつもクールでシニカルなキリエさんが困っている姿は、声を聞いているだけでむふふな気分なもので〜」

『ヴィヴィオ、気持ちにはわかるけど、話が進まないからその辺にしておきなさい。続きはまた帰ってからよ』

「はい、お婆ちゃん!」

《い、嫌なご家庭ですね……。今回はプレシアさんのご協力で、最初から転移座標がわかっていたので、すぐにでも解決できると、私たちもたかをくくっていたんですが……。いざ実行に移す前のシミュレーションにかけたところ、何度繰り返してもエラーが出てしまいました……。これはおかしいなど》

「それで、わたし一晩お泊りだったんですねえ」

お陰でとーまちゃんに会えたのだけど。

《はい》

「原因はわかったんですか?」

《もちろんです。最大の原因は原作である『Force』が完結していない、ということでした》

「はい〜?」

《ヴィヴィオさんもご存知の通り『魔法戦記リリカルなのはForce』は長期休載中。完結していません。つまり、未来が決まっていない、不確定で不安定な世界なんです》
「ちよーメタ発言ですぬ〜」

《まあ、今更なので。さらに都合が悪いことに、トーマさんが生まれたのが15年前——新暦66年だったことです》

「新暦66年って『無印』や『A's』の翌年ですよね……って、そっか『GOD』だ！ 原作のトーマって『砕け得ぬ闇』事件と同じ年に生まれてるんだ！」

そういえばゲーム中『トーマの故郷のヴァイゼンに寄ってみない』みたいなことを口にしたリリィさんに対して、トーマは、

『過去の出来事を知ったり干渉したりして、未来が変わっちゃったりしたら嫌だし』と渋っていた。

《はい。お恥ずかしい話ながら、私とキリエが過去改変をしたことで、バタフライ効果なのか、トーマさんが新暦66年に生まれない世界が、新たに分岐していました》

そっか！

『GOD』には、そういう可能性もあったのか！

『GOD』がなければ、なのはママたちは別の事件に関わっていただろうし、そっちで救

われた命、救われなかった命があるわけで、そういった世界が生まれていてもおかしくはない。

なんだかクロノクロスみたいになってきたなあ……。

でも、

「『GOD』にトーマ参戦してますよね。タイムパラドックスになるんじゃない?」

《歴史の修正力です》

「たまに聞く言葉だけど……」

『ヴィヴィオ。シユタゲなら必ずまゆりが死に、ドラえもんなら、のび太がジャイ子と結婚しようが、静香と結婚しようが、必ず子孫のセワシが生まれて、ドラえもんを送りこんでくる——というアレよ』

「……あー、納得できない部分もあるけど、理解はしました」

過去を変えても、ある程度の揺らぎは全て同じ未来に「収束」（スターライトブレイカーじゃないよ?）してしまう。

《なので、新暦81年に、トーマさんと同等の力を持つもうひとりのトーマさんが存在していれば、年齢や性別なんて些細なことなんですよ》

「あー、それで初期トーマ——とーまちゃんに白羽の矢が」

原点復帰。9歳の女の子でも、なのはママに匹敵する魔法の才能と、レイジングハー

トに代わるリレイさんという相棒がいて、あとは脅威に立ち向かえるハートがあれば、未来に繋ぐことはできる。

『待ちなさい。トーマがいない理由はわかったけれど、それではヴィヴィオが帰れない理由にはならないわよ?』

「た、確かに……」

《そうですね。こう言えばわかりやすいでしょうか。みなさん大好きシユレディンガーの猫さんと》

「猫型ロボットだけに?」

《いえ、そうではなくて、現在ヴィヴィオさんがいる世界は間違いなく『Force』の並行世界です。なので『Force』に登場するキャラも、事件も、ズレはあつても収束し、原作にあつた——確定している事項は必ず起きます。ところが、分岐は新暦66年に発生しているので、新暦81年——『Force』までの間に、もとの世界とは異なる——不確定な歴史が流れている。さらに、最初に述べた通り『Force』は完結していません》

『つまり、過去も未来も不確定。収束すべき未来と過去もない。原作ルートが大樹の幹だとすれば、並行世界という枝葉につながっていない、途切れた世界ってこと?』

《はい。その解釈で間違っていないせん》

プレシアお婆ちゃんとアミタさんのやり取りに、だんだんついていけなくなってるんですけど。

『アミタ、だったわね。それでもやつぱりおかしいわね。たとえば、私がいる。次元の狭間を起点とした時間移動だったとしても、そんな途切れた世界なんて転移できるはずがないわ。他とつながっていない世界なんて、ここ（次元の狭間）みたいなものよ？』

私がアルハザードに来るために使ったエネルギーは、

「ジュールシード9個 + α （時の庭園の駆動炉など）」

だったのよ。本来なら最低でも14個は必要だったのに、それと同等のエネルギーを使った転移だなんて、それこそ貴方たちのところの永遠結晶でも使わなければ不可能でしょ?」

《はい。リニスさんからヴィヴィオさんをお持ちの5-01型デバイスのデータもいただきましたが不可能です。なので、そちらの新型の魔力駆動炉の暴走についても検証してみました……》

『あの山猫、また余計なことを……』

ん……。

「ちよ、お婆ちゃん!? そんなのいつの間になつてたの! まさかまたやらかしちやつたのおお!!」

『またって何よ、またって!? ヒュドラとは違うのよヒュドラとは!』

「そんなランバ・ラルみたいな台詞言われてもおお!」

《あー、ヴィヴィオさんご安心を。駆動炉が暴走していなかったことも確認済みです》

「えー」

『どうして不満げなのよ!?』

「どうせなら、うちのキングヒドラが原因でしたら、みたいな方が」

『うちの駆動炉に勝手にオルテガを倒しちやいな名前をつけないで!』

「じゃあ、ヤマタノオロチで」

『それ、パワーダウンしてるじゃない!?』

《まあまあ、お二人とも落ち着いて。マスタードラゴンとでも名づけなければいいじゃないですか》

「『それはちよつと……!』」

《どうしてこういうときは、すぐに意気投合するんですか!? はあ、まあいいです。今回のヴィヴィオさんの転移についてですが、検証の結果、外部からの干渉を受けていたことがわかりました》

「外部からの干渉……って、ああ、あのフリーダムみたいな感じで、やたらエネルギー供給されたあの時のこと!？」

『ふくん、そう、外部から……。このプレシア・テスタロッサに喧嘩を売ろうだなんて、どこのどいつかしら。次元魔法で——』

《プレシアさん、次元震を誘発するような魔法は控えてくださいね》

お婆ちゃんなら本気でやりかねないからなあ……。

「でも、ジュエルシード9個分のエネルギーでしょ? そんなことができる人って……。それこそユーリ以外に思い当たらない。

「ひよつとしてクロスオーバーなの!? 何か他の作品からとか! ippそのこと無限のフロンティアの新作的な何かでもいいんだけどおお!？」

『懐かしいわね。結構面白かったのに、3DSで続編が発売しなかったのが悔やまれる作品ね』

「スパロボ系なのに貧乳の舞姫は、中の人がやつぱりアインハ……こほん、なんでもないです。フェイトママにとっても悪くない話だと思っしゅ」

《いえいえ、クロスオーバーはありませんから。この作品、他作品のネタは多くても、リリカルなのは以外のキャラが登場することは、『DOG DAYS』などの例外をのぞいてありません。そのルールはヴィヴィオさんの方がご存知かと》

「だとすると、あくまでリリカルなのはシリーズに登場した中で、次元の狭間に干渉できるキャラがいたってこと？」

《はい。おそらくはそのはずです》

『おそらくは』ってのは怪しいけど。

「例えば……『Force』のラスボス——ハーデイス・ヴァンデインとか？」

《どうなんでしょうね。彼が干渉する意味があるとは思えません》

「じゃあ、スカさん」

《可能かもしれませんが、あの意図的に狙ったかのようなタイミングで干渉した理由が説明つきません》

「えー、ちよつと待ってよアマタさん。

ユーリじゃない、スカさんやハーさん（フルバではない）でもない。他に、お婆ちゃんにいる『次元の狭間』に干渉できるような人物なんて、リリカルなのはシリーズに存在するの!？」

《すみません、ヴィヴィオさん。わからないんです……》

「わからないって……」

《未来からでも『次元の狭間』のような空間は、観測できないことの方が多いです》

『まあ、ヴィヴィオを迎えに行けない時点でお察しよね』

未来が万能なら、ドラえもんがピンチに陥ることもない、ということだ。

「ということは、このとーまちゃんがいる『Force』世界って、フツケバイン一家やハーデイスさん以外にも、まだ『未知の敵』が潜んでるってこと?」

それもわたしが知っている——いや、

「わたしとお婆ちゃんの関係者?」

『もしくは未来から来た——そうね、ギガゾンビみたいな奴かもしれないわよ?』

「未来のエルトリアより進んだ技術ってこととおお!? わたしとしてはテリーがエスタークになるというI F 設定的なラスボスがはいんですけどがああ!?!」

なのはママが進化の秘法でデスなのはになったとか、そーいうのでもいいですけどおお!? 黄金の腕輪がが……。あー、リメイク版で6章が必要だなあ。

《その辺りはわかりかねますが、そんなヴィヴィオさんがもとの世界に帰る方法をシミュレーションした結果——『原初の種』を手に入れることで帰れることがわかったんです》

「なるほど。そういうことでしたか」

アミタさんはサラリと言っているけど、キリエさんにユーリ、みんなが頑張ってくれたお陰だろう。

やっと見つけた『たった1つの冴えたやり方』というやつだ。

「ありがとうございます。大変お手数おかけしました。それでアミタさん、原初の種ってどこにあるんですか？」

《……すみません。それが、わからないんです》

『チツ、役に立たないわね、エルトリア』

「お婆ちゃんやめたげて〜。原作でもわかってないんだからしようがないよ〜」

《ですがご安心を。まったくのノーヒントというわけではありません》

「え、マジで!？」

《はい。原初の種の在り処を唯一知る男性——ハーデイス氏の行動予測の精度を高めていけば、原初の種にたどり着けるはずです。すでに、原作の範囲内でしたら現在位置の特定も可能ですよ》

「ハーデイスさんが今いる場所がわかるってこと?」

《はい》

「だったら——よし、プレシアお婆ちゃん、ハーデイスさんの今日のご飯……じゃなかった、ハーデイスさんちを強襲しよう!」

『ヨネスケ的な?』

「違うよ!?! ハーさんが油断して、戦力が整わないうちに全力全開——高町流交渉術で

原初の種、ゲットだぜっ!」

【次回予告】

これぞ、強くてニューゲームの醍醐味!

5-01型デバイスのお陰で、今のわたしは巨大な魔力だけでなく、強靱な肉体をも手に入れているのだ!

いくらハーデイスさんが『支配種』の能力を持つていようと、同じボスキャラの先輩(『StrikerS』時代)として、後輩ごときに負けられない戦いがここにある!

次回【この世界が『Force』だとわたしだけが知っている】第10話。

【月は出ているかッ!】

で、リリカルマジカルがんばります!

第10話 月は出ているかッ！

ハーデイス・ヴァンデイン。

彼の初登場シーンは『魔法戦記リリカルなのはForce』原作4巻。

フツケバイン一家の工場襲撃のあと、フェイトママとチンクが、ヴァンデイン・コーポレーションの代表者に事情聴取するシーンである。

ところが、時間軸において1巻開始直後の現在、アミタさんはすでに彼の位置情報をつかんでいるという。

流石は未来の“猫型じゃないロボ”。

「だったら——よし、プレシアお婆ちゃん、ハーデイスさんちの今日のご飯……じゃなかった、ハーデイスさんちを強襲しよう！」

『ヨネスケ的な？』

「違うよ!? ハーさんが油断して、戦力が整わないうちに全力全開——高町流交渉術で原初の種、ゲットだぜっ！」

『いやいやいや、ちよつと待ちなさい』

「もー、どうして止めるのお婆ちゃん？」

『そりや止めるでしよう。高町流交渉術つてあれでしよう、いきなりラスボス戦よ?』

「いきなりラヴオス?」

『それはクロノトリガー』

「でも、今の状況つて“強くてニューゲーム”みたいなものだから、似たようなものでしょ?」

『……それは、そうだけど。ヴィヴィオ、それで迎えるエンディングはドリームプロジェクト——開発スタッフの裏話が聞けるおまけ要素よ?』

「……い、言われてみると〜」

すると、サラちゃんからアスナ……じゃなかったアミタさんボイスが。

《……あの、お二人とも、ゲームじゃないんですから》

『そうだったわね』

「これは、ゲームであつても遊びではないっ!」

《やめてください。私としましては、できればヴィヴィオさんにはあまり危険な行為に及んで欲しくないのですが……》

「チート状態なの？」

《はい。チート状態なのは承知していますが……》

「安全マージンは十分取ってるの？」

《……言いませんよ？》

ちえつ。せっかくアスナさんの台詞を引き出そうと思つたのに。

《安全マージンの話は置いとしまして、実際問題、今のヴィヴィオさんで本当にハーディス氏に勝てるのでしょうか？》

………。

わたしとしては当然勝てる気でいたのだけど、言われてみると根拠がない。

『そうね。確かに、今のヴィヴィオを脅かせる魔導師なんてそうはいない。というより

倒せないわね。エアーマンね。貴方のところのシステムU—Dには出力で劣るけど、あの子、暴走の危険があるから全力は出せないのよね？ おまけに、性格同様、戦い方も素直で真つ直ぐだから、搦め手には弱い。魔力量が互角なら、本家と違い今や姑息な手段も自由自在なうちの孫娘の方が、遥かに強いわね!』

《それ、褒めてるんだか貶しているんだかわかりませんが、ただの孫自慢ですよねええ!?!》

「いやゝ、照れますなあゝ」

《ヴィヴィオさんはヴィヴィオさんで、クレヨンしんちゃんみたいな照れ方しないでくださいっ!》

『ヴィヴィオの能力は置いといて、問題はハーデイス・ヴァンデインね。原作を読む限りでは、原初の種から唯一直接感染した人物であり、再生能力はもちろん、肉体強化系の病化特性に、おそらく模倣能力も感染で手に入れたんでしようね。さらに支配種の能力を持つ。デバイダーを発動できることから、魔法の無効化も可能でしょう』

「ねこぶさうのてんこ盛りや舟盛りもびつくりだよっ!」

『説明しておいてなんだけど、ぶっちゃけ、今のヴィヴィオ以上にチーターね。』

とはいえ、こちらはこちらで第五世代型デバイスだから、魔力近似のエネルギーに変換する機能を使えば、出力は落ちるにせよ、いつもの魔法でダメージを与えられる。

そうなる、結局のところ実際にハーデイスと戦ってみないことには勝ち負けはわからない——といったところかしら。とはいえ——』

お婆ちゃんの声がトーンダウンする。

『私としても、あまり危険な真似はせず、おとなしく原作通りにイベントを進めて欲しいのだけど』

《そうですよね。ヴィヴィオさんのお祖母様としたら心配ですよ。遅かれ早かれ、私たちも原初の種の在り処にたどり着けると思いますし》

うーん……。

『それにね、ヴィヴィオ。前にも話したと思うけど、いくら歴史の修正力があるといつても、アレは長いスパンで見た場合であつて、細かい部分では大きく変動するのよ。とーまみたい。結果的に、私たちの知らないキャラが登場したり、本来いるべきキャラが

いなくなったり、未知のイベントが起きるかもしれない。確実に原初の種を手に入れるためにも、目立った動きは避け、不確定要素を減らし、原作通りにストーリーを進める方が賢明だと思うわ』

ん。

「思っただけど、それなら今すぐ決着をつけた方がいいんじゃない?」

今はまだ原作の状況に近い——ということとは、ストライクアーツの試合前に、対戦相手の映像を見て、戦い方を分析し終えたようなものだ。

こちらの準備が万端なら、不確定要素が増える前に決着をつけた方がいい。

『……ああ、そう言われると、そうね。放っておいて、ハーデイスに未知の能力が追加されても、それはそれで厄介ね』

《なるほど、それは盲点でしたね。でしたらいつそのこと『GOD』の私とキリエのように、管理局に保護してもらおうというのはいかがでしょうか?》

「この時代のママたちに、1年前の世界から来ちゃいましたらっつてバラすってこと?」

《はい。なのはさんやフェイトさんが協力してくだされば、わざわざヴィヴィオさんが

危険をおかさずとも、原初の種の入手も容易になるかと》

「それは……うん、アリなのか……な？」

なのはママは主人公だしなあ。ああ、この世界ではとーまちゃんのかな？ どちらにせよ、よっぽどの事態が起きない限り負けないだろう。

『そうね。ただし、その場合、あの母親のことだから、あなたは完全に蚊帳の外。事件が解決して危険がなくなるまで、この世界のヴィヴィオたちと、ジムと一緒にふもふトレーニングといったところかしら』

《もしくは聖王教会で保護——というのもありえるでしょうね》

ヴィヴィオ×2で、アインハルトさんとイチヤコラ。

ヴィヴィオ×2で、シャンテに「二重奏マスターしたよー」とか。

「それはそれで面白そうなんだけど、せつかくの5—01型デバイスだし、この力を試してみたい気持ちもあるんだよねえ」

これもサイヤ人……じゃなかった、ベルカ騎士として……いや、オリヴィエの血の影響だろうか。シグナムさんやクラウドス陛下と同じで、何だかんだで強くなるのが好きな

んだよねえ。

《またそんな……プレシアさんから何か言っただけで……》

『……そうね。私も、自分の作った第五世代型デバイスが、実際どの程度、魔力無効化相手に通用するのか、興味が無いといったら嘘になるわね』

《プレシアさんまで……》

『まあいいわ。ヴィヴィオ、あなたの人生なのだから、あなたの好きになさい。ただし、いざとなったら私が魔法で強制転移させるから。文句は受け付けないうわよ。それだけは覚えておきなさい』

「うん。ありがとうお婆ちゃん……」

《はあ……何だかんだで甘いですよ、プレシアさん……》

『……ふん。私はただ、実験結果が知りたいだけよ』

「とか言って、本当は第五世代型デバイスの研究だってフェイトママのためだもんね。リニスさんから聞いたことあるし」

『くつ、あんの山猫おお……絶対違うから、違うわよッ!』

「はいはい。ツンデレ乙。それでアマタさん。ハーデイスさんは今どこに?」

《はい。彼ならリベルタのヴァンデイン本社ビルの中ですけど……》

第16管理世界リベルタ。例の工場があるのもそこだっけ。

わたしが今いる第23管理世界からも、そう遠くない。急いで次元港へ向かえば、今日中に決着をつけることも可能だろう。

「これは舞空術を使うしか〜」

《ちゃんと飛行魔法使ってくださいい》

ふわりと宙に浮かぶ。飛行許可はないけれど、このまま一気に――

《そういえば、以前レヴィイから、そちらの世界では勝手に飛んだりしてはいけない――と

「う話聞いたのですが?」

うっ。

『探知されないように、私がジャマー結界を張るから問題ないわよ』

「あく、無印のころアルフがフェイトママに使ってたやつ?」

『ええ。アルフに教えたのはリニスだけど、リニスの魔法は私が保有していた魔法だもの。当然使えるわよ』

「プレシアデバイス——ちょー優秀かもしれない」

『カレンデバイスみたいで嫌なんですけど』

5—01型デバイスから流れこむ莫大な魔力を使い、これまで上手く活かせなかった、なのはママから受けた飛行魔法の英才教育の成果を存分に発揮して、ルヴェラの——自然豊かな空を猛スピードで飛ぶ。

「まるで、ナメック星を飛ぶ、クリリンと悟飯のように……栗悟飯とカメハメ波ああ!」

『いやいやいや』

「そういえばんですけど、これから奪いに行く“原初の種”ってどんなアイテムなんだろうね? わかっていることって『最古のエクリプスウィルス母体』ってことくらいでしょ」

『そうね。一応、ウィルスとは関係なく推察することも可能なのよ』

「ホントに？」

『ええ。例えば名称。“原初の種”を単純に言い換えてごらんさい』

「言い換えるって……プライマルシードとかオリジナルシードとか……って、あ、ジュエルシード！」

『そう。ジュエルシードが“宝石の種”だとしたら“原初の種”がどういった外見で、どういった能力を持つのかも、だいたいわかってくるでしょ。「Force」が原点復帰ならなおさら——って、ヴィヴィオ、正面ッ！』

「へ!？」

——ズゴオオオオオオオオオオツ！

「砲撃魔法っ!？」

赤色の魔力光が雄叫びを上げて、正面から迫りくる。迷いのない閃光。

あまりに唐突であり——わたしやお婆ちゃん探知にすら引つかからないほど——あまりに突然であり、目視で視認するまでまったく気づかなかった。というより、言われたときにはもう遅かった。

わたしの意志とは無関係に、聖王家の遺伝子に組みこまれた魔法が発動する。
聖王の鎧。

赤と虹、二筋の光がルヴェラの空で激突した。

眩しきで目がくらむ。右手で目を隠す。薄目で正面を見据えたそのとき、すでに相手は眼前に迫っていた。

「速いっ!」

その速度は射撃魔法並みで、間合いをわずか一秒で詰めてきた。拳を振りかぶる。赤の魔力を帯びた強烈な一撃。聖王の鎧が受け止め、魔力の残滓が後方へ流れた。

なんとという馬鹿力!

ダメージはないのに、あるはずなのに、衝撃だけが空気を伝ってわたしの全身を通り過ぎる。

「レストリクトロック!」

なのはママ直伝——反射的に魔力リングで相手の手足・胴体を同時固定する。した。いや、したはずだった。

敵は、足裏に赤い魔力をこめるとわたしの防御膜を蹴り飛ばし空中で回転。バインドを避けると、わたしを押しして、自らは反動で後方へ軽やかに飛ぶ。そんな軽業を、わざわざ空中でやってのけたのだ。

間合いを広げると動きを止めた。これでようやく姿が拝める。正体がわかる。お・は・な・し、できる！

「簡単だよ……友達になるの、すごく簡単。名前を呼んで！ 始めはそれだけでいいの……」

『色々すつ飛ばしすぎよヴィヴィオツ!』

「アインハルトさんのときできなかったから1度やってみたかったんだよおー!」

年齢は……たぶん18歳くらい。身長は『ViVi d S t r i k e!』バージョンのわたしの大人モードと同じか、少し高いかな? だけど体格はがっしりして、どちらかというアインハルトさんに似ている。

雪のような銀髪のアートロングヘア。けれど、わずかに後頭部で束ねたポニテ風。青い瞳は険しく吊り上がり、常に柳眉を逆立てている。間違いなく美人さんなのだけど、氷のように冷たく近寄りがたい。そんな雰囲気。

そう、イジメっ子をフルボッコどころか血塗れにしちやってそうな女の子――

「って、リンネ……さんっ!」

《はあ、あなた、昔からこうなんだ》

頭に直接響く声。

「どういうこと? リンネさん? リンネさんなの!」

リンネさんらしきファイターが熱い息を吐き出した。

縮んだバネが弾けるように、長い間合いを一瞬で詰めと、きつく握りしめた拳を、何度も、何度も、白い暴風のように叩きこんでくる。

ドレスのような白いバリアジャケット。その肩口から見える鍛えられた筋肉が、軋む音が聞こえそうなほど盛り上がる。

「話を聞いてよー!」

かつて『ViVi d Strike!』2話で、ノーヴェエやコロナ、ユミナさんが言っていたこと。

『この選手の強さは、突き詰めればただ一点——力が強いこと。腕力が強い。体幹が強い。全身の筋力が強い。だから、どんな状況にも強い』

『パワーが凄すぎて、打撃と投げ技全部が必殺技になっちゃうというか』

『U19でも、ここまで圧倒的な魔力と筋力の持ち主はめったにいないねえ』

そんなリンネさんと正面から殴り合うだなんて馬鹿げている。

本来のわたしのスタイルなら、確実に打撃を避けながら、確実にこちらの攻撃を打ちこんでいき、焦った相手の大振りにタイミニングを合わせての一閃必中カウンター。

けれど、今のわたしは5―01型デバイスのお陰で、巨大な魔力と強靱な肉体。さらに、あの霸王クラウス陛下ですら一撃も入れられなかった鉄壁の防御がある。

であれば――わたしは一步前が出る。

「オリヴィエの名にかけて、正面からの打ち合いも負けるわけにはいか――ぷろおくと!?」

拳と拳が交差した瞬間、派手な音を立ててわたしの身体は後方に吹っ飛んだ。砕かれた魔力の欠片が四散し、ルヴェラの空に虹の光を撒き散らす。

両脇を締めて空中で体勢を整えた。

「しまった! リーチの差を忘れてたあゝ」

つい、大人モードの気分で打ち合ってしまった。

『ヴィヴィオ、大丈夫なのッ!?!』

「平気、平気、ノーダメージだから!」

とはいえ、だ。

「あのリンネX（エックス）……」

『何よ、リンネXって?』

「ほら、今はまだ本物のリンネさんって決まったわけじゃないでしょ。だから、謎のヒロインXというか、存在Xとか、ミスターXとか、ミネルバXとか……」

『最後のはマジンガーだけど、そうね、偽リンネやリンネもどきよりはマシかもしれないわね……って、ほら、さっさと変身魔法で大きくなりなさい』

ん。

「考えてみたら、わざわざリンネさんが最も得意とするインファイトで戦う必要もないんだよね」

わたしは飛行魔法で急上昇する。

『逃げるの?』

「ううん、ちよつと試してみたいことがあつて——」

空戦魔導師は、高度2万メートル以上の空間で戦闘するという。劇場版のなのはママはちよつとやりすぎだと思っうけど。

「いくらリンネさんでも高高度の飛行訓練はしてないだろうから——」

雲の上。彼女の手が届かない場所まで上昇する。

「さて、ここでお婆ちゃんに問題です。一般的に大魔力を持つ魔導師は、どんなことが苦手でしょうか?」

『一般的に？ そうね、高速処理と並列処理かしら。ぶつかっちゃうのよ。私の次元魔法がいい例ね』

これは『魔法少女リリカルなのはStrikers THE COMICS』2巻で、はやてさんも語っていたことだ。なので、はやてさんは自分の魔力運用について、『立ち止まって展開・発射だけなんよ』

とも言っている。

「では第2問。わたしの魔力資質はどんなタイプでしょう？」

『ヴィヴィオの？ 確かシャントってシスターが言っていたわね。高速並列運用型だったかしら？』

「ピンポン、ピンポーン！ つまり、今のわたしは、本来、リリカルなのはの魔導師ではありえない、大魔力かつ高速・並列処理が可能という、まさに圧倒的なチート状態なわけです」

『まあ、そういうことになるわね』

「さらに、ここからが今日一番の見どころだよ！ この小説を読んでいた人はちよーラッキー！」

『ウイキペディア』にも『Nanoha Wiki』にも載っていない。誰も知らない、たとえ見たことがあっても、覚えていない——そんな、約10年越しの『魔法少女リリカル

なのはSt r i k e r S』新情報っ!」

『……ヴィヴィオ、大丈夫? 大言壮語じゃない? 風呂敷たためる?』

「任せて、お婆ちゃん!

『魔法少女リリカルなのはSt r i k e r S オフィシャル ファンブック』に、聖王ヴィヴィオの能力として、

『“データ収集”による魔法戦闘』

と書かれており、魔法辞典にも、

『なのはの保有魔法だが、ヴィヴィオは“データ収集”によつて獲得している』

と書いてあることから、わたしが“データ収集”により魔法を真似る——ゲットできるといふのは、多くの人が知るところ。

「だけどお婆ちゃん、この“データ収集”ってどんな能力かわかる?」

『高い学習能力のことですよ』

「甘い、甘いよ、お婆ちゃん。このデータ収集の真の名は『高速魔法蒐集』!」

『魔法蒐集って、八神はやての……?』

「そう。闇の書がリンカーコアから魔力を奪う際、魔法のデータを蒐集・記録していたことを、わたしは——生身で、それも見ただけで、行使することができる。」

それが、『St r i k e r S』のラストバトルで、何故わたしが、あんな簡単に、なの

はママやフェイトママの魔法を使っていたのか——その解答なんだよ！」

『それは、流石にチート過ぎなんじゃ……』

「うん、だよな、わたし自身、そう思ってた……。だけど、お婆ちゃん、よく考えてみて……。」

『Strikers』って『無印』『A's』と続いた——いわば『リリカルなのは3』ってことだよな？ 例えるなら『ドラクエ3』みたいな感じ」

『ええ、まあ、そうね』

「だとするならば、

● 『竜王』↓『破壊神シドー』↓『大魔王ゾーマ』

● 『プレシア・テストアロッサ』↓『闇の書の闇（ナハトヴァール）』↓『聖王ヴィヴィ

オ』

となる」

『あー、私、竜王ポジションなのね。まあ、変身前は杖持ってるし、黒いローブだし、似てるといえば似ているのかしら……？』

「もしも、RPGの続編で、前作より弱つちい、インパクトのないラスボスが登場したらどう思う？」

『それは……』

「しかも、リリカルなのはの場合、前作の10年後が舞台で、さらに研鑽を積んで強くなった前作主人公が、そのまま主人公なんだよ? これで、前作より弱いラスボスが登場してしまつたら……」

『反感を買うわね……』

「うん。原作者やスタッフが、好む好まざるとにかかわらず、わたし——聖王ヴィヴィオの能力は、初代リインさんやナハトヴァールを超える必要があつたの。そのためのが、ゆりかごであり、闇の書を超えるデータ収集能力——『高速魔法蒐集』だつたんだよ!」

『そういうこと……。強くするしかなかったということね。わかつたわ。ヴィヴィオ、あなたが実は強かつたというのはわかつた。けれど、その「高速魔法蒐集」とやらのソースは? 情報のソースを出しなさい。オリジナル設定なら興ざめよ?』

「大丈夫だよ、お婆ちゃん。オリ設定でも真偽不明のネット情報でもない。

表面のちよつとエッチなリインさんの格好に目を奪われて、誰もがちゃんと読んでこなかつた『ブロッコリー・ハイグレード・カードコレクション魔法少女リリカルなのは StrikerS』の裏面——『マジカル魔法辞典 その6』に、

『——血族固有の機能として無敵の防御を誇る“聖王の鎧”を保有し、“高速魔法蒐集”によつて得た攻撃魔法で玉座の間に近づく驚異を排除する』

と書いてあるの。ちなみに、初出は『月刊メガミマガジン2007年11月号』らしいけど、この『高速魔法蒐集』という能力は、れっきとした公式情報なんだよっ!」

『つまり、これまでの「ウィキペディア」や「Nanoha Wiki」などの執筆者たちは、幼女（リイン）に気を取られて、大事な情報を見過ごしてきたってわけね?』

バックベアード様が待機してそうだ。

「と、いうことはだよ? 『StrikerS』から5年が経過し、わたしはありとあらゆる魔法を見て、蒐集してきた。そして、これまでは魔力量が足りなくて使えなかった魔法も、聖王モードの今なら、無制限に——自由自在に——それも高速で——並列に扱える」

白い雲の合間。遙か眼下にリンネさん——いや、リンネXを見下ろす。

ふっ……。

思わず頬がにやけてしまう。

まずは1つ目!

「星よ集え——」

わたしの前方、左斜め上に巨大な魔力で編まれた虹色の光球が生まれる。

さらに2つ目!

「雷光一閃——」

電気変換資質がないと使えないと思われがちだが、ところがどっこい、わたしは電気変換魔力の打撃——プラズマアームをフェイトママから獲得して『StrikeRS』で使用している。つまり、大魔力であれば変換効率なんて無視、無視、無視、問答無用で使えちやうということ。

わたしの前方、右斜め上で青白い放電現象が起きる。

そしてラスト3つ目!

「響け、終焉の笛——」

わたしの真つ直ぐ前方、無数の虹色の魔力球が一点に集まる。続けて、三角形のベルカ式魔法陣が浮かび上がる。

「刮目せよ! 前代未聞、驚天動地、曠古の盛儀ッ! コレが、今のわたしにできる、最強・最大の攻撃魔法——」

ぶっちゃけ、集束もカートリッジもないけれど、機体内に蓄積した大魔力を瞬間的に放出してカバーする。

「スターライトブレイカー——っ!」

虹色の光の柱が、リンネXの全身を頭上から飲みこむ。

「プラズマガンバ——っ!」

雷撃のエネルギーをまとう魔力砲が、虹色の刃となって斬りかかる。

「ラグナロクっ！」

3つの発射体から放たれる、3種類の直射型砲撃魔法が、ただ一点をえぐり取る。

「リンネさん、少し頭を冷やそうかああ！ 今必殺の、石破天驚（ウソ）——ひとりトリプルブレイカアア——ツツ!!」

三大魔法の並列起動。

眼下に広がる青い世界で、リンネXを中心に魔力の光が虹色のドームを形作る。

フェイトママよく生きてたなく、という1期を彷彿とさせる閃光。

世界が白に染まる。

『……ヴィヴィオ……これ、やり過ぎじゃない？ 3人分よ？ オーバーキルでしょ……』

「大丈夫、大丈夫、非殺傷設定だから。バリアジャケットは……ちよつとエツチな感じでボロボロになるかもだけど」

リンネさんだからいいよねっ！

『前々から思っていたのだけど、非殺傷設定といえど何でもアリなのかしら？』

「高町家限定のローカルルールじゃない？」

『何よそのエクस्पロージョンルール』

あとはもう「ちゅどーん!」と落ちるだけ……だったのだけど、

「——リアクト、オン」

突然、虹色の魔力が竜巻のように渦を巻いたかと思うと、やはり、虹色の魔法陣——バカみたいにでつかい円形だった——に吸いこまれて、いや、魔力エネルギーが結合分断されて消えていく……。

残ったのは、両手に2丁一対の銃剣らしきものを持つリンネさんの姿。

魔法を無効化する銃剣って……まさか……。

「リンネXディバイダー……だと!」

【次回予告】

いやああく、なにこのガンダムXディバイダー!?

10年越しの最新報で、聖王ヴィヴィオの最強っぷりをアピールした直後のわたしが
嘸ませって、どーいうことおお!?

大型の盾はないようだけど、リンネXさんがデイバイダーを持つてるわけだから、リンネXデイバイダーで間違いない!?

とはいえ、このリンネさん、本当に本物のリンネさんなの？ 早くも原作ルートを無視したツケが回ってきたってこと？

次回【この世界が『Force』だとわたしだけが知っている】第11話。

【そいえばトーマはガロードに似ている】
で、リリカルマジカルがんばります！

第11話 そいえばトーマはガロードに似ている

ガロード・ラン。

言わずと知れた『機動新世紀ガンダムX』の主人公である……って、本当に言わずと知れたかどうかは置いて、「リリカルなのはと関係ないじゃん!」と、おっしゃる方も多いと思うのだけど、少しだけ時間を割いて傾聴して欲しい。

15歳。身長161cm。体重53kg。一人称は「俺」。

明るい性格で負けず嫌い、その一方でナイーブな面もある。

戦災孤児。

ある日、ガロードの住んでいた町は、モビルスーツに乗った盗賊集団に襲われた。本人は奇跡的に助かるも、家族や知人たちは皆殺しにされる。

天涯孤独となったガロードは、子供の身で1人生き抜いていく。

そして、依頼により潜入した艦内でティファ・アディール（ヒロイン）と出会い一目惚れ。

ティファを連れて逃げる際、彼女を守るための力——ガンダムXを手に入れる。そんなガンダムXの必殺技といえ、高出力ビーム砲——サテライトキャノン。

一方、トーマ・アヴェニール。

15歳。一人称は「俺」。

明るい性格で負けず嫌い、その一方でナイーブな面もある。

ある日、トーマの住んでいた町は、本と銃剣の二人組に襲われる。本人は奇跡的に助かるも、家族や知人たちは皆殺しにされる。

天涯孤独となったトーマは、子供の身で1人生き抜いていく。

その後、スバル・ナカジマに保護されたトーマは保護施設に入る。

そして、過去に踏ん切りをつけるための一人旅の途中、潜入したルヴェラ鉱山遺跡（研究施設）で、リレイ・シュトロゼック（ヒロイン）と出会い、エクリプスに感染。

リレイを連れて逃げる際、彼女を守るための力——デイバイダーと銀十字の書を手に入れる。

そんなトーマの必殺技といえば、高出力砲撃——デイバイドゼロ・エクリプス。

さらに序盤。夜。二人つきりで野宿をするシーン。ガロードは焚き火の前で自分の過去を語るのだけど……トーマも同じように、1巻の野宿シーン。リレイとアイシス（ダブルヒロイン）の前で自分の過去を語っている。

そして後半、ガロードとティファが宇宙で再会したシーン。ティファが飛びつき、地球をバックにクルクル回るのだけど……そういえば4巻のトーマとリレイさんの再会

したシーン。リレイさんも空中でトーマに抱きついていたなあ……と。

もつとも、ティファは例の紐（某ロリ神様の青い紐。中の人はフーカさんと一緒）を装着しようとして、すとんと紐が落下してましたが、リレイさんなら胸部がロリ神様クラスなので……って、ああ！ もうひとりのヒロインたるアイシスさんが、同じく、すとんでしたつけ……。はあ、べったん、べったん！

ちなみに、後にガンダムXは改修され、多連装ビームとスラスターを兼ねる多機能大型シールド「デバイダー」（ウエンデイのライディングボードみたいなのを装備し、ガンダムXデバイダーと呼ばれる）。

つまり、何が言いたいのかというと、

『魔法戦記リリカルなのはForce』の世界に、リンネXデバイダーが降臨したとしても、そう違和感はないんだよっ！』

『いやいやいや、違和感ありまくりでしょ!?!』

わたしの横で浮かぶサラちゃん（ガンプラ）を操るプレシアお婆ちゃんから、切れのいいツツコミが入る。流石は大魔導師。

『あなたの思う大魔導師と、私の知ってる大魔導師は別物な気がするわ』

——というわけで、ここで、現状をおさらいしてみたい。

現在わたしがいるのは第23管理世界ルヴェラの文化保護区。原作『Force』1巻で主人公トーマが訪れている場所——と言えばわかりやすいだろう。

物語のスタート地点だ。

もう第1話なのにつ!? という話はOKいったん置いてどうか……。

そして、元の世界に帰るために必要な“原初の種”なるキーアイテムを手に入れるため、時系列を無視して『Force』のラスボス——ハーデイス・ヴァンデインに挑戦しようとするルヴェラの空を飛んでいたところ、リンネさんにアツシマーみたいに強襲される。

Zのアツシマーはもつと評価されるべきだと思う。

とはいえ、今のわたしは聖王モード。強くてニューゲーム。フィンガー・フレア・ボムズだつて使えちゃう。

わたしは某少女の皮をかぶった化け物のごとく高高度まで上昇すると、リンネさんらしき人物の頭を冷やすため、最強の砲撃魔法を放った。

ところがどっこい!

リンネさんはリンネさんでリアクト。エクリプス兵器。2丁一对の銃剣型デバイスダーを起動して、わたしの魔法を無効化してしまったのだ。

「この体は間違いないく強いのに……わたしの心が弱いから……」

『はいはい、アインハルトごっこ（1巻）なら元の世界に帰ってからやりなさい』

そんなわけで、現在のわたしは、そのリンネさんを遥か上空から見下ろしているわけなのだけど——。

「ご……これが勇者アルスがバラモスゾンビを倒したときに使ったというマホステか！」

『結合分断よ。まあ、味方の回復魔法や補助魔法まで無効化する——という意味では、確かに同じだけど』

「ねえお婆ちゃん。前から1つ疑問だったんだけど、接近戦だとバリアジャケットも無効化されて、薄い本みたいに裸になったりしないのかな？」

『……その展開は薄い本だけよ、ヴィヴィオ』

「えーっ、そーなの!? わたしてつきりバリアジャケットが一瞬で消えちゃって、白い光や見せられないよ、が飛び交うのかと〜」

『はあ……その件は、あとでリニスにあなたの母親に連絡させるとして……』

「やめてー」

『そうね、細かい説明は省くけど、「Vivid」7巻であなたがミウラって子に負けた際、魔力切れで意識不明になったことがあったでしょう?』

あー、そんなこともあったっけ。

『あのとき、デバイスの予備魔力を含めて魔力を使い切った状態にもかかわらず、あなたは大人モードのバリアジャケット姿のままだった。これはどういうことだと思う?』

「えっと……変身後は魔力を消費しないとか?」

『半分正解で、半分ハズレね。これも例え話になるのだけど、「魔法少女リリカルなのは Strikers THE COMICS」の1巻で、あなたの母親とフェイト、八神はやての3人が、AMFを発生させるガジェットと交戦した話があるでしょ? そのとき八神はやてが、

「魔力が消されて通らないなら“発生した効果”のほうをぶつけろばええ」

と言っていたのを覚えている?』

「うん、覚えてるけど……あ、ひよつとして大人の姿になると、バリアジャケットの生成は、すでに“発生した効果”になるってこと? だから魔力切れでも、結合分断されても消えない?」

『ええ正解。逆に言えば、元の姿や衣服に戻る際にも魔力が必要ってことよ』

なるほど……。

『ただし、バリアジャケットに関しては見た目とは別に、不可視の防御フィールドを常時発生させているでしょ。そちらの方に魔力を消費しているから、魔力切れをおこしたり、結合分断されると、防御力という意味では最弱になるわ。2巻のシグナムVSサイファー戦がいい例ね。見た目はいつもの騎士服だったけど、防御力はゼロに等しかったのよ。ただのコスプレみたいなものね』

「コスプレ……」

普通の衣服で斬られた——とすれば、確かにあの状況にも説明がつく。

『そもそも、あなたのセイクリッドライフエンダーだって、一点に魔力を100パーセント振り分けても、バリアジャケットは消えないでしょ？』

「あ、そうでした」

自分がいつもやっていることなのに、すっかり忘れていた。

「そっか、これまでのリリカルなのは、戦闘中ちよつとエツチな感じにボロボロになってもそのままなのは、一度発生した効果であつて、すでに魔力とは関係ない衣服みたいな状態だったからつてことかあ」

わたしもよく、黒いインナー部分が破れて素肌が露出しているわけですが……。

あれ？

でも……だとすると1つ疑問が。

「1度バリアジャケットを解除して、もう1度生成すれば、バリアジャケットはもとに戻るってことだよな。だったら、激しい戦闘中は無理でも、戦闘の合間とか、余裕があれば可能だよな。どうしてやらないの？」

わたしもだけど。

『別にもう1度生成してはいけないというルールはないわよ。そもそも、解除しなくても再構築すればいいだけだし。アインハルトが試合中にやっているでしょ』

「……そう言われると」
やっていた。

『基本的には、見た目が変化したところで防御フィールド自体は変わらないのだから、破れた格好のままは嫌だとか、再構築に使う魔力も惜しいとか、そこにどれだけの価値や意味を見出だせるかでしょうね。』

あとは……そうね、実はこれが一番大事なことのんだけど、いわゆるサービスシーンというやつよ』

「あゝ」

大人の事情でした。

「でも、サービスシーンっていうなら、結合分断でバリアジャケットもスパーンって、ドレスブレイクみたいに破けた方が面白かったんじゃないや……」

——ディバイドゼロ・エクリップス!

——スパーン!

で、みんな真っ裸になるといいう

『やめなさい。一応言っておくと、あの時点で、バリアジャケットもAEC装備使用になつていたはずだから、分断対策はしていたはずよ』

「くっ……」

『Vivid LIFE』や「魔法戦記リカルなのはForce Dimensio n」だったら、コメディ路線だから可能かもしれないけど、そもそも深刻な本編では無理でしょ』

「やっぱり?」

『たぶんだけど、それを本編でやったのが「DOG DAYS」ね。防具破壊とかいって、よく衣服が破けてたでしょ?』

「あゝ」

アレか!

「はあ、藤真拓哉先生が『Vivid』と『DOG DAYS』をコラボした漫画を連載してくれたら最強だったのにな」

『それは……あー、まあ、確かにアリといえどアリだったかもしれないわね。というより

違和感ないわね。今からでも描いてくれないかしら?」

合法(?)的に脱がせられるし。

「なににせよ、魔力無効化なんて、いよいよ『Force』らしくなってきたね!」
ついに、眼下に見下ろすリンネさんと決着をつけるときがきた。

このまま未来のわたしたちとモフモフし続ける『ご注文はクリスマスですか?』みたいなノリになったらどうしようかと思っていたのだけど。

リンネさんがデイベイダーを持っている以上、相手は魔導殺し。しかし、わたしのデバイスは、そんな魔力無効化に対抗するために生み出された新世代のデバイス!

分断効果なんてなんのその!

粒子攻撃であっさり切断されるフォートレスの盾(5巻のキャロやエリオのやつ)とはわけが違う。

「ふっ……カレドヴルフ社製AEC装備とは違うのだよ、カレドヴルフ社製AEC装備とは!」

ジオン初のビーム兵器を標準装備したゲルググみたいなものだ!

『それ負けフラグなんじゃ……』

「大丈夫だって。ギレンの野望のランバ・ラルは、グフより強いドムを用意すれば、ホワイトベース隊にだって勝てるんだから!」

サラちゃんを右手でつかむと、わたしは頭上に掲げた。今こそ5―01型デバイスの真の力を見せるとき！

「術者からデバイスへの魔力供給カット！

予備魔力に切り替え！

行くよ、お婆ちゃん！」

『ええ』

「5―01型デバイス、魔力変換機構、スタートアップ！

マスター認証、高町ヴィヴィオ、結晶体からの直接魔力供給を許可！」

『術者及び蓄積石からの魔力供給を再開』

「変換機構への回路開け！」

『セーフティロック解除』

「変換開始！」

『変換開始！

いいわよ、ヴィヴィオ。

魔力近似エネルギーへの安定変換確認！」

「最終セーフティ解除！」

『デバイス内、圧力上昇！

86……97……100!

エネルギー充填、120パーセント!!』

「120パー……120パーセントおお!？」

ヤマトじゃないんだから爆発オチいい!？」

『あー、もう、いいのよ！ 前に話したでしょ。第五代デバイスはまだまだ変換効率が悪く、エネルギーロスが多いから、普段と同等の出力を得るためには、魔力供給を120パーセントまで上げる必要があるのよ!』

「そ、そういうこと!？」

フィールド再生成用意!」

『再生成10秒前!』

9……8……7……6……』

おお……。

わたしの全身を覆う、不可視のはずの防御フィールドが、魔力近似エネルギーの影響なのか、徐々に赤みを帯びていく。

こ、これは……。

映画『Reflection』や『Detonation』でアミタさんやなのはマ
マが使った加速システム——アクセラレイター（一方さんではない）のようだけど、お
そらくこの絵面は……。

『3……2……1……ゼロ！』

5—01型デバイス、完全稼働！ 行けるわよ、ヴィヴィオ!!』

「了解！ トランザム！」

『違うでしょ!?!』

「はああ、界王拳、4倍だあ——っ!!」

『それ言いたいだけよね!?!』

「狙い撃つぜええ！」

『それも違つ——』

「二閃必中っ！ セイクリッドブレイザー——ッ（魔力近似エネルギー!!）」

『——うくないわね!?!』

使い慣れた虹色の魔力砲でまずは様子見。

ギヤリツク砲のように収束された光線が、真つ直ぐ頭上からリンネXディバイダーに襲いかかった。

閃光が白いバリアジャケットをまとうリンネさんを飲みこむと、光の中に溶けるように消えていく。ルヴェラの空に轟音を響かせ直撃した。

「よしっ—」

今度は無効化されない。

変換機能が正常に働くか心配していたのだけど、これでお婆ちゃんの研究が正しかったことが証明されたわけだ。

とはいえ、あのリンネさんがセイクリッドブレイザー一発で終わるはずもない。

「やっぱり無事だったか—」

光が収まると、砲撃を受ける前と寸分変わらない場所に浮かんでいた。

けれど今回は銀髪が焦げ、防護服の破損も見える。

リンネさんが空を——わたしを無言で見上げた。

「余裕ぶっこいてセイクリッドブレイザーを避けないから……。だったらお望み通り、接近戦でとどめ！ わたしの前に立ち塞がったこと、そして聖王に牙をむいたこと！ 地獄で後悔しながら懺悔なさい！ ゴッドブロオオ——ッ！」

『それも違つ……。ああ、もういいわよ、ほら退却するわよ、退却！』

「はい？」

言うが早いのか、わたしの身体は虹色のフィールドに包まれる。一瞬にして周囲の風景が変化——してないな、これ。同じ雲の上だから違いがわからない。一面青と白。眼下のリンネさんが消えたので、かろうじて、別の場所へ移動したことだけは理解できる。

お婆ちゃんが転移魔法を使ったのだ。

「もく、どうして逃げちゃったの!? 別にまだ負けたわけじゃないのに！ ここからが本番でしょ？ お婆ちゃんが試したがってた第五世代型デバイスが、実際の程度魔力無効化に通用するかの実験だって、これからだっただけにいい！」

『あー、はいはい。でもね、ヴィヴィオ、今の攻防だけで大事なことがわかったのよ』

「大事なこと？ ひよつとして……ゴッドブローよりゴッドレクイエムの方がよかったとか!？」

『そうそう……つて、このすば関係ないでしょ！ いい、ヴィヴィオ、よく聞きなさい。今のあなたではエククリプス感染者には——ハーデイス・ヴァンデインやカレン・フツケバインには、絶対勝てないのよ』

【次回予告】

待って待って、どーいうこと？ わたしじゃハーデイスさんやカレンさんに勝てないってどーいうこととおお!?

聖王教会が崇めるご神体としては、アクア様のゴッドブローではなく、ここはオリジナルのセイクリッドブローを習得しろってこととおお!?

セイクリッドブローとは！ 聖王の怒りと悲しみを乗せた必殺の拳！ 相手は死ぬ！

次回【この世界が『Force』だとわたしだけが知っている】第12話。

【わたしにその手を汚せというのか】
で、リリカルマジカルがんばります！

第12話 わたしにその手を汚せというのか

転移先の空で、プレシアお婆ちゃんが操るサラちゃんがわたしに告げた。

『いい、ヴィヴィオ、よく聞きなさい。今のあなたではエクリプス感染者には——ハーデイス・ヴァンデインやカレン・フツケバインには、絶対勝てないのよ』

「へ？ 待つて待つて、どーいうこと？ リアクト状態のリンネさんとは、まだ拳も交えてないんだよ？」

砲撃魔法セイクリッドブレイザー（魔力近似エネルギー）をお見舞いしただけ。

『そうね』

お婆ちゃんは淡々と答えた。

むう……。そいえば今回の第12話。名作SRPG『タクティクスオウガ』みたいなサブタイトルだし、どうやら真面目モードらしい。

「わたしとお婆ちゃんがタッグを組んでるってことは、1期と3期のラスボスコンビなわけだから、ドラクエで例えるところの、竜王とゾーマがタッグを組んで、5のミルドラスだっけ？ 影の薄いラスボスと戦うようなものでしょ。負けるとは思えないん

だけだ」

『……そう言われると勝てそうな気がしてくるのだけど、これは単純な強さの問題ではないのよ。あなた、リンネにひとりトリプルブレイカーを放ったあと「非殺傷設定だから」って言ったでしょ』

「うん、言ったけど？ リリカルなのはお馴染みの攻撃方法でしょ」

純粋魔力ダメージによって対象の肉体を傷つけることなく、行動能力のみを奪うための設定。

『そうね。攻撃の非殺傷設定や相手のバリアジャケットを抜かないよう威力設定する。たとえ犯罪者といえども、できるだけ相手の命を奪わない戦い方。管理局というよりは、今の管理世界の主流となる倫理観ね』

「ん〜、『ふつ、愚かな倫理観ね……』みたいなの？」

『別に愚かじゃないわよ。その理念に文句をつけるつもりもないわ。ただ、さっきのセイクリッドブレイザーで確信したの。エクリプス感染者を相手にした場合、これまでの管理局の戦い方では、ハーデイスはもちろんフツケバインにも勝てない。かろうじて、グレンデル一家とかいう、感染者に成り立てくらいなら抑えこめるでしょうけど』

「とうとうと？」

『エクリプス感染者は、例外なく高い再生能力をもつでしょ。もちろんスピードや限界

は個人差があるけど。切断された腕が再生するのはもちろん、一次感染者にいたっては、たとえ心臓を奪われても再生できる——』

実際『Force』の未収録分——6巻以降の物語でヴェイロンが再生している。

『アンデッドモンスターもビツクリよね。「ド●えもん のび太の魔界大冒険」の大魔王だって、心臓に銀のダーツを撃ちこまれたら終わりだったのよ?』

「あー、うん」

『逆に考えれば、それほどの再生能力をもつエクリップス感染者に対して、非殺傷設定の攻撃をしてどうなるというの?』

まあ、この先はギアーズに聞いた方が早いわね。アミタ、まだ聞いているのでしょ?』
サラちゃんから、中の人がアスナさんのボイスが聞こえてくる。

《はい。戦闘の邪魔になると思い黙っていましたが、聞いています》

『原作SAO2巻で、シリカの使い魔のピナを生き返らせる話があったけど、あのときキリトが9人のプレイヤーから攻撃を受けたことがあったわよね。そのときの話は聞いている?』

《キリト君から……つて、そんな話、私に振らないでくださいああい!》

『もう、融通がきかないわね。中の人ネタくらい対応しなさいよ。そのときのキリトの台詞がこう——』

『十秒あたり四〇〇、つてどこか。それがあんたら九人が俺に与えるダメージの総量だ。』（省略） 戦闘時回復スキルによる自動回復が十秒で六〇〇ポイントある。何時間攻撃しても俺は倒せないよ』

「あー、そういうことか。納得しました」

《納得しなくていいんですよ、ヴィヴィオさくん!》

『個人差はあるだろうけど、基本的にはエクリップス感染者が諦めない限り、降伏してこない限り、延々と戦いが続くということよ』

「でも、4巻のヴァンデイン社の手下2人組とフツケバインがバトルしたときみたいに、圧倒的な力の差を見せつけてやれば、あっさり降伏してくるんじゃない?」

『ハーデイス相手に？ カレン・フツケバインだつてかなりの強敵よ？』

「それは……」

『そもそも、あのとき手下が降参したのは、仲間が殺されたから。お前も殺す——という脅しね。』

管理局は殺さないけど、拘置所や刑務所に放りこまれる。これ以上抵抗するなら、一生お前の自由を奪う——という脅しね。

あなたは管理局員じゃないから、拘束しておくための施設を持たない。

相手を上回る力で気絶させたとして、そのあとどうするの？ じつと待つわけにはいかないでしょう。

であれば、エクリップス感染者を殺せる——ということを示さなければならぬ。

あなた、諦めない、降伏してこないエクリップス感染者の命を奪える？』

「殺すつて……無理、無理、無理！ そんなことできるわけないつて！」

『そういうことよ。どれだけあなたの方が強かろうと、あなたに自分を殺せないと、あまちゃんだとバレてしまえば、相手は降伏しないだろうし、あなたも、それ以上はもう手出しできない。戦う意味がないのだから』

「じゃ、わたしじゃハーデイスさんはもちろん、他のエクリップス感染者からも情報は得られないってこと？」

『そうね。今のままでは……』

お婆ちゃんの声がラスボスチックに変わる。

『だからね、ヴィヴィオ。殺せないなら殺せないで、管理局側につけばいいのよ。素性を隠しなさい。とーまを手助けしなさい。私たちの手で『Force』の歴史をコントロールするため、原作ルートを維持していくのよ』

「動きやすいように、なのはママたちに正体を明かしちゃダメなの？」

『ええ。前にも言ったけど、高町なのはやフェイトは、あなたを危険な目に遭わせないよう、戦いからは遠ざけるでしょうからね。蚊帳の外ルートに突入よ？』

《私としてはそちらをオススメしたいのですが……》

『はあ、忘れたの阿米タ。あなたが教えてくれたことじゃない。そもそもヴィヴィオの時間移動の原因となった、実験に干渉してきた第三者。この世界にはフツケバイン一家やハーデイス以外にも、まだ“未知の敵”が潜んでいるということよ』

《あ……》

「ああっ！ ひよつとして、リンネさんがその未知の敵つてことおお!」

『さあ、どうかしらね。现阶段の可能性としては3つ。』

①現在、ルヴェラ鉱山遺跡でヴァンデイン社の撤収作業中であることから、見張りを行っていたヴァンデイン側の感染者。

②このあとすぐ、ヴェイロンやサイファーが登場することから、フツケバイン一家の一味である。

③ヴィヴィオの言う通り、第三者である可能性』

うくん……。

『どれにせよーつ言えるのは、すでにリンネという不確定要素が現れた以上、早いうちに手を打たないと、ますます私たちの知る「Force」からかけ離れてしまうということね。結末が不確定である以上、最悪、特務六課が敗北の未来もあり得る。』

ギレンの野望の連邦編で、ホワイトベースへの補給をケチつたら、ホワイトベース隊が全滅したようなものね』

「ひいひい。つまり、ホワイトベース隊が全滅しないように、マチルダさんみたいに補給したり、黒い三連星にミデアで特攻しろつてことおお!」

《なんだか死亡フラグみたいですね……》

「いやあく、どーせサポートするなら、ジヨブ・ジョンポジがいいよ」
『ジヨブ・ジョンって……なにその安泰ルート……』

ジヨブ・ジョン。

髪は金髪。予備パイロットとしてホワイトベースに乗艦したが、ガンペリーやガンタ
ンクのサブパイロット、砲撃手を務めるなど様々な役割を果たし、一年戦争を最後まで
生き延びた。

漫画『機動戦士ガンダムF90』では、第一次オールズモビル戦役時にサナリイの幹
部として登場。

ウイキペディア『機動戦士ガンダムの登場人物 地球連邦軍』より。

「つまり、蚊帳の外を避けながら、とーまちゃんをサポートして、原作ルートから外れな
いよう歴史を裏で操る……って、わたし黒幕？」

『いいじゃない、黒幕。灰色の魔女みたいで憧れるでしょ』

「灰色の魔女も死亡フラグなんだけど。どうせなら『ジョニー・ライデンの帰還』のゴツプみたいなのが〜」

『あなた、本当に安泰ルートが好きね。まあいいけど、おそらくそれが、原初の種を手に入れるための、最も確実な方法なのよ』

《そうですね。私たちのシミュレーション結果にも影響が出ますし、できれば原作ルートの方がありがたいです。そういうことでしたら、私もそろそろ作業に戻りますね。なるべく早いうちに原初の種の在り処を突き止めますので、しばらくお待ちください。その間お話しすることはできませんが、ヴィヴィオさんも頑張ってください。気合いと根性ですよ!》

「ありがとうございます。といっても、またすぐに話すことになると思いますけどね」

《……え? どういうことでしょうか》

「だってアミタさん、リレイさんと中の人一緒じゃないですか。出番すぐですよ、すうぐう。直葉さんじゃないですけど」

《そーいうこと言わなくていいんですよおお!?》

ひとしきり熱く叫んだあと、アミタさんの声は聞こえなくなった。

「さてと……原作ルートつてことは、わたしはこれからルヴェラ鉱山遺跡に向かえばいいってことだね」

空が暗くなり、トーマ……じゃなかったとーまちゃんが訪れるのを待てばいい。

あとは、鉱山遺跡内部の研究施設で、とーまちゃんとリレイさんが出会えるようサポートするだけだ。

「現在位置は……あれ? ここつて……」

『ええ、安心しなさい。こんなこともあろうかと、転移先はルヴェラ鉱山遺跡の真上にしておいたから』

「さすプレ。でも、まだ昼間だよ? 原作通りならトーマというか、とーまちゃんが来るのは夜でしょ?」

ちようど正午くらいなので、時間には余裕がある。というかありすぎだ。どこかで昼食を取つてきたいぐらい。

『ええ、知っているわ。だけど、そろそろ調査結果が出るころね。アリシア、エルトリア

の方はどうかしら?』

明るい、ちよつと舌足らずな声が聞こえてくる。

《うん。たぶん、ママが気にしてた通りだね。今のままじゃ、原初の種の在り処はわからないんじゃないかな》

「アリシアさん? レヴィと遊んでたんじゃなかったの!？」

《ふっふーん、ママの命令でスパイ中なんだよ!》

「えーっ!?! お婆ちゃん、ひよつとしてアミタさんや王様たちのこと信用してなかったのおお!？」

『いいえ、ギアーズや紫天一家の能力は、その知識や技術を含めて信頼しているわ。けど、今回の事件に関しては信用できない。原作未登場の原初の種を含めて、不確定要素が多すぎるのよ。リンネって子も登場したし、尚更ね』

「でも、ドーセスパイ役なら、リニスさんの方が相応しいんじゃない?」

『ヴィヴィオ、アリシアは一見アホの子っぽいけど——』

《アホの子言うなああ!》

『意外と感情を隠して、相手に合わせるのが得意なのよ。逆に、リニス你真面目だから向いてないのよね、隠し事は。私もダメね。フェイトもダメね、真っ直ぐだから。そういった意味では、アリシアよりフェイトの方が私に……いえ、止めておきましょう』

そういえばアリシアさん『The MOVIE 2nd Act』でも見事な腹芸を披露してたっけ。

「これでフェイトママみたいな色気があれば魔性の女になれたのに……」

《ヴィヴィオは一言多いよねええ!》

『そんなわけだから、エルトリアだけに任せず、こちらも原作ルートを逸脱しない範囲で情報収集を行きましょう、という話よ』

「とうとう?」

『せっかく、目の前に敵の研究施設があるのよ? しかも撤収作業中。この混乱に乗じて、原初の種やエクリプスの情報を手に入れる。たとえ原初の種についてわからなくて

も、管理局よりも進んだヴァンデイン社のエクリップス研究の成果が手に入れば、これから先の戦いにも役立つでしょう』

「なるほど」

『上手くいけば、殺す以外にも、感染者を無力化する方法が見つかるかもしれないわ』

「そっか！ うん。そういうことなら潜入するよ。ばっちこーいっ！」

タイムリミットは日が落ちるまで。とーまちちゃんが現れる前に、必要な情報をいただくわけだ。

「撤収作業中ならダンボールだっていっぱいあるだろうしね！」

『そうね。ダンボールが置いてあっても不自然ではないわよね……って、ちよつと待ちなさいヴィヴィオ、あなた、メタルギアじゃないのよ？』

「ヴィヴィオ・スネーク！」

出生が他人事とは思えない。

「大丈夫、大丈夫。だってわたし、ティアナさんの幻術魔法見たことあるし。ステルス化したダンボールなら問題ないでしょ」

「……ああ、そういうこと」

わたしは地上に下りると、ヴァンデイン社の私設軍隊なのか警備会社なのかわからなけれど、実弾兵器を持った警備の目をかいくぐり、ダンボール箱を手に入れる。

「よし、オペティックハイド！」

ダンボールの表面に複合光学スクリーンを展開。これで不可視のダンボールの完成だ。この中に入ってしまったえば、もう、誰の目にもわたしの姿は映らない。

「お婆ちゃん、一応ジャマー結界もお願い」

『ええ』

こうして、なんだかインディー・ジョーンズやトウムレイダーみたいな感じで、鉱山遺跡の暗い通路を進んでいく。

ひたひた……。

その間、銃を持った警備員とすれ違うことがあるものの、まったく気づかれない。完璧だ。わたしは見つからない。

『……って、ねえ、ヴィヴィオ。思ったのだけど、これ、ダンボールを被る意味はあるのかしら？』

……………。

ダンボールを被らなくても、ティアナさんのように自分自身が透明になればいいだけである。

「昔の偉い人はいいました。『なぜ、山にのぼるのか？　そこに、山があるからだ』と。ダンボールも以下同文！」

『……あー、うん。深い意味はないのね』

「でも、これちよつと面白いな」

「でしよ。ダンボールを被って施設に潜入するってのは、1つのロマンなんだよ、ロマン……って、おや？」

わたしのダンボールの後ろに、もう1つダンボールが連結してるのだけど……。

「いつの間に2両編成に……って、あ、さっきの声……ま、まさか……」

「おう、あたしだぞ、ヴィヴィ姉ちゃん！」

アリシアさんとは別タイプの、元気いっぱいといった感じの声。

「とーまちゃん!? って、え、あれ? どうして、こんな早く? まだ外も明るいのに!」

「スウちゃんから、暗くなったら外出しないように言われてるからな。明るいうちに探検に来たんだ」

「なるほど〜」

9歳の女の子だもんね。

「至極まつとうな理由だったああ!」

【次回予告】

夜の女の子の一人歩きは危ないよね。遺跡の観光に来るなら昼間だよね。うん……って、なんてこつたい！ 思つたより早くとーまちやんと合流しちやつたよ!!? あれ？ ちよつと待つて。これつて色々とマズいんじや……。まったく情報収集してないし。このままリリイさんを救出しちやつていいのかな？

次回【この世界が『Force』だとわたしだけが知っている】第13話。

【潜入！ ルヴェラ鉱山遺跡】

で、リリカルマジカルがんばります！

第13話 潜入! ルヴェラ鉱山遺跡

原作『魔法戦記リリカルなのはForce』の主人公トーマ・アヴェニールは15歳の少年である。

一方で、原点回帰らしく『無印』の高町なのはと似たこの世界のトーマ——とトーマ・ナカジマ”は、9歳の少女。

時間軸において、リリイさんと出会う前——ということは、レイジングハートと出会う前——魔法という力を得る前の、ただの小学生だったころなのはママと同じ扱い——ということでもある。

もつとも、一人旅を許されているということは、とーまちゃん、それなりに腕に覚えがあるのだろうか……。

ああ、そっか。

トーマが復讐のため一人で強くなったように……。

なのはママの海鳴の実家に、御神真刀流の道場があるように……。

あのナカジマ家に住んでいたら、スバルさんやギンガさんだけでなく、ティアナさんに元ナンバーズから、格闘技を始め、色んなスキルや知識を叩きこまれたのだろう。

だから、警備の目をかいくぐることもできる。

とはいえ、9歳の女の子。

スバルさんの、

『暗くなったら外出しないように』

との忠告は、至極まっとうであり、原作トーマのように、1人で夜の遺跡で宝探しと写真撮影なんてことは、常識的に考えてしないでらう。

まだ何か見落としていることがありそうだけど……。

「そりゃ、明るいうちに遺跡に来るわけだよねえ」

とーまちゃん、スバルさんのようにじつとわたしの目を見て話す。

「それで、どうしてヴィヴィ姉ちゃんは、あたしより先にここにいるんだ？」

「……くっ、いきなり確信をついた質問を」

屈託のない笑顔がまぶしい！

このとーまちゃん、一見りオみたいなのに、ただのアホの子……じゃなかった、元気っ子なのだけど、妙に勘が鋭く、強引に切りこんでくる。

こんなところまでスバルさんに似なくてもよかつたのに。

わたしは念話をデバイスのサラちゃん（ガンブラ）に送った。

作戦ターイム。

(お婆ちゃん、どうしよっか?)

(そうね。何だかもう、当たり前のようにヴィヴィ姉と呼ばれちゃっているけど、できればあなたの正体は隠しておきたいのよね。特務六課に協力しつつ、あくまで自由に動く立場を確保しておきたいわ)

(ヴィヴィオだとバレて、エクリプスの事件からハブられないように……だね?)

(ええ。だから、ここは『管理局法』を利用してもらいましょう)

(『管理局法』?)

(いまだ別世界に渡る能力を持たない世界については、他の世界に影響を及ぼすような事故や事件が起こらない限りは“不可侵”——という取り決めよ)

そういうえば『魔法少女リリカルなのはStrike』クロニクル』で読んだことあるような……。

(スターオーシャンの『未開惑星保護条約』みたいなやつだね!)

(……やめなさい。確かにPS4やSwitchで初代スターオーシャンのリメイクが出るけどやめなさい)

家庭用ゲーム機初の『スターオーシャン ブルースフィア』リメイク版もお待ちしています。

『GOD』や『Reflection』『Detonation』でのアミタやキリエ、ついでにイリスだったかしら、事件後のあの子の扱いを見ていればわかると思うのだけど、管理外世界から来た人”に対して管理局は甘いよ。不可侵”の部分が拡大解釈されているのね)

(うーん)

(まあ、実際、例えばキングダムな世界の住人が、現代にやってきたと仮定して、管理世界の法を守るかという……)

(あー、それならわかるかも。そりゃ無理だよねえ……)

漂や政、河了貂や羌?ならどうにかかなりそうだけど、信はなあ……うーん。

王騎なんてヒソカっぽいし。

異なる文化や価値観を持つ人に、いきなり自分たちと同じように行動しろといっても難しいだろう。

ヤツクデカルチャーである。

もしリリカルなのは新作アニメがあるのなら、ライオンみたいに、なのはママとフェイトママにデュエットしてもらいたいです。

(だから、あなたも”管理外世界から来た”ってことにしておけば、良くも悪くもアークエンジェル隊みたいに動けるのよ)

あゝ、アレかあゝ。

5-01型デバイスからの永続的な魔力供給といい、本当にフリーダムみたいになってきたなあ……。

(じゃあ、管理外世界の、とある組織に属しているエージェントである——みたいに話せばいいのかな? だから、詳しい事情を明かすことができない——とか)

(そうね。内容についてはあとで詰めるとして……)

(組織の名称は?)

(それっぽければ、なんでもいいでしょ。適当にアニメやゲームからパクリなさい)

(だったら、この世界を訪れてもおかしくない組織ってことで、カルデアとか?)

(未来観測にレイシフトって、管理世界の魔導技術を越えているじゃない)

本当だ!

カリムさんがお払い箱だよ!?

(じゃあ、魔力ではなく光子力というエネルギーが使われている世界で、光子力研究所・所属とか)

(来たわね、マジンガー。最終回でグレートヴィヴィオとか出てきそうね)

(じゃあ、ロンド・ベル。5-01型デバイスは伊達じゃない! みたいな)

(あなた毎回それ言いたいだけでしょ。というか自己犠牲フラグが立っちゃうわよ?)

アクシズシヨック！

(だったら、特務六課に対抗して、わたしたちの特戦四課！)

(『喰霊―零―』ね……って、それ、完全に死亡フラグじゃない。あなたそういうの好きそうだけど、もう少しリリカルなのは近づける努力をしなさい)

(はい)

ここまでのやり取りは0・3秒——というのは嘘だけど、じっと待っていてくれたとーまちゃんに向き直る。

「実はわたし、フロニヤルドという管理外世界からやってきた、ビスコッティ騎士団の隠密部隊で、とある任務を受けてこの世界にやってきたんだよ」

『DOG DAYS』なら許容範囲のはず！

「おー、ヴィヴィ姉ちゃん、そういう設定だな！」

「設定とか言わないの！ スバルさんじゃないんだから、もつと空気読んで！ わたしの前ではヴィヴィ姉でもいいけど、他の人がいる前ではV2でお願い。特になのはママがいる前では。いい、とーまちゃん？」

「お……お……」

少し沈黙。

「どうしたの?」

「……………」

あちゃー。しまったな。少しキツク言い過ぎちゃったか。また泣かせてしまったか
もしれない……………と思ったら、

「ヴィヴィ姉、やっぱりあたしのこと “とーまちゃん” なんだな。 “ちゃん” づけだ」
ん?

「あー、こつちのわたしって “とーま” って呼び捨てなんだっけ?」

「うん、昔からそうだぞ」

「そっかー」

確かに、わたしも元の世界の男性トーマはトーマと呼び捨てにしている。年上でも。

『V2、あなた普通に “こつちのわたし” とか言っちゃってるわよ?』

……………。

「はあ…………。やっぱりあのスバルさんに育てられた妹分に、空気読めというのが間違っ
てるかなと」

『諦めたのね?』

「うん。むしろ、真面目で律儀な性格だから約束ことは守る。だったら、普段は好きに呼
んでもらって、みんながいる前ではV2と呼ぶように約束した方がいいかなって。とー

「まちゃんもそれでいい？」

「おう、任せとけ！」

自信満々なところが逆に不安すぎる。

なんとなく、今はじめてティアナさんの苦勞がわかった気がした。

「——で、わたしがこのルヴェラ鉱山遺跡にいる理由なんだけど、実は、この遺跡で、とある秘密組織が違法研究を行っているの。でね、そこに捕まっている女性を秘密裏に助け出すことが目的なの」

何だかフルメタル・パニックの1巻みたいなことになってきたな。

いつそのことミスリル所屬とか名乗るべきだったか。

『ゴミ係でいいんじゃない？』

やめてええ！

すると、とーまちゃんが誰もいない方向を見て、頭を押さえた。

「いてて……ひよつとして、この『痛いよ』とか『助けて』って声が、ヴィヴィ姉が助けに来たっていう人の声なのか？」

「声……？ ああああああああ！ もしかしてとーまちゃん、リレイさんの声が聞

こえてるの!？」

「ヴィヴィ姉には聞こえないのか？」

「うん。まったく聞こえない。お婆ちゃんコレって……」

『ええ、そういうことでしょうね。打ち止め（ラストオーダー）、よく聞きなさい』

「打ち止め?」

「お婆ちゃん、お婆ちゃん、そのネタ通用しないから」

『ちっ、しょうがないわね。じゃあ、改めて末っ子、よく聞きなさい』

とーまちゃんが小声で耳打ちする。

「ヴィヴィ姉ちゃん、このデバイスすごい偉そうだな」

「あー、これ、インテリジェントデバイスじゃなくて、とーまちゃんが会ったことないわたしのお婆ちゃんが遠隔操作してるの。言い方はキツイけど、結構ツンデレだから、大丈夫。怖くないよー」

『聞こえてるわよ、誰がツンデレよ』

「クリスはどうしたんだ?」

『私の隣で寝てるわよ』

「お婆ちゃん、小学生にそのネタ使っちゃダメえええ!」

わたしも小学生だけどね!

『まあ、本当に寝てるのだけどね、この子。このデバイスのAIどうなっているのかしら……?』

クリスう。

「えつとく、ほら、V2のわたしがクリスを連れてたら変でしょ？」

「おー、確かにそうだな！」

「ほら、お婆ちゃんも解説、解説。なぜなにプレシア。3、2、1、どっか〜ん！」

『そんな投げやりな……まあいいわ。説明しましょう。』

末っ子、よく聞きなさい。あなたの頭の中に響いている音声は“念話”ではないの。もちろん、ベルカの“思念通話”とも違うわ。

“精神感応”——俗に言う“テレパシー”という能力ね』

「テレパシーなら知ってるぞ。超能力だな」

ESP！

『そうね。ただ、超能力を定義しようとする話が長くなるから、今回は、あくまで“魔力を使っていない特殊な能力”だと思ってもらえばいいわ』

「ん〜、つまり、お姉たちのIS（インヒューレントスキル 先天固有技能）みたいなやつか？」

『ええ。その認識で間違っていないわ。ISと精神感応、どちらも“魔力無効化状況下”での使用を考えた能力だから』

ああ、そうか。

リレイさんが念話ではなく精神感応を使っていたのは、デバイスダーの分断効果が発生しているも会話できるように——そのためだったんだ。

いわゆる伏線である。

『そのテレパシーを使い、広域念話のように受信者を定めず、不特定多数に向けて発信して助けを求めているのよ』

「だったら、どうしてヴィヴィ姉ちゃんたちには聞こえないんだ?」

そういえば1巻でも、研究者や警備員には聞こえていない様子だった。

『そうね。簡単に説明するなら、相性の良い悪いね。仲が良い悪いは関係ない。生体パターンや魔力資質、適性と相性、波長が合うでもいいわ——』

「なんだかユニゾンみたいだな」

『ええ、シグナムとアギトが初融合から高い同調率を得たのと同じように、捕まっている子は、無意識のうちに、そういった適合相性が良い相手に対して助けを求めているのでしょうね』

誰でもいいから助けて欲しい……だけど、もうこれ以上、誰にも死んで欲しくない。だから、誓約（エンゲージ）に耐えられる相手だけを求めた。

『もつとも、私が聞こえないことには、もう1つ理由があるのだけどね。精神感応は魔力を使わない能力でしょ。だから、魔力を使って動くデバイスを通して聞いても、こちら

まで届かないのよ』

「おう、モスキート音とかいうのじゃなかったんだな」

加齢で聞こえなくなる高い音。

「ちよ、とーまちゃん、わたしそんなに年食ってないからねええ!」

『末っ子、少し頭を冷やしましょうか……』

「それ、なのはママの持ちネタああ!」

兎にも角にも、その適合相性の良さが『Force』1巻でトーマが死なずにすんだ理由の1つなのだろう。

だったら、とーまちゃんも安心だっただよね。

「んー、ヴィヴィ姉ちゃんのお婆ちゃんって学校の先生みたいだな」

「うん。コロナの師匠でもあるし、大魔導師だし、そーいうところあるかも」

学生時代に教員免許を取ってそうだ。

「お局さんってやつだな」

「そこは女教師と〜」

『あなたたちねえ……まあいいわ、好きにきなさい』

「わかったぞ! 捕まってる人を今すぐ助けに行くんだな!」

言うが早いのか、二気分に右拳を突き上げたとーまちゃんが走り出す。

マツハキヤリバーやジェットエツジもないのに、一気にトップスピードに乗る。

「とーまちゃん!」

『まったく、待ちなさい!』

サラちゃんが左手をかざすと、わたしの魔力を使っているせいか虹色の鎖が鞭のように伸びて、とーまちゃんの首に絡みつく。

「うげっ!」

ナカジマ家の末っ子が後ろにひっくり返った。

「なにすんだ!」

『助けるのはまだよ。しばらく待ちなさい』

「どうしてだ!」

立ち上がると、強引に進もうと全身に力をこめる。

「うぐぐ……」

まだ、アンチエイン・ナックルは使えないみたいだけど、9歳とは思えない、リンネさんみたいな馬鹿力だ。

『末っ子。あなた、その子を助けたあとどうするつもり?』

「どうするって、連れて逃げればいいだろ!」

『当然、追っ手が来るわよね。どうするの?』

「それは……どうにかする。どうにかすればいいんだろ！」

『はあ……。本当に、少し頭を冷やそうか……。』

「また言ったああ!?!」

『仮に、あなたが姉妹たちと逃走中……じゃなかった。丸一日——24時間かけて鬼ごっこをしたとしましょう』

「それはちよつと楽しそうだな！」

とーまちゃんの目が輝く。

『その場合、あなたならどう逃げ切ってみせるのかしら?』

「んー、そうだな。どこか見つからない場所に隠れて、暗くなつてから動くな。明るいうちは見つかりやすい……つて、そういうことか! でも、スウちゃんなら!」

『そうね。スバル・ナカジマなら、助けを求めている子がいたら、すぐにでも飛び出して行くでしょうね』

「だったら!」

『あなたはスバル・ナカジマではないでしょう。末っ子として、他の姉妹からも薫陶を受けているのでしょうか?』

「それは……そうだけど……」

「ねえ、とーまちゃん。ギンガさんやチンクたちなら、どう動くと思う?」

「……お姉たちなら、用心して動くと思う。チャンスが来るのをじっと待つ。デイエチ姉なんてすつごい我慢する」

狙撃手だしなあ……。

「ティアナさんなら?」

「……ティア姉もそう。スウちゃんもよく怒られてた。すぐに突っこむクセを直しなさいって」

うん、うん。うちでもよくある光景だ。

なのはママが正座させられて、フェイトママに叱られる。

『わかってるじゃない。末っ子、あなたみたいなタイプには辛いだろうけど、少しだけ我慢しなさい』

「……わかった」

ちびスバルさんみたいな女の子は、渋々といった表情で頷いた。

「それはそれとして——」

わたしは足を止めると、とーまちゃんとお婆ちゃんを振り返る。

「この遺跡、行き止まりなんですけどおお——っ!?!」

研究施設なんて影も形もない。

ルヴェラ鉱山遺跡の終点は、左右にレリーフの施された石柱が連なる、いわゆる古代神殿のような部屋だった。

その中央に、何やらいわくありげな門扉のモニュメントが鎮座している。わたしの身長よりもずっと大きく……ああ、アレだ、ロダン作の『地獄の門』みたいな造り。

絵の具が劣化してしまう壁画と違い、鉱山から切り出した石材を彫っているため、長い年月が経過した現在でも、緻密な浮き彫りがよく残っている。

「このでっかい門の彫刻が、ルヴェラ鉱山遺跡一番の見どころだって、ガイドブックで読んでぞー！」

「へえ……」

とーまちゃん、昔スバルさんが使っていたカメラ（譲り受けたのだろう）で、パシャパシャ撮影を始める。

今にも「このロリコンどもめ！」と言い出しそうな丸い月（？）に、ゆりかごを思い起こさせる戦船。その下には、ロプロスみたいな巨大な怪鳥に、ポセイドンみたいな水陸両用の巨人に、変身途中のロテムみたいな4本足の獣が彫られている。

「なに、この3つのしもべ？」

どこかで見覚えがあるような気もするのだけど……。

『あら、当たらずといえども遠からずね』

「どういうこと?」

『だってこれ “バベルの塔” よ』

「……………は?」

最初の超能力で気づくべきだった。

「しまった、バビル2世ネタだったか!」

【次回予告】

待って、待って、バビル2世ってどーいうこと?

バベルの塔って地球のやつだよね?

スーパー横山光輝大戦でも始まるの?

ビッグ・ファイア様々。

そもそも、こんな門、漫画になかったよね。

バビル2世とリリカルなのはにどんな関係があるの?

フェイトママでシンフォギア(カ・デインギル)つながりとかじゃ許されないよ!?

次回【この世界が『Force』だとわたしだけが知っている】第14話。

【ジャイアントロボじゃなくて紫天ロボだった】
で、リリカルマジカルがんばります！

第14話 ジャイアントロボじゃなくて紫天ロボだった

ルヴェラ鉱山遺跡の奥深く。

左右に獣のレリーフの施された石柱が連なる部屋の中央に、そのいわくありげな門扉のモニュメントはあった。

「お婆ちゃん、このロダンの『地獄の門』みたいな彫刻が『バベルの塔』って、どういうこと?」

「あたしも『バベルの塔』なら知ってるぞ、父ちゃんから聞いたことある。神様に近づこうとして高い塔を建てたら、怒った神様に壊されたってやつだろ?」

「そうそう、それぞれ」

ナカジマ家は地球出身だから、インパクトのある物語は、昔話みたいな感じで語り継がれているのだろう。

ゲンヤさんなら……話しても違和感ないしなあ……。

フワフワ浮かぶサラちゃん——というか、プレシアお婆ちゃんが「やれやれ」といったポーズを取った。

『ヴィヴィオ、あなた「シンフォギア」は見たことあるんでしょ?』

「うん。だから、

『バベルの塔』 Ⅱ 『カ・デインギル』 Ⅱ 『荷電粒子砲』 Ⅱ 『デスザウラー』

つまり、その門扉に彫られた3つのしもべは、ゾイドだったんだよお!!」

デスザウラーとか、ジエノブレイカーとか、デスステインガーとかああ!

『やめなさい』

ガンプラの靴底で、ペコツとおでこを蹴られた。

「冗談、冗談。」

『バベルの塔』 Ⅱ 『カ・デインギル』 Ⅱ 『神の門』

という意味だから、あく、ひよつとしてこれ、ただの門の彫刻じゃなくて、今は使われていない、古代の転移ゲートみたいなのだったとか?」

ミッドから地球への直通ゲートなど、現代ではすでに長距離の転送ポートが開発されているので、遺失技術（ロストロギア）には含まれない。

けれど、現在のルヴェラの文化水準を基準に考えるに、転移魔法が使えるアイテムは失われた古代の技術……いや、神々の時代の遺物と思われるもおかしくないわけで、当時の現地人に『神の門』と呼ばれていたとしても不思議ではない。

「ひよつとして、例によっていつものように古代ベルカ関係?」

『ええ、だいたいそんなところね』

またか。

とーまちゃん「はい！」と挙手する。

「先生！ 質問いいか？」

『いいわよ、末っ子』

「どーして、『バベルの塔』が『神の門』って意味なんだ？ 塔じゃないのか？」

なんだか、どんどんリリカルなのはから遠ざかるな……。

アニメネタでもないのに。

『ああ、そのこと。あまり小難しく話しても面白くないだろうから、シンプルに説明するわよ？』

B. A. B. E. L (バベル) とは、絶対可憐——』

「お婆ちゃんっ!？」

『冗談よ、冗談。改めて説明するわよ——』

『バベルの塔』 || 『バビロンの塔』

『バビロンの塔』とは、バビロニア王国の都市——『バビロン』に建っていた高い塔。

『バビロン』 || 『バーブ・イリ』が変化した呼び名。

『バーブ・イリ』(アッカド語) || 『カ・デインギル・ラ』(シュメール語) || 『神の門』

という意味。

「ん、お婆ちゃん、ラストがわかりにくいんだけど？ 一週飛ばしたアニメみたい」「そうね。今となつては時間移動の魔法でも使わないとわからないのだけど、もともと、古代シュメール人が「カ・ディングル・ラ（神の門の意）」と呼んでいた神聖な場所があつたのよ。

そこを、遊牧民だったアツカド人が征服したあと、彼らの言語で「神の門」を意味する「バーブ・イリ」と呼んで、都を建てたということね。

なので、

「カ（門）・ディングル（神）・ラ（の）」

「バーブ（門）・イリ（神）」

みたいな意味になるというわけ。変化したわけではなく、同じ意味の言葉を、別の言語で言い換えたから、似てないのよね。

つまり「バベルの塔」とは、本来、

「神の門に建てられた塔」

なわけよ。

まあ、問題は、なぜ古代の人々は、その場所を「神の門」と呼び、わざわざ都市を建

設したのかということなのだけど……」

「なのだけど……?」

『そうね、この先はフェレットの方が専門でしょうから、今度会ったときにでも聞いてみなさい』

のおお。

「お婆ちゃんの良いわる!」

『私だつて説明してあげたいのだけど、これ以上続けると末っ子が、ね……』
のおお。

「頭から煙が出てそんな感じで倒れてるんだけどおお! とーまちゃん大丈夫!」

「お、おう……あたしにはまだちよつと早かつたみたいだ……」

目が死んでるよ!?

もつと、とーまちゃんが食いつきそんな話題を、

「あ、そうだ、レリーフの3つのしもべなんだけど」

ロボロス、ポセイドン、ロテムみたいな浮き彫りだ。

『ああ、それならあなたもよく知ってるでしょ、機動外殻よ』

「……あ、映画で、王様とシユテルとレヴィが連れてた巨大ロボ?」

言われてみれば、こんなんだつた。

「巨大ロボ……ひよつとして、合体して紫天ロボになるのか!？」

食いついた! でも、

「待って、待って、紫天ロボ。映画に紫天ロボが出てたの!？」

「おう……あれ? ヴィヴィ姉ちゃんの見た映画には出てなかったのか?」

……むう。

わたしの知ってる劇場版と違う。

ていうか——この『Force』世界にもリリカルなのは映画あったのおお!?

お婆ちゃんに念話を飛ばす。

(どういいうい?)

(『The MOVIE 1st』や『The MOVIE 2nd A's』のパンフレット巻末に『Force』の漫画が載っていたことや、トーマたちが映画を見るドラマCDがあったことから、この世界に劇場版が存在することは間違いなわ。けれど、『Reflection』&『Detonation』に関しては事情が異なるのよ)
(パンフレットに載ってないってこと?)

(それもあるのだけど……ほら、あなた前に考察したことあるでしょ。ストライクカノンやフォートレスといった装備からもわかるように、『Reflection』&『De

tonation』は原作であるゲーム『GOD』に、『Strikers』や『Force』などの要素を取り入れた作品だつて)

(あー、うん、そうでした)

(つまり、映画2作目までは一緒でも、『Force』の要素が含まれた3作目以降は、私たちの世界とは異なる内容の劇場版だったということよ)

(そつか、これから起きる出来事や装備が含まれたらおかしいもんね)

(とはいえ、アマタが言うように、この世界が『GOD』から分岐した世界であるなら、『Reflection』&『Detonation』と同じように、『GOD』が元になった内容だったのでしょね)

(『Strikers』や『Force』の影響がなければ映画にカノンやフォートレスが出ることもなく、紫天ロボみたいなメカが登場してもおかしくないってことかあ……)

あれ？

(つてことは……)

(そういうことよ。おそらくあなたが思った通りね。映画に登場した3体の機動外殻なのだけど、映画ではイリスが生成したエルトリアの自動機械ということになっていたわ。けれど、カノンやフォートレス装備同様、もともとは『Force』で登場予定だつ

たメカの可能性が高い)

(ああ！ だからとーまちゃんといい、プロトタイプガンダムみたいなこの世界に、機動外殻が存在するってこと!?)

(ええ。それと、3体の機動外殻と3つのしもべは、単純に似ているだけではなく、そもそも『Force』と『バビル2世』には、とある重要な共通点があったのよ)

(『Force』と『バビル2世』に?)

(ええ。ただ、まだ確証を得たわけじゃないから、この件に関しては、もう少し調べがをつけてから話すわね)

『バビル2世』が『Force』から脱出する突破口になるのだろうか？

リオがロテムで、アインハルトさんがポセイドンとしたら、コロナがロプロスなのだろうか？ 元の世界に帰ったら、コロナにはぜひ飛んでもらおう。ストライカーユニットとか履いて。

何にせよだ。

バベルの塔といい、紫天ロボといい、他のアニメや漫画ネタでなければ、結構とーまちゃんにも通じるということはわかった。

わたしは、改めてナカジマ家の末妹に向き直った。

「わたしの世界の映画には、紫天ロボが登場しなかったんだよ」

「そうなのかな？ あんなにカッコイイのに」

んー。

発想がレヴィとよく似ているなあ。

スバルさんより幼い分、とーまちゃんはレヴィと同じように対応すればいいのかも。

それはそれとして、

「この門が、古代の転送ポートだというのはわかったんだけど、この先どうすればいいの？ この部屋行き止まりだし、ここまで歩いてきて、リレイさんが捕まってる研究施設なんてなかったよね」

「んー、助けてって声は、今も下の方から聞こえてくるぞ？」

『ヴァンデインの違法研究施設は、地下にあるのよ』

奇しくも、とーまちゃんとお婆ちゃんの意見が一致した。

「そうなの？」

お婆ちゃんが念話に切り替える。

（『Force』1巻で、とーまが破壊したあとのルヴェラ鉱山遺跡を、シグナムとアギトが現場検証するシーンがあったでしょ）

(うん、あった)

(そのとき、シグナムがドロドロに溶けた最下層から、穴が開いた天井を見上げる、1ペーヅ丸々使ったシーンがあったのだけど。穴が開いた天井の数が4つ。地上1階分を抜いたとして、地下3階分はある遺跡ということになるわね)

なるほど。

ドラクエーで言うところの、竜王の玉座の後ろにある、隠し階段みたいなのがあると
いうことだ。

わたしはとーまちゃんにも聞こえるよう、声に出して言った。

「つまり、この遺跡のどこかに、地下に続く秘密の出入り口があるってことだね」

「なんだか宝探してみたいだな！」

『あら、それならもう目の前にあるでしょ』

門のモニュメント。古代の転送ポートらしい遺物。

「これ、もう使えないんじゃないかなかったの？」

『壊れたのを修理したのか、単純に転送先がなくなつて使用不可になっていたのかはわからないけど、再設定したのでしょね。最近も頻繁に使われた形跡があるわ』

そういうえば撤収作業中だっけ。

「……あ、ホントだ」

5-01型デバイスの影響で、劇的に魔力量が増えたせいか、逆に繊細な魔力の流れに疎くなっていたらしい。

「木を隠すなら森の中かあ……」

未知の古代遺跡ならまだしも、観光地の遺跡に置かれている展示物が、実は現在も使用可能だなんて、疑ってかかる人は少ないだろう。

それに普段なら「遺跡にはお手を触れないでください」と、警備員がいるのかもしれない。

門に触ってみる。

「やっぱり動かないか。たぶん起動キーが必要なんだろうけど……」

「魔法で開けたらどうだ？」

とーまちゃんさんの足元に、青いミッド式の円形魔法陣が浮かび上がる。

「——解け！」

おく、これ『Force』1巻で見たことあるやつだ。

門扉のモニUMENTが青白く発光する。

ゲートに強制介入して起動させたのだ。

個人的には、ドラクエのアバカムみたいなものだと思うている。最後の鍵はいらな

い。

「とーまちゃん、お見事！」

「これ、ヴィヴィ姉ちゃんから教わったんだぞ」

「わたし？」

「うん。一人旅に出る前、遺跡で宝探しをやるって言ったら教えてくれた。確か、無限書庫の司書長直伝とか言ってたな」

「あゝ」

古代遺跡の発掘を生業とするスクライア一族が使う魔法だ。

『Strikers サウンドステージX』では、わたしもイクスについて調べるため、ユーノ司書長と同じ検索魔法を披露している。

そういえば、原作『Force』のトーマとわたしも、こっちの世界のとーまちゃん
とわたしも、ちゃんと面識あつたしなあ……。

鍵開けの魔法は悪用されないよう一般には普及しない。学校でも教えてくれない。
よって使える人も限られてくる。

だったら、原作のトーマはどこで教わったのだろう？

そんな犯罪に使える魔法をティアナさん（マニアックな魔法が好きなので覚えてそう
な気がする）が教えるとは思えないので、あとはナカジマ家で使えそうな人は……：チン

クかな？ ナンバーズ時代、潜入任務とか多かったし。チンクが調子に乗って教えたか、わたしが深く考えずに「遺跡で宝探しをするのなら」と伝えちゃった可能性もある。

いつか、わたしも教える日が来るのだろうか……？

「よし、早速探検だぞ！」

とーまちゃんが、青白く輝く門扉のモニメントに手を伸ばす。途端に姿が消えた。

「早いよ、とーまちゃん!？」

わたしとサラちゃんも急いで追いかける。転移先はちよつとした小部屋になっていて、よくあるタイプの直通ゲートといった造りになっていた。門ではなく、足元に転送用の装置が設置されている。

とーまちゃんは部屋を出てすぐの通路で待っていた。キョロキョロしている。

「外の遺跡は石造りなのに、地下の壁は金属なんだな」

「うん。ここつてとあるメーカーの研究施設なんだけど、ちょうど引越し中なんだよ。外もたくさん警備の人とかいて、ゴタゴタしてたでしよ？」

「そういえば、いっぱいトラックが停まってたな」

そつちを襲った方が、有力な情報が手に入ったかもしれない。

「でね、捕まってる子がいるんだけど、連れて行かずに、そのままこの遺跡で廃棄処分」

するって話だったから……」

「それで助けに来たのか。ヴィヴィ姉、正義の味方みたいだ。日曜の朝にやってる魔法少女だな！」

まあ、魔法少女なんだけどね！

リリカルなのはだしっ！

地下1Fは、事務室に資料室や会議室といった、直接研究には関わりない部屋が多かった。

「どこもドアが開けっ放しだな」

撤収作業はほとんど終了しているのか、多くの棚が空っぽで、床にはたいして重要なさそうな資料が散乱していた。

そして地下2F。

「お、こっちの部屋はなんだ？」

「あ、無闇に開けると！」

珍しく閉まっていたドアを開けると、とーまちゃんが「うわ……」と、若干引き気味の声を上げた。

中は広く、いかにも研究施設といった生体ポッドが立ち並んでいた。液体に浸かった検体が浮かんでおり、光源に照らされた肉片や細胞の塊はグロテスクで、吐き気をもよ

おすほどだった。

「うげえ……気持ち悪……」

ナカジマ家の末っ子は、少女らしい潔癖さで顔をしかめた。

「はい、とーまちゃんにはまだ早いからねー。いないないばー」

背後から彼女の両目を隠す。

サラちゃんから声が聞こえた。

『あなたは平気なのね?』

「いやー、ほら、わたしには見慣れた光景だから」

わたしが生まれたのは、そういう場所だったから。

『……そうだったわね』

「ちよつと衛宮士郎みたいで格好いいでしょ。」

『別に大したことじゃない。死体は見慣れてる』

つて、はやてさんの前で言ってみたい!」

『はあ、あなた一言多いのよ。感心して損したわ』

わたしは生体ポッドを見渡した。

ふと、疑問に思う。

「ねえ、お婆ちゃん。今更なんだけど、どうしてヴァンデイン社は、こんなところで研究

してたのかな？ リベルタには少なくとも第四工場島まであったでしょ。わざわざルヴェエラで研究する意味がないと思うんだけど」

物語の都合上……とか言い出したら、ちよつと「うくん」と唸ってしまいそうだ。

『そうね……。ただ、その前にいくつか確認する必要があるわ。末っ子、見なくてもいいから答えなさい。あなた、この鉱山遺跡は観光ガイドブックで知ったのよね？』

「おー、そうだぞ」

『誰かに鉱山遺跡に行くと話して、止められたことはある？』

「ないな」

『Force』1巻の教会で、トーマが『この先の鉱山遺跡で宝探しと写真撮影を』と言ったときにも、特にシスターがストップをかけた描写はなかった。

『そう、つまり、普段から一般公開されている観光地の古代遺跡の地下に、この研究施設は造られたということよ』

「わざわざ？ 観光客が訪れるような目立つ場所に？」

次元世界は広い。無人世界だってある。

『ええ。もともと地下空間はあったのでしようけど、わざわざこんな地下施設を造り、機材を運び入れ、研究しなければならぬ事情があったということよ』

「それって……」

「うっー！」

突然、とーまちゃんが頭を押さえてしやがみこんだ。

「痛い、よ……っつて、声が近いぞー！」

まだ諦めていなかったのだろう。

駆け出したその背中が、どこかスバルさんのようで、

「ああ、もう、真っ正直なところまで似なくてもよかつたのに！」

今度はお婆ちゃんも、バインドをかける暇がなかったらしい。黙って見送っている。

わたしが追いかけてしようとすると、

『放っておきなさい』

「でも、まだ外は明るいんじゃない？」

原作よりも若干早い。

『ここまで来たら、もうそれほど変わらないでしょう。それに、下手にこのまま2人でリイがいる安置室に突入した場合、あなたがエクリップスウイルスに感染する恐れがあるでしょ。それは避けないと』

「そっか、適合相性のいいとーまちゃんは無事でも、わたしは漫画みたいに血を吐いたりして、ここの生体ポッドの中身みたいになっちゃうんだ……」

それは嫌すぎる。

「わたしにもリレイさんの声が聞こえてればなあ……つて、ん？　ちよつと待ってお婆ちゃん」

『どうしたのよ？』

「ちよー今更なただけど……」

わたしはとーまちゃんが走り去った方向を見つめた。

「わたしたち、〃リレイさん〃　〃リレイさん〃　つて言つてたけど、本当に　〃リレイさん〃　なのかなあ？」

『どういうことよ？』

「だつて、この世界、トーマがとーまちゃんに変わったんだよ？　だつたらリレイさんだつて——」

【次回予告】

トーマが女の子に変わったように、リレイさんも男の子に変わったのだとしたら……シヨタ、シヨタなの!?!　またフェレットなの!?!

いや、ひよつとして、ザフィーラとか、ドズルとか、ラオウとか、オールマイトみたいな筋肉キヤラに変わつてたりして!?!

ムキムキなフェレットとか出てきたらどうしよう!?!

次回【この世界が『Force』だとわたしだけが知っている】第15話。
【とーまの嫁は女の子じゃないと思った？】
で、リリカルマジカルがんばります！

第15話　とーまの嫁は女の子じゃないと思つた？

違法研究施設の奥深く。

薄暗い中、ぼうつと光る生体ポッドが立ち並ぶ室内で、わたしはこの世界のトーマ・アヴェニール——とーま・ナカジマが走り去った方向を見つめていた。

おそらくあの先に、原作でリレイさんが拘束されている安置室——という名の実験室があるのだろう。

「わたしたち、リレイさん」　「リレイさん」　つて言つてたけど、本当に「リレイさん」なのかなあ？」

『どういふことよ……』

「だって、この世界、トーマがとーまちゃんに変わったんだよ？　だつたらリレイさんだつて逆方向にメガ進化。ザファイラとか、ドズルとか、ラオウみたいな、ムキムキ男性キャラに変わつていてもおかしくないんじゃないか……」

『……ポケモンなら頼もしいけど、リリカルなのは的には最悪ね』

「しかも、原作通りなら、捕まつておるときのリレイさんは全裸。なので、マツチヨで全裸のリレイ（男）が、見開きでポーズしながら登場。金属の拘束具も、メキツと自

力で破壊。響き渡るとーまちゃんの悲鳴」

どこのシルバーマンジムだよ！ って感じた。

『それはもう、プラズマアークで焼かれちゃってもいいんじゃないかしら？』

「さらに、大柄なムキムキ男性キャラが、ここぞとばかりにとーまちゃんに誓約（エンゲージ）を迫る。後に融合」

『それはフェイトに通報しておけばいいのかしら？』

つまり、

「敵はフツケバインやヴァンデイン社だとばかり思ってたけど……まずはとーまちゃんをリリイさん（男）の魔の手から助けないとダメなんだよおお！」

わたしはとーまちゃんのあとを追って駆け出した。サラちゃん（お婆ちゃん）も飛んでついてくる。

『なんだかもう、目的が入れ替わっているのだけど……そうね。もう少し冷静に考えてみましょうか。』

原点回帰ということとは、

「高町なのは 〓 とーま」

なのだから、

「ユーノ・スクライア 〓 リリイ」

ということ。

つまり、変身魔法を使い小動物に姿を変えることでマスコットキャラの立ち位置を確立するキャラ——ということね』

「うん。ただ、いくら原点回帰とはいえ1期と同じフェレットはないと思うから、いつそのことケロちゃんの生物とか……」

『だったら、キュウベえでもいいんじゃない？ 僕と契約してエクリプス感染者になつてよ——的な』

「……うっ、当たらずといえども遠からずのような。どーせなら、湿布を貼ってくれろキュウベえがいいなあ〜」

『あら「巴マミの平凡な日常」のキュウベえね。基本、コタツからは出てこないけど、巴マミの話せる（筆談）ペット感がスゴいわよね。というか、あのキュウベえなら私も1匹欲しいわ。便利だし。リニスと交換で——』

とーまちゃんがいる間は黙っていたのか、サラちゃんからその山猫の使い魔さんの声が聞こえてくる。

《聞いてますよ、プレシア！ そんなこと言っていると “また” 雑巾絞ったお茶入れちやいますよ!?!》

『“また”って、ちよ、あなた、そんなことしてたのおお!』

サラちゃんからドタバタ音まで聞こえはじめた。

うわ。何気に修羅場つてるなあ……。

修羅場……修羅場ねえ……修羅、あ、

「やつちやえバーサーカー的なのはどうかな？ イリヤさんみたく、とーまちゃんの方

がマスコットになるの」

『それは……ふんっ！ はあ、はあ、リニス……お茶の件はあとで話すとしましようか
……』

一応、決着がついたらしい。

『腰が、いたた……そうね、確かにリリイがバーサーカー的なキャラだったとしたら、半裸でムキムキで拘束されていても違和感ないし、あと、通報しなくていいわね』

うん、そこはとてめ大事だ。

とーまちゃんとリリイさん（男）は、いいコンビになれるだろう。

「そういえば『Force』にも、バーサーカーっぽいキャラがいたよね。フツケバインに」

『ドウビルね。マッチョで、リアクトすると全身が鎧に覆われるキャラね』

「そうそう。でき、よくもつたないから没キャラを再利用して、別のキャラとして登場させるって話聞いたことない？ だから、そのフツケバインの筋肉が、意外と初期リリースだったりして……」

『そんなリリース誰得よ……』
すると突然、

——ピー、ピー、ピー！

耳障りな警告音が、辺りに大音量で鳴り響いた。続けて、通路の照明が赤色に点滅する。

「なにごとつ!？」

『警告！ 警告！ 安置室に異常を感知しました——』

無機質な音声が繰り返し警告を発する。

「とーまちゃんとりりいさんが接触したんだ！」

『感染災害の危険発生。これより熱焼却処理を行います。近隣ブロックの職員は至急避難をお願いします——』

「マズい！」

『プラズマアークね』

「と一まちゃんがムキムキな人と誓約しちゃう!？」

『あ、そつちね……』

これはいつもより急がねば！

わたしは高速移動魔法を使う。

「ソニックムーブ（エリオver.）！」

フェイトママのソニックムーブは飛行魔法の強化系だけど、陸戦魔導師であるエリオのソニックムーブは、ダッシュ・ジャンプの加速に性能をチューニングしてある。

だから——こけしのようにサラちゃんの胴体をつかむと、わたしは床を蹴った。

『あうっ』

一瞬で通路の端まで移動すると、迷わず壁に体当たり。その瞬間、ボールが跳ね返るように壁面を蹴り上げる。こうすることで、急停止したり、スピードを落としたりすることなく通路を曲がることできる。

空間の立体移動というやつだ。

よくわからなかつたら、モンスターストライクで壁に跳ね返るのをイメージしてもらえればいい。つまり、角度が大事。

まあ、エリオは身長や手足が伸びちゃったから、狭い室内だとぶつかって使いづらいみたいだけど。そこはフェイトママと同じブリツアクシオンで代用するだろう。

ただ、まだまだちっちゃいわたしなら、昔のエリオみたいに運用できる……いいんだか、悪いんだか。

なので、アインハルトさんもちっちゃいまままでいてくださいねええ！

ソニック・ザ・ヘッジホッグ気分で廊下を爆走する。

『繰り返します。近隣ブロックの職員は至急避難をお願いします。これより隔壁閉鎖を開始します——』

通路前方で、シャッターとは比べ物にならないほどの厚さがある、金属製の壁が下り始めた。

「何だか映画みたいになってきたね！」

『私ももう年ね……遊園地に行っても絶叫マシンには乗れないわ……』

「ええ、お婆ちゃんこんなところで年を実感しないでよおお！」

ソニックムーブの速度を維持したまま、数メートルおきに閉まっていく隔壁の下を走り抜ける。

「閉まり切る前に通過してしまえば、どうということはない！」

『シャアじゃないのよ〜』

お婆ちゃんのツツコミも弱々しい。

「見えた！」

『パンツ？』

「違うよ!? 前、前！」

『志村後ろ〜』

ツツコミも雑だ！

「漫画で見た安置室！ リリイさんが捕まってるどころ！ たぶん、とうまちゃんが中にいるから！」

背中を床につけ、スライディングしながら隔壁を潜り抜ける。

しかし、安置室の扉は、すでに赤くバツテンの描かれた隔壁で塞がれていた。電子ロックすら見当たらない。ご丁寧に、頑丈な鉄格子のおまけつき。

「こうなったら——その幻想をぶち壊す！」

テイロ・フィナー——」

『やめなさい——』

ブスツ。サラちゃんの手刀がわたしのほっぺに突き刺さる。

「わたしの虹色のソウルジェムが黒く濁る」

『いくら珍しくバマミネタをやったからつてその魔法はおやめなさい。中の末っ子とムキムキリリイまで巻き添えになるでしょ!?!』

あゝ。

「だったら、ザ・ハンドで！」

『それも魔法じゃないでしょ』

「冗談だつて——」

サラちゃんを離すと、わたしは両手の拳に虹色の魔力を集中する。流れるような魔力付与打撃。

ちよつと低い声で、

「ガイスト・クヴァール」

隔壁だけをイレイザーで削り取る——というか消し飛ばす。

チャンピオンことジークさんの必殺技。エレミアの奥義。しかし魔法である以上、わたしの『高速魔法蒐集』から逃れることはできない。

「ジークさんいただきました」

ということ、わたしは轟音を響かせて安置室に飛びこんだ。

「とーまちゃん、無事っ!？」

叫んだわたしは思わず目を丸くする。そこで目にしたものはといえば、ポーズを取ったムキムキリリイさん——ではなく、うずくまるとーまちゃんと彼女に寄り添う、

「なんかケモミミキキャラきたああ!？」

『フェレットのフレンズかしら?』

「いやいやいや、流石にそれは〜」

たぶんあの子が、この世界のリリイさんなんだろうけど……。

あの獣耳が本物なら、獣人が動物を素体とした使い魔の類。

年齢は10歳くらいか。ただ、アルフや盾の勇者のラフタリアを思い出してもらおうとわかりやすいのだけど、獣人は見た目と実年齢がかけ離れていることが多いので判然としない。

おそらく、とーまちゃんに合わせて年齢が下がっているのだろうけど、性別が女の子のままの理由までは思いつかない。でも、ちよつと安心。

あとでお婆ちゃんに尋ねよう。

身長は低く、体型も細い。大人モードになると、原作のリレイさんみたいになる——といったらわかりやすいだろうか。そんな感じだ。

髪型は原作とあまり変わらない。港町でアイシスさんにヘアカットされる前の、無造作に長く伸びた状態。ただ、色はもう少し白くて銀髪っぽいかも。

瞳の色もグリーンではなく、暴走トーマのように赤っぽい。

それにしても、頭の中央にあるぶつといアホ毛は仕様なのだろうか。原作のリレイさんにもあった。特にヘアカット前は顕著だったけど……。どこかで見覚えがあるような、ないような……。

服装は原作通り、シウトロゼックシリーズのデフォルト衣装。スカートを履き忘れたようなワンピース。元の世界に帰ったらアインハルトさんに着てもらおう。太股がまぶしいー。リレイさんは基本真つ裸だけど、実験室にあったということは、検査着の一種なのかもしれない。

あと気になった点といえば、リレイさんの眉毛。ザファイラや亡くなったゼストさん、ついでにラスポスのハーデイスさんみたいに太くてゲジゲジの眉をしている。単に

手入れをしていないからかもだけど、ふさふさだ。

珍しい。

何気に女性キャラでは初めてな気がするんだけど……あ、そっか。

やっとなかった！

このフサ眉、誰かに似ていると思ったら、

「元首相の——」

『やめなさい』

ざくつと、サラちゃんの手刀がわたしの喉に突き刺さる。

ケホケホ……。

「ひ……『干物妹！うまるちゃん』の金剛ヒカリちゃんみたいなんだあー！」

ケモミミついてるけど。

突然の闖入者であるわたしに驚いたのか、目をまん丸にして固まった表情も、どこかヒカリちゃんっぽい……と言つて、どれだけの人がわかるんだらう!?

わかんなかったら『うまる ひかり』とかで画像検索してみてええ！

『感染災害の危険発生。これより熱焼却処理を行います。近隣ブロックの職員は至急避難をお願いします。電弧炉起動。熱焼却プログラム——プラズマアーク。カウントダ

ウンを開始します』

『ヴィヴィオ、アーク炉が起動したわ。急ぎなさい』

「おっと、そうでした」

わたしは急いで、とーまちゃんとリリイさん（？）に近づいた。

「ヴィヴィ姉ちゃん……」

しゃがみこんでいるとーまちゃんがわたしを見上げた。彼女の左目からは赤い血が流れ出しており——相当痛むのだろう——押さえつけながら顔を歪めている。

誓約前、全身から血を吹き出すエクリップスウイルス感染の初期症状。因子適合者になるための最初の関門なんだけど……。

『カウント……10……9……』

しまった……。

わたしがいるせいだ……。

頼るべき相手。彼女の姉ポジションであるわたしがいなければ、とーまちゃんはどんなに痛くても、辛くても、強がって、目の前の少女を救おうとするだろう。

リリイさんも同様だ。

見ず知らずの、さつき出会ったばかりの自分を「助けるから」と言ってくれたとーまちゃんを、「必ず救おう」と決意して誓約する大事なシーンだったのだ。

それが、わたしの出現で崩れてしまった。台無しになってしまった。

とーまちゃんの今にも泣き出しそうな表情が、その証だ。

「ごめんね、とーまちゃん。対戦台でもないのに乱入しちやつた形みたいになって……」
念話に切り替える。

（お婆ちゃん、このまま2人に誓約してもらっても大丈夫かな？）

（そうね。誓約自体は可能でしょうけど、どこまで力が引き出せるかは不明ね）

（なんで？）

（4巻でシユトロゼツク5thとリアクトしたキャラがいたでしょ。だけど、リアクターがないヴェイロンにすら勝てなかった。適合相性はもちろんだけど、精神的なつながりが大事なのよ、融合には。まあ、エヴァのシンクロ率みたいなものね）

納得。

『6……………5……………4……………』

安置室の天井に無数の球電が発生し、バリバリバリと耳をつんざく音が響いた。

『アーク放電ね。あの球に触れてはダメよ。高温で一発アウトだから。それと強烈な光を発するから、バイザーをつけているヴィヴィオ以外の2人は目を瞑っていなさい。目が焼かれるわよ』

まさか、こんなところでアインハルトさんのバイザーが役立とうとは。

2人が慌てて目を閉じる。

わたしはとーまちゃんとりりいさんの間にしゃがみこむと、2人の肩に手を回して体を抱き寄せた。

「とーまちゃん、りりいさん、いい？　ここはわたしが防ぐから、わたしからくつついて離れないで！」

さらにギュツと密着する。

『……………1……………0』

——ドオオオンン！

爆発音と共に、安置室が灼熱のプラズマに包まれた。

激しい閃光。

真つ赤な炎が渦を巻き、極度の熱が周囲の水分を蒸発させる。マグマの真つ只中にでもいるように金属が溶け出した。机や棚も原形を留めていない。リリイさんを拘束していた設備すらドロドロと火色に変化した。

『プラスマアーク正常作動！』

頭上から機械音が聞こえる。

なーにが正常作動なんだか……。

今ごろ遺跡の外では、白衣の研究者たちがこちらの様子をモニタリングしながら『やったか!』と、喜び勇んで叫んでいるシーンだろう。

『いかなる防御をしようと、人間が生存することなど——』

とか口になっているのだ。

ところがどっこい。

こちとら元祖生体兵器。聖王家の遺伝子をなめてもらつちや困る。

「わたしの無敵バリア（聖王の鎧）なら、死黒核爆烈地獄（ブラゴザハース）にだって耐えてみせる！」

「ブラゴザハー……?」

『状況は似ているけど、そのネタ、アニメ化しないと誰にもわからないと思うわよ?』

聖王の鎧で複合発生させているバリアとフィールドの範囲を広げることで、わたしとーまちゃん、リリイさんがいる空間だけを完全ガード。

それ以外は、原作通りドロドロに溶けている地獄絵図。

目を開けたとーまちゃんが、キョロキョロしながらハイテンションで叫んだ。

「ぐれいとだぞ、ヴィヴィ姉ちゃん!」

「ふっふっふ、もつと褒めてくれてもいいんだよ!」

そんなわたしの隣には、相も変わらず呆然としているケモミリリイさんの姿。次から次へと起きるイベント——変化に、頭が追いつかないのだろう。

「リリイさん……つて、あれ、名前リリイ・シュトロゼックでいいのかな?」

こくこく頷いている。

どうやらとーまちゃんと違い、名前に変化はないらしい。

「もう大丈夫! なぜつて? 私が来たああ!」

『この世界にジャンプはないと何度言ったら……!』

「人生で言ってみたい台詞の1つでしょおお!? 緑谷少年!」

『誰が緑谷少年よ!』

リレイさんはわたしとお婆ちゃんの様子取りの意味がわからないのか、目をパチクリさせている。

だよね。

まあ、引かれなかっただけでよしとしよう……。

「リレイさん、とーまちゃんと一緒に助けに来たよ！ だからもう大丈夫。みんなですら外に出よう！」

すると、満面の笑みを浮かべたリレイさんが抱きついてくる。まさかのリレイダイブ。

《うん！》

初めて精神感応で声が聞こえた。

何だかわたしより年下のような反応。

原作ではシュトロゼック5thの細胞年齢が14歳7か月だったから、4thのリレイさんはもつと年上のはずなのだけど、クローンだと話が変わってくるし、なによりトーマの年齢も低くなってるし、獣人化してるし、見た目で判断はできない。

それでも……そうだよね。

ずつとこんな研究施設に閉じこめられてたんだもんね。

わたしだって、たまたま成功例だったから現在があるのだけど、もし聖王の遺伝子が

正しく発現していなかったらと思うと、他人事ではない。

「リリイさん……」

優しく頭をなでる。

ついでに獣耳もいじる。

最近はずファイーラやアルフの獣耳を触っていなかったので久しぶりの感触。眉毛と

一緒にフサフサしている。『ふさもふ』だ。

「ずるいぞヴィヴィ姉！」

背後からとーまちゃんがしがみつく。

あー。

『Force』としては『とーまちゃん&リリイさん』コンビだもんなら。

「とーまちゃんも、リリイさんのケモミミ触りたいんだ？」

「違うぞー！」

体だけでなく頭を、わたしの頬の辺りにこすりつけてくる。

「うぐ……」

なんだこれミステ……。

『この子、自分もなでて欲しいのよ』

「そうなの!？」

「ヴィヴィ姉〜」

《ヴィヴィお姉さん》

なにこれ〜。

幼女2人に挟まれた。

これがみゃーさん気分ということか〜。

わたしにとーまちゃんとリリイさんが舞い降りた。

ココアさんなら「お姉ちゃんにまかせなさい！」とか言い出すだろう。

今ならノーヴェエが小さい子ばつかジムに誘う気持ちかわかるかも〜。

……と、いつまでもモフモフしている場合ではない。

5-01型デバイスの力で身体強化されているわたしは、2人を抱えたままスツと立ち上がった。

「まずはここから出ないとね、原作通り」

「原作？」

《原作？》

「あー、うん、あまり突っこまないでくれるとうれしいかな」

原作のトーマは誓約後、無意識のままデイドゼロという砲撃で、なのはママみたいに天井に穴を開けていた。

とーまちゃんは誓約しなかったけど、せめて状況くらいは似せておこう。

「天井を一気にぶち抜いて外に出るよ！ 施設の人が通報しておまわりさんが来たら面倒だし」

「敵が守りを固めるかもだしなー！」

リリイさんもこくこく頷いている。

うむ。ここは一発お姉さんらしい華麗な魔法を使わねば。

まずはひつつついている2人を下ろす。

「特盛は無理だけど——」

ツインテにしているリボンの片方をほどいて翻すと、それは虹色の魔力光となつてわたしの手の中に集まった。

バリアジャケットの応用で、大砲クラスのマスケット銃へと姿を変える。

「ティロ・フィナ——げほ、げほっ！」

急に咳きこんでしまい、口元に手を当てると、

「な……なんじゃこりゃああ?!」

手のひらが赤く染まっていた。

『あなた、またそんなネタを……って、どうしたのヴィヴィオ!? 目から血が!』

「は……?」

まさかこの症状って……。

『ちよつ、ヴィヴィオ! マミるには早いわよお!?』

視界が赤に染まる。続けて足の力が抜けていき……もう立ってられない! わたしの意識はフラリ倒れると同時に闇の中へ落ちていく。

這い上がることはできなかつた。

【次回予告】

……え? どーしよう。

やばいよ、やばいよ。

やっぱりティロ・フィナーレはダメだったかあ……。

ここはアルティマシユートにしておくべきだったか。

……って、どっちみちダメじゃん!

こうなつたら、アミタさんでもほむほむでもいいから、時間を巻き戻してええ!

次回【この世界が『Force』だとわたくしだけが知っている】第16話。

【あれがデネブアルタイルサイコクラッシュャー】

で、
リリカルマジカルがんばります！

第X話 ロザリア

『シュトロゼック4th』であるリリイの姉妹機——ともいうべきリアクター『シュトロゼック5th』。

「ロザリア!? そっか、ロザリア……ロザリアかあ……すっかり忘れてたけど、ロザリア……」

『あら、知っている名前なの?』

「うん」

それは、わたしがこの『Force』の並行世界に来る前。

アインハルトさんと「キャツキャウフフ」していたころ（願望）の物語。



ミッドチルダのナカジマジムで、わたしがフラフラ練習していると、まだ胸が膨らんでいないころのコロナが近寄ってきた。

「どうしたのヴィヴィオ、目の下にクマができてるよ?」

「うん、ちよつと遅くまでマンガを読んで……」

「もう、ダメだよ、リオじやあるまいし」

「ごめんなさい」

「ちよ、勝手にデイスるなああ！——ふんがっ!?」

リング上でアインハルトさんとスパリングしていたリオが、ツツコミに気を取られていいパンチをもらっていた。

ああ、あれはしばらく立ち上がれないなあ。

とはいえ、いつものことなので、わたしとコロナは華麗にスルー。会話を再開する。

「それで、何のマンガを読んだの?」

「えつとね、乙女ゲーのライバルキャラに生まれ変わって、バッドエンドを回避しようとするやつ」

「あく、最近多いよね。悪役令嬢モノだっけ?」

「そうそう」

元々は、ネット小説で流行り始めたジャンルらしい。

庶民出身で、真面目で一生懸命な主人公（メインヒロイン）に対し、お金、権力、美

貌、全てを兼ね備えた貴族のお嬢様。主人公の少女に対して意地悪を繰り返したあげく、ラストは大逆転をくらい、全てを失うバッドエンド。

ちなみに主人公の少女は、イケメンの王子様と結ばれる。

もつともわかりやすい例でいえば、シンデレラの意地悪な継母や姉たちだろうか。

ちなみに、初期のシンデレラでは、継母や姉たちは鳩に目を突かれて失明し、両足を切断されてしまおうらしい——とんでもないバッドエンドだ！

つまり、そういったエンディングを迎えないように、生まれ変わった悪役令嬢で、転生前の知識を使い孤軍奮闘するのだけ——これがまた面白い。

これが男性向けなら、異世界転生したあと圧倒的なスキルで激しいバトルを繰り広げるのだけど、そういった戦闘シーンは一切ない。

意外と地味に、ちよつとずつ、周囲の高感度を上げていったり、バッドエンドからスタートして、主人公の少女を見返してやったり、逆に仲良くなってみたり、作品ごとに違うのだけど、未来を変えようとするその姿勢は、一風変わった異世界転生モノとして、男性が読んでも楽しめると思う。

ちなみに一番好きなのは『乙女ゲームの破滅フラグしか無い悪役令嬢に転生してしまつた…』なのだが……土魔法いいよね、土魔法！

土の魔力を高めるために畑を耕してみるといふ、意味のない行為もまた面白い。

「ヴィヴィオ、よっぽど気に入ったんだね」

「あはは、うちはほら、一戦交えたあと『お話し』することが多いから」

「あく、だったらさ、かなり古いゲームだけど、主人公のヒロインとお嬢様のライバルキャラ、そのどちらかを選んでプレイできる乙女ゲーがあったんだけど……」

「え、そんなのあったの？」

「うん。『アンジェリーク デュエット』っていうゲーム」

「あー、『アンジェリーク』なら知ってるよ！ 有名なゲームだよ。女性向け恋愛ゲームの、記念すべき元祖！」

リリカルなのはといえば、魔法少女の元祖なわけだから、『魔法使いサリー』に当たる作品だ。

ちなみに、サリーちゃんの原作は、あの横山光輝先生なわけで、魔法少女と三国志とメカ（鉄人28号やジャイアントロボ）——など、一見ジャンルがバラバラなようである、実は昔から共通性のある、普遍的な、作品群だったりする。

ちなみに、例の『バビル2世』も横山光輝先生なわけで……なんてこったい。

つまり、SDガンダム三国伝（三国志＋メカ）やリリカルなのは（魔法少女＋メカ）など（ついでに言えば『Force』の下地は、すでに50年以上前から出来上がっていたんだよおお！ な、なんだって〜）。

『アンジェリーク』ってシリーズがいっぱい出てるでしょ？ だから、どれからプレイしたらいいのかわかんないんだよなぁ……」

「うくん、それはヴィヴィオに自分で調べてもらおうとして、何年か前にね、初代のリメイク版が発売されたんだよ」

「おう、流石は人気作品」

「ただ、それだとライバルキャラでのプレイはできなくて……」

「あゝ、それで古い方の『アンジェリーク デュエット』なんだ——」

というわけで、その日の晩。

赤髪の、我らがコーチ、憤る。

「ごーしちぎい。」

「——で、どうしてうちでゲーム大会になってるんだよッ!？」

「ノーヴェのマンションなら、お泊まり会の許可も出やすいし、みんなで泊まれるしね、気兼ねなく」

「「「お世話になりまーす!」」」

わたし、リオコロ、アインハルトさん——チームナカジマ初期メンバーの4人が頭を

下げる。

「くっ……」

「ヴィヴィさん、ハルさん、それに、リオさん、コロさんも、今日はゆつくりしてつてく
ださい」

と、6人分の飲み物を運んできたフーカさん。もう、すっかり我が家といった感じだ。
「いや、フーカ、そんな自然に対応して、おかしいだろ」

「ですが会長、夕食までごちそうしておいて、もうこんな時間ですし、いまさら帰れもな
いと思うんじゃないか……」

「……まあ、そうなんだけどな。はあ……ま、いつか。どーせお前らのことだから、もう
家に連絡は——」

「「してありまーす！」」

「だと思った」

わたしたちとノーヴェのやり取りを聞いて、アインハルトさんがクスクス笑って
いる。わたしたちの霸王様は一人暮らしなので、連絡する必要がないのだ。

「まっ、あたしも乙女ゲーなんて話だけで、実際みたことなかったし、いいんだけどな。

「つか、うちでゲームしてるやつなんて、ウエンデイくらいだったんだよなあ。あたしはまったく手を出さなかったし」

「ノーヴェはいつも忙しくしてたしねえ……」

「まーな。体を動かす方が好きだったから」

「でも、チンクはスマホゲーで魔法少女ものをやってたような……」

「こつそり。」

「……チンク姉〜」

「今となつては、チンクの眼帯が中二病のアレにしか見えないのはわたしだけだろうか？」

チンクの誕生日には、ぜひ長いマフラーをプレゼントしようと思う。

そんなわけで、早速ゲーム開始。

『アンジェリーク デュエット』を起動させると、オープニングともいべき映像が流れる。

いかにも庶民的で元気な女の子といった金髪のアンジェリーク。

友人とのお茶会。いかにも貴族の令嬢といった青髪のロザリア（もちろん縦ロールで

ある）。

「なるほど〜。この2人のどちらかを選んでプレイできるんだ」

「普通は、初めてプレイするならアンジェリークの方なんだろうけどね」

「おや？ ヴィヴィオさんは、こちらのヴィヴィオさん似の金髪の女の子を選ぶのでは？」

「いえいえ、今日のわたしは悪役令嬢モードですのでええ！」

当然、ロザリア一択である。

まずは名前入力。

最近のRPGや男性向け美少女ゲームと違い、乙女ゲーはデフォルトで名前が決まっています、ちゃんと自由に変更が可能な作品が多いのだ。

「えっと……ヴィクトーリア……」

「おいおい、やめてやれよ。……気持ちわかるけどな」

「えへへ、冗談だって」

今ごろ、お屋敷でくしゃみをしているかもしれない。

ヴィクターさん以外、特に名前が思いつかなかったので、デフォルトのロザリアと入力。

次に、星座と血液型を決める。

「コロナ。これ、何かゲームに関係するの？」

「えっと、攻略相手との相性に関係してくるよ」

「ふうん。じゃあ、先に攻略したい男子……男子？　守護星様を選んでから決めた方がいいってことか……」

ちなみにこの守護星様。9人いて、宇宙を構成する光や闇、炎といった力を司る存在らしい。

ただの人間ではない、ということだ。

「どの守護星様も、それぞれ個性があつて、うん、基本をしつかり押さえたというか、どれか1人は気に入ったキャラがいそうな」

初代ときめきメモリアルもそうだったけど、どちらも古い作品ながらキャラクターの完成度が高い。だからこそ、今に引き継がれ、語り継がれているのだろうけど。

「ヴィヴィオさんは、どのキャラクターが好みなんですか？」

「うくん、あんまり考えたことなかったから、これとっていいよーな。アインハルトさんはどーですか？」

「いえ、わたしも別に。リオさんは？」

「あたし？　あたしは……そうだなあ……速水奨にテラ子安にカミーユにラウ・ル・クルーゼ……熱気バサラ……」

「うん、声で決めるのやめよーね」

「それも一つの決め方だとは思うよ？」

確かに、好みの声優さんで決めるのも、アリといえばアリなのか……。というか、古いゲームだけあって、声優さんが大御所ばかり。

「守護星の声が豪華だね」

「リメイク版でも、1人をのぞいて、全員同じキャストを揃えてたんだよ」

そりゃスゴい。

というか、その変更でさえ『塩沢兼人さん ↓ 田中秀幸さん』という大御所から大御所。

新キャラ以外、若手の声優さんは誰もいない！

リメイクのこだわりが凄すぎる！

ちなみに、わたしが選んだライバルキャラのロザリアにいたっては、あの三石琴乃さんである。

月野うさぎやミサトさん、今ではのび太ママのお嬢様ボイスと考えると、なんとも震えがくる。

「とりあえず、初期アインハルトさんみたいに陰のある闇の守護星クラヴィスで」

「初期アインハルトって何なんですかああ!?!」

「いや、もう最近じゃすっかりネタキャラになってしまいました。『Vivid』2巻の頭くらいまでのアインハルトさん？」

「でもさー、ヴィヴィオ、それって……」

「だいたいヴィヴィオさんのせいですよねえ!？」

「……言われてみると、そんな気がしないでもないような……うん、なかったことにしよう」

そんなこんなでゲームスタート。

ここで、わたしはようやく『アンジェリク』というゲームのストーリーを知る。

ただ、カッコイイ守護星様と恋愛するだけのゲームと思いきや、

「宇宙を司る女王の力が衰えて、世界が滅びようとしている。そんな世界を救うため、女王の後継者候補として選ばれたのがアンジェリクとロザリアの2人……って、そんな壮大なバックボーンがあったのおお!？」

世界滅亡の危機。スパロボも真つ青なストーリーである。

「乙女ゲー、スゴい……」

そして、2人のうち、どちらが新しい女王に相応しいかのテストとして、大陸の育成を行おうという……。

「シムシテイどころかシムアースというか、なにこれ天地創造?」

ゲームシステムも、よくあるテキストアドベンチャーではなく、シミュレーションゲーム。発売元が信長の野望などのコーエーだった影響もあるのだろう。

最も、男性向けであつても、初期の美少女ゲームは育成シミュレーションが多かつたけど。

「うーん、元々SFCのゲームだけあつて、アクトレイザーのシミュレーションパーティみたいな世界の画面が……」

「アクトレイザー……?」

アインハルトさんにはサツパリだが、世界を上から見下ろしたあの感じ。

見ろ、人がゴミのようだああ!

まあ、人は描写されてない、建物だけだけ。

「何というか、乙女ゲーというわりに、乙女ゲーから最もかけ離れたようなゲームだねえ……」

というか、これ、乙女ゲーと言つていいのだろうか?

最も知名度のある乙女ゲームのシリーズなのに、その初代は、最も乙女ゲーっぽくない、むしろ、その辺のギャルゲーより、よっぽどSFな、男性向けの世界設定だったりする。

「まあ、まだゲーム本編が始まつてないから」

こうして、ロザリアの女王候補としての日々が始まつたわけなのだけど……。

「つまり、ライバルである主人公アンジェリークよりも、大陸を発展させつつ、お目当て

の守護星様とデートして仲良くなっていけばいいの?」

「うん、まあ、そんな感じかな」

チュートリアルでいくつかの施設を回り、占いの館とやらにやってくる。

ここは早乙女好雄……じゃなかった、守護星様との好感度を見ることが出来る場所……だけかと思ったら、

「ん? おまじない……? 守護星との相性をよくできるってことは、わざわざ相手を誘ってデートとかする必要がないってこと?」

「えつとね、このゲームでは『親密度』と『相性』っていう2つの数値があるの。実際に会って、デートをすると『親密度』が上がり、この占いの館でおまじないをすると『相性』が上がるんだよ」

「なるほどー……って、イマイチ違いがわからないんだけど」

「例えば……そうだなあ、あくまで表面的だけど、なのはさんとヴィータさん。ヴィータさんが嫌がっているように、相性は低いけど、いつも仕事で一緒にいる2人の親密度は高い」

「えつと、つまり、わたしとアインハルトさんが、どれだけ前世のご縁で最初から相性が良くて、出会ったばかりのころは塩対応。親密度はゼロだった——みたいなの?」

「そうそう、そんな感じ」

「私も納得しました」

「そーいえば、ノーヴエともそんな感じだったよねえ……」

「うっ」

「フーカさんも、ちよつと前まではリンネさんと相性MAXでも、親密度が地を這うレベルまで落ちてましたよね」

「ヴィヴィさん、それは、そうなんじゃが」

「でも、今ではすっかり回復している。つまりゲーム内でも、相性さえ良ければ、親密度も上昇しやすい——という作りになってるんだよ」

納得しました。

恋愛に関して、好感度以外の数値がある、というのは、当時のゲームとしては斬新だったのではないだろうか？

いや、そもそも、あまり見たことがないシステムだ。

面白い。

「この世界にも占いの館があれば便利ななあ……」

「なにノーヴエ、気になる人でもいるの？」

「いや、おまじないするだけで、協会のうるさいおっさんと相性がよくなるんだろ？」

「あ」

切実だった。

とりあえず先に進めることにする。

「……つて、ねえコロナ。このおまじないで相性を上げられる中に、ライバルのアンジェリークがいるんだけど？」

唯一の女性キャラ。男性の中に1人だけ女の子が混じっている。

「あ、本当だね」

「……よし、別に守護星様なんてどーでもいいから、アンジェリークとの相性だけを上げよう」

「それ、ゲームの趣旨と違うよおお!?!」

「いいの! 説明書にだって『恋と友情も大切に』つて書いてあるし!」

というわけで、基本、平日は守護星様に、大陸の育成をお願いしつつ、占いの館ではアンジェリークとの相性アップに勤しむ日々。

そして週末。

本来なら、お気に入りの守護星様とデートをするための日なのだけど、ここはひたすらアンジェリークの部屋を訪ねて談笑。親密度を上げる作戦。

「アンジェエ……かわいいよ、アンジェエ……」

「ヴィヴィオ、なんだかおかしなことになってるってええ!」

「いや、絶対ロザリアだって内心ではこう思ってるって!」

だって、こっちはもう大陸に7つも建物が建っているというのに、アンジェリークの大陸なんて、まだ1つも建っていないんだよ?

アホな子だよ?

でも、それがいい。

「コロナだって、リオがアホな子だから仲良くなったんでしょ?」

「それは……そうなんだけど……」

「わたしもそうだけどー」

「あれ? あたし今、デイスられてる?」

「リオさん、私は違いますからねっ!」

「とにかく、アンジェリークは天真爛漫なまま、毎日、守護星様とのお話を楽しんでくれればいいんだよ!」

大陸育成なんて面倒くさいお仕事は、わたくしがやっておきますから!」

ヴィクターさんがジークさんを構いたくなる気持ちがよくわかる!」

とかなんとか叫んでいたら、

「おや?」

アンジェリークの妨害（守護星にお願いするとできる）により、ロザリアの大陸から建物が消えてしまう。

「アンジェエ!？」

いやああ！ わたしのアンジェエが妨害だなんて、アンジェリークはそんな腹黒いことやらないのおお！

ロード！ ロード！

「ちよ、ヴィヴィオー!？」

などということを繰り返しつつ、月1の定期審査では、アンジェリークが忘れていそうだからという理由で迎えに行つてあげるロザリア。

「なんとというか、オカンだよね……」

「ヴィクター……」

「「ヴィクターさん……」」

やっぱり、今ごろくしゃみをしているだろう。

「それにしても、毎朝訪ねてくる守護星様はどうにかならないのかな？ どう考えても、

わたしがアンジエのもとへ行くのを邪魔しにきてるとしか……」

「もはや違うゲームだよねっ!？」

そんなことをしているうちに、親密度と相性はMAXに。これ以上おまじないをしたところで、もう数値は上がらない。

また、いくらパラメータが上がっても、アンジエリークとデートできるわけでもない。

「コロナ……わたし、どうしたらいいの?」

「普通に、守護星と仲良くなればいいんじゃないかな」

「どーして男子と?」

「それも、乙女ゲーの意味ないよねえ!？」

ちなみにこのアンジエリークだが、同じ場所で2回連続で話しかけると、

『まだいたんだ』

と、中々に冷たいお言葉で返される。

「でも、そんなアンジエが好き。ねえ、コロナ。どうしてDSアンジエとデートできないのおお!？」

「DSじゃないから! ていうか、そーいうゲームじゃないからああ!」



『——で、結局どうなったのよ?』

「うん。大陸育成の役に立つみたいだから、仕方なく、他の守護星様との親密度や相性を上げてたら、ヤキモチでも焼いたのか、アンジェリークからロザリアを訪ねてきてくれた。それで、アンジェと楽しくお茶会。

その後は、ぽこぽこ定期的にアンジェリークとのイベントが発生して、友情イベントは終了。

エンディングでは、無事、大陸育成を終えたロザリアが新しい女王になって、アンジェリークが補佐官になりたいと言い出して、仲良く女王エンディング。

ロザリアが陛下で、ライバルが補佐官という、まさにヴィヴィオE.N.Dでした〜

『それ、なんてギャルゲー?』

「いいの! はあ、ナカジマジムでの日々か……何もかもみな懐かしい……」

『ひよつとしてヴィヴィオ、あなた、ヤマトネタがやりたかっただけなんじゃ……?』
「うっ」

そんなわけで、わたしたちの戦いは、まだまだこれからだあ!